Errata

訂正表

左記の頁にある空角「　」は取り除くこと。

一八三ノ上段（九行ノ下　十一行ノ下　十五行ノ下　十七行ノ下）　一八七ノ上段（二一行ノ下　二三行ノ下）

一九〇ノ上段（二六行ノ下）　一九〇ノ下段（二行ノ下　二三行ノ下　二一行ノ下）

二〇六ノ上段　二〇八ノ上段　二一六ノ上段

二一七ノ上段　二一八ノ上段　三八七ノ下段（十五行ノ下　十七行ノ下）

三八八ノ上段

昭和五年八月出版

群書類從

第拾四輯

東京
續群書類從完成會

群書類從第拾四輯目次

和歌部家集

群書類從第拾四輯目次終

群書類從卷第二百二十八

和歌部八十三家集一

土御門院御集 合點詞家隆卿

撿挍保己一集

詠述懐十首和歌

寄風述懐

稽古 吹風のめにみぬかたを都とてしのふもくるし夕暮の空

先うちみ候より。已落涙かきくらし候畢。善悪すへて不レ覺候へとも。心詞無二申限一歟。

寄月述懐

同 雲ゐよりやとりなれにし袖の月いかにかはれる涙とかみる

是又凡夫更々淺心難レ及候歟。

寄雪述懐

いとゝ又跡なき庭となりぬらんはらふ人なき雪の古郷

めてたく候に。無字二所に候。書失候歟。

寄曉述懐

寄後 曉のしきのはねかきかきもあへし我思ふ事の數をしらせは

又こゝろふかく。すかた不レ及二左右一候歟。

寄夕述懐

稽古 夕暮のなからましかは白雲のうはの空なる物はおもはし

初五字より。心もめつらしく。姿もをろかならす候。

寄海述懐

あまを舟とふ人あらは藻鹽たれみなみの海にわふとこたへよ

意よりはしめて。姿詞は本歌もつよくめてたく候。

寄山述懐

いはかねの枕はさしもなれにしになにおとろかす松の嵐そ

うるはしくかさる所なく。よろしく候。

寄河述懐

行水にかすはかきてきならし河おなし流をいくせ渡ると

此河子細定候歟。又優美候歟。

寄野述懐

かゝみのやたか僞のなのみしてこふる都のかけもうつらす

同前。

寄關述懐

すまの浦いはうつ浪の音はして人をとゝむる關はなかりき

十首すへて心詞高無二申限一候。注進猶事淺候。

詠百首和歌 承久三年

春

立春

氷とくしかの浦風吹まゝに波とともにや春はたつらん

秋よりもなを春波たよりをえて。立まさり候歟。

子日

春の野のはつねの松の若葉よりさしそふ千代の影はみえ息

子日のうたには。一句一字をろかならす候。但さりとては。此中には可レ爲二御地一候歟。

霞

増後 いせの海のあまのはらなる朝霞空に鳥やくけふりとそみる

餘勢委心。たくみに無二申限一候歟。

鶯

霧にむせふ山の鶯出やらて麓の春にまよふ比かな

山のうくひす。こゝろ尤よろしく候。

若菜

増後 白妙の袖にまかひてふる雪のきえぬ野原にわかなをそ摘

うるはしく。一句無レ難。優美候。

殘雪

霞行ひはらは今やくもるらん小松かはらのゆきのむら消

梅

植をきし梅のそのふやあれぬらん匂ひもよその古郷のはる

これ又まことにしのひかたきさまに。優美見候歟。

柳

さほひめのてたまもゆらによる糸や緑になひく春の青柳

一句無二相違一尤よろしく候。

早蕨

さわらひのもゆる春日と成しよりたるみの水もいはそゝく也

同前。但釋阿入道法皇の御時百首に。さはらひもいまはおりにやなりぬらんたるみの氷いはそゝくなり。如レ此覺申候。

櫻

いそかれぬ花の比こそ哀なれなけきのもとに春はへぬれと

うちきゝたるより。又涙にかきくらし候て。物不レ覺候。

春雨

浅みとりはつしほそむる春雨にのなる草木も色まさりけり

心詞又無二申限一候歟。

春駒

いとゆふのおなしなのみやまかふ覽霞のうちの野への春駒

野馬心優美候歟。

歸雁

増後 かへる鴈雲ゐは誰もなれしかとうら山しきは春のかよひち

心肝を動無二申限一候歟。又落涙候。

喚子鳥

心あれやみ山のおくのよふこ鳥さしも住へき人もなき世に

この鳥にとり候ては。いかゝかくは可二思寄一候。

苗代

苗代のたのもにはふるしめのなのしつみは沈むひく人はなし

又意すかた。まことによろしく候にや。

菫菜

紫のねはふよこのゝつほすみれ春やゆかりの色にさくらん

釋阿詠に。むらさきのねはふよこのゝつほすみれま袖

につまん色もむつまし。

杜　若

やつ橋のくもてになひく杜若昔の花のなこりとそ見る

藤

藤の花おなしえことにさきしよりまた一入の松そうつろふ

此三首。地には少し過候歟。但藤は今少勝候歟。

款　冬

おもひやるゐての山吹盛にも都にすまはあはまし物を

此山吹。いかなることにか候らん。本歌も此ために詠をき候けるにやと落涙候し。猶々無ニ申限一歟。

三月盡

春と夏とゆき相坂の關守もこよひは鳥のねやおしむらん

是又心姿をはしめて。連句なとに申候へしとも不ニ覺悟一候。

夏

更　衣

時しらてすくすうき身のかひもなくけふとて花の衣かへめや

又詞をいたはらす。幽玄候歟。

卯　花

このころも遠かた人やとかむらんしろくそ咲る里の卯花

無レ難神妙候へとも。以前に申候し可ニ御地一候歟。

葵

神地山かけしたのみのあふひ草二葉より社かさしそめしか

是又目出度候に。此神地山は他社にはよみて候へとも不レ覺候。西行と申候しか。太神宮にはじめて詠候て後。少々詠候歟。神山は常事候歟。

郭　公

時鳥まつ山のはに月は出ぬたかたのめたるこよひならねは

菖　蒲

人しれぬ袂にねをはかけしかとけふそあやめの色にみえける

早　苗

みなかみにたかさなへとる末ならん流てにこる谷川のみつ

照　射

ますらおか立田の山にともしすとひとりあかせは長き夏のよ

二首。可レ地候歟。

五月雨

さみたれのふるき思ひの晴すして眺むるかたは山端もなし

盧　橘

懷古　昔をはなたち花にしのひてん行末をしる袖のかもかな

二首。尤よろしく候。中に猶行すゑをしるそてのか。少まさりて候歟。

螢

あしま行夜はの螢やうつるらん波のそこなるいさり火の影

蚊遣火

かやりひの煙はよその思ひかはなかめにくもる夏のゆふくれ

蓮

はちす葉の露の白玉みかゝれてにこりにしまぬ夏の池水

三首。地に少々候らむ。

氷　室

ひむろ山せきいれし水の音たえて氷の上に夏そおほめく

可ㇾ爲ㇾ地候歟。

泉

せき入しいはまの水のかけすみて底にもむすふ袖はみえ鬼

六月祓

御祓する袂にふるゝおほぬさのひくてあまたになひく河風

二首。尤よろしく候歟。

秋

立　秋

かそふれは涙の露もとゝまらすこれやみそちの秋の初かせ

又例の不覺の涙にむせひ候畢。

七　夕

我いのるねかひの糸のとしをへてあはてしもやは秋の七夕

高たかく實たのもしく聞候歟。

萩

くたらのゝふるえの萩の花みれは今年はかりの秋としもなし

女良花

ふる鄕やあれ行庭の女良花あるしかほにもすくす秋哉

各可ㇾ爲ㇾ地候歟。

薄

さゝかにのうははにすかくいと薄みたれにけりな秋の夕風

面白候に。このいとすゝきは。いと詠ならひ候はす候歟。いとゝさる同前。

苅　萱

たか旅の草の枕とさためねとむすほゝれたるのへのかるかや

蘭

ふちはかまきつゝなれ行たひ人のすそのゝはらに秋風そ吹

荻

荻の葉にたれか思ひのむすほゝれ夕暮ことの露とをく覽

三首。心詞もとり〳〵に。すかた宜候歟。

早　鴈

かたしきやまたひとへなるさよ衣かりかねさむし庭の松風

かへり高候歟。

鹿

みつくきのをかの村萩うちなひき鹿のねなから秋かせそ吹

末の句ことによろしく候。

露

白露にそほつるのへの唐衣よる〳〵きぬるたひはなにそも

霧

秋霧のたつくれ毎につまかくすやのゝ神山みらくすくなし

二首。又未學者不ㇾ可ㇾ詠ㇾ出候歟。

槿　花

色かへぬ竹のまかきの槿もをのれはあたの花にそ有ける

地にはすこしすき候歟。

駒　迎

望月のあきの光りをさそひきて雲ゐにみゆるひきわけの駒

尤よろしく候。

月

久かたの月の都のみちならはわたりてもみむかさゝきの橋

擣　衣

あさち原はらはぬ霜の古鄕にたれわかためと衣うつらむ

二首。又意すかた無ㇾ申量ㇾ。落涙候畢。

虫

まくすはふあたのおほのに啼虫もひとつうらみの秋の夕暮

菊

(續後)よそに行秋の日數はうつろへとまた霜うとき庭のしら菊

二首。よろしく難二思分一。めてたく候歟。

紅葉

した紅葉よのまの露や染つらんあしたの原のきのふよりこき

又詞おもしろく殊勝候歟。

九月盡

大かたの秋になくさむ思ひたに我身ひとつとあすや成なん

是猶すこしまさり候らん。無二申限一候歟。

冬

初冬

置まよふ霜のした草かれそめて昨日は秋とみえぬのへかな

又不及二左右一。姿めてたく候とも。ことをろかに候。

時雨

神なつきみふねの山はしくるれと色にもそまぬ瀧のしら糸

無レ難候へとも。此めうつりに色すこしあさく候。

霜

いつ迄かあさちか末にはらふへき老をたつぬる野への初霜

すかた詞うるはしく優美候歟。

霰

聞わかぬまきの板とのね覺かな木葉降よも霰ふる夜も

常風情なるやうには候へとも。詞つゝきおかしく候歟。

末句ことに面白候歟。

雪

百とせの雪もけなくに風さえて又冬こもるみよしのゝ山

猶高まさり候らん。よろしく候。

寒蘆

白露のをけは玉江のあしのはに結ひかへたる冬かれのしも

千鳥

(續拾)まつ寒きみつの濱へのさよ千鳥ひかたの霜に跡やつけくる

二首。をけは玉江ひかたのしも。いかに「候」はんと不レ覺す猶候歟。

氷

谷河や氷のかくるしからみのせくとは見えてはやきとしなみ

常人詠風情に候へとも。つゝきよろしく聞えて候。

水鳥

冬の池のうきねのをしもうちはふきけにさむけなる浪の音哉

末句おかしきさまに。此すかたにとりていみしく聞候歟。

網代

はし姫の袂やいろに出ぬ覽このはなかるゝうちのあしろ木

はし姫。いまはよみつきたる物に候。この風情いかてのこり候らん。この心のこり候よ。

神樂

あめつちの神代のあきのしわざよりとるや榊の色もか(はイ)はらす

神樂にとりて尤よろしく候。

鷹狩

(續古)はしたかのすゝの篠原かりくれて入日のをかにきゝす鳴也

無常

朝ことにひまゆく駒をはやめつゝいかなるかたへ尋（人のイ）ゆくらん

このすちにとりて。又よろしく候歟。

述懐

うき世にはかゝれとて社むまれけめことはりしらぬ我涙哉

うちつゝきあまりひまなく候間老候。

祝

契りてもとしのをなかき玉椿かけにやちよの數そこもれる

祝心深よろしく候。

詠二十首倭歌　承久四年正月廿五日

四季日

春

みかさ山さすやあさひの松のはにかはらぬ春の色はみえ鬼

夏

庭のおものつちさへさくる夏の日にひとり露けき姫ゆりの花

秋

あかねさすをのか色にやそめつらん入日むかひの岡の紅葉は

冬

冬枯の草葉にさはくひのねすみ昨日はけふになるそ程なき

四首。皆心やすめ候はんひまに。神妙に候なからちと定候畢。

四季月

春

ときわかぬ涙に袖はおもなれてかすむもしらす春のよの月

尤優美候へし。

夏

あかている月のかたみにをく物は露よりさきの扇なりけり

心おもしろく候へと。地と定候畢。

秋

（新後）しきしまや山とひこえて啼鴈の翅あらはにすめる月かけ

無レ難よろしく候歟。

冬

立田山紅葉やまれに成ぬらんかはをとしろき冬のよの月

おほろけの人またよみいつへからす候。まことにありかたく見え給候。

四季雨

春

よしのかはいはとかしはにむす苔のかはらぬ色に春雨そ降

尤よろしく候。

夏

菖蒲生る沼のいはかきかきくもりさもさみたるゝ昨日今日哉

あはれかくつゝけ候ことはかなはす候物を。高なとことに候はねともこのすちに候。最上富候歟。

秋

夕暮はまかきをこむるきりのはにその色となく時雨ふる也

尤よろしく候。

冬

雪ませに雨はふりつゝしかすかにこほりもやらぬ山川の水

このみそれの心。おもしろく見る樣に候歟。

四季雲

春

花しらぬ朽木の杣になかりけり白雲かゝる春のあけほの

又心詞おかしく高も候歟。

夏

時鳥啼や雲ゐのはれすのみおもふ心やそらになるらん

又よろしく候歟。

秋

村雲のたえま〱にほしみえて時雨をはらふよはの秋風

まことにまさしく見るやうに覺候。尤殊勝候歟。

冬

冬の日は雲のみおにてはやけれは流るゝ年のしからみもなし

又同前に難レ分見候。

四季風

春

氷とく風のやとりやこれならん波になり行池のうき草

此風のやとりめつらしく。心詞よろしく候歟。

夏

たちやとるならのこかけに風過てゆふへ涼しきせみのは衣

秋

人とはぬあさちか原の秋風に心なかくも松むしのなく

二首。とり〱に宜候歟。

冬

なには江やあまの衣のうら風にかれたるあしの音のさひしさ

心詞すかた。あまの衣の浦かせ。めつらしく候。

詠五十首和歌

春

春風春水一時來

時わかぬ嵐も浪もいかなれはけふあら玉の春をしるらん

あはれけたかくめてたく候ものかな。

春入枝條柳眼低

棹姫のいとよりかくる青柳の枝もたはゝに春はきにけり

雁返爐峯頂北霞

嶺こえて秋こし道やまよふらん霞の北にかりも啼也

是はすこしをとりてや候らん。

白片落梅浮ニ澗水一

なかれくむ袖さへ花に成にけり梅ちる山の谷川の水

よろしく候。

樹根雪盡催ニ花發一

木のもとの雪はやゝけぬ足引の山の櫻よはやもさかなん

暖雨晴開一徑花

春雨の野邊のふる道露しけみぬれて色こき花櫻かな

鶯聲誘引來ニ花下一

鶯のさそふ山へにあくかれて花のこゝろ（とこイ）もうつるころかな

遊絲繚亂碧羅天

大空にたかをりなせるくれはとりあやに亂るゝのへの糸ゆふ

紛々花落門空閉

風にちるやま櫻戸のさしもやは人めまれにて春を送覽
五首。又心詞姿不レ及レ申二善惡一候。
紫藤花下漸黃昏
藤なみの花の夕はへしほるなりあすより後の春のかたみに
是はいさゝかさかり候歟。

夏

初着二單衣一支躰輕
久かたのあまのは衣またきねとかく社けふの風はまつらめ
一聲山鳥曙雲外
横雲のをちかた山の時鳥聲より後の夜半そすくなき
盧橘子低山雨重
たか袖の涙とか又しのふへき花たち花の雨のした露
綠樹陰前逐二晩涼一
また青きはゝその杜の夕かけになくも涼しき蟬のは衣
螢火亂飛秋已近
をさゝ原しのにみたれてとふ螢今いくよとか秋を待らん
五首。又とり〳〵に心詞宜候。勝劣難レ申候。

秋

窓中滿月初知レ秋
住吉のちきのかたそきもる月の行あひのかけに秋はきに鳬
耿々星河欲レ曙天
七夕もしはしやすらへ天河あくるもをのか影ならぬかは
二首。秀逸體不レ及レ申二子細一候。
寒露已催鴈北至
初かりのきこゆるよはの白露やねさめはしめの涙なるらん
達レ壁暗蛩無レ限思
ねやちかきかへのそこなる蛩おもひくらへの秋そへにける
二首。おかしきさまのすかたに候歟。
蟬鳴黃葉漢宮秋
ならのはのなにおふ宮の薄紅葉そむるや蟬の涙なるらん
月穿二疎屋一夢難レ成
あれまさるとこの月かけうち拂ひ夢によかれて明す比哉
南樓月下擣二寒衣一
思ひやる心を月になくさめて夜寒の衣うちもたゆます
菊爲二重陽一冒レ雨開
なか月やをのか比とてさく菊の露もとをゝに雨はふりつゝ
霜草欲レ枯虫思レ苦
すゝ虫の聲ふるさとのあさち原たゝかれねともをける初霜
林葉蕭々一夜霜
秋の色はひとよはかりの初霜にうつろひはつるきゝの紅葉は
六首。又同前候。無二申量一候。いかにかくのみ候にか。あさましく候。

冬

紅葉添レ愁正滿レ階
ちりつもる紅葉にはしはらつもれて跡たえはつる秋の故鄕
御地に候か。猶過候て事さひ優候。
鳥雀群飛欲レ雪天
雲ゐゆくつはさもさえて飛鳥のあすかみゆきの古鄕の空
末句ことにおもしろく候歟。

寒流帶レ月澄如レ鏡

いほさきのすみたかはらの川風に氷のかゝみみかく月かけ

よろしきさま候歟。

蘆花風起暮潮來

みしま江やあしのはちかくみつ鹽のほなみにかよふ冬の川風

晩過ニ千山ー雪氣寒

夕暮の山のしら雪ふみならし立かへるへき跡はつけてき

二首。又殊勝候歟。

戀

與レ君後會知何日

たのめをくあすの命もしらなくにはかなき物は契成けり

雪月花時最憶レ君

俤もたえにし跡もうつりかも月雪花に殘るころかな

故情歡喜開レ書後

たまつさやかきとゝめける跡みれは昔にかへる人のことのは

三首。又尤宜候歟。

分袂二年似ニ夢寢ー

夢かとよわかれし袖のなみたよりふた秋かけて露のかはかぬ

何況鷄鳴卽須レ別

きぬ〳〵のわかれやさてもかなしきと曉しらぬ鳥のねも哉

二首。又落淚不可思議事候歟。

雜

柴扉日暮隨レ風掩

夕附日さす人もなき柴のとにあるしかほにも吹あらし哉

草堂深鎖白雲間

續後拾 谷深き草の庵のさひしきは雲の戸さしのあけほのゝ空

二首。殊勝難ニ分申ー候歟。

月入ニ斜窓ー曉寺鐘

かねの音にいく有明をうれふらんねさめかちなる窓の月影

是も無レ術候歟。

野寺訪レ僧歸帶レ月

法の師にまとへる道を尋てそ野寺の月に獨かへりし

ことに景氣もあはれに。たへかたくみえ候歟。

嶺猿群宿夜山靜

獨すむみ山のよはのさひしさはけにわひしらにましら鳴也

孤官宿時風帶レ雨

時雨ふるこよひはかりの木枯に宿はなくとも衣かせやま

世間飄泊海無レ邊

玉 かちをたえおほ海の原に行舟の跡はかもなき身をいかにせん

三首。とり〳〵によろしく候。

雲愛山高且暮歸

我ことやあさゆふはれぬ物は思ふたかまの山のよその白くも

莫下對ニ月明ー思中往事上

袖の月に昔の秋な思ひいてそ夫ゆへにこそかけもやつるれ

往事眇茫都似レ夢

むなしくてみそちの夢はすくしきぬ老の寢覺も今よりやせん

白髮鏡中暫易レ老

よそにみしのはらの霜のいかにして鏡のうちに置はしめ劔

毎夜座禪觀ニ水月ー

むねの月心の水もよな〳〵のしつかなるよりすみはしめける

五首。殊銘ニ心肝ニ候。無ニ申量ニ候。

但有ニ泉聲洗ニ我心ニ

影すめるいはまのし水さはりおほみ我心をしあらひつる哉

御地に過候歟。

碧落無ㇾ雲稱ニ鶴心ニ

雲はるゝ空にきこえて鳴鶴もよその思ひはいふかひそなき

但有ニ双松當ニ砌下ニ

我もしり我もしられて年はへぬ砌にうへしふたもとのまつ

二首。不思議に思給候。

詠三首和歌　承久四年八月十五夜

月前松風

いつれともわかれぬ秋のけしきかな月にならふる嶺の松風

月前旅宿

月ゆへと出し都のわかれかはこよひそ秋はさやのなかやま

月前久戀

契りても空行月のいくめくりむなしき秋を過しきぬらん

三首。又殊勝候。

詠二十首倭歌　貞應元年十二月二日

花三首

山さくら思ひたえせぬ花のうへにいたくなふれそ春の鶯

いそのかみふるの〻花にこととはむかゝるなけきゃ有し昔も

心詞姿。二首又落涙。

あちきなくおしともいはし山櫻かたおもひなる風も社ふけ

末句無術躰候歟。

郭公二首

きく人の袖しのもりの郭公なれゆへしけき露としらすや

是おもしろく候。然而又思寄事候歟。

時鳥あやめの草のゆかりあらはわか袂なるねにもなかなん

殊勝に候歟。

月四首

たなはたの稀にあふよの月よりや心つくしのかけもそふ覽

こゝろつくしの月も。かくこそ候へけれ。いかに人不ニ思寄ニ候らん。

大井川しもはかつらの月かけにみかきておつるせゝの白浪

末句きよけにきこえ候歟。

なかむるに物思ふ事のなくさまは月になれたるみとや成なん

本歌にいたくかはらすや候らん。仍不ニ合點ニ候。

心もていらむたにこそおしからめ月のあなたはうち時雨つゝ

よろしく候。

雪五首

麓には雪けの風を先たてゝみ山の松そ白くなりゆく

見様に覺候。宜候歟。

さゝのはにふる初雪のあさこほり消ぬからへに霰たはしる

うち拂ふ羽かひの雪の寒き夜はつかはぬをしそね覺かちなる

二首。おかしきさまに候歟。

雪ふれは又も咲けり冬かれの山したのへのをはなくす花

今朝は又たれ跡つけて通ふ覽雪もてわたすきそのかけはし

二首。殊勝におもしろく候。まさりに候歟。

戀六首

いもにこひわかの浦松恨てもつれなき色に年そへにける

凡夫はなれ。ゆゝしく候歟。

秋田なるかひやかけふり下もえに思ふとはしれ跡はなく共

續古 戀をのみしつのをたまきいやしきも思ひはおなし涙也けり

二首。無レ難宜候歟。

くちにけりひる時もなきかたしきの涙の下のとふのすかこも

是は劣地候歟。

しなのなるあさまの山の淺からぬ思ひの末そ煙ともなる

ことによろしく候。

いもまつと山のしつくに立ぬれてそほちにけらしわか戀衣

高ことからゆゝしく候。

詠五十首和歌　貞應二年二月十日

春

林變ニ容輝一宿雪紅

紅のかすみにけさやにほふらん雪のはやしの春のはつ花

高心姿實難レ有候歟。

露暖南枝花始開

春の日の光りに匂ふ梅花みなみよりこそ露もをきけめ

是又宜候。

鑽レ沙草只三分許

秋はまたわくへき道と成やせん綠みしかき庭のわか草

氣霽風梳ニ新柳髮一

春きぬとつけのをくしもさゝなくに柳のかみをけつる春風

心姿とり〳〵に無ニ申限一候歟。

舊巣爲レ後屬ニ春雲一

白雲をのかすもりと契てや都の花にうつるうくひす

めつらしきさまに候へとも。すこし劣候歟。

江霞歸浦人煙遠

あし火たく難波の浦の夕煙浪ちへたてゝかすむ比かな

林中花錦時開落

立田山花のにしきのぬきをうすみ咲か散かにまよふ春哉

落花狼藉風狂後

花さそふ木のしたかせの吹まゝに猶時しらぬ雪そみたるゝ

三首。又尤宜候。同前候歟。

山腰歸鴈斜牽帶

立かへる雲ゐの鴈をおひにせる山のすかたそ春はさひしき

春情難レ繫夕陽前

夕つく日霞のしたにかたふきて入相のかねに春そのこれる

二首。いますこしさかりて見え候歟。

夏

竹亭陰合偏宜レ夏

ときはなる陰しけりあふさゝ竹の大宮人の袖そすゝしき

高尤よろしく候。

花薫紫麝凱風程

たか袖の匂ひを風のさそひきて花たちはなにうつしそめ劔

谷靜纔聞山鳥語

足引の山ほとゝきすしのふ也そのはなかこふ谷のひとむら

まことによろしく聞候。

松高風有ニ一聲秋一

松かけや身にしむ程はなけれとも風にさきたつ秋の一聲

不ニ是蟬悲一客意悲

夏ふかきもりの空蟬ねにたてゝなくこの暮は我さへそうき

二首。劣候歟。

秋

風從ニ昨夜一聲彌怨

きのふよりよはの松かせ音たてゝ恨そそむるあまのは衣

炎氣剩殘衣尙重

蟬のはのうすき衣も猶おもし秋の日數もなれぬこのころ

曉露鹿啼花始發

我宿の庭の秋はき咲そめて此曉の露そうつろふ

竹風鳴葉月明前

をとつるゝ夜はの嵐や更ぬらん籬の竹を出る月かけ

由來感思在ニ秋天一

身にしめし秋の夕のなかめより物思ふ我と成にけるかな

五首。心詞よろしく候無ニ申限一候歟。

綠草如今褒鹿苑

深草や秋ののらにも成はてゝあるしかほなるさをしかの聲

水底摸レ書鴈渡時

初かりの翅にかくるたまつさのかけさへみゆる山川の水

蔓草露深人定後

はらはねは更行まゝに露そをく草にやつるゝ庭の通路

蘆洲月色隨レ潮滿

みつしほにすさきの蘆もみかくれて月よせ返る三嶋江の浪

蘭蕙苑嵐摧レ紫後

むらさきにたか染置し藤はかまその色となく吹あらし哉

四首。又一字一句いやしからす。宜候歟。

冬

毎朝聲少漢林風

紅葉ちる梢の時雨よはるなり昨日はあらしけふは木からし

心すかたおもしろく候歟。

雪黏ニ林頭一見レ有レ花

時雨まてつれなき色とみしかともときは木なから花咲に鬼

面に雪とはみえす候なから。時雨まてと候に。心こもりて實にこゝろよりかたく候。彼からくれなゐに水くゝるとはなと同前候歟。

霜妨鶴唳寒無レ露

をく露のむすへはしろき霜の上に夜深き鶴の聲そさむけき

群源暮叩谷心寒

とちやらぬ氷のしたになみさえて谷の小川そ冬こもり行

人無レ更少時須レ惜

惜めとも老計りこそ積りけれあすはみそらの數ならぬみと

三首。又こゝろ詞すかた。いつれと難レ申候。落涙かなしく候。

戀

楊貴妃歸唐帝思

幻をうつゝ計になくさめてまたさめやらぬ夢のかよひち

年々別思驚ニ秋鴈一

秋ことに忘れぬかりの聲きけは立別にし人そ戀しき

寒閨獨臥無ニ夫聟一

獨のみねやのさむしろ打はらひあかし侘ぬる冬のよな〳〵

身化早爲ニ胡朽骨一

あかさりし都をこふる泪こそつゐにこしちの雪ときえしか

洲蘆夜雨他郷涙

夢にたにまたみしまえの葦のはに都戀しき袖のあめかな

五首。心すかた高相かねて。いかに申へしとも不レ覺候。
不レ可レ説事候歟。

雜

終宵床底見ニ青天一

かたしきや閨の板まのあれしより空もひとつに露そ置ける

蕭索村風吹レ笛處

笛のねのほの吹すさふ秋かせにとをちさひしき里の一村

ふえなとは。かゝる物にて候けるにや。

故山無レ主晩雲孤

人しれぬ山ちのおくに住なれて夕暮ことにかへるしら雲

晴後青山臨レ牖近

玉 窓ちかきむかひの山に霧晴てあらはれわたる檜原槇原

三千世界眼前盡

見渡せは幾雲ゐとも白雲のかきりをかきる夕暮の空

深洞聞レ風老檜悲

玉 苔深き洞の秋かせ吹すきてふるきひはらの音そ悲しき

人如ニ鳥路一穿レ雲出

とふ鳥の通ふはかりのしるへまて雲のかけ橋ふみみてし哉

暮鳥栖煙守ニ廢籬一

しとゝなく籬の竹のゆふ煙幾よかへぬる人すますして

觸石春雲生ニ枕上一

いはかねの枕の夢もさめやらてよこ雲かすむ春の曙

曉麗飛落峽煙深

曉の煙も深き山の邊におりしりかほ〔ひ歟〕のむさゝきの聲

付レ題ては無ニ左右一候得と。猶物によりて爲レ輕片點候。

未レ遁ニ春花夢裏名一

ちる花のあたなる春の夢のなもいとはすなからいとはしき哉

實心詞おかしくよろしく候。

儻得レ難レ逢一乘文

うとんけの法の花にもあひにけり菩提の種を植てける身は

一生西望是長襟

よにふれはいくそ思はおもひかは西を望むそなかき物思ひ

諫鼓苔深鳥不レ驚

音たえしいさめのつゝみとりなれて苔むす程に年そへにける

不老門前日月遅

年へても老せぬかとをさしてけり空に月日のすまん限は

詠二首和歌　貞應二年九月十三夜

閑中秋深

秋も今は深きよもきの下露もはらはてのみやしもと成らん

遠山紅葉

もみちするとを山鳥のをのつからたくひありける袖の色哉

曉月聞レ鹿

鹿のねにとたえかちにも成にけり夜わたる月の夢の浮橋

三首。こゝろすかたよろしく候。

詠古寺九月盡　貞應二年

行秋の名殘さひしき夕かな野寺のかねに殘るまつかせ

末句賓によろしく候。

詠寄竹祝　貞應三年正月五日

鶯のはつ春いはふ吳竹の千とせの色をわかともにせん

祝によりて尤よろしく候。

詠五首和歌　貞應三年正月廿三日

野外霞

春のきる霞につまやこもるらんまた若草にむさしのゝ原

この風情はいかにのこり候けるにか。

山間鶯

みよしのゝ山の鶯春かけてなけともいまたはなそ物うき

是は聊劣候歟。

橋邊花

花みよとたれわたしけん足引の櫻にまかふ雲のかけはし

寄松戀

たけくまのまつとはいはし年ふ共つれなき物と人も社しれ

寄水祝

いすゝ川たえせぬ水の水上も淸き流なてらささらめや

詠五首和歌　折句　貞應三年七月廿五日

女良花

小倉山道もまとはすなく鹿はへたつる霧にしをりをやせし

轡虫

雲かゝる月のをちかた晴やらてむかひの山に時雨降らし

駒迎

こぬ人をまつらかおきもむなしくて霞に浪はへたゝりに鳬

孔子影

くるとあくと忍ふ思ひや後のよのえたの劍の色にみゆらん

阿波國

秋風のはらひし宿はのとなりてくすのうら葉そ庭に殘れる

詠五首和歌　同隱題

萩花

うへあらし吹ぬる比はきのはなきみ山にしもそ月はすみける

小男鹿

浪こほるけさをしかもの床さえて玉もの池に冬はきにけり

荳

をのゝ山みやきまはらにみえつるはきり／＼炭をやけは成鳬

懸樋水

いかにせん空しくすくる駒のかけひのみつもりて老と成身を

庚申

南さす法のしるへにふたらくの岸へゆきつけかのえさる舟

年來隱題折句かゝる物にて候けると驚レ目候也。無二申限一候歟。

詠月前思故鄕　貞應三年八月十五夜

したひくる影は袂にやつるさも面かはりすなふるさとの月

詠冬景氣屬閑居　貞應二年十月廿七日

冬こもる里のあるしはこたへねと竹のあみとを敲く木からし

詠歳暮多風雪　元仁元年十二月廿一日

風ませにふるしら雪の積りつゝおいてふ年を急くはかなさ

三首。同宜候歟。

惣此中左右點片點雖レ難レ分申上候。猶愚意之所レ及聊事をも爲ニ申上一候。如レ此注進上候。地御製一切不レ見候之間。申不レ及候歟。唯同事還無レ念候歟。今此左右點之上言。其躰隨ニ長短一秀候歟。仍毎ニ御製一不ニ注付一候。只同事候歟之間如レ此候。以ニ此旨一可ニ申上給一候。

春五首　此以下以他本書加之

かそふれはなけきも老もつもりけりよそなる春を送り迎て

昔思ふくち木の柳なにゆへにみとりのかみをけつるなる覽

續古 山のはにやゝいりぬへき春の日の心なかきも限こそあれ

住すてし花の都の家櫻たれかかさしとおりやつすらむ

咲てちる花をもめてし是そこの嵐にいそくあたし世中

夏五首

もゝしきの庭の橘思ひ出てさらに昔を忍ふそてかな

あやにくになくや雲ゐの時鳥聲なき風そ思ふよな〳〵

ねをたえておふる五月の浮草のうきな計そ波にしつむな

あやめ草袖にかけても思ひきや長きねにのみ朽はてんとは

夏草のふかき思ひもある物をのれはかりととふほたる哉

秋五首

はつ秋のゆふへしらする白露は昨日の袖の涙なりけり

すゝきのゝ絲か末のはつ尾花なひくにつけてよる方もなし

こ萩はらうつろひはてし秋の色にあかすふるえの花をまつ哉

鴈のくるそなたの空をなかめても思ひつきせぬ嶺の朝きり

袖ぬるゝ秋をはあまたへしかとも月にはあかぬ心成けり

冬五首

はゝそ原しくるときけは我袖のかひなき色そ先まさりける

霜かるゝのへの葛はの心ちしてうらむるかひもなしや世中

人めよりやかてあれにし我宿のあさちか霜そむすほゝれ行

山陰にふるしら雪のきえやらて殘るうきみの末そ悲しき

行末をしらぬ我身のたくひ哉氷にむせふ谷川の水

雜十首

つらしとて人をうらみむゆへそなき我心なる世をはいとはて

いとへとてなる世の中もいとはれてうき身ににたる我心哉

行末のたのみはたれもありかほに待はむなしき月日成けり

徒にこたへぬ空をあふきつゝ哀あならとすくす成けり

續古 誰ゆへにちりに交はる光りそとはゝや神のいかにこたへん

うき身とも思へはいはし逢かたきみたのちかひを賴てしかは

よく思へあまねきあめの下なれとねなき草木は惠みやはする

昔よりうき世中ときゝしかとけふは我身の爲にそ有ける

ゆきとまる里を我よと思へとも猶戀しきは都なりけり

定なき程たに物を思ふかな末葉の露の消かへりつゝ

月前念佛

西へ行心に月の影晴てすてぬ光のちかひをそおもふ

月前述懐

なけくとて袖の露をは誰かとふ思へはうれし秋のよの月

月前無常

とゝまらぬ浮世の數によそへつゝ今夜は月をまとろまてみん

草名十首

野邊に出て誰家つとゝ折つらん春の蕨にましるいたとり

極樂の池のかさりといつかみんけふはひらけぬ胸のはちすは

夕立の名殘の露も消やらてまたたははなる庭の常夏

八重葎しけき思ひにとちはてし跡をはかれす秋はきにけり

年のうちに又さく花のなきまゝに菊の籬を猶そつくろふ

別路におふる葛はの露みれはきえぬたくひも又しられけり

あたにしく苔の莚のつゆけきは都みぬめの涙なりけり

神代よりくもらぬ空の日かけ草たえぬ末とはてらさゝり鳬

つき草の花にはすらし我衣しけき涙は露にまされる

いくしほもをのれかそむる色そかしなと紅のからあゐの花

木名十首

此比はあるしもしらぬ梅花春はみやこの梢のみかは

咲ぬとも誰かはしらん春霞たなひく方は山なしのはな

たちはなの袖に匂はぬ時たにも戀しき物は昔なりけり

朝霧のなみまにみゆるはまひさきさやかに秋の色はわかれす

深山邊やま弓よりこき色そなき紅葉は秋のならひなれとも

時雨つるこのてかしはの二おもてとてもかくてもぬるゝ袖哉

埋るゝ木のはか下のみなし栗かくて朽なん身をはおします

しきみつむ心のおくの山なくは淺き歎きをなにかこらまし

杉のかとさゝむとまては思はねととふ人なしに苔とちて鳬

續後 光をは玉くしのはにやはらけて神の國とも定めてしかな

虫名十首

山里の花のそのふにまふてふの色々まかふ春の夕暮

急雨のくもよの螢數みえて風吹すさふ庭の夏くさ

我宿の庭の夏草露かけて涙さきたつ松むしの聲

日くらしの鳴夕暮の山かせに色をもまたてちる木のは哉

冬かれのよもきかもとの蛬いけるはかりはけにそかひなき

神かきは祈るいのりは遲けれとゐもりのしるし猶やみゆ覽

蜻蛉のをのゝ草葉のあれしよりあるかなきかととふ人もなし

家をすてぬ心は同しかたつふりたちまふへくもみえぬ世なれと

世中を思へはたれもひをむしのけふの命の夕暮の空

軒ちかき籬の竹の末葉よりしのふにかよふさゝかにのいと

鳥名十首

春もいまたあさるきゝすの跡みえて村々のこるのへの白雪

夏の夜のさてもあくるに習てや我かとたゝくくゐな成らん

別こし都のかたのことつてもなをまたるゝは秋のかりかね

芦の葉につなくうきすも氷つゝすみあらしたる冬のにほ鳥

み山への嵐にうつるこからめは時雨に殘る木のはとそみる

いつもきくおほをそ鳥の聲までもねさめ悲しき有明の月

足引の山深くすむみゝつくは世のうき事をきかしさや思ふ

このうちにまたすみなれぬひえ鳥は心なくても世をすくす哉

はしたかのとかへる山にすみなから淺き心はならはさりけり

山鳥のをろの鏡にあらねともうき影みてはねそなかれける

獸名十首

此ころのしつか田かへすからすきのうしと思ふも力なのよや

谷深みふするのかるもかきたえてなれし都そうとく成行

霧ふかき嶺ゆく鹿の友をなみ迷ひてのみそねはなかれける
きつねたにかけをうかゝふ山川の氷の上をふみてのみゆく
世を忍ふ心のうちのあなねすみやすくいつへき道もあるらし
つきもよに梢もとむるむさゝひの聲きく時そ夢はたえぬる
あらくまのすむ奥山に入しよりおそろしき世を忍ふくるしさ
心をは北の翁にならへともまた立かへるこまたにもなし
月影に命をかへしさるよりもしつみはてぬる我身成けり
人心てかひのとらにあらね共なれししもなとうとく成らん

月三首

なゝとせの秋のこよひなといたつらに獨しみれは月もうらめし
我袖の物なりなから秋の月くもるはえこそとゝめさりけれ
なをさりに過し心のむくひにやかゝる旅ねの月をみるらん

名所春

よしの山また冬なからかすめるや麓の春のはしめなるらん
時しらぬたくひも今はいかゝせん朽木の柚に霞たなひく
舟つなくかけも綠に成にけりむつたのよとの玉のを柳
續古 霞にはふしの煙もまかひけりにたる物なきわかおもひかな
三笠山ぬれぬ草木のみとりさへよそに染なす春雨の露
難波めの芦火のさかもなかり鳧をのれとくもる春のよの月
菅原やふしみのあらたうちかへし民のしわさになれる此比
ときは山いかなる春のけしきそと花より外も猶そゆかしき
續後 山姫の花をりかくるかつらきの霞の衣はるそかさなる
宮木もりなしとや風もさそふらんさけはかつちる志賀の花園

同　夏

たちかふる衣の關のせきもりは昨日の春をえやはとゝむる
浪のゆふかくる比とやうの花のかけにかくれぬ玉川のさと
かしは木の杜の下をはおりしきてやかつみかみを祭る比哉
大原やをしほの山の郭公昔にあらぬねをやなくらむ
しるしあるみわの梢もみえわかすいつれも杉の夏のみとりに
やつれゆくすかたの池の菖蒲草うきねはかりを袖にかけつゝ
吹かせに昔をのみや忍ふらんくにの都に殘るたち花
あけはてゝしはしも見はや玉くしけふたみの浦の夏の夜月
なつのこる玉江のかりにとひてみんかく古鄕は忍ふ物かと
き舟川曉やみもなかりけり月に螢のかけをかへつゝ

同　秋

春日のの荻のやけはらいつのまにうはゝに秋の風かよふ覽
いせの海ふかき契のまゝならは今夜影みん星あひの濱
露なから秋まちえたる萩原のふる枝の萩に風なふれそも
花薄下にかよひし小男鹿も聲ほにいたすいなみのの原
久かたのかつらの里も有物をなとや宮この月はこひしき
千はやふる神もや秋を契るらん木のま淋しき月よみの杜
逢坂の關のわらやは跡もなし秋のしらへを松にのこして
津の國のなにはかくれぬ弓はりのはつかの山に殘る月かけ
續古 深草や誰ふるさとしらねとも昔忘れす衣うつなり
鐘の音によもきか露そ置まよふとよらの寺の秋の夕くれ

同　冬

色とりし秋の木のはゝ散はてゝ殘るゑしまの松の一ふて
かくはかりしくるゝ色やなかる覽宮この人のころもての森
霜さむき籬の嶋の冬枯に浪の花もや色かはるらん
木枯に下葉殘らす散はてゝけにもる山の冬の月かけ
見わたせはましる薄も霜かれて綠すくなきゐなのさゝ原

宮城のやかれはたに（なき）萩か枝におれぬはかりもふれる白雪
み狩せしさかのはさとにすみなしてをのか家々冬こもり（せり）
すまの浪あかしの月もよ寒にてをのか浦々千鳥なく也
冬さむみゆるきのもりにゐる鷺の夫ともみえぬ雪の夕暮
老といひてかさなる春もあすか川はやきせにのみ行月日哉

同　戀

たのめこし人の心は通ふやととひてもみはやうやむやの關
名とり川うき名にぬるゝ戀衣逢せまつまに朽やはてなん
あまの原あけてくやしき契りより思ひしらるゝ水の江の筥
市人のそめししかまのかちよりもふかき契の色はみせてき
はふくすの根は末もとをらねは心にまよふあしからの山
いくよとか袖のしからみせきもえん契し人はをとなしの瀧
我戀はかたのゝ萩に置露のうつろふまゝにてにもたまらす
なゝひろの石よりも猶つれなきはひかれぬ人の心なりけり
行あはむ程をはしらす住吉の松にたえまのちきのかたそき
うつの山過にし夢の面かけに見はてぬ夢はうつゝ成けり

花光契萬年

梅花匂ひはつきし万代の春のかさしと植置しかは

以長夜月置末句二首

なかむれとしはしなくさむ影もなしたか僞のなかきよの月
此頃の涙は秋のゆへならすくもりなはてそなかきよの月

戀二十五首

寄　風

難波めのあしひの煙たきまさりなひかぬ方へなひく鹽かせ

月

此暮とまたよし物を秋の月契しまゝのちきりなりせは

雲

たゆたひに思ふ心もさほ山の色にはみえすよその白雲

露

よひのまは出て拂はんと思ひしにさきたつ袖の露はあやしき

雪

年ふれと跡なき人の契ゆへつもりはてぬる庭の白雪

山

深くのみ思ひ入かなこしかたをまよふ山路となに歎らん

河

明日香川あすも有とや頼けんけふは逢せにかふる命を

野

すゝきの小花かもとにしほれても思ひの露そ置所なき

浦

朽はつる袖しの浦の浪ならはうきになかるゝ名をも殘すな

關

あしかきのよはのまもりや心あらん忍ひをゆるす川口の關

松

年へてもまつとは誰かうへをきしつれなき色に人ならひ皃

櫻

さためなき人の心の花櫻さくといふまにうつろひにけり

竹

（續古）吳竹のよゝの契もしられけりうきふししけき戀のむくひに

萩

小男鹿のたちののこ萩露かけて消なん後を誰にかこたん

葛

眞葛原うらむる色をしらせはや秋にはあへぬ身ともこそなれ

鶯

ねにたつる心のとも丶わすられぬなけきにうつる春の鶯

螢

きぬ〳〵の曉やみにとふ螢まよふ心のしるへをしへよ

鴈

初かりのわすれぬ秋のこゑきけは［　　　　　］

蛬

獨ぬる枕としるやきり〳〵す長きおもひの行衞とふらん

鴛

我戀は氷にすたくなし鳥のむすほ丶れ行ねをのみそなく

衣

まちくらし恨あかして置露のしろあさ衣ぬれ〳〵そきる

枕

敷妙の枕のうへにむす苔も獨ねよとや生はしめけん

鏡

増鏡戀しき人はみえなくに我おもかけのなにうつるらん

燈

窓ふかき秋のともし火消やらてもゆるはむねの思ひ成けり

席

ぬるからちにみし面影も忘られてうゝゝにあかすよはのさ筵

韻字六首

軒

世にふれはかやか軒はの月もみつしらすや（ぬハイ）人の行末の空

繁

幾度か秋の袂の朽ぬらんしけきなけきの露の下にて

猿

山深くすみける程もしられけり月夜のさるの窓ちかき聲

魂

あくかる丶我たましゐの行へをも千里の外の月や知らん

門

にしへとやみのりの門をしふ覽さきたちて行秋のよの月

痕

かよふへき跡ありとたに忘れなんとはれぬ庭を苔にまかせて

朝鶯 三首

鶯のなけともいまた明やらて横雲ゆるき春の大そら

夕霞

ゆふ霞たなひきわたす山のはにみとりの松のかけそ少なき

春戀

恨こし人の心もとけやらす袖のこほりに春はきぬれと

此御集。以二勅本一令二比挍一畢。尤可レ爲二正本一者也。

永祿八年乙丑仲秋念三

正二位藤原爲益判

群書類從巻第二百二十九

和歌部八十四　家集二

砂玉和歌集　後崇光院御集

京にすみ侍し比應永(後小松)十年九月九日伏見殿(榮仁)よりめされし三首の歌

菊帶雨

雨そゝく籬のきくの花の枝に置そふ露は千代の數かも

曉　鹿

明かたはなれもや月をおもひいるみ山に鹿の聲かへるなり

契絶戀

瀬をあさみ絶けるものを山水の流ての世となに契けん

應永十一年五月廿日萩原殿にてめされし三首の歌

山家鶯

鶯のなくねにのみやともなはん人をもさそへ春の山里

契久戀

契りしを命にかけていつまてか憂にたへたる世をもすくさん

草庵雨

思ひある葎の宿の夜の雨に猶ぬれまさるかたしきの袖

同年八月三五夜にめされし五首の歌

漸昇月

山のはの木のまをわくる月影の程なく松の上に出ぬる

岡上月

岡のへやいつともわかぬ松のはに秋しる月の影そもりくる

月似鏡

雲はるゝ遠山鳥のおのへよりかゝみをかけて出る月みゆ

旅泊鴈

行鴈に都を思ひこしの海にうきねするそとことゝやつてまし

寄澤戀

わきかへる心よいかに鳴澤の音にたつへき思ひならぬを

おなし十三夜にめされし三首

月

名にしおふ月も今はの秋ふけておしと思ふ夜そ今宵成ける

戀月

あちきなくよるたにもらせ忍ひねは月ゆへぬらす袖にまかへて

雜月

月をたに心のまゝになれて見むうき世の秋の思ひ出にして

おなし十月廿日人麿影供に召れし歌

落葉

梢にて染し名殘のあかすとや落葉からへに又しくれぬる

冬　月

秋もかく身にしむ色は見さりしに枯野の霜に氷るよの月

名所戀

契置しそのかねことを忘れすはみのゝお山の松としらなむ

應永十二年七月七日めされし三首

七夕風

ひこほしの妻まつ秋の初風にうらめつらしき天の羽衣

七ゝ獸

七夕をなれもうらやむ心とや妻まつ暮に鹿の啼らん

七夕恨

天川流てたえぬあふ瀬にも恨や殘る秋の一夜に

同年九月十三夜三首めされし歌

月前露

草の原露のやとりを尋てもとふ物とては秋のよの月

月似鏡

松浦川水底かけてすむ月を浪にしつめし鏡とそみる

寄月待戀

とへかしな今夜はことに待らむと空にみゆべき月のけしきを

應永十三年夏の頃有栖川殿(榮仁)へまいりてしはらく侍し時閏六月五日卅六番歌合冷泉中納言爲尹卿合點判詞なとめされしによめる

夏　月

月やとる岩井の淸水結ふ手のあかても明るみしか夜の空

夏　山

夏ふかきは山に秋を先こめて凉しくおろす峯の松かせ

戀　草

いつまてか思ひ亂てしの薄心のいろのほにもいつへき

戀　鳥

しのひこしうき名たかしの濱千鳥ふみ通ひつる跡やみえけん

雜　色

君になを千世の齢を松か枝のときはの色をゆつれとそ思ふ

雜　船

難波かた芦苅舟のいつまてかかゝるうき世を思ひわたらん

おなし閏六月十一日かさねて五十番歌合侍しに判者冷泉中納言と飛鳥井中納言入道(雅縁)と勝負付侍し

谷　鶯

霞つゝ古巣もみえぬ谷の戸をねにあらはれて出る鶯

落　花

月かけにほのみし花のかつちりて明る木末は雪の村きえ

夕　立

ゆふたちの過つる峯は日影みえて村雲うつる山そ暮行

萩　露

花の色もえならぬ萩の匂ひかな村雨そゝく露のしめりに

岡紅葉

もみちする岡へにましる松のはの秋ならぬ色も秋はみえけり

朝　霜

見し秋に寂しき色はつきにしを枯野に殘す霜の朝明

寄風戀

思へたゝこぬ夜更行秋風はいかに涙をさそふとかしる

寄衣戀

夢にたにせめてやあふと小夜衣待よはる床にかへしてそぬる

羇　旅

結ひつる草の枕の名殘さへ月ゆへおしき野へのあけほの
　左點　冷泉中納言
　右點　飛鳥井中納言入道
同年十月廿日人丸影供にめされし五首
櫻
花のうれにしつめる月は影おちて明る櫻の色そえならぬ
時鳥
なれのみそねをもかたらふ時鳥身をうの花の宿の夕暮
月
あくかれて行衞もしらぬ空にのみ心をやとす秋の夜の月
雪
月と花のなさけいつれと思ひしも心に迷ふ雪のあけほの
初戀
思ふよりいつしか袖に置露は君か行衞や秋のはつかせ
應永十四年三月三日めされし三首
三月三日
から人の心もけふそしら波にうかひて匂ふ花のさかつき
水上落花
大ゐ河いはせの浪による花の雪まをくたす春の筏士
竹契追年
千世こむる竹のそのふの幾年もかはらぬ色に君そさかへん
同年九月十三夜にめされし三首
月前菊
秋かせの露うち拂ふ菊のうへに猶かけとまる月そいさよふ
田家月
をしかなく鳥羽田の面に霧晴て月もいほもる秋の山風

寄月思戀
待宵のとはぬ思ひのいく思ひ月はしるやとうれへてそなく
おなし年十月廿日人丸影供にめされし
時雨
身を秋の露ほしはてぬ袖の上をしほりなそへそ今朝の時雨に
思出戀
我のみやこひもしのはんもろともにみし夜の月を思出にして
山家夕
松ふかき軒はの山は暮はてゝむかひの峰に殘る日のかけ
應永十六年八月十五夜菊亭にて歌合侍しに判者冷泉
中納言爲尹卿
秋風
しらさりし風のやとりは荻のはに有とも秋はなにゝうらみん
秋露
ものおもふ袖こそ露のやとりなれ草木はなへて秋風そ吹
秋月
あくかるゝ心を空にやとしをきてかたらひあかす秋の夜の月
秋雨
露なから桐の一葉はかつちりて木末秋なるむら雨の空
秋鹿
夕されは鳥羽田にかよふさをしかの聲吹をくる秋の山かせ
秋鴈
天津鴈都の秋をしたひきて田面の月によるとなく也
秋虫
ねにたてゝ我はなかねとうき秋の思ひをかはす虫の聲かな
秋花

露むすふ小萩か花の夕しめり月のみ秋となに思ひけん

穐霜

妻こむる鹿のたちとやあらはれん初霜かれのむさしの原

秋水

月かけのやとりにつけて鳴のたつ野澤の水にすむ心かな

秋祝

ちゝの秋猶色かえぬ松よりもときはかきはの君か御代かな

穐旅

秋風やさてもとはまし草の原露の旅ねにおもひきえなは

秋戀

おしと思ふ今宵の秋の月にしもとはぬは獨ねてあかせとや

秋述懐

山ふかく思ひもいらぬつれなさよ世をあきはつる有明の月

秋雜

時しもあれ秋の半におとこ山月に御幸や契をきけん

おなし年八月廿日庚申の會に

秋月

立田姫そむるにもあらぬ久かたの月のかつらも秋そ色そふ

穐露

をく露も有かなきかにかけろふの小野の淺茅に秋風そ吹

秋鹿

御田やもりうちぬる夢をさをしかの我しも啼て驚かす哉

秋水

秋も猶手にや結はん月影の涼しさあかぬ山の井の水

秋雜

玉ならぬわかの浦はのもくつにも光はやとせ秋のよの月

おなしとし九月重陽の歌に

菊初開

昨日迄つほみし菊の宵のまに咲るは花もけふやまちけん

尋戀

尋ねよといひししるしの杉はあれと人社みえねみわの山本

田家水

まかせつるかけひの水は猶そもる苅田の庵は月もすまねと

同年九月十三夜菊亭の會人々よませて歌合にかきつかひて飛鳥井中納言入道に判せさせしによめる

早春

民の戸も雪消ぬらし玉ほこの道ある御代の春をまちえて

春曙

山櫻ほのみえそむる横雲のひまこそ匂へ春のあけほの

見花

山さくらあかぬ心のまゝならは我世を花にくたしてやみん

曉郭公

月も猶ふくるやまちし時鳥有明の空にもらす忍ひ音

夕立

をはつせの山かきくもる夕立にふしみの暮は風そ涼しき

萩露

小萩原分つる野への秋風に思ひをかるゝ花のうへの露

河月

貴舟川いはせの月に浪こえて玉ちる影に秋風そふく

庭紅葉

なをさりに庭の梢や時雨けん染もつくさぬ薄紅葉哉

鷹狩

狩くらし道ふみまよふはし鷹のとかへる山に月をまつかな

閑中雪

とふ人も哀とみすや閉はつる蓬かかとの雪のあけほの

寄海戀

いはみかた千ひろの底も限あれはふかき恨を何にたとへん

寄秋戀

待かねしみとせもしらてにゐ枕あたし心といかにうらみん

眺望

藤代の御坂は雲の上にみえてきの海遠く有明の月

神祇

哀とは神もみすやはいたつらに心をそむる住吉の松

同年十月廿一日菊亭にて庚申まもり侍し人々に歌よませて歌合にかきつかひて常光院堯尋法印に判の詞點など申侍りしによめる

歳内立春

世の人のいそく心にさそはれて年も暮ぬに春やきぬらん

春月

かすめるを月やあらぬとうらむれは我身一つの涙成けり

待花

咲やらぬ花まつ頃の春山に人たのめなる峯のしら雲

葵

人なみに頼みをかくるあふひ草神のめくみも我をもらすな

杜郭公

一聲はしのたの杜のかひもなく千枝にかたらへ山ほとゝきす

早秋風

夜のまより軒端の荻に忍ひきて朝戸明れは秋かせそ吹

稲田

雨はるゝ鳥羽田の末の秋風にいなはをこゆるよとの川浪

社頭月

男山袖にうつりしいにしへの光もかくや秋の夜の月

夜雪

月かけのかすまぬのみそ春ならぬ梢の雪ははなの曙

寄野戀

あふ事は片野のみのゝかりにたにとはれぬ鳥のね社なかるれ

寄原戀

戀衣雨にもまさる涙かなみやきか原の露はわけねと

寄湊戀

見せはやな身はうき舟もよるはかり涙のさはく袖の湊を

葦間鶴

和歌の浦や葦邊のたつの浪風にきこえぬ音をはしる人もなし

寄日祝

君か代はあまつ日影の曇なくてらん限はつきしとそおもふ

伊勢へ法樂の歌とて人のすゝめ侍しに

翫花

折かさす袖に匂ひをうつしてもあかぬ心の花にしみぬる

初冬

神なつき時をたかへす天つ日のかけものさむき冬を告也

忘戀

かれねたゝ忍ふにもあらぬ草の名よ人は軒端に何しける覧

應永十七年三月盡に菊亭にて歌合侍しに判者冷泉中納言

初春

淺みとりはるになるてふ世の色は山も霞て鶯そなく

海邊霞

春はなを玉もかり舟よせかねつ霞にたとるわかのうら浪

雪中鶯

うちきらし梅のたち枝に降雪を花のちるとや鶯のなく

梅薫月

にほひこそしるへともなれ梅花色をはわかすかすむ夜の月

春曙

明やらぬ外山の霞ふかけれとたちもらさるゝ花の色哉

夜歸鴈

行鴈もなさけをしらはかへらめや月に花ちるあたら夜の空

山華

よしの山花より外の梢までおもかけ匂ふ峯のしら雲

花未飽

櫻はなさらぬ別のなかりせはあかてや千代の春も馴なん

花如雪

山さくら分こし雲ばかつ晴てかへさはあらぬ雪のかよひち

三月盡

鶯もけふはものうき聲す也なきもとゝめぬ春を恨て

おなし年七月七夕法樂に歌合し侍　判者飛鳥井中納言
入道

春日

朝つく日霞をいつる外山よりはるの光も四方に匂へる

秋煙

秋はまたあさまの山にたつ霧も煙になれてみやはとかめむ

春夕

思ひそめしあけほのよりも櫻はな心うつろふゆふはへの色

冬山

峰つゝき木のはを送る山かせにしくれてめくる谷陰の里

夏浦

さみたれに浦のとまやも浪こえて軒端によするあまのはし舟

雜玉

から人のうきみしつみし白玉もつゐに光やかくれさるらん

雜書

數をくふみ見るたひにもろこしのかしこき人の心をそしる

戀舟

つゐにさていかなるえにかよりはてん芦分舟のさはる契は

おなし年八月十五夜によめる

初秋月

露たにもまた置あへぬ初秋に月の桂のはや色そそふ

澤邊月

所から月にあはれやまさるらしふしみの澤にしきもなく也

暮秋曉月

長月もやゝ更てゆく有明に秋ををしかそ聲もおしまぬ

寄嵐戀

たのめつる人はあらしの音信を心のまつにこたへてそ聞

寄草戀

うき人の軒はの草の忍ふにもあらぬ忘の名さへうらめし

寄衣戀

まちよはりせめて夢にもみゆやさてかへす衣の恨てそぬる

應永十八年四月に伏見殿へまいりて今はさふらふほ
とに御歌の會しけくて月次の御會によめる

曉梅

霞とのみちりかふ梅もおたらよの月さへおしき春の曙

深夜千鳥

小夜ちとり月もふけゐの恨てやかたふく跡に音をはなく覧

山家

君になを千年をちきれふしみ山代々へし跡の庭の松かえ

月次の御會によめる

郭公頻

ことはりや聲もおしまぬ時鳥さ月も今はありあけの空

寄船戀

まほならぬ苫まかくれの捨小舟こかれわふ共人はしらしな

羇中衣

しほるとも露ははらはし旅衣馴し都の月しやとれは

おなし年七夕法樂によめる

七夕雲

天河雲なへたてそ七夕のあふせを水にうつしてもみん

別戀

いかにせむ月もわかれの明方にあかぬ名殘のおしきのみかは

寄道雑

玉ならぬ藻屑なりとも和歌の浦の道ある御代に名を殘さはや

おなし年八月十五夜に

月前霧

木々の色山のすかたはへたつとも月をはこめぬ秋のゆふ霧

關月

月かけのもらすは何にうき秋のすまの關やに心とまらん

月前鶉

深草の里とふ月のあはれをも獨うつらの音にや立らん

おなし年九月十三夜に

風告秋使

吹風の荻のうは葉に音せすはめにみぬ秋を何にしらまし

欲顯戀

くちねたゝあふせもしらて名取川身の埋木は顯れんもうし

寄身述懐

今よりは心にはれよ夜半の月うき身を秋の涙さそはて

おなし年重陽宴に

菊帶雨

うちしめる色もえならぬ匂ひかな村雨そゝく菊の上露

寄木戀

つれもなきたくひとみれはうき人のなかむる庭の松も恨めし

寄山戀

あふ坂の山よいかなる戀路にて憂身はこえぬ關となるらん

おなし年十月廿日人麿法樂に

落葉深

霜ならぬ木葉にたにもかよひちの嵐にたゆる冬の山里

水邊冬月

川風の吹さゆる夜はしら浪のこほれる上にこほる月影

名所戀

夢にたにあふ夜もしらていたつらに獨ふしみの里の名もうし

應永十九年九月重陽の會に

籬菊知時

おりをしるなへての花の中にしも菊はけふをや待て咲けん

〔頭註〕今年八月廿九日稱光院受禪

忍不逢戀

ふみなれぬ忍ふの山のかよひちにまよふ心のおくをみせはや

松契追年

ふしみ山年ふる松も更に又ちよをは君に猶やちきらん

おなし年九月十三夜によめる

月前煙

藻鹽やくあまのしわさも心なき煙をすまの月やうらみむ

寄月逢戀

今宵しも名にあふ月に新枕わすれぬふしのかたみにやせん

花洛月

たくひなや花の都の秋の空さそな嵐の月はすむとも

寄月旅宿

馴てみし都の月にとはれすは旅寢の秋や猶うからまし

應永廿年九月十三夜によめる

野月露深

深草の野への月かけ秋更て露の夜寒に鶉なく也

河月似氷

月やとる川瀬の波の音せすは秋もこほれる渡とやみん

寄月顯戀

いかにして世にはもれけん面影も朧月夜にたとる契りを

同年の冬万葉詞百首當座に人々によませられ侍し中によめる

春

かくしさけらは

たくひなき色やそはまし櫻花柳か枝にかくしさけらは

かれすなかむる

日もかれすなかむる花はうつろへと心そちらぬ春の夕かせ

その日のかきり

思ひ出にその日のかきりしたふらし花みしたひも別路の春

夏

いつとしりてか

待わひてなかなく頃の時鳥いつとしりてかつれなかるらむ

やすくぬる夜は

いもやすくぬる夜はあらし丈夫か小鹿待あかしともしする比

この夕風に

入日さす山路の木陰凉しきはこのゆふ風に秋やちかつく

秋

すたれうこかし

軒端あれてすたれうこかし吹風にねやの奥迄月そいさよふ

いそきなあけそ

心してこよひ一夜は天の戸もいそきな明そ星合のそら

朝霧こもり

山陰に朝きりこもりたつ鹿の聲吹もらす峯の松かせ

色つきぬらん

秋もやゝしくるゝ雲のたつた山さそな梢も色付ぬらん

冬

小松にみゆき

おれやすき木末をうつむ便にて小松にみゆき猶つもり皃

あさ戸ひらかん

いかにして朝戸ひらかむ呉竹の雪おれとつる窓の明かた

草木はなさき

野も山もかすまけいかに春ならん草木花咲ふれるしら雪

戀

こゝろにむせひ

しられしな心にむせひこかるともうへにみゆへき煙ならねは

なれはすれとも

俤になれはすれともみし人の行衛はそはぬ月そかひなき

行もとまるも

有明はかたみなわけてやとりけり行もとまるもしほる袂に

雑

雲のなみたち

尋かねぬ蓬か嶋に行舟よ雲の波たちしらぬ鹽ちに

たつかけるみゆ

あさりする入江の芦邊汐みちて浦路はるかにたつかけるみゆ

旅のやとりに

心をはたちもとむなよ世中は旅のやとりに住やはつへき

きのふのくれの

夢うつゝ思ひもわかぬよの中はきのふの暮の浮雲の空

おなしとし十月廿日人麿影供に

冬　雲

さのみやは時雨はかりにさむからんこほれる雲の雪け成らし

冬　水

行なやむいはせの水に音かへて氷をたゝく松かせそ吹

冬　鳥

天津鴈かり田の霜にあさる也稲葉におりし秋や忘れぬ

冬　戀

あきはつる契りも今は淺ちふの通ひし道も霜枯にけり

冬　雑

徒にねをなくわかの浦ちとり世の人なみに跡もつけはや

田舎人勸進の歌によみつかはす

澤　螢

川ちかき伏見の澤にとふ螢をちのかゝりの影かとそみる

夕　顔

たそかれにそれともみえぬ夕顔は折てそ花の名をもしりぬる

見　戀

つれなしとみるにもやかて涙そふ人の心やあり明の空

同年十一月卅日重有朝臣すゝめ侍し十首

天　象

曇なき月日をみても天の戸のあけし神代な猶あふく哉

地　儀

ふしみ山麓のこかけ水にみえて松のうれこすうちの川浪

雑　木

夢の世は花も紅葉もとまらねは松をかはらぬ友と社みめ

雑　草

住よしの松に思ひを手向草露のめくみも神はかけすや

雑　鳥

和歌の浦や芦間隠れにゐるたつの世にも聞えぬ音をもなく哉

雑　獣

有明のかたふく峯の木末より嵐におつるさるの一聲

雑　虫

涙ゆへくもると月を恨ても藻にすむ虫の名をやかこたん

居　所

山陰にやとをしめても心をは憂世にかへすみれの松かせ

釋　教

いかにして只一ふさの花の色にやかて悟をひらきそめけん

神　祇

御裳濯のなかれをうくる君か代は神に任てたえしとそ思ふ

應永廿一年端午の會によめる

菖　蒲

あやめふく軒端に風のにほはすは忍ふの綠色やまかはん

梅　雨

露たにもにほはぬ梅の青葉のみしけりて深き五月雨のころ

山　居

都にてならはさりしに松かせの心をしほる山かけの里

おなし年七夕法樂に

七夕雨

たなはたの妻まつ宵の村雨やあはぬさきより袖ぬらす覽

七夕朝

たなはたの秋を待こし程よりもけさの心はくれや久しき

七夕夜

月の入空をなかめてたなはたの袖□ほとを思ひこそやれ

七夕鳥

秋をへてより羽をかはす鵲はほしのあふ夜や契をきけん

同年閏七月廿七日諏訪明神法樂百首和歌仁科入道勸
進によみてつかはし侍る

春　月

木のまもる心つくしも身にそしむ花のかほりにかすむよの月

開郭公

一聲はをし明かたの時鳥月もなこりの空になくなり

積　雪

松なれやうつむ梢も高砂のおのへになひく雪の一村

同年九月十三夜によめる

月

月よいかに大和もろこし二夜迄かゝる隈なき名をとゝむ覽

月前戀

うき人の是もかたみの行衞ならはやとれ幾夜も袖の月影

月前雜

おりにあふ御幸に神もいかはかり今宵心のすみよしの月

同年十月人麿影供に

春天象

淺みとりこのめも春の雨の中にかすめる野へや草の下萠

秋植物

長月や花のちくさはうら枯てもみちにとまる秋の色かな

冬動物

はし鷹のをふさの鈴のなら柴に馴たる鳥やたちかくるらん

戀雜物

更ぬとやねよとのかねも哀なりさらても今は待よはる夜に

同年霜月十六日當座人々に歌よませられし時よめる

朝落葉

月のこるあさけの空のくもらぬは風にしくるゝ木のは成覽

寒草繞

野邊の色は霜かれなから村すゝきほのかに殘る秋の俤

被忘戀

契りこそかはりはてゝも忘しとちかひし神を思ひいてすや

山館竹

我友とうへてみ山の柴の戸にうき世へたつる軒のくれ竹

應永廿二年三月盡五十首の中に

暮春霞

かすめたゝ朧月夜のわかれたにをし明かたの春のなこりに

暮　春

ねにかへる名殘をみせて木のもとに花のかうすき春の暮方

暮春鳥

なきとめぬ春の別を恨てや身をうくひすの谷に入らん

名所戀

最上川あふせも今や稻舟のしはしはかりをいつとたのまん

寄鶴祝

をのゝえのくちし所を君かすむ山路にしめよ千世の友鶴

同とし二月七日菊亭梅賞翫に人々によませし懷紙に
書てつかはし侍

庭梅盛

萬代を松に契りて久にへん宿もさかりの庭の梅かえ

梅薫風

梅かかをしるへにとはむ故郷に我身もさそへ庭の春かせ

寄道祝

糸竹のたへなる道もさらに今かしこき君か代にそさかふる

同年七月三日當座三首の歌

早秋風

露よりも先やをかまし秋立てすゝしき風にならす扇を

早秋月

雲間よりほの三日月の影にさへはや哀そふ初秋の空

曉述懷

なかめつゝ思へはかなしいたつらに我よもふくる有明の月

ある人の重有朝臣によませし歌をかの朝臣にかはり
てよめる

萩露

宮城野や分行袖に露おちてそめぬにうつる萩か花摺

夕　鹿

ゆふ山や月まつほとの木のまより嵐に出るさをしかの聲

久　戀

年もへぬ契りしことは久かたの月をいつまてかたみ共みん

同年九月十三夜によめる

月前露

秋はたゝ袖こそ月のやとりなれ草木の露は風しほる也

月前契戀

うき人もさすかとひける今宵こそ月にめてたる契成けれ

寄月旅

旅人のいくやとかはる野山にもともなひすてぬ夜半の月哉

同年九月廿九日大通院（榮仁）指月庵に御座ありて詩歌
を合せられしに雨中惜暮秋といふ事を

長月や秋もあらしの夕時雨そめてもおしくちる木のは哉

おなし九月盡に

秋　戀

こひしたふ人の行衞や秋の月そふ面かけになみたおつなり

待あかしこぬ夜の數もかくはかりつもる恨を鴫のはねかき

うき人の契かれ行道芝のかよひし中は秋かせそふく

雜　秋

都人とはゝ哀やまさきちる深山のあらし秋ふくるころ

おなし十月人麿影供に

寒草霜

をしなへて千草かれ行霜の下にうつろふ菊そ秋をのこせる

戀

なをさりにたゝいひすつる言のはも思ひ思はぬ色はみえ鳧

應永廿三年二月七日御歌始によめる

竹間鶯

鶯の御垣の竹にうつるより君にそ千代の春は告なる

梅薫袖

手折かと人にとはれて梅かかをうつす嵐や袖にこたへん

寄松祝

ふしみ山代々をふる木の松かせは君をちとせと聲よはふ也

同年三月盡人々に歌めされて歌合にかきつかひて飛鳥井中納言入道に判せさせられしによめる

落花

山櫻若のみとりに散しきて庭にも花の青葉をそみる

款冬

又來むと井手の山吹契りてもこたへぬ花に蛙なくなり

暮春

花鳥のあかぬ色音を思ふにも春にわかれぬ憂世ならはや

春戀

しらせはやみ山かくれの初櫻ほのみし色にうつるこゝろを

秋戀

身を秋の契りかれ行道芝を分こし露そ袖に殘れる

旅泊

こと浦にかゝる月をやなかめこし明石のとまりいつか忘れん

おなし年の九月十三夜に月前露

月かけのやとらさりせはうき秋も猶山しはの露深き庵

橋月

月影はむかしのまゝのつき橋にいくよの秋をかけてすむ覽

月前夢

たれかけに夢もむすはむおしと思ふ今宵ねぬへき月の影かは

同九月盡に暮秋雨

長月や末はの荻もうちしほれ哀をくたく雨の音かな

暮秋契戀

さし櫛のあかぬ契りに野の宮の別の秋をしたひかねつゝ

暮秋祝言

里人のにきはふ秋は呉竹のふしみの小田をかりおさめつゝ

同十月廿日人麿法樂に山初雪

都にはしくれやすらん山里の今朝初雪を人にみせはや

神樂

岩戸明しその神わさないかにしてうけ傳へけんあさくらの聲

祈戀

常陸帶神のしるしははやみえつ思ふかことをなにといはまし

大通院御歌の會。この御法樂まてかなこりにて侍也。同霜月廿日御事ありていとあはれにこそ。同二十四年二月に葆光院(治仁)御事ありて。その年はうたのさたにをよはす。兩代うちつゝきの事に御會もなし。

應永十八年十二月四日庚申の御會に冬朝

あとおしき雪のあしたにとひとはぬ人の心のなさけをそしる

冬野

冬されの野へのかれふに吹嵐小篠にさやく音計して

冬涙

思へたゝひとりまろねの夜をさむみ枕も袖もこほる涙を

冬思

ふゆの日も物を思へは暮かたみ春よりなかき心地こそすれ

同十九年二月花見御會當座の歌に

見花

今よりやふしみの花になれてみん都の春も思ひわすれて

名所花

吉野山花にましらぬ松たにもひとつにかゝる八重のしら雲

同廿年三月盡の御會に春天象

霞たになをたちのこれ花の跡の雲もにほはぬ山端の空

春地儀

あら小田をかへす頃しも行春を苗代水にせきもとめはや

春植物

山櫻ちりし木陰のいはつゝしいはねと花のかたみかほなる

春動物

いかにせむたのむ古巣にかへりても身を鶯の音社なかるれ

同年九月盡のうたに九月盡植物

秋はけふくれなゐおしき紅葉はよそをたに残せこからしの風

九月盡人事

ねてあかす人はあらしな誰もみなおしと思ふ夜の秋の別に

九月盡光彩

秋をしたふ折しもあれや夕つく日うつろふ菊の色も忘し

このうたとも後に見いたして。年號のしたいたかひ侍れともかき入ぬ。

應永二十四年正月二日歌始に祝言をよめる

さかふへき我代の春そ此はるといはふ心にまかせつる哉

このとしの二月に葆光院の御事ありて我代になり侍。この祝言のこゝろにたかひ侍らねは。ふしきにこそ。

同廿四年八月十五夜に一身詠し侍

思ひきやことし我よをもち月のさかゆく秋にあらん物とは

四十あまり馴みし月の今宵こそ心はれたる秋にあひぬれ

萬代の秋を契てことしより雲ゐの月を袖にやとさん

應永廿五年正月七日雪いとふり侍に陽明局にまかるさてさかつきに雪を入てつかはし侍

歌始によめる初春

ちとせへん我代の春は久かたの日かけ長閑に霞そめつゝ

子日

千世ふへきためしにひかん姫小松ことしわか代の春を契て

祝言

いはひこしその年月の言のはもたかはぬ御代の春にあひつゝ

同年二月五日御會始に初春霞

春あさみ霞の色もまた寒しはれぬ雪解の空の匂ひに

庭梅盛

やとふりてあたし盛も見ぬへきを鶯さそへ庭の梅かゝ

寄松祝

伏見山松に昔のあととめて我代千とせの春をちきらん

同年の春報恩庵主はしめてまいりて見參し侍當座に

歌よませし時よめる
今よりは千年の友とたのみなんしるへともなれわかの浦人
　この庵主は二條大納言爲定卿の息女なり。七十あまりの尼衆也。
　同年三月盡の會に暮春天象
かすめたゝ月もいまはの有明よ彌生の空の忘かたみに
　暮春地儀
苗代にまかする水のまゝならは春の別もせきやとめまし
　暮春植物
行春をおしとはいはぬ色なから心ありてもさける山吹
　暮春動物
鶯のものうき音こそあはれなれ春のなこりは誰も思ふに
　暮春雜物
花の香にそむる衣を今いくかきて立かへん春をしそ思ふ
　おなし年七夕會に七夕風
心あてに思ふも涼しひこほしの行あひの空の秋の初風
　七夕別
明やすき一夜をしたふ別路や星の契のうらみ成らん
　祈神戀
つれもなき心を神にゆふしてのなひく計に祈てもみん
　寄日雜
山里のやふしもわかすてらさなん天つ日影の曇なき世に
　寄道雜
四のをのたえぬ道をはうけなから代々に及はぬ身を恨つゝ

群書類從卷第二百三十

和歌部八十五 家集三

元良親王御集

陽成院の一宮もとよしのみこいみしき色このみにおはしけれは世にある女のよしと聞ゆるにはあふにもあはぬにも文やり歌よみつゝやり給ふ源命婦のもとにかへり給ひて

後撰集十一 くや〳〵と待夕暮と今はとて歸るあしたといつれまされる

とうてゐたまへはひかへて女

今はとてわかるゝよりも高砂のまつはまさりて苦してふ也

いとおかしとおほして人々に此返しせよとのたまへは

新後撰卷二 本院侍從 夕暮はたのむ心に慰めつかへる朝そ侘しかるへき（けぬへき物を後撰）

またかくも

今はとて別るゝよりも夕暮のおほつかなくて待こそはせめ

これをなんおかしとのたまひける。

はやうすみ給ひける女のあふきに書給ひける

年毎に夏にあふきと聞からにふるき事こそとはまほしけれ

一條にて人々住給ことをうちわたりの人いひけれは

その女宮の御もとにかくなん聞えたりける

みな人のまけるか如くしりぬれは同しほとこそ思ひ成ぬれ

宮うかれめこきに住給ふ比せまりつといひさはくを聞たまふて藏人にいひつかはしける

ひとりのみよにすみ竈にくゆる木のたえぬ思を知人のなき

いとへともうき世中に炭かまのくゆる煙を待よしもかな

御返し女

はゝ木々を君か住家にこりくへてたえし煙の空にたつ名は

みふのみこにつかはしける

へしやよにうきをはこれに限てん思ふ心はあひみるからに

おやある女に程なくたえ給にけれは　おやいふときゝ給ひて

蟬の羽の薄き心といふなれとうつらしよとそまつはなかるゝ

枇杷の大臣（仲平）にいちや君とてわらはにてさふらひける男ありとはしり給はて宮の御文つかはしけれは

女

續古今二 大空にしめゆふよりもはかなきはつれなき人を頼む（こふる）也けり

又女に

いはせ山よのひとことに呼子鳥よはふときけは耳そなれぬる

宮

とふことをまつ〳〵山の山彦はいかかは人におとつれをせん
　又をんな
難波女の此方彼方によるといへは汐のひるまや戀しかる覽
　宮おはして出よとのたまへは女
いさゝめにわかきをやみとうき波のたちはてゝやまん事は惜きを
　かへり給ふとていもねらるましとのたまへは女
ふさりからねさめせ(そイ)しては起かへり又もこしとそ君は誓はん
　女のもたるものをとりておはしにけれはつとめて女
人こふる夜の衣にあらすとも是は返して我にみせなん
　かくて此女こと人にあひて宮のうらみ給ひけれは
吉野川よしや思はしたきつせの早くいひせはかゝらましやは
　宮ことはりとて
秋風にふかれてなひく荻の葉のそよ〳〵さ社いふへかりけれ
　又女
よとともに君か心し長月にあらはたのまん秋ははつとも
　女今はことさまにやと聞えたりけれは
松山にまつ波こえていにけれといかゝ思はんあたし心を
　恨給ひける女
淀河のよにならうらみそしら波のしらすや下に思ふ心は
最上川上れは下る富士のねのみしまのひまにあらはのせてん
　猶うらみ給へは女さらは是やめてんと聞ゆれは宮
山の井のやまんといへはなをさりの淺き心はたのまれぬ哉
　女
君か田の穗にて見えんと思へとも後は人からいなはと云(へしイ)也
　宮御ふくにおはしけるに
黑染のふかき心やわれなくは哀と思はぬ人やなからむ
　こと女に宮
さしぐるはたのまれすとも下紐の心とけたるよをのみそ待
　をんなとちかへやり戸のもさにて物のたまひてのち
見し夢はこまなく成てやみにけんちかへ遣戸のもとにねしかは
　太秦に詣給ひてよしある局に遣しける
たちよれは塵たつ計り近き間をなともろこしの心地のみする
　又女にあひ給ひてなかれてなとのたまひて程へてつ
　かはしける
水莖のたえにし跡を尋れはなかれてといひしことによりてそ
　御返事
なかれてと早くいひしは忘れねと飛鳥川なる世こそつらけれ
　此宮の御姨おほゐの大納言の北のかたにておはしけ
　るをいと忍ひてかよひたまひけるを北方
あるゝ海にせかるゝ海士は立てなんけふは浪間に有ぬへき哉
　此北方うせ給ひにけれは御四十九日のわさに白かね
　をはこにつくりてこかねを入てみす經せさせられけ
　るにそへ給ひける
君を又うつゝに見はやあふ事のかたみにふりぬみつは有共
　京極のみやすむ所また亭子院(宇多)におはしける時に
　けさうし給ふて九月九日聞え給ひける
世にふれはありてふ事を菊の花愛すきぬへき心ちこそすれ
　夢のことあひ給て後みかとつゝみてわたらせたまふ
　とてえあひ給はぬと宮に候けるによせりよみける
麓さへあつくそ有ける富士山嶺の思ひのもゆる時には
　かもゐの大君にあひ給ひてつとめて
から錦たちてこゝちのかへる山かへる〳〵も物うかりしか

宮うらみ給ひけれは女

世中のうきもつらきもとりすへてしらする君や人を恨むる

ほとなくかれ給ひにけれは女

白雲にあらぬ我身をあふことのまへはのうらにけふはけぬへし

宮御かへり

まつち山待としきかは年經ともいろかはらしと我も頼まん

又女

君により心つくしのはかたつのはかなきねをも鳴わたる哉

かくうらみ聞えけれと後々は返事もし給はさりけり

鶯となとかはなかぬふりたてゝ花こゝろなる君をこふとて

又おなしかも院の中の君をけさうし給けるに女

天雲をとふかりそめにとふなれはおほ空事をいかにみる覽

あひ給ひて後宮

思ふともこふとも君は下紐のゆふてもたゆくとけんとをしれ

女のきこえ給けるも

思ひせはゆふてもたゆくとけなまし何れか戀のしるし也ける

したひものゆふ暮ことになかむ覽心のうちをみる由もかな

むら鳥のむれてのみ君有ときけ獨ふるすに何にあらんと

うきふしの一よも見えは我そまつ露より先に消かへるらん

宿りゐるとくらあまたに聞ゆれは何れをわきて古巣とかいふ

おなしえにおひつる宿もなきものを何にか鳥の音をは鳴けん

又おなし閑院の三の君に稲荷にまうてゝあひ給てみやはしり給はぬを女はしり奉りてかへりて聞えける

ぬは玉のやみにましりて見し人のおほつかなから忘られぬ哉

なと聞えてあひにけりさて宮

埋木の下になけゝと名取川こひしき瀬にはあらはれぬへし

女

我かたになかれて通ふ水莖のよる瀬あまたに聞ゆれはうらし

なかれても頼む心のそはなくにいつれ程にか影のそふへき

木かくれの下草なれは米の上の光もつゐに頼まれなくに

つきもせぬ言のはなりとみるからに頼むといふも嬉しかり鬼

風ふけはみをこす波の立かへりうきよの中をうらみつる哉

むは玉のよるのみ人をみる時は夢にをとらぬ心地こそすれ

涙川なかれて岸を崩してはこひよることもあらしとそ思ふ

方さためなくあくかれ給ひけれといとこゝろありておかしう思はする宮と聞給ひてたいふの〔御歟〕宮息所の御母の女は宮にあはせ奉りてあしたにおとこ宮

程もなくかへる朝のから衣こゝろまとひにいかゝきつらん

かへし

時のまに歸りやすらんから衣心ふかくやいろにそはぬと

母御息所の御許に御后のほころひぬひに奉りたりけれは御息所

うつしけに人から衣思ふには常ならぬ香そそひてめてたき

かくて住奉り給ひけれと外ありきをし給ひけれはつらけなるけしきにおほしけれと見しらぬやうにていて給ひけれは女宮

音に高く鳴そしぬへき空蟬の我身からなるうき世と思へは

との給ひけれはあはれ／＼とてとゝまり給ひにけり。同御中にまたしかりける時のこの宮におはしはしめての又の日京極御息所の御なかに奉り給ひける

いとゝしくぬれこそまされから衣逢坂のせき道まとひして

みやす所のかへし

誠にてぬれけりやとも唐衣こゝに來たらはともにしほらん
さま〴〵かよはし給ひける御ふみとも今日かへし奉りたまふとて御息所
後撰雑二
やれはおしやらねは人に見えぬへしなく〳〵も猶返す勝れり
元良親王
北方宮にむらことてさふらひけるをめしけれはかんしうなき給けれは男宮こまの院に おはしけるにむらこ參ける
數ならぬ身は只にこそ思ほえていかにせよとか詠める覽
おとこ宮の御返し
つれ〳〵となかめてふれる人よりも宵の時雨は劣らさり鳬
女宮うせ給ひけれは男宮
岸にこそ世々をはへしかいつみ川ことし袂をひたしつる哉
又の年の十月にこれひらの中將まいりて 御みきのついてに
神無月しくれはなにそ古も思ひいつれはかへる 世 も な し
宮
いにしへを思ふにあへぬから衣ぬるゝ程なくかはき社すれ
ある女のこの宮をうらみ聞えて
世中をうきのみ渡る宿りにはかりもこなくにいろ替りけり
御返し宮
さためなき君か心にあえてこそまたき木の葉も秋をしるらめ
又女
年經ともなれしとそ思ふから衣うすき心のあらはれはうし
おはしたりけるにはやかへらせ給ひねと 聞えたれは
さらにたかしとの給けれは女
から錦たえて見ゆらん閨き夜はたれとかあやめ思なさまし

又
なにゝ君思ひかけけんから衣人めもみてはとはし物ゆへ
あた人のよはひし聲に山彦のこたへ初にし身をそうらむる
人の國へゆくとて女
にこり江のすみうきものと都をはいとふか山に身をや投まし
こと女に物のたまふとてききやう（桔梗）につけて
頼みとは同からまし言のはを歸りにけりなききやうの花
又こと女例の御心見えけれは
ことのはの我身の秋にあふ時はもみちて空にちると社きけ
宮
宇治川のなかれて深き心かと我も［　］たのみはつへく
女
たのむれは下の心はあさち原露にぬるれはいろかはりつゝ
五月はかりにはやうすたれ給ひにける女の聞えたりける
五月雨にわか手そへつゝうへそめし君か頼みは今やいつ覽
女山里にすみける比
秋風のはやき山邊にすむ比はとふ言のはもかれそはてぬる
またこと女に文つかはしたりけるかへりことに
頼まれぬしはしの程も秋の夜のなかき心もあらしと思へは
宮
頼れぬことも心のから衣なれてよるとや さらは 思 ひ し
こと女に宮
あま雲のはる〳〵見ゆる嶺よりもたかくそ君は頼みそめてき
山井の君に住給ひて久しくありて 宮は參りたまひて
夜ふけてまかてけれはくらくていかゝとの給たりけ

れは女

苦しともたとられさりき古を思ひはてゝしかへりこしかは

をくりに人につけて聞えたりける

歸り來る袖もぬるゝはたまさかにあふくま川の水にや有覽

たゝしはしにてたえ給ひにける人に程へて御文つか

はしたりければ

音つれてほとふる山の郭公なく一こゑのめつらしきかな

宮いかゝの給ひけん女

月影にわれもをくれすあふことはよしのの山に思入にき

又

涙たにかゝる我身になかりせはうきも辛きも誰にいはまし

からうしてとひ給ひければ女

中々にとふひの杜の郭公君こひなきはよはにこそなけ

又

散ぬへき花の心とかつみつゝ賴そめけむわれやなになる

加茂のまつりの日かつらの宮の御車に奉り給ひける

しらね共かつらわたりと聞からに〔て脫〕加茂の祭のあふひとそせん

又の日物のたまふ女ともへちらにまてあひてみつ(本)

なしりつにし給ひていとよく見給てつかはしける

世中にうれしきものは鳥部山かくるゝ人を見つる也けり

わすれ給へりける女清水にまうてあひ給て宮はしら

すかほにていて給けるに聞えける

假にくる宿とはみれとかましへのおほけなく社住まほしけれ

同所にて常に見給ふ女にしの竹のふししけきをつゝ

み給てつかはしける

篠竹のふしはあまたに見ゆれ共よゝにうとくも成にける哉

いかにしてくり染にけん糸なれは常にはよれ共あふ由のなき

おなし人に宮

返し

ちかくたによることもなき白糸のあふ計にはおもほえぬ哉

やむことなき女の御もとに

尋ねつゝ今ふみそむる山道にいつ鹿の音そまつなかれける

返し

世中の秋山にのみ聞ゆれはいつしかの音も耳なれにける

又おなし人に宮

つれなきをしゐて賴めは水の上のうきたる草の心地社すれ

返し

草の名におほせしもせし山川の早くよりこそ浮て聞ゆれ

わすれ給ふなよと女の聞えければ

谷の松月のかつらにねをふみて花咲む世や君をわすれん

所仰(悉香ノ假字)殿中納言君にほとなくたえ給ひにけれ

は女

拾遺戀五　人をとくあくた川てふ津の國の名にはたかはぬ物にそ有ける　さし大和物語

かくて物もくはてなく／＼戀聞えて松に雪のふりか

かりたるにさして聞えける

來ぬ人を松の枝にふる白雪のきえこそかへれあはぬ思ひに　は大和物語　くゆる後撰戀二

昇の大納言の御むすめに住給ひけるをひさしにおま

ししきて御ざのこもりて後久しくおはせてかのひさ

にしかれたりし物はさなからありやとりやたて給ひ

てしと聞え給ひければ女

しきかへすありしなからに草枕ちりのみそゐるはらふ人なみ

と聞えたりければ宮

草枕ちりはらひにはから衣たもとゆたかにたつをまてかし

又女

唐衣たつをまつまの程こそは我しきたへのちりもつもらめ

かくておはして後宇治へかりしになんとのたまへるに女

御狩する栗駒山の鹿よりもひとりぬる身そ侘しかりける

一條の君に

世中をいかゝはせまし春霞よそにもみしと人はいふなり

御返し

哀とはみれともうとし春霞かゝらぬ山もあらしと思へは

山の井の君の家の前なをおはすとて楓のもみちのいときをいれ給へりけれは女

（拾遺雑戀）思ひいてゝ問にはあらす秋はつるいろの限をみする成らん（し後撰秋下）

又ほと經てとひ給はすとうらみて

山の井にすむと我名は立しかととふ人影もみえすも有かな

すりの君のもとにおはせんと有けれは女

（新勅戀二）たかくとも何にかはせん吳竹の一夜ふた夜のあたのふしをは

うきまて人を尋給けれは女

八重垣にひとへまされる九重にあたなる人は尋しもせし

女のもとにおはしてとまり給へとのたまへは女

わたつみのそこの心は白波のしらてはいかゝよるとそや君

といてきて後京極の御息所に

（後撰戀五拾遺戀二）侘ぬれは今はたおなし難波なる身を盡してもあはむとそ思

かねもとのむすめの童部のもとに今こんとの給ひておはせさりける又の日女

人しれす待にねられぬ有明の月にさへこそあさむかれけれ

あしふちと云馬に乘給ける比女のもとに久しくおはせさりけれは女

ありなからこぬをもいはしあしふちの駒の上社戀しかりけれ

是におとろきてなんまとひおはしたりける。

女のもとにおはしたりけるに明ぬと聞えたりけれはかへり給ひて宮

（後撰戀二）天の戸のあけぬ〳〵といひなして空なきしつる鳥の聲哉

返し

天の戸をあく共我はしらさりき谷深かりし鳥の音にあかて

時々おはする所におはして前栽の中にて立聞給へは宮のこよひ夢にみえ給へる哉とて女

うつゝにもしつ心なき君なれは夢にもかりと見えつるかうさ〔[illegible]歌〕

御匣殿に宮

鶯の木つたふ枝を尋ぬとて花の住家を行てみしとや

はる〳〵と思ひて月も過ぬれは今はなつくることを待かな

つけそめし思ひを常にかすめてもおほつかなさの猶まさる哉

返し

いつよりか君か思ひの馴ぬらん今より外にいふそあやしき

源命婦にかたふたかりたれはなとの給けれは女

（大和物語）あふ事の方はさのみそふたか覽一夜めくりの君となれゝは

と聞えたりけれはさはらておはしにけり又の日さておはせて嵯峨の院にかりしになんとの給けれは（何かうらみんさかのつらさは大和物語）

大澤の池の水くきたえぬともさかのつらさを何かうらみん

御返事もいかゝ有けむわすれにけり。

近江介なほきか娘ともかたちよく心たかしと聞給ひ
てつかはしける
荻の葉のそよくことにそ恨つる風にかへしてつらき心を
又
淺くこそ人はみるらめせき水のたゆる心はあらしとそ思そ
返し
せき河の岩間をくゝる水あさみたえぬへくのみ見ゆる心を
月のあかき夜おはしたるにいてゝもなとは聞えてと
くいりにけれは宮
よな／＼に出と見しかとはかなくて入にし月といひてやみ南
扇をおとしておはしにける見れは女の手にてかける
忘らるゝ身は我からのあやまちになしてたに社思たえなめ
とあるかたはらに書付て奉る
ゆかしくも思ほゆる哉人毎にうとまれにける世にそ有ける
こまのゝ院にて秋つとめて人々おきたりけるに源の
のふるひとりことにいひける
白露の消かへりつゝ夜もすからみれともあかぬ君か宿哉
といふをきこしめして
よもきふの草のいほりとみしかともかくはた忍ふ人も有覧
おなし院にていつみ川といふことをよませ給ひ人々
の千とせおはしませといはひ聞えけれは宮御
いつみ川心にかなふ命あらはなとか千年もわたささるへき
又
泉川水ふかけなる水なれは人なみ／＼の聲そきこゆる
志賀の山越の道にいもはら（いはロ大和物語）と言所もたま
へりけりそこにおはじつゝ人見給けるをしりてとし
こかいつけゝる
かりにのみ來る君まつとふり出つゝなくしか山は秋そ悲しき
ある人御ふみつかはすにかくれて侍らすといはせけ
れは
かくれぬと聞からにこそ深芹の思そこそと思やらるれ
又つかはす
なにかへりかりにもあらぬ玉章を雲井にのみそ待わたりける
物の給ふ女男いてきにけり十月はかりに遣しける
こまはとや移ろひにけん木の葉故よその村雲なに時雨る覽
女宮ゑしてよせ奉らさりける比四宮より
身をつみて思ひしりにきたき物の獨ねいかにわひしかる覽
御返
心から今はひとりそすみかまのくゆる煙をまつ人もなし
おほしかけたる女男したるに御文つかはしたりけれ
は
三芳野の山より落る瀧津瀬の早くなりせはまちそしてまし
宮の御返し
秋風にとよりかくより花薄そよやさこそはいふへかりけれ
前わたりし給ひけれは女にこの月はいかにと聞えた
りけれは女
おほそらの月たに宿にいる物を雲のよそにもすくる君かな
近衞のみかとの君といひける人に
思つゝいはねとなにかさもあらねは心にのみもまくる我身か
女に物の給ひてあしたに
もえかへりこかれし草も厭にきたゝ宵の間の露にをかれて
京極の御息所

吹風にあへてこそちれ梅花あたにゝほへる我身となみそ
かねみちの宰相の女に
そむれともこさもまさらぬから衣いろの限をきてみつる哉
又
あまたには今も昔もくらふれと人花かたみそらに戀しき
女わすれなんとこそ覺ゆれと聞ゆれは宮いみしう
恨聞えける女に宮
恨つゝなけきのかたき山ならはおろしの風のはやく忘れね
物の給ふ女こと人に物いふと聞しめして宮
後撰戀一よみ人しらす
いつしかと我まつ山の今はとてこゆなる浪にぬるゝ袖かな
返し
松山にこきはこす共君をきて浪のたつ名はあらしとぞ思ふ
又宮
あふ事の涙にのみそぬれそはるあかぬ世をし悲しと思へは
御返

たえはて給ひぬると見て山の井の君
山の井のたえはてぬともみゆる哉あさまをたにも思ふ心に
又うこと云人の聞えける
心さへさみたれなりし郭公いかてことしの聲をきかまし
御返
めに近く身には見しとや郭公よそにて聲を聞んてふとも
いとあたにおはすと聞て女
つきもせすうきことのはの多かるを早く嵐の風も吹なん
宮の御かへし
露にたにうつり行なることのはのなとか嵐のかせを待らん

思ふてふこと世にあさく成ぬ也我こゝはかり深きことせよ
京極のみやす所
又花かんし(冊子)奉り給ふとて
鶯はなかむしつくにぬれねとや我思ふ人の聲そよそなる
三條の右大臣の御女のへしやよにとかいたまひたり
ける
なにか世に今は恨と思らんしらねは人のつらき成らん
津の國にたまさかといふ所にしりをき給ひける女に
こしまなる名をたまさかのたまさかに思出ても哀とはなん

右元良親王御集以無類本不能挍合姑仍舊耳

瓊玉和歌集卷第一

春歌上

三百首御歌の中に立春の心を

（續古）おほとものみつの濱松かすむ也はや日の本に春や立覽

人々によませさせ給し百首に

逢坂や關の戸明てとりの（か歟）啼東よりこそ春はきにけれ

春立日よませ給ひける

あつまにはけふこそ春の立にけれ都はいまた雪や降らん

早春

風寒みまた雪消ぬしからきの外山霞て春はきにけり

百首御歌の中に

（續後拾）さほ姫や衣ほすらん春の日の光に霞む天の香久山

弘長二年（龜山）冬たてまつらせ給し百首御歌の中に霞を

（續古）春きては霞そうつむ白雪のふりかくしてし嶺の松原

たちぬはぬ衣と見えて朝ほらけ水上霞む布引の瀧

三百首御歌の中に

故郷のよしの山は雪消て一日も霞たゝぬ日そなき

ひれふりし昔を遠み松浦かた霞のそてに春風そ吹

古渡霞といふことを

思ひやる都もさこそかすむらめすみた川原の春の夕暮

たてまつらせ給し百首に春雪

山たかみ風に亂て散花の面影つらき春のあはゆき

人々によませさせ給し百首に

風寒みまた花さかぬ梅かえにこれなんそれと雪そつもれる

三百六十首御歌の中に

かつ消てたまらぬ物は鶯の聲する野邊の春のあは雪

野外鶯

鶯の宿あれぬらしくたら野の萩のふるえは今そやくなる

たてまつらせ給し百首に鶯

今も猶妻やこもれる春日野の若草山に鶯のなく

三百首御歌の中に

心にもかなはぬ音をやつくすらむせり摘のへの春の鶯

人々によませさせ給し百首に

けふしこそ若菜摘なれかた岡のあしたの原はいつか燒けん

若菜を

（新後拾）霜雪に埋れてのみみしのへの若菜摘まて成にける哉

五十首御歌に

誰か袖の匂ひをかりて梅花人のとかむる香には咲覽

春の御歌の中に

いつの春とはれならひて梅花咲より人のかくまたるらん

むめの花咲は人こそまたるゝを思ひの外と何かいふらん

夕梅といふことを

袖の香にまかふもつらし人を待夕は梅の匂はすもかな

百首御歌中に

春ことに物思へとや梅か香の身にしむ計匂ひそめけん

御歌はかりもゝつかひ合せさせ給とて梅を

ふりにける高津の宮の古たみてもしのへと咲る梅枝

この春も人こそとはね宿の梅誰かなさけを花にみせまし

梅香入閑といふことを

思ひそふねやもる月の影に又猶いひしらぬ梅か香そする

和歌所を始をかれて結番しけるをのこともに歌よませさせ給ふ次に

梅か香の身にしむ床は夢たえてねぬよかすめる月をみる哉

三百首御歌の中に

飛鳥風川音ふけてたをやめの袖にかすめる春のよの月

春月を

人めもる空にはあやな春の月なと霞つゝ影しのふらん

かすめるはつらき物から中々に哀しらるゝ春のよの月

おほろ月夜を御覽して

晴かたき身の思ひこそうかりけれ霞める月も秋を待らん

春曙

いさ人の心はしらす我のみそかなしかりける春の明ほの

たえ／＼にさと見えそむる山もとの鳥の音さひし春の曙

百番御歌合に

何事をまた思ふらん有はてぬ命まつまの春の曙

三百首の御歌に

いひしらぬつらさそふらし鴈金の今はと歸る春の明ほの

曉歸鴈

時こそあれなと有明の空にしも別をみせて鴈の行覽

十首歌合に

たのめこし人の玉章いまはとてかへすににたる春の鴈金

故郷歸鴈を

ふるさとをうき名なりとやいとふらんならの都に歸る鴈金

海邊歸鴈

こきかへるあまの小舟の友なれやゆらの戸わたる春の鴈金

春の御歌の中に

玉章や春行鴈につたへましこし路のかたの都なりせは

身にしれはうしともいはし歸鴈さそ故郷の道急らん

和歌所にてよませ給ける

こしかたを忍ふ我身の心もて何からうらみん春の鴈金

花をまつ外山の梢かつこえて別も行かはるのかりかね

三百首御歌の中に

雪とふる花をこしちの空とみてしはしはとまれ春のかり金

人々によませさせ給し百首に

ひとかたになひきにけりな谷風の吹上にたてる青柳の糸

奉らせ給し百首御歌の中にはなを

春といへはやかても咲て櫻花人の心をなとつくすらん

花月五十首御歌に

櫻花咲へきころと思ふよりいかにせよとかまたれそめけん

百首御歌中に

まつ程はちるてふことも忘られてさけはかなしき山櫻哉

花御歌とて

花の咲時やきぬらん足引の遠山みれはかゝろしら雲

人々によませさせ給し百首に

生駒山はな咲ぬらし難波とをこき出てみれはかゝる白雲

よしの山雲と雪との僞をたかまことゝか花の咲らん

花月五十首中に

へたつとも恨みぬ雲はいこま山君かあたりの櫻なりけり

三百首御歌の中に

花咲ぬときはの山の嶺にたに櫻を見せてかゝるしら雲

瓊玉和歌集巻第二

春歌下

文永元年十月(亀山)百首の春御歌

思ひせく人の心か山櫻をとのきこえぬ瀧とみゆるは

花五首歌合に月前花

まとろまぬ月に夢路は絶はてゝ春の夜一よみつる花哉

閑居花

さひしさは馴ぬる宿になにとなく軒はの花の人またすらん

五十首御歌中に

いかにせんとはれぬ花のうきなさへ身に積りける春の山里

花の御歌とて

植て見る我をや花のうらむらんうき宿からに人のとはねは

和歌所の結番うたをのこともよみ侍ける次に

とはるへき宿とも更にたのまぬを人まち顔に花の咲らん

よゝふりてしらぬ昔の春の色を花にのこせるみよしのゝ山

をのことも題をさくりて歌よみ侍りける次に山花といふことを

(新後拾)三よし野もおなしうき世の山なれはあたなる色に花そ咲ける

百番御歌合に花

花の色にいさなはれつゝ春毎に行てはきぬるみよしのゝ山

よの中をいとふ山邊と聞しかと吉野は花の宿にそ有ける

春の御歌中に

みよしのゝ山にいる人山にてもおなし櫻の奥やゆかしき

なれをこそつらしとは思へ櫻花あたに移ろふ春の經ぬれは

人々に歌よませさせ給ふ百首に

うつろへは物をそ思ふ山櫻うたて何とてこゝろそめけん

春らせ給し百首に花

したにこそ人の心もうつろふを色にみせたる山櫻かな

惜花といふことを

咲そめし昔さへこそうかりけれうつろふ花の惜きあまりに

花月五十首に

散ぬともねさへかれめやとはかりに思ひなくさむ山櫻哉

いかてかはあたなる花にをしへまし浮世にたえす過す心を

花五首歌合に霞中花

山さくらちるまを人にみせしとてかすむや花の情なるらん

曙落花といふことを

いかにせん高根の櫻雪とのみふるたにあるを春の明ほの

をのことも題をさくりて歌讀侍けるに鶯

花ちらすをのかは風もかなしきに松にこつたへ春の鶯

三百首御歌に

ときはなる松にもおなし春風のいかに吹はか花の散らん

春風を

みな人にあかぬ名殘をおしませて花の爲とや風の吹らん

落花を

風吹はいかにせよとて散時のつらさもしらす花に馴けん

なれてみる春たにかなし櫻花ちりはしめけん時はいかにと

三百首御歌の中に

うかりける花にいつよりなれそめて散春ことに物思ふらん

散をみて更に我身のくやしきは櫻にそめし心なりけり

百首御歌の中に花を

おしみてもあまり有けり一とせに又とも咲ぬ花の名殘は

春の御歌とて
またのはるあひみん事は命にてことしも花に別ぬる哉
奉らせ給し百首に落花を
かねてより散なん後となけかれし人の名殘もおしき花哉
人々によませさせ給し百首に
散はてゝ後こそ花はかなしけれ待こしほとを何うらみけん
春駒を
我ふるす人の心にあらなくになと春駒のあれてみゆらん
文永元年十月御百首に
駒なへて朝こえくれは春山のさきのおすゑにひはり立也
奉らせ給し百首に欵冬を
山吹の花おる人かはつなくあかたのゐとに袖のみゆるは
人々によませ給し百首歌の中に
ことしより松の木陰に藤をうへて春の久しき宿となしつる
百番御歌合に
御狩人衣にすれや紫の色こき時の野邊のふち浪
みぬ人のためならす共なほさりにおらては過し田子の藤浪
文永元年百首に
咲にけりぬれつゝ折し藤の花いくかもあらぬ春をしらせて
暮春の心を
さもそうき彌生の空の雲間よりはつかに殘る有明の月
人々によませさせ給し百首に
たくひなくかなしき時か春の行彌生の月の廿日あまりは
三月盡を
めくりあふ命しらるゝ世なりとも猶うかるへき春の別を
したふへき便りたになしいつかたへ行ともみえぬ春の別は
定めなき浮世にもにぬならひかな日をかきりぬる春の別は

瓊玉和歌集巻第三

夏歌

百首御歌の中に更衣
花染の袖さへけふは立かへて更に戀しき山さくらかな
三百首御歌の中に
雲のゐる遠山鳥の遅櫻こゝろなかくも殘るいろかな
奉らせ給し百首に卯花
淺かりし春のへたてと見るからに垣ねもつらき宿のうの花
人々によませさせ給し百首に
明ぬれは光を殘す月のうちの桂の里に咲る卯のはな
葵をよませ給ける
あつまにはかさしもなれす葵草心にのみやかけて頼まん
奉らせ給し百首に時鳥を
昔よりなと子規あちきなく頼まぬものゝまたれそめけん
三百首御歌に
待わひてこよひも明ぬ郭公たれにつれなき音をならひけん
人ならは侘つゝもねん時鳥いとゝまたるゝ夜半のむらさめ
いとゝまた夢てふことを頼めとや思ひねに啼ほとゝきす哉
百首御歌の中に
うき身にもまたるゝ物を蜀魂心あれとはたれいとひけん
和歌所にてをのことも結番うたよみ侍ける次に
かく計またるゝ音とも時鳥思ひしらてやつれなかるらん
人々によませさせ給し百首に
しけりあふ草かの山の郭公くれにこえてや初音なくらん
文永元年十月御百首に

故郷のさほのうへ行子規はかひの山にはつねなくらむ
　杜ほとゝきす
なきぬなりいはせの森の時鳥ゆふへさひしき山陰にして
　五月子規
ほとゝきす里に出たる聲すなり五月は山に住うかるらん
　山路郭公
行やらてくらせる山のほとゝきす今一聲は月に啼なり
　奉らせ給し百首に時鳥
をのかつま戀しきときか時鳥山より出る月になくなり
　人々によませさせ給し百首に
一聲をあかすも月に啼すてゝ天の戸わたる郭公かな
　夏御歌の中に
時鳥秋の夕をみせたらは今よりもけに音をやなかまし
まちわひし時こそあらめ郭公聞にも物のかなしかるらん
　和歌所にて
聞はうしきかねはまたる子規物思へとてなきはしめけん
五月とはなと契けん郭公うきになく音は時もわかしを
　三百六十首御歌に
物思ふね覺の空の時鳥誰かまさるとなく／＼そ聞
郭公あやめの草のなになれやわきてさつきの音には啼らん
こゝにのみ聲をつくせはことかたのよかれ嬉しき時鳥かな
　奉らせ給ける百首に郭公
岩井汲人や聞らん時鳥あかて過行志賀の山越
　をのことも題をさくりて歌よみけるに早苗を
秋風にきのふといつか思ひけんいそく山田のけふの早苗を
　百首御歌合に
山里も猶ことしけし我門の外面の小田のさなへとるころ
　奉らせ給し百首に五月雨
天の原岩戸の神やさためけん五月を雨の晴ぬ比とは
　三百首御歌の中に
露にたにみかさといひし宮城のゝ木の下くらき五月雨の頃
　池の五月雨を
いかはかり水まさるらし川上のあちふの池の五月雨のころ
　さみたれを
松浦川かは音たかしさよ姫のひれふる山のさみたれの空
　人々によませさせ給ひし百首に
ふけぬともいかに待みん夜半の月はつかの山の五月雨の空
　閑中五月雨を
さらてたに人やはみえし夏草のしけれる宿の五月雨の比
　百首御歌中に
いかにせん心のうちもかきくれて物思ふ宿の五月雨のころ
いかにせん涙はかりの袖たにもほすまはなきを五月雨の頃
　せきちく(石竹イ)を
ちらぬまに今もみてしか高圓の尾上に咲るやまとなてしこ
　野亭夏草
よそにてはありともみえし夏草のしけみに結ふのへの假庵
　野夏草
秋ちかくのは成ぬらし夏萩のおふの下草茂りあひつゝ
　人々によませ給し百首に
よるはもえひるは消ゆく螢哉ゑしのたく火にいつ習ひけん
　螢を
燒すてし跡とも見えぬ夏草にいまはたもえて行螢哉

三百六十首御歌の中に
時わかぬ思ひの友は何ならん螢も夏そもゆるとはみる
杜夏月を
夏のよはみつといふへき程もなし淀のむかひの杜の月かけ
人々によませさせ給し百首に
今もかも夕立すらし舟木山のさかのにしに雲のかゝれる
五十首御歌に
夕立の雲吹のほる谷風に下葉そたへぬ山のときは木
奉らせ給し百首に夕立
松風もはけしく成ぬ高砂の尾上の雲の夕たちの空
納涼
秋ちかくなりやしぬらし足曳の山の蟬なきて風そ涼しき
三百首御歌に
水上にたれか御祓をしかま川海に出たるあさのゆふして

瓊玉和歌集巻第四

秋歌上

崎初秋といふことを
都にははや吹ぬらしかまくらのみこしか崎の秋のはつ風
河初秋を
みくつせくやなせのさ浪音信て川音涼し秋の初風
三百首御歌の中に
今よりのあはれをいかに忍はまし外山の庵の〔か歟〕秋の初風
淋しさはさらてもたえぬ山里にいかにせよとは秋のきぬ覽
山家早秋
いつち又あくかれよとて山里の心うかるゝ秋のきぬらん
初秋のこゝろを
かく計物うかるへき時そとはいかにさためて秋のきぬらん
野も山もなへて露けき時そとや秋くるからに袖のぬるらん
人々によませさせ給し百首に
あはれまた秋そきにける何事のうしとはなしに物思へとて
文永元年十月百首御歌の中に
天の川いつかと待し七夕の行あひのけふに成にける哉
三百首御歌に
更行は月さへいりぬ天の川あさせ白浪さそたとるらん
奉らせ給し百首御歌の中に七夕を
七夕の戀やつもりて天の川まれなる中の淵と成らん
七夕後朝
月たにもつれなくみえぬ七夕の別れの空よいかゝかなしき
秋の御歌の中に
荻の葉は風吹ことに音信て物思ひつく秋は來にけり
さらてたに涙こほるゝ秋風を荻のうはゝの音に聞かな
荻の葉に風の音こそ聞ゆなれ涙おとさぬ人はあらしな
夕荻といふことを
吹風も身にしむはかり音たてゝ荻のはかなし秋の夕暮
秋かせのつらさは時をわかねとも夕かなしき荻のをとかな
人々によませさせ給し百首に
あきのよはうつゝのうさの數そへてぬる夢もなき荻の上風
奉らせ給し百首に荻
聞初はいかにかせまし秋ことになれてもつらき荻のうは風
おなし心を

秋風をうしとはいはし荻のはのそよく音こそつらさ成けれ

　草花露を

消ぬまを人に見せはや女郎花猶一ときとをけるしら露

　庭草花

しけりあふ籬のすゝき穂に出て秋のさかりと見ゆる宿哉

　行路薄

夕日さすあさちか原の花すゝき宿かれとてや人まねくらん

　御歌はかり百番あはせさせ給とて薄

はな薄おほかる野へはから衣袂ゆたかに秋風そふく

　奉らせ給し百首に

立わたる霧のたえまの花薄袖かとみえて秋風そ吹

　和歌所にて

今よりの誰か手枕も夜さむにて入野の薄秋風そふく

　蕣を

夢路にそさくへかりけるおきてみんと思ふをまたぬ槿の花

はかなしと何かは言ん世中はかくこそ有けれ蕣のはな

朝顔の花の籬の秋の露いつれあたなる名にか立らん

　萩を

春燒し其日いつともしらねともさかのゝ小萩花咲にけり

袖ふれておらはけぬへしわきも子かかさしの萩の花の上の露

　萩花映水といふことを

いまそみる野路の玉川尋きて色なる浪の秋の夕暮

　人々によませ給し百首に

高圓の野邊の朝露かつ散てひもとく花に秋風そ吹

　秋の御歌中に

やゝ寒く夜風も成ぬ秋萩の下葉の露や色に置らん

　野鹿

夏草のかけに忍ひし棹鹿の音にたつはかり野は成にけり

　文永元年十月百首に

眞葛はふ野はらの小鹿恨ても啼てもさこそ妻を戀ふらめ

　人々によませさせ給し百首（時のイ）に

波たてるつま待風や寒からしいまきの嶺に鹿の啼なる

　百番の御歌合に鹿を

尋きてさもなくさめぬあはれかな鹿のなくなる秋の山里

　奉らせ給し百首にむしを

何事を思ひあまりてあさちふの小野の草葉に虫のなくらん

　秋御歌とて

露ふかき尾花かもとのきり〲すさそ思ひある音をは啼覽

いくよしもあらしとそ聞露霜の寒き夕の松虫の聲

うきをしも泪を誰に習てか草木も秋は露けかるらむ

　三百首御歌中に

心なき草葉も露のこほるゝはいかなる秋のつらさなるらん

草も木も露そこほるゝ大かたの秋の哀や泪なる覽

　奉らせ給し百首に

草葉こそ萎れてほさぬ秋ならめなと我袖の露けかるらん

　おなし心を

長夜の寐覺の涙いかゝせん露たにほさぬ秋の袂に

うきことにならはぬ人や置露を袖より外の秋とみる覽

くるゝまも賴まれぬ身の命にて何かは露をあたにみるへき

　五十首御歌中に

さのみやは憂身のとかにかこつへき秋のけしきの誘ふ泪を

　和歌所にて

なかむれはたゝ何となく物うくて泪こほるゝ秋の空かな
　人々によませさせ給し百首に
置つゆにぬるゝ袂そいて我をひとなとかめそ秋の夕暮
　百首御歌中に
吹風も心あらなんあさちふの露の宿りの秋の夕くれ
　三百首御歌の中に
遠さかるあまの小舟も哀なりゆらの湊のあきの夕くれ
色かはる野へよりも猶さひしきは朽木の杣の秋の夕暮
　秋のゆふへを
たへて猶すめはすめとも淋しきは雲ゐる山の秋の夕くれ
みすしらぬ野山の末のけしきまて心にうかふ秋の夕くれ
さひしさになかむる空のかはらすは都もかくやあきの夕暮
いつまてかさても命のなからへてうしともいはん秋の夕暮
尋はや世のうきことや聞えぬと岩ほの中のあきの夕暮
　閑中秋夕
思へたゝまたるゝ人のとはんたに淋しかるへき秋のゆふ暮
　秋の御歌中に
おもひしる時にも有らし世中のうきもつらきも秋の夕暮
うしとても身をやはすつるいて人の事のみそよき秋の夕暮
泪こそこたへておつれうきことを心にとへは秋のゆふくれ
うきことをわするゝまなくなけゝとや村雲まよふ秋の夕暮
あはれうき秋の夕のならひ哉物思へとは誰をしへけむ
　文永元年十月御百首に
袖のうへにとすれはかゝる泪かなあないひしらす秋の夕暮

瓊玉和歌集巻第五

秋歌下

　山月といふことをよませ給し
したひものゆふへの山の高根よりめくりあひてや月の出覧
　十首歌合に
みるまゝに山の端遠く影すみて松にわかるゝ秋のよの月
　川月といふ事を
すみなれて幾夜に成ぬ天の川遠きわたりの秋の夜の月
　閑居月を
人とはぬ葎の宿の月影に露こそ見えね秋風そふく
　月前鴈
あはれにも待こし秋のめくりきて雲井の月に鴈そ啼なる
　月前鹿
とをつ山月すみのほる秋風に宮城かはらは鹿そなくなる
　野月
身をすつる人や有らん唐國のとらふすのへの秋のよの月
　嶋月
なかめはや言のはたにもかはるなるうるまの嶋の秋の夜の月
　奉らせ給し百首に月を
あつまにて十年の秋はなかめきぬいつか都の月をみるへき
　和歌所にてをのことも結番歌よみ侍ける次に
月見れはあはれ都と忍はれて猶ふる郷の秋そわすれぬ
うくつらき物成けりな更る夜の月の空行秋のむら雲
　人々に讀せさせ給し百首に
我袖よいかにかせまし思ふことなきにもぬるゝ秋のよの月
絶すをく涙の露を契りにて袖によかれぬ秋のよの月

文永元年十月御百首に

いつよりかうきを泪のしり初て月にもいたく袖のぬるらん

月の御歌の中に

露をかぬ袖には月の影もなし泪や秋のいろをしるらん

とはすとて人をはいはし我からとねを社なかめ秋のよの月

秋のよは物思ふことのかきりとて月に涙をまかせつるかな

袖ぬらす月とも何かわきていはん思ひのみこそ涙成けれ

いかにかく袖はぬらすそ世中のうきもなくさむ月と聞しに

なくさめぬ我にてしりぬよの人もかくやみる覽秋のよの月

されはとて行へきかたもなき物を秋の月夜の我さそふらん

百番御歌合に

いとふへき物とはしらすみても又またもみまくの秋のよの月

うきことの身にそふ秋となけきても猶らとまれぬ夜半の月哉

三百六十首御歌に

宵のまのおなし空行月影のいかにね覺はかなしかるらむ

花月五十首に

夜寒なるねさめの空の秋風に涙こほるゝ月をみるかな

よな〳〵の袖の涙にやとりきて憂身ふるさぬ月の影哉

秋の夜のふけたる月をひとりみてねになくはかり物そ悲しき

忘られぬ都の秋をいくめくりおなし東の月にこふらん

山端の夕の空に待そめて有明までの月になれぬる

歌合に殘月といふことを

秋の夜の心なかきは涙とて入まて月にしほるそてかな

奉らせ給し百首に擣衣を

わひつゝもねられぬ夜半の月影に人待人や衣うつ覽

五十首御歌の中に

秋の夜の月をあはれとみる人やひとりおきゐて衣うつらん

夜擣衣

河内女のくろてふ糸の長きよに手染の衣いまかうつらん

曉擣衣

ね覺する長月の夜の有明をいかにしのへと衣うつらん

三百首御歌に

眞萩ちる遠さとをのゝ秋風に花すり衣いまやうつらん

五十首御歌合に

僞のたか秋風を身にしめてこぬ夜あまたの衣うつ覽

百番御歌合に

里はあれていとゝ深草しけき野にかれなて誰か衣うつ覽

人々によませさせ給し百首に

なが月の菊の垣根に霜さえてうつろひ行か秋の日數の

夕霧を

何となく空にうきぬる心かなたつ川霧の秋の夕くれ

和歌所にて原上夕霧といふ事を

何處にか我やとりせん霧深きいなのゝ原にくれぬこの日は

三百首御歌に

外山なる槙の葉そよく夕暮に初鴈なきて秋風そ吹

故郷秋風

ふるさとのかきほの蔦も色つきてかはらの松に秋風そ吹

秋雨

夜の雨の音たにつらき草の庵に猶物おもふ秋風そふく

百首御歌合に秋風を

深草の里の秋風よさむにてかりにも人のとはぬころかな

和歌所にて

人はこて秋風寒き夕こそけにさひしさのかきり成けれ

三百首御歌の中に

立田山しくれぬさきの秋風にまつうつろふは心なりけり

秋御歌とて

立わたる霧のたえまは紅葉して遠山さひし秋の夕くれ

外面なる梢をみれは紅葉してまたるゝ人のつらき頃哉

山のさくらのもみちしたるを御覧して

花散し尾上のさくら紅葉して又いとはるゝ風の音かな

人々によませさせ給し百首に

しからきの外山の紅葉かつちりてさとは夜寒に秋風そふく

山秋風を

蟬のなくと山の梢いとはやも色つきわたる秋風そふく

五十首御歌に

さほ山のはゝその紅葉色見えて霧のとたえに秋風そ吹

和歌所にて

朝な／＼鴈かね寒み佐保山のはゝそ色つく時はきにけり

いたつらに散や過なむ奥山の岩かき紅葉みる人もなし

百首御歌に

秋の色のかきりと見るもかなしきに何山姫の木のは染らん

文永元年十月御百首に

秋ふかくはや成に鬼十葉のぬのこの手かしはの色付みれは

三百首御歌に

みなふちの細川山そ時雨めるま弓の紅葉今さかりかも

なく鹿の聲聞時の山里を紅葉ふみ分とふ人もかな

奉らせ給し百首に紅葉を

うらふれて我のみそ見る山里のもみち哀ととふ人もなし

文永元年十月御百首に

鹿のなく有明の夜の山おろし木のは時雨て月そ殘れる

暮秋心を

月をのみなかめしほとに故郷のあさちか末に秋そなりぬる

人々によませさせ給し百首に

神なひのもりまてとてやをくらまし人やりならぬ秋の別を

九月盡の夜むら雨したるを題にてをのことも歌よみ
侍ける次に

空も猶秋の別やおしむらん涙に似たる夜半のむらさめ

瓊玉和歌集巻第六

冬歌

三百首御歌の中に

時はいま冬になりぬとしくるめり遠き山邊に雲のかゝれる

初冬の心を

ほしあへぬ秋の涙をあかすとや袖にしくれて冬のきぬらん

人々によませさせ給し百首に

秋の空いかになかめし名殘とて今朝も時雨の袖ぬらす覽

須磨のあまの鹽たれ衣冬のきていとゝひかたく降時雨哉

秋よりも音そさひしき神な月あらぬ時雨やふりかはるらん

時雨を

續古　風はやみうきたる雲の行かへり空にのみしてふる時雨哉

さたまらぬ冬のくもりのたひ／＼に風にまかせて降時雨哉

朝時雨と云ことを

さならてもおきうき袖は乾かぬをあしたの床にもる時雨哉

つゝめとも涙そおつる身に戀のあまるや秋のゆふへ成らむ
　戀のこゝろを
袖をわれいつの人まにしほれとて忍ふにあまる涙成らん
　奉らせ給し百首に
よそにては思ひありやとみえなから我のみ忍ふ程の果無さ
　不逢戀
あふことはいつにならへる心とて獨ぬるよの悲しかるらん
思ひにもよらぬ命のつれなさは猶なからへて戀やわたらん
さりともと月日の行もたのまれす戀ちの末の限しらねは
　人々によませさせ給し百首に
はては又さこそはきえめ物をのみ思ふ月日の雪とつもらは
　三百首御歌の中に
したもえのあまのたくもの夕煙するこそしらね心よはさは
　五首の御歌合に戀を
戀初し心をたれにかこたましあはぬは人のうきになせとも
　題しらす
夢にのみみるをあふにてやみもせは何か現の片身なるへき
つれもなき人のつらさも馴ぬるにこりぬ心のいろを待らん
いかにふる袖の涙のしくれにて紅葉にあまる色をみす覽
　和歌所にて
山鳥のをのれ猶みるますかゝみかけてや人をなかく戀まし
　百番御歌合に名所戀を
くらへはや戀をするかの山たかみをよはぬふしの煙成とも
　三百首御歌に
わたつ海の底の玉ものみ隱に亂れてそ思ふあふよしをなみ
　百首御歌中に
心をそ盡しはてぬる宿をたにそこともいはぬ人をこふとて
　百番御歌合に不逢戀を
つれなきも限りやあると頼むこそなかき思ひの始なりけれ
浪のうつ岩にも松のたのみこそつれなき戀のたねと成けれ
　夕戀といふことを
人またぬ時たに物のかなしきにこんとたのめし秋の夕くれ
　人々によませさせ給し百首に
また人を待そわひぬる僞にこりぬ心はあきの夕くれ
　まつ戀の心を
いねかてに人まつよひそ更にける有明の月も出やしぬらん
待わひてひとりなかむる夕暮はいかに露けき袖とかはしる
來ぬ人をいかにまてとか秋風の寒き夕に月の出らむ
よひのまとたのめし人はつれなくて山のは高く月そ成ぬる
　契空戀を
待人と友にそみまし僞のなき世なりせは山端の月
　三百六十首御歌の中に
わひつゝもねぬへき夜半の村雨に猶人まてと秋風そ吹
　忍待戀といふことを
宵のまは人めしけしといひなして更てこぬにそ恨みわひぬる

瓊玉和歌集卷第八

戀歌下

　奉らせ給し百首に初逢戀を
なか／＼に逢とも胸のさはかれて言もやられぬ夜半の睦言
　戀御歌とて

忍ふとて逢よのまれに成もせは心にあらてたえぬへきかな

寄月忍戀

よひ／＼はくもれとそ思ふ人しれす我かよひちの秋の月影

百首御歌合に別戀

聞しより猶こそうけれ衣々の別の空の月のつらさは

戀のこゝろを

今はとて別る袖の涙こそ有明の空のしくれ成けれ

いくたひか夜深き空の鳥の音にあかぬ別をおしみきぬらん

三百首御歌の中に

暮なはと契ても猶かなしきはさためなきよの曉のそら

逢後契戀

いかにせん逢までとこそ歎しにその面影のそへて戀しき

文永元年十月御百首に

よそにみし思ひは猶も數ならすなれてそ人は戀しかりける

題しらす

下むせふ思ひをふしの烟にて袖の涙はなるさはのこさ

思ひわひ人にもかくといふへきに忍るほとはそれもかなはす

いかはかり戀るとかしる我せこか朝明の姿みすひさにして

玉章をつけし淺茅のかれはにてもゆる思ひの程はしりけむ

三百首御歌に

ふけすともまたてやねなん月にたにこさりし物を宵の村雨

雨ふらはうらみさらましこぬ人の心みえなる夜半の月哉

世の常と思ふわかれのたひならは心見えなる手向せましや

「これは後拾遺別に藤原長能か歌也」

戀の心を

たのめぬを我心より待わひて人のつらさや身につもるらん

被忘戀

いつまてかまちもわひけん今はまた我身のよその秋の夕暮

更る夜のかねの音にも思ふかないつまて人のこぬを待けん

人々によませさせ給し百首に

人はいさ思ひも出し歎つゝぬれはや逢と夢にみゆらん

百首御歌合に會不逢戀

うたかひし心のうらのはては又逢ぬかあふとなるそ悲しき

戀御歌の中に

忘れなんといふもかしこしうき人の猶しのはるゝ心よはさは

忘れしと僞なからいひしこそつらきか中のなさけ成けれ

三百首御歌の中に

いかにしてよそにも見んと思ひしはつらきになれぬ心成鳧

さりともと人のなさけを賴哉つらき心も岩木ならねは

ほしわふる袖のためしは何ならし草はに秋そ露は置ける

あはれなる身の思ひかな僞の人のちきりをなくさめにして

逢不逢戀

哀またあふ夜ありやとなからへて物思ひする我命かな

我のみやたえぬかたみと忍ふらんつらきかなかの有明の月

奉らせ給し百首に同心を

さはた川ゐてなるあしのかりそめに淺しや契一よはかりは

見るたひにつらさそまさる今はとて人のいそきし有明の月

三百首御歌に

うつろはゝ色かはれとや契をきしうき身しりける袖の露哉

人々によませさせ給し百首に

何とかく色變るらん木にもあらす草にもあらぬ人のことのは

寄花戀

うつろひてまたもさかぬはうき人の心の花のつらさ成けり

變戀といふ事を

花の木のとかをはいはし人心ならひなけれとうつろふ物を

いかにして恨やらまし契しにあらぬつらさの月日經ぬるを

人々によませさせ給し百首に

あちきなやいつまて物を思へとてうきに殘れる命成らん

和歌所にて結番歌をのこともよみ侍ける次に

恨むへき我身の科は忘られてとはぬをうきになすそはかなき（かなしきイ）

戀のこゝろを

身の程を思ひしりつゝうらみすは頼ぬ中となりぬへき哉

百番御歌合に恨戀

たのめはと思ふはかりにうき人の心もしらすうらみつる哉

被忘戀

なをさりにこれや限りといひしよのつらき誠に成にける哉

二十首歌合に戀を

忘草たねあれはこそしけるらめ軒はや人の心なるらん

絶戀といふ事を

もろともに忘れしとこそ契しに誰つらさより思ひ絶けん

十首歌合に

今はまた影たにみえぬうき人のかたみの水は涙成けり

寄淵戀

人心うきになかるゝ我袖の涙のふちはかはるせもなし

寄川戀

ちりをたにはらはぬ床の山河のいさやいつより思ひたえけん

絶經年戀

いたつらに年のみ越て逢坂の關はむかしの道となりにき

瓊玉和歌集巻第九

雜歌上

三百首御歌の中に

百敷や天照神の宮柱君かみかけをさそまもるらん

奉らせ給し百首に神祇を

民やすく國おさまれと身ひとつに祈る心は神そしるらん（もろくイ）

おなし心を

よの中のうきをみるにも男山頼む心に身をまかせつゝ

此道をまもると聞はゆふかつらかけてそ頼む住吉の松

三百首御歌に

住吉のうらはの松のふかみとり久しかれとや神もうへけん

二所へまうてさせ給ける時

たのむそといふもかしこし伊豆の海ふかき心はくみて知覽

五戒の御歌の中に不殺生戒

くらき夜の鵜河の篝さしをきて心の月の影を尋よ

末法萬年餘經悉滅

散はてゝ花も紅葉もなき山にひとり色こき高砂の松

此日已過命卽衰滅

はかなくも暮ぬとはかり歎かな命しらする鐘のひゝきを

百番御歌合に釋敎を

あひかたき御法の花をそれとみよ老すしなすの藥尋は

世をおさめ民をたすくる心社やかてみのりのまこと成けれ

旅御歌の中に

年月はへたてきぬれと逢坂や關路復し昔そ忘れぬ

何となく我にもあらぬ心ちしてさすらへこえしさやの中山

羇中松といふ事を

雲のゐる外山の末のひとつ松めにかけて行道そはるけき

百番御歌合に野を

日のくれにいなのゝ原を分行(わかイ)は鳴そたつなる宿はなくして

人々によませさせ給し百首に

臥わひぬいかにぬし夜か草枕ふる郷人も夢にみえけん

旅宿月といふことを

都おもふたひねの夢のさめぬまに恨やしつる秋のよの月

旅御歌とて

またしらぬ野山の末にあくかれてかはる草木に秋をみる哉

夜船こくせとのしほひをよそにみて月にそ越るさやの中山

羇中晩嵐を

きさかたのあまのとまやに宿とへは夕浪あれて浦風そ吹

海上眺望といふことを

出雲なるちくみの濱の朝なきに漕出て行は興の嶋みゆ

海旅を

はりまなる稲見の海に舟出して朝こき行はやまと嶋みゆ

あはち嶋せとの吹わけ風はやし(みイ)心してこけ沖津舟人

奉らせ給し百首に海旅を

心なる道たに旅はかなしきに風にまかせていつる舟人

弘長三年八月の風によりて御京上とゝまらせ給て後
をのことも題を探て歌よみ侍ける次に浦舟といふこ
とを

今そしる浦こく舟の道ならぬ旅さへ風の心なりとは

三百首御歌の中に

みわたせは鹽風あらし姫嶋の小松かうへにかゝるしら浪

浦古松を

うら風に幾世の友を契らんふりて木高き住吉の松

人々によませさせ給し百首に

あしたつの啼音もすみて更る夜に月かたふきぬ和歌の松原

百番御歌合に河を

吹風のなるをにたてる一松さひしくもあるか友なしにして

三百首御歌の中に

住わひは行て尋ん三輪川の清き渚(なかれイ)やいつこなるらん

河の名もことゝふ鳥もあらはれてすみたえぬるは都也けり

奉らせ給し百首に河を

(續古今)このさとはすみた河原も程遠しいかなる鳥に都とはまし

橋

今も猶ふしの煙はたつ物をなからの橋よなと朽にけん

百番御歌合に同し心を

いかにせんとつなの橋のそれならて浮世を渡る道の苦しさ

山を

岩木までもゆる思ひのある世とてあさまの山も煙たつ也

人々によませさせ給し百首に

ふしのねやいかに思ひのもえ初て雪にもけたぬ煙成らん

卯月の頃二所へまうてさせ給し時箱根にてふしの山
を御覽しける折しも殘鶯の啼けるを聞せ給て

此山はふしの高根のみゆれはや時しらね音に鶯の啼

百番御歌合に山を

世のうさに思ひもいらは誰をかもしる人にせんみ吉野の山

山家を

ことしけきうき世のまきれうち捨てすまはや山の奥の庵に

三百首御歌に

都人とはぬもよしや山里はさひしきにこそ心すみけれ

山家松を

山里はまつのあらしの音こそあれ都にはにすしつかなり鳬

住なれぬ心なりせは山里のまつの嵐やさひしからまし

奉らせ給し百首に山家を

人の身はならはし物を山里のすみよきまでに成にけるかな

人々によませさせ給し百首に

山里も住うくなりぬいつちまたあくかれそむる心なるらん

六帖題をさくりてをのことも歌よみ侍りけるに古郷を

此里をすみうしとにはなけれともなれし都そさすか戀しき

御京上とゝまらせおはしましてのころよませ給ける

今更になれし都そ忍はるゝまたいつとたに賴みなけれは

百番御歌合に述懷を

年月はうつりにけりな故郷の都もしらぬなかめせしまに

うき身こそかはりはつとも世中の人の心の昔なりせは

續拾遺懷舊ニ入此集ニ不見

瓊玉和歌集卷第十

雜歌下

三代御詠御覽せられける次によませ給ける

書をける跡見るたひに古のかしこき御代はしのはすもなし

奉らせ給し百首に懷舊

わかの浦やあはれ昔へありきてふ人の情を猶しのひつゝ

六帖題をさくりてをのことも歌よみ侍ける次に言葉

かきつくる言の葉なくは何をかはしらぬ昔のかたみとはみん

玉

うき身とは思ひなはてそ三代までにしつみし玉も時に逢鳬

述懷

有て身のかひやなからん國の爲民のためにと思ひなさすは

心をはむなしき物となしはてゝ世の爲にのみ身をや任せん

心をも身をもくたかしあちきなくよしや世中有にまかせて

うつり行月日にそへてうききとのしけさまさるは此世也鳬

人々に讀せさせ給し百首に

世にふれはうきことしけきさゝ竹の其名もつらき我身也鳬

題しらす

梓弓ひきのにはへる青つゝらことしけきよはくるしかり鳬

山深くすまんとまてはなけれとも事しけきよをよそに聞はや

有增の心のかねてかよへはやまたみぬ山の戀しかるらん

うらやましいやしき賤も中々に身をは心に猶まかすらん

述懷廿首御歌に

うきも又我身のとかになけくかな世のことはりに物忘して

なけきてもをのか心とくちぬよを誰におほせて猶うらむ覽

世中のうきには關もなき物を何に心の猶とまるらん

されはよになとや心のとまる覽うきは名殘にあらしと思ふに

馴てみる人の心はたのまれす誰をか山の友と契らん

おなし十首御歌に

世を捨は友にと契る人もかなひとりは山の道たにしらぬに

いとひても後をいかにと思ふこそ猶世にとまる心なりけれ

文永元年十月百首御歌の中に

鶯のねくらの竹の世中にとまりやすきは心也けり

百番御歌合に

いとふへきうきよの中と思ふより外なる物かとまる心も

雜御歌中に

世のうきを思ひつゝくる夕暮は我身にちかしみよしの山

すつとてもうきみひとつは惜からす人の情に思ひ侘ぬる

行末に待こと多き身なり共いとふへきよのうさとこそみれ

よの中にとにもかくにもくるしきはたゝ身を思ふ心なり鳬

身の爲にうれしと思ふ事はみなうきよの中となるそ悲しき

世中をあなうと歎くことしあれは先こほれける我涙かな

和歌所の結番歌𪜈のことも讀はへりける次に

世中のうけれはとてもいとはれぬ哀我身の何をまつらん

はかなしと浮世中をかつみてもこりぬ心はいとひやはする

五十首御歌中に

いかにせん唯有増の月日へてつゐに厭はぬ世𪜈もつくさは

百首御歌合に

後の世を此よの爲に忘られて我身のあたは我身なり鳬

述懐の心を

のちのよを思へはかなしいたつらに明ぬ暮ぬと月日數へて

とにかくに猶世そつらき賤しきもよきも盛のはてのうけれは

三百首御歌に

夢のうちに猶みる夢やよの中のはかなく過しむかし成らん

うつゝにも思ふ心のかはらねは同しことこそ夢に見えけれ

雜御歌の中に

夢は猶昔に又もかへりなん二たひ見ぬはうつゝ成けり

かねてしる命なりともおほかたは悲しかるへき夢の浮世を

人々によませさせ給し百首に

いかに見て思定めむうつゝとも夢ともなきは此世なりけり

寄草無常といふことを

よの中はさそふ水まつ浮草のあるともきかぬねのみなかれて

圓滿院宮仙花門院御事うちつゝき聞えさせ給ける頃月を御覽して

なき人の數のみまさる世中をいかに哀と月もみるらん

寂明寺の舊跡なる梅のさかりなりける枝を人の奉りたりけるを御覽して

心なき物なりなから墨染に咲ぬもつらし宿の梅かえ

去年冬時頼入道身まかりてことしの秋長時おなし樣に成にしことと思召て

冬の霜秋の露とてみし人のはかなく消る跡そかなしき

雜御歌の中に

なき人のかすそふ世こそ悲けれあらましかはといふ計にて

なかむれは思ひそ出るみし人のなきかおほくの秋の夜の月

されは又いつをうつゝのならひとて今更よをも夢といふ覽

明るまてと命を頼む心こそはかなき事の限成けれ

文永元年十月百首御歌に

まてといふに更に別のとゝまらは何をうき世に思ひわひまし

あし原の國つことのは絶すして猶もつたへよ万代までに

人々によませさせ給し百首に

おさまれる御代には朽ぬ道なれはいともかしこし和歌の浦風

百番御歌合に祝のこゝろを

萬代のかすにとらなん君かすむ龜のお山の瀧の白玉

文永元年大嘗會の心を讀せ給ける

すへらきの位の山の小松原ことしや千代のはしめなるらん

文永元年十二月九日奉仰眞觀撰之

老てかくもしほに玉そやつれぬる浪は神代の和歌のうら風

此一册者以　禁中御證本留寫畢　　左少將基任

慶長三年三月日

群書類従巻第二百三十一

和歌部八十六家集四

李花集上 宗良親王御集

春歌

立春のこゝろをよみ侍し
春たつといふはかりにはかすめとも猶雪深しみよしのゝ山

千首歌よみ侍しに立春天
久堅のあまの岩戸そかすむなる神代に歸る春のしるしに

立春雲
今朝よりは霞そとつるあまつ空雲のかよひち春やきぬらん

立春關
(新葉)關守のうちぬるひまに年こえて春はきにけり逢坂の山

早春河
たつた河雪けの水もまさる也三室の山ははやかすむらし

早春湖
比良の山海ふく風はさゆれともさゝ波かすむ春はきにけり

百首歌よみ侍し中に立春とて
立浪も霞をそへてあら玉の年やこゆらんすゑの松山
くるとあくとめかれぬ空も霞けりいつの人まに春はきぬ覽
さほひめの霞の衣うちはへてたもとゆたかに春や立らん

羇中によせて百首歌よみ侍し中に立春の心を
いそきつるひなのなか路に年暮て都に遠く春もきにけり

餘寒の心をよみ侍りし
春のきる霞の袖も立かへり嵐にさゆる山のはのくも

春雪を
山たかみはや消ぬらん春の日のひかりにあたる松のしら雪
霞たつ山の木のめの春風にきえれとおつる松の白雪

時しらぬ深山のすまゐもいつまてかくてはなとおもひつゝけられし比
雪つもる谷の埋木そのまゝにしらてや春をよそにすくらん

中院准后(親房)詠歌ともあまたかきあつめてよしあししるしつけて歌をもよみくはふへきよし申たりし中にふりにける身にそおとろくあは雪のつもれはきゆる色をみるにもとありしそはに書そへ侍し
ふりにける雪と我身そあたらしき春にはあへぬ物にそ有ける

鶯の歌とてよみ侍し
たくへくる花かと見せて谷かけに鶯さそふ春の白雪

延元(後醍醐)四年吉野の行宮にさふらひし比よみてたてまつりし歌中に

あきらけき御代の春しる鶯も谷より出る聲聞ゆ也
おなし比よみ侍し
みよしのゝ谷のふるすも出にけり君か春しる鶯の聲
山家鶯といふことを
鶯の谷のふるすのちかけれは山里よりや春をしるらん
中院准后うくひすの鳴て出つる谷かけをなを時しら
てのこる山人とありしそはに書そへし
君か代の春まつ人は谷深み鶯よりも先やいつらむ
山ふかく籠侍し比よみ侍し
鶯は谷より出る春なれと猶山ふかきわかすまひかな
たに深きやとの梢の鶯はふるすを出しかひやなからん
舊巣のうくひすを
をのかねはあらたまれとも鶯の谷のねくらそいとゝふり行
二十餘廻の春も都のよそに過ぬることなと歎侍しこ
ろ鶯を聞て
ことしわか春をしらせよ鶯もしるしなきねやさのみ啼へき
永日もくらしかたう侍しにたゝ鶯のみ啼けれは(のイ)
うれへあれは聞こといとふ我宿になれのみ春と鶯そなく
興國(後村上)五年信濃國大川原と中山のおくに籠居侍
しにたゝかりそめなる山里のかきほわたり見ならは
ぬ心地し侍にやふしわかぬ春の光待出る鶯の百囀も
むかしおもひいてられしかは
かりのやとかこふはかりの吳竹をありしそのとや鶯のなく
春ことにあひやとりせし鶯も竹のそのふに我しのふらん
千首歌中に鶯とて
春くれは花にうつろふ鶯の心の色そねにはしらるゝ
なへてふる梢の雪を鶯のいつれ梅とかわきてなくらん
色かよりほかにも猶そあはれなる軒端の梅の鶯の聲
子日を
君か代は猶こそあかねかすか野の松をみなからひき盡しても
若菜を
春やとき花やをそきとたとるまにみかきか原にわかなつむ也
(新葉)鶯のとふひの野邊の初聲にたれさそはれて若な摘らん
いつのまに若なつむ野と成ぬらんきのふは雪のふるの中道
消すともなとかなか覽獨いてゝ若菜つむへき雪まはかりは
よそよりは雪まもみえぬ春日野に野守や獨若菜摘らん
千首歌の中に霞
立わたる霞のしたの白雪は山のはなから空にきえつゝ
みよしのやこれよりおくの嶺續きありともみえす霞む空哉
關霞
春はなを名にこそたてれ東路やいつれ霞の關路なるらん
名所霞
松浦川なゝせのよとのはる／＼と霞なかるゝ春のあけほの
住江の岸うつほとは聲もせてかすめるおきに［　　］
海邊霞
いつくをかわかすむかたと歸る覽かすめる興のあまの釣舟
延元四年春比遠江國井伊城に住侍しにはまなの橋の
霞わたりて橋本の松原湊の波かけてはる／＼とみわ
たさるゝあした夕のけしきおもしろく覺侍しかは
夕暮はみなとももそことしらすけの入海かけてかすむ松原
はる／＼と朝みつしほの湊船こき出るかたは猶かすみつゝ
遠樹の霞といへる心を人々によませ侍し次に

高砂の峯の梢もかすむ也空にあらしのをとはかりして

信濃國にて百首歌よみ侍しに霞を

霞めたゝいつれ宮このさかひともみゆへき程の旅の空かは

そのはらや有とはみえしはゝ木々の梢もかすむ春の夕暮

すはの海や氷のうへはかすめとも猶うちいてぬ春の白波

きさらきの比山をこえ侍とて

梅かかに花のあたりを行やらて山路くらせる春風そ吹

むめかかの嵐にたくふたひことに人をも花や又さそふらん

百首歌よみて北野の宮に法樂し侍しに梅を

山里は風そたよりのしるへとも梅かかにほふ比やしるらむ

梅風を

里ことにさける軒はの梅かかを風はひとつにさそひける哉

しのひて住侍し山里に梅花さかりなりしかは

梅のはなうたてにほひのしるけれはわか隱家も人やとふ覽

あるところの梅をみてかへるとて

おらすとも歸りやせまし梅かかのうつれる袖を家つとにして

ひとりすみ侍し山里に梅花のさかりに鶯の鳴けれは

色もかもしらてみるこそ梅花やみよりは猶あやしかりけれ

いろも香もしらてそみつる梅かえの花もてはやせ宿の鶯

あやしやなとたはふれ侍し人の許へ梅花一枝おりて
つかはすとて

梅かかのにほはぬ袖もなかり鳬誰をたれとか人のとかめむ

里梅を

待人のかそにほふらん梅花さかりをとはぬ里しなけれは

朧夜の月の光によもすからあくかれてあるところの
梅花のもとに立より侍しかとも　あるしもみえさりけ
れは後にもみよとて花の枝にむすひつけ侍し

あやなしといはぬはかりそ梅花さける軒はの春の夜の月

うつし栽侍し梅の程なく咲ける春よみ侍し

ことしより花咲そめて宿の梅うき身には猶春をまてとや

千首歌の中に池柳を

青柳のみとりのまゆをかきたれてうつすは池の鏡成けり

春駒を

淺みとりあらはれそむる初草の雪まをあさるのへの春駒

喚子鳥を

あまひこの音羽の山のよふこ鳥我か人かとはまし物を

興國三年越中國にすみ侍し比歸鴈を聞て

おなしくは散までをみて歸る鴈花の都のことかたらなん

同比嶺中百首とてよみ侍し中に

かへる鴈こしちの嶺のへたてをも我こえてこそ思しりぬれ

人々に歌よませ侍し次に歸鴈を

今はとて雲ゐはるかに成ぬ也空行鴈の春の通路

百首歌よみて北野宮に法樂し侍し中に歸鴈を

歸鴈なにいそく覽思ひ出もなき古鄉の山としらすや

百首歌よみ侍し中に

夕暮のやとりもとらて歸鴈こしちの山はよるやこゆらん

興國二年越後國寺泊といふところにしはしすみ侍し
に歸鴈をきゝて

ふる鄉と聞しこし路の空をたに猶うらとをく歸る鴈かね

旅の空にも年月のみつもり侍ぬれは故鄉もさすかに
戀しく侍しに千首歌よみ侍し次に歸鴈

春きぬとわかるゝ鴈の我ならはかへる雲路にねをはなかしを

いかにそや身のみ物うくおほえ侍し頃鴈の歸るをききて

誰もけにありなは後のいかならんうきめみえしと歸る鴈金

百首歌よみ侍しに闕春月

まはらなる不破の關屋の夜半の月霞める影はもるかひもなし

春月とて

花の色にあらそひかねて春のよの月も光のかすむ成けり

羇中百首とてよみ侍し中に

新葉 やとからに霞むとのみやなけかれん都の春の月みさりせは

歎事侍し比春月をみて

袖の上にかすめる月はそれなからもとのみならぬ身を歎哉

中院准后よみて見せ侍し歌の中にいかにせんさらてもかすむ月影の老の涙の袖にくもらはとありしそはに書そへ侍し

この頃はさらてもかすむ月なれは老の涙をいとはさらなむ

花歌よみ侍し中に待花とて

待ことの花にしなくは山櫻さかぬまいかにさひしからまし

櫻花春はかきりのある物をいつみよとてかつれなかるらん

これかれさそひて花尋侍し所にて

いつくとも所さためぬ花のかにさそはれきつる春の山道

たつねはやそこともしらぬ花のかの霞ににほふ春の山もと

花の色はみまれみすまれ分ゆかんかすめる山に風にほふ也

對山待花といふ心をよみ侍りける

さらぬたにまたきなき名の立田山いくたひ雲の花とみゆ覧

花さかりに吉野に侍しにちかくても雲とやみると人の申侍しかは

花ならて何とかはみむみよしのゝあをねか嶺にかゝる白雲

同比歌たてまつりしに見花とて

分きても雲ゐとそみるよしの山君か御かきの花の梢は

花のうたの中に

久かたのあまのかく山空はれて雲にまかはぬ花のいろかな

よしさらはいつれ花ともなか／＼にしゐてはわかし峯の白雲

北野宮に

すかはらやふしみの暮にたつ雲ははつせの山の花にそ有ける

人々に歌よませ侍し次に嶺花

櫻さくこれやたかまの山ならん嶺よりおくのみねの白雲

さらぬたに春はまつおもひやらるゝ吉野の奥此比は皇居にてさま／＼をしはかられさせ給しかは

さかはまつ行てこそ見め我やとゝたのむよしのゝ花の下陰

信濃にてよみ侍歌の中に

ありとみて尋はこれもいかならんふせやにさける山の初花

東路に侍しころ都のはなおもひやられて

春といへはやかて心にまかひけりなれし都の花のしたかけ

盛花といふ心を

山櫻花はさかりの比なれやにほひはかりをさそふはる風

ある所にて花によする祝をよみ侍し

咲花も散といふことをしらぬ迄のとけからなん御代の春風

故郷花を題にてめん／＼歌よみ侍し中に

ことかたれふりにし志賀の宮木守花こそせめて物いはす共

社頭花とて

春の日ののとけき神のめくみもてちらしとたのむ花盛哉

閑居花

柴の戸にうき世のなかは捨はてつ花に嵐を又いとへとや

しはしすみ侍し所に櫻を栽て程なくたちいて侍しかはその木にかきて結つけ侍し

ゆく末に誰かうへしと人とはゝその名はかりや花にのこ覽

羇中百首とてよみ侍し中に

都にて花みるひまもなかりしを心のまゝにくらす春かな

とし毎に宿かへてみる花なれは後の春ともいかゝたのまむ

花散にあくかるゝ名も立ぬへしさらて旅ねをせぬみ成せは

信濃國伊那郡と申所にて花み侍しに思出侍ける

ちらぬまに立かへるへき道ならは都のつとに花もおらまし

花見にさそひ侍し人のさはることありとてとゝまりけるにかへりて花の枝をつかはすとてよみ侍し

こぬ人のためとて手折一枝はちるよりおしき山さくらかな

花のもとにて人々和歌會し侍し次に

よしさらは散ともおらし山櫻風よりつらき名をもこそたて

身を捨て心はかりや思ふよりほかなる花に猶うつるらむ

歸るさは身にこそそはねあかさりし心や花に猶とまるらん

老木の花をみてよみ侍し

わきて猶花も老木そあはれなる植けん人を昔とおもへは

延元四年春比にや顯家卿なといさなひてあつまよりはるゝとのほりて今は都へといそき侍しに奈良天王寺のいくさやふれにしかは思ひのほかに吉野行宮に參りて月日を送しにやよひの比爲定卿の許より風の便に歸るさをはやいそかなん名にしおふ山の櫻は心とむともと申をこせたりし返事に

新葉 ふる鄕は戀しくとてもみよしのゝ花の盛をいかゝみすてむ

人もすさめすなり侍ける家に花さへことしはをそきなといふを聞て

をそし（あるイ）ともなれをそたのむ山櫻やとふりぬとて春な忘れそ

ある所の花おもしろかりけれは暮まてなかめて歸侍しことに名殘もおほくてその花に結び付侍し

めくりあはゝ又こん春の花もみよ我やわするゝけふの夕暮

池のみきはも物ふりてよしある木たちのはなかけむかしおほゆるもあはれに見入られしところにて

春ことの池のかゝみは年ふりて花も老木のかけやはつらん

扇の繪に春の山にかれこれたちやすらひて花の枝かさしたる所を人のよませ侍しかは

たかためにしゐては花を手折らんさても家路のいそかれぬ哉

中院准后かきあつめてみせ侍し歌の中にみよしのや雲ゐの櫻君か代にあふへき春や契をきけんとありしそはにかきそへ侍し

うつろはぬ君か心にならひなは花もときはの色をみてまし

又ひとりみてなくさみぬへき花になとしつこゝろなく人をまつらんとありしに

我はかりみるにかひなき花なれは憂身そいとゝ人もまたるゝ

はかなきことなと思ひつゝけ侍し比花のうたとて

さけはちるよしや芳野の山櫻うき世の春を花にしらせし

人々に歌よませ侍し次に志賀山越を

忘れすよしかの山こえ春をへてなれしさくらの花の下かけ

花はいつれもおなし春なる色香をみるにも所から猶あかぬ心ちして九重の昔のみ思ひ出られ侍しかは

百敷やあひも思はぬ花の色のこゝろにそみて忘られぬかな

中院准后歟よみて吉野よりみせ侍し中に九重の御階のさくらさそなけに昔にかへる春をまつらんとありしそはにかきくはへける(侍りイ)

君すめは是もみはしの櫻花むかしの春にかはらさるらん

又いかにして老の心をなくさめんたえて櫻のさかぬ世ならはとありしそはにかきくはへける

花さそふ風にそさはく春はたゝのとけかるへき老の心も

日くらし花のもとにたゝすみてよみ侍し

忘るゝに忘られぬへき身なりせは花に憂へのなき世ならまし

春ことにかはらぬ花をみるにもいさゝうつろひはてたる身のしき思ひしられて

老木まて花はさきけりうたてなと我世の春のすくなかる覽

おなしこゝろを

ちるとみし花もさきけりうきはたゝ我世の春の一さかり哉

吉野の行宮もあらぬかたにうつされて後岩のかけみちもいとゝ跡たえはてゝ侍し先帝(後醍醐)の御廟もゆかしくおほしめされけるにや。三月十日比新待賢門院(廉子)

(頭註)准三宮簾子。後醍醐院妃。後村上院母儀。右中將公簾女。

御まいり有けるに藏王堂をはしめてさなから房とも皆煙となりはてゝ跡たにもみえさりけるに塔尾の御廟の花なん昔なからの色香にてなつかしくおほしめされけれは同心にもみよとて一ふさ御ふみのなかにつゝみくはへられてみよし野はみしにもあらす荒にけりあたなる花は猶のこれともと仰たりし御返事に

今みてもおもほゆるかなをくれにし君か御蔭や花にそふ覽

たつねみる人のためにや殘けんおなしかさしのみ吉野の花

と申侍しにいくとせもへたてさりしに女院も御かくれありしかはさらに又世の中くれまとひぬる心ちして後春又かの御ふみをとりいたしてみ侍しにしほめる花もさなからつゝみくせられて見しまゝなれはいとゝあはれにて

尋ても今はた誰かみよしのゝ花のむかしを我にかたらん

うき世のならひもよろつにつけて思ひしられぬにしもあらぬ身のなにとしてかつれなくなからふるやらんと我なからおもひつゝけられしころ花をみて

今はとて思ひすつへき世中に花こそうたて心とゝむれ

あたなる世を今はなにかは歎なと申しらせ侍し人に彌生の末つかたうつろひたる花に結ひ付てつかはしける

おしむなよたれもうき世の花盛散とみてこそ有へきものを

彌生の比はしめて山里にうつろひて人の許につかはし侍し

山ふかみあくかれそめてわか心花にうき世の門出をそする

中宮准后の許より歌よみて見せ侍し中にまたさかぬ梢あれはとたのますはうつろふ花やなをうからましとあるそはに書そへし

いとゝ猶ちらぬをみてそ散はうきおなし心に花たにもなき

同歌に春をへて涙ももろく成にけりちるをさくらとなかめせしまにとありしかは

おしめ先とまらぬ花になれ〳〵てはては涙そもろく成ぬる

花のちる夕つかたこしかた行すゑのことゝもつくつ

くとおもひつらね侍て
うつゝともなに思ひけん夢とこそいふへかりけれ花の盛を
落花の歌中に
吹からに誘はれやすき花そとはいかてか風にしらせ初けん
うつろふも心つからとみる花の風の名たてになにとちる覽
櫻花さきてとくちる年毎に幾たひ春をうらみきつらん
いつのまに春日のとけき櫻花さくとみしより風も吹あへぬ
花のちる木陰にたちよりても日數へぬる旅のすまゐ
なとおもひつゝけられて
あたにさく木するゑを旅と思へはや花もつゐにはねに歸る覽
相阪の關に花のちりけるを人のみてとをるかたかき
たる繪にかきそへし
かつこえて春にわかるゝ逢坂は人たのめなる花やちるらん
落花のこゝろを
あはち嶋せと行船の追風にちりくる花や跡のしらなみ
雲まよふよしのゝ山のやまおろしに花の白雪ふらぬ日はなし
おしめたゝ散なむ後はあくた河それとも見えし花の白波
風いと吹たてゝ花の梢もやう／＼うつろひゆく夕つ
かた花おしむ心めん／＼よみ侍し次に
ちる花におほふ袂はせはくともおしむ心はよもにみつらん
谷落花とて
ちる花の嵐にさはく谷川はふちにも瀬にもあた浪そたつ
ある庵室に住侍し比世中のはかなき事なとありしも
ろともに物かたりせしに庵の櫻折しりかほにさとち
りて春のくれ行氣色も哀成しかは
今はさは花ちりはつる憂世也なにゝか人の心とむらむ

久しくをとせさりける人の春の暮かたにしもまうて
きたりけるに庭櫻の枝を取いてゝみするとて
我やとをとふにてしりぬ山櫻外の木するゑは散はてにけり
永日もくらしかたう侍しかは春の霞とたちいてゝそ
こはかともしらぬ山邊にあくかれ侍しに薪おへる山
人のわらひなと取くして行あひ侍しかは
山人や妻木につけて歸るらんさらてもゆる嶺の蕨を
松下躑躅といへる心を
松か枝はときはの山の名のみして下てるはかりさく躑躅哉
摘　菫
春ことにすみれつみにとくる人そ荒行宿の哀しるらむ
苗代を
水上に誰なはしろにまかすらむなかれてほそき春の山川
しつのをか苗代水をまかせ入てけふは門田に蛙なく也
中院准后よみて見せ侍し歌中に小山田の苗代水のひ
きひきに人の心のにこる世そうきとありしそはに書
くはへ侍し
をのつから道ある御代にまかすれは苗代水もにこらさり鬼
款冬を
かはつなく井ての山ふき逢ことのまれなる色と春は暮つゝ
藤　を
咲てこそ猶したはるれ藤波のなみにおもはぬ春の名殘は
うちはへてかけとたのまむ我宿の松にさく藤春もかきるな
暮春歌とてよみ侍し
うつり行山の櫻のかり衣けふはかりなる春のいろかな
彌生の廿日あまり花ものこりすくなくて春のけしき

物ことにをとろへたる夕つかたよみ侍し
今はとて春をもさこそさそふらめ散ぬる花の跡の山かせ
羇中百首中に暮春
鳥のねもふるすにかへる谷の戸に春をは獨われやおしまむ
惜三月盡といへる心を人々よませ侍し次に
二なき心は花につくしてき（きぬイ）又いかにして春をおしまん
我身世にふる春のなかめにうちまきれぬる鐘の聲も
けふはさすかにおとろかされて
惜む共なにかとまらんさらぬたに憂身のよその春の日數は

夏歌

百首歌よみ侍し中に新樹を
春わけし跡にしをりを殘し置て櫻はしるき夏木立かな
卯花似月といふ心を
うのはなのよそには月の影もなし籬や空の雲ま成らん
中院准后よめるうたみせ侍し中にもろかつらたのみをかけしまゝならはしめの外なる身をもわするなもろ人は心を神にかたふけてけふはあふひの山かつらせりとありしそはに書くはへてつかはしける
代々かけて神にあふひのかさしをはしめの外とも何か思はむ
かけて頼めその神山のやまかつらけふにあふひと人は云也
すみあらしたる前栽の中になてしこの一むら花さきてみえけるに
今更に塵をもたれか拂ふへきあれにし宿の床夏の花
瞿麥露を
けさのまはまたしきたへのとこ夏に露のおきゐる程そ涼しき
待郭公を
よひ／＼の雲路に關はなきものをさはりかちなる郭公哉
山里にすみ侍し比時鳥を待とて
かくてたに猶もまたれは郭公なにを深山の思ひ出にせん
忍ひねも待人からにやなとまて思ひとかめられし暮つかたからうしてそれかとはかりほのかなる聲を聞て
あちきなくいつも雲ゐのよそにのみうき身へたつる郭公哉
待わひ侍し夜夢にもほのかに聞侍しかは
思ひつゝぬれはこそきけ霍公またすは夢もかひなからまし
草の庵雨すくるほと山郭公心ありぬへき折からなれは
ふらぬ夜の心はしりつほとゝきす今こそなかめ村雨の空
人ことにはや聞侍なといふにも身一つもれぬる心ちして
物おもふ我にかきらは郭公なかぬもけにそこゝろ有へき
時鳥を
なかぬかなやとふかき夜の郭公たゝなのるへき里のあたりを
かれこれ時鳥ははや聞たりやなとたかひにたつね侍し折ふし樵夫の山より出けるを見て
歸るさの遠山人に（かつイ）ことゝはむけふほとゝきす聞やきかすや
〔頭註〕後醍醐帝去年十二月入吉野。
延元二年夏の比伊勢國一瀬といふ山の奥にすみ侍しに郭公を聞て
深山をはひとりないてそ時鳥われも都の人はまつらむ

螢を
荒ぬれはしけれる宿の草むらにあつめしよりも飛螢かな
あしの葉にかくれぬ里のもしほ火や入江にもゆる螢成らん
思ひあれはよしのゝ河の岩波にはやくももえてゆく螢哉
池水のいひ出かたき思ひにやもえて螢の身をこかすらん
草ふかみしたゆく水もをのつからありとやこゝに螢飛らん
螢の光かすかにみえまかひて草ふかきやとのあはれ
もしりかほなれは
せめてなとほたるはかりの身をてらす我身の光なき世成覧
山ふかく籠居侍し比木すゑに蟬のなくを聞て
山ふかみ世のひとこともきこえぬに何を空蟬なきくらす覧
納涼のこゝろを人々によませ侍し次に
我宿にかたえさしおほひしけるなるならの廣葉の陰そ涼しき
羇中納涼といふことを
秋かせにこゆへき關のちかけれは涼しく成ぬたひの衣手
中院准后みせ侍し歌中に松風の音するかたの山陰は
思ひやるよりすゝしかりけりとありしそはに
深山路は日もゆふかけのうす衣いとふはかりの松風そふく
六月秋をよみ侍し
夏と秋と行かふ浪のみそき河わたりはてねは風そすゝしき

秋歌

百首歌よみ侍し中に立秋を
いつのまに秋はきぬらん夏衣ころもへすして風そみにしむ
けさよりそうらめつらしく吹かへす岡の葛葉の秋の初かせ
海邊初秋といふ心を
浪によるみるめに秋はなけれとも松に音そふうら風そふく
七月七日よみ侍し
まちえつる涙のひまの秋ことにこよひや袖をほしあひの空
代々の秋思へはひさしたなはたのぬる夜の數もさそ積る覧
たなはたにやとかす人やなかるらん天の川原に岩枕する
たなはたは年にまれなる逢ことにかへてやなかき契成らん
袖かはすあまのかはらの岩枕浪さへけさはたちわかれつゝ
さま／＼物おもひ侍し比前栽の露をみて
あはれてふことをあまたになかむれは露もくたけて秋風そ吹
秋の露なにしら玉とかはるらん涙は草にかゝぬものかは
露をよみ侍し
玉とちる露のみたれのつかれをは風吹みたす蜘の糸すち
なへて世にうれへなき身の秋ならはかこちそせまし袖の白露
風かよふ蓬かもとの苔の庭露もしつくもわかれさりけり
いかなりけんあしたにか露をはらふとてよめる
おきてうきこよひの夢の名殘かは朝の床の秋のしら露
荻を
そよと吹をとはすれとも白玉を露にこたへぬ荻のうはかせ
山里の秋の氣色やう／＼物かなしう侍しに荻の風を
聞て
今よりは物思へとやおきの葉にあつらへつくる秋の初かせ
夕暮はよきてと思ふ荻のはにあやにくに吹風の音かな
荻風を
ほに出てむすはれにける庭の荻の末葉の露を拂ふ秋かせ
人々に歌よませ侍し次に江荻を
すみのえの松にたくひてひゝく也遠里をのゝ荻の上風

萩の風の吹ける比よみ侍し
物思ふ人の心そおきの葉に風も吹あへぬ秋をしりける
露ならぬ心を萩のうは風にさのみくたけて物おもふ哉
歌よみ侍し次に萩を
しめのゆき紫野ゆき秋はきの花にしほるゝ袖そ色こき
中院准后よみたる歌ともかきあつめて見せ侍し中に
萩の戸の昔の秋の面影に今たにかゝる袖の露かなと
ありしそはに書そへて遣し侍し
いましのふ袖にくらへは萩の戸の昔の秋の露はものかは
同歌に野へみれは秋は千種の花かたみめならふ色に
わきそかねぬるとありしに
花かたみめならふのへの秋草にわすられぬ覽旅のおもひは
又故郷となしてこそみめ宮城のゝ萩の錦をきてもか
へらはとありしに
咲花の千くさにあけるかたへしも萩の錦をきて歸るらん
人々に歌よませ侍しに原薄を
露にふす朝の原の花すゝきまたしきたへの袖かとそみる
羇中百首とてよみ侍し中に女郎花
かりそめの契はうきを女郎花草の枕になにゝほふらん
旅ねに侍しあたりに蘭のにほひけれは
蘭ぬしさたまらぬ匂ひかな誰もかりねの野へのあたりに
北野に法樂し侍し百首の中に秋夕を
いつちへか心をやりてなくさめむうきはなへての秋の夕暮
物毎に哀しられし秋の夕つかたはなくさめかたくや
ありけん
たよりにもあらぬ草木に秋はたゝ心をつくるのへの夕くれ
つゐにあくかれ出侍し野山の道もさこそはつゆふか
かりけめ
いつくにか心とまるとなかむれはみやもわらやも秋の夕暮
夕暮の雲のはたても時雨けりあまつ空なる秋のあはれに
霧を
露深きゆふ暮よりもしほれけりまかきの花の霧の朝明
舟よはふ遠かた人の聲はしてまた夜はふかしよとの川霧
へたて行いなのゝ原の夕霧に宿ありとても誰かとふへき
わかきつるかたもしられす立霧にをちかた人は宿りとる覽
おもふこと侍し比虫のなくを聞て
夜もすからねをなく虫にくらへても我やいほねぬ思そふ覽
身にしらぬ思なりせは虫のねをあはれときかぬ折もあらまし
山ふかくすみ侍し比よみ侍し
世のうさをきかしとおもふ草の庵に猶ことしけき虫の聲哉
中院准后のみせ侍し歌の中にかきりなき虫の根にた
くへてもつきぬは老の涙なりけりとありしに
老てこそ聞はとかむれいにしへの秋のよすから虫や鳴らん
蛬を
きり／＼す野はなけれはやね覺する夜半の枕の下に鳴覽
秋の夜は人なき床のきり／＼す枕のみしるねをやなくらん
なれも又恨やそふるきり／＼すま葛か原の風の夜寒に
人々に歌よませ侍しに岡鹿を
夕つくよさすや岡邊の秋風に霧晴てなくさをしかの聲
鹿を
山鳥のおのへのしかもひとりやはなか／＼し夜の月に鳴覽
田家鹿といふことを

雲もなき田面の月のもる庵にいとはれてのみ鹿や鳴らん

羇中百首よみ侍し中に鹿を

音にたてぬ袖さへ露にしほれけり鹿なくのへの秋の旅ねは

百首歌よみて北野社に法樂し侍し中に鹿を

長きよもあかすや鹿のをのか妻こふれとしるしなき明す覽

鹿歌中に

さをしかのつまとふ聲は更にけり今夜の月の空たのめかは

をのかつまゝつとしらせて高砂の尾上にたてるさをしかの聲

露深きをのゝ草葉をかたしきて今宵も鹿の妻や待らん

をのかつま逢よしをなみ秋の野の尾花にましり鹿や鳴らん

百首歌よみ侍し中に鴈を

めにちかき萩の下葉のうつろふは雲ゐのかりや鳴わたる覽

秋ことに故郷いてゝくる鴈はみやこの月にすみやならへる

夜舟こく音はかりして白浪の跡なき空にかりやなくらん

なく鴈の聲きく秋も忘れぬはかすみていにし恨なりけり

中院准后歌よみて見せあはせ侍し中に　誰かはとおもふ物からふる郷のたよりまたるゝ初かりのこゑ　とありしそはに書そへ侍し

故郷のたよりうれしく待えても問へき人やなく鴈の聲

又かきりなくとをくきぬらし秋霧の空にしほれて鴈もなく也とありしそはに

鴈たにもしほれてそなく越路迄さすらへし身を思ひやら南

越中國にて羇中百首歌よみ侍し中に鴈を

思ひやれ都の空も鴈なけは獨こしちの跡のさひしさ

人々に歌よませ侍し次に鴫を

夕霧のへたつるをちはしらねとも鴫たつかたや澤邊成らん

信濃國に住侍し比人々に歌よませ侍し次に駒迎のこゝろを

みやこへといそくをきけは秋をへて雲ゐに待し望月の駒

百首歌よみ侍しに月を

またなれぬ心つくしの木のまよりほのみえそむる秋の三日月

芳野に侍し比月の歌とて

ほかよりも猶まちかねつ吉野山かさなる嶺を出る月かけ

みよしのゝ山の秋かせ更る夜に古郷かけてすめる月かな

月欲出山といへるこゝろを

いてぬるか光はよそにみえなから松のかけなる山の葉の月

月の歌中に

山鳥のはつ尾の鏡これなれやなか〳〵し夜の嶺の月かけ

秋風にまよふむら雲もりかねてつらきところや大空の月

なかめつゝ秋とや人も覓なるたかまの山の木間もる月

はつせ山尾上のかねの音するはひはらか奥に月かたふきぬ

野月とて

分きつる野原の萩の枝なからうつしてすれる袖の月影

さすか又限あれはやむさしのゝ草葉の末に月はいつらん

夜もすから月はくもらて宮城のゝ木の下露や雨とふるらん

原月を

さらぬたに色ことになる故郷のあさちか原に月そかたふく

夜もすから法談なとして曙かたに寺より歸ける道すから月すさましく鹿の音すみ渡りて面白く侍しかは

露深きうき世の秋をあはれみて鹿の園にも月はやとりき

月前鴈といへるこゝろを

なく鴈の涙なるらし月影に數さへみゆる庭のしら露

河月を

くもりなき玉嶋河の秋の月幾瀬の浪にひかりそふらん

心あるあすかの川の浪なれや七瀬のよとに月やとるなり

天河雲のしからみよはからし光もりいつる秋の夜の月

沼　月

かくれぬの下ゆく水はすみなからみくさそ月の隔成ける

池　月

さる澤の池のたまもゝくもらねは月にそうかふ人の面影

月歌の中に

谷水のこほりにまかふ岩まより打いつる浪や秋の夜の月

するかに侍し比よみ侍し

するかなる田籠のうら浪たゝぬ夜はあらはや月を氷ともみめ

海邊月を

時しあれは秋なき浪の花の色も月にうつろふ浦風そ吹

越中國なこのうらに忍て侍しに羇中百首よみ侍とて月を

都にやおなし空ともなかむらん我は行衛も浪の上の月

遠江國に侍し比月歌とてよみ侍し

湊江や夕しほふかくなるまゝに月にそうかふ浦の松原

駿河國にてしはしなれにし人の程へてのちをとつれたりし返事に

わすれめや清見か磯の浪まくら關路の月を面影にして

浦　月

難波かた浦のもくつをかたしきてしほひに殘る月をみる哉

をしてるや難波の秋を身にしめて今夜も月をみつの濱風

わたつ海のおきつしほあひに宿る月のよる方もなき秋の半天

松かけやふけ行まゝにかはる覽月こそめくれ志賀のから崎

跡たれし日吉の神のかけそへて月さへすめるしかのから崎

諏方下宮寶前に通夜し侍りて夜もすから法施たてまつりしに湖上月くまなくて秋かせもほかよりは夜さむに侍しかはよみける

すはの海や神の誓のいかなれは秋さへ月のこほりしくらん

社頭月といへるこゝろをよみ侍し

かたそきの行あひのまより月もりて神さひまさるよはの松風

竹間月といへる心を

窓ちかき竹の葉分にもる月の影さたまらぬよはの秋かせ

山里にかくれ居侍し比月のみよな／＼友成しかは

山深みうき世に忍ふかくれ家はありとやこゝに月もすむ覽

月いとあかき夜山里にまかり侍しに

さひしさに猶やま柴の夕煙とはれぬ月のかけくもるらん

信濃國大川原と申侍ける深山の中に心うつくしう庵一二はかりしてすみ侍ける谷あひの空もいく程ならぬに月をみてよみ侍し

いつかたも山のはちかき柴の戸は月みる空やすくなかる覽

中院准后見せ侍し歌中にさひしとは太山隱の杉の庵松の軒もる夜半の月かけとありし誰も思ひしられてそはにかきくはへ侍ける

杉の庵松の軒はもかはらねは月にそいとゝ思ひやらるゝ

山里にすみ侍し比よみける

草の庵竹のあみとのかりの世に月も心をとめしとそすむ

露しけき草の庵も月かけのみかけは玉のうてな成けり

草庵月とてよみ侍し

秋萩のかりほの軒の露しけみ花のしつくに月そもりそふ

あかたのすまゐも年を經てすみうくのみ覺侍し比月をみて

月にあかぬ名をやたゝましことしさへ猶更級の里にすまはゝ(や聲)

正平十七年秋住吉の行宮よりことしの八月十五夜こそ月もおもしろかりしかいかゝみつらんなとおほせられて年經ぬるひなのすまゐの秋はあれと月は都と思ひたにやれと有しかは御返事に申侍し

いかゝせむ月もみやこと光そふ君すみのえの秋のゆかしさ

月に君思ひ出けり秋ふかく我をはすての山となけくに

中院准后のもとよりよみたる歌ともみせ侍し中に幾里の月に心をつくすらん都の秋を見すなりしよりとありしそはにくはへ侍し

さらしなの月みてたにも我はたゝ宮この秋の空そ戀しき

同歌かくてなとすまさりけると山さとの月みる秋のこころをそとふとありしそはに

なくさまぬ心なれはやさらしなの月みる里もすみうかる覽

又なにしおはゝ雲ゐの秋の夜半の月外よりもさそてりまさるらんと有しに

名にしおふをはすて山に照月も雲ゐの秋をみしことはあらす

月いとあかき夜故郷のかたもおもひやられしかは

後は又旅ねや月に思ひいてん今は都のかたみなれとも

あつまにすみ侍し比月を見て

入をさへおしまてそみる夜半の月山のあなたを都と思へは

中院准后みせ侍し歌中に待もうし山のあなたの里人になりてそ月はみるへかりけると有しそはに

聞こえぬほとや思ひし都人山のあなたに月はまたしと

又猶いかになかめられまし物おもふ心のうちを月にとはれはとありしに

物思ふ心を月もとへはこそおりしも空のかきくもるらん

興國六年秋月をみてよみ侍し

ものおもふことはかはれと秋の月みそちあまりの影は眺めつ

正平(後村上)十二年百首歌よみて北野社に法樂し侍ける中に月を

大空をてり行月しかこたれぬ身の光なき秋とおもへは

人のすみあらし侍ける宿に月のみ隈なきをみて

庭にみし影は淺茅にうつもれて軒の板間そ月はくもらぬ

月歌あまたよみ侍し中に

時しもあれ身にしむ月の光哉おなし雲ゐに風や吹らん

ひとりぬる身はならはしの秋かせに手枕さむき月の影哉

なかめつるうき身のかけは老もせて月そ有明の空にかたふく

興國二年うかりし八月の空にめくりきぬれは十五夜會し侍りし次によみ侍ける

おもひいつるこその八月の秋の月又くもれとてぬるゝ袖哉

年へて後八月十五夜によみ侍し

うきなから秋の半の月影そなかきわかれのかたみとはみる

なき人の別をあすと思はすはこよひの月はしたはれそせし

夜もすから月をみてよみ侍し

なかむれはうき世中の思ひ出もありける物を山のはの月

興國の比にや月爲秋友といふ心を人々によませ侍し次に

諸共に三十あまりはすくしきぬ我なへたてそ村雲の月

かくても年をのみかさね侍ければ いたつらに月にむかひゐてよみ侍し

我よはひ共にかたふく月なれは身をかくすへき山のはもなし

なかむるに(れはイ)齢はたけぬしかはあれと猶いつまてか有明の月

信濃にすみ侍し比歌よみ侍し次に擣衣を

信濃なるあさの狭衣よしうたしやつれにけりと月も社みれ

信濃の山さとにすみ侍しに衣うつ音を聞て

よそにのみきゝし信濃のあさ衣はこの里にうつ物にそ有ける

人々歌よませし次に擣衣を

篠わけしあさのさ衣こよひさへぬきかへかてら月にうつ也

秋風の吹とふきぬる里ことになへてきぬたの音そひまなき

遠聞擣衣といへる心を

わかうたぬ砧の音のひゝききてたれか夜寒にねられさる覧

羇中百首とてよみ侍し中に

里もなき野原に風のたくへきておほつかなくもうつ衣哉

秋田を

みやこには風のつてにも稀なりし礁の音を枕にそきく

風渡る田面の末に霧晴て稲葉の露に月そうつろふ

吹はとていなはのそよく音もなし風よりしけき露のおもさに

小山田のいなはの露の袖の上にをくとはなけきもりあかす哉

人々に歌よませ侍し次に初紅葉を

今朝みれは紅葉してけり龍田山昨日の雲やしくれ成らん

杜紅葉を

草かくれ野中の杜の薄紅葉そめはしめたる秋の色かな

長月のすゑつかたうつの山路をこえ侍しに名にしおふ秋の山路まことにおもしろう侍しかは

聞しより猶露深しうつの山くれなゐくゝるつたのした道

うつの山秋行人の袖なからしくれてそむるつたの下みち

山さとに侍ける比紅葉をみて

心さしふかき山路のしくれかなそむる紅葉も我のみそ見る

秋霧のたつや錦のぬきをうすみ紅葉みたれて山かせそふく

末の露もとのしつくのあらそひてをくれ先たち染る紅葉は

遠村紅葉をよみ侍し

しくれ行四方の木すゑを見渡は千里にしける錦なりけり

延元五年八月十六日に先帝かくれさせ給ぬるよしほのかにきこえしかともさらに猶まことにもおほえ侍らて日かすを送り侍しにいつかたよりの風のをとつれもおなし悲のこゑにのみきこえしかは一かたに思ひさため侍るにつけてもいとゝ夢の心ちしてさらてたにさひしかりし山の奥のすまゐともゝいかゝとおほつかなけれは長月の末つかた空もれいよりはかきくもりてわれらか中の時雨もひまなかりける比涙の色の紅もおなし千しほにやなと思ひやられしかは秋のもみちとちりぐ\にならぬやうに申さたあるへきよしなと別當資次卿のもとへ申つかはす次に非伊城にありし紅葉を一はつゝみくして

おもふにも猶色あさき紅葉哉そなたの山はいかゝしくるゝ

返し　　資次卿

此秋の涙をそへて時雨にし山はいかなる紅葉とかしる

かくて二三年もすき侍し後九月はかりに新待賢門院いまた准后と申侍し比御廟に御籠ありて御らんせられけるに山の紅葉おもしろかりけれは所からことに

御めひとつにやつしかたくて一葉御文につゝみくせ
らるゝよし仰られしかともひきあけてみ侍しにみえ
さりしかは御返事に申侍し
その山ときくに涙もしくるゝは袖をもみちの色とみよとや
こゝまてもふかはふきこてもみち葉を誘ひ捨ける山風そうき
かやうに申侍て程へて御文の中よりみいたし侍しか
は父のひんきに申侍し
もみち葉に涙をそへて見る色は手折しよりもふかきとをしれ
羇中百首とてよみ侍し中に紅葉
いたつらに紅葉の錦きてみれは家路ならてはかひなかり鬼
山里にかくれ居侍し比秋風やゝ吹て山かつのかきほ
あたり荒行にいとゝ物かなしうおほえ侍しにはひか
かりたる葛のはのをのれひとりとさはくも哀におも
ひしられて
風わたる賤かかきねにはふ葛のくるしや何の恨なるらん
世のうきめ見えぬ山路の葛の風いかにふけはか先うらむ覧
九月九日菊をよみ侍りしに
幾千代も結ひかさねよ秋の露山ちの菊のほしあへぬまて
老せすは猶とりそへむ菊の花千世もとおもふ人のかさしに
菊の露を
あさな〳〵うつろふ菊にをく露も花ゆへにこそ色かはりけれ
野邊の氣色もおもかはりし侍まゝにいとゝさひしき
夕つかた荻すゝきなとやうの草も秋の霜にむすほゝ
れて花かあらぬかとみえまかふにをのつからのこれ
るしをんりむたうの（濃イ）色もむへ山風にのみしほれ
行もあはれにて
なにを世に秋はてぬとて野への草今は限の色とみすらん
暮秋の風をよみ侍し
風はやみ世を今更にくすのはの恨やすらん秋はてぬめり
秋の暮つかた草むらの虫もかれ〳〵に聞えしかは
恨ても鳴ても野への蛬いはんかたなき秋の暮かな
九月盡によみ侍し
人は又けふはかりとや詠むらんうき身はつきぬ秋の思ひな
中院准后よみてみせ侍し歌中におしからぬ我身にか
ふる秋ならはさてくらすへきけふの暮かはとありし
そはに書そへ侍し
なからへん命と身をも頼まねはかへても秋をえこそおしまね
又おしむへきことはりならぬ身を秋のくるゝしもな
とものはかなしきとありしに
身を秋と思ふにいとゝよそならぬけふの別のおしくも有哉
暮秋歌中に
かきりそと思はて過し夕たにたゝやは秋の空はなかめし
けふといへは入相の鐘に木葉ふり秋そはつせの山おろしの風

冬歌

初冬の心をよみ侍ける
神無月しくるゝ空のはれ曇りけふは冬ともさためかねつゝ
越中國にすみて羇中百首よみ侍しに初冬を
都にもしくれやすらんこしちには雪こそ冬のはしめ成けれ
物おもひ侍し比冬のはしめをよめる
昨日まて露にしほれし我袖のいとゝひかたくふる時雨哉
時雨を

てりもせすくもりもはてぬ冬の日の空行雲はらちしくれつゝ

　神無月のはしめつかた山里にうつろひゐてよめる

今よりのあはれをしれははつ時雨ふる程よりもぬるゝ袖哉

さらぬたに照日まれなるおく山の谷のかけ道うちしくれつゝ

　しくるゝ空をみてよめる

誰里もおなししくれのまゝならてなそしも雲のたえ〳〵に行

　冬の夜の夢といふ心をよみ侍し

ね覺して絶々にきく槇の屋の時雨のひまや夢路成らん

　中院准后よみ侍歌中にはれくもる程たにもなく山端の嵐よりふる初時雨かなとありしに

時雨さへ山さととてやかはるらん宮この空は晴まありしを

　又今よりや人めかれなむ草の原霜をきそへて冬はきにけりとありしに

冬はまつかるゝ人めを歎くかなうきみ草葉のなにならね共

　山里にすみ侍しに時雨をきゝて

軒はなるならの葉かしは散ぬれは庭に時雨の音を聞かな

　曉落葉といへるこゝろをよめる

あか月の夢のかよひちたえにき木のはふりしく四方の嵐に

　落葉歌中に

さらてたに夕さひしき風の音に木葉みたるゝ岡のへの里

山ははやのこるこのはもなき物をちるはいつくの紅葉成覽

さと人のもみちふみ分跡もなし猶吹まよふ庭のあらしに

　落葉混雨といへる心を

有明の月はくもらて山おろしに紅葉吹おろす音そしくるゝ

　霜を

わか袖の露より霜となるまゝにはらはてきつる旅衣かな

　ある所にかりねし侍しに風いとさむかりし夜

霜さむき小篠かはらのかり枕ひとよをたにも明しかねつゝ

　信濃國にすみ侍しにさむさなん都にはかはりたへかたくやいかゝはすると人のとふらひ侍しかは

かたしきのとふのすかこもさえ侘て霜こそむすへ夢は結はす

なかめふりぬる前栽の草とも今はそれともみえすなり行もあはれにて

花すゝきなひく葉すゑも霜ふりて我かはあやな袖のさむけさ

けぬかうへに猶をきそへて山かけや夕霜ふかき谷のした草

　寒蘆とてよみ侍し

此暮もしほかせさえてひかたなる蘆の枯葉に霜結ふ也

　冬月を

いかてかははらひもあへむ初霜の置まとはせる袖の月かけ

ふりそむる尾上の雪もみかゝれて友鏡とや月はみるらん

　中院准后よしのにてよみあつめたる詠歌ともとてみせ侍し中にいほりさすやとは深山のかけなれはさむき日ことにふる霰かなと有しそはに書そへ侍し

是よりも吉野の山の山あらしは寒くあらしと思ひやりしを

氷を

にほのうみやこほれる程をかきりにて浦より遠くよする白波

　北野社に百首歌よみて法樂し侍し中に水鳥を

おきへにもよらぬ玉ものとことはにうきてきこゆる水鳥の聲

　池水鳥といへることを

池水の氷や閤と成ぬらんよひ〳〵ことのにほのかよひち

　千鳥を

ふけぬるか佐保の川との清き瀬に月かたふきて千鳥鳴也

越後國寺泊といふ海つらにすみ侍し比夜もすから千
鳥をきゝて
あら磯のほかゆく千鳥さそなけにたちゐも浪の苦しかる覽
千首歌よみて爲定卿のもとへつかはし侍し
濱ちとり心みえなる跡をしも行末迄となにおもふらん
ふみまよふ和歌の浦ちの濱千鳥はかなき跡は浪もけたなん
雪歌中に
昨日よりたなびく雲もはれやらすつきてふるらし嶺の白雪
よそにみしたかねの雲のさえ〳〵て我衣手にふれるしら雪
白妙のをとめの袖とみゆるまて雲のかよひち雪やふるらん
露にみし花こそあらめ霜枯の色も殘らぬ野への白雪
中院准后みせ侍し歌の中に霜枯はさすかに殘る秋の
色を跡みせぬまてふれる雪かなとありしそはにくは
へ侍し
霜枯はなか〳〵つらし行秋の跡ふりかくせ野への白雪
同歌に待人の跡みるまてもつもらねとこゝろ空なる
けさの初雪とありしに
積らぬもよしや歎かしはつ雪にまつとはるへき我身ならねは
雪を
かつらきやたかまの山の空はれて雲ゐにつもる峯のしら雪
ふる雪に尾上の松もうつもれて月みる程の木のまたになし
あまの川こほらぬみおに風さえて雪氣にもたつ雲の浪哉
いにしへのかさしおりけん跡もなし三輪の檜原の雪の明ほの
にほの海のかさしにさせるから崎の松白妙にふれるしら雪
禁中雪といふ心をよみ侍ける
ふるまゝに雪の光もそへてけり玉もてしける九重の庭

東路の旅もおもひ出らるゝ事もや有けん
かきくらす雪にそこえしうつの山うつゝか夢か跡も殘らす
雪かきくれふる日山里成ける人のなとやとはぬと申
をこせ侍しかは申つかはしける
雪ふかきふもとをみてそ歸にし山には道もたえぬと思へは
初雪ふりていとさひしかりし朝よみ侍し
跡つくる人もありやときえもせてけふはまちみよ庭の初雪
山里にかくれ居侍しに
山ふかみふりつむ雪をわくらはにとふ人なくて年そくれぬる
いたつらになかめくらしつ待人のこぬをならひの庭の白雪
今更に何かは跡のまたるらん思ひしことよ庭のしら雪
思ひのほかに柴のとほそを人のとひけれは
さすか又雪にとひきて冬籠思ひもかけぬ跡をみるかな
あやしき山かつのすみかに身をかくし侍し比ゆきい
たうふりて庭の籬もあらはなる心ちし侍しかは
れやかこふ賤か篠かきひまをあらみ所もわかすつもる雪哉
あけそめしねやのひまさへ埋れて猶夜深しとふれるしら雪
信濃國伊那の山里にしは〳〵すみ侍しに雪いみしう
ふりつもりて道行ふりのたよりもたえはてにしかは
稀にまつ都のつてもたえねとや木曾のみさかを雪埋む也
曉の雪深くつもりて群山にみてる色もおもしろく侍
しかはいにしへの園のうちも思ひやられてひきかへ
たるすまゐ我なからあはれに覺侍しかは思ひつゝけ
侍ける
かゝる世のためしもいまた白雪にうつもれやせん園の呉竹
わすれめや都のたきつしら河の名にふりつみし雪の明ほの

其まゝのみやこなりせは庭の雪に厭ふはかりの跡はみてまし
こぬまても雪にそ人はまたれましおなし都の住居なりせは
　夢といひけんなのゝ山里もおもひ出られて
をのつから雪ふみわけてとひこしも都にちかき山路成けり
　ふしきにも又たちかへる世もあらはと　わか心をなく
　さめ侍し次によみける
故郷の庭のしらゆきいたつらにわか歸るさのあとやまつ覽
　年月すみ侍し所を又あくかれ出しに　雪さへふりける
　日よめる
いてゝいなは我跡さへや埋れむ住こし宿の庭のしら雪
　こしの國にすみ侍し比都の人の許へ申遣しける
雪つもるこしのしら山冬深し夢にも誰か思ひをこせん
　かくて猶年をかされし冬の比よみ侍し
何ゆへにゆきみるへくもあらぬ身の越路の冬を三年へぬ覽
　中院准后よみ侍し歌ともの中に故郷のよし野のみゆ
　きふみ分てむかしにかへる跡そ見えけるとありしそ
　はに書そへ侍し
芳野山昔にかへるためしには今のみゆきの跡をたつねん
　おなし歌にふみわけてとふ人あらはふりつもる雪よ
　り深き跡はみてましとありしに
心さしふかくふりつむ雪なれととふへき人のなきそ悲しき
　山ふかくすみ侍し比さらに雪のみふりつみて月日の
　行衛も覺す侍しかは
谷深き雪の埋木まてしはしあはてはつへき春ならなくに
　鷹狩を
まゆみちるあたちの原を踏分て鳥たち尋ぬる野へのかり人
御かりする野守の鏡かけもなしこほれる程や曇るといふ覽
としことにやとをかりはのさゝ枕一夜もさむしあまの川風
　かれこれいさなひて狩にまかりて日暮けれはよみ侍
　し
きゝす鳴かた山かけにうつる日の殘る程とやかりくらす覽
みかりするつかれの鳥のおち草に猶ふみまよふのへのさゝ原
　中院准后みせ侍し歌中にうちむれて猶かりゆかん野
　へとをみくれなは草の枕ゆふともとありしに
野へとをみ歸るさまにも狩ゆかんくれなはなけの草枕かは
　羇中百首歌よみ侍し中に鷹狩とて
日くるれは狩はの小篠枕にて霰玉ちるたひねをそする
　歳暮のこゝろを
おしむからかつそ戀しき行年のことしはこそに成ぬと思へは
かくしつゝとにもかくにも年月の暮るはやすき物にそ有ける
うき身にはやすくも過ぬ月日さへつもれはさすかくるゝ年哉
　つきせぬ身のうれへし侍ける比歳暮といふ題にて
きのふといひけふと暮すも涙にてとまらぬ年を袖にせく哉
徒に過ぬとおもへは思ひいてのなきにつけてもおしむ年哉
おしむにもよらぬ別もある物を何とし月の身につもるらん
　中院准后みせ侍し歌の中になけきつゝ暮ゆくさしを
　世にふれはなをいそくとや人のみる(いふイ)らんとあ
　りしそはにかきそへ侍し
あらたまる春には誰もあふやとてうきにもいそく年の暮哉
　今上いまた吉野行宮にまし〳〵ける比にや　歳暮歌よ
　み侍しに
あしかきの吉野の里の冬こもり難波の春のためしにそまつ

李花集下 宗良親王御集

戀歌

百首歌よみ侍し中に

思ひ侘たかまの山に分きても猶よそにみる峯の白雲

夕くれはまたみぬ人をこふるかな雲のはたてを俤にして

初戀の心をよみ侍し

煙たつになる島守かとまやかたいつよりかくはくゆり染けん

戀百首とてよみ侍し中に

ふしのねやたえぬ思ひの夕煙きえなてさのみ何くゆるらん

中院准后歌みせ侍るとてさりぬへきにはかならすうたをそはによみくはふへきよし申たひたりしに富士のねにまさる思ひのはてそなき戀の煙は空にみえね

ととありし所に

我つゝむ胸のけふりの立出て曇りふたかり空もみえしを

寄山戀を

よそにたにみるへき物をいもせ山隔なはてそ中の川霧

戀百首歌よみ侍し中に

袖にをくならひも今やしらるらん思ひ入野の秋の白露

武蔵野の露分わひし袖ならていつか戀路にしほれきぬ(つイ)らん

羇中百首歌よみ侍し中に戀の心を

これやさは戀路なるらん旅衣露はかりとは見えぬそてかな

しられしなふしのたかねの雲かくれむせふ煙は空にたつ共

信濃國あさまの山ちかきわたりにすみ侍し比

あさましやあさまのたけも近けれは戀の煙も立やそふらん

忍戀とて

から衣むねのあたりにたつ煙末をは富士のたかねともみよ

夜とゝもに胸をそこかす烟たちもゆとはみえぬ思ひなれ共

しのふてふ心のおくのすり衣色こそみえねみたれそめつ(にしイ)ゝ

人のもとへ文つかはし侍し次に

いかにせむ忍ふの浦のもしほ草かきやる浪のひまたにもなし

羇中百首よみ侍し中に戀を

人しれぬ心のおくのしるへには忍ふの里もかくれさりけり

北野宮に百首歌よみて法樂し侍し中に忍戀を

いかにせむ瀧津涙のしからみもかけてせくへき袂ならぬを

忍戀さて

いかてかは尾花か本の草の名の思ひありともほにはいつへき

戀歌よみ侍し中に

今はたゝ袖の涙ももらしてんそをたに人のつらき名たてに

しのふるも猶人しれぬ心哉もらさはかくやくるしかるへき

寄虫戀を

枕にもしらせぬ物を蛬あなかま夜半の聲なとよみそ

忍戀さて

いかにしてこの瀬包まむ涙河うきにはいさゝ名社おしけれ

思はすよしのふにたへぬ我命憂名にかへてなからへんとは

伊勢の海の千尋の底にうちはへてくるとしらすなあまの釣繩

年を經し槇の下葉の露なれはぬれても色にいてぬ成けり

寄琴戀を

しらせはや君かかきなすことの音に松風ならてかよふ心を

人のもとへ申つかはしける

しるしなき心の杉をたよりにて思ひそやりし三輪の山本

尋戀

尋ねつる杉のしるしはかひもなし人の心なまつとしられねは

中院准后みせ侍し歌の中にわきも子か手染の糸のよるへなみこなたかなたにかけて戀つゝとありしそはに

思ふそよこなたかなたにわきもこか手染の糸の色深くのみ

戀歌とて

うきしつむ涙の床のひとりねに枕さためてあかす夜そなき

寄河戀

流れてはふかさそまさる涙河あふ瀬ありやとたのみし物を

中院准后歌に君こふる涙かたしきねてしより枕のしたはふちとなりにきとありしに

流れても我みなかみのなかりせは涙の淵よあせやしなまし

戀歌の中に

戀すとてわれにもあらぬ我心たかため誰を猶しのふらん

寄糸戀とて

いまたにも人の心はしら糸を經てみまほしく何おもふらん

程ちかく侍し人のもとへつかはしける

あしかきのまちかきほとにかつみれとうときは人の心成皃

戀の歌の中に

ぬれてほす袖の涙の露のまも猶きえかへり物を思ふよ

ことはりと思はゝ人もつらからししらはやせめて世々の報を

みさこゐる荒磯浪もかくはかり心ひとつにさはかれやする

古のちぬの丈夫なかりせは戀のためしに我やならまし

をとせさりける人につかはしける

吹風のたよりはありときく物を雲路なれはやふみゝさる覽

片思といふことを人々によませ侍し次に

もろともに思はゝなにか歎へき戀をはかゝるものとしらすや

羇中百首歌よみ侍し中に戀を

へたてこし遠山鳥の獨寢に都をこふるねをのみそなく

寄山鳥戀を

かきりあれは遠山鳥の契たに尾上ひとつのへたてとそ聞

戀百首歌よみ侍し中に

難波かたしほひのありそ尋てもかひこそなけれ袖はぬれつゝ

思ひ川なかるゝ水のあはれともいふ人なしにきえかへりつゝ

つねよりもまさると見しは我袖の涙なりけりよとの澤水

我心つたのほそ江をこく船の君にそよせしうらかくれても

不逢戀とて

よそにのみいはれの池のねぬ繩のねぬなはなとて苦しかる覽

寄夢戀を

ほしやらて猶やかさねん草枕ゆふてはかりの露のぬれきぬ

思ひねの夢はかりこそ海となる枕のしたのみるめなりけれ

寄衣戀を

中にありし夜半の衣のそのまゝに月日重ねて猶へたてつる

戀百首歌よみ侍し中に

人しれぬ心はかりをへたてにてうちとけかたき下ひもの關

おなし世につれなくなからへて侍よしなと人に申つかはす次に

あふまての命と人にしらせはや戀しねとてそつれなかる覽

不逢戀を

涙川なかれて戀んかひもなしつゐにあふせもしらぬ身ならは

後の世に此むくひとてつらからむわか心さへうき契りかな

とへかしなあはての浦にしほたれて年ふる蜑の袖はいかにと

寄鷹戀といへるこゝろを
逢事はかた野の鷹のかたかへりいかゝはすへき戀の繁さを
信濃國伊那と申所に侍て人の許へ申つかはし侍し
山たかみ見つゝわかこしはゝ木々のあはてふせやに迷ころ哉
寄山戀を
かひなしな渡らぬ中を河とみていもせの山に年をのみへは
おもへともつらき人に申つかはし侍し
さりともとたのむ心のうらさへにゐはてはつへき身の契哉
いかにしてゆき逢坂の道なれはまたこえぬまの苦しかる覽
羈中百首歌よみ侍し中に
いさや又しるもしらぬも逢坂の關路ときけはたのまれぬ哉
中院准后みせ侍し歌中に逢坂もこえはこゆへき道なれとつれなき人そ關は守けると有しに
いさや又こゆともこさし逢坂も憂身のための關路なりせは
心地れいならす侍ていとこゝろほそくおほえし比人の許へ申つかはしける
いとせめておしき此世の名殘哉あひみぬさきの別と思へは
ひとをうらみ侘てよみける
うき身先消ましものを行水のあはれとたにも人にきかれは
我はかり先戀しなはこん世にも人をまつまや久しかるへき
戀百首歌よみ侍し中に
沈むへき身をも心に任せねは思ひますたのいけるかひなし
さりともなとかけていひ侍し人の返事に申遣しける
なからへてこれを頼むにかたけれは露の情そいとゝかひなき
中院准后みせ侍し歌の中にいたつらにすくる月日をせめてなとまてとはかりもちきらさりけんとありしに
ありへはと思ふはかりにたのめかしまてと契らぬ月日成共
戀歌の中に
せめて唯身を離れ行我玉もこれなんそれとしられたにせよ
中院准后みせ侍し歌の中にいかにせんみるめは（もイ）からてあま人の浪かけ衣下に朽なはと有しそはに
朽ぬたゝふかき恨にしほたるゝみるめも浪のあまの衣手
又なをさりのことの葉ならはいかにせん命にかけてたのむ契をとありしに
なをさりの契にたにもなれぬれはいふを誠とたのむはかりそ
憑戀といへる心を
たゝ頼めいのちはあすをしらすとも契は世々にくちん物かは
契久戀を
かくはかりたへて有へき命ともしらてや人のため置けん
不逢戀を
ことのはをたのめし程のなくさめも憂になれてはなき契哉
契戀とて
をのつからさはるといひしよな／＼や契し中の誠なりけん
僞も思へはこそは契けめつらくはたゝにやみぬへき世に
先の世の契も猶そたのまれぬいひしまゝなる習ひなけれは
行末をのみたのめ侍ける人の許へ申つかはし侍し
まてといはゝまつへき物か玉のをのみしかき心思たえなて
待戀の歌中に
難波江のあしまをさして行船もさてやはとまるさはり有とて
早き瀨に棹さしとめぬ筏士の猶このくれもすくしてよとや
待空戀といへるこゝろを

槇の戸をさゝてまちつる宵々も誰もる關に又さはるらん

いつよりは猶あやにくに賴まれて更行鐘そうたかはれける

　羇中百首歌よみ侍し中に戀を

誰たかはまつのした根の岩枕行衛をたにも人はとはぬに

　中院准后みせ侍し歌中におもひ侘又や契らん僞もた
　ひかさなれはたのみなけれととありしに

僞のかさなる夜半をかそへてそ猶さりともと人はまたるゝ

　待戀とて

わひつゝもねられぬ月の有明につれなく待し程そしらるゝ

　北野宮に法樂し侍し百首歌中に夢中契戀を

はかなしや我身に糸のよるの夢あふとはすれと現ならねは

　別戀を

面影のともに立いてゝ別れなは何か身にそふ形見ならまし

鳥のねをなにかいひけんあか月のわかれは人のこゝろ也鳬

したひかね別もやらぬ衣々に鳥の八聲をかさねてそきく

何か又い(にイ)けらは後と契なん身にかへてこそおしきわかれを

うねの野のたつの一聲鳴わかれ又もあふみと賴めてそこし

　いかなる夢の名殘にてか有けん人の許へ申遣しける

夢たにも忘れかたみは有物をありし現のさてやゝみなん

　中院准后みせ侍し歌中にそのまゝにたえなはいとゝ
　うかるへき一夜の夢を人にかたるなと有しに

それをたに思ひ出にして忘られぬ一夜の夢を人にかたらん

　戀百首歌よみ侍し中に

これやこのゆめてふ物の行かよふ涙の床のうたゝねのはし

思ふより外なる心かよふらしうちぬる人の夢の枕に

ねてもみえねても忘れぬ面影を夢計にはいかゝなすへき

　かはらしといひしは夢かゆめにてもなとあふことの
　見えすなりぬるととひたりし人の返事に

契しは夢ならはこそ夢にてもせめてみゆやとまとろみもせめ

　祈戀とてよみ侍ける

はかなくそ人の心にまかせけるいのるにたにも難き逢瀬を

我そ祈る人の心のおほぬさたひくてあまたに神はうくなと

千早振神てふ神もうき人のおなし心に成にけるかな

　中院准后の歌の中にことはれよ神々ならはゆふたす
　きかけてちかひしすゑのことのはとありしに

誓ひしも神ことはらはいかにせん人うかれ共思はさりしを

　戀百首歌とてよみ侍し中に顯戀

淚川くゐの八千たひ思へ共なかれし名をはせくかひもなし

　いかなる事にかもれけん人のうらみ侍しかは

はゝそ原かつ散そめし言のはに誰かいはたのをのゝ秋かせ

　顯戀を

思ひわひ我名もよそに立に鳬人のつらさの(をイ)とはすかたりに

憂そとよ浪うつ岸のそなれ松いつのしたねにあらはれぬ覽

はし鷹の野守の鏡くやしくそ戀すさ人にしらせ初けん

　羇中百首歌よみ侍し中に戀を

思ふ人ありといはすはすみた河ことゝふ鳥の名をも賴まし

　歌よみ侍しついてにおなし心を

とはゝやな心のうちも宮こ鳥わかおもふ人の我やおもふさ

　寄笛戀といへる心を

笛竹の一よのふしの遠けれはねもなれかたき物にそ有ける

　物いひ侍し人のさらに又つれなく也侍しかは申つか
　はしける

逢ことにかへんといひし命をや今はたえねと人のまつらん

寄露戀を

あたにのみいはれのゝへのしら露を誰契にかむすひ置けん

うつろはむ物とそたれも白露のことのはことに心なかれし

紅葉のうつろひたるを人のもとへつかはすとて

かはり行ことのはにこそ色みえぬ心の秋も先しられけれ

戀百首の中に

くみてこそ戀るもやすくしられけれ野中の水のもとの心は

うつり行けしきの森の色をみよこは大かたの秋のいろかは

身にそしむいまはの心つくは山みねよりおろす秋の嵐に

なへて世のさか野の秋の風ならは身にしむとても歎かさらまし

わすれ草を一葉つゝみて人のもとへつかはし侍とて

忘らるゝ身をおなし名と思はすはなにか軒はの草もうか覽

戀歌の中に

逢生の庭のかよひち中々にたえははてなてしけるころ哉

もえこかれ螢のもしほ木こりすまに又もなき名をたつ煙哉

うつろふは我身ひとりか玉葛はふ木あまたの色をみせはや

うかりける誰ことのはのかはる覽はては歎きの杜の時雨に

數々にみなうつろはゝいかゝせん信田の杜の千枝の言のは

たのまれぬ人のもさへ申つかはしける

僞のことのはにのみきゝなれて人のまことそなき世成ける

ふるき扇のみえけるにかきてつかはしける

君か手にならす扇やわすらるゝうき身の秋のたくひなる覽

松風のあやしく吹たてゝいと心すこき夕つかた琴の
ねほのかにきこえける所へ申つかはし侍し

今はとて思ひたえにしことのねにたか松風の又かよふらん

寄澤戀を

契しはあさゝは沼の草かくれ影をたに見てたえはてよとや

寄月戀を

思ひいてよかたみはをのか物ならぬ雲ゐのよその山のはの月

人の許よりこよひの月はみるかと申侍し返事に

是ならぬ忘かたみも有物を月はなかめしくもりもそする

中院准后歌みせ侍しにかよひこし人は軒はの夜はの
月たのまぬまつの木のまにそみると有しに

月そすむ人は軒はの木のまにも思ひ出れはたゝまつの風

又うき人はおもひもいてしひとりわか心をやりてみ
つる月かなと有しそはに

わか心たくふとしらは影やとす月さへ人にいとはれやせん

人々に歌よませ侍し次に久戀といへる心を

をのゝえはつれなき中に朽ぬれと猶こりはてぬ我なけき哉

をのつから思ひいつやとまたれつるその年月も今は過にき

命たに猶なからふる物ならは人の心のはてはみてまし

戀百首の中に

年へぬる宇治の橋守なかりせは何をたくひに待わたらまし

みちのくのとつなの橋のくりかへし契し末もたえやしぬ覽

うからまし一夜ふせやの契にてそのはらとたに思ひ出すは

越中國にて羇中百首歌よみ侍しに戀を

今そうきおなし都のうちにては心はかりのへたてなりしを

こしちにはしほのみちひもなき物をいかなる袖の恨なる覽

寄鏡戀とて

なとつらき心のわれにかはるらん人をみる社鏡とおもふに

戀の歌の中に

さすか我心にかなふ物とてや命はかりのうきにたへけん
つらからは誰もさこそと思ふたにおなし心になき契り哉
陸奥のあつさのまゆみたかひけは思はぬかたに心よすらん
朽はてん苔のしたにも露をきて此世なからの袖はかはかし
たよりあらはうらみもやらん水くきの岡の葛はの秋の初風

恨戀を

數々に恨はてゝもから衣涙は袖に猶のこりけり
夫をたに人のつらさになしはてゝ憂身の咎をしられすもか（にイ）な
いかにせむうきを怨むる時たにも猶したはるゝ心よはさを

うらみかねて人に申つかはし侍ける

いかにせんいはれは胸にみつしほの心のうちのからき恨を

恨戀の歌の中に

いまはたゝ涙にかこつ色をみよいひしに勝る言のははなし
人そうき憂は我身の數ならぬ世のならひそと思ひなしても
秋と吹風のやとりはうき人の心なりけり行てうらみん
よしさらは我か人かと辿らせて元の憂身としられすもかな

雜歌

歌よみ侍し次に曉鐘といへる心をよみ侍ける

をはつせの鐘のひゝきそ聞ゆなる伏見の夢のさむる枕に
夢の世に重ねてゆめをみせしとや尾上の鐘のおとろかす覽

曉を

いまはとてたゝよふ嶺の横雲に有明の月もかけまよふなり

中院准后みせ侍し歌の中にね覺して思ふもかなし有明のつれなき物と身こそふりぬれと有しに

同し世に猶有明のつれなくはなれし雲ゐにめくりあはゝや

窓灯を

消殘る窓のともし火そむけてもともにあはれむ人やなか覽

松をよみ侍し

徒に世々（にイ）はふるとも高砂の松はわかこと物はおもはし

中院准后歌にはるかなるさとのつゝきは木かくれてまつの色よりくるゝ山もとと有しそはに書そへ侍し

夕月夜さすかにみれはをかへなる松の葉こしに里も有けり

又見し世こそ猶戀しけれ小倉山かけの庵の庭のまつ風とありしに

むかしみし人はいさとやうらむらんすまて年ふる庭の松風

又みし世にも心かよはゝ武隈の松ふく風のをとつれもかなとありしに

吹風のたよりあれはそ武隈の松とも人の聞わたるらん

又雲のうへのともとおもひし吳竹の　その世にもあらて身こそふりぬれとありしに

雲の上に契やをきし河竹のなかれて末の代をたのめとは

又いにしへの竹の園より家の風吹とし ふかはよゝにかはるなとありしそはに

言のはもしけくなるらし吳竹のそのより風の世々に吹きて

ふるさとの事なと思ひいてられて

行末を契ていてしそのゝ竹よゝはふるともあるしわするな

竹を

憂ふしは茂からてこそなよ（くれイ）竹の代になかゝれと身を思ひしか
今はわか友とたにみす窓の竹むかしなからの色しあへねは
おひかはる竹のふるねそあはれなる世々の昔を聞につけても

和歌會し侍し時山榊を

榊葉の枝さしかはす神かきのみ室の山はときはなるらし

　麓柴とて

さひしくもむすふ麓の庵かなま柴こりたく便はかりに

　簷忍草を

をしなへて昔をしのふ草ならは軒ははかりに何しけるらん

　路芝

ふる郷の道のしは草しはしとて出こしまゝの跡やたえなん

　沼蘆を

あしねはふ玉江の沼の水鳥はしたのかよひもやすからぬ哉

　中院准后みせ侍し歌の中に世間よふるからをのゝいつかさはもとみしまゝにかしは木の杜と有しに

君ひとりふるからをのゝもとかしはもとみし人と頼む斗そ

　伊那にすみ侍し比よみ侍ける

ありとてもあるかひもなき帚木の伏屋にのみや年をへぬ覽

　住侍しあたりの山かつのすまゐもみならはぬことのみおほく侍し中にもこかふわさなんいとむつかしくくはこきたるあたりもまことに所せけに見え侍しかは

厭はしな親のかふこのいふせさもかゝる伏屋の習ひと思へは

　中院准后歌みせ侍し中になけかしな山としたかくなり行もせめて道あるためとおもはゝと有しに

君か代に山とし高くなる人を誰かはよそにあふかさるへき

　又いつかたも道ある御代のちかけれは又もこえなん白河の關とありしそはに

道あれは又もこえなんと誰もみなけに白川の關路まさしき

　名所關を

君か代にあふ坂までといそけとも關の外なる身こそ老ぬれ

あつまちと聞しなこその關をしも我故郷にたれかすへけん

　名所山を

東路やいつれ都のさかひそとはねとしるきあふ坂の山

伊駒山おほえの岸のたかけれはたえすそ雲の浪はかけゝる

　名所野

武藏野の草葉にのみそ喞たるゝ同しゆかりのなきに付ても

　心ほそく覺侍し比ことにたつきなき心ちして讀侍し

武藏野の草のゆかりも遠けれは露消ぬともたれかつけまし

　名所川

今は世にありともいふな名取河その名もつらし瀬々の埋木

最上川しはしはかりと思ふ身をくたしなはてそせゝの稻舟

古は誰も宮こにすみた川われにことゝふともゝあらなん

こゝにのみすみた河原のわたし守都にありし人はあらしな

飛鳥川きのふのふちもけふの瀬も我身ひとつにうき沈みつゝ

　遠江國に侍し比三河國より足助重春しきりにさそひ侍しを猶おもひさためぬよし申つかはして

一すちに思ひさためぬ八橋のくもてに身をもなけく比かな

　ことにふかき山路にひきこもり侍し比よみ侍し

すみなれて人めをたひと思ふたにさひしさたへぬ松の風哉

山深みしはしもかくてありぬやと心みかてら月日をそふる

世のうきにたへぬ心のまゝならは猶山里もすみやうかれん

　中院准后歌みせ侍し中に是もみな忘かたみに成ぬへし思ひの外の柴のかりいほと有しそはに

しかりとて心なとめそ此頃のしはしはかりの柴のいほりに（はイ）

　同歌に山深くむすふ庵もあれぬへし身のうきよりは名所關を

世をなけくまにとありしそはに書くはへ侍し

山深くすむ人さへにいつる社かしこき御代のしるし成けれ

又すみはつる栖ひそかたきうきみにもくみてしられし(るゝイ)山の井の水とありしけにいにしへの白河邊のすみかあはれに思ひ出られてそはに書くはへ侍し

くみてしる君か心のふかけれはすまて出ける山の井の水

又のかるとて庵結ひし山の井のすみはてぬるそけにをろかなるとありしに

山の井も淺かりけりな明らけき御代には更にかくれかもなし

また山里は思ひやるこそさひしけれ すめはこゝろもすまるゝものをとありしに

すめはこそすむともおもへ山里にすまぬ心やすみうかる覽

同歌によそにきゝあらましにせし見よしのゝ岩のかけみちみぬくまそなきとありしそはに

思ひきやつかへなからにみ吉野のおくより奥を尋ぬへしとは

山里にしのひてこもりゐ侍し比 猶みち行ふりのたよりもしけくなと申てふかき山にうつろはせ侍し時よみ侍し

山にても猶うき時のかくれかはありける物を岩のかけみち

人々に歌よませ侍次に山家雲といへる心を

吹拂ふ松の風たになかりせは軒はも雲にうつもれなまし

田家を

春秋の賤かしわさもなれてみつ田面の庵に年をへぬれは

あれにけり小田の假庵すむ人の有をみしたに淋しかりしを

うき世には秋風立ぬおくてもる山田の假寝あはれいつまて

歌よみ侍し次に故郷山を

むかしとてみしも昔に成にけり今はよそなる志賀の山越

吉野にすみ侍し比よみける

みよしのゝふる郷人も君すめは又にきはふる時にあふらし

正平十五年東國の凶徒とも河内國にせめ入て行宮もあやうく聞えしかはなにともしてひとつ所へなと思ひ侍しかともふとはかなひ侍らて心くるしうきゝわたり侍し程ならもとのことくにうちしたかへられてあまさへ御入洛あるへきにて住吉へうつろはせ給程信濃よりとく力をあはせてせめのほるへきよしおほせられしに 秋冬までに成にけれはをそく侍とていつまてかわれのみひとりすみよしのとはぬ恨を君にのこさんと仰られしかは御返事に奏せさせ侍し

わかいそく心をしらはすみよしのまつ久しさを恨さらまし

冬の程は馬のあしなとも 木曾路のこほりになんきなるへきよし申とて

木曾路河あらしにさえて行浪の滯るまをしはしまたなん

羇中百首歌よみ侍し中に

さのみやは身のうき雲のさそはれん人やりならぬ四方の嵐に

おほつかないかなる山そみ吉野の奥たに人のつてはありしを

たちかへり又はみるとも鏡山ありしにもにし年經ぬる身は

日數のみかさなる山のたひ衣あらしも露も袖になれつゝ

東路やさやの中山こえくれはかひのしらねそ雲かくれゆく

その原やふせやの床の露けさにきそのあさ衣ほす隙もなし

徒につなかぬ船のわれよさはいかなるえにか朽んとすらん

湊江やよせてはかへる浪のまにさしをくれしといそく舟人

かち枕夢路はかよふ舟もなしねぬ夜の浪の音はかりして

たひねしてわかるゝ嶺の曉を横雲のみと人やみるらん
つらからぬやとこそなけれ草枕野にも山にも結ひきぬれは
きかさりし嵐をさむみ旅衣こゝのかさねのうちそこひ(ゆかイ)しき
かりの世にかりのやとりを問かねて旅よりたひの身を歎哉
人にわかれける時よめる
露わけぬ人もや袖をぬらすらんとまるは行をおしむ別に
いとひきて侍みちに出てよみ侍し
旅の空うきたつ雲やわれならんみちもやとりも嵐ふく比
露ふかゝりける野にて風さへ身にしみ侍しかは
ほさてねし昨日の露もはらへとや朝たつ風の袖にふく覽
なか月の比一年すみ侍ける所を立出侍とて
時しもあれ秋や別の草枕このたひはたゝ袖そ露けき
雲井はるかに成ぬるかたをかへりみて
いとせめて心もゆかぬ旅なれと日數は跡をへたてつるかな
中院准后みせ侍し歌中に白雲の八重にかさなる山に
たにころもへすしてやつれぬる哉と有しに
おもひやれ年をかさねし旅衣ころもへぬたにやつるゝ物を
旅歌中に
わたつ海とあれにし床のたひ枕わかため拂ふ松の風かは
これよりはむけに都もちかき程なりなと申侍し所に
て思のほかにさはる事ありて その夜しもふるさとも
夢に見えけれは
草枕さすかみやこのちかけれは行てそかへる夢のかよひ路
延元四年の春にや遠江よりはる〳〵のほりて 都へと
心さし侍しも 御かたのいくさやふれにしかは吉野行
宮にまいりてしはらく侍しかとも 猶東のかたにさた
すへき事ありて まかり下へきよし仰られしかはその
秋の比かへりて井伊城にてよみける
なれにけり二たひきても旅衣おなしあつまの嶺の嵐に
かくてしは〳〵すみ侍ける所の柱に書付侍し
あつまやのあさ木の柱かりそめに思ひなからや住なれに劔
あるところの障子にかきつけ侍し
たひ衣へにける年をあはれともなれぬる里の人はしるらん
暮行山路のはる〳〵と心ほそくおほえ侍しに松の一
木たてるも峯の雲ゐにしるくみえける折から哀にて
をちこちのたかねにみゆる一松歸るさまには道しるへせよ
木曾路をとをり侍しにたゝ河音のみたかく岩にむせ
ひて浪の氣色も心ほそう侍しかは
きそち川うつたへ瀬々の浪ならは行めくりても立歸らまし
忍ひて美濃國まてまかりのほり侍しかとも 都へもは
はかりおほく又跡へもかなはぬことなん侍て 犬山と
いひし所よりなるみの浦ちかくいて侍しに山ちには
引かへて海つらの住居もめつらしく覺侍しかは
山ちより磯邊の里にけふはきて浦めつらしきたひ衣かな
佐良科の里にすみ侍しかは月いとおもしろくて秋こ
とにおもひやられしことなと思ひ出られけれは
諸共にをはすて山をこえぬとは都にかたれさらしなの月
中院准后よみ侍し歌中に 常陸國にてのうたにてや有
けん都にて月まつとせし山のはゝいく重こえてもか
はらさりけりとありしそはに
つくは山かけしけゝれは東路の道のはてまて月やまつらん
又露にぬれ霧にしほれて 足引の山分衣ほすひまもな

しとありしに
分てみぬ山路の袖の露ならはほさぬと聞もゆかしからまし
又草枕たひといふへき程もなし十とせあまりををくりむかへてとありしそはに
すめは又いつくも君か都にてたひとは誰もおもはさらなん
旅歌中に
立田山夕つけ鳥も聲す也夜半にこえつる道やはるけき
ありま山ゐなの篠原行暮て一よのやとに嵐ふくなり
なるみをとをり侍しに折ふししほさしてこゝをはいかかなと人の申侍しかは
なるみかたしほのみちひのたひ毎に道ふみかふる浦の旅人
海路の心をよみ侍し
暮行はうらこく船の湊人に夕波たちてしほかせそふく
延元四年の秋の比にや伊勢より船にのりて遠江へ心さし侍しに天龍のなたとかやにて浪風なへてならすあらく成て二三日まておきにたゝよひ侍しに友なる船ともみなこゝかしこにてしつみ侍しにからうしてしろわの湊といふ所へ浪にうちあけられてわれにもあらす船さしよせ侍しに夜もすから波にしほれていとたへかたかりしかは
いかてほす物ともしらすとまやかた片敷く袖のよるの浦浪
旅の歌とてよみ侍し
秋風の吹にし日よりかそふれは關よりおくも道そはるけき
中院准后みせ侍し歌の中に行さきは夢にもみえすふる郷にかへる心そ身にはそひけると有しそはに
夢たにも人にしられはよるは行ひるはかへるとみえまし物を

いみしうおそろしき山中にまとひて夜もすからつかれ侍けるにや松風にもさはらすうちまとろみしに昔の御面影夢にみえけれは驚て思ひつゝけ侍し
ひとり行旅の空にもたらちねの遠きまもりを猶たのむかな
芳野の行宮を他所にうつさるゝよしきこえしかは先朝の御なこりも猶遠さかる心地していかなることにかなとさま〳〵なけき申侍しついてに
たらちねの守をそふるみ吉野の山をはいつち立はなるらん
御返し
ふる郷となりにし山は出ぬれとおやのまもりは猶もある覽
とにかくに旅のうさも一かたならすおほえ侍し頃
旅の空なにか戀しき故郷はすみうくてのみあくかれし身に
興國三年越中國名古といふ浦に忍てすみ侍し頃都へ行人のありし便宜にやよひの比にや爲定卿のもとへ申つかはし侍し
いたつらに行ては歸る鴈はあれと都の人のことつてもなし
今は又とひくる人もなこの浦にしほたれて住あまとしら南
返し
ねになけはそれとはきかて行鴈にことつてなしと何思ふ覽
あゆの風はや吹かへせなこのあまのしほたれ衣うらみ殘さて
信濃國伊那と申山里にとしへて住侍しかは今はいつかたの音信もたえはてゝ同世にありともきかれはやなとおほえし比よみ侍ける
我を世にありやととはゝしなのなるいなとこたへよ嶺の松風
月日のひかりはかりは見し世なからのおなし空とおほえ侍けれは

たのむそよ照行空の月も日も我みそなはせ光けなくに
　嵐にまよふ浮雲も我身のよそならす覺侍しかは
吹はらふ嵐をいたみ中空にうき立雲は我身成けり
　大河原と申侍し山の奥をも又立いて侍しに行末もい
かかなと申て香坂高宗なとしきりにとゝめ侍しを猶
ふりすてゝ出侍しにそなたとおもひしかたも又さう
ゐする事ありしかは中空にたゝよひし比よみ侍し
暫したに吹ぬまもかな風の上に立ちりの身のありか定めん
　さのみかくわれにもあらすあくかれゆく身のしき（をイ）な
けき侍けるころ月を見て
月も又同し空をそ行めくるさのみや旅のやとをとふへき
　駿河國貞長か許に興良親王あるよし聞てしはしたち
より侍しに富士の煙もやとのあさけに立ならふ心ち
してまことにめつらしけなきやらなれと都の人はい
かに見はやしなましとまつ思ひいてらるれは山の姿
なとゑにかきて爲定卿の許へつかはすとて
みせはやなかたらはさらにことのはも及はぬふしの高ね成鬼
返し
思ひやるかたさへそなき言のはの及はぬふしと聞につけても
　同比忠雲僧正かもとよりいかにもしてくたりてひな
のすまゐみるへきよし申をこせたりしかともむなし
く月日すくし侍しかは申つかはしける
淸見かた浪の關守ひまもあらはまつとはつけよみほの浦風
　かくて又の年の半まてすみ侍しかともさすか又我世
へぬへき所にもあらねはこゝをも立出侍らんとせし
に狩野介貞長なとやうのものとも夜もすから名殘お
しみてさかつきたひ／＼めくり侍し程過こしかた猶
行末の事まて二心なきことなと申あつめつゝはては
ゑひなきなとせしかはいつの程よりのなしみにかと
あはれに覺えて出さまにそこのかへに書をきし
身をいかにするかの海の沖の浪よるへなしとて立はなれなは
　かしこをは夜ふかく出侍ておきつといふ所は曙かた
に成ぬるに霧もたえ／＼に成てゆたゝ見えたるいほ
さきの松原はさなから海の上にのこれり吹はらふ風
のけはひもすさましきにいつて船のはやく過るも波
の關守にはよらぬかと見ゆ月は有明なれはあくるも
しらすおもしろくすみわたりて一かたならすみすて
かたけれはせきのとにしはしたゝすみ侍しに袖のう
ら風秋の夕よりも身にしむ心ちせしかは
東路のすゑまてゆかぬいほさきの淸見か關も秋風そ吹
　うきしまか原をとをりて車かへしといひし所より甲
斐國に入て信濃へと心さし侍しにさなから富士の麓
を行めくり侍しかは山の姿いつかたよりもおなしや
うに見えて誠にたくひなしすそのゝ秋のけしきまめ
やかに心こと葉もをよひかたくおほえ侍て
北になし南になしてけふいくかふしの麓をめくりきぬらん（行めくるらん新葉）
　甲斐國しらすといふ所の松原のかけにしはしやすら
ひて
假初の行かひちとは聞しかといさやしらすのまつ人もなし
　信濃國に行つきぬれはをくりのもの返し侍し次にす
るかなりし人のもとへ申つかはし侍し
富士のねの煙を見ても君とへよ淺間のたけはいかゝもゆると

百首のうたよみて北野宮に法樂し侍し中に述懐の心
を
心こそ猶立かへれ年をふる日なのなかちに物わすれせて
中院准后よみて見せ侍し歌の中にあつめこし雪も螢
も年をへて消ぬはかりの身そ殘りけるとありしそは
に書加侍ける
くもりなき御世をも人はあつめこし雪と螢の光とそみむ
又かたいとのみたれたる世を手にかけてくるしきも
のは我身なりけりとありしそはに
苦しとも思はさらなんかた糸の亂はつへき世にしあらねは
同歌にいかにせんわかみおいその杜の露なをいたつ
らに袖をぬらさはと有しに
いかにせむ人もおいそのもりの影たのむ我身の袖の露けさ
又身のうさはさもあらはあれおさまれる世をみるま
ての命ともかなとありしに
身のうさにたへても御世のまたれける心なかさや命成覽
歌よみ侍し次に寄關述懐を
あらましのそのまゝにてもとをらぬは心の末や關路なる覽
戰場に出侍し道すからいさみあるへき事なと つはも
のともにいひふくめ侍し次に思ひつゝけ侍し
君かため世のため何かおしからんすてゝかひある命なりせは
遠國に久しく住侍て今は都の手ふりもわすれはてぬ
るのみならすひたすら弓馬の道にのみたつさはり侍
て征夷將軍の宣旨など給りしも我なからふしきにお
ほえ侍けれは歌よみ侍し次に
思ひきや手もふれさりし梓弓おきふし我身なれん物とは

千首歌かきあつめて爲定卿のもとへつかはし侍し次
に贈三品（爲子）のをよはぬ跡をもたえしとて此道の心
さしふかきことなと申つかはし侍しに
（頭註）贈從三位爲子。爲世卿女。爲定卿叔母。後醍醐帝妃。宗良親王母儀。
散はてしはゝその杜の名殘そとしらるはかりの言のはも哉
同千首歌の中によみくはへてつかはし侍し
をのつから玉やましると和歌の浦のま砂の數をよみ盡しつる
同千首の歌のつゝみ紙にかきつけける
山ふかみかけの朽木と成ぬれは言のはさへに色なかりけり
返し
あたならぬことはの花の色にこそ朽はつましき杣をもしれ
興國の比旅の歌とも書あつめてつかはし侍とて
うき身には思ひすてなて敷嶋の猶みちしたふ程のはかなさ
返し　爲定卿
敷嶋の道しあらはとたのむ世をはかなき跡と思はさらなん
續後拾遺撰侍し比立親王以前名字なとなんきに侍て
思ひの外に作者にもくはゝり侍らさりしに今度風雅
集とかや撰はるゝよしきこえしかとも今は又身のよ
そに覺侍しにあらぬさまなる撰者ともにて爲定卿は
もれ侍ぬるなときくさへ此道もなく成ぬる心ちして
なけかしくおほえしかは歌つかはし侍し次に
いかなれは身はしもならぬ言のはの埋れてのみ聞えさる覽
此度はかきもらすとももしほ草中々わかのうらみとはせし
うれふる事侍し比村鳥のたつをみてよみ侍し
うらやまし芦まにすたく村鳥の飛たつはかり何おもふらん
述懐のうたよみ侍し中に

いとゝ憂身社しらるれ沖津浪人につくまのえにしよる世は
都をいてゝのちは時のまもやすき心ちなく侍て
世の中の浪のさはきにこきいてし蜑の小船そよる方もなき
いかなるおりにかありけん人のもとへ申つかはし侍し
末つゐにかくうからめや梓弓人しひきのゝつゝら成せは
都の外に身をはふらかしはてぬるなめりと おもふにも昔の蟬丸かためしなとまておもひつらねて
古のわらやもみやも猶ちかしいつれの關に名をとゝめまし
いとわひてうみつらにすみける比よみ侍し
よしさらは斯てありその浪による浦の藻屑と身をやなさまし
信濃國大河原といふ深山に籠て 年月をのみ送侍しにさらにいつとまつへき期もなければ 香坂高宗なとか朝夕の霜雪を拂ふ忠節もそのあとかたなからん事さへかたはらいたく思ひつゝけられて
いはて思ふ谷の心もくるしきは身をむもれ木とすくす成鳬
人のもとへ申つかはしける
さそふ水なきにもいとゝ數ならぬ身を浮草のねこそなかるれ
おほえすして過し侍ける月日をかそへても今更身のうきふしのみつもりければ
我身さてかゝらんとてそせめきけんけにうき物は月日成鳬
正平三年の比よみ侍し
歎きこし十年あまりの世中を夢になしつゝさめてましかは
秋のはしめつかた住吉の行宮より御をとつれありしにことしはさりともなと おほしめされなからも今日まてに成ぬることどよとて
徒にことしもなかは過にけり我あふことはいつをかきりそ
とおほせことありし御返事に
けふ〱と先急かれていたつらになかは過ぬる年を覺えす
御子左大納言(爲定)の宿所を此比は尊氏卿うつろひ侍て昔の跡をさへたちわかれて今は身をかくすへきかたもなくまよひいてたるやうにて あすをもしりかたく心ほそきにも今一たひのたのみは思ひすてかたき世にてなとさま〱申し侍し文のおくに いとゝ身のをき所なくなりしよりまちこそわふれたのむかけとてとありしいとあはれに 侍し又のひんきに申つかはし侍し
袖濡す露なけかめやたのまれし昔なからの木かけなりせは
〔頭註〕爲定。爲道朝臣男。爲世卿孫。
住吉殿よりひんきありしに 北山太政大臣の許より思ひなから久しくとはぬと心よりほかなるよし申されし次にをろかならすかよはし侍し心のうちも 昔に露かはらぬなとありて おくに日にむかひ月にわすれぬ心をはたゝ中空におもひやらなんとありし返事に
思ひあかしなけきてくらす心をは月日もしらぬ時やある覧
あさからす申かはし侍し友たちも 今はよそにのみきき侍しかは
いにしへの人の心を今みてそ我身のかはる程もしらるゝ
述懷歌の中に
さすか世の憂を歎かぬ人よりはしりかほにしてぬるゝ袖哉
浦にすみ侍し比行衛もしらぬおき中に 舟のうかへるをみてよみ侍し

世を海の波にうかへる蜑小舟よるへあれはそさして行らん

寄瀬述懐を

淵はせになると聞にもあすか川沈むうき身の果そゆかしき

寄川述懐とて

芳野川よしやと物を思はすはなかれて世にもあられたにせし

寄江述懐とて

うき沈むにほのうきすも難波江の蘆の此世ははなれさり鳧

寄沼述懐

山ふかみ人たにしらぬ沼水のみくさかくれもすみかたの世や

年月すみ侍し山里を立はなれてもたゝかはらぬ世のうさのみなけかれしかは

宿かへて猶世の中はこゝろみついつくもすめはつらき成鳧

世中うきつらきあはれなる事のみきこえ侍りて 身の上にもありぬへき心ちし侍し比

かくてこそうきもなくさむ世間をさためなしとはなに歎覽

御子左大納言いまた中納言ときこえし比 あはれなるよの中の事とも申をこせ侍し次に 法印俊慶さへなく成ぬるよしなといひて 思へたゝ花咲春を待かねてつらなる枝のかれし歎をうたてなと 我もあるにはあらぬ世にはかなき夢をかさねきぬらんと申侍し返事に

つらなりし枝もあらはと思ひいてゝ花咲春は猶やなけかん

よそに猶はかなき夢をみるほとそうつゝの我もある心ちする

同法印かことを四條一品隆資卿申をこせ侍し 文のおくに

いつまてと身をたのみてか聞たひによその哀と猶思ふらん

かへし

いつまてと身を思ふにそよそにきく人の哀も悲しかりける

山里にすみなからも今は限の妻木のたよりも 思ひきられすや侍けむ

うき世かなつらき身かなと恨てもさて又なにゝとまる心そ

いつかたの風のたよりもたえはてゝおほつかなう侍折ふし住吉殿より御使ありて この程うちつゝき御惱にて御心くるしかりつるやうなとおほせられし御文にめくりあはんかきりそ しらぬ命たにあらはとたのむほとのはかなさと有し御返事に

めくりあはむ憑あるへき君か代に獨老ぬる身をいかにせん

御子左大納言の許よりつねに世中のあるかひなき事をのみ申なからさま〲に賴みをくへき行すゑのあらましことなんまつ事にて あかしくらすよしたのもしけにのみ申侍しか かきたへをとつれなくておほつかなく侍しに さまなとかへてゆゝしくいたはりけるよし聞しかはわさと人をつかはしける次になにとてかくはなと申侍とて

ゆく末を猶もたのまてさのみなと世をうき物と恨はつらん

返し

かくてこそ猶行末もたのまるれ今更世をは何かいとはむ

野への煙のたつをみてよみ侍し

なひくかたわきてやあらん夕煙いつくの空に立消ぬらん

先帝(後醍醐)崩御の後はいとゝよしのゝ奥のおなしかさしもゆかしう思やられ侍しかとも今はそれも又何のかひあるへきなとさま〲に歎かれ侍てよみ侍し

たくれしと思ひし道もかひなきは此世の外のみよしのゝ山

中院准后みせ侍し歌の中に　尋入ひとも嵐の山なれや
麓の鐘の聲そきこゆるとありしそはに
かひなしな見し世のまゝに嵐山麓のかねはなをひゝくとも
又いかにせん春のみ山のむかしより雲ゐまてみし世
のこひしさをとありしに
古の春のみやまを雲ゐまて見し人さへになつかしきかな
寢覺懷舊といへる心を人々によませ侍し次に
いかはかり秋のね覺のなかけれは思ひのこさぬ昔なるらん
おもひねにや有けんさなから見し世の事のみ夢に見
えけれはあしたにおきてよみける
人しれすこふるにしるしある物は昔をみする夢路成けり
ぬれは夢さむれはうつゝとにかくに昔わするゝ時のまもなし
懷舊の歌中に
憂事も昔になれは忍ふかと今より後そ思ひしるへき
見し人のあらましかはと忍ふ哉世にたつきなくなるにつけても
なけかしな忍ふはかりの思ひ出は身の昔にも有しもの也
老後懷舊といへる心をよみ侍ける
おいらくのいとふにたにもくる物を昔はなとて遠さかる覽
夢のうたの中に
うつゝ社夢と思ふにぬるが中の猶はかなきを何にたとへん
それとたに思ふこととてみる夢をなにさますらん庭の松風
無常歌とてよみ侍し
程もなくひま行駒は過ぬへし何にかしはし命つなかん
寄露無常
消返りはかなきうへの道芝に幾度露の身をやとすらん
寄霜無常
露の身を蓬か霜にをきかへて草葉の宿を枯はてよとや
中院准后みせ侍し歌の中に思へたゝ草のうへなる露
のみの消やらぬまもあるは有かはと有しそはに書加
し
あれはある露の身とのみ頼まれて消へき事をしらぬはかなさ
又なけゝとて老の身をこそのこしけめ有はかすかす
あらすなる世にとありしそはに
みし人のなきはなへての世成覺いきて我身のあるは有かは
正平十五年三月十四日御子左大納言入道(爲定)身まか
りけるよしきこえしかはあはれともなか〳〵言のは
もなき心ちし侍て月日をのみなけきくらし侍し程に
宮こへ便宜ありしかは哀傷五十首歌よみて爲遠朝臣
(爲定嫡男)のもとへつかはし侍し
いつしかと春くる空のうす霞消し煙のおもかけにたつ
鶯と啼てそわふる今は我ふるすにのこる人もなき世に
いささらは梅の花植ん我宿になき人のかやいつもとまると
春ののにあかりておつる夕雲雀かすみし空の行衛しらせよ
立のほる霞の雲となりしより春のなかめの袖そしほるゝ
又もこん秋をもまたは行かりにたくひしらるゝ別ならまし
今そしる風も吹あへぬ程なれや花にさきたつ人の命は
花たにもちらてのとけき春風にいかてか消し峯の白雲
あかて散花のまきれに別にし人をはいつの春か又みん
いかはかりことしは春のおしみけんおしみ馴にし人の別を
墨染の色にやかへしけふことに花の袂はぬき捨しかと
めつらしきこゑとや思ふ郭公我啼ふるす袖をみせはや
人なくていくかもあらねと五月雨の降ぬる宿と聞そ悲しき

みしか夜の空行月の雲かくれ又みることのなきそ悲しき
露やとる池の蓮の花の上にきえにし人を祈をく哉
今よりは人なき宿そあはれなるたゝく水雞を聞につけても
氷室山のこるこほりも有物をやすく消にし人そあたなる
さらぬたに昔忘れぬ故郷に猶おとろかす萩のうはかせ
ありし人なきや戀しき七夕のこそのこよひを思やりつゝ
露深き小萩か花のさかりかなもとのふる枝を聞につけても
ふる郷の一村すゝき秋にあはゝ哀忍へと植やをきけむ
鴈かねは啼てきぬれと春霞かすみていにし人はかへらす
常にてる月も涙にかきくもりやみにふるよのおほくも有哉
みし人のなきを忍ひて月たにも今年の秋はくもりかほなる
今は世にありともしらぬ面影を月は何とてさそひきぬらん
歸るへき別ならねとふる郷は人まつむしのねにやなかまし
哀さはなへての空となくさめし秋にもけふは猶やこふらん
此ころはふらねとぬるゝ我袖に思ひとかめぬはつしくれ哉
神無月しくれとふりし言のはを猶このもとに尋ねてやみん
老ぬれは殘らぬ物とおほあらきの杜の下草かれやはてけむ
和歌の浦に友なき千鳥をくれゐて獨なくねを誰にきかせん
降積るゆきみるへくもなき人の跡をも今朝は思ひやりつゝ
とはれしを思ひ出てそしら雪のふりにし人はいとゝ戀しき
さ夜深きねやの埋火かくてたにせめて有世と思はましかは
別路にありといふなるしての山こえてかへらぬ旅そ悲しき
さはかりにつらき別をみつせ河かはとみなからなとか歸らぬ
けふ別あすはと人を思ふたにみぬまは袖のかはくものかは
いきうしといひても歸る道ならはこぬをつらしと恨社せめ
なきや夢ありしやゆめとたとる哉面かけのこる夜半の枕に
あるか上にあるを思ひし人の世になきか内にもなきそ悲しき
又も見ん賴みやありし同世はさかひはるかにへたてしか共
有をたにみさりし旅の恨こそなきにつけても猶かなしけれ
みし人は皆先たてつ今はわかあすのあはれよ誰にとはれむ
ありし時戀しかりしにくらふれは猶もなけかぬわか心かな
しられしな別れし後の六の道行めくりてはあふ瀬有とも
思ふ人なしとはきゝつ都鳥今はなにてふことかとふへき
しるへせし人にをくれて敷嶋の道にはひとり我やまよはん
はかなしな(やイ)今はかきをくうたかた〻誰かはみつの哀ともみむ
たまひろふ事もあらはと和歌の浦に賴む心の今ははかなき
我みちのたえぬときけはなき跡のかなしき中に猶そ悲しき

このかへしとおほえて　爲遠朝臣

言のはにかゝるさへこそ悲しけれ消てはかなき露の名殘は

神祇歌とてよみ侍ける

君か代をたえせすてらせいすゝ河我はみくつと沈みはつ共
代々かけて思ふも久し神風やいすゝの河のすゑのしらなみ

中院准后よみて見せ侍し歌の中に我上に月日はてらせ神ち山あふく心にわたくしはなしと有しそはに書加侍し

くもりなき月日もさそな神ち山あふく心を先てらすらん

石清水を

いはし水にこりにしまぬ心をは神そあはれと照しみるらん
たのもしな神もさこそは石清水人のひとゝは思はさるらん

中院准后みせ侍し歌の中に石清水清きなかれを憑よりにこらしとこそ思ひそめしかとありしに

石清水なかれにこらぬわか人の心をかみもあはれとそ見ん

賀茂を

そのかみに祈りし末のいかなれはかけはなる覽かもの河浪

春日を

あまの原はるかにあふく心をは三笠の山のかみもしるらん

日吉を

いつくにも照す日吉の影なれとあらたにすむはひえの山本

から崎の松にかけてもさゝ浪の立かへるへき世をいのる哉

やはらくる光なれともくもらぬは猶もひよしの光なりけり

興國三年越中國にすみ侍し比羇中百首よみ侍ける歌の中に神祇を

かそふれは七とせもへぬ頼みこしなゝの社のかけをはなれて

住吉を

我みちを思ふ心のふかけれはわきてそあふくすみよしの神

祇園を

忘るなよそのしら河の神かきになれし斗りを頼みにそする

稻荷を

稻荷山いのりしことのしるしもやかつ／＼みつの社なる覽

北野社に法樂せし百首歌中に

いつはりのなき世なれはや跡たれてあら人神も君まもる覽

諏訪宮に法樂せし百首歌中に

あらたなるすはの祭の御狩人しかもありける神のちかひか

すはの海や氷を踏て渡る世も神しまもらはあやしからめや

神祇歌よみ侍し中に

すはの海やみきはの氷ふみ分て神も道ある世にはまよはす

中院准后よしのにてよみ侍歌ともみせ侍し中に萬代と聲きこゆ也みよしのゝ山やよはひをよはふなるらんさありしそはに

万代とよはふる聲はみよしのゝ吉野の山の神のつけかも

羇中百首中に釋教の心を

ちかひあらははやこきよせよ渡し船憂世の岸に浪(はイ)たかく共

中院准后歌に釋教とていつかさはうつゝなるへきねてもみえねぬにも見ゆる夢の世中と有しそはに書てつかはし侍し

世中は夢もうつゝもなき物をおきてもねても何思ふらん

釋教歌中に

なにとかくはしめもしらすはてもなき心ひとつの迷ひ成覽

よしあしを我心より分かねてなにはの事もさはりかほなる

をろかにや心ひとつに歎けむうきもつらきもなかりける世を

譬喩品を

小車のみつの御法をしるへにてうき世の門はいてやしぬ覽

千首歌よみ侍し時法華經の品々をよみけるに序品人於二深山一思二惟佛道一

山ふかく尋入てそまかひなき佛の道はしるへかりける

方便品共智慧門難レ解難レ入

入かたき草のとさしも秋かせの吹はらふにそ月はすみける

化城喩品故以二方便一權化比城

かりそめに草の庵を結はすははるけきのへにいかて行まし

五百弟子品不レ覺內衣裏有二無價寶珠一

いにしへもかけし衣の珠なれとうらめつらしくいま思ふ哉

提婆品皆遙見レ彼龍女成佛

渡津海のあしまの波をわけきても五のさはりなきそ嬉しき

囑累品如二世尊勅一當二具奉行一

末の世を思ふ佛の勅なれはわれらかためそいともかしこき

勸發品(即往二兜率天上一)

のほるへき雲の上そと思ふよりかねて心の空になるかな

心經を

花の色はむなしき枝に消はてゝ染し心の跡たにもなし

十如是の心をよみ侍し如是躰

みかくなる玉のかたちの淸けれは光もよそにうつる成けり

如是果

昔より御法のたねをまきてこそ今も佛の身とはなるらめ

如是夜(章イ)

いにしへの昔の席を引かへて花のうてなに身をやとすかな

如是本末究竟等

あつさ弓ひけは本末ひとつにて今も昔に又かへるなり

方等經の心を

色もかもしらぬ憂身をよそにしていかなる袖に花はちる覽

十界歌とてよみ侍し中に地獄界

かりそめに身をやくたにも有物を消ぬほのほと聞そ悲しき

修羅界

わたつ海の底まて浪やさはく覽はけしくおろす峯の嵐に

聲聞界

のこりなく鹿なく野への秋霧に鷲のたかねの月もはれけり

空蟬のからたにとめぬ木の木になにを有とか世をは頼まむ

緣覺界

なかめつる花も紅葉も散はてゝ心の色そ今はむなしき

花のちり木のはのおつる山風を厭はてみるやさとりなる覽

祝の心をよみ侍ける

うちはへて春とやいはん今よりはのとけかるへき御代の光を

この比はのとけかるらし嘀田鶴も雲ゐにかへる聲きこゆ也

寄星祝

まつり事おさまれる世の雲井にはほしの位もたかはさり鳧

寄郡祝を

名にたてる鶴の郡の民なれは千世のみつきもたえせさり鳧

寄都祝を

吹風の枝をならさぬ御世にこそ花の都はしつかなりけれ

歌よみ侍し次に祝言とて

敷嶋ややまさしまねのはしめより今迄たえぬ道はこの道

年を經し澤邊のつるも今よりや雲ゐをさして鳴わたるらん

羇中百首歌に祝をよみ侍し

君か代にあふ坂山の關ならはなとか都にかへらさるへき

寄天祝を

久かたの月日のかけもくもらねは空にしらるゝ君か御代哉

東夷を征すへき將軍の宣旨を下されて東山東海のほとりに籌策をめくらし侍ひまに題をさくりて歌よみ侍とて寄海祝を

四方の海の中にもわきてしつかなれ我おさむへき浦の波風

建德二年九月廿日鎭西より便宜に中務卿親王(懷良)

日にそへて遁れんとのみ思ふ身にいとゝ憂世の事しけき哉

しるやいかによを秋風の吹からに露もとまらぬわか心かな

同年十二月到來して後に便宜にかくそ申つかはし侍し

とにかくに道ある君か御世ならはことしけく共誰かまとはむ

草も木もなひくとそきくこのころのよを秋風と歎かさら南

此本書　先師兵部卿師成親王（出家號惠梵）筆跡也。敎弘相傳之。

時享德改元仲冬廿日　　多々良朝臣判

右以二本阿本一書二寫之一。但彼寫本於二防州一大内文籠之抄物取出之次。卒爾令二借用一半日馳筆之間落書等多之。猶重而以二證本一可レ加二挍合一者也。

于時享祿四曆極月廿七日　　兵部少輔中原遠忠

右李花集二卷以成嶋和鼎横田茂語藏本挍合畢

群書類従巻第二百三十二

和歌部八十七　家集五

西宮左大臣御集

をんなに
すまの蜑のうら漕舟の跡もなくみぬ人戀る我やなになる
笛を人のもとにをかせ玉ふとて
笛竹のもとの古音は變る共をのか世々にはならすもあら南
小野宮の中君にいと久しく聞え玉はて
さりともと思ふ心にひかされていまゝて世にもふる我身哉
御返し
頼むるに命ののふる物ならは千歳もかくてあらむとや思ふ
九條殿(師輔)三の宮に聞え玉ふ
年月は我身にそへて過ぬれとおもふ心のゆかすも有哉
かへし
もろともに哀といはすは人しれぬとはす語を君のみやせん
たねしあらは岩根の松と聞しかは心にのみそ委せさりける
返し
朽かたき物とこそきけときかへて常盤の松と成にける哉
夢にたにみぬものからに暮かたき春の日をのみ眺めつゝる哉
常夏にわひしき物は色ふかく思ひそめたる心なりけり
五月雨のなかめにぬれて郭公ことしさへにやふる聲をせん
現にもあらぬ事こそかたからめ夢斗りたにみつといはれむ
御かへし
見つとたに言へきかたもおもほえす現も夢に我はみえねは
小野の宮の中君に聞え給ふ
露はかり頼む心はなけれとも誰にかゝれる我ならなくに
かへし
はかりなき草葉をみつゝ白露のかゝること社あはれ成けれ
又かへし
はかなから草としりせは白露のかゝる事をそしらすそあらまし
よそにのみあるそ侘しき久方の天津空にもすまぬものから
我ひとり思へはくるし限なき心はかりをわきてしらせん
人やりにあらぬものから恨むるも身の理と思ひしらすや
わひはてゝやみもしぬへきよそにのみ難面中をきくの白露
かくしつゝ月日を經ぬる世中に有かたき身を我いかにせん
明暮に思ふ心をうつゝにも夢にもみぬはたかつらき也
日をこそは長きものとは思ひつれ月のほとたに暮かたき哉
またなしとこたふ計りそ今はたゝ誰にもとはて我に問かし
限なく燃る思ひの中にたにみえもせなくにわれいかにせむ

おもひこかれし夏むしの（首尾欠）

世中にときを待つるかひもなく夢にたにやはみえしらす覽

をきところ有ともみえぬ露にのみ思ひけちても長閑成かな

人しれぬ我そ侘しき白露のいとゝ心に消んとやする

ひかりまつ下にかゝれる露の命消はてねとや春のつれなき

鶯の木つたふ花にふみつけし跡の見えぬをいかて尋ん

歎つゝ忍ふることのくるしきにいひても物をおもふころ哉

山彦のこたふる聲や聞ゆらんなかめしほとに春はきにけり

もろともにみん人もかな獨のみをれはかひなき常夏の花

限りなく深き心もかくしあらはあさましくやは思ひたえ南

いとふてふ言の葉をたに露はかりみまくほしきや何の心そ

水莖のあとをし君にまかすれはゆかぬ心もあらしとそ思ふ

返し

あたならむ人の心を水莖のせきとめはてすなかれましやは

はつ雁のはつかに聞しことつても雲路にたえてわふる頃哉

いとふてふ言の葉ならは年をへて秋を何しか色のみつらん

神無月時雨とのみや思ふらん天津空にてこふる泪を

空にもや人は知らん夜とゝもにあまつ雲ゐを詠くらせは

打侘て啼音にかへは山彦のこたへぬ空はあらしとそ思ふ

秋の田のほのかに人を哀ともいはてにかけてやまんとやする

時雨にも雨にもあてしいたつらに年のふるにそ袖はぬれける

秋の夜の月の光にあらねともあけてはおとる物にそ有ける

年をへてこりぬ思ひの甲斐もなし心みかてら厭ふと思へは

春をたにいつしかとのみ思ひけんまつ鶯の聲もせなくに

かへし

なかゝらむ心みえにもかくはかり長閑き春の名をたつる哉

人しれす君によそへて梅の花おりみる程に袖そ濡ぬる

ぬるゝほと露ならなくにから衣はかなき名をも殘すなる哉

打忍ひなくとせしかと君こふる涙はいろに出にけるかな

昔人のいひふるしてしことなれと此五月雨はあやしかり覓

かへし

いひふるす人たになくは打つけに思はぬ事も言すはあらまし

かへし

ふりにける事の厭ひにせきなからいはぬは辛き心ち社すれ

ひた道に頼めは人をつらしとも知らぬ顏にてあらんとそ思

つらさをは咎めぬ人のひたふるにたえぬと言もいかゝ頼まね

返し

つらくとも何か恨ん今さらにうれしさ誰か君にまさらむ

けふよりは秋の初めと聞からに袖のたもとそ露けかりける

かへし

たのまれぬ秋の心にゝる人や露けきほとを先は知らん

かへし

言の葉の色にさこそは優るらんなとてか秋を頼まさるへき

返し

語るたに深からは社こひことにしらぬ哀をいはんと思はめ

かへし

こひ毎にまたいひしらぬ君ならは深き心もあらんとそ思ふ

七月七日

（風雅集）たなはたの契れる秋もきにけるはいつと定めぬ我そ悲しき（玉集）（わひ集）

かへし

うたかひもなき七夕の中なれは契れるほとを過ぬなる哉

秋深く成行野へに鳴むしのいとゝ侘たるこゑきこゆ也

思ふ事有てなかねと秋きつとことになきける虫の聲きけ
時雨する神無月かと聞しかと涙の玉そけふふりにける
返し
涙ともわかれぬ雨のふりけるは時雨ときかは哀ならまし
かへし
よとゝもにたえぬ泪の雨よりは時雨や何そなにならなくに
かへし
空に降泪のよにし聞ゆれは袖の時雨をおとりこそせね
返し
なく涙空にもなとかふらさらんあま雲晴ぬ物を思へは
ちかつきて
いかてへし我ならなくにことしあらは今しも物の悲しかる蘭
かへし
有しより今しもとのみ悲しきはさてそ中々あるへかりける
篝火もものもしる〳〵あかすのみまとふ心をおもひしる覽
一宮の中君に聞えそめ玉ひける
袖の色のこく成ぬれは我戀をしらせそめつる涙なりけり
また
山彦のこたへぬ空はよにもあらし聲をさへにも隔つる哉
とあるに御かへりなけれは
詠めあかておかしき事をいひしまに戀も我身もつみてける哉

治承三年七月二日書寫挍合畢
建長五年四月十三日以貞觀本書寫挍合畢

右西宮左大臣集以村井敬義本書寫挍合了

金槐和歌集

鎌倉右大臣實朝公

春

正月一日よめる
けさみれは山も霞て久かたの天の原より春はきにけり
立春のこゝろをよめる
九重の雲井に春そ立ぬらし大内山に霞たなひく
故郷立春
朝霞たてるを見れはみつのえのよし野の宮に春はきにけり
春のはしめに雪の降をよめる
かきくらしなを降雪の寒けれは春ともしらぬ谷の黄鳥
春たゝは（はまつ　新千）若菜つまんとしめをきし野へ共見えす雪のふれゝは
春のはしめのうた
うちなひき春さりくれは楸生るかた山陰に鶯そなく
山里に家居はすへし鶯の鳴はつ聲のきかまほしさに
屏風の繪に春日の山に雪ふれるところを讀る
松の葉の白きをみれは春日山このめも春の雪そふりける
わかなつむところ
春日野の飛火の野守けふとてやむかしかたみに若菜つむ覽
雪中のわかなといふ事を
若菜つむ衣手ぬれて片岡のあしたの原はあは雪そふる
梅のはなをよめる
梅かえに氷れる霜やとけぬ覽ほしあへぬ露の花にこほるゝ
屏風に梅の木に雪降かゝれる所

梅のはな色はそれともわかぬまて風にみたれて雪は降つゝ

むめの花さけるところをよめる

わかやとの梅の初花咲にけりまつ鶯はなとか來なかぬ

花のあひたの鶯といふ事を

春くれはまつ咲やとの梅のはなかをなつかしみ鶯そなく

梅花風に匂ふと云事を人々讀せ侍し次に

むめかゝを夢の枕にさそひきてさむる待けり春の山風（はつイ）

梅香薫衣

梅かかは我衣手に匂ひきぬ花より過る春のはつ風

梅のはなをよめる

春風は吹とふかねと梅のはな咲るあたりはしるくそ有ける

春の歌

早蕨のもえいつる春に成ぬれは野邊の霞もたな引にけり

かすみをよめる

三冬つき春しきぬれは青柳のかつらき山に霞たな引

おほかたに春の來ぬれははる霞四方の山へに立滿にけり

をしなへて春は來に鳬筑波根の木本ことにかすみたなひく

柳をよめる

春くれはなを色まさる山城の常盤の杜の青柳の糸

雨中の柳といふことを

淺みとり染てかけたる青柳の糸に玉ぬく春雨そふる

水たまる池の坡のさし柳この春雨にもえ出にけり

柳

青柳の糸もてぬける白露の玉こき散す春の山かせ

雨そほふれる朝勝長壽院の梅ところ／＼咲たるを見て花にむすひつけし歌

古寺のくち木の梅も春雨にそほちて花の綻にけり

雨後鶯といふ事を

春雨の露もまたひぬ梅かえにうはけしほれて鶯そなく

梅華厭雨

我宿の梅はなさけり春雨はいたくな降そちらまくもおし

故郷梅花

誰にかもむかしをとはん故里の軒端の梅は春をこそしれ

としふれは宿はあれにけり梅花はなはむかしの香に匂へ共

古郷に誰しのふとか梅のはなむかし忘れぬかに匂ふらん

古郷春月といふ事をよめる

故郷は見しこともあらすあれにけり影そ昔の春の夜の月

たれ住て誰なかむらん古郷の吉野のみやの春のよの月

春月

なかむれは衣てかすむ久方の月の宮古の春の夜のそら

梅華をよめる

我宿の八重のこう梅咲にけり知もしらぬもなへてとはなん

鶯けいたくなわひそ梅のはなことしのみ散ならひならねは

さりともと思ひしほとに梅のはな散過るまて君かきまさぬ

わか袖に香をたに殘せむめの花あかて散ぬる忘かたみに

梅のはな咲る盛をめのまへにすくせる宿は春そ少なき

呼子鳥

あをによし奈良の山なる呼子鳥いたくな鳴そ君もこなくに

すみれ

淺茅原ゆくゑもしらぬ野へに出て故里人は菫つみけり

きゝす

高圓の尾上の雉子朝な／＼妻にこひつゝ啼音悲しも

をのか妻戀わひにけり春の野にあさる雉子の朝な〳〵なく

名所櫻

をとに聞よしのゝ櫻咲にけり山の麓にかゝるしら雲

となき山の櫻

かつらきやたかまのさくら眺むれは夕ゐる雲に春雨そふる（風そ吹新後）

雨中櫻

雨ふると立かくるれは山さくら花の雫にそほちぬるかな

けふもまた花に暮しつ春雨の露のやとりを我にかさなん

山路夕花

道とをみけふ越くれぬ山櫻はなのやとりを我にかさなむ

春山月

風さはく遠のと山に空晴てさくらに曇る春のよの月

屛風のゑに旅人あまた花の下にふせる所

木の本の花のした臥夜ころへて我衣てに月そ馴ぬる

木の本にやとりはすへし櫻花ちらまくおしみ旅ならなくに

この本にやとりをすれはかたしきの我衣てに花は散つゝ

いましはと思ひし程に櫻はな散木の本に日數へぬへし

山家に花見るところ

時のまと思ひてこしを山里に花みる〳〵となかゐしぬへし

花ちれるところに鴈のとふを

鴈かねの歸る翅にかほる也花なうらむる春の山かせ

きさらきの廿日あまりのほとにや有けむ北むきのえんに立出て夕暮の空をなかめて一人をるに鴈のなくを聞てよめる

なかめつゝおもふも悲し歸鴈ゆくらんかたの夕くれのそら

ゆみあそひをせしによしのゝ山のかたをつくりて山人の花見たるところをよめる

み吉野の山の山もり花をみてなか〳〵し日をあかすも有哉

みよしのの山に入けんやま人と成みてしかな花にあくやと

屛風によしの山かきたる所

みよし野の山にこもりし山人や花をはやとの物とみるらん

故鄉花

里はあれぬ志賀の花園そのかみのむかしの春や戀しかる覽

尋ねても誰にかとはん古鄉の花もむかしのあるしならねは

はなをよめる

櫻花ちらまくおしみうち日さす宮路の人そまとゐせりける（とのゐせイ）

さくら花ちらはをしけむ玉鉾の道行ふりに折てかさゝん

道すから散かふ花を雪とみてやすらふほとに此日暮つゝ

人のもとに讀てつかはし侍し

春は（イ无）くれと人もすさめぬ山櫻風のたよりに我のみそとふ

山家見花といふ事を人々あまたつかうまつりし次に

さくらはな咲散みれは山里に我そおほくの春はへにける

屛風に山中に櫻咲たるところ

山櫻散はちらなんおしけなみよしや人みす花のなたてに

花をたつねぬといふ事を

花をみむとしも思はてこし我そ深き山ぢに日數へにける

屛風の畫に

山風の櫻吹まく音すなり吉野の瀧の岩もとゝろに

瀧の上のみふねの山のやま櫻風に浮てそ花も散ける

散花

春くれはいとかの（糸イ）山のやま櫻風にみたれて花そ散ける

花かせをいとふ

咲にけりなからの山の櫻はな風にしられて春も過なん

はなをよめる

三よし野の山下陰のさくら花咲てたてりと風にしらすな

名所ちるはな

さくら花うつろふ時はみよしのゝ山下風に雪そふりける

花雪に似たるといふ事を

風吹は花は雪とそちりまかふ吉野の山は春やなからん

山深み尋てきつる木本に雪とみるまて花そ散ける

春は來て雪は消にしこのもとに白くも花のちりつもるかな

雨中夕花

山さくらいまはのころの花のえに夕への雨の露そ(そイ)こほるゝ

やま櫻あたに散にし花のえにゆふへの雨の露の殘れる

落花をよめる

春ふかみあらしの山の櫻はな咲とみしまに散にけるかな

三月の末かた勝長壽院にまうてたりしにあるそう山陰に隱れおるを見て 花はとひしかは散ぬとなんこたへ侍しを聞て讀る

ゆきて見んと思ひし程に散にけり鬼あやなの花や風たゝぬまに

櫻はなさくとみしまに散にけり夢かうつゝか春の山風

水邊落花といふ事を

櫻はなちりかひかすむ春の夜のおほろ月夜のかもの川風

行水に風の吹いるゝ櫻はなながれて消ぬあはかともみ(そみるイ)ゆ

山さくら木々の梢に見しものを岩まの水のあはとなりぬる

湖邊落花

山風の霞吹まきちる花のみたれてみゆるしかの浦なみ

故郷惜花心を

さゝ浪やしかの都の華盛風よりさきにとはまし物を

散ぬれはとふ人もなし故郷は花そむかしのあるし成ける

ことしさへとはれて暮ぬ櫻はな春もむなしき名に社有けれ

花恨風

心うき風にも有かな櫻花さくほともなく散ぬへらなり

春風をよめる

櫻花さきてむなしく散にけり吉野の山はたゝ(よしイ)春の風

櫻をよめる

春ふかみ花ちりかゝる山の井のふり(なきイ)にし水に蛙なく也

河邊欵冬

欵冬の花の雫に袖ぬれて昔おほゆる玉川の里

山ふきの花の盛に成ぬれは井手のわたりにゆかぬ日そなき

山吹を見てよめる

わかやとの八重の山吹露ををもみ打拂ふ袖のかほり(ほそちイ)ぬる哉

雨のふれる日山吹を讀る

春雨の露のやとりを吹風にこほれて匂ふ欵冬の花

欵冬をおりてよめる

今幾日春しなけれは春雨にぬるともおらんやまふきの花

欵冬の花おりて人のもとにつかはすとて

をのつから哀ともみよ春ふかみ散殘るきしの山吹の花

散のこる岸の山吹春深み此一えたをあはれといはん

やまふきの散を見て

玉もかる井出の河風吹にけりみなはにうきぬ山ふきの花

たまもかる井出のしからみ春かけて咲や川瀨の山ふきの花

まとゆみのふりうにて大井川をつくりて松に藤のか

かるところ
立歸りみてをわたらん大井河かはへの松にかゝる藤波
屛風の畫に田籠の浦に旅人のふちのはなおりたる所
田籠の浦のきしの藤浪立かへりおらてはゆかし袖はぬる共
池のほとりの藤の花
古郷の池の藤なみ誰うへてむかし忘れぬかたみ成らん
いとはやも暮ぬる春かわか宿の池の藤波うつろはぬまに
正月の二有し年三月に郭公の鳴を聞てよめる
きかさりき彌生の山の郭公春くはゝれる年はありしかと
春のくれをよめる
春ふかみあらしもいたく吹宿は散殘へき花もなきかな
なかめこし花もむなしく散はてゝはかなく春の暮にける哉
いつかたに行かくるらん春霞立出て山の端にもみえなくに
三月盡
行春をかたみとおもふを天津空在明の月はかけもたえけり
惜むともこよひ明なはあすよりは花の袂をぬきてかへてん

夏

更衣をよめる
おしみこし花の袂もぬきかへつ人の心そ夏には有ける
夏のはしめのうた
夏衣たつ田の山の郭公いつしかなかん聲をきかはや
春過て幾日もあらねと我やとの池の藤なみうつろひにけり
郭公を待といふ心を
夏衣たちしときより足曳の山郭公待ぬ日そなき
子規きくとはなしにたけくまの松にそ夏の日數へぬへき
初聲をきくとはなしに今日もまた山時鳥またすしもあらす
郭公かならす待となけれとも夜な〳〵めをもさましつる哉
山家郭公
山近く家居しをれは蜀魂なく初聲は我のみそきく
ほとゝきすのうた
足曳の山郭公木かくれて日にこそみえねをとのさやけさ
かつらきやたかまの山の杜宇雲井のよそに啼渡る也
足曳の山時鳥み山出て夜深き月の影になくなり
在明の月は入ぬる木の間より山子規啼ていつなり
皆人の名をしもよふかほとゝきす鳴なる聲の里をとよむる
夕郭公
夕暮のたと〳〵しきに郭公聲うらかなし道やまとへる
夏歌
五月まつ小田のますらおいとまなみせきいるゝ水に蛙鳴也
菖蒲
五月雨に水まさるらし菖蒲草うれはかくれてかる人そなき
五月雨ふれるにあやめ草をみてよめる
袖ぬれてけふふく宿の菖蒲草いつれの沼に誰かひきけん
五月雨
さみたれは心あらなん雲まより出くる月をまてはくるしも
五月雨に夜の更ゆけは郭公ひとり山邊を鳴てすく也
さみたれの露もまたひぬ奥山の槇のはかくれなく郭公
五月雨の雲のか〔か間歟〕ゝれるまきもくの檜原か峯に啼子規
五月山こたゝき峯のほとゝきすたそかれ時の空になく也
故郷盧橘
いにしへを忍ふとなしに故郷の夕への雨に匂ふたちはな
盧橘薫夜衣

轉寐の夜の衣にかほる也もの思ふ宿の軒の立花
　ほとゝきすをよめる
蜀魂きけともあかす立花のはな散里の五月雨の頃
　社頭時鳥
さみたれをぬさに手向て三熊野の山郭公なきとよむ也
　雨いたくふれるよひより郭公を聞てよめる
郭公鳴聲あやな五月やみ聞人なしに雨は降つゝ
　深夜ほとゝきす
五月やみおほつかなきに郭公ふかき峰より鳴ていつ也
五月やみ神なひ山のほとゝきす妻戀すらしなく音悲しも
　蓮露似玉
小夜更てはすの浮葉の露の上に玉とみるまてやとる月かけ
　河風似秋
岩くゝる水にや秋の立田川かはかせ涼し夏の夕暮
　螢火亂飛已近といふ事を
杜若おふる澤邊に飛螢かすこそまされ秋や近けん
　蟬
夏山に鳴なる蟬の木隱て秋近しとや聲もおしまぬ
　みな月の廿日あまりの比夕への風すたれをうこかす
　をよめる
秋近くなるしるしにや玉たれのこすのまとをし風そ（のイ）涼しき
　夜風冷衣と云事を
夏深み思ひもかけぬうたゝねの夜の衣に秋風そふく
　夏の暮によめる
昨日まて花の散をそおしみこし夢かうつゝか夏も暮にけり
御秡する河瀬にくれぬ夏の日の入あひの鐘のその聲により
夏はたゝこよひはかりと思ひねの夢ちにすゝし秋のはつ風

秋

　七月一日の朝によめる
昨日こそ夏は暮しか朝戸出の衣手寒し秋のはつ風
　海邊秋來といふことを
霧立て秋こそ空に來にけらし吹上の濱の浦のしほ風
うちはへて秋はきにけり紀の國やゆらのみ崎の蜑のうけ縄
　寒蟬啼
吹風の涼しくも有かをのつから山の蟬鳴て秋はきにけり
　秋のはしめの歌
佳人もなき宿なれと荻の葉の露を尋て秋はきにけり
野と成て跡は絕にし深草の露のやとりに秋はきにけり
　白露
秋ははや來にける物を大かたの野にも山にも露そをくなる
　秋風
夕されは衣手さむし高まとの尾上の宮の秋の初風
なかむれは衣手寒し夕つくよさほの河原の秋の初かせ
　秋のはしめによめる
あまの河みなはさかまき行水のはやくも秋の立にける哉
久かたの天の河原を打なかめいつかと待し秋もきにけり
彥星の行あひをまつ久堅の天の川原に秋風そ吹
夕されは秋風涼し七夕のあまの羽衣たちやかふらん
　七夕
天河霧立わたる彥星の妻むかへ舟はか〔は歟〕やもこかなん
戀々て稀に逢夜の天河川瀨のたつはなかすもあらなん
七夕の別をおしみ天河やすのわたりにたつもなかなむ

今はしも別もすらしたなはたは天の河原に田鶴そ鳴なる

秋のはしめ月あかゝりし夜

天原雲なきよひに久堅の月さえわたる鵲のはし

秋風に夜の深ゆけはひさかたの天の河原に月かたふきぬ

七月十四日夜勝長壽院の樓に侍りて月のさし入たりしをよめる

なかめやる軒の忍ふの露のまにいたくな更そ秋のよの月

曙に庭の荻を見て

朝ほらけ荻のうへ吹秋風に下葉をしなみ露そ亂る

秋野にをくしら露は玉なれやといふことは人々におほせてつかうまつらせし時よめる

さゝかにの玉ぬく糸のをゝよはみ風に亂て露そこほるゝ

あきのうた

花にをく露をしつけみ白すけの眞野の萩原しほれあひけり

路頭萩

道のへの小野の夕霧立かへりみてこそゆかめ秋萩の花

草花をよめる

野邊に出てそほちにけりなから衣きつゝ分行花の雫に

蘭

藤はかまきてぬきかけしぬしや誰とへと答へす野への秋風

とかりしにとかみか原といふ所に出侍しときあれたる菴のまへに蘭さけるをみてよめる

秋風に何にほふらんふちはかまぬしはふりにし宿と知すや

古郷萩

古郷の本あらの小萩徒に見る人なしに咲かちりなん

庭のはきをよめる

秋風はいたくな吹そ我宿のもとあらの小萩ちらまくもおし

夕秋風と云事を

秋ならてたゝ大かたの風の音も夕へはことに悲しきものを

ゆふへの心をよめる

おほかたにもの思ふとしもなかりけり只我ための秋の夕暮

たそかれに物思ひをれは我宿の荻のはそよき秋風そ吹

我のみやわひしと思ふ花すゝきほに出るやとの秋の夕くれ

庭の萩はつかにのこれるを月さしいてゝのち見るにちりにたるにや花のみえさりしかは

萩の花くれ／＼までも有つるか月出てみるに無かはかなさ

萩をよめる

秋萩の下葉もいまたうつろはぬに今朝ふく風は袂さむしも

あさかほ

風をまつ草の葉にをく露よりもあたなるものは朝皃の花

野へのかるかやをよめる

夕されは野ちのかるかや打なひき亂れてのみそ露もをきける

秋歌

朝な／＼露におれふす秋萩の花ふみしたき鹿そ鳴なる

萩かはならうつろひ行は高砂の尾上の鹿のなかぬ日そなき

さを鹿のをのかすむ野の女郎花はなにあかすと音をや鳴覽

よそにみておらては過し女郎花なをむつましみ露にぬる共

秋風はあやなゝ吹そ白露のあたなるのへ・葛〔の脱歟〕のはの上に

白露の仇にもをくか葛の葉にたまれはきえぬ風たゝぬまに

きり／＼す啼夕暮の秋風に我さへあやな物そかなしき

山家（邊イ）眺望といふことを

暮かゝる夕への空をなかむれはこたかき山に秋風そふく

秋をへて忍ひもかねす物思ふ小のゝ山邊の夕暮の空
聲高みはやしにさけふ猿よりも我そもの思ふ秋の夕へは

秋のうた

玉たれのこすのひまもる秋風はいも戀しらに身にそしみける
秋風はやゝはた寒く成にけり獨やねなん長き此夜を
鴈なきて秋風さむく成にけりひとりやねなん夜の衣（なくイ）うすし
を篠ばら夜半に露吹（夜のイ）秋風をやゝ寒しとや虫のわふらん
秋ふかみ露さむきとや蛬たゝいたつらに音をのみそ鳴
庭草の露のかすそふ村雨によふかき虫の聲そ悲しき
あさち原つゆしけき庭の蛬秋ふかき夜の月に鳴也
天のはらふりさけ見れは月清み秋のよいたく更にける哉

月をよめる

我なからおほえすをくか袖の露月に物思ふ夜頃へぬれは

八月十五夜

久かたの月の光し清けれは秋のなかはを空にしるかな

海邊月

たまさかにみるものにもか伊勢の海の清き渚の秋の夜の月
伊勢の海や浪にかけたる秋の夜の有明の月に松風そふく
須磨の蜑の袖吹かへすしほ風にうらみて更る秋のよの月
しほかまの浦ふく風に秋たけて籬か嶋に月かたふきぬ

月前鴈

天原ふりさけみれはます鏡きよき月夜に鴈なき渡る
むは玉の夜は更ぬらし鴈かねの聞ゆる空に月かたふきぬ
啼渡る鴈の羽かせに雲消て夜ふかき空にすめる月かけ
九重の雲井を分て久かたの月の都に鴈そなくなる
天のとを明かたの空に啼鴈の翅の露にやとる月影

海の邊をすくるとてよめる

和田の原八重の鹽ぢに飛鴈の翅の浪にあき風そふく（わひゆくゑもしらぬものと思ふ哉　後）
なかめやる心もたへぬ和田の原八重のしほ路の秋の黄昏

鴈を

秋風に山とひこゆる初かりの翅に分る峯のしら雲
足曳の山飛こゆる秋の鴈いく重の霧をしのき來ぬらん
鴈かねは友まとはせりしからきや槙の杣山霧たゝるらし

夕鴈

夕されは稻葉のなひく秋風に空飛かりの聲も悲しや

田家夕鴈

鴈のゐる門田の稻葉打そよきたそかれ時に秋風そ吹

野への露

ひさ方の天飛鴈（そらイ）の涙かも大あらき野のさゝの上の露

田家露

秋田もる庵にかたしく我袖に消あへぬ露の幾重をく覧

田家夕

かくて猶たえてしあらはいかゝせん山田守庵の秋の夕暮

田家秋といふことを

から衣いなはの露に袖ぬれて物思へともなれる我身か
山田もる庵にしをれは朝な／＼たえす聞つるさをしかの聲

夕鹿

鳴鹿の聲より袖にをくか露物思ふころの秋の夕暮

しかをよめる

妻戀る鹿そなくなる小倉山やまの夕霧立にけんかも
ゆふされは霧立くらしをくら山やまのとかけに鹿そ鳴なる
雲のゐる梢はるかに霧こめてたかしの山に鹿そ啼なる

小夜更るまゝに外山の木のまよりさそふか月をひとり鳴鹿

月をのみ哀とおもふを小夜更てみやま隱に鹿そなくなる

閑居望月

こけの庵にひとりなかめて年も經ぬ友なき山の秋の夜の月

名所秋月

月みれは衣てさむしさらしなや姨捨山の峯の秋風

山寒み衣てうすし更科やをはすての月に秋ふけしかは

さゝ波やひらの山風小夜更て月かけさひししかのから崎

秋歌

月清み秋の夜いたく更にけりさほの川原に千鳥しはなく

月前擣衣

秋たけて夜深き月の影みれはあれたる宿に衣うつ也

さよ更てなかはたけ行月かけにあかてや人の衣打らん

夜を寒みね覺てきけは長月の有明の月にころもうつ也

擣衣をよめる

ひとりぬるね覺に聞そ哀なる伏見の里に衣うつこゑ

みよし野の山下風のさむき夜を誰古郷に衣うつらん

秋歌

昔思ふ秋のねさめの床の上にほのかにかよふ峯の松風

見る人もなくて散にき時雨のみふりにし里の秋萩の花

秋萩のむかしの露に袖ぬれてふるき籬に鹿そなくなる

朝またき小野の露霜さむけれは秋をつらしと鹿そ鳴なる

秋はきの下葉のもみちうつろひぬ長月の夜の風のさむさに

雨のふれる夜に菊を見てよめる

露をおもみまかきの菊のほしもあへす晴れは曇る宵の村雨（むら雨の空イ）

月夜菊の花をおるとて

ぬれておる袖の月かけ更にけり籬の菊の花の上の露

ある僧に衣をたまふとて

野邊みれはつゆしも寒し蛬よるの衣のうすくや有らん

長月の夜きり／＼すのなくを聞てよめる

蛬夜半の衣のうすき上にいたくは霜つをかすもあらなん

九月霜降秋早寒といふ心を

虫の音もほのかに成ぬ花すゝき秋の末葉に霜や置らん

秋のするによめる

鴈鳴て吹かせさむみ高圓の野への淺茅は色つきにけり

かり啼て寒きあさけの露霜にやのゝ神山色つきにけり

名所紅葉

初鴈の羽風のさむくなるまゝにさほの山邊は色付にけり

鴈啼て寒き嵐の吹なへに立田の山は色つきにけり

鴈のなくをきゝてよめる

今朝來なく鴈かねさむみ唐衣立田の山は紅葉しぬらん

深山紅葉

神無月またて霰や降にけん深山にふかき紅葉しにけり

さほ山のはゝその紅葉時雨にぬるゝといふ事を人々
によませしついてによめる

佐保山のはゝその紅葉千々の色にうつろふ秋は時雨降けり

秋歌

木の葉ちる秋の山へはうかりけり堪てや鹿のひとり鳴らん

もみちはは道もなきまて散しきぬ我宿をとふ人しなけれは

水上落葉

流れ行このはのよとむえにしあれは暮ての後は秋も久しき

暮て行秋の湊にうかふ木のは蜑の釣する船かともみゆ

秋をおしむといふことを

長月の有明の月のつきすのみくる秋ことにおしき今日かな

年毎の秋の別れはあまたあれとけふの暮るそ侘しかりける

九月盡の心を人々に仰せてつかうまつらせしついて
によめる

初瀬山けふを限となかめつゝ入あひのかねに秋そ暮ぬる

冬

十月一日よめる

秋はいぬ風に木のはは散はてゝ山淋しかる冬は來にけり

まつ風しくれにゝたり

ふらぬよもふるともまかふ時雨かな木の葉の後の峯の松風

神無月木のはふりにし山里は時雨にまかふ松の風かな

冬のうた

木の葉ちり秋も暮にしかた岡のさひしき杜に冬は來にけり

神無月時雨ふるらしおく山は外山の紅葉今さかりなり

冬のはしめの歌

神無月時雨ふれはかなら山のならのはかしは風にうつろふ

下紅葉かつはうつろふ柞原神無月とて霰ふれりて〔むイ〕へ

三室山紅葉ちるらし神無月龍田の河に錦をりかく

吉野川もみちはなかる瀧の上のみふねの山に嵐吹らし

散つもる木の葉朽にし谷水も氷てとつる冬はきにけり

野霜といふことを

花すゝき枯たる野へにをく霜のむすほゝれつゝ冬は來に鳧

霜をよめる

東路の道の冬草枯にけり夜な〳〵霜や置まさるらん

大澤の池の水草かれにけり長きよすから霜やをくらむ

月影霜にゝたりといふことをよめる

月影のしろきをみれは鵲のわたせる橋に霜そをきける

冬歌

夕月夜さほの川風身にしみて袖より過る千鳥なく也

河邊冬月

千鳥なくさほの河原の月きよみ衣手寒し夜や更ぬらん

月前松風

天原空をさむけみ烏羽玉のよわたる月に松風そ吹

海のほとりの千鳥といふことを人々あまたつかうま
つりし次に

夜を寒み浦の松風吹むすひむしあけの浪に千鳥鳴也

夕つくよみつしほあひのかたをなみ浪にしほれて鳴千鳥哉

月清みさよ更ゆけは伊勢嶋やいちしの浦の千鳥鳴なり

名所千鳥

衣手にうらの松風さえわひて吹上の月に千鳥鳴也

寒夜千鳥

風寒み夜の更ゆけはいもかしまかたみの浦に千鳥鳴也

ふかき夜の霜

むは玉の妹か黒かみ打なひき冬深き夜に霜そをきける

冬歌

かたしきの袖こそ霜にむすひけれ待夜更ぬる宇治の橋姫

かたしきの袖も氷ぬ冬の夜の雨降すさむ曉のそら

夜をさむみ河瀬にうかふ水の泡の消あへぬ程に氷しにけり

氷をよめる

音羽山やまおろし吹てあふ坂の關の小河に氷りし（わたれりイ）にけり

月前嵐

更にけり外山のあらしさえ〳〵てとをちの里にすめる月影

湖上冬月といふことを

比良の山やま風さむきからさきや鳰のみつうみ月そ氷れる

池上冬月

原の池の芦まのつらゝしけゝれ（はイ）とたえ〳〵月の影はすみ鳧

冬歌

あしの葉は澤へもさやに置霜の寒きよな〳〵氷しにけり

難波潟あしのは白くをく霜のさえたる夜半に田鶴そ鳴なる

夜更て月を見てよめる

小夜更て雲間の月の影みれは袖にしられぬ霜そをきける

社頭霜

さ夜更ていなりの宮の杉の上に白くも霜の置にける哉

屏風に三輪の山に雪のふれる所

冬こもりそれともみえす三輪の山杉のは白く雪のふれゝは

社頭雪

み熊野のなきの葉したり降雪は神のかけたるしてにそ有らし

鶴岡別當僧都もとに雪のふりし朝よみてつかはすうた

鶴か岡あふきてみれは峯の松こすゑ遙に雪そ積れる

八幡山木たかき松にゐるたつのはね白妙にみ雪ふるらし

海邊鶴

難波かたしほひにたてる芦たつの羽白妙に雪は降つゝ

冬歌

降つもる雪ふむ磯の濱千鳥波にしほれて夜半に鳴也

みさこゐる磯邊に立るむろの木の枝もとほゝに雪そ積れる

夕されは鹽風さむし波まよりみゆる小嶋に雪は降つゝ

立のほる煙はなをそつれもなき雪のあしたの鹽竈の浦

なかむれはさひしくも有か烟たつ室の八嶋の雪の下もえ

雪をよめる

冬のうた

夕されは浦風さむしあま小船とませの山にみ雪降らし

まきもくの檜原のあらしさえ〳〵てゆつきか嶽に雪降に鳧

深山には白雪ふれりしからきの槇の杣人道たとるらし

はらへたゝ雪分衣ぬきをうすみ積れは寒し山おろしの風

槙の戸をあさけの雲の衣手に雪を吹まく山颪のかせ

山里は冬こそことにわひしけれ雪ふみ分てとふ人もなし

我庵はよし野の奥の冬こもり雪ふりつみて問人もなし

奥山のいはねに生るすかの根のねもころ〳〵にふれる白雪

をのつから淋しくも有か山深み苔の庵の雪の夕くれ

寺邊夕雪

打つけに物そかなしき泊瀨山おのへの鐘の雪の夕暮

閑居雪

故郷はうらさひしともなき物をよし野の奥の雪の夕暮

冬歌

夕されはすゝ吹嵐身にしみて吉野のたけにみ雪ふるらし

山高み明はなれ行横雲の絶まにみゆる峰の白雪

見渡せは雲ゐはるかに雪白し富士の高根の曙の空

さゝの（はイ）はのみ山もそよに霰ふり寒き霜よをひとりかもねん

山邊霰

雲深きみ山のあらしさえ〳〵て生駒のたけに霰ふるらし

雪（のイ）をよめる

はし鷹もけふはしらふに變る覽とかへる山に雪のふれゝは

冬歌

雪降てけふともしらぬ奥山にすみやく翁あはれはかなき

炭竈の烟もさひしおほはらやふりにし里の雪の夕暮

わか門の板井の清水冬ふかみ影こそ見えね氷すらしも

冬深み氷やいたくとちつらん影こそみえね山の井の水

冬ふかみ氷にとつる山河のくむ人なしに年や暮なむ

ものゝふの八十宇治川を行水の流てはやき年の暮哉

白雪のふるの山なる杉むらのすくる程なき年のくれかな

かつらきや山を木高み雪しろしあはれとそ思ふ年の暮ぬる

佛名の心をよめる

身に積る罪やいかなるつみならんけふ降雪とともにけぬ覽

歳暮

老らくのかしらの雪をとゝめをきてはかなの年や暮て行覽

とりもあへすはかなく暮て行年をしはしとゝめん關守も哉

ちふさすふまたいとけなきみとり子と共になきぬる年の暮哉

ちりをたにすへしとや思ふ行年の跡なき庭をはらふ松かせ

烏羽玉の此よな明そしは〳〵もまた古年の内とおもはん

はかなくて今宵明なは行年の思ひてもなき春にやあはなん

賀

千々の春よろつの秋になからへて花と月とを君そみるへき

おとこ山神にそぬさを手向つる八百萬代も君かまに〳〵

松によする祝といふ事をよめる

八幡山こたかき松の種しあれは千年の後もたえしとそ思ふ

位山木たかくならん松にのみ八百よろつ代と春風そ吹

ゆく末も限はしらす住よしの松に幾代の年か經ぬらん

住の江に生てふ松の枝しけみ葉ことに千世の數そこもれる

君か代は猶しもつきし住吉の松は百たひ生かはるとも

祝のこゝろを

たつのゐるなからのはまの濱風に萬代かけて波そよすなる

ひめしまの小松かうれにゐるたつの千年ふれとも年老に鳬

大嘗會のとしのうた

くろ木もて君[か]つくれる宿なれは萬代ふともふりすもあら南

梅の花をかめにさせるをみてよめる

玉たれのこかめにさせる梅のはな萬代ふへきかさし成けり

はなの咲るを見て

宿にある櫻の花は咲にけり千とせの春もつねかくし見む

苔によする祝といふことを

岩にむす苔のみとりの深き色を幾千世まてと誰か染けん

二所詣し侍し時

千早振いつの山の玉椿やをよろつよも色はかはらし

月によする祝

万代に見るともあかし長月の有明の月のあらん限は

河邊月

ちはやふるみたらし川の底清み長閑に月の影はすみけり

いはひのうた

君か代もわか世もつきし石川や蟬の小河の絕しと思へは

朝にありて我世はつきし天のとや出る月日のてらん限は

戀

初戀のこゝろをよめる

春霞たつ田の山のさくら花思束なきを知人のなき

寄鹿戀

秋の野に朝霧かくれ啼鹿のほのかにのみや聞渡りなん

戀歌

足曳の山の岡へ[尾上イ]にかるかやのつかのまもなく亂れてそ思ふ

我戀ははつ山あひの摺衣人こそしらねみたれてそおもふ

木隱て物を思へはうつ蟬の羽にをく露の消やかへらん

かさゝきのはにをく露の丸木はしふみゝぬ先に消やわた蘭

月影のそれかあらぬかかけろふのほのかにみえて雲隱れにき

雲かくれ鳴て行なる初鴈のはつかにみてそ人は戀しき

草によせて忍ふる戀

秋風になひくすゝきのほには出す心みたれて物思ふかな

風によする戀

あたし野の草のうら吹秋風のめにし見えねは知人もなし

秋萩の花のの薄露をおもみをのれしほれてほにや出なん

ある人の本へつ[か脫歟]はし侍し

難波かた汀のあしのいつまてかほに出すしも秋をしのはん

鴈のゐるはかせにさはく秋の田の思ひみたれてほにそ出ぬる

戀のこゝろをよめる

小夜更て鴈の翅にをく露[霜イ]の消ても物はおもふ限を

忍ふ戀

時雨ふるおほあらきのゝをさゝ原ぬれはひつとも色に出めや

神無月の頃人のもとに

霎のみふるの神杉ふりぬれといかにせよとか色のつれなき

戀のうた

夜を寒みかもの羽かひにをく霜のたとひけぬ共色に出めや

芦鴨のさはく入江のうき草のうきてや物を思ひわたらん

海の邊の戀

うきなみ[みのみイ]のをしまの海士の濡衣ぬるとないひそ朽ははつ共

伊勢嶋やいちしの蜑のすて衣あふことなみに朽やはてなん

淡路嶋かよふ千鳥のしは〳〵もはねかくまなく戀やわた覽

戀のうた

とよ國のきくのなかはま夢にたにまたみぬ人に戀やわた蘭

須磨の浦に蜑のともせる漁火の灰に人を見るよしもかな

あしのやの灘の鹽燒われなれやよるはすからにくゆり侘覽

ぬまに寄てしのふ戀

かくれぬの下はふあしのみこもりに我そ物思ふ行衛しらねは

水邊の戀

まこも生る淀の澤水みさひゐて影し見えねは問人もなし

三嶋江や玉江のまこもみ隱れてめにし見えねはかる人もなし

雨によする戀

郭公なくやさつきの五月雨の晴す物思ふ頃にも有かな

時鳥まつ夜なからの五月雨にしけきあやめのねにそ鳴なる

子規鳴やさ月の卯の花のうき言のはのしけき頃哉

夏の戀といふ事を

さつき山木の下やみのくらけれはをのれまとひて鳴郭公

戀のうた

奥山のたつきもしらぬきみにより我心からまとふへら也

おく山の苔[草イ]ふみならすさをしかも深き心のほとはしらなん

天原風に浮たるうき雲の行衛さためぬ戀もする哉

雲によする戀

白雲のきえはきえなて何しかも立田の山の名のみたつらん

衣によする戀

忘らるゝ身はうらふれぬから衣さても立にし名社おしけれ

戀のこゝろをよめる

君にこひうらふれをれは秋風になひく淺茅の露そけぬへき

物おもはぬ野への草木の葉にたにも秋の夕へは露そ置ける

秋の野の花の千草に物そ思ふ露よりしけき色はみえねと

露によする戀

我袖の泪にもあらぬ露にたに萩の下葉は色に出けり

こひのうた

山城のいはたの杜のいはすとも秋の梢はしるくや有らん

山家のちのあした

消なまし今朝たつねすは山城の人こぬ宿の道芝の露

なてしこによする戀

なてしこの花に置ゐる朝露のたまさかにたに心へたつな

草に寄て忍ふる戀

我戀は夏野の薄しけゝれとほにしあらねは問人もなし

あひてあはぬ戀

今更に何をか忍ふ花すゝきほに出し秋も誰ならなくに

すゝきによする戀

まつ人はこぬものゆへに花薄ほに出てねたき戀もする哉

たのめたる人のもとに

小笹はらをく露さむみ秋されは松むしの音に鳴ぬよそなき

まつよひの更行たにも有物を月さへあやなかたふきにけり

まてとしもたのめぬ山も月は出ぬいひしはかりの夕暮の空

月によする戀

數ならぬ身は浮雲のよそなからあはれとそ思ふ秋の夜の月

月影もさやには見えすかきくらす心の闇のはれしやらねは

月のまへのこひ

わか袖におほえす月そやとりける問人あらはいかゝ答へん

秋のころいひなれにし人のもとへまかれしにたよりにつけて文なとつかはすとて

うはの空に見し俤を思ひ出て月に馴にし秋そ戀しき

逢事を雲ゐのよそに行鴈の遠さかれはや聲も聞えぬ

遠き國へまかれ〔り歟〕し人八月はかりに歸りまいるへきよしを申て九月まて見えさりしかは人の許につかはし侍しうた

こぬとしもたのめぬうはの空にたに秋風吹は鴈は來にけり

今こんとたのめし人は見えなくに秋風寒み鴈はきにけり

かりによする戀

忍ひあまり戀しき時は天原空とふ鴈の音に啼ぬへし

戀のうた

海人衣たみのゝしまに鳴たつの聲聞しより忘かねつゝ

難波かた浦より遠になく田鶴のよそに聞つゝ戀や渡らむ

人知す思へは苦したけ熊のまつとはまたしまてはすへなし

我戀はみやまの松にはふ蔦のしけきを人のとはすそ有ける

山しけみ木の下かくれ行水の音聞しより我やわするゝ

神山のやました水のわきかへりいはて物思ふ我そ悲しき

苔深き石まをつたふ山水の音こそたてね年は經にけり

あつまちの道のおくなる白川のせきあへぬ袖をもる涙かな

忍山下ゆく水の年をへてわきこそかく〔へ歟〕れ逢よしをなみ

もらし侘ぬ忍ふの奥の山ふかみ木かくれて行谷川の水

心をし忍ふの里にをきたらはあふくま河は見まくちかけん

としふとも音にはたてし音羽河下行水のしたの思ひを

石の上ふるの高橋ふりぬとももとつ人には戀やわたらん

廣瀬川袖つく斗あさけれと我はふかめて思ひそめてき
あふ坂の關屋もいつら山しなの音羽の瀧の音に聞つゝ
石はしる山下瀧津山川の心くたけて戀やわたらん
山河のせゝの岩浪わきかへりをのれひとりや身をくたく覧
うきしつみはてはあはとそ成ぬへき瀬々の岩波身を砕きつゝ

戀

しら山にふりて積れる雪なれは下社きゆれうへはつれなし
雲のゐるよし野のたけに降雪の積り／＼て春にあひにけり（つまそするイ）
春ふかみ峯のあらしに散花の定めなき世に戀つゝそふる

月によせてしのふる戀

春やあらぬ月はみしよの空なから馴しむかしの影そ戀しき
思ひきや有しむかしの月影を今は雲ゐのよそに見んとは

まつ戀の心をよめる

さむしろに獨むなしく年もへぬ夜の衣のすそあはすして
小莚にいくよの秋をしのひきぬ今はたおなし宇治の橋姫
こぬ人をかならす待となけれとも曉かたに成やしぬらん

曉の戀

さむしろに露のはかなくをきていなは曉ことに消や渡らん

曉の戀といふ事を

曉の露やいかなる露ならんをきてしゆけはわひしかりけり
曉のしきのはねかきしけゝれとなと逢事のまとを成らん

人まつこゝろをよめる

みちのくのまのゝ茅原かりにたにこね人をのみ待か苦しき
まてとしも頼めぬ人の葛の葉もあたなる風を恨みやはせぬ

戀のこゝろをよめる

秋ふかみすそ野の眞葛枯々にうらむる風の音のみそする
秋の野にをく白露の朝な／＼はかなくてのみ消やかへらん
風をまつ今はたおなし宮城野のもとあらの萩の花の上の露

きくによする戀

消かへりあるかなきかに物そ思ふうつろふ秋の花の上の霜
花よりも人の心は初霜の置あへぬ色のかはる成けり

ひさしき戀の心を

我戀はあはてふる野のをさゝ原幾よまてとか霜のをくらん

古郷戀

草ふかみさしもあれたる宿なるを露をかたみに尋こし哉
里はあれて宿は朽にし跡なれや淺茅か露に松虫の鳴
あれにけり頼めし宿は草の原露の軒はに松虫の鳴
忍ふ草しのひ／＼にをく露を人こそとはね宿はふりにき
宿はあれてふるきみ山の松にのみとふへき物と風の吹らん

年を經て待戀といふことを人々におほせてつかうまつらせし次に

古郷のあさちか露にむすほゝれ獨鳴むしの人をうらむる

ものかたりに寄る戀

別にしむかしは露か淺茅原あとなき野へに秋風そ吹

冬の戀

あさち原跡なき野へにをく霜のむすほゝれつゝ消やわた覽
淺茅原あたなる霜のむすほゝれ日影をまつに消やわたらん
庭の面にしけりにけらし八重葎とはて幾夜の秋か經ぬらん

すたれによする戀

古郷の杉のいたやのひまをあらみゆきあはてのみ年のへぬ覽
津の國のこやの丸やのあしすたれまとをに成ぬ行逢すして

戀の歌

住よしの松とせしまに年も經ぬちきのかたそき行逢すして
住の江のまつ事ひさに成に鬼來むとたのめて年の經ぬれは
思ひたえ侘にし物を今更に野中の水の我を頼むる
をしかふす夏野の草の露よりもしらしなしけき思ひ有とは
きかてたゝあらまし物を夕月夜人たのめなる荻の上風

たなはたによする戀

七夕にあらぬ我身のなそもかく年に稀なる人を待らん

戀のうた

我戀は天の原とふあしたつの雲井にのみや啼わたるらん（りなイ）
久かたのあまの川原に住たつも心にあらぬ音をや鳴らん
久方の天とふ雲の風をいたみ我はしか思ふいもにし逢ねは
我戀はかこのわたりの綱手なはたゆとふ心やむ時もなし

こかねによする戀

こかねほるみちのく山にたつ民の命もしらぬ戀もする哉
逢事のなき名をたつの市にうるかねて物思ふ我身成けり

雪中待人と云事を

けふもまたひとりなかめて暮にけりたのめぬ宿の庭の白雪

戀のうた

おく山の岩かき沼に木の葉落てしつめる心人しるらめや
奥山の末のたつ木もいさしらす妹にあはすて年の經ゆけは
ふしの根の烟もそらに立ものをなとか思ひの下にもゆらん
おもひのみふかきみ山の郭公人こそしらね音をのみそなく
名にしおはゝそのかみ山の葵草かけてむかしを思ひ出なん
夏深き杜のうつせみをのれのみむなしき戀に身をくたく蘭
大あら木のうき田の杜に引しめの打はへてのみ戀や渡らん
それをたに思ふ事とて千早振神の社になかぬ日はなし
千早振加茂の川なみいくそたひ立かへるらん恨しらすも
涙こそ行衞もしらねみわの崎佐野の渡りの雨の夕暮
しらま弓磯邊の山の松のは（色　新勅）の常盤に物を思ふ頃かな
白浪のいそこせちなるのとせ河後も逢みん身をしたえすは
わたつ海になかれて出たるしかま川しかも絶すや戀渡り南
君により我とはなしに須磨の浦に藻汐たれつゝ年のへぬ覽
沖つなみ打出の濱の濱ひさきしほれてのみや年のへぬらん
かくてのみ有磯の海のありつゝ（も）逢よもあらは何か恨（み）む
みくま野の浦の濱ゆふいはすとも思ふ心の數をしらなん
我戀はもゝしまめくる濱千鳥行衞もしらぬかたに啼也
おきつ嶋うのすむ石による浪のまなく物思ふ我そ悲しき
田子の浦の荒磯の玉も浪の上にうきてたゆたふ戀もする哉
かもめゐるあら磯のすさき鹽みちてかくろひ行は勝る我戀
武庫の浦の入江のすとり朝な／＼常にみまくのほしき君哉

旅

玉ほこの道は遠くもあらなくに旅とし思へはわひしかり鬼
草枕旅にしあれはかりこもの思ひみたれていこそねられね
旅衣袂かたしきこよひもや草の枕に我ひとりねん

覊中夕露

露しけみならはぬ野へのかり衣ころしもかなし秋の夕暮
野邊分ぬ袖たに露はをく物をたゝ此ころの秋の夕くれ
旅衣うらかなしかる夕暮のすその〻露に秋風そふく

覊中鹿

旅衣すそ野の露にうらふれて日も夕風に鹿そ鳴なる
秋もはや末野の原に鳴鹿の聲聞時そ旅は悲しき
ひとりふす草の枕の夜の露ともなき鹿の涙成けり

旅宿月

獨ふす草の枕の露のうへにしらぬ野原の月を見る哉

岩かねの苔のまくらに露をきていく夜み山の月にねぬらん

旅宿霜

袖枕霜をく床の苔のうへにあかすはかりのさよの中山

しなか鳥ゐな野の原の篠枕まくらの霜ややとる月かけ

旅歌

旅ねする伊勢の濱荻露なからむすふ枕にやとる月かけ

旅宿時雨

旅の空なれぬはにふの夜の床わひしきまてにもる時雨かな

屛風の繪に山家に松かける所に旅人あまたあるをよめる

稀に來て聞たにかなし山賤の苔の庵の庭の松風

まれにきて稀に宿かる人もあらし哀とおもへ庭の松かせ

雪降山の中に旅人ふしたる所

かたしきの衣手いたくさえ侘ぬ雪深きよの峯の松風

曉の夢の枕に雪積り我ねさめとふ峯の松かせ

羇中雪

旅衣夜半のかたしきさえ／＼て野中の庵に雪降にけり

あふ坂の關の山道越わひぬ昨日もけふも雪し積れは

雪降て跡ははかなくたえぬともこしの山道やますかよはん

二所へまうてし下向に春雨いたく降しかは讀る

春雨はいたくな降そ旅人の道行衣ぬれもこそすれ

春雨にうちそほちつゝ足曳の山ち行らん山人やたれ

雜

海邊立春といふことをよめる

しほかまの浦の松風霞なり八十嶋かけて春や立らん

子日

いかにして野中の松のふりぬらん昔の人はひかすや有けむ

殘雪

春きては花とかみえんおのつから朽木の杣にふれる白雪

鶯

深草の谷の鶯春ことに哀むかしと音をのみそ啼

草ふかき霞の谷に（はくくまるイ）春こもる鶯のみやむかしこふらし

海邊春月

住よしの松の木かくれゆく月の朧にかすむ春の夜の空

屛風に加茂へもうてたる所

立よれは衣手凉しみたらしや影見る岸の松の川波

海邊春望

難波かた漕出る舟のめもはるに霞に消て歸る鴈かね

關路花

名にしおはゝいさ尋みむ相坂の關路に匂ふ花は有やと

尋見るかひはまことに相坂の山ちに匂ふ花にそ有ける

あふさかのあらしの風に散花をしはしとゝむる關守そなき

あふ坂の關の關やの板庇まま〔は歟〕らなれはや花のもるらん

櫻

いにしへの朽木の櫻春ことに哀むかしと思ふかひなし

空蟬のよは夢なれや櫻花咲ては散ぬ哀いつまても

屛風に春の繪かきたる所を夏みてよめる

見てのみそ驚ろかれぬる烏羽玉の夢かと思ひし春の殘れる

なてしこ

ゆかしくは行てもみませゆき嶋の岩ほに生る（根イ）なてしこの花

戀

我宿のませのはたてにはふ瓜のなりもならすも二人ねまほし

六月秡

わか國の山としまねの神たちをけふの御秡に手向つる哉

仇人のあたにあるみの仇事をけふ六月の秡へすてつといふ

山家思秋

ことしけき世をのかれにし山里にいかに尋て秋のきつらん

ひとり行袖よりをくか奥山の苔の扉の道の夕露

故郷虫

たのめこし人たにとはぬ古鄕に誰松むしの夜半に鳴らん

古郷のこゝろを

鶉なくふりにし里の淺茅生に幾夜の秋の露か置けん

契むなしくなれる心をよめる

契けむこれやむかしの宿ならんあさちか原に鶉なく也

あれたるやとの月といふことを

淺茅原ぬしなき宿の庭の面に哀いくよの月かすみけん

月をよめる

思ひ出てむかしを忍ふ袖の上に有しにもあらぬ月そ宿れる

行廻り父もきてみむ古鄕の宿もる月は我をわするな

大原やおほろの清水里遠み人社くまね月はすみけり

水邊月

わくらはに行てもみしかさめかひ〔ゐカ〕のふるき清水に宿る月影

まな板といふものゝ上に鴈をあらぬさまにして置たるを見てよめる

あはれなる雲ゐのよそに行鴈のかゝる姿に成ぬと思へは

聲うちそふるおきつ白浪といふふることを人々あま

たつかうまつりて次によめる

住の江の岸の松吹秋風をたのめて波のよるを待ける

月前千鳥

玉津嶋若の松原夢にたにまたみぬ月に千鳥鳴也

冬初によめる

春といひ夏と過して秋風の吹上の濱に冬はきにけり

はまへ出たりしに海士のもしほ火をみて

いつもかく淋しき物か蘆のやにたきすさひたる蜑のも汐ひ

水鳥のかものうきねのうきなから玉もの床に幾よへぬらん

松間雪

高砂の尾上の松に降雪のふりて幾世のとしかつもれる

海邊冬月

月のすむ磯の松風さえ〳〵て白くそみゆる雪のしら濱

屛風になちのみ山書たる所

冬こもるなちのあらしの寒けれは苔の衣のうすくや有らん

深山に炭やくを見てよめる

炭をやく人の心もあはれなりさても此世を過るならひは

あしにわつろふことありて入こもれりし人のもとに雪降し日よみて遣す歌

降雪をいかに哀となかむらん心は思ふともあしたゝすして

老人寒をいとふと云事を

年ふれは寒き霜こそさえけらしかうへは山の雪ならなくに

雪

我のみそ悲しとは思ふ波のよる山のひたひに雪のふれゝは

としつもるこしの白山しらすともかしらの雪を哀とはみよ

老人憐歳暮

老ぬれは年の暮行たひことに我身ひとつとおもほゆる哉
しらかといひ老ぬるけにや事しあれは年の早くも思ほゆる哉
打忘れはかなくてのみすくしきぬ哀と思へ身に積る年
足引の山より奥に宿もかな年のくましき隠家にせん

年のはての歌

行年のゆくへをとへは世中の人こそひとつまうくへらなれ

雑

春秋はかはりゆけともわたつ海のなかなる嶋のまつそ久しき

みさきといふ處へまかれりし道に磯邊の松としふりにけるをみてよめる

磯の松幾久さにか成ぬらんいたく木高き風の音哉

ものまうてし侍し時磯のほとりに松ひさもと有しを見てよめる

あつさ弓磯邊に立るひとつ松あなつれ／＼けともなしにして

屏風の歌

年ふれは老にたうれて朽ぬへき身は住の江の松ならなくに
住の江の岸の姫松ふりにけりいつれの世にか種はまきけん
豊國のきくの濱松老にけりしらす幾世の年かへにけん

屏風の畫に野の中に松三本生たる所をきぬかふれる女人とをりたる

をのつから我を尋ぬる人もあらは野中の松よみきとかたるな

かち人の橋わたる所

かち人のわたれはゆるくかつしかのまゝのつき橋朽やしぬ闌

故郷のこゝろを

いにしへを忍ふとなしに石上ふりにし里に我はきにけり
いその上舊き宮こは神さひてたゝるにしあれや人も通はぬ

相州の土屋といふ所に年九十にあまれるくちほうし有をのつからきたりむかし語りなとせし次に身の立居にたへすなん成ぬる事をなく／＼申て出ぬ時に老と云事を人々におほせてつかうまつらせし次によみ侍る歌

我幾そみし世のことを思ひ出つ明る程なき夜のね覺に
思ひ出て夜はすからにねをそ鳴有し昔のよゝの古ことを
中々に老はつれても忘れなてなとか昔をいと忍ふらん
道とをし腰は二重にかゝまれり杖にすかりてそこ迄もくる
さりともと思ふ物から日をへてはしたひ／＼によはる悲しさ

雑歌

何處にてよをは盡さん菅原や伏見の里もあれぬといふ物を
歎わひ世をそむくへきかたしらす吉野の奥もすみうしと云り
世にふれはうき言の葉の數ことにたえす涙の露そをきける

あし

難波かたうきふししけき蘆のはにをきたる露の哀世中

ふね

世中はつねにもかもな渚こくあまの小船の綱手悲しも

千鳥

朝ほらけあとなき波に鳴千鳥あなこと／＼し哀いつまて

鶴

澤邊より雲ゐにかよふ蘆たつもうき事あれや音のみ鳴らん

慈悲のこゝろを

ものいはぬよものけた物すらたにも哀成哉や親の子を思ふ

道のほとりにおさなきわらはのはゝを尋ていたく鳴を其あたりの人に尋しかは父母なんみまかりてにし

とこたへ侍しを聞てよめる
いとをしやみるに涙もとゝまらす親もなき子の母を尋ぬる
無常を
かくてのみ有てはかなき世中をうしとやいはん哀とやいはむ
現とも夢ともしらぬ世にしあれは有とて有と頼むへき身か
わひ人の世に立めくるをみてよめる
兎に角に哀有けるよにしあれはなしとてもなき世をもふる鴨
ひころやまうすともきかさりし人あかつきはかなく
成にけると聞てよめる
聞てしも驚くへきにあらねともはかなき夢の世に社有けれ
世間つねならすと云事を人のもとによみてつかはし
侍し
世中にかしこき事も（わりイ）はかなきも思ひしとけは夢にそ有ける
大乘作中道觀歌
よの中は鏡にうつる影にあれや有にもあらすなきにもあらす
思罪業歌
焔のみ虚空にみてるあひちこく行衛もなしといふもはかなし
懺悔歌
塔をくみ堂をつくるも人なけき懺悔にまさるくとくやはある
得功得歌
大日の種子より出てさまやきやうさまやきやうまた尊形と成
心のこゝろをよめる
神といひ佛といふも世中の人の心のほかのものかは
建暦元年七月洪水漫レ天一氏愁歎せむことをおもひ
て一人奉レ向ニ本尊一聊致ニ祈念一
時によりすくれは民の歎なり八大龍王雨やめ玉へ

人心不常といふ事をよめる
とにかくにあなさためなの世中や喜ふものあらはわふる物有
黑
烏羽玉のやみのくらきにあま雲の八重雲かくれ鴈そ鳴なる
白
かもめゐる沖のしらすに降雪の晴行空の月のさやけさ
ある人みやこのかたへのほり侍しにたよりにつけて
よみてつかはす歌
夜をさむみひとりねさめの床さえて我衣手に霜そおきける
かゝるおりも有ける物を手枕の隙もる風を何いとひけん
岩根ふみ幾への峰を越ぬとも思ひも出は心へたつな
宮古より吹こん風の君ならは忘なとたにいはまし物を
打絶て思ふはかりはいはねとも便につけて尋ぬ計そ
宮古へに夢にもゆかん便あらは宇津の山風吹もつたへよ
五月の頃陸奥へまかれりし人のもとにあふきなとあ
またつかはし侍し中に郭公かきたる扇にかきつけ侍
し歌
立別因幡の山の郭公まつとつけこせかへりくるかに
ちかうめしつかう女房遠き國へまからんといとま申
侍しかは
山遠み雲井にかりの越ていなは我のみひとりねにや鳴なん
遠き國へまかれりし人のもとよりみせはや袖のなと
申をこせたりし返ことに
我ゆへにぬるゝにはあらしから衣山路の苔の露にそ有けん
しのひていひわたる人有きはるかなるかたへゆかん
といひ侍しかは

ゆひ初て馴したふさのこむらさき思はす今に淺かりきとは

山の端に日の入を見てよめる

くれなゐのちしほのまふり山端に日の入時の空にそ有ける

二所詣下向にはまへの宿の前に前川といふ川あり雨降て水まさりにしかは日暮てわたり侍りし時よめる

濱邊なる前の川瀬を行水のはやくもけふの暮にける哉

相模川といふかはあり月さし出て後船にのりてわたるとてよめる

夕月夜さすや川瀬のみなれ棹なれてもうとき波の音哉

二所下向後朝にさふらひとも見えさりしかは

旅をゆきし跡の宿守をれ〳〵（のイ）に私あれや今朝はいまたこぬ

民のかまとより烟の立を見てよめる

陸奥に愛やいつくし〔し脱歟〕・ほかまの浦とはなしに烟立みゆ

またのとし二所へまいりたりし時はこねのみつうみを見てよみ侍る歌

玉くしけ箱根のみうみ（海はイ）けゝれあれや二國かけて中にたゆたふ

箱根の山を打いてゝみれは浪のよるこしまありとものものに此海の名はしるやと尋しかは伊豆の海となん申とこたへ侍しを聞て

箱根路を我越くれは伊豆の海や沖の小嶋に波のよるみゆ

朝ほらけ八重のしほち霞わたりて空もひとつにみえ侍しかはよめる

空や海海やそらともえそわかぬ霞も浪も立みちにつゝ

あら磯に波のよる（よするなみイ）を見てよめる

おほ海の磯もとゞろによる浪のわれてくたけてさけて散かも

走湯山に參詣の時歌

わたつ海の中に向ひて出るゆのいつのお山とむへもいひ鳬

伊〔豆脱歟〕の國山のみなみにいつるゆのはやきは神のしるし成けり

はしるゆの神とはむへもいひけらし早きしるしのあれは也鳬

神祇

瑞籬の久しき代よりゆふたすきかけし心は神そ知らん

里みこかみゆたてさゝのそよ〳〵になひき起伏よしや世中

かみつけのせたのあかきの神社やまとにいかて跡をたれけん

法眼定恩にあひて侍し時大峯の物語なとせし聞て後よめる

幾かへりゆきゝの峯のそみかくたすゝかけ衣きつゝ馴けん

すゝかけの苔折きぬのふる衣いく木の本にきつゝ馴けむ

奥山の苔の衣にをく露は泪の雨のしつく成けり

那知瀧の有さまかたりしを

三熊野のなちのをやまに引ひめの打はへてのみおつる瀧哉

三輪のやしろを

今つくる三輪のはふりかすき社過にし事はとはすともよし

加茂祭歌

葵草かつらにかけて千早振賀茂の祭をねるやたか子そ

社頭松風

ふりにけるあけの玉かき神さひてやれたるみすに松風そ吹

社頭月

月のすむ北野の宮の小松原幾代をへてか神さひにけん

神祇

月さゆる御裳濯川の底清みいつれのよにかすみはしめけん

いにしへの神代の影そ殘ける天の岩戸の明方の月

八百萬よもの神たち集まれりたかまか原にきゝたかくして
　伊勢御遷宮の年のうた
神風や朝日の宮の宮うつしかけ長閑なる世にこそ有けれ
　述懷
君か代になをなからへて月淸み秋のみ空の影をまたなん
　太上天皇御書下預時歌
大君の勅をかしこみ父母に心はわくとも人にいはめやも
ひんかしの國に我をれは朝日さすはこやの山の影と成にき
山はさけ海はあせなん世成とも君にふた心我あらめやも

・　右鎌倉右大臣集以一本及流布印本挍合了

一本及印本所載歌

　梅の花をよめる
咲しよりかねてそおしき梅花ちりのわかれは我身と思へは
　春の歌
このねぬる朝けの風にかほる也軒はの梅の春の初花
　雨中柳
靑柳の糸よりつたふ白露を玉とみるまて春雨そふる
　落花をよめる
咲はかつうつろふ山の櫻花花のあたりに風な吹そも
みちすから散かふ花を雪とみてやすらふ程に此日暮しつ
　櫻をよめる
櫻花さける山路や遠からん過かてにのみ春の暮ぬる
　水底の山吹と云事を人々あまたつかうまつらせし次に
聲高み蛙なくなり井出の河岸の山吹今は散らん
立歸りみれともあかす山吹の花散きしの春の川浪
　欵冬に風の吹を見て
我心いかにせよとか山吹の移ふ花のあらし立らん
　三月盡
朝きよめ格子なあけそ行春を我閨のうちにしはしとゝめん
　卯花
我宿の垣根に咲る卯花は憂事しけき世にこそ有けれ
神まつる卯月になれはうの花のうき言の葉の數やまさらん
　深夜郭公
五月やみ小夜更ぬらし郭公神なひ山にをのか妻よふ
　郭公
玉くしけ箱根の山の郭公むかふの里に朝な〳〵なく
　照射
五月山おほつかなきを夕月夜木隱てのみ鹿や待らん
　蟬
泉川はゝそのもりになく蟬の聲のすめるは夏のふかさか
　夏の暮によめる
御秡する萱か軒はに引してのまつはれつきて夏をとゝめん
　詞書闕
今よりは凉しく成ぬ日暮しのなく山陰の秋の夕風
　蟋蟀
秋の夜の月の都のきり〳〵すなくはむかしの影や戀しき
　菊を
ませの内による置露やいかな覽ぬれつゝ菊の移ろひにける

秋の末によめる
はかなくて暮ぬと思ふををのつから有明の月に秋そ殘れる
初冬歌の中に
夕つく夜澤邊にたてるあしたつの鳴音悲しき冬そきにける
初しくれ降にし日より神なひの杜の梢そ色まさり行
霰
武士のやなみつくろふこての上に霰たはしるなすのしの原
笹の葉に霰さやきてみ山への峯の木枯しきりてそ吹
雪
久かたのあま雲あへり葛城や高まの山はみ雪ふるらし
建暦二年十二月雪のふり侍ける日山家の景氣を見侍らんとて民部大夫行光か家にまかり侍けるに山城判官行村なとあまた侍り和歌管絃の遊ありて夜更て歸侍しに行光黒馬をたひけるをまたの日見けるにたつかみに紙をむすひ侍るをみれは
此雪を分て心の君にあれはぬししる駒のためしをそひく
返し
ぬししれと引ける駒の雪を分はかしこき跡にかへれとそ思ふ
建保五年十二月方違のために永福寺の僧坊にまかりてあした歸り侍るとて小袖をのこしをきて
春待て霞の袖にかさねよと霜の衣のをきてこそゆけ
戀歌の中に
はみのほるあゆすむ川の瀬をはやみはやくや君に戀渡り南
夕月夜おほつかなきを雲まより仄にみえしそれかあらぬか
かれはてん後しのへとや夏草の深くは人のたのめをきけん
今さらにわか名はたゝしかはらやの下しく烟くゆりわふ共
もしほ燒蜑のたく火のほのかにも我思ふ人をみるよしも哉
足曳の山にすむてふ山かつの心もしらぬ戀もするかな
風吹は浪うつきしの岩なれやかたへも有か人の心の
よそにても有へき物を中々になにしか人にむつれそめけん
名所戀の心をよめる
須磨の浦に蜑のともせる漁火のほのかに人をみるよしも哉
から衣きなれの里に君をゝきてしま松の木のまては苦しも
我せこをまつちの山の葛かつらたまさかにたにくるよしも哉
水莖の岡邊のまくす枯しより身を秋風の吹ぬ日はなし
忍戀
時雨ふる秋の山へにをく霜の色にはいてし色にいつとも
寄月待人
忍ふれはくるしき物を山端にさし出る月の影にみえなん
恨わひまたしと思ふ夕へたになを山のはに月は出にけり
寄露戀
色をたに袖よりつたふ下萩の忍ひし秋の野への夕露
今もみてしか山かつのといふ事を
山賤のかきほに咲るなてしこの花の心を知人のなき
ある人のもとにつかはし侍し
秋の田のほの上にすかくさゝかにの糸我はかり物は思はし
旅の心を
草枕たひにしあれは妹にこひさむるまをなみ夢さへみえす
東路のさやの中山こえていなはいとゝ都や遠さかりなん
旅泊
湊風いたくな吹そしなか鳥いなのみつうみ舟とむるまて
やしのさき月影さむしおきつ鳥かもといふ舟うきねすらしも

素暹法師物へまかりけるにつかはしける
おきつ浪八十嶋かけてすむ千鳥心ひとつといかゝたのまん
返し
濱千鳥八十嶋かけてかよふともすみこし浦をいかゝ忘れん
秋の比いひなれたる人のもとへまかりしに便につけて文なとつかはすとて
思ひ出よみしよはよそに成ぬともありし名殘の有明の月
建保六年十一月素暹法師（于時胤行）下總國に侍しころのほるへきよし申つかはすとて
戀しともおもはていかゝ久かたの天照神も空に知らん
松間雪
雪積るわかの松原ふりにけり幾代へぬらん玉津嶋守
社頭夏月
なかむれは吹風すゝしみわの山杉の梢をいつる月かけ
寄松祝といふことを
田鶴のゐるなからの濱の濱松のまつとはなしに千世を社ふれ
行末の千とせをこめて春霞立田の山に松風そふく
障子の繪に岩に松の生たる所
岩の上に生る小松の年も經ぬ幾千世まてと契りをきけん
寄竹祝
竹の葉に降おほふ雪のうれをおもみ下にも千世の色は隱れす
なよ竹のなゝの百そちおひぬれとやそのちふしは色も變らす
なよ竹のちゝのさ枝のはゝ枝の其ふし〳〵によゝはこもれり
あひ生の袖のふれにしやとの竹よゝはへにけり我友として
大嘗會のとしの歌
今つくる黒木のむろやふりすして君はかよはん万代まてに
慶賀の歌
宮はしらふとしき立て万代に今そさかへむかまくらのさと

和歌部八十八 家集六

常徳院殿御集

文明十三年二月廿五日愚齋月次會

梅 凪但延引廿九日

にほひをはかせこそをくれ人はいさ心もしらぬ宿の梅かえ

五月廿五日會瀧五月雨

秋山にあらぬころしも宮たきや心そまよふさみたれの空

九月廿一日より平等寺に七日こもり侍けるに道のま
かきに荻のなひくを見やりて

こゝろなき賤かかきほのひまにたに秋をしらする荻の上風

廿三日題をさくりてよみ侍し名立戀

ふしのねの煙のみさそおもひしに我身のうへに有けるものを

十四年二月五日飛鳥井中納言雅康卿遁世して江洲松も
とと云所にまかりてかしらおろし侍ときゝてとゝめ
侍らんために重信を遣し侍しに年月の望にて侍るな
と申て

かしこしな君につかへし道なくはのかるゝ山の奥もとはれし

返し　十日遣之

君に先仕へし道はさもあらはあれ遁るゝ山の奥はとひてん

三月末つかた折句をよみてかいたう花に付て同人の
もとへつかはしける

形見にといひてやさても手折ましうつろふ花のけふの木末を

返し

梢にはうつろふ色も惜からし詞の花のときはかきはに

七月廿六日歌合し侍しに暮春鶯

暮行は身をうくひすの音にたてゝ啼はかりにもおしき春哉

九月三日家君長谷より茸かりのとて松たけを硯のふ
たに入てをくられたりけるを旬の上に置て

ふみ分むたか通路もかひそなきへたてゝ遠き住家成せは

返し

吹かせに玉とみたれぬ萩の露きしの小薄ぬきもとゝめて

十一月十八日題をさくりて人々に歌よませ侍しに海
邊月

もしほくむあまの袖しのうら波にやとすも心有明のつき

日比古今集のこと葉にて人々歌よみける時

古郷はもみちふみ分とふ人も秋より後の山おろしのかせ

十五年三月六日打聞し侍る所にて人々歌よみ侍しに
雨中花

なかめやるをちの霞はそれなから櫻にくもる春雨の空

五月九日故招月廿五年忌とて正般藏主人々に一品經歌すゝめ侍しに序品

よをてらす光は一ひかりにてちかひはよもの法のともし火

懷舊

さらに今袖ぬらせとや廿あまり五月の雨のいとゝひまなき

廿八日庚申に二百首題をさくりてよみ侍しに

秋月

かけやとすしのふか原の秋かせに露ちる月はなを亂れつゝ

夜灯

待いてし夕の月はかたふきて軒端の竹にのこるともし火

日比すみはへりける所よりことかたへ移ける夜月のくまなかりけれはおもひつゝけ侍りし六月十九日

軒端なる忍ふの露をかた見にて忘れなはてそ古郷の月

その比姉小路宰相基綱卿歌合の判をこひ侍しに詞にまかせ侍し折句

折しもあれ夏なき床に清水もりしくれぬ松をならす谷風

やそ嶋やみちくる鹽のはる／＼と松はらかけてくもる浪哉

霜こほり露さむくなる山かけはさそなかれ行柴のした草

とまやかたも中の月の西かけてよな／＼なみも少時宿かせ

しらせはや野への小篠をふみ分て通ひし袖に露かゝりきと

すみ捨て通ひしみちも絶にけりよもきふ深き柴のあみ戸は

露なから月こそかゝれ葎はふまかきのもとの草のしけみに

よしやたゝきえねと思ふ月くさの形見の露はひる袖をなみ

廿七日褒貶歌合に契晩夏戀

秋はまたほにいてぬ萩の白露よたのめぬ袖になとかゝる覽

晦日に北野法印禪椿社頭に侍しとて松虫をおくりたる次てにそえ侍ける

君ないのる神かきなれは松虫も秋より先にこゑよはふ也

返し

名にしおはゝ秋も一よにめくりこむ神の宮ゐの松むしの聲

七月廿五日月次會萩風

なく鴈をねさめの床におとろけは時しもあれや萩の上風

岡鹿

柞原またきもみちぬかた岡のすそのゝま萩鹿や分らむ

八月十五日夜公宴三首月前秋風

をくつゆはのきはのかせに亂れきて萩にしらめる庭の月影

湖月似氷

あま人はぬるもかた田の秋の月氷のなみに袖をまかせて

寄月顯戀

もれそめし露の行衞をいかにとも袖にこたへは月や恨みむ

月のいとあかき夜こむといひてさも侍らさりけれは文のおくに

ひとりみる今宵の月のおもかけを空たのめなる人になしてよ

返し　源義春

面影もさめうかるらん獨みることよひの月のそらたのめして

十月廿五日月次會氷閒細流

さらてたに岩まかくれし山水の氷てのちは面かけもなし

寄名所戀

みるもうししゐておもへとわかれての後せの山の有明の月

そのころ雑躰歌よみ侍しに短歌の返歌とて

かきなかす谷の下水哀ともうきなをかけむことの葉そなき

旋頭

鶯のひとくと告る我宿の梅かゝにおりしる比は猶そまたるゝ

混本

しまつとりうのゐるいしにはふ松のねをのみそなく□

折句

ふくる夜は雪のたるひに軒閉て氷にさむきひとりねの床

沓冠折句

夕たゝみむかひの山ちくれなからたかゆく方か雲に距つる

十一月二日北野社へたてまつるとて人々にすゝめ侍し名號のうたよむ

昔おもふ形みのみけしいかなれはちさとの浪に袖は朽けむ

い

いつくより雪けの雲になりぬらむ時雨も過ぬよもの嵐に

神

かみかきやみかきの松の手向草色なきつゆの言の葉そこれ

廿八日石淸水法樂櫻

さくら色の初はな衣つゆかけてかすみににほふ春雨の空

十二月十二日姉小路宰相基綱卿自詠を百番歌合につかひて後成恩寺關白判詞書給しを一見しはへれは嚢祖濟時大將のことをよみ侍けれは返すとてつゝみ紙にかきつけ侍し

我そまつしつみはてける水底の月になけきし跡ならねとも

返し

なけかしな君か光をたのむみはしつみもはてし水底の月

水底の月をあはれとなかめてそかゝる言葉の玉もかりける

十六年正月廿五日源倚俊家會始に庭松弄毎年舊冬移宿所也

殿つくり三は四はの松かけに猶たちならひいく千代かへむ

三月十日のころいはし水の社にたてまつりける卅首内

八重むくらかこふともなき古鄕に人こそ見えね松虫のこゑ

うらみしないせをのあまのすて衣なるれはそれもぬるゝ袂を

いつかさてみ山の竹に庵しめて浮世のなかを哀とおもはむ

十二日十首のたいをすゝめて人々よみ侍しに

海邊鶯

おきつなみ吹上のはまのはま風に花かあらぬか鶯のこゑ

同ころ多田院にこめ侍し五十首の中

いつのよのたかゆかりにかそほつ覽菫つむ野に春雨そふる

かたそきの行あひの霜のよや寒き衣うつなり住吉の濱

廿八日臨時會藤爲松花

くさならぬ濱松かえの藤なみをけふの手向にさそならうくらし

右歌者。舊冬對二後京極殿一讀二和歌一之時。攝政殿語云。春日山都能南志賀曾懷北濃 藤浪葉流耳案邊登輪。是隨分思給云々。奇特夢想也。然仰二中納言入道一彼御像令二書寫一。狩野大炊入道色紙形之歌大納言入道書レ之畢。則於二影前一披講。題者亞相禪門。讀師同。講師雅俊朝臣也。

四月梅子につけてつかはしける

あはれにもをしへの道をきかぬ哉昔の友はめくりあへとも

返し　　中納言入道

敎へすはそれともわかしさかぬ間の草葉にましる蘭も紫苑も

宮御方へ折句をよみて芍藥につけて參らせし

しけり行山下陰の草むらにやとれる露や暮をまつらん

御返し

しら露のやとれるからに草ふかき山ちや秋のくると見え南

同比かな題の歌人々よみしに卯のはな

のこりけり月の入にし籬にも光はとめつにはのうのはな

廿六日いにしへの歌仙の名を題にて人々よみけるに

俊成卿

行するゑにしのはれぬへきことの葉や昔の筆の跡にとめけん

爲世卿

白玉の葉分のかせやいにしへの伏見の竹のすかたなるらむ

五月二日内より慈惠大師の御法樂とて題を給侍しに
よみて奉れる

春　雨

いにしへのいもゐの庭の春の雨に草の莚のめくみをそしる

山　家

かしこしな横川の峯に契ありてよはひは杉のかけとふりにき

廿五日月次會夏虫

日くらしのなく音を風にたくへきてぬれぬ時雨を松にきく哉

六月下旬太神宮に奉りし百首歌中に

立　春

時しあれは神にむかしやおもひいつる天の岩戸のはるの曙

花

家つとによしさはたをれ山口はいかゝいはれの初さくら花

七月四日人々に萬葉風躰のうたをすゝめて褒貶し侍
し

駒なめて草かの山を分行はあさちか末にきり立わたる

夜に入て人々題をさくりてよみ侍しに初秋

しかりとてそむかれぬ身の夕暮にまつなけかるゝ秋の初風

七日に中納言入道すゝめ侍し七首のうち

七夕天象

星合をまちつゝをれは天川しら浪たちて月かたふきぬ

七夕植物

露はかりかけむ言葉の色もなしけふの手向の千種ならては

堀川院百首二の題を一首につくりて五十首をすゝめ
て千首に書なし侍けるとき

立春子日

子日する松のよはひに契をかはこれや万代やとのはつ春

打聞し侍る所にて人々題をさくり侍しに

閑居秋風

ひとりきく袖のなみたにふきとめて月にのこれる荻の上風

廿五日月次會餞別

白露のをくるゝけふの袖よりやたひれの山をおもひ出らん

その比うれふること侍けれは奏し侍し

たれもまたもれぬめくみの秋の露浮身はくちね谷の下草

御返し

万代の秋をもちきれいやましにこたかゝるへき松の言の葉

八月に從一位富子もとより女房ともなひてまうてき
たりけるかかへらむなと申をきてつくりたる荻のあ
りけるに付てことつて侍し

來（みイ）る人に秋のたよりはうとくとも荻のうはゝの風につて南

返　し

ほのかにも荻ふく風のつてにこそ君か言葉の便をも見れ

行人のたよりすくさぬ言傳をいかなれはかく疎ゝといふ覽

十五夜公宴御會三首霧間月

立きりもへたてなはてそいもせ山こよひそ秋の中河の月

返書戀

〔う歟〕さき中のかたみはとめしとはかりにうらみて歸る筆の跡哉

旅祝言

都思ふ草のまくらのかりねにもしつか成代そ夢に見えける

十九日月のおもしろかりけれは俄に人々めして歌よませ侍けるに名所里月

この里は初瀬のかねにゆめ覺て月をふしみの有明の空

廿八日打聞の所にて人々歌よみしに

朝萩

のる駒のあしたの原の露分ていさ見にゆかむ秋萩の花

九月五日源義春にはかに身まかりにけれは十二日あすは明月の名をえたる空を思ひやりて

おりにあへはなたかき月も曇れたゝ跡の煙を忍ふはかりに

内よりもみちのかた枝そめたるを賜はすとて

立田ひめをるや錦の青地にもえたに一村見ゆるなりけり

御返し

からにしきいつれの色も立田姫おほぬさにはなと織初けむ

打開所にて人々題をさくりて

寄虎逢戀

忘れめやこよひの露のかね事はとらふす野へのためし成共

十五日同所當座に秋田

秋山のふもとのをしねこきたれてかり庵さむみ時雨ふる也

同所にて題をさくりてうたよみ侍し時

古郷聞鹿

こぬ涯をまつとせしまにあれはてゝ野となる庭にさを鹿の聲

十月の比周全法師出雲國へまねきの侍をつかはす歌をもをくりてむやとありけれはよみてつかはし侍し

此比のいつも八重垣へたつともしくれの空に君かへらなん

自二内裏一賜二紅葉一仍奉之

いく秋か時雨ふりをける一もとの色にならへむ言のはそなき

二十首歌よみはへりけるに

夏去はあさのよりてのそよさらに御秡すゝ敷浪のゆふして

小川亭にまかり人々遊なとし侍し次に題をさくりて

冬竹

一よさへ夢やは見ゆるくれ竹のふしなれぬ床に木枯の風

今夜一夜逗留仍如斯詠也。

打聞の所にてよみ侍し檜原雪

穴師川かは音さむしまきもくのひはらや雪にうつもれぬ覽

寄草戀

かれねたゝ思ひいるのゝ草のなよいつしか袖の色に出る共

瀧　水

吉野川よしや憂身はたきつせの岩にくたくるあはれ世の中

十一月八日四季戀のかなの一字をかしらにおきてそのこゝろを人々によませ侍しに

初瀬ちやむかしの梅のたよりさへ心もしらぬはるの夕かせ

韻字を置てよみ侍しに林變容輝宿雪紅

たつた山梢の雪はつれなくてさくらをくるゝはるの紅

露暖南枝花始開

夏のくるかたえの梅のはるは先つゆあたゝめて花や咲らむ

十二月廿五日月次會冬浮嶋原
ふる雪にふしのねかけて見わたせは松に色なき浮嶋か原
冬因幡山
きのふこそ秋はいなはの峯の松あらしにかはる冬やきぬ覽
戀二見浦
ふたみかたあふよも夢のとはかりにあけてかひなき浪の手枕
十七年正月十日題をさくりて百首歌よみ侍しに梅
槇の戸をとし明方の梅かゝにうき春かせや夢さそふらむ
廿五日月次會始鶴有遐齡
いく年を立かさぬらむ山高みはるのかすみも鶴の毛ころも
この會に大納言入道限なくよゝ(は歟)ひはくもゐはるかにて宿にきなるゝひな鶴の聲とよみ侍りけれは遣しける
契りをく君かよはひもおい鶴のこゑふきかはせわかの浦風
返し
羽杖つき霜をふるまておい鶴の恵あらせよわかのうらはに
二月廿二日水無瀨殿法樂とて藤原政行すゝめ侍し立春
くれはとりあやに霞をおりかけてけさより來春の山のは
歸鴈
ほとそなき秋にこしちの月かけを花にかすめて歸る鴈かね
忍戀
くもるよにこむとちきらむそをたにもいはゝ知南袖の月影
別戀
さらすとてつらからなくに鳥の音を恨みて慕ふきぬ〴〵の袖(容イ)
觀世音菩薩と云字を上に置てすゝめ侍りしなり。

廿五日北野宮にたてまつらむとて人々すゝめ侍し山寒花遲
かつとくるなみの初花色みせて匂ふち出ぬ谷の下影
白地戀
かりそめのみちのたよりの梅の花そのかにふれし袖そ忘れぬ
三月八日水成瀨殿法樂とて三十首うたよみしなかに
これも又みゆきの跡は哀なり大内山のはなのした影
廿一日東山の花見に人々まかりて題をさくり侍しに初はな
いくよより開しはしらすこれやこの宿を千年のはるの初花
古寺花
夕つくひ雲に櫻はくれはてゝ入あひさひし志賀の山こえ
その比句ことにあまりたるとて風前花
名殘あれや梢ふきはらふ花の雲の明かたの月に山風のかせ
廿五日源倚俊會に路落花
こぬ人をいとひしまてはなかりしにさても苔ちの花の白雪
閏三月十四日當座に夕喚子鳥
鳥のなの呼聲くれぬわきもこをきませの山の待とせしまに
廿一日水無瀨殿法樂春庭
みなせ山なかめすてけむはるの色の霞と消し跡そかなしき
春弓
夏はまた弓末見えこしむさしのや東のまもなき春の若草
廿五日月次會林喚子鳥
よふこ鳥鳴ねに花や散ぬらむはやしの木かけ春そ淋敷
閏三月盡
彌生山かさなる雲の花衣なれてもつらしはるの別は

廿六日人々に六首歌よませ侍しに

けふよりや霞の袖も廣せ川淺せのみつはかつこほれとも

四月二日人々雜躰歌よみ侍しに折句

朝日かけ山の尾上にめくりきてくるゝ雲より五月雨の空

夕まくれきさ山かけにふる雪のかたえになひく柴の下草

隱題　山寺

すむ月のなかにありてふ男山てらさむまては猶そたのまん

廿五日　月次會　戀鏡

つらきかなみしおもかけもうつり行人の心の花のかゝみは

同比源氏目錄にて雜躰歌よみ侍しに隱題桐壺

秋のきりつほめる花の籬よりひとりほにいてゝなひく荻原

榊

いかにせむ通ふ玉つさかきたえて手にもたまらぬ水くきの跡

五月七日雨のふり侍しに人々うたよみける次に寄雨

釋教

おり〳〵に草木の色は變れとも催す雨はをのかひとしほ

十一日右京大夫勝元十三廻なりよりて源政元一品經

歌人々にすゝめ侍しに懷舊

たらちねの庭訓はのこるともいさめしみちのあとやこひ敷

副法花經遣之畢。

同日水成瀨殿に奉し五十首内（別奉納言）

はるはけにきひのなか山かすむ也ほそ谷川も氷とくらし

あらし吹み山の秋をわけ行は月よりおつるまつの下露

我心まかれる枝はもとめねと人のなをきそまれに成行

打聞のために五十首歌人々によませ侍しに述懷の題

にて大閤をろかなる身なから代々のあと付て三度そ

越しせきの白雪と侍けるをみてまいらせし

かしこしなふりにしよゝの跡とめて三度こえける關の白雪

返し

くもりなき世々の跡にもこえつへし君かこと葉の玉の光は

人々に廿一首をすゝめて日吉社に奉る中に

殘雪

春の色は淺茅か末にむすほゝれ風はあらちの山のしら雪

山時鳥

卯の花のまかきの山の時鳥夜もこえてやなかむとすらむ

紅葉深

露しくれのこれる山のもみち葉に夕日をそめて秋風そふく

述懷

われを人をろかに思ふ程はかり人をわか身のおもふよも哉

七月廿五日月次會露

浪のたまも秋にみたれて浦かせのふき上のをのゝ葛の夕露

薄

あつさ弓入のゝ薄わけまかひをちかた人に秋かせそふく

橋

この里は山のかけはし苔ふりて杉のした道とふ人もなし

八月廿五日月次會曉月

露しけき有明かたの秋かせに月かけさひしふる里のには

卜戀

いかにせむ浮木の龜のうらみてもあふせによらぬ契成せは

九月十一日水無瀨殿に奉りけるうたの中に別に（副イ）

奉納之

袖の色ははなかあらぬか都人わかなつむ野に雪はふりつゝ

廿五日月次會秋山朝

かつらきや花に詠めし名殘かはもみちにかゝる峯のよこ雲

廿八日源倚氏歌合の判をこひけれは書てつかはし侍しうち

折句
さひしさは浮身も秋のひとりねにともを尋て鹿そ鳴なる

山風に薄も菊もしほれけり峯のもみちはきのふとおもふに

十月二日自歌をつかいて柏木に判をこひて聖廟にたてまつりける時早春待花

あしかきのよしのゝ山のあさ霞まちかき花の俤そたつ

遐齡翫鶯

いくとせのはるにきゝけむ乙女子か袖ふる山の鶯のこゑ

砌下垂柳

古鄕の軒はの柳時しらぬわか世の春のすゑもたのもし

河邊春月

駒とむるひのくま川の春の夜にかけみる月もかすむ比かな

羇中曉花

たひねする木のしたかけにかけおちて花の袂も有明の月

山家秋夕

山里はかきほのことり庭におりて木の葉色つく秋の夕暮

池草氷閒

とをつ人かりちの池は氷してひしのかれ葉も霜さゆるころ

寄山神祇

春日山その藤浪の末ならはきたのゝ松にかけてたのまむ

述懷非一

愛まゝに人のとかとは思へ共思ひとくにそ身はしられける

廿七日古今集に同文字なき歌とて侍るを上に置て卅一首人々によませ侍し各冬也

よしの山おちはの梢いかならむはや古鄕はみそれふるなり

侍從中納言實隆卿に筆をたつねて侍しかは遣とてつゝみ紙にかき付て侍し

草かくれ霜の下なるきり／＼すいかなる春にあはんとす覽

返し

霜の下にうつもれぬとも苔こと葉の春にあはさらめやは

十二月廿五日月次會閑埋火

しもの後松の戸ほその閒のうちにつれなくむかふ埋火の本

羇中雲

芦曳の山分衣たつくもの袖もほしあへすうち時雨つゝ

十八年正月廿五日月次會始松爲久友

君そみむ四もとの松のかけしけみ雲ゐるみねに生のほる迄

同日源倚俊家月次會梅契遐年

いく代かはふりさけみえん春日なるみ笠の森の春の梅かゝ

藤原倚隆鶯のうたこひ侍しに

山鳥の尾上の梅に宿しめてなか／＼し日をうくひすそ鳴

二月廿二日水無瀨殿法樂とて藤原政行すゝめ侍しに

立春

けさよりは色わくほとに日かけさす岡への松に春はきに見

三月宮御方へ梅枝をまいらすとてむすひ付侍し

おもひきや春しらぬ身の宿に咲軒はの花は君かためとも（ほイ）

御返し

花もさそ我もまちえてうれしきは君か言葉の色をそへつる（ぬイ）

白藤につけて藤原倚隆につかはしける

君か心すゑの松山こさはこそこの藤浪のかけてうらみめ

返し

藤浪のかけてたのまはよもこさしふかき契りのするゑの松山

四月六日宗山より予出題にて廿首歌すゝめたりしに

窓柳春十首秋同之

これも又窓の螢の光かな柳にぬけるつゆのしらたま

野徑菫

すり衣君か袖ふるはる雨に紫のゆきすみれつみてん

松藤

石はしる瀧なき山の松かえにおち來る水や春の藤浪

庭荻

いつのよの秋の哀のかせよりかのきはの荻の音つれぬらん

見萩

袖の露は人の心をそめはてゝ萩の下葉の色そうつろふ

秋竹

しくるとも色はかはらしくれ竹の園生の秋の代々のした影

九日石淸水にこめ侍し卅首内落花

風ふかはなしと答へむ門さしてちらぬ櫻にあはさらよし〔ま歟〕を

十六日四季をわかちて人々歌よみ侍しに

霜か雪かひとりなかめてさよ衣打おところけは有明の月

廿二日褒貶歌合に首夏

木々もはやかとりの衣袖かけてね覺のまとの露のしたかせ

藤原尙隆一夜こぬ事侍しに五月六日あやめにつけて

見せはやな菖蒲の枕ひとりねてけさ迄かくる袖のうきねを

つかはしける

返し

袖の上にかくる菖蒲のなかきねを君かよはひの枕にそひく

十日古人の名にて人々歌よみ侍しに山邊

取名 春日山のへのさをしか心せよ秋萩さきて露みたるなり

忠岑

取歌 いにしへの有明の月の別より秋の心のかきりをそしる

順

取名 なには潟ことうら船の名もつらしたからき中に遠さかる覽

俊賴朝臣

取歌 まさきちる峯のあらしの音信をきゝけむ人は逢よしもなし

爲家卿

同 花のすかた面影にして散にけんその木のもとそ今も戀しき

頓阿法師

取集 今もなを袖にかけてそおもひしる草の庵の言の葉の露

雅世卿

取名 蔦かえてしけみわけきてうつの山さよ更かたの露にぬれつゝ

廿二日公宴水無瀨殿法樂五十首午隨不逢戀

うき契り結ひもやらぬ揚卷のとくる氣色はいかて見えけん

戀自我下人

山かつのなけきの程をおもふには宿のけふりも立ける物を

右題十九日賜之。廿一日詠進之。御一座之樣戀雜題五十首也。作者廿二人。各二首詠之云々。

廿五日月次會夏草露

草ふかきまかきの本のきりきりす秋まつ露や泪なるらん

寄糸戀

河内女か手染の糸のくるとおくと我思ふ心いく夜をか經し

遠寺鐘
はつせ山あらしにまかふ鐘の音をふしみのくれに誰か聞けん
十五日藤原尙隆十首歌人々にすゝめ侍しに
峯霞
みよしのゝ青ねか峯はかすめ共こけの衣はたつとしもなし
鷹
御かり野や木居せぬたかの振舞に寛かひしてすゝやときてむ
楊貴妃
宮の內は露のうてなとなりはてゝ消けむ人の跡そかなしき
つくりたる松に露の置たるを筆にそへてつかはすと
て
いくかへり松にをく露積りてかふての海とはならんとす覽
返し　藤原尙隆
いく代まて松の言のはかきあつめ盡せぬ筆の海をたゝへん
八幡名號を上にをきて卅三首歌社頭に奉りしなかに
むかしたれ古のゝ澤につみそめてかたみのわかな袖濡す覽
八月初つかたよみ侍しはつせ山
心あてにわかはそわかかむ初瀨山ひはらの露に秋はなけれと
十日藤原尙隆すゝめ侍し歌合に山家月
岡のへや松ふくかせに夢さめてのき端の山の月を見るかな
依戀祈身
此まゝにかけはなれすはしめ繩のなかきを人の契と思はん
十五日夜二首歌中納言入道すゝめ侍しに秋月入簾
月見よとすたれうこかす秋風に君まちをれは夜そ更にける
九月二日假名題歌よみ侍しにふちはかま
又やこむすそ野の原のふちはかままはきにすれる花の盛を

こひわひぬ
人よさていかに難面く永らえむ戀わひぬ共しりてやみなは
九日宗山聖廟に詩歌をたてまつられけるに不逢戀
山鳥の尾上のさとはなのみしてかくろへかねし夕暮の空
廿一日藤原尙隆人々にすゝめし歸鴈
おりしあれははるのにしきやこれならむ柳さくらの衣鴈金
雜々の歌に
あきらけき御代の光をしるへにてよもに曇らぬ春は來に鳬
下もみちうつろふ比の山風は月のためともおもはさりしを
わしの山高ねの花のにほひてそひらけそめける法の言のは
廿五日月次會關鷄
あしからや關ちの鳥のなくねよりいそけとくらき竹の下道
十月中旬題をさくりて夕落葉
夕つく日さすやは山の峯の松のこるこすゑはあらし吹也
十五日柏木大納言もとよりもみちにつけて
うすくこき此一枝は山ひめの心をいかてわけてそめけん
返し
山ひめのそむる心の色よりも君かことはやたくいなからん
十一月中つかた藤原尙隆とさしむかひに歌よみ侍し
とき江雪
湊風夜さむになりぬあすや又なこ江のたつの雪にうかれむ
廿三日三十首歌日吉社にこめ侍けるに
早春
きのふけふくものはたても霞みつゝ天津空より春はきに鳬
無常
大かたの夕のくもゝあはれなりわか身のいつの空に詠めん

寄神祇祝言

くもりなき君か世いのる心こそ日吉のかけの使なるらめ

朗詠題にてよみ侍し歸鴈

したふそよ春の有明の山のはにたへてつれなく歸かりかね

僧

いかにせん衣にかゝる玉ゆらのしはしはなれぬ浮世也せは

將軍

八雲たつ出雲やへ垣宮ゐせし契のすゑはたえしとそ思ふ

十二月中旬あふことはと云五字を上にすへてよみし十首內

逢ことはいなはの山の秋のかせしくれぬ松の色もうらめし

海住山大納言高清卿御扶持あれと言事を句のかみにをきてたひ侍し

心さしふた心なく契りきてあふく君にはれいもたかへし

返しこゝろゆる

これも又これも又とやろんすらむ弓と馬ともるい代のみち

源寬行人丸名號の賛に愚詠をよみてと申侍けれはかきてつかはし侍し

風のすかたあふきてみれは敷嶋の山とし高き言のはそこれ

文明十九年二月廿日石清水社法樂廿首內

いつる日のかけこそかすめ豐國の鏡の山に春たつらしも

かた鋪の袖のむめかゝ匂ふよは春の嵐にねむかたもなし

露は猶いつれのかたにみたるらむ軒の柳にさゝかにの糸

なにとなき歌よみしに初秋雲

今よりのなかめへたつなみねの雲露もしくれも色は分とも

擣寒衣

しもやたひおきなさひ行仙人の鶴の毛衣たれからつらむ

俳諧歌に鹿

とにかくに船につきたる名なり鬼かいよと鳴もさを鹿の聲

廿三日姉の去年身まかりしをとふらふとて一品經のうた人々によませ侍しに勸發品

賴もしな法の衣のおりに逢ておほふはかりの袖のめくみは

申出　御製隨而公武詠之。廿八人各一首也。

三月中比見るに梅の花をかさりてうちの女房につかはすとて

渡津海のかさしの花は有といへと梅見る迄は思はさりしを

盡日人々に五首歌すゝめ侍しに

夕月夜有明のかけをしく花のかたみもつらしみよしの山

梓弓はるくれぬめりいさゝらは彌生の空を引もとめなむ

雲かへるやよひの山のもゝ千鳥散にし花に詠なくても

歸こむ我身の春もしかりとてそむかれなくにしたふけふ哉

ちりし花のこれる藤の花までも獨なかめておしむ春哉

五月廿一日庚申によめる夏風

川きしや岩ねの柳うちなひきむすふ清水に山かせそふく

夏車

夕かほの露の契りやを車のとこなつ(か脫歟)しきかたみなりけむ

夏刀

あやめ草おなしすかたに置馴て枕の露や光そふらむ

廿五日月次會森

たかさとのたよりもしらす玉嶋やこの川上の五月雨の比

竹

山本や里のけふりは立消て竹にのこれるあきのゆふかせ

六月六日折句歌おもてかは

奥山のもみちややかてゝらす覽かたへの日影はや時雨つゝ

七夕七首人々にすゝめて褒貶歌合し侍しに

待七夕

君やこむ我宿たとる夕くれの雲のはたての星あひの空

七夕雲

白雲は聳にけりなたなはたのあまつひれふると空にみる迄

七夕霧

彦星の待夕くれの秋かせにきりたな引てあふ人もなし

七夕橋

はつ秋のもみちの橋の色よりや四方の梢もちゝにそむらん

七夕衣

へたてゝもよはのつらさは恨なよ七夕つめの中のさころも

七夕舟

七夕のたむけのみかは秋ことにけふのかちとる漢川をさ

七夕後朝

立かへりこむ秋までのかねことやあまのかはらの葛の下風

人衆十人。大納言入道付ニ當座勝負。

廿七日諏方社法樂とて神主貞通下時信の守兼日より題を

たひ侍し花

さゝ竹の大みや人の春の色にさほ山さくらさきにけらしも

戀

うき人の心のあきの袂より月と露とはらみはてゝき

祝

すくなるを眞に定めまかれるをみちにおこなふ我君のため

廿九日父の十七年忌とて藤原政行すゝめ侍し一品經

歌に序品大光普照のこゝろを

秋の空心よりすむ法の月はてらしのこせる山のはもなし

懐舊

十あまり七年過し秋かせは今もたもとにふく心ちして

自二十八日長享

八月下旬つれ／＼に人々歌よみ侍しに苅萱

いつ迄か鶉の床にたのみけむ露にはかなきのへのかるかや

九月三日宗山勸進に夜荻〔本ノマヽ〕

くさのなのおきて詠めし夕くれたえけるものをよはの秋風

寄鳥戀

はしたかのをのれあふ事はかたきよに心打絶て物をこそ思へ

但廿八日給題。仍朔日詠進之。

十二日近江國進發のためにおもむき侍しにまつ東坂本の陣所にて十九日續歌よみ侍しに暮秋山

なか月や日もうす衣たつた山もみちのにしきあらしふく也

夜神祇

神樂歌にうたふさゝ浪よるなれとひよしのちかひ曇らぬ物を

十月四日さかもとよりうみをこして安養寺と云ところへちんをよせ又しはらくそれに逗留し侍しなかに

女房のなかへのよしにて家君に贈侍し

坂本のはまちを過てなみ安くやしなふてらに住とこたへよ

返し

やかてはや國治まりて民やすくやしなふてらも立そかへ覽

廿七日まかりと云所へ又陣かへし侍しに霜月廿日あまり中納言入道宋世もとより

かへりねと志賀の浦浪たゝぬ日も君を都にまたぬ日はなし

返し
思ひとけは浮世なり見しかの蚕の業もしつへき旅の日數を
同比鴈のつはさにむすひつけて侍從中納言もとへ
此まゝにさてややみなむ十あまりこゝのへの年は雲に行共
かへり事
遠きをもおさめしる代は行かよふ鴈のつかいの雲に見え見
閏十一月廿八日一昨日より二樂軒安養寺に宿をとり
て卅首歌張行侍しに朝山雪
朝ことの花になかめむ色よりもかゝみの山のさくら木の雪
卽談合二樂每朝鏡山一段神妙々々　十二月二日侍從中
納言くたり侍りしに御製をおくり給てはへりし
君すめは人の心のまかりをもさこそはすくに治なすらめ
御返し　四日奉之
人心まかりの里そ名のみせむすく成きみか代につかへなは
その末つかたに藤はら尙隆とたゝさしむかひによみ
ける時湖邊歲暮
うき秋はおもはさりけりさゝ浪やはまへに年の暮物とは
爐頭歲暮
春近き廿日あまりのいたつらに身もうつもるゝ埋火のもと
寄名所戀
月よさていかに契りてしのふ山つゆより袖にやとりきぬ覽
我戀はしらつき山のしられねは只ゆふたゝみゆふてたにみむ
長享二年正月十五日百首題を人々につかはし侍し內々
會始立春
三冬つきはるきにけらし乙女子か袖ふる山にかすみたな引
三月十三日卅首の題をさくりて歌よみ侍しに花盛

くもやあらぬ花のよそめのよのほとに昨日の山そ稀に成行
所勞之間殊左遂之。
五月朔日藤原尙隆につかはす
けさよりの詠めも隙はあるものをうき人ゆへの袖をみせはや
返し
如何みらん五月雨の露にあらて香珠計なき袖を過る月の色
女院御ことほとへて侍從中納言に申とて　實望朝臣上
洛の次にことつけて遣し侍し
思ひやれ國のはゝ木々かれしより玉の緒よはみなけく心を
返し
すみ染の袖にめなれてことのはのよにゝぬ花そをき所なき
女院嘉樂門崩四月廿八日。此詠送事五月中澣也。愚詠
は
初はるのはつねのけふの玉はゝき手にとるからに
ゆらく玉のを
此心也。但比興歟。
六月十八日卅首續歌侍しに彌勒
今そしるたかのゝ山にしむる庵はあけむうきよの夢の宿りと
法花
一枝の花に心のひらかすは露のなさけもしらすそあらまし
その比後成恩寺殿の詠草をみて　內大臣に返しつかは
すとてつゝみ紙に書付て侍し
さくもゝの言葉の花のかゝみにもたつをもかけの水茎の跡
彼作者桃花也。故如此。
返し
君かいまみかきそへすは塵つもる言葉のはなの鏡ならまし
六月つくる日歌合し侍りしに名所夏秡判者予

しかの浦や春のおもかけ立浪の白ゆふ花にあさのゆふして

路納凉

夏ふかき山ちの夕日色くれて秋にすゝしきならの下かけ

欲迎秋近

今もさくまかきの萩のさよ更て一はのそはむ秋の風かは

寄風戀

うらめしや恨やりても吹風のつてはいかにととはゝ社あれ

寄草戀

しはしとて結ふ契りは枯行に秋まつ草よしけらすも哉

天

わか心くるらしと思道よりそ天津みそらもきよくてらせす

甲

四方にみつ星のやとりに雲の腰はやふき歸し空もはれなむ

八月十八日初鴈を内へまいらせし文のおくに大納言三位（僧綱女）のもとへかくなん

玉章は雲ゐの外に待もみすはる別こし鴈はくれとも

返事御製の短籍を書そへられて侍し

かけてくるかりの翅の文ならていつか都に君を待みん

依二數寄一注二雖レ雜レ計一　天氣ニ拵レ之處如レ斯。眉目之如何之。

廿五日佛供養（地藏）し侍る導師に天台座主尊應を請し侍て廿首歌講し侍し次に萩如錦

一よにや紐ときそめし小車のにしきとみゆる秋はきのはな

湖上月

秋ふくるかたののうらの蜒人は月にうたひていくよへぬ覽

述懐

よにしらぬ浮身なりともをのつから願文よ契（有注）たかふな

十月三日夜雨ふりてつれ〳〵なりしかは歌よみ侍しに初冬時雨

きのふけふ神有月の空かけて雲の八重かき時雨きにけり

殘鴈

引すてしひたのかけ繩なかきよのかり田の霜に落るかり金

山家友

此里は梢のさるにはの鹿それならてたゝともなはゝこそ

十一月十四日歌よみ侍しに窓前雪

灯を花の光にさきたてゝまとの白雪春いそくなり

古寺雪

しら雪のふり分かみのつゝゐつにあり原寺の跡をしそ思

長享三年正月廿二日卅首題人々に遣しける（内々會始）早春霞

つくは山めくむ霞の黛能こやはつ春の衣にはあるらし

叢虫

野への色つゆのなさけにかはり𡋾庭にうつしゝ虫の鳴音は

述懐泪

人もらし我身もつらしとはかりにとにもかくにも落る泪よ

二月のはしめつかた瓶にむめのはなをさして藤原倚豐につかはすとてこのうたをむすひつけ侍し

菩提心無非中道にそむかすは一色一香のたねやこの花

廿五日聖廟法樂とて五十首歌人々よみ侍しに社頭梅

さくむめの花のにしきを手向山春吹かせもかみのまに〳〵

近花

あかす見るにはを盛の花ゆへに軒はの山のかけやくれなん

浦月

いせの海やしほひのたつの辭たけてわかの松原月さえ渡る

積雪

松は緑まさらむとする暫よりふりをける雪をあはれとそ思

切戀

たゝたのめいはゝや物を僞になさむ限りのはてをしらすは

名所夜

同

露も猶ゆるさぬ月の袖のうへにいく夜か宿をかるかやの關

薄

吹かせの音もなつかし花薄なひく籬の秋のゆふくれ

名所擣衣

いにしへを思ひみたれて陸奥のしのふの衣誰かそふらん

原上霞持

文明十四年六月十日歌合

古郷は霞そこむるみよしのゝみかさか原に春や立らむ

見花忘恥持

同

山櫻春はいかなるならひとて人めもしらぬはなの木の本

麓納涼勝

同

風かよふふもとの野邊の葛かつらかた葉の露に秋そ近つく

田早秋負

同

今朝見れは露をきそふる小山田のかりほの庵に秋はきに鳬

月似鏡持

同

み空行月は鏡と見えなから手にはとられぬ物にそ有ける

芦間氷持

同

みしまえや霜におれふす芦のはもなひかぬ迄に氷る比哉

不叶心戀勝

同

つらくとも逢を限とおもはすは人に哀をなにかかへまし

互恨戀同

同

君と我ふたみの浦の恨ゆへかけ衣ほす隙もなし□□□〔なみ脱歟〕

山家戸負

同

さらてたにあれまくおしき山里の柴の戸たゝく峯の松風

祈世神祇持

同

君か代も猶すくなれと祈るそよたゝすの竹にかもの水かき

寒夜月

文明十三年十一月二十日歌合

秋に見し露をは霜にむすひかへて枯野の月の影そ淋敷

竹雪深持

ふりつみし籬の竹は折ふして雪よりはるゝまとの明ほの

忍逢戀勝

あひ見てそ心のおくはしられける忍ふの山の露の下みち

夏日陪　多田院廟前詠五十首和歌

征夷大將軍從一位行權大納言源朝臣義尙

春十首

たちわたる長柄の橋の朝かすみ春の氣色を何にたとへむ
梅かほり鶯の音もくれはてゝ軒端ゆかしき春風そふく
松たかき日影のうへは霞はれてけふりにつゝく里の夕暮
吹をくるあらしの後のむら雲に雨を殘して歸るかりかね
只暮ぬ暮すとけふはとまら南明日やはいかに花の下ふし
月よし吉野の山のやま櫻まかはゝまかへみねのしらくも
へて見はやあたの此世も一さかり人と風とのしらぬ櫻を
いつのよのたかゆかりにかそほつらん菫つむのに春雨そ降
磯山やいはほか中のかきつはたよを隔てつゝ恨みてそふる
くれぬめりしはしはとめよ呼子鳥春のわかれもなれか別よ

夏五首

から衣きつゝなれにし花の色にかへむ袂の名こそおしけれ
郭公月にかたらふしのひねのさなからあくるよはの短かさ
橘をねさめのまとにゝほはせて月の枕に水鷄なく也
小山田や杉の下かけ雨すきてすゝしき露にとるさなへ哉
みそきする難波の芦の夜のほとに秋きにけらし住吉のはま

秋十首

秋きぬと吹すきてくる風の音につらくも有哉袖の白露
をく露はあたちの原の霧の内にかつ／＼秋の色そこもれる
初鴈のつはさにかゝる白雲はをのつからふくあきの夕かせ
哀れをは荻のうは葉にかこたなむたもとはゆるせ棹鹿の聲
故郷にきり／＼す鳴てはたさむき秋風たちぬあけぬ此よは
我心こと有かほのなかめ哉月はかりなるあきのいろかは
をか野へのわさ田のをしね色つきて山もと淋し秋のゆふ暮
露に萩きりに紅葉をこきませてたつた（本ノマヽ）の秋をしそ思
秋されはまかきの菊の霜やたひおくあらはなる高圓の宮
かたそきの行あひの霜の夜や寒き衣うつ也住よしの濱

冬五首

山かせにかり田の木の葉吹分て時雨のしたにうつら立也
時雨の雨ふらはふらなん故郷のみかきの紅葉散ぬともなし
あられふるかたのゝ眞柴わけまよひ夕かり衣ほす隙もなし
筏士のみちはこほりに絶にけり槇木も雪にうつもれぬらむ
ふる雪にわかすむかたはとひこかし芦やの里の冬のくれ方

戀五首

柞ちるおなしおのへのしのすゝき本の心やいろにいつらむ
身を秋の末のゝま萩つゆかけて袖も心もおきのうはかせ
厭はるゝなけのなさけを忍はすは人め計のなみたならまし
難波女のすくものけふり空にのみこと浦風のつても恨めし
歸るさの袂に殘る月影はくもれるしもそかたみなりける

雜十五首

月影をならのみ山の高根にてかなふねかひを照してし哉
春日山ちかひをあふく松かせに神さひわたるよろつ代の聲
吹風を心のそこにこたへなん胸のはちすも今やひらくと
春はまつ明ほのはかりかこてとも秋の夕もをのか一とき
すてぬよをくやしきとおもふ心こそたゝうち數住居也けれ
あはれ又いつの日まてと數まにをくるゝ涙いく世へぬらん
浪かゝる袖に跡ふり濱千鳥しほれてたにものこるうき名に
ふかく入て人の心に宿とへはとめんとめしは情なりけり

たかみそき夕露はらふ足引の山分衣袖もしみゝに
うつの山都は月もをくりきと露にともなへ蘿の下かせ
あま衣しきつの浦の松かけに幾世の波をかさねきぬらむ
燈火の明石の瀬戸に見渡せはおきつの田鶴の友なしにして
鷺のゐる田中の柳色くれて夕日かけろふきりの下みち
小さゝ原なみたあらそふ草むらに夜をしる虫の聲そ露けき
をくりおく二位のふたこゝろなくて吾道をなをまもらなむ

右三十一字をつゝり。五十首につらねてかの廟院にたてまつる。むねおほきに似たりといへとも文道にをきて其名たかく。武藝に至て其譽おほひならむことをおもふ。此願に過さるへし。おほよそ水の尾のすめるなかれを請て。桃園の跡からはしく。第六孫王の餘裔をつき。いま天の下のかたき守りとして柳營のかけ盛なる。無雙重器の元祖となれり。されは多田の鳴動をもて四海の安危をかゝむ。よりてわたくしの尊祟はなはたしきのみならす。つゐにおほやけの嘲哢いちしるきかゆへに。あらたに二品の位階を送りて。さらに千載の美談とせり。抑餞別の玉辭を拾遺の集にととむ。靈神の丹心も雅頌の道にあらむものか。是によりていま長柄のはしの朝かすみ。難波のうらの晩夏より神のちかい萬代まてあふかむことをおもひ。吾道二心なく守りまさんことをねかふにいたるまて。事によせてことはをのへ。ものにふれて心さしをあらはす。をのつから是神を感せしむるの道にかなはゝ。國家をたすくる力をくはへたまふへしとなり。時に文のあきらかなる年の第十六の暦。夏五月のはしめの十日に。いさゝか是をしるしをはりぬ。

右五十首和歌以多田院藏眞蹟摸本挍正

群書類從巻第二百三十四

和歌部八十九 家集七

柿本集

春

昨日こそ年はくれしか春霞春日の山にはや立にけり
きのふこそ月は立しかいつのまに春の霞の立にけるそも
あすからは若菜摘んと片岡のあしたの原はけふそやくめる
梅花それとも見えす久方のあまきる雪のなへてふれゝは
誰か宿の梅の花そも久堅のきよき月よにこゝらちりくる
来てみへき人もあらなくに我宿の梅の初花散ぬともよし
我せこにみせんと思ひし梅花それともみえす雪のふれゝは
梅の花まつ咲枝を手折もてつとゝなつけてよそへてもみん
雪さむみさけときかれぬ梅花なほ此ころはしかとあるかは
梅花さきて散とはしらぬかも今まて妹か出てあひみぬ
わか宿にさき散梅を月清みよる〳〵きつゝみん人もかな
(せをイ)風はやみ落たきつらし白浪にかはつ鳴也朝夕毎に
河水に蛙なく也夕されは衣手さむみつまゝくらせん
わかせ子をならしの岡のよふこ鳥君よひかへせ夜の深ぬとに
よそに有て雲井にみゆる磯の上に咲散花を(もりにはやなれ萬)とらてはあらし
朝な〳〵わかみる柳鶯のきゐて鳴へき時にはあらぬ
とまりゐてかつらき山を見渡せは雲そ降るまた冬なから
青柳のかつらにすへくあるまてにまてともなかぬ鶯の聲
春雨のうちふることにわか宿の柳か枝はいろつきにけり
今さらに雪ふらめやもかけろふのもゆる春ひと成にし物を
春雨にもゆる青柳手に持て日ことにみれとあかぬ君かな
爰にきて春日の原をみわたせは小松か上に霞たな引
わか宿に鳴しかり金雲の上にこよひ鳴也くにへ行かも
春されは野へに鳴てし鶯の聲も聞えす戀のしけさに
春霞たな引山の櫻花はやくみてまし散過にけり
櫻花枝になれたる鶯のうつし心もわかおもはなくに

夏

我宿の池の藤浪さきにけり山ほとゝきすいつかきなかん
　たこの浦にて藤の花をみて思ひをのふ
田子の浦そこさへにほふ藤浪をかさしてゆかむみぬ人の爲
時鳥かよふ垣ねの卯花のうきことあれや君かきまさぬ
時鳥なくや五月のみしかよも獨しぬれはあかしかねつも(つゝイ)
われこそはにくゝもあらめ我宿の花橘をみにはこしとや
我宿の花橘に時鳥さけひてなかんこひのしけきに
かたよりにいとをこそよれ我せこか花橘をぬかんと思ひて

我せこをうらまちかねて時鳥いたくなかなん戀もやむやと
我ことく君をまつとや時鳥こよひすからにいねかてにする
萩の花枝もたはゝ（とをゝ萬）に露（霜）のおきさむくも夏（時は）の成にける哉
庭草に村雨ふりて日くらしのなく聲きけは秋はきにけり

秋

天川こそのわたりのうつろへはあさせふまに〔むまにイ〕夜そ深にける
天川とほきわたりにあらねとも君かふなては年にこそまて
わたし守舟はやわたせ（わたせをとよふ聲のいたらねはか萬）おとよはふ聲もきかぬか梶音もせす
渡もりはや舟わたせ一とせにふたゝひきます君ならなくに
年にあひて一夜妹にあふ彦星の我にまさりて思らんやそ
としのこひ今宵つくしてあすよりは常のことにや我戀を覽
あはすてはけなかき物を天河ふなてはせまし夜の深ぬ時
あはすてはけなかき物を天河へたてゝ又そわかこひをらん
彦星とたなはたつめとこよひあはん天河原（せ・とイ萬）に浪立なゆめ
天川霧立わたり彦星のかちおと聞ゆ夜の更行は
天河川〔衍歟〕打橋渡し妹か家にやます通はん時またすとも
天河せをはやみかもむは玉の夜は深行とあはぬ彦ほし
銀河（たまかつらたえぬものから萬）夜は深行てさぬるよは（らく萬）としのわたりにたゝ一よのみ
七夕の今宵あひなは常のこと秋を（月日イ）へたつる事（年イ）なから南
天河こそのわたりはあせにけり君かきまさんあとの白波
天河せゝの白波ふかけれとたゝわたりし（き萬）ぬまてはすへなし（くるしみ萬）
妹にあふときかたまつと久堅の天のかはらに月そへにける
戀るひはけなかき物を今宵さへともしかる（むへしや萬）へくあふへき物を

彦星のつまよふ舟の引つなのたえんと君にわか思はなくに
神なひの山下とよみ行水にかはつ鳴なり秋といはゝや
戀つゝもいなはかき分我をれはともしくもあらす秋の初風
夕立の雨ふることに春日野の尾花か上のしらつゆおもふ（はゆ萬）
此くれに秋風吹ぬ白露のあらそふ花のあすかみさらん
てまもなくうゑし草はた出みれは宿の初萩咲にけるかも
秋風はすゝしく成ぬ駒なへていさみにゆかん萩の花みに
白露のおかまくをしき秋萩を折のみ折りておきやからさん
秋の田のかりほの宿の匂ふ迄さける秋萩みれとあかぬかも
春されは霞かくれにみえさりし秋萩さけり折てかさゝむ
我待し秋は來ぬか（し萬）ゝれとも萩の花こそひらけさりけれ
皆人は萩を秋といふいなわれは尾花か末を秋とはいはん
玉ほこの君かつかひの手折たる此秋萩はみれとあかぬかも
このよらはさ夜深ぬらしかり金の聞ゆる空は（にイ）月わたる（たちわたるイ）みゆ
我宿にさける秋花あきならは（常ならは萬）我待人にみせまし物を
我宿にうゑ生したる秋萩を誰かしめさす我にしらせて
わきもこに行あひのわさをかる時に成にけらしな萩の花咲
我妹子かあかもぬらして植し田をかりて納めんくらなしの山（はまイ）
秋霧のたなひくをのゝ萩か花今や散らんいまたあかなくに
戀しくはかたみにせよとわかせこか植し秋萩花咲にけり
秋されは妹にみせんと植し萩露しもおきて散にけるかも
秋萩におけるしら露朝な〳〵玉と社みれおけるしらつゆ
白露と秋の花とをこきませてあくことかたきわか心かな
此比の秋風さむみ（あかつきつゆにイ）わか宿の萩の下葉はいろつきにけり

秋萩をおらす（ち萬）なかめのふる比はひとりおきゐて戀る事多き
秋風は日ことに吹ぬ高松の野への秋萩ちらまくをしみ
鴈金のきなかん日までみつゝあらし此萩原に雨なふりこそ
わか衣すれるにはあらす高松の野を行しかは萩のすれるそ
さきぬ共しられし我はたゝにあらん此秋萩にしらてをあらん
みまほしく我まち戀し秋萩は枝もたはゝに花咲にけり
秋風の日ことに吹はつゆかさね萩の下葉はいろつきにけり
秋萩はちり果ぬへみ立よりてみれともあかす君としあれは
夜をさむみ衣かり金鳴なへに萩の下葉は色つきにけり
棹鹿のあさふす（きイ）をのゝ草わかみかくろひかねて人に知らるな
鴈金は今そきなかぬわか待し紅葉はやつけまてはくるしも
鴈金の初聲聞てさきてたる野への秋萩みにこわかせこ
かり金を聞つるなへに高松の野のうへ草はいろ付にけり
雁かねのさむき夕の露ならん春日の山をもみたす物は
かりかねの聲聞からにあすよりは春日の山も紅葉そめなん
かりかねのさむく成より水くきの岡の木葉はいろつきに鳬
秋風のさむく吹なへにわか宿の淺ちか末はいろつきにけり
朝かほはあさ露おきて咲といへと夕影にこそ咲かゝりけり
手にとれは袖さへにほふ女郎花木下露にちらまくをしみ
ことさらに衣はすらし女郎花さく野の花に匂ひてをらん
山ちかく家をしをれは棹鹿の聲を聞つゝいねん比（そねかねつもイ）かも
かけ草のおひたる宿の夕露に鳴日くらしは聞とあかぬかも
足引の山ならませは棹鹿の妻よふ聲をきかまし物を
夕かけて鳴日くらしのそくはくの日毎に聞とあかぬ君かも
我宿の尾花おしなみおく露の（に萬）てふれわきもこちらまくもをし（みんイ）

秋されはおく白露にわか宿の淺ちかうれは色付にけり
秋風の日毎に吹はみつくきのをかの木葉もいろつきにけり
一とせにふたゝひゆかぬ秋山を心にあかす過しつるかな
我宿にまもる田みれと秋の海のうらの秋萩すゝきおもほゆ
わかせこかかさしの花におく露をきよくみせんと月は照らし
秋の花咲たる野への（はイ）日くらしのなくなるともに秋風そ吹
奥山にありてふ鹿のよひさらす妻（と萬）よふ萩のちらまくをしも

詠花

白露にあらそひかねてさける萩ちらはをしく（けん萬）も雨な降こそ

つるによす

たつかねのけさなくのへに鴈金のいつくをさして雲隱る覽
むは玉の夜中計（わたる月は萬）りはおほつかな幾よをへてかおのか名をよふ

鹿の聲を

此比の秋のあさけの霧かくれ妻よふ鹿の聲のさやけき
秋萩のさきたる野へは棹鹿の分つゝねは妹戀をする
山へまていたせる年はおほかれと嶺にも尾にも棹鹿の鳴

きり〳〵す

きり〳〵す我床の上に啼明すおき出ぬるにぬれとねられす

つゆをよむ

白露をとらはけぬへみいさもに（とも萬）も露にいそひて萩の遊せん
ますかゝみみなふち山はけふもかも白露おきて紅葉ちる覽

山をよむ

曉の時雨の雨にぬれわたりかすかの山はいろ付にけり
秋山をゆめ人かくな忘れにし其紅葉葉のおもほゆるかも（きみ萬）
物おもふとかくれのみゐてけさみれは春日の山は色付に鳬

紅葉する時に成らしつま〔月人の萬〕をとこかつらのいたく色付ぬれは〔えたのいろつくみれは萬〕

　田によす

秋の田のほむけの風のかたより〔よする萬〕に我は物思ふつれなき物を
橘をもりへの家のたわせかるとて過〔き萬〕ぬ〔本ノマヽ〕こしとすらしも

　鹿によす

棹鹿のをのゝ草ふしいちしるく我もとはぬに人の知るらん
わか宿のはきさきにけり散ぬまにとくみにこなん都里人
草深みきり／＼すおほく〔いたく萬〕鳴宿の萩見に君はいつかきまさん
散里のはつ紅葉葉を手折つゝ今そわかくるみぬ人のため
心なき秋の月夜の物思ひにぬれとねられすてらしつゝふる
朝な／＼立川きりを寒みかもたかはし山の紅葉そめけん
秋くれはかふりの山に立霧を海とそみつる波たゝなくに
秋萩をかりにあはしといへれはか聲を聞ては花の散らん
棹鹿の戀をしのふと鳴聲のいはんかきりはなひけ萩原
なと鹿のわひなきすらんよそにても〔けたしくも萬〕秋のゝ萩にしけく有〔散萬〕覧
足引の山の木かけに鳴鹿の聲もしのは〔きかすやも萬〕す山田もらす〔るすこ萬〕と

　きり／＼すをよむ

秋風はさむく吹なりわか宿の淺ちかもとにきり／＼すなく
秋の野の尾花かくれに鳴虫の聲を聞はか我も我妹も
秋萩の枝もたはゝに露もおき寒も秋の成にけるかな
春はもえ夏はみとりにくれなゐのいろにみゆめる秋の山哉
いもか袖まきの朝霧をしむらん〔ししかれとも萬〕紅葉はちれるくちをしきかも
紅葉はの匂ひはしけく成ぬともつま梨の木を手折かさゝん
露霜のさむき夕の山風に紅葉しにける妻なしの木は

鴈かねのきなきしからにから衣立田の山は紅葉はしまる
風吹はもみち散つゝしはらくも我まつはらにきよからなくに
妹こそは今おきて〔かりとうきにくらおき萬〕ゆけ伊駒山打こえくれはもみち散つゝ
秋萩の下葉のもみち色に出て時過ぬれは後戀んかも
色付ぬ有明の〔し秋のつゆしも萬〕月もなふりこそ妹かたもともまかぬ此日〔ことひ萬〕は
くれなゐの八しほの雨はふりけらし春日の山の色付みれは
あやしくもきなかぬかりか白露のおきて朝はさひしき物を
わか宿の淺ち生まて〔と脱歟〕も色付ぬまたこぬ君はなにの心そ
秋霧のおとろへなん思ふかも野へに出つゝさをしかのなく
妹かひもとくとむすふと立田山今こそ紅葉はしめたりけれ
足引の山田の稲はひてすともつなたにはへよもるとしるかね
たかまつの此みねことに風吹て紅葉たえたる秋の月かな
秋山の木のはもいまたもみちねとけさ吹風は霜もけぬへし
妹をこひとこしの池の波まよりとりのね聞ゆ秋はきぬらし
けふ暮てあすにならなん神無月時雨にまかふ紅葉かさゝん

　冬　天皇立田川のわたりに行幸有けるに御供にまゐりて紅葉おもしろかりけるに　天皇御製

立田川紅葉みたれてなかるめり渡らはにしき中や絶なん

　とありけるに

立田川もみちはなかる神なひのみむろの山に時雨ふるらし
しくれの雨まなくし降は槇の葉もあらそひかねて色付に鬼
玉たすきかけぬ時なく我待し時雨しあらは侘つゝもゆかん
紅葉はをおとす時雨の降比はよさへそ寒きひとりしぬれは
思はすに時雨の雨は降たれとあま雲晴て月は清きを
君か家のともしき紅葉とくは散る時雨の雨にぬらさゝら南

秋田もるひたの庵に時雨ふり我そてぬれぬほす人なしに
天雲のよそにかり金聞しよりはたれ霜ふりさむし此よは
さをしかの妻とふ山の岡へなるわさ田はからし霜は置とも
おしてるや難波堀江の芦へにはかりねたるらし霜の降るに
いそくともよふかく行な道のへのこさゝか上に霜の降るに
やたの野に淺ちいろつくあらち山峯のあは雪寒くそ有らし
あさ月の峯猶くもるむへしこそ籬のうちの雪けさえけり
ことならは袖さへぬれてかよふへく降なん雪の空に晴行
淡雪はけさはな降そ白妙の袖まきほさん妹かあらなくに
いといたくふらぬ雪ゆゑ事おほけに天つみ空は曇あひつゝ
妹か家は我まとはしつ久堅の空より雪のなへてふれゝは

ゆきにあひきて

淡イ降雪の空にけぬへく思へともあふよしをなみ年そへにける
笹の葉にはたれふり覆ひけ長くも忘れすといはゝ我も頼せん
霰ふりいたくもふふき寒きよははたのにこ宵かり人のねむ
あまをとめのほるの山の峯にふる雪は消しとつけよ其こに
あまとふやかりの翅のおほひはのいつくもりてか霜の置覽
我せこと朝な〳〵に出みれはあは雪ふりぬ庭もはたらに

蒼天

あめのうみに雲の浪立月の舟星のはやしにこき歸るみゆ

月

常はさもおもはぬ物を此月の過かくれ行をしきよひかな
あすの夜を照す月影かたよりに今宵によりてよなかからなん
玉たれのこすのま遠し獨ゐてみるしるしなき夕月よ哉
百敷の大宮人のまかり出てあそふこよひの月のさやけき
ますかゝみ照月影を白妙の雲かくせるか天津きりかも

雲

足引の山川のせのあるなへにつきゆみなかく雲立わたる
おほうみはしまもあらなくに海原やたゆたふ波に立る白雲
我せこか袴の裏をそめんとてけふのこし雨に我そぬれぬる

山

なる神のおとにのみきくまきもくのひ原の山をけふみつる哉
いにしへの事はしらねと我みてもひさしく成ぬ天のかく山
大君のみかさの山の帶にせる細谷川のおとのさやけき

千鳥

さほ川にあそふ千鳥のさよふけて鳴聲聞はいこそねられね

みよし野

皆人の戀しみよしのけふみれはむへもいひけり山川きよみ
うち川に生たるすかも河清みとらて來にける苞にせましを

津のくに

さよ更て堀江こくなる松浦舟かち音たかしみをはやみかも
いとまあらはとりにきませよ住吉の岸に生たる戀忘くさ

すみよし

住吉の岸に心をおきつへによする白波みつゝ思ふらん
すみよしの興津白波風吹はきよれるはまをみれはきよしも
夕されは梶おとすなりあまを舟おきつめかりに出る成へし

旅にてよめる

草まくら旅にしあれは秋風のさむき夕にかり鳴わたる

紀伊國

玉つ嶋みれ共あかすいかにしてつゝみもたらんみぬ人の爲
むは玉の黑かみ山を朝こえて山下つゆにぬれにけるかも

さほ山にたな引雲のたゆたひに思心をいまそさたむる

もろこしにまかりてかりをきゝて

あまとふやかりの使もえてしかなならの都に言つてやらん

芳野山に御幸の時の歌

夕されは秋風さむしわきも子かときあらひきぬ行てはやきん

おほなむちすくな御神の作れりし(りたる萬)妹せの山をみれはともしも(しよしも萬)

たひになほ(すら萬)ひもとく物を事しけみまろね獨(われ萬)する長き今宵を

ふなかせ(はつせ萬)のかく吹までもいつまてか衣かたしきわか獨ねん

いにしへに有けん人も我事や三輪のひはらにかさし折けん

ほの〳〵と明石の浦の朝霧にしまかくれ行舟をしそ思ふ

近江よりのほるに宇治川のほさにてよめる

ものゝふのやそうち川の網代木にいさよふ浪の行ゑ知すも

旅の歌　伊勢のみゆきの時

神風やいせの濱荻折敷て旅ねやすらむあらき濱へに

石見の國に女をおきてのほる時のうた

さゝのはのみ山もそよにみたるめり(れとも萬)我は妹思別きぬれは

川の瀬にうつまくみれは玉もかる散みたれたる川の舟かも

あふみの宮のあれたるをみて

さゝ波やおふつの宮は名のみして霞たな引宮木もりなし

さゝ浪や志賀のからさきさきくあれと大宮人の舟まちかねつ

おみの海に(生の海にイ)舟乗すらんわきも子か玉ものすそに鹽みつ覽か

むこの浦のとまり成らし(にはよくあらしイ)いさりする蜑の釣舟浪の上にみゆ

たちはきのたまさの末に(ふしのさきにけふもかも萬)いつしかと大宮人の玉もかるらん

しま宮のまかりの池の濱千鳥人めを近みおきにおよはす

石見にて京をおもひやりて

石見なるたかつの山の木間より我ふる袖を妹みけんかも

こ紫ほすかはくれぬいつくにかたま宿からんさとはらにして

はなれいそに立むろの木うたかたも久しき年の過にけるかも

こかね山したゐの下に鳴鳥の聲たにきかは何かなけかん

ことしけに里にすますはけさ鳴し鴈にたくひてきなまし物を

天さかるひなの長路をこきくれは明石のとより大和しまみゆ

岩城の野中に立る結ひ松心もとけすむかしおもへは

もかみ山すかきせしより心有にまかりかへせるやかたをの鷹

白浪は立と衣にかさならす明石も須磨もおのかうら〳〵

草かくれ行棹鹿はみえねとも妹かあたりはみれは戀しも

春雨に衣のいろはひちつとも妹か家ちの山はこえなん

朝さく夕はしほむ月草のうつろふ色は人にそ有ける

くたら川かはせをはやみ我せこかあしの底にもふれてふる哉

旅にしてあたねする夜の戀しくは我家の方に枕せよきみ

いにしへのふるき翁のいはひつゝ植し小松は苔生にけり

朝な〳〵みすは戀なん草枕たひ行君かかへりくるまて

思はすに吹秋風か旅ねして衣かすへき妹もあらなくに

まゆねかき又(した萬)いふかしく思ける(へりし萬)いにしへ人に(を)あひみつる哉(かも)

おしてるや山(なには萬)すけかさをおきふるし後は誰きん物(かさ萬)ならなくに

山たかみ下行水のおちたきつうら波みれとあかぬ君かも(み萬)

みよしのゝあきつの河の萬代にたゆる時なく又かへりこん

ちとりなくみ吉の川の河こゑ(かしこけれと萬)のなりやむ時はなきに思きみ

瀧の上のみふねの山はおきなから思忘るゝ時(とき萬)のまもなし

あらのらにあれ(さか萬)はあれとも大君のしきますよひは都と成ぬ

やゝましろ我匠のをゝおほくには大和へかとも同しとそ思
「有は萬葉卷六に「やすみしゝわか大君のをす國はやま
ともみも同しとそ思ふ」とあるを誤りし也」
わたつ海のもたる白玉みまほしき岩ふち巡りあさりする（かも）
鶯は時々鳴さ東路の君かたよりはまてとこぬかも
宮こちはわれもしりたり共道は遠くもあらす年はふれ共
こゝはくに人はいへともおりてきん我はた物の白きあさ衣
せんとう歌
うちひさすみやちに有し人妻はねたしたまのをのおもひみ
たれてねにし夜そおほき
かの岡に萩かるをのこしかなかりそ有つゝも君かきまさん
みまくさにせん
ますかかみ見しかと思ふ妹にあはんかも玉のをのたえたる
戀のしけきこの比
かなしひ（きての）うねへ身をなけたる時の歌
さゝ波やしかのてこらのまかりにし川せの道をみれは悲しも
さゝ波や志賀の大わたよとむ共いにしへ人に又あはめやも
さる澤の池にうねへの身なけたるを
わきもこかねくたれかみをさる澤の池の玉もとみるそ悲しき
ひなみのうせ給へきとき
久堅のあめのふる事あふきみしみこのみ事のあれまくをしも
さぬきのさみねの山にして岩の上になくなれる人を
みて
妻しあらはつみてゆかましさみの山上のお原に過にけらしも
おきつ浪よるあらいそを敷妙の枕としてもなれる君かも
めのしにたるをかなしみてよめる

家にいきて（きて萬）我やをみれは敷妙（玉床萬）のほかにおき（む萬）ける妹かこ枕
かへるとしの秋月おもしろきに
去年みてし秋の月よは照らす（せ萬）とも相みし妹はいや遠さ（とし萬）かる
あすかの女王をおさむる時によめる歌
飛鳥川しからみわたしせかませは流るゝ水ものとけからまし
奈良の帝をおさめ奉けるをみて
久堅のあめにしほるゝ君ゆゑに月日もしらす戀渡るかも
めにをくれて
秋山の紅葉をしけみまとひぬる妹をもとむと（めん萬）山ち暮しつ（しらすも萬）
石見國に有てなくなりぬへき時にのそみて
（か萬）いも山の岩根に（しま萬）おける我をかもしらすて妹か待て（つゝ萬）やあらん
かも山の岩ねのたかにある我をしらすて妹かまちつゝまさる
おほ舟にまかちしけ（しゝ萬）ぬきおはかち（うなはら萬）をこきつゝ（こゝ萬）渡る月人男
神風の清き夕に銀河舟ときわたせ月ひとをとこ（ソイ）
秋風の吹にし日より天河川せにいてたちてまつとつけこせ
戀
我せこを我戀をれは我宿の草さへ思ひうら枯にけり
湊入の芦分をふねさはりおほみ我思人にあはぬ比かな
かた糸もて貫く玉のをゝよはみ亂れやしなん人のしるへく
足引の山下とよみ行水の時そともなく戀わたるかも
よそにのみみつゝや戀む紅のすゑつむ花の色に出なて
からにしき紐ときあけてゆふ人も知ぬ命を戀つゝやあらん
戀々て後もあはんとなくさむる心しなくはいきてあらめや
月しあれは明らむわきも知すしてねて明しゝも（わかこしを萬）人みけん鴨
戀するにしにする物にしあらませは千度そ我はしに歸らまし

棹鹿の岡のかやふしいちしるく我はしらぬに人のしるらむ
足引の山下風はふかねとも君かこぬよはかねてさむしも
とに角に物は思はすひたゝくみ打すみなはのたゝ一すしに
　たひのうた
はふり子かいはふ社の紅葉はもしめをはこえて散といふ物を
戀てしね〳〵とやわきもこか我か家の門を過て行らむ
ますらをのうつし心も我はなし夜ひるわかす戀しわたれは
戀つゝもけふはくらしつ霞たつあすの春日をいかて暮さん
山のはをさし出る月のはつ〳〵に妹をそみつる戀しき迄に
玉ゆらに昨日のくれにみし物をけふの朝に戀へきものか
かくはかり戀しき物としらませはよそにそみつる有けん物を
戀しなはこひもしねとや玉鉾の道行人にことつてもなし
岩ねふみかさなる山はへたてねと逢ぬ日數を戀わたるかも
つるはみのあはせの衣の裏にせは我か袖ひめや君かきまさぬ
　八さひの女王のおさかへのみこに奉る歌
敷妙の袖かへし君玉たれのおちのすきせる消てあらんやは
ときゝぬの思ひ亂れて戀ふれともなそ何故ととふ人もなき
足引の山田もる庵におくかひの下こかれつゝわかこふらくは
思ふなと君はいへともあふ事をいつと知てか我こひさらん
奥山の岩かきぬまのみこもりに戀や渡らんあふよしをなみ
なにすとか妹をいとはん秋萩のその初花のうれしき物を
秋萩の咲散のへの夕露にぬれつゝきませ夜は深ぬも
長月の有明の月の有つゝも君しきまさはわか戀めやも
わきも子に相坂山のしの薄ほには出すて戀わたるかな
朝はさき夕はしほむ月草のけぬへき戀も我はするかな
長きよを君にこひつゝいけらすは咲て散にし花ならましを

秋のよの月かも君は雲かくれしはしもみねは戀しかるらむ（こゝらこひしきイ）
君かあたりみつゝをゝらん伊駒山雲なかくしそ（すき萬）雨はふる共
（このよらあかつきくたち萬）けふの日の曉方になくつるのおもひはあかす戀こそまされ
君こふ（まつ萬）と庭にしをれはうちなひき我黒かみに霜置まよひ（そおきける萬）
住よしの岸を田に堀蒔し稲かりほすまてもあはぬ君かな
み狩する狩はのを野のならしはのなれは增らて戀そ優れる
紅のあさはの野らにかる草のつかのまもなく忘られなくに
あはぬよのふる白雪とつもりなは我さへともに消ぬへき哉
（青柳のイ）足引のかつらき山にゐる雲の立てもゐても妹なしそ思ふ
風吹は浪たつ岸の松なれやねにあらはれてなきぬへら也
み熊野の浦の濱ゆふもゝへなる心は思へとたゝにあはぬかも
この比の有明の月の有つゝも君をはおきて待人もなし
（こひまろひ萬）よそにして戀はしぬれ（とも萬）といちしるく色には出し朝顔の花
ことに出ていはゝゆゝしも朝顔の匂ひひらけぬ戀もする哉
梓弓ひきみひかすみこすはこすこそはなそよそに社みめ
垂乳根の親のかふこのまゆ籠りいふせくも有か妹に逢すて
宮木ひく泉の杣に立民のやむ時もなく我戀らく（こひわるか萬）は
朝霜の消み消すみ思へともいかてこよひをあかしつるかも
ちはやふる神のいかきも越ぬへし今（る萬）は我身のをしけくもなし
戀るひのけ永くあれと御園ふのからあやの花の色に出に鬼
皆人の笠にぬふてふありますけ有ての後もあはんとそ思ふ
ますかゝみ手にとり持て朝な〳〵みれ共あかぬ君にも有哉
朝ねかみ我はけつらしうつくしき人のたまくらふれてし物を
久堅のあまてる月もかくれ行何によそへて妹をしのはん

三日月のさやけくもあらす雲隠れみまくそほしきらたて此比（た萬）
あひみてはいく久しさに（萬无）もあらね共年月の事おもほゆる哉
頼めつゝこぬよあまたに成ぬれはまたしと思そ待に増れる
足引の山鳥のをのしたりをのなか〳〵しよをひとりかもねん
春日山雲井かくれて遠けれと家はおもはす妹をしそ思ふ
むは玉のこよひな明そ明ゆかは朝ゆく君をまつくるしきに
我かせこをきませの山と人はいへと君かきまぬ〔こ脱歟〕山の名ならし
難波人芦火たくやはすゝたれとおのか妻こそとこめつらなれ
この山の嶺に近しとわかみつる月の空なる戀もするかな
三島江の玉江の芦をしめしより已かとそ思いまたからねと
久堅のあめにはきぬをあやしくも我衣手のひる時もなき
波まよりみゆるこ島のはまひさき久しく成ぬ君にあはすて
夏草の露わけ衣きもせぬになと我か袖の（ふイ）かはく時なき
夏野行をしかのつのゝつかのまも忘れす思へ妹かこゝろを
夕されは君來まさんと待しよの名殘そ今もいねかてにする
妹かかみあけをさゝ野のはなれ駒こかれにけらしあはぬ思は
わきもこは衣ならなん秋風のさむき此比したにきましを
わか心ゆたのたゆたにうきぬれは（うきぬなはイ）へにも奥にもよらむ方なし
山高み夕日かくれのあさち原後みん爲にしめゆはましを
杉板もてふける板間のあはさらはいかにせんとか相見初せん
棹鹿の（はらのふりにし里の萬）いるのゝすゝき初尾花いつしか妹か手まくらにせん（ねて萬）
藤の花咲て散にき秋萩はさきて散にき君待かてに
さくらあさのおふの下草露しあらは明してゆかん（いゆけ萬）おやは知共
三輪の山やましたとよみ行水のみをし絶すは後も我妻
あらちをのかるやのさきに立鹿もいと我ことく物は思はし
ちはやふる神のたもてる命をも我か爲にかは（た萬）長くと思はん（はりする萬）
久かたのあまてる月の雲まにも君を忘れて我思はなくに
家の井のたまわけさとに妹をおきて戀や渡らむ長き春日を
天雲をちへにかき分あまくたる人も何せん妹かあはすは
こと絶て今はこしとは思へともせきあへぬ心猶こひにけり
梓弓引はり持てゆるさぬにわか思心君はしらすや
今も思ひ後も忘れしかりこものみたれてのみそ我戀まさる
打なひき人もねつれはます鏡とると夢にみつ我戀まさる
あひ思はぬ妹は何せんうは玉の一よも夢にみえもこなくに
夏草のしけきわか戀（といふ萬）住吉の岸の白なみ千重につもりぬ
賢木にも手はふるなるをうつたへに人妻なれは（といへ）こひぬ物かも（ふれぬものかも萬）
島つとふはやひと舟の浪高みひさよゝとますたえんと思な
獨ゐて思ひみたれてあま雲のたゆたふ心わか思はなくに
わかせこか家を頼て足引の山すけ笠をとらて來にけり
妹みては月もへたてすいそのさき道なき戀も我はするかな
夕されは野へに鳴てふかほ鳥のかほにみえつゝ忘られなくに
時鳥さほ山の松の根のれもころみまくほしき君かな
みくまのに立朝霧の絶すして我はあひみんたゝんと思な
後つひに君をみんとて打なひきわか黒かみに雪のふるまて
けふ〳〵と君を待よのふけぬれはなかき心を思ひかねつる
雨ふるによは深にけり今更に君きまさめや誰かきてねん
かくてしも戀しわたれは玉きはる命もしらす年はへにけり
つくも川たゆる時なく思ふにはひとひも妹を忍ひかねつゝ
かく戀ん物としりせは梓弓するのなか比あひみてし哉
かさゝきのはねに霜ふりさむきよを獨そねぬる（こふるころ萬）君を待かね
石上ふるのわさ田のほには出す心のうちにこひやわたらん

わか戀ふる心をしらす後つひにかゝる戀に（も）あはさらめやは
立田山嶺の白雲たゆたひに思しやれはまつそすへなき
あさみつむ春日の露のおきそめてしはしも峯は戀しき物を
青柳のしけりに立てまとふとも妹とむすひし紐とけめやは
山越て遠くいにしをいかてかは此山こえてゆめにみえけん
たらちめのはゝかてはなれかく計わひしき戀は未せなくに
いつとても戀せぬ時は（ぬ時とはあらねとも萬）なけれ共夕さるゝまは（かたまけてこひはすへなし萬）戀しきはなし
わか後にうまれん人は我ことく戀せん道にあひあふな夢
よしやよしこさらん君をいかゝせん厭はぬ我は戀つゝを覽
君をわれみまくほしきはこの二夜年月の事おもほゆるかな
秋風にちる紅葉はのしはらくも散なみたりそ君かあたりみん
紫に匂へる妹かかくしあらは一（人つまイ）もとゆゑにわかこひめやは
玉ほこの道行つかれいなむしろ敷ても君をみるよしもかな
あま雲の八重雲かくれなる神のおとにのみやは戀渡り南（イきゝわたるへき）
月草に衣そそむる君か爲色のわかはの（とるところもすらんと萬）かけとおもひて
猶あへと事なし草にいふ事を聞てもしらはうれしからまし
月草に衣はすらん朝露にぬれての後はうつろひぬとも
夕かけて祈るみむろの神さひて妹にはあはす人めおほみそ
もゝへなるやそのしまへ（らこのしまへ萬）をこく船に乘にし心忘れかねつも
しほさゐにいつものうみにこく舟に妹乘らんか荒き磯へに（しまわを）
紅葉はの散ぬるなへに玉章のつかひをみれは逢し日思ほゆ
雨のこるすゝしのへの逢はん日をおほのはしかは今そ戀敷
人ことは夏のゝ草の［けく萬］しけくとも妹と我としたつさ［し萬］はりなは
此比の戀のしけくは夏草のかりそくれともおひらくかこと［ぬ萬］
かけてのみ戀ふれはくるし撫子の花に咲なん朝な／＼みん

みな月の土さへさけて照日にも我そてひめや妹にあはすて
秋風に山飛こゆるかり金のいやとほさかり雲かくれつゝ
かきほなる荻のはさやき吹風の吹なるなへに鴈そ鳴なる
秋風の遠く（さむくイ）吹なるわか宿の淺ちかもとに日くらしも鳴
この比の秋風さむみ萩の花ちらす白露おきにけらしも
玉たすきかけぬ時なく我戀ふる時雨しふらは行つゝもみむ
秋の田のほの上における白露のけぬへく我はおもほゆる哉
秋の田のかりほにつくる庵してまつらん君をみるよしも哉
秋萩の枝もとをゝ（たはゝイ）に置露の消もしなまし［けり萬］戀つゝあら［す］は
さもこそは身は心にもあらさらめ身さへ心にたかふなり鳧
水底に生る玉もの打なひき心をよせてこふる比かな
足引の山より出る（は空にイ）月まつと人にはいひて君をこそまて
なる神のしはしくもりてさし曇雨もふらなん君とまるへく

　　伊勢のみゆきに京にまかりとまりて

あすの海に花の香すらむわきも子か玉もの裾に浪やよす覽
〔右は万葉卷一に「あこの浦に船のりすらむをとめらかたまものすそにしほみつらむか」とあるを誤りし也〕
足引の山ちもしらすしらかしの枝にも葉にも雪のふれゝは
玉葛といふけきつゝ（たえぬものから萬）さぬるよは（らくは萬）年のまれよ（わたり萬）にたゝ一よのみ
草枕たひに物おもふわか聞はゆふかけつき（たまけ萬）て鳴かはつかも
うちひさすみやちに人はおほかれ［と萬］と我か思人は唯ひとり也
あら玉の年はふれ［と脱歟］もわか戀ふるあしなき戀のやまぬ悲しき
行ゆけとあはぬ物ゆゑ久堅の朝露しもにうるひぬるかな
戀しきに心をやれとやられぬは山も川せもしらぬなりけり

山しなの木幡の里に馬はあれとかちよりそゆく君を思へは
水の上に數かくかことわか命君に(妹萬)あはんとうか(け)ひつるかな
我ゆゑにいはるゝ妹かたかき山嶺の白雲すきにけんかも
むは玉の黑かみ山の〔や〕まくさに小雨降しきます／＼そ思
わか妹も我を思はゝますかゝみとりても月の影そみさらん
曉にさすつけくしのふるけれと何そも君かみれとあかぬ(かも)
玉ほこの道ゆきふりにうらなへは妹にあひぬと我につけける
敷妙の枕をしきてねす思ふ人は後にもあひなん物を
誰かこの宿に來てとふたらちねのおやにいはれて物思ふ我を
さぬるよはちよに有ともわかせこか思くゆへき心はもたす
おほよそは誰かみむにかむは玉の我黑髪をけつりておらん
獨ぬる床くちめやはあや莚を(へ萬)になるまてに君を忍はん
たそかれとはゝこたへんすゑをなみ君か使を返しつるかな(も萬)
妹戀とわかなく泪敷妙の枕とをりてそてそひちぬる
たちておもひゐてもそなけく紅のあかものすそを引し姿を
思ふ事あまる時にはかひもなし出てそ行しその門を見よ
夢に見て猶かく計り戀ふる我うつゝにあはゝましていかにそ
あひみてはおもてかくるゝ物からに〔か脫歟〕常にみまくのほしき君哉
昨日より今こそよなれ吾妹子かいかはりかもみまく(欲しきかも)
むは玉の妹か黑かみ今夜もやわかなき床になひきてぬらん
いろに出て戀は人みなしりぬへし心のうちのかくれ妻かも
逢みてはこひ慰むと人はいへとみての後こそ戀まさりけれ
僞もにつきてそするいつよりかみぬ人ゆゑに戀にしにする
戀しなん後はなにせんわか命いきたる日(けるひにこそ萬)社みまくほしけれ(りすれ萬)
しき妙の枕うこきていねられす物思こよひはやく明なん

夢にたになとかは見えぬみえね共我かも惑ふ戀のしけさに
なくさむる心もなきにかくてのみ戀や渡らん月日かさねて
いかにして忘るゝものそ我せこに戀はまされと忘られなくに
かひもなき戀もするかな夕されは人の手枕ねぬるものゆゑ
もゝよしもちよしもいきてあらめやは我か思妹をおきて歎かん
玉ほこの道行ふりに思はすに妹をあひみてなけく比かな
妹か袖わかれし日より久堅の衣かたしき戀つゝそぬる
むは玉のわか黑かみをなきくらし思みたれて戀わたるかな
今更に君か手枕さためゝやわかひものをのとくともなしに(けつゝもとな萬)
大原のあら野らに我妹をおきていね社かねつ夢にみゆれは
夕けにも夢にも見えよ今宵たにこさらむ人をいつとか待ん
敷妙の枕かさねて君とわれぬるとはなしに年そへにける
山里の槇の板戸の音はやみ君かあたりの霜の上にねむ
足引の山櫻戸をあけ置てわか待君を誰かとゝむる
月淸み妹にあはんとたゝちから我はくれ共夜そふけにける
朝かけに我身はなりぬから衣たもとのあはてさひしくなれは
すり衣きると夢にみつうつゝにはたか事のはかしけく有へき
しかのあまの汐たれ衣なるれとも戀てふ物は忘れかねつも
さゝ遠み戀わひにけります鏡面影さらすゆめにみゆれは
たちのをのおひに尺さすますらをも戀てふ物は忘れ兼つも
時もりからちなす皷數ふれは時には成ぬあはさるもあやし
灯の影にかゝよふうつ蟬のいもかゑみかほおもかけにみゆ
おはたゝやいたゝの橋の崩れなは桁よりゆかんこふな(なこひそ萬)我妹子
君戀とぬれとねられぬつとめては誰かのる馬の足音かする
紅のすそひく道を中におきて君やきまさん我や行へき
まのゝ池の小菅の笠をぬけはすして人のとふなを立へき物か

わきも子か袖を頼てまのゝ浦の小菅の笠をとらてき（きす萬）にけり
山たかみ谷へにはへる玉かつらたゆる時なくみるよしも哉
いきのをに思へはくるし玉のをのたえて亂れん人は知る共
玉のをのくりよせつゝもあはさらは我同しをにあはん（とそ）思
いせの蜑の朝な夕なにかつくてふあはひの貝の片思にして
思へとも思へもかねつ○（と）引の山鳥のをのなかきこよひを
我妹子を戀ふるに（こふるにか萬）あらん沖にすむ鴨の浮ねの安けくもなし
明ぬとて千鳥しはなく敷妙の君手枕いまたあかなくに
おく山の木葉かくれて行水のおと聞しより常にわすれす
風吹ぬうら〳〵浪になき名をはわか上に立あふとはなしに
眉ねかきはなひん時もまためや（ひもときまつらんや萬）（は）いつしかみんと（し萬）問つる我を（おもふ我君萬）（きや萬）
わきも子に戀てかひなき（すへなみ萬）白妙の袖かへしては夢にみえつゝ
我せこか袂かへせる（袖かへすよの萬）よるの夢にまさて妹か逢かこと〳〵に（ならしまこともきみにあへりしかこと萬）
おしてるや山すけ笠をおきふるし後は（もち萬）誰きん物ならなくに
紅の花しありせは衣手にそめつけんとて行へくそおもふ
河上にあらふ若なのなかれても君かあたりのせに社よらめ
百敷の大宮人は玉ほこの道も出ぬにこふるころかな
棹鹿のなくらん山（なるこまつの萬）を越さらん（ゆかん萬）ひたにや君かあはしとはする（はたあはさらん萬）
石上に生たるあしの名をしみ人にしられて戀つゝ（わたるかも萬）そふる
わきもこかきすてふりぬるあか衣穢れふりなは戀やしぬへき
冬こもり春さく花を手にとりて千かへり恨み戀もするかな
春山の霞にまよふ鶯も我にまさりて物はおもはし
わきも子か朝けの貌（すかた萬）をよくみれは（すて萬）けふのあいふ（ひた萬）を戀暮しつゝる（すかも萬）
さきて散る梅か下枝におく露のけぬへく妹を戀る比かな

朝霞かひやか下に鳴蛙聲たにきかはわ（は萬）れこひめやも
櫻花（さくはなはすくる時あれと萬）時過ぬれとわか戀る心のうちのやむ時もなし
山吹の匂へる妹かはねす色のあかものすかた夢にみえつゝ
秋のゝの尾花か末の打なひき心もいもに（〔ヒ〕）我よ（〔よりにけ六萬〕）するかも
秋山に霜ふりおき（〔降ひ萬〕）て木葉ちる年は行とも我忘れめや
紅葉はに匂へる衣我はきし君かまつちはよもきこえかね
わか宿に今さく花は女郎花さらぬ色には猶戀にけり
萩の花匂ふをみれは君にあはぬまの久しくも成にけるかな
秋されはかり人こゆる立田山立てもゐても君をしそおもふ
秋の田をつとにおしなりおける露消もしなまし君に逢すは
ますらをの心はなくて秋の田の戀には花をみつゝ有なん
我か袖にふりつむ雪のなかれ出ていもかたもとに今も消南
夢の事君にあひみてかきくらし降くる雪のきえそかへれる
ひとめみし人はこふらくかき暮し降くる雪のきえそ歸れる
かきくもり降くる雪の消ぬとも君にあはんとなからへ渡る
梅花うちみゝられす降雪のいちしるくしも（ろけんなまつかひやらは萬）使なやりそ
獨して物をおもふかすへなさにいけとも妹かあふ時もなし
うちの海に釣するあまの舟にのりのりにし心常に忘れす
今さらに妹にあはてや春霞たな引のへの花も散なむ
あひみすて年そへにけるあやしくも妹は戀すて戀渡るかな
芦かもの入てなくねのしらすけの知すや妹をかく戀んとは
衣手もさしかへつへく近けれと人めをおほみ戀つゝそをる
露草のかりなる命有物をいかにしりてか後にあはん君
棹鹿のふす草村のみえねとも妹かあたりをゆかはかなしも
よそに有て雲井にみゆる妹か家にはやくいた覽あゆめ黒駒

たけとあまりたかね（は萬）と長き妹か髪此比みねはあけつ覧か（みたれつらんか萬）も
山草の白つゆおほみ袖にふる心ふかくて我戀やます
よならへて君をきませと千早振神の心をねかぬ日はなし
夕附よ曉かたの朝かけに我身は成ぬ妹をおもひかね
ま袖もてゆか打拂ひ君まつとおりつるほとに月かたふきぬ
君かすむ（きる萬）三笠の山にゐる雲のたては別る（つかるゝ萬）戀もするかな
夕けとふわか袖におく露をおもみ妹にみせんととれは消つゝ
待わひてうちへはいらし白妙の我手に〔衣脫歟〕つゆはおくとも
朝露の消みきえすみ思つゝまた駒かへし（に）君をこそみめ
足引の山鳥のをの人めを（ひとをこえ萬）はひとめみしこを戀へき物を（か萬）
妹か名も我名もたてはせし（たはをしみ萬）と社ふしの高ねもえつゝ渡れ
白波の立よるかたのあらいそにあらまし物を戀つゝあらすは
おほとものみつの白波妹をなほこふと人のしらて久しく
おほ舟のたゆたふ浦に錨おろしいかにしてかも我戀やまん
みさこゐる沖のあらいそに立浪の行へもしらす我戀しさは
大船の沖にもへにもゐる浪のよるへも我は君かまに〳〵
中々に君にあはすはまきの浦の蜑ならましを玉もかりつゝ
すゝきとる蜑のたく火のほのにたにみぬ人故にこふる比哉
むまやちにひき舟渡したゝのりに妹か心にのりてふるかも
我宿のほたてふたからつみはやしみになるまてに君を社（まて）
わか戀のこともかたらんなくさむる君か使を待やかねてん
現にはあふよしも無し夢にたにまなくみん君か戀にしぬへし
こゝといへは只にたやすしちいさくも心のう〔ち脫歟〕に我思はなくに
思出てねにはなく共いちしるく人のしるへくなけきすな夢
白妙の袖かけしより玉たれのをすのすかさる又もあはぬに
をくるまの錦のひもをとけむかも我を忍はゝわれも思はん
忍ふへしむすひもあへす小車の錦のひもをよひ〳〵ことに

返し

小車の錦のひもをときそめてあまたはねすはたゝ一よのみ
あらかふにしひても君か濡衣かきよにそやなそ只一夜のみ

名立ける女の十首よみて送りける

しほ衣あまの身かとそ思けるうきよにふれはきぬ人もなし
なき名のみいはれの池のみきはかなよにも嵐の風も吹なん
ぬれきぬをほす棹鹿の聲聞はいつしかひよと鳴にそ有ける
田子の浦あまのぬれ衣きたれともほしきに物は言すも有哉
吹風のしたのちりにもあらなくにさも立やすき我なき名哉
ほしわひし人をそ聞しぬれ衣わか身になして今そかなしき
陸奥にあるといふなる名取川なきなとりてはくるしかり鬼
わたりぬる身にこそ有ける名とり川人の淵せと思けるかな
なき名立身のきる物はぬれ衣いくかさねとそかきらさり（ける）
しつのをに掛てとゝめよ大方はたか立そめしなきなならね（は）

返し十首

我屋にも君かきるなるぬれ衣をよにも嵐のかせも吹なん
同し名を立としたゝはぬれ衣きてをなくさむうらふるゝ迄
なき名のみたつの市とはさはけともいさ又人をうる由なし
おりたゝぬ程はかりをや名取川渡らぬ人もなにならなくに
夢ならてあふことかたき君ゆゑに我も立名をたゝにやは聞
あちきなく名をのみたてゝ唐衣身にもならさてやまんとや君
君をわれいくたの浦のいく度かうき名を立てと思ひし物を
竹のはに落ゐる露のまろひあひてぬるとはなしに立我名哉
なきたむる泪の川のうきぬなはくるしや人にあはて立なは

君といへは何かなき名のをしか覽よそへて聞も嬉しき物を

うつくしと思し妹を夢に見ておきてさくるになきそ悲しき

柿本人麿あからさまに京近き所に。しはすの廿餘りくたりけるを。とうのほらむと思けれと。いさゝかにさはる事ありてえのほらぬに。正月さへふたつあるとしにて。いとゝ春長き心ちしてなくさめかねてこの世にある國々をよみける。是なんゐ中にまかりたりつるつとゝて。あるやむことなき所に奉りけるとなん。

五畿内

やましろ

打はへてあな風さむの冬のよやましろに霜のおける朝道

やまと

ふた道に我やまとはんいにしへの野中の草もしけり相に鳬

かうち

朝またきわかうちこゆる立田山ふかくもみゆる松の綠か

いつみ

あまならて海の心をしらぬ哉いつみつしほにみるめから〔きらんイ〕南

津のくに

あしかものさはく入江の水の江のよにすみかたき我身成鳬

東海道十五ケ國

伊賀

ちりぬともいかてかしらん山櫻春の霞の立しかくせは

伊勢

二葉よりひきこ〔イ无〕そうゐめみる人のおいせぬ物と松を聞にも

しまのくに

山川のいしまを分て行水はふかき心もあらしとそおもふ

をはり

春立は梅の花笠らくひすのなにをはりにてぬひとゝむらん

參河

あた人の事につくへき我身かはしらてや人の〔よそにこひしてふイ〕戀むといふ覽

とほたあふみ

ひねもすにとほた近江に種まきて歸るたをさは苦しかる覽

するか

ふしのねのたえぬ思ひをするからに常盤に燃る身とそ成ぬる

伊豆

あふ事をいつしかとのみ松しまのかはらす人を戀わたる哉

かひ

須磨の浦の鶴のかひこのある時は是か千世へん物とやはみゝ

さかみ

足柄のさかみにゆかん玉くしけ箱根の山の明んあしたに

むさし

しほりせむさして尋〔よイ〕に足引の山のたちにてあとはとゝめん

安房

春の田のなはしろ所つくるとてあはけふよりそせき始〔はしむかイ〕めつる

かんつふさ

とめ行んつふさにあは〔ひはイ〕とみえす共しかのはかりはしるといふ也

しもつふさ

木するゐしもひらけさりつる櫻花しもつふさこそまつは咲けれ

ひたち

いつしかとおもひ立にし春霞君かみ山にかゝらさらめや

東山道八ヶ國

あふみ

流れあふみかとの水のむしふれ〔まけイ〕はかたへもしもはむまき也鳬

美濃

わたつ海の沖に東風はやからしかのこまたらに浪高くみゆ

飛驒

さしてゆく三笠の山し遠けれは今は日たけぬあすそいた覽

信濃

あたなりといひさ〔そイ〕められし濡衣はひしなのみこそ立勝るらめ〔りけれイ〕

かんつけ

音に聞よしのゝ櫻みにゆかんつけよやま守花のさかりを

しもつけ

春きぬと人しもつけよ相坂のゆふ付とりも聲〔のイ〕にこそしれ

むつのくに

いつかおひんつの國薫〔くむイ〕をみる程度は難波の浦〔もイ〕の名のみとそ思ふ

いては

夕やみはあなおほつかな月影のいてはや花のいろもまさ覽

北陸道七ヶ國

わかさ

春立はわかさゝ〔はイ〕水につむせりの根ふかく人を思ひけるかな

越前

志賀山を越行人のつくしつゑちせんわたすときはまことか

加賀

おのか香の有ける物な花といへはひとつ匂ひと思ひける哉

能登

されはかつ散ぬる山の花さくら心のとかに思ひけるかな

ゑちう

花のすゑちうに優りて匂ひせはそれをそ人は折てとらまし

ゑちこ

人にすさかなきおやの心ゆゑちこさへにくゝ思ほゆる哉

さと

東路のもろこしさとにおりてたつきぬをや唐の衣といふ覽

山陰道

たには

春雨によには水こそまさるらしたにはたきえは音高くなる

たにこ

たのむへき我たに心つらからはふかき山にもい覽とそ思ふ

たちま

春霞立まふ山とみえつるはこのもかのもの櫻成けり

いなは

鶯の聲をほのかにうちなきていなはいつれの山に尋む

はゝき

山のはゝきよくみゆれと天原〔つはらイ〕たゝよふ雲の月やかくさん

いはみ

よとともに浪なれ磯の岩みれはかたへそかはく時は有ける

おき

草のはにおきゐる露の消ぬまは玉かとみゆる事のはかなき

いつも

あともなくけさふる雪の朝また〔きいつもといふはイ〕いつもるときくは空事か君

山陽道八ヶ國

はりま

立かはりますたの池のうきぬなはくれとも絶ぬ物にそ有ける
みまさか
君かみまさかなく常にはなれつゝ我か花園にふみしたくめり
ひせに
ときは山二葉の松の年をへてくひせにならん時をみてしな
ひちう
たもとひちうきてみさへそ流れつるわかなき〔りイ〕戀のあはぬ泪に
ひこ
ひころへてみれともあかぬ櫻花風の誘はんことのれたさよ
あき
鶯のあきて立ぬる花の香を風の便に我はしる〔まつイ〕かな
すはう
水鳥の立ゐてさはくみつ〔磯イ〕のすはうかへる舟そ浮て〔よそにすれイ〕いにける
なかと
海の中ときはに入てかつく蜑も人にはあはひともしかり鳧

南海道

きのくに
あさみとり野への青柳出てみんいとを吹くる風は有やと
あはち
我ちかふことを眞と思はすはあはちはやふる神にとへきみ
あは
梢のみあはとみえつゝはゝきゝの元をもとよりしる人そなき
さぬき
われはけさぬきて歸〔りぬイ〕つから衣よのまといひしことを忘て
伊與
はかなしや風にまかへるくものみよ心細くて空にわたれる
とさ
みなとなる舟社けさはあやしけれ目たけは風の吹て返すに

西海道十一ヶ國

ちくせ
かたみちゝくせに作れといひやらん蒔し若なもおいはつむへき
ちくこ歌本になし。
ひせん
人をこひせめて泪のこほるれはこなたかなたの袖そぬれける
ひこ
誰しかも我をこふらん下ひものむすひもあへすとくる心は
ふうせ
春の野に昨日うせにしわか駒をいつれのかたにさして求めん
ふこ
花に蝶こゝにて常にむつれなんのとけからねはみる人もなし
ひうか
逢ぬこひうかり鳧とそ思ぬる身をは焦せとしるしなけれは
おほすみ
我宿のおほすみ山のいかなれは秋をしらすてときは成らん
さつま
春の野の華をくさ／＼つまんとてさもかたみをも作りつる哉
ゆき
ゆきかへ〔よふイ〕る雲井に〔はイ〕道もなき物をいかてか鴈のまとはさる覽
つしま
山き〔かイ〕はに水しまさらは水上につもる木葉はおとしはつらむ

萬治二とせ小春後の八日豐の前中津河にして書人の歌あり。

詠誉宗連坊

一本所載歌　芳野山にみゆきする時

みれとあかぬよしのゝ河とこなめに絶る時なく又歸りみん

あかねさし日は照せ共むは玉のよ渡る月のかくらくをしも

しらすとも又ひく道を知すともすまちを行はつかひ思ほゆ

すまの浦に舟乘つらん乙女らかあかもの裾にしほやみつ覽

山里は月日もおそくらつらなん心のとかに紅葉はもみむ

白露を玉につくれる長月の有明の月はみれとあかぬも

たれかれと我をなとひそ長月のしくれにぬれて君まつ我そ

我宿に咲る秋萩ちりはてはあきにもあはぬ身とや也なん

長月を君にこひつゝいけらすは咲てちりにし花ならましを

ことに出ていはゝゆゝしみ山川の瀧つ心をせきそかねつる

ひのくもり雨ふる河のさゝら波まなくも人を戀わたるかな

あら磯のほか行波のほか心我は思はしこひはしぬとも

無名のみたつたの山の麓には世にもあらしの風もふかなん

まさしてふ八十の巷にゆふけとふ占まさにせよ妹にあふへく

右人麿集以橋本肥後守經亮本書寫以一本印本及万葉集挍正

家持集

早春部

月よめはいまた冬なりしかすかに霞たな引はる立ぬとか

きのふ社としは暮しか春霞かすかの山にはや立ぬらん

いにしへの人のうへけむ杉かえに霞たな引春そきぬらし

春霞たつかすかのゝゆきかへり我はあそはないや年のはに

うちなひき春はきぬらし我宿の柳のうれに鶯のなく

梓弓はる山ちかく家ゐして絶す聞らん鶯のこゑ

寒さ過春は來ぬらし年月はあらたまれとも人はふり行

梅花さきたる中にふくめるは戀やこもれる雪を待かも

淡雪にむらさき立る梅花君しきたらはよそへてもみむ

梅かえにふりおほふ雪を包みもて君にみせんとそれは消つゝ

わかせこにみせむと思し梅花それともみえす雪のふれゝは

殘たる雪にましれる六日の花はやくな散そ（をきか一萬）雪はけぬとも

わかをかにさかりにさける梅花殘れる雪にみたりつるかも

あは雪の日をへてきえすかくふれは梅の初花散か過なむ

ゆきの色をうはひてさける梅花今さかり也みん人もかな

春のゝに鳴やうくひすなつけんと我やのそのに梅の花さく

春くれは先さく宿の梅の花獨みつゝやはるをくらさん

いもか爲いつれの梅を手折とて下枝の露にぬれにける哉

わか宿に咲たる梅を月夜よみ夜な〳〵みせん君を社まて

久かたの月夜をきよみ梅花心ひらきてむかし思ふきみ

來てみへき人もあらなくに我宿の梅のはつ花散ぬるもよし

我かさす柳のいとをふきみたる風にや妹か梅のちるらん

うちなひき春かと我はけふそしるわかしろかみに梅花ちる

春霞立し時より鶯のはつ聲するははるへにやなる
淺みとり染かけたるとみるまてに春の柳はもえにける哉
あさな／＼わかみる梅に鶯のきゐて鳴へくしけくはやなれ
百敷の大宮人のいへ（かつら萬）路なるしたり柳はみれとあかぬかも
青柳の糸よりかけて春風のみたれぬさきにみん人もかな
今日更に君はなゆきそ春雨の心を人のしらさらなくに
はる雨にあらそひかねてわか宿の櫻の花は咲そめに鳬
見わたせは春日ののへにかすみ立さきみたるゝは櫻はなかも
はる雨の折々ふるにたかまとの山のさくらはいかゝ有らん
足引の山のまてらすさくら花此はる雨に咲にけらしも（ちりゆかんかも萬）
春の日の紅にほふ桃のはな花の名たてに出いたるいも
山もせに咲ろつゝしのにくからぬ君をいつしか行てはやみむ
我せこにわかこふらくはおく山のつゝしも（の花のいま萬）今日は盛成けり
はる山は散過れとも三わ山はいまたふくめり君まちかてに
つはなぬく淺ちか原のつほすみれ今はさかりにしける我戀（なりわかこふらくは萬）
山吹の花とりもちてつれもなくかれにし妹を思出るかも
やまふきを宿にうゑつゝみる時は（ことに萬）思はやます戀そ（こそ萬）まされる（れ）
戀しくはかたみにもせんわか宿にうゑし藤波花咲に鳬
藤波の花のさかりにかくこそはかきすくりつゝ年に思はめ
ふちなみのはなさくみれは時鳥なくへき折はちかつきに鳬
藤なみの花の盛に成にけりならの都は思いつやきみ
梅の花はるよりさきに咲しかと見る日はまれに雪は降つゝ
來て見へき人もあらしを我やとの梅のはつ花折つくしてん
梅の花散にし日より敷妙の枕も我はさためかねつも
白紙にさしまとはせる花の色をそれなむ梅と人はわかなむ
春風のふくにさきたつ梅花きみかためにそこきとゝめつる
風ませに雪はふるともみになさす我家の梅を花にちらすな
雪さむみさきもひらけぬ梅花よし此頃はさてもあるかね
我宿のまへの青柳かせふけは折人なしにぬきみたるいと
青柳のいとゝあやしき散花をぬきてとゝむる物とはなしに
山守はいはゝいはなん高砂の尾上の櫻折てかさゝむ
手もやます折ておきてむ櫻花散なむ後にあかぬ戀（くひイ）せし
ゆかん人こん人しのへ春霞たつたの山のはつさくら哉
ふる鄕に花は散つゝみよしのゝ山のさくらはまたさかす鳬
櫻花こたかき枝の空にのみ見つゝやこひん折すへもなみ
春の雨に匂へる色もあかなくに香さへなつかし山吹の花
折てしもてゆきかほに櫻花さける山へをわたるしら雲
梅の花さきつる野へ（そのイ）の青柳をかつらにしつゝ遊ひくらさむ
花（宿イ）やなきかつらに折し梅花たれかはらゐしさきのゝうへに（うかへしさかつきのうへにイ）
さほ山にたな引霞みることに妹を戀つゝなかぬ日もなき
久かたの天のは山に此夕かすみたな引はるたちにけり
おくれゐてあれはや戀の春霞たなひく山を君かこえなは
花のちることやくるしき春霞立田の山の鶯のこゑ
石はしる瀧なくもかな櫻花手折もたらんみぬ人のため
色も（今イ）かも咲にほふらん橘のこしまかさきの山吹のはな

夏歌

春雨そふりやみぬ也時鳥たつたの山に今やなくらん
時鳥まてときなかすあやめ草玉にぬく日のまた遠きかも
五月雨の空もとゝろに郭公何をうしとか夜たゝ鳴らん

さみたれをたひにのみふる時鳥夜深くなきついやねかねつゝ
たれをかはこふ（ひイ）の山邊のほとゝきす草の枕にたひ〱そ鳴
郭公宮古へゆかは立かへり今きぬへしと妹につけよかし
郭公山ちにたかく鳴聲をわか獨ねに聞かかなしき
しのゝめのほからに聞は時鳥我まつかひはなかりけりやは
かも河のみなそこ見えて照月を行てみんとや夏秋する
うの花の匂ふ五月の月きよみいねす聞とやなくほとゝきす
卯のはなもいまたさかぬを時鳥さほの山へをきなきとよむる
わきもこかきる夏衣白妙にさけるかきねのうの花やとき
時鳥待に夜ふけぬ此くれのしつくをおもみ道やよくらん
夏山の梢をたかみほとゝきすなきてとよむる聲のさやけさ
郭公一こゑ鳴ていぬるよはいかてか獨いをやすりぬる
夏衣かたしめ山の時鳥今はきとよみ立かへりなけ
うつくしとみる度毎になてしこの花の名殘はなつかしなきみ
春過て夏そきにけらし久かたの衣ほしたる天のかこ山
時鳥おもはすありき此くれのかく成までになとかきなかぬ
神なひのいはせのもりの時鳥ならしのをかにいつかき鳴む
春日野のふちちり過て何をかもさかりの人の折てかさゝん
うの花のちらまくをしき時鳥野にも山にもなきとよむかも
ほとゝきすなきとよむる橘の花ちる庭をみる人もか（やたれ萬）な
此暮の夕やみ成を時鳥いつこをいへとなきわたるらん
獨ゐて物思ふときにほとゝきすこゝを鳴行は心あるらし
じなのなるすかのあらのに時鳥なく聲きけはとき過に鳧
君こふとふしゐもせぬに時鳥あを山邊より鳴わたる也
我宿の花橘にほとゝきすよふかくなけは戀まさるなり
ほとゝきす獨山へになくなれは我らちつけに戀せらるはた

秋歌

神なひのみむろの山のくすかつらうら吹かへす秋はきに鳧
君ゆへに我戀をれはわかやとのすたれうこかし秋風そふく（の風ふく萬）
わきもこか衣ならなむ秋風のさむき此ころ下にきましを
秋かせのさむき朝のさゝのをか戀らん君に衣きせましを
あき萩の咲出るのへの夕露にぬれつゝきませよは深ぬとも
秋はきの下葉たはゝに置露のけなはけぬとも色に出ぬや
玉はぬけ消すはきえし秋はきのうれもたはゝにおける白露
いもか家の門田をみんとうち出て心もしるくてれる月かも
秋かせの吹にし日より天河かはせに出立て待さつけこせ
あまの河波は立とも我舟はいさこき出なむ夜のふけぬるに
秋かせのきよき夕にあまのかはふねこきわたせ月人をとこ
しは〱もあひみぬ君に天川舟出はやせよ夜のふけぬ時
ひこ星の妻むかへ舟こきくらし天のかはらに霧立わたる
此夕ふりくる雨はあまの川とくこく舟のかひのしつくか
天河白波たかく我こふる君か舟出はけふそすらしも
あまの川霧立のほる七夕の雲の衣のなひく袖かも
あまの河わたるせふかき船をうけてこきくる君か梶のと聞ゆ
君かふね今こそわたれ天のかは霧たちわたる此川のせに
秋かせに山飛こゆる（けはイ）鴈金の聲とほさかる雲かくるらし
此頃の朝けにきかぬ足引の山をとよましさを鹿そ鳴
手にをれは袖さへ匂ふ女郎花その白露のちらまくをしも
殊更に君はすらしなをみなへしさかのゝ花に匂ひてをみむ
秋萩の咲たる野への棹鹿はちらまくをしと鳴といふ物を
我宿の萩のはなさけり見にきませ今二三日あらはちら南

まくす原なひく秋かせ吹里に（こと萬 からイ）あたの大のゝ萩の花ちる
秋のゝの尾花か末のうちなひき心は妹によりにしものを
秋されはおく白露に我宿のあさちかうれは色付にけり
物思ふとかくれのみゐてきてみれは春日の山は色つきに鳬
かり金の鳴にし日よりかすかなる三笠の山は色付にけり（るイ）
かり金の鳴つるなへにたか圓ののへの草はも色（そイ）付にけり
秋はきのうつろふをしと鳴しかの聲聞山はもみちしにけり
むは玉の夜の夢にはみゆらんや袖ひるまなく我し戀ふれは
鳴鹿の聲にて（うらふれぬイ）ふりぬ時は今あきの半に成ぬへらなり
此夕秋かせふきぬ白露にあまねく花はあすも咲なむ
春くれは霞にこめてみせさりし萩さきにけり折てかさゝん
わか宿にさける秋はき常ならは我待人にみせまし物を
うつら鳴ふりにし里の秋はきを思ふ人とちあひみつるかな
いもかひもとくと結ふ（ひて萬）と立田山いま社もみちはしめ也けれ
秋はきの花咲にけり手折もてみれともあかぬ君にも有哉
飛鳥河もみちそなかるかつらきの山の木のはは今かちる覽
秋山に霜ふりおほひ木葉ちるともにゆけとも我忘れめや
紅葉はをちゝ（ちらす萬）に時雨の降なへに夜さへそ寒きひとりしぬれは
さを鹿の妻とふ（上萬）山のをかへ成わさ田はからし霜はおくとも
秋田かり庵つくりてわかをれは衣手寒し（〔く歟〕）露そおきける
長月の時雨のあめにうつり（ぬれとほり萬）行かすかの山は色つきにけり
しら露を玉にも（なしたる萬）ぬきて長月の在明の月を（ツヨク萬）みれとあかぬも
一とせにふたゝひゆかぬあき山を心にもあらすくらしつる哉
ときは今は秋そと思へと衣手に吹くる風のしるくもある哉

あきはしめいつとしらぬを月影のまとに入ても思ほゆる哉
今よりは秋風さむく成なむをいかてか獨なかきよをねむ
たかまとの野への秋萩ちらさらは君かかたみと見つゝ忍はん
こそ見てし秋の月夜は照せともあひみし妹はいや遠さかる
七夕はなのりすらしも天河きよき月よにきりたちわたる
ひこほしの別て後にあまの川をしむなみたに水まさるらし
天河かへらん空もおもほえすたえぬ別とおもふものから
とし（によそふイ）かさね我舟かくる（こかん天の川イ）泪かはかせはふくとも波たつな夢
戀わたる年のわたりは（をイ）七夕のかた時もあはす別ぬるかな
君かくる今夜はまれに天川年月のみそわかるへらなる
あまの河淺くふみつゝわたるせに歸なみたの淵と成つる
天川きり立くもれ玉くしけ明なはあかすかへらまくをし
秋かせのふきにし日より天河せゝに立出て待とつけなむ
ひとゝせにひとたひわたる天川いくらはかりのひろさ成覽
けふよりは天の（イ元）かはらはあせなゝむ淵せともなくたゝ渡南
逢よしもわたるなと思へは天川思立（おりイ）よりそ嬉しかりける
かさゝきのはしつくるより天川水もひなゝむかち渡りせん
河（秋イ）かせに夜のふけ行は天川かは（入萬）せになみの立ゐこそまて
一とせに七日のよのみあふ事の戀もつきねは夜そふけにける
天の河かはせに波のうちはへて我たちまちしけふそ來にける
天河せゝのしら波さはく也わかまつ君か舟出すらしも
いもにあはん夜を（ふときかたなつと萬）はたまつと久（のイ）かたの天川原に月はえ（そへにける萬）に鳬
銀川いはこす波の立ゐつゝ秋は七日のけふをこそおもへ
さゝかに（かさゝきのイ）のはつなにかけてわたす橋又もこほれす心有らし

天河夜ふかく君はわたるとも人しれぬとはおもはさらなむ
七夕のあふ夜のみ社天川わたるせありてきりもたつらめ
よな／＼に天の河原にならせ共夜永しとしもあらしとそ思
久かたの天のかはらに舟うけてこよひや君か我やとにこむ
あけぬやとゝふ物ならは天河霧立いまたはれすといは南
秋のよの庭のしら露けさみれは玉やしけると驚かれつゝ
わか宿の尾花か末にしら露のおきし日よりそあきかせの吹
玉にぬきかけて（けさてたまらん高）まもらん秋萩のうれはわくゝ（わわらはに高）における白露
しら露と名にはたつれと紅に山の木葉の色にみえけり
秋かせは日毎にふきぬ高砂のをのへの萩のちらまくをしも
秋風はことと吹ぬか白妙のわかとき衣ぬふ人もなし
うちはへてかけとそたのむ峯の松色とる秋の風にうつるな
さほ山のはゝその紅葉ちりぬ（ぬにイ）へみ夜さへ見よとてらす月影
我門のわさ田も未たかりあけぬにかねて移ろふ神なみのもり
足引の山田の稲もひいてにけり植しにあはぬわかかりにこん
いと早みまたきもかるな石上ふるのわさ田に未たひてぬを
秋の田のかりの庵に雨ふりて衣手ぬれぬほす人もなし
足ひきの山田のいねは出すともつなをはやはへ守と知らむ
たかためのにしきなれはか秋霧のさほの山邊を立かくす覽
秋きて（秋來てはイ）の見へき紅葉を霧くもりさほの山邊のはるゝ時なし
霧分て鷹は來にけりひまもなく時雨は今やのへにそゝかん
千鳥なく佐ほの川きり立ぬらんみねの梢もいろかはりゆく
秋霧のまきれにいへち忘れてや思はぬ方にとまりしにけむ
あしろへとさしてきつれと河霧の立とまよひに道も行れす
かり金の鳴つるなへにから衣立田の山のもみちしぬらむ

秋霧に妻まとはせる初かりの雲かくれ行聲のきこゆる
あま雲のよそにかり金鳴時そ下葉いろつく我やとの萩
雲の上にかりそ鳴なる我宿のあさちもいまた紅葉あへぬに
大空に雁そなく成うれひ山みかさ（さイ）の原にもみちしぬるかも
あま雲のよそにかりかね聞しより霰霜ふりさむきこよひかも
〔小聚歟〕山田に田もりのひたのこほろわて戀す鹿（るイ）のこゑたとよめる
秋山にこゝろのはれ（いイ）はみかひする鹿をおくまてとむる也鬼
きり／＼す我宿近く夜はなけひるはさはかし物かたりせむ
から衣立田の山にあやしくもつゝりさせてふきり／＼す哉
きり／＼すつゝりさせとは鳴なれと村衣もたる我は聞いれす
秋ののに人松虫の聲すなり我かと行ていさとふらはむ
秋の山かけやかたふく日くらしの此暮ことになき渡らん
萩の花色つく秋をいたつらにあまたかそへて年そへにける（そ心つきぬるイ）
いなひのゝ秋の尾花はまねけとも女郎花にも心とけゝる
藤はかまきる人のみや（そイ）立なから時雨のあめにぬらし染つる
なとうたて吹秋かせそ藤はかま（みえイ）ぬきてかすへき妹もまさぬに
うゑてこし秋田かるまて越こねはけさ初かりの音にそ鳴ぬる
折てみはおちそしぬへき秋はきの枝もたはゝにおける白露
萩の花ちるらむをのゝ露霜にぬれてをゆかむよはふけぬ共
おく山の岩かき紅葉ちりぬへみてる日の光みるよしもかな
天川あふせしら波たとりつゝわたりはてねは明そしにける
きり／＼す我衣つ（よイ）ゝれわひ人の宿も秋かせ（きイ）よきすふくなり
わきも子かはたきりおろしから衣させてし日より秋風の吹
萩の露玉にぬかむととれはけぬみむ人は猶枝なから見よ

我せこか衣のすそを吹かへしうらめつらしき秋のはつ風
秋風の吹につけてそおもほゆるさほの山邊は今やもえ出る

冬歌

神な月時雨にあへるもみちはの吹は散なんかせのまに／＼
もみちはは過まくをしみ思へ共あらそふ今夜明すもあら南
冬(夕イ)されは衣手寒きみ(しイ)よしののたかき山(よしのゝイ)へにみ雪ふるらし
まきもくの檜原のいまたくもらぬは小松か原に淡雪そふる
とをろ(夕されはイ)にか衣手寒したか圓の山の木ことに雪そふるらし
やたのゝの淺ち色つくあらち山みねの淡雪さむくなるらし
はたゝ雲ふらぬ雨ゆへ久かたのあめよりは空に曇りあひつゝ
あは雪の日毎々々にふりしけはならの都のおもほゆるかな
我せこを今や／＼といてみれは淡雪ふれり庭もお(ほイ)とろに
妹か家路われ惑はしつ久かたのあまきる雪のなへてふれゝは
つくはねのよそにのみして有かねて雪けの水になつみつる哉
山の上のさやかにみえす久堅のあまきる雪のなへてふれゝは
あし引の山にしろきは我宿にきのふ日くらし(くれにイ)ふりし雪かも
松かけの淺茅か上のしら露をけたすて玉にぬく物にもか
白雪(たか山の萬)のふりおほふ山をこゆるまも君を社せにいきのをに思へ
高ま山岩ねに生(このはイ)ふるすかのねのねもころ／＼に降おく白雪
奥山の槇のしのほにふる雪のふりはます共つちにおちめや
うちはふき鳥は鳴ともかくはかり降しら雪に君きまさんや
おほ宮の内にも外にも珍らしくふれる白雪(に霜おいとましときわのに萬)ふまゝくをしも
橘のみさへ花さへその葉さへ枝さへふれとまさるときなき

けふしれに雪にいそひて我宿のふた木の梅は花さきにけり
わかやとの冬木の上にふる雪を梅のはなかとうちみゆる哉
うちなひく冬をちか(のみ萬)みかむは玉のこよひの月よかすみたる哉
み雪ふる冬はけふまて鶯のなかん春日は(へ萬)あすにあるらし
あすか川かは霧(音萬)たかしむは玉の夜風そ寒き雪そふるらし
今更に待人こめやあまのはらふりさけみれは夜はふけに鬼
あはすある物ならなくにときゝぬのさらなる戀も我はする哉
草かけのあさゐ(あらえのさきつイ)の松のかきしまを見つゝや君か三(山さイ)笠こゆ覽
すみの江のみるみち(ふたみちをゆくイ)をわき道なしと人にしらるゝ事はよき哉
三ケ月(みかはなるイ)のふたみくち(ちイ)よりわかるれは我身もあれゝ獨かもぬる
照月を雲な隠しそしまかけに我ふねとめんとまりしらすも
美吉野のみふねの山にゐる雲の常ならむ共我おもはなくに
紅葉はの時雨とふれはさ(ほイ)す笠の上に紅しみぬへらなり
吹風に散たにをしきさか山の紅葉かきたれ時雨さへふる
から衣立田の山のもみちははははた物もなきにしき(ときにイ)とそみる
わきもこか神な(ゝみのイ)ひ山のもみちははうつる事にも物は悲しき
かさゝきの渡せる橋におく霜の白きをみれは夜そ深にける
さほ山に錦おりかく神な月しくれの雨をたてぬきにして
春をまつ梅の立枝にふる雪は人のためなる花にそ有ける
別行冬のかたみは黒かみのふりおける雪のきえぬなり鬼
あら玉の年のをはりになる事に雪も我身もふりまさりつゝ
此時雨いたくなふりそわきもこかつとにみせむと紅葉折けん
秋のたは皆かりはてつれと初霜のおくての稲そ久しかりける
露霜もおけはそよけと竹のはのいつゝうつろふ色ならなくに

おとしける末はの上に白玉をぬきてみせたるけさのあられは
綾ふり玉とみれともひろひおきて心の如くぬかはけぬへし
夜をさむみあさとを明て見わたせは庭もおとろに淡雪そ降
山のかひそこともみえす白かしの枝にもはにも雪のふれゝは
月夜には花とそみゆる竹の上にふる白雪をたれかはらはん
雪ふらは立もかくれん春日なる三かさの山のするのまつ原
あら玉の年も渡りてあるかうへにふりつむ雪のきえぬ白山
梅かえにふりつむ雪を包みもて君にみせんととれはけぬへし
しら雪のいろわきかたき梅かえにとも待雪そきえ殘りたる
しら山の峯なれは社白雪のかのこまたらにふりてみゆらめ
冬のよの寒きまに／＼わきもこか衣をかりの聲はきゝつや
けひか家ちあれまとはめや足引の山かきくもり雪はふら南

戀部

わかせこを戀ては久しむまおひのあへ橋のこけをふるまて
吉野川いはきりとほし行水のおとにはたてし戀はしぬとも
音にのみ戀れはくるし撫子の花にさかなむなそへつゝみむ
玉ほこの遠道もこそ人はゆけなとか今のま戀しかるらん
彥星のつまよふ舟の引つなのそこに絕なむと我思はなくに
足引の山のかけ草むすひおきて戀やわたらん逢よしをなみ
しらま弓いつはの山のときは成命かあやな戀つゝやあらん
奥山のいはほのこけの年ひさにみれともあかぬ君にも有哉
長月の時雨のあめの山かくも我むねたれをみてはや見なむ
妹かぬる床のあたりに岩くゝる水にもかもやいりてくゝ覽
くしけなるかゝみの山をこえ行は我は戀しき妹かすかたか
こひしくはきませぬ君の長月のもみちの色のすきはつる迄
かくはかり戀しくあらはます鏡月日ならてもあらまし物を

雜部

最上山すかけせしより心有てまもりかへせるやかたをのたか
橋をもりへの家のかと田わせかりとき過ぬうとみやすらん
我宿のわさ田かりあけておへす共君か使はたゝにはやらし
かは風にかはつ鳴也夕されはかり衾さむしゆふまくらせむ
白波のこすといふかたにつきぬれは今そ嬉しきみつの濱松
家路には石ふむ山もなき物をわか待君かむまのつまつく
さよ深てみつゝやゆかむまつら成小夜姫のこかひれふりの山
岩のへに釣せし人もうちつけの思ありとはしらすや有けん
足引の山すかのねをひきみつゝ我かねはとゆめ人にいふな
足引の山下かせはふかねともいもかなき夜はいねて寂しも
あひみんとあひ榮へみむと大宮を仕へまつれは尊くも有哉
世中の常なきことは知らむを心をつくすますらをにして
よの中のつねならぬ身とかつしれはいもに心を忍ひかねつも
みたちせしこまのあら磯今みれは老さりし草生にけらしも
けふ／＼とわか待君は岩水のかこにましりぬありといはめや
妹か名はせなになかさむ姫小松まつかえかくれこけ生る迄
しぬらんとかねてしりせは北海のありその濱はみせまし物を
いつしかとまつらむ妹に玉ほこの事たにつけすゆきし君かも

一本所載歌

雲隱鳴なる鴈の行てみむ秋の田のほもしけくしおもほゆ

妹家路我わすれめやあし引の山かきくもり雪はふるとも

新しき年のはしめにいやとしに雪ふみちらし常ならぬかも

戀つゝもあらんと思へといふは山隱れし妹を忍ひかねつも

さほ山にたな引霞みる毎に妹にこひつゝなかぬひそなき

きのふこそ君はこましか思はすに濱まつかえの雲のたな引

君はいさわすれやすらむ玉葛かけにみえつゝわすれぬ物を

白露はけなはけなゝむきえす共玉にぬくへき人もあらしを

我宿の江の木つきのきつき毎につかひはやらむ心またくな

その原の山をいくかもなけくまに君も我みもさかり過行

右家持集以橋本肥後守經亮本書寫挍合

群書類従巻第二百三十五

和歌部九十家集八

権中納言兼輔卿集

正月一日これかれあつまれる所にて
あたらしき年の始の嬉しきはふるき人とちあへる也けり
藤原のさねきか藏人よりかうふり給はりて あす出ん
とするに
むは玉のよひはかりかあけ衣あけなは人をよそに社みめ
のりゆみのかへりたちのあるしの所にて
故郷のみかさの山は遠けれと聲はむかしのうとからなくに
兵衞のつかさはなれてのち庭に紅梅をうへて花おそ
く咲けれは
宿ちかくうつして植しかひもなく待とほにのみ匂ふ花哉
梅花おもしろかりけるを見にとて ひわ殿におはしけ
るに
やと近く匂はさりせは梅花風のたよりに君をみましや
はるかむ(玄上)の宰相左近中將にて紅梅を折て おこせ
たりしに
君かため我おるやとの梅花色にそ出る深き心は
とある返し
色も香もともに匂へる梅花ちるうたかひのあるや何なり
しのひたる人の移香の人と かむるはかりしけれはそ
の女に
梅花立よるはかり有しより人のとかむる香にそしみぬる
是も女に
もとの香のあるたにあるを梅花いとゝ匂ひのそはりぬる哉
屏風に
青柳のまゆにこもれる糸なれは春のくるにそ色まさりける
三條の右大臣殿(定方)のまたわかく おはせし時かた野
に狩し給ひし時おひてまうてゝ
君かゆくかた野はるかに聞しかと慕へはきぬる物にそ有ける
いそくことありてさいたちて歸るに かのおとゝのみ
なせ殿の花おもしろけれはつけて送る
櫻花匂ふを見つゝかへるにはしつ心なきものにそ有ける
京に歸たるにかのおとゝの御返事
立かへり花をそわれは恨こし人のこゝろのとけからねは
あたなりといへる人に花折てやるとて
あすしらぬ物としる／＼櫻花ちらぬ限りはみまくほしはた
櫻の花のちるをかきあつめて下さふらひにをかせ給

へりけるをみてひはのおとゝ
散花をあたなる物といふなれは斯てのみ社みるへかりけれ
そのついてに
ひろひ置てみる人しあれは櫻花ちりての後の悔しさもなし
櫻の花のちるをみる人
雪のことちりくる春の櫻花冬は殘れることゝちこそすれ
かへし
櫻花しらかにましる老人の宿には春のゆきやたえせし
庭にたゝすみて八重山吹のもとにて
わかきたるひとへ衣は山吹の八重の色にもおとらさりけり
くちなしの色このみといふなはたてゝ非手の山吹盛すく哉
是は非手といふみかはやうとに山吹の花をもたせて
色めける人のおこせたりける返事也
あふ事をこよひ〳〵と賴めすはなか〳〵春の夢もみてまし
雨ふる日
庭たつみ木の本ことに流すはうたかた花をあはとみましや
みのむしつける枝につけておこせたる返事に
春雨のふるにつけつゝみの虫のつける枝をは誰か折つる
もろともに我をる宿の櫻花あかぬ匂ひを誰にみせまし
京極の家の藤の賀三月一日しけるに三條右大臣殿
かきりなくなにあふ藤の花なれはそこゐもしらす色の深さに
かへし
色ふかく匂ひしことは藤浪の立もかへらす君とまれとそ
またおとゝ夜明にけり
昨日みし花のかほとてけふみれはねてこそ更に色優りけれ
とあれはまた
一夜のみねてしかへれは藤の花心とけての色みせんやは
また
いたつらに明はあやなし時鳥なくな待とて君はとゝめん
かつらの御息所なにことにかそゞせ給て返事おそし
とて恨み給けれは
つゝむへきほとならなくに時鳥いかゝしてかはふる聲のする
物思ひしける比時鳥を聞て
時鳥なきのみわたる夏山のしけくも物をしのふ比かな
大やけ所にしのひにきける男のえかくれあへて誰そ
なといひさはかれけるを聞て
人しれぬ宿にすみせは時鳥うき五月雨はしられさらまし
平のなかきかはりまよりのほりさたすること有てい
ままてまいらぬといひたる返事に
時鳥なきまふ里のしけゝれは山へに聲のせぬもことはり
男のもとより扇えたる女にかはりて
嬉しくていとゝゆく末わひしきは秋よりさきの風にそ有ける
七月六日
いつしかとまたく心をはきにあけて天の河原をけふや渡覽
七日うへのさむらひにこれかれ歌よむに
七夕をわたして後は天河浪たかきまて風もふかなん
戀わたる七夕つめにあらは社けふしも人にあはんと思はめ
是は。かのさはること有てと云たりしなかきか。ありあ
りて七日に來けれは。内のさふらひにていひ出したり
ける。
七月七日歌よみける所にいきて
天河あさせ白浪たとりつゝ渡りはてなは明そしぬへき

常にあひそひたりける人の。其夜ほかにて
七夕にわかかすものはまたもなしこよひ計のあはぬもの也
返し女
こよひかす七夕つめに身をかへて明は歸らん事を社おもへ
まらうとのいそきたつを
七夕の人に物かすこよひさへいてゝはいたく急かさらなん
女に
人しれすおもふ心は秋萩の下葉の色に出ぬへらなり
扇を人に送るとて
吹風とうとまさら南秋の夜のえそむつましきしるへ成ける
月なみの御屛風につらゆき
人しれすこゆと忍ひし足引の山下水に影はみえつゝ
殿返し
河霧の立しかくせは水底にかけみる人にあらしとそ思ふ
よさふらひにて女郎花みに野へ出んとさたむるに八
月なり
女郎花は思ひなわひそもろ共に月も過さすむれてとふへし
こないしのかみの賀みかとのせさせ給ふに屛風の繪
雲非にかりの飛所
白雪の中にまかひて行鴈も聲はかくれぬ物にそ有ける
女のもとより
いて人の忍ふといひし言の葉は時雨と共にちりにけらしも
返事人にかはりて
初時雨ふりしそむれは言の葉も色のみまさる比と社見れ
はつ時雨ふるにぬれつる我袖のひるまはかりをみるそ侘しき
こないしのかみの御屛風に
時雨ふるおとはすれとも呉竹のなと世と共に色もかはらぬ
はつきはかりに親の思にて久しくえあふましき人に
墨染の衣もよな〳〵へたてつゝおほつかなくや秋を過さん
おもひなりけるをしは〳〵とひけるほとにかくとい
ふになくさむといひたりけれはこのとふらふ人
とふ毎に名草の濱のなくさまは波のよるひるあらしとそ思ふ
返し
白浪のよる〳〵ことになくさまは袖のひるまは我も知なん
十月ふたつあるとし御前の菊のえに
神な月ふたつあるとしの時雨には一本菊そ色こかりける
女房の
菊の花折てはとらし初霜のおきなかしこそ色まさる比
こないしのかみの住給ひし時藤壺にて菊の賀みかと
のせさせ給ひけるに
紫の一もときくは萬代をむさしのにこそ頼むへらなれ
御前に菊たてまつるとて
けふほめて雲非にうつす菊の花天つ星とや明日よりはみん
秋初瀬にまうてゝ紅葉のなかるゝを見て
からにしきあらふとみゆる立田河大和の國のぬさにそ有ける
はやうなく成にける人ともろ共に逍遙せし所をひさ
しく成て見て
うたゝねのうつゝに物の悲しきは昔のかへをみれは成けり
人にさうそくをくるとてものこしにつけゝる
むすふをのかけてみたれはむは玉の夜の衣を返すまとしれ
人のもとに文やらむとてかきてはやり〳〵するひと
をみて

思ふことといふことかたみ徒にかきてやるをそかたみにはする
女の恨てなきけるに
岩千鳥あやなかるねは何故になかすの濱のなかすにあら南
女かへし
物思ふをなくさの濱のいは千鳥なくさむまにそ鳴まさりける
父女に
わすれなん我をうらむな時鳥人を秋にはあはんともせす
返し
忘れなは誰かは人を恨へきうきにおくれてしなは我かは
をとこ
みくまのゝ浦のはまゆふもゝかさね心はあれとあはぬ君哉
女返し
みくま野の浦の濱ゆふ夕されは我にひとへに思やはすな
また返し
しのゝめの明れは君は忘れなんいつともわかぬ我そ悲しき
雨ふるとてこぬ男をうらみけれは
思ふ事ならすなからに世の中のふれはや雨に我さはりけん
月もへたゝりにけると女のいへる返し
浮雲に身をしなさねは久かたの月へたつともしられさり鳬
女に
あひもみて君かきえなはけふ計りちいろの濱の名をも流さん
伊勢の齋宮にまいりて歸る比はやうしりたる女のも
とより
人はかる心のくまはきたなくて清きなきさにいかて行けん
此女は齋宮のないしといふなり。返し
たかために我は命をなか濱の浦にやとりをしつゝかはこし
かたたかへにいきたる所に枕をかへすとて
しき妙の枕にちりのゐましかは立なからにそ人はとはまし
かへし女
君か爲打拂つゝしき妙の枕のちりにけかれぬるかな
冬の日はなかむるまにも呉竹のよるそ侘しきなかき思は
女のもとより出てほとなく雪のいたくふりけれは
白雪と今朝はつもれる思かなあはてふるよの程もへなくに
父女に
冬のよの涙にこほる我袖の心とけすもみえし君かな
返し
いつとてもはるゝ事なき我身には戀そまさらんかけん物かは
女
うき身とて雪降まゝに消にしを人にとはれん玉しゐもみん
かへし
ふりもせぬ君か雪けの雫ゆへ袂にとけぬ氷しにけり
あふ事をいつしかとのみ思ひつゝくらす心のあやしかり鳬
常にあひしりたりける女のいかゝありけんふすへけ
れは
東路のあるかなきかをしらぬまは厭ふにきたる物にそ有ける
つねにそへる女四日はかり外にて
おのゝえも朽やしぬ覽あふ事の世々ふる事の久しと思へは
心みにひとりぬるよの夢にたにみぬは侘しき物にそ有ける
女山吹のきぬきかへたりけり返すとて
語りつといふくちなしの色もなくたてる衣はかひなかり鳬
わらはは名むきといひける人にすみけるをすこしかれ
ける比かくやるとて

みまくさのためとおほゆる草莖のむきとや人の今はかる覽

たしまの湯にくたるとてふたみのうらにやとりて

夕月夜おほつかなきを玉くしけふたみの浦は明てこそみめ

しふく山にて

あらしふく山下とよみなく鹿の妻こふるねに我そ侘しき

女のまたあかぬほとに人の國へいきけるにあふ坂なりける家をかりてそれよりいてたちけれは

あふさかの關にわか宿なかりせは別て後はたのまさらまし

大江千古かしらやまにまうてけるに

君かゆくこしのしら山しらねとも雪のまに／＼跡は尋ん

ものへゆく人にきぬやるとて

もろともに惜むわかれもから衣けふ許りそと先そほちける

ものへゆく人に

思ひやる心しさきに立ぬれはとまる我身はあるかひもなし

人のはらからの物へゆきけるにかはりて

ひとつすに歸りはゐれと濱千鳥しはしもたえは侘しかり覽

あふきにぬさつけて

風にしもつけつるぬさは道のへの手向にあかぬ神なかれとそ

亭子院のみかとのおほうち山におはしますにうちの御つかひにてまいりて

白雲のこゝのへにしも立つるは大内山といへはなりけり

幽仙法師かとし久しく御導師つかうまつりて御佛名のあしたに律師になりけるを見て

足引の山のかけはしふみのほりけふこそ嶺の花はおるらめ

この律師にかはりてそうせる

日の光ちかき朝はいたゝきの霜こそとけて袖ぬらしけれ

式部卿宮うせさせ給へるころ

今はとて風まつほとの櫻花人の世よりはひさしかりけり

おやの思ひにて山寺にこもれるにいつくにてと人たつねたりける返事

足引の山へに今はすみそめの衣の袖のひる時もなし

藤衣人の袂とみし物をおのかなみたになかしつる哉

女をなくして家に歸てかのすみし所をみて

立寄んかたもしられすうつせ貝むなしき床の浪のさはきに

思ひにて人の家にやとれりけるに此家に忘草のおほかりけれはその家にいひける

なき人をわすれかねては忘草おほかる宿にやとりをそする

かへし

かた時も見てなくさめよ昔よりうれへわするゝ草といふ也

ふくぬくと聞て人のいひをこせたる

今はとてをしきなからに藤衣ぬきすてゝけることの侘しき

返し

藤衣うきをかきりにはつれつゝ泪の玉をぬくそ悲しき

先帝のおりゐさせ給ふに三條のおとゝ

かはりなん世にはいかてかすまふへき思やれ共ゆかぬ心に

そのかへし

秋ふかき色かはるらん菊の花君かよはひの千世しとまらは

又

おちかはる萩の下葉のしたにのみ秋うき物と我なきそへん

たいこの帝うせ給て後三條右大臣

人の世の思ひにかなふ物ならは我身は君にをくれさらまし

帝うせ給て又の年の正月の朔日に三條のおとゝ

いたつらにけふやくれなんあたらしき年の始は昔ながらに
　返し
なく泪ふりにし年の衣手はあらたまれともかはらさりけり
　是もおとゝ
都にはみるへき君かなき物を常に思ひて春やきぬらん
　又おとゝ
はかなくて世々ふるよりは山科の宮の草木とならまし物を
　かへし
山科の宮の草木と君ならは我も雫にぬるはかりなり
　三月のつもこり。おとゝ
櫻ちる春のくれには成にけりあやめもしらぬなけきせしまに
　返し
春ふかくちりかふ花をかすにてもとりあへぬ物は泪成けり
　帝の御ふくに親のを重ねて貫之か來りけるによみて
　やりける
ひとへたにきるはわひしき藤衣かさなる秋を思やらなん
　山里にて
足引の山へにをれは白雲の立ゐたゆたひ物なこそ思へ
朝夕の身にはそへともあら玉のとしつもりゆく我そ悲しき
　さかのおほみゆきのついてに
年たけてあひつることを數ふれは我もおきなに成そしにける
としことに鳴つる鴈と聞しまに我はひたすら老そしにける
　このかなしきなと人のいふ所にて
人のおやの心はやみにあらねとも子を思ふ道にまとひぬる哉
子の爲に殘す命をへてしかな老てさきたつくひなかるへく
　ひんかし
以下一本無之
我わひんかしらの白くなるまてに年月ふともあはす成なは
　たつみ
かすみたつみねやいつくと尋みん花のとをめをまきらはす哉
　みなみ
並々の人なみならは住の江のまつともいふに出ていなましを
　ひつしさる
陸奥の白川こえておひ／＼つしさる／＼もゆけとはるけき
　にし
わすれにしさきをうしとは思へとも心は雲のうち忍ふかな
　いぬゐ
今はいぬゐのへのまつのおひぬ覽年月ふともさかりとけ南
　きた
しきたへの枕に涙せかれつゝ夢とたにみぬころにも有かな
　うしとら
憎かりし人のあたりはものうしとらはとら南玉のをにして
　きのえ
秋はきの枝にかゝれる白露をあやしく玉と我おもふ哉
　きのと
ふたりねし床にて深く契りてきのとかに我をうち頼めとて
　ひのえ
はしたかのとかへる山のしひのえは常盤にかれぬ中を頼まん
　ひのと
夕されはあひみるへきを春の日のとく暮ぬ社佗しかりけれ
　つちのえ
風さむみ衣うつなるつちのえのおれぬはかりに音のする哉

つちのと
門田かりせきのふかりを思ひしをひつちのとくもおひにける哉
かのえ
梅の花いつれは□にくからすかのえたおりて家つとにせん
かのと
さをしかのともまよはせる聲す也妻や戀しき秋の山へに
みつのえ
淀河やすきてあなたにある水のえこそまたみね駒の立とも
みつのと
ちはやふる神の社のいふはかり水のとあ□て祈るめる哉
ひとよめくりこそおほかれ
別れてもなを忘られすうちしのひとくめくりこよ空のうき雲
出たては後めたなくある人よめくりにすへてみる由もかな
五月はかりに女の人にをくれてほとゝきすを
よのつねにきくたにあるを時鳥なき人こふるおり〳〵の聲

右兼輔卿集以古寫本并流布之印本挍之

權中納言敦忠卿集

しのひたる人に
あふことをいさほに出なん篠薄忍ひはつへき物ならなくに
たえたる人のもとに花をつみて
心にもあらてありふる年月のけふまてはなとつみてける哉
あたなたつ人いとむくつけし物をたにいはしとあれ
は
忍ひにもいかてか問ぬ濡衣を名にのみ立てやまんとやする
返し
名に立るあまの濡衣くやしきをほさてはやまん物ならなくに
又
しほりたる蜑の濡衣同し名を思ひかへさてきるよしもかな
また
五月雨のよゝと鳴つる郭公袖のひるまもなきそかなしき
やむことなき人に
雲井にてくもゐにみゆるかさゝきの橋を渡ると夢にみし哉
ちかもりかからものゝ使にくたるにいはにかねのひ
うちをほくそにちむをしてしのふをすりたるぬのゝ
袋に
うちつけに思ひいつとや故郷のしのふ草にてすれる也けり
たいこのみかとにをくれたてまつりて
君なくてたつ朝霧は藤衣いけさへきるそかなしかりける
物へゆく人にあふきに
たひとをくわかるゝ人を思ふには心の色そあらはれにける
我ひとつたくふる風をやそしまの松の嵐にあふきくらへよ

みくしけとのにまたの日
けふそへにくれさらめやはと思へともたへぬは人の心也皃
あふみのかういに
みわの山かひなかりけり我宿(かとイ)の入江の松はきりやしてまし
一條の君のつとめてうへより おるゝにさしむかひ給
へれは
白露のいそきおきつるあさかほをみつとも人に夢に語るな
かへし
あさかほを朝ことにみる物ならは君より外に誰にかは(いはん)
みくしけとのにきんたちのはゝよ
朝な〳〵をきつむ霜のあさからて心とけたるいはねてし哉
いかてとおもふ人のこと人に さたまりたるにをみな
へしにさして
二葉よりたのみし物をみなへし人の垣ねにおひにける哉
年月をへてちきりなからさもあらぬ人に
人しれす思ふ心はとしをへてなにのかひなくなりぬへき哉
人にいひうとめられてかへりことせぬ人に
うきことのしけさまされる夏山の下行水の音もかよはす
はしめのきたのかたうらみ聞え給て
世中にまたしら雲の山の端にかゝるやつらき心なるらん
すけまさの母きみうみをきてうせたるを おはのもと
にてやしなふたつはかりなるを見におはしたるに
物かたりなと聞えけるに いみしうなき給てちこの名
はあつまとなんいひける
むつこともまたいひいてゝ別にし人のかたみはあつま也(けり)
齋宮とよをへて聞えかはし給ひけるはしめのにや
したにのみなかれわたるは冬河のこほれる水と我となり皃
かへし
心から人やりならぬ水なれは流れわたらんこともことはり
また
かけにのみ殘れる雪の消はてぬさきにも人のあひみてし哉
返し
光みぬかけにならへる雪なれはあひみむからに消てまさ覽
又
露なから野への花をはおらねともたえす袂をしほる比かな
返し
露にたにおほせそせましかく計りてる日にぬるゝ袖も有よを
又
さりともと思ふ心にはかられて世にもけふまていける命か
かへし
頼むにも命のかゝる物ならは千とせもかくてあ覽とを思へ
又
いつしかとおもふ心のなき人やとまらぬ春を侘しとは思ふ
野分して白波たゝむ時たにもすくさす君にあひみてしかな
返し
松山もこゆといふなる白浪の〳〵立んつきとはかけすもあら南
又
しひてのみ我身をふれはひとつともおさらぬ物は涙也けり
かへし
せきあへぬ涙なれともわれを君けふは心のふるはまされり
ふくにやおはしけん
ひとへたにきるは侘しき藤衣この事をさへかさねてそ思ふ

きてうしと思ふかきりそ藤衣かさねて色はおもはさりけり
又
世と共にはれぬ涙にさはりなはよそにのみふる身さや成南
世中をわふるわかみはひとつにていかてこゝらの物思ふ覽
返し
たれかわか身を二つにて物は思ふ幾ら計をこゝらといふ覽
ふるき人になんかへりときゝ給へるけしきなる人に
今はとて春のわかれに鶯のふるすみけるをくやしとそ思ふ
なかあめのころ又
我のみは夏のなかめはせさりけりおほ空さへや物を思ふ覽
物思ひなくてなかむるおほ空のうちのころと聞かひのなさ
又
いつとなくしつ心なき我戀のさみたれにしもみたれそむ覽
ほとへてなともしたまはさりけれは宮より
古のことかたらひし時鳥いつれのさとに長ゐしぬらん
返し
なからへてへにけるさとは時鳥道のほとたにおほえさり鳬
又
五月雨はすきぬとおもふ時鳥おほ世中をなきつゝやへん
右敎忠卿集以古寫本并流布之印本挍之

權中納言朝忠卿集

村上の御時歌合に霞
くらはしの山のかひより春霞年をつみてや立わたるらん
うくひす
我宿の梅か枝になく鶯は風のたよりに香をやとめこし
藤
むらさきに匂ふ藤浪打はへて松にちとせの色は見えけり
暮春
花たにもちらて別るゝ物ならはけふをわりなく惜ましやは
戀
人にたにしらせてしかな隱れぬのみこもりにのみ戀や渡覽
あふ事の絶てしなくは中々に人をも身をも恨さらまし
朱雀院御時。わか宮の御もきの御屛風に。柳
青柳の糸はかけさへあやなれや氷もさけて今はむすはぬ
櫻の花を人みる
心こそ花にをくれてとまるらめ駒さへあやな過かてにする
なてしこの花を人もてあそふに
初花をみてこそしのへ白露の置て殘せるなてしこの花
女郎花
ほのかにもかけみてしかは女郎花野へにまされる色は有やと
八月十五夜
秋霧は月のこゝろも心みに入山のはを立かくさなん
網代
もみち葉のなかるゝ底を尋てそ山のふもとに我は來にける
村上の御時齋宮くたり給ふに長奉送使にて下りて歸

るとて
萬代のはしめとけふを祈置て今行末は神そかそへん
權中納言のおとはの家にて
音羽川身をはたきりてなかる共君か宿にはまさりしもせし
みちの國のかみしら河にてせんし給ふに
別るともまた逢坂の關路にそしるもしらぬもまとはさり鳧
行かへる物としる〳〵あやしくも別と聞はをしまるゝかな
たいふかもとより曉にかへりて
もろ共にをるとはなしに打とけてみえやしぬらん朝顔の花
同し人
古はおもひ出きや渡り河わたるてふなはなかれすや君
かへし
なかれての名に社有けれ渡り河あふせありやと頼けるかな
又同し人
ぬれはつる水の下にもいかなれはこひといふ魚の絶す住覽
又
池水のいひ出る事の難けれはみこもりなから年そへにける
世中のさはかしきころ
人の世の花をはてにしせましかはけふかあすかと思はさらまし
かへし
心にもまかせさりける命かとためもおかし常ならぬよに
物もいはてかへるあした
いたつらに立歸こし白浪のなみたにそてのひる時もなし
返し
何にかは袖のぬる覽白浪のなこりありともみえぬけしきを
とのゐ物をうちの人のつほねにもてたうへたりける
にきたなけなる上のきぬにむすひつけたりける
故里のならのみかとの始めよりなれにけりともみゆる衣哉
かへし
ふりぬとて思ひもすてしから衣よそへてあやな恨もそする
女にはしめて
白浪の立出るはまの濱千鳥あとやは歸るしるへ成らん
内侍督の御もとにたのめてこねは
よのほとは今や〳〵と慰めつさめての後そわさとなかるゝ
少貳命婦かよふにつゝむことありて
雲間にはいとゝ詠めそ増りける天の岩戸のひまやみゆると
かくて久しくありてわつらひしにとはてほとへてい
ひたる
露はかり思ひおくへき心あらは消ぬさきにそ人は問まし
ひさしくおとせてとひたる人の返事に
思ひ出ておとつれしける山ひこの〔　　　　　　　　〕
いと忍ひて物いふ人のをとこのつかさえてくたるに
程へつる我玉しゐはいかにしてはかなき空にもてはなる覽
七月七日
七夕のあまのとわたるけふさへや遠かた人のつれなかる覽
本院侍從かれみちとねたるを立聞て
よそにわか人と〳〵を聞しかはあはれとも聞あならとも聞
うちの女房に
知人はみよしもあらし思なる心のうちのこゝろならては
ほかへやる文をたいふかもとにもてたかへたれは
道しらぬ物ならなくに足引の山ふみまとふ人も有けり
返し

しらかしの雪も絶にしあし引の山路を誰かふみまよふらん
　本院侍従にからしのかはに書て
うすけれとうすくもあらす山吹のやへの色にし思そむれは
　かへし
かさぬれとうすき心のやへなれはそむてふ色の數は物かは
　本院のせうさうしはふきするを聞て
しもつけやしはふきの杜の白露のかゝる折にや色かはる覽
　かたらふ女おさせぬに
ことしおひの竹の一よのへたつれは覺束なくも成まさる哉
　返し
幾世しもあらし物故わか竹のおひそはりける春さへそうき
　たいふ
あふ事を松にかゝれる白露は久しきほとに消そしぬへき
　右近にはしめて
よと河の汀におふる若草の根をし絶ねはそこもしりなん
　同し人に
山城のうりのつらくはみゆれとも思ふ心のなとさはらめや
　中將にて女と名たつ比中納言といふ人に
もろともに君とほさなん濡衣はかなき名をは我のみやたつ
　少將にて駒むかへに本院女御殿のおまへをひかせて
　御前へまいる人々ゐたる所よりて
望月のこま引わたる秋の夜は光あまねきものにそ有ける
　少弐
時しもあれ秋のさかりにつらけれは思はぬ山に入ぬへき哉
　女に
富士のねを音にそ聞し今はわか思にもゆる煙なりけり
　返し
しるしなき思と聞は富士のねもそことはかりの煙成らん
　女藏人けんといふあつまへくたるに
別ちを惜む心そ櫻花あふ坂まてはちらすもあらなん
　たいこのみかとかくれ給へるに好古宰相
夢かとそわひては思たまさかをとふ人ありや又やさめぬる
　かへし
あはれとも思そわかぬうは玉の同し夢ちにまとふ身なれは
　むま子にむかへられてかへりなんとて車こへはをく
　らぬに外にもとめてかへりたるに
天の戸をあくるまをたに許されてまたきにのりて歸ける哉
　權大納言ひは殿にかよひはしめ給て四日といふに
我妹子かねやのつまなる菖蒲草ねも顯はれて今朝はみゆ覽
　こないしのかみの御はてに母君の御もとに
あふ事のみやつかへにと侘つるを今朝の袂そ露けかりける
　返し大將
人しれすうちはらひつる朝露にあやしく君もぬれにける哉
いつとなくぬるゝ袂は古を忍ふる雨にぬれにけるかな
　かへし
人しれぬ野の下草となれる身も雨におとらぬ露そ置ける

右朝忠卿集以古寫二本挍之

海人手子良集　實大納言師氏卿也

春

白妙の雪はかすみもみよし野のかさねてけふや立はしむ覽
こち風に氷薄くていけかをものつらゝもへゆるをしの鴨鳥
かくせともをそきはるへにひとりいてなかむる宮の鶯の聲
にほふかのめも春風にさきたゝはちりやそむらん紅の梅
とふ人もみえぬよもきのもとなれや今はすみれの盛なる哉
いとまなみ淀のさしつる程もなく春の遊ひのよるのよるとか
陸奥のまかきのわたりいそなめてわかめかりにそ蜑も行かふ
久かたのみとりの空の雲間より聲もほのかに歸るかりかね
わきも子かまゆにたれは青柳のなひくにつけてます涙哉
春のすゑ夏のもとにはかゝれともまつにみたれぬ岸の藤浪

夏

やをとめもけふやひとへに夏衣神のみそきそいそきたつ覽
見渡せは今はもえきも緑にてなくみをとりの聲のみそする
うの花のさかりになれは時鳥夜ふかきねにそ有明の月
あやめ草軒の限りはひまもなみけふはよとのやあらは成覽
數ならぬしつかたまきもをのかしる今は早苗のいそかしき哉
みたれすてこの下やみに小倉山ふもとに鹿をともすあき人
あせもよにみたるゝ夏も涼しきは君にあふきの風はやみ也
高瀬さす鵜飼も今はをりたちて水なつかしきかものうは浪
しけりあひて亂るゝ萩の上葉すら靡くは夏もみなつきぬ覽

秋

露結ふもとあらの萩の末たをになりゆく秋もちかつきに皃
鵲のゆきあひの橋のつきなれは猶わたすへき日社とをけれ
聲よはみ亂るゝ虫をこからしの露ふきむすふ秋の夜な〱
ひこほしのなかめにけふは天の川さしてやわたる鵲の橋
白露と草葉にをきて秋のよを聲もすからにあくる松むし
山吹の色にかひあるをみなへしさのみやゐての名には有覽
霞たち立かへりにし鴈金もけふそ雲井にきりはれてなく
たかさこに立わたりたる霧間より紅葉の色のふかき奥山
八重菊のうつろひわたる庭の面にかねても結ふ夜はの白露
ほの〱と天のと渡り明たれはこきませなりやよもの玉垣

冬

ぬきかふる衣のつさにたつものはけふ珍らしき火おけ也皃
陸奥のうたの濱へにこのはかたなからむ冬の風うからまし
吾妹子か玉のうてなに獨ゐていとゝわさなにやまなかた覽
あしたつの遊ふすさきも冬くれはけさしも冬の心ちみえ皃
しも月のひよりもうちの網代木に今も氷のいほにさりける
をみかよふこゝのかさねにひかけさし豊の明に見ゆる妹哉
をし鳥の衾のなかもすゝしやとよな〱しもの夕重ねつゝ
雲高きよものたかねもかたちなるみなしら山にみゆる比哉
都へとゆきかふ人の道もなみとしのせめてもいそかしき哉
百敷の大宮人もむれゐつゝこそとやけふをあすはかたらん

あはぬ戀

いかて猶みてのかさまもえてし哉我する戀の數のしるしに
逢坂のうたかた人は陸奥のさらになこそをなつくるかもし
歎きつゝかたしく袖にくらふれは清見か關の浪はものかは
よと共になへてけしきを陸奥のさは此身よといはせてしかな
すはの海の神のみまるを詠めつゝけふひねもすにをり暮す哉
君かふる涙は袖にひたちなる色つくそこのみねはなるらし

君しいなはいな〳〵こそは信濃なる淺間か山と成やはて南
あつまちのはまなの橋のはやくより深き心はくみてしる覽
かひもなきいくたのうらをあさりつゝ涙なからに歸る釣舟
黄昏に涙の玉をなかめつゝねふしてよはにあかすともし火

あひての戀

こゆるきにさし出てみれは天の原波間にこゆる舟のわれ哉
いはゝしを造りさしけん葛城の神にけなく(らぬイ)もあさほらけ哉
ひまもなく涙に袖をぬらしつゝこまに任せて歸るよな〳〵
通へ共常にまとふを武藏なるさゝのやまへのしるへせよ君
わりなきをしなむふしなむみまさかやくめのさら山今更に君
あひてあはぬ歎き駿河のふしの浦に焦れて歸るあまの舟鴨
わくらはにあふかはあふか陸奥の忍ふのちすり數ふ計りを
しのひねに又忍ひねの重なりてひるまなく〳〵袖朽ぬへし
逢坂の道にかきほは越なからまた許されぬしたひものせき

わかれ

ひなたかのよもの別もかくやたつ烟はみよにすきにたる哉
わかれちをけふそかきりと陸奥のいはて忍ふにぬるゝ袖哉
今はとてわかるゝ人をみくまのゝ浦の濱ゆふ重ねてそ思ふ
別路となつくるたひはたまほこのみち見ぬ人も猶惑ふらし
別路に行もとまるも二こゝろ袖にうきてもなけく比かな
わかるゝを心つくしにくたるともいきの松原色かはらめや
別路は千草のとのをさしなからいなくら山のこまと社みれ

無常

結ふての雫ににこる月影の身としりぬれはちよもいな〳〵
春たては子日の松をひさつれていつら祈りし千世のしるしは
ともしひの影にならへし世中をいつれ久しとかすめてし哉
ちよをまつ松の緑とみえしよははやつきくさのうつし成鬼
朝かほに露の命をくらふれは花のにほひはひさしかりけり
庭の面にうきて漂ふうたかたのまた消ぬまにかはる世の中
澤の面に年ふるたつのちよをへて後は羽うつ「おと歟」程もなしとや
色深き峯の紅葉も山川のそこにくちはのみくつとそなる
しつもなしみとりとみえすすかはねし何れも白き渚なり鬼

いのり

さゝれ石におひむよ松にすを作るたつの日なき(も)君はすみ南
山彦をしるへになしてみとりにもいつくか龜の内に通はん
斧のえを手馴しそめぬ君なれは何をかくたす何はくたさん
三千年になるてふもゝのもゝかへり君か爲にとうへし山人
ころもしてなつる巖のつくるまて君か齡をしらさらめやは
蘆田鶴の千世の齡をさしなから君にゆつるとなつくるかゝも
限なき齡をのふるうら嶋のこのたまくしけのとけしや君
君か世は猶おほはらのをしほ山なつののすゑも頼もしき哉
昔よりかすかのふちの榮ゆれは今のつかひもかさしなり鬼

とし

思はんとしのひ〳〵に誓ひしを今はたゝすの神そゆゝしき

月

たかかたの浦々事にかつきつゝ蜑は苫屋にいくかへぬらん

日

風ふけはひゝきのなたのをと高み浪の末わくあまのつり舟

とき

おもふこと君を思ふも思ふ也なをしかすかのわたりにて社

花

ませちかくうふる花しも匂ふかなこやこからしの秋の初風

春の花に鶯むつる
鶯の木つたひちらす櫻はなこや春の日のをそきなりけり
夏ほたるみきはに火をともす
身をてらす螢きえなは夏の夜の水際くらしと火をともす覽
池水かゝみにたる
池水ののとけき底にかけなみそさるは鏡にみゆるなきはを
玉のひかりていのなかにあり
別るともきみを汀にのほるにはいきの松原はたみさらめや
あふさかのせき
別る共身のうちふねそうかりける手向の神もみえぬ浪かは
秋の夜の月みつにうかふ
秋の夜の月影うかふ水のおもやあまの川ともみえわたる覽

此一册者。定家卿以二自筆本一書寫了。尤可レ爲二證本一者也。
永正三年九月日
右之本。文字繁多不審。重而以二類本一可レ爲二挍合一之者也。
永祿元暮春念日　左府藤公彥在判

閑院左大將朝光卿集

たまさかにかへり事したる女に
うき橋のうきてたにこそ賴みつれふみゝて後は跡たゆな夢
ある上達部のむすめのちいさきをおとなになしてとちきりたるほとにこと人にときゝたまてそのわたりの人のあふきに
おひたつをまつと賴めしかひもなく浪こすへしと聞は誠か
はゝのかへし　權中納言敦忠室枇杷左大臣女
おひもせすおひすもあらす末の松なにかこすへき沖津白浪
□殿□大盤所にはかまのこしのおちたりけるをたれかならんと［　］あるかきり［　］かはあらす〳〵［　］けりさ［　］みて［　］［　］のあ［　］つけて大盤所に
ときむすふてかせにいたくほころひて花の下紐解にける哉
下紐の下にもいかてあやしきはまつうへにしもおつる也兒
とてやなきの枝にあをきしきしにつけてその藏人に
匂ひさへちるそ侘しき青柳のかたいとしてはなとかときけん
鶯のよる青柳の糸なれは君かてかせにとくるなるらん
万代
あたにのみ君かむすへる下紐のとくるを人におほせさら南
百敷の花の下紐さしなからみれともあたにをちすそ有ける
世と共に君かおもひにとかれたる下紐のさはをちにける哉
内侍のかみの□のもをきかへて　たてまつりたまふとて
かつきするいせをの蜑のぬれ衣あらはれぬへき心地社すれ
春宮の左近藏人わすれたまらてのちに聞えたる

下紅葉みるにつけてそ我身にも秋〔き脱歟〕にけりと露も置そふ
大貳の聞えたりける
垣ほにも思ひよそふるなてしこの忍かねてそ今朝は折つる
返り
誰にかはおもひよそへて折つ覧さためにもてことこ夏の花
又かへり
色をみて思ひよらなむ撫子はかきほよりま□跡とそもなし
女おもふやととひたりけれといらへもせさりければ
思ふともいはすなりぬる時よりもまさる方にて頼まるゝ哉
返り
いはねとも心のほとをみえぬれは何れをまさる方と頼まん
しのひたる處よりかへり給てひるつかた
白露の目たくるまゝにきえゆけは暮待我もいかゝとそ思ふ
消ぬるときけはそおつる我袖にいかに置つる露のしけさそ
十月はかり女のもとよりかへり給にしくれのふるに
〔万代〕露わけてかへる袂にいとゝしくしくるゝ空のつらくも有哉
返り
時雨さへ露けくそ降いつ□そてをわけてや哀れといはん
馬内侍のみなみなる家に十二月二十日はかりにわた
るまつともにつけて
春近きとなりに住はすみのえのまつ人とはたおもほゆる哉
返り
冬こもり氷にとちてみつかきの春のとなりにとくやとそ思ふ
ひは殿にて不斷經よませたまひける大とくたちのな
かにいたさせ給
しりかたき物にそ有ける我身□いつれかおつる涙なるらん

御かへり　　智範あさり
いつれともなに□つきいさきよき蓮のかゝる涙なるへし
ちせんあさりまつかさきにてすほうするにいひやり
たまふ
頼もしきちとせをまつかさきにすむ人の心のときは也せは
［　］なりにしをれは草も木もさまことにして頼む成へし
みあれの宣旨あまになりたるにしきみの枝のむしつ
いたるにつけていひやる
あめの下ふりて哀といふ程にみのさためたる虫そかなしき
返り
ことの葉にかゝれるみのゝあ□せはさ袂も［　］そぬれぬる
つかさめしのころ左右えたまはらぬおもふことおは
しましけり［　］をきこえ給［　］
おもはしと思ふ物からまつ山の末こす浪のぬれつゝそふる
返り
浦こへし浪のけしきのあしければ思はしとたに我は思はす
思はすになり行末のまつとてもつれにはいかゝぬれ渡る覧
わたらゆと涙もあらは思ふとち人のつゝめる君をみましや
かへしこのたひはなかりけり
こきつくる　きしちかみなる　きにたにも
なみまもあらはと　おもふなり　ましてわかみは
あまひとの　まか□の□まを　へたつれと
なとゆ□と　まつやまの　ふもとこめたる
秋きりの　たちを［　］　ことたにも
おもひもかけす　ゆふたすき　神無月とか
いふなれは　しくれましれる　ことの葉の

草もかはかぬ　　ほとなさに　　あさましくのみ
みゆるころかな
　四條宮大盤所にこれさためてとのたまへるに
鶯の春のはつねと時鳥よふかくなくといつれまされり
　とあるを人々さためさせ給に
拾折からに何れも[ともなき]まさる鳥の音を時ならぬみ[もいかゝさためん時ならぬ身は(へ)]はいかゝ定めん
　左右大將の御くるまにていて給にちむにて
　左朝光
おもふとち□へんをのやまの□
　とあれはみき濟時
□れなるみちによはひくわへ□
秋のたのかりにとみゆるほと□れか添てつまん程そ侘しき
　かものやしろのまへにてをるゝ人を見て
　右
きみとわれいのる心をちはやふる□
　左
かみいつかたにみゝとゝむらん□
　いそけとてとひたりののたまへはみき
まつみねとうしろめたくは思ほえし近き守りと我し馴れは
　つゝみにて左のくるまそひのと□にかはりて
袖ならてつゝみとゝめんけふよりは君か嬉しき言の葉も哉
　右の車そひに又かはりて
そひてゆくくるまの事もおもほえす君か心をけふはやる哉
　花見にありき給ふ時にさそひたまはすとて　左大將濟時
獨して花も紅葉もわきてやは錦はかりとみてはきにけん

　返り
百敷の花ももみちもわきてきみ天津星かときみそとはまし
　みやをの大將したうつのかたをかりたまひて　あしか
　たとある處にかきつけ給ふ
流れあしの方にとまれる沼水のかひありけふもみゆる影哉
　ほりかはの院にて八月はかりの夕暮にはたをりのい
　みしくなくに中將君御前なるにのたまふ
おほつかな錦もみえぬ闇の夜に何のあやめをおるにか有覽
　中將かたる五條のあまきみかくそきこゆめる
をるとはた思はさりけり唐錦あやつる聲のをとゝこそきけ
　宮の君のうちとけたまへるをみて
下ひものゆふ日に人をみつるよりあやなく我そ打解にける
　かへり
下ひもの夕日もうしや朝良の露けなからをみせむとそ思ふ
　ひたちのをのゝみまきよりくさたてまつりたるをみ
　たまひて
常陸なるをののみまきの露草をうつしは駒のをくにそ有ける
　ほりかはの院にすませ給に　閑院のさくらの花をもし
　ろくみえ□　少將内侍
かきこしにみるあた人の家櫻花ちるはかりゆきておらはや
　御返り
おりにこと思ひやすらんさくら花ありし昔の春をこひつゝ
　ともまさの大貳のこのむまのすけをうしなひたるこ
　ろ閑院女御もうせ給ひぬときゝて
拾我のみやこのよはうきと歎し[おもへとも]を君も[なけくと拾]思ふときくそ悲しき
　かへり

同
うき世にはあるみもなきにおもほえて涙のみ社ふる心ちすれ
入道殿にてなにをかきみの□たし給さまおとなにも
まされりかけものなといれ給ひけり
源宰相
昨日より心にそいるあつさ弓はるのかさしとみゆる君ゆへ
かへり
さためなき君か心にいるなれは梓の弓のはるも物うし
女のもとにおはしたるにかへら□ねといはせけるを
おほしさことありてつとめて
後拾
あま雲のかへるはかりの村雨に所せきまてぬれし袖哉
かへり
人はいさ袖やぬれけん我はたゝ涙にのみそそほちつゝこし
とき〳〵かよいたまふ女あまたなる事人にいはるゝ
こそ心うけれとのたまひけれは女
ねぬなはのねぬなのいたく立ぬれは猶大澤のいけらしやよに
返り
おほ澤のおほくの人の嘆きにていけらしとのみ思ふなる覧
大貳くたらしとすまひて心ちあしとてきて修法すと
きゝてやり給
思ひやることそ悲しきあさ□みねの白雲たつやたゝすや
おなし女おはすへからむおりはひるはのたまへとい
ひけれは二三日ありて
晝といひし言かはる共笹蟹のいかにふるまひしるくみゆ覧
かへり
我せこかしるきよひともさゝかにのいとを頼まん心ち社せね
とてけふあすすくさむとありけれはたちかへり
今日をたに暮しかねつる笹蟹の糸にかゝりてあす迄やへん
たひ〳〵かへりことせぬ女に
山彦はこたふるたにもはるけきを音せぬ人をまつか苦しき
ついなしのときをろところはきにつけて
小鹿なく峯の朝霧よそにわか思やりつるおりそかなしき
おなし人のもとに月あかき夜うちよりおはして
きもなれぬよるの衣もさよなかにかへす〳〵も哀なりけり
かへり
色ならぬ衣もなとかかへるにはうすく成覧身にしみてかく
よそふる人やおはしけんその□いとたかき人を心に
かけて
君か身を春の山ともみてしかな思ふ心もかすむはかりに
中宮宣旨を内にてほのみ給て
万代
女郎花よはの下紐うちとけてみなれし袖そ今は戀しき
あらかひてかへりこともなし
あらかはゝしひてもいはし岩淸水流れて今はしたに頼まん
いかにせましといふをきゝて
世中に身をしかへつる君なれは我は家にもあらすとや思ふ
又
いかなりし旅の夕か忍ひけんぬれにし袖よまたそかはかぬ
とあるにたまはりぬとのみあれは
今更におほつかなしやまたなさむへたてぬ中となりにし物を
いかなる事のあるにかありけん人かはりなとしけれ
は
忍ふ草忍ふかひなくもてなさは忍ふる事ももらはいかにそ
返り

あふとたにみさりし物を忍ふ草もらすはかりの露や置けん
　かせを
思ふかならすき衣を空蟬の今よりあらき風にあてしと
　父おとゝの御ふくにてものし給に内より馬内侍を御
　つかひにてとはせ給へるにその夜とゝめてあか月に
いかてかは夢にも人のみえつ覽物思ひそめし後はねなくに
　返り
歎つゝ我もねなくにみゆる夢の慰むかたはなきさこそきけ
　おなし人くらへやに中將とありてあか月いつるをよ
　ひよりいとよくきゝ給て
くらへやの覺束なくもみえぬよは月みるほとのすめは也鳧
　返
なにしおへは影たに見えぬくらへやを月有さまにいひもなす哉
　三條のきたのかたよりかへりたまひて萱草花にさし
　たまひて
をこたりの色に出たる花みれは物思ひしれる折かとそ思ふ
　返
あやまちの始めもしらす何事にをこたりそめし花の頃そは
　又返
知すとかそとに聞つゝかさしたる花は移りて外にをらすや
　かりのこをとをたてまつりたまへれはきたのかた(重
　明親王女)
雁のこに根をさへそ重ねつるいとゝつらさの數をみすれは
　ほさへておはしてすのこにすゝきのかせに
万代
我きてもまねきやまねは花薄またくる人の有かとそ思ふ
　とのたまふをきたのかたの御めのとひらかといふ聞て

ありそ海の根もはてぬまつ頃になひくをはなはつねの事也
　ほりかはの院より仁和寺にみかとかへらせ給ふに女
　房のみふたにかきつけたるをみたまひて
御狩野の野へに漂ふ草なれやかきつくへくもみえす成ゆく
　ためちかかみかはになりて□いはのかたにふくろを
　ぬいてかめのかたをぬいつけてものともいれて
岸の上かゝるまてふるかめのよの春けくすまむ程そ久しき
定めむと思ふ物からしかすかのわたり□みては難くせまほし
　たなこひのはこのふたにあしてにて
別路のかたみにそふる玉匣あけくれ我を人忘れめや
　しらかはとのゝはかによるとまりたるひまに
めの前にかくみる人もすくるまにとまれるとてや過ぐ成覽
　返
うき世にはまたもかへらてやかてかく蓮の上の露と成なん
　又返し
露とたに消なは何のうたかひか花のなかより生れさるへき
　またの日まうてたれははすの花を□してつくりてみ
　のうちにはこは□いしほをいれてやり給
日たくれは消やしぬ覽うたかたの花の顏をも今朝はみる哉
　この御八からをたうとかり給ひて
しらかはとたれなつけなんなかれての後よりかさす蓮也鳧
　宮にわたり給に中宮いて給へるにまいり給へりかみ
　まいらせ給へるにおひてかみをたてまつり給へりま
　□にかみ□らすやうを
まけ□も君を祈りしるしにや多くのかみの今朝はみゆ覽
　御返

祈る共あまをかさしと見えしかは神の邊によらしとそ思ふ
むかしうちわたりにねたまへりけるに
あまに思ひをかせりけりと千早振いかきのもとに聞し事也
正月十五日ねの日にあたりたりけり　ほりかはの中宮
わたらせ給てこなと參らせたまひて　しろかねのこま
つのゑたにあをきかみにて名かきつけ給中將に
君か代をゆく〱みれは小松より外の綠はみえすそ有ける
中宮の御返
するゑ遠き野への小松をまかすれはいさひきつれん〔　　〕
〔　　〕とのにてかよひはしめ侍りて雪のふるにかへり
てすなはち
（万代）あかすして歸るみやまの白雪は道もなきまてうつもれに鳬
返
ともすれはあとたへぬへきかへる山越路の雪はさや積る覽
かく通ひ給へとあらすとかくし給を左大將見あらは
し給てよひとよ物かたりし給て　かへりたまひぬまた
の日
左
忍草いかなる露かをきつらむ今朝はねもみなあらはれに鳬
返
淺茅生を尋ねさりせは忍草思ひ置けん露をみましや
たらのみねの君にひはとのゝ御いのりし給へとのた
まひけれはみねのきみ大納言とのの御ときよりをろ
かならすなんとて
昔よりいひはしめけるいかかさきするゑの人さへ頼もしき哉
かさきにまうて給へるに　ためもとしほ〔　　〕あり
かすよりきみところちかきをきくもなと　のたまふに
まいらんといひけるをおもひ出てつかはしける
我宿にしける蓮のさしをわけ思はん人にゆつりてしかな
返
君たにも心へたてぬ物ならは花とともなる身とそ成へき
正月一日　右大將殿より
あたらしき年のはしめのうれしさは昔の春もかくや有けん
返
うれしきにめつらしさをもそふるかな〔　　〕
ほり川の中宮
くやしくもくみてける事思ふ哉沈みそめたる今朝の我身を
中將にもののたまひてつとめて
音にのみ聞しはさてもなくさみきなとかけさしも袖の露けき
少將の君さとにいつるに
さゝ浪やたちいつるこさはいとなくて〔　　〕
あめに十月はかりのもみちのみなちりたるにつけて
うしと思ふ秋に後れて止まれる人はかひなき物にそ有ける
返
過る秋とゝむる人は色わかてみえはか□ある心地こそせめ
三條の大殿（廉義公）のうせ給へるを又ともかくもせて
おとゝいみしうなき給ふと聞て
烟とも雲ともならぬ程はかりありと思はんことのかなしさ
わつらいたまふて久しくさふらひにも　いてたまはて
いひいたしたまへる
朝夕にいてつゝみしをおほつかな人の心のうつりうつらす
御返　左衛門督まさひら
いつしかと心にしみてふかみとり松より外の色はかはらし

なかのきみの御もきにちむの枕にいれてたてまつり
たまへる

よそみなく人もろ共にふすことく枕を君にゆつりつる哉

御返

今よりはみよりはなるな敷妙の君かとこ世の枕と思へは
すけまさの大貳のくたるになむし裝束一くをこひの
ふたにいれてたゝうかみにかきてさしはさみて□よ
りつかはしける

また近き程をもたえぬ戀なれはをくらすへくも思ほへぬ哉
殿やはたにまうてたまふにまうて、とふらい玉ふをあ
かめもよにかくとふらひ給ふよとよろこひたまふつ
いてに

今日は猶ぬるゝのみ社嬉しけれ天の下にしふる身と思へは
八月はかり仁和寺の帝ひろさはにおはします御とも
につかうまつりてかへさにひたりにきこえ給

秋のよを今はとかへる夕暮に鳴虫の音そ悲しかりける
左御かへり

むしの音に我も涙をおとすかないとゝ露けく野へや成らん
まつりのかへさに女車に卯の花あふひ□□ち
はやふるならぬことかきとて□てやたまふ

しつのをのしのひにをなけ時鳥□□
とあれは

こたかき聲はまたもしつるを□□

此一册。以二家隆卿筆跡之本一書二寫之一。舊本虫損等多故往々除レ之。重以二別本一可レ改二正之一。入二撰集一歌有二首書一。考レ之閑院左大將藤原朝光歌也。他人書集レ之歟。此集詞書有二左右大將一。左者則朝光。右者藤原濟時也。

藤朝光。天暦五年辛亥生。關白太政大臣兼通公四男。母三品兵部卿有明親王女從二位能子。貞元二年四月二十四日任二權大納言一。同年十二月九日兼二左大將一。寛和二年轉レ正歟。永祚元年六月廿七日辭二大將一。長德元年三月二十日於二枇杷第一薨。歳四十五。號二閑院大將一。

藤濟時。天慶四年辛丑生。左大臣正二位師尹公二男。母右大臣定方公女。貞元二年十月十一日兼二右大將一。永觀元年八月廿三日任二權大納言一。正暦元年六月朔日轉二左大將一。同二年九月七日轉レ正。長德元年四月廿三日辭二大將一。同日於二五條第一薨。歳五十六。號二小一條一。

群書類從巻第二百三十六

和歌部九十一　家集九

前大納言公任卿集

春白河に殿上の人々いきたりけるに

拾 春きてそ人もとひける山里は花こそ宿の主なりけれ

同し所に紅梅うへ給へるにはしめて花さきたるにおはしたりけるに女御(諟子)の御もとより

植しよりしたまつものを山里のはなみにさそふ人のなき哉

かへし

うへをきし花なかりせは蓬生を何につけてか思ひ出まし

雨のうちに山里の梅をおもふといふ事を

山里の梅をおもふに雨ふれはたゝにもちらて色や増らん

二月迄梅の咲さりけるとし前の梅にむすひつけたる

しるらめや霞の空をなかめつゝ花もにほはぬ春を歎くと

たかともえしり給はてとる人やあると結ひつけ給ふける

新千 おほつかないつこなるらん花さかぬかすみのうちの鶯の聲

いとひさしうとる人もなきに打たゆみてとられにけりあさましうねたきことをおほしけるによふかき曉にむすひつけゝるを見てとらへとゝめてみ給ひし

霞たつ遠山ふかきうくひすの花の林をとふにそ有ける

つかひにとへは三條の宮に□といふ人のとらせしなり本はしり給はさりし事也かゝる事ゆかしかりこし給ふなといふ返しに

うくひすの音をしるへにて霞たつみ山のうちを尋つる哉

ほとへて奉りたる

花咲しひより待哉尋ぬやと三わの山邊の鶯のこゑ

かへし

花をのみ尋る程にうくひすはその山もとを過やしにけむ

花山院また春宮と申けるとき水にはなの色うかふといふことを人々によませ給ふに

花の色をうかふる水は淺けれと千とせの秋の契ふかしな

やみはあやなしといふ題を

後拾 はるの夜のやみにしあれは匂ひくる梅より外の花なかり鳧

前ちかき桃のはしめて花咲たるに

うれしくもゝゝの初花みつる哉又こむ春も定なきよに

白川の西のとに人のかきたりける

きてもみて花をさなから散しつる風のためにや人の植けむ

都いてゝ花見にこそはくれなゐの色なる梅に心そめつれ

返しかたはらにつくる
風にしも何かまかせむ梅の花よそへてとはむ人をこそまて
花ひらの數にてもしれ紅にやしほそめたる梅にやはあらぬ
中務の宮(具平)にて人々酒のみしつとめて宮のきこえ
給ふける
あかさりし君かにほひの戀しさに梅花をそけさはおりつる
かへし
今そしる袖ににほへる花の香は君か折けるにほひ成けり
中宮にてなにのおりにや
めつらしき玉の臺の花のかけにきかまくほしき鶯のこゑ
返したれともしらす
しつえにて聲をおしみし鶯は花の盛を待にそ有ける
あはたに人々おはしておもふ心よむに
浮世をは峯の霞やへたつらんなを山里はすみよかり鳬
二月十日前なりける梅の咲たりけるにきとなる女房
に
君により風もよきつゝ散かてにまつめる花のおりな過しそ
なしの花にとき過たるみのつきたるに右大弁
春ふかみ深山かくれの花なしといふにつけても分そかねぬる
かへし
常ならぬ身をそ恨むるならぬより花なしといふよに社有けれ
またかくてはとて
ありといふ程たにあるをかつみつゝ花なしといふ春を社思へ
二月に雪のいとたかう降たるゆきよりかさうしの前
に雪の山をいとたかうつくりて煙をたてたるに雪の
いたうふれはからかさをおほひてたてたりけれは
東路のふしのたかねにあらねとも三かさの山も煙立けり
そちのみや(敦道)花見に白河におはして
我か名は花ぬす人とたてはたて唯一枝はおりてかへらむ
と有けれは
山里のぬしにしらせて折人は花をもなをもおしまさり鳬
又みやより
知れぬそかひなかりける飽さりし花にかへてし名をは惜ます
かへし
人しら(れイ)ぬ心のほとをしりぬれは花のあたりに春はすまはん
花をも名をもと聞え給へりける御かへしにつけてみ
ちさた(道貞)かめのきこえたりける
おる人のそれなるからにあちきなくみし山里の花のかそする
かへし
しるらめやその山里の花のかのなへての袖にうつりやはする
また聞えたりける
しらせしと空に霞のへたてしはたつねて花の色もみてしを
かへし
今さらにかすみとちたる白河の關をしゐては尋ぬへしやは
白河にて
故郷の花をもおもふ山さくら散をみすてゝかへりかたさよ
白河に忍ひておはしたるに大白河といふ所に殿上人
おほくおはしたりときゝ給ひてその日式部卿の宮の
中將おほ白河におはしけるに
かへし
しら河のおなし河邊のさくら花いかなる宿を人たつぬらん
花の色の深さあさゝにをのつからやとわく人と成にける哉

三月十日松か崎の念佛きゝに女御らへなとしのひて
おはしけるにみちのほと月おほろにて風の聲なとは
るかなり女御とのゝ御
晝ならは河邊の花もみるへきによはの嵐のうしろめたさよ
とありけるに
香をとめてゆかはけぬへし山風の吹まゝにちる陰みれはうし
夜一よたうとき事きゝあかして曉かたにみれはよる
散ける花のやり水の浪によせられてすはうかひ（蘇枋
見）のさまなるに櫻かひとは是をやなといひて
よもすから散ける花を朝ほらけあかしの濱のかひかとそみる
といふにとものり
水に浮ふ櫻のかひの色みれはなみの花とそいふへかりける
といふに
朝ほらけ春の湊の浪なれや花のちる時そよせ増りける
御車のことゝもあるへしたらにゑさうしに花のちる
をみ給ふむかしの御むろの南なる花のいといたう散
をとり集てすけあきら
花のちるむろは昔の跡なから苔の庭にはあとはかもなし
といふに
さくら花露にぬれつゝ尋ぬれはいにしへしるき宿の庭哉
此ついてにすけあきら遠くいぬへき事なといひて
すきかたき花につけてそ都出てゆかましもの□あつちの風
すけあきら
春過て散花たにも有ものを老のみをたゝ思ひやらなむ
白河により給ひて
しら河のなかれてけふをわすれめや□

とありけれは御車より
見たえて淺き瀨とはなるとも□
三條殿世中すさましうてこもりおはしけるころ御前
のふちの咲はしめたるを
年[風]ことに春をもしらぬ宿なれと花咲そむる藤も有けり
花山院觀音院におはして殘のはなをたつぬ山寺にあ
そふといふ題よませ給ふけるに
みるまゝにかつちる花を尋ぬれは殘の春そすくなかりける
常にます鷲の峯をしまたみねはけふ山里の珍らしき哉
三井寺に物ならひに入給ふとて白河により給りけれ
は花のさかり成けるかかへるさに散はてゝけれは
故鄕の花はまたてそ散にける春より先に歸ると思へと
白河に三月つこもりにおはして
おしみにとさしてきつれ[たイ]と相坂の關にも春はとまらさり鳧
□はのすけ京極の家なる紅梅をしら河にうへ給と
て堀せ給ふけれは結ひ付たりける
いにしへの春のかたみに詠めつる花をいつれの風さそふ覽
かへし
香はかりをさそへと思ふ山里の風をねなから誘ふへしやは
人に春のはしめなり
すこし春ある心ちこそすれ□
との給ひけれは
吹そむる風もぬるまぬ山里は□
子規まつこゝろを
ほのかにもきかぬかきりは時鳥待人さへそねられさりける
同し心を女御の御

待えてもたゝ一こゑを時鳥ね覺かちにてあかすころかな
ほとゝきす聲まれなりといふ題を實方中將
里わかぬ空音ときけは時鳥誰にかいかゝいはゝこたへむ
さあるに
ほとゝきすあかてやゝまむ待きつる今朝のね覺の只一聲を
からなてしこ
色ことにゝほへる宿の撫子はいにしへからの種にそ有らし
たかとを(高遠)のきみ
種わきて色しも深きなてしこの花に心も染てこそみめ(れイ)
夕立のしたるに人々歌よみけるに
夕立に草の緑に見ゆるかな秋さへとをくならむとやする
ためもと
夏の日のふりしもとけぬ村雨に草のみとりを深くそむらん
また
くれなゐにぬるゝ袂はなる物をいかなる庭かみとり成らむ
山里のうの花をすけかたの弁
としをへて通ひなれにし山さとのかとゝふまてに咲る卯花
かへし
卯花のちらぬ限はやまさとの木の下闇もあらしとそ思ふ
中納言のちこにおはしけるとき藥玉をたてまつり給
ふとて女御の御
命をそつくといふなるいときなき袂にかゝるけふの菖蒲は
御かへし
いときなき菖蒲はおふる所から誰にかゝりてふへき千世そは
また
あやめ草おふる澤水清けれはひく人あまたあらさらめやは

ゑにう(圓融)院にたち花のこに入たるに夏むしをすへ
て是よめと仰られけれは
夏虫ははな立花にやとりしてこの中なから千世もへぬへし
さつきのくもりたりけるに
月待と天のかはらを詠むれは出る程たにみえぬそらかな
ほとゝきすを(つイ)待は月をまつにまされりといふ題を
月よりも待そかねぬる時鳥太山を出む程をしらねは
からなてしこを人々よむに
敷嶋や大和にはあらぬ撫子の花はむへこそよにゝさりけれ
くもれる月をまつころ
ふたゝひや人よりまたむ月影の雲の隙より出ぬ限は
なてしこをみ給ひて
いそくへきよとはしか〳〵床夏の花に心のとまりぬる哉
四月になかたに(長谷)にゐむよ僧正のまうてたりける
にさくらのさかり成けるをみていみし有けり折て進
て又の日
きのふまておしみとめてし山櫻よのまの風のいふかしき哉
かへし
春過て君を待ける花なれは又くるまては散しとそ思
五月五日
けふ殊に軒のつまなる菖蒲草たなはたつめにをとらさり鳬
七月七日藤つほの撫子あはせに人讀半都滿字計たり
ける
たなはたの秋のよをへて撫子の花をそけふは合せつとみよ
ないせの命婦か家ちかきところに渡り給ひて七月七
日

雲ゐにて契りし中はたなはたをうらやむ程に成にける哉
　かへし
哀にも忘れさりける雲井哉たなはたつめのけふよりもけに
　秋のはしめつかた中務のみやに
おほかたの秋はきぬれといかなれはした待花のをそく咲覽
　人々のさかのにゆく日とまりていひやり給ふける
誘ひていくやなになる女郎花分てひもとく野へのあたりを
　返し中宮大夫たゝ今の大殿(道長)
君をしもよくともなきにをみなへし露の心のをかれぬる哉
　女郎花ほりていく所の有けるをとはせ給ふけれはあ
　きのふか家にといひけれはやりたまふける
思ふとも心もしらてをみなへしいかなる宿にうつす成らむ
　返し
をみなへしおなしゆかりの花なれと君し尋ねは家に社せめ
　宮に大夫の藥入て奉りたりけるくしのはこを程へて
　秋立日返すとて色々の花ともを入て　かへさせ給ふと
　て
初風にのとけき花の露ならはをきてみつへき玉くしけ哉
　とかゝせ給ふけるをかくもいひて　むかしと見たまふ
　ける
夜をこめてをきける露の玉くしけ明てののちそ秋と知ぬる
　八月十五夜にあきのふかもとに
蓬生のやみものこらぬこよひさへ錦の袖をしらすや有らん
　かへし
月といへと心のうちはてらさぬに衣のうへはそへて社きけ
　ひさしう住給はさりける所にかへり渡り給ふて
時しもあれ秋ふる里をきてみれは庭はのへとも成にける哉
　松のしたもみちしたるを
露霜についにかれせぬ松なれと下葉は秋にしのはさり鳬
　くるすのにてみつといふ題を
としふとも契れる水はかはらしを人の心やいかゝとそ思ふ
　故殿うせさせ給ふて後はなちたる鈴むしのきこえて
　侍けれは
いかてかは音のたえさらむ鈴虫のうきよにふるは苦しき物を
　南の岡の鈴むしといふ事を人によませ給ふけるに
萬代の秋をこめたる宿なれはたつねてすめる鈴むしのこゑ
　すゝむしのとしをへてなくに
後拾　年經ぬる秋にもあかす鈴虫のふり行まゝに聲のまされは
　女御にや有けむ
同　たつねくる人もあらなん年をへてわかふる里の鈴虫のこゑ
　女御のかたおとこ女とかたわきて歌合せさせ給ふに
　まけてうれへたりけるとものり
露ふかき色にまされる花のえをいかに定めし野分成けん
　かへし
露を重み折ふしにける花のえはかことを風におほせさら南
　さか野を過給ふとて
秋たにもまたゆきはてぬ道なれさおしみし人そ先過にける
　中宮の御前にせさい栽させ給ふ日　秋のはなをらふと
　いふ題を
松むしの音を尋ねてやほりつ(ぬイ)らん長閑くみゆる秋の花かな
　北白河に人々まうてあはむと聞えたりける日　雨ふり
　てとまりにけれはありくに(在國)かきこえたりける

雨をなみふりはへおもふ山里につらくも雲のへたてける哉

かへし

白河の河邊にたてるをみなへしけふの雨にや身をしほる覽

大殿のみもとにて秋の日あそひくらして

秋の夜は水こそことに增るらし月と露とのもるにまかせて

花山院より名もしらぬ花を給はせて

あきことに咲とはみれと此花の名をしる人の更になきかな

御かへし

君か代に咲とはきけとみもしらす是やことはの花といふ覽

月のくもかくれけるを

後拾 すむとてもいくよもすまし（あらし後拾）世中に曇かちなる秋のよの月

題おほえす

新續古 秋ののの花の露ともしらさりつ千草の色に（原にぬける新續古）をける白玉

すゝむしのはねに

年毎にとこめつらなる鈴虫のふりてもふりぬ聲そ聞ゆる

八月十五夜月をみ給ひけるに女房のめさましたりけるに

君ならて誰かみしらむ月影のかたふくさよのふかき哀を

とてひとりこつに

ふかくしる事はなけれと月かけを同し心に哀とそみる

ふみなとつくり給ふけるよの

雲 空晴てをそくも月のすくるかないとゝなかむる數や增らむ

八月十五夜

一とせの秋の半は殘れゝと月は今夜そ限り成ける

大殿より

我宿のみきはにまちし秋風は半によくもすきにけるかな

御かへし

よと共にすめるみきはの秋風は盡るしるしもみえすも有哉

大殿のまた所々におはせし時人々くしてもみち見にありき給ひしにさかのたきとのにて

拾 千 瀧の音は（いと拾）たえて久しく成ぬれと名こそなかれて猶聞えけれ

殿にかへり給ひて

山邊よりのへものこさす尋きてとまりもしる（るイ）き宿の紅葉は

白河に紅葉見に大殿のおのこともいきたるにみつといふ人のもとにやりける

ぬししらて誰かおりけむ山里のものとももものと思ふ紅葉を

かへし

いつこともさためて過し道なれと秋のとまりに我はきに鬼

菊の花こまやかにて秋なしりぬといふ題を

我袖によそへてみれは菊の花ふかきにしより露のしけきは

ありくにかすまぬ家にて九月九日

住人もなき山里にきくの花秋のみ咲てたゝに過ぬる（けイ）

かへしありくに

住人のにほひそふらん菊のはな又うつろはぬ事をこそ思へ

又水のほとりのきく

秋ふかき汀のきくのうつろへは浪の花さへ色增りけり

ゑにう院の石山におはしますに殿上人うきはしといふところにいきてかへるとて

われたにも歸る道には物うきにいかて過ぬる秋にか有らん

ためより（爲頼）

田上や山まの紅葉は數しあれは秋はおふ共のとけきをみよ

秋はつる日山路ゆく

新古 打むれて散紅葉はを尋ぬれは山路よりこそ秋は行けれ

九月つくる日かんし(庚申)なるに

めにみえて行秋なれやよもすからいもねて何をまもる成覽

九月廿日初雪ふるに

梅か枝にふる初雪をけさみれは春秋とさく花にそ有ける

女御おほむかへし

花かとも雪ともいさや何事も物うき秋はしられさりけり

九月晦日の日秋のかけは雨の中につきぬといふを

何方に秋は行らむわか宿にこよひ計は雨やとりせて

九月ふたつ有としの十月朔日の日かねすみ(兼澄)かむすめのもとに霧のいみしうたちふたかりたりけるに

つねよりも程へて過る秋なれと猶立とまれ今朝の朝霧

かへし

跡かはる霜にまきれて立霧は久しき秋のためし成けり

山里に行て笆のきくひとしといふ事を

續後拾 色々に笆のきくは成にけりたゝ一枝の(もと 續後拾)霜とみしまに

月前のしらきくといふ事を人々よみしに

おほつかな花はありやは月影にをく霜とのみ見ゆる白菊

ある人

のとかなる月にまかせて我はたゝ霜をそ拂ふ宿の白きく

法輪にまうて給ふ日あらし山にて

拾 朝ほらけ(またき)嵐の山の寒けれは散もみち葉を(もみちのにしき 拾)きぬ人そなき

十月朔日殿上人大井にいきたるに

落つもる紅葉をみれは大ゐ河ゐせきにとまる秋にそ有ける

いしのなかなるきくのたゝ一本のこりたるを

岩間よりおふるにしるき菊なれはなへての花は霜に枯にき

長谷に入給ひて後中納言のまいり給ひてかへりたまふとてなかたにより

みすてゝは歸るへしやは風止ぬ峯の紅葉ののとけからぬを

御かへし

嵐ふく峯のもみちをみぬ時も心はつねにとゝめてそくる

八月十五夜のいみしうあかゝりしにたやしの君のむすめのとをきところにいくへと聞給ふて

くもりなき後の今宵の月をみは山邊の秋を忘れはてめや

なかたにゝ紅の岡といふは例の草木にもあらす人の名もしらぬきとものはやしにてあるかいみしうめてたう紅葉するなりけりやしほの岡とつけ給へりけるか紅葉のいとめてたき比中納言の御もとより

思ひやる心たにゆく紅葉はを見せてちらずな木からしの風

かへし

名にたかき岡のあらしは寒からし紅葉の錦みにしきたらは

三井寺に入道の中將(成信)紅葉見にまうて給ふてかへるさに松かさきのこうきうあさりのもとにより給ふたりけるに聞え給ふける

見そめてはとくかへらめや紅のやしほの岡のもみち葉の色

あるしのあさりにゆつり給ふけれは

紅葉葉にとめし心は松の葉の緑とゝもにかはるよもあらし

またこれより

おつる葉の常ならぬよにいかてかは松の緑に心と(そイ)むらむ

あさり

君か代をなか谷の松露のよに心をかくる梢なれはそ

これより

松の雪消かへりつゝ君かため千とせをへても我はつかへむ

あさり

法のためいとゝふかくそおもほゆる水も心をすめるなか谷

みくしけ殿にやしほの岡のめてたきを御らんせさせぬことゝ年毎にまうし給けるを渡らせ給へりけるとしも紅葉せさりけれは帰らせ給ふとて

紅葉はの錦とみゆる物ならは山里いかに立うからまし

御かへし

やしほとも岡はみえねと故郷に紅葉をきてや立帰るらん

文のついてに

春もみし木のはもみちて散にけりこや一年の限成らん

十月初瀬にまうて給へるに きりのいみしうあかつきに立たりけるを

行路の紅葉の色もみるへきをきりとゝもにやいそき立へき（後へ）

かへし中納言

霧分ていそき立なむ紅葉はの色しみえねはかへりゆかれし（同）（に見えなは道も後へ）

雪のはしめて降たりけるに女御の御

みる人の年は積れと初雪といふなはかりはふりすそ有ける

御かへし

初雪も降ぬとなとかいはさらむこそ年積るはしめと思へは

雪を

人のあともみえす成ゆく我宿にとひくる物は雪にそ有ける

冬をみなへしの咲たるを

女郎花菊より後に咲にけりこと花なしとたれかいひけん

兵部卿の宮にて月待こゝろを

月影の出ぬほとたにある物を人まつ宿を思ひ社やれ

御かへし

またちらぬさきに紅葉もみるへきになと（をイ）月影の出かてにする

枯たる枝に雪のこほりつきて花のやうに見えけれはかくて所々にやり給ける

雪ふれは花咲とのみみえしかとけさは枝さへさえてける哉

みあれかへし

蓬生の枝なき雪にうつもれてあやしく今は枝をみる哉

雪の山をつくり給ふて

音にきく越の白ねはしら山の雪つもりての名にこそ有けれ

よさむにして山の雪をしるといふを

小夜さむみ山への雪を待とてはおもふ心を人やしるらん

雪降日いひむろのにうたうの中将に

君かすみかをおもひやるかな

かへし

君をのみみ山かくれに降雪を心なかくそまつたつねける

清昭阿闍梨のやまよりたてまつれたる

外山なるまさきのかつらいかなれは時雨や降と問人のなき

かへし

山さむみ雪まつ積る宿のうへを白雲そふるすみかとやみる

また

おく山をしらすかほにて年ふれは心のうちは時雨のみして

雪ふらぬ伊邊尾心のさむけれは峯のあらしを忘やはする

禪林寺のそう正に雪の消ぬるうへに霜のをきたるつとめて

雪のうへに置はつ霜のよの中はいつれ朝日の消のこるへき

かへし

人のよのはかなき程に較ふれは雪しもまつは消しとそ思ふ

雪降たるつとめて

おなしくそ雪は積らんと思へ共君ふる里はまつそとはるゝ

かへし

白雪はとふことのはにかゝりてそ降くる宿もはる心地する

ゆきよりかさうしに雪の山をつくりたるに物にかき
てさゝせ給ひける

音にきく越の白山しら雪の降つもりての事にそ有ける

かへしかねすみか女

ふり積る雪をのみゝる白山のけふはかひある心地こそすれ

ひさしう里なるころ雪の山つくり給ふたりときゝて
奉りける

おほつかな今も昔も音にたゝ名をのみそきくこしの白山

かへし

白山をよそに思はゝ我宿を今はこしとやおもひなりぬる

雪のとしかへりてふりたるにうちの大殿(教通)へ上

後拾 ふる雪は年とともにそ積りけるいつれかふ(た後拾)かく成増るらん

御かへし

雪つもる君か年をもかそへつゝ君かわかなをつまむとそ思

あまうへの聞え給ふける

積るとも雪とともなる年ならはかへる／＼も君にひかれむ

女御とのにきこえ給ふとて

消やすき名になたとへそ年をつむかしらの雪はたかく成とも

長谷にすけ(出家)し給ふておはしましはしめたるとし
雪たかき日おなし女御の御もとより

おもひやる心はかりはおく山のふかき雪にもさはらさり鬼

御かへし

はやくくるす野といふ所におはしたりけるにともま
つ雪を見給ひて

山里に雪さへともを待けれは野風を寒み寺來にけり

中務のみやに八重きくうへ給ふてふみつくりあそひ
し給ひける

をしなへてひらくる菊はやへ／＼の花の霜にそみえ渡りける

宮

閣の上の霜とおきゐて朝な／＼ひとへに家の花をこそ思へ

春宮にてものなと聞えける人位につかせ給ひて後忘
れ給ひにたるかときこえたりけれは

九重のうちはかはれとみかきもりおなし思そ今も焼らし

おなし春のはしめつかた

鶯の聲をまつとはなけれとも春のしるしに何をきかまし

ときこえたりけれは

鶯はなけとしるしもなき物をうきことしよりまつまさりける

ある人うちはの給にさらひきん(焦尾琴)といふ事よま
せ給ふけるに

きりふ山吹木枯にこかれたるをよりそ聲はしるへかりける

冬のはしめつかたかんたちめ殿上人大井にあそふと
いふことを

風雅 流れゆく紅葉をみれは大ゐ河ゐせきにとまる秋にそ有ける

女のもとに

冬さむみいつも氷れる衣手を今朝はとけてもかはらさり㒵
をの丶宮の中納言殿そめ殿の御おもひにて秋はてか
たにきこえ玉ふける
白河の紅葉をみてや慰さまんよにふるさとはかひなかり㒵
ときこえ給へりけれは
常ならぬ思ひやなにかなくさまむ山邊はいと丶木葉散つ丶
ある女に
新古 しら山にとしふる雪やまさる覽よはにかたしく袂さゆ也（つもる新古）
とよのあかりのよ女のもとに人のきあひたれは
をみ衣すりすて丶きつる露けさは春の日すから又そ忘れぬ
しらきのうるまの嶋人きてこ丶のひとのいふ事も聞
しらすときかせ給てかへりことと聞えさりける人に
千 おほつかなうるまの嶋の人なれや我恨むるをしらす顔なる（ことのはを千）
かへし
はるかなるその嶋人のことの葉をあるとはみけむ風の便に（ちイ）
かつらに人々おはせしにそのわたりなる女につかは
しける
尋ねくる人の心もしらぬには山邊をのみやなかめくらさん
おもひやみにける人のもとより
新後拾遺 嵐ふくと山のもみち冬くれは今はことのはたえはてぬらむ
とありけれは
同 遠近の峯のあらしにことゝはむいつれのかたか色は變れる（るとイ）
おなし人にあるやうありて
木のもとを我くやしくそ頼みけるはさまから社雨も漏けれ
こおと丶（頼忠）の御おもひにて　そのほとはおはせさり
けるを程すきてつかはしける
新千 もゆれともしる人なきは年つもる思ひのうちの思ひ成けり（つる千）
物いひける人のまたひとになたちけるころ秋つかた
いひやり給ひける
かはり行人の心をみさりせは何につけてか秋をしらまし
ゆきより御むかひにまいりてから／＼ゆふ所の有け
るとてその頃すけた丶ともろともによみてをとり増
りろう（論）しけるゆきより
秋も今は嵐の山の山高みいかてのこれる紅葉成らむ
冬つかた麗景殿のほそとのにものなといひける程に
くら人これすけからもの丶使にてくたるまかりまう
しせむとて御ものいみにこもる日あけての年からうふ
り給るへけれはやかてうへにもさふらふましきよし
いひけれは
新千 西へゆく月の常よりおしきかな雲の上をしわかると思へは（もイ）
これすけ
別路はよのつねなれや中々に年のかへらん事をこそ思へ
たいあまたして歌よみけるに水鳥（はイ）
拾 霜置ぬ袖たにさゆる冬のよにかもの上毛を思ひ社やれ
ぬふ人もなき水鳥のけ衣はさつる氷にまかせてそみる
ゆきより
冬の池の氷ゆくらん水鳥の夜ふかくさはく聲聞ゆ也
女のもとに
人しれすつ丶む思ひのあまるときこほるといふは涙なり㒵
たひ／＼御返事きこえさりけれは
雪やまぬおく山里の道なれやきのふも今日も跡のみえねは

みちのくにのかみさねかた（實方）くたるにしたくらや
るとて

（拾）東路の木下くらに見え（くなり拾）行は都の月を戀さらめやは

かへし

ことつてむ都のかたに行へきにこの下くらにいとゝまとふと

ありくにの大貳のつくしにくたるに

（千）別より増りておしき命かな君にふたゝひ逢むと思へは

よの中さはかしかりけるとしつねにありける人おほくなくなりて後神無月のつこもり方にしら河にわたり給ふに紅葉の一木のこれるにつけて常にふみつくり歌なとよみける源中納言なと思ひ出られていとあはれにおほえ給ひけれは

（新古）けふこすはみてやはやまし（やまし新古）山里の紅葉も人も常ならぬよに

またのとしほうさうしの御八講の日ためより

（拾）世中にあらましかはと思ふ人なきかおほくも成にける哉

ある女に

白山にとしふる雪やまさるらんよはにかたしく衣さゆ也

人のもとにこしのかたなるつかさある人のかよふといはれけるころ

くやしくそ春を待ける雪ふれと通ひやすきは心也けり

かへし

思ひやれもろこしはかり聞物をゆきかよふなの空に散らん

またつかはす

もろこしも夢みむ程や遠からんこはよるかたの道と社きけ

水のほとりのきく

秋ふかみ汀のきくのうつろへは浪の花さへうつろひにけり

なりとものむまのかみ

秋ふかみ霧立わたる朝な／＼くものもりなる君をこそ思へ

女院（東三條）の四十の賀に大將殿のし給けるかはらけ取て

（拾）君か代に今いく度かかくしつゝ嬉しき折に（ことイ）あはむとすらん

女院うせ給ひて又のとし二月初子の日女房のもとに

（拾）誰にとか（より拾）まつをもひかん鶯のはつねかひなき今日にも有哉

なりのふの中將すけしてつとめて左大弁ゆきなり（行成）のよのはかなき事聞え給へりけるに

（拾）思ひしる人も有ける世中に（をイ）いつをいつとてすくすなるらん

雪ふるに入道なりのふの中將のもとに

ふれはまつ君かすみかを思ふ哉雪は山邊のしるし成けり

こその六月にうせ給ひてしはすのはてつかたに入道

露の身の思ひに絶てきえにせは間言の葉も聞すやあらまし

かへし

夢とのみ歎きし程に明暮てとはぬうつゝにみえやしぬらん

しら河におはせむと有ける雨のふりけれはおほしやりて

白河の花をそ思ふ雨ふれはたゝにもあらて色やまさらん

人の御むすめを聞え給けるにうちにまいるへし（とイ）とありけれは

（詞）ひとたひに（は）思ひしりまし（たえにしイ）世中をいかゝはすへき賤のをたま

をみにさゝれ給ひてのふかたの中將のふく（服）なるにあかひもかりにつかはしたりけれは

雲の上の光もいか丶遠けれは猶ほしかたし墨染のそて
かへし
晴すのみしくる丶方を詠むれは光もくもる物にそ有ける
山里のはつ秋といふ題を
いつこにも秋はきぬれと山里の松ふく風はことにそ有ける
すはらのかみとよみつの朝臣の家にしはしおはしけるを三月十よ日花のいみしうおもしろう咲たるほとにまたほかにわたり給ふとて
王 仇なりと思ひなはて（すイ）そまたちらぬ花より先に移ろひぬとて
御かへし
をろかにも思はぬ物をことしより人にあかる丶なを散す哉
秋の暮つかた母うへの御もとにまいり給ふけるに日頃もなやませ給ひていとよはけにならせ給へれは女御殿に聞えさせ給ひける
風やまぬ秋の林に紅葉はの色はいかにとみるそ悲しき
八月二十八日かつらとのに右の大殿の北のかたなとおはして稲からせてみ給ひけるに
千世をへてかりつむ宿の稲なれはおほくの年をあたる君哉
山里の紅葉は時はわかぬかな秋の半にいろふかくみゆ
とやいはましと思ひてふところかみにかきてもたせけるを大殿の御ひとつ車にておとし給へりけれはかへり給てまたのあしたかくやいはましとなむおほえしとて聞え給へりける
山里にまたき散けることの葉を宿の主やかきと丶めけん
正月十よ日あせちの大納言きこえ給ふる
白妙に雪のふれ丶は水鳥の青はの山もあらしとそ思ふ

祭のつかひにいつるないしの御車に聞えたりける
あふひ草心にかけておもひやるをのか車（我かくるまイ）をさしはまかせん
中宮(彰子)の御うふやのいつか（かにもイ）の夜
王 秋の月影のとけくもみゆる哉こやなかきよの契（ためしイ）成らむ
ゐにう院かくれさせ給ふての春のよの中ふく(服)なるころつれ／＼なりけれは歌よみける
春雨
同 草も木も色つきわたる春雨に朽のみ増る藤のころもて
うくひす
常ならぬ音にそ聞ゆる山里の山へにきなくうくひすのこゑ
わかな
此春はたかためにかは水もくみのへの若菜も摘むとそ思ふ
かすみ
戀侘て君かあたりに尋ぬれはの丶の霞を哀とそみる
かへるかり
思ひしる人もなきよにうらやまし浮世をすて丶かへる鴈金
やなき
墨染の櫻ならすは青柳のみとりの袖をかけてみてまし
ちるはな
花たにもはかなく散は憂物を数ならぬみのたのみかたさよ
春の田
春の田をなそうちかへしかなしきは頼みすくなき我身成鳬
戀
さま／＼に思しよりは世中にたえぬは君を思ふなりけり
ち丶おと丶(頼忠)うせ給ふてのころたきもの人のこひ

たるつかはすとて
花たにも散つる宿のかきほ（ねイ）には春の名残もすくなかりけり
三月つこもりふくにおはするころ
別れにしかけさへ遠く成行はつねよりおしき年の春かな
御いもうとの女御
春しらぬ宿には花もなき物を何かはすくるしるしなるらん
四月ふくなれはころもかへもし給はて
すみ染の衣なからのけふなれとかはれるものはむかし成鬼
ふくぬき給ふとて
墨染の衣にそへてなかせともつきせぬ物は涙なりけり
ひかし山のあたりに人々もみち見に行て
色ふかき峯の紅葉を尋ぬれは山路よりこそ秋は行けれ
一の宮の御めのとみふにものゝ給ふけるをまたおとりの人かたらふときゝ給ふところものいはんといはせ給ふけれはゆにをりてといはせたりけれは
哀とも猶きよしとも思ほへす人はありまのゆさしきかねはかへし
杣山におろす筏も有ものをゆのみやあむと人のいふらむ
序品
くさ〳〵にちりかふ花は古の風にまかせてふるにそ有ける
方便品
ひとことによりてそよゝに出けれは二も三もなきなゝり鬼
譬喩品
かとてには三の車と聞しかとはてはおもひの外にそ有ける
信解品
さすらへし昔はおやとしらさりきいつを任するけふの嬉しさ
藥草喩品
ひとつ雨にうるふ草木はことなれと終には本に歸らさらめや
授記品
あらためて深き心を悟りぬるしろしをけふはうるにそ有ける
化城喩品
古の契もかひやなからましやすめて道にすゝめさりせは
五百弟子品
きてふしてところひなれは衣手にかゝる玉ともさめて社みれ
人記品
ふたなからみよの契の有ければ行末かねてゆふにそ有ける
法師品
法とかむみむろも外になかりけり唯心をそすますへらなる
見寶塔品
（續古）そのかみの誓絶れ（くちはイ）はいくよともしらぬ姿を空にみるかな
提婆品
みな人を佛の道にいれつれは佛のあたも佛なりけり
さはりおほみ浪を分こし身をかへて蓮の上に居とこそみれ
勸持品
さま〳〵に浮世の中を忍ひつゝ命にかへて法をとくらむ（おしま）
安樂行品
よをそむくくせも心をおさめつゝ誓て末の法をひろめん
涌出品
たらちねは親よりこそは老にけれ年あらかひを人もしつへし
壽量品
（玉）出入と人はみれともよとゝもに鷲の峯なる月はのとけし
分別功德品

きくまゝに皆人道をますかゝみ行末までもてらしつるかな
　隨喜功德品
傳へつゝあなたうとゝもいふ人のその人ことにしく事そなき
　法師功德品
法の雨にみなからきよめ盡してはさはりの外を何か尋れむ
　不輕品
うちのるもさても種をし植つれは終に御法の空しからぬを
　神力品
珍らしく述る舌にて御法をは眞の中の誠をそしる
　囑累品
いたゝきを猶數々そかきなつるえ難き法のうしろめたさに
　藥王品
明らかにてらす程社みゆる哉身をはおしまて法をおもへは
　妙音品
法のためきぬとみれ共身を分て至らぬかたはあらしとそ思
　普門品
（後拾）よをすくふうちには誰かいらさらむ普き門を人しさゝねは
　陀羅尼品
限りなき法の力にときそふる守はいとゝ賴もしきかな
　妙莊嚴王品
闇にのみまよひきつれは契てしともそ道ひくしるへ成ける
　普賢品
尋くる契しあれはゆく末もなかれて法の水はたえせし
　是はかき給へりけるおくに
法ほむる事きこえねと靜なる光のうちはてらささらめや
　ゆいまの十のたとひ此身あはのことし
（千）こゝにきえかしこに結ふ水の淡の浮世にすめる（めぐ千）身に社有けれ
　このみ水の月のことし
水の上にやとれるよはの月影のすみとくへき（く歟）あらぬ我身を
　この身かけろふのことし
夏の日の照しもはてぬ蜻蛉の有かなきかの身とはしらすや
　この身はせを葉のことし
（後拾）風吹はまつやふれぬる草のはによそふるからに袖そ露けき
　此身まほろしのことし
このみをは跡もとゝめぬ幻のよに有物と思ふへしやは
　此身夢のことし
（續古）常ならぬ此身は夢の同しくはうからぬ事をみるよしもかな
　此身影のことし
世中にわか有物とおもひしはかゝみの内の影にそ有ける
　この身響のことし
ありときく程に聞えす成ぬれは身は響にもまさらさりけり
　此身行雲の如し
（後拾）定めなき身は浮雲にたとへつゝ（よそへイ）果はそれにそ成はてぬへき
　此身いなひかりのことし
いなつまのてらす程には入息の出るまつまもかはらさり皃
　中宮のうちにまいり給ふ御屛風歌人の家近く松梅の
　はなと有みすの前に笛ふく人あり
梅のはなにほふあたりの笛の音は吹風よりもうらめしき哉
　宰相中將いれりたゝのふ（齋信）
ふえ竹のよふかき聲そ聞ゆなる峯の松風吹やそふらん
　中宮のうちにまいり給ふ御屛風にかの海つらなる人

の家の門に人きたり人いてゝあひたり
昔見し人もや有と尋ねてはよにふることをいはんとそ思ふ
わか門に立よる人は浦ちかみ浪こそみちのしるへ也けり
翁の鶴かひたる處
ひなつるをすたてし程に老にけり雲ゐの程を思ひ社やれ
花山院の御いれり
ひな鶴をやしなひたてゝ松原の陰にすませむ事をしそ思ふ
山つらにけふりたつ家あり野に雉とも有道行人たち
とゝまりてみたり
煙たちきゝすしはなく山里の尋る妹か家ゐなりせは
人の家に花の木ともあり女すゝりにむかひてゐたり
行人につけやゝらまし我宿の花は今こそ盛なりけれ
人の家に松にかゝれる藤をみる
紫の雲とそみゆるふちの花いかなる宿のしるし成らむ
女院の四十の御賀の屏風の歌もしやとて承りけれと
さもあらさり花あるところ
春立て咲花みれは行末の月日おほくもおもほゆる哉
松のおほかるところにて六月はらへしたる所
姫松のしけき所にたつねきて夏秡する心あるらし
秡へする河邊の松もけふよりは千世をやちよにのへやしつ覧
七月七日女男にものいひたるけしきしたる所
我戀はたなはたつめにかしつれと猶たゝならぬ心地社すれ
花山院のかゝせ給へる紙畫に歌つけて給りたりける
に人々さるへき所はつけはてゝなかりけれは人の鶴
かひてふみひろけていたる所
鶴ならぬ友はなけれと文みれは昔の人に逢心ちする

人の顔をかくしてあやしき事したる所におほちにて
我顔は露もらさしと思ふともはなけそいたく紅葉しぬへき
繪物かたりにねひたるやもめなる詠てゐたる所
なかむれと曇らは月のうらやましいかて浮世を出て住らん
とりあつめてそとよめるうた
安からぬしたの思ひも消ぬらし又取あへすこほりゆくには
きくはこさこそといへる女の所
いかはかり契し花の露ならんおきてしもいと哀とそおもふ
かへし
結ひけむ契も今や朝露のおくみえぬへし花のところは
これもおなし事なるへし男のこゝろにもあらぬこと
なといひたる所に女きて
打とけて頼まさりせは露の身の忍ひに袖はしほらましやは
かへしとて
わりなきは心の外に置露を袖のみたれにかくる也けり
これもおなしさまのこと
くるしきは人にかたらぬ夢路にて又も逢よや有とみるまて
かへしとて
夢計まさろまてのみすくすにはいかなる世にか又は逢へき
あるところにすの中にて
繪に梅の木にうくひすのなきてすのこにことひく男
鶯のさきにか君かきゐつるをかつ打出む梅かえのこゑ
春ゐなか家にあそひしたる處にまらうとの來て
青柳のかた糸により出けれとさしてそきつる梅の花かさ
女のとおほしくてそ女御の御
花笠をさしてきつれと櫻人春の山への使とそ見る

花山院の御歌合のやうなる事せさせ給ひけるに月を

御

秋の夜の月に心のあくかれて雲井に物を思ふころかな

いつもみる月そと思ふに秋のよはいかなる影をそふる成覽

かりこれしけ

我せこか旅ねの衣打はへてまつかりかねは今もなかなむ

たかたにて

わきも子かかけてまつらん玉章をかきつゝけたる鴈金の聲

むめ殿上のうた合に雪を

梅かえにふりしく雪は一とせに二度咲る花とこそ思へ

大殿いしやまにこもりたまひてたいともしてうた合し給ひにけるに題をよみてありけるにみねの上のほとときす

山邊たにねかたき物をほとゝきす都の人はまちやかぬらん

水の邊の螢

水の上にもゆる螢にことゝはむふかき心のうちはもえすや

山里の卯花

うの花のちらぬ垣ねは山里の木のしたやみはあらしとそ思

草の庵のたち花

蓬生のしけきいへには橘のかをたつねてそとふへかりける

くれかたき夏の日

暮かたきけふにてしりぬ石山の山の歳を祈るしるしは

影すくなきよひの月

忘れても有へき物を中々に雲間すくなき月を社思へ

かくて奉れたれは

五月雨は詠る程のみつくきに君かことのはみるそ嬉しき

かへし

ことのはをみるに袂のぬるゝ哉軒の玉水數もしられす

中將におはしけるとき冬のよさう〳〵しとて歌合の樣なることとし給ふけるに

もみち葉は雨とふれとも空晴て袖より外はぬれすそ有ける

臨時の祭のつかひしてかへりたるにふねにすけあきら

石清水かさしの藤の打なひき君にそ神も心よせける

かへし

水の上心はしらす石清水浪のおりこし藤にやはあらぬ

おなしおりになかふる

いはし水昨日の藤の花をみて神のこゝろもくみてしりにき

こせち(五節)のちやうたいの夜中宮の御方にかんたちめ殿上人まいりて

九重の雲の上人打むれてくれとひかけは[　]さりける

右大辨中務の宮に參り逢んといひてみえすなりにけれは

秋の日を詠くらせる夕暮は月待よひにおさらさり息

おなし宮にまいり給ひたる人に契り給たりける事ありけれは心もとなくてまたいて給はぬにいてたまひにけれはつとめて

恨めしく歸りける哉月夜にはこぬ人をたに待とこそきけ

御かへし

夜を寒み月よゝしともつけさりし宿も過うく思し物を

五月はかりおなしみやにまいり給ひてこのころすくしてまいらんと申給てあきに成けれは宮より

五月雨をすくすに程と頼めしを秋の風こそまつはきにけれ
　御かへし
うつろはて行末遠き松のえは初秋風を何とかはきく
　内藏頭たき物こひしを梅につけてつかはし給とて
降雪にまかふはかりそ梅花おれはにほひもとまらさり𪜈
　かへし
なつかしき袂にかゝる梅か香を風にしられぬ事をしそ思ふ
　庭はらふなてしこの引きられたるをみてなかふる
すき物を花のあたりによせさらはこの床夏にねたえましやは
　宮の女房すけの君といふ人
床夏も花の名たてに思ふ覽ことすきもののねしりかほなる
　といひて後なかふる久しうみえさりけれはやりける
いかにそやなのりし人もかれぬれは過にし花の折そ戀しき
　かへし
常夏に思し出は今よりは花の時なる實とや成なむ
　せいせう阿闍梨夏のはしめに聞えたりける
白雪のふかくつもるとみし程に夏のみとりに成にけるかな
　かへし
　又阿闍梨かへし
雪消て花さへちりぬかくしつゝ常なきよをやたゝに過さん
　返し
をやみせす流て落るみなのさと月日の過るいつち成らむ
行かたもしらすと思し年月は我みにつもるつみにそ有ける
　又
わかゝりし昔年月のとけくてつみのふかさはとくそ消ぬる
　女院にて權を見給ひて

［續古］あすしらぬ露のよにふる人にたに猶はかなしとみゆる朝顔
　みちのふ(道信)の中將
［拾］朝かほを何はかなしと思ひけん人をも花はさこそみるらめ
　おなし中將のかうかいのまくらはこにあなるかへし
　やり給とて
かみかきを返す〳〵もみる時そ色好みとはしるくみえける
　又かへし
をしなへてもみつる時は神垣の榊葉さへやしるくみゆらん
　又かへし
紅葉はは時にかはるを榊葉の常なる色にいかて成けん
　かへし
時ならてよにふる人は紅葉はの移りやすなる色はならはす
　ほうりにためもとしほうまうてあひて晉せていてに
　けるつとめて
なみのよに逢事かたき龜山の浮きをたゝにかへすへしやは
　かへし
天河跡を尋ぬるよなりせは逢事やすき浮木ならまし
　野分したるつとめてなかふか家の北に故入道とのみ
　なみには故三條殿すませ給けるにおほ風の吹けれは
　たてまつれる
我宿は野分はふかむとなりよりあれ増りたる心地こそすれ
　かへし
隣よりあれまされりといふなるはいかなる風か身をは吹覽
　さねよしといふ人久しうこもりゐたりけるころゆき
　のふりけるつとめて
いとゝしく常ならぬよを歎くみに逢みぬ程と過すへしやは

かへし
心にもあらぬ道にやまとふらん雪ふるまては思はさりしを
さねかたの少將祭りの使せしにかひをはなにいれた
りしあふきをやり給ふとて
かへし
あふきをは猶床しとそ思ひこし今日はかひあるしるし也鳬
いかてかはかひの有とはみえつらむ袖の裏にもよせしと思ふに
宰相にえなり給はさりける九月九日爲元法師
世中をきくに袂のぬるゝかな涙はよそのものにそ有ける
かへし
をくれゐて猶さりかたき菊のはな笆のもとをとふや誰そも
又
世中をきくにはことに思ふへし袖の露たにちるよ成せは
かへし
常ならぬ此よの花をみさりせは露の心はつらくやあらまし
藏人これすけかぬきいてにかうふりうへきころ椎を
をこすとて
みを君にまかせつるより椎柴のかはらんよまて頼もしき哉
かへし
しゐ柴にそむる衣はかはるとも此身をよそに思はさらなむ
事のついてにむかしのことをいひ出てないけの命婦
おもひ出る有し昔の在明の月なからよのかはらさりせは
かへし
忘られぬそのよの月はふりにしを新しくのみおもほゆる哉
また
はなやさく有しなからに鶯のさもあたらしくおもほゆる哉

とて鶯をさくらの枝に居ておこせたれはそのえたを
宮のすけのかりやり給ひたりけれは
雲井なる櫻のえたをうくひすのふみ絕んとも思ふへしやは
かへし
さくら花しつえをならす鶯のふみたかへたゐ杏にや有らん
曉月夜にいしやまより出たまふとて關のあなたにて
月のいらぬさきにうたひとつとの給ひけれは
相坂の關まて月はてらさなん杉のむら立木くらかるらん
といひたれは
（續後拾）ともに行月なかりせは朝ほらけ春の山路を誰にとはまし
かけまさか露草のうつし聞えたりけるやり給ふとて
朝夕につねならぬよを歎くまにうつし心もなく成にけり
かへし
葉末より深く染てし色なれはよはうけれさも歸りやはする
月のあかゝりけるよ一品の宮に殿上人あまたまいり
給ふるにくちすさひに松からしまとの給ひたりけ
るを聞てうちの人
浪たにもよる事かたき松嶋をいかてか蜑のありなしをしる
かへし
浦なみの昔の跡のしるけれは尋てきつることゝろ有らし
うち
いかてかはむかしの跡を尋ぬ覽さかしき人になしと社きけ
又
さかしかる人もなけれは行末の契にきつる松からしま
御とものひとの雨ふりぬへしと聞えけれは
秋のよの雨にもなにゝかいそくへき此ころふると思ひなしつゝ

かへし
雨ならてはかなき空にふる人は露にもぬるゝ物と社きけ
ぬれてかへり給ふとてそちよりつとめて
新後拾 あは(かイ)てこし袖(そらイ)の雫は秋のよの月さへくもる物にそ有ける
かへし
人はゆき霧は笆に立とまりくもりなからそ我はなかめし
その夜もろともにものしける人にかくなむありしと
いひやり給けるついてに
うきよには心すこしも行やらて身さへ止らぬ跡なもらしそ
返したゝのふの少將
恩むるかたゝにあらは月影のすむへきよとは今のみやしる
みちのふの中將
世中はあるかなきかそ今はたゝおもふ心を思ふとちへむ
露草のうつしを宮のすけのもとめけれは色わろきなん有との給へりけるをとりに奉るとて
うすからん花を侘てそ思ひつる猶こゝまても散せおしむな
かへし
惜むへき程たにもなき花よりもまつかへりぬる色にそ有ける
又しり給ふ山寺におはして
千 今はとて入なむ後そおもほゆる山路をふかみとふ人もなし
かへし
歸りてもふかきなこりの花の色を袖に移してけふはみる哉
いかなるおりにか
草の庵をたれか尋ねむ「　」
との給ひけれはくら人たかたゝ
九重の花の都ををきなから「　」

女御の御かたよりつれ〳〵になんうたひとつときこえ給へれは
何事もつねならぬよのさかなれは明くるゝまて忘られに鳬
御かへし
植置し人なかりせは淺茅生を何につけてか思ひ出まし
殿上人こむくうのつゐてに嵯峨野にいきて馬こそかありけるをあはれかりてむかしをおもひやることゝろを
佳人も昔も今もことなれは花みる寺に尋ねつる哉
みちのふの少將
としふれはかはりやしにしをみなへし昔の秋も問へき物を
なといひてかへるに廣澤の池に月のうつりたるを
水の面にやとれる月の影みれは浪さへよると思ふなるへし
みちのふの少將
浪のよる水にうかへる月影にまつしらるゝは淵せ也けり
こほりたる水に月のうつりたるをおなし少將
池水の濁りにしつむ月影を我みになしてみるそかなしき
かへし
月影のうかひわつらふにこりにはおふる蓮を頼むはかりそ
むまこそかかへしとてきたるをみれは
遁るれとうとましく社思ほゆれこやなき人のみそのたる覽
とかねすゑかよみかけたるかへしを
今更にわかなは惜くもあらね共みそのとつくる事の侘しさ
越前(えちせ)の前司(せし)の松のみを奉らんときこえて
ほとへてありてけれは
暮かたき春のひよりも契てし君待のみそ久しかりける

八河といふ所におはしたりけるにさゝをかせたりける
宿らてものとけくもあらぬ人のよを露は床しと思らんやは
ためもとしほち(新發意)のてなれはたつねて
あくるまのほとたにもなき露のみの此世中の心ほそさよ
又かへし
草枕はかなき物とこのよをは鳴むしのねやおもひしるらん
小野宮右大臣殿(實資)式部卿のみや(爲平)の女御のもとにまいりはしめ給ひて三日いとつれ〳〵なるにこよひまいりてものかたりも聞えんと有けれは
秋風の袂すゝしきよひことに君待ほとは人やうらみむ
かへし
うらむへき人をはしらて秋風にお花をあやなたのみける哉
おはしなれしころ焼物を聞え給たりけれは
いにしへは契し宿のをみなへしかをむつましみしりも社すれ
こ君ときこゆるかへし
女郎花おなしのへにはおふれ共契しねにはあらすとかきく
この歌とも心えねと本のまゝと本に
宮のすけの君といふ人　女郎花のわかきをなん兩ほうといふをきゝて
りやうほうといかゝいふへき女郎花佛の種をたつと社きけ
かへし
をみなへし種たえましや白露の口なきころを世け
竹に氷のつきたるを女御殿に奉り給とて
君かため雪まを分て尋ぬれはひとよこもれる竹にそ有ける
御返し
鶯の氷れる竹のよをふともかゝる雪まを誰尋ねまし
うちの御使にてきさいのみやにまいりて　いみしうしひられてつとめて
今よりは思ふ事をもいはてへむしふるはつらき物にそ有ける
かへし
ことはりや扨も心にしられにき思ふ人やはひとをしひける
ひらをかへすとてたゝのふの少將
今はとてとくをもみれは年のをのなかく契しかひやなか覽
かへし
としのをに結かけてし契あれは心のこりをとくといはなむ
宮にえちことてさふらひける　女房にひとりのはいをやかせてとてあつけ給たりけるを奉るさてあかきかみにかきてひのやうにてうつみたりける
數ならす埋もれたるか思ひにはあたりのはいも山こ社なれ
かへし
うつもるゝけはいをみれは人しれす思ひやふしの煙とも立
是ははやうの事なりこ河にまうてたりしにふねにてかうふりやなきさいものたいふくな什
いにしへの露にぬれにしかひもなくなとか柳のみとり成覽
たれとかおほつかなけれは
から國の昔の事にくらふれは松にをとらぬ柳なりける
きむさたの中將
昔よりあけの衣はなのみして柳色なるとしをふるかな
うこんの少將さねよし
いにしへのなにもかはらし青柳のことくさすかや緑なる覽
しはかりをいてふね弁

さして行しはかり小船さほをいたみ
　といへはしもつく左衛門
まつこかるゝは心なりけり
春とゝもにゆく船路にも思ふ哉都の花は散はてぬらん
なといふほとにみしま江とはしもをなん申といふを
ききて
思ひしるうきみしま江の水なれはゆけ共ゆかれぬ心地社すれ
なかみつ
行過てこのみしま江にいとゝしく遠くはなれん事をしそ思
なからのはしにて
橋はしらなからましかは流れての名を社きかめ跡をみましや
くらうなるほとに住吉にまうてつきぬ松風波の音き
こえしにたかはすおかし人々御てくらのついてに歌
よみて奉れとこひたれはえきかすそのよは其わたり
にとまりて曉月夜にはまつらをゆけはいはむかたな
くおもしろし
斯はかり歸るものうき住吉の岸にはいかて浪のよすらむ
こと人のえきかねはかゝすひゝきのなたにて海士の
綱ひくにいをともこひてはなたす濱邊は何事もおか
しきにあまの鹽やくことにみゆ
もしほやく煙になるゝあま衣霞をたちてきたる成へし
少　将
あま人のやくやもしほの立そへは雲の波こそ深く見えけれ
いかなることをみけるにかふな君
へたゝなき海へをわたり行ときも人の心のくまはわかれす

ひなみの湊松はらのほとにてしはしやすらひてかさ
きより越てつくゑ松をみれはけにゆへなくはあらす
こゝにてこそはくらさめといふ其よはきしつらに泊
りて曉に出ていとおもしろけなる所々見むとて玉津
嶋にまうてむとてあるに道おほつかなしなといふほ
とにかみ人たちたものさきにつからまつらんとてい
てきたりなりあひの松はらよりゆけはまこもくさ生
しけりさはにこまあるにおかしう綠の松こくらき中
より白浪のたつもみとをさるやう〳〵みやしろにい
たるほといりひのほとりに蜑の家かすかにて船とも
つなきあみともほしなとしたるを都にはかはりてお
かしみやしろにまうてつきてみてくら奉り所々めく
りてみれはいひやらんかたなくおもしろくおかしき
をおもひとにみせぬをたれもかくおもふへしそこの
ありさまいはゝ中々をとりぬへしかゝる所にて中々
ものもいはれぬものになむありけるかへさにうしろ
のいはやをみれはほとけのいとけにておはするを
あま人の法わたしけむしるしにやいはやに跡をとゝめ置劔
少　将
蜑のすむ濱のいはやの佛には浪の花をや折てよすらん
といへは
彼岸の遠きをしりて岩陰にみかけをやとす水の月哉
和歌のうらよりかへるにおもしろきさくらやおいた
るあまをみて少將
年をへてわかの浦なるあまなれは老の波には猶そぬれける
吹上のはまにいたりぬ風のいさこをふきあくれはか

すみのたなひくやうなりけになにはたかはぬ所なり
けりさたかやまのほうの前人々なとみえたりて〔マヽ〕
いとおもしろし駒をひきとゝめてやすらへは蜑の鹽
たるゝもいと哀なり
物おもふにみれは忘るゝ濱風に住あまいかに鹽をたるらん
粉河にまうてつきて風のもりといふ所に
いとこへも花のあたりはあたなれといかに散らん吹風のもり
圓融院のおりゐさせ給ひての日さうに〔せイ少貳〕のみやうふと
いふ人あはれといふをきゝて
哀たかたゝさのみやは思ふへき萬になけく人も有よに
冬のはしめつかた觀音湯本より久しう御讀經にめさ
れぬと聞えたりけれは
霜はやみうつろふ色は菊の花をと女の袖もかくこそはみめ
かへし
たと女子か袖ふる霜の打はへてたはまぬ菊の心とをしれ
みちのふの中將よみたる歌とも書あつめたるかたみ
にみむといひやるとて
斯はかりふる事かたき世中にかたみにすめる跡にそ有ける
かへし
古事はかたくなるともかたみなる跡は今こむよにも忘れし
賭弓のつとめて中宮のすけ
弓はりのまとゐやいかて有しそのいるかた山は遠さかり劔
かへし
かた山は雨に紛れてやみにしをかつ〳〵きくと誰か定めし
こまの內侍のこはく聞えたりけるをほとへて秋立る
日やり給りけれはなとてか今までと聞えたりけれは
紅葉けの露の色なる玉なれは秋をまたてはいかゝみすへき
かへし
秋深き海のそこなる玉なれは露待ほともをきてこそみめ
のふかたの中將まうてむと聞えてみえす成にけれは
又つとめてやり給けるせとうか
思ふとちねてはかなくもあくるよを長しといふは人待時の
名に社ありけれ
人のもとにある事をの給ふて
世中は水にやとれる月なれやすみとくへくもあらすも有哉
頭になりたまふてうちにまいり給ふて花山院の御と
きよにつかさる家をわたりたまふけれはいひ出した
りける
雲ゐこそ昔を空にあらねとも思ひしことよかはらさり鬼
かへし
賴こし月日はたゝに過にしをいかなる空の露にか有らん
人の尼になりたるに
あはれともいはて思はむ行末の蓮の上はおもひいつやと〔はイ〕
かへし
とふにたに置所なきはちすはの上までかゝる露そかなしき
薫物あはせてうへに置ていて給にけれは少しとゝめ
給ひて女御の御
殘りなくなりそしにける燒物の我獨りにしまかせてしかな
と有けれは
くゆるへき人にかはりて終夜このわたり社したこかれつゝ
ひはのをかへし聞ゆとてみちなりの中將
秋霧のたな引小野の山路にはことのはさへそふかく成ける

かへし

ことのはの散山のをは秋風のすくるまゝにそ聲増りける

花山院おりゐ給ひての年の佛名にけつりはなにさし

てみあれのせし〔宣旨〕のもとへ聞えたりける

かへし

〔新古〕程もなく覺ぬる〔にし〕夢の中なれとそのよにゝたる花の陰〔いろイ〕哉

〔同〕見し夢は〔をイ〕いつれのよそと思ふまにおりを忘ぬ花の戀しさ

またのとしおなしおりされかたの中將

いにしへにかはらぬ花の色なれは花のむかしの昔戀しき

かへし

昔見し花の年々にたれともおなしからぬを思ひしら南

かまくらといふ所におはしたるになかりけれは忘草

をとり給ふとて寺にかくいへとての給ける

忘れくさかりつむ程に成にけり跡もとゝめぬかまくらの山

かへし

あり侘て枯にし宿の八重葎いつこをさして君に告けん

山里をはしめてしむかすみ

春かすみほとへてたれか山里はうきよの外をとむる成へし

入道のとうにあひたまひてあしたに

雪ふかみ山路もしらすまとふみは道ゆく人やあるとまつ哉

かへし

みな人をよそにきくとも雪深みひとつ山路にいらんつまとて

かすかにまうて給けるにけふりたつ山里をこれなむ

こまのさとゝ人の聞えけれは

朝またきあさゐる雲とみえつるはこまのゝ里のけふり也鳬

そとはある所を過給ひけるにこれを題にてよまむと

て

覺束なそとはみなからいそのかみふるき都やいつれ成らん

山にきよき事をせさすとておはしけるにいたつらな

りけれは

〔干〕今はとて入なむ時そおもほゆる山路をふかみとふ人もなし

宮の女ほうへむつかせ給ひしこまつりしてつかせた

まふけるを少將といふひさまけすとあらかひけれは

さしそへし春日の山のみかさ山まつりし人もいかゝ定めん

かへし

三笠山わきてや君かまつりけむかねていのらぬ人の爲には

山におはしけるころたゝのふの中將

よをうしとのかると聞は我はいとゝ是より深く入ぬへき哉

かへし

山よりも深き所をもとむれは我心にも君はいらなむ

九月十五日みやの御念佛はしめられけるよあそひな

とせられて月のおほろなるにふるき事なとおもふこ

ころを人々よみけるに

〔詞花〕古をこふる涙にくらされておほろにみゆる秋のよの月

權弁

雲間より月の光やかよふらんさやかにすめる秋のよの月

かへし

蓮葉の露にもかよふ月なれはおなし心にすめる池水

これをきゝ給ひて左大殿より

〔續拾〕君のみやむかしをこふるよそなから我みる月もおなし雲〔心をイ〕ゐを

又

同 いまより〔はたゝイ〕は君かみかけをたのむ哉雲かくれにし月を戀つゝ
ときこえ給ふたりければ
今よりはあみたか峯の月影を千よの後まて賴むはかりそ
女院のすみよしにまうてさせ給ふるに式部卿のみや
の中將のうちのおほんせしにてまいり給ふるにつけ
て左の大との大宮の大夫の御もとにをのゝみや
都人ありやとゝはゝ津の國のこふのわたりにわふと答へよ
と聞えければ
さそはれぬ身こそ侘つれつの國のなにはの浦を思ひ遣つゝ
御むかへにまいり給ふみちにて見給ふて
尋ねくる心をしりて津の國のこふとも人のつくる也けり
なりともの馬のかみすけしてうち院に住ころ逢にい
きて
秋ふかみ霧立わたる朝な〳〵くもの森なる君をこそ思へ
中務のみやきゝ給ふて
そむきにし跡をいかてか尋ねまし霧も立そふくもの杜には
とあれは
白雲に跡くら〳〵と行かけもとひもやするとおもひける哉
御かへし
もろともに契し雲のすみかにはとへともたれを賴なるらん
又みやより
秋ふかきおなしかさしのことのはゝ山下露やもらむとす覽
御かへし
常ならすしくるゝ空のことのはゝもるとも露を何とかは思ふ
又
いふにたにしくれむ空はつれ〳〵と詠の後は思ひこそやれ

おなし心を大とのに
世中を花の匂にさそはれてはかなきよをは何たのむらむ
かへし
よの中の花を花とや思ふらんそのはかなさはしる人そしる
御かへし花山院のとも
をくれぬと何思ふらんその花は時の至りて有にやはあらぬ
御かへし
その時をいつれの時としらぬまはまつや常なき時や今こむ
左の大とのゝかすかの使に出たち給ひて又の日雪の
ふりけるにそのとのより
後拾 わかなつむ春日の原に雪ふれは心つかひをけふさへそやる
御かへし
同 身をつみておほつかなきは雪やまぬ春日の原〔野へイ〕の若な也けり
うちとのゝ八講に
みな底に沈める底のいろくすをあみにあらても掬ひつる哉
と有けるに
うち河の網にあらねと誰はかは君にひかれてうかはさるへき
かけまさか四位になりてうへのきぬ申たりしつかは
すとて
おなしこと衣はふかく成にけり心そ我にならひやはせぬ
みちさたかみちのくにゝくたるにめのしきふかやり
けるうたをきゝ給ひて
今更に霞へたつるしら河の關をはしめて尋ぬへしやは
笛ふきのやしろを
ふえ吹のやしろの神は音にきく遊ひ岡にや行かよふらん
月の前の笛の音

月かけにこちくの聲そきこゆなるふりにし妹は待やかぬ覽
ねまちの月を
ねてまつと今宵の月をいふなれは物思ふ人はみてやゝみ南
三河入道のたうにわたるとて しら河にくたりけるに
やり給ふける
わか宿にやとる門出の行末は旅ねことにも忘れさらなん
かへし
音にきくからかの水はかへるとも白河の名をいつか忘れむ
七月七日ふねにのるにやり給ふける
拾 後拾 天河後のけふたにはるけきをいつともしらぬ〔ふなイ〕我そかなしき〔なイ〕
たや寺の君のむすめとものもとに しろきかみにせみ
をつゝみてはちすの花に さしてやり給ふたりけれは
蓮の花をつくりて此うたかきてせみの中にさし入て
たてまつりたりける
いつれをかのとけきかたにたのまゝし蓮の露と空蟬のよと
かへし
蓮葉にうかふ露こそたのまるれ何空せみのよをなけくらん
又あれより
はちす葉にうかふ計りの程なれやなへて頼まぬ玉のありかを
かへし
契あらは玉のありかも告なゝん此よの夢はうとくみゆとも
殿上にて琴ひきふえふきあそひ給ふて おなしことあ
そひ給ふける人殿上おりてまいらぬに
笛の音は哀むかしにゝたれともあふ事なきはかひなかり鳧
うちよりかへり給ふ日
こゝろたにゆきはてぬれはこも枕よとの渡は近付ぬらん

人にをくれて世中すさましう おほされけるころしら
かはにおはして
白河の宿にうきよをのかるれとしつめる影は猶そみえける
女御とのよりきこえ給ふける御かへしに
ことのはをかきなかしつゝ白河の水の面をけふみつるかな
うへのあまになり給ふたりけるころ
空蟬のよの常なきを知ながらいとひかたきはわか涙かな
いはし水臨時まつりのつかひとのゝ少將まひ人にて
わたり給ひけるに 大殿のもの見給ひけるにきこえ給
ふける
をみ人のゆふかたかけて行道をおなし心に誰なかむらん
かへし
小忌衣袂にきつゝ石淸水心をなへてくますもあらなん
よすさましうてこもりゐ給へるころ 大殿より春のこ
となり
谷の戸をとちやはてつる鶯の待にこえせて春も過ぬる
御かへし
行かはる春をもしらす花さかぬみ山かくれの鶯のこゑ
おなしとのおもくわつらひ給ふて大殿に
かそふれは同し齢の草なれや露にをくれて先そかれぬる
おなし御とししなりける。
ゑゆう院の御ときにやうつほのすゝし仲忠といつれ
まされるとろしけるに しのはらはすゝしか方にや有
けむ女一宮はなかたゝか方におはしけるにや いつれ
をいるゝなとあるにものないひそとおほせられけれ
はともかくもいはておはしけるを いひにおこせ給ふ

けれは
おきつなみ吹上の濱に家ゐしてひとり涼しと思ふへしやは
權中納言筆に扇をかへていくつはかりにかあたるへきといひたるを
數しらすあふく風にも水くきの跡はなかれて絶むものかは
せきみの少將春日の使したまふてかへり給ふ日いみしう霧のたちたりけれは是より大殿に
三笠山春日の原の朝霧にかへりたつらん今朝を社思へ
御かへし
みかさ山麓の霧をかき分て秋をしるへに今やきぬらん
左の大殿にふみつくられけるにみるへき事ありてふみもおきていそきかへり給るにかの殿よりすなはち
うらめしや今宵はかりの旅ねをは我宿にたゝ草枕せて
御かへし
おひしこそよゝに契れる吳竹のそのあたふしを恨むへしやは
少納言むねまさかほうしに成てしかにあるに
さゝ浪やしかの濱（浦イ）風いかはかり心のうちはすゝしかるらん
同し人のもとに久しう音もし給はさりけれは
奥山の木下かけに住人は月さへとはぬ物にそ有ける
かへし
おく山の木下水の清からはもりても月のかよはさらめや
清少納言か月輪にかへりすむころ
ありつゝも雲間にすめる月のわをいくよ詠て行歸るらむ
返事もきこえてほとへてうれふことありて御ふみを聞えてその事いかに聞えけれは
何事も答へぬ事とならひにし人としる／＼とふやたれそも
かへし
たふなきはくるしき物とならはして人の上をは思ひしら南
とてなむとあれは黄なる菊にさして
くちなしの色にならひて人事をきく共何かとはんとそ思ふ
かへし
おしなへてきくとしも社見えさらめこは厭はしき方にさけかし
さねよりかかひに有けるに
東路に入にし人を思ふよに都なからもきえぬへきかな
さねより
はるかなる雲井の程のひと事はみるに時雨そふり増りけり
左大將朝光五節舞姫たてまつりけるをみてつかはしける
あまつ空とよの明にみし人のなを俤のしゐて戀しき
齋院にてもの申ける人内わたりにまいれるよしきゝてあふひにかきつけてつかはしける
年ふれとかはらぬ物はそのかみに祈かけてしあふひ也けり
五月五日につかはしける
時鳥いつかと待しあやめ草けふはいかなるねにか鳴へき
かへし　馬内侍
五月雨は空おほれする時鳥ときに鳴音は人もとかめす
寛仁二年正月入道前太政大臣大饗し侍りけるに屏風の繪に山里にもみち見る人きたるところ
山里の紅葉みにとやおもふ覽散はてゝこそとふへかりけれ
よをそむきて長（すイ）谷（やイ）に侍り（たりイ）けるころ入道中將のもとよりまた住なれしからなと申されけれは
谷風になれすといかゝ思ふらん心ははやくすみにしものを

秋のくれつかたしら河にまかりて

都出ていつかきぬらん山里の紅葉はみれは秋くれにけり

長谷に侍けるころ僧の装束法服なと關白殿よりをくらるとて

いにしへは思ひかけきやとりかはしかくきん物と法の衣を

かへし

おなしとし契しあれは君かきる法の衣をたちをくれめや

同しとしの人になん。

後朱雀院生れさせ給ひて七夜に

いとけなき衣の袖はせはく共こうの石をはなてつくしてん

題しらす

我宿の梅の盛にくる人はおとろくはかり袖そにほへる

數寄侍りけるに紅葉のちるをみて

もみちにも雨にもそひてふるものはむかしをこふる涙也鳬

よの中はかなきことおほかりけるころいひ絶たる女に

逢みねと忘れぬ人はつねよりも常なきおりそ戀しかりける

花のさかりに藤原爲頼(晋イ)なとゝもなひていはくらにまかれりけるを中將宣方朝臣なとかく侍らさりけむ後のたひたにかならす侍しと聞えけるをそのとし中將も爲頼もみまかりにける又のとしかの花のころ中務卿具平親王のもとより

春くれは散にし花も咲にけり哀わかれのかゝらましかは

かへし

行かへり春や哀と思ふらん契りし人のまたもあはねは

右公任卿集以古寫一本挍合了

群書類從卷第二百三十七

和歌部九十二 家集十

權中納言定頼卿集

正月五日雪のふりて松にたるひのしたりけるに

いつしかとたれ引つらむ雪分て子日の松はこほりとけぬに

返したれにか

冬籠りまたしかりける松ゆへに子の日をとしと誰かひき釼

右大臣左衛門督と申ける時 松雪似花と云題をよまれけるに

しら雪のつもる梢に咲花はまたふるとしの春にさりける

三月十日隨風尋花と云題を

吹風ないとひもはてしちり残る花のしるへとけふはなり皃

三月盡日あめをかしてさりぬと云題を

かきり有て雨にさはらぬ春なれは散花笠なきてや行らん

右大弁

すきゝぬる春はわかれて残る覽花ゆへけふの雨をこそ思へ

九月九日ひねもすに翫菊といふ題を

夕露のをくまて菊をみつる哉おもてのしはをのこひつるより

庭のおもに秋くれぬと云題を

いつとなくこひしき宿の花なれと秋の氣色はしるく見え皃

庭のもみちをみてよめる

もみち葉の散つむ時そ打はへてはらはぬ庭の面かくれなる

大井川にて人々紅葉をよめる

大井川水のあさくもみゆるかな紅葉の色は雨とふれとも

四條の宮におはしける時大納言殿(公任)より時雨とゝもに紅葉のこらすちると云題たてまつられたりけれは

紅葉にも雨にもそひてふるものは昔をこふる涙也けり

御返し姫宮のなくなり給けるとしなり

春ちりし花をおもへはもみち葉のめにとまらぬは涙也けり

廣澤に人々いきて月のいみしうあかう池にうつりたりけるに

すむ人もなき山里の池の面はやとる月さへ淋しかりけり

かりのおほくつれていきけるに

かきつらね雲路にむすふ鴈金のはかすも秋の月は見えけり

ゑに織女にことひきてかしたる所

琴のねはかさすもあら南彦星のうへのまへには誰か彈へき

松の木のしたに人々居てことひく所

ひく琴はこと〳〵なれと松風にかよふ調はたかはさりけり

月夜に旅ゆく人ある所に
人しれす出たつ道の旅なれと空行月はをくれさりけり
紅葉の木の下にて酒のむ人ある所
風にいたくちらぬさきにと紅葉はを君か爲には折留めまし
繪に櫻のいみしうさける所に
世と共にちることもなき櫻花ゑには風こそかゝらさりけれ
櫻を見はやとのたまひけるをきゝて　いみしうめてたき花をたてまつられたりける　あかそめか家のはなを折につかはしける
櫻さく盛になへてなりぬとも花なき里はしらすやあるらん
返し
我宿にをとらぬ花はありやとも今は尋しなき名立けり
さか野におはして
春の色をきてみる時は稀なれと心は秋の野守也けり
しとみのひまより月のさし入たりけるを
しとみ山へたてたれとも月影のあまり赤きはもりて見え皃
きゝもしらぬ鳥のなきけるを人のきこえける
またしらぬ鳥もなきけりさよ更て［　　］
といひけるに
いまはしりたるなのりたにせよ［　　］
白川殿にて
限なき匂ひをそへて白川の里のしるへはしかにさりける
うちよりいてたまひてゆつけのゆまち給ひける程に時鳥のなきけれは
ゆつけのゆまつに夜更てをのつから山時鳥なくをきゝつる
右大弁の父におはしけるに　右大臣殿うへの御もとよりくすたまたてまつりたまひけるを
宿わかぬ軒のあやめをみてたにも隙なき戀のねをやたえ南
御返し
すきたもてふく暇たにある物を軒のあやめの程を社思へ
四月一日のりたゝか女房の許にいひたりける
けふよりもきそめてしかな夏衣すきなは人の心みゆへく
女房にかはりて
うちつけにいそきたつなる夏衣先しるきかな人の心の
又のりたゝ
夏衣またひとへなる心とはかさねぬほとに見ゆるなるらん
又返し
かさねての後をしまたは夏衣けにとみるへき程のはるけさ
中宮の七夜に
かすか山わかねにさける藤の花松にかけてやちよを祈らん
子日に
千世こめておひ出る野への姫小松引てもちよのねも知れけれ
春毎に花をおしむと云心を
としをへて花に心をくたく哉おしむにとまる春はなけれと
のこりの菊をおしむ
わかれにし秋のゝこりて菊の花匂ふ籬のしまにそ有ける
右大弁
すきぬとておしみし菊は咲殘る籬のしまにとまる也けり
いそきてきぬを人にぬはせけれは　御せあはせんと人人のいひけれは
衣川遠きあたりにあられ共たれにあふせをわきて云らん
すたれに雨の玉のやうにかゝりたるを

雨にいとゝあれのみまさる故郷に思ひもかけぬ玉簾かな

九月はかりさか井と云所に しほゆあみにおはしたり
けるにひめきみの御もとに

すみ吉のなかゐのうらもわすられて都へとのみ急かるゝ哉

かへし

立かへりひころのふれは住吉の猶なかゐする浦とこそ見れ

おなし所にて

ふれはゐれとも浪は立けり□

ひとりこちたまひけるをみちなり

ゆふされはふしみの里にいそくまに□

雲晴て月あきらか也と云題を

みる人の心や空になりぬらんくまなくすめる秋のよの月

菊色をへんすと云題を

きのふみし色もかはりて朝ことに面かはりする庭の菊哉

うす櫻さ云を人のもてまうてきたりけれは

是や此をとにきゝつるうす櫻くらまの山にさける成へし

春の比題出して人々によませたまひけるに

をとつるゝ人しなけは鶯の友よふ聲に慰るかな

春過てうとくやならんつれ〳〵をたえすをとなふ鶯の聲

ちくふしまにまうてたりけるに

磯なれてこゝろもとけぬこも枕いたくなかけそ岸の白浪

おく山の瀧

くる人もなき奥山の瀧の糸水のわくにそ任せたりける

つれ〳〵におはしけるたはふれに こめたいにすたれ
かはを人々よみける

跡たえてとふへき人もおもほえす誰かは今朝の雪ま分こん

わかくりを

たちかはり誰ならす覧年をへてわかくりかへし雪ましる道

なつめ

都人けふもそきますかた岡の雪かき分てなつめ わかせこ

もちひ

かつきせむ蜑のしわさも千尋なるみるめしなくはかひあらしはや

あはしかき

水のあはし掻きえ易くみゆれとも露の身よりは久しかり鳧

やいこめ

あなうやいこめてそ只にやみなまし斯つらからん物と知せは

右大弁人のむこになりて久しくまうてたまはさりけ
れは

谷水のうへはひとつにこほるとも下の心はのとけからめや

御返し

こほるともうちたにとけは谷水の深き心はかくれやはする

なにのおりにか頭弁の御もとに

古の春忘れすは梅の花もとのあるしのおるなとかめそ

御返し

古のあるしならねと梅の花おりしる人そいかゝとかめん

右大弁花□ひ給ふとて

春暮てちりはてにける花の上は木の本に社とはまほしけれ

筑前の入道なくなりて後四十九日のゝゑたいかゝせ
たてまつりけるかへしやり給とて

極樂のはちすの花のひものうへに露の光をそふるけふ哉

御返し

人の上に蓮の露を結ひ置けはみかける玉のひゝに社ませ

三月三日はらへしに河原へいて給けるにくるまとも
のきをひてさはかしかりけれは御心のうちに
ときなはのとくもいそかし御祓にはゆふかけたるそ神は請覧
三月つこもり郭公の鳴を
時鳥思もかけぬ春なけはことしはまたて初音きゝつる
いとあかくしもあらぬ月の折に菊のいみしうさきみ
たれたれは女房なといてゐてみるとてある人のさゝ
めきける
またきふりぬる雪かとそ見る「　　」
とあれは
神無月おほろ月夜のしら菊は「　　」
四月まゆみのもみちしたりける見給ひて中将殿のか
れかれになり給ける比なり
すむ人もかれゆく宿は時わかす草木も秋の色にそ有ける
ひめきみ
みとりなる松の木末をおもはすに紅葉の色のこくみゆる哉
やはたにまうてたまひて木の本にとまりたまひてこ
みと云くゝつまはしよひにやりたまひけるかをそか
りけれは
たかせ舟ふなてこさむとまつ程に「　　」
とあれは右大弁
やかてにしにもかくれぬるかな「　　」
おさなき人のおやにをくれておもひもいれてあるを
み給て
もりおほす露も消ぬるませのうちに獨匂へるなてしこの花
うへの御をとうとのおさなくおはしける程わたり給
てひとよありてかへりたまふにめのとのかたはらな
るに
ねたえぬるこゝちこそすれ笛竹のひとよやふしの限成らん
おまへなる人のこゑをにはかにいとたかくわらひけ
れは
ふりたてゝわらふ聲をは秋過てまた鈴むしの鳴かとそきく
式部かやすまさかめになりてたむこになりけるにい
きやせましいかゝせましといふときゝてやり給ひけ
る
ゆきゆかすきかまほしきを何方にふみ定む覧あしらの山
五條のあまうへの御もとに君たちわたり給て菊のう
つろひたる紅葉のたゝひとはつきたるをたてまつり
たりけれは
我のみやかゝるとおもへは故郷に籬の菊もうつろひにけり
このもとを思ひこそやれ紅葉はの枝にすくなき色をみる哉
みつなりかさぬへきいくにやりたまひける
松山のまつのうら風吹よせてひろいて忍へこひわすれかい
御返し
たゝぬよりしほりもあへぬ衣もてまたきなかけそ松の浦浪
遠きほとなる人のもとよりかゝみとくものこひたま
ひけるやりたまひけるに
君か影見えもやするとます鏡とけと涙に猶くもりつゝ
と云たりしおなし所なるをみて
ます鏡とけと涙にくもるらん影をならへてみるはうれしや
うへの御をとうとの三君の御許に
ひくよりそしるくみえけるあやめ草君か袂にかくる千年は

この返しを
み隠れにおふるあやめはけふ事に誰に引れてふへき千年そ
はりまのかみのひさしうたいめしたまはてうへにき
こえ給ける
あはぬまのうきにおひたる菖蒲草袂にかゝるねをたにもみよ
このかへしを
逢ぬまは我うきからそあやめ草袂にかけていはすもあら南
女房のちこを男おやのとはさりけるに
故郷のこはきか本の露けさをとはぬつらさは秋そまつしる
こうりを人のたてまつりたりけるに
朝夕にたつをやくまてうりふ山麓の霧のはるゝまそなき
此うりを人のもとにやりたりけれは
うり作り今は辛さも忘られてよそになれるそ戀しかりける
とある返しを
山城のとはのわたりのうり作りこまほしと思ふおりそ多かる
殿上にて
けふよりは衣の袖もほしからす紅葉の錦身にしきたれは
三月はかりはしめて女御殿に御たいめありてのちこ
れよりきこえたまひける
あさかりし夜の名殘の面かけを宿の櫻によそへてそみる
御返し
詠むらん花とひとへのにほひをそおりても我は床しかり鳧
おなし女御殿のはゝうへなくなり給ひて後その御か
はりにおほせなと聞え給て
我を君むかしの人とおもはなん心はさらにかはらしものを
御返し
かはらしと聞はむかしの人よりもこはまさりても賴へき哉
しほゆにおはしてあかつきかたになみのたては
おきつかせよはに吹らし難波潟あか月かけて浪そ立なる
ゆきかふふねを
思ひやる都のことをかたるやとゆきかふ舟をみぬ時そなき
おなしたひにて九月卄日
常よりものとけき秋と思ひしを旅のそらにもやとる月かな
十月はかりよるなゐのいたくふりけれは
梢には殘りもあらし神無月なへてふりつる夜半のくれなゐ
尼上のはすのすゝをねすみのくひたりけるをみて
よめのこの蓮の玉をくひけるはつみうしなはむとや思ふ覽
物におはしける道にてそとはをはしにわたしけるを
わたり給て
世を渡る誓ひの方をいひなしてそとはみなからこえ渡る哉
白川におはしけるに御ともにゆきよりの朝臣ありけ
るかかへりけるにをひてやりたまひけり
山里にくれはとひけり今よりは戀しき時のかたみにをせん
返し
うちはへてかけと賴まは假初の山里にしもおくれやはせん
うへの御おはのうせ給ひける御いみにてよりみつの
朝臣
しての山しほりたにしてみえよかしこに後れたる人の爲にと
とありけるをきゝ給ひて
うき世には留るのみ社悲しけれかくいふ人もあらしと思へは
おなし人の御手のありけるを見給ひて
みることに浪はよすれと濱千鳥昔の跡はかはらさりけり

おなし人みのにおはしけるに御祈よくせさせ給へよ
のさはかしきなときこえたりけるふみをみ給て
なかゝれと人をたに祉をしへけれなとか我身を祈らさり劔
男の女房をかたらひてとうかとなさてまいりつゝ申
さむといひけるか一月はかりみえさりけるをいかに
いはむといひけるに
とほとほと契りし事は鳥の子を重ぬる程をいふにさりける
返し
とほにてと咎むる人は有ぬへしみそかにと祉いふへかりけれ
中將殿のかれかたになり給て五月雨のころ
五月雨の軒の雫にあらねともうき世にふれは袖そぬれける
ひめきみ
今まてもなからふる身のなかりせは何かは露の袖もぬれまし
中將殿たえはてさせ給て後御枕にらてんに松をすり
たりけるに姫君かきつけ給ける
心には思ひいてしとしのふれと枕にてこそ松は見えけれ
あはれなることなと人のかたりきこえけれは
しきたへの枕のちりをうちはらひ待かひ有とみるおりも哉
いとあからしもあらぬ月に菊のいとしろう見ゆるを
うへの帳のまへにふしたまへるをやとおこしきこえ
給けるをおき給はさりけれは
梓弓をしひきしつゝ夜もすからやゝといへ共いる人もなし
ひとりをまさくり給て
おもと事ありとはみれといかなれは獨とのみは人のいふ覧
中宮の女房人にわすられてなけきけるを十月はかり
にやり給ひける
紅葉にもそひてふる物はむかしをこふる涙也けり
中納言御かへし
春ちりし花を思てもみち葉のめにとまらぬは涙也けり
なかたにの入道殿の御もとにまうて給てかへりたま
ひけるに入道殿
みすてゝはかへるへしやは山風の峯の紅葉のことと問ぬを
御返し
嵐吹みねの紅葉をみぬ時も心は常にとゝめてそくる
なかたによりかへり給てはゝの御もとに
故鄕のいたまの風にね覺つゝ谷の嵐をおもひこそやれ
御かへし入道殿
谷風の身にしむ事は故鄕の木の本なこそ思ひやりつれ
三井寺に入道大納言いり給けるにこしらかはにより
給たりけるに花の心もとなかりけるにかへさにみな
ちりにけれは入道殿
故鄕の花はまたてそちりにける春よりさきに歸ると思へと
御返し
行かよふ便ならてはこぬ人をこしとや花の色にちり劔
又とのゝ御返し
故鄕のあるしと思はゝとめてまし面かはりにや花も見え劔
御返し
植置し人たにもこぬ故鄕に歸て花をうらむるやたれ
いたうわつらひ給けるころところをかへたてまつり
給へりけれは御かへにかきつけたまひける
人の命なかたに山にほるといはゝ死る所はあらしとそ思ふ
入道殿にたき物をきこえ給けるをたてまつり給はさ

りければ
いつかたに風さそふらん梅の花なと木の本に匂ひたにこぬ
おん返しとてなし。
人々なくなりける比
みる儘に人よけふりとなりはてぬこそひのいゑは悲しかり鳬
女御殿の御いみはてゝ七月十五夜山のさすのことの
のみかとに常不輕つきにきにけるを後にきゝ給て
老て社うつへかりけれよゝへてもそらのつゝみの契有やと
返し
朝夕にたへなる法をよむ君は世々の後をも何かまつへき
うへうせ給てのちわかなを人の　たてまつれたまへり
けるをみ給ひて
古のかたみにつめる若菜ゆへみるこのめにもみつ涙かな
母うへの外にわたり給て人に物いはぬ行ひにて久し
うたいめしたまはてかへりわたりたまひてけふなん
いとまあきたるときこえ給けるにいそきまいりたま
ひけるに人の文御いとまふるかりてと聞えければか
へり給にけるをうへはいときちとをにおほしてかく
聞え給ける
この本にきてもみかたき帚木々はおもてふせやと思成へし
御返し
みえ難き帚木々を社恨みつれ其はらならぬみかはと思へは
女院の中納言の君つれなくのみありければ
ひるはせみ夜は螢に身をなして鳴くらしてはもえあかす哉
おなし所の人に又やり給けるを返事をつかひのせめ
ければかみをひきむすひてたてまつりければ
我ほとけ跡たれたまへ千早ふる神のかきりはいふせかり鳬
おなし所にはやうやすらひとてさふらひけるわらは
のもとにこの御なのりして人入ぬときゝ給ひて
怪しくも我なのりそをいせの海のあまたの人にかゝるめる哉
これは女にちかう見きこゆる人の。いみしうかくし給
めりしほくともの中なりしかは。かくなり。
かものまつりの日なるへし
千早振神のしるしと思ふ哉思ひもかけぬけふのあふひは
いかなるおりにかありけむ
はらふ人ありと聞しをしきたへの枕にいかて散つもりけん
又
夕露のいかなる方にをきつ覧あくるまたにもなき夏のよを
御返なともことに聞えさりしかは
あひおもふ事こそ人のかたらめ我思ふ事をしるとたにいへ
なとやにて年月すくめりしをしはすのつこもりかた
にいみしうあれたりつとめて
年をへてとつるつらゝも春近みとくれはとくる物にさりける
かへし
しきたへの枕も床にとちられてとけぬはとけぬ心地社すれ
れいのつまとをならし給けれときゝすくしてあけに
ける又のつとめて
まつ人や有明の月と思ひしをさしてやみにし槇のつま戸を
御返し
獨のみ有明の月の山の端に入まてさゝぬ槇のつまとを
女御殿の内にいらせ給ての春物忌にてまいり給はさ
りしころ

鶯は都の花にうつるともとのふるすはわすれさらなん
御かへし
雲の上をならはさりける鶯はもとの古巣をこひぬ日そなき
さのゐ所なと物さはかしきをこよひせちにきこゆへ
きこざなん御くるまの有明の月のいとまはゆきほと
すくしてとてところをもしたまはて
夕つくよまはゆき程も過ぬるを待人さへやいてかてにする
おん返しとてなし。
ある人のもとにかよひ給けるころ内にまいりてひさ
しういてさりければあやにくにこの比はありきもせ
てつれ〳〵なるまゝに例の所にいきつゝなむなくさ
むるとて
戀わひてあひみしとこに立よれは枕にちりそ待ゐたりける
しきたへの枕はさもやなかるらん待ゐしちりは數積りにき
つほねにおはせしほとに尼上に申さることありし人
のたちよりたりしをなにしにきけるそなとむつかし
けにおほしてあけにしまたつとめて
きしかたもうたかはれ鬼月よみしならし顏にもとひし人哉
かへしとてなし。
まきれ給ひし所ありし比五せちに内にまいりたれは
日影さす雲のうへにはかけてたに思ひも出し故鄕の月
返し殿上人まいりなとして いとものさはかしければ
わろきなめりとそ
影とめぬ月に心のくれそめてとよのあかりもしられさり鬼
さとより内にをくり給て せちなる事ありて出るなり
とありしつとめて聞えし
まちかねの里をいてぬと思ひしを大方としの名に社有けれ
かへし
思ふとし伏見のさとゝ聞しかとなとまちかねと人のいふ覽
さか井といふ所にしほゆあみにおはしたりしに聞え
し
覺つかなさかゐはるけき旅人のなか井の浦になかゐする比
返し
はる〳〵となかゐの浦を詠つゝ戀しきことの名社つらけれ
内にまいりたりし又の夜せちにいふへきことなんあ
るとて御くるまのありけるをさるへき人々さふらは
ぬほとにえいてさりければこゝろの内をみせたてま
つらはやと聞えたりければ
うき人の心の内をみせたらはいとゝつらさの數やまさらん
かへし
昔よりつらき心をたへてみは人にいくへのかすをさゝまし
さとなりしにこよひはうちのとのゐとていて給しを
れいの所にやと思ひしかはつとめて聞えし
うちかはしかさぬるとは何なれや返し侘つるよはのさ衣
返し
返すとはきこえぬ物をから衣かさぬときくそまさるぬれ衣
うちにまいらんとせしに關白殿の白河殿にまいり給
にしにさはる事有てまいらすなりにければ つとめて
聞えし
行道もけふは猶こそとゝこほれつてにも花のうへを聞とて
かへし
ゆく道もとゝこほるなる花の上を急きていかゝ人にかた覽

ある所にかよひ給けるころ内にさふらひしになとか
花を
歸りてもみつやは猶やあくかれん花もあるしも盛すきなは
返し
あくかるゝ花の心をみる程に我さへ旅のそられをそする
ものうくていてぬ程にこゝちのあしかりけれはくる
またへと聞えたりけれは
もろ共にあひも思はぬなからゐの車はいかに久しとかしる
かへし
しらすやはくるま〳〵の久しさを心うしとはかけて祝ふと
かやうにいひつゝあかしくらしゝをあさましうめに
ちかう見なしきこえてこゝに入給ひぬめりしかは今
はふりはへてもなとおもひしをしられたりけるに御
ふみといふをとりいれたれはありしにもにすいとう
とうとしきたてふみにてこまやかにまめやかなる事
とものあはれにおほしなりたる事とものあるなかに
かきまきらかしたるをとりいてたるとて
思ひすて出てにしやとのつまなれと下に忍の草はおひけり
とありけるこそ。まことに哀なりしか。返しとてなし。
父のとしの春都にいて給たりし比さうしもてへたて
たる所にあまうへおはしましゝかは御經のこゑはか
りはかはらねとありしよともおほえすいと物あはれ
にてすくしゝにくれつかたつねよりもよみすました
まひたりしにかりのなきたりし聲にもなみたととめ
かたきこゝちするに内よりとて俄に車をたまはせた
るにとく〳〵とさはかすをかくなんともえ聞えあは
すくるまにのるそらもなき心地するにたゝうかみな
さかしいれたるをみれはからそかゝれたりける
聲はかり聞たにあるを雁かねのいとゝ雲井になりぬ成かな
めくるゝ心地してみしろくも覺えねとかならすとさ
ふらひつるをいかに〳〵と車の人々のいふに心あは
たゝしくて
鴈金の雲井になかむ折ことになれしとこよをこふとしら南
とかみのはしにかきつけしはか〳〵しうもみえさり
けむかしとそありしをきたまひける枕をかたみに見
つゝすくしけるに御ふみにかくてよろつすゝましう
やと思ひしにつみのからのみおほゆる事のみおほか
れはなむありし枕たまへ佛につくりたてまつらんつ
みもほろほさんさありけるををしつゝみてとみに御
かへしもかきやられさりけれはつゝみかみに
た枕の佛にならむ後の世もかりそめふしの人を導よ
かへし御返ことのなきこそ中々ことはりなれとて
いまはとてかへす枕はあかねとも共に佛の道をちきらん
方ふたかりてとみにもかへりたまはさりしほとにし
も月はかりよりれいならすなやましうし給しにいみ
しう物こゝろほそけにおほしたりしを常のことにお
もひなしてあからさまに内よりめしたりしかはかく
なんと聞えたりけれはいとから心ほそきに
春ちかみ峯の朝日の出るまもまたてや露の消はてなん
くるまよせてれいのとく〳〵とせむるに。心ちかもか
きみたりて。はか〳〵しうおほえすとて。返しとあれと
なし。

[千]梅か枝に心もゆきてかさなるをしらてや人のとへと言らむ

東山の花のもとにて人々うたよみしに山をこえて花をみるといふ心を

あふ坂のせきちにゝほふ山櫻もるめに風もさはらましかは

みちのなかにしてあふこひといふことを

なこの海のと渡る舟のゆきすりにほの見し人の忘られぬ哉

故殿うせ給てのち五月五日源中將くにさねのきみせうそこして侍しかへりことのついてに

[千]すみそめの袂にかゝるねをみれはあやめもしらぬ涙なり鳬

返し　　中將

〔千〕あやめ草うきねをみても涙のみかくらむ袖を思ひこそやれ

家の歌合に花たちはな

[金]さ月やみ花橘のありかをは風のつてにそ空にしりける

こひ

[下]我戀はあまのかるもにみたれつゝかはく〔まもイ〕時なき浪のした草

二條の家にて十首のこひのうた人々によませし時

占戀

きねかとるそのくましねに思事みつてふかすを頼む斗りそ

來不留戀

我戀はくすのうらはの風なれや靡きもあへす吹かへしつる

誓戀

いかて我心つくしのまつらなる鏡にかけて見ゆるわさせむ

乍臥無實戀

戀々てかひもなきさに沖津浪よせてもやかて立かへれとや

祈不遇戀

あけおろし乙女か神にねきかくる榊のさすかにゆるさけもなし

追從戀

我妹子かもすそ許にしなさ南さけひかれても恨みやはせん

僞不遇戀

如何せむうしろめたなき人心つらぬく玉のくたけてそ思ふ

聞音戀

よるこえぬ關地にかゝる旅なれや鳥の空音にねをそそへつる

厭賤戀

數ならぬいはせの杜ときくからに身をしる雨は時雨てそ行

〔本ノマヽ〕さくら花ふりにし春そこひしかりける

つかひかくれにしかは中宮女房にやとてほりかはの院へたてまつりし

おもひきや散にし花の影ならてこの春にさへあはむ物とは

ひか事なりけれはきさいの宮の女はう返し

雪とふる花ならね共いにしへをこふる涙にまよふとをしれ

身をうらみてかつらの家にこもりゐて侍しころ九月十三夜

なかめする心のやみもはるはかりかつらの里にすめる月哉

おなし所にて父のとしの春のこりの花をおしむ心を

世のうさを厭ひ乍らもふるものを暫しもかくる花もあれかし

八條の家にて歌合に草花露といふことを

[金]夕露の玉かつらして女郎花野原の〔かせイ〕露におれやふす覽

月

くまもなくあかしの浦にすむ月はちひろのそこの鏡なり鳬

鹿

終夜つまとふしかの鳴なへに小萩のはらの露そこほるゝ

寄瀧戀

詞 戀わひてひとりふせやによもすから落る涙やをとたしの瀧

法輪寺にまうつとて故大納言殿(忠家)の御はかの見ゆるほとにくるまをとゝめておりてまうつとて

新古 さらてたに露けきさかの野邊にきて昔の跡にしほれぬる哉

秋ころえふみにひころこもりていつるあか月に

山深み松のあらしにきはなれてさらに宮こやたひ心ちせん

嘉保三年(堀河)三月廿一日花契千年　左少將

君か代のちとせをふへきためしにて花ものとかに匂ふ成覽

鳥羽殿歌合

花爲春友　左中將

この春はかさねてにほへやへ櫻霞とともにたちもはなれし

御前にて五月雨を名所によせて人々つかうまつりしに　少將

時しもあれ藻鹽たれたる須磨の浦に日數ふる雨の晴間なき哉

永久四年(鳥羽)閏正月廿五日

鳥羽殿　梅花薫衣　參議

袖かけておりみおらすみ花の色にそむる匂ひを妹なとかめそ

題可尋

山守よ歎きといへは伏柴もなかめかしはもわきてやはこる

右俊忠卿集以村井古巖所藏京極黄門眞蹟摸寫本書寫

中納言雅兼卿集

曉聞鶯

金 鶯の木つたふさまもゆかしきに今一聲は明はてゝなけ

山花初發

櫻花まつ咲山のはつ風はほかよりさきにいとはれやする

水上落花

金 花さそふ嵐や峯をわたるらむさくらなみよる谷川の水

池邊柳

金 風ふけは波のあやをる池水にいとひきそふる岸の青柳

毎朝見花

咲しよりいくかきぬらむ朝霞たつたの山の花のあたりに

松間花

なみたてる松もや風をいとふ覽あたりの花の散かおしさに

白河の花見御幸に

金 年毎にききそふ宿のさくら花猶行末の春そゆかしき

落花盈地

苔むしろみとりの色はうつもれて散しく花にしく物そなき

苔上落花

こけむしろありけるものを散花にしく物なしと思ひける哉

水上落花

咲は散こすゑのみかは櫻花――みつゝもとまらさりけり

夜梅遠薫

波のよるせゝの末までかほるなりこれや梅津のなかれ成覽

花經年香

さきそめしはしめもしらぬ櫻花いく春風に匂ひきぬらん

三月盡
花故にけふのおしさはかゝるかと常盤の里の人にとははや
河邊欵冬
□心してひけたかせ船きしの山吹にほふさかりそ
遠水螢
五月やみ芦まのほたるほの〳〵と見ゆるや淀の渡りなる覽
未聞郭公
五月雨の空のなたてに郭公きゝつとかたる人たにもなき
夏夜月
風ふけはかたよる澤のまこも草□たまらぬ夏のよの月
路夏草
かへるさの道のしるへと宮城のゝ花まつ萩をしほりてそ行
六月思郭公
きかねともなをかてらるや郭公まちし五月の心ならひに
晩風告秋
夕まくれをはきか花は咲ねとも鹿なきぬへき風の音かな
初聞郭公
明はまつ人に語らむほとゝきすまた里なれぬ初音きゝつと
名滅秋
年毎の御秋のしるしあらませは我なに事をけふいのらまし
草花告秋
〔金〕咲そむるあしたの原の女郎花秋をしらするつまにそ有ける
秋月
これやこの詠むるたひにしのはるゝ哀れ異なる秋のよの月
早萩
□萩はら花咲にけり今年たに□しかにいかてしらせし

七月八日
久かたの天の川なみあけたてはぬれてやかへる雲の羽衣
をみなへしをみて
女郎花なひくとみれは秋風の吹くる末もなつかしき哉
夕月
たかまとの山の裾野の夕露にかけさしそふる弓はりの月
八月十五夜
秋ことにこの月影のこよひしも□れはこそはなには立けり
おなしき月の十六日に女許へ
忍ひつまひとりにもあらす望月のこまいつかたに心ひく覽
曉聞鹿皇后宮にて
思ひしる人に見せはやをしか鳴ふたかみ山のあけほのゝ空
永久元年九月依二山大衆事一下二向河尻邊一歴二覽住吉社一於二注江一詠
すみよしのたむけのたひにあらね共哀はかけきおきつ白浪
隔垣紅葉
□まはらにかこへ柞原下枝の紅葉よそなから見ん
月前落葉
隱れゐの木くれの月のもるのみや紅葉散よのとり所なる
移野花
秋くれは野原の花をませのうちに露も落さす移してそみゆ
十月紅葉
たつねこむみたに隱れのはゝそ原しつ枝に秋の色や殘ると
船中晩涼
ふなてせし秋まつほとは暮しまの空吹風もすゝしかりけり
旅門秋深

秋ふかみ山風寒したひころも心してこそたつへかりけれ

駒迎内府にて

逢坂の關もる神にことゝけむいくよかみつる望月のこま

逐夜雪深

おれふして竹の末葉もうつもれぬ夜毎にまさる雪の重さに

鷹狩

御狩する片野のすそとしりなから何ときゝすの跡とゝむ覽

初雪

あつまちの人にとはゝや甲斐か根の山にもけふの雪や初雪

棲聖人とて東山に侍し僧の棲のうへにこもりゐて人のいくに見えさりしかはかへりて三四日ありていひやりし

此たひはあかきみ佛みえたまへさてこそ後の世をも賴まめ

戀春花

わすれしの契もかけぬ花なれとたをりし枝は忍はれそする

月照松

時雨とやおもひはてまし松風を梢の月のもりこさりせは

月照橋

はつ霜は降にけりとも見ゆる哉なからの橋をてらす月かけ

松久緣公宴

八百よろつ久しき御代のためしとは替らぬ松の緣をそみる

隔夏戀

夏衣へたて〳〵てやかてさは夜寒の床にひとり寢よとや

尋不遇戀

さりともと尋ねこしちのかひもなく跡をたにみて歸る山哉

互有障戀

人の上となけきしものを今は又我さへすふるはゝかりの關

雲によする戀

むねにみつ戀の煙や雲ならん心のそらのはるゝよもなき

をみなへしによする戀

よそへつゝ我みる野邊の女郎花こひせぬ人もきてやおる覽

臨時增戀

なけきつゝ夜は明かたに成ぬれといとゝ心のかきくらす哉

懷舊心

昔のみ忍はるゝ身の行末はけふこひしくやあらんとすらん

貧人戀

はなをたにすゝり□われか身にいかにそへつる戀の涙そ

近不遇戀

伊勢嶋や蜑ならませはをのか浦の見るめ渚に物はおもはし

不問人戀

苦しさはとはぬつらさをつらし共思はしとおもふ思ひ成覽

忍戀

忍ふれと戀はけしきやしるか覽まつみる人のめてた顏なる

山家戀皇后宮にて

思ひやれ松吹風に夢さめて戀しさまさる冬のやまさと

寄石戀

山里の岩垣なれやわか戀はおもひこめつゝ年のへぬらん

寄水鳥戀

をし鳥はすかたの池に移してやをのか思ひのほとをしる覽

聞二權大納言家詠一水上月の心

あるしなる水たにすまぬ濁江にほのかに月のなにやとる覽

同讀レ女白地出の心

たち出てねともさらぬ程なるを獨ふすまの妻やらむる

戀心

[子] かゝりける涙と人もみるはかりしほらし袖よ朽はてねたゝ

九月十三夜くもりて去夜あかゝりければ

きのふとは誰か契りしこの月は十四夜と社いふへかりけれ

返し中務丞平實重

古のきのふはことに雲はれて今宵の月やかゝらさりけん

又遣

さやかなる秋のなたてに年をへても――

返實重

九月の今宵わきては曇らねとかくしもはれは名にそたゝまし

又

これも又うき世にめくる妻かとて心のまゝに月をたに見す

返實重

世をすてゝ西へ行とは知なから見しとはいかに山のはの月

思へともよにゆるしなき雲のうへにいさなふ月の影も有兒

よの人に月みることのをとらねは秋そ我身のさかり成ける

又

盛りとはまたきなかけそ秋の月雲の上まて見ぬはみるかは

實重藏人に未成前也

雲ゐには月の光もそふなれはいとゝ心のかゝりぬるかな

世のはかなきことを

いひしいへは此世は夢そうれしとて包みし袖に何かとまれる

夢のうちに生れもしにもする事を何かうれへも喜ひもせん

世の中を同しまとひのうちにても歎かぬ夢を見るよしも哉

涼[字缺]閏年七月七日

涙のみかゝる袂を秋の夜は人なみ／＼にかさすやあらまし

遭喪時不訪人の許よりいへる

人を社とはて過ぬれ定めなき世をうみにのみ汐たるゝまに

かへし

悲しさのいつを限りとあらはこそとはて過ぬる人を恨みめ

ひさしくれいならぬころ五月をみなへしの咲たれは

よはりゆく我みよとてや女郎花秋よりさきにいそき咲らん

中納言になりたりけるを皇后宮よりよろこひおふせ

られたりければ堀川院御事思ひ出て

植をきし匂ひとおもへは梅のゝいとゝむかしの春そ戀しき

雅頼昇殿して侍し時奏内裏出家後

[子] うれしさをかへす／＼もつゝむへき苔の袂のせはくも有哉

右雅兼卿集以佐伯侯秘本書寫

成通卿集

民部卿殿伊勢使にくたり給しに 藤方にて人々浦の松
をよみしに
いくしほか立波毎に染つらんみとりのふかき藤かたのまつ
三條殿に中宮おはしましゝに 其御方にて人々月の心
をよみしに
さもこそは曇りなき世の月ならめみる人まてもすむ心かな
同御方にて草花告秋といふ心を
花薄またほにいてぬ宿ならはけふ迄秋をしらすやあらまし
新院御方にて人々毎春花盛心をよみし
いつとてか花に心をつけさらんをろかに匂ふ春しなけれは
鳥羽殿にて霞隔残梅をよめる
春霞へたつとならは梅花またありけりと風にしらすな
遇不逢戀
〔千載〕逢みむといひわたりしは行末の物思ふ事のはしにさりける
けふ社はしらせ初つれ戀しさをさりとてやはと思ふ餘りに
月前紅葉
あかなくによるも紅葉をみよとてや秋しも月のさやけかる覽
幾かへり嬉しつらしと思ふ覽たのめてあはぬ夜半し積れは
ある人にちかくみるさてやみなはのちのよのさまた
けにも成ぬへしと申たりしかはよみてをこせたりし
玉章のかよふはかりになくさめて後の世まての恨のこすな
返しつかはしゝ
幾かへりふみかよふ共逢坂をこさすはいかゝ恨みさるへき
ある人故院の御事をなけきて
いかなれは別れは今の心ちしてよはあらぬよに成はてぬ覽
返しやりし
名殘なくかはりはてぬる世中になかるゝものはなみた成覧
故院かくれさせ給ひたりし頃美作前司のもとより
さりともとたのみしかけもくれはてゝ涙の雨にぬるゝ頃哉
返しつかはしゝ
言の葉にいふともつきし世中は我心にて人をしらなん
おなし頃三條殿にまいる人々かきつけ侍し着到のう
へにかみをほそくきりてかきてをして侍しよみ人不
知
思ひわひ頼む影なき宮の内を歎きてみれはあれそしにける
返しらにかきつけし
なけく覽人を誰とはしらねとも心はわれにかはらさりけり
竹風夜涼
荻の葉にあやまたれつゝ呉竹のよるの音にそ秋はきにける
草枕よはのけしきのわりなさをおもひやるさへ袖そ露けき
思ひやれはるかにゆかぬ時たにも君戀しさは忘れやはする
暮るまも定めなき世としりなから歸りこむ日を待そはかなき
なに事を我思はまし時のまも君にはなれぬ身ならましかは
人のもとより
さえわたる氷の上にふる雪の消ても物をおもふころかな
返しやりし
きゆはかり思はゝなとかあは雪のあはぬ夜半しも積る成覽
霞
音羽山をとにきけとや春霞かたゝにみえす立かくすらん
らくひす

鶯やとしのはしめと告つらんなくひところは春めきにけり

さくら

めにみえぬ心にたにもとまりけり枝なはなれそ春のはつ花

五月雨

水まさるふるえのあやめ今更に生いつと見ゆる五月雨の空

ほとゝきす

一聲のなとつらからんほとゝきすきかて明ぬる夜たに社あれ

盧橘

我宿の物ならなくに匂ひ來る花たちはなのあるしともかな

鹿

夜もすから妻とふ鹿を聞からに我さへあやない社ねられね

をみなへし

女郎花なひくをみれは人しれす秋吹風そうらやまれぬる

雪

しら雪の行かふみちをしらせねはまた音つれぬ遠のさと人

水鳥

夜とともに霜をくつるを水鳥のうら山しくや下にもゆらん

あし

冬ふかく成にけらしな難波江の青葉ましらぬ芦の村立

祝

言の葉にかけてもいかゝ祝ふへき計をしらぬ君か代なれは

こひ

あちきなや誰爲思ふことなれは我身にかへて人をこふらん

十五首述懷に一萬盛定

限りありて立はなれなは春霞戀しかるへき雲のうへかな

とよみて侍しを人々あはれかりほめしかは　またの日よみてつかはしゝ

雲の上にとまる心のあまりにてなをさへ君は殘しつる哉

返もとの消息のまゝ

雲のうへに猶殘しつと聞おりも涙の雨はとまらさりけり

九月十二日夜月のあかきにたれともなくてかみわたりよりとてつかはしたりし

雲の上の月はかりをはなかむれと我身もおなし數ならぬ哉

返しつかはしゝ

雲の上の月を詠むる人ならはかけはなれては思はさらなん

ひとゝせ二條にて四十九日からちに月のおほろなりし夜誰ともいはて人のもとより

雲はるゝ朧月夜の哀さを物おもふ人はいかゝみるらん

かへし

いつくにも晴すみまさる月影を我宿からと思ひけるかな

夕暮に命をかけぬ身なりせはけさ歸るさにしにやしなまし

月契遐年　内裏

千年まて君のみそみむ久かたのひさしかるへき秋のよの月

山家月

まはらにて時雨に厭ふ柴の庵は月もるよりそ悔しかりける

今よりは山邊に近く家居せしまたいらなくに月かくれけり

遠思野花　内裏當座

あかすして過きし野への花薄たつねは道に秋やくれなん

寄月戀　内裏

ひとりぬる身を浮雲のはれぬよや戀せぬ月もかけに成らん

月照竹　内裏

時雨にもかはらぬ竹の緑さへしろくそ見ゆる秋のよの月

河竹にむすふ氷とみえつるはなかるゝ夜半の月にそ有ける
秋のはなちかくにほふ
かほりくる籬をみすは闇のうちに花咲やと人やいはまし
たひによせるこひ　内
宵のまは草葉の露にことよせてひるの袂をいかゝ忍はん
水のへんのもみち　内
紅葉はを折へき物をとあさにて船のよらぬそわりなかりける
雪のうちの佛名
こよひしも散あは雪はふるとしの罪のきゆへきためし成覽
祝のこひ
もろ共に千世へん程の久しさはけふの暮るを待にてそしる
月
程もなく入にしよひの月よりもなをうらめしき有明の空
うのはな
しら波に見ゆる垣ねの卯花は我こゝろとやおりつくすらん
月夜遠行　樹下
思ひしりりしはしな入そ秋の月こゝまて人をさそふとならは
水邊夏草　寒暁
浪たてる荻のからほの夕暮はむれゐる鷺にわきそかねつる
山家月
此里はこなたかなたの山高みみるに程なし長き夜の月
寄衣戀
むらさきのねすりの衣うらめしき人にやちしほ心そめつも
設網のちゝのめも悲しかしあらはかく迄君を見さらめやはた
白菊のなをもたのまし年をへて心にそめぬ秋しなけれは

菊閑中友　樹下
この花の散なん後の心をはなにゝつけてかあかしくらさむ
雨中のこひ　樹下
紅葉はをそむる時雨のあたりにや我心さへいろにいてぬ覽
舟中言志
河岸のふれはちかひてのほる哉これや早せの見する成らむ
戀
獨ねてまつに久しきかねの音もうしと思はしあはんよの爲
海邊眺望
是よりはいくらかあらん夕つく日入かゝりぬるおきつ白波
紅葉漸落
たちまちに散とはなしに紅葉はもひころをふれは梢すき皃
寄擣衣戀
うつ聲にあはれしらるゝ唐衣つれなき人にきかすへらなり
ある人の消息云
いかにして世にめくれとて月影の我を見すてゝ雲かくる覽
かへし
曇るとて思ひないりそ世にすまは又もはれなむ冬のよの月
ある人のもとより
たゆましと思ひそめてし道なれは猶ふみかよへ谷のかけ橋
人のもとへ
さりとても慰むへきにあらね共心かはれるゆへをしらすや
ある人にやる
花さかぬ我身と思ふにあやしくも春のみ君かたつね來る哉
かへし

花さかん折をたのめる我なれは來る春毎にたつぬとをしれ

　花漸少

打つけにさひしくもあるか櫻花まれに成ゆくみやまへの里

　契不來戀

たのめつゝ君かこぬよの衣手や待かね山の雫なるらむ

　ゆめにあふこひ

とにかくに程なき夜半そ恨めしき明る別もうつゝのみかは

　らくひす

鶯の人をのみやはさそふへき我もふるすにかへらさらなん

おるもおし見すてゝかへる空もなし花下陰に身を盡してむ

ひたすらに風をいとはし風しらぬみやまかくれの花も散皃

苗代のあらたをかへすいとまなみいつらは永き春日なる覽

河霧はたちにけらしな高瀬舟はたうつ棹の音はかりして

櫻花あらき風なき君か代にことをよせてそみるへかりける

此世にてかきれるなかにあらね共命はおしき物にそ有ける

今よりはあはしとかける玉章のそれより奥は見やはさゝるゝ

菖蒲草なへてにはあらす長きねの千世迄かけんためしとはみよ

　これは信成むすめのあかこのかりはしめてくすたま
　やるうた

こひわひて多くの年を吳竹のたゝひとかたに嬉しと思はゝ

　皇嘉門院に女房共供花以ニ百種花一供レ佛可レ被レ奉レ訪ニ
　北政所菩提一其中或女房云獻ニ結花一之日欲ニ相具一和
　歌一首可ニ綴作一讀レ之

はちす葉に消にし露をもらさしと契りを結ふ花としらすや

　菩提山上人に給

消ぬへき命にかけてたのむそよ露もあたにはおもはさら南

花を見る程のみ物を思はねはおしさはいかゝなへて成へき

青柳のあなたに匂ふ花の色は峯こす風の便りにそみる

いかてかはなへてなるへき櫻ちる庭さへ拂ふ風のつらさは

まつ時はいてゝもいてすおしむ間はいらぬに入や有明の月

　人にかはりて

雲の上に朝夕かくるたのみをは天照神はいかにしつると

雲の上にふき上の濱を待かねて神のみつかのらめしき哉

前大納言實國卿集

春

たつ春の心を

(月詣)こそといへは久しくなれる心地して思へは夜半の隔て也鳬

山人の笕にむすふ氷たにとけすはけふを春としらめや

關路霞

さらぬたになこその關ときく物をいとゝ霞のたちへたつ覧

梅のはなひさしくにほふ

松かえにさかぬはかりそ梅花いろはちとせも變らさらなむ

對樹待花

櫻花今いくかありてさかなんと枝ものいはゝ問ましものを

待隣花と云こゝろを皇后宮にて人々よみ侍しに

詠めやる花し咲なはあちきなくまたぬあるしや我ものとみむ

按察にさそはれて大内の花見侍しに

雲の上に風ものとけき春なれやちるともみえぬ花さくら哉

あかなくに袖につゝめはちる花を嬉しと思ふに成ぬへき哉

花みけりときゝて花山院の中將のもとよりまたのあしたきのふはなにことかは侍しとゝはれし返事に

櫻花見しそのほとは思ひやれ散よりほかのなけきやはせし

遠方の風にみたるゝいとさくら我手にかけてみる由もかな

本院のはな見にまいりたりしにみすうちにことのをとのせしかはかへりさまに

琴のねにあかてや今はかへりなむ花にとのみも思ひける哉

夏

ころもかへ

思ひなく花色ころもぬくはかりそめし心のまつかはれかし

卯花連里

山さとのかきねならひの卯花やをとなし河のせゝのしら浪

爭待郭公と云こゝろを女御殿にて人々よみ侍しに

我は早きゝつといはむほとゝきす人のまとろむ時のまも哉

なこりなくすきぬなるかな時鳥こそ語らひし人としらすや

水草隔船

あまを舟さして入えのこもかくれ水うつ棹の音のみそする

小屋五月雨

(月詣)五月雨は賤のしのやの(たかイ)しのすかきふしところ迄水はきに鳬

故里五月雨

朽にける板まにもれるさみたれのふるやくるしき我住ゐ哉

月明似秋といふことを二條院にて人々よみしに

月きよみなかめもあへす明るよや秋にかはれるしるし成覽

秋

江上月

さらぬたに玉江の水の淸きうへに光をうつすあきのよの月

鹿

あはつ野になくよの數の積れるは鹿もよ妻やつれなかる覽

八月の中の十日に神樂をし侍て　いとなこりおほかりしになか月の十日あまりにかくなむ申をこせたりし

隆信朝臣

あかほしのあかて出にしあかつきは今宵の月に思ひ出すや

返し

たゝ爰にたゝ爰にとそ思ひしにけは八月のかひもなかりき

落葉

紅葉ちるあらしの山の山もりはおもひもたゝぬ錦をやきる

せきのもみち

〔月詣〕をとは山ぬさと散かふ紅葉はをせきもる神やわか物とみる

皇后宮の女房もろともに大井川のもみち見にまかり
侍しに三位中將にはかにさはることありてとゝまり
たりしかはいひつかはし侍し

もろともに君とみぬまのもみちはゝ心のやみのにしき成皃

九月盡

〔月詣〕暮行をおしむにつくるこゝろ社秋のこよひの類ひなりけれ

冬

あかつきしくれ

をやみては又をとつるゝ村時雨幾たひといふに鳥のなく覽

とをき山のはしめの雪といふこゝろを女院にてよみ
はへりし

杉原や三輪の山へに雪ふりてけふこそ冬のしるしとは見れ

雪のうちのたかゝり

〔月詣〕朝またき狩はの小野に雪降はしらふにならぬはし鷹そなき

旅のとまりのちとり

旅ねするすまのせきやに夢さめて我よすからのとも千鳥哉

山のいへの氷

かけひにはつらゝゐにけり山人の朝け夕けの水いかゝする

戀

戀そめし心のはなの色ふかみ風のつてにもまたしらしかし

經年序戀

八重霞はれぬ思ひはそれなからいくたひ春のかはりきぬ覽

つゝめ共たえぬにひけるあやめ草我心ねそあらはれにける

ほのかに聲をきゝて

きゝもせすきかぬしもなき聲ゆへにあるもあられす山時鳥

なけきつゝかくてやきえむ白雪のしられむ迄の命ともかな

二條院にてこひのこゝろ人々よみ侍しに

さきのよに我に心や盡しけむむくひならすは掛らましやは

依和歌増戀といふを二條院にてよみ侍し

あふことはとをくにみゆるしきしまの道にまとへる我心哉

〔千載〕戀しなは我ゆへとたにおもひ出よさこそはつらき心なり共

〔千載〕思ひあまりけぬへきものをいかなれは戀を命と人のいひ劔

汐たるゝ我やいせおの蜑な覽さらはみるめをかる山もかな

依雨遂約戀

ぬれしとて思ひかへさに思ひしれ身をしる雨はさそ處せき

〔さイ〕艷女遇他人戀といふ心を人々よみ侍し

〔月詣〕とけかたみこゝろと見しは氷室山たゝ我からのつらゝ〔さイ〕成皃

かれ／＼になりにし人の又人に見えけるときゝしか
は

契りしを三年まてこそまたさらめいつしかなりや新枕する

待明後日と云ことを女院にて人々よみ侍しに

頼めをく今日はう月の御秡してきみをみあれの日社またるれ

雨度遂約戀

ありしそのうきを忘れて頼みつることよひもおなし僞にさは

臨期變約戀

さよ衣きてかさねよと契りしを返してはさは夢にみよとや

(此間有脱簡)

上東門院にて戀宮仕妨と云こゝろを

五月雨の日をふるまゝにさはた川其たかはしは名のみ也鳬

閏五月郭公

ことしたに聲なおしみそ郭公をのかさ月のそへるしるしに

山さとに侍けるころ郭公はなくやと人の尋侍りしか
はいたく鳴てあまりなるよし申たりしかは

經正朝臣

今もさは昔もきかすほとゝきすいとふためしに君やなり南

返し

足引の山時鳥いにしへもものおもふ人はいとひやはせぬ

夏虫

夏虫をはかなくよそに思ふ哉これは此よにもゆるはかりそ

夏月

なつのよをうらみもはてし月影の名殘は秋もかくそ惜みし

橘寄(寄橘歟)無常

見むといひし君もまちえぬたち花は花の盛もあちきなき哉

七夕

秋にしもゆきあふ事は七夕のなかきよとてや契りそめけむ

棚機にあひそめ衣ぬきかさんかへる色をはいみもこそすれ

としに待あふことよりもたなはたは中々けふの暮や久しき

雁

斯はかりいとふうき世をいかにして又かへりくる初雁の聲

夕まくれ旅の空ゆく鴈金はふしみの田井やとまりなるらん

入道大納言資賢卿集

梅

むめの花ふきくる風やわきもこかかさねし袖の匂ひなる覽

菖蒲

我宿のつまと頼まむ菖蒲草ひとりねをのみかくる身なれは

雨中郭公

(千載)をちかへりぬるともきなけ時鳥いまいくかゝは五月雨の空

夏夜待月

月まては涼しかり鳬なつのよも山のあなたに秋やきぬらむ

社頭明月

さやけさにいとゝ光をますかゝみくまなき空の月よみの神

月

山のはにいりぬる月をおしむたににしへ心のゆきにける哉

駒迎

望月の駒のあまたにみゆる哉ひきならへたるかけにや有覽

社頭郭公

ゆふかけてまつのをやまの時鳥神のしるしにひく聲もかな

草花

思ひあまりほに出にけり花薄人めもしらすまねきかほにて

虫

いかなれは聞たひことに鈴虫のふりせて聲のかはらさる覽

鹿

しとろなる小萩かもとにをとするは妻をしのふる男鹿鳴也

なてしこ

ひとりねに枕の塵はつもらねとさひしかり鳬とこなつの花

あられ
あはらなる賤のふせやに音するはたはしりかゝる霰成けり
雪
雪降てあとたえにけるおく山にくる人もなきあをつゝら哉
常住心月輪の心を
いかなれは我身はなれぬ月影のこゝろのやみを照さゝる覽
丹州にこもり居のとき述懷のこゝろを
歎きこそおほえの山と積りぬれ命いくのゝほとにつけても
世中の心つくしをなけくまにわか身のうさはおほえさり皃
おなしころ一條三位入道の許へ
今はさは君しるへせよはかなくてまことの道に惑ふ我身を
返し
言のはゝおほえの山と積れ共君かいく野にひこそちらさね
會不會戀
下紐はとけにし物をいかなれはおもなかめしてまた結ふ覽
はしめより
いかはかりさひしかるらん秋はてゝ人もをとせぬ冬の山里
述懷
かへさぬもいかにかはせむ夏衣ひとへに君かゆかりと思へは
郭公おほつかなきにおなしくは都のかたのことをかたらへ
なけくこと侍しとき　かさきの少輔入道延俊巾をくら
れたり
とかくしてねふりをさませ春のよの憂夢はさそ悲しかる覽
返し
春のよのうき夢にたに驚かすいつかねふりのさめむとす覽
ある女房の許よりをくられたり
さはり多みいしまの水のもりこぬやたえけてぬへき始成覽
かへし
心より外に一よのたひねしていしまの水のたゆるなそたつ
故少將遠忌日かさきの少輔入道女に物なとあひくし
て中將のもとへつかはされたりし返事に
年ふれとかきりもしらぬ歎かなをくれさきたつ習ひなれ共
返し
わかれしはけふなり皃と思ふかもさこそけあらめ歎く心は
壽永元年八月六日
入道大納言資賢（前宮内卿有賢之息也）集

右之外集に入歌
有馬のゆにしのひて御幸ありける御ともに侍りける
にゆの明神は三輪の明神となむ申侍りけると聞て物
にかきつけて侍ける　按察使資賢
（千載）めつらしく御幸をみわの神ならはしるし有馬の出ゆならまし
題不知　前大納言すけかた
（新勅撰）立かへりあまの戸わたる鴈かねははかせに雲の波やかく覽
（同）百首うたよみ侍けるにしのふこひのこゝろを
思ひやる方こそなけれをさふれさつゝむ人めにあまる泪は
（續後）こひのうたの中に
限なくうかりし中をこりすまの（にイ）思ひもしらてまた歎けとや

以二冷泉中將爲景之本一。誂二春正一寫レ之。
慶安貳年仲秋上旬

按納言集　長方卿

春

立春の心を

あら玉の年とはきくにいかなれはたゝ同し身のふりは行覽

霞を

春毎に面かはりせぬ霞こそ年たちかへるしるし成けれ

濱邊霞

春霞いくへ重ねてへたつらんえそみくまのゝ浦のはまゆふ

もゝつたふ八十の船路の夕霞幾重へたてつあはの嶋山

よさの海霞わたれるあけほのに沖こく船の行衞しらすも

霧中霞

清見かた波のせき路やこゝならん霞のうちにふねよはふ也

橋上霞といふことを

おきつしほたかしの海の夕霞いつか濱名のはしもみゆ覽

皇后宮大輔三輪のやしろにまうてゝ人々に歌よませしに春のうたとて

なからへは我世の春の思ひてにかたるはかりの花櫻かな

見遠花といふ事を

おほつかな一村見ゆるしら雲やよし野のたけの春のはつ花

皇后宮大輔か春のうたとてよませしに

我心いくしほ春にそめつらん花さへにほふあけほのゝ空

水上歸鴈といふことを

ひきつらねことをたてゝ歸る鴈浪にしらへの聲あはすなる

河邊霞を

たつね行人も道にやまよひけむ霞へたつるあまの川かみ

鶯呼客といふことを

花の香をしるへにやりし鶯のをのか聲にも人さそひける

うくひす

花の木の枝にこつたふ鶯は聲のみならす見まほしき哉

鶯のこゑまたしふく聞ゆなりすたちのをのゝ春のあけほの

高倉院御時殿上人鶯契遐年といふことをよみ侍しに

ねくらとはみかきの竹をしめをきて千世をは君にちきる鶯

百首歌中に梅花を

花は散香はにほひくる梅ゆへにうれしくつらき春の風かな

梅花招客

君ませといひにはやらて梅か香を風の便にまかせてそよる

二條院御時梅花遠薫といふことを

むめの花さかぬ垣ねも匂ふかなよその木するに風や吹らん

若菜

見わたせは若菜つむへく成にけりくるすのをのゝ荻の燒原

こらか手はさぬれやしぬる飛火野に雪も若なもつみに社つめ

わらひ

武藏野のすくろか中のした蕨またうら若しむらさきのちり

高倉院御時宮花初開といふことを

咲そむる雲井の花はいはれとも空にそ千世の春はしらるゝ

花を

散もうくまつもくるしき櫻花咲初てこそ物もおもはね

花の色はあかしとそ思ふ萬代をさなから春になしてみる共

いさゝらは吉野の山のやま守と花のさかりは人にいはれむ

咲てちる時そくるしき櫻花まちしは物も思はさりけり〔雲イ〕

新勅 春風のやゝ吹まゝに高砂のおのへにきゆる花の白雪

年へてもわすれやはせん花盛志賀の山こえせしはその日と
花故にのりに心そうつりぬるいつもしほまぬ色をみんとて
よし野山こするゑに花の散まゝにたえ〳〵になる峯のしら雲
春のうちは花にけかるといはるへき庭をも風の朝淸めする
さくら咲ひらの山風ふくなへに花のさゝ波よするみつうみ
花ゆへにふみならす哉みよしのゝ吉野の山のいはのかけ道

花下忘歸

我をまつ故鄕人は花さそふ風やあやなくうれしかるらん

白川にて花見侍しに花樹臨池水といふことを

みなそこに花の錦をうつしもて又あやをるは池のさゝ浪

池邊花

曇りなき池のかゝみのそこきよみうつしとゝめよ花の面影

雨中花

春雨の糸すちよはみをりいてゝ花のにしきを染るぬれ色

林花半落

庭の面にいまこれはかりつもりなは梢に殘る花やなからん

水上落花

水の面に花のにしきをしきみてゝ波のたゝむに任せたる哉

晩尋山花

暮ぬともなを見にゆかん櫻花あすは青葉に成もこそすれ

遠尋山花

またちらぬ花もやあると春霞へたつる山を幾重とゆらん

池邊殘花

池水のそこにも色のうつらすはたゝ一枝の花をみましを

柳夾水

筏士のこなたかなたへこす棹のしつえをさふる柳はらかな

春駒

もえ出る春はけしきの事なれは草葉そ駒のこゝろなりける
春くれは澤邊のまこもつのくみてなつみし駒も引かへてみゆ
春くれは雲にいりぬと見ゆる哉澤邊にあるゝつるふちの駒

春雨

〔續後撰〕日にそへてみとりそまさる春雨のふるからをのゝ道の芝草

つゝし

くれなゐのやしほの岡の岩つゝしこや山姫のまふ〔く歟〕りての袖

夏

卯花

しら波のこすかとそみる卯花のさける垣ねやすゑの松山
卯花の枝さしかはすほそ道は雪のした行心ちこそすれ

郭公

〔千載〕心をそつくしはてぬる〔つるイ〕郭公ほのめく宵の村雨のそら
時鳥雲井のよその一聲はきかてやみぬといはぬはかりそ
郭公かたらひあかす名殘にはまつよひよりも物をこそ思へ
たまさかにきなくとならは郭公まつよの數に聲はきかせよ

旅宿郭公

ほとゝきすよそになくねのいかなれは草の枕に露こほる覽

皇后宮大輔人々に四季のうたよませしに夏を

たち花のしたてる枝に郭公かたこひすらし聲もしのはぬ

故鄕郭公

〔新勅〕あれにけるたかつのみやの郭公たれとなにはの事かたる覽

五月雨

みたやもりせきそわつらふ五月雨にあせこす計みかさ増りて

夏月

夏の夜は月のみふねにまほあけて天の戸わたる程のなき哉

晩涼如秋

夕されは一むらすゝき打なひき鹿こそなかね秋のけしきそ

二條院の御時蘆葉有風といふ事を

夕されは難波のあしを吹風にこやのわたりそ涼しかりける

關路晩涼

ゆふされはせき風はやき清見潟秋とおほゆる波まくらかな

泉を

岩間もる水のあたりの涼しさにしられて夏の過にけるかな

秋

早秋の心を

秋たちて事そともなく悲しきはおきの葉そよく夕くれの空

七夕

たなはたはたゝよふ雲をころもにて月の光やかゝみ成らむ

二條院御時草花始開といふことを

咲そむる小萩か原を見渡せはまたをりはてぬ錦成けり

萩な

我宿に野原の萩をうつさはや鹿のしからむいろのおしきに

夕されはま萩か下に小鹿ふしたゝゐにかける野邊のけしきそ

をみなへし

わきもこか花のすかたの女郎花たまのころもやあきの夕露

行路秋花

さらすとてたゝにはすきし花薄まねかて人の心をもみよ

萩

おほかたの秋吹風は身にしむにこはよにしらぬ萩のをと哉

すゝき

すかるふすくるすのをのゝ糸薄まそほの色に露やそむ覽

旅亭聞鹿

夕されは尾花かたよる秋風にみたれもあへぬつゆのしら玉

をしかなく山の麓にやとりして心つからそ袖ぬらしつる

鹿

さを鹿の聲そ悲しき露むすふいはたのをのゝ萩のしたふし

月

（續後撰）駒とむるひのくま河の底きよみ月さへ影をうつしつるかな

山端に月まち出るよひのま（をイ）はおほろけならすうれしかり鬼

あかていらん名殘もいとゝおしめとや傾ふく儘にすめる月影

雲はらふたひにひかりそまさりける月をは風のみかく成鬼

清瀧の河瀬にさゆる月影は冬よりさきのこほりなりけり

皇后宮大輔人々に四季の歌よませしに秋を

入月を誰ためなにのおしむらん心はやまのあなたにそすむ

賀茂歌合月を

（千）やをかゆく濱のまさこをしきかへて玉になしつる秋のよの月

又きりを

むこの海にあまの呼聲聞ゆ也霧のあなたにあひきすらしも

八幡歌合社頭月を

神垣や世々にたえせぬ石清水月もひさしき影やすむらん

又旅宿虫を

かやかねに虫恨みける野邊にしもひとりさぬれは都思ほゆ

水路月

とまりするみなとに影の宿る夜は月もたひねの心ち社すれ

林中月

神ますと人はいへ共かしは木の杜の木の間は月のみそもる

池上曉月

生駒山たかねに月の入まゝにこほりきえ行こやのいけ水

九月十三夜によめる

さやけさを今宵と人のいひをきし昔もかくや月はすみけむ

虫を

鈴虫を御狩のたかのをとかとて野邊のきゝすや草かくる覧

忘られてたなれの駒もこぬ宿にいかてをとなふくつは虫そも

擣衣

とをつ道行にしせなを戀わひてむなしきねやに衣うつなり

遠聞擣衣

ねさめしてきけは物こそかなしけれとをちの里に衣うつ聲

紅葉

新古　あすか川せゝに浪よるくれなゐやかつらき山の木枯しの風

妹か袖まきての山をくれなゐに千しほふり出雨や染らん

みむろ山神に錦もたむけせし紅葉の色にあける此ころ

社頭紅葉

筏さほにしきをわけてくたすめりにふの川上紅葉散らし（むイ）

關路紅葉

時雨ふる音羽の山のあらしゆへ紅葉になれるせきの杉（村イ）はら

紅葉未遍

山めくり村雨にして（しくれしてイ）過れはや峯の木のはをそめはつすらむ

きり

難波かたこや夕霧の立ならんいこまの山のみねのむらきえ

柚人は道まよふらしまき向のひはらもみえす霧たち渡る

きくを

長月のきくのした水汲くれはおいせぬくすり誰かたつねん

秋のするに大井河にまかりたりしにもみちいまたち
らす侍りしかは

もみちはを吹もちらさて小倉山峯のあらしの我を待ける

冬

月前落葉

吹たひに梢の風はよはりつゝ月はひかりのまさり行かな

しくれを

音もせぬあしの丸やの村時雨くもるのみこそしるし成けれ

深山邊の楢の葉かしは散つみて上には夜半の時雨をとなふ

海路時雨

松風の音かときけはあはち嶋時雨すくとて笘たつぬなり

家歌合に曉時雨を

みやまへのならのはさはく初時雨幾むらすきぬあけ方の空

羇中雪

まろねするをしまの崎の笘やかたもくつか上に雪もしき鬼

江邊氷を

續後撰　みなと風寒く吹らしたつのなくなこの入江につらゝゐに鬼

山家冬深といふことを

都人花のたよりをまたすともかれぬる草のいほりをはとへ

皇后宮大輔四季の歌人々によませしに冬を

春ならぬ花と見よとやみよしのゝ玉松か枝にふれる白雪

山家落葉
山里に夜半の時雨とき〻つるは紅葉をやとに吹にそ有ける
橋上落葉
かつらきやくめちの橋のとたえにも紅葉を風のわたしつる哉
氷未遍結
原の池の汀はつら〻ゐにけらし湊をさしてつたふあちむら
山路霰
霰ふるゐなのしは山行人のしらたまつ〻むまくりての袖
深夜霰
竹の葉にそ〻や霰の音すなりさらても夢のさむるおりしも
ゆき
[新古]夜もすから床のさむしろ下さえて今朝は高根にみ雪積れり
[新勅]初雪のふるの神杉うつもれてしめゆふ野邊は冬こもりせり
宮木ひく杣やま人は跡もなしひはら杉はらゆきふかくして
行路初雪
道すからふるとはすれと行駒のつめもかくれぬけさの初雪
氷逐日結
難波潟みきは日をへてこほるらしうらはの浪におきに成行
寒草帶霜
[月詣]冬ふかみおふの浦風さえ／＼て霜かれにけりいせのはま荻
故郷雪
[新勅]敷嶋やふるのみやこは跡たえて[つもれてイ]ならしの岡にみゆき積れり
千鳥
おきつしほさしての磯の濱千鳥風さむからし夜半に友よふ
霜
冬の夜は玉のうてなに霜さえて雲井にたつの一聲そする
海路雪
雪のうちに友をたつねし心ちしてあはての浦に歸る舟人
年暮
明ぬとて鳥たになかはけふを又ふる年と社いはんとすらめ
旅宿歳暮
白雲の八重たつみねを暮て行年とともにや我もこゆへき
年の暮の雪の庭につもりたるをみて
庭の面に雪こそふかく成にけれ我身に歳のつもるのみかは

戀部

戀

おち瀧つはや瀬の川もいはふれてしはしはよとむ涙とも哉
うしといひつらしといふもをしなへて心は同し戀にそ有ける
つれなきを猶さりともとなくさむる我心こそいのち成けれ
ひとすちに件を思そ入にけるこひ路はかへるかたやなか覽
[新古]袂にはたえぬ涙も戀にのみくちぬる名をはえこそす〻かね
[新古]戀しなむ同し浮名[みなとイ]をいかにして逢にかへつと人にいはれん
きの國やゆらの岬に拾ふてふたまさかにたにあふ[あひみてしイ]よしも哉
しなの路や木曾のみさかの小篠原わけ行袖もかくや露けき
さりともと思ふ心になくさめていはて過にしかたそ戀しき
誰をかはうらみもすへきうつせ貝心くたくも我からそかし
これもみなむくひある覽さきの世に我ゆへ君も物や思ひし
いひすて〻君か心のつらからはそを恨みても慰みなまし
かくしつ〻あらぬ其よになりぬ共みし俤はいか〻わすれん
人しれぬ心のうちのかねことをむなしくなさぬ行末もかな

君かすむ宿の水際に岩のあらは雲と成てもふれんとそ思ふ
道のへの草はか露となりてさは君かもすそをぬらしてし哉
ありへては如何なるへき我なからつきせぬ戀の果そ床しき
しまきふくひゝきのなたの船渡り心まとふも誰によりてそ
草をなみうたの燒野にすむきしのなにゝ隱れて戀を忍はん
新勅 伊勢の海おふの根を重ねつゝあふ事なしの身をいかにせむ
同 戀をのみすまの汐干に玉もかるあまりにうたて袖なぬらしそ
たつねはやあひつの山の中に又人にしられぬ道やあるらん
おほつかな戀はいかなる色なれはいひそむるより深く成行
淺ましや思はさりしを思ひ出とありし其よのならむ物とは
身にかへむうき名のみかは永きよも同し戀路に猶や惑はん
今はとてしはし忘るゝ時しもあれ何をさりの言葉そこは
戀わひぬ淵にもいらん今はさはこむよを待と契りたにをけ
我戀はこさしのもちにつく鳥の思ひ放てとえこそはなれね
しつかをるみつきの庭の筋よはみ苦しき戀のしけきふし哉
蜘蛛の我いか樣にふるまひて君かあたりにかきもつきなん
難波かた堀江の芦におひまさるよしなき戀に身をくたく哉
あふ坂の山路たつねて人はかり我をゆるさむ關守もかな
なかむれはいとゝ物こそかなしけれくれ行ほとの空の村雲
今は只そらしはてつるはし鷹のいかて雲井のよそにたにみん
我戀は海士のも汐の何なれやからしわりなし人しれすのみ
結ふへき人もある覽わか松のおひ行すゑはいかゝたのまん

初過戀

思ひかねしなはやといひし言葉も逢みてはまつ悔しかり鳧

忍戀

我戀は小倉の山のきりかくれしかありけりとたれか知へき
色深くしたに思はん岩つゝしいはしやいはゝちりも社すれ

二條院の御時山路見戀といふことを

東路やあふ坂山のゆきすりに見し人しもそつれなかりける

初戀

包みてもほに出るけふそ賤かかる秋の山田の否と言なゆめ

行路戀

小篠原わけ行露もある物をあなあやにくの袖の雫や

過在所戀

妹か門駒のあしおるはしもかなそなかこちても暫しとま覽

寄占戀

思ひわひすさひにもするはひ占もあふてふ事は嬉しかり鳧

賀茂歌合に戀の心を

なみた川淵と成てもはては猶あふせにかはるなかれ共かな

八幡歌合寄松戀

波あらふはま松か枝のたむけ草としふる戀に袖そかはかぬ

家歌合に絶久戀といふことを

まちしよに思ひよそへて幾かへり山のはいつる月をみつ覽

ほのかに見たる戀

我せこはまつちの山にすまねとも見し俤やひれふりし袖

不知家戀

我戀はたつね行へきかたそなきうらやましきは三輪の杉村

並面戀

いかこ潟よこの浦はに置網のめを並へてもあはてやめとや
芝かこふ園の瓜生の一つらになる年ならはまくりあへかし

春夜戀

永き日を夜半のけしきと思ひせは獨やいとゝあかし兼まし

悲離戀

夜と共にあふせたえせぬ中川もつらゝゐぬれは通ふ物かは

雜部

紀伊二位八十嶋詣に住吉にて人々歌よみしに

神垣や磯邊の松に言問はむけふをは代々のためしとやみる

賀茂のまつりのかへさの五月一日にあたりたりしに女房の中より申をくりて侍りし

あやめふく五月にかゝるあふひ草永き例にひかれもやせん

返し

けにやけに千世の例となるへきは五月にかゝるあふひ成覧

祝

神風やいすゝ河かみ宮居して幾よろつ代か君をまもらん

德大寺左府うせられて侍りしころ九月盡日三位中將のもとへ申つかはし侍りし

又もこむ程をまつへき秋たにもわかるゝけふは悲しき物を

かへし

身にしみて惜むとをしれ別にし名殘の秋のかたみと思へは

人々のちる日

昔人はもゝの木のはとちり〳〵になり行程はいかゝ悲しき

十月に服になりてつきのとしの春傍官とも加階のときよめる

千諸人の花さく春をよそに見て猶しくるゝはしゐしはの袖

無常

世中を思ひしとけはあたし野に風まつほとのかるかやの露

よの中はうたの狩場にすむ雉のありとてありと如何頼まん

世中はきしのかけ草ねをたえてよせくる浪をまつ程そかし

少將公房出家の時兄少將のもとへつかはしゝ

いかゝせむ我より和歌の浦人も憂世のあみを出ぬときけは

述懷の心を

うき身には時雨もよその物なれや歎くなけきの色も變らぬ

官辭したるよし申侍るつゐてに

おなしくは苔の袂にぬきかへていとひはてつと君に告はや

返し　寂蓮

思ひしる心のみこそあはれなれ苔の袖にもまよふうき世を

皇后宮大輔人々に述懷の歌よませしに

澤邊にて子を思ふ鶴の鳴聲をあまつ雲井にいかてとをさん

おなし大輔人丸墓見にまかるとて其心を人々すゝめてよませ侍しに

塵となる跡とふまてはかたけれと誰もしのはぬ柿の本かは

かのはかに詣て佛事をおこなひて

かきつめし言はの露のかす毎にのりの海にはけふや入らん

賀茂政平か一品經歌よみ侍しに藥草喩品

をしなへて同しみのりの雨なれとうるふ草木はものゝ品々

海路の心を

おきつ浪たかしまめくり漕過てはるかに成ぬしほつすか浦

羇旅の心を

旅に出てみれは悲しも故鄕のみやこの方はかすむ一むら

別の心を

別れつゝ今はこし路の歸る山えそひとかたにおもひ定めぬ

都うつり侍りし頃廣田邊の家に宿して柱にかきつけ侍し

一夜ぬる草の枕もよゝをへて結ひをきてし契りならすや

きしかたの事なとおもひつゝけ侍て

おもひ出のなきにもあらぬ昔こそ忘れぬ夢のなかき成けれ

春の花秋のもみちをみし友のなかはゝ苔のしたにくちぬる

名所

さくらゐの里にて春は花を見て秋はかつらの月をなかめん

うつすとも筆も及はしあはちなるゑしまの石にかくる白波

上陽人

はかなしやむなしき床に明くれて年のむそちの空に過ぬる

李夫人

中々に散なむのちの爲とてそしほれし花のかほもはちけん

王昭君

かくはかりせきわつらはゝ涙川みやこのかたへ流れいら南

楊貴妃

まほろしは玉のうてなにたつねきて昔の秋の契りをそ聞

此一册定家卿自筆之本一覽之次書寫了。外題按納言家集直書之。是按察大納言長方卿詠也。

一本云以二京極黄門定家卿自筆一令二書寫一尤可レ爲二證本一而已。

慶長第三暦五月日　　羽林郎藤［花押］

右一卷以勢州林崎文庫本挍合畢

群書類從卷第二百三十九

和歌部九十四家集十二

權中納言爲重卿集

康暦二年

正月十二日松田丹後守宿所當座三十首

朝霞

光をはかすみの色にさきたてゝのとかに出る朝つく日哉

夕郭公

たそかれといふよりたとる一聲の空に別れぬほとゝきす哉

採早苗

殘りつる苗をも今はうへはてゝかへさすゝしき小田の夕風

川霧

明ぬへき程とはしれとはし姫のまつ夜を殘す宇治の川霧

松雪

ふみ通ふ雪のはしたて跡見えてとたえかちなるよさの松原

後朝戀

道しはの露のひるまも消かへりたへて待へき夕ならぬを

旅泊波

浦風のたよりもかはるよひ〳〵に浪まてうとき夢のかよひち

十七日道場會始

早春

氷ゐしみきはゝ去年の道なれやなみに春たつ志賀のうら風

朝鶯

今朝はまた野邊の霞をへたてにて宿よりよそに鶯そなく

祝言

絶せしな和歌の浦なみ世々の名をかけても遠き敷嶋の道

當座三十首　予出題

霞

春になをうらをかすみの名にたてゝはや遠さかる興つ白浪

春雨

春雨の空をのとかになかむれはこけに色あるのきの玉みつ

螢

水はなをせゝにせかるゝ夏川の井てにあかるはほたる成覽

紅葉

秋ふかみ霧にはなれし薄もみちそむる時雨のほとや待らん

神祇

梅かかも松もふりぬる神かきに猶春しるきめくみをそ見る

二月十四日柳原當座十首

霞

山とをきよそめよりはやかすむ日の色になりぬる春の空哉

梅

雪と見し色にさかりや過ぬらんよそめに殘る春の梅かな

待戀

頼みける心や見えむいつはりといひはてつへき夜半の契を

祝

末とをくこれも吹こせあし田鶴のをのかよゝへんわかの浦風

十八日道場月次會

梅薫風

梅の花とひもとはすも春かせのよその匂ひにうつりぬる哉

春月朧

さすかなをみえける程に光にはあらてやかすむ春のよの月

名所橋

朽にけるなからの橋は我なれやそのあとゝたに知人もなき

當座三十首

湖上霞

けさみれは霞のみをにうかひ出てみきはそわかぬしかの浦舟

嶺早蕨

山はたに立し烟のしたわらひみねにもおにも今そもゆらし

池藤

あやをなすやよひの雨のいけ水におれともうつる藤の陰哉

田家水

これも又秋のかたみの水なれや冬のたな井にみくさゐに皃

三月六日早旦。澁谷遠江入道爲ニ關東使節一下向之次。立寄侍し次に。餞別の義に一首を可ニ詠給一之よし申侍しに

たちかへる道とは聞とたひ衣ゆくをなこりとぬるゝ袖かな

十一日　禁裏　二十首　御短册

柳帶露

白露のむすふとみれはあをやきのいとに玉ちる春かせそ吹

遠尋花

すゝわくるみねまてこえて吉野山雲にいろある花を見る哉

違約戀

木の葉しく宿のかよひち秋かけてやかてそ人はうつる物かは

恨身戀

いはみ潟はやよせたゆむ浦浪をなを身にかけてぬるゝ袖哉

十三日松田張行當座五十首

早春雪

雪はらふ簑しろ衣けふまてもうちきて寒き袖のはる風

野若草

もえわたる野への草はの薄緑うらのみわかき物とやはみる

朝葵

葵草また朝露も玉たれのこすのうへまてけふはかくらし

夏草露

をきあかるつゆの下葉に跡みえて猶道ふかきのへの夏くさ

渡霧

あかし潟霧のまかひに夜をこめてあけぬと浪にかゝる船人

松雪

とへはとていかゝあくへき柴の戸もさらにとちぬる松の雪折

忍戀

なかるとやつゐにみえなむ涙川をさふるたにもしるき袂を

隣家鷄

さもこそはおなしね覺の袖ならめやとにへたてぬ鳥の聲哉

思往事

しのふそよ馴こしかたの人かすもなかはゝすきし昔語りを

十八日道場月次

歸　鴈

をくれしと行こそみゆれ旅にはやたちぬる頃の春のかり金

花

咲あまる色にそひぬる光より春にくまなき花をみるかな

山　家

濁る世を捨ぬと思ふ山の井もなをあさはかにすみや侘まし

當座三十首

野　霞

あまのすむいそ野の草の薄みとりなみもひとつに霞む春哉

湖歸雁

水とりのにほのうみちを行かりも春は霞のしたくゝる也

尋　花

わけまよふ山もいくへの櫻よりあとなき雲のあとを尋ねて

路苗代

なはしろにひくよりあまる山水のするをも河とわたる比哉

曉　鷄

逢坂はまた山あさき里なれは明行鳥のこゑをこそきけ

故鄉松

わひ人となりて住こし故鄉の殘るしらへのまつかせそふく

三月廿三日　内裏御會始

藤花春久

幾千世もあかぬやよひの匂ひよりうちはへかゝる藤の下影

三月盡　將軍家御會始

松有春色　大納言出題

小松原はるにそひゆくひとしほの色をは千代も君そ數へん

同日　禁裏御會　當座二十首題は同

暮春野

いはえこしこまのゝ草のしけみより春さへ深く成にける哉

暮春別

きぬ／＼の名殘にそへてとゝまらぬ春をも人に恨つる哉

暮春祝

よしくれねけふはなこりにしたふ共遠きやよひの九重の春

卯月四日。柳原辨速例侍しをしり侍らて。狀をつかはし侍しに。とふらひ侍らぬよし返しに申侍りしを。やかてもとひ侍らさりしに申たひたりし。みたれゆく心のすゑのとこにてもとはぬやうときはしめなるらむと侍し返事に

さそときく後まてとはて過るまはわれゆへうとき心〔ち脫歟〕社すれ

五日　將軍家　月次御會始

更　衣

いろ香まてけふぬきかへは花衣なにを櫻の名殘とかみむ

郭　公

きかて社うらみはつとも時鳥まつ人かすにいかゝもれまし

祝　言

代々をへしあとにはのこる道なれや又吹そふる和歌の浦風

當座五十首　亞相出題

歸　鴈

見るまゝにへたつる跡の霞ゆへなをすゑとをくかへる鴈金

夕虫

ゆふ露のをかやの下葉みたれてもおもはゝなにか松虫の聲

時雨

たえ／＼に移る入日のかけなから雲もみね行村しくれかな

鷹狩

かり衣なを袖見えてはしたかのをすけにかゝる玉あられ哉

顯戀

名とり河やなせをかけてせく袖のうへにも今は流れぬる哉

逢戀

山といひせきとてさはるつらさをも今あふ坂に忘れぬる哉

眺望

吹上の濱のまさこをきのうみのするまて殘すおきつしら波

神祇

今年こそみゆきも急け君か代にかへる日よしの光しられて

十三日顯阿一廻一品經勸進詠歌成忠勸進也

序品

みよしのゝいはのかけちを殘しても猶おくしるき花盛り哉

懷舊

こその夏そひし卯月の別れよりなきもくはゝる數そ悲しき

十二日土岐會始　油小路宿所

迎春祝言

さらに此春にそみつる雨露をうけゝる君か御代の惠は

當座三十首　予出題

山霞

山のはの雲に雪けをのこしてもかすむはしるき朝日影かな

早苗

時にあふ千町の苗も今日よりや君かよはひの數はとらまし

朝氷

とちのこす流れはみえぬあさあらしの下に氷れる山川の水

十六日木阿張行　當座五十首

山早春

峰高きあまのかく山かすむ日の色にのとけきはるはきに鳬

朝若菜

けさはまた袖にも殘るつらゝゆへ澤のね芹を摘やわけまし

夏草滋

をしかふす夏のをふかみかり人のゆ末もみえすしける比哉

關駒迎

せきまてといそきし道にくるゝ日もたな見えて行望月の駒

聞霰

おやの上のならのかれはをへたてゝも音はさやかに降霰哉

待戀

僞もまこともわかてくるゝまをそもいつ方に思ひさためむ

變戀

うき中にやかて月日のうつるよりなみまてこゆる末の松山

里竹

里までもめくりてしけき深草の竹のはやまをよそにやはみる

廿二日上御所當座五十首　予出題

竹間鶯

吳竹のしけみさえたに夜はこめてあくるまをそき鶯のこゑ

花下送日

櫻かりふりこし雨のやとりよりぬれていくかの花のした陰

夕早苗

あすまてと思ひし苗をとりやらてけふも岡への暮にける哉

野女郎花

かり人のくるもさか野の女郎花靡くあた名はたちそそふ覽

篠霰

さゝのはのうへにくたくを白玉のかすにみえてもちる霰哉

忍久戀

亂れこし袖のもちすり年月をさのみ忍ふといかゝみゆへき

寄國祝

我國といひけむ神のちかひをも今おさまれる御代に社しれ

廿三日　准后御張行百首　大樹參會

簷梅

吹はなをにほひをそへてさそふまもしられぬ軒の梅の下風

郭公

思ひいつるときはの里のよかれゆへとふさへつらき時鳥哉

夜鹿

つまこむる山はいくへとしらね共夜半にそ高きさを鹿の聲

冬月

山川のこほりのうへもよるみえていはまに寒き月のかけ哉

寄雲戀

さえてたつ槇の葉山の峯にさへいさよふ雲を詠めわひつゝ

廿六日久我亭當座十首　亭主出題

更衣

かへてうき物とはいへと花衣ぬけはそ殘る袖のうつり香

無返報戀

しらせはやよせしはかりの藻鹽草かへるなみなき跡の恨を

山家祝

さひしともきく人やなき御代に今出ぬる山のあとのまつ風

五月八日上御所　當座五十首　予出題

初春待花

霞たにまた立なれぬ山のはに花となみえそ春のしら雲

深夜春月

たちまよふ雲はしつまる春のよの霞なからもふくる月かな

晴天聞鴈

しら雲の道ゆきふりは名のみしてあとなき空にかへる鴈金

民戸菖蒲

高きやの軒端よりふくあやめ草民のかまとも五月をそしる

家々夏秋

おほぬさの引手は宿の數なれやみそきあまたの加茂の川浪

二星適逢

恨をはのへも盡さし年にのみくるな契のほしあひのそら

廣澤池眺望

池よりも北なる山の春風になをひろさはの月そくまなき

海上待月

山のはも見えぬしほせに漕出て雲にのみ待夜半の月哉

古渡千鳥

ゆらのとに絕にしかちもある物を行衞をもしる友千鳥かな

忍疲戀

しきしのふ道のゆくてのいなむしろいなは心の契にそしる

從門歸戀

かへりこし浪路そつらき鳴戸よりさし出されし船の行衞は

行路市

道のへのたつの市人くれゆけは何なうるまのしみつ共みす

上陽人

春秋を送るむそちのゆかの上にかく老はつる身をもみせはや

十一日月次御會

山田早苗

小山田になひくさなへの薄煙いほもるかひをゝかぬ計りそ

河五月雨

名取川しはしはせくとみしやなゝはやをしおとす五月雨の頃

忍不會戀

しのふ山心のおくもまたしらてみちなきかたにまよふ比哉

當座五十首　予出題

浦霞

をしてるやなにはのみつの浦つたひみえても霞む蜑の釣船

郭公

時鳥待あかす身もある物をたかふす程のよはのひとこゑ

夜虫

夜さむをは同し恨のきり〳〵すさて社床のあたりにもなけ

井氷

いとゝしくさゆる朝日のあさ緑とちよと氷る山の井の水

逢戀

下紐のとくにつけてもあかぬ夜になをや契を結ひをかまし

曉鷄

曉とゆふつけとりの聲なからなきそめてなと夜を殘す覽

十四日俊成卿九十賀記を管領に書てつかはして侍りし返ことに。八十あまりとゝせにみてるとしなりときくにもならふよはひともかなとはへりし返事に

言の葉にそへてもならへ九十みつとしなりとみゆる齡を

同日上御所　當座五十首

杜新樹

夏木立春あきならぬもりの色をいくたと計り誰かとはまし

郭公

やかてはやふりぬるこゑは時鳥忍ひしよりや世にもれに劔

里蚊遣火

をちかたの里のかやりの薄けふりたてそへぬまに暮る空哉

鵜川篝

うかひたつまつらの鮎の上りせも見ゆはかりなる篝火の影

寄杣木戀

山人のみほのそまとりとりもあへすひくを心と戀やわた覽

寄虫戀

夏虫のもえはてつへき思ひゆへなをきえやらぬ程や見え南

寄鏡戀

はし鷹の野もりの鏡しるへせよ見れはそよそのこともしる〔マヽ〕

寄衣戀

見るめをはかけゝる物をあま衣さのみや人を恨わたらむ

田家風

もる人もしはしまところむ小山田にひたひくはかり秋風そ吹

霧中雲

けふははやよこをる雲をわけ越て跡にそみゆるさやの中山

海眺望

わたの原うすきよそめをなをかけてうかふ計りの淡路嶋山

十六日眞實坊もとよりしろきうりを一たひたりしによみそへて侍し。五月雨にこまのわたりのうりつくりひとつなれとも君かためとやと侍しに返し

露深き駒のうりふの五月雨に誰かはかゝるつらをみすへき

廿一日道場會

簷菖蒲

茂り行簷のしのふをかき分てけふそとはかりふくあやめ草

江夏月

にこりなく涼しきものはみさひ江の玉に曇らぬ夏のよの月

思往事

和歌の浦に哀きえにしうたかたのなき數そへてぬるゝ袖哉

當座

朝更衣

花ころもけさのもぬけを夢そとは如何したはむせみの羽衣

摘葵

願ひこしかたならす共諸かつらかけよみあれの同しかさしに

鵜川篝

河しまの水のなかれをさかのほるほとよりよとむ篝火の影

故郷橘

里はあれて人さへふりし袖のかを猶さき殘すやさのたち花

曉雲

あけぬとや人もみつらん東雲の雲よりみれは山かつらして

六月十日久我殿風呂之次三十首

浦夏月　亭主出題

夜半に出る野坂の舟もみしまゝにゆかてそ明る夏のよの月

隣家瞿麥

花はよもおりてもやらしちりをたにすへしといひし宿の常夏

橋螢

あけてみぬをのかひかりも岩橋の夜のま計りと飛ほたる哉

不同心戀

うけひかぬ中とはみれとくるかたを猶身に賴む浦のあみなは

來不留戀

立かへる礒への波のうつせ貝われのみ今も身をくたきつゝ

無返報戀

をのつからつけゝる迄の玉章はかける葦手のよしあしもなし

野亭閑談

はし鷹のすゝの篠屋の狩にてもとへはそ語るかゝる住居を

仁義禮智信五常　此時出之

禮

親を親と思ふひつしのひまをたにみえける道は猶そたかはぬ

智

ほたるをも雪をもおなし窓のうちに見しや心の光なるらむ

廿三日眞覺上人のもとよりつるのこと申うりをたひたりしによみそへて侍し。たちそひてあつむるわかの浦かせものとかなれとて鳴はつるの子と侍し返しに

わかの浦に音をなく鶴の此世迄かけても波の行衞やはみむ

廿六日柳原當座十首

夕立雲

ふる程になれはいつくも晴まなくみえてそかゝる夕立の雲

河夏秋

みたらしや月日と友に暮はつる夏の御秡はけふや流さむ

契待戀

眞木の戸をさゝぬはいひし末なれとふけて賴まぬ契ならぬを

思往事

いはてたゝさて社すきめ思ふ共さのみしのはん昔ならねは

七月六日注之大塚庄之事御執奏事二條殿へ申侍し狀の
おくに
ひけはこそ君をもたのめしつむへき程をな捨そわかの浦舟
と申侍しをほとへて又おとろかし申てはへりしに武家
時宜無二子細一之由仰られしつゐてにかの御かへし。今
さらにひくさもいはしときにあふ風そたよりのわかの
うら船と侍しに御返し
今こそは風のたよりもしら波のあとに道ある和歌の浦ふね
七日此事已以二萬里小路中納言一御執奏のよし承侍しつ
ゐてに。心ひく道のしるへもうれしきははやしほかな
ふわかのうら船。又たなはたのけふのことよひをためし
にてかきりもあらし行末の空と侍りしに御返しに
思ふ事みち引しほのかなふよりしるへ嬉しきわかのうら舟
たなはたの契にかけて思ふにも君そよゝへむ行末の空
同日松田張行七十首　愚身出題
七　夕
七夕河　此題依夢著出
めくりあふ月のみ船のみなといてにをひても涼し天の川風
七夕庇
七夕のまちにし袖のなみた川けふはあさみにみをやひち南
七夕床
まれにくる秋や夏やかたひさしかたきよるへのあまの川波
七夕墻
まつよひの露の玉ゆか打はらひなをたなはたの袖やぬれ南
七夕桐
あしかきのまちかき中もある物をうとき契のほしあひの空
落そむるのきはのきりの一葉たに秋とそいそくほし合の空
七夕柏
けふは又みつの柏のうらまてもとはてや頼むほしあひの空
七夕山鳥
山とりのひるみる中の契には一夜もまさるほしあひの空
七夕墨
するすみのそのふちしろに秋かけて絕ぬなぬかの梶の玉章
あふ事をまつにかけたるふちしろの墨のなしるき梶の玉章
此墨歌後直之。
七夕筆
秋にとるかちの七葉とみゆるより露に染たる水くきの跡
七夕笛
千々の秋ときこゆるからにふえ竹の一夜もとをき星合の空
七夕矢
あらちおのおへるかるやのうはさしもけふ七夕にぬきてかすらし
七夕布
星合のけふのこほりにほす布のほそくやをりて我もかさまし
同日詠進　禁裏七首
七　夕
風 秋風の立ていくかとかそふれはほとなきけふの天の川なみ
橋 あきにをく露の玉はしかすそへて渡る夜しるき星合の空
川 大川いくよわたりて更る夜のさて明ぬへき程をしるらむ
夜 やかてこそまきるゝ物となりにけれ逢よまれなる星の光は
逢 いつとなく戀になれぬる七夕のあひみることも年に社しれ
女 彥星の迎ふる妻による船のけふはかたほにいかゝ見るへき

[illegible]たきものゝひとりの煙それまてもたちてたむけに匂ふ比哉

七夕七首梶葉

衣あふことのとを山すりの衣をやけふ七夕にかけてかさまし

[illegible]たなはたはけふ暮ぬとや日暮の鳴つるなへに契りまつらん

川代々たえすすみけるほとも天川かけにそしるきほし合の空

風久かたの天の河かせ秋にはや吹こそなかの契なりけれ

舟こひ〳〵てけふとりむくるおも梶にをひてを急く天の川舟

緒彦星のけふくる秋の秋衣をわかはたものとまつやかさまし

琴たなはたの手向の棚にをく琴のひきもひかすも今は逢らし

十三日浦上入道豪覺かもとよりあこたのうりをたひたりしかへしによみそへて侍し

今社はあこたもしるきひとつるになりつゝけたる程もみえ鬼

十四日あふきの繪に相坂の關のわらやにて蟬丸か琵琶をひきはへるを博雅三位立聞侍を書て侍しに

あるしにはとへともあはて雨風の夜半にわらやの調をそ聞

廿日高雄密乘坊宣惠法師もとよりからなしをたひたりしによみそへて侍し。しきしまの大和にはあらぬからなしをつねのたくひとおもはすもかなと侍し返しに

我國のたねにもあらてなるなしの常のたくひと誰か思はむ

廿六日　内裏二十首

荻風。この短册にて書進る。而々懷紙に書進云々。所爲各別不レ可レ然歟。依レ爲二中内裏一之處。可レ爲二思々一由被二仰下一候

籬なるおきのはまては音たてゝしのふによはる軒の秋かせ

萩露

をしかなく秋もいまはのころなれや小萩露ちる山のした風

夜虫

秋風も露も夜寒のあさちふに恨そへたるむしのこゑかな

曉鹿

山ふかき秋の夜ことのね覺をもよそにさためて鹿そ鳴なる

秋夕

身にはそも今さらなにを思ふそとみゆはかりなる秋の夕暮

秋田

急つるむろのかりしほ色見えてはやうちなひくをたの秋風

山月

へたてつるかすにもうなる村雲のあとゝはあはし山のはの月

河月

はやせ河みなきる水にすむ月のなをしく物はこほりなり鬼

擣衣

今そうつ露わけきつるかり衣とを山すりもわたるはかりに

紅葉

はれくもる秋の日影のうす紅葉そめよ時雨のほとはなく共

忍戀

人まとて猶もあふせはなみた川みをにも袖のなりぬへき哉

契戀

頼ましなつらきなからの末の松またこすほとの浪はみす共

待戀

しるしなき夜半とも如何かこたまし我いひかけし蜘蛛の糸

會戀

さよ衣かへす袖よりみし夢のいまうつゝにもなりにける哉

別戀

鳥のねもはやいそく夜の明暮はしはしとしたふ袖の別れそ

絕戀

かこつへき夜かれを人に任せ置てつゐにも中の絕にける哉

恨戀

うらかるゝほとを限りのくすのはに猶身をしらぬ秋風そ吹

浦松

波をさへこすゑのをとに吹そへて松のみひゝくよさの浦風

野旅

天さかるひなのあらのゝ荒き風いくかを袖にふせききつ覽

祝言

さらに今吹もつたへし風なれやあしはら遠き世々の言のは

此二十首。八月二日御碁の御勝負の時參上。愚作事凡不レ混レ俗。每首言語道斷。非二御批判之限一なとまて。預二叡感一之條。道之面目何事如レ之哉。

八月十二日四條道場月次會

鹿

さをしかのたつきしらるゝ杣方に又此くれもつまやこふ覽

月

ほしわふる袖のなみたを契にてなを身の秋は月そなれ行

竹

たのみなきわか行末もうきふしのしけきにしるき宿の吳竹

當座二十首

野女郎花

今はたゝおらてや見まし女郎花なひくさかのゝ風に任せて

夜虫

しはし猶こゑもよはらてきり〳〵す鳴そふ程の夜寒なり鬼

里擣衣

手すさひといはゝいふへき里人の月待ほとのきぬたなり共

夕鐘

けふまての命をあすのたのみにてきゝのみきつる入相の鐘

七月十二日兼日分。今日一座披露

初秋風

いふき山ふけはさせもか露なからなにそ思ひの秋のはつ風

野草花

山風のをのゝ秋はきみる人のなくてさかりのすきぬへき哉

古寺松

はつせ山やとゝふ花はむかしにてよその木すゑに松風そ吹

八月十五日上御所將軍家當座三十首。此題當日早旦以二濱名備中守一承候間。出進畢。

水邊萩

玉川のなみと露とにうつりきぬ野路より染るはきか花すり

雲端鴈

あらし吹秋の日なからむら雲のたえまに寒きはつかりの聲

竹間月

葉わけよりもるかけしるく吳竹のふしみの月に秋風そふく

擣寒衣

秋さむき霜夜の床のから衣うちさへあかす比にもあるかな

雨後紅葉

下紅葉またひぬ露にしくれつるほとよりも猶いろやそふ覽

每夕待戀

月をみぬ夜半はあれとも頼めこしすゑを賴まぬ夕暮そなき

會不遇戀

立歸り又をとつれはもとの身になしつるものと人や思はむ

厭形見戀

今はうき形見のうらの藻汐草かくよるへとは何留めけむ

恨身戀

身の程を思ひしるにもたかうきになすへき中の事のはそなき

田家水

秋はつるたな井の水のみくさよりはや住のきしいほぞ見え行

同日夜　禁裏　三首

薄暮待月

山のはの暮るゝまて祉いそきつれ出よ今宵のあきの月かけ

深夜見月

いねかてのよ寒もしるくかたしきの袖に更ぬる月のかけ哉

曉更惜月

月影のかたふくかたの山かつら雲にうらみの殘るのみかは

十六日　禁裏當座三十首。大樹參上。同夜九打程に。別當井万里小路黄門可ㇾ參之由送狀候間。則參上。

遠山花

よしの山松のはとをきよそめより猶はなしるくかゝる白雲

藤交松

咲かゝる松には花をなをみせてうらはすくなき春の藤なみ

庭夏月

霜と見るひかりに急く秋の色を月よりそふる庭のまさこち

杜納涼

かけふかきいく田の森のすゝしさをとふへき比と秋風そ吹

草花露

まねくかとみれはま袖にをく露をはらひて立る花すゝき哉

野外月

さゝ葉しくゐなのゝ露の深き夜にさも袖ぬれし月をみる哉

寒草霜

さかき葉のやたひの霜のかすまても今やみむろの谷の冬草

寄岡戀

我中はむかひの岡の草をたにしらぬゆかりと問やわひまし

寢覺鷄

いそくかとおもふれ覺の手枕にやかても鳥のこゑをきく哉

廿一日宗久坊張行。十鏡齋西

寒夜雪

やとしなき旅ねに雪をかたしきて月も夜深きにしの山もと

廿六日上御所將軍家當座五十首

竹裏鶯　予出題

世にたかきこゑそ聞ゆるくれ竹の枝より移る春のうくひす

野雲雀

野邊とをみ霞むみとりの草の上におりてはあかる夕雲雀哉

籬欵冬

やかてはやゐてそと見ゆる山吹のまかきは里のみちへ（しる歟）成鬼

早苗多

つくはねのすそはをかけて立田子やしけき惠の早苗とる覽

江夏月

なかれ江の波のよすかにおりしきて月影涼しいせの濱おき

萩如錦

まはき原露の白地をゝりかへてむらさき深きからにしき哉

行路薄

花すゝき分ゆくまゝの道のへにかへるともなき袖のあき風

曉擣衣

うちあかす數は幾夜そ唐衣しちのまろねのほとはなけれと

落葉深

そよいかに散しく庭を幾重ともしらぬ木のはの上の通ひち

面影戀

思ひ出よまのゝかや原みたれわひみし社とをき契り成とも

關路鷄

たひ人の逢坂まては夜をこめてきくよりあくるとりの聲哉

羇中友

やとなくはのへの草葉を枕そといひてたかひにいそく暮哉

獨述懷

うき程そわきてしらるゝ君か代にあひて憂へん我身ならねと

九月九日　禁裏菊十首

山路尋菊

おのゝえのくちにしあとをいつく共君にやとひて白菊の花

菊浮河水

谷川のなかれに遠きいほとせをなをせく菊の花のしからみ

菊　花

咲うつむみかきのきくの白妙に雪ますくなきこゝのへの庭

菊匂留袖

いく秋そつむよりうつる袖のかも花にかはらぬけふの白菊

菊漸色々

さきそめし時よりのちの霜の色をまた染かふるあきの白菊

菊籬契戀

うつろはむ心のほともしらきくの秋なき時やさかは頼まむ

菊下待戀

とへかしな菊のまかきの袖の色もはやくれはつる心盡しを

對菊恨戀

みるもうし身をあき風の吹上にうつろふきくの花のあた波

毎秋愛菊

霜をへしいそちの秋のしらかみになれぬる菊の色そゝひ行

翫菊延齡

千代ふへきよはひを花にとりそへてかさしも遠き秋の白菊

十二日　管領張行當座五十首

簷荻風

ねやちかき夜半をもしらす秋風の吹はとそよくのきおき原

川上月

あなし河をとは山へにひゝけ共こほれるものゝ秋のよの月

湖朝霧

まのゝ浦のさゝ浪なからほのみえてけさや尾花の袖の薄霧

故鄕鶉

すまはこそならへてもみめふか草や鶉の床のよゝの故鄕

寄風戀

思ひわひみぬめの浦にかこちても其をとつれはよその汐風

寄原戀

さゝ枕ゐなのといふもしるき哉ふしはらとき中の契に

寄江戀

身を盡しなをも戀ちのふかきえに今はたくちぬ程やしられむ

曉更鐘

ふけすくるよもきか（の歟）かみの霜にたにひゝきは急く鐘の音哉

十三夜　内裏五十首　御短冊

月前露
なひくかとみゆるあさちの露なから月まてもろき秋風そ吹
月前野
花にこそみなうつりにしみやきの丶露をもらさす宿る月哉
月前紅葉
龍田川月のこほりのしたもみちちらても冬の色は見えつ丶
月前別
めくりあはむ程をはさこそ頼ともまたやは月のきぬ〳〵の袖
月前蓬
うつら鳴秋社まの丶かやむしろ月にもいと丶しき忍ひけれ
月前笛
心あるあまのたきさし夜ははれて月にのみふく秋のうら風
十五日久我亭　當座二十首
薄似袖
暮ぬるかあまのいその丶花すゝきかへる袖まて浦風そふく
海上月
月もこよひすめる今宵かわたつ海やとよはた雲のあとの浦風
初忍戀
誰にいまとひてかをかむ泪川けふよりかくる袖のしからみ
不會戀
こひしなぬ命のま丶になからへてつらき心の限りをやみむ
名所松
船よせし神代のなみのいろ〳〵をみとりに殘す辛崎のまつ
十七日久我亭　當座二十首
暮秋露
霜こほるあさちか上の露にたに秋のかたみは殘しかねまし
暮秋虫
鳴よはる根もさそなきり〳〵す夜さむの床の秋のくれかた
暮秋擣衣
今こむといひしやまちて長月のありあけまても衣うつらん
寄枕戀
空にたつちりにやあらんしきたへの枕にさのみ積りはつ覽
懷舊多
さらに猶みしかすそへてなき人の名殘わすれすぬる丶袖哉
皆以卒爾遣歌也。可憚々々。
十八日道場月次會
月前擣衣
いそきうつよそのきぬたもある物を夜寒もしらす月をみる哉
紅葉山錦
たつた姫しくれの跡にをりたて丶露にとさらす唐にしき哉
海邊眺望
しほかまの浪よりをちを猶わけて雲にしまそふ曙の空
當座二十首
籬草花
たちこもる霧の籬の名殘よりぬれて露しくをみなへし哉
故郷虫
蓬生と成にし庭のふる里にたかこむあとを松むしのこゑ
關駒迎
引とむる程とそみゆるせきの水うつれるかけのもち月の駒
水郷葦
ひきつる丶難波の舟のつな手ゆへしはしかたよる葦のむら立

十月一日松田宿所當座三十首濱名張行云々

初冬嵐

神無月時雨もあへぬ空よりもあらしにしるき冬やきぬ覧

浦冬月

暮るまてさえつるすまの波かせを夜半の光とこほる月かな

疑契戀

たのましといふも契は殘りけるうき身にしたふ中の言のは

會増戀

から衣かさぬる夜半を待えてもららなきなかにぬるゝ袖哉

後朝戀

ことのはをみわくはかりもなかり鬼心のやみのけさの玉章

被厭戀

鳴子ひく秋の山田の鹿なれやちかつく程をいとはるゝ身は

五日久我亭　當座二十首

夕落葉

山人のかへさの木のはふみ分てそよくともなき□

池水鳥

ひろさはやたゆたふ波の隔ゆへかつかぬにほそしはし隱るゝ

雪埋竹

忘れはやあくるひかりにたゆみなて今朝迄つゝく竹の雪折

恨戀

憂ほとはいつそといひて聞せまし我身かひなき中の言のは

述懷

いかにせむしらぬさかひはいりやらて猶身にあさき敷島の道

七日庭のきくをおりて中院大納言もとにつかはし侍し

に短册にかきてつかはし侍し

うつろはぬ程にと思ひししら菊の花を冬にもおりてける哉

返し　中院大納言

手折ける心もふかき色なれはあたにはをかし露のしら菊

十八日道場月次會

落葉

たつ田姫冬にすみなす庵より紅葉のゝきは風もたまらす

寒草

枯はつる色とみしよりをく霜のしたにすくなき庭の冬くさ

夕鐘

露きえむゆふへはいつとしらね共ちかつく物を入相のかね

當座三十首

杜時雨

さのみ世を歎きの森の村時雨たゆむひまともぬれぬ袖かは

橋上霰

駒わたすせたのなかはしさゆる日にとゝろくはかり降霰哉

田家雨（稻たはねをうちかへしてほしたるをはさかをると云なり）

山かつのをしねさかをりほしあくる程に日影の何しくる覧

名所瀧

尋はやいくたをとひしたよりにもなをみぬかたの布引の瀧

旅泊浪　松田許にて書之

浦風のたよりもかはるよひ〳〵の波まてうとき夢の通ひち

廿日松田本安なとあひともなひて仁和寺の權香僧都坊

のもみちみにまかりて侍りしに當座卅首に

時雨雲

浮雲のたえまの日影それなからもりてくもらす降しくれ哉

尋網代

月影はいさよふ程になりぬ共とはてやゆかんちの網代木
　閑上霰
木の葉ちる閑まおろしはしつまりて更に降よの霰をそきく
　寄坂戀
思ふ事なるみもしらすしほみ坂我ゆへからき中のへたてに
　寄虫戀
しらせはや猶身は人にひきまゆのくはのはかくれ思ふ心を
　名所松 有注
和歌の浦の松のふるきの跡にきて猶ことのはの色をみる哉
　廿三日本阿張行當座三十首
　檜原霞
きのふまて曇らす見えしまきもくのひ原をこめてたつ霞哉
　五月雨久
槇のはのこけも今こそ生ぬらめをすての山のさみたれの比
　鵜川篝
かゝりさす田上河の山かけはすきても猶やゆふやみのそら
　靜見月
秋かせのふけ行まゝにすむ月のかけを心になしてみるかな
　寒草處々
冬枯ののへのえもきのむら／＼に霜もたえ／＼結ほゝれつゝ 〔よ敗〕
　寄舟戀
みを浦の蜑のはしふねむやひきてこかれもやらす戀や渡覽
　寄鐘戀
契こし心のするにひゝきゝていまはとたのむいりあひの鐘
　寄琴戀
手なれにしかたみの小琴ひき別れあらぬ調に音をやそへ猿

　行路市
わきてわれとふともなくて大和路に立てしみわの市をみし哉
　廿四日松田張行樹玉庵歸洛 題源房一座
　雨中落葉
染はてゝ散ける木々の紅葉ともけふの山路の時雨にそしる
　氷留河流
せくと見し程よりもなを音羽川つらゝによはる瀬々の岩浪
　惜別戀
きぬ／＼の袖の移り香よそ迄はしらぬ名殘を慕ひわひつゝ
　廿七日大方張行當座二十首 松田経資春理等参入
　篠上霰
たまりえぬ霰なからに吹ませてをさゝにとまる風のをと哉
　夕鷹狩
きゝす鳴夕かりをのゝ入日影今ひとよりはあはせてや見む
　立名戀
しるときく枕の外の塵とてもさてたちやまんうき名ならぬを
　被忘戀
今そけに殘るとはしるあはてけにはなれし程の人の面かけ
　寄神祝
みかきけるものとそみえむ玉津嶋たゆたふ浪の程はあり共

群書類從卷第二百四十

和歌部九十五家集十三

亞槐集卷第一

夏日同詠百首應　製和歌

正二位行權大納言臣藤原朝臣雅親上

春二十首

立春

こほりとく池のさゝ浪今朝みえて水なき空も春風そ吹

山霞

まさかきのかをかくはしみかく山に立や霞のあまの羽衣

海邊霞

行船の波路へたてゝかすむなりをしてる宮のあとも遙に

鶯

春來ぬと人たにいはぬ山里にはやくそつくるうくひすの聲

野若菜

若菜つむ袖はぬれつゝ春日野やしのふにはあらぬ雪の亂れに

梅風

軒ちかみたゝ香はかりに〔はイ〕さそひ來て長閑に匂へ梅の下風

柳

今そあかぬまゆにこもれる青柳の春のけしきに打なひく比

春月

雲やまたそれともみえす迷ふらん思ひしよりも霞む月哉

春雨

つく／＼と我ころもてもほしかたく霞にくらす春雨のそら

歸雁

いとせめてよる歸るらむふる里のこひしき時の衣かり金

早蕨

岩かねにのこる薄をつかねをにたえ／＼もおるはつ蕨哉

栽花

つきて吹花の心をとにかくにかねてそうふるあかぬ餘に

尋花

ちきり置て思ひこそたて花あれは入し山路のこその舍りに

盛花

あらし吹春の朝けのみねの雲なをこりゐるは（やイ）花さかりかも

揷頭花

狩人もあかぬ陰とや交野なるなきさの花の枝をおりけむ

落花

ちらすとて古郷人の來て見しも〔ゐ見しイ〕歸るよし野の花そかひなき

苗代

小山田もけふはらるほふあめつちの心かはして種やまく覧

歎冬

いはぬいろと名のりて咲る山吹の籬はましる花もなきころ

藤

さく藤の花のしなひに吹むすひ松にもよはき風のをとかな

暮春

あたら世の花ものこらす春くれてわつかに霞む有明の月

夏十五首

更衣

色も香もかふれはつらし散とみて有へきものを花そめの袖

葵

むら雨に暮る日かけは見えわかて露にかたふくあふひ草哉

待郭公

うちわひてぬるほともなく時鳥めをさましつゝさらに社まて

郭公遍

ほとゝきすをちかへり啼明かたは猶らとまれぬ短夜のそら

菖蒲

五月まつやとのいつみの水淸みしけるあやめの色そすゝしき

橘

いつよりか庭も木立もふるさとに軒端うつもれ匂ふたちはな

五月雨

草つたふ雫もおちて岩そゝくたるみ音そふ五月雨のころ

夏草

かりにくるおのこたになき夏野哉いとゝ深草道まとふまて

夏月

出るよりかつみなからにしたはれてしつ心なきみしか夜の月

蚊遣火

たつ煙さなから千賀の鹽かまのからき思ひに蚊遣たくみゆ

螢

ともし火に身をやく虫のはかなさをよそけに見ても行螢哉

池蓮

ぬきとむる池のはちすの糸はあれと浮葉の露そ玉と亂るゝ

夕立

雲おほふ空のみたれの程もなく日かけ見えそめすくる夕立

納涼

涼しさにふみからすまてかよひ來ていとゝ夏なき森の下草

六月秡

しるしらすけふは川邊に小車のひく手あまたに流す大ぬさ

秋二十首

早秋

秋にしもかさねぬ袖は涼しさのことはりしるき初風そふく

七夕

まれにあふ契りうき木の朽ぬ名を天の川せにいつ流しけん

荻

今さらにうきゆふへかな荻のはにうへし春より待し秋風

萩

見せはやな立田姫にも眞萩原時雨のそめぬ秋のにしきを

女郎花

をみなへし野守（寺にイ）のかよふ道にしもなをさはり有名にや立覽

叢虫

なきあかす草の原をはとはしとも思はぬ誰をまつむしの聲

初雁

萩のうへの露もいかにと思ふ夜にくる初雁の聲をそへぬる

田鹿

これをさへいとふならひよ小田守の〔にイ〕なくさみぬへき鹿の聲哉

秋夕

おりも時も心あらはやかこたまし思ひそ秋の夕くれの空

山月

雲のちり雲の上まておさまりてはこやの山に月そさやけき

橋月

明行をかきりの影もいは橋〔のイ〕によな／＼おしきかつらきの月

浦月

月見つゝとてもあかしの浦波に嶋かくれ迄行舟もかな

社頭月

君をまもる賀茂のやしろに宮人も都のかたの月やみる覽

古寺月

月そすむにしより出しこの寺の淸くすゝしき光かはして

曉鴫

あかつきの涙のかすも百羽〔のイ〕かき鴫たつ澤やかたしきのとこ

擣衣

うらみてもとふ影見えぬ月草のたかすり衣うちすさむらん

河霧

たかせ船うきていつくに迷ふらん立川霧の深きあさけに

菊

花の上のひかりやそふる葉に置てさ〔そイ〕たかにみゆる菊の白露

紅葉

名もしらぬ秋の太山の木々のはも人こそとはねいろ深き比

九月盡

立かへはあすものこらし行秋のかたみを露の袖にをくとも

冬十五首

初冬

みよし野の山かせはけし神無月いふ計なる春もしられて

時雨

なかめわふるこゝろの空を夕時雨むなしき色に染て過なり

落葉

あれまさる葎の宿の木からしに散しくものは落葉也けり

霜

日にそへてもとくたち行冬草におもくもみゆる霜の花哉

寒蘆

霜かれてみなと入江の舟の音もあるか無かの蘆のむら立

冬月

さえとをるねやより出てみる月に袖の氷もふかき夜のかけ

氷

汲〔め〕は濁る野中の淸水かけたえてもとの心にこほる比哉

千鳥

妻とふや夜はの千鳥もさゝ波にみるめなしてふうらみてや鳴

水鳥

なつみ川山陰さしてゆく鴨やこほらぬさきに浮ねさたむる

網代

たきすさむ網代のかゝりほのかにて明かた寒き宇治の川浪

嶺　雪

うちはらひなつるとそみる高砂の雪にこもれるみねの松風

庭　雪

野分してみたれし秋の花の後雪もふまゝくおしき庭哉

鷹　狩

つみうへき心もしらて御狩野になれ行鷹のあかぬふるまひ

炭竈煙

深雪よりさきにつみしは炭竈の煙にみゆる爪木なりけり

歳　暮

おしからぬ身におしむこそ哀なれさすかに暮る年の名殘を

戀二十首

初　戀

これそまよふ戀路なりける行末をあやふみなから思ひ立身は

忍　戀

我忍ふおもひににたる世かたりは〔をイ〕きかしや涙こほれもそする

新　戀

いとふゆへ哀ときかは戀せしのみそきといひて猶や新覽

聞　戀

おほつかなまたみぬ松からら嶋にむへ袖ぬらす波のよす覽

不逢戀

かくて我思ひきえなは人やまたあまりつれなき名を殘さまし

契　戀

行末をちきる心の誰なれや〔はイ〕あす知らぬ身を又わするらむ

逢　戀

いかならん折かと思ふつらさをも逢夜にまけて言す成ぬる

別　戀

人のせくなみたもかなし限りとや此きぬ〳〵を思ひなす覽

後朝戀

おきて出し〔いてしイ〕床の朝けのうたゝねにうつゝの夢そ名殘悲しき

遠　戀

おもひかね今宵もやとそ打わひし雪も夜深き宇治の渡りを

馴　戀

いたつらにあけのそほ舟さす棹のみなるゝ袖を幾世ぬらさむ

顯　戀

くちかためいふきの山の影草にむすひし露も色に出にき

増　戀

あしへより滿くる汐のうら風にそよとも人の思ひしれかし

僞　戀

人のうきいつはりよりの我涙これもやあらぬ色にしほらん

悔　戀

したひしもおなし涙のさきたゝぬくゐの幾度袖ぬらすらん

經年戀

なつかしきふるき枕をあたにやは年のみとせの後もかふ〔へき〕

忘　戀

うへてみる物とは聞しわすれ草まさしや君か宿にしけれる

思

はれかたく思ふおもひにたきそへてたつともみせぬ夕煙哉

片　思

深き夜につかひはなれぬ鳥の音も獨なくなそ友と聞つる

恨

思ひくまなかりし中にいつよりか恨を深くかくしきぬ覧

雜十首

曉

老か身はねてもね覺の物うきに嬉しくあくる鐘のこゑ〳〵

名所松

としふれはいく世の人もよそへこしよはひや獨り武隈の松

窓竹

風わたる竹の末葉のおきふしに窓のひかりや晴くもるらん

山家

雲きりのしめりも深き山里ははやく朽ゆく板ひさしかな

田家

稻葉もるかり庵よりやすみなれて田つらに賤が里をしめけん

羇旅

けふはまつみやこ離るゝ道そうき鄙の野山の末はしらねと

述懷

代々の跡も其名はかりの身ひとつにうけて賢きみことのり哉

夢

あたなれや末みぬ夢のうきはしは絕て思ひをつかぬよもなし

釋敎

ありときく御法の舟の〔にイ〕こき歸り我もやつゐに人をわたさむ

祝

神もまた神にや祈るいやつきに君のきみをし守る世なれは

右文正元年爲二撰歌一所レ獻之百首也。二月中旬引接院贈内府（親光。于時權中納言。）爲二勅使一。持二向院宣一畢。家之光輝世之稱美難レ述二筆端一。猶前後之子細別記レ之。

亞槐集巻第二

住吉社法樂百首

春二十首

立春

春のくるあしたつの音もいつしかにのとかなり皃住吉の濱

子日

君に千代ちたひも契れ姬小松たかためならぬけふの子日に

霞

をしなへて〔こめイ〕春をつゝむと見えてけり霞の衣袂ゆたかに

鶯

うくひすの舊巢より鳴初音こそ谷には春をまつしらせけれ

若菜

つむ人をけふは野へにや待つらん雪まを分て生るわかなも

殘雪

ふみ分るあとたにきえす雪さえて春のあさくもみゆる庭哉

梅

道のへの竹の内なるしのやまてあるし床しくにほふ梅か香

柳

みかくれぬ玉藻とみえて川のせになひく柳の陰そ移れる

早蕨

山人の柴のおもにゝ家つとをあはれにつくる初わらひかな

櫻

ものゝふもいとま有ときの櫻かり花より御代の盛をそしる

春雨

つく〳〵となかむるうちに露おもく草木いろそふ春雨の空

春駒

花すゝきほさかの駒の春はまつわか葉になれて荒まさる頃

歸雁

こし秋の鴈の玉章返りをは誰にか忍ふかすみかくれに

喚子鳥

みやま路にはるの日くらし呼子鳥我かと行てとふ人やなき

苗代

すみよしの岸にはしめの苗代をいはひそ初るかみの宮つこ

菫菜

これもまたいかなるねより紫のいろうすくこく菫咲らむ

杜若

池水のみさひの中に花も葉も色のまかはぬかきつはたかな

藤

松かえにはひまつはれて咲藤はよそにかへらぬ浪をかけ鳧

歎冬

花さくら散にし後は籬より八重咲いつる庭の山ふき

三月盡

けふとてもめに見ぬ春をしたはめや月日を何に數へしりけん

夏十五首

更衣

夏きぬときのふにかはる風もなし薄きをしらぬ墨染の袖

卯花

賤のめかをるてふ布を〔にイ〕花の色のひきてさらせるうつき垣哉

葵

葵草すたれのみかは手すさみにふるき文にも卷そへてけり

郭公

ほとゝきすいかにせよとて過ぬらんなく一聲に月を殘して

菖蒲

いろ〳〵の糸に結へるあやめ草老すしなすの玉のをなれや

早苗

おそくとく稻葉の風や聞えまし昨日もけふもうふる早苗に

照射

みしか夜に分入山の松の火は鹿まつほとやひかりすくなき

五月雨

さみたれはめくる月日を心あてにわくへき空の光たになし

盧橘

雨すくる軒の橘はなちりてすゝしくかほる露のゆふかせ

螢

なをもゆるをのか思ひをけつほとの草葉の露にやとる螢も

蚊遣火

待いつる有明の月にかやり火の煙はかりのうきこともなし

蓮

ぬきとめんはちすの糸はあやなくて浮葉に露の玉そ亂るゝ

氷室

ときわかぬ名にはたてとも松か崎夏はしられて氷室もる也

泉

むすふ手にとる計なる秋なれや月も泉に影をやとして

荒和秡

ちりの身もけふ人なみの御秡川神の光をかはささらめや

秋二十首

立秋

いやましに音やそふへきあしへよりけふ吹初る秋のしほ風

七夕

天の川いつよりさてもひこほしの人にしれつゝ戀渡りけむ

萩

花もちり露もこほれん萩かえのおもくみゆれと風は待れす

女郎花

秋かせのつらき名にしも女郎花なとなひかむと亂れそめ劔

薄

ゆふ露〔風イ〕のしのに露吹しのすすきほに出すとてみえぬ秋かは

苅萱

枕にもかるかや人のひきむすひ跡みたれたる野邊のあさ露

蘭

松かえに春はみしなの藤はかまおなし木陰ににほふいろ哉

荻

ふかぬまもさすかさひしき荻原にうきをまちとる秋風の音

鴈

くるかりよならの都をわすれすやいまの雲ゐを過て行らん〔はイ〕

鹿

こゝろをは聲きく時そ思ひしる深山の秋に鹿もなくなり

露

千草なる花にさまへうつろひてをのか色なき野への露哉

霧

ゆきかふや遠かた人の聲はして夕霧ふかし秋の山もと

槿

うへ置て籬にしめを夕影もまたてしほるゝ花そかひなき

駒迎

夕まくれ道たとへし望月の駒まつほとの逢坂のやま

月

秋の月いかにすめはか物ことのあはれをそふる影となる覽

擣衣

あき風の身にしむまゝに打すさむ衣は夜寒猶やかさねん

虫

神やきく聲うちそへて更る夜にきねも袖ふるすゝむしの鳴

紅葉

露しくれ染すはありとも紅葉葉は秋の深きに色やみえまし

菊

秋のきくうつろふ後の霜ふかみしけくもかはる花の色かな

九月盡

露になれ風にうらみし秋の袖けふを名殘と猶しほれつゝ

冬十五首

初冬

秋たにも草木しほれし山風のをとあらましく冬は來にけり

時雨

高嶺より雲をあまたに吹分て風もむらへ行しくれかな

霜

かたそきのひまをそ思ふかかりねする遠里小野の霜の枕に

霰

あらし吹音にこゆるはさゝのはのみやまよりふる玉霰から

雪

冬は父ふもとの山の白妙にゆきめつらしくみゆる富士の根

寒芦

枯はてゝわつかにのこる村芦のなひかぬ霜そさむきうら風

千鳥

淡路嶋やまの端ちかく月更てしきつの浪に千鳥なくなり〔つまとふイ〕

氷

岩間ゆく水のしら浪音たえて氷はけしき河風そふく

水鳥

我身こす波はなけれと池水につかはぬをしの氷にそなく

網代

身ならちと思ひもしらて網代木に年なみよせて守もはかなし

神樂

神と君こゝろやすめる赤星のひかりも聲も折にあふよは

鷹狩

あらたかの心とりかふ山口にしろくそみゆるけふの御狩場

炭竈

尋常のさとの煙のおくに猶ふかくみゆるやをのゝすみかま

爐火

燒すさむよひの名殘を埋火とたのむもよはき影と成にき〔つゝイ〕

除夜

折にふれ春秋をたにしたひこし年のわかるゝ夜をいかにせん

戀十首

初戀

くるまにも餘るためしの戀草をけふつみそむる袖の露けさ

不逢戀

せめてたゝいまの命を後の世の逢にかふとも身を惜まめや

忍戀

つゝみかぬる涙を袖にゆるさむと契らぬ暮をまたぬ日もなし

初逢戀

行すゑもまた難からんあふ坂になを袖ぬらすせき川の水

後朝戀

きぬ〳〵につきせさりける我涙をとつれもなきけさそ知るゝ

會不逢戀

人つてに契りやはせしとはかりも今一たひは聊つ夜もかな

旅戀

たゝ一夜はかなくかはす旅枕いそちを經ける夢になさはや

思

我涙せきかへさすはかくはかりむねに思ひの淵もたゝへし

片思

戀すてふならひは君よしらすとも思ふ人をは思ふ世そかし

恨

とにかくにいひつくす哉恨をはかくすをはつる心ならねと

雜二十首

曉

明やらぬ夜をなかしとて歎く哉よはひみしかき老のね覺に

松

住の江にあまりふりぬる松の年きしなる草にとふかひもなし

竹

かしこきかあとをもしらぬ山賎もうへてそ竹の陰頼みける

苔

すまてとしふる郷となる我やとや都のうちの苔の通ひ路

鶴

誰にかもあひかたらはん老の鶴忍ひかねてはよるもなけ共

山

くれか〻［おなりイ］り明行山にむかふとき春と秋との色もおもはす

河

瀧津川かくやなかる〻木々の露山の雫のつもるはかりに

野

心ありて誰かやとりをつくりをく行なやむへく遠き野中に

關

あらき風關ふきこゆる音絶て須磨の浦は〻白波もなし

橋

いまは世にあしまに見えし水莖のあともなからのはし柱哉

海路

のとかなる浦漕出るおほふねのあとなき浪も跡は見えけり

旅

おり敷てさぬる山路の椎柴に故さとこふる涙もりつ〻

別

花もみちありとも時をうつさめや歸りこん日をちきる別は

山家

このさとは庭に鹿ふし山ひこも近く答ふるむさ〻ひの聲

田家

小山田やほられぬ石を庭にたて水はしらせて住るかり庵

懷舊

もろともに老ぬる人そなつかしき昔かたりも［はイ］泣きみ笑ひみ

夢

現にそかはらさりける道をおこし身を捨る共見えぬ夢路は

無常

思へたゝ過るははやき山水にきえてかへらぬあはれ世の中

祝

きみ〳〵は百とせすくるよはひにて世は皆人もすなを成［し］

述懷

百草のことの葉するの露はかり惠［はかけよイ］かけてよ道守る神

右文明十一年四月廿四日爲レ遂ニ舊願一參ニ詣此社一。三箇日逗留之間。於ニ神主國照朝臣館一詠レ之畢。

詠五十首［和歌イ］

春十二首

初春

くる春の色もみとりにあらはれて小松か原は雪［にイ］そ消ゆく

霞

さたかには霞とたにも見えわかて常より遠き春の山のは

朝鶯

呉竹の軒の下なるさえたまて鶯なる〻まとのあさあけ

梅薫風

春はたゝつゐにもみちぬ松風［の風イ］も心よはくて梅か香そする

柳

一むらのうすみとりなる柳原煙をたえ［た、イ］ぬさとかとそ見る

歸鴈

秋もこぬ友をこし路に殘してやまつおもひたつ春の鴈かね

春曉月

かすめともかねの響は高砂やおのへのにしに月は埋れて

山花

咲花はかはらす世をやふるの山にうへけん時の色も匂ひも

禁中花

衛士のたく夜の煙の名殘なくくもらぬ花の朝ほらけ哉

落花

さそへ風心つからに散と見は花にうらみの殘らんもうし

藤

み山本にそれとも分す見しかつらかゝる花にもさける藤哉

暮春

目に見えぬ春こそあらめ關守もしゐてかためよ花鳥のため

夏七首

葵

誰なへて哀ともみんあふひ草つゆはかさしの玉とおつとも

不如歸

時鳥らみはれてもあちきなく〔やイ〕思ひあかせる空のひと聲

早苗

いそく覽門田のさなへあけたてはせみの羽衣折はへてとる

五月雨

山川はいせきの杭もかたふきてもくつしからむ五月雨の比

夏草

深山邊を越にし後もなつくさのたかきに見えぬ道の行末

螢

ゆくほたる初めて永き夜半の空に早く傾く星かとそみる

納涼

松風は岩根におちてなかれにも枕しぬへき夕涼み哉

秋十二首

七夕

七夕のなみたや染て露しくれまたぬ紅葉のはしとなる覽

荻

うきなからいとひもはてす荻のはに心をかるゝ露の秋風

女郎花

わすれ草植そへて見ん女郎花思ひあれはや露けかるらん

松虫〔叢虫イ〕

行ふりに聞は松てふ虫そ鳴とふへかりける草の原かな

鹿

嶺たかみうはの空なる妻やとふ雲のはたてに鹿の鳴こゑ

待月

山のはにまつほのめかす光かなまたれて月や出んとすらん

木間月

月みんとたのむ木のまもさたまらす心つくしの軒の松風

惜月

夜もすからみるか内にも思ひ侘ぬ今より月は有明の空

霧

岩根ゆく水はをとして山本の川霧くらき秋のあけほの

紅葉

もみちせぬ槇檜原には龍田姫つらき心の色を見せけり

擣衣

露霜になれたる袖も卷ほさていく夜打らん賤かさ衣

九月盡

あまをふね泊瀬のかねにけふ暮ぬしらぬは秋のとまり也鳬

冬七首

時雨

あつまやの雫も落ぬさよ時雨袖をそぬらすあまり成まて

庭霜

本の色も殘らぬ庭のま萩かなふる枝は霜の花〔にイ〕となけとも

氷

深き夜の月をも風そ吹むすふ池の心とこほるのみかは

河千鳥

明ぬるか引鹽とをき濱川に聲打かはし千鳥なくなり

雪

天乙女をしますいかて下すらんこの世のものとみえぬ雪哉

炭竈

嶺の雪かたふく月にくもるなり炭燒をのこしはしたにみよ

鷹狩

犬かひの柴の下みちかゝる聲にたかも木ゐたや移り行らん

戀六首

忍戀

枯ては形見なるへき玉章を忍ふあまりの思ひ〔思ひのあまりイ〕にそやく

祈戀

ゆふ疊手向にはあらて相坂のなをや關守る神にいのらん

初逢戀

今そ知〔る〕またいつかはと思ふには新枕にもなみた落つゝ

後朝戀

きぬ〳〵の夢の浮橋たとりきて命あやうきほとをとへかし

増戀

思ひきやほのかたらひし夕附夜よをへて影の身に添はんとは

恨戀

みるやいかに靜に聞と我恨かきつくしつるかひはなくとも

雜六首

名所浦

名にそたつ神も心をとめしよりいつくはあれと和歌の浦波

山家

山水の思ひしよりも住よきにおなし流れをくむ人もかな

旅

ふるさとの軒もる月に思ひやれ忍ふもちすり露に敷野を

述懷

語り出む言の葉までもをろかにて人もすさめぬ老のあやなさ

夢

はかなしや我心ひくことをみてうつゝに夢のあとしたふ身は

祝

斧くたす杣人あらは我君の御代をかはらす歸り來てみよ

亞槐集巻第三

春部

年内立春

あら玉の年ののこる日數にもたか急くとて春のくるらん

立春

天となり地と定〔ま〕る神代よりときのはしめの春や立らん

さえ／＼し雪けのそらも閑長にてけふ出そむる春日影哉

聖廟法樂の百首歌に

薄こほりけふとけそめつ東風ふかは池の心も春をしれとや

坂本の旅宿にて

大ひえやたかねそ霞む氷とけけふはさゝなみ春も立らん

住吉社法樂三十首歌の中に初春

春のくるけさの朝水ひとしほにまつ陰うつす住吉の松

〔一花の匂はぬ先も年こえて春にのとけき天の下哉〕

〔原本こゝより下に十首脱したれは〔〕を標して補足す〕

藥師法樂三十首歌に

はるのくる空はみとりの光にて世に明らけくあふくけふ哉

春の歌の中に初春祝道

四本うふる庭のまつ陰雪消てわか道みゆる春は來にけり

〔人丸の影供養とて人の申せしに初春

くりかへし春はきにけりあら玉の始め終りもなき年のをに〕

早春風

春はたゝ名にのみ立〔ち〕てきのふけふ霞む共なくさゆる山風

〔初春霞

一花もまた咲やらぬ天の下の春をかすみの色に見せけり〕

子日松

ねの日する野邊の小松の千代の種手ことにとりて歸る諸人

鷹をさへけふひきすへて子日する小松か原に暮しつる哉

〔諸人の千代を手ことの家つとや今日の子日のかさし成覽〕

霞

〔長閑なる志賀の浦風打かすみさゝ浪よする音も聞えす〕

うすくこく霞の色そにほふなる空や雲間に夕日さすらん

春のきるこれも霞のかり衣とを山すりに匂ふ野へかな

子日にはあらて年ふるのへの松もたなひかれけり春の霞に

深くのみたてる霞のみほの浦にけさは印の松たにもなし

山霞

けさみれはよもの山邊の八重霞九重に立春そしらるゝ

野外朝霞

わか草はまたそれとなき冬枯の野原になひくあさ霞かな

橋邊霞

松のはのみとりのするもかきりなく霞みかけつく天の橋立

關路霞

逢坂の山路へたてゝかすむ也たてるやいつこ關の杉むら

松上霞

唐崎や氷し波はうちとけてかすみの下にむせふまつ風

霞隔行舟

ときつ風ふかすかすめる波の上に行衞も見えぬ玉もかり船

鶯

うちかすみ都の山はとをくして初音ちかつくやとの鶯

鶯そしゐてさえつる春來ぬと人はいへともおりをしれとて

一花もまた咲やらぬ梅かえに世はみな春ときなくらくひす

谷かけにすむ山かつをふるす出て里なれそむる鶯の聲

若菜契遐年

君か爲神しまもらは春日野のわかなも千世を摘んとそ思ふ

若菜

里人の家をも名をもはなかたみかたみにとひて若菜をそ摘

近江國柏木にすみ侍しときわかなの類を人のみせけれは
これそこのわかなも名にもかひなきは都をよその宿の初春
住吉社法樂百首歌の中に春雪
さすかはや高根はきえてなかれ出る山下水の淡雪そふる
はるの歌の中に殘雪
降つみしうへより消てたゝひとへ殘るやこその峯のはつ雪
谷殘雪
かつきえてのこれる雪のふかさこそ顯れそむれ谷の埋木
竹殘雪
外面なる竹や雪まとなりにけり春の嵐のむら消の音
餘寒
谷川にとけし氷はまたとちてふり出にけり春のはつ雪
山さくらおもふもとをし谷風にこほりつれなき春のはつ花
餘寒霜
かれぬへきいろとは見えぬ若草も秋よりさむき春の朝霜
氷解
よし野川こほりはときつ山さくら花のひもふけ春の初風
初梅
なへて世の花にはしめの梅かえのましてまつ咲色そえならぬ
梅久薰
降をける雪の下よりにほひきて今は梅かえ色もまかはす
梅薰袖
いくたひか匂ひを袖にはこふらん花に行かふむめの下かせ
梅風
さそひ行風やうからんむめの花めに見えて散匂ひなりせは
こすのうちの匂ひなからや千里まて吹まかふらん梅の下風
もろ人の袖に匂ひをもらさしとのとかにさそふ梅の下風
むめかほるうら風吹ておほかたに見えぬ難波の春の空〔ころイ〕哉
月前梅
なかむれはひかりも花も匂ふなり月にはかすみ梅にさよ風
雨中梅
あかすなを袖につゝまん春雨に梅か香おつる軒の玉みつ
梅かえも花そうつろふ春雨のふるはなみたかきなく鶯
霞中梅
さたかにそむめかゝむかふ初瀬路や〔のイ〕匂りかすめる春の夕暮
文安五年二月十三日内裏へ紅梅の枝をたてまつりしに
いま手折この一枝の色香をはわきえぬ身にも猶やめてまし
御かへし
ちよの春もなをそたならん梅かえに君か言葉の花を契れは
江州柏木にすみ侍し時つれ／＼なる春のころそのあたり見めくりけるに梅のにほひけれはよみ侍し
竹あめる垣ほのうちの賤のやも猶世にしらぬ梅か香そする
柳先花綠といふことを
あさみとりあかぬ柳の玉かつらかけてそ花の色もまたるゝ
岸柳
行水のさそひもはてぬうき草や枝をひたせるきしの青柳
船くたすよとの川長きしちかみしはし柳の花かつらせり
常德院かくれ給し後彼あそはし捨られし題ともにてある人歌すゝめ侍しに河柳
春ふかき小川のきしの柳かけかへらぬ水のあはれよの中

若草を

雪間出るいろも珍らし年こえてけふははつかの野への若草

ゆき消る庭のわか葉に露見えておもひやらるゝ秋の淺茅生

早蕨

山里の庭のさはらひ手を折てかそふれは又としもつみけり

春曙

明わたる高根の花にわかるなり心つよきははるのよこくも

月殘る雲のいつこも見えわかて霞そ色にあけほのゝ空

なにのいろにそむる心そことなくかすむ計の明ほのゝ空

浦春曙

かすみ行この鹽かまのうら船のいつはあれともはるの曙

春月

いく夜われ月にちかつく浮雲もしらて霞をかこちあかせる

はるのきるよるの衣のうす霞月にうらみをかさねてそみる

おほろなる光につけて夜はの月深き霞をさたかにそみる

ほのかなる月や霞のみをつくしふかきしるしのみゆる影哉

濱春月

春風の吹上のはまの夜はの月眞砂も空にかすみそふらし

春曉月

春そうきさらてもうすくなる比の月影かすむ有明のそら

春雨

たつた姫木のめはる雨降よりやこゝろにそむる行末の秋

河上に雪やのこりて春雨におもひしよりも水まさるらん

草庵春雨

野へみれは〔はみなイ〕色まされともはる雨に草のいほりそ軒は朽ゆく

春田雨

せきもいれすまたきかへさぬ小山田にまつ水濁る春雨の比

ますらおかみのしろころも打しほれかへす山田に春雨そふる

春駒

勇みある世の名は立て春駒の野原にあるゝけしきをそみる

春のくるそなたの風に當りてもいはへに息な野へのあら駒

雪消し澤邊の水とわか草をおもふことゝてなるゝはるこま

雉

山もとや春のあはれをかり行は霞かくれにきゝす妻〔とイ〕こふ

妻こむる霞やはるの狩衣のへのきゝすのうらふれて啼

雲雀

菫さくのへの床にはなくひはり一夜もかれし子を思ふとて

たひ人の朝行野への芝生より雲雀も床をはなれてそたつ〔なくイ〕

おりゐつゝ峯のしはふになくひはり上らぬ聲も空に社きけ

歸鴈

たえすおもふ古郷なれや春のかり時しも夜〔へイ〕たゝかへる聲々

もえ出る草木のいろはみとりにて鴈の北にも歸る比かな

またさむきこしの白根にむかふなりみやこのたれに衣鴈金

しるへとやこしのしらねにむかふ覽かすめと鴈の行末の空

さたかなる聲をそしたふ春の鴈數さへ見えし月はかすみて

浦歸鴈

歸るなり春の日影をかさしにてをみのうらはの衣かりかね

田里歸鴈

人やりの道とやいはん門田よりかへせはかへる春の鴈かね

野遊

すみれつみ小鷹ひきすへ梓弓はるのに人のくらす日かな

待花

こゝろあてに思ふ月日を大かたの契りになして花そ待るゝ

雨中待花

さきなはとまたあらましの櫻かりぬれぬそつらき春雨の空

尋花

花とみて思ひそ立し太山路やあとはまかはぬ雲ゐはるかに

けふも又まかひしまゝの峯の雲おられぬ花の影やとはまし

花と見し雲はおもかけ消ゆけと思ひかへらて山路をそとふ

くれなはといひて出にし花のいろにけさより迷ふ遠近の陰

はしたかのと山かたかけ長き日のくるゝをしらぬ櫻かり哉

享徳□年二月廿六日室町殿の御さたにて内裏舞御覽ありし次三十首御續歌講せられしに花始開

千世かけて繙きそむる花の雪をめくらす袖やためしなる覽

初花さいふことを

おもひこし花のうへより匂ふ也けふそわか身の春のはつ風

けふはなを日數かそへて庭の花かつみなからに盛をそまつ

〔愚亭の庭の花を人々見侍りし時朝見花

朝戸あけて我も見るかひあるものを花こそ人を待えたれ共〕

見花

あかすみてたゝ時のまとおもふこそ花に重ねし日數也けれ

なをあかぬ心のしほはみちかねて礒山さくら見らくすくなき

終日見花

おき出てむかひし花のあけほのゝおもかけ計くるゝいろ哉

見花觀無常

またさかむ春もたのまぬ老か身にことし植そへ花を見し哉

花

古郷のよしのゝ花はふらぬ日もなかりし山の雪かとそ見る

つゐにちる花なうき世とそむくともよしのゝ外の山や尋ん

さきのよの我身たれにて契りけんあやしき迄になるゝ花哉

盛花

よしの山花はゆふへをさかりにて歸るともなき雲そ重なる

をそくさきはなの心そしられける盛りはおほき四方の櫻に

つれもなくみえし櫻の今は又枝こそ花にこもりはてぬれ

嶺花

けふ幾日みねにこりゐし白雲は花の雪けとあらしふくなり

うつり行こゝろの色もまかふ覽おのへあまたの花のしら雲

花のいろにかすみも幾重匂ふらん面影ふかきみねの白雲

山花

散かゝる色にはあらてかゝみ山くもり果ぬるはなさかり哉

〔暮山花

たかかへる家つとならんくれ行は山路の花の雪をれの聲〕

夜花

俤はくらきのきはにみゆれとも花に月まつ春のうたゝね

夜思花

かつちるをおもかけなから花の陰ねてかさめてか山風の音

ねぬる夜もめはさめにけり夕くれの花の匂ひを俤にして

交花

けふいくかかさしにをしき山櫻おらて袂をかはしきぬらん

挿頭花

山櫻ちるならひをは恨きてあかぬかさしに折もあやなし

かくれえぬ老の心をわすれすはあたら櫻をたをらましやは

〔花下忘歸

くれなはといひし山への花のかけさても幾夜を家路忘れて〔一

花慰老

見すはいかにみるも苦しといひしよの花の陰迄思ひしれ〔るイ〕共

散郷花

花見にとまつこし人をあるしにてとふこと絶ぬはるの古郷

胡蝶のみ春の闇もるふるさとは散よりも猶おしきはな哉

野花留人

あまの川花をやとかす人にしてあすもかたのゝ櫻かりせん

おもへはや野への櫻も色に出てくれなはなけの情みすらん

ある所に梅櫻柳なと枝をかはして庭の木立も艶に侍るにかの梅か香を櫻の花に匂はせてと侍ることさをおもひて

おなし枝にさかぬ計そ梅かゝも櫻もましる青柳のいと

三井寺金堂の花只一樹さかりなるを見て暮行ほとに人々別れけるとき

いささらは暮る一樹の陰しめてその曉の花まても見む

仁和寺神殿のほとりの花をみて暮行ほとにやとにうへし櫻のかつうつろふもおしくて立歸るに

とひすてゝ歸らんものか山櫻やとにうつろふ花なかりせは

惜花といふことを

身を忘れ家路もしらて〔すイ〕なとか思ふかひなかるへき花の行衞を

しはしまつ盛なみせそ櫻花おとろへぬへきことはりもうし

花浪

やまかせに岩こすをとをひゝかせて苔のうへゆく花の白浪

落花

あけわたるたかねの花に風過て春に別るゝよこ雲の空

はかなくて咲散花のことはりはみれ共悔しうへさらましを

落花如雪

ちらぬまの花のかゝみも春の日のうつれはかはる雪の下水

水上落花

にほ鳥は花にそあそふ池水の玉もの床もさくらちる比

庭上落花

庭のおもにうらみそつもる散花を風の宿りのしるへにはして

摘菫

つみたむるわか衣手の鹽染にすみれも色をやつすのへかな

躑躅紅

岩つゝし春のいくかの雨なからけふそふりての色に咲ける

雨中に庭のつゝしをよみ侍る

花のみかいろそふ苔の岩つゝし春雨あかぬ庭のおも哉

巖躑躅

ふる雪のおもかけにまたかへるまていはほにも咲白躑躅哉

〔紅にあらぬつゝしも種しあれはいはほも雪の色に咲く也〕

池杜若

春の池の底にもうつるかきつはた鳰の下道へたつとやみる

欵冬

うのはなの枝にこもれる籬にもまつ時しりてさける山吹

行春をこゝにこめてや山吹の花の八重かきつくる里人

河邊欵冬

よし野川さくらなかれて行春もこゝそとまりと咲る山吹

岸藤

鳰鳥ものとかにみゆるいけ水にをのれ岸うつ春の藤浪

松上藤

松かえのみとりの色はことなれとかゝれる藤も春の一しほ

さく藤の波のさはきにしく風はきえ〔きイ〕ていとはぬ松のこゑ哉

ときはともみえすよ春の末の松たかことのはにこゆる藤浪

名所藤

さく藤の花もうつろふ色によせて歸るをみれは田子の浦浪

暮春

〔梅を折り藤をかさしてしたふ哉うつれは變る春の日數に〔さイ〕〕

何をかはいまはと思ふ老か身に花ちる〔りイ〕春もくるゝかなしき〔さイ〕

山風は花も殘らすはる暮てさすかひはらに聲そかなしふ

いとはてそ今はうらむる山さくら花なきわかは風すさふ比

ゆく春と思ふもあやし老はてゝ今は月日もおしからぬ身に

やよやまてやよひのよはの明方に横雲出てかすむ月影

花ちりしさくらのわかは打しほれ春雨さひし夕くれの宿

なれ〳〵てしたふに春のいかなれはあひも思はて別れ行覽

いまいく日あらはなつみの川水に吉野の花のとまるせもなし

文明十一年三月若狹國へくたり侍し時小濱瑞雲院と云寺にて

またもこん時とところと頼めともあはれ老ぬる春の暮方

暮春殘鶯を

折からの名とそきこゆる春も行をのれも歸るうくひすの聲

三月盡

櫻あさの袖は花にも匂はねとあすたちかへん名こそ惜けれ

亞槐集巻第四

夏部

首夏

月草の花すり衣四〔いろイ〕のときのうつろひそむる夏は來にけり

首夏藤

雨の中におり殘しつる藤かえの露もまたひす〔ぬイ〕夏はきにけり

夏くれはふきあまたの深みとりうらはもわかぬ藤浪の花

わかれにし春のかたみにさく藤のかへる浪にも又や恨みん

竹亭夏來

はしにさく花はまたきに軒ちかみ竹の葉風の夏そ涼しき

更衣

こゝろをはかへぬ色とて今朝もなをひかふる物を花染の袖

羇旅更衣

われもけふうすきころもの關守にとゝめぬ春を恨てそゆく

尋餘花

ちるさくらありてうかりし春過てまた咲もやとふ山路哉

殘花在何

散ぬとて出しみ山の道かへて春にをくるゝ花やとはまし

さかぬまもいたつらにこし山さくら青葉の雲にまた迷ふ哉

殘花

道のへに散をくれたる花のえをたかためおらて誰のこし劔

新樹

しくれにも雪にもたえしときは木の梢夏しるわかみとり哉

霜の葉の色もおもはす夏木立朝露なからなひく匂ひは

なつ衣袖かけてふくあさ風にみとり涼しき若かえて哉

春は見しかすみのひまのいろたえて若葉櫻に吹風もらし

卯花

散にしそなをした（のイ）はるゝ卯花は咲さくらとも見えぬ匂ひに

籬卯花

うつき垣花の淡雪つれなくて雫も見えすさす日影かな

卯花似月

卯花をもるかけにしてひまもなきしけきの梢月そさやけき

山家卯花

うのはなのひかりはまとをてらす共しらし山賤雪のふる事

賀茂祭

めくみある神と君とのもろ心もろかつらにそかけて見えける

世をそむき侍し又のとし人の許より草紙を硯のふた［セイ］に入てをこし侍しにそのふたに葵をまきゐにし侍しに祭の日なれは書付てかへしつかはすとて

何となく袖そ露けき今年はゝよそにみあれのけふのかさしに

朝葵を

神山のあさ露なからとるあふひ誰にかさしの玉をそふらん

待郭公

おきゐつゝ待よことゝへ郭公夢にまさらてほのかなりとも

時鳥おもひねに見し初聲にめをさましてそ待あかしつる

つれなさのわか身ひとつをわかしとは思へとつらき時鳥哉

人傳郭公

われそうき人のおしまぬ初音とて今朝あまた聞郭公哉

始聞郭公

きゝふるす幾夜の夢の時鳥はてはね覺に初音鳴なり

さそなまつよしやしたはし郭公はつね過行遠のさと人

時鳥

一こゑは夢にまきれて時鳥とをさかるをそさたかにはきく

こゝろしてまちかくきなけ郭公老のねさめは猶たとる也

いかなれはなをしたふらん郭公七十年きゝしこそのふる聲

時鳥ほとは雲ゐの月影にわするなとたによはのひと聲

春日社參詣の時よみ侍る三十首の中に

ほとゝきす待とはしるや橘のかほる軒端に夕なかめして

日吉の社のほとりにて基綱卿いさなひ侍しかは實藏院といふ寺にて歌讀侍しに

しつかにて鳴音もきかん石走る瀧なくもかな山ほとゝきす

寢覺郭公を

いかゝきくいかにかしたふ郭公とははやよその人のね覺を

夜郭公

子規なく一聲のみしか夜にたか里まてかとはんとすらん

雨中蜀魂

ほとゝきす鳴や五月雨降すさふ雲の迷ひのあり明の空

馬上聞時鳥

いたるへき雲ゐならねと時鳥駒ひきむけてしたふこゑかな

旅宿郭公

草枕まつかりそめのうたゝねもやかてねられぬ子規かな

早苗

遙なる田面にうへん苗なれやほとなきしめの内にとれとも

あさ衣おりたつ田子の袂にもわかなへいろのみゆる比かな

うへわたす山田のさなへ影見えて涼しくすめる水のいろ哉

をやま田の水にうつろふ夕つくよ影を早苗に取や添らん

文安五年十月十三日畠山修理大夫入道賢良家の障子に四月に早苗うへわたしたるかた書たるところに

うらわかみなひく早苗にはる〳〵と音なき風の見えて涼しき

〔以下錯亂せり雲間夏月より夏草までの八首は下の夏月の歌五首の次に入るへきなり〕

雲間夏月

したふそよ雲のひま行影よりもあくるは早き短夜の月

浦夏月

夏かりのみしかきあしへしほ滿て月にくまなきわかの浦波

名所夏月

山陰はみるほともなしなつみ川鴨の羽かひの短夜の月

なつは猶よとむせ〔くイ〕もなし瀧のうへの月のみふねの山そ明行

長祿四年四月十六日此蓬屋に室町殿わたらせ給ひて題をさくりて二十首歌よませ給ひしとき

歸るさを君し忘れはいさよひの月をすゝし〔みイ〕めあくる迄みん

庭瞿麥をよめる

庭にうつすはまの眞砂にうへ置てみるかひあれや常夏の花

秋の花にましへても猶あかす見む咲な盡しそ底のなでしこ

夏　艸

春のゝにまつみし若なうつもれてあらぬ末葉のなひく夏草

端午興といふことを

あやめにそけふみたれあふ忍草あ〔おイ〕ふる軒はもすれる袂も

池菖蒲

宿ふりて水影ひろき庭の池のおも高ましりあやめ茂れる

澤菖蒲

けふといへは野田の田子さへおり立てあたりの澤に菖蒲引也

菰菖蒲

五月雨に淀の川舟苫をあらみけふかるあやめまつやふく覽

橘

ふるさとの軒はの草の名をとへは花橘をさそふゆふかせ

樗

あふちさく梢に移る入日かけこゝろにかゝる雲のいろ哉

五月雨

さみたれは天の川瀨をせき分ていつくも汀まさる比かな

なをさりの露こそ見るも涼しけれ草葉をしほる五月雨の庭

終日に空かきくらすさみたれのたそかれ時もわかぬころ哉

つく〳〵と衣手しほれくらす哉日はすかのねの五月雨の比

雲のみそ行ては歸る五月雨に遠方のへは人かけもなし

谷川や岩こす波は音たえてたかきそみかさ五月雨の比

ぬきかへん衣かせ山五月雨にけふみかの原袖しほれぬる

文明十七年五月廿六日東山殿御參內のつゐてに禁裏廿首御續歌

苔のいろ露の玉しくたまかしはさみたれも猶あかぬ砌か

愚亭にて浦五月雨を

すくもたく浦の苫屋の夕煙思ひもかなし五月雨の比

夏色

さみたれのはれ行窓の竹の葉に夕日の色そぬれて涼敷

夏木

さみたれのなこりの露の玉柏葉守の神のかさしなるらん

水鷄

やすらひに出つゝ月を松の戶に水鷄は誰を驚かすらむ

水鷄驚眠

夢をこそおとろかしけれ柴の戶を明よとて飛水鷄ならめや

夢のうちにとひこし人そ槙の戸をたゝく水鶏に明て出ぬる

夜水鶏

浦嶋のあまのとまやを叩く夜も明れはくゐな行衞しられす

夏月

めてこしも悔しき計短夜のつもれは月のあり明の空

夏の夜はなかはの空を行月もみなみの山にちかき影かな

月待と立やすらひしあつまやのあまりなる迄短夜の空

月はなをすむへき空をみせなから残らぬ夏の夜た恨つゝ〔きイ〕

みしか夜の月にむかひてしたりおの長き鳥をも恨てそなく

夏艸露

なつふかき庭のくさむら雨過て花なき露のさかりをそみる

野夏草

みな月のてる日に水はかれゆけと野中の草そ滋く成ぬる

分ゆけは萩の葉にする夏衣色もすゝしき宮城のゝ露

夏天

みとりこく星のひかりはかゝやきて月まつ夏の空も涼敷

夏獸

山陰やうしひきつれてあけまきの芝生にすゝむ夏の夕くれ

夏鳥

木をめくりねくらにさはく夕鳥涼しきかたの枝やあらそふ

夏衣

こぬ秋もうらめつらしき風たちてなく夕かけのせみの羽衣

嶺照射

峯にたく松としきかはさをしかも立別れつゝよらしとそ思ふ

谷川のそこにそ影をあつめける峯にまとをのともしなれ共

鵜川

大井川よなまつ鵜舟かゝり火の影こそ見えね煙たつなり

いつのまにぬるや川邊の石間さす鵜舟の棹のなかゝらぬよを

螢

飛ほたる淺澤をのゝわすれ水思ひ出たるゆふくれのかけ

衞士のたく影にはあらぬ夏むしの哀れ思ひにもゆる比かな〔もイ〕

住吉社によみて奉し歌の中に水邊の螢を

〔新續古今〕池水のいひ出かたき思ひとや身をのみこかすほたるなる覽

江螢

こぬ秋もよる／＼みえて難波江やあしの螢のなひく浦風

蚊遣火

蚊の聲のむせふはいかにつらけれと煙にかふるしつか枕そ

疎屋夕顔

しつかたくおりしもつらく咲花の煙にくもる軒の夕顔

蓮

ちるもおしはちすの糸にぬきとめよ池のうき葉の露の白玉〔ほとイ〕

雨をきゝ露みるのみもすゝしきにはちすはかほる池の夕風

氷室

氷室もる神のこゝろやとけぬ覽柴まの水のしたゝりもなき

朝またきむすひし氷室さえにけり春立風も吹とかすして

夕立

夕立のあとはとたえす鳴神の跡とゝろかす雲のかけはし〔ふみイ〕

露たにもなこりはあらし夕立の雲よりあとの嶺の松風

みな月のするは月みぬよひかけて涼しさあかぬ夕立の空

夕立雲

わつかなるあしたの雲のかさなりて雨となり行夕立のそら

夕立過

あつかりし日の夕立の名殘有て分るもぬるき道芝の露

夕立早過

水上と聞ほともなし山川のなかれにつれて過るゆふ立

行路夕立

吹送るかもの山陰〔風イ〕ほともなく雲のはやしにかゝるゆふたち

みちのへやあとよりきほふ夕立を友とはなしに待木陰かな

綠樹蟬

なくせみのはにはかはりて衣手の森のしけみの陰そ重なる

水風涼晩

夕すゝみ千世も經ぬへし宿の池の心もきよくまつかせの吹

納　涼

むすふ手にいかなる水の心にて夏をはわすれ〔わすれてイ〕秋のおほゆる

水艸のすゝしさあかぬ山陰におりゐてしはし駒な飼つる

松下納涼

このまゝに枕にしめん夕風の涼しさあかぬ庭のまつかね

山陰そまたきすゝしき松かせはいつれの緒より秋とふく覽

享德四年六月十三日嵐山の〔のイ〕かえての一枝えもいはすもみちして侍るを室町殿より給はるとて枝にむすひ付らるゝ

わきてみよ秋をもまたぬ一枝はたくひ嵐の山のもみちは〔そイ〕

御返し

世にたくひあらしの紅葉山姫も君かためにそ〔とイ〕急くとはみる〔そイ〕

六月秡

いにしへはけふにかきらぬ御秡川月さへ淸き影やそへけん

老ぬるもいときなき身もけふは皆年の半の御秡をそする

よしの川みそきになかす櫻麻の惜まぬなみの花や咲らん

けふなかす御秡の瀨々のあさかしはぬるや川邊に袖そ涼しき〔にイ〕

いつよりか秋はかよひし御秡するみたらしの糺森の下風

亜槐集巻第五

秋部

六月立秋

御秡せん日數もまたて涼しきは秋立けふの加茂の川かせ

立秋風

一葉ちるきりの立枝に秋をはやみせもきかせも渡る朝かせ

初　秋

はたさむく吹とはなしに袖とをる程はおほゆる秋の初かせ

諏訪〔社〕法樂三十首の續歌の中に

かり衣日も夕くれの袖かけておはな吹也秋のはつ風

秋の歌の中に初秋曉

寢覺して秋おもほゆる床の上にわか置初る露そ身にしむ

初秋水

もり捨し氷室の山の谷風に秋そうち出る波の初花

岡初秋

岡邊なるわさ田の末葉音たてゝまつほに出る秋のはつ風

早　秋

涼しさはわきて見えぬに夕月よおほつかなくも秋の覺ゆる

早秋風

夕すゝみなれし木陰に吹そめておなし袖とふ秋のはつ風
早苗とりし日数はしらすいなは山けふはまつ吹あきの初風

殘暑

身にしむる程こそなけれ扇とる手にまかせたる秋の初風

早涼至

あつき日の空にまたれし秋は來ぬ驚かれぬははつ風の音

早涼知秋

袖にむかふ風より秋の心にて〔とイ〕いつしか涼し三日月のかけ

待七夕

星のまつ秋の一夜はみな人のとしをかす〱送る程かも

七夕

けふに名をのこしける哉あまの川浮木のさほの末の世迄も〔にイ〕
こよひとてしるしなけれとみな人のうち詠るや星あひの空

七夕露

ものおもひなき空ときく天川なと星合の名をなかすらむ
たなはたの涙ほす夜の手向して草の露とる袖はぬれけり

七夕琴

梶の葉に露の玉つささきたてゝかきなすことも空にうく覽

乞巧奠

秋風や空にしらふるたなはたのかす玉琴のねにもたてぬを

七夕後朝

夢うつゝけさいかならん星合の心を世人さたむへしやは

露

ふかき夜のまつ風吹てたつそなく老の袖より露やをく覽

淺茅露

ところえて茂るあさちの宿の庭露のさかりを拂はてそみる
玉かともとはぬ野分に淺茅原をのれこたへて消る露かな
このこゝろ色にもみ鬼花もなき淺茅になひく露そめとまる

荻

荻の葉のむすふをはらふ音はして枕に露をたむる秋風
うきも今うきなくさめと成にけり夕は秋の荻のうはかせ

荻音近枕

きゝてたに身にしむ物を手枕のすきまもとむる荻の上風

萩

眞萩原なひくにつけてあたりなる草の袂の錦とそなる
露しけみたゝ一夜にも萩か花にしきの紐をときかさねけり

萩盛

秋風になひきしまゝに露ちりて花のみおもる庭の萩はら

萩露

はきかえやたゝ白妙にみし露も心のいろか花にうつりぬ
今朝みれは庭の眞萩の露そ重き野分にあらぬ秋風も哉

野亭萩露

眞萩ちる野への夕露身にしみてかり庵さむきあき風そ吹

秋植物

秋さむみ花と〔もイ〕露とそちりまかふ風をもまたしもとあらの萩

草花

野へみれはおはなくす花風をうらみ露に袖かす秋の夕暮

草花露

白露のをきかさねたるませの内に千草の花もこほれてそ咲
風わたる野への千くさにをく露の幾たひ花のいろに散らん

野外草花

露ふかみ花はむもれて野へはたゝ色の千種の玉をしくころ

薄

岡のへやいなをほせ鳥も花薄まねくおりにそきつゝ鳴ける〔なイ〕

まのゝ浦や汀もそこと見えわかて尾花〔さゝイ〕咲波秋かせそふく

薄似袖

くるゝまてまねく尾花の袖見えて遠方のへは行人もなし

苅萱

百草のませゆふ庭もかるかやの〔はイ〕葉にをく露そ猶亂れける

槿

夜もすからつゆにむもれてねくたれの花の槿あかぬ色かな

籬槿

花みんとおもはゝしはの籬をもうつむはかりにかゝる槿

戸外槿

松の戸のときはの陰はしはし猶あさ日かくれに殘るあさ皃

文明十一年按察使〔親長〕もとよりしろき槿の花を硯筥のふたに入てをこせて

數ならぬかきほもしらてみせはやと思ふ心やあさかほの花

返事

いまそみるやとの朝皃夕つゆに紐とく花のいろに咲けり

稲妻

いなつまのひかりの間にそ白露の草葉に宿る程も見えける

さゝかにのくものふるまひ顯れて軒のしのふに通ふいな妻

よるひかる玉にはあらて小車のかよひち遠くてらす稲妻

初あきの夜半の木かくれ里人のすゝむもみゆる稲妻の影

秋夕

露もまたわすれす袖をたつねけり七十なれし秋の夕暮

春の風にひらけし花もとゝまらて桐の葉かゝる袖の夕露

うき秋を荻ふく風にとはすれは空にゆふへの雲そこたふる

文安五年九月十八日内裏月次五十首御續歌におなしこゝろを

夕くれの秋のこゝろを心にて草葉も袖もわかぬつゆかな

閑居秋夕を

秋とふく不破の山かせ軒近みせきもる人もゆふへ悲しな

尋虫聲

我ならぬたれをかさても松虫のねたくとへとも忍ふのへ哉

虫

あかつきのねさめもあれとすゝ虫はほのなき出る夕暮の聲

すゝむしの聲は千種の花やかに鳴出る宿に月もまたれて

松虫

きひしさはいつともわかぬ岡のへも秋は一木のまつ虫の聲

鳫初來

ふもとなる小田の稲葉の山こえて待としもなき鳫は來に鳬

初鳫

露としもむす〔イ〕ひはかへすくる鳫のなみたは涙夕くれのそて〔袖歟〕

荻のうへの露をかたしくねさめ哉あはれ夜ふかき初鳫の聲

初鳫一聲

つらにをくれ友をゝくらす心をはしらす夜深き初かりの聲

月前初鳫

荻のうへの露もあらけにかりかねのきこゆる空は月更に鳬

左右聞鳫

過行もくる鳫金も波のうへにきゝてそわたるせたのなか橋

夕鳫

おりからやかりのなみたの玉章も袖に待とる夕くれの空

田上鴈

かりかねはいなはの雲にうち佗て門田にさむき秋風そ吹

遠天旅鴈

なみたもや時雨てきぬる一むらのゆふへの雲に初鴈のこゑ

いなおほせとり

秋風はかり庵さむく吹たちていなおほせ鳥の暮深き聲

文明元年五月のころ日吉の御社のほとりにて基綱中將いさなひ侍しかは寶藏院といふ寺にて百首の續うたよみ侍しに鹿を

うかるへき秋に夕かせ吹たちぬおもふ妻なきしかも鳴らん

文明元年七月七日室町殿御會に田鹿

さすか又小田守しつも鹿の音のとをさかるをは哀れとや聞

春日社參詣の時よみ侍ける二十首の中に野鹿

みかりするならひもしらぬ春日のや萩の錦にをしかふす也

秋の歌の中に田家鹿

をやまたに庵もるひたの音絶て妻おとろかす鹿そ鳴なる

深山鹿

つまこひにおもひもいらぬ鹿なれや世を秋山のおく深き聲

鶉

露をふくあさちか原の秋かせにゆふへはさそなうつら鳴聲

文安五年關白家千首續歌に里鶉

里はあれてふりそふ比の露霜にかはらぬ床も鶉なく也

寛正四年七月十八日内裏月次五十首御續歌に曉鴫

よるひるの思ひの數はかきり有て明行空に鴫のはねかき

享德二年七月廿日室町殿御會當座三十首續歌に

澤田もる秋のねさめのうき數を羽かく鴫の音にきくかな

秋の歌の中に田鴫

露ふかき〔さむイ〕山田のほたち見えそめて鴫のはねかく曙の空

もる人の袖いかならん夕まくれ物さひしきのさはたつ音

月前鴫

白妙に澤邊の水は月澄てまたふかき夜の〔にイ〕鴫そ立なる

大樹家御月次會三首秋山朝

朝霧のはるゝを見れはまきの葉に露うち散て山風そ吹

秋野夕

むしの聲千種の花ののへみれは秋の暮行〔かれイ〕夕かなしも

秋浦夜

白浪のよるのなかめの末はれてあかしも須磨もすめる月影

秋のうたの中に秋田

あかすもれ小鹿妻とひかり鳴てわさ田色つく露のかり庵

秋牛

かへす田に見えつるうしの此比は稲つみ車かけぬ日そなき

秋色

しくれにはまたそめやらぬ片岡に秋をいろとる森の薄霧

曉霧

色も聲〔香イ〕もなきなかめさへ秋はおし空うち霧て明やらぬ程

曙霧

露なから霧ふきかくる秋風に離しほるゝ明ほのゝそら

山朝霧

朝日山かけたに見えす麓よりたつ川霧のみねにくもれる

駒迎

空にすむ月けにはあらぬ駒なれと秋の最中の雲ゐにそ引

八月十五夜

月もまた最中の秋の名にめてゝみる人なみに數へさらめや

十五夜惜月

天河こよひをせにそ月はみる名はまたすゑの秋にあれとも

終夜月

更にける我世ををきて秋も月もなかはたけ行影をしそ思ふ

夕　月

秋のよも空もなかはに見る月のにしは〔にイ〕うれしく雲霧のなき

閑見月

いたつらに空の半をめくるまてみぬ影おしき夕つくよかな

雨後見月

とへかしなとはゝやと思ふ人もなし憂身は月を長閑にそみる

老見月

秋の空しくれぬさきの影よりも雲を出行月そさやけき

かそふれは七十過てかすむなり秋の最中も春のよの月

享德二年四月廿一日室町殿にて太神宮法樂百首御續歌に雲收月明

秋風の月に吹とも見えぬまてさやけき空は行雲もなし

月の歌の中に

幾世をか我もめくりて秋といへは月に心をすましきぬらん

人ことに苦しきものとまたすとも里をはかれす月やとふ覽

あかすたかふ月もかけをやかはす覽心の末に色は見えねと

なかめつゝ昔をおもふ袖の上に月そことゝひ月そことふる

おとこ山みねにくまなし里人や淀の澤邊〔のイ〕に月をみるらむ

海　月

みるこゝろやまともろこしいかな覽松浦の沖の月に問はや

江　月

月やみる入江しつかに更る夜にあしの葉そよき舟出るをと

秋さむみうらかれそむる草か江のよさむの波に月は更つゝ

河　月

かくしこそ神代も月は住の江の松を秋風ふくる夜のそら

水上月

みなの川なかれぬ月もつくはねの峯より出し影やすむらん

湖上待月

雲のちりいけのみさひを吹分て風のまに／＼すめる月影

湖月似氷

曇りなき鏡の山にほのめけはかねてそみゆる波の上の月

浦　月

氷にそたとへてはみるしかの浦や漕行船のあとのつき影

松陰のをのか篷屋をうら波のよる／＼月にいつるともふね

嶋　月

天つかせ雲のみほより吹そめて月かけよするわかのうら波

月前秋風

あはれ共思はぬ海士のみるめさへをしまの波に更る夜の月

秋月勝春花

あまつかせのこらぬ雲に吹はてゝ月の身にしむ影さそふ也

月前薄

二月の花もおよはしくれなゐのかつらの影のひろき哀れは

月前女郎花

秋かせにもるゝ尾花の露とめてまねかぬ袖を月はとひけり

花のいろはあはれたさへてみるはかり月影てらす女郎花哉

松間月

雲はらふ峯のあらしは軒に落てなを月くらき松の下庵

古寺月

石の室苔のとほその露の上に高野の月そかけ靜かなる

すみのほるよ川の鐘の聲の内に月はにしなる嶺に落つゝ

山家見月

うかりつる世のすさひにも契をきし月のわすれす飛み山哉

秋月入簾

しつのや〔かイ〕の軒もみしかき簾すたれ隙もる月はおくも隈なし

庭月

秋かせのはらひのこせる露さひて月しつかなる淺茅生の庭

有明月

めてきつる光のほとは有明の月のわつかにのこる比かな

つらかりし山のはとをく成はてゝ空にそかゝるあり明の月

よひのまの夜をなか月とかこちてもいく有明の月をみつ覽

告わたるゆふつけ鳥の尾上にもかゝらて月のあくるころ哉

已入月

空に殘るひかりそうすき山の端に入ぬる月の影や行らん

擣衣

さよ衣きゝてかたしく露の袖思ひやらてやうち明すらむ

〔新續古今雜上〕長月の有明の月に秋更てうつ音さむし麻のさころも

よな／＼の月も有明にうつるまて花すり衣露にうつころ

長月や夜寒の月はかたふきてきぬたの音そ空にすみぬる

名所擣衣

萩か花うつろふころのすりころもとふ火の野守今やうつ覽

海邊擣衣

とまをあらみ秋風さむき浦浪にうつ音たくふあま衣哉

故郷擣衣

砧さへうちよはりつゝ露霜もふるさと寒き秋のあはれさ〔にイ〕

秋夜

萩に風まくらの下にきり／＼す秋はなか／＼夢そみしかき

秋夜長

かきりある思ひの數もいかならん八月長月あけやらぬ夜は

野分

をしかふす跡たにつらき秋萩のにしきをしなみ野分立ぬる

山菊

見てのみや山路に千世を送るへきいさ折とらん白菊の花

谷菊

春こそははるもよそなれ白菊の秋をは谷のものと咲なり

うち出ん春のはつ花もほと遠ししはしは匂へ菊の下みつ

黄葉

ときは木にかはるはかりのけちめみせ時雨も待ぬ露の下染

くれなゐの深きはまたきした染もかつ／＼あかぬ山の色哉

柞紅葉

そむれとも千入はみさほ佐保山の秋の色を〔をも色にイ〕もふる時雨かな

紅葉

ねくらとふ鳥もゆふへやわかさらん林のかけの紅葉てる比

にしき木のもみちの千束立田姫誰につれなくくたしはつ覽

霜のたて露のぬきにもそめはてぬ程そ梢はにしき成ける

いかにしてもみちはふかく成ぬ覽〔るイ〕色有としも見えぬ時雨に

いたつらにしくれとそみるくれなゐの色染つくす秋の梢は

唐にしきたゝむとそみゆるうすくこくかさなる山の峯の紅葉は

岡紅葉

水くきの岡のこすゑを色とるやえならぬ秋の時雨なるらん

松かえのならひの岡の下紅葉いたつらなりし時雨なりしを

瀧紅葉

山ひめの瀧のよとみをかくすかと紅葉のかさしさす高根哉

紅葉映日

かたみにや影かはすらんくれなゐの鏡にむかふ峯の紅葉は

紅葉移水

紅葉葉のかけもなかれす大ゐ川ちらぬ梢をしからみにして

草庵紅葉

もみち葉の色そふころの草の庵にもるもうれしき露時雨哉

紅葉深

そめつくすのちは何かは色そはんもみちにあやな露も時雨も

こゝろをそ染かさねつる露霜は限りをみする木々の紅葉に

文安五年九月十八日内裏月次五十首御續歌に　紅葉帯霜

さすか猶うつみもはてす紅葉はをまたはつしほに返す霜哉

文明六年九月十五夜江洲栢木に住侍し時　春日社〔にイ〕參詣

時亂世によりて道すなほならぬ　折にてしからき龍泉

寺〔をイ〕といふ寺にやとりてよみ〔侍り〕し

もみち葉のひかりに分し影暮て月にそ　明す　三　山への宿

同年九月廿九日柏木郷より　蒲生郡新熊野へ參詣の道

すからもみちの盛にみな人歌よみし次に

もみち葉をあかちになしてつれもなき松こそ山の錦也けれ

思ふとちきて見んことや稀ならん山はとし〳〵〔りイ〕紅葉する共

惜秋といふことを

袖の露もなにそはかたみしたへともあひも思はて秋の暮行

暮　秋

行秋のかたみまつとてふくるまて月の影みぬ長月のそら

暮秋興

うちしくれ秋もすゑのゝかり衣立よる陰はもみちしてけり

暮秋惜月

いかにせん初霜むすふ草木かはよを經てかるゝ有明のかけ

暮秋風

野邊の花木々の下葉も散はてゝむへ山風の色かはるころ

暮秋霜

ゆく秋の草葉のうへももとゆひも〔のイ〕霜より深き哀とそみる

秋もいまかへるをみせて眞葛原初霜まよひ風すさふなり

暮秋虫

うらむなり尾花浪こす野分して秋さへ末の松むしの聲

九月盡

けふくれて行かたしらは秋の別れみやこ出てゝも猶や送覽

を

文明五年九月十九日室町殿百首御續歌に同しこゝろ

かこちこし夕の空もしかすかにけふは別れそうき秋となる

亞槐集巻第六

冬部

初　冬

外山よりしくれとなりて冬そくる秋にわかれし峯の横雲

初冬嵐

はけしくそむへ山風もなりにける秋の草木は色ものこらて

時　雨

夕附日やとすはかりの露もなし時雨にぬるゝ岡のへのまつ

つれもなき松にいく度かへり来て因幡の山もしくれ行覽

夕しくれけしきはかりの軒にはには忍ふの露の玉水もなし

染はてし色は一葉も殘らしなしくれよこきり山かけて〔せそイ〕ふく

時雨易過

このほとはしくると見れはさす日影いくかほす覽雲の衣手

寛正四年十一月十八日内裏御續歌の中におなしこゝろを

さよ風や雲さそふらん閨の上に時雨はときをふる程もなし

しくれの雲といふことを

山にてはたれなかむ覽夕しくれさそひてかへる雲の一むら

朝時雨を

おとろきてまたつく夢の末もなし朝けの窓は打しくれつゝ

野時雨

山風のさそふたよりも遠けれは時雨そよはるむさしのゝ原

山家時雨

やま風に時雨吹まく芦すたれあみめにすかる露も寒けし

朝木枯

散のこるならの廣葉の朝霜もむすほゝれ行木枯のこゑ

夕こからし

一葉たにいまはのこらぬこからしの枝にはけしき夕暮の聲

詩歌合侍しに十月見紅葉といへる事を

神無月名にたつ春のくるゝまて初花染の紅葉なそみる

落　葉

しゐてなを時雨のそめし限りこそ落葉か露の色にみえけれ

まつちるや先朽ぬらん霜のはのつもるともなき庭の面かな

落葉有聲

そめはてしゝくれを色にさそひきて木葉窓うつ山風の音

麓落葉

山下風のさそひかさぬる麓にはつゐにもみちぬ松としもなき〔しイ〕

瀧落葉

色もなきとなせの瀧の白糸をあらしそ染る紅葉ちるころ

殘菊帶霜

草かれの籬のかせははらへとも霜さへ散らぬ菊の一もと

秋のくさはかれたる上にをく霜をひとり色けつ白菊の花

朝　霜

みし秋の千種はのこる色なくて霜の花さく野への朝風

寒　草

とひなれし秋の色なき百草の花にはかれぬ野への霜かな

江寒蘆

難波江や霜かれはてゝ芦邊行鴨の羽かひの色もまかはす

寒　松

をのか名にたつをともなくなりに鳧雪にしくるゝ峯の松風

寒樹交松

こからしにたへぬ梢をかはしてもまつの霜ふく色は寒けし

氷初結

岩間もるをとたえそめて遣水のこほるをよはの枕にそ聞

遣水のをとかれそめてこほる夜は淺茅か露も霜とをくらし

氷

さそふとは見えぬ嵐に岩波の花も殘らすこほるやま川

かけたのむひのくま川の朝氷こまうちわたす音のさやけさ

氷閉細流

山風もさゆる小川の河くちはこほりそ水の關のあらかき

田氷

くちはつる庵のみかは氷ゐて山田は水のもるをともなし

湖氷

かれ殘るおはなの浪もまとをにて汀そこほるまのゝうら風

寶德二年十一月廿七日大樹家百首御續歌に冬月

秋の露やとりは袖にかはれとも霜にかさねてなるゝ月かな

同十一月十八日內裏月次御續歌におなしこゝろを

雪はろゝ庭の梢の花にいまかすまぬはるの月をみるかな

さゆる夜にたへて社みねかたふくはをし明かたの窓の月影〔同しこゝろをイ〕

一花の〔のイ〕ちるもさなから春なれや空は雪解の朧月夜に

雲のなみこほりをしのきもる月もやとりかねたる庭の池水

きくもさえ見るも氷りて更る夜の鐘のねたかく澄る月かけ

水邊冬月

はちす葉の朽てくまなき冬の池に月も氷に〔にごりイ〕しまぬ影かな

文安五年十月十日室町殿御續歌の中に千鳥

あま小舟友よひかはすうら／＼に猶こゑさはく夕千鳥かな

同十八日內裏月次百首御續歌の中におなしこゝろを

しほかせに波もや高くなるみかた聲うちよする夕千鳥哉

春日社參詣のときよみ侍し二十首の中におなしこゝろを

くれぬとて鹽燒たゆむ浦つたひをのれくもりて立鵆哉

湖上千鳥といふことを

したにかよふにほてふ海のさよ千鳥波の上にそ妻を戀ける

嶋千鳥

こゝろある海士のね覺のいかならん千鳥鳴なり松から嶋

河千鳥

月清みなく河ちとり打佗て瀨のこゑさむき明方の空

水鳥をよめる

〔新續古今〕むれて立羽音そ寒き芦鴨のさはく入江はさそ氷るらん

鴨の立澤たにおつる村鳥の羽かきそへて寒き音かな

さゆる夜もかたみにたのむ聲す也羽うちきする池のをし鳥

芦邊ゆく波風さむみふくろ夜に鴨の羽かひも霜やをくらん

水鳥多

こすゑよりをしのむれ入る山川を嵐にらかふ紅葉とそみる

池水鳥

かのみゆる池邊にかゝるゝあしまには鴨の羽かひもしるき色哉

網代

川霧のはれまに見れは朝日山かけたゑせゝにしけき網代木

霰

水上はこほりてたゆる岩かねに瀧のしら玉ちるあられかな

かめの尾の山の瀧津瀨氷ゐてあられの玉そ岩ねにはちる

篠霰

あられふる岩ねの小篠音たえて〔てゝイ〕こほれと散や瀧のしら玉

初雪

うつもれぬ風もさえたに音たてゝ初雪寒き窓の呉竹

文明元年四月二日室町殿御續歌中に都初雪を

いかはかり太山の松のつもるらんみやこゝ野へのはつ雪の空

美濃國へ下り侍し時伊吹山を見れは雲たちかくして見えす侍しか漸はれ行まゝに雪いとしろく見えけれはよみ侍し

雪けともしらぬいふきの峯の雲晴てそつもる程をみせける

雪の朝東山殿へ詠進し侍し

軒ちかき山いかならんわかやとのせはき庭にもまつの白雪

御かへし

さそな雪庭の松にもつもるらん軒はの山は埋れにけり

雪のうたの中に

時のまの草木にいろの匂ふかな枝より出ぬ花のしら雪

かつふるにきえし雫もたるひして槇のや埋む夕暮の雪

まかきよりみなおれふしてくれ竹の末葉は庭の雪の下草

雪滿群山

みねの雪猶おくふかくつもり鬼外山はみえし松のはもなき

野外雪

冬かれの色も殘らすやたの野のあさちか雪の淺からぬ比

海邊雪

はらひえぬ風そと見えてよる波も雪もたかしの濱の松かえ

山家雪

山里にすますはさても庭の雪とはれぬまても跡やまたれん

閑中雪

なをさりにゆきこそ埋め苔深みいつもと晴ぬ庭と見えしを

依雪待人

つもらはと人もちきらぬ庭の雪に心と待て誰をうらみん

行路雪

たひ人のすかたそくもる道のすゑみのしろ衣雪はらふらん

積雪

わきて先たかかつけゝんわたむきやあたゝかけなる峯の白雪

ふりそめていつれ眞砂と見し色も埋れにける庭の雪哉

深雪

ねや寒みうつもれふしてきけは又まかきの竹も雪おれの聲〔音イ〕

庭の山は雪にむもれて遣水のなかれを聞も谷ふかき音

松雪深

白妙にあらぬちとせの色はなを松のかたえに深き雪かな

うつめともなを松の葉のしるき哉降雪さへに散らせすして

雪埋松

風さむみ冬木のこすゑはらへとも雪ふり埋むまつの長閑さ

ふるまゝに嶺の松原枝たれて木のもとさへも見えぬ雪かな

橋のえたうちはらふ庭の雪に松のみおもきよもきふの宿

日にそへてみとりも見えす松をたにしる人もなき高砂の雪

かすかのゝ草のはつかの色そなき雪まもしらぬ冬の松かえ

木のもとに峯のまつ原猶見えて雪よりいつる朝日かけかな

享德二年四月廿一日室町殿太神宮法樂百首御續歌の中に海邊松雪

まさこにもつもれは高き白雪をよそめにえやはわかの松原

おなしこゝろを

浦かせにくもりて暮るゝ松原をさたかに見せて積る雪かな

杉雪を

ふりおもる軒はの杉の下おれにこほれてふかき雪の一かた

檜原雪

行人もかしらの雪をはらふらしおいの檜原の山の下道

鷹狩

はしたかのすゝの下道分過て太山のおにもかゝりぬる哉

かきりなきけふの鳥立もとひ侘ぬ忍ふの鷹の雪の亂に

鷹狩日暮

とまるへき館は見えすやかたおの鷹も手かへる岡のへの暮

連日鷹狩

かりくらしきのふの鳥のおち草をけふ猶たとる明ほのゝ空

爐邊閑談

老人のみちしる夜半のことはさも靜かにふくる埋火のもと

閨埋火

あくる窓のほたる計の光にてたえ〴〵見ゆる閨のうつみ火

冬人事

埋火の夜ふかきまてにむかひゐて道をおこさぬ身を歎つゝ

神樂

おりかへす霜夜のさかき笛の聲もりの嵐そふきあはせたる

八こゑなくゆふつけ鳥に六のをのしらへもすめる里神樂哉

歳欲暮

よる糸のなかくなるてふ冬の日も覺えす暮るゝ昨日けふ哉

歳暮

山川にかへらぬ水はこほれとも月日なかるゝとしの暮かな

文明六年冬春日社參詣の時よみ侍ける廿首の歌の中におなしこゝろを

やとせうき年のおはりはおしましよはや治れる世に歸れ春

歳暮雪といふことを

春かけて猶降そはん雪なれや月日はつもるかきりあれとも

百首續歌のなかに除夜

なやらふをいそくはかりに行年もおしまぬ程の雲の上人

除夜の佛名といふことを

となふなる佛のみなに小夜更て積れるつみもはるそま近き

亞槐集卷第七

戀部

初戀

契りをくならひなけれと思ひあれは詠そめぬる夕暮の空

あすよやは思ひかへ覽我なからきのふはしらぬ戀路なれ共

ふみそめて袖そしほるゝ野邊の露山のしつくは分ぬ戀路も

ためしあれはうちつけなから岩かねに心の松のたねや蒔まむ

おなしこゝろを「イ本此題詞なし」

いかなれは出たつあしのまよふ覽とをき所もしらぬ戀路に

始尋緣戀

うくひすの宿りにかよふ花のかをけふこそ風の便にもとへ

忍戀

まよふともさのみ歎かし色に見せことに出へき戀路也せは

わけ迷ふ戀の道芝ふみそめてしのふか原の露をしるかな

たえす我思ふことゝて夢路まて人めつゝまぬうたゝねもなし

忍ふそとこゝろのとはゝこたへても落る涙を誰にかこたむ

おなしこゝろを「イ本此題詞なし」

いかにせん人めをつゝむ折しもあれ心のとへはおつる涙を

心にもあらて涙やこたへましおもひを人にとはれすもかな

もれなはとさすかに思ふ玉章は言葉のこしてやるもうらめし

いかにせんしのふもちすり袖の上の涙のみたれ限り有よを

心にもせきかへさすはわかなみたつゝむ袂を猶やもれまし

軒はもるしのふなからの月のかけ涙の〔をイ〕露にうつす袖かな

忍涙戀

おもひをもけたぬ涙のなかれ出てなと人めもる袖濡す覽

おなしこゝろを〔イナシ〕

あはれともたれか白玉なへて世につゝむ涙はとふ人もなし

共忍戀

思ひ川ふかさあさゝはしらねとも同し心にうき名をそせく

相互忍戀

袖のいろのまつ誰かゝたに亂れまし同し涙を忍ふもちすり

忍視眠戀

かたみとて涙に浮ふもくつをはかへすを見ても袖や濡なん〔けイ〕

忍久戀

我おもふ人たにしらはせめてたゝ心にこめて年はふるとも

秘知音戀

我忍ふことをいかて〔はいかてイ〕かしらせまし緒をたつ程の友はあり共

寄都鳥戀

ことゝはゝ人そあやめんみやこ鳥わか思ふ心空にこたへよ

寄螢戀

あけゆけは人め思はぬ思ひかなうらやましきは夜はの夏虫

寄玉戀

しらせはやからき思ひの鹽かひに〔にイ〕涙の玉もひろふ袂を

夜ひかる玉とも見えはいかゝせんくらきを類〔たイ〕袖の涕の

思不言戀

つれもなくむすほゝれたる心をはいつかはさても岩代の松

言出戀

思ひより餘りていつる言の葉のけたれぬ名にも立ぬへき哉

洩始戀

忍ひえぬ思ひとかねてしられなはけふより先に打や出まし

切戀

つまはやなわすれははてぬ忘れ草やすめて心またつくす共

おなし心を〔イナシ〕

たゝ〔えイ〕せしのちかひにかけし我命一よもかれはかひやなか覽

戀しなん此世の後の身をせめてかゝる思ひに沈めすもかな

我せくにあまる涙の玉しゐもつれなき袖の中にまきれよ

不逢戀

戀侘る身をとにかくになくさむる心なかさもいつ迄の世そ

なをやうきつれなく見えし別路はしらぬ袖にも有明の月

おなしこゝろを〔イナシ〕

なき名にもたゝはやせめてそれをたに契り有とや人の思ふと

あふ事はかたきならひと慰めて心なかさに身そたえにける

別れてふそのひとことのうき數にあはれ加はる契りとも哉

馴不逢戀

とへかしな逢瀬をとはん舟人のみなれさほさす袖はいかにと

答言不逢戀

絕ぬ共いふはならひの僞をなき名〔世イ〕になしてとはしとそ〔やイ〕思ふ

寄月戀

わか袖の露かはおもひいつやとて月にも心やとすよな〳〵

寄山戀

ひとりのみわかぬる床の山はたゝちりはらふへき松風もなし

寄杣戀

杣人もよひやはせん思ひいる戀の山路になけきこる身は

寄野〔もイ〕戀

まよひては限りあるへき武藏野を我戀路とも思はましかは

寄松戀

まつとたに君こそつゐに岩ねより入たのめなる種はみせけれ

寄桂戀

有明の月のかつらよひきそふる草の名をたにかけぬ難面さ

寄衣戀

かたしきの我思ひねのさよ衣かへさすとてもみえぬ夢かは

寄繪戀

君かかく手すさみならはあら海のいかれる魚も哀とやみん

寄鐘戀

けふもきゝてなかめやすると思ひ出は慰みてまし入相の鐘

寄夢戀

つらくのみ見えつる夢の面影を身の契りにそ思ひ合〔は〕する

戀　帶

いつ迄か心もとけす下の帶のしたにを思ひむすほゝれまし

戀　紐

心よりとけぬといかてたのむへきあはに結へる紐ならは君

寄老人戀

恥かしな南にまれにみゆる星の心空なる身とはしらしな〔れしイ〕

立聞戀

哀ともいふやいかにと立そひぬそのかひまみはわかぬ夕に

祈　戀

神たにもうけぬちきりをくりかへし今は歎きの森のしめ繩

おなしこゝろを〔イナシ〕

あひ見ての後は神をも忘れしと契り〔ハイ〕も深く結ふしめ繩

うけひかて神も諫むる中ならはかけしみしめや悔しからまし

來世には契りたえぬと祈らはや迷ふ〔もイ〕むくひにこりぬ心を

神よひけ戀しかなしとおりたつは浮田の森にかくるしめ繩

契　戀

まち〔にしイ〕いつる月はふけゝり契りつる人の心の道たとるまて

ことのはを頼むはかり〔はイ〕のなか〳〵に思ひ絶せぬ月日經に鳬

おなし心を〔イナシ〕

頼めしにいつの人まはしらね共くるとあくとを急くはかなさ

契日中戀

うちつけにまはゆくさてもよしや只頼む晝まを待て社みめ

晝　戀

かつらきの神やはかくるおもかけにひるね驚く夢の浮橋

契久戀

このくれといふたにまつは久かたの月日いつまて積り行覽

不憑戀

いまはたゝ人の心の大ぬさをわか戀せしのみそきにそかる〔するイ〕

憑誓言戀

我思ひいのるやしろはそれなから人の誓ひし神もことはれ

待　戀

忍ふそといひて契りし言のはをかはる〔ふくイ〕につけて頼むよは哉

頼めしに時のうつるはうき宵のうたゝぬるとも紛やはせん

おなしこゝろを〔イナシ〕
更行にわか身おとろく鐘の音をたのめし人よいかゝ聞らん
さよふけてとかむる犬の一聲も人まつかたに聞そ嬉しき
逐昔待戀
覺束な我をとつれも黄昏にいかゝみつらんさよのふけゆく
連夜待戀
さはる事なき世なりせは僞の幾夜なくさめしゐてまためや
寄雲戀
なかむれは袖そしくるゝさためなき契りに似たるうき雲の空
寄雨夜戀
つく／＼とまもる燈かきくらし獨り雨きく閨の夜ふかさ
寄雨戀
閨の上に君は聞ともよるの雨のかすなき恋の思ひやはしる
寄花戀
行末はうつろふ色にならふともせめては花の便りにもとへ
寄木戀
つれなさの色には人のならふ共名をはしらすや夕暮のまつ
寄蛛戀
とひもこは涙の玉をぬきて見せよ袖にかけたるさゝかにの糸
これもまつつまとそみつるよき事と聞さゝかにのドる軒はを
寄莚戀
幾夜さてとはれぬ床のあや莚あやめもわかす塵つもるらん
寄衾戀
夢にてもくることあらはわひつゝも獨ふすまの下に待みん
寄車戀
待わひぬしのひ車のくるまたに猶やるかたもなき心地して
若松の思ひのかけや見えさらん忍ふ夜くるま道たとるまて〔ともイ〕
待空戀
うたゝねのまとろまぬよのなか／＼に今ほと鳥の空音〔はつねイ〕をそ待
さゝかにの糸は軒はに露見えてくへきよあくる空も恨めし
人とはゝいかゝこたへん月まつといひし空かは有明のかけ
おなし心をよめる〔イナシ〕
人もまた人め忍ふと思ふまによひのま過て鳥そ鳴なる
待のまに思ひたえなは打ねても待へきものを夢の浮はし
初逢戀
これまてもしらはとはゝや新枕なを行末の契りいかにと
新まくらかはす一夜をちよまてと言葉のこらす契りつる哉
逢戀
忘れにき逢にかへたるうき中〔ことイ〕のやかて別れに向ふへきよを
あふことひといふことを〔イナシ〕
あすやまたさらに戀路にまよはまし逢を限りも僞にして
俄逢戀
風のまにおもひもかけすむすひにき軒はの荻の露の契りは
〔逢切戀イ〕
あはすはと思ひしものを玉の緒は別れん際も知らぬ夜は哉
稀逢戀
いかにせんよるの衣のおさをあらみ重ねても猶うすき契りを
文安五年四月十一〔八〕日内裏月次五十首御續歌に夢逢
戀
夢にてもとはれにけりなおもひつゝぬるてふ事そ僞もなき
おなしこゝろを
おもひねの床はなれ行夢たにも猶俤をかたみとはして

こよひよりあひみぬさきを思ひねに問れし夢そ覺て嬉しき

亞槐集卷第八

戀部

寄源氏物語名戀

諸人の同しかさしにまかへてもあふひてふ名をかくる比哉

欲別戀

あふこともせめて思ふにつらき哉別れにむかふ心まとひに

おなしこゝろを〔イナシ〕

きぬ〳〵をおもふ涙をしりかほに鳥もをくれぬ初音鳴なり

いかにせん賴む夕も程そふるかつみなからのきぬ〳〵の空

別戀

別路は思ひしるともうかるへしさもあらぬ人の涙つれなき〔さイ〕

岩戸明し神の代まてにかけまくもかしこけれともうき別哉

人もまた涙をかはすきぬ〳〵の袖をはほさて形みにやせん

忍別戀

あはれとや人は思ひし忍ふとて我いそきつるきぬ〳〵の空〔袖イ〕

忿別戀

我のみのうき名なりせは忍ふとてまた深きよに別ましやは

惜別戀

きぬ〳〵にくらき涙よしはしまてうき俤をせめてとゝめん

深更別戀

世にもれはまたとふましき契りゆへ別れに深きよを恨つゝ

恨鳥別戀

初音なく鳥の涙をかりそめにおきて歎しまゝのきぬ〳〵

寄鳥戀

恨みわひ〔ぬイ〕鳥もしは〳〵鳴よはのあけ暮まとふきぬ〳〵の袖

負戀

つれなさもつゐには人そかつしる〔かイ〕や通はすなりしまゝの繼橋

後朝戀

きぬ〳〵を思ひ惱むに殘りつる言葉盡して今朝そかきやる

おなしこゝろを〔イナシ〕

逢すはといひしに違ふ玉のをゝなからふる身と人や思はむ

今朝も猶言葉のこりて鳥の跡面影なからかきくらしつゝ

寄衣戀

いとせめて思ふやせみのから衣かへすに夜の夢はまたねと

後朝切戀

ゆふへとは契りをけ共今朝は身のきえをあらそふ道芝の露

歸無書戀

別れにし今朝はいのちのいかに共とふへき人の玉章もみす〔なしイ〕

逢不會戀

うき事のためしなりつる別れ路の俤しのふあけくれの空

いのちをそしらぬといひし行末に契りは絶つ同し世にして

おなしこゝろを〔イナシ〕

うかりしもたゝ一たひの別れとてこりすや人を猶したふ覽

〔新續古今〕なからへて今更なけく命こそ逢にかへたるつらさ也けれ

かよひ路のたえにし後はをさゝ原一よもほさぬ袖の露哉

寄柱戀

うつり香の殘るもうすき形見哉人のよりゐし眞木の柱は

寄鬘戀

ねくたれのその玉かつら俤をかたみとまては思ひかけきや

寄鏡戀

はなれしといひし鏡にうつらねとけに俤の身にやそひけん

通書戀

かきやるもわか涙さへさそはるゝあはれはみるや水莖の跡

なをさりの鳥の跡とて恨しよいつかは我もかきつくしつる

顯　戀

たつ名とてさのみはなとかかこつ覽たからきにより洩す涙そ

やすく世にもれにける哉君に我しらせかねつる思ひ成しを

寄月顯戀

くやしくそ月に忘れてのほりつる思ひも袖の露のうてなに

隔夜戀

なをさりに人は思ひやしりぬ覽一夜まろねの床のけしきを

追從戀

きぬ〳〵に恨みてあくる槇の戸をいてゝ控ふる袖もはかなし

難忘戀

あふ事のかたきをゝきて忘んとしゐて思ふもかなはさり鬼

尋　戀

我こひの山もとにのみ迷ふかなみわと契りし杉のした道

寛正四年七月七日七十首續歌の中に互疑戀

人も又おもひかへるな行末をともにあやふむ戀路なりせは

戀のうたの中に疑眞僞戀

契りしに〔を〕なをやたのますと〔たのますといひイ〕ひやらは心淺きにわれや成らむ〔なんイ〕

疑行末戀

かきりある契りそしらぬもろ友に心にかなふ命なりとも

僞　戀

したはしと我いひしをは僞りと思ひもたさて猶そうらむる

厭　戀

しりにけん人に〔よイ〕いとふも苦しくはましてうき身に深き思ひを

被厭戀

せめて我身のとかも哉それをたにいとふを人の理りにせん

思後世厭戀

水莖にうつすむくひをみてやかく深きえにしも絕んとす覽

從門歸戀

つれもなき心のむくらさす門の露に袖ふれ歸るよふかさ

おなしこゝろを〔イナシ〕

月尋にとふ舟人もつれもなく門させりとて歸りやはせし

悔　戀

しらて社憂もつらきも聊ちけれ悔しかるへき身の契りとは

顯悔戀

やちたひも流れし袖のみなと川歸らぬ名社かひなかりけれ

誓隱戀

つれなしやさたかにかけし神山に椎しは隱れ行衞しられす〔ぬイ〕

變　戀

水莖の跡はさなから流れてといひしにたかふ言のはそうき

われのみそうつろひかたき世中は心の花もかく社有けれ

誰おもふ涙のしくれ身にふれて我にことは〔のはイ〕の色かはるらむ

寄月戀

かたみそと思ひしよりそ曇り行さやけき月にさやは契りし

寄船戀

とへかしな契のよそになるとよりさしはなれ行船はいかにと

寄鏡戀

心たにうつりゆかすはともにみし鏡のかけはさすか絶しを

うつるてふ人の心はますかゝみ我かけはかり殘るにそみる

おなしこゝろを〔イナシ〕

かけをたに殘さはせめて淚川人のこゝろのはなも〔の〕鏡そ〔もイ〕

借名戀

元の身や靡くにつけてつらからん黃昏時に名をはかへても

戀の歌のなかに

〔新續古今〕ぬれつゝもとふへき人の心かはそをたにくもれ村雨のそら

むくひをも人にうちそへかこつ哉数かん爲の世に生れ來て

後の世もあはれうき身の契りそと戀てふ道にめくり逢人

いかにせん身はならはしの夕くれに恨ても待心よはさを

いひそめし事をくやしと思ひ出は忘れはてんや嬉しからまし

それをたになひきて見えはよしや猶思ひの煙たき增るとも

等思兩人といふことを

なひかすは共にをたえね夕手繦かけて戀しきこなたかなたも

片戀

心かへする世なり共いかて我つらきけしきを人にみえまし

われを思ふ人をはしらす戀侘てあやなむくひの始とやなる

久戀

あらはあふ世に年ふるもはかなしやをのか物から知ぬ命を

年を經てなからふる身よ大かたのよかれをたにも歎く習に

寄露戀

をく露の命のいつを限りとてわか戀草もかれんとすらん

寄山戀

とこの上につもり初にしちりよりそ我身も戀の山守となる

寄松戀

昔たれたれしあれはとなくさめて心の松に千世もへぬらん

舊戀

としをふる淚の袖やあふ事のまれなるいろに出て見えまし

こりすまの波かけ衣たちかへりまた露はらふ蓬生のやと

いく年か秋はかきりのもみちをも袖にこき入て淚まかへし

忘戀

よしさらは戀そむる身といひなさん驚かす共思ひ出すは

今さらに思ひいつともよもとはし我わすれぬをしらぬ心は

寄若草戀

つまはやと思ふに袖をぬらす哉雪間にもゆるこひ忘草

被恨戀

身のとかを心へたてす語り出は恨かほにはむかはすもかな

恨

あはれ共いふへき人の心かは憂きをもうしとよしや喞たし

いはてすきいひておりおり喞つをは恨のひまの有身とや思ふ

披書恨戀

はかなさの數かきそふる玉章に思はぬ人をうらみてそ見る

おなしこゝろを〔イナシ〕

あはれてふ言の葉もなき玉章に何となみたの露かゝるらむ

人傳恨戀

わかおもふ心のかきりつたへすはあらぬ恨や人に分まし

恨身戀

もしほ草つらくみゆともさそひこよ我みをうらに歸る白波

恨絶戀

絶ね〔そイ〕ともかけて誓ひし神嶋やいそまの海士の里のしるへ〔にイ〕は

互恨絶戀

誓しこそ共にひまゐる中ならめ言の葉さへにかれや果ぬる

寄月戀

いまこんの契りたになき身を秋の月にられふる有明の空

寄心戀

幾たひか身をいつはりになしつ覧おもはしとても思〔は〕ふ心〔のイ〕を

絶戀

はかなしや思ひ絶ても程ふるをたゝになかめぬ夕くれの空

寄硯戀

よはの床はらはぬのみかかき絶て硯も塵のつもりぬる哉

曉戀

うちわひて今はたのまん夢もやは有明の月に鐘ひゝくなり

老戀

いかにせん涙を露にまかへてもわか身老曾のもりの下草

寶徳二年三月十九日大樹家月次五十首御續歌に旅戀

わするなよさらぬ契りそ我も旅人もかりねの一夜成とも

享徳二年七月内裏月次五十首に古戀

たのまれぬ心の古はまさしくてあはぬそ中の契り成ける

おなしこゝろを

末つゐにあふよしも哉とふうらの正木のかつら長き契りに

亞槐集卷第九

雑部上

關鷄

明わたる關のとほそにうちはふきまた一しきり鳥やなく覧

なく鳥のをのかたれをかしたふらん關の戸あくる逢坂の山

あふ坂やおきなれてもる關の戸に鳥も時しる明かたのこゑ

文明元年十月五日日吉の社のほとりにて基綱朝臣いさなひ侍しかは寶藏院といふ寺にて百首の續歌よみ侍し中に松

夢のうちに見し松かえのいかなれは身の小高くも生昇〔りけイ〕る覧

おなしこゝろを

いつ見るもあかぬ松かな春秋に心をうつす色はなけれと

嶺松

夕ゐると見えつる雲も浮立ぬあらし吹けりみねのまつ原

浦松

わすれすよ芦へのたつの聲はして夕汐みちし和歌の浦松

あけわたる波をかさしの玉くしけ二見の松のあかぬ色かな

薄暮松風

風はなといつともわかぬ松の葉にゆふへ淋しき音をそふ覧

竹

萩の戸はまた秋遠しことし生の竹のうてなの露の凉しさ

岸竹

ねくらとふ鳥は聲して川かせもふかぬになひく岸のくれ竹

寛正元年十二月廿三日内裏御月次に窓前竹

末たかく生のほりぬる竹の葉になか〳〵窓のうちそ晴たる

布引の瀧を見にまかりて

山ひめの手もたゆ〔とイ〕からす織かけてさらすや幾世布引の瀧

世のうさもわするゝはかり驚やなみたにからぬたきの白玉

名所瀧といふことを

布引と名にはたてともしらきぬをかけてそ落る瀧の岩波

行てみぬみねのいつみのいかならん落てそ瀧つ布引のみつ

おりかくる高ねの雲のころもにやあまるよしのゝ瀧の白糸

名所市

檜原にもさはく聲して市人のかへるさをくる三輪の山風

名所橋

朽ぬ名の昔ながらにのこらすは誰かははしの跡もしのはん

庭　鶴

わかみちも庭の松かけまなつるに千代をまなはん行末の爲

名所鶴

音をそなくいまもなるゝは友鶴の昔にもにぬ和歌の浦はに

三井寺にまかりける時古寺をよめる

古寺路

たのもしなわかたつ柚木引分しこの山寺の法のゆくすゑ

おくふかく入相のかねの聲はしてまた門みえぬ杉の下みち

遠寺鐘

きく人も寢覺の心雲わけて尾上のかねにかよはさらめや

山　家

くる人のおさまれる世と語る社山にても猶うれしかりけれ

立出てみるにそさすかあはれなるおきふしやすき柴の庵も

此山に宿りしてぬる友もかないてぬうき世を一夜いさめん

山里も世のうきよりはとはかりに住よくとても心とめしな

頼みこし山やあらぬとゝもすれはもとの身にしてすむ心哉

うきことをきかぬも君か惠みそよたか山なれは身を隱す覽

のかれ來てすむと思ふないつかたも我大君のきみの山さと

歸るそとみし山人のしはしありてふもとにたつる夕煙見ゆ

山家苔

一たひは我か踏分つ浮世よりいりにし山のこけのかよひ路

山家鳥

愛もたゝ人はとひこす鳥のねのきこえぬほとの太山ならねと

名もしらすみさりし鳥は近く馴てうき世に遠き深山への庵

山家人稀

いかにせん草のいほりに山鳩のよるの雨よふゆふくれの聲

友とするひとりふたりは山ふかみ有かなきかの庵の通ひ路

山家送年

いくたひかかやか軒端もくちぬらん我引うへし松の下〔庵イ〕露

谷　梯

となりなき谷の下庵とふ人のあとやはみゆるこけの梯

閑　居

しつかにもすめる庵かな松のとし竹のよはひを獨か〔そ〕すへて

浮世にはかく勝りける住ゐをも語らんとすれはとふ人もなし

閑居夢

人とはぬ宿はうちぬる夜はたにも現の見えて夢そ淋しき

閑庭苔深

松風のちりはらふ音はしつかにて日毎にあつき庭の苔哉

幽徑苔

山ふかみ岩ほつたひのかよひ路を蘚のむすまて問人もなし

鷲

姿をもみせしとやすむ〔るイ〕筑波根にかく〔かゝイ〕なく鷲のかゝる浮世は

鵲

いつくにかわたるかさゝき一聲ののちまてすめる有明の空

遠村煙

たてそふる宿やあまたの夕けふり一むらくもるをちの山本

田家水

もり捨しかりほの筧朽はてぬあせ行水も音細くして

田家鳥

鳴そたつ小篠の庵のしのゝめにあはれたへてもも山田哉

柚川筏

さそなけにくたす筏のとことはにうき世を渡るみをの柚川

樵夫

かくれかのある世もしらすし〔てイ〕は人や山に入ては市に出らん

夕樵歌

くれけりな嶺にはをのゝ音たえて谷のこかくれうたふ樵人

湖眺望

しかの山の鐘や聞らん釣ひとのけふも暮ぬと漕かへるみゆ

さゝ波も名のみ也兎山かけてみるめにあかぬしほつすか浦

湖上雲

しくれつる比良山おろし末見えて雲もうきたつ興津白浪

遠帆連波

をひてそとまほ〔きイ〕引つるゝ興津舟みるめや遠き行としもなき

望遠帆

友船も思ふとまりやかはる覧きほふかた帆に漕わかれゆく

昆明池

ひこ星のかたちをうつす池水は天の川をやせきてたゝへし

李太白

水莖にさくと見し夢まさしくそことはの花と世に匂ひける

王昭君

都出しかたみなるへきまゆすみもきえて悲しき旅の空哉

琴

そのかみは五と聞し琴のをにまたかけそへしねも絶にけり

かけそへし二つのを社今の世に名のみたえせぬことと成ぬれ

寄琴雑

ことのねにかよふやいつれ雨はるゝ庭の松風のきのたま水

筝

あはれ昔心ひきてし筝のを〔をイ〕もたつとはなしに別れはてぬる

心静延壽

をのつから心ひまある柴の門さゝすとてくる老らくもなし

披書逢昔

流れての世にもかはらしいにしへのみちはさたかに水莖の跡

室町殿より万葉集のうたの詞の一句を題にて五十首かきて奉れと仰せられしときかきてまいらすとて女房のもとへ申遣し侍し

古の時雨ふりをける言のはもこのたひさらに色やそへまし

侍従大納言實隆卿もとよりしなの櫻のかへり花の枝にさして

まちつ〔け〕ん人のみかたき宿なれや年にまれなる花は咲兎かへし

珍らしき言のはそへて待みめや年にまれなる花しさかすは

定家卿のかゝれたる色紙をとし比持たりしをことの故ありて僧宗祇につかはすとてつゝみ紙に書つけ侍し

さま〳〵にあはれとをみよ今の世に殘ることはの花鳥の跡

三條相府公敦公五十首歌よみてみせられ侍しにかへす

とておくにかきつけ侍し
よしあしをわく事難し和歌の浦の道に名をかる年はふれ共
返事　　　　　　　　　　　　內大臣
わかの浦のもくつをてらすしるへ哉かゝる言葉の玉の光は
横川住侶慶嚴阿闍梨正教の文卷に勸學文勿レ謂ニ今日不レ學有ニ來日一を書たる傍に書つけ侍し
いたつらにけふくれことし暮はてゝ哀老ぬる身をや歎かん
室町殿御續歌の中に述懷
家の風老の浪とをあはれてふことたにかけは袖はぬらさし
おなしこゝろを
おろかなる心はわかすよそにても我〔はイ〕をや人の憂身ともみる
たれなりと後しらるへき言のはのなき水くきも跡や殘らん
心なくて詠こしをも誰かおしむ六十あまりのあたら春秋
世中はさのみこそあれ疎にてうからぬうさを歎つるかな
苦しきにくるしき事はかへたくてなとかかたみに人を羨む
ことの葉の一花もかな家の風ひろく世にちる程はなく〔見イ〕とも
世のうさも人のつらさもふかゝらす春花をめて秋月をめて
うけかたきあたらこの身を捨すして捨はてん社悲しかりけれ
おしへ置きゝも置つるかひそなき君に仕へん道のさまゝゝ
われよりもな〔なイ〕を數ならぬ人はよもさのみ心のなきも歎かし
物にそひこゝろの色やなけくとてすみの袖にも涙落けり
せめて身をしるとやいはん愚にて世にありふるを歎く心は
獨述懷
愚なる身には等しき人もあらしたくひなき名を世にや殘さん
われはかりわか君あふく人はあらしと思ふ心のおろか成覽
老後述懷
これそこの老の心にねかふことさすかあれ共思ひとをさて
春述懷
浮世をはいてやと思ふ折しもあれ花さへさそふみ吉野の奥
寄花述懷
いかにみる心とたにもしらぬ身にあやしやあかぬ花の色哉
寄命述懷
愚にて月と花とをいかゝ見んちゝのこかねもよしや春のよ
寄鏡述懷
朝毎の鏡はさても見るからちに世の俤のかはらすもかな
寄道述懷
山水をかけひにうくる庵にてものこる二のみちはわすれし
老ゆけとさかぬことはの花園に心のたねよ有かひもなし
近江國柏木といふはしる所にて應仁の亂世以來おりおり下りてすみ侍し比おなし國百濟寺西谷の曼陀羅堂の前に古鞠懸あり一本闕たるをうへつきたきよし寺僧とも頻望侍し難波一流のうへ侍る懸なり〔にけイ〕かの說當流の說通用の事有てそのやうをそうへをき侍しさてこのかゝりうへける人誰かと申傳侍りけると尋ね侍れとも時代へたゝりたる事にてその物し知れる人もなきよし申もあはれにて妙音院といふ僧坊にさしをかせ侍し
庭の松けふうへそへていつの世の誰ともしらぬ跡しのふ也
懷舊歌の中に
世にあるをおもふこゝろはたゆめとも昔の友は猶そ忘れぬ
忍ふらんおもふも悲しおもかけはきのふをこその夢の昔に
忍はるゝ數となるにもわすれすよ馴て聞つるむかし語は

常徳院御一回に懐舊を

うかりしをこそとやいはんことし又めくる月日にちかき佛

寄月懐舊といふことを

更行は袖せはきまて月そとふ數まさりぬる昔語に

燈

消てまたをのれかゝくるともしひの光もさひし明方の窓

寄月往事

月見つゝおもひわたせるいにしへの事やねぬよの夢の浮橋

往事如夢

昔おもふうつゝの夢の浮橋はぬるからちこそとたえ成けれ

夢

なをたのめ神の心をことのはにまさしくみつる春のよの夢

曉夢

あはれ我世は明かたに更はてゝよそけにみつる夢も恥かし

夢驚

曉の夢をはゆめとおとろくやけふも暮ぬと聞し鐘のね

草庵夢

山ふかみ人そわけこぬくさの庵あとなき夢は行かへれとも

人丸の影前にて三十首續歌に夢を

限りなく道守るへき影なれやあふけは見えし夢のかたちは

ある人定家卿影をかゝせて供養に百首の續歌すゝめ
侍し中に寄夢無常

おとろけは心そ夢に紛れぬるむなしかりけりねても覺ても

別部

餞別

あひそふる親のまもりもなき身にはしゐて別を誰か惜まん

離別

老てゆきおいてとまるそ哀なる悲しからぬはなき別れにも

坂本に住侍し比僧宗春明日よし野の花見になん思ひ
立より申て來りしに扇をつかはすとてつゝみ紙にか
きつけ侍ける

春もくれはかへりてみせよ言の葉にちらて殘んみ吉野の花

大膳大夫入道宗勤若狭の小濱に侍し比まかりて日こ
ろへて歸りたりしにひかさといふ所まてしたひ來て
宗勤もやかてのほるへきよし申てをの〳〵後會を契
りてわかれ侍ぬるにおもひつゝけ侍る

行末をともにみやこと契るたにわかるゝ程の袖はぬれけり

返事　　宗勤

行する爲の都にむかふ袖たにもぬるゝになれし別れかなしも

旅部

旅を

いてゝこしふる里へとて行人をうらやましくそ歸りみし哉

山旅

またしらぬ山のあなたを逢人にとひてやすらふ岩のかけ道

朝旅行

雲となる岩ねを床とこよひもや山のしめりに袖ぬらさまし

夏旅行

のるこまもいさみにけりな宿出て朝露ふませ野原ゆく程

旅行友

石ふむもあつき河原は楸生る陰にやすらひ行もやられす

獨ゆかは物うかるへき野山そといひ出す〔ははすイ〕にも道そなくさむ

旅宿夜雨

くらき雨の窓うつ音に夢たえてうき限りなる旅の宿哉

旅宿夢

都おもふをさゝの枕かせたちてさやかに見えし夢は殘らす

江洲柏木といふ所にすみ侍し比京へのほりて三十首續歌よみ侍し中におなしこゝろを

たひに出て思ふゆへなり都にて都のみやは夢にみえつる

旅泊

舟なから袖うち敷てねぬる夜のうきにも馴て夢そみえぬる

うきねする枕の下の波のまにしはしそ夢をみるめかりつる

覊旅

露霜のたてぬきなるゝ旅衣いく夜しほれていくかほしけん

幾夜われ山の岩根にむす苔の袖しきかはしししほれきぬらん

みちのくの遠きたひね〔にイ〕をすか枕とふのすかこもいくよ敷劒

たひにのみ思ひの外の年をへてみやこのかりね今そ嬉しき

覊中野

むかしたれしらぬわれをもやすらへて〔とイ〕野中に庵を結置けん

覊中懷都

思ひやるこゝろのうちは日にそへて都にちかき旅の空かな

海路

松風に出るいそへのとまり舟いかなる夢に酒わかるらむ

けふはたゝのとかなるへき波路そと聞になくさむ舟の內哉

草の庵もかはらぬ舟のまくら哉とまふく軒にいその山風

舟

身のうへはたれもわすれて友舟のたゆたふ波をみるか危き〔こゝイ〕

夢そなき錨おろしてねぬれとも船うつ波のすさましきよは

渡船

我ならて舟待人もなき暮にものうくよするわたし守かな

古渡舟

舟もはやつなきて歸る川長にわたらてこよひ宿やからまし

すみた川舟待ほとに日は暮ぬむかしもかくや都こひけむ

岸頭待舟

日暮ぬと我こそいそけすみた川船さしかへる程ののとけさ

物名

はるたつ日

たむくるに神の惠みやなをそはるたつひろまへのきぬも豊に

きくもみち

いかにせん詠めし月もかき曇り野分人もみちくさしほるゝ

うほのな十

山をこしおめにますひをいるかとて振さけ歩む旅の辛さは

壺槐集巻第十

雜部下

哀傷部

ある人二月花の比身まかりけるに

よそへつゝ見るも悲しき〔はイ〕おほかたの春の嵐に花のちるをも

百首續歌よみ侍しに無常

おもへたゝ北なる州にすむ人も千とせの後はあたし世の中
八月八日〔はイ〕勝知院殿の七めくりの日にて提婆品捧物な
ゝ室町殿にたてまつり侍し經の包紙にかきつけ侍る
けふはさそ七年さめぬ思ひにて半の秋の夢もかなしき
かすならぬ袖にも秋の露そをく世におほひてしかけを忍て
御かへし
見し夢の分れは程もなゝとせのあととふけふそさらに驚く
大かたの袖たにあるに〔をイ〕思ひやれなをこの本の露のふかさを
享德三年正月廿九日嵯峨の崇福寺といふ所にて〔にイ〕贈大
納言の墓所の侍しに雪をわけてまうて侍しかの在中
將の惟喬のみこをとふらひにをのにまかりよみ侍し
事をふとおもひ出て
夢とたに思ふはかりの影もみす雪ふみ分て跡はとへとも
長祿四年十一月一日祖父黃門禪門の三十三回なりか
の嵯峨の墓所にまかりて
三十あまりみしそのかみの初時雨けふも幾度袖ぬらすらん
あはれなりせめてわかとふ今日の跡末の世迄の名は殘る共
文明十一年の秋伊賀前司賢盛年比すみ侍し女の身ま
かりけるをあふみの柏木といふところよりさふらひ
にのほせ侍し文のおくにかきつけて侍る
袖よいかに露けかる覽秋やはといひし別れも思ひしられて
かへし　賢盛
袖もけにぬれこそまされ秋やはと夕の露のかゝる別れに
僧正徹十七回にかの遺弟正廣經文の歌すゝむるつい
てに懷舊のうたに
とふあとのまたおとろかす月日にはかへれと覺ぬ短よの夢
文明二年十二月廿七日　仙院崩御の事明る廿八日柏
木にてうけ給りておとろき侍しおりふし風氣にをか
されて老病たえかたきころにておくる正月にそのほ
り侍しそのころおもひつゝけ侍し歌とものなかに
色香しる君もなき世にさく梅の花のうへまてあはれ成哉
月は猶なみたうちそへかすむ也雲かくれにし影さたかにて
さすかみな歎しつまるほとならは遅れてきくを哀とはしれ
冷泉三位爲廣もとより顯豪僧都逝去し侍る事をとふら
ひをこせておくに
おもふそよつらなる枝の下おれにさそな歎きの森の音のは
返事
おもひやれたのむかたえは朽くて殘るなけきの森の老木を
父の思ひにてこもり侍しに〔に以下ナシイ〕聖護院准后滿意より壽量品
を給るつゝみ紙にかきつけ侍る
此法の花のひかりにあたるてふ人はやみちに迷ひやはせん
御返し
知らめやとふにつけても後れにし跡にかひなきねのみ鳴さは
靑蓮院入道內府于時帥大納言實雅より淨土三部經をくられ
しつゝみかみに
しるへせしわかの浦はの老のなみたちも歸らてぬるゝ袖哉
かへし
君までも袖ぬらしけり立をくれはや道迷ふわかのうら波
後成恩寺殿兼良于時關白左大臣より亡父の事なけき思給ふ
ことなと消息ありて
和歌の浦に　年へて住し　あしたつの　をのか翅に

霜ふりて　千世もさ誰も　おもへとも　歎〔なさけイ〕きもしらぬ
秋きりの　はたへを犯し　身をしほる　あらしの風に
たれこめて　つもる月日も　しら雪〔くもイ〕の　猶はれやらて
しかすかに　年も歸れは　あらたまる　事をかことに
たのみつゝ　猶さりともと　おもひしに　こは夢かとよ
きさらきの　二日の空の　あけく〔きイ〕れの　かすみと共に
消にけり　この世中の　つねなさを　いへはさら也
しかはあれと　昨日けふとは　あたしのゝ　露思ひたに
よらさりき　まして歎の　このもとは　さこそ言のは
なかりけめ　かゝる悲しき　折にあひて　世を鶯と
なきわふる　涙も雨も　しく〳〵と　ふりにし事を
さらにいま　思ひ出れは　てるひかり　ちかき守りの
身なからに　みはしの櫻　たちならし　おとろの道を
ふみわけて　くらゐの山の　ふたたにを　きはめし迄は
をのつから　三代の君にそ　あひにける　我身はなれぬ
玉てはこ　二のみちを　たつぬれは　なと白川と
いひをきし　春のとまりの　花のかけ　山もとかけて
みなせかは　かすみの洞と　なしつほの　むかしの跡を
かへすして　いつゝの人に　かそへしや　家のはしめと
なりにけん　流れたえせぬ　かはたけの　よゝに共なは
きこゆれと　あゐより出て　あをやきの　いとも提き
みことのり　降りし日より　こゝのへの　大宮にのみ
つかへつゝ　きよき渚に　ひろふてふ　玉のかす〳〵
あつめても　いにしへ今の　ことのはに　新たにつくと
なつけしは　万代までも　わか君の　みそなわせとそ
おもひける　つゐに名遂て　しりそくは　あめの道とか
いふなれは　妻木こるへき　いとなみに　苔の袖とは
やつれしを　思ひつくはの　かけひろき　うへきの風に
なつさひて　けに涼しさは　あすかゐの　やとりも更に
わすれぬや　また春秋は　はなのもと　月のよすかに
まさゐして　玉のむしろを　しきしまの　道のさかりに
あひにあふ　かゝる時代に　あめつゆの　めくみも事に
ふかけれは　ねても覺ても　世をいのり　國にむくひん
ことをのみ　思ひしほとに　うつせみの　空しくなれと
こけの下に　くちせぬ玉は　いまもなを　草をむすはん
とおもふらん　思へはかなし　ひとのよの　六十あまりの
みつせ川　かへらぬ水の　あはれけに　いつの逢せを
たのむらん　きけは古へ　ありきてふ　琴のをたちし
人なみに　立やかへると　我そての　涙のつゆに
たまよはひ　よはらん聲は　いたつらに　松風のみや
空にこたへん

二月の鶴の林のけふりにも君かなけきや立まさるらん

和歌の浦に留る玉もかひなきはさきたつ波の返りこぬなり

御返事

くれ竹の　世々を重ねて　たらちねの　つかへし道は
ひさかたや　天津日影〔みイ〕の　やふしわかす　てらす内にも
このきみの　仰かしこき　いにしへに　立歸りにし
和歌の浦に　波のしはをも　たゝむより　苔の袂の
おなしくは　岩ほか中に　すまはやと　あらまし乍ら
年を經て　猶のかれえぬ　ことのはの　花をそふとて
こゝのえの　雲の上には　月をめて　廣きうへきの

みきりには　四本の下に　立ならし　しるへと也し
みち〳〵の　その一かたも　まなひかね　身をとに角に
なけくまに　さても別の　限りある　六十三とせの
きさらきや　つゐに朽ぬる　あをやきの　いとよはけにはは
見えしかと　終り亂れす　一すちに　唱へしみなを
きゝしとき　三のこゝろの　まことにて　たのむ人をは
すてすてふ　ふかき誓の　かはらすは　佛も御手を
さつけつゝ　花のうてなに　うつるへき　ことも今やと
たのもしく　思ひかへせと　かへりこぬ　道のならひは
うつせみの　空しきからに　むかひゐて　夢もうつゝも
わかさりし　心まとひに　ほともなく　明行西の
山かつら　高ねをかけて　なひきつる　よはの煙の
するまても　怨めしかりし　藤ころも　立事やすく
春くれて　雨も涙も　ふりまさり　思ひ晴せぬ
折ふしの　憂をとはるゝ　たまつさに　せめてなくさの
濱ちとり　跡はかす〳〵　おほけれと　をゝたちにける
ふることに　思ひよそふる　〔なさけイ〕歎きさへ　今はかひなく
見るにこそ　更につらさも　ますかゝみ　また俤の
うかふより　涙くはゝる　水くきに　思ふ計の
ことをたに　かきも流さて　やま川の　岩まにむせふ
こゝろをは　さなから君も　くみてしらなん
音をそなく我身をくらす老の鶴のはやしに入し二月の空
わかのうらにかへらぬ浪の哀をはほさぬ袂に猶もかけてよ
おなし比堯孝法印本より
日數さへしたふにつけて春雨のふるも涙ときそなけくらむ
老のなみ立をくれてもかはかぬはなれこし苔の袂なりけり

かへし
おもひやれ日數もともにとゝまらて涙降そふはる雨の空
かはかすときくもなつかしたらちねになれし計の苔の袂よ
常德院殿かくれ給ひしころ思ひつゝけ侍る
はしめなく　終りなき世に　めくり來て　をのつから成
ことはりを　みしも聞しも　とゝまらす　過し中にも
〔たイ〕たのみつる　ひろき梢の　かけかくす　闇のうつゝは
それもみな　夢にまさらぬ　おもひにて　心まよひの
とにかくに　日數うつりて　卯月てふ　名も恨めしき
こゝぬかの　朝のけふり　たつと見し　涙もきりて
まほろしの　有かなきかの　おもかけは　何なか〳〵に
のこるらん　馴にし事を　つく〳〵と　思へはかなし
わかの浦に　道を學ひて　まなつるの　あさる渚の
しほかひに　玉もかす〳〵　あらはれん　波の打きゝ
人しれす　かけし心は　袖ぬるゝ　よすかとのみそ
成はつる　哀むかしへ　いひをきし　まれなる齢
七そちの　餘れる迄に　なからへて　惜からぬ身の
かはりゆく　習ひもかなと　おもへとも　猶をくれゐて
なけく比かな

釋教部

釋教
身を深く思ふのみかは法の師の世をへたてなく祈るかしこさ
えにしあれは衣の裏の玉かしはかくれあらはれ知人そしる
のりの道さとりひらかん一きはゝいさやいさ此門に入身も
慈惠大師の尊像を每月兩度すり奉る事　上は玉躰より

はしめそのほか私さまの妻子從類のため又兩道の門
弟祈事多年になり侍ぬ今老病心ほそく侍るにけふも
又摺奉るとて思ひつゝけ侍る
わか身世になからん後の末まても祈る心はとをれとそ思ふ
夕聞法といふことを
いたつらにくるゝをおもふ心には入あひの聲も法と社きけ
江州百濟寺一見の時聖德太子の御堂に參り侍りしに
かの所〔門イ〕に太子御願文云遠聞ニ我寺名一近拜ニ見寺塔一往〔殊イ〕
經ニ一宿一獲必生ニ一淨土一との御誓をみてをのつから
一夜彼坊にとゝまりてつとめておもひつゝけ侍し
生れあはん便りをきけは此寺の一夜もかりの宿りならすよ
按察使大納言亭にて往生要抄の天道を講するを聞て
庭のくすの葉に書付侍る
おもへたゝかさしの花の色も香もつゐにしほるゝ天のは衣
かへし　按察大納言親長
しほれ行かさしの花をみるからにいとゝ頭の雪そわひしき
堯孝法印來て歌よみしに念珠を落して侍るをあした
につかはすとてつゝみ紙にかきつけける
いかてかくうき世のちりの中にしもきよき念の珠は有けん
かへし　堯孝
さらにいまことはの玉を引珠のちりにましはるかひも有哉
心經をよみ侍りける
山さくらおりかさすとも心せよつゐに空しき色香ならすや
信解品
磯かくれまよひ行てもあまの子の歸るなみにや玉は拾ひし
陀羅尼品法花經者除其衰患
山櫻おれはしほるゝ色もうしあせぬ御法の花をかさゝむ
佛前にて看經の序に見し人々の菩提をとふらふとて
おもひつゝけ侍る
我たのむ國にゆけとそ朝ことに短かなき世の跡はとひけり〔るイ〕

神祇部

春日
君をいのり〔るイ〕身にたのみても春日山やまとし高く仰きつる哉
春日社參詣のときよみ侍る廿首の中に
あふくかたあまたあれ共わきて此我うち神を願まさらめや
勅なれはつかへまつりし年々を神の御前におもひいてぬる
禁裏月次御續歌の中に神祇を
あとたるゝこの日本の國つかみ君まもるてふ數もしられし
おなしこゝろを
諸人も神のめくみの廣まへに思ふすち〔つイ〕をやたてるみてくら
なをさりにあふくへしやは今も世に神世をうつす敷嶋の道
天地のはしめもいまも神の代のみちに言葉の花そひらくる
たまかきの明行まゝに白妙の袖見えそむる神の宮つこ
吉田の社によみて奉りし歌の中に
いまこそは森の草木もめくむらめもとの宮ゐの山かけの春
文明十一年六月三日御靈八所明神に奉らるゝとて内
裏より十首題を給りしに寄神祇祝
世をいのる出雲の寺のいつも／＼此神まもる法はたえせし
社頭祝を
すみよしによりくる波の玉津嶋かへらぬ宮ゐいく世しる覽
すみよしに種をそ千世と祈つる神もうへけん松の言のは

諏訪の社の法樂に瑞籬
代々をへてのほる位のしなの〻や神垣たかき名をあふく哉
文明十一年九月十四日御臺御方（將軍家御母儀）御參宮とて柏木の茅屋ちかき所につかせ給しに參り侍れは此度の御まいりは世のみたれしはしもしつまるさまにも侍らはとの御願にておほしめし立ぬるよし承り侍りけれは女房のかたへ申つかはし侍し
世をいのる君か心のまことにや内外の神もめくみそふらむ
御返し
代をいのる心を神のうけぬ共此ことのはにさらにこそしれ

祝部

池水久澄
庭に落る瀧のしら玉かそふれは池の心にかよふ千代かな
享德三年正月十三日室町殿月次御會はしめに水石契久
千代のやとに御船こかんと白玉を岩ねより敷庭の瀧なみ
文安五年關白家千首續歌の中に松を
軒ちかくうへし松にそ契りつる君かちとせも道のめくみも
をなしこゝろを
住吉や玉津嶋松うつし植て道にともなふやとのひさしさ
大樹家御會始に松爲久友
君をまつしる人にして若みとり千世たちなれん春の宿かも
庭上松を
風をきゝ雪みんための庭の松わするゝ色「千代イ」もこもる千代「いろイ」哉
延德二年公性法印坊にて三首歌よみ侍し中に庭松
ちよまても二の道にまよはしな庭のをしへの松のことの葉
おなしころ扇なつかはすとて書付侍る
わかや「家イ」との風を扇につたへ置て契りし道を千世もわするな
文明十二年三月十四日將軍家（于時宰相中將）御鞠始あり准后もたゝせ給ふ予雅康卿（于時中納言）已上四人立侍し事はてゝ詠進侍し
君々の千世もつらねん袖をみて身に餘りぬるけふの嬉しさ
御返し　准后
末とをくつらねん袖をみても「につゝみてもイ」けに嬉しさそ猶身に餘りぬる「あまりぬるイ」
内裏十八日月次御續歌の中に祝を
ことしまたのほるもうれし位山あふけは高き君かめくみに
正月六日叙位に正二位の加階し侍り參議に任し昇進の事なと申ける文のおくに甘露寺大納言（親長于時右大辨）もとより
道をおこす君かしるへに位山のほるこゝろやさらに嬉しき
返し
道をおこす君か惠のかしこさにおろかなる身も登る嬉しさ
雅俊朝臣四品し侍し時東山殿より賀し仰られて彼朝臣によみて給りし
さらに今君かめくみのうれしさはつゝみやあまる椎柴の袖
御かへし　雅俊朝臣
きみかめくみ君か言葉の嬉しさもつゝむまそての色を添息
おなし時よみて奉り侍し
わか君のめくみに猶や椎柴の袖のむらさき色や「をイ」かさねん
室町殿御會に竹不改色

千世の色かはらぬ陰をたつぬれはこゝにみきりの竹の行末

　大膳大夫入道宗勳もとにて春祝を

わか道の老の坂とふ人にけふ千とせの春のするもをしへつ

　寶德二年祝の歌の中に

さゝれ石にいまもたとふる君か代は岩ほをまたん程そ久敷

　諏訪法樂百首歌の中に祝言

世には引ことを忘るゝ梓弓とるわさたえぬすはのみかりは

　此亭にて四季に會侍しに寄月祝

君か代にめくらん千々の秋のかけ空にはしるやつきの宮人

　寄矢祝

四の海静に成ぬものゝふの矢なみおさまる御代を待えて

　寄民祝

は衣のいはほに越てわかきみの民をなつるや久しかるへき

　寄旅祝

旅ねまてやすき山路の苔むしろ治れる代にしく事そなき

　寄道祝

つきせしな出雲八重垣いにしへもいまもへたてぬ敷嶋の道

我家のめくみにしるし世にひろき道にも君をさそ仰らむ

行末もなをそのほらん位山みちに二つの神しまもらは

　寄國祝

君もしらすおさむる國と成ぬへしつかふる人の心すくにて

右亜槐集十帖者。飛鳥井權大納言雅親卿之家集也。雖レ有ニ世本一不レ無ニ魯魚之謬一。幸今得ニ正本一故寫レ之以傳レ世者也。

　右亜槐集以一本挍正畢

昭和五年二月家藏甘露寺嗣長卿書寫の古本及押小路家舊藏の寫本を以て挍合畢第三卷に脱落せる歌十首あり〔〕を標してこれを補足す又第四卷に前後錯亂せる所あり其處に記せり

　品田太吉識

和歌部九十六　家集十四

爲和卿集

（土佐殿）永正十四年二月七日一條殿御會始　松還年友

君そみん老木の松もわかかへり限りしられぬ千世の行末

一條殿舊冬より御上洛。君公御同道□御會始之事被レ仰如レ此なり。

同八日土佐國守護代細川遠江守政益母　身まかりにけるとて方便品を勸侍けるに

かく法を心ひとつにうくる身も蒼生のかすならぬかは

六月十日土佐殿（一條殿）より住吉社御法樂とて人々によませられし時　水郷寒蘆

さはりなく蘆まの小船出いるや難波わたりの霜かれの頃

御上洛之御時。難風にあはせ給ふ時。船中にて三十首。ひと〲よませられて。御寳納あるへきよし御祈念有つれは。やかて波風しつまりしまゝ。其御法樂とて仰給ひける。やかて又御下向の御沙汰有。御上洛は去年十二月七日なり。

永正十五年二月六日細川安房守身まかりけるに　壽量品つかはし侍けるそのつゝみ紙に

見しよたゝいやはかなにもなる夢の現にかへれ人の面かけ

同（永正十六年）五月廿九日　姉小路前宰相濟繼卿身まかりけるに爲二追善一三條西前内大臣入道（堯空）勸給けるに聞法出家を

法の師の教ゆゝしく聞からに今はたかふる墨染のそて

永正十七年二月十一日滋野井會の發句に（今月十七日に細川高國江州へ被落了）

ふた道に名殘やいつれかへる鴈

三月廿二日半井明孝母越前國にて身まかりけるにあくるとしのおなし日よめる

やよいかに越路の鴈の名殘さへ三月の空にしたふへしさは

同廿七日後法花寺殿御七年に陀羅尼品

むつよろつ八千人までもうる法にもれんもれしは心とをしれ

五月廿九日明孝亭にて　雪（三日に高國出長（張歟）十一日三好腹切）

ふるまゝにいくその瓜木數たえて雪をおもにゝ歸る山ひさ

永正十八年三月廿二日御卽位。廿一日に雨降により。二日に御延引。同八日早朝に室町殿阿波へ御座をうつされはへるなり。京都雜說也。然とも御卽位廿二日に行はれ侍也。外辨の參議に爲和參。午刻にはしまり未の刻に

終。

八月廿六日（大永元年也廿三日改元）梶井法親王（堯胤）去年うせ給けるに當年人々一品經よませ給ひけるに勸持品

まよふへき心のやみもすみのほる月にさはらぬかせの浮雲

同十一月廿四日家月次會　落葉（十月延引也淡路武家十月廿二日に堺迄御渡海然間延引也十月題也）

大永二年二月廿四日禁裏月次御會　洩始戀

つゝみかねけふ立そむる錦木も思ひの色はあさからめやは

昨日廿三日武家御參内始也。

十月四日（三河東條下吉良國〈下向の折節也〉）吉良持淸勸め侍られける　松遐年友

いつよりの深きねさしと松か枝に今そよりくるわかの浦波

大永三年閏三月廿四日禁裏御會　納凉

一とをり風に先たつ凉しさやゆふたちこゆる峯の浮雲

寄河戀

今はたゝつれなき人につくは河たゝりなしてよ思ひしらせん

十三日に。幸夜叉遠行之間。談事打置。然間他事望却不ㇾ詠候。光玉童子四男。（三歳也）。爲益弟也。十念寺に納之。

從二六月四日一。孝父以外腹を煩。存命不定也。竹田其外方々雖二良藥用一無ㇾ減。既に廿日には待時侍り。然に澄玄自ㇾ堺上洛。驗而一藥用。そのまゝ得ㇾ減。七月二日には日出事也。（生身玉）祝着々々。

同十月廿五日下冷泉前大納言入道身まかりて三十五日にあたりける時かしらに彌陀の名號を置て人々よみける時　篠上霰（あかしら）

あかすしたふ心は野への玉篠や袖にあまりて霰ちるなり

氷始結（たかしら）

瀧津せのをとは今朝よりとたえして嵐にこほる谷の下水

大永四年三月廿八日赤澤兵庫助父七年忌とて勸侍五百弟子品

心よりまとふやみちの山のはゝ出てそ月の光ともしれ

大永五年三月廿四日禁中晴御會（中殿已前密々御[illegible]内々皆々書也）

（懷紙臣上臈之只官姓名乘計也）

春日同詠花色春久和歌

右衞門督藤原爲和

（三行上字）ことの葉の玉の砌やさく花のひかりも千世の春をしるらん

今日戌刻に參内。中山中納言。飛鳥井宰相依二遲參一。丑刻御會はしまる。主上以外御氣色よろし。今日勅題也。御製講師惣の發聲等爲和依ㇾ仰勤ㇾ之。

同五月廿五日齋藤又二郎賢綱夢想とて勸侍　祝言（なかしらにて）

名の譽代々にかしこき道々も一心のゆくゑなるらむ

同七月廿七日諏方法樂とて諏方左近勸はへる　卯花

卯花のかきねつたひの山兒やさえぬ袂に雪はらふらん

同九月廿三日赤澤兵庫助政貞母三十三回に分別功德品

さま／＼に心うつろふませの中も只一本のしものしら菊

十一月廿一日家月次會　冬木（細川六郎植國〈十八歳高國ノ一子也〉去月廿三日逝行後儀今月九日於二龍安寺一有ㇾ之然間取亂により十二日延引なり）

きえは又柚木こるへき山人の斧のてもなき峯の雪折

同閏十一月十八日畠山左衞門佐義總父保壽院身まか

りける經を贈るとてつゝみ紙の裏に書付侍る

あたにみし露をは袖にとゝめ置て夢のたゝちに消し面影

大永六年二月廿六日西郡貞弘遠行之時　宗化勸はへる

寶塔品

いてゝ世のをしへうけつゝ法の水の流の末や淸くすむらん

四月廿五日人記品人の勸侍る正廣三十三回（正廣勸侍也）

聞もらす方こそなけれ時鳥むらさめ過る月のよな／＼

五月廿一日能州七尾城畠山左衞門佐亭にて當座　虫

分迷ふ秋の野もせに鳴むしも色のちくさに聲みたるらし

七月廿三日に彼城にて入道身まかり給けれは　彼御座

所をのちにおもひてつかはしける左衞門佐かたへ

哀けさあとなき床をかへりみて有しよりけの袖の白露

返事左衞門佐

又故入道殿御前に奉り侍る歌

廿日あまりみし夜の月を侍えてや心のやみの雲はらふらん

一期之間。月待をさせ給ひて。看經に歌六首。心經千卷。念佛六万反つゝ。每月廿三日每に　させ給ひしゆへやらん。七月廿三日身まかり給ひける。

大永七年六月廿三日今川修理大夫入道一回とて　宗長勸ける勸持品

立おほふ浮世の雲のさはりなくたれも心の月やすむらん

同七月廿五日に。將軍家。江州長光寺に御牢人にて御座間。爲和長々牢人にて奉公申なり。同廿七日に守山まて御出張。御伴申御先へ參。同九月十九日に東坂下まて御出張。佐々木彈正少弼御伴。廿五日に渡海也。十月六日に越前衆坂下へ着陣。同十三日に　東山若王子まて御着陣。同廿四日東寺まて御着陣。十一月十九日に大合戰。明年四月六日に相國寺まて御陣替。同五月廿八日に。又東坂下まて被レ移二御座一。爲和御伴申。公家衆は高倉兵衞督永家朝臣。阿野少將季時朝臣。烏丸右少辨光康。爲和。以上四人。近日又江州朽木補迄被レ移二御座一由其沙汰あり。飛鳥井雅綱卿は。東寺まて御伴申。今度坂下へも御伴不レ申候。言語道斷々々。今京都に公方と申は。誰人の息共。諸人不レ知レ之。大永（享祿元）八年五月廿八日に。武家御所。又江下まて被レ移二御座一。細川道舟今月十四日に。江州山上迄退。

七月廿三日亡父一回に　安樂行品

松たてる岩ほの上もよをそむく心を種とすめは住らし

同日彼位牌前歌

四十年あまり馴しうつゝは夢よりもはかなく覺る初秋の月

八月十五夜に攝津掃部頭元道勸ける　山月

雲霧も及はぬすみの山の端を出て隈なき月のなかそら

同夜理乘坊菴にて　三雲新九郎等當座よみ侍るついでに八月十五夜

いつはあれとこよひ計や秋の半月も名にめて澄のほるらん

享祿二年正月廿五日理乘坊所にて　杉原伊賀守孝盛其外人々當座に　霞

鳰の海や春のけしきは顯れて霞にしつむおきのしまやま

同四月十六日任庭之官片山中務入道勸ける　當座

立春風

霞みあへすけさくる春やみちのくちいそく都の心あひの風

同五月二日香取民部丞家祐在所にて會　五月雨

消あへぬ雪のふゝきもかきくれて五月雨寒し不盡のしは山

同七月廿五日澤廟法樂細川常植之友波々伯部兵庫助勸侍　雨後庭萩

村雨の露ほしあへぬ夕風にしめりてそよく軒の萩原

於二敦賀一細川右京兆被官伊藤因幡守伊勢國より右京兆出張之時彼伊藤は伊勢國被官にてありけるか京兆供すへきよし申西國まで供して討死すへきよし申し侍ていとまこひに愚亭敦賀の旅宿へ來りしかはつかはしける

たくひなき人の心の高名や天津空まで聞えあくらん

同天笠彌六勸ける　初春鶯ほかしらにて

ほのか成霞の袖にひかれてや都ははるといつるうくひす

享祿三年七月廿六日　關

さすらふる身はひたふるに夢のよを現に越るうやむやの關

此四五年。世のみたれに都をはなれ。たゝよひありきければかくなん。

同九月廿九日　理乘坊會當座。　江州柴原彦九郎一勝參會。門弟子也　萩似人來

花に鳴し鳥もかけせぬ秋風に人〳〵と萩の何そよくらん

享祿四年十月五日　太守對面遲々之間。　同名關口刑部大輔氏緣許へ門弟也かくて程なく見參有。

浮ひ出る汐あひしらてかくて世の浪にたゆたふ和歌の浦船

惣印軒太守へ取合無沙汰ある間　雪の朝にいひつかはす

さもあらはあれなと人の問ぬまに恨みて雪や獨消なん

おなしころ同人に門弟也

ひかるへき縄手をよはみ波の上によるへ漂ふわかの浦船

かく申つかはしければ。ほとなく取合共彼仁申て。今河五郎氏輝門弟になられ。會とも侍りき。

享祿五年(天文元年也七月廿九日改元)三月五日　後慈光院前内府追善三回に　無常

かけりても慕はさらめやなき玉の面影かよふゆめの浮橋

同五月十八日瀨名寅王丸法樂に　瀧霞れかしらにて

れいのをとは高雄の峯にうかひ出て霞の底におつる淸たき

四月十四日に都の友たちとも伊勢八郎貞就。大和兵部少輔晴統已下のほられければ。河原まで送に出てわかれおしみ都の朋友のもとへいひつかはし侍ける

友はみなつれ行かたを都そとおもふに袖やなをしほるらん

同六月廿三日今河故匠作七回にひと〳〵歌よみける時和しはへりける阿彌陀名號上にをきてよめり

なけきのみちゝにつみてや七車めくる日數のけふは悲しな

むつましくなれし言葉の跡とふもむなしき露に殘る玉のを

あはれけに夢てふゆめよみるか内もやかて別るゝ魂の面影

みなれつる人は何地といへはえに抑ふる袖よむせ歸りつる

たまきはる命も仇に世に超し人の光をしたけさらめや

二つなく三ともわかぬしるき法の花咲庭は千世もへぬへし

匠作息寺に庭に蓮侍ければ。かの息の寺へ遣しはへるなり。

同七月廿三日亡父七回に　釋教るかしらにて

瑠璃をのへ玉をちりはむ法の場の敎への道よ仰かさらめや

濱　月

一とをりしほくもりすゝ月影も松のあらしにすみよしの濱

右嶋月にて侍しを。今河の家に嶋といふ事不吉なる間。俄によみかへ侍り。嶋の歌には下句うかふや　波の淡路しま山とよみ侍し。

九月一日奥州會津の金井源家朝門弟になりはへる時歌に老躰の述懐を申送り侍ける返事

老のなみよりくる和歌の浦風に心の船のかよはさらめや

同八日由比四郎兵衛尉光階七回とて子の僧惣印軒安星勸侍ける　早秋風

あさな〳〵身にしむ老の哀さよ今年〔も脱歟〕・なかはすきの下風

天文二年正月十三日今川五郎氏輝會始　梅花久薫

いくかへり鶯さそふはなの香に十世ツキの宿やよろつ代をへむ

右十代は當今河まて今河家十代なり。然間如此よみ侍るなり。

今河元祖
國氏—基氏—範國—範氏—泰範—範政—範忠—
—義忠—氏親—氏輝

三月十一日於二相州小田原一北條左京大夫氏綱亭にて當座　朝花

吹立る浦風ならし朝戸明やのき端によする花のさゝ浪

小田原は浦ちかく侍る間如レ此詠。

同三月晦日に藤見之當座

いへはえにみなれぬ花の朝こちになひくもしるき北の藤浪有注

右有注と書はへるは。氏綱女中は近衞殿。關白殿御姉にてましますか。御内縁になられける間。かくよみはへり。

ことに彼女中にての會也。

於二駿州一奥州より門弟新田伊豫守入道家朝上洛して歌みせける奥に

同家朝伊達かたへ遣歌みせける其おく

葉かへせぬ色をみさほに世々ふとも根さし添てよわかの浦松

とり〳〵のことはの玉の光こそ世々に朽せぬちきり成けれ

右家朝本國は常陸歟。牢人にて奥州に逗留。然而伊達かたへ又此國よりたのみ可レ申由申し歌也。

同家朝牢人して本國の人をたのむよし申下しはへる歌の奥に加點してかく書加

あはれけに老の浪路をしのくともよらん湊よ何たとらまし

同家朝に兵法傳へはへりけるに　のこさすをしへし時家朝歌にことの葉の情わすれす　武士の愚なる道をいかて殘さんとはへれは

殘なく傳し君か武士のみちの光をあふかさらめや

駿州へ下向の時三河國松平兵衛大夫入道在所に一宿せしかは。かのものやさしき者にて上洛にはかならす又一宿の由度々駿州へ申し下し間。さる便風に申遣ける

山述懐

おもひきや一よのやとりかり衣君か情をちゝにみんとは

神もしれ二代をかけてふしのねのならぬ歎に老そしにける有注

右有注と侍るは。當今河氏輝と父氏親とへ分國之内に。恩知行分四ケ所はへり。然共于レ今無二安堵一間。かくよめり。

同八月廿八日葛山中務少輔藤原氏廣亭にて當座　萩

風

いくさとのね覺もよほすうき秋も荻一本にそよくさよ風

同九月七日珠長所會(法宗院事也又ハ號釣雪也)　月前荻

ふきわくるかけ待のきの下荻に心うこかす月のさよかせ

同十月十三日家月次會　尺教

南無佛(リレヲタスケタマヒホトケ)と願ふこそまことのみちのしるへなりけれ

天文三年二月廿日大浦藤二郎會に　花所々

みる人にかたりあはせていつかたの花一本も千本にをせん

同八月廿四日葛山中務少輔氏廣亭にて當座之百首之
內　立春

紀の海や春きにけらしそことなく霞の浪にかゝる浦舟

かへるかり

故鄕にさそはん友の有とたにしらてやひとりかりの行らん

當國に四年在國し侍しかはかくなん。

黑谷の上人一枚起請人のかゝせ侍りける　その奥に所
望せし歌　ー

となふより外にさとりはなかりけり南無阿彌陀佛〳〵

同十月廿日(但十五日)沖津又四郞頭役會　落葉不待風

つくしてはけふはた落ぬ木葉哉あすの嵐につらさおほせて

藤澤廿五代上人かたより　懇志之儀とも申送り早々上
洛之儀待入之由越前國より　申被ㇾ下候　返事にかく申
遣しける(意息一男等覺院上人弟子也)

思ひきや世のうき波に浮沈みあらぬすまひに年をへんとは

天文四年正月廿二日　東漸寺月次會始頭人葛山八郞氏
元　鶴千年友

なれきつるをのかちとせの毛衣を春いくかへり宿に契らん

百年を十とせの宿になれきつるをのか毛衣はるいくかへり

同二月十三日　若浦

たちかへる代々の契をたのみてもねに鳴ぬへき和歌の浦鶴(有注)

有注と侍るは。今河代々別而當家扶助之處に。愚にもて
あつかはれけれはかくなん。　彼分國に　愚知行數か所侍
り。當今河親父氏親の代には何も〳〵知行可ニ相渡一由被
ㇾ申候。先遠州小高(ヲタカ)鄕。　駿州小柳津(ヲヤイツ)。此兩所
は可ㇾ渡。相殘分。遠州相良(サカラ)庄鄕。同國高部(タカヘ)鄕
(但是は替地を爲和に可渡由被申了。)同國菅谷水垂御園(ミソノ)。何も何
も當給人に替地を出可ㇾ返由被ㇾ申侍るに。　其後遠行侍
る間打過はへる處に。當今河此子細をも未申候。人々に
は侘事とも申。　折節侍る間愚詠如ㇾ此。　小高鄕は京着万
疋運上の在所なり。　然間其由申之處に。先ㇾ是彼在所之
分とて黃金十兩宛氏親一兩年運上之處に。無ㇾ程遠行之
間無念無ㇾ極。其旨にて黃金十兩は每年被ㇾ出之間。此訴
訟を葛山中書岡部左京進等　內々申共不ニ事行一間。心底
を申述計也。

六月四日渡邊彥二郞廣會に　寄宿祝

夜半におき足をいたゝきひたふるに仕ふる宿の代々の行末

今月五日從ニ甲州一敵出張。廿七日に諸勢出陣。八月十
九日に万澤口にて合戰。　同廿日に從ニ相州一氏綱兄弟
父子。何かに一万計にて出陣。同廿三日に相働。都留
郡主小山田衆(武田被官)。合戰終日侍りて未刻散。　小山田
衆討捨七八百。三百六七十討捕。　廳渹廿三日に小田原
へ歸陣。小田原衆手負二三百。討死衆は二人。　河村與
太夫(足輕)子也

天文五年正月十三日於二本城一彦九郎爲昌興行當座　浦霞

釣たるゝをのかすさひはことたらて霞の網にかゝる浦舟

四月十七日氏輝死去。(廿四歲)。同彦五郎同日遠行。

夏日（四月廿七日於二酒井惣左衞門丞亭一當座從二今日一亂彻也。）

更に今秋をうかへて夏の日もすゝしくうつる庭の遣水

十月十八日三條宰相中將母（仁齡榮保六姉）追善二十三日二遠行彼辭世

五形をはみなこと〳〵く返し捨て曇るかたなき有明の月如此はへれは彼位牌の前に一紙瓦礫

夢にのみ有かとみれはなきかけの心の月や空にすむらん

天文七年八月武田信虎亭にて同名大井宗芸初て參會之時信虎歌よみて宗芸へ可レ遣之由申されける時當座に彼宗芸歌道執心之法師にて侍る間かくなん

いまよりや契置なんしるや君世々のねさしの和歌の浦松

天文八年正月十三日今河治部大輔義元會始　竹不改色

露霜ははらひ果たるさゝ竹の匂ひこほるゝ千世の春風

怡雲亭孫彦五郎於二尾州一歸陣之砌舟に沈み侍よし聞て祖父怡雲亭許へ

親のおやの心を千々にしつくともしらて子のこや浪に入覽

同父の兵庫頭信喬へ

さそなけに世のことはりもかきくれて心の闇の道たとる覽

一條之住持に双紙あつけ侍しをとりつかはすとて沓冠にかくなん

ありてなをつゆといつはたけぬるはまもの丶哀はのへにこそあれ

右爲爺母に去四月にをくれて。彼寺にて佛事なとなし侍る間。物哀なるついてにて侍れは。彼住持へかく申侍也。

天文九年八月三日　荻風（一色元廣亭にて當座於甲州也）

千里まてかよふ心のうき秋もおき一本にそよく夕かせ

九月十三日申剋二甲州を立。同十六日二駿州へ下着。同晦日二駿州を立。十月十二日東坂本へ上洛。京都へは同十七日に上洛。

天文十年九月能州金臺寺天神法樂とて井上藏人張行　早春鶯（來年二月之張行）

霞あへす日影木くらき谷の戶にをのれほのめく鶯の聲

天文十一年二月十三日於二高雲齊一（武田大井宗芸）晴信月次會　花風

みよしのやその曉の花の香も合の御嶽にひゝく山かせ

晴信同名民部少輔入道怡雲齊道鑑亭にて庭梅各見はへるついてに

三月九日於二高白齊一（積翠寺也）當座　初花

とふ人の心や見んとけふまてに花はまたれてさらに聞らん

八月十五日於二板垣駿河信方亭一會に　月前聞鴈

音に立て月もこよひの最中そと南にかへる鴈の一つら

同當座　十五夜當日

月も今夜なたゝる秋に有耶無耶の心にさはる雲霧もなし

天文十二年正月十三日今河治部大輔義元亭會　鶯有嘉聲

なれきかん春いくかへりしつはたの山もよはふや宿の鶯

天文十三年二月三日甲州へ越とて今河へ暇申とて富

樫氏部大輔かたへ紅梅の枝につけてかく申遣

世はかくそ花も折しる姿見よと匂ひふかめてゆるし色なる

甲州於二晴信亭一月次會穴山信友頭役也　毎月十五日愚宦越により九月十七日に延引　池上月

さす棹のしつくもしつく波の上に月をのせたる庭の池水

同九月廿一日同月次向山參河守七月分頭役張行　紅葉色深

日にそへてもみたす木々に置露も積れは老の霜のましらか

天文十四年七月七日治部當座　七夕霞

霞にもむせふはかりに七夕のあふせをいそく天の河岸

聖護院門跡御座なり。內々東と和與御扱候由なり。然間當國へ御下向之間。彼會へ入御也。河つらと詠けるを。河つらさは今河家に禁也。同嶋も禁也。殊に新嶋一段不吉。

同月十六日於二三浦尹氏員亭一當座　時鳥一聲

時鳥たゝ一聲をこゑ〲にをのれ添たる木綿付の鳥

秋　香

行人の袖引はかりゆふ風におはなかるかやわれも香はし

右聖護院門跡入御也。和與の御扱不調候而同十八日午刻に御上洛。和與之御使禮部へ爲和可レ申に。彼門跡仰によりて御使申なり。同廿三日義元臨齊寺へ門出。同廿四日人數立。義元は廿四日の曉月出て出陣。すくに富士のふもと善徳寺へ着陣。

天文十五年三月廿七日齋藤佐渡守元清夢想とて　勸侍る　霞隔遠樹にかしら

梢こそそれともわかぬ花の色の霞にくるゝはるの山もと

六月二日於二義元亭一　早春鶯　京都より三條西實澄卿（時大納言）四辻實遠卿（參中納言）下向甲州へ被レ越之間一會張行

さそはるゝをのか心のはなをのみしるへにきゐるはるの鶯

同六月六日最勝院素純十七ヶ年之追善に彼弟子素経張行　郭公　但六日三西甲州へ越山之間路次迄送に素經同道朋會延引

面影はほのみし夢の行ゑそとかへるやいつち山ほとゝきす

同六月九日家月次會　樹陰夏月　朝比奈十郎左衛門尉親孝頭

さぬらくは跡なき夢の餘波そとつらさ身にしむ秋の初風

八月九日家月次會　野外秋月　富樫介氏家頭役

ふきはらふ裾野の月にねおろしの雲をそなかすふしの芝河

十月十一日　但廿九日　家月次會　風前落葉　飯尾善右衛門頭役

神代にも沈む木葉を吹たてゝ風やかけたる天の浮はし

十一月十一日家月次會　雪中旅行　名和式部少輔頭役

これや此宿かる峯の爪木そとたよりにひろふ雪のかさ折

天文十六年六月廿日　但廿一日　葛山八郎氏元月次會　樹陰納涼

松かけや衣をりはへ河社なみのぬれ衣かけてすゝしな

右爲和卿集以一本挍

權大納言言繼卿集

永祿五壬戌年　五十六歲十一月二(三イ)日還任　正二位行權中納言兼太宰權帥臣藤原朝臣言繼

松添榮色正十九　公宴御會始
霜の後一しほつゝの春の色の松の千年は君やかそへむ

鶯是万春友同廿　近衛殿御會始
いく年の限もしらす春といへは馴きて宿に鶯のなく

餘寒月同二九　聖廟月次
さえかへる嵐の末のいかなれは梅か香そはぬ夜はの月影

祈身戀
契りたゝ神もあはれめ玉くしけふたしへもなく祈る我身を

早苗多同二廿五　公宴御月次
此ころは袖うちはへて遠近のみぬさと迄もさなへとるらん

池水鳥
むら〳〵の芦は枯たつ池水にうかへる鴨そあをは成ける

五月雨久同四廿五　公宴御月次
雲ふかみいつかは晴んをのゝえもくたす計りの五月雨の空

瀨鵜川
瀨をはやみみなきる水の鵜飼船さしてのほれる魚やくふ覽

羇中枕
たひはたゝ木のね岩かね浪枕いつまて夢を結ひては見ん

春田雨同六廿五　公宴御月次
草もなくかへすあら田は徒に露もむすはぬはるさめそふる

浦秋夕
心とめて誰かみさらむ浦遠くかりかねおつる秋のゆふくれ

夏草露同日御法樂御當座
置ぬへき時ならなくに草のはの露めつらしき夕立のあと

忍戀
よそにしもうきな立なは暫し先こたへせす共よしや恨みし

庭松
今年生の二葉より先うつし植て千世をこめたる庭の松かえ

初秋朝同七廿五　公宴御月次
聞はや音吹かへついかにねておくるあしたを秋の初風

鴈初來
玉章は待となけれと聞からにまつめつらしき初鴈の聲

忘久戀
いかさまに紛れかすらむ年へても忘れはせしにとふ年もなき

雁作字同八廿五　公宴御月次
白雲にたゝ一くたりかく文のそれかあらぬかかりのゆく空

淨侶暮歸
かへるさやそこと告らむ墨染の袖のゆくゑのいりあひの鐘

山家猿
山深み獨のすみかことゝへはなを淋しさのましら鳴なり

秋菊盈枝同重陽公宴
時ならぬ雪こそつもれ白菊の咲そふ花の枝たはむ迄

春曙鴈同十廿五　公宴御月次
おき出て行衞の空もほの〳〵とかりかね霞むはるの曙

旅秋夕
穉はなを夕そつらき草むしろ袂は露をきかさねつゝ

竹間霜
わきてけさ猶霜白しなよ竹の夜長き程や置も添らん

雪中眺望 同十一廿五 公宴御月次
ふしのねをこゝに都の大ひえや小ひえの雪の明ほのゝ空

爐邊閑談
さま〳〵のよのことくさを語りあひて嵐の音は埋火のもと

河水流清
河水の底すみわたりみさり成空も移て雲そなかるゝ

開郭公 同十二廿五 公宴御月次
老か身のね覺も嬉しあか月の月にむかへは鳴ほとゝきす

寄雨戀
いとせめて思ふそなたにさりとては涙よゆきて雨とふら南

野霞
ひろき野をたれまろはして其儘に貫きとめぬ玉霰そも

松上雪
立並ふ四本の松の雪にけさ千年の色の深さをそみる

祝言
家の風吹つたへきて行末も限りなき世にしき嶋の道

雪中眺望 同十二 於太秦月次
降積る雪のたかねの嵐山是も都のふしとかも見む

冬 曉同當座
しらけたる雪の光に冬されは明ぬ此よもあけかたの空

冬 野人に代て
霜にかれ雪にむもれて野への草いつ萠出ん色としもなし

冬 獣
ひろふへき木のみも雪に埋れてさそ侘しらにましら鳴南

藥王品 同十二二 三條亞相勸進父稱名院前右府七回
つとめては月日と共にいさきよく明らけき名の世に聞えける

花盛
すきかてにみつゝも暮す殘なく開くる花のうつろはぬまを

社木
春秋を幾ちとせとか天みてる神の宮居にしける眞榊

爐邊閑談 同十 於太秦眞珠院月次
むかし今かたり出つゝ向ひゐてしはしさむさを埋火のもと

篠霰 同當座
をのつから清き心を見よとてや玉さゝにちる玉あられかも

澗水
山人の聲かとはかり谷川のこほりのしたをくゝる水をと

逢戀 同人に代て
嬉しさもうさをもわかすあひみては泪そ先にまつすゝみける

早梅 同十二 於飛鳥井月次會
世にしれとやゝこえぬへき春にしも先立て咲宿の梅か香

歳暮
ことしけき我身ならねと暮て行としに心のさそはれそする

祈戀
木綿かけて神にしいのる身の契いつかうけひく心をもみん

海邊霞 同七十一 左金吾勸進春日社法樂
四海の浪もしつけく朝かすみゆたかに匂ふはるの色哉

忍久戀
あらはれていつかはみえむ年月は人めくるしき瀬々の埋木

たなはた 同八三
年月のつもる思ひの袖の露こよひや共にほしあひの空

すゝき
夕まくれ人も音せぬ庭の面に誰をか招くお花なるらん

うらみ
一かたにつらくはかくも恨しを何そはなけの情かけゝむ
漸秋雨 同當座
草も木も天の恵の露をそへて村雨さそふ秋のはつ風
尋虫聲
色々の聲のみしけく廣きのもまつてふ虫を先や尋ねん
漁舟火
くらきよの爲にはあらてかゝりひに驚く魚をあまの釣舟
待七夕 同人代
としことに穐立といふ日より先さそな嬉しきほし合の空
江邊荻
なにはえやむら／＼茂る芦も名の替るとそ聞いせの濱おき
網代 同十一十一人に代て
風さむき網代の床に日を重ねよを重ねつゝもりや侘らん
炭竈
煙をはふりも埋まて立のほり雪の底なる峯の炭かま
餞別
やかてとく又逢坂をたのむれとけふの別の先そ悲しき
松有佳色 同十一廿九 菊亭會始
ふりにけり千年の色も白雪の積るにしるき宿の玉松
竹雪 同當座
移し栽しめくりの竹や霜八たひ置て千尋の陰深むらん
歳暮
越てくるはる近しとて年木こりいとなみしけき人の行かひ
永祿六癸亥年 正二位行權中納言兼太宰權帥臣藤原朝臣言繼
野若草 同正十一 近衛殿御夢想御法樂懐紙
秋こそは千種にましれ春はみなゆるし色なるのへの若草
馴増戀
年月はかゝる心もしら糸のとけて思ひの色をそへけり
し荻 同御短尺
しらせてや軒はの荻のむつましく問くる人をそよと告らん
か紅葉深 同人に代て
かつ染る程さへあかぬ色なるにそふは千入の木々の紅葉葉
寄若菜祝言 同正十九 公宴御會始
我君の千世のためしに澤へなる長きねせりを摘やそむらん
鶴遐年友 同正廿 近衛殿
巣たつより砌になるゝひな鶴の千世の齢は君かそへてん
松樹契多春 同正廿一 聖護院殿御會始
二葉よりうつし栽てし松なれは君そみるへき千かへりの春
山ふきのはな 同當座
色にそむ心しられて見る人の衣の重ねも山ふきの花
竹契齢 同正廿七 風亭會始
契りをかむ代々の齢の例にはときはかきはの庭のむら竹
春 月 同當座
いかなれは思ひしよりは老か身にかす增りける春のよの月
祝 言
敷嶋の道を心のましはりにけふまつ契る千世の行末
歸鴈連雲 同二十四 風亭月次
雲の袖花の錦をふるさとにきてこそ鴈のかへり行らめ
契行末戀
ちきりをく我中かきの姫小松木高き迄に色かはるなよ
松 藤 同當座

ためしには榮行松を三笠山よゝの花さけ北のふちなみ

旅　曉

たひは只またよ深くも鳥かねにいそかしたてゝしつ心なや

歳　暮

いつのまに昨日の春とけふもくれあす又年のこえんとす覽

呼子鳥同三廿五　公宴御月次

答へする人はなけれと春の山のこなたかなたに呼子鳥なく

花纔殘

手折なは心なしとや人も見ん散てかたへに殘る花の枝

初逢戀

つらさのみかこちなれしも今はゝや新手枕にかはる言のは

靜見花同三三　太秦眞珠院月次

たをりもつ人もましりて木の本に風吹ぬまの花をみる哉

池邊藤

池水の底も匂ふやうつりぬる影もこするにかゝる藤浪

名所關

いかにして越も行ましをろか成身は許さしのもしの關の戶

里　花同當座

こゝのみはめかれにけれはめつらかに又事方の花をみてまし

夕　花同人に代て

あやなくに暮行空も夕附日さすかに花の光そひけり

早　苗同五廿八　於眞珠院月次

小山田に五月男しつのめ隙をなみうたふも有てとる早苗哉

梅　雨

三日月も雲間にみしか有明の空まて晴ぬ五月雨のころ

眺　望

なくさみも何か磯邊のかたを浪よせては歸るなかめのみして

郭　公同當座

よそよりはむつましけにも郭公こゝをせにとそ百千返なく

旅　宿

くさ枕結ひて社はをろかにもすみし住居のたのしみはしれ

氷　室同人に代て

昔にも立歸る世を松か崎父もそなふるひむろならなん

蚊遣火於太秦實仙房月次會

さとつゝき夕けの後の煙こそすゝか伏屋のかやり成けれ

遠夕立

ゆふたちの雲はよそにも鳴神の音のみ聞てあつき日の影

通書戀

かゝりける露の情も柏木のもりてそつらき水莖の跡

夏　岡同當座

晴やらす日をふる雨に水くきの岡の葛はゝなをそ茂れる

夏　旅

故鄕は夢さへうとく草枕むすひもあへすあくる短夜

夏　糸

たれとしも主はしられす山姬やかけてほすらん夏引の糸

七夕管絃同七夕　公宴

こよひ先秋のしらへを彥星に手向ことなる琴笛の聲

曉擣衣同廿三　三條大納言興行

なかきよを月みかてらや明す覽鳥かねそへて衣うつ聲

荻同廿九日　於太秦

假そめも露をはためし朝夕にそよくのみ成庭のおき原

露

秋草は所せきまてふるもありのほるも有て置る白露

舟

その人の思ひ〳〵に沖をこき浦つたひして行船もあり

擣衣幽同當座

吹風のおり〳〵ことに聞えきて遠き砧そたゆみかちなる

寄秋雲戀

身を秋の心そつらき晴くもる時雨の雲を中にへたてゝ

稙祝言人代

民の竈なひきしたかふ時きての今秋津洲そ豐成ける

月同八十六　大秦月次會

あくかるゝ心にそ思ふ峯高みのほらは月や手に取てみん

山月

所からみる人からは有もせむ月のひかりは山さともなし

寄月戀

いかにせむさやけき夜半の月影も泪くもらす恨そひけり

秋蝶護籬花同重陽公宴

とふ蝶もまかきの草のあるか中にわきてや菊の花に宿れる

河千鳥同十十五　公宴御日待御當座

青海の浪もやあらき猶柃のさほの河原に鵆鳴也

暮山雲酉刻月蝕也

こよひ月かけたる影を山のはの夕の雲の立やかくせる

津千鳥同十廿五　公宴御月次

世間にいまなにはつのよしあしをやよいかさまに千鳥鳴覧

雪中望

しはしみむ船さしとめよひらの山花こそあらめゆきの曙

寄鷲戀

いかにせんをよはぬ峯にすむ鷲のうへ見ぬ程の人のすかたを

遠歸鴈同十二廿五　公宴御月次

錦とて鴈は霞の衣をやふる里遠くきてかへるらん

山家月

山さとはなくなみおほく松の聲鹿の音そへて月をみる哉

寄露戀

いたらねと人の心の秋といへは時ならぬ露の袖にあまれる

永九三月十五日太秦眞珠院興行

ちらすなよ香はしめるとも花の雨

八月廿七日於殿下

こゑやはなこゝら鹿なく野への草

永祿七甲子年

鶯有慶音正十九　公宴御會始

嬉しさは我はかりかは君か代にあへるを春の鶯のこゑ

椿葉契久同正廿　近衛殿御會始

移しうへし砌の椿つら〳〵におもへはひさし八千年の春

山殘雪同正廿六　於廿露寺而辨亭夢想法樂當座

へたてこし春ともいはし消やらぬ山路は雪のふるとしの空

り俄逢戀

呂の聲に心もことにひかれきてたのめぬ人をあひみつる哉

み窓竹

道すくに思ふ心の窓ならは猶栽そへよ千尋あるかけ

松色春久同正廿八　近衛殿御會兼日嶋津薩摩守義從巾沙汰

蒔のむす巖岩ねに春をへて千世にやちよの松の木高さ

浦邊雪一御當座

袖寒くまのゝ浦風ふくからにお花むら〳〵なひくしら雪

松千春友同正十九　墨亭會始
千とせとも春は限らしわか君の友と砌の松の木たかさ
湖上霞同當座
消殘る雪もさやかにひらのねの霞吹とくしかの浦かせ
名所鶴
霜寒き夜半も吹井の浦風に所さためぬひな鶴の聲
柳垂糸同二廿二公宴　水無瀨殿御法樂
露ならてなにをぬきとか織なましたてのみゝゆる青柳の糸
被忘戀
ちきり只後の世まてと誓ひしに今更なとかわすれはつらん
梅同二廿四　人に代て
こゝにきて問すはあらし梅花袖ふれて猶色かもそゝふ
花
よそに又たくひあらめや所から宿から深き花の色香は
旅春雨同二廿五　公宴御法樂御當座
たひにして休むもあれといそくには道さまたけの春雨の空
隔遠路戀
契りしをとかむと計出たつに只足もとの千里ともなき
曉花同二廿七　公宴御當座
鳥の聲鐘も聞えてさきつゝく花の色より明るしのゝめ
月前花
よしの山花より出て花にいる月に我身もさそはれそする
寄花釋敎
開は散ことはり見せて春ことの花こそ法のをしへとはなれ
閑庭薄同六廿五　公宴御法樂御當座
ひとりすむ庭の籬の花すゝきなくさめかほに何招らん

稀戀
とたえある中もかこたし彥星の契をたにも頼むためしに
星夕言志
せめておもふけふより年に二たひと二の星よ契りをか南
月下女郎花同八十五　公宴御當座
をみなへし月に心を移しつゝなひくとみるやくれる成らん
寄月閑居
すむ影は人もとひこぬ老か身なむかし忘す月そともなふ
初鴈同八廿五　公宴御月次
姿をは霧のむら／＼へたつれと聲はまかはす鴈の來る空
翫月
たかさとも行て問なん我ひとりあたら今宵の月を見ましや
野旅
野を遠みむしの音そへてかり衣露を結へる草枕かな
秋菊盈枝同重陽公宴
九重にけふ八重ひとへ下枝まて咲てやちよを秋の白菊
穐夕同九廿五　公宴御月次
みひとりとなにうれへけん昔よりいつくの空も秋の夕くれ
馴戀
たち馴てかたらふさへにいなせ共いひも放たて程をふる哉
旅夢
狩衣露もかさねて草まくらむすふとすれと夢は結はす
岡紅葉同九月盡　公宴
時雨ても岡への柞いかなれはうすきなからに秋はくれ劔
秋忍戀
たゝはなをいかにかせまし袖の上の泪は露と答へてもみん

寝覺月同九廿五　公宴御月次

よひのまは曇ると見しに老か身のね覺嬉しき月の影哉

紅葉深

かつそむる時雨もあれとあかねさす入日や木々の色深む覽

稀逢戀

かく計り月日へたてゝあはんとは我もかねては契らさりしを

冬　月同十十五　御日待公宴御當座

曇りしもさゆる嵐にみかゝれてむかふ月こそ鏡なりけれ

冬　岡同十廿五　公宴御月次

ふみ分て誰か問まし冬枯のをかへのさとのしもの通ひ路

冬　鶴

幾とせをへにける程もしら鶴の白きや霜ををき重ぬらん

水邊螢同十一十七　於南都本日於但馬尾近衛殿御當座

河きしに光みたれてちる波や風の行衞のほたる成らん

待　戀

さりとては我のみいひしかねことの行衞ならぬをいかに待けん

不逢戀人に代て

こと〻ふもあらさる方にいひなして猶人傳の答へたになき

連日雪同

山ふかみ雪も日數も降そひて立出つへき道もわかれす

冬　月同十一廿五　公宴御月次

よはになをさやく霰はさやかなり月の光のくたけてやちる

遠山雪

雲霧のいかに隔て〻遠かりき雪には今朝の山のま近さ

初　戀

假初のかいまみなから忘られぬ人のこゝろのおくいかな覽

古溪雪同十二十九　於聖護院殿御會

さらぬたに苔にふりたる谷の戸を埋み添けるけさの雪哉

永祿八乙丑年　正二位行權中納言兼大宰權帥臣藤原朝臣言繼

春天象正十九　公宴御會始

君か代のためしをかくと北にゐて動ぬ星のいくはるか經し

鶯是万春友同廿　近衛殿御會始

春ことにともなひきてや鶯のかそふる君かよろつ代の聲

梅遠薫同御當座

程遠きさとの梢はさきぬともしらしを風の梅か香そする

寄神木戀

つらしたゝ思ひそま木のそまぬ其心の色はいかにひかまし

花　雪同二廿二　公宴水無瀬殿御法樂

はる風や尾上の花をさそふらん猶ふりそひて匂ふ白雪

朝海路

朝ほらけなきたる浪は跡さきと漕こそ出れ浦のとも舟

山　花同二廿五　公宴御月次

栽し世も名のみに今はあらし山又も千本の花はみまほし

池水鳥

池ひろみ汀のあしはかれはて〻たゝ鴨のみそあをは成ける

夏草露同日　公宴御法樂御當座

しける野に先ひめ置て姫ゆりの花に顯はす露の色哉

擣衣幽

遠く聞ちかく聞えて里わかぬ砧の音そ風のうへなる

逢切戀

思ふそのすちたかふなよ糸竹もあはすはかゝる心しらめや

竹　鶯同三廿九　公宴御當座

なれてくる春はかきりもなよ竹の幾世の宿の鶯の聲

霞隔花

たつとてもいとひははてし花に吹風やへたての霞なるらん

旅宿春雨同四廿五　公宴御月次

春雨の日をふる旅の宿なれはとまるもいふせ濡てゆかはや

水鳥馴舟

かち音になれてさはかぬをし鴨はさなから浮ふ波の友舟

葛　風同當座

古郷の風のたよりも水莖の岡の葛はのかへす〳〵も

寄莚戀

いつまてかかゝる思ひをすか莚しき忍とはせめてしれかし

懷舊涙

たらちおのいさめし時はうかりしを思ひ出てそ今泪なる

湖上月同九十三夜　禁中菊御覽御當座

かゝみ山あかすそ向ふさゝ波や鳰てる月の影をうつして

月前鴈

なれつゝも越路の秋やうかるらし宮古の月に來る鴈の聲

菊契多秋同九十七　同菊御覽

露はらふ山路のたねを植つれは籬の菊もちよはへぬへし

秋　雲同九廿五　冷泉殿進法樂

たてぬきに何をすらしも織女にかすてふけふの雲の衣は

秋　思

しらさりき我もつれなく袖の露の起伏かゝる思ひせんとは

霜同十一十六　禁裏月次

いかなれはいとしも露にうるほひて霜にかしくる草木成覽

氷

むかひみる池の氷はさなからに影もうつさぬ鏡なりけり

思

とにかくにつらき心のかゐからす思ひに身をそ猶くたしぬる

水　鳥同當座

かさねても暖ならしよな〳〵にいくへの霜のをしのふすまは

野　風

宿るへき草も木もなく廣き野はいつこを風の行ゐなるらん

嶺上雪同十一廿　於若州有脩朝臣亭息久脩元服砌

わか方はよしへたつとも峯高み猶ふりつもれけさの白雪

寄松祝

姫小松かねてそ見ゆるいや高く生のほるへき千世の行末

冬　月同當座

をのつから清き光もみかゝれて氷をわたる夜半の月哉

永祿九丙寅年　六十歲　正二位行權中納言兼大宰權帥臣藤原朝臣言繼

霞添山色正十九　公宴御會始

淺みとり龜の上なる山もけさ霞てはるの色やそふらん

花　雨同二廿二　公宴水無瀨殿御法樂

よしやたゝ雨もいとはし立よれは雫も匂ふ花にやはあらぬ

谷　水

静なるすまゐをとへはこたへして岩間に咽ふたにの水をと

旅春雨同二廿五　公宴御月次

はれやらぬ春のなかめに旅衣とまるも淋しゆくものうし

荻　風

ふくとしもよその梢は見えねとも荻の葉よりや秋風の聲

寄鳥戀

我袖は鵜のゐる石にあらねとも人のうき瀬の浪そかゝれる

餘寒雪 同日　公宴御當座御神社御法樂
この比はことはり過て冴かへりなを消かての四方のしら雪
新身戀
よしさらは兎角に人のうけひかぬ我身を神に祈りてやみん
春秋野遊
あかなくも野をこそ分れ朝鳥かり小鷹狩はに日を暮つゝ
三月十五日於太秦眞珠院讀之
さきて今梢の雪とみる花の散ても草をうつまさらめや
庭上落花 同三廿五　公宴御月次
老か身はたれとふへくも思はねと花散庭の道もなき迄
惜春不留
まてしはしはやくも暮て行水の歸らぬ春の末のしら浪
山家待人
山里は春こそいとゝうたてけれもしや花にと人の待れて
寄雪花 同書　御當座公宴
つもるともよしやいとはし袖にしも匂ひをとめよ花の白雪
山家鳥
遠しとて思ひへたつる山鳥のおのへのさとの夕をもとへ
山榊
神山になをしけりそふ眞榊は幾代の霜か置かさぬらむ
萩 同廿五　冷泉勸進法樂
のへの草あるか中にもさく萩の花の枝かさる露の白玉
霧
み渡せはおほろ〳〵さ立くるも消るもわかぬうす霧の空
雨後月 同八十　愚亭月次
村雨の跡こそかくはやとしみれ草木の露のちゝの月影

松間月
田子の浦や浪のよる〳〵立出てしはしそ月を三穗の松原
山家月
淋しさや身のくせならし山里にうからねはこそ月はすむ覽
行人隔霧 同當座
間近くも聲は聞えて姿のみ立へたてたる袖のうす霧
海邊鳥
こと浦のいつこさためて一方に立さはき行あちの村鳥
月前風 同八廿五　冷泉勸進法樂
風もなを光と成て一葉ちる桐の木のはの月そ影そふ
月前戀
よな〳〵に立てみゐて見待てふは月をか言とせめてしれかし
雲雀 同日　公宴御當座
思ふ子の空にも有て幾たひか父は鳴たつひはり成らん
惜別戀
さらはとはかたみにいひて袖の露をき別うききぬ〳〵の空
庭松
陰たかき砌の松は栽しよりいく十の年の霜か置らん
逐年菊馥 同重陽公宴
とし〳〵になをうへ添て咲菊の花の匂ひもゝしきの庭
龍田山 同九十一　愚亭月次會
うすくこく今や錦を立田姫山はもみちの色をそへつゝ
會坂關
あふ坂のせき路を遠くこえゆけはやかてそ歸るしかの浦浪
永祿十丁卯年 六十一歳　正二位行權中納言兼大宰權帥臣藤原朝臣言繼
松有春色 正十八　於本能寺法泉坊會始

けふよりや春のみとりも立そはん萬代こもる庭の松かえ

初春霞同當座

春きても花の錦のをそしとや霞の衣たちそめぬらん

春松契齡正十九　公宴御會始

いくかへり龜のうへなる山松の千年の春を君かそふらし

鶯是萬春友正廿　近衛殿御會始

春といへは宿に馴きて君かへむ万代かそふ鶯の聲

野若菜同御當座

うちむれて若菜摘なり春日のゝ野守もいまやゆるす成らむ

社頭祝

末葉まてさか行けるに三笠山さしてを守れ北のふちなみ

挿頭花同二廿二　公宴水無瀨殿御法樂

かさしもつ花もはつかしいとゝなを老の姿のあらはれやせん

野旅

一夜をはゆかり有ける色めてゝ菫咲野にかりねをやせん

河欵冬同二廿五　公宴御月次

行水に影をうつしてこほれさく花の數そふきしの山ふき

歲暮忿

なへて世に春くといひて誰もみないそかしたつる年の暮哉

紅梅盛同二廿五　公宴御法樂御當座

かけてほすきぬかと計り咲みちて枝おもけなるくれなゐの梅

忍久戀

夢計しる人ありてとふとてもよそになしつゝあひきといはし

山家水

濁る世をそむくとなしに山水の淸き心のすむにまかせむ

落花如雪同日　人に代て御月次

散しくを又いくたひか春風の梢にかへす花のしらゆき

爐邊閑談

いにしへや今の世の事取あつめ語るにあかぬ埋火のもと

窓前竹

すなほなる世のことはりのためしにはまつこれな覽窓の吳竹

松藤同三廿五　公宴御月次

色かへぬ松のちとせに契置てはるに榮へよ北のふちなみ

暮春

行雁をさきに立つゝ鳥も皆かへりて春のくるゝあやなさ

忍戀

問まては門をもさすな槇の戶をたゝかはよそに人もしら南

卯花盛同四廿五　公宴御月次

しらきぬを掛てもほすやと計りに垣ねのうつき花そ咲そふ

逢戀

年月の人のつらさも我うさもけふそかたみにいひはるけぬる

春月同日　公宴御月次人に代て

難波かたよしとなかめし月もあれと都の春にしく影そなき

栢霰

一とをり山風なからいさきよきなともあられの玉かしは哉

聞郭公同五廿五　公宴御月次

あかすなをたれきけとてか過かてに山郭公をちかへりなく

橘薰枕

むかしのみ其ことゝなくみし夢のさむる枕ににほふ立はな

名所山

をろかなる身とて心をつくはゝ山このもかのもにしる道そなき

郭公同六廿五　公宴御月次

聲はなを花にそまさる置露の木々の青葉のやま郭公

時雨

春秋をしらぬ梢も時雨してみさほの色やなをふかむらん

山家鶯同六廿五 公宴御法樂御當座

山さとにすむてふかひは鶯のはつねをはやく聞にやある覽

寄船戀

いかにせむ人の心のあら磯に身はうき船のよるかたもなき

老述懐

うるわさのよしなくとても仕へむのそれも怠る老のあやなさ

行路萩

分きつるのへの限りのひとつ色に薄はましる露の萩原

鹽屋煙

宿からむ濱邊につゝく一里をとへは鹽屋の打そけむれる

勸持品同八五 故中院通胤卿卅三回勸進

さはりありそしり有とも心にはかけしの法の敎へならすや

蕑同八廿五 公宴御月次

かこひをく籬の草にさく花のまれなる色や露の山吹

衾

ぬきすへし惠もあるに寒しとて閒の衾をいかゝ重ねむ

菊獨秋花同重陽公宴

わきてみむ千種は有とも千々の秋よゝのためしを白菊の花

永祿五暮秋十二天松峯尊靈の三十三回をむかへ寸志を勵さむとするに家貧ければその懇情を徒になし小僧を請せむとすれとも世亂かはしくてなを經營の求を空すよりて僅に法華八軸心經四紙眞文等を書寫し泣筆を淚痕に浸し六字の名號を句の上に置て野語を綴り牌前に奉レ備といふ事しかなり

特進都督郎藤言繼

長らへてあるもかひなし垂乳根の跡とふへくも事たらぬみは

紫の雲にましりていと竹のしらへもおなし臺なるらむ

數多しもあらぬやいかに只獨此とふらひはをろそかにして

三十あまりみとせの秋の過にしも思へは夢よ見る程もなし

手向つゝとなふる彌陀の力もて上からへなる品に道ひけ

ふたつなく三なくうけよ一筆にかきし御法の花のめくみを

永祿十一戊辰年 六十二才 正二位行權中納言兼大宰權帥臣藤原朝臣言繼

鶯告春正十九 公宴御會始

空はまたかすみもあへぬあら玉のはる來とけさは鶯のなく

鶴宿松樹同廿 近衞殿御會始

なれてすむ松の千年と君か代をかそへやあくる鶴のもろ聲

庭落花同御當座

庭の面に散しくはたゝ春風のさなから花をふき上の濱

窓竹

うへしよりすなほ成ける心とはよそにもしるき窓のくれ竹

春雨同二廿二 水無瀨殿御法樂

しつくのみ木々より落てはるゝとも降ともみえぬ春雨の空

山家

かけひさへ冬は氷れる谷の戸の雪消てこそ水も音すれ

野春草同二廿五 公宴御月次

こぬ秋の色をさなから先みせて萩のはなさく野への若草

寄雨戀

いつまての限さもなく春雨のはれぬ思ひに身をくたせとや

苔埋路

いかさまにかくれすむ覽ふむ跡も見えぬ苔路の奥の谷の戸

麓納涼 同日　公宴御當座

日の影はよそにもふりて麓ゆく岩ねの水の音のすゝしさ

寄琴戀

一つらの鴈も飛くる琴の音にひかるゝ人のこゝろともかな

陀羅尼品 同三廿四　摂州朝倉祖母第三回飛鳥井羽林勸進

とく法をたもつ此身はおとろへも憂る事もなにかあるへき

山家夏月 同四廿一　伊勢加州勸進大坂興生寺早世追善

月も今山里いかにみしか夜のあけぬにはやく雲かくるらん

盧　橘 同四廿五　公宴御月次人に代て

見し夢は花たちはなにさそはれて枕にかよふかせかほる也

夏　秡

津の國の難波のことのあしさをもけふの御秡にはらひ流さん

餞　別

けふ出て程なく歸りあふ坂のとりか音まてと廻る杯

夕　花 同四廿五　公宴御月次

いつみるもをろかならねと色もかも猶一しほの花の夕はへ

擣　衣

こゝも又寢ぬよの里と長夜をうちあかしたる賤か狭衣

山　旅

稲舟にあらねと山はいく度かのほれはくたる道のさかしさ

郭　公 同五十七　禹亭月次

ひと聲に明ぬといひし夏のよにをちかへり鳴やま郭公

五月雨

おほかたはこまもろこしの雲までも集りきてや五月雨の空

歎無名戀

いかにせん思ひもかけぬ人に今ほすかたもなきあまの濡衣

郭　公 同五廿五　公宴御月次

月なから一通りふるむらさめの雲のはつかに鳴ほとゝきす

五月雨

ゆふたちはまたき過行夏の空にいかに日をふる五月雨の雲

名所旅泊

いかにせむ鹽時ならし浪の音のまくらに高きしかの浦ふね

欵　冬 同六廿五　公宴御月次

秋またてはる生る草の中にしも花めつらしく咲る山吹

嶺　雪

ふかさをは分入ねともはやくふりつもるをこゝに峯の白雪

郭　公 同日　御當座御法樂

穐もとへ聞あへぬほさの短夜にきなくはおしきやま時鳥

七夕雲爲衣 同七夕公宴

けふといへは我袖のみか織女に雲の衣も空に手向て

初秋月 同七廿五　公宴御月次

風前薄

新　樹 同四七　於連歌師紹巴亭當座

所から色も一しほなつ木立はなも紅葉もいかゝをよはん

夏　雨 同四廿五　公宴御月次

かせわたる草葉もあれと夕立の跡こそ露は涼しかりけれ

夏　社

任例にかものみあれの神祭又もつかひのたつ世ともかな

夏　獸

報ひありて已か命をけたんとやともすほくしに鹿はよりけめ

曉月聞郭公同五廿五　公宴御月次

名殘あれや八聲の鳥に聲そへてあけ行月に鳴郭公

古宅五月雨

いかはかり年をふるやの五月雨に軒の忍ふの露みたるらん

寄名所述懷

思ほえす幾その年かたけくまの待事なしに身はふりぬらん

江中菖蒲同六廿五　公宴御月次

蓮葉にあらぬあやめもにこり江の濁にしまて露の涼しさ

寄煙戀

思ひせくむねよりたつとふしのねとくらへは煙何れ高けん

樵夫入山

木をこるも山路を行も世を送るわさとし知に苦しくやなき

星夕言志七夕公宴

【

藥王品同八十五　聖門新門主御勸進[illegible]院五七日

此のりの教にあはゝ誰も皆なにか心のまゝになからむ

暮天旅鴈同八廿五　公宴御月次

故郷をへたてゝ遠くこし鴈は夕のあきやさそうかるらん

依處月明

わきて猶をは捨山にてるといふ月をは行て見まくほしさよ

隱士出山

うきに社身をは捨つれおさまれる世にしあはんと出る山すみ

菊花薰袖同重陽公宴

朝夕にかこふ籬の菊の露袖にそしみのふかく匂へる

春小鹽山同九廿五　公宴御月次

誰かさて等閑に見むをしほ山神代のまゝの花の色かを

樵路日暮

山遠くかへる木こりは夕暮の月になりてや越る一坂

暮山聞郭公同四廿五　近衞殿御會豐州朽綱入道古帆齋張行

月をのみ待し夕の山のはに聲ほのめかすほとゝきすかな

隔年戀同御當座

中かきのよそなるさへもうかりしにいかてか年を隔きぬ覽

夏草露同五九　於西園寺左府亭與州松葉入道

くれてみむ茂る河への夏草に螢そ露の色を添ぬる

獨述懷

いかにせはわか身ひとつも四の國二の嶋に名をもしられん

郭公同五廿五　公宴御月次

山よりも空に名たかし夕暮の聲めつらしきほとゝきす哉

五月雨

いかなれは時こそ有けれ五月とて必雨のひかすふりぬる

名所旅泊

またなれぬ方のみみつの泊ふね行衞をとふも白浪の聲

雨中螢同六十三　愚亭當座

しめらすも晴やらぬ雨に消もせていかにかともす螢火の影

池上蓮同六廿五　公宴御月次

濁にもそまねはそまぬ心をもしれとや淸き池の蓮葉

寄虫變戀

かならすといひし今宵も松虫の待にかひなく明るはかなさ

水江芦

難波人さしてはなにのわさならしあし分小船行かへりぬる

星河稱久同七夕公宴

彦星は天の河せにあめつちのあらん限の秋や契りし

たまやなき同八廿五　公宴御月次

光をもちらさす露の玉柳つらぬく糸やなかくみゆらん

をのゝすみかま

草木まて埋れはつる雪の日も烟はのほるをのゝ炭竈

あかつきは

鐘の聲鳥の音そへてあか月はいとゝめさます秋の夜長さ

暮春花

限ありて彌生の空は暮ぬとも花は千年の春もみてまし

翫花同人に代て

見捨つゝ歸るそつらき一枝は手おるもゆるせ家つとにせん

岡花

はるにこそしはし心を岡のへの花より外になくさみもなし

新樹朝風同四廿　於太秦眞珠院月次會

いまは又花ともいはし若みとりたちまさりつゝにほふ朝風

夕聞郭公

心あれやたそかれ時の一聲に名のりをしつゝゆく時鳥

海邊眺望

雲かすみはるれは近し住のえや浪にうかへる淡路しま山

海邊眺望人に代て

いく十度沖の小嶋による波はいつくにこえて又かへるらん

首夏同當座

今朝ははや霞の衣ぬきかへて卯花かきね夏やきぬらん

變戀

いかなれは花田の帶のいとなかくむすひし末の色かはる覽

軒廬橘同五廿二　於[illegible]月次會

小夜まくら軒のあやめも香を添てはな立花に風かよふなり

瀨鵜川

さしくたすせゝの篝のおほろ河末やかつらの鵜船なるらん

變約戀

今宵とはかたみにいひてとひこしをなとしも人の咎たになき

軒廬橘同人代

のき近き花橘のこたへせはとこ世のむかしとはまし物を

瀨鵜川

消やらす河瀨の浪になす罪もなにから舟のかゝり成らむ

變約戀

必すと頼めしけふもあひみねはいかに契ていかにとかめん

早苗同當座

行末の秋を心にくるゝをもおほえす田子やさなへとるらん

白梅同九廿五　公宴御月次

たに河の水にし梅の散うきてさなからにほふ春のしら浪

寄鳥戀

鳥立にも思ふといへは思ふてふ例もしらてなとみさほ成

分別功徳品同十三　於三條亞相勸進[illegible]於逍遙院卅三回

をのつから思ひしとけは法の道わか心こそをしへとはなれ

懷舊

敷嶋の道のみならす三十あまりみし面影ににたるもそなき

落葉埋路同十十　於太秦月次

かへるさを誰にとはまし山里はつもる木のはに道も別れす

江寒草同當座

こと花のかれしお花にさくやいかにまのゝ入江の雪の朝明

松經年雜

としを猶ふりそふ雪もすかたをは埋まさりける松の木高さ

首夏藤　同十二日　親王御方御夢想御法樂

青葉にもさきましる藤の夏かけて梢に春をゆるし色なる

見戀

例なれてなとかつれなく年月をみるめ計に過しきぬらん

落葉　同廿五　公宴御月次

やまかせの又吹たてゝ梢よりおなし木のはの落そかさなる

千鳥

我君をかそへあけてや濱千鳥千世々々といふ聲のみのする

僞戀

中々によしつらからて等閑のなさけをそふる言のはそうき

朝時雨　同廿八　飛鳥井月次會

照もせす曇もはてぬ朝日影さしもさため す時雨ゆく空

橋落葉

いろ〳〵の木のはつもりてさなからに錦をりかく峯の梯

初逢戀

かくてしも末いかならむ今宵まつたのめぬ人に逢み初てき

池水鳥　同當座

枯わたる池のあしへにひとりたゝ鴨はあをはの色をみせ㒵

歳暮　同當座

なすわさの何に月日もくれはとりあやなく暮る年にも有哉

契戀

よしや人いひさくる共替らめやかはらしとのみ頼め置身は

石間氷　同當座

うすかれや氷る岩まも下くゝる水の音をはとつるともなし

神祇

みかさ山はやくも四の宮はしら國の民のつくりかへてよ

十二月廿六日雪中獨吟於濃州岐阜旅舍

大内よりの御つかひさねとして しはすの廿日あまりのころ美濃の國岐阜といふ所にくたり侍けるに雪のふる日いなはの山にむかひゐて御ことのりのおもむき成就し侍るやうにと天地に祈念し又は境地のおもしろさを筆にまかせて志のゆく所しかなり

野叟拾翠

すへらきの御ことのりには武士もしたかはしめよ天地の神

都路にいなはの山の嬉しさを色にいてゝもいさかへりこん

あふきみよ一の石の山たかく生のほる峯にかゝる白雲

おもふ事心のまゝになるみかたさはりも浪に立かへりなむ

よそにさへ名高き山の峯に生るまつたくひなきゆきの曙

雪の色をよふもなきをうつしゑに素きを後と誰かいひ劔

所から光をみかく玉のちり玉のみきりも何ならぬまて

ふりくらすみのゝ小山の雪の色にさす笠重き里の通路

秋も過冬深けれは月日なをつもるもしるきふれる白雪

にきはゝむ國のためしに豊なる年をみせたるけさの雪哉

元龜三壬申年

正二位行權大納言臣藤原朝臣言繼 六十六歳

梅有色香　正十九　公宴御會始

しろきをは後にやおらむわきて先匂ひもふかき紅の梅

鶴遐年友　同廿　一條殿御會始

雛よりもいく十の年の霜ふりて老行迄のとも鶴の聲

増戀　同當座

聞しよりみても思ひのます鏡いつかはいつも向ひゐてまし

鶯告春　同廿五　愚亭月次會始

けふ立をいかに知てか鶯のきゐる千年のはるのはつ聲

春　月同當座

まとゐするよはも短しあつさ弓ゆみはる春の月霞む空

述　懷

おもふそよ任例にも百敷やもゝのつかさの時にあふ世を

殘　雪同二廿五　愚亭月次會

くるはるの跡やつけゝむ谷の戶はふむ人なしの雪の村消

久　戀

思ひさていつ山人のをのゝえもいはて朽ゆく袖いかにせむ

柳同當座

さきなはと風のまに〳〵繰ためて花やぬひものゝ青柳の糸

鶴

わきて猶寒き霜夜はまた雛の子を思ひての老鶴の聲

春　曙同二十　愚亭月次

月雪の空も及はしほの〳〵とかすみなしたるはるの明ほの

恨　戀

つらしたゝ返す〳〵もさよ衣うらみなからに身を盡せとや

夏　雲同當座

涼しさはいはんかたなし風かほり雲もにほへるむら雨の空

夏　海

かつきする海士人さそな水底のみるめやわきて涼しかる覽

夏　衣同人代

着換ても猶あつき日はしはしまつからまくほしき蟬のは衣

霞同廿五　冷泉勸進

かけ高き松は緑にしめのうちこの野ゆたかにたつ霞哉

霜

朝毎に空よりやをくとけて又もとのしつくか霜にむすへる

神まつり同六十　愚亭月次當座

神まつるけふとて雲の上人の出す車よいつのまゝなる

もとゆひ

思ふそよ思ふ子の子の紫の初もとゆひをみるよしもかな

猪名野同六廿五　冷泉勸進

かるもかくやかて茂りて小篠のみ深き猪名野の露の涼しさ

益田池

さのみ又影もはなれすとに角に思ひ益田のいけるみのうさ

七夕衣同七夕公宴

織女にいつれありともわきてけふ七かさねの衣やかさまし

初　秋同七十　愚亭月次會

草も木もいたりいたらぬ秋の色を獨さためてをける白露

祈　戀

今こそはよしつらくとも天にます神もあはれめ祈る行衞を

乞巧奠同當座

けふことにひかて手向る玉琴は二の星やかき合すらん

暮　秋

もみちちり千種の花もうつろひてなかめ淋しく秋そ暮行

寄松戀

いつまてか恨をしかの濱松のまつはかりにも夜を明さまし

寄車戀

巡りあふ限りもあらは小車のしちのはしかきかきてしもみむ

夜　霰人代

隔こし都を思ふ手枕にゆめもくたけてちるあられ哉

早梅似春同十二十五　於一條殿御會

年の内にたつてふ春を先みせてひらくや梅の唇なるらん

歳暮 同御當座

弓とりてなやらふよはもま近しといひしはいつの儘にか有劒

恨戀

かつきする海士ならぬみのいかなれは恨つゝ猶年をふる覽

元龜四年癸酉天正元　正二位行權大納言臣藤原朝臣言繼

松歷年 正十九 公宴御會始

陰たかく生のほる松は君か代にいく十かへりの花か咲らん

霞添山色 同正廿九 親王御方御會始

はるのいろ顯れゆくやあし曳の山はかすみの立にまかせて

寄道祝言 同二六 冷泉拾遺會始

ちりひちの山とし積る言のはの道をうけつく宿のかしこさ

梅風 同當座

なにはつの昔かはらすさくや此はなの香さそふよゝの春風

恨戀

むは玉のよるの衣をかへしつゝうちぬる夢も恨みならすや

社頭

三笠山今年は四の宮はしらいともふとしくつくりかへてよ

落花 同二廿二 公宴水無瀨殿御法樂

うつろへる梢とみれは吹かせのよはきも花をさそひてそ行

薄暮煙

遠かたのさとのむら／＼うちなひく煙を色に暮てゆく空

瞿麦勝衆花 同六八 於飛鳥井中將

うつろふな猶とこ夏にみはやさむ千種万木ははなはありとも

五月雨晴 同當座

五月雨の雲間ならすは秋の空も及はぬよはの月をみましや

山家夕嵐

なくさめて人は音せぬたそかれにあらしのたゝく山の下いほ

殘菊盈枝 重陽公宴御會

さきそひて花にもれたる枝もなく降ぬ雪をも秋の白きく

殘雪 九月晦 公宴御當座

峯たかみ霞ふきとく春風にきえ殘る雪を花かとそ思ふ

恨戀

なをさりに思ひもすてぬおり／＼の恨にふかき情をそ見る

野郭公 同十廿六 公宴八幡宮御法樂

夢さます假ねの野へのほとゝきす猶もきかなん明ほのゝ聲

梅雨

麓をもたかねもわかす遠近は雲につゝめる五月雨のころ

絕戀

此まゝにたえやはてなんいさゝかの言葉の末そ恨とはなる

夏秡 同人代

思ふそよ難波の事もけふよりは悪きもよしと御秡をそする

螢 同六十五 於太秦眞珠院月次會

徒にをくるもしらて夕まくれあつめぬ窓をとふ螢かな

蓮

濁をはうきはの下に隔つゝ蓮にをける露のすゝしさ

旅

老かみの足とからねは旅の道をくれて□友たにもなし

螢 同人代て

河かせや吹たちぬらむ一かたにすたく螢のうち亂れ行

蓮

しら露の玉をかさりて花も葉も池の蓮そかほりえならぬ

旅

跡さきとおなしやとりに行あひて語るに社は國ふりもきけ

杜夏草同當座

涼しさに立よる杜の木陰にはさゆりなてしこ花も咲けり

稀戀

へたてゝはたのめさりしに天河ほしの契をわか中にとは

松下泉同人代

かへらめやしはし夏をわすれ井の水を結へる松の下かけ

若菜同六廿五　公宴御法樂御當座

雪なからゑくもましへて摘たむるほとやいく田の若な成覽

歸鴈

雲かすみたつを錦と鴈のきて故郷にもやかへり行らむ

擣衣

かさねてはきれとよ寒に忘れつゝきぬたをしもや擣明す覽

七夕植物同七夕公宴

百草のあるか中にも彥星のうしひく花を手向とやせん

湖上月

から崎やいつくの秋か及はまし今宵鳰てる月のひかりに

春月同十二廿二　河内源五郎勸進夢想法樂

久かたの空には立もをよはしをなとか住らん夜半の月かけ

禁中神樂同十二廿五　公宴御月次

わか君のちとせを猶もいのるてふかしこ所の前張のころ

歳暮雪

暮てゆく年木こるへき山路さへふみわけかたく雪や積れる

砌下有松

色かへぬためしをしれといつよりか栽て砌の松の木高さ

永祿十三年金山藥師万句

ゆくはるをつなきとゝめよいと柳

天正二甲戌年　正二位行權大納言臣藤原朝臣言繼

初春祝正十九　公宴御會始

節會時毛寒幾爾使安利氏御酒給布春能惠美加志古佐
（オリニアフトキモサムキニツカヒアリテミキタマフハルノメクミカシコサ）

花雪二廿二　公宴水無瀨殿御法樂

はなを今あらしや空にさそふらん雲より散てにほふ白ゆき

増戀

つらさにはこりもせよかしいとゝ猶したふはなにの心成覽

海邊月同廿五　公宴北野社御法樂御當座

あかしかた波の友ふね心あれや月にさほさす秋のうら人

祝言

天みてる光そへてよ君か代はあふく此野の神のまに〳〵

螢同六廿五　公宴北野社御法樂御當座

さく花の色こき草の朽しもやほたるとなりて光みすらん

荻

それとまた穗には出ねと昨日けふあきと夕のおきのうは風

千鳥

夜もすからたゆむまもなくしは鳴はいく村ちとり聲を添覽

星河秋久同七夕公宴

あまの川神代のいつの秋よりか契をきてしあふ瀨なるらん

盛花同二　内侍所御法樂

峯もおもひとつ色にし咲比の花につゝみてときは木もなし

風前花

匂ひをはよしさそふとも春風にさくてふ花をふきな散しそ

柚花

春きてはさそな朽木の杣人もはなの袂やまつひかるらん

湖　花

にほの海やひらの山風ふくからによするとみるも花の白浪

待　花同八廿五　公宴御月次

消のこる雪の色よりまかへきて霞も雲も花かとそおもふ

篠　霰

風ならて又一とをり音すなり霰打ちりさやくさゝ原

寺

しつかにと思ふのみなる古寺も峯の松かせ又瀧のをと

五月雨同日　公宴御月次

空はなを雲重なりぬ五月雨は今いくかありて晴んとすらん

別　戀

しはしたゝおきは別れし鐘の聲鳥の音きかて住さともかな

竹

植しより枝に霜をけと常盤にて千尋ある陰に住かかしこさ

同五廿四連歌師紹巴興行　小野小町影弘法大師五筆感得人々に詩歌よませけるに

梅　雨同五廿五　公宴御月次

見し春の俤なから花の色はうつりにけりな木々のあをはに

納　涼

つくりなす庭に瀧おちいつもみぬ澤水ひろき五月雨の頃

風の音もならのはかしはうち茂り行過かてにすゝしかり鳬

曉　鷄

まとろめははや明方の短よに八聲まてやはとりもなかなん

夕鵜川同六廿五　公宴御月次

しはし猶月をそかれと夕やみにうふねのかゝりかすや添覽

開聲增戀

さらぬたにふかき思ひのつま事の聲に心のなをそひかるゝ

遠山鐘

はつせ山さそふ嵐にすかはらや伏見を遠み鐘かすむなり

遠村卯花同日　同人代

時ならぬ雪かとみえて寒からすうつ木花さく遠の一村

待　戀

我心かよひやすらしよな〳〵にきけはよそにも松かせの聲

田里夕煙

立のほる田つらのさとの夕煙なひくや風のすかたなるらん

七夕草花同七夕公宴

あるか中に牛ひく花を彦星のまつけふことの手向にやせん

愛　萩同七廿五　公宴

宮城野やまのゝ眞萩を移しうへませゆひたてゝ猶見はやさん

寄玉戀

河　月同八十五　公宴御當座

底清くうつれる月の桂川かけもとまらぬ瀬々のしらなみ

躑　躅同八廿五　公宴御月次

散て猶くれなゐ櫻こき色にのこるとみえてつゝし咲也

冬　月

冬になれわきて光のさやけきも月の桂や落はするらん

普門品同八九　同人に代て

身をかへて猶あまねくももらさしの法の敎のちかひ賴もし

菊粧如錦同重陽公宴

仙人の苗をあつめし色々の花のにしきはきて見さらめや

月前擣衣同九十三　公宴御當座

よを寒みいそくきぬたも有明の月みるほとや打たゆむらん

冬　月

影もなを雲間はわきて淸けれは時雨そ月の光とはなる

恨

いかにせん蟹の子ならぬ身にしあれと恨てのみそ年はふりぬる

近見花同十廿五　公宴御月次

こゝをゝきてよそは尋ねし芦かきの間近き方の花を社みめ

霧底筏

立こむる霧またとりて大井河くたす筏のとこいかならむ

磯　浪

徒に同し磯邊をいつとなくよせかへる浪も世のなかそかし

法師功德品同八廿九　故二條殿十三回御勸進

法の道聞うるならはよの人の見ぬを鏡にうつしてもみむ

壽量品同壬十二廿一　稱名院右府盡七日

藥そと先きくからに法の水うけてこゝろの濁あらめや

嶺　雪同廿五　公宴御月次

木々はけささなから花に降なしてまたこぬはるを峯の白雪

竹　雪

ふるとしもみさりしものを吳竹のよのまにふかく積る雪哉

松上雪

時きぬとみきりの松に十かへりの花をさかするゆきの色哉

寄雪祝

年も今豐なるへき色見せて猶いや高く雪そつもれる

社同御當座

降雪に色そめかへて今朝は又みな白妙の衣手のもり

沙

言の葉の數にしとらはわかの浦や濱の眞砂もいかにたよはん

藤埋松同十二廿五　公宴御月次

行春の末の松山こゝにしも木すゑをこえてかゝる藤なみ

寒草霜

日影さす方よりちりて一さかり花をみせたる霜のした草

永祿五二廿五於淀細川右京大夫千句

織ぬふやはなのにしきのいとさくら

右言繼卿集雖有少々不審以無類本不能挍合

和歌部九十七家集十五

明日香井和歌集　參議雅經卿

鳥羽百首 建久九年五月廿日始之毎日十首披講之

詠百首和歌　侍從

立春

東路をいそき立ける程みえて今年越ぬるあふさかの春
今はさて今宵はかりと思ひねのあたに覺ぬるふる年の夢
東より立くる春やこれならむ霞のおくの明ほのゝ空
今朝よりは都のかたの雪消てまたかたさゆる谷のした風
今朝よりのなかめはそれに成はてゝかすみも馴ぬ初春の空
鶯も出あへぬほとの明ほのに先春つくる鳥のひとこゑ
いつしかととくるつらゝはそれなから波も聞えぬ音なしの瀧
今朝こそは同し日數に春をしる心のうちを人にしらるな
けさこそは花に成ぬる㒵のなかめにかはる雪の明ほの
もろ人の春にあふへきゆへなれやはこやの山の千世の初空

花

梢にはまた春あさし吉野山さえたる風の音はかりして
これそこの霞のうちの梢よりまつさきたちしおもかけの花
さてはいかに人にはかはる氣色哉花待えたる春の山かせ
詠やる高ねは花にうつもれて雲のみふかきみよしのゝ山
たれもみな花に心をうつしきてみやこのはるはしら川の里
たとりつる霞はよそのなかめにて匂ひにこもる春の花かけ
咲そめし花に心をいれしより春の日かすはみよし野の山
花かとも思ひもはてぬ山路よりなかめもまよふみねの白雲
とにかくに思ふも悲し吉野山花ゆへにやはいらむと思ひし
をのつから靑はに殘る花の色やつらき嵐のなさけ成蘭

霍公鳥此題三首不足歟

花もまた忘れぬ程の夢路より山ほとゝきす春に鳴なり
ほとゝきす待えぬほとのなくさめは心にとめし去年の古聲
とにかくに名殘そ思ふほとゝきす聞たにはてぬ聲の明ほの
待來つる五月の頃になりぬれは雲に聲あるゆふくれのそら
五月やみ雲路もみえぬさよ中に山ほとゝきす聲まよふ成
したひ行心の末になく聲もきく心地するほとゝきすかな
つれならぬ老やはつらき郭公さてこそあかね人のこゝろを

五月雨此題一首不足歟

五月雨はすたく蛙のこゑなからさはきそまさる井手の浮草
さみたれは雲のしからみ越にけり空よりあまる天の河水

五月雨は軒の雫の音すみて長閑に更るあま雲のそら
さ月やみ窓うちあかす雨の音にこたへて落る袖の玉水
初せ山入あひのかねの音までも打しめりたる五月雨のころ
さみたれの日數の外や小男鹿のつめたにひちぬ山川の水
うち川のはやせにめくる水車そらよりそくる五月雨の頃
雲間よりいてぬ日影のほのみえて猶しも晴ぬさみたれの空
五月雨のおなし雲まに秋をみて獨はれたるおもかけの月

月此題一首不足歟

ほのめかす鳥羽田のいなは打なひき露に影有夕月よ哉
それもみな出へき程の有物をまつ心にやいさよひの月
しかはかり待には暮ぬ空なからいつれは更る秋のよの月
晴やらて山端たかく成にけり雲よりいつる秋の夜の月
詠むれは更行まゝに雲はれて月すみはつる秋かせのそら
哀にも袂にやとる光かな月や情をおもひしるらん
おもかけを何に忘れむ秋の末なかめ馴たる在明の月
思ふ事是そたかはぬあきの月我ゆへはるゝそらならねとも
むねのうちにたのみもふかき月よりも先心すむ秋のよの空

紅　葉一首不足歟

外山より心にふかきうす紅葉時雨のおくの思ひやられて
かはり行すそのゝ萩の下はより梢につゝく秋の色哉
よそにたにみてやは過し柞原きりのうちまて思ひ入らむ
秋山の色を心にそめかへて詠すてゝきみねのしら雲
のこるへき秋のかたみのためなれやまた青は成枝の一むら
思へとも色はみやこに遠けれはあたちのまゆみ音にのみ社
ちりつもることをかねてや谷川の影よりうつす峯の紅葉は
哀さて是はかきりの色なれや秋も末はのはしのむら立
おもふよりかねてかつちる詠哉たつ田の山の秋かせの色

雪

むら時雨跡より晴し山端のやかてくもるや雪け成らん
朝戸あくるなかめは霜の心地してまつにはなさく薄雪の色
分なれし木のはの上に雪つみて跡たえはつる秋の故都
よはさゆる冬の朝になかむれはまつ都にはをの山のゆき
みよしのゝいはのかけ道跡たえて人やはかよふ雪ふかき頃
程もなく哀もふかきなかめ哉こまかにつもる夕暮の雪
ときはなる松のみとりも埋れてなにの梢の雪のむら立
たれかみる夜深くあくる槇の戸に雪よりしらむ庭の明ほの
この比はかけのかよひち心せよふゝきにこゆるこしの旅人
いはしろの尾上の松に雪ふれは風の音までむすほゝれつゝ

歳　暮一首不足歟

尋ねはやあすか都に年越て春はこよひや關のあなたに
春よいかに年をこめてや立ぬらむ宵よりかすむ面影の空
春たゝむ氷の下のおもかけやうち出かたの[きイ]波のはつはな
月をのみめつるつもりも今夜にて年こそ人の老と成物
いたつらに哀あならうと思ひきて過し日數の一とせのはて
大かたの日數もけふのなかめにて暮はてぬるか年の夕暮
みな人の年のつもりそ哀なるいそく氣色をみるにつけても
ゆく年を送りはてつるうたゝねの夢路にちかき春の明ほの
はかなしと思ひはてつる詠より袂につもるけふの年波

戀

懷かしと思ひ初てし氣色にはつれなかるへき君とやはみし
思ひ餘る心の程や見えぬらむうち沈まれはなかめせられて
厭はるゝうき身の程のことはりもいさや心のあらは社あらめ

あやなしやをさふる袖に移りきて泪にしつむ君か面影
をしかへし思ひしつむる身の程にあまる心やあくかれぬ覽
人しれぬ心の外にもる物はをさへてむせふ袖のした水
かへしてもむなしき床にしほる哉恨はてつる夜はのさ衣
きても猶かさねそやらぬさよ衣かへさぬ夜はも恨せよとや
あかなくに立かへりぬるおもかけやなかめにうつす有明の月
命にもかへむと思ふあふことに先きえ行はこゝろ也けり

述懐

思ふにも猶たのもしな千世ふへきはこやの山の行末のかけ
立かへりなをやはかなくまよひ南此度なかく離るへきよを
いとはしな扨もなからむ後は又戀しかるへき此世ならすや
つく〲といつをいつとて過す覽急きても猶急くへきよを
さりとても思ひもとらぬ身の程に何と心のありかほにこは
あくかるゝ心そよもにまとひぬる思ひ定むる心地なきほと
とにかくに思ひし事はたかひきて果はよをたに背き兼ぬる
なにとなく哀身にしむなかめ哉うき世を是そ夕くれの色
哀なりいつくも草の枕にてつゐのすみかは苔の下ふし
あはれ我なつまて過る道もかなくらゐの山の岩のかけ道

後鳥羽院第二度百首正治二年

冬日詠百首應　製和歌

從五位上行侍從藤原朝臣

春

霞

雪消るはるはみとりのゝへの色をかすみ初つる明ほのゝ空
春は猶明ゆく空そあけやらぬ霞かゝれる横雲のやま
風の音も春の氣色になかみかた波路はるかにうす霞つゝ
かすみ行まゝにみきはやへたつ覽また遠さかる志賀の浦波
まきもくの檜原か末は長閑にて霞の上に春風そふく

鶯

うくひすの泪の氷いかならむふきにし物を春のはつかせ
春きてはまた雪ふかき梅かえに宿とひかぬる鶯の聲
初音より名殘そ思ふ鶯の都へ出るはるのやまさと
今よいかに月影かすむ明ほのゝ梅のにほひに鶯のこゑ
古巣たつ都もはるの梢にて霞を出ぬうくひすのこゑ

花

これも先あかぬ心に入やらて外山の花にけふは暮しつ
詠てもねたきは雲の色なれや思へは春の花のさかりを
よしさらは花のふもとの松にふけいとひもはてし春の山風
吉野河ゆくせもみえぬ霞より風になかるゝ花のしら波
何としていか成へしとなき物は花にあらしの春の暮かた

夏

郭公

うの花のかきねより社子規まつちり初る忍ひ音のこゑ
ほとゝきすまつ夕暮に匂ひきてたのめかほ成軒のたちはな
初音とていかにかたらむ子規まちふるしたるよはの一聲
我もまたほのかにきゝつ郭公誰まちえたる夜半の一聲
いつもあかぬ名殘なれとも子規ひと聲のこるみな月の空

五月雨

霞しく朧月夜とみし物をへたてはてつる五月雨のそら
詠やるいこまの山のみねの雲いくへになりぬ五月雨の空

五月雨はもとのみきはも水越て波にそさはくいての浮草

さみたれの頃ともいはしいつとても雲は軒はの山かけの庵

我袖にむかしはとはむ橘のはなちる里のさみたれのそら

秋

草花

袖の上にうつれる色やそれならぬ折はやつさし秋萩の花

のへは閏草はゝをのか枕にて露にのみふすをみなへし哉

萩原や風まつくれの下露をよそにもかこつ女郎花哉

花薄なにとて秋を待けらし忍ひし程は露かゝりきや

まねくおはなうらむる葛に事とへはたか秋風のゝへの夕暮

月

秋よたゝ夕のそらを哀ともなかめはつれは山端の月

花の春なれし名残の俤に秋の月とはちきらさりしを

光もる軒のしのふの露なから袖にみたるゝ夜はの月影

なかめわひ更行まゝの袖の露月やはつらき秋のよのそら

月影の名残をのみやなかむへき秋もいくよの明ほのゝ空

紅葉

そむるより心やつくす立田姫あらし吹そふ秋の梢に

しくれ行木々のこすゑや移るらむ露も色つく杜の下くさ

尋入秋はとやまの色なれや是よりおくは松かせのこゑ

秋は猶たえすや松の下紅葉思ひもすてぬ色をみすらむ

宿うつむ軒はの蔦の色をみよ深山の里の秋の氣色を

冬

雪

晴くもるあらしにさゆるむら雲のしくるとすれは初雪の空

さひしさはかれのゝ原の末よりも雪の朝のとを山の松

ふりにける跡ともけさはみえぬ哉志賀の都の雪の花その

御狩野や雪はふりきぬ是も又ぬるとも花のはゑのおもかけ

たつねくる人は音せて三わの山杉の木すゑの雪の下おれ

氷

石はしる清たき河は玉ちりて結ひかねたるうす氷かな

そこ清き玉江の水のうす氷やとらぬ月もみる心地して

霜こほる尾花か末も波の音もむすほゝれたるまのゝ浦かせ

あらし山木のはの音も落はてゝとなせの瀧は氷してけり

山河の岩本たきつゆく水のこほるへしともみえし物かは

雑

神祇

君かため明はしめてや久かたの天の岩戸のいにしへの空

いはし水そのみなかみを思ふにも流れて末は久しかるへし

賀茂山のたかねにかゝるしら雲や分し名残の空のかよひち

住吉の松にたのみをかけ證てけふはうれしき波のしらゆふ

わけうつすおなし日吉のかけなれや光は是そあけの玉垣

釋教

天眼通

をしなへて尋ぬ山の花もみつへたつる雲のへたてなけれは

天耳通

遠さかる聲もおしまし子規聞のこすへき四方のそらかは

宿命通

世々をへて過にし方を思ふにも猶くもりなしよはの月影

化心通

皆人の心々そしられける雪ふみ分てとふもとはぬも

神境通

思ひたつ程こそなけれ東路にまた白河のせきのあなたは

曉

夕へとて淋しからすはなけれともたへぬ哀は明かたのそら
いとふへき契有ともいかゝせむ夜ふかき鳥のほのかなる聲
今はとてたか道芝にわくる露あはぬねさめのよその袖まて
さても猶夢をはかなみまとろまんしはしな明そ小莚の床
東やのまやのあまりのやすらひに先たつ人の音はすく也

暮

色かへぬ色こそかはれ夕附日さすやをかへの松のむら立
詠むれは暮たにはてぬ山のはにいつかたふける三日月の影
やまのはに月待頃のしはの戸をさゝすやなにをみねの松風
雲くるゝやまかたつきて誰か父都の空をなかめそふらむ
おほえすよ野守や近きいほりさすあたりもしらぬ入相の鐘

山路

なかき夜のさよの中山明やらて月に朝たつ秋のたひ人
時雨つる礒邊の雲を分くらし野原にいつるそての月影
ふる郷のたよりとならはことつてむ袂にむかふうつの山風
暮行は宿かる方もしら雲のかゝれる峯に立そわつらふ
ゆきかよふかけのほそ道末たとりこゆとしらする旅人の聲

海邊

明石かた月ゆへならぬ詠まてはれて淋しき波の上かな
都思ふ袖をはゆるせ清みかたさこそならひの波のせき守
哀なりいつれの浦の泉郎ならむ寄かたもなき興の釣舟
なみの音松のあらしの浦つたひ夢路より社遠さかりぬれ
またしらぬうきねの床の梶枕なれぬ袂になるゝなみ哉

禁中

百敷やたえぬなかれをみかは水猶行すゑのかけもはるけし
河竹のかはらぬ色のふかみとり玉しく庭の末そしらるゝ
治れる世のためしとやかきとめし風も音せぬあら海の波
くもかゝる大内山と成にけり幾よのちりのつもる成らん
衞士のたく烟たえせぬ御代にあひて民の竈もいかゝ嬉しき

宴遊

菫つむ袖より袖をかたしきて野をなつかしみ一夜のみかは
こゝやさはたなはたつめに宿かりし天川原の夕暮の空
もみちはを袖にこき入て歸けむ人の心のいろを見るかな
御狩せし野守のかゝみ尋きてふりにし影もみる心ちする
しほ釜にいつかきにけむとはかりの其言の葉に昔をそしる

公事

春の朝はこやの山のみきりより先いはひたつ雲のうへ人
今日にあふ雲ゐの庭のすまひ草とるてもあたにうつる物かは
これも又ちとせの秋のためし哉けふことにひく望月のこま
君か代に雲のかよひち空晴て乙女のすかた月に見るかな
新玉の春をむかふる年の内におにこもれりとやらふ聲々

祝言

雲の上もはるのみやまの萬世も松と竹との末にたとへて
いつとなく君か齡はわかの浦に千年をさして田鶴なき渡る
きみか代を思ふ心の末の松波はこすとも色はかはらし
幾千世もおなし月日の廻りきて變らぬ御代は空にしるしも
百草の千くさにあまる言のはも君かみかけは末そさかへむ

千五百番歌合百首 建仁元年

秋日同詠百首應　製和歌

從五位上守左近衞權少將藤原朝臣

春

きのふかも年はくれしか天の戸の明るまちける春霞かな
氷とくをきつ春風吹ぬらしみきはにかへる志賀の浦なみ
はれやらぬ雲は雪けの春風に霞あまきるみよしのゝ空
若なつむゆかりにみれは武さしのゝ草はみなから春雨の空
雪さむき山の軒はの梅かえに春を待しもうくひすの聲
春もきて立よるはかり有しより霞の袖の梅のうつりか
[新古]霞むより雲路にのみそ聲はするさはへの田鶴ものへの雲雀も
しらくもの絕間になひく靑柳のかつらき山に春風そふく
立歸りみても見まくの花盛さそはぬ風のうち匂ひつゝ
山高み雲ゐの櫻くもとみて休らふ程に風やふくらむ
たにかせや山も霞のひま每に又うち出る花のしら波
山風のふきぬるからに音羽川せき入ぬ花もたきのしら波
雪もうし嵐もつらし山櫻まかふとみれはちりはてにけり
春のうちは待もおしむも思ひねの花をのみ見る頃の夢かな
忘れすは散なむ後も思ひ出よ花みかてらの春のよの月
三吉野やたのむのかりの聲す也花に名殘の春の明ほの
さゝをみいく野の末を見渡せは霞にかへすはるの小山田
暮ぬともいかゝみすてゝ橘のたつねこしまのやまふきの花
うつり行春をはたこのうらみても忘れすかけよ岸の藤波
限りあれは今宵もすてに更にけり暮かたかりし春の日數の

夏

袖の色も移りにけりな夏衣春は暮ぬとなかめせしまに
卯花や春をへたつるかきねまて殘はてたる雪のむら消
花は春ちりにし峯に哀てふことをあまたにやらぬしら雲
たつねはやさ月こすとも子規しのふの山のおくのひと聲
數ふれはこぬ夜あまたの郭公待にまされるなかめせよとや
子規ねさめさりせはとはかりも思ひもあへす過るひとこゑ
橘の匂ひは今そほとゝきすなかはなくへきゆふくれの空
いにしへやみぬ俤もたちはなの花ちるさとのありあけの月
五月雨に越行浪はかつしかやかつみかくるゝまゝのつき橋
石上ふるのゝ道も夏くさに露分衣そてふかきまて
夕立の名殘はみねに雲消[晴イ]てすそのゝ草の露の一むら
明わたる雲のいつくに入やらて山のはかこつなつのよの月
立よれは衣手凉しあらし山秋やとなせのたきのしら波
夏ふかき野原の暮に影みえて螢露けきさゆりはのはな
みな月やさこそは夏の末の松秋にもこゆるなみの音かな

秋

朝倉や木の丸とのにたれとへは秋をもなのる荻の上かせ
久方のあまの羽衣まれにきて契りはつきし星合のそら
萩のはなさくともよそに宮城のゝ木の下露の秋の夕くれ
をとつれて身にしむ風の吹しより結はぬそてにおきの上露
咲にほふ千種の花の末はよりうす霧なひく野への夕かせ
尋ねてもたれかはとはむ三わの山霧の籬に杉たてる門
夕附夜やとる山田の露の上にかりねあらそふいなつまの影
よしさらは袖にもかけをやとしてむ月待よひのやまの下露
眞葛はら露に光をさしそへて玉まく物は秋のよの月
かつらきやたかまのみねに雲晴てあくるわひしき在明の月
有明の秋そ名殘は大はらや月をゝしほの山のはのそら
ともしせしは山しけ山忍ひきて秋にはたえぬさをしかの聲
秋かせにうつら鳴のゝ夕まくれなきこゝろまて哀をそしる

夕暮はいつくをいかになかめまし野にも山にも秋かせそ吹
いはしろのゝへの下草ふく風にむすほゝれたる松むしの聲
何とかくはらひもあへす結らむ袂は露のをき所かは
夜な／＼はやとり馴にし月影もかれ行をのゝ淺ちふの露
暮かたの木のはに（そイ）まかふ秋の雨の窓うつ音に夜は更にけり
あきふかき（にイ）松の嵐の立田山よそのこするを先はらふらむ
ふかくさや秋さへ今宵出ていなはいとゝ淋しき野とや也南

冬

秋山に時雨は過ぬ神無月このはそ冬のはしめとはふる
ゆく秋のわかれし野へは跡もなし只霜ふかき淺ちふのはら
くれぬとも猶秋風は音つれよ荻のうはゝのかれ／＼にたに
行かへり是や時雨のめくる雲又かきくらすとを山のそら
霜やこれかはらぬ色をおきあかし月にかれのゝ秋のふる郷
此ころは月こそいたくもる山の下はのこらぬ木からしの風
ふちはせに變るのみかは飛鳥河きのふの波そけふは氷れる
つくは山しけき木末やいかならむこのもかのもの雪の下折
とふ嵐とはぬ人めもつもりてはひとつなかめの霜の夕暮
波の上に友なし千鳥うちわひて月にうらむる在明のころ
芦間とちいかにうきねのをしの聲先氷りける波のまくらを
あしろ木や宇治の河風よはさえておのれのみよる波の音哉
昔よりたえぬ煙の淋しきはむろのやしまの冬の夕くれ
哀にもをのゝ音まていそく也松きる山のとしのくれかた
としくるゝ春や昔の春ならぬもとの身にのみ立かへりつゝ

祝

千世を祈る神のみむろの榊葉は君かためしに茂りあひにき
思ひやる心のはても猶過て道ある御代の千世のゆくする
かきりなきよは久方の空はれててらす月日も長閑にそすむ
君かへむ齡をさして大そらにむれたるたつのおのか聲々
きみか代は常盤の山の松のかせ色もかはらし音も絶せし

戀

是やさは人を思ひの初けふりなれぬ詠のそらのうき雲
（續古）ほに出し芦のふしはの下みたれ入江のなみにくちはつ共
思ひせく心の瀧のあらはれて落とは袖の色に見えぬる
いかて猶しはしも人をすみよしの淺澤水のするはたゆとも
（續拾）かけてたに頼めぬ波のよる／＼を待もつれなきよさの浦風
哀ともいつかは人にいはれのゝいはれすかゝる袖の露よな
さきの世を思ふもうしや人心つれなかれとは契りしもせし
思ひわひ落る泪の玉ことにくたきはてゝもあるこゝろ哉
やとるとて月に涙をまかせても朽なはいかに袖のしからみ
歸してもむなしき床にしほる哉うらみはてつるよはのさ衣
思ひかねつれなき中にまつ事はくらせる宵の夢のかよひち
（新後撰）山のはに入まて月をなかむともしらてや人の在明のそら
物思ふ心ひとつに秋更て人をも身をもくすのうら風
思ふこと殘らぬ秋のゆふへにも猶わすらるゝ身社つらけれ
むすふ手の雫はかりを袖にみてあかても人に山の井の水

雑

東屋のゝきの忍ふの末の露いく朝おきの袖しほるらん
やとれとや苔のさむしろうちはらひ旅行人を松の下かせ
雲にふし嵐にやとる足曳の山のいくへのゆふくれの空
跡とめてとまるかたなきうきね哉さこそうきたる波ち成共

風わたる松の下ねのさよ枕夢ちさたゆるあまのはし立
玉藻しき袖しく磯の松かねに哀かくるも沖つしらなみ
けふも又荻のうはゝを空にみて露ふりくらすむさしのゝ原
草のはにしほれふしぬる袖枕夢やはむすふよはのしら露
野への露山の雫に立ぬれてかことかましきたひ衣哉
哀とてしらぬ山ちをゝくりきて人にはつけよあり明の月

詠百首和歌建仁二年八月廿五日

正五位下行左近衛権少将藤原

春二十首

消あへぬ雪を花とやみよしのゝよしのゝ山のはるの初風
春霞たちなはみ雪稀にふれ若なつむへき野へのかよひち
はるも猶むすほゝれてや岩代の野中にたてる松の白雪
鶯の聲は都にふりにけり舊巣はいまた雪もけなくに
けふも又とふ火の野守しるへせよ今いくかありて峯の初花
雪もきえ花もちりなは中々に雲そさひしきみよしのゝ山
百千鳥さへつりくらす春の日を物うかるねにうち詠つゝ
するかなる田子の浦波うら馴て春は霞のたゝぬ日そなき
なかめわひぬ春の霞に入月のおほろけにやは在明の空
新勅 花さかていくよの春にあふみなる朽木のそまのよその埋木
八重霞たつ田かはらの河柳ふかくもはるの色になりゆく
ひきかへて緑の色をみちのくのあたちのま弓春雨そふる
雪の色は越のしら山しらね共はつかにかすむはるならぬ空
立わたる霞の袖や大そらにおほふはかりの春の明ほの
いつれとか梢はかりを三わの山霞にまかふ檜はらすきはら
人やりの春ならなくに行かりのかすめは空にをのれ鳴聲
なはしろの水かはあやな遠山田風にまかする花のしらなみ
ちりつもる花はいくかそもゝ敷や大宮人の春のかよひち
きゝもせすみもせぬ山の嵐まて俤つらきはなの上哉
わくらはにとへかし人のけふの暮春の別にわふとこたへむ

夏十五首

袖の色になれにし花のから錦たゝまくおしきなつ衣哉
分入れと袖やはぬるゝ卯花のうきたる波の玉かはのさと
浪速なる芦間をしふみかき分てけふはた同し菖蒲をそふく
雪まよりほのみし野への夏も猶むすほゝれたる風の下草
一聲もいつらはよはの子規まつかとすれはあくるしのゝめ
たか爲もまちし五月のあやめ草あやめもしらぬ郭公哉
石上ふるのさみたれ瀧にそふいかにみかさの末のしら波
五月雨におりたつ田子のみつからもほしあへぬ迄早苗とる袖
むら雨の名殘涼しきなてしこのとこなつかしき露の玉哉
あまのかるもにかすむてふ我からの音をたに鳴ぬ夏虫の影
夏くれは梢をしけみ葉かくれて蟬の鳴音はおほあらきの森
くもりあへす白雨すゝし夕つく日さすやをかへの村雲の空
月かけに風ふく夜半の夏衣たちこぬ秋になるゝ袖哉
いとひこしなつみな月の空晴て秋にまちかき在明の月
みそきかは河波しけく立まよひ夏はなこしのけふの夕くれ

秋二十首

荻のはのなひく氣色はそよきてもまた馴そめぬ秋風そふく
たなはたのたえぬ契りもしら露の曉をきの天のはころも
分わふる袖の朝露打はらひ秋にしなれはみやきのゝ萩
露にふく淺茅かはらの秋風をいくよのやとにたれなかむ覽

誰とてもうれたき秋の夕暮をたえすも吹か葛のうら風
さとはあれてうらむる虫の聲計庭も籬も秋の夕くれ
ふる郷の秋をはかれす人もとへくるしき物と松むしのこゑ
はらはしよ分入のへの露しけみうつるとすれは袖の月かけ
なかしとはけにもいつらは月の頃みる人からの秋の夜の空
あたら秋の月と露とをやとしもて哀もしらぬそてにみる哉
たえ〳〵に雲間を分て行月のゆくゑにまよふ秋のむら雨
ひたすらに山田もる身と成もせし今やいなはの秋のゆふ暮（霧イ）
鹿の音をねこし山こしことつてよつまにもかもや秋の夕風
秋のくる峯の朝霧たちまよひ思ひはれせぬさなしかの聲
あまのすむ浦より遠の秋よたゝたくもの煙夕きりのそら
（新古）みよしのゝ山の秋かせさよ更てふる郷寒く衣うつなり
秋は今朱の松山なみ越てあたし心はあり明の月
しくれ行よもの山邊をなかむれは空よりかはる秋の色哉
時雨ゆくときはの山の岩ね松いはねは社あれ下もみちつゝ
かつらきの山の紅葉はなかるらし冬を思へはあすか川かせ

冬十五首

冬きぬといはたのをのゝ梢より先しくるゝはあらしなり鬼
曇り行しくれなはらふ松かせの音しもはれぬをかのへの里
虫の音も今はかれ野にありてなし哀あならの秋のふる郷
ぬるからちにをとやこのはの積るらむ夢ちもたゆる山颪の風
外山なるまさきのかつら繰かへしいく度晴て霰ふるころ
小さゝ原露ふき結ふ風の音のいとゝさやきてけさの初霜
吹まよふ嵐の音の山めくりくもる時雨かはるゝ木のはか
さても猶秋の名殘は在明のつきせぬ色をみねのしら雪
雪ふれは秋なきときし咲にけり移しうへての宿のしら菊
いつしかも影みし水の薄氷月や光をむすひをきけむ
時しらぬ山ともみえすふしのねやつもれはつもる此頃の雪
千鳥なくさほのかはらの河風に霧晴わたるあり明の月
哀なりにほのうきすのうきてのみよるへしら波跡も止めす
さひしとてやくとしもなき炭かまのたえぬ煙の大はらの里
おしみかね今こそ春にこゆるきの磯たちならしいそく年波

戀十首

亂れあへすかゝる露をく物そとはまたしら菅のまのゝ茅原
是やさはもゆる思ひをしなの成わか身あさまの夕くれの空
思はしと思ひたえてもいくかへり解やらぬ戀を賤のをた巻
さてのみや山路の菊の露のまにぬれてほしあへぬ片敷の袖
いく世まて（さイ）契りし後も久かたの月ならぬそらをまち詠つゝ
更ぬるか思はぬ月はまち出ぬわれやゆかむのやすらひの空
便りあらはいはたのをのゝをのれたに斯と告こせ葛の裏風
消かへり落るなみたの玉のをのたえぬとかいはむ袖の亂に
秋は只枯ぬるくさは道芝のしはしのあとゝみしやいつまて
むすひをけ別しまゝの跡の露けなむ名殘は人とはすとも

雑　此題歌十三首不足

そむきえぬ我をやつねに松の風心ならはすみよしのゝおく
きてはさていか成山にかくれなむ世にすむ月の行するの空
なかむれは月はむかしのかたみかはあらましかはの人の俤
とにかくに思ふ事のみ大原やせりうの谷に身をやなけてん
世やはうき人やはつらき大かたは只我からと思ひなりぬる
むかしまて立かへるへき我身かは道ある身には（はイ）嬉しけれ共
ことのはをちらし置こそ哀なれ朽ぬ名もあらんと思ふ計に

詠千日影供百首和歌

元久二年正月九日相當立春仍始之

羽林員外次將

春

春たつといふはかりなる月日にて今日より空や霞そむらん

猶さゆるおなし雪けの空の雲たゝまくおしきはる霞哉

峯の雪たにの氷りもとけぬらむ鶯さそへ梅の下かせ

のへの色は若菜つむへく成ぬれと山のおくには猶雪そふる

見渡せは野へはみとりに雪きえて今はこのめも春雨そふる

こしのそらはいくへの雲の上に又霞とひ分かへるかりかね

花やさく霞のうちもしら雲のかゝれる山のあけほのゝ空

花の色はいまたよそにもみねの雲重ねて消るきさらきの山

くもの色もおなしなからの山櫻霞そしかのはるの明ほの

しら雲とかすみはてゝも足曳の山のかひより春や行らむ

夏

久方の天のは衣ころもわかし今日のならひの夏は立とも

此頃はあなうの花の垣根まて山ほとゝきすなく／＼そふる（なかぬ日そなきイ）

かけて待その神山のほとゝきすけふやはつねにあふひ成覽

あやめゆふおなしよとのゝ子規なれか鳴ねも枕にそする

人ことに戀ふる昔はかはれとも匂ひはおなし軒の立はな

今はたゝさそふ水あらはと思へ共袖のみそうく五月雨の空

世中はふかき契りをうかひ舟しつまんよゝのをと尋ねつゝ

露をきへ玉とあさむく蓮葉のにこりにしまぬ夏夜（盤イ）の月

ほに出ぬなつのゝすゝき下そよき吹かたしらぬ秋風のいろ

春も過夏の日數もたけくまの松ふく風や秋ならすとも

秋

はつせ河きのふかみそきすかはらやふしみの里のけさの秋風

天河かさぬる年の〔　　〕ふたゝひわたせかさゝきのはし

あやなしや露吹むすふ夕かせにちるらむ小のゝ秋萩の花

世中を心ひとつに秋風の吹にしそてにおきのうは露

鴈のくるそなたの空のたよりとてつはさを送る秋の山かせ

あらしふき霧晴あかる山のはに猶ほのかなる夕月よかな

秋遠く露に光やみちぬらむすそのにしろき草の上の月

秋は只なをおく山の夕まくれ紅葉ふみ分る鹿のねもうし

たれもみようき世を秋の末の露もとの雫の淺ちふのかせ

思ふよりやゝ木からしの聲もうし秋にわかるゝ夕くれの山

冬

荻のはになれし音こそかはれ共これも身にしむ木枯の風

（山めくるイ）暮かゝる時雨の雨のたてぬきに雲のはたての折そさひしき

聞わかぬよはの嵐やたゆむ覽木のはの音もふりみふらすみ

さとかよふ四方の嵐の聲さむしいつれの山にはつ雪かふる

片敷や置まよふ霜のさむしろにいくよの冬をうちのはし姫

月影はあしやのおきにかたふきて我すむかたは千鳥なく也

さえゆけは芦間のをしのとり／＼に友ねあらそふ夜半の諸聲

芳野川たゆる時なき瀧つせにあらし落そふ冬のさやけさ

冬のうちはいつれを梅の雪の色に匂ふかきねやさける初花

暮はつるけふを哀とまとろめはいやはかなゝる一年の夢

戀

今日こそは岩かきぬまのみこもりに打出かたき底の心を

思ふとはしらすやいかにまとり住人をうなての杜の下草（路イ）

誰故かかくしもたえぬなけきひく思ひいつみの杣の通ひち

かきくらす涙に空やまかふ覽あくらんわきもしらぬよの月

さても猶山鳥のおのをのつからなかく\しきを契り共かな
ぬるか内に夢としりせは中々にあふとみる程の慰めもあらし
いとせめて物思ふ時のなかめには空行くもしつ心なし
興に出てみるめをかつく時たにもくるれは蜑の恨みてそ行
今は只けぬとかいはん朝露にぬれにしそても朽はつるまて
しぬる命さてもかきりのいかなれはしらぬ月日の猶積る覽

旅

今はとて都をいつる空そなき山のはしらむあふさかのせき
雲の外にいくへ日數をへたてきて宮古も遠き山の夕くれ
袖ふかき露のかことや月影をきつゝなれたるあきのたひ人
しほれふすのへのをかやのかり枕むすふや露のやとり成覽
足曳の山の下露うちはらひ入にし袖をとふ人はなし
かそへこし日數も今はしら雲のいくへの山をけふも越らむ
あつまちや宮古しのふのうらみてもならはぬ波にかこつ袖哉
思ひねはかならすなれし都にていくよもおなし夢の通ひち
みし夜半の月に都をとひかねてしほれふしぬる袖の俤
またしらぬのへにや宿をかるかやの思ひ亂るゝそての夕露

懷舊

久かたの天きる雪のふかき色は幾夜ふりても跡そかはらぬ
足曳の山鳥のおのなかく\に昔をかけてかゝみさりせは
いかはかり我身しくれとふりぬらんみしも昔とぬるゝ袖哉
ぬは玉のよるの名殘は今もみれと又あひかたき古の夢
身にそひてやすむ心のひまそなき遠さかりにし古のあと
きけは猶心にむすふふるき風今更にやはいはしろの松
立かへり心のうちそたとらるゝ過にしかたの道まとふかに
うきなから我身ひとつのもとの身やあらぬ昔の名殘成らん
いたつらに過る月日の明暮は思ひそ出るいにしへのそら
こしかたはむなしくてのみ杉たてる里もうき我みわの山本

述懷

よる波のかひある和歌の浦人とかゝる汀のいかてなりけむ
哀このみちしる御代にあひぬとも昔のあとを尋ねさりせは
あはれとやそれさへうしと身を捨て思ひし谷のふかき心を
いたつらにかくても年のたけ行をたけしや心猶たのむらん
ことしけき世はうき物と亂ぬる心をさてもしつめかねつゝ
よの中よとてもかくてもありはてぬ命まつまを何歎くらむ
ことのはを今さらにやは岩代の尾上の松とむすひそめてき（けんイ）
さりともと思ひそめてし年月のはては哀と身につもるまて
數ふれは三年になりぬ水莖のたえぬ流れのためしともなれ
人ことに哀はかけよ百草のちくさにつもることのはの露

無常

誰か世を思ひとりへの山のはにたつやはよその煙ならねと
世のならひはかなき物とはかりを云もあたなる言のはの露
おとろかぬ心ひとつのまよひきて猶夢ふかしあなう世中
いたつらにむなしきそらを詠ても世は浮雲のうち時雨つゝ
人となること社かたき世なれ共哀いく度生れきぬらん
有とてもさてやはつるといける物必すしぬるよとはしるく\
かきりあれはいつの契りを結ふらむしらぬの山の苔の下露
さきの世もいかなるつみのおもき上に重ねて積る月日成覽
いつ迄か長閑に世をも思ひ劒うしとみそしの餘りはかなき
人の齡これより末そあはれなるさり行さまの思ひしられて

十樂（一首不足）

聖衆來迎樂

ふかく染る心の色のあらはれて浮世はれ行むらさきのくも

蓮華初開樂

初花とさくも程なきはちすはのにごりにしまぬ色やみゆ覽

身相神通樂

をしなへてゆきゝのさとりみつる身は通ふ心に身を任せつゝ

五妙境界樂

是そ此心にかけししら雲のさかひはるかにうき世へたてゝ

快樂不良樂

思ふ事ゆたのたゆたにつゝむ袖立ゐにつけて身に餘るまで

引攝結緣樂

あたにのみ猶うたかたのきえぬ共結へは深きえに社有けれ

聖衆俱會樂

終に又法のむしろをしきしまややまと言のはかはす諸人

見佛聞法樂

佛を見法を聞こそうれしけれねかひしまゝの心たかはて

隨心供佛樂

朝夕のなるゝたふさにさゝけても心のまゝの花たてまつる

詠百首和歌 此百首四十八首有之殘歌不見

秋二十首

立　秋 九月九日始之

秋のくる山さなかつらうちなひき朝露かけて風やふくらん

七　夕

天の河紅葉のはしの秋かせにこそのわたりもうつろひそ行

萩

いねかての曉露もをきもあへす下葉色つくのへの秋はき

女郎花

色に出てまたきうつろふ女郎花たか秋風になひき初けむ

薄

袖にまかふ遠方人はしられね共尾花ふきこす風はうらめし

刈　萱

をかや原かるも亂るゝ秋風にふするゐの床もい〔え歟〕やはやすけき

蘭

武藏野の草のゆかりの藤はかま主こそしられ色はむつまし

荻

下おきのをきふし秋をかそふれはなかは過たる露そ降ぬる

鴈

かりのくる都の秋の俤にとこよの月やひとりすむらん

鹿

高砂の松もつれなき秋風によをつくしてや鹿の鳴らん

露

露落るよものあらしの聲毎に泪もたえぬ秋のそら哉

霧

麻衣八重たつきりを分かへりつま木にこりぬ賤のをたまき

槿

さくとみてかつちる春の花よりも空蟬のよは秋の朝かほ

駒　迎

しろたへになひく眞袖や花薄ほさかのこまにあふ坂の山

月

移りあへす色かはりゆく山のはに殘るもつらき在明の月

擣　衣

かりかねのきこゆる空に月さえて小夜更るまて衣うつ也

蟲

露霜をたてぬきにはたをる虫の聲のあやなくまつよはり行

菊

秋の霜つもれと人のこれそ此老とはしらぬしらきくの花

紅葉

くれなゐのやしほの岡の色そこきふり出て染る秋の時雨に

九月盡

秋の色のためこそみまくほしやらぬ後は何せむ袖のしら露

冬十五首

初冬

今朝よりは嵐ふきそふみよしのゝ故郷さむき冬やきぬらん

時雨

しくれ行み山かさとの庵にたくしは〳〵くもる此頃のそら

霜

ふく風の音もさえ行篠のはにをく初しものふかきよの空

霰

浦かせにさやく難波の玉かしはもにうつもれぬあられ降也

雪

誰みそきゆふかけそふる色なれや衣立田の山のしら雪

寒芦

ひろ澤の池の玉もに亂あひて枯ゆく芦のしのふもちすり

千鳥

波ち行月になくさの濱千とり友こそなけれ影ははなれす

氷

水の面にねさしとまらぬ浮くさのよとむ計に氷る瀧つせ

水鳥

芦のはにかくれてすみし水鳥の鴨の青はもあらはれにけり

網代

橋姫のまつ夜更行かは波に月もいさよふせゝのあしろ木

神樂

みしまゆふかたにとりかけ榊葉にときはかきはに祈る神垣

鷹狩

はしたかの野守のかゝみ外にやはみるかけさへに暮方の空

炭竈

忘れては雲かとそ思ふ雪分て煙たなひくをのゝすみかま

埋火

秋をやくこのはの色や殘るらむ嵐にたえぬ宿のうつみ火

歳暮

東路にありといふ成てまの關とりとめかたき年のくれかな

戀十首

初戀

思へ共いはかき沼のひまをなみうきみこもりにもらし兼つゝ

不知人戀

しる人もなきさの松のねを深み又とゝはれす波はかくれさ

不遇戀

あふ事は涙のかはのはやきせにおひぬみるめを何もとむ覽

初遇戀

うしとのみゆふてもたゆく思ひこし心も今そとくる下ひも

後朝戀

俤は猶有明の月くさにぬれてうつろふそての朝露

遇不逢戀

立かへり又やはよそに石間行みつのしら波袖もせきあへす

旅戀

かたしきの袖も我からあまのかる藻(に脱歟)すむといふ虫あけのせと

思

煙たつふしの高嶺のよそにたにたえぬ思ひを空にしれつゝ

片思

哀とも思はぬ人の俤にかすかきわふるみつからそうき

恨

しかのあまの鹽やき衣なれたにもかはかぬ袖を恨やはせぬ

雜二十首此歌十七首不足

曉

年をへてねさめよふかきかねの音の泪ももろく成そ悲しき

松

霜雪にさても年ふるそなれ松心の色はわれそつれなき

竹

木にあらす草にもあらぬ竹のはも籬の外の物とやはみる

春日社百首元久二年十二月三日於寶前披講七ケ日參籠之間詠之

冬日百首和歌

左近衞權少將正五位下行加賀權介藤原朝臣

春

春はまつ空の氣色そ春日山みねの霞もはや立にけり

春きぬと人にもかもや岩にふれ瀧のみなかみ氷とくらし

松の雪は今はたおなし高砂の尾上のとやまはる風そふく

春日野やたゝはるの日にまかせても猶うつもるゝ雪の下草

野へみれは今は霞のしかすかに雪消にけりわかなつみてん

へたてつるかすみややかて曇るらむいこまの山の春雨の空

霞行春は雲路をとふとりのあすかのさとに鴈かへるらし

立まかふかすみの色も朝日影にほへる山のむめのしたかせ

はる風に梅の初花さきしよりあかぬ色かはうくひすのこゑ

吹さらむ山ちの花もしら雲にかきねの梅をみすか過なん

みやこ人花とやみらむはるかすみかゝれる山のみねの白雲

霞たつ春の錦のおりをみよ柳さくらをたてぬきにして

はる風にありかをとへは足曳の山櫻戸の明ほのゝそら

年をへて花みる事はしかあれとも春にはうとき物思やなき

花の色はうつりにけりなみよし野の梢青根かみねの春かけ

はるの色も今更しるになくさます秋をはすての朧月夜に

梓弓はるはかすみの山のはにいるか如くのありあけの月

つみにこし人の心もすみれ草野をなつかしみひはり鳴也

河風にちるたにあるを山ふきのゐてこすなみに春や行覽

けふならて今幾日ともなき春をとふ火の野守えやは留むる

夏

春をのみ猶うつせみのから衣むなしくうつる袖のいろかな

夏かけてうつろふ池の藤波に山ほとゝきす松かせそふく

この頃は卯花月夜よゝしとて山子規またすしもあらす

待えても誰かはきかむ子規たゝ一聲をさよふけてなく

子規なく一聲も夏のよのみはてぬ夢のあけほのゝそら

郭公あやめか軒のむら雨にぬれてもかほる夕くれの聲

五月雨はふもとにくものおりはへて山もとゝろになく郭公

久堅の雲の波こす瀧の上や御ふねの山のさみたれのころ

ふる鄕はむかし忍ふの軒の露袖にかけてもかほるたちはな

早苗とる山田の原のならかしはいなはもまたぬ風そよく也

鵜川たつかた山舟のさしもなと月にはいてぬならひなる覽
柚川や月も波間にうきまくら筏の床は夏もしられす
むすふてに秋を思ひそいつみ河波ふく風を袖にかせやま
夏ふかき篠分るあさの袖ひちて野中の淸水結ひ暮しつ
凉しさをそてにならしのをかへなる秋といはせの杜の下風
夏のひもたけふのこふの夕すゝみ袖には秋の心あひのかせ
河なみにまかふ螢のみたれてもすむや澤邊のあしのうら風
夏なれは遠かた野へにかる草のかきねにつゝく山のへの里
小はつせの山たちはなれすかはらやふしみの里の夕立の空
たかみそきゆふかくる波の立田山あさのは流る此川のせに

秋

このねぬる朝けの袖はまたひとへかさねはたれに秋の初風
まちえても先更ぬらし夕つゝの行かふよはの星合の空
夕日さすすそのゝ末にわくる露うつるか袖に匂ふうきはし
秋萩の花をやねたくしら露のをくとははらふ野への夕風
夕されは玉ちる露も白妙の尾花かそてにあきかせそふく
つの國のこやのねさめに芦へなる荻のはさやき秋風そふく
風の音は秋もあらちの山のはにこゝろくやしき鴈そなく成
夜もすから妻とひかねてかへるらし朝行しかのあとの白露
出やらぬ月待よひは足曳の山のあなたのおもかけもうし
月といへは嵐そ雲をまきもくのあなしの山の夕暮の空
山のはに秋もや今と更ぬらむ待宵過ていつる月かな
哀我秋のなかはの夜をかさね在明の月にねさめしてのみ
守あかす月に心をつくはねのすそはの田井の秋のかりいほ
秋のよのふかき思ひはもゝはかきはねかく鴫の曉のそら
ふかくさや霧のまかきにたれすみてあれにし里は衣うつ覽
虫のねに露を夕かせふきみたり淺ちかはらは秋そかなしき
秋も今はしくるゝ程に成に鳬山のこのはのそらにうつろふ
はゝそ原色つき行は山しなの石田のをのゝくすのうらかせ
三むろ山秋をや風のかへすらむ紅葉にあける神なひの杜
詠わひ秋もくれぬと夕つくひさすや三かさの山のはの空

冬

いつしかも冬の氣色を水くきのをかのかやねのけさの初霜
冬は來てとはぬ人めを松かきのましはの樞風もたまらす
槇のはにあらそひたてるみねの松いつれつれなし木枯の風
よしさらは人とはぬまて埋とも入なむ山の跡の木からし
ねさめする深山もそよに篠のはに一夜ともなき嵐をそきく
草も木も枯ゆくよはのしもとゆふかつらき山の冬の明ほの
さゆる夜ははねに霜ふる大鳥のはかへの山に山下風そふく
霜の上にかたふく月の影落ておなし尾上のかねの一聲
さむしろに衣かたしく橋姫の枕に波のよるのあしろ木
日影さすあしたの原やくもるらむかた岡山にしくれふる也
久堅の空は雪けのみねの雲きのふもけふもうち時雨つゝ
霰ふるまさきのかつら埋れて雪になり行みやまへのさと
ふきしほるむへ山風のあらしより野への草木の雪の下折
見わたせは檜原杉のはうつもれていつれかみわの雪の山本
誰かけさ雪うち拂ひはし鷹を末のゝはらにとかりすらしも
霧はるゝ月は明石のみなとかせさむく吹らし千鳥しは鳴
月影をそれかと計みしまえの玉江の水はこほりしにけり
よし野なる冬はなつみの川かせに氷る岩間のをしの諸聲
此里や八十氏人のすみかまとまきのお山に煙たつなり
いかにせん春にはあはて老らくのこむといふ成年の暮かた

雑尺教

是身如聚沫

早くゆく岩間の水のわくらはに浮てもめくるあはれよの中

是身如浮泡

庭たつみはかなく結ふうたかたの消るもよその袖の上かは

是身如炎

春のゝにやくともえ行若草の哀をこめてたつ煙かな

是身如芭蕉

あひにあひて世を秋風の吹もあへす先破ぬる草のはもうし

是身如幻

世中に猶哀なりまほろしのうつりやすきはならひなれとも

是身如夢

むは玉の夢とみつゝもおとろかすなかき眠に結ほふれつゝ

是身如影

厭ひかねうきは身にそふ陽炎のあるかなきかのよをや頼まむ

是身如響

谷風のひゝき計を契りにて聞もあやなき山ひこの聲

是身如雲

詠むれは空しきそらにうき雲のさすらへはてむ行衛知すも

是身如電

秋の田のほの上てらす程もなし闇をはなれぬいなつまの影

述懐

神垣にひくしめ縄のたえすしも君につかへむ事をしそ思ふ

かすか山またゝにふかき岩ね松かたきは神の惠み成けり

ことしたに春にはかけよ藤の花いかに三笠の山のはもおし

春をまつ袖にはいつかこむらさき我元ゆひの霜そふりぬる

ねきかくる泪の色やふかゝらむ思はぬそてもあけの玉かき

うしとのみ三年かけつる年波のなみ〳〵ならて身の沈む覽

水上の哀はかけよさほ川のたえ行末のみくつなりとも

有もうくなきも悲しき世中をいかさまにかは思ひさためむ

そのかみの契りをしのにたのみても袖に涙や七日ひさらむ

短歌

あまのはら　ふりさけ仰く　春の日の　光あまねく
てらす世に　なとかきくらす　うきくもの　あるにもあらす
さすらひて　へにける方を　かそふれは　みそち餘りの
よるのしも　いかに結ひし　契りにか　水上きよき
さほ川の　しつむみくつと　なりはてゝ　あへすしほるゝ
ふちなみの　さ社下葉の　したにのみ　末かすゑまて
かれぬとも　ゆかりの色の　ひとしほは　松にかけても
かすかなる　みかさの山の　名にしおはゝ　身をしる雨も
空はれて　なを久かたの　つきもせす　あゆみをはこふ
たまほこの　道をたつぬる　いそのかみ　ふりにし跡は
とをくとも　君につかへて　むかしへに　かへるためしは
大あらきの　森のしたくさ　しけゝれは　しけみか中の
露はかり　たのみや（はかりのイ）ありと　かしこみて　たむくる神の
ゆふしてに　なひく程には　よゝのかせ　ふくとなけれと
ことの葉に　こゝろの色を　あらはして　かきあつめつる
もゝくにや　かすにも（そのかす〳〵のイ）あらす　惠みをそ思ふ

反歌

哀とも人こそしらね人しらぬ心のうちは神のまに〳〵

百日歌合

毎日一首後不見建保二年七月廿五日始之　春一首不足

曙雲

あらし吹尾上にまかふ鐘のをとの絶々になる横雲の空

夜雨

窓の雨のうちねぬことも夢なれや現かはらぬ長きよの空

過風

峯續きいく里かけてかよふらむやとゝふ風の遠さかりゆく

遠煙

ふる郷は雲に煙そたつ田山そなたのそらをとふひのゝ杜

閑曉

ぬるかうちにみるを夢とておとろけは猶なかきよの曉の鐘

ねさめとふ遠山寺のかねの音も我身の外のものとやはきく

幽夕

けふも又はれぬ詠に暮にけり谷のとほそにかゝるしら雲

今日もきくたか入相のかねの聲明日やわか身もしらぬ詠に

移時

けふも又ゆふかけ草にをく露のうつれはかはる世中そかし

往昔

いにしへにかへらぬ道の悲しきはかさなる年の行方そなき

送年

大かたは行もかへるも一にて身にのみつもるとしの通ひち

沖石

荒磯にはなれてたてる岩たかみ沖つ汐干にあらはれそゆく

湊波〔宿歌〕

風の音もみなと湊入江のさはりおほみ芦分小船波やかゝ覽

濱砂

うち寄るはまのまさこのしき波にかそへもあへす積る年哉

深江

さても猶いか成えにて難波なる身をつくしても世に沈む覽

迅瀬

あすか川うつりもあへす月も日も流れてはやきせゝの白波

荒渚

波高みきよする船もなきさ成泉郎の笘やもあれやしぬらん

古渡

角田川いまは昔の都鳥あとなきふねの跡のしら波

堰水

ゆく年をせかはやゐてにわく泪流るゝ水もかへりくるかに

故郷

みよし野のよし野の山の夕時雨ふるさと人の袖ぬらすらむ

細徑

よをたとる跡を思ふそほのか成行末しらぬのへのほそ道

漲瀧

よし野河山のはふかくなかれ出て雲にあま(みなイ)きる瀧の白なみ

湖上

興に出て釣する泉郎も心せよさゝ波たかしひらの山風

磯邊

暮かゝる磯邊の波のおり／＼にともしけちたる蜑の漁り火

江橋

なには江やなからの橋は朽はてゝくもてに殘るあしの村立

田家

いねかてにすそはの田井の秋の庵守山風やおとろかすらむ

野亭

しなか鳥いなのさゝやのかり枕一よか露にふしそわつらふ

渓梯

世を渡る道をたえすも人へきにあやふまれける谷のかけ橋

麓庵

なかきよのをくらのすその草の庵夢をはかなみとふ嵐かな

仙室

たちぬはぬ山分衣いく秋の霧のまかきにぬれてほすらん

杣山

我身たつ杣も朽木のそま山はしけきなけきを引人もなし

山畑

思ふ事かた山畑のらちたへてたつきもしらぬ夕けふりかな

檜原

露霜にはつせのひはらつれなくて嵐にたくふ入相のかね

杉村

わか身猶いかにまちみむ三わの山つれなくてのみ杉の村立

篠原

たか里を野原か末と跡とへは露の小さゝのいくよともなし

蓬生

月をのみすめと計に山風のあらしかはつるよもきふのやと

杜樹

しけりゆく我このもとを思ふにも哀はゝそのもりのした草

嶺松

いか計りつれなしとのみ岑に生ふるまつらむ山の奥も耻かし

梨花

思ふ事かたえのなしのなりならす身には年のみおふの浦波

濱楸

さりともと思ひこしまの濱楸ひさしき名をや波にのこさむ

社榊

神路山かゝる心やしら露の玉くしのはのゆふくれのそら

寺樒

たれか猶尾上のかねの音ふりてしきみかはらに年を積らん

槇葉

山ふかみまきの下はのをのつからうつまぬ杣のあとは絶鳬

椎柴

いつまてか猶椎しはの折からに心ひとつの色かはりつゝ

白樫

山人のしほりのみちもしらかしの枝にも葉にも嵐ふく比

玉椿

はま風に清きなきさの玉椿よせくる波のかけまよひつゝ

閑竹

かきこもるそのふの竹の秋の風ふしなれてしも淋しかり鳬

巌苔

山ふかみとへといはねのこけ衣たかためにとて露のをく覧

池蘋

さそはれぬ身をうき草の悲しきは行かたもなき宿の池みつ

道芝

石上ふりにしあとをたつねても我身にふかき道芝の露

澤菅

風わたるおなし澤邊にしら菅のまのゝかや原亂れあひつゝ

岡葛

風そとふ軒はの岡のくすかつらくるかは人の恨みわふとて

忍草

跡もなくあれにしやとのしのふ草末はに殘る露の身もらし

忘草
すみ吉のきしかたをやは忘草まつにふりぬる身を思ふにも
淺茅
きえやすき露のかきりをたつぬれはあさちか原の秋の夕暮
浦鶴
和歌の浦のその名はむかし昔田鶴の鳴音もふりぬ沖つ汐風
汀鷗
かもめゐる汀のなみやまかふらむ立もたゝぬも夜半の浦風
洲鷺
はらひかねはかひの霜や氷る覽すさきの鷺のたつ空そなき
鸐尾
ますかゝみその數ならぬ山鳥のおのへの月に音をや鳴らん
原鷹
はしたかのとかへる山のかり衣すそのゝ原や露にしほれぬ
關雞
相坂のせきちのとりの鳴聲や音羽の山の明ほのゝそら
拾貝
玉ひろふ磯邊の波のうつせ貝空しき跡に名をや殘さん
峽猿
跡たえて御幸ふりにし山のかひ今はあらしにましら鳴也
牧馬
打むれてをのかたちのゝ放れ駒あれても友にひかれてそ行
里牛
里ことにはなつ野牛はうなひ子からちたれ髮のかひ亂つゝ
隣人
心をは猶へたつとも津の國のなにはかくれすあしの中かき
老翁
すかたこそ昔にあらす成行と心はかりはおきなさひけむ
行客
里遠み麻のきぬうちわたすをちかた人のしるへとそなる
蒭蕘
をのかすむ草刈をのこうらみわひあなかまつらき虫の聲々
樵夫
山ふかみいりと入なは爪木こるをのれうき世に何かへる覽
獵師
しおりしていつさ入さの武士よ心なとめそいなむやの關
漁父
あひきするよにうけひかぬ諸共に恨みても猶浦そはなれぬ
八乙女
千早振神のいかきにきねかふるすゝろにものゝ哀なるらむ
遊君
たれとなきなこり計に袖ぬれて浮たる船のあとの白なみ
傀儡
たひ人の俤つらきかゝみ山うつれはかはる契り成らん
羇中
この程はあらしの音もあらかねの岩ねこきしき獨やはねん
旅泊
舟とむるむしあけのせとの波枕むすひもあへす沖つ鹽風
枕塵
ふる鄕とあれ行ねやはしきたへの枕のちりをはらふ山かせ
窓燈
疊やらぬ長きねむりも悲しきにうき世そむけよ窓の燈し火

琴調
きゝなれし昔を忍ふことのねに今はあれ行にはの松かせ

笛音
音にきく其よの笛はいさしらす習はぬ音のみ身には戀つゝ

曝布
月をまつ雲のはたてのおりかけてよる迄布をさらしなの里

倍鏡
朝毎にみれは思ひそますかゝみしらぬ翁のかけもはつかし

釣舟
いせの海にゆらるゝ舟そ哀なる釣する蜑のうけかたきよに

河筏
柚川におとすいかたの暮ぬまもいさしら波のうき世成けり

小車
うきなから離れもやらぬ小車の我身いつまてよにかめく覽

寺鐘
さめぬれは現なるへきかねの音も猶夢ふかきあかつきの空

海査
波の上にあらぬうき木をいく世まてみても盡せぬ沖つ嶋山

鹽木
浦ちかき山ちにも又なれにけりしほ木こりつむ里のあま人

焚藻
浦風になひく焼もの夕けふりいか成あまのおもひなるらん

引網
網引する蜑のたく繩うちはへて苦しき物のはてはうけくに

圍碁
わたしこし唐舟の波のをともまたうちたえぬ濱のまさとは

雙六
十あまり五の石のかす〳〵によにすくろくのすさひ成けり

蹴鞠
立なるゝ我身おい木の本毎にさても朽せぬ名やとまり南

競馬
とねりこそちかふるこまの足うらに心競へのみえもする哉

相撲
世中にすまふとすれと猶そふる思ひとられぬ心よはさは

濱木
いせの海の浦のはまゆふいくへ共いさしら波の立重ねつゝ

唐衣
よの中のうきは猶ふれから衣何と心をかさねきぬらむ

玉帶
いつとなく落る泪の玉のをは露のかことをむすふ計そ

院百首　建保四年

春日同詠百首應製和歌

正四位下行右近衞權中將兼伊與介藤原朝臣

春
淺みとり長閑き時の色とてや春立空の霞そめけむ
續拾 久堅の天きる雪のふりはえて霞もあへす春は來にけり
さゝ波やふるき都のしかすかに霞なからの山のしらゆき
春風に野澤の氷りかつ消てふれとたまらぬ水の淡雪
古巣たつ雪まのくさのはつ聲はわかなつむのゝ春の鶯
鶯のはねしろたへの衣手に梅かかにほふあはゆきそふる
月かけに折袖にほふ梅かえのかはたれときの在明の空

あら玉のとしのをなかく打はへて絶すもなひく春の青柳
さくらかり雲ふみ分て足引の山とりの尾のいくおこゆらむ
〔續拾〕立かへりとやまそかすむ高砂の尾上の櫻くもゝまかはす
山のはのみなしら雲に成ぬれは花のかならぬ春風そなき
〔續拾〕はなの色は雲の八重山かさねても春の日數のあかぬ頃哉
〔玉葉〕霞たつ春の衣のぬきをうすみ花そ亂るゝよもの山風
春風は花ちるへくもふかぬ日にをのれうつろふ山さくら哉
花さそふ嵐のつてや白雲の道行ふりのはるのかり金
〔新勅〕はるのよの月も在明に成にけりうつろふ花に詠せしまに
春も今は杉のはかすむ三わの山花より後の色も尋ねよ
以上十七首之内御點十五首可ㇾ有之。而朽損之間不ㇾ見之。
立かへり山には春もなく聲の今は物うき谷のうくひす
すみよしの岸の藤波ちりぬとも春を忘るゝ草の名はうし
けふは又暮なはなけの陰もなし花もちりにし春の餘波は

夏

東路の衣の關のなもつらし今朝たちかふる春の別に
かきねさへうしや卯月のさく花に色も匂ひも春そ忘ぬ
卯花のさきちるをかのまくさひくいもねすそまつ山郭公
たか爲に待しさつきのあやめ草あやめもしらぬ子規哉
ほとゝきすやすらふ雲の山かつら曉かけて一聲そきく
五月雨の雲間の月の出かてに山ほとゝきすまつ空そなき
かそふれは老その杜の子規ことしはいたく聲もおします
思ひ出るときは立花いかなれはおたなる袖のかにゝほふ覽
ともしけちほくしもたへす嵐山をくらの峯の夕やみのそら
夏ふかき澤邊にしけるかりこもの思ひみたれて行螢哉
山陰や清水おちくる岩枕手にのみ波とゆめはむすはす
あなし山夕たつ波に風さはき弓槻かたけにかゝる村雲
露まかふ日かけになひく淺茅生のをのつから吹夏の夕かせ
哀にも我身にあきのちかつきて盛過たるもりの下草
河波にせゝの玉ものうちなひきまたみこもりの秋風そふく

秋

袖にまた露をさそひて來る秋も我ためにやは荻の上風
あふせ猶うきつの波やさはくらん秋こくふねのよるへ計に
風に行くものみを成天川はやくそうつるほし合のそら
やとれ月をのかすむのゝ女郎花ひとりしほるゝ花の白露
夜や更る月やをそきと詠ても猶つれなきは山のはの空
千々にのみ思ふ思ひも心から我身ひとつの秋の夜の月
秋のよの月にいく度なかめして物思ふ事の身につもるらん
小鹿なく山の尾上のをのれのみ音を社たてめよその夕暮
涙そへてかりも鳴也哀我思ひつらぬる秋のねさめに
なき渡る鴈の翅にもる霜をはらひもあへすうつ衣哉
山賤のあさていそかすきり〳〵す鳴音もさはき衣うつ也
虫のねもしのふる事そまくす原うらみや秋の色にいつらん
ぬきみたるくもの糸すち露おもみ玉のをよはき虫の聲々
をのかふす末野の秋の夕露に鳴やうつらのとこの山かせ
露のみや秋のかたみとしけ山の青葉の杉の色はかはらす
みむろ山下葉そ遲き神南備のもりあへぬ程の秋の時雨に
しくれ行雲のはたての折からや山の錦も色まさるらん
秋山の紅葉を分る月影ははるゝもつらし峯の木からし
大かたの秋をはいはす物ことにうつろひ行を哀とそ見る

秋のゆく野山のあさちうら枯て峯にわかるゝ雲そしくるゝ

冬

小莚も衣手かれて秋はいぬねての朝けのしものふるさと
今朝は猶よのまの露も玉さゝのは分の霜のかたむすひなる
むは玉のくろ髮山のやま草のやゝ霜さむくうら枯そ行
さゆる夜の在明の空の霜くもり枯野は月も影そ淋しき
月影はうつりもあへ〔る歟〕す時雨つゝ風吹くもるむら雲のそら
雲かゝる深山にふか(はイ)き槇の戸の明ぬくれぬと時雨をそ聞
大かたは色なき風も身にそしむ袖にしくれの夕くれのそら
朝戸明て軒(のイ)はのをかは跡たえぬ雪ふりつもりまつ人はこす
末をもみもとくたちゆくさゝの葉の我身につもる年の暮哉
波路かけはまゆふ風のいやはやに吹上の千鳥聲そかたよる
霜こほる汀はしらすなにはかた枯はの芦の末そすくなき
芦邊行かものはかせも寒きよに松かけ氷るみしま江の月
結へ(ふイ)とも氷ににこるかけはなし木の間はれ行山の井の月
ふゆ川のさゝれふみ渡る朝氷をちかた人の音そ寒けき
梓弓いるかことくの年月はまた春ちかく成そしにける

戀

初鴈の羽うちかはすしら雲のしらしな袖にやとる月かけ
正木ちる山の猿の玉かつらかけし心や色にいつらん
〔新勅〕み吉野のみくま〔か〕すけをかりにたにみぬ物からや思ひ亂れむ
山田守をのれ心をおくかひの人こそしらね下こかれつゝ
思ひわひ煙はたてし鹽かまの浦こく舟のほのかにそみし
餘所にのみ水のうへとそ思ひしをうつるもしらぬ袖の月影
岩そゝくたるみの水のうち出ても猶下もえの春のさはらひ
山ふかみ時雨あらそふ槇のはのつれなき色もたえぬ袖哉
かつきわひ爪木折たく蜑の袖猶こりすまにほしそわつらふ
今は只身をそいふきの山に生るさしも思ひにもゆる物かは
移りやすき花田の帶の色そうきたえける中を何むすひけむ
みくさのみしける板井の忘れ水波ねは人の影をたにみす
數わひぬる玉の緒のよる〳〵は思ひもたえぬ夢もはかなし
曉のしきのは音のかく計泪かすそふねさめやはせし
きえぬとも淺茅か上の露しあれは猶思ひをく色や殘らん

雜

神路山かひ有春のたむけくさ玉松かえやまつなひくらん
石清水たえぬ契りやみなせ河水上ちかくすみはしめけむ
みくまのゝはしめの年を數ふれは我身に殘る浦のはまゆふ
さりともと思ひこしまの濱楸ひさしき御代を猶たのむかな
年をのみ思ひつもりの興津波かけてもよをは恨やはする
和歌の浦の其名計はかけなからあらぬ波社身にはよるらめ
思ひきや君も雲井にみし花の我のみ雪とふりはてむとは
春の雨に身はふりぬとも三笠山さしもに袖のぬれん物かは
身の上にふり行霜のかねのをとを聞おとろかぬ曉そ(にもイ)なき
心やは二むら山の峰の雲月日へたつるたひの空かな
かくてやはふるの中道なか〳〵に思ひたえにし行衛也せは
今は我心のやみも春にあひぬ子を思ふかたの道はまとはし
嬉しさもつゝみなれにし袖に又はては餘の身をそ恨むる
思ひしる心計はありなからたゝおほかたに物そかなしき
いかにせん松も老木に成ぬれは君か千年にあはんともせす

詠五十首和歌　正治元年九月四日　侍従

春十首　三首不足

急けともをくりもはてぬ年の内に思ひもあへす春は來に鳬
梅の花さけはなきけり鶯のこゑのいろもや枝にこもれる
淡雪の猶ふるさとの梢よりなかめわひぬるみよし野のはる
春風の花をたつぬるしほりとや結ひて過る青柳のいと
心ある霞のうちに分入てなそよはりなくさくらふく風
やきすさむ朝のはらのかた岡に殘る所ときゝすなくなり
うす霞む色はのとけき詠にてうちみたれたるいとゆふの空

夏五首　一首不足

宿さらすたゝく水鶏も有物をまつに音せぬほとゝきす哉
風わたる梢もしらぬ橘のにほひにすゝむまとのゆふくれ
たれかみるは山にまかふ下紅葉秋も梢のいろをまつほと
春も過夏もたけぬる今年哉今秋冬もあはれいく程

秋十首　三首不足

荻の音は暮行ほとの哀にて袂よりふくあきのはつかせ
月をみはをは捨山の秋のそらなくさめかぬる心ありとも
月は秋となかめなれぬるよな／＼の名殘はかりそ在明の末
鹿も虫も哀はひとつ聲なれや野にも山にも秋の夕暮
思ふにははかなき物は曉の空にかすかくしきのはねかき
宿うつむ軒はの蔦の色をみよみ山の里の秋の氣色を
なれ／＼て秋に別のたつ田ひめ今夜はそての色やそふらむ

冬五首

枯にけり秋にわかれしまくすはらうらみ計を風にのこして
けふまても思はぬのへの埜よを秋はてぬならひかなしも
今朝みれは岩間をくゝる山河のよとむともなき薄氷かな
かきくもり空にあまきる詠哉つもれはこれや雪となるもの
かくしての年の積りを思ふにはいそくこゝろも物うかり鳬

戀十首　一首不足

思ふより波こす袖をたのむ哉人のこゝろの末のまつやま
をしかへし思ひしつむる身の程に餘る心やあくかれぬらん
うからすは厭はて只そいなといはん我身の程をしれと成へし
君かすむ宿にもかよへ袖の露荻の末はの風のたよりに
かつきするあまの濡衣いかな覽袖ひとつたに泪ほしあへす
契りあらはまつへき程と思ふにもたへぬ心はゆふくれの空
思ひわひねられぬいさへ數てもかならす夢のみゆる物かは
よふかしといとふもしらすしたひきて遂にをくる鳥の聲哉
わすれしのなこりはかりは思ひ出よ結ひすてゝし契也とも

祝二首

むかしよりいく千とせをか松風（聲イ）のたえぬ氣色のみゆる宿哉
契りあらはむれゐるたつの諸共に千世を重ねよ和歌の浦浪

述懐三首

なにとなく哀身にしむ詠哉うきよはこれそ夕くれの色
ともすれはうかれ出るも如何せむ身を捨はつる心なけれは
いとはしなさてもなからむ後は又戀しかるへき此世ならすや

旅三首

哀（あイ）われしほれなれたる袖なれと都にかゝる波の音かは
枕とて草引むすふゆかりとや我そてぬらすむさしの露
哀わか駒も心もなつみきぬかさなる山のいはのかけ道

眺望三首　此題二首欠不審

時しらぬならひたにいつもたゝしとや煙にかすむふしのねの空

院老若謌合　建仁元年二月十二日奏覧

詠五十首　從五位上守左近衛權少將藤原朝臣

春十首

たけくまの松に「イ老」や音を立初てけさは都のはるのはつ風
雪きえぬひらの山おろし猶さえて霞に氷るしかのうら波
鶯の聲やはかすむ春とても月そおほろのあり明のそら
花は猶風まつ程もある物を枝にたまらぬ春の淡雪
さらすとて匂はぬ梅のあたりかは風もあやなし春のよの闇
心あらむ人ともいはし津の國のなにはのはるの明ほのゝ空
【新續古・二（ニイ）】雪やそれ雲やあらぬとうつりきて待えたる花に春風そふく
新古　色は雲匂ひは風に成はてゝをのれともなき山さくらかな
たつねきて花にくらせる木間より待としもなき山端の月
名殘まて思ふ心やのこるらむ花より後のはるのくれかた

夏十首

立殘る霞の袖のうすみとりこれもやけふのならひ成らむ
分て猶まつをは知やほとゝきす一聲きくもねぬ夜成けり
はつせ山入相の鐘のをとまてもうちしめりたる五月雨の頃
大方はうちぬる程も夏のよをさてもいつよりあかしかぬ覽
山かけや袂すゝしき夕かせに聲をはきかしせみのはころも
のへの色もしけりにけりな大あらきの梢につゝく杜の下草
秋のゝの千種の花を待ほとやしはしやとれるさゆりはの露
大江山木かけも遠く成にけりいくのゝ末の夕立のそら
夏虫の光をやとす下葉より淺ち色つく野への夕くれ
今日といへはみそきに靡く袖なから秋風たちぬせゝの河浪

秋十首

新古　きのふまてよそにしのひし下荻の末はの露に秋風そふく
秋は猶風そこたふる暮よりも萩のうはゝのむら雨の聲
秋そかしかへらは社はと思へとも雲ゐのかりの遠さかる聲
谷ふかき軒はをこむる朝霧のはるゝ梢はくれかたのそら
宿はあれぬ庭はよもきに埋もれぬ露うち拂ひとふ人はなし
新古　たへてやは思ひありともいかゝせむむくらの宿の秋の夕暮
とを山田いなはのかせはほのかにて庵もるひたのさよ深き聲
新古　はらひかねさ社は露のしけからめ宿るか月の袖のせはきに
今こむと契ぬつまを長月の在明の月にさをしかのこゑ
袖の上に誰しのへとて行秋のなこりかほなるのへの夕露

冬十首

今よりの宿をはかれす人はとへ庭のけしきは霜にあるもの
木のはふく嵐そ今は音羽山みねたちならす鹿のねはなし
新古　秋の色をはらひはてゝや久かたの月のかつらに木枯しの風
かけとめし露のやとりを思ひ出て霜に跡とふ淺ちふの月
今朝みれは岩間をくゝる山川のよとむともなき薄氷かな
有明の月にむれたる聲なから千鳥なみよる沖つしほかせ
冬されは雪にふりにし宿なれや庭もまかきも跡たゆるまて
新古　はかなしやさてもいくよか行水にかすかきわふるをしの獨ね
おほかたは哀もしらぬ武士のやそうち河の冬のあけほの
月をのみめてしつもりもこよひにて年こそ人の老と成もの

雜十首

君か世のためしはこれかよもの海の波をおさむる和歌の浦風
新古　影やとす露のみしけくなりはてゝ草にやつるゝ故郷の月

すみなるゝおなし木のまに影落て軒はに近き山のはの月

ならはすよすまはやすまんをのつから雲より遠の山陰の庵

瀧の音松の嵐を枕にてむすはぬ夢のむすほゝれつゝ

吹かよふよものあらしは音[佳イ]たえて野中にたてる松の一もと

波よする磯やの下のかちまくらなれたる蜑もぬれぬ袖かは

なみの上もなかめはかきり有物を心のはてそ行衛しられぬ

新古 故郷のけふの俤さそひこと月にそちきるさよの中山

朝露もきつゝもなれぬたひ衣はる／＼ぬれむ袖をしそ思ふ

仁和寺宮五十首

詠五十首和歌

左兵衛督藤原

春十二首

初春

久かたの天のいは戸のむかしよりあくれは霞む春はきに鳬

雪中鶯

春となく初ねはかりそ鶯の羽かせをさむみ雪はふりつゝ

橋邊霞

しもとゆふかつらき山に春やくる霞とたえぬくめの岩はし

行路梅

分やらぬ匂ひそふかき梅かえの花のゆきゝも道まかふかに

春月

ときはなる松は緑の色そへてひとしほかすむ春のよの月

岸柳

もかみ川影こそおなしいなふねののほれはくたる岸の青柳

旅春雨

春さめのふる郷人のかたみとてみのしろ衣ほさすともきむ

遠歸鴈

霞行よもの木のめもはる／＼と花まつ山にかへるかりかね

山花

續拾 あたなりといひはなすとも櫻花たか名はたゝし岑[春イ]の松風

關花

おしめとも花もとまらぬふはの關やま吹こゆる春の嵐に

庭花

雪とのみふるはならひの花なれとやとから庭の跡やたゆ覽[えなんイ]

川欵冬

山ふきの井手のさと人主やたれ花はこたへすはるの川なみ

夏七首

社卯花

神まつるうつきの花や咲ぬらむ下くさかゝる杜のゆふして

早苗多

植つくす千里の田子のいとまなみつけの小櫛も早苗とる頃

里郭公

尋ねきてさとゝふ人も鳴ふるす山ほとゝきす我のみそきく

岡子規

朝戸あけの軒はの岡のほとゝきすをのかね山も今やいつ覽

夜盧橘

さたかなる夢もむかしとうは玉の闇のうつゝに匂ふたち花

蘧瞿麥[なイ]

をく露や宿りとるへき[はイ]夕暮のまかきそやかて大和なてしこ

江螢

新勅 なにはめかすくも燒火の深きえにうへにもえても行螢かな

秋十二首

早秋

續古 空蟬のはにをく露もあらはれてうすき袂に秋風ぞたつ［ふくイ］

荻露

年をへてうつろふ秋の露やそふいつかは袖のもとあらの萩

荻風

おほかたのなひく草木は分れ共荻のうはゝそあき風はふく

寺蟲聲

ましはし聞てもとはむ草のはら嵐にまかふ松むしの聲

山家月

袖の上にやとさすとてもこの山の峯にはちかき月そ馴ぬる

野徑月

なかめつゝ更行末も忘られぬ山のは遠きのへの月影

舟中月

こく船の外行なみも月寒み［さえてイ］雲はへたてぬやへのしほかせ

曉鹿

あくるまてつままつ風も高砂の［にイ］をのれつれなき小男鹿の聲

川霧

つれもなき槇のを山はかけたえて霧にあらそふうちの川波

擣衣幽

から衣うつか砧も初かりの雲ゐをわたるねにまかひつゝ

夕紅葉

暮かゝる夕つけとりのをりはへて錦たつ田の秋の山かせ

殘菊匂

物事にうつろふ頃の色なから秋もかきらすにほふしらきく

冬七首

朝時雨

あさな／＼しほるゝ袖もますかゝみみる影さへに時雨てそ行

竹霜

竹のはによる［なイ］／＼霜のふる鄕は庭もまかきも冬そあれ行

池水鳥

ゆられ行にほのうきすもよろへなみ氷［ら］ぬ程そひろ澤の池

嶋千鳥

あはちしまわたるちとりも白妙の波まにかさす沖つ鹽かせ

松雪

庭の面はすゝきをしなみ跡たえてとひこぬ人を松のしら雪

湖雪

さゝ波やうらちはるかに風さえて峯もたひらの山の白雪

惜歲暮

年きはる身の行へ社悲しけれあらはあふよの春をやはまつ

戀六首

寄雲戀

思ふより泪ふりそふ雨雲のよそにも人はみえぬものから

寄露戀

おくといひぬとはしのはんしら露のねたくや袖の色に出覽

寄煙戀

恨しな難波のみつにたつけふり心からやく泉郎のもしほ火

寄草戀

いかにせん人の心のたねたえて思ひ忘るゝ草のはもなし

寄鳥戀

袖の上もかすかく計成にけり鴫の羽音のしけきなみたに

寄枕戀

續拾 しられしな我袖はかり數妙の枕たにせぬよはのうたゝね

雜六首

曉述懷

かきりあれはけふも暮ぬと詠つゝきのふのかねの曉の聲

閑中燈

人とはぬわかよやいたく更ぬらむ影よはり行窓のともし火

山　旅

新勅 立歸り又もやこえん峯の雲あともさためぬよものあらしに

海　旅

續古 影移す袖はうきねの我からに月そもにすむ虫明のせと

野　旅

里遠み野中の庵に人はなし草の袂をまくらにそかる

寄松祝

神代よりまもるちかひのつきせぬは君か千年もすみ吉の松

最勝四天王院名所御障子

春日野　立春景色

かすか野や咲ちる梅も白妙の雪ふりやます若菜つむ袖

吉野山

花やたゝ猶しら雲に霞みぬといふはかりにやみよしのの山

三輪山

ほとゝきす一聲すきの木のもとに尋ねぬみわの山ち暮しつ

龍田山

さをしかの紅葉ふみ分たつた山いく秋かせに獨なくらん

泊瀨山

菅原やふしみのをたは時雨して雪そはつせの山のはの空

難波浦

なにはかた波も霞のみこもりにしたねとけ行芦の浦風

住吉濱

淡路しま浦こく船のほの〴〵と霞にあくる沖つしらなみ

芦屋里

夕されは秋の濱へをふく風に軒うちそよく芦の屋の里

布引瀧

さほひめの山分衣ぬきをうすみよれは涼しき布引のたき

生田森

津の國の生田のおくの秋風にしかのねなるゝもりの下露

若　浦

鶴のすむわかのうら風ふけぬらし片邊の波に月わたるみゆ

吹上濱

冬ふかみそれかあらぬか沖つかせ吹上のはまの雪のしら波

交　野

かりくらし今はとたちも交野なるふみならしはの雪の下折

水無瀨川

庭にうつす山路の菊をみなせ河ぬれて吹おろす千世の松風

諏磨浦

定なき心ひとつをすまの浦の月に出たる秋のあま人

明石浦

あかしかた月は波路のはてもなし秋をかきりの在明の空

志賀籬市

しるしらすゆきかふ秋の名殘ていかにしかまの市の夕暮

松浦山

都には春をかけてやまつら舟とし立かへるなみにまかせて

因幡山

いつかとていなはの松の秋風に身をまかせたる山の夕暮

高砂

松風にうきねのなみも高砂の尾上のかたかさをしかのこゑ

野中清水

往古の野中ふる道跡たえて淸水なかるゝよゝのさゝはら

海橋立

波路分つりするあまの橋立や霞にまかふよさのうらふね

宇治川

さむしろにうちの橋姫いかな覽波のみよるのせゝの網代木

大井河

此川にもみちはなかる足引の山のかひあるあらしふくらし

鳥羽

とはたゆくかりの泪のちるなへに秋の山邊の色をかふなる（らんイ）

伏見野

いなは守ふしみの田井のいねかてに千世を一よと松風そ吹

泉川

いつみ河ゆくせの水もふかみとりしける柞のもりの下かけ

小鹽山

大原や神代かけたる夕霞はるやをしほのまつの山かせ

會坂山（關イ）

いくそたひおなし霞の立かへり春のゆきゝにあふ坂の關

志賀浦

峯さむきひらの山おろし雪ちりて汀氷れるしかの浦波

鈴鹿山

やそせ行水はまさらて木のはのみふるやすゝかの山の秋風

二見浦

玉くしけ明ゆく空やふたみかたうらみもあへぬ波の上の月

大淀浦

大よとの松はつらくもかすまねと波ちへたてゝ歸るかり金

鳴海浦

夕霧に友となるみの浦千鳥跡なきかたのしほひをそとふ

濱名橋

はつ鴈の聲のゆくゑもしら波の濱名のはしの霧の明ほの

宇津山

（續古）ふみ分し昔は夢かうつの山跡ともみえぬつたの下みち

更科里

雲ちかき山路の月を人とはゝ今さらしなのをはすての空

富士山

ときしらぬ山とはきゝてふりぬれと峯の白ゆき

淸見關

きよみかたせきを岩ねにもる月の波間すき行夏のしほ風

武藏野

淺みとりかすむ計の若草に春もこもれるむさしのゝはら

白川關

思ひをくる人はありとも東路や雪ふりぬらしはしら河の關

阿武隈川

忘れしよ〔なイ〕又あふくまの川風にしはしなれぬと千とり鳴也

阿立原

色つくかあたちのまゆみ秋の末しくるゝ雲の空にたなひく

宮城野

故郷をしのふもちすり露みたれこの下しけきみやきのゝ原

安積香沼

〔新古〕野へはいまた淺香の沼にかる草のかつみるまゝに繁る頃哉

鹽竈浦

かすむより今一しほの鹽かまに松のはなひきうら風そふく

〔本云〕永仁二年春比類集之畢。

應召備叡覽訖。　前參議藤原

同年六月廿二日被返下之。

嘉元二年冬比以雅孝朝臣本書寫之畢。令一挍畢。

北野歌合　建久元年十月

時雨

なかめわひ我身世にふる夕時雨くもりなはてそ空もうき比

忍戀

我なからうちねぬ程のせき守は夢もゆるさぬ戀のかよひち

羇旅

しら雲のいく重の山を越ぬらむなれぬ嵐に袖をまかせて

新宮歌合　正治二年八月一日

社頭祝

萬世を祈こゑまてつきもせしはこやの山の秋の宮人

池上月

せきとめて下もかよはぬ池水の波のしつかにすめる月かけ

野邊虫

しけきのゝをのかすみかにをく露を袖にしらする虫の聲々

玉津嶋會　同九月日

海濱曉月

詠れは吹上のはまの松風に波よりすめるあり明の月

山館秋雨

くれかゝるたかねのくもの梢よりまとうちなれぬ秋の村雨

松風破夢

都とふ夢路の末にかよひ來てうつゝにさそふ松のかせ哉

仙洞十人歌合

神祇

今も又さしそふ千世の朝日まてあまてる神の光成へし

若草

高砂の尾上の雪の〔はイ〕きえやらてまつ綠なる野への一しほ

落花

〔新古〕花さそふなこり〔雲新古〕を空にふきとめてしはしは匂へ春の山かせ

菖蒲

けふ毎に結ふ淀のゝあやめ草是もなれぬる枕成けり

子規

忍ひこしかきねわたりの郭公はな立花に聲うつる也

浦月

哀猶あかしの浦の秋の月すめともなれる波の上かな

山嵐

吹まよふよものあらしの秋の聲しくるともなき山めくり哉

曉雪

月は今くもりはてぬと詠れは雪の光もあり明のそら

水鳥

芦かものうきねよいかに波枕たのむ入江のまのゝうら風

庭松

たれゆへにな〔閑イ〕かめわひぬる夕とてをのれやととふ軒の松風

同歌合　同九月盡

月契多秋

かけそふる雲ゐの月ものゝ〔と歟〕かにてはこやの山の万代の秋

暮見紅葉

行あきの名殘なのみや夕まくれあすはあらしの峯の紅葉は

曙更聞鹿

暮るより妻まちわふるさをしかの思ひたへたる明かたの聲

同歌合　同十月日

社頭霜

石上ふりぬるけさのはつ霜に先色かはるあけの玉かき

東路月

都出しその月かけのめくりきてまた在明のさよの中山

同歌合　同十一月

初冬嵐

これも猶秋のあはれのなこり哉み山おろしの木のはふく音

梢野朝

のへの色は秋をく霜にむすほゝれ恨によはる葛の下かせ

暮漁舟

くれかゝる波路の末のかす消てこき出る程そあまのとも船

影供歌合　同十二月八日

暮山雪

くれかゝる空の色ともみえぬ哉岑にあまきる雪のしら雲

古寺月

をきまよふ霜になれてや泊瀬山月にもひゝくかねのこゑ哉

朝遠望

詠やる沖つしま山ほのかにて波よりはるゝよこ雲のそら

同歌合　同十二月廿六日

曉尋千鳥

哀とてなれもきむかへ友ちとり月にとひ行在明のそら

山家如春

鶯はふるすなからも聲す也はるをもまたし谷ちかき庵

海邊歳暮

音ふくる波にや年もかへるらむたちくる春はちかのうら風

同歌合　建仁元年正月廿八日

遠嶋朝霞

朝なきや波ちはれ行鹽かせに霞にたてる浦しまの松

隣家夜梅

とふ人も匂ひはわかし梅の花おなし軒端のはるのよのやみ

山家殘雪

やとふかき外山にかすむ松の雪殘るとならは花の頃迄

新宮撰歌合　同三月二十九日　作者隱名

霞隔遠樹
からにしき秋のかたみを立かへて春はかすみの衣手の森
霧中見花
〔新古〕いはねふみかさなる山を分すてゝ花もいくへの跡のしら雲
山家秋月
よそにみし雲よりくもに〔おくイ〕やとしめて梢に出る山端の月

鳥羽殿御會　同四月廿六日

池上松風
かけきよきみとりはおなし池水に千世をまかする庭の松風

影供哥合　同晦日

曉山子規
ほとゝきすまた明やらぬ山端に横雲ならすやすらひのころ
海邊夏月
夏のよもあかしの浦に雲きえて波のいつくにあり明の月
忍戀
物思ひをさてしも人のとひやせむつゝむは常の氣色ならねは

院御會　同日當座

竹風夜涼
夕すゝみやかてうちふす窓ふけて竹のはならす風の一むら
山家五月雨
足曳の山のはふかくなりはてゝ軒はにくもるさみたれの頃

同御會　同六月晦日當座

六月秋
夏はつるけふみな月の秡河かは風かくる波のしらゆふ

和歌所　同七月廿七日當座

暮山遠鴈
月やまつ雲路の末に飛かりのしはしやすらふ山端の空

影供歌合　同八月三日

初秋曉露
夏と秋と行かふ風や過ぬらむ露ちりそむる篠目の道
關路秋風
さひしさはこゝにとゝめつ清見かたせき守なみの秋風の聲
旅月聞鹿
草むすふ露の枕に袖しきて月に鹿なくさよの中やま
故郷虫
あれぬとてなくか籬のきり〳〵すをのれ淋しき蓬生のやと
初戀
〔續古〕けふよりや人に心を沖つ波かけてもしらぬそてのうらかせ
久戀
年月もむなしき空にうつりきてふるき詠になれぬ俤

撰定歌合　同十五夜

月多秋友
いく秋を空に契りて君か世にすまんかきりのあり明の月
湖上月明
からさきや秋のこよひを詠れはてる月なみにらら風そふく
深山曉月
人はこてまきのは分の月そもるみ山の秋の〔ありあけイ〕明かたのころ
野月露涼

袖の上に更行月のかけなから露ふきむすふのへの秋風

河月似氷

月かけやいかにさえ行薄氷なみはたつたのあきのかは風

仙洞歌合　同當座

深夜聞虫

長月の夜も更ぬらしきり〴〵すよその枕に聲なるゝまて

海邊暮鹿

秋と云はつまをや鹿のまつらかたうらみわひたる夕暮の聲

羇中曉戀

詠わひ夢ちたえぬるうつの山月もうらめし有明のそら

影供歌合　同九月十三夜當座

近野秋雨

わか庵はのへもひとつの秋の露まかふとみれは村雨そふる

遠山暮風

秋のあらし梢をかけてはらふらし夕暮みねにまよふしら雲

寄池戀

あしねはふうきはよそなる汀かは袖にもふかしこやの池水

和歌所　同二年正月十三日

初春松

はるも今日ちよも初のときは山のとかになりぬ松かせの聲

春山月

さらてたにたつ事やすき木かけかは花に有明の山のはの月

野邊霞

野へみれは霞にはるをならしはのしはしは雪も消あへぬ共

影供歌合　同二月十日

海邊霞

浦かせの音も長閑になりはてゝ波よりかすむなには江の春

關路鶯

雪の色はまたしら河の關ちより春はこえぬと鶯そなく

忍戀

新古　きえねたゝしのふの山のみねの雲かゝる心のあともなき迄

同御會　同八月十五夜

月前虫

月になけすき行あきのきり〴〵すなかはも今は有明のそら

月前鹿

月ゆへやをのれ鳴ても秋を知る今宵在明のさをしかの聲

月前風

あきの月こよひそ名をは高砂の尾上の雲をはらふ松かせ

戀十五首歌合　同九月十三夜水無瀬殿

春戀

人しれすをさへてむすふひま事になみた打出る袖のはる風

夏戀

きかし只人まつ山のほとゝきす我もうちつけのさよの一聲

秋戀

なかめしや心つくしの秋の月露のかこともそてふかきころ

冬戀

霜はゝやふるの中みちなか〴〵にかれなて人を何にとふ覽（したイ）

曉戀

涙さへしきのはねかきかきもあへす君かこぬよの曉の空

暮戀

あちきなくそへし心のかへりこてゆくらんかたの夕暮の空

羇中戀

新古 草枕むすひさためむかたしらすならはぬのへの夢の通ひち

山家戀

君しるや都もよそにみねの雲はれぬ思ひになかめわひつゝ

故郷戀

〔人ふるすイ〕ひたふるに里をも何かいとふへき我身一つのうき名なり鳬

旅泊戀

片敷の袖のうきね〔もイ〕の波枕ひとりあかしのうらめしの身や

關路戀

新古 みし人の俤とめよ清見かた袖に關守なみのかよひち

海邊戀

契りきなさてやはたのむ末の松まつにいくよの波は越つゝ

河邊戀

さゝのくまひのくま川にぬるゝ袖ほさてや人の面影もみむ

寄雨戀

詠わひたえぬ泪や雨となる〔ふイ〕しくるゝ空にまかふよの袖

寄風戀

〔新續古〕今はたゝこぬよあまたのさ夜更てまたしと思ふに松風の聲

同夜　當座

月前秋嵐

秋も今はこよひをのみそ松の嵐はらふみねより出る月影

水路秋月

唐舟やいくせをさしてみなれ棹みなれてくたる波の月かけ

曉月鹿聲

今はとて月になしかの聲たてつ妻まつ山の在明のそら

同夜　當座

水無瀨川　隱題

山のはに雲をあつめてこよひみなせかはや月の入やらぬ迄

同夜　折句

しはしみむうき雲になゝさやけさは昔もあらし山のはの月

同御會　同三年正月廿五日

松有春色

春といへは今ひとしほの松の色も千世をかねたる我君の爲

影供の次に　同六月十六日

夏月二首

夏はらしらしと思ひし山のはに入まて月をいつか詠かむ〔め賦〕

釋阿九十賀屏風和歌　同八月十五夜次　若草

雪まより綠はふかし春雨のふるからをのゝ野への若くさ

霞

ことならは花よりさきも人はとへかすむ梢の春の山もと

花

久かたの雲にたかまの山櫻匂ふもよその春の明ほの

子規

一聲もいつらは夜半の郭公まつかとすれは明るしのゝめ

五月雨

かめのおの瀧のしら玉千世のかす岩ねに餘る五月雨のころ

納涼

むすふての涼しくも有か山の井のあかぬ雫はなつの夕暮

秋野

さをしかの入のゝおはなほに出てつまとふ暮に秋かせそ吹

月

更行はなかめにかゝる雲もなしちさとにはるゝ秋夜の月

紅葉

秋の山まかはぬ色もたえ／＼に猶立ならすみねのしら雲

千鳥

友ちとり君かや千世の聲はして波はのとけし和歌のうら風

雪

けぬか上にふりにしかたのこしの空いつれの年の雪の白山

氷

かはらすよ影みし水の薄氷月や光をむすひ置けむ

同夜　和歌所當座

秋月五首

あかしかた面影かよふ月かけに都にちかき波のかよひち

きよみかた關守波に影とめていかにこよひのありあけの月

後も見むつくしなはてそ月のかけこよひ計の秋の空かは

つくはねのこのもかのもの下晴て今宵の月にます影はなし

君か世のくもりなき社嬉しけれ長閑にすめる月をみるにも

同御會　元久元年八月十五夜當座

翫月

おほかたの月をは秋とまちえても今夜計の影をやはみし

春日社歌合　同十一月十三日

落葉

新古 移り行くもに嵐の聲す也ちるかまさ木のかつらきの山

曉月

あかなくの秋もや空に殘るらむ山のは分て有明の月

松風

君かためふりさけ聞はかすかなる山もちとせの松の風かも

新古今竟宴　同三月廿六日

きみか世になれぬるわかの浦風にあまねき波や嶋の外まて

詩歌合　同六月

水郷春望

霞より綠はふかしまこもおふるみつのみまきの春の河なみ

かたしきの霞ふきみたる春かせに猶さむしろのうちの橋姫

山路秋行

たちぬるゝ木の下風になく鹿のこゑきく時の山の夕暮

ふきなるゝ嵐の音もたつた山秋のしくれとまかふ袖哉

北野宮歌合　同七月十九日

初秋曉

明かたに行かふ空やなりぬらむまたひとへなるそての秋風

暮山雨

暮かゝるやまは手向の峯のくもくもれる雨も神のまに／＼

田家風

小山田の庵守しつかひたすらに身にしむとても秋の夕かせ

高陽院歌合　建永元年正月十一日

庭花春久

萬代を砌の梅もさきくさのみつはよつはに匂ふはるかせ

院當座歌合　同七月十三日

湖邊月

よしさらはひら山おろし月にふけ波ちはれゆくしかの唐崎

暮山雲

いりぬともたれかはとはん山ふかみ越て跡なき夕暮のくも

行路風

たれとなく袖に亂るゝ玉ほこの道行ふりの露の夕かせ

卿相侍臣歌合　同七月廿八日

朝草花

木のまよりさすやをかへの朝日影うつろふ露にゝほふ萩原

海邊月

里のあまの袖にくたけぬ影をみむ岩うつ波のあら磯の月

羇中暮

新古 いたつらにたつやあさまの夕煙さとゝひかぬる遠近のやま

院當座歌合　同七月廿八日

雨中無常

いかならむ世にかはまたは松風の今はむかしの秋と吹ぬる

被忘戀

かそふれは猶かきくらす袖の上のなきかおほくの村雨の空

いつまてか馴し名殘の俤のわするゝ程の袖の上の月

卿相侍臣嫉妬歌合　同八月

述懷三首

新古 君か世にあへる計の道はあれと身をも思はす（はたのますイ）行末のそら

續古 おほかたは置あへぬ露のいく世しもあらし我身の袖の秋風

うしとても身をはいつくにおく山の苔の岩とも露けかる覽

鳥羽殿御會　同八月五日新御所初度

庭上月

ふるき秋の月も砌の影添て宿あらたむる千世のはしめに

院御會　同二年正月廿二日

春松契齡

きみか世はちよともいはし常磐なる松にみとりの春の行末

鴨御祖社歌合　同三月七日

山家朝霞

みやこ人とふさもけさは白雲のやへたつ山のなをかすみ行

湖邊夕花

浦かけてちりかふ花のさゝ波や志賀の夕かせ山にふくらし

社頭述懷

早くより深き頼みはそれなから猶御手洗のみつからそうき

同御會　永元二年閏四月四日

雨中郭公

足引の山ほとゝきす一聲もそらしつかなる村雨の空

遇不會戀

いつまてか岸うつ波のまつ事も絶えてうきねや現はれぬ覽

寄述懐雑

大君のみことかしこみ仰きても我たつみちに末をしそ思ふ

此歌は御鞠の長者にておはします事を思ひてよみはへりけるとなん。

住吉社歌合

寄月祝

君か代のためとそそらに久かたの月もかねてや住吉のまつ

寄旅戀

わすれしの契りはかりはむすひてき逢ん日迄の野への夕露

寄山雑

わたの原雲ゐにみゆる波まより猶遙なるあはち嶋山

河崎會　同四年八月十一日當座

雨中草花

むらさきに人のゝ眞萩露おもみぬれての色は袖そうつろふ

粟田宮歌合　同九月廿二日

寄海朝

そらにのみたつ朝きりの波の上にうきて思ひの海人の釣舟

寄山暮

そのかみにあらぬもなをし粟田山かけてもしるや夕暮の雲

寄月戀

またしたゝ猶秋のよは長月の有明の月のおもかけもうし

建暦元年閏正月四日庭雪厭跡といふ題をたまはりてよみ侍りける

よしさらは家たつあとの木下にわすれぬ今朝の庭の白雪

大内花下應製　建暦二年二月廿五日

萬世の春をかさねて咲にけり大内山の花のしら雲

あはれ我昔か御世よりみし花のかはらぬ色に年そへにける

たちなるゝ我身ともなし九重の雲ゐに高き花の下風

内裡詩歌合　同五月十一日

山居春曙

山の端は霞のうちに明やらて軒ははるゝよこ雲の空

春きても誰かはとはん花咲ぬ槇のは山の明ほのゝ空

水郷秋夕

さゝ波やおきに釣する志賀のあまのくるれは歸る袖の秋風

羇中眺望

時しらぬふしのたかねのゆきやらて日數のみふる東路の空

みねの雲かゝる嵐もまたしらぬふる郷人のまつにつけこせ

松尾社歌合　建保元年七月十七日

初秋風

里の名に月のかつらもかよふらし木のまほのめく秋の初風

山家暮

詠め暮す身を秋山のしかりとてそむかれなくに宿求むらむ

社頭雑

ゆふなひく空にまかせて神かきの松のお山にかゝるしら雲

仙洞歌合　同三年六月二日

春山朝

いつもみし朝ゐる雲はそれなから霞にかほる春の山かせ

夕早苗

〔ま徒〕さとゝをき田中の森の夕日影うつりもあへすとるさなへ哉

行路秋

もみちはも行衞さためぬ秋風にしらぬの山の道たとりつゝ

曉時雨

まきの戸の明かたとしも驚かすねさめふりにし頃の時雨に

松經年

いつ迄か松のしつえにこゆるきの磯ちにかくる波も恨めし

歌合　同三年八月七日

山曉月

おしみかね思へは同しよはの月いらて明るを山のはの空

野夕嵐

のへの色を詠てけふもひくらしの鳴音うつろふ秋風そふく

河朝霧

ほの〳〵と朝日いさよふ波の上に山端のこすうちの川霧

內裡歌合　同九月十三日

江上月

秋は猶ことしの空も津の國のなにはかはらすみしま江の月

旅宿戀

都にはかこちかねにし我袖にあまるもしらすのへの夕露

暮山松

今よりの夕ゐる雲やさそふらん時雨をならすみねの松かせ

內裏歌合　同閏九月十九日

深山月

しくれ行色こそしらねしからきの外山のおくも秋夜の月

寒野虫

きり〳〵す鳴音もよはの初霜に野への淺茅や先かはるらん

寄風祝〔雜イ〕

つくはねのこのもかのもの嵐にも君かみかけを猶や頼まん

和歌所　建保元年十月十四日當座

冬月五首

此頃は雪ふる山のときはなる松にも月の影そくもらぬ

秋たにも氷るものかとみしまゝに片間の月のかけそさえ行

枯はつる草のとさしのあたにやは人の契りしあり明の月

いたつらに我身ふりねとゆふ霜のかさねて更る夜はの月影

ゆく年の數かく水にかけみれはせくかたしらぬ袖の上の月

秋十五首歌合　同二年

秋風

今よりのはきの下葉もいかならむ先いねかての秋かせそ吹

秋露

音そよく荻のはよりも秋かせの人にしらるゝ袖の夕露

秋月

おほかたは我身ひとつの秋としも嵐にはるゝ山のはの月

秋雨

かせすさふきりの落はに跡たえて窓深き夜の秋の村雨

秋鴈

鳴わたるかりの泪やしくるらむはねうちかはす村くもの空

秋虫

月影はいたらぬ里もなく虫の聲のかきり〔やイ〕はふか草の露

秋鹿

〔新後拾〕思ひ入山にても又なく鹿の猶うき時はあきのゆふくれ

秋花

あき風に咲ちるをのゝ露しけみ袖もとをゝに移る萩はら

秋水

香羽かはせきの嵐の影みえてたか色ふかき秋の瀧つせ

秋霜

夜な寒み今はあらしのなとめ子か袖ふる山の秋の初しも

秋祝

神風やみもすそ河の夕波に千とせの秋の聲もつき〔はイ〕せし

秋旅

月よ〔やイ〕猶さよの中山なか〳〵になに面かけのあきのふるさと

秋戀

風むすふたよりもつらし道のへの尾花かもとの露の下くさ

秋懷

しらさりしねさめも今は深き秋の在明の月に夜を殘しつゝ

秋雜

秋の夜をかつはつらしと深山木のこりす時雨に袖をかす蘭

秋十首撰歌合　同八月十五日於水無瀨殿被調之

花薄くさの袂をかりそなく泪の露やをきところなき

さそへ月なれぬる秋の露の袖のにも山にも道はある世に

身を秋のわか世やいたく更ぬ覽月をのみやは待となけれと

袖のみや思ふ心も朽ぬへしことしもふりぬ秋のよのしも

秋はけふ紅くゝる立田川いくせの波も色かはるらむ

あし引のやまとにはあらぬ唐錦たつたの時雨いかてそむ覽

當座御會　同九月十三日

曉山

秋の色は袖にもたへす有明の月をのこして山そ時雨るゝ

夜戀

いく度かよを長月のねさめしてみはてぬ夢に秋もはかなし

院御會　同九月十四日

月契多秋

萬代にちよをかさねて契るらし君にかけそふ秋夜の月

月卿雲客歌合　同九月廿九日

野徑月

露分る名殘はかりや行月も秋の末のゝ有明のそら

寄雲戀

思ふよりわか名やまたき立雲のうはのそらなる詠計に

霧中雁

はれやらぬ雲路分くる初鴈の羽風になひく岑の秋霧

同嫉妬歌合　同九月盡

河落葉

神南備の山の嵐やたつた川みつの秋のみふかき色かな

寄鳥戀

〔新後〕待わひてこぬよむなしく明行は泪かすそふしきのはねかき

深山雪

ふみまよひたつきもしらぬ山人の袖もしほりの雨の夕暮

內裏歌合　同三年六月日

水邊柳

石はしる清たき川の玉柳こすゑにむすふ水のしらなみ

江上霞

立かへりかすみの内に入江こくたなゝし小ふね春や行らん

朝落花

よしの山さゝ分るあさの下露に袖こそおもれ花のしら雪

夜歸鴈

月をやはたのむのかりも立まよひ霞む雲路によると鳴也

山晩風

いかさまのなにかとまらむ君か世にあふさか山の關の夕風

野曉月

かくてのみふるのゝさはに影みえて猶有明の月もはつかし

內裏百番歌合　同四年閏六月九日

春

續後 霞行日かけは空にかけろふのもゆる野原の春の淡雪

みよしのゝまきたつ雲の梢には花もつれなき色そ殘れる

夏

新勅 子規なくや五月の玉くしけふた聲きかて〔きゝてイ〕あくる夜半哉〔もかなイ〕

續後 みちしほのからかの嶋に玉もかるあままもみえぬ五月雨の頃

秋

續古 こしちより秋を急〔はイ〕かす鴈金は初もみちはのおりにあふらし

同 虫の音もいかにうらみて眞葛原〔はふイ〕をのゝあさちの色かはり行

冬

同 しろたへの衣ふきほす木枯のやかて時雨る天のかく〔こイ〕山

新勅 かり衣すそのもふかし箸鷹のとかへる山のみねのしら雪

戀

新後 秋の田のわさほのかつら露〔ゆふイ〕かけて結ふ契りのかり〔はイ〕にたになし

をとは川たきつ心をせきかねてあふさか山の名さへ恨めし

熊野路にて湯淺の宮にて御會ありけるに　同年九月廿日

山花

分まよふみ山櫻や咲ぬらん雲よりおくにかほるはる風

山夕

日かけさす雲のはたてのいとか山くるれは空に風そ涼しき

山月

藤代や山のはかけて秋風の吹上のなみにいつる月かけ

山曉

そらふかきまきのと山は明やらてをのれしくるゝ岑の横雲

山旅

秋の霜みな白たへの衣手にかさねて寒きみちの山風

嵯峨の鄕二品の第へ御幸ありて庚申に當座御會侍けるに　同年十月十一日

山家落葉

宿ちかき山はあらしの吹たひに木のはの音も猶しくれつゝ

內裏御會　同十一月一日

寒山月

夜な〳〵は聲よはり行嵐山梢もたかく月そのこれる

遠村雪

よそなから山ちもたえてふる雪はとはれぬ花の主とそみる

寄葉戀

つの國のなにはしられし蘆のたくあしのしのひに煙たつ共

院庚申御會　同五年四月十四日

春夜

花をおもふ四方の白露をきもせすねもせぬ比の床の山風

夏曉

夏草の露分衣此ころのあかつきおきは袖そすゝしき

秋朝

小男鹿のつま木こるおに迷ふらし同し尾上のゝへの朝きり

冬夕

續拾 あられ降まさきのかつら暮る日の外山にうつる影そ淋しき〔みしかきイ〕

久戀

新勅 つれなしと誰をかいはむ高砂の松もいとふも年はへに鳧

光明峯寺入道攝政 右大臣家歌合　同五年九月

夜深待月

待出ていつかなかめん久堅のあまり更ぬる山のはの月

故郷紅葉

ならのはの名におふみやも今更に時雨ふりそふ秋の色哉

河邊擣衣

秋ふかきよしのゝ里の川かせに岩波はやくうつ衣かな

行路見戀

思ひ送る心はかりはしたの帶のみちはかた／＼行めくる共

山家夕戀

よそにみし雲のはたての夕くれを軒端の山に思ひきゝつゝ

羈中松風

けふはまた野中の松を友なへと送る嵐そ遠さかり行

内裏歌合　同十一月四日

冬山霜

山風にみむろの木間もる霜の下草かけて冬はきに鳧

冬野霰

〔新拾〕うたの野や宿かり衣きゝすたつ羽をともさやに〔音もさやかにイ〕霰ふる也

冬關月

清見かた月かけこほる冬のよにをのれたのまぬ波の關もり

冬河風

續拾 此頃は時雨も雪もふる郷に衣かけほすさほの川かせ

冬海暮

さとかよふあまのとまやも跡たえて誰となくさの濱の白雪

冬夕旅

はれくもり時雨る空やくれぬらん日かけも急くさよの中山

冬夜戀

續拾 涙せく袖の氷りをかさねても夜半の契りはむすひかねつゝ

同御會　同六年八月十一日

池月久明

いけ水にちよはまかせつ久かたの雲ゐの月の影もはるかに

同十月二日

社頭曉月

さりともとよもの空をもあふく哉しるし有明の月よみの杜

禁中翫月といふことを

雲の上の今宵の月をみつる哉こゝろもはれぬ萬代の空

內裏御會　承久二年二月十三日五十七歲

春山月

なのつから雲こそ春の夜半の月霞かゝらぬ山のははなし

樓外柳

野への色はまた下もえの淺みとりをのれそなひく春の靑柳

內裡御會　同八月十五夜

待月

木のまもる月の桂の下紅葉山のはふかき影そつれなき

見月

万代はまたなかはにもあらなくに秋は今夜とすめる月哉

惜月

なかしてふ秋のよすから詠てもあかぬあまりのあり明の月

同御會

春風

花のかはまた白雲の色はかり袖の外なる春の山かせ

春雨

大かたの霞むを春のならひにて曇らぬ御世のはる雨そふる

春日社歌合同三年三月七日

野花

ちる花の野守のかゝみくもるらむ佛つらきよものあらしに

海霞

春のうちはいつれの蜑もしほくむ同しかすみの袖の浦波

述懷

春日のゝおとろか道はわけそめつ古きに歸る御世にあひつゝ

左大將家會に庭上松

松風もつきせぬ宿とみかさ山さしそふ千世のかけなひきつゝ

日吉社家親成七十賀し侍けるによみて遣しける

いくとせも猶みつしほのいやましに昔にこえんわかの浦波

春

建曆二年の頃よみ侍ける歌の中に湖上立春

朝日影にほてるおきのさゝ波に春も立ぬとかはる浦かせ

空は猶雪けなからの山風にはるとかすめる志賀のうら波

はるくれはとくる氷りのさゝ波に先たち出る志賀の花園

建保元年の頃霞中餘寒といふことを

立わたるかすみを分てふる雪にみのしろ衣はるとしもなし

海霞

うらちとふ里のしるへそほのか成霞めるかたの蜑の藻鹽火

立迷ふ霞の袖やふるさとに松浦かおきのけるの舟人

春のうたの中に

ふるかなを春の淡雪哀よにいつまて消ぬ物とかはみん

梅かえの花のたよりにおられ共そてにそかゝる春のあは雪

しつえひつ磯邊の松そ色まさるみちくるかたの春の一しほ

川邊柳

色ふかき河そひ柳いなむしろはるはみとりにしく物そなき

歸鴈

ほの〳〵と空はかすめる橫雲の山たちはなれかへるかり金

あし引の山とひこえて行かりのはかせにつらき花のしら雲

正治元年三月十七日大內南殿花御覽のために御幸あ

りける御ともに右少辨範光さふらひけるか花のえた
につけて被送ける
心あらは花も昔を思ひ出よもとのあるしのけふは御幸そ
返し
いかはかり花も哀と思ふらむ昔のはるにあふこゝちして
きのふの御幸のことを思ひ出て
きのふみしはなの御幸の名殘にてちりかひくもる雲の通ち
承元四年三月頃花山院の花見にまかりて侍けるにお
りふし雨ふりて催興し餘亭主南庭のかたへいてゝ歌
よみなとせられけるに
跡たえぬ庭のはる雨ふりもせよふるともけふは花の下かけ
同月廿日あまた人々ともなひて南殿の花見にまかり
たりけるに土御門中納言定通同中將通方朝臣なと女
房五六人あひくしてきよりまいりて侍けるに（かイ）
中納言の許より
しるしらす何かへたつる春霞あやなし花のよそになりなは
かへし
わきてよも誰をへたてむ春霞立よる程の花の木陰は
具親朝臣
花ゆへに誰かうらみを夕かすみへたてけりとも今社はしれ
かく申て後をの〳〵（のイ）よりあひて歌よみ侍けるに
いく年の春に我身もふりぬらむ花のゆきゝの雲のかよひち
家會に月前花を
花の雪空にしられぬ色なから木の下風に月そさえ行
野花
すみれつむ袖とはいはし櫻ちる野をなつかしみ春風そふく

河邊花
櫻ちる山下水をせきかねて瀧つあらしの末のしら波
建保三（二イ）年三月廿日頃八重櫻の枝に鞠をつけて内
裏へまいらせけるにそへて侍ける
春をおしみ折一枝の八重櫻九重にもとおもふあまりそ（にイ）
御かへし
はるをおしみ折つる花も九重に思ふあまりの色はそへけり
最勝寺のさくら鞠のかゝりにてとしへにけるか風に
たふれてありけるに跡にこと木をうへられて侍ける
をみてあまたの年々たち馴にしことを思ひて讀侍け
る
（新古）なれ〳〵てみしは名殘の春そともなとしら河の花の下かけ
うたあまたよみける中に桃花浮水上
うつしそめし折から人の花かつらかけてもけふの流をそくむ
海邊春暮
立かへる難波のはるを恨てもかすみそのこる跡のしらなみ

夏

夏の歌の中に
花になれし色やはかはる夏衣たつ田の山のみねの白雲
なくへき頃よりもとく時鳥をきゝて清範かもとへそ
のよし申つかはしたる返事に
ほとゝきすなか鳴さとを恨てもまつはむなしきやとの夕暮
これよりかへし
さと近き山ほとゝきす一聲に我そむなしき名殘とは聞
菖蒲

あやめ草なかきねさめのうき世にはむすふ計の枕成けり

建暦二年の家會に澤螢火を

影まとふ星か澤邊の芦のはに螢みたるゝ夏の夕暮

夏　秋

みそきする河こえかてらよる波の歸らぬさきに暮ぬ此日は

秋

立　秋

夏のよはみしかき芦のふしの間にいつしかかはる秋の初風

萩の歌よみける中に

時しもあれ慰めかたき夕暮にそよとこたふる萩のうはかせ

露ふかき軒の下萩末わけてとふへき物と秋かせそふく

兼思七夕

秋風のたつやをそきと銀河こゝろ行かふ波のかよひち

七夕後朝

いつとまたたのみなくさむ□□なく／＼かへるけさの七夕

山家秋思

哀とふ都の人のあらは社なくさみもせめ秋のゆふ暮

荒庭露滋

いにしへの玉のうてなの心地して露けき庭の苔むしろ哉

待野花

秋毎に心の色やさきたちておもかけうつるのへのはきはら

野徑薄

ならひにてまねくと思へは花薄駒もとゝめす野原さゝはら

承久二年七月十七日影供三首に古徑萩を

道のへの朽木の柳みしはるもうつりにけりな萩の下露

水邊草花

風吹は汀にたてる女郎花波のまくらにおれふしにけり

故郷蘭

あれにけり籬もたはにぬきかけてたか故郷の藤はかまそも

ふちはかまきてみる人もあらしたつ野と成にける庭の通ち

行路聞虫

分わひぬ袂の露も虫のねもしけき野原の秋のゆふ暮

連夜聞虫

夜をかさねよはるにつけて虫のねは哀をそふる物にそ有ける

向山待月

よや更る月やをそきとなかめても猶つれなきは山のはの空

承元三年八月十五夜家會に浦邊月

秋のよの月に煙のいかならむあまのやくてふ鹽かまのうら

河上月

秋といへは名になかれたる夜半なれや影久方の中の河波

深山月

外山には正木のかつらくる人もまたみぬ色はおくの月かけ

關路月

逢坂の夕つけとりもなきぬらし關のとさしの明かたの月

田家月

露や守山田の庵のかり枕わか袖ぬれぬ月やとるまて

竹中月

秋風はみ山もそよと竹のはに夜ふかき月のかけそもりくる

閑庭月

さても猶人こそとはね八重むくらしけれるまゝの庭の月影

月の歌あまたよみ侍ける中に

秋の夜の苫まの月をなかむれはなにはゝ春の氣色のみかは

月淸みなからの山に雲消てよるともみえすしかの浦波

都にはかゝる嵐の聲もあらし思ひも出よ月は見るとも

月といへはまつ思ひ出る木間よりなかはとみゆる秋のよの月

くまもなき月みるたひに思出る秋のなかはは今夜なりけり

小山田の庵もる賤かをのつから心もあらす月をみるかな

八月十日あまりの頃兼秀中將信能少將なとともなひて鴨禰宜祐綱か河崎の家へまかりて侍けれはもとより人々のあそふ景氣のしけれは迯かへりて祐綱かもとへ遣しける

はれくもる雲間の月にさそはれて出てもつらきむら雨の空かへし

月故にあくかれ出し池水にすまさらめやは雲の上人

家會に每夜明月

さしもさはたえせさりける光かな今夜もあかし秋のよの月

月照亡屋

故鄕はいく世の秋にあれぬらむ軒はの月のねやにもるまて

九月十三夜に鈴鹿の關にとまりてよめる

我心いかにすゝかのせきの戸に名をとゝめたる月をみる哉

家會に月前語往事

月みつゝかたる今夜そしられぬるたれも昔はわすれさり息

關路駒迎

ゆきなやむ駒ひきとめて逢坂のせきの小川にしはし水かへ

雨中駒迎

かきくもる逢坂山の時雨してさやかにみえぬ望月の駒

閑居秋雨

秋ふかき霧の籬のむら雨にはるゝよもなくしほれてそふる

野宿曉鹿

曉に鹿(けイ)のねきかぬたひねたにいかゝ露けき小のゝ草ふし

月前聞鹿

とにかくに秋の哀そ知れぬる月澄よはのさをしかの聲

鹿聲遠近

わか庵のかきほのみかときく程にとを里に又をしか鳴也

鹿聲両方

なれかすむのへにさこそは旅ねせめ跡まくら成さを鹿の聲

承久二年七月十七日影供三首に曉初鴈を

曉のしきの羽かきかすかすにかきつらねたる秋のかりかね

朝初鴈

立かへり名殘にかける玉つさをみる心地するけさのはつ鴈

晩聞鶉

詠やるすそのゝ秋の夕露に鳴やうつらのとこの山かせ

旅宿擣衣

から衣うちおとろかすつちのをとに都のかたの夢をたにみす

霧隔山路

いとゝしく駒やなつまむ夕霧にあしともみえす岩のかけ道

紅葉

みれは猶下葉はまたし神なひのもりあへぬ程の秋の時雨に

くれなゐのやしほのをかの色そこきふり出て染る秋の時雨に

花のみやあるし成へき山里はもみちのおりもとひける物を

隔川紅葉

朝日山みねの梢(紅葉イ)のさかりにはこゝろあらなんうちの河霧

霧間紅葉
さらぬたに小倉の山の紅葉はを立こめてける今朝のきり哉
當座歌合に海邊紅葉
いせしまやいちしの浦の蜑のやくいくしほ深き峯の紅葉は
菊　花
さもこそは千くさの〻ちの色ならめさくへき程も白菊の花
終日見菊
ねやのうちを朝日と〻もに立出て入までそみるしら菊の花
籬菊花
いつとなく籬の竹はときはにて移ろひにけり白菊のはな
暮　秋
夕日さす梢に秋はくれていなはいと〻嵐の山とやはみむ
秋の色のためこそみまくほしやらぬ後は何せん袖の白露

冬

建保四年十月歌合し侍けるに初冬
けさよりは嵐ふきそふみよしの〻故郷寒きふゆやきぬらむ
海邊初冬
けふよりは冬になるおの浦さえてはけしかるへき沖つ汐風
日吉の社にて如法經の十種供養し侍ける次に故郷時
雨を
初しくれふりにし里のしかすかに同しなからの山のはの雲
時　雨
しくれゆくみ山かさとの庵にた〻しはしばくもる此頃の空
しほれふす磯屋か床のあまの袖しらしなよはの時雨もる共
落葉埋橋
きてみれはうつもれに鬼吹わたる風に紅葉のふるのたか橋
落葉埋路
思へとも入ぬ山路は跡もなしことしもさてや木のは降つ〻
海邊落葉
紅葉はのちりしく時のうら〳〵はすまも明石の心地社すれ
嵯峨の郷二品の第へ御幸なりてしはらく御所にて有
けるに清範か御供にさむらひてけるに小袖つかはす
とて
古はちるもみちはをきるといふに嵐の山に今は思はす
かへし
紅葉きしきんたうの君にくからすか〻る小袖もあらし山には
紙燭一寸にて讀ける歌のうちに月前菊花を
うつろへる色なかりせは月影にまかひやせまししら菊の花
（題闕）
をみなへしさかり過たる冬かれのかしらの霜をそふる月影
里　冬
この里やよのうきよりはすみ吉と思ひもあへすさゆる松風
春は猶とを里をの〻草かれにあらしそ寒きすみ吉の松
風の音も遠さと小野の此頃は人こそとはねすみよしの松
氷をよめる
つら〻ゐるけさやはくまむ古の野中のしみつ心しるとも
谷川の岩うつをとの絶ぬるはむすふつら〻や波のしからみ
水の面にねさしと〻めぬうき草のよとむ計に氷る瀧つせ
水　鳥
水鳥のかもの青羽もかれて行氷る汀のあしのよな〳〵
難波江の芦のふしはやをしとりの浮ねの床のかこひ成らむ

千鳥

波路ゆく月になくさの濱千鳥友社なけれかけははなれす

夜をさむみ芦のうら風音さえて千鳥しはなくなにはかた哉

いそなきのなけとこぬ身の濱千鳥ひとりや夜はに友恨む覽

初雪

年毎にめつらしきかな初雪はふりてふりせぬ物にそ有ける

山路雪

故郷へ歸る山路はさりともと駒をそたのむ雪の明ほの

雪の中に法勝寺へまいりてよめる

花咲しけふしら川をきてみれは雪の木かけも立うかりけり

冬歌よみける中に

ふみ分てとふ人もなき宿なれは心のまゝにつもるゆきかな

雪の内に春の立くる年ならはけふやきかまし鶯のこゑ

はしたかの野守の鏡よそにやはみるかけさへに暮方のそら

連日鷹狩

昔よりひつきの御狩たえせぬはうち出ぬおりはかたの成皃

冬歌の中に

みしまゆふ御室の山の榊葉をかたにとりかけいのる神かき

はし姫(たイ)のまつよ更行月影もいさよふ波のせゝのあしろ木

秋をやく木のはの色や殘るらむ嵐にたえぬ宿のうつみ火

忘れては雲かとそ思ふ雪分て煙たなひくをのゝすみかま

禁中佛名

聲々に雲のうへ人きこゆ也ほとけの御名はつくすのみかは

歳暮從水早

筏おろす杣山川のはやせ河としの暮社ほとなかりけれ

歳暮

東路にありといふ成てまのせきとりとめかたき年の暮哉

雪中除夜

今夜ふる梢の雪の明はては初花かとやみらむとすらん

戀

忍戀

よしさらはまたしる人も泪川うきはなへての□

暮忍戀

ゆふつくひけふくれなゐのまふりてにつゝむ泪や色に出覽

夏戀

難波江やうきて物思ふ夏のよの短き芦のふしのまもなし

旅戀

夢路さへ遠さと小野の草枕獨そむすふよはのまつかせ

夢ちやはとをちのをのゝ松風になひく草はを結ひかねつゝ

海路戀

しるや君すみたかはらに袖ぬれて都鳥にもなれをとふとは

たちはなれ獨あかしの浦ちには袂にまつも波そかけゝる

隔關戀

あつまちの衣か關を打こえてそのなを君とかさねつる哉

隔遠路戀

程もなく心つかひは通ふ哉日數へぬへき戀ちと思ふに

遇門戀

まてよ君今かへさには立いらむ心かはりてなしとことふな

互恨戀

心にもあらぬ夜かれを恨つゝかへす君とてつらからぬかは

雨中戀

待宵の雨も涙もふりまかひはれ間もなくて更る空哉

歳暮戀

いつとなく君かあたりはよそにして思はぬ春そ近付にける

寄月戀

思ひ出ぬ君かこゝろもかよふらむ月をなかむるよはの心に

寄虫戀

くれゆけは淺茅か原に鳴虫の音にたてつとも君しるらめや

寄葦戀

深き江のうきにしほるゝ芦のねのよゝの契りも朽やしぬ覽

寄藤花戀

波よする田子のうら藤しほれつゝ人を心にかけぬ日はなし

承久二年七月十七日影供三首に寄荻戀

消かへり心ひとつの下荻にしのひもあへぬ秋のゆふつゆ

寄秋風戀

あき風は君かきくをやよきてふく物の哀もしらすかほなる

寄鹿戀

さらぬたにかたしく袖は露けきを泪なそへそさをしかの聲

寄源氏戀

もらすなよ只手ならひとことよせてかきなかしたる水莖の跡

思高人戀

數ならぬ身にあふ程の君ならは思ひありともいはまし物を

契經年戀

たのめつゝ年はみとせになりぬ共新枕をはえこそかはさね

寢人戀人

から衣此つまと又ふれなからかさねて人の戀しきやなそ

忍人戀

山ふかみ下行たにの埋水せくもらすも人しれすのみ

憑示現戀

祈りつゝぬる夜の夢にあひぬるは神のしるしをみする也鬼

憑誓言戀

賴むそよ今際かんとわきもこかかけて誓ひしをすゝきの宮

聞詞怨戀

人心なをさりけ成言のはゝたのむるまてもつらきなりけり

深夜待戀

契りきや扨もはかなき宵のまにをけらん露のきえはてね共

毎夜違約戀

夜はことの其僞をしるへにていとふ戀ちにかよひなれぬる

鴈聲催戀

はつかりの泪とも今白露のをくかたしらぬあきのころもて

曉風催戀

松風のふかぬおりたにきぬ〳〵になりぬる床は如何淋しき

隨日增戀

ひにそひて深き思ひになるみかたゝちまさり行□波かな

秋風增戀

契とてむすふか露の玉ゆらもしらぬ夕のそてのあきかせ

冬來增戀

露たにも所せかりし戀衣たもとしくるゝ神無月かな

近隣戀人

芦かきの同し内なる君ならはもらす隙たになからましやは

物隔談戀

あふ事は思ひかけすさ思へとも此玉たれのうちへいらなむ

並枕語戀

敷妙の枕のみかは逢夜半はむつことをさへかはす成けり
忘るなよこよひちきりを敷妙の枕はともにこけのむすまて
　被妨人戀
古の關守すへし通路はいまはわか身になりにけるかな
　夢會戀
（稽古）思ひねにあひみる夢のさむる社とりのねきかぬ別なりけれ
　不慮逢戀
心にも結はぬよはの契り哉さきの世よりやとけはしめけむ
　精進間戀
いもゐして引しめ繩のうちはえて絶すも袖のかく朽めやは
佛のしめのうちにも立そひてきよき衣のそてぬらしつゝ
　思三人戀
いつれをも思ひたえしとする程に三夜に一よもめくり逢哉
　敎居隱戀
尋ねよといひし心をあらためて宿をさへにもかへてける哉
　厭戀思浮世
いもかりとやりし車を引かへて法にも今はこゝろかけつる
　見返事無字戀
濱千鳥あとなき浦は中々にみせすは袖もしほれさらまし
　落返事戀
さのみやはいとなかる覽さりとても賴むたひしも落にける哉

雜

　ふたみのうらにてよめる
神風にたちよる波のたよりにもけふりふたみのよゝの浦松
　海邊のこゝろを
月はみつさてもあかしの夢ちたえなれぬ野原に浦風そふく
昔よりなのみなからの橋はしら跡もあとなき波のかよひち
　山路雲
そことなく夕こえかゝる山風に漂ふ雲のあともはかなし
　關路嵐
とまるへき關やはうちもあらはにて嵐はけけし足柄の山
　御使に鎌倉へ下るよし高弁上人のもとへ申つかはし
　侍けるつゐてに
みやこたに遠しといひし（おもイ）山のはにいくへへたてん峯の白雲
　かへし
白雲はいくかさなりもへたつとも思ふ心のへたつ（かよふ）へけれは
　九月廿九日侍從宰相定家卿の許へ申送ける
秋をおしむ名殘計りはあらす共わか行かたも思ひをこせよ
　かへし
とし每の秋のたくひの別かは君をそなたにしたふこゝろは
　おなし夜餞すとて暮秋餞別といふことを
たひ衣たつ空そ（もイ）なき別路は秋もかきりのあかつきの露
　十月一日賀茂社へまいらせける三首に太田新社
いかにせんたのむ都の神無月しくれ計を身にはそへつゝ
　橋本
此たひの我みちさらぬしるへにて今は昔のあとを忘るな
　東へくたるとて野ちの松原にやすみて侍りけるにし
　くれしけれは
しはしかと思ひもあへす袖ぬれて時雨はすきぬ野ちの松原
　篠はらの池に水鳥のありけるをみて

霜をけとをのれはかれすにほのすむ汀に寒き芦のしの原
かゝみの宿にて
としをへて立よる影をます鏡山の名つらき物とやは見し
安儀河にて
をのつからこのはの色はよとめ供くれにし物を秋川のみつ
小礒森を
下草もをいその杜の霜をへてわか身のうへと成にける哉
小野宿たちけるに
あけぬとてまたたつをのゝ草枕このたひ計露けきはなし
をのれさへをのゝ山田のかり枕日数かそふるしきの羽かき
さめかゐにて
思ひゆく其俤に袖ぬれてむすはぬ夢もさめかゐの水
あを墓
われみてもいくよの霜かふりぬらむ[　　]あをはかの里
同合宿にとまりて
冬枯のあをのゝ原は霜にあれて今あらたむる宿のかやふき
株河にて
我も世にまた朽はてすくいせ川又もあふせの波のかよひ路
信濃路のかたへ里馬引たかへたるを
さもこそは其名もしらぬ信濃ちよ引たかへたるかひの黒駒
小川にいかるかをもちたるものゝあへるをみて
世中はいつくもおなしいかるかやとみの小川の流とそみる
やふ川といふを
日のひかりやふしわかねは此河の汀の波もかけはへたてす
墨俣渡にて
浪の上に身をうき舟のわたし守いそくもつゐの同し渡りを
かの岸とおなし浮よのむやい舟渡るといふもはなれさり鳧
玉井森にて馬よりおりて
思ひいつやみたらし川にせしみそき忘れぬ袖の玉のゐの水
古渡
むかしより其名かはらぬ古わたりさても朽せぬ橋はしら哉
鳴海かたのしほみちて侍けれは
汐みてはよそになるみのかたをなみ浦より遠の急きてそ行
汐みては跡なき波のかへりみるかたは鳴海のうらみつる哉
星崎のかたをみて
和田のはら空もひとつの朝なきに波間にみゆるほし崎の浦
二村山にて
心やはふたむら山を越來ても君なそたのむみやこ思へは
色々に誰おりかくる折なれや紅葉のにしきふたむらの山
あひともなひて侍ける人の
一むらこゆる二むらのやま[　　]
といひけるをきゝて
八はしもわたるはほともなかりけり[　　]
八橋にて
都思ふ程はくもてにみたれつゝ袖こそぬるれなみの八はし
矢作宿にて恒例
これ迄もいたゝく星のかす／＼に猶たのもしきたひの空哉
乙川のはしを渡
里とよむかたもはるかにきこえけり駒うちわたす乙川の橋
みやち山にて
宮古思ふみやちの山の中にたつたつきもしらぬ夕霧の空
いかはかり風もたかしの山なれは峰のかや[　　]しところに

火打坂といふ所にて雑人の中に
ひうち坂にはくつをかくるそ□
これを歌に聞なして
いしのかとたかしの山のこれならむ□
たかしの山うちおりてしらすかの濱にて
沖つ風をともたかしの山越てうちよする波のしらすかの濱
橋本の宿にて
波のうつ浦のはま松ねもいらす枕さためぬあつまやのとこ
たれらへて海と河とをへたつらむ波を分たる松のむら立
佐夜中山
東路のさやのなか山中絶てかくこひぬれは又もこえなむ
菊川宿にて
うつり行わか影のみやかはるらむおいせぬ物ときく川の水
大井川にて筏を
是や此みやこの西の大井河いさことゝはんくたすいかたし
藤枝にて
春をまつなけきはたれもある物をおなしかれはの藤枝の里
うと濱にて
いにしへの天のは衣きてとへはいふこともなきうと濱の松
興津にて
宮古思ひ興津のはまの濱ひさし久しくなりぬ波にしほれて
大和多の浦にて海人をみて
哀なりいかにするかの田子の浦蜑のしはさとみるもはかなき
富士の山を
旅人の思ひはふしの夕けふりはれぬみそらをなかめてそ行
昔よりみてもいくとせふりぬらん我身にふしの雪積りつゝ
いさやその昔はしらすふしの山けふりは絶す雲そたな引
浮嶋か原にて思ひ出ること侍て
世中は猶うきしまのあた波にむかしをかけてぬるゝそて哉
關東へ下りつきて仙洞へ奏せさせ侍ける
此由雖レ載ニ日記一。歌未ニ勘出一。
宸筆の御返歌十月廿七日給りて侍ける
かへりこむ程は時雨の衣手にへたてゝ遠き雲ゐ成とも
旅春雨
たひ人の衣はる雨ふる郷をこふる袂のかはく日もなし
羇中夏草
なつ草のは山しけ山茂あひて露分衣そてもほしあへす
旅泊月
月かけに夜舟いさよふ浦人もあかしのせとは出そわつらふ
旅山秋鴈
故郷にかよふ夢路も初かりの聲におほめく宇治の山風
旅歌の中に
野へなれは露にはぬれん旅衣さのみはなしにしほりかねつゝ
たれにかも跡の契りを結ひをかむいなはの山のこけの下露
都思ふ夢のみ残るねさめには時雨も袖になこりかほなり
あつまのみちにて讀ける歌中に
あとゝめてたれ又こゝに草枕結ひそめつるのへのはかなさ
思ひ出るねさめはおなし都にてみねの嵐を枕にそきく
漂らふる身はし□かの恨みてもあれたる波に濡つゝそ行
わするなよ友とみきはのひとつ松まつとは波の立歸るまて
けふはまたはまなの海の橋柱うきたる波の跡もとゝめす
かへりみる都のかたはとを海のはまなの橋のわたり迄きぬ

はやくみしはまなの海に立かへりむすはぬなみも契り有鬼
やみふかき浮世をいたふ（上歟）なにもおはす曉事の名殘をや思ふ

熱田社にて

駒とめてすゝみてゆかむ千早振ゆふ日あつたの杜の下かけ

これもおなしあつまの路にて讀侍ける歌の中に

あとはかつみえす鳴海の潟をなみ滿くる汐に駒うちわたす
汐もみちぬ日も夕暮になるみ潟いかなる方に今夜かもねん
見しよりも猶ふりにけるわたり哉うきかみ川の波の八はし
朽にけるけふやつ橋を都思ふこゝろやゝかてくもて成らん
武士の身にならすてふやはき川をのかすかたの行衞知すも
うらに出る湊はおなしおきつ河たえすやせゝの猶深くして
おほつかな我はのに出てからは共おかしき岸の姿とそみる
足からの山の關守古はありもやしけんあとたにもなし
うさ濱にいつかきにけん昔より我を汀にまつとなけれと
花もみな色なき時はをしなへて野成くさ木そ淋しかりける
誰もかはかりのならひの枕とて草ひき結ふのへにかもねん
さゝのやのよふかき霜をおきもせすねもせぬ床に嵐ふく也
今までにわすれぬ人はあらしふく山もへたてつ跡のしら波
いかならむ風の便につけやらん立ゐる雲の跡もたえねは

吾妻へ下るとてあをはかの宿にてあそひて侍ける傀儡のほるとてたつねけれはみまかりけるよし申をききて

訪ねはやいつれの草の下ならむ名はおほかたのあをはかの里

山家

山下風によのうきよりは空晴てすみよきものとあり明の月
とふ人はをかへのをかはかき絶てけふりをたつる冬の山里

山述懷

立なれし其神山のみねの雲こゝろはかりはかけぬ日もなし

海述懷

うきて思ふよるへしらせよ興つなみ海と嵐のかけの便に

月前述懷

さても猶物思ふことはなくさまて月にしもこそ詠わひぬれ

述懷歌あまたよみ侍ける中に

和歌の浦にその名をかけてたのむ哉哀と思へ玉つしま姫
われかくて住ぬへしやと世中に心のとめよ山のはの月
ともすれはうかれ出るも如何せむ身を捨はてぬ心ならねは
（新後撰）厭はしなさてもなからむ後は又悲しかるへき此世ならすや
初めなき身のまとひこそ悲しけれ誠の道をまたしらぬまに
思ひ出る事もいくその數そへはなきか多くも成につけても
今はよに有にもあらす成ぬれと暮れは年の數やそふらん
すみ染のころもむなしく過そ行心のうちに思ひたてとも
春にあふ今一しほの松ことに霞の衣たちそやられぬ

社頭述懷

あはれみよ人數ならぬ身なり共神はあまねき物とこそきけ
かすか山朝いるみねにかけて祈る雲ゐはるかに空そ長閑き
君か世をかけていのれはかすか山朝ゐる峯の雲のかよひち

橋本社五十首中に

柏木の森の朽葉は霜ふりぬいつとかまたん惠みありとも
君かためはるもかきりは嵐ふく松にそなひく万代の聲
つくりけるうそをあまた木の枝にすへて人の許へつかはすとて人にかはりて
心にはとひぬはかりに思へ共うそゝきいたる歎きをそする

かへし

とひぬはかり思ふらむ社哀なれうそゝきいたる歎するとて

　ひはを人につかはすとて又人にかはる

思ひやるひはいくかにか成ぬらむ明ぬ暮ぬとまち數へつゝ

　かへし

待かねてなかむる空に暮日はうれしなからに猶かそへつゝ

　入道寂蓮身まかりて侍し頃定家朝臣許より

たまきはる世のことはりも賴まれす猶うらめしき住吉の神

　かへし

限りあれは怨みても又いかゝせむかゝるうきよに住吉の神

　承久三年七月七日六波羅の壹岐前司親重か家へまか
りて侍しに昔この所にて遊ひしことなと思ひいてら
れて哀に侍しかは障子の上の小壁にかき付ける

をのつからなきかけもやと水の面にさしても袖の濡增つゝ

かなしきは別れはてにし詠哉又こん年も星合のそら

　建暦二年七月六日篳篥の師にて侍ける季遠か爲に追
善しける所へまかり向て更て歸るとてこゝろのうち
に思ひつゝけ侍ける

おしへをきし道は露けき蓬生にあとゝふのみそ限り也ける

　承久元年六月の頃より女子中將忠副朝臣室歲十三わつらふ
ことありけるに七月七日梶のはに書付らる

年每のたえぬたのみを契りにてこのせにもたて天の川なみ

　九日つゐにかくれ侍にければ其頃あまた歌よみける
中に

むは玉のこの黑髮をかきなてゝ思ひし末よかゝるへしやは

思へたゝ此世むなしき玉くしけふたゝひあはん契たになし

佛はたちにし月をへたてゝも別はけふのゆふくれのそら

消はてし露のかたみの女郎花いはぬも色にしほれはてぬる

消はてし露の形見と折袖にうつるや花のなこり成らん

五十まて多くの年はへぬれともこの秋はかり悲しきはなし

哀とも御世の佛に消はてし露の名殘の花たてまつる

うしとみし其夜の夢はまたさめす何おとろかす曉のかね

子を思ふ心ややかて晴やらてさきたつ道の闇と成らむ

おとろかす鐘の響も打たえて猶長きよのさめすや有らん

今夜又うかりし月のめくりきて思ひ出れはかきくらしつゝ

こゝに猶佛のみそ殘りけるをくりし月よ行衞しられす せよイ

こけの下もみる心地する佛にはくゝみはてし袖そくちぬる

別れにし其日をけふとかそふれは泪かきあへす夕くれの空

今はたゝ濁りにしまぬ玉のをのはちすに結ふ契りともかな

今はたゝ九の蓮にやとりして六のちまたになかくかへすな

さきたちし佛のみそ有明のつきせぬものはなみた成けり

限りあれはさても止めぬ別路に只戀しさのやるかたそなき

思ひをきて消なん事を歎しに猶さためなき露の身そうき

別路は淺ちか末と成にけりいつしかしけき秋のゆふつゆ

　八月廿七日此佛事の棒物に唐綾をもちてかめをつく
りて前栽の花を折てたてゝ一首を結つけゝる

けふは又折袖うつる花の色を消にし露の名殘計に

　九月十五夜亡者の小手箱を布施にしける中によみて
いれける

いかにせん行衞もしらぬ玉匣ふたゝひあはぬ此世なりけり

　廿一日おひぬき侍とて

たえはつる名殘やけさの麻の帶思ひとくにも猶そかなしき

廿七日中將忠嗣朝臣の造帋箱をゝくりつかはすとて
敷のうらにかきつけゝる

なき影を思ひもいてよ十寸鏡うつれはかはるならひなり共

とまりぬ(ゐイ)る歎も夢の内なれやさきたつ人もうつゝならねは

かへし

夢うつゝ思ひもあへぬ迷ひにもわかさきたゝぬ道そ悲しき

古のわしのたかねにことよせてこの面影そ在明の月

建暦二年とよ(はイ)のみそきふたゝひとけをこなはれ
し日次の日治部卿定家のもとへ申をくり侍ける

君まちてふたゝひすめる河水に千世をふとよの御禊(をイ)とそ見る

返し

續拾 君か代の千世にちよそふみそきしてふたゝひ澄る鴨川の水

治部卿定家子息爲家元服して後ほとなく從上の加階し
たるよろこひに申つかはし侍ける

袖のうちに思ひなれても嬉しさの此はるいかに身に餘る覽

かへし

袖せはくはくゝむ身にもあまるまて此春にあふ御世そ嬉しき

子息教雅をありきそめに人のもとへつかはしけるに
手本を引出物にしてそのつゝみ紙に

あとならへ思ふおもひのとをりつゝ君にかひ有敷嶋のみち

かへし

敷嶋の道ある君にならひをきつ末とをるへきあとに任せて

同人三位に叙して一たひに侍從をかけたりけるにつ
かはしける

嬉しさはむかしつゝみし袖よりも猶立歸るけふやことなる

かへし

嬉しさはむかしのそての名にかけてけふ身にあまる紫の色

近衛司にて年たけぬるよし述懐百首におほくよみて
ほとなく右兵衛督になりて侍しあしたに同人の許よ
り

柏木そ今日やわかはの春にあふ君か御かけのしけき惠みに

かへし

春の雨にふりぬとなにか思ふ覽惠みもしけき森のかしは木

同人祖父中納言の春日行幸の賞をつのりて正三位し
たる朝につかはしける

新後撰 神もまた君かためとや春日山ふるき御幸のあとのこしけむ

かへし　　定家

同 うつもれしおとろか(のイ)路を尋てそふるき御幸の跡もとひける

教雅少將になりて侍し時同人のもとよりよろこひつ
かはすとて

みかさ山わかはの松にいか計あめの惠みのふかさをかみる

かへし

年のうちに春の日影やさしつらむみかさの山の恵をそ見る

社頭祝言

かきりなく君か千とせは大はらやをしほの山の松は物かは

承元四年新羅祭の次に社頭殘菊といふことをよみ侍
けるに

神垣やいくよの霜の跡ふりてむかしをかくる菊のしらゆふ

元久元年五月廿日院より御歌を春日社へまいらせら
れける御使にまいりて其たゝう紙に御使の位署年號
なと書付てそはにわたくしの歌を一首かきそへ侍け
る

勅奈禮者如何爾賢久御笠山差天納夜與呂津世之音

建保三年正月十四日加茂へまうてけるに月はくまなくて雪うちゝりけれは

またしらすその神かけてふりぬれは月と雪とのよはの白ゆふ

五月五日本院へまいりて女房越前を尋て對面してやゝ久しくありていてけるに忠信卿春宮權亮のあふきをとりて硯を召てたひけれはかきつけゝる

けふも又かへるみあれの夕たすきありし名殘の猶殘るらん

宿所へ出て後返事忠信卿の許よりつたへ送りける

ゆふ襷ありしなこりはいかなれや今日そ心にわきてかゝれる

貴布禰社にまうてたりしに奥御前にて庵室のありけるにたちいりてみけれは深山のけしき餘興つきかたくおほえて障子にかきつけゝる(雲鯨)

けふは猶なこりを思ひおく山にたつ空もなき夕暮の空

無量義經

我も又よそち餘りと過にけりたのむ心のまことあらはせ

法師品

やみはれぬ人の心をさそふとてうきよをめくる山のはの月

提婆品

法の水結ひし谷のこけのそて千世にいく度ぬれてほしけむ

勸持品

雨雲のよそにも何か恨みけむさすかにやかてはるゝ物から

神力品

かくれにし後も必てらす月定めなき世の空たのめせて

日吉社にて如法經十種供養し侍けるに法師品種々供養のこゝろをよめる

誰もけふひとくさならぬ花のかに露のかことや結ひをく覽

普賢經

かねてよりかすめる空の色をみる春のなかはの入かたの月

多寶佛

ときのへし法の莚の友なれやいかに契りをしきしのひけん

大圓鏡知

よしさらはこの世のさとり增鏡なき影つらき身とも思はん

般若波羅密

浮世渡る波のうきゝをたてぬれはしるしも深きえに社有けれ

衆生無邊誓願度

新後撰 ゆくゑなき世をうち河の橋柱たてゝし物を人わたせとは

彌勒菩薩

よしさらは此世のやみは夢にてもさめむかきりの曉のそら

法印慶範か坊に舍利供養し侍ける次に人々歌よみてつかはしはへりけるに紅葉を

染てほす色や梢にみえぬらむしくるゝ山のみねの秋風

隱題

女郎花

秋の野の露にしほるゝ花をみなへしやおらまし後のかたみに

明障子

あしのはの末まて波のあかりしやうらしほ遙にみつの浦かせ

折句

はきのはな

はるゝ〳〵ときり立こむるの山よりはつかり金のなき渡る聲

かけて祈るその神山の山人とたれもみあれのもろかつらせり

夏

穐

風さむみ夜な〳〵虫のなみたにや明るあさちの色かはり行

いく秋か月をめてゝもいたつらにおいその森の霜の下くさ

をのゝえは朽木のそまの夕時雨つれなき色に秋風そふく

今はさて我身に秋もたけくまの松に嵐のしくれてそ行

冬

はしたかのすゝの篠やに宿からむあすはひつきの御狩のゝ原

雜

足からの山のかひ社なかりけれわかるゝ涙せきもとゝめす

建保六年八月十三日中殿宴に池月久明といへる事を

■古〔はイ〕

池水にいはほとならむさゝれ石の數もあらはにすめる月影

備ニ　叡覽一之處。今日被ニ返下一畢。

永仁四年卯月四日　　　　戸部尙書在判

以ニ雅孝朝臣本一書ニ寫之一畢。

嘉元二年十月廿八日戌刻於ニ讃州之許一注レ之。

此集。相公御集也。家之正本粉失。仍假ニ借冷泉前大納言爲富卿之本一。仰ニ治部大輔藤原爲說一令レ書ニ寫之一。彼本書落字謬等繁多。尋ニ正本一重可レ改者也。

右明日香井集以百花庵宗固本挍合

群書類從巻第二百四十三

和歌部九十八　家集十六

隣女和歌集

やまとうたは。みなかみひの河よりいてゝなかれ。たまかきの國つわさとなれりしより。代々の勅撰。家々のうちきゝ。いにしへのあとをつきて。いまの世にたえすなりぬるなかに。歌よみとおもへる人。たかきもくたれるも。みつからの歌をしるして家の集とせり。かれは心のはないたつらに散らせ。ことはのはやし。むなしくむもれきとならん事をおしみ。もしは末のよの集のためとのこし。かつはなきあとのかたみとおもへるなるへし。こゝに人なみ〳〵に。正元よりこのかた。わかの浦にかきすてしもくつをいまひろひあつめて隣女和歌集といへることあり。さきにいふ所の歌仙たちのおもむきにはあらす。これはたたこの道にふける思ひにひかれて。たへさる身。をろかなること葉をかへりみす。おりにつけ時にしたかひて。こゝろさしをのふるかすをみて年々にふかくなり。あさくおこたる心のほとをしらんためはかりにかきとゝめぬるを。しらいとのこのすちをはしらす。くれ竹のよのつねにならひてみむ人は賤かかきねにさらすぬのを心ひとつに花とあやまり。難波江におふる蘆をもわか目にはよしと見るになむなりぬへし。おほよそいとけなかりしより。かす〳〵に書置しことのは。たひ〳〵のやとのけふりに大空の霞となりにしかは。過にし弘安のはしめよりことなるふしなけれと。ゐなのさゝはらしけるにまかせて。たかきみしかきをもいはす。なほきみや木ましはらされは。くちきのそまにまかりゆかめるをもきらはす。さなからかきのせぬるあさけり。今のひとのきゝ後のよのそしりのかるゝかたなく。はゝかりおほけれと。ねかふところは心さしのふかくて。よのいとなみにまきれぬかたをあはれみて。つたなきことは。いやしきすかたをはおもひゆるせとなり。又題のしたい歌のにほひ。ことはのかきさまふるき言。かやうのふし〳〵さなからおほく。かたくなにたかひひかめる事みつからとゝのへんとすれは。老のやまひ物うく。ふたゝひみむはたわれはつかしく。いはんや人のてをからんすらかたはらいたきによりて。此道にあやめもわかぬともからにまかせて。かきあつめさせぬれは。うしろめたけれと。ちからなき身のいたつきになむ。まけにたる。もし見む人このおもむきをおもひて。あさけることなくは。のそむところたりぬへし。そも〳〵わかみは新古今新勅撰のすかた

を心にかけ。なかころよりは万葉集古今等の心地をいかて
かとこひねかへとも。箕裘をたにまなひみす。かの西施かと
なりの女の。かれをうらやめるよそほひ。もとのかたちより
は。ます／＼みにくゝなりけるになすらへて。この集の名と
せりといふことしかり。

隣女和歌集巻第一 正元年中

春

雪のうちみ山の里にたつ春は冬の日かすをかそへてそしる
けさよりは春のとなりに成ぬとや冬をへたてゝ霞たつらむ
けさみれは氷とけぬる谷川のしたゆく波に春や立らむ
鶯もかすみもをそき雪のうちに春しる物は心なりけり
春は來ぬゆきけの雲ははれやらてさなから霞むみ吉のゝ山
しからきの外山はゆきもなをさえて里のみ霞む春の明ほの
ほの／＼と明ゆく空をみわたせは山もとよりそ霞そめける
はるのきる霞の衣たちこめてよるへもみえす袖のうら波
もしほやく浦の煙をたよりにて春はなみちそまつ霞ける
深山にはなをしら雪のふるすよりのきはにうつる鶯の聲
はるきてもなを風さむきみやまきのかけのゝ草に殘る淡雪
かすめともまた綠にはなりやらてかれのゝ草に殘る白雪
何處にも梅かゝそする春の日の至りいたらぬ里のなけれは
故郷の老木のむめは咲にけりむかしの春の色をのこして
あさみとりなひくもしるし青柳のいとかの山の峯の春風
春來てもいくかもあらぬにいつしかと心にかゝる花の白雲
雲ははな花はくもとやまかふ覧空にかすめるかつらきの山
みよしのゝ山のさくらの花さかり峯にもおにもかゝる白雲
吉野山はなよりおくのしらくもやかさなる峯の櫻なるらむ
麓よりいくへの雲をわけすてゝしらぬ山路の花をみるらむ
みよしのゝ春の鏡とみゆるかなあをねか峯の春のよの月
くれぬとも月にはみてん春のよの闇はあやなき花さかり哉
もゝしきやおほうち山の櫻花くもゐにふかく匂ふはる風
たちはなの匂ひならねと古里の軒の櫻にむかしこひつゝ
いさゝらは散なはなけのはな櫻風よりさきに折つくしてん
雪とふるはなにのきはゝ埋れてさくらをふける春の山里
をのつから心とけさは散はてゝさそふ風をもまたぬ花哉
けさふかはいかに風をもかこたましのとけき空にちる櫻哉
峯の雲みきはのなみそさわくなるひら山風に花や散覧
歸るへきならひなりとも春のかり今年計りは花にやすらへ
さすかまた花のなこりやおしからむ啼て別るゝ春のかり金
なのみしてときはの山の岩つゝしみとりにかゝる花も咲覧

夏

わかさりしうの花かきも白妙に咲あらはるゝ夏は來にけり
しつのめかさらせる布や山里のかきへのたにゝ咲るうの花
としことのをそさになれて郭公またぬうつきの空に鳴なり
まちわひぬおのかさ月の空にたになをもつれなき郭公哉
いりひさす雲のはたてのをりはへて鳴やさ月の山郭公
鈴鹿山あけ方近きせきの戸をふりはてゝなく郭公哉
なつのよの有明の空のほとゝきすおなしねさめの人や聞覽
なけやなけさよのねさめの郭公ふた聲きゝて思出にせむ
ひとこゑは夢と思ひておとろけはうつゝなりける郭公かな
しられけりひける菖蒲の長きねにまたみぬゝまの底の深さも
足曳のとを山をたにそて濡ていく程もなきさなへ取らし

五月雨は日かすふれともなにには瀉もとのみきはを越ぬ白浪
さみたれに天の川浪たかゝらし月のみふねの渡るよもなき
たか袖のうつりかよりか橋を昔ことゝふつまとなしけむ
みしかよとさこそはいはめ月影のいるをもまたて明る空哉
五月雨にきえぬうふねの篝火やかつらの河の螢成らむ
こかくれにしつみ流るゝ山の井のあかても夏の日を暮す哉

秋

うたゝねの袂をかけて吹風のめにみぬ色に秋をしる哉
久方の空になかれぬあまの河なをほし合の影そみえける
秋の露たか手枕と結ふらんいるのゝすゝきほに出にけり
なか／＼に千草の花もなきのへのしのゝを薄風そ淋しき
むさしのや千くさの花の色々にをきかへてける秋の白露
秋風のふきしくをのゝあさちはら結ひもあへす露そこほるゝ
あきもたゝ思へはおなし夕暮をなかめからにや淋しかる覽
春はこし秋はみやこにくる鴈のいつもたひなるねをや鳴覽
あき風に鴈は來にけりしら雲のみちゆきふりに聲そ聞ゆる
久かたのあまとふかりのおほひはに初霜ふりぬ有明（カヘ）の空
しからきのみやまに風やむかふ覽おのへの鹿の聲よはる也
ふきをくるみ山嵐につたひきてさとまてかよふ（コノサトサラヌ）小男鹿の聲
村時雨はれゆく雲のおひかせに山めくりするさをしかの聲
みやきのゝこのした露にたちぬれていくよか鹿の妻をこふ覽
寂覺してなを殘すよもなかつきの有明の山のさをしかの聲
久かたの月こそあらめあけゆけは鹿の聲さへ山にいるらむ
うつらたつあさちのはすゑ打なひき夕の露に秋風そ吹
ゆふされは草はの露をふきすきて涙なさそふ袖のおひかせ
さひしさはゆふへの風と思ひしにうすきりまよふ曙のそら
山のはにまつよの月は出にけりこの里人やいねかてにする
くもりなき空すみわたるなかきよの月のみふねの山の秋風
山里のにはの荻はら露ちりて身にしむ色の月そさひしき
をきあかす露のよすからかけとめて月にやとかす庭の荻原
むさしのは心つくしの山もなしまたれんものか秋のよの月
神もさそ秋もなかはといはしみつなに流れたる月はみる覽
須磨の浦せきふきこゆる秋風に月さひわたる浪のなちかた
月影はよるとも見えすみつしほに流れひるまの心地のみして
明石かたあかてかたふく有明の月ふきかへせおきつしほ風
しはのいほまつのあみともまはらにて窓より出る有明の月
きり／＼すなにを恨みてあさちふの有明の月にねは盡す覽
たひねする野風をさむみきり／＼す草の枕のしたに鳴也
ふるさとの庭のあさちふうらかれて虫の音よはる秋の夕霜
ふきすくる風ならねともおきのはにをとつれて降秋の村雨
もみちはゝをのれと染る色なれやときはの山も時雨ふる也
山人のそても色にや出ぬらんつたはひかゝる谷のした道
もみちはをよるさへ見よとてる月の光さやけき神並のもり
をしかなくありあけのころの山端にもみちを分て出る月影
露霜にかねてこのはの移ろひてしくれを待ぬ神なひのもり

冬

神無月しくれすとても曉のねさめは袖のかはくものかは
かみな月冬のはしめはかき曇りしくれはさため有ける物を
あくる夜の外山吹おろすこからしにしくれて傳ふ峯の浮雲
たかねには夕日さすなりいこま山ふもとの里の雲は時雨て
何に（タカタメニ）かは紅葉の幣をたむくらんしらすやあらし神無月とは

淋しさをいかに忍はむ神無月かせにしくれてこのはふる頃
紅にいはなみたかしみなの川おなしたかねに紅葉散らし
片岡のはゝそのこのはちりはてゝ庭に音する山おろしの風
風さむみ日かけにもるゝ山したのくちはかうへに殘る朝霜
をゝさむしゆふしも結ふ淺茅生の枯葉のをのに嵐吹なり
山里のいはのかけちの霜くつれとはむといひし人も待れす
紫にかはりし花もしも置は又しらきくとうつろひにけり
またふらぬ雪けの空の雲をみてかねてこりをく山のした柴
したはよりかへぬみとりはほのみえて初雪薄き岡のへの松
のこりなくはらふも風の心にてたゆめはつもる松のしら雪
とにかくに冬はやまちそたえにけるこのはの後は積る白雪
今朝見れはあきさく花のあともなし雪そふるえの宮城野の萩
さえ／＼し雲はゝれぬる山のはの雪よりいつる有明の月
難波江やしほをふきこす浦風にかれはたになき芦の村立
難波潟ゆふしほみちてあまのすむいそやに近く鳴千鳥かな
さよちとりなくこゑさむし有明の月のてしほやみつの濱風
心あるあまそきくらん松しまやをしまのちとり月になく聲
冬もなをあさき淀みそこほりけるたきりて落るうち河の水
すはのうみや舟ちは絕てこの比はこほりの上を通ふかち人
山里のかけひの水はをとたえてこほりも夢も結ふころかな
なみ越るうちの河瀬のあしろきにいさよふ月の影の寒けさ
いかにせむあかてかたふく月影にしくれてむかふ峯の浮雲
ふしのねは又も有けり雪のうへに烟そなひくをのゝ炭かま

戀

あやしくも詠めかちなる夕へ哉わか心こそひところにもにね
枕たにしらぬ思をいかゝせんうちぬる程もあらは社あらめ
としをふるやとにしけれる忍草したはの露よ人めもらすな
かくはかり人めをつゝむ思ありとちらすな露の袖のあき風
人やきくけしきは色にみえねともしのふの山の松の秋風
あふ事は誰ゆへつゝむこひちとて思もしらす人のつれなき
あま衣ぬれそふ袖のうらみてもみるめ渚にもしほたれつゝ
あらくまのすむなる山のおくまても君たにあらは行て尋ん
ひろせ川袖つく計り尋れとあふせをしらぬみをいかにせん
いのらすよ稻荷の山の杉のはのつれなき色に人ならへとは
きえかへりまつ夕暮の空の雲空しきはてはうちしくれつゝ
待わひぬたのめてもこぬ僞はたかならはしの夕暮の空
たのめつゝくらせるよひの更ゆくをかこち顏なる袖の露けさ
たのめつゝこぬ僞をまつのとのさゝていくよか夜を明す覽
われのみやうきみかりのゝ楢柴の一夜もなれぬ人を戀つゝ
知せはやあふせもしらぬかたふちのやかても深き戀の心を
あふせなきわか戀かはをゆく水のふかきよとみに袖や朽南
あはてのみたゝ徒らに戀しなはなにゝかへつる命とかせん
我戀はあふを限と思ふみの日をふるまゝによはりぬる哉
一夜とてあたにや思ふさゝたけの此よはかりの契りならしを
逢事はたまさかやまの谷かくれした行水のこかくれてのみ
あかさりしけさの名殘を身にそへて又ねの床も起うかり鳧
別れちをなかめし月の有明はつらきなからのかたみ成けり
なれし夜はならへし床の枕にもぬるよなけれはうとく成つゝ
わたりけむあふせもみえすあすか川きのふに變る人の心に
我ならは今夜の月にさそはれて思はぬ中の人も問なむ
たつね行わかしるへせよ夜半の月なれにし袖の露のおも影

風ふけはたゝよふ雲のなか空にうきて思ひの消やはてなん
なかめやるそなたの雲をたよりにて袖にしくるゝ我泪かな
烟たつ思ひは誰もするかなる富士の高根をよそにやはみる
烟たつむろのやしまは遠けれとくゆる思ひのかよふころ哉
もしほやく難波おとめかあしのやのひまなくくゆる下煙哉
我袖につれなき浪はかけなから月日そこゆる末の松山
伊勢嶋やしほひのかたによる浪のいや遠さかる中そつれなき
時雨にはつれなき山のまつたにもさそふ風にはなを靡き皃
ひとよとてかりねのゝへのさゝ枕むすひし露の契り忘るな
こひしとも誰にいひてか慰まんおなし心の人もなきよに
つれもなき人を必すこひよとは心よいかにたれかをしへし
いとせめて物思ふ時のふてすさみ只かく事は戀しとそいふ
よしさらは心のまゝに恨みてんつらきを人の思しるやと
さすか父（ナヲ）心やかよふつれもなき人も夢ちにあひみつる（フサカノヤマ）哉
いかにせむ花に心そ移りぬるみやまかくれの朽木なるみも
しけかりしいとのは山のあをつゝら思ひ絶ては來人もなし
あはてのみ年ふる里の軒の草かれね忘るゝことのはもうし
みをしれはうちみんとしも思はぬに心にもあらす濡る袖哉
しらせはや人をうらみの戀衣なみた重ねて獨ぬるよを
まれにてもあひ見はとこそ思しにたえぬは人の恨なりけり
ふえ竹のひとよのふしのうきねのみなく／＼人を恨みつる哉
あらいそにうち捨らるゝ忘かひ忘す人を恨みつる哉

雜

別路に厭なれたるつらさにゝさならぬよはの鳥の音もうし
はる／＼と都をよそにへたつなりこえ行山のあとのしら雲
しからきのとやまに深き夕煙よにたつ人のすみかならしを
あまのはらふりさけみれは東路やふしの烟に秋風そ吹
ふしのねはいかなる神の誓ひにてつれなき雪の山と成けん
夕されはしほやみつらむ伊勢の海ひかたにむかふ沖つ白浪
おなしくは都へさそふ浪もかなみつのこしまは人ならす共
室のとやおひてふきまはす夕風に片ほにかけてよする蜑舟
まる／＼とよふね漕なるこゑすなりひらの港の有明の空
旅人のかちのゝはらに日はくれぬいつれの草に枕むすはん
ゆきくれぬいさやとからん松風のこゑするかたや住吉の里
よをいとふみ山のいほのさひしさに又うかれぬる我心かな
かた山のそはのいしゐのさゝれ水淺ましきみはすむかひもなし
つゝらはふ山のこさかの道せはみ苦しき物をよを渡る身は
うかりけるみ山かくれのいはね松色もかはらて朽やはて南
うき事のなをみにそはゝいかゝせん吉野ゝ奧によを厭ふ共
よの中はかくこそ有けれ濁江の堀江の水のすみかたのみや
なにことか今はあらんと思へとも身の行末そさすか床しき
行末のあらまし事になくさみてはかなくすくす月日成けり
うき身にもなを行末そまたれける君かみかけを賴む計りに
長きよに迷ふうきみのしるへせよわしのみ山の有明の月
君か代はなからの濱にひろふとも盡ぬ眞砂のかすも限らし

已上百八十六首（朱者中書王御點〈今以｜示之〉朱者戶部侍書點也〈今以‖示之〉）

右愚詠。去正元二年之春。依二竹園之召一所二書進一三百首

之内也。雨方無點歌等除之畢。
正應五年五月日書之。
勅點十八首朱
永仁元年十二月十二日被返下之。
前參議藤原朝臣

隣女和歌集卷第二 自文永二年至同六年

春

歳内立春

めつらしき年にも有かな一とせに二たひ春の光見つれは

立春

いつくよりくる春なれはあまの戸のあくるもまたす霞初覽
あまの戸の明かたちかく鳴とりの聲のうちにや春はたつ覽
わかまちし春やきぬらんあまの戸のあくるもしるき鳥の聲哉
あら玉のとしたちかへる時なれやゆふつけ鳥も聲そ聞ゆる
あたらしき年の始と何かいはむけふは齡そふりまさりける
春の立けふたにいまたくれなくにやかてもふかき朝霞哉

正月二日あめのふり侍りしかは

あたらしき年はいくかもあられ共ふりぬる物はこのめ春雨

初春

春たちてけふみかのはら見渡はいつしかかすむ泉川かな
谷川にうちいつる波の遲けれは軒はの梅や春のはつ花

雪中子日

しら雪のふりかくしてし梅のはなけさ色見えて春はきに鳬
万代を君にゆつれと引松のはな咲まてにあは雪そ降

若菜

たか爲のわかななれはかかすかのゝ雪間を分て急きつむ覽
かつきゆる雪まもしろし白妙の袖をつらねて若なつむのは
袖ぬるゝのへの雪けの忘れ水いへちわすれてわかなつむ哉
わかな摘のへのゆふ風なをさえてかへる袂は雪にぬれつゝ

野遊

おもふとち梅さくのへに尋きて花見かてらの若なをそ摘

霞

春霞たちにけらしなしからきの外山の朝日影そくもれる
山風やさえすなりゆくころしもそ霞の衣たちかさねける
はる山の谷のとかけにわかおれは霞たなひきむもれさり鳬
入相のひゝく山邊をなかむいと〔れは脱歟〕ゝなくらのなにそかすめる
三輪の山なしへし杉はうつもれて霞そたてる春のしるしに
ふしの根のめつらしけなき煙かとみしそ霞のはしめ也ける
のとかなるたこのうらなみ春かけてたゝぬ日もなき朝霞哉
うとはまにぬきし乙女かあまつ袖面影たてる春霞かな
春されは霞のそこにうつもれてそのなはかりやうき嶋の松
春霞やへのしほちの波まより見えし小嶋もいつく成らん
見わたせはあしやのおきの夕なきに霞にうかふ蜑の釣舟
さたかなる夢にはをとるうつゝ哉かすむなにはの春の夕暮

あしやに侍しに住吉にまかりてよめる

すみよしの岸より見れはあしのやの我すむうらは霞成けり

うくひすのなかさりければ

としの内になきふるしてし鶯のはるてふなへに聲も聞えぬ

うくひすのうたの中に

鶯はいつれの梅にうつろひてなれにし花にをとつれもせぬ
春雨にぬれつゝそなく鶯のかさにぬふといふ梅はさけとも

夕暮はやまとやみえむ鶯の籬の竹にねくらしむなり

餘寒

春立てつのくみ渡るあしのやもなをよな／＼の風そ寒けき

春きても山風さむく猶さえて雪けなからにかすむ空哉

殘雪

たちさらぬ雲かとそ見る葛城の高まの山に殘る白雪

かつらきや山の霞はとたえして夕日うつろふ峯のしら雪

まかひつる霞も雪もいろ／＼にあらはれわたる朝ほらけ哉

侘人のすむかくれかの山里は春をしらせぬ雪のつれなさ

海のほとりの山に雪のゝこりて侍を見て

山端は猶白ゆきのふりそひて浪ちはかりそ霞そめぬる

正月はかりにものへまかり侍みちにて男山をみやりて

神さひて年たけにける男山かしらの雪はくろきすちなし

おなしとき道のほとりの竹をみ侍て

つもりけん雪のふかさは消はてゝのちさへしるき竹の下折

攝津國よりまかりのほりて

旅衣雪うちはらひわけしかと都は春のけしき成けり

春雪欲消

あすからは若なやつまむ春の日のうらゝに照すのへの白雪

春のうたの中に

いはそゝく山の雫のこゑすなり嶺の白雪解やしぬらむ

梅か枝にかゝれる雪の朝こほり花まちつけてきえは消なん

梅か枝に咲かとすれはかつちりて庭につもるや春のあは雪

霜かれのまた色かへぬ故郷に咲散はなや春のあは雪

いつしかとまたるゝ花の面影も散はものうき春のあはゆき

白雪のふりしく山か花ならは咲るさかさる枝はかくなむ

春來てもまた霜枯の櫻木に花のぬれきぬきするあは雪

さくら花咲ぬと見えし二月の空たのめして雪そ猶ふる

誰かけふ花とみさらむ二月の空もくもらて降れるあは雪

谷春水

鶯の谷の戸いつるやすらひにまつをとつるゝ雪のした水

こやの池を見やりてよめる

春風に汀の氷とけぬらしさゝ波よするこやの池水

燒野雉

やけのこる片山はたの村薄たのむ陰とや雉子なくらん

やけのこるかたのゝ原を分行はそてふる草にきゝす鳴也

梅

白雪のかゝれる枝の梅花かをとめてたに別れさりけり

吹風はいつくよりかは誘ふ覽のへには見えぬ梅のかそする

梅のはな香をふきかくる春風にさなから袖をまかせつる哉

見渡せは里は霞にうつもれてそこはかとなく梅かゝそする

春の夜の月はおほろにかすめ共さやかに匂ふ軒の梅かゝ

むは玉のやみこそあらめ月にさへ色もわかれぬ梅花かな

月夜よしむめも盛の色なれは誰とはなくてまたすしもあらす

梅の木のもとにて月を見侍て

月のもる梅のしつえに立よれは影も匂も身にうつりつゝ

梅の歌中に

梅かえにふる春雨の雫こそ花のちるかとあやまたれけれ

春雨をかたいとにしてよりかくるはなたの色の玉のを柳

みる人の心をふかくそむれはやから紅にむめはさくらむ

紅に匂はさりせは梅のはなけふふる雪にいかておらまし

梅のちるをみて
いとふへき風より先にかつちれはをのれのみうき軒の梅枝
いにしへのためしもきかす春風にかほれる雪そ袖に散ぬる
ちりぬとて何かは花をわきていはん春の日數も移ろひに鳧
梅のちりてのちよめる
むめの花ちりぬる後のこのもとは鶯さへそをとつれもせぬ
柳漸低
みとりこかふりわけ髪の朝みたれまたうちはへぬ青柳の糸
柳歌中に
さほ姫のかさしの玉か青柳のうちたれかみにかゝる白露
梅はちり櫻は遲きこのもとはなかめにかくる青柳の糸
ぬきとむる花はなけれと梅かえに亂てかゝる青柳の糸
河岸になひく柳のかけみれは底の玉もそ浪にみたるゝ
立こむる霞の袖のほころひに亂て見ゆる青柳の糸
佐保姫のたつや霞のうす衣はつるゝ糸か峯の青柳
春風はのとかに吹ぬあさ綠霞になひく青柳の糸
あさみとり霞のうちにかけろふのあるかなきかの青柳の糸
春雨のよにふることはくるしとや柳の糸のむすほゝるらん
水無瀨殿の柳を見侍て
みなせ川あれにしみやをきてみれは朽木の柳春めきにけり
路邊柳
わかことく人やおりけん道のへの一本柳えたそさひしき
春雨
春雨の降とも見えぬ夕暮に霞に落る軒の玉水
梅かゝの移ふ袖もうちしめりうたゝあるさまの春のよの雨
彌生まて咲をくれぬる櫻木の花をすゝむる春雨そふる
人とはぬむくらのやとに佗つゝもわか身よにふる春雨の頃
みかさ山よそなる袖は春雨のよにふりはてゝ濡ぬ日そなき
閑居春雨
梅もちり鶯さへも音たゆるやとはなかめのうちそさひしき
歸鴈
あまの原霞のうちにねをたえてたかさそふとか鴈のいぬ覽
春毎に歸るもつらし鴈金のなかしかよひち霞へたてよ
しのゝめの霞の衣立歸る袖の別れに鴈もなくなり
櫻さく山の尾上をかつ越て別れもゆくか春のかりかね
逢坂の鳥よりさきにかへる鴈をのれ鳴てや立別るらん
かへる鴈强顏みゆる有明の月をのこしてかすむ山もと
此里の秋にてしりぬ越路には初鴈金とはるはいふらん
かまくらへまかりくたらむと思ひたち侍頃鴈のこゑを聞て
故鄕に我もことしはかへる鴈あつま越ちの道はかはれと
鴈の聲をきゝてこしなる人をおもひいてゝ
かへる鴈秋風吹は別にしわかひとつらをさそひてもこよ
こしよりまうてきたる人のかへり侍しかは
鴈かねにあらぬ物から春たてはもとのこしちに歸行らん
遠所にまかりて心ならすひさしう侍て歸鴈をきゝて
故鄕にかりかへるなり此春は我もともにとおもひし物を
ふる鄕にいかなる鴈の歸るらん思はぬ方に我そ年ふる
春きても我は歸らぬなけきすと雲井の鴈よいもにつけこせ
ものへまかりて月をみ侍て
夕月夜竹のした道過行は葉分のかけそ袖にかすめる
春月

このまたに心つくしの山のはの霞よりもる夕月よかな

霜かれのまた色かへぬこのまにも猶晴かたき春のよの月

春霞おほつかなしや小倉山まつの梢にうつる月かけ

はるの夜の月はをくらの山なから川音きよき龜のおのたき

鐘の音は霞のそこにとたえして霜にかけそふ峯の月影

月を見て

昔わかおもひしまゝに津の國の難波の春の月をみる哉

あけぬるか霞のうちに影たえてあるかなきかの山端の月

山家春曙

明ぬるか柴のかこひのひま見えて霞にのこる山のはの月

花

咲やらぬはなまつ比は徒にゆきてはきぬる春のやま里

きのふたに咲ぬとみえし山櫻けさゝへいかに猶またるらむ

咲きかすかつとふへきを山さくら尋ぬる道にあふ人そなき

咲さかすよそにてもみむ春霞花のあたりをよきてたゝなむ

櫻をうへをきてものへまかり侍とて

植置しわかきの櫻咲そめはつけよわかせこみにかへりこむ

花歌中に

このまよりひれふる袖と見えつるは今朝咲そむる花の一枝

遲くとき櫻を宿にあまたうへて花の盛の日數をそみる

花の傍の木に鶯の鳴を

盛なる花に羽風をあてしとや我とよそなる鶯のこゑ

花の歌中に

花をみる春の日かけの夕かつらなかしと誰かゝけて思はむ

櫻木に枝ぬきみたる青柳の糸は花田の色にそ有ける

夜の程に花や咲らん朝朗かすみのうちにかゝるしら雲

たよりにもあらぬ野もせにゐる雲の行かたなきや櫻成らむ

色かよふ高ねの雲の僞をこりすも花と又なかめつる

まかへすは尋さらましたのめつゝまてはや雲を花とみつ覽

立かくす霞やなそとあしかきの吉野の花をみるよしもかな

人しれぬ花や咲らむ春霞たな引山にうくひすの鳴

櫻咲あしやの里の薄霞空さへ花の色にみゆらむ

霞しくあしやの里の花さかりうら山かけて人にみせはや

春雨の雫の露の朝しめり色なつかしきやま櫻かな

朝霞立まふ山の春雨に咲すさみたる嶺のさくら木

春雨にぬるともゆかむしめゆひし山の櫻はちりもこそすれ

此雨にさきたつ花はちりぬともをくれし枝は盛りなるらん

春雨にしほるゝ花を哀とや櫻かえたに鶯のなく

月きよみさよ更かたに立いてゝ花のこかけに立そやすらふ

花にほふ彌生の空のうす雲かすめる月にあくかれそゆく

月夜に花を尋侍て

山里の花みにゆくと月影に分入そてはさよふかき霜

よしの山の花おもしろきよし人の申侍を聞て

音にきく吉野の山の櫻花この春ゆきておもひてにみん

花歌中に

春毎にあくかれいてゝ見しかともかゝる所の花はなかりき

としをへて都の花もみしかとも此山里にゝる花そなき

今更に誰かさはむと思へとも猶たのまるゝはな盛哉

とはれぬもうき身をしれは恨みぬをかこつかたなる花盛哉

櫻花にほふ比たに人もこす散なん後に誰をまたまし

とはれぬも身にはうらみす大かたは花を尋ぬる人もなき哉

わか宿の花の思はんこともかくほかの櫻にめかれやはせん

限りなき思のまゝに手折とも人なとかめそ花のやまもと
かつみてもあかぬ心におりつれは花のため社色なかりけれ
さくら花待もおしむもくるしきにこりぬ心を哀とやみぬ
櫻花あすより後はしらねとも心のとかにけふはみるかな
よの中はさてもやうきと櫻花ちらぬ春にも逢みてし哉
ちるはおし匂ひはまさる數々に思ひおもはぬ花の下かせ
櫻花かつみなからに戀しきはちりなむ後を思ふなりけり
かつみつゝかねて戀しき名殘かな散ことやすき花と思へは

春禁中

百敷や大內山のさくら花昔かさしゝ春そわすれぬ

花下過友

故鄉の老木の櫻みにこすは昔の人にいかてあはまし

朝夕に奉公し侍しに勞によりてこもりて

ことしけきよにもつかへて此春は心のとかに花をみるかな

一兩年在京なから或所勞或は服にて出仕に及す侍て

いひしらぬ身のつらさ哉よそにたに雲井の櫻みてやゝみ南

あつまの故宅にひとりかへりすみ侍て

古も人はとひこすわきもことみてなくさみし花は咲つゝ

閑居花

さしこもる葎の門もあけぬへし人たのめなる花さかり哉

惜花

今よりは人もとひこし櫻花ちるは名殘のおしきのみかは

落花隨風

小倉山吹こす風のつてにこそあなたおもての花は見えけれ

風前花

けさよりは心つからも散花にうたて吹そふはるの山風
山たかみ雲井をわたる春風に亂るゝ花の行衞しらすも

落花

かねてたにあらまし事のうかりしはさは此風よ花散すめり
我からもうつろふ花の風吹はかことをかけてちる櫻かな
春雨に庭行水のさゝら浪まなくなかるゝ花のうたかた
ぬれ／＼も昨日みましを春雨のはるゝまつまに花そ散ぬる
春の色ははやく移りぬ吉野川岩きりとをる花の白波
芦のやの岡へのさくら風吹はをよはぬ波の花さへそちる
時ならぬみそれとそみる春雨にふりそはひぬるはなの白雪
庭の面にまなく降しくあは雪の消ぬ物から波に立らん
さくら花ちるこのもとに立寄は袖こそぬれね雪はふりつゝ
櫻咲梢の雲はかつ消てふりまさりゆく庭のしら雪

花のちるおり鴈のかへるをかける屛風の繪をみてよみ侍し

花のねに今かへるとや故鄉の雲ちにむかふ春の鴈金

花前無常

夢のよをあはれとみつゝなかむれはいやはかなにも散櫻哉
つねならぬ習ひもかなしさけはかつ散行花の哀れ世中

落花歌中に

世中のうき數々にちる花の歎をさへもそふる春哉

ものへまかるみちにて

なはしろのあせのなか道過行は日くれさひしく蛙鳴也

藤

うつろはぬ松にかよへる色とてや常盤のもりにかゝる藤波
さきかゝる梢の藤の色なから同しときはの松にやはあらぬ
松にのみ枝をつらぬる契もてなとかは藤のあたにうつろふ

池水に春の名殘はかけとめつみきはの藤の花のしからみ

春日社の御前の藤をみ侍て

かすか山藤のかたえの花さかて年ふることを神はしらすや

惜春

あはれてふ事をのこさて花をさへさそひていぬる春に有哉

常よりも日數くはゝる今年たにやすく過ぬる春にも有かな

三月盡

昨日たになけきしものを春の日のけふはかりなる入相の鐘

潤月ある春の末に郭公のなくを聞侍て

よのつねのう月に馴て時鳥數そふ春も又きなくらん

夏たにもめつらしと聞初聲を春よりもらす郭公哉

夏

首夏

咲あへぬ垣ねなれとも卯の花のなにおふ月ははや立にけり

卯月に鶯をきゝて

散のこる櫻とやみる卯の花のさける垣ねに鶯のなく

卯花

神まつる杜のゆふして色そへて咲まかへぬる野への卯の花

うの花のかきほの月よ影きよみやみもあやなき庭の通ひち

葵

祈るそよその神山のみつかきの久しきみよにあふひあれ共

賀茂祭日よみ侍し

よの常の年に葵の草ならはよそにみあれのかさしならしを

神まつり

たかさとに神まつるらん昨日けふ榊葉とりてかへる山人

ほとゝきすを待侍て

徒に花たちはなは散にけり山郭公待とせしまに

郭公歌中に

我そのゝあふちの花のちらぬまに山時鳥きつゝなかなん

郭公いつもかはらぬふることゝ思ひ捨ても猶そ待たるゝ

あしのやはうきふししけき里なれや山郭公ねをたえてこぬ

人の時鳥聞侍よし申侍れは

待わふる我より先に時鳥ねたくも人にきかれぬるかな

霍公歌中に

めつらしき初音なれとも人傳にきけはふりぬる時鳥かな

いさよひの月とともにも山のはをまたれて出る郭公かな

名殘をは心にとめて時鳥いつくの雲のよそにすくらむ

霍公さよふけかたの一聲はまとろまねともおとろかれけり

聞もせすきかぬにもあらぬ時鳥とをき雲路のさよの一聲

我そ先鳴はしめぬる郭公物おもふやとのさ夜の一こゑ

郭公さ月まつまの忍ひねを夜ふかくおきて獨聞かな

鳴ぬなりさよ更方の時鳥おなし寐覺に誰か聞らん

宵なから明ぬる月のほのかにもあかぬねに鳴郭公かな

有明の月まち出る高嶺よりをくれてすくる時鳥かな

我宿の花橘や匂ふらん窓ちかくなくほとゝきす哉

賀茂社にまうてゝ侍しとき郭公を聞侍て

神山のみねよりいてゝ時鳥たゝすのもりの方になくなり

はこねをとをり侍とて

箱根山雲のうへなる杉かえにあまた聲する時鳥かな

たこのうらにて

田子の浦のなみかたかけて富士のねの雲に鳴入時鳥かな

嵯峨にかへりまうてきて侍しに

かへりすむをくらの山の郭公こそかたらひし我を忘るな

夢後時鳥

あふとみてさめぬる夢のつれなさにかへて嬉しき時鳥かな

郭公歌中に

しての山こえてくるなる時鳥わか思ふ人の行衛かたらへ

何事をいかに歎きて郭公物思ふやとを鳴て過らむ

橘の花こそちらめほとゝきすなと言とひしねさへかれぬる

五月五日よめる

菖蒲草まとをにふける宿なれとこゑもりこぬ郭公かな

玉かくる五月のけふのなつ衣はなの袂にかへりぬるかな

芦のやのあしのやへふきふきそへて軒はひまなき菖蒲草哉

早苗

よそなからみるさへ苦し五月きており立田子の暇なの身や

五月雨

五月雨にはやなりにけり咲初し花橘になかめせしまに

けふいくか露も雫もる山の下草くつる五月雨の頃

おちまさる瀧の白糸をりはへてふる五月雨は日数へにけり

さゝ波やあれにし宮にうらさひていとゝ降ぬる五月雨の比

初瀬山ひはらもみえす五月雨の雲のそこなる入相のかね

蟬

五月雨の雲ゐる嶺のこのまよりほのかにもらす蟬の初聲

盧橘

ねやちかき花橘の匂ひきてわか袖の香のなをそたてぬる

思ひいてゝ誰忍へとはなけれ共我袖ふれん軒のたちはな

夏夕月

時鳥鳴一聲にあくるよをなをのこしても月そかくるゝ

夏月

鹽風の涼しき磯の松陰にまさこかたしき月をみるかな

照射

みなとえの芦のしけみを分わひて月のみふねもさはる比哉

狩人のいるのにたてる楢芝のなれていくよのともしつ覽

螢

夜はの月をよはぬ谷のこかくれに見ゆる光（光ミユルヤ）は螢なりけり（ナルラム）

さ夜更てあしやの里を見わたせは田面はるかに飛螢哉

やゝしけるさつきの池の萍のうきて思ひにとふ螢哉

むら雨の露けき花のゆふかほに光そへてもゆく螢かな

夏草

ふみわけてさらにやゆかむ玉ほこの道もなきまて茂る夏草

蚊遣火

夕顔の花咲かゝるあつまやのまやのあまりにたつる蚊遣火

夕立

夕立の空もとゝろになる神のこゑする方にむかふ雨雲

日はくれぬと思へは雲の小倉山嶺より過る夕立のあめ

松陰納涼

興津風涼しき磯の松かねに衣かたしき日なくらす哉

あふさかにて

逢坂の杉のこかけに駒とめて涼しくむすふはしりゐの水

山家晩涼

雨そゝくそともの眞柴風過て夏を忘るゝ山の夕影

晩夏

日くらしの鳴夕暮に吹風の音にそ秋はちかつきにける

六月祓

麻のはのゆふしてなかる此川の水上にたれみそきしつらん

戀せしと誓はぬ人もけふ侍にみたらし川にみそきをそする

みなつきのつこもりの夜讀侍し

夏秋も思ひさためぬさ夜なかに風吹わくる庭のおきはら

夏秋の行あふ空をかそふれはとしの半はこよひ成けり

さ夜なかとよはふけにけり夏はてゝ秋社今は立かはるらし

秋

立秋

久かたのあまの川浪あさ立ぬけさよりいかにしつ心なき

初秋

涙たにおき所なき我袖に又露そへて秋はきにけり

今よりの風の氣色を如何せむきのふけふたにまつそ悲しき

秋風

秋風のさむき夕は何事をおもふとなしに涙おちけり

吹過る夕の風やさそふらん露も涙もとまらさりけり

此夕村雨ふりてわか門のいな葉をわたる風のすゝしさ

荻の音に宵のうたゝね夢さめて涙こほるゝ袖の秋風

秋かせの身にしむからによの中の今さらなとか悲しかる覽

七夕

天河月のみふねはいてにけり七夕つめや今渡るらし

天河とわたる雲の秋の袖千代を一夜にかさねてしかな

七月七日雨のふり侍を

かきくもりけふ降雨は七夕の暮待わふる涙なるらし

同日人のもとへ申侍る

我戀はかたのゆくなる天河けふ待えても渡るせもなし

かちの葉を

天川あふせの舟のわたし守はやいそきとれけふのかちのは

八日朝人のもとより歸り侍てよめる

けさはわか身にしられても悲しきは七夕つめの別なりけり

故宮萩

露分ておのへの宮をきてみれはいまはのらなる秋萩の花

草花露

晴あかるきりの名殘に露落ておるそてぬるゝ秋萩の花

野にまかりて女郎花をゝりて

女郎花花に心のうつろはゝあやなくのへにけふや暮さん

女郎花おりてかへらは同しのにすむらん鹿や妻こひにせむ

ものへまかりて

山里にわか植置し女郎花あやなく散なかへりゆくまて

草花歌中

うすくこきち草の花のうつろへは花そかへりて露を染ける

染出すのへの錦の色々にかへりてうつる秋のしら露

秋の露たか手枕に結ふらんゐる野のすゝきほに出にけり

あしやにすみ侍しころほに出たる田をみて

浦近きまつをふきこすしほ風にたのもさへにそ波は立ける

虫

わか宿の荻吹すさむ夕風に忍ひあまれるむしの聲哉

暮行は荻ふきまさる秋風に聲うちそふる庭の松虫

月見つゝ物思ふ宿のあさちふになく松虫の待人はこす

蛬をのか涙か終夜こゑする草にきえかへるつゆ

蛬鳴のゝあさち色つきぬ泪の露やよさむ成らむ

あきをへはのへとやな覽虫の音もかつ〳〵しけき草の一村
色かはる萩のしたはの露さむみ獨や虫のいねかてに鳴
野も山も色付そむる秋風の身にさむきよは虫も鳴也

鹿

女郎花おほかるのへにたつ鹿のなにをあかすと妻をこふ覽
小男鹿のしからむのへの眞萩原花をはのこせ露はちるとも
我門のわさ田苅まて足曳の山たちいてぬさをしかの聲
山田もる苫屋にかこふならしはのなるゝを厭ふさほ鹿の聲

月

風そよく軒はの萩のほのかにも露にかけそふ秋のみか月
またいてぬ今宵の月のさやけさもかねてしらるゝ夕日影哉
空晴て山のは殘る夕霧に立はなれたる月のさやけさ
さをしかの妻とふ山の松の葉に月は移りて夜そ更にける
僞のなにこそ有けれ小倉山くもりなきよの月はさやけし
忘すよまたゆきて見む大井川玉ちるせゝにさえし月かけ
おもひきや年ふる里を住かへてことし都の月をみんとは

船にのりて讀侍し

入江より舟漕いてゝあしのやのうらの湊の月を見るかな

月前眺望

あしのやのうら路を行は住吉の松さへみゆる月のさやけさ

月歌中に

月のすむあしやのたつみ霧晴て夜さへみゆる住吉の松
月も猶すみよしとてやよとゝもに入江の水に影やとすらむ
松かえに月のしらゆふかけて猶神さひまさる住吉のうら

八月十五夜讀侍し

難波かた秋のもなかの玉かしはあらはにみゆる波のうへ哉
難波江やしほのさしくる波の上に宿る月さへ影そみちぬる

同夜にあかしにまかりて侍しにくもりて侍しかは

待えたるこよひの月はくもれ共明石の浦の名にそなくさむ

ふくるほとに晴て侍しかは

よひの間にくもらさりせは月影のかく計やは嬉しからまし
心ある人こそなけれ秋のよの月も名高き浦のとまりに
昔よりおもひし事はこれそこの今宵の月をあかしにてみる

船にのりて讀侍し

明石潟おきに漕いてゝ月みるを釣するあまの名をやたつ覽
明石かたきよき月夜にこき行は淡路の嶋に千鳥友よふ

いさり火を見て

くまもなき明石の浦の月影に光そへたるあまのいさりひ

曉かたにすまへこきかへり侍しに

いける身の思ひ出なれや明石より月に漕行須磨の浦浪

かへりて後月をみ侍て

月見れは先そ戀しきよとゝもになかめあかしの波の通ひち

九月十三夜入道大納言爲家卿の會に題をさくりて月前橋

あかてのみあくるもつらし葛城やくめちの橋の秋のよの月

月前海

みくまのゝうらよりをちの秋風に霧のよそなる月を見る哉

月前薄

さをしかのいなのゝおはな照月の旅寐のとこや露の手枕

月前葛

吹かへす眞葛か原の秋かせに月にうらみてしかも鳴なり

月前顯戀

せきかぬる涙の露にやとりきて人にしらるゝ袖の月かけ

月前逢戀

わくらはに逢とみるよの月たにもあかぬ涙にかきくらしつゝ

月の歌中に

老さなるうさをはしらて此秋も月みるよはそ身に積りぬる

わか袖に露そ置なる月見つゝ物思ふまに夜やふけぬらん

哀いかに人待宿にうらむらん秋風さむく月そふけ行

月影の更行まてに獨ゐてちゝに物思ふ袖の露哉

故鄕の軒のいたふきつまくちてしのふを分る月のさひしさ

ふるさとは軒もる月のかけのみそ昔の秋にかはらさりけり

うたゝねの袖ふきかへす秋風に夢路たかへて月をみる哉

更る迄詠めさりせは宵のまにくもりしまゝの月にやあらまし

門田なる鴫の羽音にねさめしてかたふく月に物思ふ哉

秋風に物おもひおれは濱松の梢をいつるいさよひの月

秋風に雲のたなひく山のはをいさよひのほる有明の月

浦さふる松の秋風さよふけて雲かくれゆく有明の月

明ぬるか夢もいく度きえかへりねさめの後もなかきよの月

駒迎

あつまより秋は都の雲井まてたなひきのほるきりはらの駒

秋歌中に

秋萩の花ちるまてに久堅の雲ゐのかりの音信もせぬ

萩もちりわさ田のをしねかり過ぬいつか雲ゐの鴈はき鳴ん

初鴈

秋風のさむく吹にし夕より門田のおもに鴈はきにけり

霧深きくもちやまよふ我門のわさ田に落る初鴈の聲

から衣のつまふく秋の夕風にうらめつらしき鴈はきにけり

霧たちて朝くもりする秋山の嶺飛こえて鴈は來にけり

野も山も色付ぬらし霧立てさむき朝けに鴈は來にけり

いつくよりけふゆき暮て穐のよの月の都に鴈はきぬらん

和琴を彈侍し時鴈のすき侍しかは

秋風に聲をまかへて引ことのことちにゝたる鴈のつらかな

鴫

山田もる秋のかりいほのいなむしろ鴫の羽音に夢も結はす

霧

程ちかくきたつ人の聲はしてそのあと見えぬ山の夕霧

山路霧

これやこのやみのうつゝのうつの山霧に分いる蔦のした道

さかにすみ侍しころ

あさといてに小倉の山をなかむれは霧立空のなに社有けれ

むこ山の霧を見て

浦風にとまやは晴て奥山の槇たつ嶺にのこる夕きり

穐歌中に

なへてよの野山の草木花も葉も秋の盛とみゆる色かな

秋されは物思ふ人のいかならん我袖たにもほすひまもなし

さひしさは山里からとおもひしに都の秋も涙なりけり

小倉山尾上吹こす秋風に松よりつたふ入相のかね

うらちまて秋の山下風さそひきぬのてらの鐘の入相の聲

宿ちかしいく田のもりのいく度もとはむとそ思ふ秋の限は

浪よする秋のしほ風よをさむみ入江のかたに千鳥鳴也

夕霧のはるゝとたえになかむれは入日にほへるあはち嶋山

なかつき

風さむみよを長月になりにけり今よりいかにね覺せられん

九日人のもとに申つかはし侍し
諸共にけふはつむへき白菊のはなれてよそに袖そ露けき
菊
おる人も老せぬ菊にをく露の玉のをなかきかさしとそみる
擣衣
都には人またたゝぬ秋風の音羽の里に衣うつなり
この里はひとりある人のやとるらしなへてより先うつ衣哉
遠村擣衣
ほのかにも衣うつなる聲す也たか山里のねさめなるらし
秋時雨
鴈かねのきこゆる空の夕時雨なみたなからやこのはそむ覽
紅葉
きのふけふ秋風さむく雨ふれは山のこのはや色かはるらん
この朝けはつ霜ふりてしかのたつ外山のはゝそ色付にけり
白露となにはたてともをくからに秋の草木の紅葉しぬらん
夕日さす雲のはたてのから錦立田の峯はもみちしにけり
嶺はるゝ霧の名殘に露落て月日色つく山のもみち葉
秋歌中に
もみち葉をさそふ嵐にねをたえて露の底なる庭の松むし
九月盡
長月もけふ紅のから錦もみちのかけは立もさられす
暮秋霜
尋ぬへきゆくゑもしらす草のはら霜に跡なく秋はいぬめり
同日あす京へ出侍らんとてさかの宿所にてよみ侍し
立かへり秋もろともにわかいなはこの山里そ人めかれなん

冬

初冬
神無月けさはことなるけしき哉きのふもふりし時雨なれ共
時雨
問人はかれぬる庭の冬草にをとつれかはるむらしくれかな
まさきちる峯のむら雲立まよひをとふりそふるゆふ時雨哉
旅宿時雨
かりねするさゝのまろやにもる時雨涙の外に又しほれとや
十月一日入道前大納言爲家卿家にて題をさくりて讀侍し歌の中に冬落葉
まかひつる高ねの雲は空はれて時雨をのこす山の紅葉は
冬曉
篠の葉は霜をかさねてそよく也みやまの月の有明の空
冬山
秋はつるかり田のとまや荒はてゝ心のまゝにもる時雨かな
冬夢
たえすゝる時雨の音にねさめして冬のよさへの夢そ短かき
落葉歌中
時雨たにひまなき物を神無月ふりそはりぬる山のもみちは
なにしおはゝ嵐の山の紅葉はや外より先にちりはしむらん
紅葉ちる梢の冬の風さひて庭にとまれる秋の色かな
霜
駒なめてあさふむ後のをかやはら枯はの霜に風さはく也
閑庭霰
庭の面はふるや霰のたまさかにふみ分てとふ跡たにもなし
霰歌中に

冴さゆる有明の月は有なから村雲みたれちる霰かな

野寒草

虫の音も花の色々かれはてゝみしにもあらぬのへの淋しさ

寒芦

風さゆる池の汀はつらゝゐて獨なみよるあしの村立

千鳥

浦風の吹上のまさこかたよりになくねみたるゝさ夜千鳥哉

浦風に月更行はあしのやの我すむかたにちとり鳴也

住吉の松の梢をこす波はいりえにかよふ千鳥なりけり

難波江やこほる霜夜の芦間より立ゐる浪は千とりなり〔けり脱歟〕

浦つたふ夕浪ちとり立迷ひやそ嶋かけて千鳥なくなり

明石かた鹽風さむく月冴て嶋かくれなくさよちとり哉

さほ川の汀の氷ふみならし妻よひまとふさよ千鳥かな

氷

大井川嵐の山のさむけれはふもとの汀先こほりけり

なるみかたを過侍しにひかたに氷のひまなく侍しかは

なるみかたしほひの道をあさ行は波の名殘に先氷ける

雪

此里もうら風さむし雲かゝるかつらき山は雪けなるらし

雲かゝる嶺の松風音さえてさむき夕にあは雪そふる

さえくらす時雨の雨やこほる覧かつみるまゝに雪に成ける

あまの戸は猶雲くらきしのゝめの山のはしろくつもる初雪

ふり積る雪のしたしはうちなひきさひしさまさる冬の山風

冬されはいつくも雪の白山をこしちにのみと思ひけるかな

たかき山に雪のしろく侍をとひ侍しにきそのたけと申侍しかは

雪白きかたやいつくとことゝへはきその山と人はいひ鳬

海邊雪

白雪のふりしく時はをしなへてなみまともなきあはち嶋山

冬月

月かけはふけぬともねし我袖にをけらん霜はうちはらひ南

冬のよの曉までに月見ると我かほるそてに霜はをきつゝ

廣澤の池の氷にかけさえてともかゝみともみゆる月かな

旅宿冬月

草枕霜をかたしく袖のうへにまたかけこほる月のさむけさ

冬曉月

霜こほる庭の冬草うちなひき有明の月に嵐ふく也

月をみ侍しおりゆきのふるを見て

曇るとていとひもはてぬ雲間より月は有明に雪そかつちる

神樂

今も猶神代の風やかよふらんあつまのことの朝倉のこゑ

あめのした道ある時そおなしくは神代にかへせ朝倉のこゑ

神代より色もかはらて宮人のかさしにさせるわか櫻かな

歳暮雪

くれ行は年こそつもれけふまては我身のよそにふれる白雪

老後歳暮

流行としのとまりを尋れは老の浪よる我身なりけり

歳暮歌中に

定なき習ひとしれは老かよにをよはぬ身にもおしき年かな

二年といへは久しき名のみしてけふとあすとは程なかり鳬

戀

初戀

忍山わかまたしらぬ道なれはふみそむるよりくるしかり皃

忍山これよりおくのいかな覽ふみそむるよりかつ迷ひゆく

見戀

忍山たかしるへよりふみそめて我身ひとつに道迷ふ覽

あさりするあまならぬ身のみるめゆへ朝夕袖に波をかく覽

風吹はあしやの波にうく草のなをたに人のなをたえねとや

忍戀

常盤山色こそ見えね下草のしたはの露はかはくまもなし

下荫のわかたくひこそなかりけれ忍ふのうらも烟立なり

冬河のこほりをくゝる岩波の下むせふとも人はしらしな

逢見ての後は立名も惜からすまたき色にはいてしとそ思

契戀

忍ひつゝ年のへぬれは我なから心つよしと身を思ふかな

波こえむ末をはしらすすゑの松かはらぬ色と頼め置かな

待戀

たのめつゝこぬ人よりも僞にこりすまたるゝ我そつれなさ

ぬれつゝも雨にさはらす今夜こは思ひ皃とは身をも頼まん

月よゝし秋風さむし今夜たにとはすはゆかん人なとかめそ

月前顯戀

せきかぬる泪のつゆにやとりきて人にしらるゝ袖の月影

不逢戀

祈らすよ其かみ山の草のなの我身にうときかさしなれとは

戀路にはなとあふさかのなかる覽人めは關のとさしなれ共

うき身にはそをたに後の思ひてになきな計りの逢事もかな

臥無實戀

あひみてもあはぬなけきの戀衣かさねても猶なにか隔つる

逢戀

今夜たに泪はかはけわか袖のうらめつらしき月日わすれて

初夜逢戀

ふけぬまにやかてさめぬるよひの夢あふと計もみやは定むる

月前逢戀

わくらはに逢とみるよの月たにもあかぬ涙にかき暮しつゝ

後朝戀

思ひをく心はかけとそひぬるをいかて我みのなかへたつ覽

夢ならはけさのつらさはなからまし闇の現そかき暮しつゝ

忍歸戀

鳥をたにまたてそ　る人しれぬ我身一つにねをはなきつゝ

かへるさの袖はまきれし有明の月たちかくすみねの横雲

逢不逢戀

別れちにかこちし月のめくりきて今は形見と見るもはかなし

變戀

我袖にならひにけりな松山のまつとせしまにこゆる白波

片戀

我僞につらきむくひのたかはすは人も戀路にかくや迷はん

恨戀

亂つゝもにすむ虫のなをわすれかるてふあまの恨みつる哉

遠戀

東路のみちのおくよりたつ人の相坂とをき戀もするかな

名立戀

忍山しのひし道とふみまよひ思はぬ川のうき名とりぬる

思高戀

契あれは空なる月も思川ふかき水にはやとるとそきく

夢に人にあふと見て

夢にても現のうさにかはらすは思ひたえつゝ歎かさらまし

人のもとへ申つかはし侍し

夢とたに思ひ忘れぬはかなさの名殘よいかに現なるらん

色みえぬ心のみこそ悲しけれ思へと人のしるよしもなき

此比のうつゝは夢に劣りけりぬるよならてはあふ由もなし

人はいさ思ひもいてし我のみそつらきを慕ふためし成へき

たのみ侍る人にあはすして遠所へまかるとて申遣し侍る

別るてふ事はあひての後の名をまたきに歎く我そあやしき

ものへまかり侍る人の許に

逢事は波にたゝよふみるめたにはてはかれなん後の悲しさ

鎌倉へまかりて侍しかやかてかへりのほるへきよし思ひて侍しに心ならすひさしう侍て

けふ〳〵とまつらんいもか下紐のひきちかへてや年月をへん

唐衣つましなければ古鄕も旅のやとりにかはらさりけり

旅衣かたしきわふる我よりも獨ふすらんいとおしそ思ふ

草枕ひとりぬるよの露けさは都のとこもかはらさるらん

咲そむる若木の花のまとをにも君をみし日のなりまさる哉

よな〳〵の夢ちは絶すかよへともうつゝにこえぬ相坂の山

草枕旅のやとりにいもこふと我ぬる袖は露にぬれつゝ

ものへまかり侍る道より人の許へ申つかはし侍し

ときはなるまつらんとしも賴まねは思ふ物から急く旅ちは

ちりかたなる萩につけて人のもとへ申つかはし侍し

秋萩の花ならなくに人心うつろふ色のあたにみゆらん

もみちにつけて人の許へ申つかはし侍し

下染の心の色にくらへみよなを深からぬ峯のもみちは

薫物を人のもとへつかはすとて

あふ事のと絶かちなる歎よりくゆる思ひのたくひともみよ

煙たつ我下もえのたくひともいはゝあたにや思けたれん

寄日戀

天の原雲ゐのよそにわたる日のをよはぬかけをみしそ戀しき

寄月戀

涙あれは袖にも月はやとりけり戀しき影よなとかつれなき

忘なよ行末かねて終夜ちきりし月の有明のかけ

寄雨戀

難波人あしふくこやにふる雨の音にそたてぬ袖はぬれつゝ

つゝみかね人めにあまる我袖の涙まきるゝよひの急雨

我ゆへの涙とやみぬなきあかす袖よりくもるけさの五月雨

寄風戀

逢事は思ひたえぬる我宿にうたてあるなの松風の聲

寄雲戀

なかむれは空行雲のはてもなしあふを限りの戀ちならねと

戀しなは雲となりても君かすむあたりの山を立ははなれし

寄煙戀

芦のやの下たく煙ひまあらはもらしやそめん名にはたつ共

寄春戀

見てたにも慰みなまし春霞君かあたりをたちなへたてそ

寄夏戀

みるもうし我身もさそな夏虫の思ひにかへてすつる命は

寄秋戀

別にし人のかたみか秋風のふくにつけてはこひしかるらむ

つまこふる尾上の鹿の人ならはあひ語ひて音をはなかまし

寄冬戀

物おもふ袂は冬の外なれや涙の川のこほるよもなき

涙川こほらぬ波もこほれはや行方もなき思ひなるらん

寄朝戀

かへるさの袖よりおちし涙にや今朝の道芝いろかはりけん

寄夕戀

ともすれは猶たのまるゝ夕哉あひみし比の心ならひに

夕暮はたのみなれにし時とてや思ひたえてもかなしかる覽

寄夜戀

まとろまは忘るゝ程もあるへきを慕る夜毎に夢にみゆらん

思ひかねうちぬるさ夜のかねの音に夢はたえても覺ぬ比哉

寄山戀

此比は關守も居ぬあふさかをなとこえやらぬ身とは成らむ

露ふかき葉山しけ山分いれと我こひちにはあふ人もなし

寄瀧戀

み山木のこかくれおつる瀧つなみ心くたくと人はしらしな

寄野戀

宮城野のこのしたしけき露よりも袖の涙そ雨に增れる

寄杜戀

我袖の涙とも見よ色かはるしのたの森の千枝の夕露

寄石戀

谷陰のこけの下なる玉かしは人にしられぬとしそへにける

寄河戀

涙川袖のうき波立さはき人めつゝみもせきそわひぬる

大井川關のいはまをもる水のわきかへりてもむせふ比かな

瀧川の岩にくたくる白波の人めもしらす散なみたかな

寄池戀

いかにせむ池のみなくちいひ出はまたきにもれん名社惜けれ

故郷戀

もり出る袖の涙か故郷の軒のしのふにあまる夕つゆ

寄木戀

今も又かきなかさはや古のかきのもみちの水莖の跡

埋みては波こす磯のいはね松ぬれてとしふる袖のつれなさ

寄葵戀

祈るそよけふのかさしの草の名の葵を神のしるしと思はん

今そしる葵てふなをかことにてかけし思ひを神やうけゝん

寄夢戀

思ひねの夢さへおなしつれなさのうつゝにゝたる夜半の俤

あふと見てあくる別を歎くまにはかなく夢の覺にける哉

あふ事は夢より外のみちもかないかにねしより現なりけむ

寄鏡戀

戀しのふ人はうつゝにます鏡かけとなるみをみるそ悲しき

戀の歌中に

天の原霞をわたる月影のおほつかなくもよそにみるかな

何故につゝみそめけん我戀をしらはそ人の哀とも見ん

足引の山井の氷うちとけていはぬを友にくむ人もかな

住吉のまつとしきかは白波のほとをもをかす立かへりなん

行かへりあふさか山はこえぬれと我戀路には同しなそなき

諸ともに命そしらぬ別てもあらはあふよのなとかなからむ

袖の露ひるまもたえぬ逢事は又ねにかよふ夢ちなりけり
うつゝにも夢にも常にみし人のねてもさめてもあはぬ比哉
呉竹の一夜へたつる程たにも猶うきふしに物そ悲しき
思ひきや逢せのうらなき別れきてみるめをよそにかゝん物とは
通路の中こそたえめ君かすむあたりをさへに立別れぬる
仇なりし花の心を見てしよりうしろやすくもたのまれぬ哉
風あらきうら漕舟の侘つゝも思ふかたにはよらすやある覽
頼めつゝこさりしよはのつらさたに忘れ形見に戀しきやなそ
わくらはに逢みし夜はの名殘社此頃まてもねられさりけれ
さらに又あらたまりぬる歎哉なれし昔を春とおもへは
詠むれは物思ひまさる久かたの月には人のかけやそふらん
物おもふ涙や落てつもりけんなかむる月の袖にやとれる
秋はたゝ草葉はかりとみし物をことしは袖に露そこほるゝ
大かたの秋の露たによひ／＼はほしあへぬ袖にそふ涙哉
我はかりかなしき物か秋風はつれなき人のそてもふく覽
鴈鳴て秋風さむみ暮ゆけはわか戀まさるとふ人はなし
宮古にも夜さむに秋のなりゆかはつれなき人もさすか忘し
忘れすは思ひやらなん君こふとねなくにあかす夜はの秋風
鴈啼て吹風さむき秋の夜に獨かたしく袖をみせはや
わか爲にくる秋なれやしけかりしことのは山の色かはり行
鴈啼てはたれ霜ふりさむきよを君きまさすは明しかねつも
物思ふ袂や秋のまくすはらうらむるたひに露のこほるゝ
契りきな有明の空をかたみにて月みむことに思ひてよとは
まつ山とちきらぬ中の袖にたに我身こすなみ立さはきつゝ
あふ事のたえは思ひもたえはせて心ひとつになに殘るらん
あさましやみ果ぬ夢の名殘たにはかなくけさはうち靡きつゝ
形見たに身にはのこらて思ひいつる心のみこそ名殘也けれ

雜

てる日
あきらけき日影や空に照すらん道ある御代と祈る心は

庚申に終夜月をみ侍て
月故にまとろまぬとはなけれとも今夜かひある光とそみる

月夜に木のかけの庭にうつり侍たるを
むは玉の闇には見えすこのもとの闇きも月の影にそ有ける

雨晴て曉ふかく月み侍しに庭のこすゑの露風にちり侍けしき時雨にて侍しかは
風かよふ梢のつゆのむら時雨月はくもらぬ有明の空

ものへまかり侍道にて
月またはよもふけぬへし夕闇のたと／＼しきをしゐて待哉

桂里といふ題を探て
久堅の中なる里のちかけれはたのむ光に我身もらすな

伏見里
呉竹のふしみの里の宮柱万代ふともあれんものかは

遠村煙
行くらすあつまの野ちのをち方に煙のたてる宿やからまし

足柄山にて富士をみて
足柄のゆふこえくれは入日さすふしの高根に雲そかゝれる

あひつにて雨のふりしに
そま山のひはらかうれもみえぬまて雲たち渡り雨は降きぬ

たこのうらにてしほや見侍し時
たこの浦になひく煙をしるへにてあまのしほやに尋きに鳬

ふし河にてよみ侍し
ふし川のわたせを深み岩もとのはゝにかゝれは日そ暮にける
いかたをみて
ふし川をくたすいかたのみなれ棹早く都をみるよしもかな
うつのやまにて人にわかれて
別路の涙にくれてうつの山うつし心もなく〳〵そゆく
さやのなかやまにて故郷を思出て
嵐吹さやのなか山さやかにもわか故郷のおもほゆるかな
濱なのはしにて
ゆふ日さすはまなの橋をみ渡せは入海とをく鹽そみちくる
うちわたす濱名のはしの橋柱みらくすくなく垣にみちくる
のかみにて
雪白きいふきの山をめにかけてのかみをゆけは嵐さむけし
ふはの關やをかやにてふきてひさしを板にてし侍を
見て
をかやふくふはの關屋の板ひさし久しく成ぬ苔おひにけり
いぬかみにていさやかはをとひ侍しかともしらすと
人申侍しかは
いつくそと流をとへはいさや川いさとこたへて知人もなし
雪いたくふり侍しかはおいそのもりに立よりて
雪ふかきおいそのもりに立よれはしらぬ嵐も袖はらひけり
俄に雪のふるに鏡山をみて
したひこし日影もみえす鏡山ちりかひくもり雪のふれゝは
せたのはしにて
眞砂路のきよきかはらに駒とめてあふ人すくすせたの長橋
あふさかにて
東にていつかといひし相坂の關の杉村今そこえゆく
蟬丸かことをおもひいてゝ
いにしへの東のことの跡とへはわらやもみえぬ峯の松風
かの和琴のてをつたへて侍事を思ひ出して
行衞なくわらやの跡はなりぬれとひきし調は身にそ殘れる
はしり井にてしはしやすらひて
走井の水のうへなる二本のすきうき山はあふさかの關
京の舊宅に一日侍てやかて津の國へまかり侍らんと
て
よゝをへて殘る都の故郷も一夜はかりの宿りなりけり
井なのにて
駒なへてゐなのゝはらを朝ゆけは衣手さむし有馬山風
上のはらといふ所にて
駒留てうへのはらより見渡は難波のうらはたゝ麓哉
有馬山にて
有馬山雪けの道をこえ行は木々の雫に袖そぬれぬる
あしのやにこもりゐて侍しころ
東にておもひしよりも攝津國の難波わたりの春そ淋しき
眺れはそこはかとなく淋しきは芦やのおきの霞なりけり
夕暮にあしやのおきをなかむれは霞こきゆくあまの釣舟
夏かりのあしやのなたにみるめかるあまたの年を過しつる哉
故郷を別て程はへぬれとも猶かりねなるあしのやのさと
聞なれし夕にも似ぬ詠かなあしやの寺の入相のかね
ことを引ならしてあそひ侍に
芦のやのおかへの磯のことのねにかよひまされる浦の松風
思ひいてゝ今しのふとは故郷にとゝまる人のしらすや有覽
同しころ人のもとへ申つかはし侍し

めくりあはむ命しなくはこれそこのなかき別の門出成へき
海山の千里をこえて思ひやる心はかりはへたてさりけり
芦のやのなたのやかたのかり庵かりそめにたに問人もなし
みつからしほやきてよみ侍し
かりにこしあしやの里に年をへて鹽やくあまと成にける哉
雜歌中に
夕されは鹽みちくらしあし〔の脱歟〕やのふかひの橋にかゝる白波
きちの山麓にまかふ横雲に立まよひぬるおきつしら波
浦ちかくねて讀侍し
ね覺して岸うつ波の音きけは枕のしたに海は有けり
ものへまかる人のさはる事侍て一夜とまりけるにつかはし侍る
行やらぬけふの泊は限りなくしたふ心のせきと成らん
都より人のまうてきてほとなくかへりて後つかはし侍りし
都人心もとめぬ芦のやはたゝうきふしのなにこそ有けれ
かつらきやまをみやりて
春されは霞のいくへへたつらん雲ゐにうすきかつらきの山
住吉を見やりて
見渡せはあしやの奥の波まより一村かすむ住よしの松
あしのやのしほちの霞空はれてゆふひにみゆる住吉の松
同所にまかりて歸侍てよめる
よの中のうさはいつくもかはらねはたれ住吉の里といふ覽
みのおちかくやとり侍て
草枕かりねのやとにきこゆ也みのゝお山の曉のかね
あかしへまかり侍し道にて
磯つたひ石ふむ道のとをけれは駒行なつみ日もくれぬへし
すまの關屋のあとの松をみ侍て
これや此すまの關屋のまき柱のこる松さへ苔ふりにけり
あかしにて
あしのやの浦より浦に傳ひきて明石もすまもけふみつる哉
みぬ人にいかて語らむことのはゝ思ふ計もいはれさりけり
都へのほり侍し時なにはにて淡路嶋をかへり見て
みやこへと難波の海を漕行は跡にかすめる淡路嶋山
よとにとまりて千鳥を聞て
舟とむる淀のわたりのふかき夜に枕にちかく千鳥鳴也
あまのかはにて
久かたの七夕つめにあらぬみのあまの川せに舟出をそする
橋を見て
聞わたる天の川瀬のはしなれともみちもみえす鵲もなし
とはに思ひの外にとまりて
都人しらすまつらし契をく日數を過てとまる今夜を
ものへまかるとき木幡山にて
こはた山峯たちこえてみ渡せは伏見のをたにさなへとる也
又もこむうちの橋姫我をまてもみちの比の月のよな〱
同時道にて
分わふる道のゆくゑを宮古そと思はゝいかに急かれなまし
伊勢に侍てよみ侍し
我こえし山ちをみれは白雲のはるゝ時なきたかねなりけり
山をこゆとて
涙たにほしあへぬ袖をみ山ちのこの下露にぬれぬ日はなし
河のほとりをまかるとて

つはなさく川原のしはふ駒なめてあさふむ道に雲雀たつ也

鎌倉へまかり下侍とて會坂にて

行末を思ふそとをき宮こいてゝ先こえとむる會坂の山

かゝみの宿にて

玉くしけあけてそみつる鏡山よのまは月のくもりにしかは

いさやかはこの川と人の申侍しかは

此川といへはその名にたかひ鬼しらすいさやとはゝ答よ

ふはの關にて

關守のもる山よりも心をは都にのみそとゝめをきにし

やつはしにて

古にかはらすみにもかなしきははる〳〵きぬる道の八橋

濱名のはしにて

都おもふ心もしはしなくさむは濱なの橋の渡りなりけり

うつのやまにて

夢路にもうつの山へのうつゝにも都にかへるわかこゝろ哉

清見か關にてめをかりて

清みかた欄干の磯におふるめをかりに立よるあまと成みは

清見潟波の關守かけとめて夢ちをさへもゆるさゝりけり

みほのさきに煙のたち侍しかは

もしほやくあまやすむらんみほのさき松にかさねて立煙哉

京より人のをとつれして侍し返事に

心あらは我をな問そ都人いとゝそなたのわすれかたきに

かへりのほり侍し時ふしの山を見て

富士のねの煙はたえて年ふるにきえせぬ物は雪にそ有ける

詠めつゝけふはくらさむふしのねのゆき過かたき浮嶋の原

濱名のはしにて宿とり侍し

松かけに駒引とめて海こしにむかひのさとの宿をとふ哉

月あかく侍しかは舟にのり侍てきみともおほくおそひ侍しに

東路のおもひいてなれや終夜月にさほさす入海の舟

しりしらすあふ人毎に鳴海潟しほひの道をとひ〳〵そゆく

しほのひるほとを待侍し時

鳴海潟しほひをまつと山陰におりしあひたにこの日暮しつ

羇旅歌中に

みやこ思わか涙よりぬれ初て袖にあまれるあかつきの露

露しけき非なのゝはらのきゝ枕ひとよなれ共ふしそ侘ぬる

故郷に立かへるへき我爲は都もたひのやとりなりけり

もゝしき

百しきの近き守りの數なからいかに雲井のよそになるみそ

庭

草ふかみうつもれはつる我宿の庭のをしへの道や絶なむ

庭松

誰か又聞もとかめむ跡たえてすむ山里の軒の松かせ

山家

かりそめと思ひしかとも小倉山松もとしふるともと成けり

山里はのきはに立る松をのみとしふる友とたのみけるかな

わくらはに都にすまふ時たにも猶山里をはなれさりけり

都をはかけはなれつゝ山かつらはふき數多の年そへにける

跡たえて我よへぬへき山里にすみうきほとの峯の松かせ

山ふかき庵にまかりて炭やくをみ侍て

おもひきやまきのと山の谷の戸に煙をたてゝ炭やかんとは

閑居

暇なくつかへし物を山里にあはれのとけく年をふるかな

芦のやのなたのかりやのかやすたれ隙ある身とそ今は成ぬる

無主草菴をみて

世をすてゝすみこし山のいほりをも心とまると猶や出けむ

玉

玉ひろふかたをしらねはわかの浦や昔のあまの跡や絶なん

鏡

増鏡そこなるかけのありかほにみゆる物からなきよ成けり

箏

夕されは物思ふやとの琴のねになけきくはゝる松の秋風

あまの川といふ箏を人につかはすとて

七夕の契りたになきあまの川雲井のよその形見ともなれ

鐘

驚かすうき世の中のかねの音にたれもね覺て哀とそきく

燈

呉竹のよなかきとこにね覺して又かゝけつる窓の灯

物名てうし

よひ〳〵に通ひしなかの道絶てうしとも人を恨つるかな

山鳥

山鳥のおろのはつをの思にもおもはすなから隔そめてき

かめ

濁なき御代のためしはかはかめのをにうかひにし水莖の跡

懐舊

昔まてとをくはいはし過ぬれは昨日の事もこひしかりけり

戀しくはまたもあひなん思いつる我心こそ昔ともなれ

行水に何かたとへん思ひいつるたひに昔はたちかへりけり

夢

なに事も昔なからにみる夢のさむるそかはるうきに成ける

常ならぬうつ蝉のよをみる夢の覺て思ひそいさゝはかなき

やまひ大事に侍し時

無〔き〕ひとの跡をもしはしとふ許露の命の消すもあらなん

草枕たゝかり初と思ひしはやかてもなかき別なりけり

別ちをなけく心のあまりにはとはぬ人さへうらめしき哉

なけきの中にとかくわつらはしき事侍しかは

別てもあふさきるさにくるしきは浮世を過る道にそ有ける

五月五日よみ侍し

墨染の袖の涙の白露をさ月の玉と人やみるらむ

すみそめの衣ならすは菖蒲草けふ我袖にねはかけなまし

藤衣やつるゝとしの袂にはあやめにあらぬねそかゝりける

なき人の鏡をみて

ある程そ鏡はうつすなき人の面影見るは心なりけり

いろぬき侍し日よみ侍し

なき人のかたみの色の衣たにはてはかへぬる今そかなしき

亡父か墓所へまかりて

分いりて昔をこふるこのもとに面影あらぬ月そもりくる

無常歌中に

吉野川よしや世中うかふあはの消るまつまの程もはかなし

墨染のふちの衣をきてしより人の哀も身にそ知るゝ

なけきのころさかに籠るてよめる

小倉山麓の里にこもりゐて浮世のさかと歎く比哉

目をかさねふる五月雨の露よりも猶ひまなきは涙なりけり

雅經卿らへをきて侍かゝりの櫻を

らへ置し人の形見と尋ねきてみれははかなく散櫻かな

したしく侍女の身まかりて後そこに侍人のもとへたちはなの盛につかはし侍し

しのふらむ昔の袖のゆかりとも花たち花のまとをとへかし

述懐

おもふ事人にはいはてあまのはらふりさけみつゝ歎く比哉

いかはかりあはれ成らん世中はいとひてみはや秋のよの月

跡たゆるみ山の庵に獨ゐて秋の有明の月をみてしか

露たにもやとかるかやはある物をなとか我身の置所なき

秋はいぬ袖は時雨のひまもなし哀みかさの山のはもかな

徒にわか身ふりゆく時雨ゆへみかさの山のかけをまつかな

よをすてゝいらむ山路は近けれとなとか心のとをさかる覽

うき事のきこえぬ山もあるなるを思ひはいらて猶歎く哉

すみわひぬ山にても猶かなしきは所もわかぬ浮世なりけり

世中は所もわかぬうさなれや野にも山にも歎きのみ有

難波江や底の玉もにすむゝしのたゝわれからとよをは恨す

和歌の浦や磯隠れなるあしたつの鳴音もけふそ人に知るゝ

朝夕にしほくむあまのぬれ衣いとひかたきは浮世なりけり

みなといりの芦分舟にあらぬ身の障り勝なるよにもふる哉

よを侘てすむかくれかの芦のやも猶憂ふしのやむ時もなし

今はわれむくらの宿に門さしてなしと答てあるへき物を

思ふより心はまたもなき物を厭はむとてもなをそよにふる

一すちにうしとはいはしすき行はつらきも果のなきよ也鳬

思ひとけは惜からぬ身の惜かないかにならへる心なるらん

よの中を捨ぬをうしといひなから心よはくも猶すくす哉

捨からぬ我身をしれはよの常の思ひなれにし心なりけり

はかなくもしなは烟とならん身をいける程とて何惜むらん

世中を厭はむといふことくさのあらましにのみ成やはて南

朝夕は我とわか身をいさめてもそむかれぬよの果そ悲しき

二條舊跡の柳をみ侍て

故郷の朽木の柳いにしへのなこりは我もあるかひそなき

亡父か日記をみ侍ついてに本望の不達侍し事を思ひいたして讀侍し

花さかてかれにし藤の末なれは何をまつとか頼みかくへき

神祇

ゆふかけて祈るみむろの榊葉のかはらぬ色や君かよろつ代

隣女和歌集卷第三 自文永七年 至同八年

春

立春

きのふけふ都に春をさきたてゝまたとしこえぬあふ坂の山

逢坂の夕つけとりのなく聲やけさたつ春のはしめなるらん

春の來るいはとの關のあくるたにゆふつけ鳥の聲をまち鳬

山里の庭のかよひちあともなし雪のいつくに春のきぬらん

あとたえて雪にこもりし山里もありとやこゝに春の來ぬ覽

將軍從三位左中將になり給ひて正月一日

三笠山みもとの松の若みとり千代にさかえん春そ來にける

同日雪降侍しに出仕し侍とて

春の來る庭のしら雪ふみわけて道ある御代に出つかへつゝ

十二月つこもりころに京よりまかり下り侍りて元日に

みやこをは霞へたてゝふる里に年とゝもにも立歸かな

山早春

立そむる淺間のたけのあさ霞春來にけりとみやはとかめぬ

初　春

曉のかねのひゝきととりのねといつれか春のはしめなる覽

むつき立今ははるへと鶯のきなくかきほの雪のむらきえ

春夕月

めつらしき春の光と見ゆるかなけふみか月の雲間もるかけ

春たちてけふみか月のほのかにも霞そめぬる峯のまつ原

處々子日

野へ毎にけふひく松の萬代をあまたかそへて君そみるへき

餘　寒

鶯のたえて聲せぬさとなくは雪のうちとや春をまたまし

冬さむみ雲のいつくに殘りてか春たつ空にまた雪けなる

うつもれし軒端はかりはあらはれてなを雪さむき峯の松風

谷川にうち出し波のたちかへりなをよな〳〵はこほる比哉

霞

あけはつる鐘の響に山の端のなを夜ふかきや霞なるらむ

たよりにもあらぬ烟のおほ空になひきそむるや霞なるらん

此春はをくらの山のゆふ霞おほつかなくもへたてつるかな

かさしおるかたやいつくそ三輪の山ひはらかすめる春の曙

雪中霞

よしの山峯のしら雪なをさえてふる里はかり霞むそらかな

たえ〳〵に峯の霞やたちぬらんまた解そめぬ雪のむらきえ

里近きふもとは雪や消ぬらむ峯を殘してたつ霞かな

深山霞

淋しさはまた雪消ぬおく山のまきのこすゑの霞なりけり

遠山霞

あしひきのとを山かつら春かけてやゝ長き日にかすむ空哉

河邊霞

あさみとり霞も深したかせさす淀のわたりの春のあけほの

海邊霞

すまのあまのしほやき衣春たちてまとをに霞むあはち嶋山

淸見かた春の夕くれみわたせは波にたてる三穗の松はら

あまた舟今こそよそにへたてつれ霞のをちのみくまのゝ浦

伊勢のあまのすむなる里の夕烟しるへをそへてたつ霞かな

わすれすよなにはの春の夕霞そこはかとなき浦のをちかた

鶯未鳴

梅のはなさきちるをかは近けれとまた聲聞ぬ春のうくひす

雪中鶯

鶯のこほる涙やおちつらむこつとふ枝の春のあはゆき

夕　鶯

夕暮は山とやみえん鶯のまかきのたけにねくらしむなり

鶯のをのかは風もなをさえてくるゝ籬にあはゆきそ降

竹間鶯

軒端なる竹のさえたにこつたひて千代をならせる鶯のこゑ

閑居鶯

八重葎さしこもりにしふる里はよを鶯のねをのみそなく

鶯歌中に

朝霞たちにし日より鶯のたえす聲きく春の山さと

梅のはなありとやこそやならひけん雪のかきねに鶯のなく
しら雪の降てつもれる谷かけにひとり春しる鶯の聲
我やとにはつ音鳴はやとふ人の珍しといふ春のうくひす
我宿のはなのねくらによかれしていつれの梅に鶯のなく

春氷

野へははやなつみの川の山かけになを冬のこる薄氷かな
雪とけの軒のいと水くりかへしまた吹むすふ春の山風
春風にむすひしつらゝ解そめてたるみのみつはいは注く也

焼野

むさし野のおきの焼原たつきしのつま籠るへき草陰もなし

若菜

武藤野は只けふもやけいつしかとあすよりやかて若菜摘てん
たつねてもたれに問はまし草の原若菜摘へく雪やけぬらん
今ははや雪消ぬやとゝふひのゝ野守もけさそ若菜摘ける
冬枯の荻のふるえをふみしたきむれゐてのへの若菜摘なり
白妙の袖ふりはへていそのかみふるからをのゝ若菜摘なり
さは水のうち出る波に袖ぬれて氷のあとにねせりつむ也
我やとはいまはの山し近けれはきのふもけふも若菜つむ也
山里は花まつほとのなくさめに垣ねの若菜摘ぬ日はなし

題をさくりて歌よみ侍しなかに白馬

もゝしきやおほうち山の朝霞棚引わたる春のあをむま

残雪

まきもくのひはらの雪もきえなくにこまつ霞て明るしのゝめ
うちわたすをちかた人の袖さえてまた雪しろきおきの焼原

つほみたる梅の枝を人のをこせて侍しかは

折人の行末とをきいろみえてさかりまたしき春の梅かえ

月前梅

軒ちかくなかむる袖に梅花かこめの月のかけそうつろふ
ふりにけり春やむかしの梅花月はみしよにおもかはりせて
梅花月のかつらのなになれは色も光もかはらさるらん
にほひもてわかはやおらん春霞月にあまきる夜はの梅かえ
梅のはな色こそ見えね風吹は月の光のにほふなりけり
風さむみ霞まぬ月の都にも梅のにほひに春やしるらん

夜梅

梅ちかきよとこねなれは手枕のすきまの風も花のかそする

曉梅

春の夜のあかつきをきの袖のかに移りにけりな軒の梅かえ

行路梅

風かよふみちゆきふりの梅か香をおりける袖と人やとかめん
たまほこのゆくてのかきほ末なひき梅かゝをくる庭の春風

故郷梅

梅のはな咲ぬとつけは見にゆかん故郷人よものわすれすな

折梅

梅の花折てかさゝん我身には老とはいはすうさやかくるゝ

梅歌中に

鶯のこゐせぬ宿もむめのはなにほふにつけて春そしらるゝ
春風の鶯さそふ梅かゝに我さへあやなあくかれにけり
待人も来ぬものゆへに梅花匂ひを風のなにさそふらん
我袖に匂ひかうつせ梅のはな咲ちるをかの春の夕かせ
うくひすのこつたふ枝の梅花は風を寒み雪そ散ける

柳

をそくとく春しる色もあらはれぬこなたかなたの岸の青柳

つらゝゐしこのかは柳かけ見えてうち出る波に春風そ吹
ふる里の朽木の柳をのつから三代の春まて色そ残れる

行路柳

暮ぬとも行末近し青柳のかけふむ道を誰かいそかん

春雨

かき曇そらにはもえぬ陽炎のあるかなきかに春雨そふる

旅春雨

なみこえぬふるかはのへの春雨に緑はかりやふかくなる覧

春月

けふいくかみのしろ衣ほさてきぬひなのなかちの春雨の空
故郷のあれたる軒の板まより梅か丶なから月そもりくる

雨後春月

さらてたに都戀しき月影のをくらの山のなにそ霞める

海邊春月

晴やらぬゆふへの雨の名殘さへ霞に添て曇る月かけ
春のよの月をへたてゝ三熊野の浦よりをちに立霞かな

水上春月

霞たつなにはの春のよはの月おほろけならぬ哀れとそみし
春の夜のおほろの清水影みれはやとれる月の名に社有ける

春曉月

山のはの霞をわけてほの〳〵といさよひのほるあり明の月

野遊糸

青柳の風にみたるとみえつるは霞のひまの野へのいとゆふ

待花

待わふるおもかけみせてよしの山花にさきたつ峯の白雲
わすれては問はすと人をおもふかな花まつ里の峯のしら雲
鶯のはつね待えしゆふへより花をおそしといはぬ日もなし
とふ人のなきにつけては山里の花をおそしとうらみつる哉

人のもとへ申つかはし侍し

咲そむるはつ花櫻なへてよの人にふるさぬ色をみせはや
誰ゆへに待れし花そ山櫻咲ぬときかはとふ人もかな

花歌中に

きのふまて春を遲しとまつことのけさこそ人に移りぬる哉
誰里につけはやらまし我宿のはつはな櫻咲そめぬとも
きのふけふ誰かまちえたる花ならん遠き山へにかゝる白雲
あけわたる峯の霞はとたえして咲あらはるゝ山さくらかな
花盛いくかもあらしと思ふよりよるも安くはねられさり鳬
あしの家の我すむ里にうへ置し花も今ころ盛りなるらん
人しれぬ花や咲らむみわの山霞のうちの峯のしら雲
櫻花いま盛なり筑波ねのこのもかのもにかゝるしら雲
きのふけふまなくときなくしら雲の龍田の山は花盛かも
吹をくる風こそにほへ山たかみ雲のあなたや櫻なるらん
こゝろあてに雲をさなから尋つる山のかひある花櫻かな
みよし野やなきたるあさのはる風に猶雲殘る山櫻かな
雲にのみまかひはてなは花櫻吉野の山のかひやなからん
來て見れは雲にまかひし僞をたゝすのもりは櫻なりけり
山櫻霞のいくへへたつらん色こそ見えねかはにほひつゝ
よし野山花の盛の朝霞ふる里かけてにほふはる風
ふく風ものとけきころときさらきやなかはにかゝる花盛哉
花かくす霞吹とく春風はいとひいとはぬおもひそひけり
風吹はこのもとことに行やらて花にくらせるしかの山こえ
吹風にうしろめたさに待えてもしつ心なき山さくらかな

たのめつゝこぬ人よりも山櫻匂ふさかりの風はうらめし
山櫻おれはかつちる袖のうへにそへてみたるゝ花のあさ露
をくら山霞のひまにかつきえて花にうつろふ峯の月影
みつならぬ花のかゝみは山櫻このまを出る峯の月かけ
此春は月と花とのあひにあひて物思ふ比のよるそかさなる
徒に我身ふりゆくなかめにも春のものとて花は忘れす
みわの山ひはらにましる櫻花春はかさしをおりやかへまし
山櫻わきてよきけん袖人の心のいろも花に見えつゝ
あかてこそけふもかへらめ志賀の里花の影みる山井の水
櫻花春もいろ／＼にうつろへはひとつ緑ののへとやは見む
やとからに問人もなき山里は花のなたてに身そなりぬへき
あくかれて花をやみましこの里に絶て櫻のなきよなりせは
いつ迄かあくかれはてんきのふといひ今日と暮せる花の下影
はなみてもまつそこひしき九重の都も今や盛りなるらん
春ことに雲ゐはるかにおもひやる都の花も我を忘れな
わするなよ馴しをくらの山櫻みやこの外に春はへぬとも
このころと思ふもかなしをくら山麓の花のこそのおもかけ

花のさかりに雪のふり侍しに

山櫻さくほともなく散と見ておしむ袂は雪にぬれつゝ

つきの日よみ侍し

ふれはかつきのふの雪はきえにけり名残を花の色に殘して

花遲

こそはゝや花みし頃を此春はなを雲寒〔空歟〕くあは雪そふる

花有遲速

櫻はな咲ちる山かきのふけふ所をかへてかゝるしらくも
をそくとき山の櫻の花ゆへにまつもおしむもしつ心なし

見所々花

移り行心を花にまかすれはいく山里の春をとふらん

ひさくら

霞はれ空ものとけき日櫻の花のかけにてけふはくらさん

縣の花さかりに侍るころ百日のまりはしめ侍るに人
人おほくまうて來て侍しかは

ゆく末はけふをやこひんもろ人の袖ふりはふる花の下かけ

源親行陽福寺のはなみるとて使をゝこせて侍りしに
日のいたはり侍りてえまからて申をくり侍りし

うき身にはさも社春のよそならめ花をたに見ぬ昨日けふ哉

返事　親行

老か身はのちの春ともたのまねは花にあひみぬ人も恨めし

落花

春の夜の月も曇らてふる雪はさき〔け歟〕は且ちる櫻なりけり
山風や峯の櫻をさそふらん野へ行袖に雪そみたるゝ
咲さかぬ花のほかなることすゑまてけふはあまねく散櫻かな
櫻散みねのしら雲いつきえて麓に波のたちかはるらん
山川の岸の櫻のかけみれは花のうへこす水のしらなみ
櫻ちる庭の池水うつもれて花より外の波もさはかす
落つもる庭の櫻に風ふけはもとのこすゑを越るしら波
のちもなを忘れかたみにしのへとやあかてわかるゝ山櫻哉

法印定清遲櫻さけるよしつけて侍しにさはる事あり
てをそくまかり侍りしかはをくり侍りし

定清

暮て行春をかきりと見る月にはやくもちれる遲櫻かな

返事

散はてゝ後はなにせん遅櫻はなの盛はをとつれもなし

三月三日

花のせに盃なかすみつくきのあとはいくよの春を經ぬらん

春田

をやまたの苗代水にかけ見えて峯の櫻そ風にみたるゝ

喚子鳥

たれもかもしる人にして呼子とり鳴や尾上の松かあらぬか

藤

花の咲春にあふこそかたからめ藤の末葉のかれもゆくかな

津花

ふる里の庭も籬もあともなしつ花ぬく野といつ成にけん

蛙

苗代の谷のかけ樋に水もりてしめゆふ小田に蛙鳴なり

題をさくりて春のうたよみ侍し中に

よしの川岸の山ふきうつろひてかはつ鳴せに春風そふく

山吹

春の色はうつりにけりなよし野河蛙なくせの山吹のはな

よし野河かはつなくせにかけみえて春もうつろふ岸の山吹

たつた河そこなる花のしからみや三室のきしの山吹のかけ

みるもうしやよひの月の有明に殘すくなき山ふきの花

影はかり移ると見えし谷川の波にちり敷きしの山吹

暮春

ちるはなは流むいはまもあるものを瀧津せ早くくるゝ花哉

三月盡

櫻たにいまは流れぬ山河のよとまて行や春の別れ路

ゆく春は我をもおしめ命こそ又あはんともさらに頼まね

夏

首夏

誰かまつころもほすらん久方のあまのかく山夏は來にけり

夏衣けさたちかへてはなそめの袖のわかれに春そなりぬる

更衣

これやこのあまの羽衣夏たちて袂そうすき雲の上人

花の色は袖に殘りしかたみたにけさはかへぬるしら重ね哉

餘花

郭公たつね入さの山かけにおもひのほかの花をみるかな

卯花

とふ人の袖かとみえて夕暮はものおもひまさる庭の卯花

川しまの磯こす波のかけなからたちかへらぬや咲るうの花

卯の花はやみちまよはぬひかりかな衣の浦の玉河のさと

うのはなの垣根のほかも白妙に光そへたる玉河の里

郭公

うつゝにもさもこそあらめ郭公夢地にさへも一こゑはなけ

我宿のはつ卯の花の月夜よしまたすもあらぬ郭公かな

人ならはおもひたゆへきあめもよになをたのまるゝ郭公哉

此里になきてすきぬる郭公誰かはつれと今はきくらん

夢中聞郭公

郭公はつ音きゝつさおとろけは思ひ寢に見る夢にそ有ける

聞後待郭公

郭公あかぬは人の心にてきゝてしもこそなをまたれけれ

郭公鳴橘

郭公こそのやとりのたちはなにこゑもかはらて今きなく也

卯月にものへまかり侍りしみちにて森の下にて月を

見侍りて
郭公きかすは過しゆふつくよこのまもりくる森の下みち
馬上郭公
郭公こゑきくほとは駒とめてしはしくさかふ森の下かけ
雨後郭公
むら雨のはれ行峯の雲間よりこゑもり出る郭公哉
郭公歌中に
郭公よそには過し卯の花のまかきはやまとくれはみえけん
ほとゝきすふたむら山を夕こえてなるみのかたの月に鳴也
ほとゝきす雲のいつくにすきぬ覧また宵の間の月を殘して
郭公まつ宵過てありあけの月のほのかに一こゑそなく
ふたこゑとなをもかたらへ郭公寢覺ぬ人にあけはかたらん
しきたへのちり拂ふまて郭公鳴やさ月のよはあけにけり
葵
かみ山におふるあふひの二葉よりかけし心は今もかはらす
菖蒲
ひく人もなきみこもりの菖蒲草よに沈みぬるね社なかるれ
同題を五十首よみ侍し中に朝菖蒲
あさといての軒の菖蒲に風過てかほれる露そ袖にかゝれる
寄菖蒲蓬
枝かはす契りの末やよし經てもあやめ蓬とむすほゝるらん
寄同橘
軒近き花橘のあやめ草たかひに袖のかにそしみぬる
寄同螢
おなしえの契りしられて菖蒲草軒〔は脱歟〕にすたく夏むしのかけ
寄同枕
まくらとて結ふはかりの菖蒲草あやめもしらす明る夢かな
寄同笛
笛たけのねやのまくらの菖蒲草ひとよのふしと誰結ふらん
寄同船
河船のよとのにおふるあやめ草引手のなはに露と亂るゝ
寄同神樂
我袖のあやめの草のねにそへて引結ひぬるこも枕かな
早苗多
里毎に早苗とるなりあまさかるひなのなかちにさ月きぬらし
夏草
露をかぬ夏野の草のひとゝほり是やゆきゝのふるのなか路
夏草埋水
なつ草のもとの心をくみゝつ〔す歟〕は野中の清水誰かしらまし
照射
かつきゆる峯のほくしのかけなからほのめき渡る横雲の空
ふけ行はしかや深山に歸るらんおのへのともし遠さかる也
山五月雨
夏衣ほさてやくちん五月雨の晴ぬ雲井のあまのかくやま
この頃もきえんものかはふしのねの雪より下の五月雨の雲
河五月雨
ふる里のあすかをゆかぬ河水も瀬は淵に成五月雨のころ
みなの河みつまさるらし筑波根の峯にはれせぬ五月雨の雲
野徑五月雨
五月雨の野へ行人の三笠山なにもかくれすぬるゝ袖かな
田家五月雨
早苗とる田面のいほのあしすたれひま社なけれ五月雨の雲

五月雨歌中に

かち人の行あふ坂も五月雨にわたれはぬるゝ水増るなり

五月雨は一よのほとにかはしまのさゝこす波の音まさる也

涙さへぬれそふ袖はほしわひぬものおもふ宿の五月雨の頃

五月つゝきて侍りしころ法印定清か許よりやまさと
にふる五月雨よ道たえてとはねはとてやとはれさる
らんと申て侍りし返事に

とはぬをも我にてしりぬ此里の山路たえぬる五月雨の頃

夏月

夕立の雲はあとなく空はれて露の名残にやとる月影

あかてこそ影もきえぬれみしかよの天の戸わたる有明の月

橘

さ月きて今も花咲橘のなにおふさとはむかしかふらし

おりつれは我袖の香をたちはなの昔に誰かおもひなすらん

橘のにほふのきはゝあれはてゝ昔をしのふ人たにもなし

山路螢

行くらす山路はるかに影見せて里まて送れよはの夏虫

水邊螢

おほ井河ゐせきをこゆる篝火や鵜舟にあらぬ螢なるらん

海邊螢

夜とゝもに焼もすさめぬいさり火や波間にすたく螢なる覽

湊いりを舟の篝やすらはてあしまを行や螢なるらん

古庭螢

古はふみ見し庭のあとゝへはふるき軒端にすたく夏虫

螢歌中に

すむ人のおもひある夜とみせかほに葎の宿にとふ螢かな

しら玉か露かなにそとたとるまにきえかへりつゝとふ螢哉

鵜川

さつきやみ月なきころの桂川あらぬ影さすよはのかゝり火

いはゝしの契りならねとうかひ舟あくれは歸る淀の川なみ

水鷄

夏のよの心しりてやくるゝよりまきのとたゝく水鷄なる覽

山里のさよ更かたのまきの戸をたゝくや今はくひなゝる覽

蟬

世中はむなしき物とうつ蟬の身をなけきてや音をはなく覽

わすれては秋かと思ふひくらしの鳴山陰のならの下風

夕立

郭公まつとはなしに行やらて山路くらせる夕立のあめ

遠嶋夕立

夏の日のかけろふをちの峯つたひよそに過行夕立の雲

この浦は夕立はれて波間よりみゆる小しまに雲そかゝれる

夕顔

すきやらてをちかた人にこと問しみちのゆくての宿の夕顔

故宅夕顔

里はあれぬ誰いにしへに住む人のかたみはかなき花の夕顔

納涼

涼しさのて「す歟」つさみなれやよるもなを月にしほ汲すまの浦人

涼しさにえそすきやらぬはつせ川ふるかはのへの杉の下影

此頃はふく風を「な歟」のみ松かけのまきの板戸をさゝていくよそ

暮ぬとも人やりやらぬ道なれはあかて別れし山の井の水

山の井にかけさし出て結ふてのしつくも見ゆる月の涼しさ

行やらて濱名のはしの松かけにこま引とむる袖そすゝしき

六月祓

水上に誰かみそきをしかま川うみに流る〻（出たるイ）波のしらゆふ

秋

立秋

物おもふ涙の露のおちそめて我袖よりそ秋はしらる〻

旅宿立秋

秋やたつ露咲「吹歟」むすふ風の音に草の枕も夜寒になる

山家立秋

いつのまに淋しくなりぬまつのとを〻し明かたの秋の初風

初秋

朝またき秋たつ風に淺茅生のをの〻しはふに露そこほる〻

きのふたに音たて初し荻の葉に秋としらる〻風そ吹なる

波音も涼しくなりぬ夏草ののしまかさきの秋の初風

七夕

彦星のつま待秋の夕暮は雲のはたてにもの思ふらし

七夕の涙の露のくれなゐにもみちのはしはうつろひにけり

同庚申

七夕のまれなる中にあらねとも我さへことよひねてあかす覽

同別

天の川雲のしからみかけとめよぬれては歸る袖のわかれち

棚機のあまのは衣おさをあらみまとをにきても立歸りつ〻

天の川わかる〻船の渡もりなしとこたへてけさは歸すな

萩

さをしかの妻とふ野への小萩はら曉露に花咲にけり

妻こひの聲は聞ねとむさしのや鹿なく草の花咲にけり

さをしかのたちならすの〻朝露に花咲そむる萩の一えた

草花露深

さのみやは風もはらはむ宮城の〻このしたふかき萩の朝露

女郎花

女郎花おらては過し白露のあたのおほの〻名にはたつとも

夜はの露こ〻ろをくとも女郎花かりねの〻への手枕にせん

女郎花ならへ侍るとて

仇なりと名には立とも女郎花多かる野へとうへやをかまし

薄

淋しさはほやの薄のそよとたに同しこ〻ろにいふ人もかな

わきもこか手枕の野の初をはないつしか露にむすはれに鳧

古庭薄

ふる里は庭もまかきも秋の野のおはなをわけて問人もなし

鶉鳴草花中

むさしのやおはなみたる〻秋風にそこはかとなく鶉なく也

苅萱

吹まよふ風をまつまの露にたにかつみたれぬるをかの苅萱

秋花を

色々の花もかきりはなかりけり行末とをきむさし野の原

蘭

ふる里にたれかへるらん春日野は錦とみゆるふち袴かな

荻風

秋來ては老のね覺にあらねともおき吹風によを殘す哉

風わたる荻のうは葉はよそなれとねさめの袖にか〻る露哉

馴ぬれとまたは夢路もたえぬへし間ちかく吹荻のうは風

山里は荻吹風のたよりにもそよともなとかいふ人のなき

秋夕

ゆふくれはさらでも悲し我宿の荻の葉よきて風はふかなん

日くらしを

淋しさは色こそみえね秋風の吹なる山の日くらしの聲

鴈

うすきりにつらを離るゝ鴈金ははなたのおびの中そたえ行

誰かための玉章なれはかりかねの我をはよそにへたて行覽

み吉野のたのむをすきていつかたによるさへ鴈の月に行覽

こしの秋都の春のいかなれはかりの心のすみうかるらん

暮山鹿

鳴鹿も雲のはたてに物やおもふゆふゐる山に聲そ聞ゆる

麓鹿

たえ／＼に鹿の音送るあらし山嵯峨野の庵のね覺にそきく

霧間鹿

さを鹿のつまをはよそに隔てゝや霧よりをちに音を盡す覽

鹿聲幽

さをしかのいる野の尾花ほのかにも我手枕にこゑかよふ也

鹿歌中に

みる人の折たにおしき秋萩の花ふみしたき鹿のなくらん

風さむきふしの裾野の鹿の音にぬるよすくなきたこの浦人

虫

草のはらたかたのめ置ゆふ露を涙にかりてまつむしのなく

松虫の聲する野への花すゝき誰とさためて人まねくらん

きり／＼す枕のしたに音つれて秋の夢ちはすゑもとほらす

露ふかき葎のやとのきり／＼す誰も思ひにねこそなかるれ

まとろまぬ壁の底なるきり／＼す浮世の夢はなれも悲しな

露なから小はきちる野の秋風に聲そ亂てむしそ鳴なる

あさちふはまた色みえぬ露霜にやかてかれ行虫のこゑ哉

色かはる萩の下葉の露さむみよな／＼むしの聲そかれゆく

露

武藏野はみきやいかにと人とはゝほさてそ袖の露をみせまし

眞葛原またたちかへり秋風のはらふあとよりむすふ白露

ふる里はむくらの露のたま／＼も月の外には影もとゝめす

秋歌中に

あけ暮の朝霧ふかしあまを舟同しとまりに漕や歸らん

夕月

淋しさのときはわかねと夕つくよ小倉の山の松の秋かせ

待月

武藏野は月のいさよふ山もなし何にさはりてなをまたる覽

曇りなき秋のならひのこよひとて月も暮行空やまつらん

出月

秋風を高根の雲にさきたてゝはれぬる後に出る月かけ

みるまゝにこすゑにとをく也にけり峯を別るゝ秋のよの月

月前草花

月みれはわかいねかてに成にけり萩の下葉の色はしられと

月影も移りにけりなをみなへしおほかるのへの露に任せて

月もなをあたにそみゆる女郎花おほかる野への露の宿りは

忘れすよ尾花か袖をかたしきて露にねし夜のむさしのゝ月

秋風に月よゝしとや花すゝきこてふに似たる袖のみゆらん

月前鴈

かりかねのつらをみたるゝ雲見れはいる山端の弓張の月

月前鹿

影さむく更行月にうらみても鳴ても鹿のつまやつれなき

月前松

住よしの松はいくよにふりぬともおなしえにすむ月や知覧

和歌の浦や磯への松のよゝをへてなれぬる月よ哀とをしれ

月前槲

ふけぬともあかてすきめや槲おふる清き河原の秋のよの月

月前櫛

此頃はつけのをくしもてにふれす月に心のあくかれしより

月前舟

夢にたにまたやみさらんうきねせし枕の下の波のうへの月

月前眺望

我心もろこしまてもかよふらしまつらか沖の月をなかめて

月前祝

積りては淵となるへき菊の露かつ／＼千代の月そやとれる

山月

たくひなき淋しさなれや獨みるみやまの月に秋風そ吹

こゝにたになくさみかたき月影を姥捨山にたれか見るらん

古のおもかけみえて松浦潟ひれふる山の木の間もる月

峯月

神もなを月見むとてやふしの根のけたぬおもひも煙たえ南

谷月

にしはるゝ谷のこかけのしはの庵入かたはかり月を見る哉

河月

隅田川名におふとりはあともなし月に都のことやとふへき

水上月

よし野河よしやいは浪はやくとも宿れる月の影しよとまは

瀧月

龜の尾のたきのしら玉君か代の千とせの數も月にみる哉

野月

花にあかて一夜わかれし武藏のゝ草の枕の月そわすれぬ

里月

おちたきつ河音きよく月さえてうちの里人ころもうつなり

水郷月

かつら河もみちやなみに流る覽やとる瀬はかり月そ曇れる

都月

月やあらぬおなし雲井と思へとも都のかけそわきて戀しき

忘れすよこその今宵は都にて小倉の山の月を見しかな

題をさくりて秋のうたよみ侍し中に

今年よりひなにいくとせなからへて都忘れす月をなかめん

關月

西にゆく月にたくへて逢坂の關のあなたを思ひこすかな

あふ坂や雲路を過る月をたにもるゝ水には影とゝめけり

海上月

志賀の浦や月の出しほはなけれ共波に宿れる影そみちぬる

海邊月

おきつ風吹あけの眞砂白妙にひかりかよへる秋の夜の月

浦つとふあかしのなみに影見れは月の旅ねも宿はさためし

わすれめや須磨の苫屋に一夜ねて波にしほれし袖の月かけ

二つなき月と聞しにわたの原うら／＼ことに影やとしけり

なかむれはわかかねぬともゝあり明の月にうら漕あまの釣舟

月影にやとも定すあくかれて八十嶋つとふ海士人の釣舟

影やとす月さへ岩にこゆるきの磯の波ふく秋のしほ風

波かくるいらこか崎の月影にたまもかりしくあまのつり舟

かくてやまは覺束なしや夕月夜ほのみの崎はあすもきてみん

旅泊月

由良の戸や明かた近き月にまた枕をわたる松風のこゑ

出やらて幾夜あかしのとまり舟思はぬかけに月は見せける

岸　月

あけかたによやなりぬらん住吉の岸にむかへる秋の月かけ

山家月

影ふけて獨なかむる山さとは月よゝしとも誰につけまし

契り置人たに問はぬ山里に都の月はしたひきにけり

月影を軒のかけひにせき入て水のまゝにもなかしてそみる

田家月

ひとり住いほとはいはし月もなをいなはの露に影やとし皃

月臨秋穗

ほに出るいなはの露の數みえてとはたのおもに月そさやけき

故鄉月

ふる里の軒のしのふをもりかねて袖にすくなき月のかけ哉

故宮月

ふけ行とみる人もなしたかまとの松のへの宮の秋のよの月

社頭月

いそのかみふるのやしろも今更に月にみかけるあけの玉垣

古寺月

はつ瀨山嵐を寒みいはのうへに旅ねをしつゝ月をみる哉

惜　月

いる月のさらぬ別れはいかゝせん山のこなたに雲隱れぬる

擣衣幽

さそひこす尾上の風に聞ゆなり山のあなたに衣うつこゑ

菊

白菊の花おるまにも我袖に千代のかすをく秋の夕露

待て暫し移ろふ菊の花かたみめたらふ色のあるよならねは

秋閑居

草はより人めそはやく枯にけるまたしもをかぬ淺ちふの宿

秋　雨

秋の雨のまとうつこゑに月影は曇る夜さへもねられさり皃

神な月またき時雨のかねてよりはれぬ山へをとふ人もかな

山姫の秋はしくれにかす袖の紅葉のにしき折は盡さし

雨後紅葉

染すてゝ時雨はいつち過にけん露を紅葉にかたみとゝめて

深山紅葉

おく山の色なき木々の時雨にもぬるれはかはる下紅葉かな

深山木の雫をそへて下もみちたえぬ時雨やちしほそめけん

深山木の常盤にましる下もみち秋の色こそすくなかりけれ

白雲のはれぬ梢の色みえて外山はうすくもみちしにけり

いはねふみ雲もかさなる峯こえてなを奥山の紅葉をそみる

都にてかゝる紅葉の色やみしたゝおく山のこすゑなりけり

里紅葉

山深き色にはにねとこの里も時雨にけりと見ゆるもみちは

紅葉歌中に

夕霧のたえつる山の下紅葉色こそ見えね露は染らん

ゆふつく日うつろふ山の薄もみちふかくそむるは心なり皃

鳴わたる鴈の泪のゆふ露も色つきそむる峯のならしは

秋風にはゝそ色つくさほ山のみねはこひしき秋のおも影

風さむき秋の朝けの露しもに色つきあへすちるはゝそかな
暮ぬとも秋はうからし紅葉はを散ぬかたみと頼むよならは

秋歌中に

小倉山もみちかつ散なか月の有明の月に鹿そなくなる

暮秋

秋の色はあさちかすゑに移りきて人めもかるゝ霜のふる里
野も山もいまは限りの色みえてうつろひはつる秋そ悲しき

九月盡

秋はつる色をみせてや紅葉はも枝に殘らすけふはちるらん
我やとの籬は山につゝけともとまらぬ秋やよるもこゆらん

曉九月盡

暮ぬとてなけく一夜の秋もはや更行かねのあかつきのこゑ
行秋を今宵はかりとおしむまの心もしらぬ鳥のこゑかな
行秋を惜しむ心は深きよをあけぬとゝりのおとろかすらん
鳴そむるゆふつけとりの一聲にやかてや秋の立別るらん
花すゝき曉露をかたみにて袖の別れに秋はいぬめり
曉はうきものなれやきぬ／＼の袖よりほかの秋のわかれも

小九月盡

なか月となに社たてれおほかたの日數もたらて秋の暮ぬる

冬

初冬

神無月けさはしくれすもみち葉のちる社冬のはしめ也けれ

時雨

神無月よのうきときやこれならん紅葉こきちらし降時雨哉
今はゝやまさきの紅葉あともなし外山をかけて時雨降ころ
夢さむる里のいたまをもる時雨なれより先にぬれぬ袖かは

河時雨

みなと河山もとめくる村雲に時雨の雨もたえ／＼に降

人に餞し侍時旅歌あまたよみ侍りし中に時雨を

行人もとゝまる袖も露けきをかさねてぬらす村時雨かな

落葉

吹しほるむへ山風のあらし山たえぬ木の葉はあめと降つゝ
紅ゐになかるゝ河の水上はもみちをはらふあらしなりけり
山里のすみうきときはこれそこの紅葉みたるゝ峯の夕かせ
紅葉はに庭のかよひち跡たえてをちかた人の訪つれもなし

落葉與時雨爲友

梢をも雲をも風やさそふらんもみちとゝもに降時雨かな

冬歌中に

木の葉なきよその梢は音たえてまつにのみ吹冬の山かせ
嵐さへこの葉の後はをともせて山邊淋しき神な月哉

霜

立かへりまたふみわけていつか見んさかのゝ冬の霜の古道
さえ氷る袖の夕霜うち拂ひけふいく里の旅ねしつらん
よをさむみねてのあさちふうちなひき初霜しろし水莖の岡

行路曉霜

たまほこの道の冬草霜わけて曉さむき袖のかへるさ

霰

風さはく枯野のまくす立歸りあられ玉しく冬のゆふくれ
そともなる竹の落葉に音信てたまこきちらし降霰哉

山路霰

深山路の槇の葉つたひもる霰袖にくたけて物そかなしき

驚夢

なれゆへに見はてぬ夢かまきの屋に霰たまちる音そ聞ゆる

寒夜

臥わひぬあられ亂れて霜氷るさゝのまろやのよはのさむしろ

暁初雪

有明の月かとたとるやすらひにやかても袖につもる初ゆき

雪歌中に

軒近きたけのはしたりむはたまのねぬる一夜につもる白雪

降雪のやかてつもらは誰かまつあとつけ初てけさは問こん

絶ぬとて庭の通ひ路うらみしな雪よりさきも人しとはねは

わくらはに問はるゝ跡もかつきえて雪を恨むる庭の淋しさ

山里の谷のかけ橋いまさらに雪ふみわけて誰か通はん

きのふけふ降積雪の九重にあさきよめせぬとものみやつこ

松上雪

高砂の尾のへの松もいたつらによにふるものと積るしら雪

きてみれは雪もこたかくつもり鬼誰かひき植し宿の松かえ

麓にはつもりもあへすかつきえてまつ雪しろき峯の松はら

谷雪

ふるゆきはよのうき事の積れはや深きたになく埋もれぬ覧

河雪

水はやき岸の河竹おりふせてこほらぬ淵に積る白雪

枯野雪

うつもれぬかれのゝ尾花うちなひき風に亂れて淡雪そふる

濱雪

あま人の汐くむ道もたえはてゝなに降にける雪の白はま

行路雪

朝またきさきたつ人のあとゝめて雪を分行野路のかや原

京より下り侍しにふたむら山にて

ふる里にいかてしらせむ山高み雪ふみ分てこえわひぬとよ

雪はれて暁月によふかく立侍しに

あふ人もさきたつあともなかり鬼我ふみ初るみちのしら雪

をさきかはらといふ所にて

雲はれて朝日にみかくしらたまのをさきか原に氷るあは雪

ふり埋む雪の下なるもとかしはもとこし方を忘れやはする

みちすから忘れわひぬる小倉山みなれし里の雪のおもかけ

はしもとにて

波こゆるしつえはかりはあらはれて雪にかくるゝ磯の松原

さかわといふ所にてあしからを見やりて

こえきつるあとの山のは雪しろし此里までの雲はしくれて

山家雪

山里は日をふる雪にうつもれて軒端をわくる庭の通路

我はかりふみならしたるあともらし芝こる軒の雪の通ひち

故郷雪

きのふより埋もれはつる楢のはのなにおふ里にふれる白雪

嵐吹寒草

あらち山峯のあらしに雪ちりてやたのゝ尾花袖氷るなり

千鳥

冬寒みしほかせあれてこよろきの磯の波わけ千とりなく也

うき枕ねさめてきけはあはちしまとわたる千鳥月に鳴也

あり明の月かたふけは淡路嶋ゑしま（にしにめくりてイ）か磯に千鳥なくなり

さよ千とり鳴聲近しありあけの月の出しほやみつの松原

さよ千とりなくこゑ淋し有明の月のかたふく浦のをちかた

氷

冬こもるたるみの氷いまとぢてたえすそゝくは時雨なり鳬
ちり果しこのはののちのをとつれもけさまた絶て氷る谷川
淺き瀨も冬はさはかす山河のらは波たちて氷るこのころ
龍田川わたれはこほり中たえて紅葉のにしき色も殘らす
冬さむみ人もすさめぬ山の井にたえすむすふは氷なりけり

湖上氷

氷とちいまはよせこぬさゝ波の志賀のはま風さむく吹らし

冬月

名殘なく雪けの雲はそらはれてつもるとみゆる庭の月かけ
ひろ澤の池の堤を照月はともに曇らぬかゝみとそみる

江水鳥

難波江の氷の床やさえぬ覽おちはかたしくよはのあしかも

網代

ふけ行はもる人もなし網代きにいさよふ波の音はかりして
網代木の宇治の河おさ暇なみひおのよるさへうちも休ます

豐明節會

山あゐのをみの衣の日影よりとよのあかりといひや染けん

年内鶯

もろともに春待わひて咲そむる冬木の梅に鶯そなく

寒梅

あしかきの雪まの梅は咲にけり春のとなりやまちかゝる覽

年中冬盡るといふ題をさくり侍て

送るとていくかもあらし年月をさそはて冬のひとり行らん

戀

初戀

いせの海士のけふやきそむる汐竈のやかてゝからく立煙り哉
たきそむる浦の藻鹽火いつのまにやかてなき名も空に立覽
ふみそむる戀ちの奧にありといふ山は忍ふの名をもらすな

聞戀

さのみやは音に聞へき高砂のおのへの松のあらしならぬを

不見戀

みるめなき我身はしかの浦なれや袖のさゝなみひる時もなし

人つて

いかにせんみぬめの浦のさよ千鳥人傳ならぬ聲そゆかしき

初見戀

雪まよりけさみえ初る若草の我したもえに出る也けん
波まわけけふかりそむるみるめ故やかても袖の汐たゝる哉

戀歌中に

雲間よりほのかに見えしみか月の我はかり社おもひ出らん

忍戀

いまよりは月をもめてし枕たにしらぬ涙に影やとしけり
あやなくもかけやとしけり今よりは月にも袖の涙しらせし
月ゆへにぬれぬる袖とかこちてもいりなん後を如何答へん
ふしの根のかみたにけたぬ煙をも猶したもえに我そ年ふる
おく山にやくすみかまのゆふ煙人もとかめぬ身のおもひ哉
したむせふ芦屋の小屋の夕煙いかなる隙にもらしそめまし
あつまやの軒の萱間をもる時雨音には立[て]ぬ袖そ濡ける
たつね見よしのふの山もをのつから心の外に露はもりつゝ
しのふ山人の心のおくのみち夢にあふともさらにしられし
としふとも谷になたてそしのふ山いはまをくゝる谷の下水

人しれぬ心のおくの山もなをしのふてふなの世にそ聞ゆる
奥の海のうのすむ石をこす浪のかけて思ふと人はしらしな

見忍戀

しられしな海士もあさらぬ荒磯の底のみるめにぬるゝ袂は

月前忍戀

つゝみあまる涙や袖に落つらんおもひの外にやとる月かけ

忍久戀

時雨もる槇のを山の下もみち人もとかめぬ秋そへにける
我袖やつゐには朽んたまかしは波の下にもぬれつゝそふる
つれなしやかれなて軒の忍ふ草いや年のはになにしける覽
忍ふれは苦しき物をいかにして思ふにまけぬ年のへぬらん

言始戀

春の田にけふかけそむる池水のいひ出るより袖はぬれつゝ

契戀

身をかへて後もかれしと契れ共待このよ社うしろめたけれ
くちかたむ
をのつから問人あらは僞はなへてうきよのさかとこたへよ

尋戀

杉立るかとゝも人のをしへねはいつくを行て三輪の山もと
人しれぬたのむるくれをしりかほ・〔に脱歟〕うたて躍する軒の松風

待戀

いまもうし誰かつれなさの初にて松といふ名を卿ちそめけん
こすとてもまたてはあらし我さへに頼めし事を如何違へん
いつはりも誠もけふそしらるへきたのめそめぬる夕暮の空
なれぬれは頼むるまても僞そおもふ物からなをそまたるゝ
さすかなを頼めしよはと思ふらんいひし計は忘れしもせし

寄月待戀

よしさらは月よゝしとも告やらし只まつ虫の聲にまかせて

寄筵待戀

さのみやは空しき夜はも積るへきたゝ塵拂へ閨のさむしろ

不遇戀

こえやらて逢坂山にまよふかなせきとめかたき涙なれとも
もりわふる人目の關はありなから我戀ちにはあふ坂そなき
よな〳〵は袖のみ濡ていたつらに行てはきぬる道しはの露

顯戀

よしやさはおもひけり共しるはかり袖の涙を人につゝまし
みる人のとかむるほとに成にけり淺間の嶽の思ひならねと

逢戀

思ひねにかねて逢みしぬはたまの夢はうつゝに迷ひなる哉
わか涙あふをかきりと思ひしにあけ行袖はなをしほれけり

馴戀

須磨のあまの鹽燒衣たゝなれんまとをに有も浮世ならすや

稀遇戀

思ひねの夢もあふ夜の數なくはまとを也とは恨みさらまし
おもひねの夢をうつゝにとり添はあふよの數やさすか積覽
あふ事はとを山とりのをのれのみ思ひ亂れて泣ぬ日はなし

後朝戀

なこり思ふ又ねの夢路立歸りくるゝをまたてあひみつる哉
歸るさのけさの泪に比ふれはあはてこしよの袖はしほれす

別戀

あか月のとりよりさきの別にも我なくね社なをうかりけれ
夜ふかしといひ慰むる別れちをすゝむるとりの聲も恨めし

有明の月をは何かわきていはんつれなき物は別れなりけり
あけわたる峯の横雲たち別れおなし空にや我もきえなん

化偶戀

さゝまくらぬしさたまらぬ別かなかはる一夜の露の契りは

遇不遇戀

あひみてもあはての浦のそのころにまた立かへる沖つ白浪
逢見しと思ふはかりをなこりにて心の外はかたみたになし
ありしよにたかふ契のするの松たか袖よりか浪はこえにし

昔あへる人

いにしへの野中のしみつ今さらに思ひ出れはぬるゝそて哉

久戀

人しれぬ年のへぬれは山深くたつをたまきの我もつれなし
年をへは思ひやよはる片糸のなかからへてみる玉のをもかな
もゝよ社しちのまろねも人やすれ逢を限りの數をかけとや
よそに見しかつらき山の峯の雲心にかけて年はへにけり

逢約戀

わかためは僞になるあふことのまことを誰に人のみすらん

形見

忘れしといひしに違ふ言の葉そつらきなからの形見也ける

ふみたかへ

うちつけにうらみやかけん濱千鳥ふみたかへたる跡を尋て

絕戀

逢事にかへし命のなにとまたなからへてうき世をもみる覽

夜戀

東屋のまやにはあらぬあまそゝき余りにぬるゝ夜はの袖哉
賴め共ねられぬ夜はのから衣かへしてはなを身をそ恨むる

誰か袖に今はかくらんかよひこしあかつきおきの道芝の露

獨寢戀

獨りねのみはならはしも僞に思ひしらるゝよなく／＼そうき

しつく

忍ひ寢の涙まかへてあしひきの山のしつくに袖やかさまし

うたかた

うち拂ふ袖のうたかた哀れにも海とあれぬる床のうへかな

思

徒に我のみもえてふしのねのならぬ思ひに年は經にけり

互思戀

わすれすはおもひおこせん心こそ我忍ふよりなを悲しけれ
ひと方になをさりならは賴めしも僞になる夜半のあらまし

片思

月見てもまつそ戀しき人はいさ誰をいかにと思ひ出らん
もしほやくなるみのうらのかた思ひ煙も波も我身にそたつ
風吹はおはなかもとの思ひ草かたなひきなる袖の露かな

恨戀

いかにせん身を秋風にまくす原歸りしまゝの露そかはらぬ
暫し社我身のうさと歎きしかあまりになれは人そつれなき
思ひしる我身のうさもひと心つらさも共に恨めしのよや

寄日戀

朝毎にあまのいはとを出る日の思ひやむへき時のまもなし

寄月戀

夜な／＼は寐られぬ儘に眺めわひぬ月みよとしも人や契し

寄煙戀

ふしのねの空し煙に年はへぬならぬ思ひのなをはたてつゝ

ふしのねのもえつゝとはに立烟さのみ思ひによをや盡さん

徒にうき名をたてゝ富士の根の煙くらへに身そなりぬへき

あさましやあさまのたけの煙にも立まさり行みの思ひかな

東路やむろのやしまに立けふり心のほかのおもひともみす

いつまてか室のやしまもよそにみしもゆる煙は我身なり鬼

ならはすやおもはぬかたのうら風にたくもの煙なひく心は

寄露戀

わか袖のたくひもうしや色かはる軒のしのふにかゝる夕露

寄雨戀

しられしな横のを山に降時雨色こそ見えね袖はかはかす

雨降となをそまたるゝ中々にかゝる折もや人はとふとて

寄霜戀

袖の霜枕の塵もいかゝせんきみかこぬよのつもるのみかは

寄雪戀

降雪に我かよひちはうつもれぬたゆみやすらんよはの關守

ふりそむる庭のしら雪いつのまに深くも戀の身につもる覽

寄橋戀

いは橋やいかに契りをかけ初てよそにふみ見る中と也けん

ありしよのまゝの繼橋中たえてとしのわたりに袖そ朽ぬる

繰返しもとのかたにやみちのくのとつなの橋の戀渡るへき

寄水戀

八橋のくもてに物を思ふかな水行かはを袖に流して

寄春氷戀

氷たにとまらぬ春もとけかたく人の心のむすほゝるらん

寄河戀

うき名のみよには流してぬる床の涙の河に身そしつみぬる

みな瀬川したゆく水もある物を袖に浮ぬる我涙かな

寄瀧戀

音なしの瀧のみなかみたつぬれは人めをしのふ涙なりけり

寄塵戀

逢ぬよの閨のさむしろしきたへの塵拂ふまて積りぬるかな

あやめ草五首の中に寄菖蒲見戀

隱れぬる菖蒲にましる草の名のかつみしるよりぬるゝ袖哉

寄菖蒲顯戀

昨日まてみこもりなりし菖蒲草けさ我袖にねをそかけつる

寄菖蒲夢見戀

あやめ草枕にむすふ夢ちさへあかぬ一夜にわかれぬるかな

寄菖蒲違約戀

あやめ草なかき契りを引かへて一夜はかりに今はなすらん

寄松戀

浪越るらのすむしまのいはね松ぬれはぬるとも色に出めや

寄木戀

忍ふれは錦木をたにえそたてぬちつかかふとも誰（か歟）しらまし

寄鳥戀

逢ふ事のたえぬる後はつらしともうしとも聞ぬとりの聲哉

濱千鳥しほひのかたにひく波のとをさかりぬるあとに鳴也

寄鵜戀

おくの海の波こすいしにすむ鳥のうき人ゆへにぬるゝ袖哉

寄蟬戀

さと遠き深山かくれに鳴蟬の音をつくせとも人もとかめす

寄衣戀

いせの海士の鹽垂衣なれは猶ぬるときのまも袖はしほらし

寄糸戀

逢ことは夢にもいまは片糸の玉の緒とけてぬるよなけれは

寄弓戀

立歸り身をそらむる梓弓引ちかへたるこゝろ強さは

寄舟戀

我戀は引しほ向ふみなといりの蜑の小舟のよるへたになし

あしわくる湊の小舟うきふしにさはりかちなる程を恨むる

我戀はよるへもしらす風吹は浪に流るゝあまのすて船

寄火戀

あまつ空雲井に物をおもふかなゑしの燒火の夜はもえつゝ

つれなきを恨むる海士のすむ里は煙やきたてこかすも鹽火

寄夢戀

諸ともにあふとたにみはむはたまの夢はかりにも慰なまし

雜

雲

山たかみ夕ひらつろふしら雲の棚引かたや都なるらん

月あかき夜人にさそはれてはしめて人に對面して後の朝に申つかはし侍し

人はいさ思ひも出しわれのみやあくかれし夜の月をこふ覽

六帖題にて讀侍し歌中にいさよひ

山端をいさよふ月のいてかてにうき世にすむは我身なりけり

ありあけ

なからへてすむへきよとは思はねと有明の月の猶めくる哉

あか月やみ

しはしともえ社とゝめぬ夕月よあかつき闇といそくかへさは

峯松

數ならぬみのゝをやまの一つ松又たくひなくよをや盡さん

山家松

山里は軒端の松のなかりせはまた友もなくよをやつくさん

世中のうさにくらへて住里の峯の松風心してふけ

いたつらに世に經る物とひきうへし松もこたかき軒の山風

物おもふよはの寢覺のあらましを松にこたふる軒の山風

六帖題にて讀侍りし歌中につはき

こせ山のつら〳〵椿つらからは逢にはかへぬ身をや盡さん

からもゝ

降雪はきえぬものから百ちとり今ははるへとけふそ鳴なる

くるみ

此里は山もとめくる道とをみゆきかへるまに日はくれにけり

むろ

古の人にたとへしあまそきの岸のなかはにたてるむろの木

かつら

里とをみ我すむいほの山かつらさても浮世のかけは離れす

竹

かは竹の流ての世も頼まれすうき節しけく身はしつみつゝ

うきふしの色も替らて呉竹のよにふるともは我か身なりけり

たかむな

いとゝなを人の心やまよひけん雪まをわけて生し竹の子

よもき

古里に軒をあらそふ蓬生のもとみし庭の俤はなし

わすれくさ

つれもなき人の軒端のわすれ草かれねしのふの露を殘して

ねぬなは
徒に行てはくとも池におふるねぬなはたてし人のきかくに
藻
わかの浦や昔のあとに年をへてかき集むるはもくつなり鳧
夏草のゝしまかさきの朝風にあまの乙女子玉藻かるみゆ
浦　鶴
和歌の浦や雲にのほりしあしたつのかたみ計の跡も止めす
六帖題にてよみ侍し歌中にはとり
うちはへて音をのみそ鳴庭つ鳥かけのたれをの長き思ひに（をイ）
からす
あけぬとて寝やたち出てなかむれはやもめ烏の月に鳴ける
に　ほ
風吹はにほのうきすのうきにのみ流るゝものは涙なりけり
鵜
大井河ゐせきのさなみたちかへりおなしせめくる篝火の影
すゝき
世中はたゝ秋風にすゝきつる浦のとまやそすみよかりける
た　ひ
波あらきいそらか崎にたい（鯛イ）つるとあさる蜑舟こき歸るみゆ
あ　ゆ
今もかもたましまかはゝ古のかしこきあとにこあゆつる也
ひ　を
槇の嶋網代によするひをへてもみまくそほしきうちの渡りは
く　も
さゝかにのくものすかきのいとすゝき露も亂れて秋風そ吹
をくら山
小倉山はては我身のかくれかとあらましにのみ思ふこゝろ哉
ふかくさ山
みしよこそおもかけさらぬ深草やふりにし里の山端の月
とりへ山
とりへ山あすをはしらて暮ぬまのけふの煙を哀れとそみる
みかさ山
こえわふるみかさの山の峯の松つれなき名のみ年はへに鳧
みわの山
月日のみすきのしるしはかひもなし人も尋ぬみわの山もと
かつらき山
よそにのみ見てはやましなこの里に時雨てむかふ葛城の空
吉野山
よし野山はなちるまての宿もかなふるさと人は待わひぬ共
さやのなか山
おほ非河わたせをおほみ行暮て月にこへゆくさやのなか山
うつの山
うつの山うつゝはいはし夢ちさへなとみえ難き年のへぬ覧
ふしの根
ふしの根の煙の故はしらね共たえぬ思ひのたくひとそなる
やまひこ
山彦の答ふる聲にしられけりありてなきよの夢のうつゝは
谷
谷深みみ草かくれのさゝれ水よにすみわふとしる人もかな
たきゝこる谷のをかはゝ淺けれとあした夕の風もねかはす
いはほ
苔ふるきいはほにねさす松の葉のかすかすかす遠き千代の行末

むめつかは
影うつすむめつの河のはやき瀬にいはこす波も花そ散ける
たなかみ河
なみさはくたなかみ河のあしろきに氷いさよふ冬のよの月
ひとよ河
七夕の契りにたゆる一夜河このあふせこそやかてたえぬれ
ゐせき
ゐくひたて此方彼方にせきかけてもとの流はせたえしに皃
瀬魚簗
山河のやなせのさ浪たち迷ひ行末「へ歟」もしらぬ我身かなしも
池
世中のうきめの池の水を淺みすみわふる身のはていかな覽
たのむの池
よをさむみ氷にけりなあしかものうきねのとこと賴む池水
うきめのいけ
はちすはのうきめの池のむらさめに亂れてはまた結ふ白露
いかほの沼
したにのみ思ふ心の深さをもいかほの沼のいかてしらせん
江
里はあれし難波ほりえにすむ鳥のをのか名のみそ都なり皃
みしまえ
みしまえや鹽のひくまは顯れて又みこもりの芦のわかたち
たまえ
影やとすほとたにもなし夏苅のたまえのあしの短かよの月
澪漂
我ことや難波ほり江のみをつくし徒にのみよにたてるらん

山の井
淺ましや今はむすはし山の井によにすみわふる影はみゆ覽
嵯峨野有注
忘れすよあつまに歸るなこりとて雪ふみわけし嵯峨の通路
かすかの
春日野を燒しけふりの消はてゝあとにもゆるはわらひ也皃
武藏野
むさしのははきの下葉の露わけて花の中ゆく秋の旅人
みくま野
しるらめや賴む心はみくまのゝ浦よりをちに身を隔てゝも
人野
いかはかり露みたる覽さをしかの入のゝはらは秋風そふく
野亭
涙そふ露のたまくら袖ぬれぬ後のさゝやのよはのまろふし
すまの關
須磨のうらせきやもみえぬ夕霧に袖に吹こす秋のしほ風
かすみの關
行末の霞のせきははる〳〵となかむる方のなにこそ有けれ
東路やはるはかひなくすきにけり霞の關の名はとまれとも
はまなの橋
との海のしほ風まつに吹こしてはまなのはしに月わたる也
里
あつまには住吉といふ里もなし何處に暫しみなしかくさん
山なしの里
いつくにか身をはかくさん厭ひても浮世の外の山なしの里
たまかはの里

盛りなる岸のうのはな月にみかき風にみかける玉川の里

　さらしなの里

秋はなをなくさめかたき浮世とは月にもしるや更科の里

　海

世中に沈みはつれはわたつうみの底を深めて身をそ恨むる

　海人

しかの蜑のめかり鹽やく袖も猶うちぬる程はぬるゝ物かは

　いかり

舟とめて今ひきおろす碇縄かつしつみゆく身をいかにせん

　鹽竈

あさりする干潟に海人やいてぬ覧けふり燒さす浦の鹽かま

　ねぬなはの浦

涼しさの月にしほくむあま人や夏はさなからねぬなはの浦

　たかしの濱

おきつ波たかしの濱の松影に千鳥なくなりよそふけぬらし

　うき嶋

うき嶋の名をもいとはし世中に思ひ定むるすみかなければ

　なからの橋

古のなからの橋よあとはかり名に殘りてもいくよへぬらん

　礒浪

あら礒のいはうつ浪の我なれや心くたけぬ時のまもなし

　旅歌中に

けふもまた里なき野へに行くれぬさのみやしもに枕結む

なれもまた旅寢の袖にしたひきぬ思ひやらるゝふる里の月

なくらさぬ心なり共うつの山うつゝにしらし夢にたにみよ

草枕あかつき毎のとりの音にけさのなこりを思ひわするな

あかしかた月たにやとる秋の夜を風に任せてこきやすき南

　くたりはへりし時あふさか山をこえはへるとて

あふ坂の山の杉村すきかてにせきのあなたそやかて戀しき

　鳴海にて

都のみとをく鳴海の濱千鳥日かすにそへてねそなかれける

　清見關にて人々ふねにのりてめなとかり侍りしに

清見かた浪まをわけてかつけ共しのふ都はみるめたになし

　富士山を見侍りて

いつくより雪はふるらむ天の原雲のうへなるふしのしは山

　送旅人

したひ來る心のまゝに身をやらはやかてや越ん足柄の山

　京に侍る人のもとへ

最上川たゆるあふせもいな船の昇りわつらふしはし計りそ

　遠江へまかる人に

こえぬともさやの中山わかなくに心へたつな峯のしら雲

　駿河へくたる人にたきものつかはすとて

行かたの山はふしのねくらへみよ我したもえのおなし煙に

　近江へくたる人に裝束つかはすとて

近江ちやのちのゆふ露ふかゝらはみのしろ衣たちも重ねよ

　美濃へくたる人に

したはるゝ心のまゝに同しくは行てやみましつきよしの里

　甲斐へ下る人に

わかるれは袖こそぬるれ假初の行かひちとは思ふものから

　信濃へくたる人に

さらしなの月みむたひに思ひ出よ慰めかたく君をこふとは

　常陸へ下る人に扇つかはすとて

常陸なる霞の浦のにれせねはあふきの風をたくへてそやる

陸奥にくたる人に

しひて行心よいかに東路のなこその関のなをはきかすや

つくしへ下る人に

あすよりはかへりこむ日をまつら潟心盡しに我やしのはん

遠所なる人のもとへ申遣し侍りし

君かあたり雲井はるかになりぬれと思ふ心はへたてさり鳬

入宋し侍僧のもとへ

浪ち分濤わかるともろこしの虎ふすのへも浮世ならすや

人の女のもとより男こゝにとゝまりたるときくと申
をこせて侍返事に

尋みよ誰かすむさとのぬれきぬに三笠の山の名をかさす覽

丹後前司定有美乃國へ下向せんとし侍ころかねて日
ことになこりおしみ侍とて

けふ迄はなを行末もあるものを今はといはんときいかな覽

下向してのち思やりてよみ侍し

旅衣さそな露けさをくれゐておもひやるたに袖はぬれけり

都

現こそ都へたつる身なりともよかれぬ夢のかよひちもかな

あかさりし都のみこそこひしけれ月みるたひに物忘れせて

いにしへのならの都にあられ共我身ふるれはとふ人もなし

禁裏

百敷をゝとにのみきく山川のうき瀬に沈む身をいかにせん

またしらぬ雲井を戀てあしたつの澤へに獨なかぬ日はなし

山家

人めとてみて思むも哀なりつまきのしつかよそのかよひち

きくもうし思ひいれしとしのへとも夕暮ことのみねの松風

曉山さとより歸侍とて

木かくれの山もと遠くなる儘にいりぬとみつる月そ出ぬる

閑居

我やとは八重葎してかとさゝむよにすめはとて訪人もなし

やと

吉野山浮世へたつる宿もあらはすみ浮れぬる身をは歎かし

山田

徒に世にたてるかな秋はつる山田のそほつをのれられへて

故郷

故里は風もたまらぬ板間あらみねやなからみるよはの月影

寺

里とをみけふりもたゆる深山ちにゆふへの寺に歸る袖みゆ

初せ山ゆふゐる雲にこえくれて檜はらにしつむ入相の鐘

水郷

よの中をうちの里人しかそすむ我も行てや身をかくさまし

王昭君

あさことに鏡の影を頼みきて都のほかをみるそかなしき

六帖題にてよみ侍りし歌中におや

たらちねの心のやみの深さをも身をおもふ道に今そ知ぬる

わかこと

我事やいとけなきこの思ふ事いはてのみ社ねをはなきけれ

つかひ

鴈金の雲ちのつかひきりわけてつはさにかくる露の玉つさ

かり

かり人のいる野のはらになく鹿は命にかへてつまや戀しき

色
つき草の花よりあたに移ろふは人のこゝろの色にそ有ける
つゑ
君か代の千とせのさかの爲とてやその神山に卯つゑきる覽
かさし
かさしこし雲井の櫻わするなよ都の外に身はふりぬとも
たまくしけ
玉くしけ都のてふりえそしらぬあつまの民と衰ろへしより
はた
數ならぬ身賤しくてしつ機に物おもふことは人にをとらし
綿
萬代のはると吹なる笛の音にかさしの綿も花とみえつゝ
裳
わきもこかひきもの姿うちはへて面影にのみ戀ぬ日はなし
和琴
山かつら紅葉も枝にひきかけてあらしの聲をてにそ聞する
寄月管絃
かきならす東のことの聲たてゝ月のしらへにかよふ松かせ
懐舊
いくほとも積らぬ年の我身にも思ひ出おほくすくしつる哉
おもひ出る心をのみそ忍ひける忘るゝ時はむかしともなし
秋懐舊
故里は昔しのふの軒端より見しよににたる月そもりくる
夢
ぬるか中も覺るうつゝもかはらぬをわくる心や夢となる覽
夢の中にてよみ侍りし
誰かために秋のきぬらん故郷のぬしなき宿の庭のあさちふ
無常
翌まての命も今やしら露のかゝる草葉に風そ吹なる
物事に移ろひ行はありはてぬ世のはかなさも秋そしらるゝ
少僧都嚴雅病かきりになりてのころ手本をくるとて
つゝみかみに
古のかしこき筆の跡まても我かたみとやのちはなるへき
返し
世々ふとも君かかたみと水莖の跡もかしこき道をならはん
身ちかくめしつかひ侍ものみまかりて今けふりとな
すよし聞侍て律師嚴雅許へ申つかはし侍し
蚊遣火のけふりを見てもかなしきは雲となるらん山端の空
返事　嚴雅
蚊遣火のけふりの色も時しあれはむせふ心のうらにみせ鳧
釋教歌中に三界唯一心
思ひとけは氷も浪もうたかたもひとつ流の山河のみつ
三世不相待
古とおもへはやかて昔にて心のまゝのよにこそありけれ
心佛及衆生是三無差別
ぬる夢もさむるうつゝもひたすらに思へはおなし心なり鳧
是法住法位世間常住
大方のみつの心をしりぬれはたちゐも波もかはらさりけり
煩惱即菩提
風ふけは俄にあれてさはけともなみはさなからもとの池水
唯境無識
みる人もきく人もなし高砂のおのへの松にわたる夕風

唯識無境

ねむりこそ夢ともみゆれ世中はたゝおもひわく心なりけり

六帖題よみ侍りし歌中に法師

あらはるゝころものたまやこれならんこけの袂に結ふ白露

法印宣信日饒の御いのりし侍しに雨降て侍しかはのちの日申つかはし侍し

おほふなる我たつそまの雲よりやきのふの雨のふり始けん

返し

つたへこし我たつ杣のみのり社きのふの雨と今はなりけれ

法印定清まうてきて物かたりし侍しついてに眞言の記教にすくれたることなと申て歸り侍て次の日申をくり侍し

きよたきを下すいかたのさす棹にのりの流の淵瀬をそしる

返し

きよたきのなかれの淵をふみ分て水のみなかみいかて尋ん

有宣法師としへてのちまうて來て物語なと申て酒すゝめて侍しにゑひて袈裟をわすれて侍しを朝にかへすとて

年をへてまれに逢みし宵のまの名殘あり共けさそしりぬる

述懐

世中を厭はんと思ふあらましのいつか誠にならんとすらん

年たけはいらむと思ふ山ちこそ月日にそへて近くなりゆけ

かねてより世のうき時としめ置し山ちもいまや近くなる覽

行末もさそなことしのけふまては思ひし事の叶ひやはする

心から我とわか身をせめきつゝなけくもいへは浮世なり鳬

世中に我をとむるはさりともと行末たのむ心なりけり

世のうさを思ひしらすはいかゝせむ歎く心のなとか厭はぬ

しつかなる寢ざめは誰か心にてそむかれぬ身を思ひ捨らむ

人毎に思ひつきせぬうき世とやあさまの獄もたえすもゆ覽

月もなをあはれとみすやわかの浦にしつみ果ぬる浪の下草

和歌の浦やむかしの跡は有なから迷を月のしるへやはせぬ

わかのうらに沈みはてぬる身をしらて袖に浮ふは涙なり鳬

浦風や浪に流るゝなひきものさしてよるへもなき我身哉

寄月述懷

はれかたき身の歎きかな月見ても猶かきくらす袖の涙は

寄秋雨述懷

あま雲のうへ行月の我なれやよにすむとたにしられさる覽

降はてゝ秋の時雨にかす袖をほさて朽なむ名こそおしけれ

寄鳥述懷

夏苅の芦邊の鳥にあらぬ身のよにたつ空もなくくそふる

名所述懷

よの中はなにか難波の恨むへきもにすむ虫のなに沈みつゝ

世中のうきたひことにみよし野の山を哀といはぬ日もなし

なけく事侍人のもとへ申遣し侍し

三代すきてしつむためしも有ものを我ひとりとは何歎く覽

京にすみ侍なから所勞にて出仕せすしてくたりてよみ侍し

久かたの雲井の影はよそなりき都の秋の月をみしかと

人におほくこえられ侍ころ關屋といふ題をさくりて

我ことやふはの關守年をへてこえゆく人のかすをみるらん

轉任事申侍しに奏者心にいれすしてひさしくありて

五月五日雨ふり侍しに人のもとへ申つかはし侍し

み籠りにくちや果なん隠れぬの菖蒲はけふも人しひかれは
いかにせん我身ふりゆく五月雨に頼む三笠の山はかひなし

おもふ事侍て
住吉の神をやいまはかこたまし松もむなしく年のへぬれは

題をさくりてよみ侍し歌中に四方拜
春のたつ雲井の竹のおき伏てよのため四方にさそ祈るらし

除目
この秋は我名もらすな三笠山さのみしくれに袖やぬるへき

文の心よみ侍し歌中に人行莫レ大ニ於孝一
古のあとはかた／＼おほけれと親につかふる道そかしこき

進思盡忠退思補過
心をはつかふる道にすゝめともなを立歸り身をそいさむる

一人有慶兆民頼之
あまつそら春たちくれは野も山もなのかさま／＼花咲に鬼

在上不驕高而不危
おほ空の星のくらゐは高けれと道たかはねは影そ久しき

戰々兢々如臨深淵如履薄氷
そこゐなきいはかきふちの薄氷こゝろも解ぬ世中のうさ

夙夜匪懈臣事一人
霜雪に我身を責てくるとあくと君につかふる年そへにける

資於事父臣事君其敬同
たらちねの親にしたかふ心もて君につかふる道そかはらぬ

自天之時就地之利
夏はうへ秋はかり田にたつ波のをのか儘なる身とやしる覽

不以一惡忘其善
あたにちる色をうしとて山櫻いつれの花におもひおとさん

儉以養生
世中はたまのうてなも何かせん草のいほりも心こそすめ

禍福無門唯人所召
恨みしななには入江のよしあしもともに住虫のなにそ有ける

欲悔非於既往唯愼過於將來
行末をいまは思はぬおもひ川過にしうさはまたもかへらす

欲生於身不過則身喪
笛による秋のをしかもおもひより身を徒になしそはてぬる

茅茨不剪
とゝのへぬ草の軒端はよゝへても道有みよの試しにそひく

王者欲明讒人蔽之
久かたの月日はいつら曇るへきたゝ雨雲のおほふなりけり

いはし水
やはらくる月の光もいはし水こゝろきよさに宿るとそきく

たむけ
立歸り年をへたてゝ逢坂とせきもる神にたむけせしかな

しめ
今よりはひくしめ繩のうちはへて神の心に身をはまかせん

七夜に人々歌よみ侍しに
行末はおもふも遠し万世をかそふるけふはなぬかなりけり

祝
我か君のめくみそ遠きあまの原月日の影のさすにまかせて
しきしまの外には雲のみたるとも神よの月の影はくもらし
君かよのともなりけるを徒に尾上にたてる松とみしかな
かめのおの山のいはねにむす苔のかはらぬ色や君か万世
浪風ものとけきこゝろと和歌の浦やなきたる朝のたつの諸聲

よもの海の濱の眞砂の數々にいはほとならんみよそ久しき

限りなく思ふ心にまかせてもなをいひしらぬみよの行末

さかさまにかそふる年の神代まてくらへてあまる君か行末

君か代を神にそ祈る住吉の松はやちたひおひかはるまて

寄月祝

君か代を月にそ祈る行すゑのかきりもしらぬ秋にまかせて

曇なきみよをしらする月影に千とせをそへて松風そふく

寄里祝

古のかしこきあとにたちかへり今も道あるかまくらのさと

已上八百四首

點者戸部禪門也。星點者權黃門也。依ニ忩劇一不レ終レ功。及ニ兩年一間爲ニ粉失一歟。返云了。

永仁二年十二月廿三日

隣女和歌集卷第四 自文永九年至建治三年

春

立春

逢坂のとりより先のね覺こそまつ春をしるはしめなりけれ

我そまつ春はしりぬるしのゝめのとりより先の老のね覺に

あまの戸を出る朝日や梓弓春のひかりのはしめなるらん

けふやかてきゆる雪まの松か枝や春のみとりの初なるらん

白雪の降かくしてし我やとをいかにたつねて春の來ぬらん

消あへぬ峯のしら雪ほの／＼と霞むを見れは春そきにける

はれやらぬ空の雪解のうす曇霞になして春そきにける

山立春

春來ぬといふはかりにて足曳の山かきくらし雪はふりつゝ

春の立朝けのそらにみわたせは遠き山へそまつ霞ける

春たつと雲井のよそにしられ鳧けさまつ霞むかつらきの山

今朝みれは霞の衣たちそめて袖ふる山に春は來にけり

羇旅立春

あふ坂を我より先にまつこえてけさは都に歸るはるかな

禁中立春

けさははや霞もやかて九重のおほうち山に春は來にけり

山家立春

春たちてあらはれそむるまきのやの軒端に落る雪の玉水

故鄕立春

霞たちいまははるへとなにはつにけさ消殘る雪やこの花

早春

子日する松の千とせを君かため空に棚引はる霞かな

子日

春日野の小まつを君かやとにうへて神の保てる齢うつさん

朝霞

あさほらけいつれ山ともみえわかて霞に立てる峯の松原

さしのほる朝日に峯はかつはれて霞殘れるをちの山もと

山霞

春日山はるは色そふひとしほに松よりほかも霞むそらかな

棹姫の霞の衣はる風に袖ふる山はみゆき解ぬらし

ときしらぬ山ともいはしふしのねの雪にかゝれる春の霞は

河霞

つらゝゐしほそ谷河はうつもれて霞おひたる吉備のなか山

野霞

春の野のおきのやけはらけさみれは若な摘へく霞そらかな

野へ見れはまた綠にはなりやらて霞はかりそ春めきにける

浦霞

すまの蜑のやくしほ烟り空にのみたちみちぬるや霞なる覽

里霞

いつか見むあしやの里のゆふなきにひとむら霞む住吉の松

鶯

春たつといふはかりなるかすみよりほのめき出る鶯のこゑ

明ぬるか閒のいたまのひま見えてほのかにしつる鶯の聲

鶯のは風やなをもさえつらんこつたふ梅は雪とふりつゝ

今さらに雪ふらめやも鶯のこつたふ梅のはなやちるらん

谷鶯

我のみやあはれときかん山かつのかきつの谷の鶯の聲

野鶯

きのふけふ若菜つみにと春の野にきつゝなれぬる鶯の聲

山家鶯

ふるすより深山つたひにこの里はまつ聞そむる鶯のこゑ

竹間鶯

色かへぬ春のともとや吳竹の千代をならせる鶯のこゑ

遠鶯

此里に啼てうつろへ霞たつをちかた野へのうくひすのこゑ

近鶯

けさよりは餘所にもきかす咲そむる軒はの梅の鶯の聲

若菜

萠出る若菜もあらは摘へきを野へのいつくか雪間なるらん

ふる里をたち出てみれは春日野のとふひのかたに若菜摘也

春日野に若菜摘なる袖なれや雪よりのちの雪のむらきえ

ことゝはむ遠かた野へにうちむれて白くみゆるや若菜摘袖

ふる里はわかなつめともみ吉野の山かきくらし雪は降つゝ

雪中若菜

藤衣袖うちはへて山かつのかきつのたゐにねせりつむなり

鶯のこゑきく野への若菜さへ袖にたまらぬ春のあは雪

岡若菜

みつ莖の岡のやかたを立出てねてのあさけに若なつむなり

野若菜

人每に我しめし野の若菜とやをのかさま〳〵けさは摘らむ

野へみれはきゆる雪まも白妙の袖ふりはへて若菜つむなり

澤若菜

氷とけうち出るなみに袖ぬれて野澤のわかな誰かつむらん

海邊若菜

浪あるゝのしまかさきの海士人はいそなは摘て若菜をそ摘

行路若菜

見渡せは行も歸るも道のへのさはたの若なつまぬまもなし

春草處々

同し野もまつやきそめしかたみえてをくれ先たつ春の若草

遙見殘雪

春霞ふゆをへたてゝかつらきや雲井のよそに殘るしら雪

春雪

ふる里ははやかすめとも見よし野の山の白雪降まさりつゝ

淺みとり霞む日かけに山のはの雪さへけさは春めきにけり

春もなを雲のいつくの冬なれは霞をわけて雪はふるらん

山春雪

この里ははや霞ともあしからの箱根の山に雪はふりつゝ

岡春雪

朝日さす軒はにつたふ水莖の岡のやかたの雪のむらきえ

杜春雪

春風にみたれし糸のくりかへし柳の杜にあは雪そふる

河春雪

氷とちまたうちとけぬ谷河に浪のはなちる春のあは雪

湖邊春雪

一しほも雪のうちにやまさるらん綠かくるゝしかの濱まつ

關春雪

あふ坂のせきにや冬のとまるらむをとはの山に殘るしら雪

橋春雪

春霞たちわたれともあとたえて雪のみ深き峯のかけはし

里春雪

春もなを冬につゝきのさとなれは雪解はなれす立霞かな

春氷

うち出しいまはの浪もたちかへり春さへ氷る谷河のみつ

梅遠薫

この里はまた咲やらぬ梅かゝのいつくの風ににほひ來ぬ覽

雪中梅

降雪の匂ふよならは梅の花なにをしるへにわきておらまし

白雪のふりかくせとも梅の花なをうつもれぬ色とこそみれ

月前梅

梅花かやとまるとて立ならす袖にうつるは春のよの月

紅梅

わきもこかたちよる袖もくれなゐのこそめに匂ふ軒の梅枝

くれなゐのいもか衣に梅のはな色こそあらめ香さへ別れす

そのかみうへをきて侍紅梅とし欠しらさかす侍しか
はしめて咲て侍をみて

をのつから春しる年も有けるを身のたくひとは何思ひけん

落梅

風吹は匂ひはかりとみし梅の色さへけさはさそはれそゆく

我袖に梅ふきたむる春風はつらきはかりをえこそうらみね

柳歌中に

あを柳のいとふきなやむ春風に朝露もろく玉そ亂るゝ

立よれは袖にみたるゝ玉ほこのみちゆきふりの青柳の露

あさ綠いとよりかくる青柳やちる花ならてねにかへるらん

霞間柳

棹姫の霞の衣たえ／＼にはつるゝいとや岸の青柳

かけろふのもゆる野原を來て見れは霞になひく青柳の糸

雪中柳

うちなひく柳の糸のたちかへりまたかき曇庭のしら雪

雨中柳

たちよりて見る人もなきあを柳にいとかけそふる春雨そ降

水邊柳

池水になひく玉もとみえつるは岸の柳の影にそ有ける

遠村柳

誰里のこすゑなるらしあさみとり霞になひく青柳の糸

隣家柳

春風にわかやとかけてなひくなり人の垣根のあを柳の糸

故庭柳

ふる里ははらふ人なき庭のおもにあさきよめする青柳の糸

二條の舊跡の懸の柳をおもひやりて

ふる里の庭のをしへの跡なからのこる柳もよゝふりにけり

三代のこるおいきの柳ふる里に今一春のさかりまたなん

蕨

立わたる春の霞を煙にてけさもえそむる野への早蕨

春雨

みよしのゝ山には雪やふるさとの霞もさむき春雨の空

さを姫の霞の衣たてぬきに糸よりかくる春雨そ降

おほろなる春のならひの朝曇り霞と見れは春雨そ降

中將所望し侍しころ春雨ふり侍しに

我身よにふるかひもなき春雨にふれぬ三笠の山のなもかな

歸雁

春はこし秋は都にかへる山かりのためなる名にこそ有けれ

雁の行こしの國なるしら山のしらねは社あれ言つてなまし

歸雁なきゆくかたをなかむれは雲のみ殘るきたの山のは

夕歸雁

ぬしらぬ黄昏ときのうすゝみにかく玉つさの歸る雁かね

夕日さす峯のかけはしあとたえて霞にきゆる雁の一つら

夜歸雁

何ゆへにいそきて雁のかへるらむ花の盛の月を見すてゝ

京へ登らんとてのころ歸雁を

旅にてもをとつれかはせふるさとにわれさへ歸春の雁かね

喚子鳥

呼子鳥よふかひもなし山彦のこたふる聲もおのかねなれは

待花

さらてたにまたるゝ花の面影をほのかにみせてかゝる白雲

都人とはぬにつけてこのころはいとゝまたるゝ山櫻かな

遠尋花

はなとみる外山の雲をわけ捨て侵む高根にかへさ忘れぬ

初花

咲そむるはなかあらぬか山のはにかゝるともなき峯の白雲

山里のはつ花櫻けふもなを雲とみれはやとふ人もなき

けさやかて誰にか見せむ待わひし花咲そむる軒の一枝

尋ねいる山のはつかに咲そむる初花さくらあすも來てみん

ことはをかきて歌讀侍しにみやこのはな咲はしむる
ころ山さとへまかりて侍るにはないまたをそしとい
ふ題をとりて

たつねつる山路はをそき梢かな宮古よりこそ花は咲けれ

障子の繪を見て

吹風やのとけかるらし梓弓はるをかきらぬ花をみるかな

曉花

いつのまに鳥の啼まてふけぬらむ月と花とはみる程もなし

雲間花

しら雲とみゆるも花か山櫻にほひを送れ峯の春風

月前花

この春は月のころしも盛にてよるもめかれぬ山櫻かな

花

またれつる花や咲らし常よりも山のはしろくかゝる村雲

嶺花

しら雲のたつたの山とみえつるは小倉の峯の櫻なりけり

河　花

またちらぬ花のかけさへよし野河行末みえてうつろひに鳧

名所花

宿りして花ちるまてはみ吉野のふる里人に身をやなさまし

都　花

春をへてにほふ櫻のこゝのへにおほうち山は曇りかさなる

みよし野は山のは高き名のみして櫻は花のみやこなりけり

年のうちに京へ登り侍らんと侍りしにおもひの外に
とゝこほりて

おもひきや猶この春もこのさとの花に都をこひぬものかは

花比眺望

咲にほふ花の都をみわたせは唯九重の春のしら雲

閑居花

春來てはにほふ櫻のやへむくらしけれる宿も人はとひけり

春きては花をあるしと頼め共なをやとからにとふ人もなし

花ゆへに人のとひ來るやとならはちるに歎を猶やそへまし

花下待人

散はてむあすはなにせん山櫻きのふけふこそ人も待たるれ

花誘引人

いつくにか春のこゝろのとまるへき花より後そ宿も定めむ

花忘愁

思ふことみれは忘るゝ花にまたなけきくはゝる春風そふく

花歌中に

みよし野の山の櫻や咲ぬらんふる里にほふ春風そふく

ゆふ日さす峯の霞も櫻色のうすくれなゐに匂ふころかな

あけぬれと峯をわかれぬよこ雲の花になり行山櫻かな

峯の雪尾上の雲にうつろひて花にそまとふみよしのゝ山

雲と見え雪にまかひて山櫻花こそ咲ねかはにほひつゝ

山櫻いま盛なり雲もなくなきたる朝に降れるしら雪

よそにたつ雲もさなから花とみてまかふ色なき山櫻かな

花にあかていく里すきぬかへりみるやとの梢は雲となる迄

誰さとに花咲ぬらんあし引の山のはならてかゝるしら雲

よし野山今年は遲き花なれややよひにかゝる峯のしら雲

月のすむそらは霞て山櫻こすゑはかりにかゝるしらくも

月もらぬ木のまも春はいとはれすちる事おしき花の下かけ

花見ても袖こそぬるれいたつらに我身ふりぬる春雨のそら

今よりは誰をかまたん春雨のつゝけるころの花のふる里

ふる里と宿をあらして今よりは花みかてらに誰をさそはん

春はたゝさてもや人のまたるゝと花なき里に宿やからまし

落　花

よし野山はなやちるらん昨日より薄くなりゆく峯のしら雲

冬ちかき色をみせてやあしかきのよし野の花も雪と降らん

雲ときえ雪とふりても山櫻行ゑもしらぬ春の色かな

みよしのゝ山のあなたも櫻花さそふ嵐のかくれかやなき

おほ空に霞の袖はおほへともなを春風にちるさくらかな

我やとの若木の櫻さきしよりめかれすみつゝちらしつる哉

庭のおもは闇とも見えぬ光にておほろ月よにちる櫻かな

春の夜の夢よりもなをはかなきは咲とみしまの櫻なりけり

きのふかも盛とみしは山櫻ねぬる一夜の夢にそ有ける

きのふまて梢の雪とみし花のよのまにみつのあはれよの中

やり水のいはゝしはかりあらはれて苔にふりしく花の白雪

花後春風

散る花のおもかけのこすかたみさへあたなる雲に春風そ吹
山櫻あかすさそひし春風のかたみの雲を又はらふらん
ちる花にいとひ馴にしなこりとて雲にもつらき峯の春かせ

三月三日

いとゝ猶またるゝ物は花のせのいしまによとむ春のさかつき

苗代

あしねはふ澤の沼水ひきかけてのたの苗代しめはへてけり
苗代のを田のしめなは引はへてはや山かつのいとまなき比
なはしろの池のみなくちさしとめて水もまかせぬ春雨の比

菫菜

ふるさとの淺茅か原のつほすみれ人目すさめぬ年やつむ覽

杜若

たつねすは花もみましやかくれぬのいはかきつはた今盛也

松上藤

松にのみ枝をつらぬる契もてなにかは藤のあたにうつろふ

淵邊藤

山河のそこひもしらぬ淵なれとあたにさはくや岸の藤なみ

藤歌中に

九重にゝほふ櫻はかさしてきまた身にかけぬ春の藤なみ

中將にて石淸水臨時祭の使つとめてあつまにまかりくたりてつきのとしの春ふちをみ侍て

みれはまた都に歸る心かなこそのかさしの春の藤なみ

躑躅

たつた山からくれなゐの岩つゝし春も紅葉の色かとそみる

蛙

花の色ははやくうつろふ山吹の咲るよし野の蛙なくなり

欵冬

咲しつむきしの山吹なみこえて花の色なる谷川の水
くちなしの色もあやなし山吹の咲る井てには蛙なくなり

河邊山吹

山吹の影ゆく河の水の色やにこらぬ御代のためしなるらん

吉野河の山吹を

花はなを契りありけりよしの河櫻のゝちのきしの山吹

庭山吹

ゆふ暮の籬はかはる色もなしをのか名のみや山吹のはな

山吹の盛に人まうてきてよるになりぬいまはかへらんと申侍しかは

ゆふ暮の庭の籬は山吹の花につけても夜はかへるな

暮春雲

春深きあを葉の山のしら雲は咲をくれぬる花かとそみる
山高みあをはに殘る花とみておられぬ雲にさそはれにけり

暮春月

やよひ山花よりのちの光かなあを葉わけ出る有明の月

暮春歌中に

花もちり月もあり明にうつろひぬ哀れあなうの春の別れや
ひとかたの名殘やおしき山櫻ちるや彌生のありあけの月
暮はつる春のゆくゑはしら浪のあとなきかたにたつ霞かな
暮て行春よひとめぬ呼子鳥なにそはありてなくかひもなし
影はかりそこにしつみし山櫻浪にうきても暮る春かな

惜春といふことを

年ことにおしむかひこそなけれともこりぬ淚そ春を先たつ
ちる花におしむこゝろは盡にしを又なけかるゝ春のくれ哉

なをさりにおしき春かは暮ゆくも命のほかの月日ならねは

春殘二日

散る花のかたみの色の衣たにけふとあすとや身にもならさん

三月の末に卯花の咲るを見侍りて

またきよりやよひをかけて夏衣さらしそめぬる岸のうの花

三月盡鶯

鶯のをとつれさへやたえはてんけふよりのちの春のふる里

小三月盡

よの常の日數にくるゝ春たにもさらぬ別は辛くやはあらぬ

夏

四月朔日ころ京へ登り侍らんとて

けさはまた花の袂をぬきかへてひとへにいそく旅ころも哉

卯花

夏衣けさたちかふる袖の色にひとつに咲る庭のうの花

我袖にまかひやすらんとふ人もなき山里のにはの卯花

卯のはなの咲る垣根としりなからいく度いもか袖とみつ覽

朝卯花

立とまる袖かとそみるわきもこかかへる朝けの庭のうの花

朝といてのいもか袖かとみるまてに庭しろたへに咲る卯花

夕卯花

また出ぬ山のあなたの月かけのかねてうつるや庭の卯の花

このころは空にしられぬ夕月のさとわくかけや庭の卯花

卯花歌中に

うの花の咲るかきほかしら浪のよせてかへらぬ玉河のさと

殘花

ほとゝきすたつぬる山の遲櫻はつねにかへて花をみるかな

郭公はつねたつねている山のあらぬかひある花を見る哉

葵

うち渡すをちかた人もけふは皆其かみ山のもろかつらせり

あまつ日のかけに葵の草なから月のかつらに影もはなれす

朝ゆふの日影のまゝのあふひ草君にしたかふ道をしらせて

賀茂祭

もろかつら月日に契る草きとや雲井のつかひけふかさす覽

神祭

誰さとにかみ祭るらむ山人の歸るつまきにさせるさかきは

待郭公

郭公はつねやきくとうの花の咲るあたりにやとやからまし

ほとゝきすはつねはいかにうの花の咲ちる岡のむら雨の空

人ならはおもひたゆへき雨もよにいとゝまたるゝ郭公かな

こよひたに聞かてやあけむ郭公雨の晴まの村雲の月

郭公はつねまつまに卯花の月もありあけの影そすくなき

長景すゝめ侍し歌の中に同題

またてきく年はなけれと郭公ねぬよのいたく積るころかな

四月許に嵯峨にまかり侍て京へかへらんとてそこに
すみ侍る人のもとへ申つかはし侍し

都にて何をかたらむ郭公はつねをきかてたちかへりなは

人傳聞郭公

なきぬとも我にかたるな郭公人よりのちの聲やまたれし

賀茂にて社頭郭公といふことを

しめのうちにはつねたむけて郭公そのかみ山を鳴て出なり

二聲郭公

みしか夜となにはたてとも郭公また宵なから二聲そきく
　河邊郭公といふ事を
五月雨のふるかはのへのすきかえになく郭公またもあひみん
　宇津山にて郭公をきゝて
都にてまつやかたらん郭公うつの山ちにはつねきゝつと
　旅にて郭公を聞侍て
都まて我をや送るやとことにおなし聲なる郭公かな
　奈良にまかりて侍しに
ふる里のならの都の郭公しらぬむかしのこともかたらへ
こかくれの三笠の山の郭公年へぬる音を神はきかすや
　内野にて郭公をきゝて
いにしへをなれもしのふや郭公おほうち山のあとになく也
　内裏にて時鳥きゝはへりて
久かたの雲のうへにてきく時もなをよそになく郭公かな
　郭公歌の中に
同しくはあけはてゝなけ郭公またぬ人にもはつねきかせん
まてしはしつらさうらみむ郭公またれ〳〵てすくる一こゑ
郭公けさよりそなく五月をはをのかときはの森のむら雨
郭公いま一こゑはあし引の山のあなたの人やきくらん
一こゑの名殘もつらし郭公こゆるたかねのゆふ暮の雲
郭公ゆふつけとりにあらぬねもきゝてそこゆるあふ坂の關
郭公なにうたゝねをさますらん二聲そきく夢もこそみれ
ありあけの月なかめすは郭公行かたしらぬねをやしたはん
山里は人こそとはね郭公たえすかたらふ聲はかりして
郭公なく音聞えぬあつまちも身は山かつの慰めもかな
　ひさしく郭公なかす侍ころ
都おもふ我にならへる郭公あつまに來ては音をのみそなく
　閏五月あるとし郭公をきかす侍しに鳴侍るよし人の
　かたりしに
郭公さ月くはゝることしたに人つてにのみきゝてやみぬる
　菖蒲
五月きてあすのあやめをひく袖にまつけふかゝる池の小浪
故鄕は軒のしのふもひまなきにあまりにふけるあやめ草哉
　雨中菖蒲
あつまやのまやのあまりの菖蒲草たまさへふける雨そゝき哉
　六日菖蒲
うらかれて袖に殘れるあやめ草ときすくるねは我のみそ鳴
　藥玉
玉のをのなかきためしはいろ〳〵の花ぬきかくる袖の白糸
　早苗
さかきさす森のしめ繩くり返しみとしろをたにとる早苗哉
けふもなを奥手の山田すきかへし五月雨すきてとる早苗哉
　夏歌中に
夏草の野しまの崎のしほ風にすゝしくさはく浪のさゆりは
　長景許にて題をさくりて夏草
夏草は庭のをしへのあとはかり我みち見せよ宿のこのもと
　庭の夏草あとなきまてしけりにたりとうらみ侍る人
　の返事に
あさゆふにおもひやらるゝ通路に心もしらすしける夏艸
　照射
木のまより峯のほくしのほのめくを闇を忘れて月かとそみる
さ月やみ思ひの外に月影のいさよふ山やともしなるらん

きのふたつと山すそのにしかやなき尾上を越ているともし哉

山五月雨

淋しさは夏こそまされ五月雨にかきこもりぬる山陰のいほ

河五月雨

いつみ河いつみしより〻五月雨はけふみかの原浪そこゆなる

沼五月雨

たつねはやいつれあさかの沼ならむ水のみ深き五月雨の比

夏月

人しれすすみける月のあたりしもまつ晴そむる五月雨の空

待程は秋におとらぬ月かけの出てはやかてあくるみしかよ

轉任事年久かなはて賀茂にて河夏月といふことを讀侍しに

この夏もみたらし河に照る月の沈める影にすみやはつへき

長景すゝめ侍し歌中に浦夏月

この頃はなか井の浦の海士人も月をみるめのよるそ短かき

ぬるかうちも覺るうつゝも夏の夜はみはてぬ夢に明る月影

新樹間曉月

庭のおもはあか月やみとみえなから木影のほかに有明の月

朝橘

あさとあけに吹いるゝ風のにほふかな軒の橘花咲ぬらし

故郷橘

五月來て今も花さく橘のなにおふ宮古あれまくもおし

右近橘を見侍て

雲の上わかたつかたの袖ふれてみはしの西に匂ふたちはな

歌合し侍りしに月前螢

月はなを心つくしのこのまにもさはらぬ影やほたるなる覽

江螢

なにはえの玉藻の光あらはれて波の上にもとふ螢かな

漕かへるたなゝし舟のいさり火やおなし入江にもゆる夏虫

浦螢

身を照らす光はみねと和歌の浦に螢あつめて年はへにけり

螢歌中に

煙たつ思ひとそみる夏むしのもえて亂るゝふしのなるさは

はるゝ夜のあしまの水に影みえて波のそこにもとふ螢かな

鵜河

あらし山かたふく月のかつら川光をかへてのほるかゝり火

蚊遣火

月をみるやと社夏はしられけれ外にはたつるよはの蚊遣火

淋しさにたつる煙となけれとも柴おりくふるよはの蚊遣火

みな月も涼しかるへき夕暮のあつさをそふる軒のかやり火

氷室

ときしらぬふしより外の氷室山こほりて殘る冬のしら雪

晩立

ゆふ立の雲井にひゝくかみなひのみむろの岸は水まさる也

晩立に日影のみえ侍しかは

かきくらす雲のいつくのひまもりて夕立なから入日さす覽

山家夕立

風はやみ涼しく曇雨雲の我かいる山の夕立のあめ

月前納涼

なかむれは涼しかりけり夏の夜の月には秋のかけやそふ覽

曉納涼

このほとは夢をわかれて有明の月にしみつを結ひかへぬる

山家納涼

山かけや風吹いるゝ松のとをさゝていくよかあかしきぬ覽

三首歌合し侍し時同題

涼しさはしみつを庭にせきとめて夕日よそなる山かけの庵

納涼歌中に

ゆふつく日よそにうつろふ山かけの涼しき宿にかよふ松風

かた岡のならの葉そよき風すきて夕かけ涼し日くらしの聲

結ふてにさはくいつみのさゝら波立よる人の歸りやはする

夏神樂

かはやしろ榊の枝にをりはへて波にかさぬる夏ころもかた

河やしろ波かけ衣をりはへてしのに聲するほとゝきすかな

榊さすきよき流の河やしろしのにかけほす夏衣かな

六月晦日みたらし河にて風涼しく侍しに

秋風はけふより吹ぬみそきするみたらし河の森の下かけ

六月祓

みそき河あか月かけてよる浪のかへるや夏の別れなるらむ

みそきするあさのたちえのとりもあへす更行空に秋風そ立

秋

初秋

さ夜ふくるみそきにかけしゆふしての靡きし儘に秋風そ吹

露は今をきもやすらむあけぬまは風社秋のはしめなりけれ

いつしかとはやうらかなしまくす原暮行そらの秋のはつ風

秋はきぬけふよりのちの夕暮を風につけてもとふ人もかな

月の色風の聲までわひ人の心つくせと秋や來ぬらん

風かよふ袖に涙の露ちりてねさめよりこそ秋は來にけれ

露よりもまつおちそむる涙かなね覺のとこの秋のはつ風

風のみや秋のけしきにかはる覽露はたらひのあさちふの宿

ふる里はいつも露けきあさちふに風こそかはれ秋やきぬ覽

秋はきぬ風は淋しく吹かへぬとふへき人はをとつれもなし

なとたてゝ一夜ふたよに成にけりおさゝか原の秋のはつ風

よな／＼は涼しくなりぬをさゝ吹わさたのいほの秋の初風

初秋月

今よりの心つくしもかつみえてこのまにいつる秋の三日月

初秋露

あさとあけて庭の荻原見渡せは露こそ秋ははしめなりけれ

秋風はまたをとつれぬ荻の葉の露にそけさは驚かれぬる

いつのまにをきかさぬらん夏衣またひとへなる袖の白露

七月六日

短しとあすは恨みむ秋の夜をけふ七夕やなかしといふらん

七夕

秋の日もなかしとや思ふ七夕にかしつる糸のくるゝ待まは

秋來てもなを短か夜をたなはたはなと長月と契らさりけん

天の河もみちのはしは秋の夜の月の桂の影にやあるらん

棚機のもみちのふねや天の河とわたる月のかつらなるらん

ひとりすみ侍し秋七夕を

七夕に今年はかさしひとりねの秋をかさぬるよはのさ衣

七夕後朝

きぬ／＼にかへる別の袖こえて我身うきぬるあまの河浪

行末はまたとをさかる天の河きのふそ近きわたりなりける

萩

秋たちていくかもあらぬ朝露にまつ咲つらむ萩のひと枝

このねぬる曉露に咲そめて花まとをなるもとあらの萩
棹鹿のけさなく聲に野へみれはもとあらのこ萩咲そめに鳬
いまははや鹿の音さそへ我宿の萩のふる枝の花の下風
みる人の心はかりと思しに月もうつろふはきのうへのつゆ
よそにのみみてこそやまめ朝またき折はこほゝる萩の上の露

女郎花

花にあかてなをやすくさん女郎花秋の限りは野へにあり共
色かはるたか秋風にをみなへし涙こほるゝのへのしら露
女郎花風の心のいかなれはなひくものからなをそむくらん

薄

さをしかのいる野のおはな暮行は誰た枕と露むすふらん
ゆふされは人まつ宿の秋風に袖かとみゆる花すゝきかな
人めなき宿のかきほの秋風におはなか袖のたれまねくらん

蘭

をり出す野への錦の藤はかま風と露とをたてぬきにして

草花

いまはまた思ひそ出るさかの山みなれし秋の花の色々

苅萱

いはしろの岡のかるかやゆふ露に松ならねとも結はれに鳬

荻

きゝなるゝ垣根の荻のをとつれも今はたかはし秋のはつ風

山家秋風

山かけやあしふく軒の荻の葉にひまこそなけれ秋風のこゑ

秋夕

むら雲の風にみたるゝ山のはの夕日の色も秋そ淋しき
小倉山くるゝ麓の秋風にきりのそこなるいりあひのかね

秋夕立

夏たにも涼しかりしをのわきたつ風をたよりの秋のゆふたち

初鴈

久かたのあまつさきりのあさ曇り吹風寒くかりは來にけり
小萩ちる夕風さむみ山かつのうつ衣かりそなくなる
秋風の寒く日ことになりゆけはころも鴈金なかぬよもなし
雲井まて稲葉の風やさそふらんふしみのをたに鴈は來に鳬
月はなを光もみえぬ秋のよのきりにもれくる初鴈の聲
秋風に雲かはれぬる山のはの月をよこきる初鴈のこゑ
なかむれは秋風いたくさよふけてかたふく月に鴈そ鳴なる

月夜に鴈のなきわたり侍しに和琴の月の調の事おもひ出て

久方のかつらの影にとふ鴈は月のしらへのことちとそ見る

鹿

女郎花おほかる野へになく鹿はいかなる草の妻をこふらん
小男鹿のいる野の尾花かりそめに結ふ庵はねむかたもなし
妻こふるときをは誰にならふらんふしの裾野の小男鹿の聲

夜鹿

月のすむよをうち山の秋風にみやこのたつみ鹿そ鳴なる

曉鹿

夢さむる閨のいたまに月もりて手枕なるゝさをしかの聲
淋しさをいかにしのへと山里のねさめの月に鹿のなくらん
さを鹿もねさめのゝちそ鳴そむる何に驚く夢にかあるらん

基盛朝臣許の探題に同題

夜をかさねつれなきつまや有明のつきす恨むるさを鹿の聲

山里にまかりて鹿をきゝ侍てのちよみ侍し

忘れすよねさめの月のあり明にほの〴〵きゝしさを鹿の聲

虫

松むしのはつねをさそふ秋風のほのかにわたる庭の荻はら

露さむき萩の下葉の色みえてはやいれかての虫の鳴らん

露しもに枯ぬときはのなはふりてなくれ異なる野への松虫

ゆふ暮のをのゝ篠はら忍ひかねあまりて虫の聲そほのめく

花みむと植し籬の一むらを野へありかほに虫そなくなる

出やらぬゆふへはさそな月影の入かたにしも松虫のなく

長きよになにを明すときり〴〵すあけても聲のなを殘る覽

月前虫

またきより霜とや月を水莖のをかぬさきにもよはる虫の音

終夜聞虫

夜もすからねぬともとなる蛬あはれと思へ哀とそきく

夢後虫

なれゆへに覺ける夢かきり〴〵す枕の下に聲そきこゆる

壁底虫

きり〴〵す壁におふてふ草の名の秋の思ひのねたやなく覽

蛬の枕邊になくを

都おもふ枕のしたのきり〴〵す我なくねをも哀とやきく

秋の歌の中に

虫の聲鹿のなくねも秋はたゝひとつ涙にあはれとそきく

露

風さむみ暮行にはをなかむれは萩のしつえをのほるしら露

涙さへもろくなり行秋風に草のかきはも露そこほるゝ

さをしかの朝たつ野への跡なれや風よりさきに露そ亂るゝ

霧

あけくれの空とみしまに我袖のおほえすぬるゝ秋の初霧

あらし山峯のあさ日ははれなから麓はくらき秋のかはきり

千鳥なくさほのわたりの河霧に駒ゆきなつみ家路ともしも

すみよしの岸のわたりになりにけり霧のあなたの松風の聲

山路霧

野へにては露わけ衣ほさてきて又きり深き秋のみやまち

關霧

秋ふかく霧たつころは武藏野の霞の關もなをやかふらん

槿

薄霧のまかきの竹のよをこめてぬれ〳〵咲る花のあさかほ

朝良のはなをやとりにをく露のいつまてかゝる命なるらん

待月

まちわふる月影さそへあし引の山のあなたの松のゆふ風

限あれは山のあなたにすむ人もまたいてぬ間の月はまつ覽

未出月

いつくにて誰と今宵の月をみむとよはた雲に入日さすなり

出月

秋風にたなひく雲はきえはてゝまつにかくるゝ山のはの月

山月

かねてより雲なき空をなかめつゝくらせる宵の山のはの月

曇りなき影をや空に移すらむかゝみの山の秋の夜の月

いく千代も曇りはあらし君かすむはこやの山の秋の夜の月

露しものまた色染ぬこの間よりしたてる山は秋のよの月

月もなをなくさめかたきうきよとや影すみはてぬ姥捨の山

霧はるゝ小倉の山の秋風に名にゝぬよはの月を見るかな

嵐山の月をみて

秋の夜はむへ山風のなもしるく雲もかゝらぬ峯の月かけ

峯月

ふしのねは雲より高き山なれとなを空とをく澄る月影

山路月

ふけ行は月も出なむ暮ぬともいそかてこえよさやのなか山

山地まてしたひてけりな久方の雲井に馴しよはの月影

河月

みなせ河した行水はしらねともうへにこほりて月そ流るゝ

野外月

夜半の月まつもおしむも山のはのつらさしられぬ武蔵野の月

山のはやいつくなるらむむさし野はを花かするゑに月そ傾く

關月

あふ坂の關もる水のなかりせは空行月をいかてとゝめむ

海邊月

隈もなき月によるともしらねはやかれなて蜑の藻鹽たる覽

なにはかた底にうつれる影見れは月のかつらにかゝる白波

住吉のまつほともなく出にけりゆふへにかゝる浪の上の月

すみよしの松はふたゝひ老ぬれと神代の月の影そかはらぬ

いつくにも光をわかぬ月をたになほ住吉とあまはいふなり

聖福寺の僧住吉新宮にて同題を

霧はるゝみこしのさきの波かけてなをすみ吉の月をみる哉

濱月

白妙の光そきよきふきあけの濱の眞砂の秋のよの月

八月十五夜

秋の月なかめからなる光かとこよひをしらぬ人にとはゝや

九月十三夜雨ふり侍しに

長月のなたかきかひもありなましきのふの月の今夜也せは

旅宿月

ひき結ふ草の枕の露にまた月も旅ねやよさむなるらん

人の許へまからんとて申て月まつほとによみ侍し

あり明の月まつほとのやすらひを問ぬつらさに人や待らん

ものへまかり侍る道にて

ゆふやみの山のは過てなかむれははるかに月はすみ登り鬼

里月

山のはをまつもおしむも月ゆへに慰めかたきさらしなの里

山家月

誰さとにまつうつろひてなかむらん我すむ峯を出る月影

月ははや木の間の外にさし出て心つくしはのきの山かせ

この秋はおのへのいほにすみかへて心つくさぬ山のはの月

庭のおもの鹿のかよひち跡みえて月に玉ちる萩のうへの露

秋風に月さえのほる山のはの軒のつまとふさをしかのこゑ

あとたえて世をうち山は人もなし都のたつみ月のみそ見る

きり／＼すなくやまさとの秋の月たゝ我のみそ哀ともみる

したもみち色つく山の木の間より軒はにうつるよはの月影

軒はゆくかけ樋の水の音はしてひとり氷れる秋のよの月

山さとにすむ月影の都まていかて心をさそひゆくらん

山深き住家ならすはなかめつゝこよひの月に誰をまたまし

年を經て馴すはいかにすみわひん獨深山の秋のよの月

とふ人の影たにみえぬ山里にあひやとりして住る月かな

山里も月のよころはこゝろせむ思ひの外に人もとひけり

我のみやあはれもみまし山里のこよひの月に人こさりせは

身にうとく雲井の影はへたゝりてなれて久しき山端の月

こぬまても都は人のまたれしを思ひたえたる山のはの月

故郷月

淋しさはいつくの秋と人とはゝたゝふる里の月をこたへん

月のみや軒をあらそふ蓬生のもと見し影にかはらさるらん

月の歌あまたよみ侍しに

木の間より心盡しにもる月の影みるからに秋そかなしき

おきの葉にはつ秋風の音たてゝ月のかつらにかゝるしら雲

かりかねの聞ゆる空をなかむれは夜わたる月に秋風そ吹

かねてたに早いねかてとなけくよの月の頃にも成にける哉

まとろまぬ夜は積る共それをたに思ふ事とて月をなかめん

今よりは露もはらはし月影を袖のものとはいかて見るへき

思ふ事ありしむかしの秋よりや袖をは月のやとゝなしけん

夜もすからなかむる袖のしほるゝは月の光やなみたなる覽

風にこそ露も落なれ月見れはすゝろにもろき我なみた哉

山とりのおのへの月の増鏡かけみるからにねこそなかるれ

曇りなき秋の月夜に見渡はかゝみの浦のかけにそ有ける

曉月

すみはてぬ都の秋のなこりとてよな／＼みつるあり明の月

山のはにたゝよふ雲はあけぬめり空行月になかめせしまに

惜入月

又いてむ後のたのみも忘られているをかきりとみつる月哉

擣衣

誰さとのねさめなるらん月かけのいるやまもとに衣うつ聲

衣うつよその夢さへたえぬらん我身一のねさめなれとも

秋風はまつこの里やさむからん外よりさきにうつ衣かな

色かはる萩の下葉の秋風にやゝいねかての衣うつなり

山家擣衣

日暮れはさむくふくなる山風にこゑうち添る賤のさころも

まさきちる峯のあらしに月さえておのへのいほに衣うつ也

田家擣衣

しかのたつ山田のなると引かへてねぬてすさひの衣うつ也

山田もるひたになれてや衣うつ宿にも鹿のとなさかるらん

待菊

夜のほとに花や咲とて見る菊のいくあさ露に袖ぬらすらん

菊歌中に

よろつよもおいせぬ秋のしら菊になにそは露のあたに置覽

けふまては猶しら菊の露しもにまつうつろふはにはの月影

とふ人の袖かあらぬかしもまかふたそかれ時の庭のしら菊

或人の夢に政村朝臣此題にて人々をすゝめて歌よませて心經を書供養せよと見侍とて時村すゝめ侍しに

庭前菊

露はらふ袖かとそみる秋風に亂れてなひくにはのしらきく

人にかはりて

それをたになたゝる宿のしるしとてときはに匂へ庭の白菊

秋霜

野へみれは萩の下葉も色つきて夕風さむく結ふ初霜

まくすはふおのゝ淺ちの夕霜に芦のうらみもかれ勝るなり

秋歌中に

ゆふつく日うつろふ山の秋風にもみちぬ松も色はみえけり

かはり行よそのもみちに秋もなをひとしほまさる松の色哉

風の音も木の葉の色も山里はひとかたならす秋そ悲しき

きのふけふ時雨かちなる山へかな哀れ木の葉の色かはる頃

物をおもひてよみ侍し
我袖もいろつくほとになりにけり涙しくるゝころの秋風
紅葉色淺
時雨ゆく雲たちかへり猶そめよ唯一しはの峯のもみちは
月前紅葉
月影のいたらぬ谷のこかけまてしたてる山はもみちなりけり
久かたの月のころこそもみちはのよるの錦も色まさりけれ
雨中紅葉
かき曇りしくるゝ雨のいかにして日影の色も紅葉そむらん
雨後紅葉
時雨つるひとむら雲の露のまに山をちしほの色に染けん
紅葉間松
常盤なる松も時雨の染れはや紅葉のころの色まさりける
庭紅葉
我やとは立田のふもと時雨して峯よりつゝく庭のもみちは
柞黄葉
はゝそ山また色淺し神無月しくれぬさきの秋のひとしほ
紅葉歌中に
ふゐ里にあさち色つく鴈鳴てきり立山はもみちしぬらし
染そめぬよはの時雨のむまやちもけさの紅葉の色に見えけり
そめかへしなにをあかすと時雨らん紅葉にかゝる秋の村雲
暮秋
木からしに殘る紅葉もあるものを惜むかひなく秋のゆく覽
ふりにけりみそちあまりの秋暮て今はおいその森のゆふ霜
山暮秋
なか月もゆふくれなゐの紅葉はにいまは限りと山風そふく
野暮秋
なか月も殘いく野のをさゝはら一夜ふた夜にむすふ霜かな
暮秋鹿
ちりつもる紅葉ふみわけ長月のありあけの月に鹿そ鳴なる
暮秋曉月
秋の夜もあさちか末のしら露にやとるもよはきあり明の月
長月はかきりとそみるはつ秋の有明たにも月はうかりき
暮秋落葉
秋の色もいまはかきりにうつろひて有明の月にちる紅葉哉
長月のあり明の空のこからしに桐の葉おつる窓の村雨
暮秋雨
秋はつるけふの空こそ晴やらね時雨は冬のはしめと思ふに
九月盡日
雲の上をこふる眺めにしらさりつ秋はけふこそ暮て行なれ
曉九月盡
更ゆくをおしみ〳〵てなか月のわかれの鐘のあかつきの聲
小九月盡
翌まてもあるへき秋のことしもけふをかきりに暮て行覽

冬

初冬
きのふたに嵐の音は高砂のをのへの松に冬は來にけり
松の音のけさよりことに聞ゆるは嵐のつてに冬やきぬらん
時雨せぬ山の木の葉もさためなく降こそ冬の初めなりけれ
冬きぬといふはかりにて秋たにも時雨し空のけさは晴ぬる
行秋のかたみの露も干ぬ袖に時雨かさなる冬はきにけり

きのふみし野へのゆふ露置かへて霜のふりはに冬はきに鳧

時雨

神な月あれたる宿の獨ねの袖の外にももる時雨かな

いひしらす淋しき物はね覺するまきのいたやの時雨なり鳧

けさみれはをちの高根そ曇るなるたかすむ里の先しくる覽

神無月しはとる峯やしくるらむゆふひにぬれて歸る山人

更行はゆきをやみまし宵のまの空さへさえて降時雨かな

旅時雨

ふる里の木すゑの色やいかならむしくれは旅の袖ぬらす覽

亡屋時雨

里はあれてふりにし宿は時雨たになをもり捨て跡も定めす

人のもとに申つかはし侍し

世のうさも人のつらさも神無月ひとつ涙に降しくれ哉

落葉

思ひやる山ちはさそな都たにふみわけかたき庭のもみちは

移りゆく雲のはたての山風に空に亂るゝ峯のもみちは

とふ人のあとなる宿と見せかほに風吹わくる庭の紅葉は

基盛朝臣許にて朝落葉

時雨つるよはと聞しもけさ見れは露なき庭の木のはなり鳧

山路落葉

紅葉はに道なくみゆる山里はあらしのさきにとふへかり鳧

杜落葉

ちらぬまにとはまし物を神無月いくたの杜はあらし吹なり

殘菊

うつろひし色ともみえす秋はてゝ降ゆく霜のしら菊の花

霜

みつしほのさしこすほとはつらゝゐて末はに殘る芦の朝霜

柴の戸をしあけかたの風さえて庭のくちはにこほる朝霜

冬草のくちはからへに置しもは菊より後の花とこそみれ

寒草

秋暮し露より霜にむすひきて軒はの荻の音そかれぬる

長月のもとの雫もほしやらて末葉にこほる霜のした草

庭ふかきくちはかうへも白妙にふるえに氷る萩のあさ霜

山里の人目はときもなきものを草葉は冬そ枯まさりける

江水

みつしほのいり江は波に立かへりあしまに殘るあさ氷かな

冬月

里わけて曇りくもらぬ空なれや月のよそなる雲そしくるゝ

冬かれのおはなか袖のしろたへに霜をかされて氷る月かけ

ふけ行は氷そまさる千とりなくきよきかはらの冬のよの月

降すさむ雪けの雲のたえまより氷かさぬるにはの月かけ

これやこの高根の松のひまならん雪のそこより出る月かけ

千鳥

浦ちかき宿こそ冬は淋しけれね覺の千とり月に鳴なり

あり明の月の出しほの浦風にいりうみ遠く千とりなくなり

水鳥

夜な／＼の氷のとこや寒か覽おちはかたしく池のあしかも

霰

さゆる日にふるや霰のなこりまて氷て殘る庭の玉さゝ

このころは霰みたるゝ玉さゝの葉わけの風の音のみそする

あらし吹まさきのかつら散はてゝ外山もいまは霰ふるなり

みよし野はけふもみ雪やふる里のならの枯葉に霰ちるなり

ふしわひぬあれたる宿のいたまあらみもるや霰の床のた枕
涙たに置ところなき我袖も玉こきちらし降あられかな

月前霰

月かけは曇りもはてぬうす雲のたえまかちにも降あられ哉

冬歌中に

冬の夜は松なき宿に住人や嵐もきかて夢むすふらん
ちりはてし梢はかよふ音もせすまつはかりにや嵐ふくらん
暮行は嵐のをともはけしくてまた雪けなる雲のいろかな
人とはぬ窓の呉竹うちなひき雪けの風の音のみそする

初雪

さよなかに寝覚さりせは初雪の降にけりとも翌そしらまし

朝雪

明るまてあり明の月はさえつるをいつ曇りけんけさの白雪
むは玉のよはの小衣さえ〱てうらめつらしきけさの初雪

夜雪

雲ふかき闇はあやなし白雪の光は月にをとりやはする

山雪

槇の戸をし明かたになかむれは山のはしろく雪は降つゝ
雲はれぬ都もけふは時雨して雪になりゆくしかの山こえ
この山やいかに見ゆらん都たに木すゑは花とまかふ白雪
此里はあられ亂れてあしひきのとを山白く降れる初雪

山路雪

あと絕る山路はよそにあらはれてつゝら折にも降れる白雪

野雪

暮行は野風をさむみ雪ちりておもはぬ草のやとりをそかる
我あとをくるゝ人やとめくらん今ふみそむる野ちの白雪

雪中船

見渡せはうちのしは舟うつもれて雪こきくたすまきの嶋人

雪中旅

落つもる蔦の朽葉はうつもれて雪わけわぶる宇津の山こえ

山家雪

降や雪山路たゆともうらみしな人めは宿のならひなけれは
ふる雪にとふ人もなし山里は柴こる道のあとはかりして

閑居雪

さしこむる葎の枯葉うつもれて雪にとちぬる宿の門かな

雪歌中に

小夜衣そてさえ〱てあまのとのをし明かたに降れる白雪
きのふかも高根はかりにみし雪のはや麓まてけさそ降ぬる
あり明の月は雲まにみえなから袖にみたるゝよはのしら雪
宵のまにさえつる月は曇れとも同し光にふれる白雪
明るまてさやかにみえし月影のいつくもりてか雪の降けん
ふる雪は秋みし色にかはれともはきのふるえの花さきに皃
我やとのまつはかひなくふる雪にをちかた人の誰をとふ覧
暮行ははらひもあへし雪積る山のしたしはけさやからまし
をの山の雪ふみわけてたち歸る都はけふもしくれなりけり
大はらや山のはしろく降そめて宮古もけさは雪解なりけり
はしたかのすゝの篠原降すさみ積りもあへぬみかりはの雪
降雪にをちかた人の道はあれと我あとはかりなとか絕ぬる

賀茂の臨時祭の舞人つとめて侍りしに雪のふりて侍しを思ひ出て

忘れすよそのかみ山のやまあゐの袖に亂れしあけほのゝ雪

人のもとに申つかはし侍し

降そむるほとこそ人も待れつれ思ひたえぬる雪の下みち

雪のふる日とはすと申人の返事に

思ひやる心は人もしら雪にあとつけてこそとふへかりけれ

夢中によみ侍し

雪降れは庭も木すゑも白妙の花と月とをひとつにそみる

神樂

神かきのまつの嵐にかよふなりあつまの琴のよりあひの聲

山人の庭火にこれるみをたきにさとる榊のかをそ留こし

禁中神樂

とのもりのにはひの影もほの〴〵とあくる雲非の朝倉の聲

たきすさむ雲非の庭火かけろひてほのかにかへす朝倉の聲

遠炭竈

まきのたつ炭やく峯や遠からむ日暮て歸る小野の里人

歳中梅花を

冬なから春たつ年の色見えて雪まに匂ふ梅のはつ花

年くれて春の隣もあしかきのまちかき宿に咲る梅かえ

年暮如水

氷たに結もとめぬたき河のはやくなかれてくるゝ年かな

基盛朝臣の許にて歳暮

あはれなりみそちあまりの年暮てよそに思ひし花そ近つく

戀

初戀

きのふまてかゝる心はしらさりき眺めからなるけふの空哉

覺束なこひてふ事もしらぬ身にたゝならけしの袖ぬらす覽

さやかにもみさりし月の俤に曇りそめぬる我なみたかな

我戀はまた谷出ぬうくひすのはつ音なりともしる人もなし

花薄ほのみしのへのゆふ霧にしほたれそむる袖としらすや

花すゝきほに出そむる袖とてやかこち顔にも露のをくらん

山あひのはつしほ衣いつのまに心にふかく思ひそめけん

たちそむる袖のしら露つもりては涙のかはの名にや流れん

あふとみし夢の契を頼みにてそのねさめより思そめてき

聞戀

荻はらやはつ秋風の一こゑを聞そむるより袖そ露けき

白河の關のあなたにありときくつほの碑いかてふみゝん

見戀

春の夜の霞へたてゝゆく月のほのかにみてし影そ戀しき

忍戀

したにのみ忍ふもちすり忍ふれと思ひ亂るゝ色やみゆらん

何ゆへにしたの亂となりにけん心のをくのしのふもちすり

露とたに袖にはみせすよな〳〵の人なきとこにあまる涙を

つゝみかね露もる袖のしたもみち色に出ともうきな散すな

我戀はみ山つゝきの道なれや人しれすのみふみまよふらむ

我袖の涙なるらしみなせ河うへはつれなきしたのかよひち

我戀はしのふの浦のおきつ波をとになたてそ人のきかくに

忍通書戀

またきより浮名やもれんふく風にかきやる袖の露の玉つさ

忍契戀

すゑの松ゆく末契る波よりも音にたつなとまつやかけまし

顯戀

獨りねのよな〳〵ゆるす涙より聽て浮名のよそにもりぬる

待戀

我やとは軒のしのふに露ちりてくるゝ夜ことにまつ風の聲
人はいさこぬ夜あまたの僞をまたしとまてはえこそ思はね
恨みすよ空たのめなる夕暮もいけてこしよを慰さめにして

人のふけてこと中侍か心もとなくて

君かこん時こそあらめまつ事の我ゆくよさへかはらさる覽

不遇戀

あふ坂にあらぬなこりの關もりを我戀ちには誰かすへけん
逢事はかた野にたてる楢芝のいつならひてかみねは戀しき
鳫金とゆき違ふなるつはくらめ逢頼みなき音をのみそなく
夜もすから月に尋しとも船のあはてこかるゝえに社有けれ
あふ事けまとろむ夜はのあらは社夢はかりなる契をもみめ
はかなくも夢に慰むうつゝかなあふとみつるを思出にして
年をへはいとふにまけぬ戀しさの心くらへも誰かよはらむ
いつまてかあらはあふ夜を頼けん戀しなぬ身と歎くころ哉

人のもとへ申つかはし侍し

なからへぬ契とならは別れ路にあはてさきたつ命ともかな

或人の夢に政村朝臣此題にて人々をすゝめて歌よませて心經を書供養せよと見侍とて　時村すゝめ侍しに

不遇戀

逢ことにかへぬ命のさきたゝはよしのちのよを今は頼まん

過戀

戀しなぬ身の息のつらさこそあふよはかへて嬉しかりけれ
恨みこしうさもつらさも忘られて逢夜は物もいはれさり鳬

別戀

別れ路の人のかたみも我身よりあまる思ひの涙なりけり
まちしまのふけしつらさも忍ひきてたへぬ命は別れなり鳬
別路をすゝむるとりのをのれさへなと曉はねをつくすらん
歸るさをなを夜深しといひなせは僞しらぬとりのねもうし

後朝戀

けさはしも誰に別てかへるらん我身はなれぬ君かおもかけ
思ひ置こゝろは露も身にそはて我にもあらす歸るけさかな
別路にともなふ月はあけはてゝおもかけ殘る袖の朝露
いにしへも我かまたしらぬ別ちにむすほゝれたる袖の朝霜
逢と見るまたねの夢の覺ることそふたゝひつらき別なりけれ

遇不遇戀

たか中の心つくしにふきかへてよそになりゆく松風のこゑ
逢坂のゆきゝに馴しとりの音をいく夜むなしき床に聞らん
夜を重ね詠めそあかす戀しくは月見にとしも契らさりしに
在し夜をさなから夢になしはてゝ闇のうつゝに猶迷へとや
待よひの日頃にもにすふけし社心かはりのはしめなりけれ
逢事はうつゝともなき一夜にて二たひ夢をなとみさるらん
あふ事は夢より外の道そなきいかにみし夜からつゝ也けん
すゑの松たか契よりかけ初てつれなき波を袖にこすらん
人はいさ波やこすらん我はかり契し末のまつとせしまを

寄月戀

いつとても月の夜ころはねられぬをあやしくもろき我涙哉
秋のよの月よいかなる影なれはなかむるからに人の戀しき
人しれぬしのふの山のした露もあらはれぬへき月の影かな
曇れたゝあなあやにくや人しれぬ我通路の秋の夜の月
眺めつる月をそかこつやとらすはなに故袖の露もしられん
今よりは心してみむ人めもる袖の涙に月やとりけり
たのめても人そつれなき我袖の涙に月のよかれやはする

なかむれは我心のみあくかれて人をさそはぬやとの月影
人はいさことひの月をなかめても思ひや出る我そ忘れぬ
あふ事はぬるまをたのむ夢ちさへ猶たえぬへき月のころ哉
あめにたに頼めぬ夜はもこし人のつらさをみする月の影哉

寄星戀

七夕の雲の衣のまとをなる契りくらへに我やなりなむ

寄雲戀

戀しなむ身をはおしまし白雲の消てあとなき浮名なりせは
思ひきやたかまの雲のよそなから聽て隔てゝ遠さかれとは

寄風戀

我袖のなみたならねと大方も秋風ふけは露そ亂るゝ
うきものと思ひそめてき頼めつゝこぬ夕暮の松風のこゑ
つれもなき人の心の風ならは松にはたえすをとつれなまし

寄雨戀

くれなゐは空にまかはぬ涙かな秋の時雨に袖はかせとも
我袖よなとて涙に染るらん槇の尾山も時雨もらすや

寄煙戀

いつとなく思ひにむせふ煙哉室のやしまや我身なるらん

寄霞戀

つれもなき人の心や春霞まちかき里もへたてゆくらん

寄霧戀

かきくらす心のほかもはれかたく空さへ秋は霧こめてけり

寄稲妻戀

宵のまの空にほのめく稲妻の影はかりたにみてやゝみなん

寄霜戀

みせはやなまつ夜の月の影たけて霜置まよふ曉の袖

寄霰戀

みせはやな霰みたれて寒き夜にひとりかたしく袖の氷を

寄春戀

春のよのみはてぬ夢の名殘しもなと覺かたくけさまよふ覽

寄夏戀

みしふつきおりたつたこにくらへみよ我戀路社袖は朽ぬれ

寄秋戀

我そてを人なとかめそ野も山も秋はならひの露に亂るゝ
しのふ山なにはかくれぬ露ならは染る下葉の色やみゆらん

寄冬戀

我涙もみちを染る露たにもいつかはをのか色にいてける

寄朝戀

神な月空のはれまも我袖はたえぬ時雨にぬれぬ日もなし
立[illegible]るみちのあさちの朝露は袖よりつたふ涙なりけり

寄山戀

契り置しすゑの松山いかならんまつ我袖に浪はこえける

寄岡戀

人心つらさは雪とつもれはや身はふしのねのもえわたる覽
けふまては忍ひの岡のしの薄いつほに出て人をこひまし

寄原戀

戀しなぬ命そつらきなからへていきの松原まつかひもなし

寄河戀

みなせ河した行水もあるものを袖にうきぬる我涙かな

寄江戀

我袖もいろにないてそなには江の波のした草ぬれはぬる共

寄海戀

伊勢の海に汐汲蜑のあとも猶ぬるゝはかりそ色はなかりき
いせの海士の汐たれ衣いつよりか波のよる〳〵袖濡しけん

寄濱戀

つれなさの限りもはても白波のはままつかえの年はへに鳬

寄浪戀

松山にあらぬ我身をこす浪も契るにたかふなみたなりけり

寄里戀

思ふ共かひなき世にや長らへむいはての里のいはてやみなは

寄橋戀

いははしの夜の契もあらはこそ明るはかりを恨み渡らめ

寄社戀

住吉の松になひかぬゆふ襷つれなかれとは神にかけきや

寄紅葉戀

よそにみししのふの山の下もみちよるの袂にたれうつし劔

寄藤戀

いつはりと思ひなからも立歸るまつにたのみをかくる藤浪

寄卯花戀

よひ〳〵に待えし袖のおもかけを垣根に殘す庭の卯花

寄瞿麥戀

夜をかさねはらはぬ露やつもるらん君こぬ宿の瞿麥の花

寄葛戀

秋風の吹しくをのゝまくす原うらむるほかの言の葉もなし

寄雉戀

烟たつ燒野のきゝすつま戀に我身ももえてねをのみそなく

寄郭公戀

郭公ほのかなるねをきゝしより袖の涙の五月雨のころ

寄糸戀

あはてふる戀の亂れのかた糸は苦しとはかりいかて知せん

旅戀

ふる里のあれたる宿にいもをゝきて旅をし行はしつ心なし
かりねする草の枕の露けさも袖の涙にまさるなりけり
かりそめの一夜なれともさゝまくら結し露の契りわするな

戀歌中に

難波なるみつともいかゝ語らましうつゝ共なき夢の名殘は
いかにせん露とこたふる我袖の涙もあらぬ色となりなは
待わひて恨みし夜はのそのまゝにいく有明のつらさみす覽
をのかねにおき別にし朝よりゆふつけ鳥の鳴ぬよもなし
我ために思へはつらき命かな人のうきよをなからへて見る
年を經て思ひけりともしるはかりかはる涙の色を見せはや

人と戀歌の贈答し侍しに

とへかしな涙しくるゝ神な月袖の紅葉の色はいかにと

返し

誰をかはわきてもとはむ神無月なへて時雨のそむる袂を

人のもとへつかはし侍し

戀しさの慰む事はなけれともかこつ方とてねをのみそなく
思ひいつやさこそ心はへたつとも契置にしむら雲の月

京なる人のもとへ申遣し侍し

戀しさのあまりになれは水莖にかき流すへき言の葉もなし

京へのほり侍し頃いまたあはぬ人のもとへ遣し侍し

あちきなやなとて心をくたくらん重ねぬ袖のよその別れに

ものへまからむとて人のもとへ申つかはし侍し

めにちかき人のつらさをいとひても雲ち隔てむ程の悲しさ

人のしのふわすれ草をみせ侍しかは
わすれ草うき名に人の枯ゆかはひとり信夫の露やはらはん

夏戀
もの思へはあくかれいつる玉河のうき瀬に燃てとふ螢かな
なには江や芦のしけみに飛螢さても思ひはかくれさりけり

絶戀
逢とみし夢路はかりのすさひたに絶てうつゝの慰めもなし
なをさりに今宵はかりの契かといひしは人のまことなり鳧

忍絶戀
あふ事は軒のしのふをかことにてやかて忘るゝ草そ茂れる

長景すゝめ侍し歌の中に恨絶戀
つらしとて人をも身をも恨みしは猶も名殘のあるよなり鳧

思
せみはもえ螢はなかす我のみやひとつにかねて年のへぬ覽

片思
いつのよの我つれなさのむくひとて厭ふ人しも戀しかる覽
なひかしなしほやく浦の片おもひ我のみむせふむなし煙は

恨
秋風のふきしく野への葛かつら恨るほとのことのはもなし
おほろけの恨とやおもふ秋風のふきと吹にし小野のくす原
わきもこやまくすか原にいりにけん恨る外の言の葉もなし
なにゆへに人のつらさも増るそと［　　］
たちかへり思へは人もつらからす我身ひとつの浮世なり鳧
身のうさを思ひしらすはなけれともつらきは人の心なり鳧

雜
月影の宵曉はかはれともまた弓はりにたちかへりぬる
我ことや人も月夜をたのむらん暮て行來のあふ坂の山

雲
かさし折袖かとそみる三輪の山ひはらの上にかゝるしら雲

羇中雲
行末になかめし峰のしら雲はこゆる山ちのあとうつむなり
歸り見る都のさかひいつくともしらぬ山路のあとのしら雲

松
うへ置し人はいくよにふりぬらん小高き松に苔おひにけり
千とせまてかけはならへて徒に世にふるともと松をみる哉

蓬
露はらふ人こそなけれふる里の庭のよもきふ風にまかせて

鶴
なにはかた浦こきくれは有明の月の出しほにたつそ鳴なる

浦鶴
雲井にも聲は聞えて芦たつのよにたつ空もなく〳〵そふる
わかの浦にはねを並へしとも鶴の我おと計りなとかたゆ覽

鷄
にはつ鳥かけの垂尾の打はへて浮よはいつもねそ鳴れける
明やらぬ寢覺のまたねさめかへりいくたひとりの聲を待覽

名所の歌あまたよみ侍し中に嵐山
うき人の心の秋のあらし山となせのたきは袖におちつゝ
たきゝこるゆふへはきたの嵐山かへさ淋しき谷のかよひち

かめ山
萬代のありかすにせん龜山の松のいはねの瀧のしら玉

をくら山

淋しともいつかはきかむ小倉山むかし馴にし峯のまつ風

たかをの山

たかを山たえすしくるゝころなれや都のいぬゐ雲そ晴せぬ

松のお山

萬代ときみかみかけを祈かなまつのお山の神にまかせて

宇治山

我庵はあつまの奥に有なから世をうち山といはぬ日もなし

とり邊山

いける世に絶ぬ思ひのはてやさはとりへの山の烟なるらん

かさとり山

笠とりの山にいるともわひ人は身をしる雨に袖やぬれなん

かすか山

今ははや神たにしらしかすか山よにあらはれぬ谷の埋木

みかさ山

ふり出る我身時雨のみかさ山いつまておなし影にかくれん

かつらき山

かつらきの麓にかゝるしら雲はいつれの山のたかねなる覧

しられしなかつらき山にゐる雲のはれぬ思ひの心たかさも

三輪山

いはと明しそのいにしへの笛竹のいく代になりぬ峯の神杉

天香具山

やをよろつ神のうたひしもろ聲にいはとを明る天のかく山

吉野山

みよし野の山のあなたを尋ともうきよの外の宿やなからむ

すゝか山

思ひ出る昔はいまにならねともまたけふこゆる鈴鹿山かな

さやの中山

東路のさやの中山なかたえし宮古をいてやまた歸りみむ

宇津山

故郷の夢にもみえようつの山うつゝにまよふつたの下みち

宇津の山うつゝも夢となりに兒いにしへわけしつたの下道

うつの山またこの秋やわけわひんこそふみなれし蔦の下道

さらしなの山

身のうさそなくさめかたき更科の山より出る月は見ねとも

ちとせ山

行末はかきりもしらぬ君か代を誰か千とせの山といひけむ

かみなひのもり

誰にかは紅葉のぬさをたむくらん冬たつ月のかみなひの森

山なしの里

いつくにか身をはかくさむ事繁き浮世へたつる山なしの里

不破關

駒とめてふはの關もりことゝはむ越路にかゝる道は何れそ

宇治橋

徒に年ふりまさる我身をやあはれとはみる宇治の橋もり

すみの江

すみのえの松ならねとも徒に神さふるまて身そふりにける

鹽竈浦

なのみして燒とはきかぬ鹽かまのうらの烟や霞なるらむ

若浦

古のしちのまろねにあらねともゝよかすかくわかの浦人

わかの浦は沈みし袖そほしわふる人にこされし浪の騒きに

野

武藏野や露もるいほのさゝまくら夢も結けてあけぬ此よは
むさし野けこと山みえぬ雨雲にふしのねはかり殘るしら雲
夢の中けなをふる里の空なからさむれはあらぬのへの月影
忘れつよおはなかり吹野へのいほの露は枕になれし月影

橋

うらやましなからの橋の跡迄も朽果ぬ名のたゆるよそなき
山河のいはとかしはのつたひはしふみも定めぬよを渡る哉

海路

これやこのいなの港になりぬらん浪路にかよふ峯の松風
便りなき沖にてにけり山のはも目にみぬ風のしるへ計りに

眺望

和田のはらなきたる朝に見渡せは雲井のみ社限りなりけれ
春ならぬなかめも末のかすむこそ遠き雲路の限りなりけれ

あつまに侍しころ思都といふ題にて

東路にいかにすみてかすみた河こと問ふ鳥の名をは忘れん
すみた河我おもふかたの都とり戀しきたひにことや問まし

京へのほらむとてかと出の所にて

都おもふ夢のかよひちさめかへりうつゝにみるも古里の月
このほとは故里なからやとかへて旅に先たつ旅ねをそする

竹下といふ宿にとまりて

旅衣なれにし里をへたてきてふたよになりぬ竹の下ふし

青墓にて故相公の歌を思ひいてゝ

いつくとそたつねし昔の青墓に今も置そふ袖の露哉

あしやにすみ侍しころ京より人まうてきて歸侍しに

尋來るふる里人の歸るさは我心さへとまらさりけり

あつまへ下るとて京出侍しに雨そほふり侍しかは

わか袖に雨も涙も降そひぬ都わかるゝよこ雲のそら

鏡山にて

こしかたの面影みせよ鏡山けふよりのちの忘れかたみに

なるみのしほみちて山路にかゝらむとて

しほみたはよそに鳴海のうらわかれ白雲かゝる山路にそ行

同旅宿にて

おもひねの都の夢ちみもはてゝ覺れは歸る草枕かな

しほひ坂より船にのりて濱名橋のやとにつき侍とて

みなとより入海とをくさすしほに棹をまかせて登る海人舟

同旅の道にて

あはれけふ都にかへる人もかな覺束なさのことつてもせん

菊河にて

露なから濡てほすなり旅衣さやの山路のきく河の水

宇津山にて

都には青葉をそめし宇津の山つたもかへても紅葉しにけり

六連にて

立まよふなみかあらぬかわたの原ちさとの沖にみゆる白雲

旅歌中に

都をはかつへたてつゝ逢坂の杉の梢にかゝるしら雲
いる月に都をこひてなかむれはおなし空をも出そへたつる
草枕むすはぬほとは旅寢にてまとろむ夢は都なりけり
とりの音を旅の夢ちのかきりにて結ひもはてぬ草枕かな
浪かくる蜑のとまやに一夜ねてもしほもたれぬ袖濡しつる

あつまに侍しころ京より人のいのちのうちにいかていま一たひたいめんし侍るへきよし申送りたりし返事に

あふことを今ひとたひと思ふにもうしろあたきは命なりけり

さとの國へなかされて侍人のもとへ申遣し侍し

すみなるゝ故里なからみるたにも淋しき月に思ひこそやれ

はるかなる波路ともなしあさ夕に思ふ心はゆきかへりつゝ

人しれすねても覺ても思ひやる佛ならていつかあひみん

定有春ゐなかへ下り侍しに

馴かれの春のつらさにいつなれて花のころしも別れ行らん

人の餞別に

歸りこむたのみはかりに慰みて思はぬかたの道いそくなり

山家風

すみなれは淋しからしと思しにきゝしまゝなる峯のまつ風

眞木柱

すみなるゝこの山里のまきはしら跡たに殘れ我のちのよに

夕樵夫

たきゝこる峯のあなたや時雨けん夕日にぬれてかへる山人

閑居煙

淋しさに柴おりくふる夕煙里のしるへとみやはとかめぬ

田家

世の中はいほさすをたになく鹿の驚きなから立もはなれす

秋はつる山田の庵のひたふるによに捨られてひく人もなし

故郷

故里は松の風のみをとつれて月よりほかにすむかけもなし

和歌會百日滿侍てまた百日はしめ侍んとて

わかの浦もゝ夜の數を書のへてもくつの外の玉を尋ん

和歌の浦や今年よとせの秋をへて百たひ拾ふかひもあら南

これは百日歌よみ侍ことのつもりたることをよめる。

河内入道覺因の許へ揚名介事とひ侍とて

昔ならて誰にか問む夕かほの花のあるしはしる人もなし

返　事

夕貝のはなのあるしも白露の置忘にし袖そぬれそふ

人の琴をかりてみとせといふに返とて

今はとてみとせてならす琴の音にひき別るゝも悲しかり鳬

述　懷

花の咲春にやあふとまちしまに身はとしふかき谷の埋れ木

年ことに老の數をは身にとめてよそにわかるゝ春の色かな

衰ろふる我身ひとつにあらぬよにおなし影なる月をみる哉

つれもなく浮世にめくるたとひとて有明の月を眺めつる哉（ともとこそみれイ）

山のはにいるみちしらぬ有明は浮世にめくる我ともにせん

我ななをともとやみらむ高砂の尾上に朽し松のむもれ木

數ならて老ぬる友は高砂の松ともいはし谷のむもれき

つれなくて世にふる友と高砂の松も我をはあはれとやみん

すま人のきのふの山にのこす木のたゝ徒に年やふりなん

一日みし雲井をこひてあしたつの歸る里へにねをのみそ鳴

みひとつの憂にあきりし芦たつのこを思ふねを重ねてそ鳴

波こゆる沖つ小島の岩かねにすむなる鳥の名にそしほるゝ

難波えやあまのすて舟いたつらに引人なくて身そ沈みぬる

いかにせんわかみよとめるふる河のすゑは絶ぬと歎く頃哉

我よにや跡は絶なん雲井まてにはのをしへの道はありしを

雲の上に我身はさをくへたて來ぬ近きまもりのなを賴め共

なからへは君か惠もまつへきを定めなき世にみはふりに鳬

すみわふる身はすみのえに沈むとも言のは殘せ岸の松か枝

もろこしの文みるあとは變れとも雫をあつむる大和言のは

うき身には又渡らしと水莖のあとをいつくのはしに殘さん
ますかゝみうつれる影や人なから人かすならぬ我身なる覽
あはれ我身は數ならていたつらにうきこと多く積りゆく覽
おいらくよ名さへ浮世に沈む身をなを人數に許てやこん
あめの下よにふる人は多けれと我身ひとつの袖そかはかぬ
嬉しさをつゝみもなれぬ我袖に絶すかゝるは涙なりけり
くり返し思ふもかなしをとろふる身は山賤の賤のをたまき
あらましを思ひつゝけて身のうさを忘るゝ外の慰めもなし
思へ共身のうき事は數々にさのみはえこそいはれさりけれ
なに事にとまる心のあるよかと我つれなさを誰に問まし
世の中をまつともしはし住なれむ都にとまる心殘さて
いとはれぬうき世と誰か歎かましいつもね覺の心なりせは
なからふる人のためしをひきかけてしらぬ命のあすを待哉
いとはれぬ世をやそむかん昔より思ふ事のみたかふ身なれは
うき事の限りを見るも嬉しきは世を厭ふへき道そしらるゝ
すみわひていまはとおもふ山ちまて同し心にいる人もかな
年たけはいらむといひしみ山ちの老をもまたす急かるゝ哉
うきは世の習ひといひし慰めも餘りふるれはかひなかり鳧
春日山神の惠みの春もなをよはぬ谷のむもれ木
春日野や神もさこそは忘水世にすむ數にあらぬ身なれは
いのりこし神に我身を任せてもかひなく沈むえに社有けれ
神かきに祈る我世もかひなくはそをたに厭ふ道をしらせよ
よゝふりてその名をかけし柏木のはもりの神よ今も變るな
世々へぬる契りくちすは柏木の葉もりの神も我を忘るな

中將を申侍しかともかなはすしてなけき侍しころ寄
月述懷といふことをよみ侍し中に

思ひ出のありやなしやを人とはゝ月見る外はいかゝ答へん
よそにのみみかさの山の峯の月うらやましくもさし登る哉
わかの浦やいへの風なき海人も思ひはるけて月は見るよを
思ふ事あるとはなしにあちきなくよを重ねてもみつる月哉
我のみや沈みはつへきみなそこに宿れる月も空にこそすめ
すみわたる我身よいかにみな人のおしむ月たに山にいる也
をくらさていらぬ山へに誘へ月世にすむかひの有身共なし
有明の月ならなくに山のはに思ひもいらてよにやめくらん

おなしころ秋の除目ちかくなりてさやらの事られへ
申人のまうてきて歌よみ侍しついてに

この秋は我名もらすな三笠山さのみ時雨に袖やぬるへき

おなしこゝろをよみ侍し

三笠山なとこえかたくなりぬ覽〔論歟〕よゝのふる道跡はあるみに

轉任の事上首多とて沈論し侍頃河といふ題にて

いかにせむ我身せかるゝ古河のよとめは末の絶ぬへき身を
最上川のほるとはなきいな船の下り果ぬる身をいかにせん
山川に沈みはてぬる埋れ木の浮名はかりやよにはなかさん

雅顯少將所望のころ長景もとの探題に述懷

こえかねて我身年へし三笠山こを思ふ道に又かへりぬる

老人述懷といふ題をさくりて

ふしの根の雪にこかるゝ煙こそ年ふる人の思ひなりけり

所ともめされ侍しころ人の物へまかり侍しに

よるへなき身は浮草となり出てさそはぬ水をなをしたふ哉

歎事侍しころ

行末は斯るへしともしらて社さりともとのみ頼みきつらめ

賀茂社に述懷卅首をよみて奉し中に

あはれとも神はきかすや郭公うきみやまへのこかくれの聲
なにことにとまる心と身にとへは只いひやらすぬるゝ袖哉
世中はかくこそありけれとはに（本ノマヽ）のうき慰めに年をふる哉
いまそ我ともとしりぬる徒に年へてたてる高砂のまつ
身のうさはさてもかくてや山鳥のをのれ恨みてねをは鳴へき

懐舊

思ひ出のありしはさそな昔はうかりしさへになとか戀しき
思ひいてのありきあらすはしらね共昔と聞はまつそ戀しき
戀しさのさむるとそなき夢とのみなりし昔やうつゝなる覽

寄夢懐舊

思ひねの心からなる夢にたによな〳〵こさの昔やはみる

夢

いかはかり夢路は近き都とてうたゝねのまに行かへるらん
ぬるうちもうつゝの外のよをやみる何を何とて夢とわく覽
うしとても此世の夢はみもはてゝ長き眠をいかてさまさん

或人の夢に政村朝臣此題にて人々をすゝめて歌よませて心經を書供養せよとみ侍とて時村すゝめ侍しに

雖叶思

行末をかねてよりみる夢もかな頼みなき世も思ひさためむ

右題をあまたよみ侍し中に

夢ならていかてふたゝひたらちねの昔なからの面影をみん
思ひ出るおもかけならてたらちねに今一度のあふ事もかな

無常歌中に

思ひとけはきえん程なき命かな氷のうへの春のあは雪
世中は日影におりてをく花のしはしもいかてあらんとす覽
久かたの天つ雲井にとふ鳥の跡はかもなき世にこそ有けれ
なからふるよそのならひに怠りて頼命のあすもはかなし
昨日見し人はけふなきよの中にあす迄我身あらんとやする

先人日記をみ侍て

夢ならて見ぬ世の事をみつる哉むかし書をく筆のすさみに

同時に亡父無文燻革韈ゆりすして身まかりし事を思侍て

あやめなき煙の色を身にそへて絶にしあとの思ひはるけん

同月忌の日

郭公けふはまつかなしての山こえにし人のゆくへかたれと
たらちねの跡問ふけふをかたみにて行衞もしらぬ昔戀つゝ

世中さはかしく侍しころ

うらめしき春にもあるかな櫻花心のほかにまつ人もなし

人々おほくうせ侍しころ

此春はねなくにみつる夢よりも花のちる社のとけかりけれ
限りなきこの夢みても世のうさを猶驚かぬ身とやなりなん

諒闇のよし聞侍て

春の日の霞のたにゝいりしより心のやみに花をたにみす
世のうさを何につけてか慰めん花をみるへき春にあらねは
暮し日のそのゆふへより墨染の霞の衣空もきてけり

入道中書王うせ給よしきゝ侍て

つかへつゝなれし昔のまゝならは今夜やよをは背き果まし
めのまへにみまし浮世をひきかへて雲井の空の哀とそきく

人のもとへ申遣し侍し

いかはかり君も歎かんめの前にありしなからの浮よ也せは

雅顯少將あつまへ下り侍し時石帶を宗成朝臣にかりて侍しをなくなりてのちかへしつかはすとて

めくりあふ契りたえぬる石の帶の返すにつけてぬるゝ袖哉
世にふれはうさのみ積るしら雪のしらぬ山路に跡や絶なん

返　し　　　　宗　成

かけてたに形見なれとは思ひきやこはうき帶のかこと計りも
うしとのみ思ひ消なてみし人のあとをも殘す庭のしら雪

釋敎歌中に無常偈を

身をなくる人こそなけれ古のなかはののりは今もきけとも

照見五蘊皆空度一切苦厄の心を

ぬるか内にこゆるは雪としりぬれと夢もつらきもなきよ也鬼

信解品のこゝろを

いそちあまりもとの栖をあくかれてからぬ境に迷ひこし哉

神　祇

いはしみつ濁なき世と祈りをく心のそこをあはれとやみぬ

賀茂のみたらしにてあそひてまたのちにまかりて侍しに

ありしよの月をこひつゝ尋きて又みたらしのあり明の空

蹴鞠の道は賀茂成平か流なる事を思ひて

たえ行は神もあはれとみたらしやしめの外なる流ならねは

神祇歌中に

住よしのうらさひてみしいにしへの有明の月を神も忘るな
小浪のしかのから崎いく千代か神のみゆきにあひおひの松

新熊野六月會に參詣して

けふよりは思ひ隔つなみくまのゝ浦よりをちに我はすむ共

每朝彈神琴て諸社に法樂し侍とて

朝每に神に手向て彈琴の庭火のかけやよをてらすらん

あつまにて中將になりてやかて都に登て拜賀申ついてに殿上ゆるされ侍しかは

あつまより三笠の山をまつこえて雲の上なる月をみる哉

祝

よろつ世も都をかけて東路の世きのふちかは絶すつかへん
世を照らす君かみかけはあまの原行末遠き月日なりけり
千代ふへき君か常盤の影みえて池の汀にたてる松かえ
あら磯のいはうつ浪にちる玉のしられぬ數はきみか萬代
わたつ海のおきつ白波昔よりよせくる數を君か代にせん
すみよしのまつの常盤に祈りても久しくなりぬ君か萬代
住の江の松にとはゝや君か代に今いく度かおいかはるへき

右隣女和歌集以猪苗代謙誼之本挍合

群書類從卷第二百四十四

和歌部九十九 家集十七

祭主輔親卿集

夫ひとの才學をみかき文章ををれる家の集となつけて世につたへたり。是をみしれる人はすくなくして。しらさるは多かり。かるかゆへに褒貶の龍は其數いくはくにあらす。和歌の心しれるものは知りてそしる。しらさるはしらすして又そしる。たとへは和らかなる人のこはきそねみにあへるかことし。然れとも。すさのをのみことの出雲のみちにわかれ。婆羅門僧正の難波津にむかひしより。三十一字は詠ことにはしまれり。其後さま／＼の體これくはしからす。但妖艶のなかたち。花鳥のつかひ。契接の曉。産生の夜。或離別餞送のをしみ。或哀泣戀慕のなくさめ。山川野望の所。煙霞の夕を見て友をたつね。興にのりて醉によるついてに。いひあつめたること葉なれは。はか／＼しくもおもほえす。此外屛風草子の歌。うたあはせ。艸あはせ。かたわきのいとみほとすきぬれは。心はせ顯れてことのはふかくすへし。是によてかきもとゝめさるに。兩三の兒女。祖師のふにうけて。家々の舊草をひろふ。今あひつくこゝろにもよほされて。はつらくはあれたること葉をもて。なましひにあさやかなる紙をけかさん事を。ゆめ／＼人のねたゐ。これをいやしき身からいたして。かたくなゝるおやのために。いよ／＼あさけりをのこすことなかれ。其こと葉にいはく。

〔後拾遺雜四〕花のしへ紅葉の下葉かきつめて木の本よりそ〔や後拾〕ちらむとす覽

　おやの家のさうしすみにて人々うたよむにはつ春のこゝろ

こその冬今年の春のしるしには山の霞そ立へたてける

　梅花

ふるとしに咲初めにし梅かゝも春になりてそ匂ひましける

　鶯をきく

萬代のはるにあひくる鶯のこゑわかやけるけふにも有かな

　秀才すけたゝあたらしき家すみするに學生いはひのうた琴をもてあそふ

千年へて變らさるへき家ゐには□きくの琴そ里にあたれる

　きさらきのはつむまにいなりへまうつるみちに田つくるをみて

玉鉾のみちほとりなるあら田をは踏すき難き物にそ有ける

　三月人々花みて歸るに

ゆきめくりみれともあかす山櫻我のみならは歸らましやは

おなし月山吹もてあそふ所にて
たち歸る春のかたみと思へはやひとへにおしむ八重の山吹
おなし頃藏人所の人々一種物してまいれといへるに
菓子十種を山ふきにませてそへたり
井手ちかき宿にしすめは山吹のはなの色より外の物なし
ある人におもふ所ありて
あふ事をいつともしらす歎きつゝぬる夜の數そ年積りぬる
ある人にあふきやるとて藤の花にさして
藤なみの心かけたるいろみなむそふる扇の風のしのひに
う月はかりに寺のくりして卯花をおりてひとにみす
とて
卯花のうら珍らしくみえつれと折ての後は常の色にて
おなしころ兵庫のかみとも時の朝臣のありまの湯か
らかへりておやのもとにきて酒のむついてにいふ一
日郭公をみちにてきゝてかくよみたりしといふ
とくゆきて人にかたらん足曳の山郭公初音きゝつと
といへは
きゝすてゝ君か來にける郭公こゑよいつれの山路なりけむ
内に人のかたらふかかくてやかてやみなんとやとい
へるに
九重の雲井なりとも逢ことのたえてやむへき中の契か
五月なかあめのころ人
あひみすてなかむる空の雲間なく思ひ晴せぬ五月雨の月
ある僧のみなつきのゑかゝせたるうちはに天のはし
たてのかたかきてたひゝとおりゐてあま人にものい
ひたる所に
はし立の松の緑はいくそしほそむとかかたるよさのあま人
又ひとえたに吹上のはまにしほやくところ
波風のたえす吹上の濱なれはうらなき君そもしほ燒ける
おなし月かはらの院に人々ありて泉の邊にすゝむ所
いは水の涼しき陰をみゐけふは夏の暑も忘られにけり
又と山のなつの山寺をたいするに
みねつゝき老たる松の色のうちにこふかくみゆる夏の山寺
ふ月のなぬかの日に七夕まつりをする所にて
雲間より星合の空をみわたせはしつ心なき天の川なみ
おなしころ世のはかなき事をいひて人々うたよむに
人の世は何かはためしあさかほの露けき人を命とおもへは
はつ秋うたあはせする所からよみてとあるに左かた
もてならす扇にそへる涼しさはあまたの秋のしるし成けり
右かた
あまたとしてならしてける扇には多くの秋の風そこもれる
八月はかりに人にふみやるとて薄のほにつけて
〔後拾遺戀二〕篠すゝき忍ひもあへぬ心にてけふはほにいつる秋としら南
あふみのくらふのさとゝいふ所にて月あかき夜とゝ
まりて
よそにてはくらふのさとゝ聞しかと普ねく照す秋のよの月
しりたる人の承香殿のみこの齋宮にてくたり給ふ御
ともにある神宮の九月まつりにまうてゝわたりあひ
川といふ河わたるによるなれようちそひていふ
君にかくわたりあひ川なからへて思ふ心のあせすも有哉
返し女
渡りあひの河渡りにも其かみのちかりしせをは忘れやはする

といへは又いふ

けふまでにのとけき淵としらすして淺き心をうらみける哉

おなし夜みもすそ川といふ所に齋宮とゝまりて御はらへし給ふに女日をたちかくれつゝみつのかしはといふかしはをおこせてこれは何とかいふといへるに

わきも子をみも裾川の岸におふる人をみつのゝ柏とをしれ

又おなし夜神宮にまうてつきたるに鹿のなくをきゝて人々あはれかる

みやひたるこゝろにも有哉鹿のねの深き山へにすさむ物から

神無月はかりに京へかへるに紅葉を見て

あふみなるなつみの里の家ゐには秋の紅葉そ今に殘れる

人にはしめて文やるに

よそ聞に年しへぬれはうとからす心なれても賴まるゝ哉

しりたる人の伊與へくたるに

をちへゆく船のとも〳〵あらましをこき離れぬる浪のよそ哉

冬すみよしにはしめてまうつるに

またしらぬ難波のうらの芦間わけ漕ゆく方や住吉の岸

まうてつきて舟よりおるゝ程に松をみて

これやこの神代久しく成ぬれとときはかはらぬ住吉の松

願はたす人のかくらするをみるに長き榊に松をとりそへたるに

榊葉に千代の小松をとりそへてけふより祭る住吉のかみ

女房なとありて住吉のひめ君の事なといふに

たつねけむ昔のことのしらへとはふく松風そ聞なされける

かへる程に

住の江のなみ立かへるほともなし何長居すとむかしいひ劔

天王寺にまうてゝ

難波江に心深くそ尋ねくる法をひろめし人のあとみに

かへさに遊女を見て

うふねさし波の上にてよを過す身は何ものとしらぬ成へし

人に物いひて後にやる

けふたにも慰めかたき心にはいかてすくしゝ昔成けん

五節のころ藏人所にて人々あまたゐて殿上人のさかり給ふところなめりわれらはとうねなむなといひてふしなみて心によむ

もゝしきの雲の隔の遠くしてとよの明をよそに社見れ

ほのしりたる人のかしつきに出てほめられて殿上人むつましくありつときくに又のあした

かたしけるをみの衣のうらめてゝけさの日影はまはゆかる覽

ある所のむすめもきたるころてまさくりにさかりたるこしをむすひてのち人かたらひたりときゝて

結ひてし玉ものこしをゆるしなく我ならすして誰かとき劔

御佛名の後朝裝束つかまつりなをすついてにつくり花をおりてまかへるきくに人にいひける

終夜をきあかしつる霜のきく折つる罪やきえせさるらむ

後のとしの正月にほり川中納言との人々によませ給ふ十首歌はつ花

霞たちほのめく春と成にけりもゆる草木も煙まかひて

鶯をまつころ

春は淺くする山道は深けれはをそく鳴いつる鶯のこゑ

わかな

わかなつむ春日の野へに雪まわけ今かく人そ家ゐせさらん

春雪

降そはる春の雪たにひまあらは山の緑もけふはみてまし

閑院大將殿をとこ方女かた歌あはせあるにあはぬこひ

敷たへの床うちはらひ待侍にあひみぬ人をよそへてそ見る

中たえたる人のもとよりつらき人のためには涙せきあへすといへるに

今はとも思ひなたえそ野なかなる水の流は行て尋ねん

閑院女御さふらひに人々一數物いたすに紅梅の枝に鳥つけていたすとてうたよむに

くる人もなき宿にさく梅花とりのは風にをりみつるかな

二月子日に閑院大將との女房なとくして有明をかにて

緑なるまつひきかへる紫の野へに出てそ色めきぬへき

〔後拾遺春上〕三月はかりに花みるに

何れをかわきてをらまし山櫻心うつらぬ枝しなければ

麗景殿女御かたの女房ほそとのにいて居たるにやまふきの花をとりつたふるに歌あるへしとあれは

思ふこといはてつもれるくちなしの色ことならぬ山吹の花

おなし所の女房なしつほを局にしたるか枕とりにおこせたるにかきつく二首

みにそへて年ふる床の枕たに忘られぬれは身をは思はす

また

わすらるゝ床の枕と成はてゝあまたよみけむもの語りせよ

かへし

しらはしれ何に枕を尋ぬらんあやなしひとよ夢なとはれそ

かためたりとあるにあふさかには世にあらしとて

尋ねすは君しらめやはうつゝにも夢にもこふる人の枕を

おなし所にふちの花を山吹にそへてこれはいかにとあれは

ふた心ありける人のおる花はひとつ色にもさかすそ有ける

女房に藏雑色保男かかたらひたえてまたあらためてうちはしからしのひてかよふを見て

かつらきの絶とたえにしいは橋をしのひに渡る人は誰かも

ある男人のてをなりたりつるにれいならすならめなけしきになん〔マヽ〕みえつるうたやらんとせむるに

君戀てあくかれ染し玉の緒をとまれとしてや手に結ひつる

こ堀川とのゝ御さうしにをむなもの中て立たり瀧のほとりに男かくれてみる所に人々うたよむにおしつくる三月なり

行人は影ややとると瀧つせの波もろともに立ゐこそみれ

人の家にすみはしむる比五葉のちいさきをいつこの松ならんとゝへはかまくらよりほりて後八年になりぬといへはそのこと葉をやかてつゝくるなり

植て後まつの千代まてかそふれはけふは八年の春にそ有ける

家にありし人のほかよりきて紅梅のおもしろき事といふに

花さかぬ宿ならませは古の春をたつねて人のこましや

むつましき人のひせんの守のめにてくたるに

わかれちに君を松浦の濱松の千代へても又あはさらめやは

おなし人にぬさやるすはまにかけり

さしはへてゆくに波路の浦々に浪立つへくもあらぬ洲濱に

あからさまにものへくたるよし はゝいふこしにはも
せきこゆときけは遠き心地すといふに
【後拾遺別】逢坂の關ちこゆとも都なる人に心のかよはさらめや
人にふみやる返事のなきにかくいひやる
【後拾遺十二】みつ潮の干間たになき浦なれや通ふ千鳥のあともみえぬは
しりたる人のれいすむ所にはあらて ほかになんとい
ふにたつねてやる
定めなき人のありかの聞ゆるは波にうきける蜑の小ふねか
田舍なるほと京より人のきて ひとりすみはいかなる
そさいへは
都よりかれて知にき旅ねして人はなれたる住居せんとは
人に物いふに心いられしけれは ふかうそといへれは
松にふみをさしてやる
久しきを何かはいはん岩代の松の結ひはおひかはるとも
左むまのせうかねすみつかさえて 後露艸うつしおこ
すとて
手につみて身つから染し花なれは年はふれとも色も變らす
かへし
我宿のかきねの草に咲ましる花の色こそうすくみえけれ
おほやけ所なる人をあまたいふころ
うしろめた風のさきなるもかり舟何れの方によらんとす覽
閑院大將殿なつのよの雨といふ題を よませたまふに
申ことある程にて
うるほひにぬるへき身としゝりぬれは降夏のよの雨も嬉しき
十月はかりにいもうとをけさうする人の ことはなる
ましきなめりふみをたにかへしえてんといへるに
木枯の風のゆくてにまかせてし人の言のはとまらさりけり
冬のおはりにしりたるをんなのひさしう來ぬ おとこ
にやらんとて歌せむれは 女郎花のおりからしてさゝ
す
かれぬとや思ひなりなん女郎花折々みえぬ人のとはぬを
あるをとこの人のもとにふみやりける返事にすゝき
のはにさしもくさといへることはいかゝといへは
誰故にもえん物かはさしも草もゆる思ひの身にしあまれは
おほやけ所にかたらはんと おもふ人のつまとにて物
いはんとするか人さはかしとて入にしかはつとめて
岩とさし入にし月の影をたにみるへき暇のあらしとやする
五月十日よひつれ／＼なるに 大將殿御もとより夏の
よ軒のあやめといふ題をたまへり
五月雨はをくらき月と思ひしを今よひの空はくもゝ隔てす
のきのあやめ
ひきわかれ日頃へぬれと菖蒲草のきはにみゆる色は替らす
女所の宮つかへする比そこにさふらふ 女房なさのゐ
てたはふれことするに かく心かゝひなさゝるは人に
うたかはれてなといひて
我によりいもは思ひやみたるらむ宿に結ひし紐もとけぬに
おなし所なるわらはをみる人の ものいふついてにか
ひなゝるすいゝをとりたれはこひに をこせたるをき
きて
我にこそ心のほかにはつくれ共誰にあひてかたまとゝるらん
ある所におとなひたる人のわれみさためて これとい
はんにものはいへと契れるかおとなしきに

我身より君をさきにと思へ共まとふ道にはしるへやはする
かつらなる人の家にせうえうしにかれこれいきてま
へなるくれはしにおりゐてみな人はひさしくみたる
こゝろはへによめははしめていきたる人にて
おもなれて水たにみなん年へたる橋をはしめてけふ渡る共
さるへきわさして又ひと〳〵こむといひしを桂へは
いかてやましろのかみの月のわといふ所にこれかれ
いきてかつらをあらためてこゝにきたる心はへをよ
むに
〔後拾遺雑四〕先の日に桂の宿をみしゆへはけふ月のわにくへき成けり
ある女の家にこうはいさきたるを梅つほの女御のた
いはん所よりおもしろからん枝まいらせよとあれは
かはりて
匂ひかは君にますへきあらねとも折てそみする宿の梅かえ
おなし所にて月のあかきよ梅の花おもしろく見ゆる
に
常よりも哀こそませ春のよの月の影さす梅のはな笠
といふにこゝにありし女今はほかにあるかこよひし
もきて
住なれし昔ににたる春の夜の月と花とをみるそらもなし
おなし頃月のあかきに人のもとにいきてかとをたゝ
くに車にのりなからひはをひくをきゝなからつゐに
あけねはつとめて
春のよの月にしらへしことの音の哀をしれる人そなかりし
三月つこもりの日いもうとのおとこのもとに山ふき
の花をやるとて
あすよりは色や變らんけふなれはのとけくちらて井手の山吹
かものまつりの日かたらひし人のもとよりあふひに
つけて
ち早ふる神かけつゝそ恨めしきよそのかさしとなれる葵は
といへるにさらにわすれすといひて
ゆふ襷かけはなれたる心あらは神のしるしに葵[illegible]あらし
かくをそろしくおもはぬ事をかくるそよそにてもた
いらかにてとこそ思へとてかへし
千代へよとおもふ心のある物を何にたゝすの神をかくらむ
かへし
よそにかくこふへき身とし知ぬれは久しき千世を何か待へき
四月に左馬允かねすみおやにをくれて
鳴聲はおとらし物をほとゝきすしての山路の道しるへせよ
かへし
しての山道しらませはたらちめの先にそ我は立てゆかまし
なきたまは蓮のはにも浮はなん涙の露もをきやまかふと
夢におやをみて
夢のうちに之を夢そと思ひせはさめて千歳もあらまし物を
とあれははしめの□ことと人かへしすれはいまみつ〔マヽ〕
返し
たらちめのおやより先に何かそのしての山路を君か越まし
此世をははかなき露と消にしを今は蓮のうへそゆかしき
夢にてもあかすさめけん面影を現の千世にならはましかは
四月はかりにむつましき人のもとよりたちはなをお
こすとてむかしの人にならはまほしくなん有といへ
れは

橘のかほと〔を脱〕ゝめはや昔の思ひわすれぬ袖のかさなり
　おなしころおなし人のもとより卯花をおりて
思ひいてゝけさうの花の露しけみ垣ねに袂いとゝそほちぬ
　あやしくもかこてるかな。
卯花を折らん袖はぬるらめとわれを忍ふる雫にはあらし
　むかしかたらひし女の今はことにつきてゐなかにあ
　るかもとよりとはぬことなとうらみて
よとともにかけつゝ戀るかひもなく立返りえぬ袖のうら浪
　あたにさる事なからましかは　なとかはとはさらまし
　とて
濱風も何につけてか音つれん沖つ白なみよるとしる〳〵
　五月五日人のもとよりくすたまおこすとて
君かため玉つくり江のあやめ草ひけるねなかき心ともみよ
　かへし
かくれぬの深きにひける菖蒲くさ心なかさを比へてそみる
　ほとゝきすの隣になくをきゝて
我宿になかぬ心はうけれとも聲なつかしき山ほとゝきす
　まらうとあまたゐて時鳥のなかぬ事なといひて
時鳥なくへきほとはいかなるを待にもすきてをとなはぬ哉
　心かけたる人にをんなゝ（本ノマヽ）きすしせておそしと
　こひにおこせたそはいまゝてなりにけるをたゝなる
　よりはそへんとあれは
あちきなく君かさし櫛みてしより妻をもとらて日頃へに鳬
　かへし
つまとらて日頃へぬとかさしくしのさして誰をと思ふ成覽
　とあれは又かへしす

君ならぬ人をは戀もしらなくに誰とかよそに思ひなすらん
　八月はかりの夜人々あまたとまりて　あるかかへるも
　あるをおしむこゝろ
曙になるまて人はとまらなん夜とひるともわかすみるへく
　むかしかたらひし人のもとにある女の　あふきそめに
　やるをみてすはうにかきつく
そめ姫の色にしあへは夏のあふき薄き物からうつろひやせん
　ある人のうふやの七日夜人々歌よむに
なみ清き濱松かえにおひそはる苔の緑はいつもかはらし
　かたらひし人の七月五日はかりに　まゆみのもみちた
　らん枝折てとあるやりたれは
秋もまた淺きもみちの色をわか心深くもたのみける哉
　とありけれは深きつたのもみちにかきて　其まゆみの
　枝にそへてかくいふ
去年の秋深き紅葉にくらへみよ色はことにもおとらさり鳬
　七月はかりおなしせんさいなとうへて　ひと〳〵御前
　にあまたあるよ月のあかきにかはらけ取て　あきのよ
　の月水にゑいすといふ題を院にて
秋のよの空をすきゆく月なれと流るゝ水に影はすみけり
　おなし所のすゝみに人々歌よむに
身にそはる扇の風は忘られて秋の空にもまかせたるかな
　九月はかりにまへの花さま〳〵に　咲たるをみて雨の
　ふるひ
秋のひにしつけき雨のなくさめは我宿に咲いろ〳〵のはな
　かたらふ友たちのほうしになりて　こと人のもとにふ
　みやるかへり事につけて十月廿日宵はかりにやる

みし人のいれる山路を尋れは跡も木のはにうつもれにけり

十一月はせにまうつる人々うちにやとりて是かれおもしろかるほとにたちぬへきことなさいひて

川浪にひをはよせてやとまらましみるにもあかぬうちの川浪

おなし日みわの山もとゆくに木かくれなる紅葉のちらすおもしろく見ゆれは

みわの山杉のしるしは年ふりてちる新らしきもみちはの色

おなしたひのかへるさにうちにきてきやうにひをやるにひとつおほきにて

旅にいてゝ數多の日をはへぬれ共うち路のひをは一つ成鬼

かたらふ人のつねにうとくのみあれは

うちとけぬ人の爲にはよと共に我たましゐも結ほゝれつゝ

ある人をかたらひそめてほともなくえさらぬことにてほかにねてつとめてつかはす

逢すして歎きあかせる夜はよりも暮待ほとの心なりけり

夏夜月あかきに人のもとにいきたるにねたりとてあはさりしかは歸りてつとめてやる

月かけもすさめぬ人の宿にきて夏のよ深くいてゝこしかな

けさうたつ人のもとにいきて花橘のはにかきてやる

橘のかをむつましみなれよらむ花の姿も折てみるへき

十月はかり水のほとりの菊を

水かけに白くもみゆる菊の花老せぬなには流れたりとも

おなしころもみちおもしろくしたる山の本をゆくにかゝるあたりにすまはやと人のめつるに

紅葉はの色こき山の山かつと成やしなましちらぬ限は

十月はかりいよのゆへかねすみゆくにこれかれむまのはなむけするに月たにいてはといそくに

冬のよの月とともなひ漕つへき舟路の風はのとけからなん

なよ竹のをのか此世を知すしておほしたてつと思ひける哉

かへし

竹の子の老まさるへき世をすてゝ常盤ならすも枯にける哉

九月十日よひものへくたるにゑ京〔恵慶法師〕のもとよりさらはあすやくたる野のはな山の紅葉はたれとか見んするとてかくいへる

〔後拾遺別惠慶〕もみちはも殘の秋も少なきを君なかゐせは誰とをらまし

とあれはまことと思はねと心ときめきにさらは此月の十日かさきにはのほりなんとてかく

〔同〕惜むへき都のもみちまたちらぬ秋のうちには歸らさらめや

おなしたひおほやけつかひなれは人々あまた尋ねて鈴鹿山のせきある所にてさきなるひと月は此關にはさはりやあらんとあれは

すゝかなる關の山のは高けれと越て過行秋のよのつき

別ちの草はにをかん露よりもはかなき旅の形見にもみよ

とあれはむつましき人なれは思なるへし

忍はれんおり／＼事のなくさめは扇にそへる君かうつりか

たひより京にある人のかりやる

身にちかき衣へたてすねし床を旅の心に戀ぬよはなし

ある人とふるに又うたかはしき人もあれは

もかり舟うかへる波にたくひなはいとゝや我かこかれ增覽

人にむつましくなりてほともなくとをき所にゆくに

女

程もなく雲井はるかに別るれは有にもあらぬ心地こそすれ
とあれはけにいかにあやしきさまに おほさるらんと
て
〔後拾遺別〕あふことは雲井はるかに隔つとも心かよはぬ程はあらしを
文やる人のかへりことして後父やれともせねは
跡たえす猶ふみかよへ濱千鳥かひある浦のしほのあはひそ
むつましう日ころ相かたらふ人のよそ／＼なるに
あふことのいや遠さかる雲井にて猶こそ物を思ひみたるれ
かへし
遠さかるくもゐなりとも逢事の絶間にかよふ人や有らん
又人のもとに文やる返事せねは
よと共に波しあらへは須磨の浦に通ふ千鳥の跡はみえぬる
かたらふ人のもとによへは雨のふりしかは さはりて
なんといへるにとくやみにしものをとて
忘らるゝ身をしる雨はふらね共袖はかり社かはかさりけれ
といへるにわすれぬにかくいへるとて
我ためにかけてぬれけん衣手は忘れぬ人をうらみてかもし
人にやりたる返事をせねは
小倉山ふみはしめたる道しらて歸る跡さへ見えすそ有ける
あるおとこ人のもとに文やりけれと返事せねは
數ならぬ身にも辛さのしられつゝ歎けは君を如何とそ思ふ
とあるかへししてとあれは
よそ人のなけく歎きは何ならて恨みん程に年やつもらむ
人にふみやりたる返事にものかゝぬ紙を おこせたれ
は
しるしなきみと□しる／＼頼む哉我思ふ事をなれと祈りて

かたらふ人おさ／＼とはぬをうらみてすむ所はしら
せてさすかにふみやる返事みな月はかりにや ありけ
ん
身はかくれ聲は音なふ山彦を尋ぬる程に夏そ暮ぬる
人々あまた居て物なといひて手まさくりにおものを
まろかして鳥のかひ子のかたをしてかくいふ
かひにしてあまたしあれは知離しこやいひときのこには有覽
むまのせうかねすみ
はしよりも尋ぬへけれと歸らねは未いひしらす何鳥の子そ
なといふにれいのかくいふ
巣守なるかひとみつるはかりてほす稲負鳥の種にそ有ける
かたらふ人のもとに雨のふるひいきたるになに心な
くて居たるかみつけてかくれけれはよしくらからん
にまいらむとていてゐる後にかくれあへて みえぬる
ことゝいひてかくいへり
三笠山みのをのたちも隠しあへすふりつる雨に我そ濡ぬる
とあれはかくれぬる人はさもあらしとて
さしはへてとふかひもなく三笠山立歸りにし人はぬれしを
ある所の歌合に物の名なとよまするに秋風
夜さむなる秋の初かせ吹しより衣うちはへね覺をそする
もみち
ひとてにはそむとも見えぬ紅葉はの色は錦に立そまされる
をみなへし
あたし野の種とはみれと女郎花うつろひかたき花のいろ哉
すゝき
紫のほかに出たる花すゝきほのかによその風そ なひかす

荻

待人にあやまたれつゝ荻の音のそよくにつけてしつ心なし
かり

雲路より宿かりきたる鴈かねはたひの空なる聲にこそきけ

はたおりめ

虫の音にはたおる聲はうちはへて秋さ成にしひより絶せす

あはぬこひ

あふことのなくて年ふる我身哉何を命にのふるなるらん

あるをんなのもとに又ある女のもとより色々のにし
きをかみてふしてかくかきてをこせたり

君かため思ふ心のへたてぬをかみてふかみは空に知らん

とあるかへしよみてとあれは

隔なく君し思はゝ何かそのかみてふかみにこともよすへき

ある女のもとにくさに文をかきてかく

夏くさの結はぬ人の心もて露にはいたくぬれそしにける

ある人のもとに日ころはをのといふ所になんありつ
るとてかくいひやる

世を恨みをのゝ山路にいる人のたえぬほたしは君にそ有ける

かたらふ中のたえたるかやなりからつる歌のさらし
かりてかへすとて

閒すてすかきつめてける八千草のよゝのふる事我も忘れし

すみける女のたえにけるかもとよりかみをもとゆひ
にしたるかむすひなからあるをおこすとて

年ひさにはかなき物はかみさひて古き契のあせすそ有ける

とあるかへし

礒のかみ結ひをきてし元ゆひは古きなからに忘れやはする

あるをんなのもとにはしめて文やる

とふことの初めはけふにみゆらめと思ふ心は年そへにける

むつましからぬ女に松にさして

みくまのゝ浦の松とそ成にけるときはに人をこふる我身は

うしをうしなひてもとめわつらふほとにかよひし女
のもとにいきてたてりけれはひかせてかくいひたる

うしとみし心そ人にまさりけるこや後おひのつのといふ覽

返し

〔後拾遺雜三〕数ならぬひとをのかひの心にはうしとも物を思はさらなん

ある女のもとに文やることはありなからつゝむこと
ありてなんとてかくいひにやる

世の中の人のなかにはあらすとも戀る心はたれもまさらし

またよそにてかたらふ人のほかにわたりけるをいひ
やる

いつくともありかをしらぬ人故に尋ねそわふるみわの山寺

をんなかへし

よそにても杉はみゆるを三輪の山何しか寺に人のたつぬる

五月ついたちのころなかあめのやみたる暮つかた螢
を見て

あまらせる五月のやみのこかくれに螢のみこそ光みえけれ

おなし月のみかにしけゆきの朝臣のもとへ雨のふれ
はこのあめによりてなんとて

日をかねてひくへきものを菖蒲草おひたる沼の汀まさりぬ

馬允かねすみひころあはて夏月のあかき夜きて日こ
ろこひしかりつることなといひて

山のはの月まつほとの心にもやゝ思ひまし戀てこしかな

といふにまちつゝる心もしるくとて
雲まより立いつる月影やある待かひありてみゆる君かな
人々ありてなてしこよむに
からにしき籬にかけてみえつるはさく床夏の花にそ有ける
ある女かれ／＼になるほとおなし所なる人のもとに
物いひにきたるにさりともと　おもひけるかのちにと
ていれは女
獨してさしてかりつる蜒舟のすき行方はゆかしかりけり
われはのとけくおもへと心いられしていへはからよ
そよそになりぬるとおもふけてかく
風はやみのとけくもあらぬ浦波にかれはなれ行舟としら南
ある女に物いひそめてほともなく田舎へくたりてを
こすひころはあやしきたひの　ひとり寝をのみなんと
て
むつましく成ての後は手枕もあたらし人にふれらかりけり
人になれてあか月にいひやる
（後拾遺戀二）程もなくこふる心は何なれや知らてたにこそ年はへにしか
ある人のもとにいきてさけなとのむに　かくきたるは
ことさらにはあらしなといひてたよりなる　心はへを
よめる
たよりとは思はさらなん釣舟のとまりをと社さしてきにしか
おとこある人にあたなたちけれはなをあるよりはと
てかくいふこの人は齋宮にそ有ける
仇浪はたつときけ共伊勢の海のかひある浦もみてやゝみ南
ある所のひやうふのゑに櫻のはなのさける木の下に
水なかる人の家より女の水くむ所あり
花さける木の下水をむすひあけて散なは後の影をたにみん
心かけたる人のもとにいきて物なといふにいらへも
せさりしかはかくいひやる
をとなしの里とはみれと聲たてゝ鳴へきまてになれる我戀
三月つこもりにかくてくれぬへきといふに
夏衣たちへたつへき程ちかく暮ゆく春の色おしきかな
左大臣殿さふらひに大はん所よりからくたものをお
ほきなる枝につくられたるにしゐくりなとをならし
ていたされたりしかは
なれる身はこゝのもの／＼いかなれは猶隔つ覽唐のくた物
三月廿日よひはかりはつせへまうてんとて　女房にい
とまこふとて
くりこまの山の櫻のちらさらん春の中にはかへらさらめや
はしめて女に
思ひつゝこゝらの年をしのふくさ忍ふる程につみてける哉
やつはしといふらへわらは人々あまたかよはしける
に
やつはしはあまたの人そ通ひける春はすくれと道はきに鳬
異本歌瞰本傍載　正月はかりに人々あまたきてさけのむに　まへの梅の
はなを見ておもしろかる
かをとむる人も有けり春の夜のなに咲花とすさめさりけむ
おなしころ大將殿のさふらひにゆきのいたうふるあ
したにおしきに雪をすはまにをきて松と梅の花とう
へてたいはん所よりとてなさしゝてあるにかきつく
濱松のときはの色に咲ましる花のにほひはひさしかりけり
ねうはうかへしとて殿

年月のゆきつもりける濱松はかそへ盡さむ世こそしられね
とあるにこと人々にかへしませとあれと なをさせる
心さしあらん人こそとあれは
君か代のつくへくもあらぬ長濱はいとゝもおふる松のちよ哉
おなし頃麗景殿の女御のさふらひに これかれものひ
とくさとりにやれとあるにこうはいに きしをつけて
いたせるを人々かゝる花はありけりとあれは
くる人もなき山里にさく梅はとりの羽風にをりみする哉
二月ゐなかにある院の子日と聞て いかなるさまに
よむらんかやうにそあらむとて
野へにいてゝけふひく松の本毎に君にとのみそちよをかす覽
おなし所にて二月十日のころ 京の花いかにおもしろ
からんと戀しうなりぬなとはらからなる人に いひあ
はせて
大かたの都の花は咲ぬらん中にも宿の梅そこひしき
齋宮のおりゐ給へるふる宮所の いとあはれにあれて
人影もみえぬを入てみれは 三月十日はかりさくらい
とおもしろしはやうさせりける榊のかれたるを見て
あたにみし庭の櫻はちらすしてしめの榊の色かへてけり
右輔親集。爲定卿爲秀卿以₂兩自筆本₁一字不ㇾ違令ㇾ書₂寫
之。₁再往加₂挍合₁者也。
寛文六丙午初冬仲旬
右祭主輔親集雖不審多依無類本不能挍正

大藏卿行宗卿集

長承元年十二月炎上之後隨₂思出₁書ㇾ之

山花未綻大教院作
山櫻またさかすともみえぬ哉朝見るくものたえぬかきりは
山家早春圓融院
何ゆへか人もとひこん道遠みまた花さかぬはるの山さと
五月十五日依忠目龍向仁和寺之時師賴朝臣許より
足引の山ほとゝきすけふしこそ昔をこふるねにはなくらめ
かへし
郭公音なふからにいとゝしくむかしのけふをこひつゝそ鳴
八月十五夜頭中將國信朝臣許より
我ことく君もわれをや思ひ出るくまなき月を獨なかめて
かへし
月影の心や空にかよふらん忍ふるやとをさしてとふかな
鳥羽殿前栽合
薄
花すゝきなひかさりせはいかにして秋のゝ風の方を知まし
荻
〔千載秋上〕
物ことに秋のけしきはしるけれとまつ身にしむは荻の上風
晩見殘菊內府
いつしかとあさとをあけて菊の花月の光のさすまてそ見る
菖蒲同
いかてかは深みにひける菖蒲草なへての根には等しかるへき
止宿草庵

しらてこそ草の庵に宿りけめはや武藏野の深きゆかりを

忍戀

しのふれと顯れにけり我戀はしほひの礒の玉もならねと

女のもとにつかはしける

つらしとて思ひたえなは是さへや人を忘るゝなには立へき

寄鳥戀大井

たちのけとうへならひぬるこからめをつれなき人の心共哉

關路月

月影にさそはれて行われかみそ今宵はすくせ關のせき守

初雪山寺

初雪は今朝ふりにけりしるかりし昨日の暮の雲のけしきに

風中擣衣堀川少將會

追かせにとをちの里のから衣我宿ちかくうつこゑそする

五月一日聞郭公

いつの間に里なれぬらん郭公けふを五月の初とおもふに

落花滿橋

岩はしにちりつむ花をふましとて此方の岸に立そやすらふ

地下にてはへりし時

雲井にはまた聞えぬか澤にすむかしらのかみも白たつの聲

土御門の內裏の陣にて頭辨雅兼朝臣宿所の花みて

よそなからあかぬ梢を尋ぬれは君かすみかの花にさりける

かへし風やみけるころ

此ころは我身も花もおしけれは風をそいとふ春のあけほの

皇后宮齋院にておはしましゝ時故源中納言なとあり
て三月つこもりの事にやまかりかへりしにものにも
かゝてさふらひしてかくありし

いかにして立かへる覽神かきにかゝれる藤の色を見すてゝ

かへし

さらぬたにかへる空なき夕されに結ひとゝむる神垣のふち

六條院とはにおはしましゝにほの〴〵とあくるほと
に女房たちいつみさのゝあさかほみに船にのりてお
はせしにをひてたてまつりし

覺つかな花の朝かほいかならん露のおきうきけしき成とや

かへし

思ひやれ霧のまかきにかくろひて露うちとけぬ花の朝かほ

法勝寺鐘樓前の花見にひと〴〵まかりて見はへりし
に

故鄉へたちかへるへき道そなき散つむ花のふまゝおしさに

白川にて俊賴朝臣伊勢へくたりし餞に

たのむへき我身なりせはいく度か歸りこん日を君に問まし

氷逐夜結鳥羽

汀よりよはの氷のとちゆけは沖にや鴈のうきねしつらん

鳥羽殿にて曉郭公を聞て修理大夫のもとへつかはし
し

聞らめやみ山たちいてゝ時鳥いまこそきなけ鳥羽田渡りに

返し

夜もすから寐て待ものを郭公おなしわたりにわきて鳴らむ

同人とことにかみ〳〵をつかはしゝたつねにつか
はしたりしかは

〔題季集〕たをさりのことの葉をたに聞ましや〔かしとやイ〕扇の風の便ならすは

かへし

〔同〕なをさりの風のたよりと思ふなよこの神々もかけて誓はん

顯仲朝臣のもとへ扇とものたゝまぬを櫃にいれてこ
れにてならひしてと申たりしかは返事に
戀をこそひつに鎖さしおさむなれまた社しらぬ扇いるとは
返　し
戀はいさ吹くる風の身にしめは扇をひつにいるかとをしれ
日ころ山里にゐてふるさとにかへりて
我宿は淺茅か原とあれにけり鶉なきぬといはぬはかりに
岸　竹
岸の竹鳥やねくらにしめつらん重けにたはむ枝のみゆるは
熊野のみちより便につけてふるさとへつかはしゝ
立てなから淺茅か末をおひに結ひ知らぬ山路に旅ねをそする
熊野の道にてふかき谷にとまりて月あかきところに侍
りしかともくらかりしに夜ふけていほのうへに月の
さしたりしかは
山路にはいつれも峯の高けれはさよ中にこそ月はもりけれ
九條民部卿家歌合に夏月
月影のけしきは秋にかはらねと明ゆく空そ程なかりける
圓宗寺に宮の御ともにまいりて花前述懐
色かへぬ緑の松にことゝはん咲ちる花をいくかへりみつ
四位侍従宗忠朝臣還昇したりと聞て
[金葉雜上]うらやまし雲のかけはし立歸り二たひのほる道をしらはや
あはれなることありしころ
哀てふ我ことくさをとりつまはいく車ともしられさらまし
仁和寺にてなはしろに水まかすとてみてくらをたて
てはらへするやうにせしをみて
苗代のみなくちまつる丈夫はその川かみを頼む成へし

すみれを
われたにもありうき宿の淺茅生に共にすみれのいかて咲覽
堀川院御時宮女房殿上人なとに仁和寺の花見にまう
てきてみちのくにかみたつねにつかはしたりしにこ
とつけし
[金葉雜上]いく年に我なりぬらんもろ人の花みる春をよそに聞つゝ
戀　歌院
[金葉戀上]つらかりし心ならひに逢みても猶夢かとそうたかはれける
葵
神代しもかさしもこそはあまたあれけふ葵とは如何定めし
白河院御事のゝち月あかきよ經敏入道のもとより
月みれと猶慰まぬ心こそ物思ふことのほとはしらるれ
返　し
月みてもなをなくさまぬ心をそけにきらしなと思ひ知るゝ
遠壽郭公
いとかくは尋ねさらまし郭公きなく山へをかねてしりせは
停舟見花
この春はかちかくしてよ櫻花咲る嶋はにひかすへぬへし
僧正御許より八重紅梅めしゝにたてまつるとて
けふこそはひきわかるとも梅の花もとの垣ねを忘れさら南
返　し　　　　僧　正
梅の花おなし垣ねのたねなれは匂ひはかへしひき別るとも
内大臣殿に折櫃にとりを入てむめのはなさしてまい
らせたりしかは
鶯やぬきすてゝけんきゝすさへいつよりきるそ梅のはな笠
返　し

きゝすさへさしたてまいる印には梅の花笠かりてきたるに

内大臣殿南庭花を見て

君かすむ宿の櫻にくらふれはよしのゝ山もいかゝとそ思ふ

御返し

名にたてる吉野の山にくらふれは心まさりのしつる花かな

宮の御經申とて

千とせへて君に仕へんしるしには御法をかねて我に授けよ

御返し

それにより人を道ひく佛たにのりをはおしむ物と社きけ

五月六日ある女のもとより

さもこそはかりそめなから菖蒲草やかて軒にも枯にける哉

かへし

かりそめの軒にはかれんあやめ草なかく契りしねを頼ま南

梅花當簾

梅か香のたまらす匂ふことのみそ柴のとひらのとり所なる

これを聞て又の朝つとめて三宮のかひの君のもとより

心をそ柴のとひらにとゝめつる梅の匂ひのなへてならねは

郁芳門院かくれさせ給ひてつきのとしのあき御まへのつほの萩を見て

萩か花おなし匂ひに咲にけりうかりし秋の露もさなから

返し　堀河殿

みるたひに露けさまさる萩か花折しり顔に何にほふらん

三月盡

東路や雲のいしふみたちかへりもとこしかたへ春やいぬ覧

心あらは人にかたるな行春よけふにあひくるわかとしの數

むろのとまりといふ所に櫻のおもしろく咲たりしをみて

櫻花こゝろやすくもみゆる哉むろには風もふかしと思へは

鳥羽殿にて月のあかゝりしおり郁芳門院女房のなかにたてまつりし

天の原おなし空行月影の秋しもいかて照まさるらん

返し　御匣殿

そよやけにいてそふ月はなけれとも光ことなる秋のそら哉

長承元年十二月廿四日雪朝當齋院の御たいはん所へまいらするゆき降かゝりたる竹につけて

吳竹の雪うち拂ひけさみれはよことに君か千世そこもれる

かへし　美濃仲正女

吳竹の雪うち拂ふよことにはそよ／＼君か千代そこもれる

同日大僧正御許へたてまつるこの家つくりて　わたさせ給へりしころ

いかにして旅ねの雪を拂はましけふ立やとる宿なかりせは

かへし

白雪の年ふりにける我か身はふせやにつけて思ひてよかし

六條院にて月のあかき夜女房たちあそひしに

天のはらよこきる雲にあらはれて月のかゝみそあかく成行

五月雨

五月雨に數もしられす我宿の軒のしのふにつたふ玉みつ

爐火

埋火の下に焦るゝ身にし有は世にきえうすと誰かしるへき

述懷

いつ迄か代に長らへてよと共にうきにしにせぬ身をは歎かん

さまにめてたくせられたりしをみて宣旨許へ
千とせとそ齋の宮のいつくしく打出のきぬの色にしらるゝ
返し
誓ふへきつまとていたすらちいての色をもしりて祝ける哉
同二年二月六日教經權守の梅のおろしえたひとゝせ
とりて植たるかはしめて花咲たるみせに遣すとて
植わけし君か垣ねの梅の花おなし匂ひに咲やさかすや
かへし
植わくる宿もかはると梅の花何か匂ひのうすくこからん
菊閑中友　雨中戀侍從中納言許
菊のうへも我もとゆひの霜をけは是こそ老の友となりけれ
雨ふれはまちしもせしなをしたかへ今宵はゆかん袖笠をきて
保延三年九月十四日三井寺歌合に人にかはりて月菊
戀
くまもなきおなし月夜を宿毎にこゝはまさると爭ふやなそ
八重匂ふ菊は籬に咲にけりあるしもとはて人やみちこむ
まさしてふ津守の浦に物とひてあはしといはゝ戀やしぬへき
同年後九月經定朝臣家歌合に　月　女郎花　戀
雲はれてみとりの空にすむ月や天津乙女のかゝみ成らむ
女郎花おもはぬ方の風ならは靡くまねしておれふすなゆめ
我戀は千引の石にあらねともあふはかりなきねをのみそ鳴
保延三年侍從中納言許へなとうりはたはぬそといひ
しかは　中納言
ときのよに君かふくほしみゆる哉只今人のこれをたひたる
返し
ふくほしのけふより見ゆる身にしあれは瓜轉ひして悦そする
又中納言のもとへ二三日ありて
きのふけふ瓜もみえねは人しれすこまの渡りを思ひ社やれ
返し　中納言
限なく君かとふへきためしには山城やまとともにまいらす
又二三日はかりありてうりやかみおこすとありしか
みてさりしかはかく申に
魚のあみ龍の跡のみえぬかな水にかくれて空にのほるか
かへし
うをのあみ龍の跡を獻せるを白浪（銀イ）のためかすめられつも
内に申ことありしころてよしときこしめしたりとき
きて中將得業靜顯
九重にあしてはなしと聞ゆ也なにはの事をかたらましかは
雪朝宮法眼のもとへ奉
心さし大はら山にあらませは世に住わふる身をとひてまし
阿彌陀經かきておくに
願くは此みつくきの跡によりおなし蓮のうへにやとらむ
大藏卿になりてのつとめて大納言師頼許より
我君のみことの末のうれしきは大藏にこそつみあまりけれ
かへし
いへはありや君か惠の嬉しさはちくらにおくと積や餘さん
いはひをかもとよりことりをつかはしたりしかは
我爲に取集めたる嬉しさはすへこのすへていひもやられす
かへし　いはひを
たつねてそとり集めたる心さし君にすへこの程を見よとて
正月七日備前介のもとより
羨ましけさはわかな口いそくらんゆきのみつむは翁草かな
返し

もろともに若菜はつまてあはれにも雪の下なるおきな草哉
大原尼上のもとより
下蕨つみにやくると待ほとに野へにてけふも日をや暮さん
かへし
老ぬれは野への若菜もはつかしみ年のみ積て思ひたゝれす
木幡人道いまはものともたへとありしかは
けふ迄に物をきみてぬ大藏はもとの修理にそたかはさりける
かへし　　入道
大藏になにはの物もつみみてしとくおろしたへいける身の爲
拾遺抄かきておくに
みつくきのあとはかなくも世にふれは落る涙そ流そひける
松の木の中に櫻の咲たりしかは
たちましる松の梢にものなれて花もときはに匂はましかは
仁和寺のあさりのおさなくてすたれいたくおりたり
といはれてめのとのつほねにこもりゐてよみておこ
せたりし
おもひたにかけさりしかと玉簾うきふしはまつ我身成けり
返し
玉垂のみすは戀しと思ひせはうきふししらすさしいてなまし
琳賢かもとよりいかくりあけひなとつかはして
いかくりは心よはくそおちにける此山ひめのゑめる顔みて
かへし
いかくりは君か心にならひてや此山姫のゑむにおつらん
女院の中納言とのゝはしかみのめはかと／＼しき氣
のしたるとありしかはかと／＼しきものまいらすと
てつかはしたりしかは中納言殿
はしかみのめにもつきたる心哉かと／＼しくて是を起すな
かへしせよとありしかは
からくしてめにつくなれは今よりは此はしかみを仇に思はし
女院中宮と申しゝ頃のはるしけよしかめのもとより
咲そむる春のはなにもなくさまて秋のみやなる人そ床しき
これをかへしせよと有しかは
おもひやれ千とせの秋の宮のうち春の花さへ匂ふけしきを
遙望山花　寄述懷戀
よそめには雲井の峯のさくら花布をさらせる泉とそ見る
我からと人のつらさはしらるれと別れぬ物はなみたなり鳬
さうしかきておくに
忍へとてかきそとゝむる水莖のあとはかもなくならん後迄
兵部大輔雅通のよきほうたんとてつかはしたりしか
とわろかりしかは
心さし深みくさとそ思ひしにあさましけなる花のさまかな
安樂行品　乃至名字不可得聞
世々をへて名をたにきかて過しにし法に嬉しく逢見つる哉
阿彌陀經　水鳥樹林皆演妙法
池の鳥林の花もいかてかはこのよの事にいひたとふへき
南面の梅はなのちりたるを見て
いかなれはうす紅のむめの花ちりつむ庭の雪とみゆらん
保延五年五月三日禁中にて緣よりおちて侍しに成通
中納言もとより
〔本ノマヽ〕おさなひやなくいゑのさいてらうにしりて衣にかくと聞は誠か
かへしはせて二三日はかりありてなとかへしはせぬ
そといはれしかは

落緣に女法に腰の折たれは御歌の返しも不献なり
　擣衣をよみはへる
たか爲によを長月の明るまてうちもたゆまぬ衣なるらん
　來不留といふ題を
よひのまにいてゝ入にしうつりかの何とて身には止る成覽
　信解品　止宿草庵重出
しらてこそ草の庵にやとりけめいや武藏野の深きゆかりを

百首

春二十首

立春
月よめはけふは春たつ日なりけり芦間の氷とけやそむらん
子日
二葉なるねのひの小まつ行末に花さくまては君そみるへき
霞
天のはら霞をわけてふる雪はちりゆく花のこゝちこそすれ
鶯
めつらしく今そ鶯きなくなる春山ちかく家ゐせねとも
若菜
打むれてかたみにめをもかくる哉誰か若菜をつみまさるとて
殘雪
初雪のまつ降そめし心ちして庭もはたらにきえのこるかな
梅
君か代ののとけき風に梅のはなちらぬものゆへ匂ひくる哉
柳
春風にいつかとくへき青柳のむすほ〔従服歟〕れたるあをやきの糸
蕨
かた岡のおとろかしたの下わらひなる人なしに老やしぬ覽
櫻
一枝もちらさゝらまし山さくら風を心にまかせましかは
春雨
春雨のふる野の道を分ゆけは三嶋すかゝさかはくまそなき
春駒
春艸やしかふはかりに成ぬらんいはゆる駒の心地よけなる
歸鴈
かりかねはかへる／＼や思ひいつる花の都の春のあけほの
呼子鳥
呼子鳥わか名を呼はいくかへり聲するかたへ尋ねゆかまし
苗代
苗代にまかする水は心せよあせこゆはかり成もこそすれ
菫菜
つほすみれ若紫にみゆる哉色ゆへこれもなつかしきかな
杜若

藤花
我宿の松にふちなみかけてけり田子の浦とや人はみるらん
款冬
山吹はいつれまされり名にたてる小嶋か崎と井手のわたりと
三月盡
花のいろ鳥の聲とはさてをきつ老ぬる身をは誰かをしまむ

夏十五首

更衣

入かすに衣はかりはかふれともあらたまらぬは我み成けり

卯花

卯の花とかつ知なからよそめには夏きて消ぬ雪かとそみる

葵

山人は諸かつらとそいふなれとけふのみあれにあふひ也鳬

郭公

雲井よりたそかれ時のほとゝきすとはぬ先にも名のり行哉

菖蒲

ひきみれは底井もしらぬ沼水にあやめも長く根そさしにける

早苗

早苗より室の早わせしなきかも代かきあへす急きうふめり

照射

星とのみみゆるともしの光かな雲のはやしに鹿やたつらん

五月雨

五月雨に水まさるらし淀川のわたせのきしの遠さかりゆく

花橘

我宿に花橘の匂はすはさならぬひとの尋ねこましや

螢

玉ほこの道とやいはん夕やみに螢のすたく河のへのさと

蚊遣火

蚊遣火のけふりは人にしられけり我下燃そいふせかりける

蓮

氷室

いはひつゝ千世のためしにをく物は松か崎なる氷室なり鳬

泉

道遠みいた井の清水むすひつゝけふは扇もさしそをかろゝ

荒和秡

けふは皆千年の命のへんとて川の瀬ことにみそきをそする

秋二十首

立秋

けふよりは心盡しの秋なれはいとゝ我みそをきところなき

七夕

天河ちきりたかへぬ今宵さへつかひの星をけさや待らん

萩

よなよなの曉つゆに宮城野の萩の下葉や色つきぬらん

女郎花

女郎花おなし野へなるおもひ草いま手枕にひき結ひてむ

薄

思ふ事ほにたにいてゝやみぬへしとをちのをのゝ篠のを薄

苅萱

亂るれとつかねをもなき苅萓はたゝよとゝもの心成けり

蘭

きてみれは野毎に匂ふふしはかまたか移りかそ懷かしき哉

荻

身のほとをおもひつゝくる夕されの荻の上はに風そよく也

鴈

越路よりあさ霧かくれくる鴈の都ちかつくこゑ聞ゆ也

鹿

かねてよりさつをのねらひ恐ろしみたちのゝ原に小鹿鳴也

露

しら露の青葉の山をいかにしてから紅に染かへすらむ

霧

幾つらそみね飛こゆるかり金の霧間をわくる聲きこゆなり

槿花

道のへのたちかくれなき槿をねたしや人はいかゝみるらん

駒迎

天の原なかは雲井をかけるよりけしきことなる望月の駒

月

九重の庭さえわたる月影を氷をしくとたれかみさらん

擣衣

から衣かさねんことを急けはや夜さむの里に打あかすらん

虫

よを寒み卿むらことになく虫の涙ややかて露と成らむ

紅葉

すはえよりしくれの雨に染られて紅ふかき神なひのもり

菊

君かつむやをよろつよになすらへてやへ社匂へ白きくの花

九月盡

苦しくもいさやおしまし君かへん千年の秋は多くこもれり

冬十首

初冬

いつしかと冬のけしきのしるき哉葎のかともしもかれに見

時雨

雲はれてしくれの雨はすきぬれと獨りかはかぬよはのさ衣

霜

朝霜のをきわたしたるをさゝ原下葉はかりやみとり成らん

霰

いとゝしくいやはねらるゝ片岡の奈良の枯はに霰ふるよは

雪

かきくらし降白雪そ哀なるわかもとゆひにまかふと思へは

寒芦

堀江にはをれふす芦のひまなくにたなゝし小舟漕そやられぬ

千鳥

むれゐたるしたの湊のさよち鳥汐みつまゝに聲そちかつく

氷

岩間もる玉ゐし水も夜を寒く玉のかすにそ氷ゐにける

水鳥

鴨鳥のむれゐてさはく入江にはをのかは風にを波立らし

網代

遠かたにきこえしもせしあしろ人舟よふ聲は波にまかひて

神樂

夜もすから榊みてくらとり〳〵て朝倉かへす程そえならぬ

鷹狩

雪つもるかたのゝみのをかりゆけは雉子の跡も隠れさり見

炭竈

あれやさはをのゝ炭竈たえ〳〵にたつ煙こそしるし成けれ

爐火

いかにせんしたに焦る埋火のかきあらはさて消ぬへきみを

除夜

流れ行年はけふにそ成にけるおもてに波のしはをとゝめて

戀十首

初戀

月草の色とり衣けふよりはふかく思ひをそむとしらすな

不被知人戀

君こふと今はさりともしりぬらん心遣ひはつくやつけすや

不逢戀

いて立のあしうらよくて幾夜さへ又つれなくて立やかへ覽

初逢戀

はゝかりも名こその關もこえはてゝ今逢坂そ嬉しかりける

後朝戀

今朝よりはいもか住居を思ひ出て暮を待まの思ひてにせん

逢不逢戀

中々にあはすはあはて泪川かさねし袖や更にくちなん

旅戀

むは玉のよこと淋しき旅ねには枕うこきていやはねらるゝ

思

思ふとは我をしら南あた人のうち語らふはことのなくさそ

片思

我獨り思へはくるしいかにせんかたよりなりやみのゝ白糸

恨

いかにしてつれなき人をたのみけん我心さへうらめしき哉

雜二十首

曉

きのふまて事そともなく暮にしを何また鳥のおとろかす覽

松

何事をまつともなくて過すかなみとりの髮のおひ替るまて

竹

あかねさす日もくれ竹に風吹はねくらさためぬ雀なく也

苔

あをつゝらくる人もなき山中にたかためしける苔の莚そ

鶴

松か枝に鶴のかい子の巢立つゝ千代へん程は君そみるへき

山

梓弓たな引雲のたえ間よりはつかに見ゆる初瀨山かな

河

よしの川岩こす波のわきかへり白ゆふ花にみえわたるかな

野

道しけき野原の露にそほちつゝとふてのまゝに詣そ社ゆけ

關

都いてゝ立かへるへき程とをみ衣の關をけふそこえゆく

橋

哀ともいふ人あらは今はたゝまつみち橋にならんとそ思ふ

海路

汐まつとなこの浦はに舟とめてとも舟またむしはし休らへ

旅

松かねに枕をしてもあかしてん心とまらぬ旅の身なれは

別

わかれちは雲のはるかに成ぬともそなたの風の便すくすな

山家

山里にすみなれぬれは峯のさる谷の小鹿もむつましきかな

田家

小山田をかへす春より秋まては賤のてまなきしからきの里

懷舊

昔とて思ひてもなき身なれともせめては今になすよしも哉

夢

思ひ寝のゆめはかりなるよき事をやかて現になすよしも哉

無常

いかにしてゆふかけ草にをく露のいまゝて消ぬ命なるらん

述懐

沖つもをかへさふ波の返すよりしけき思ひを誰かしるへき

祝

君か代はやみねの椿はをしけみふたゝひ陰のあらたまる迄

保延元年七月八日草花未遍

咲そめて秋の日数しあさけれはかたえそ匂ふまのゝむら萩

寄露戀

道芝にひまなき露も獨りぬる我たもとにはいひもくらへし

遠尋山花

よしの山花のさかりをすこさしと伏見の里を今そ過ゆく

無常心を

〔金葉雜下〕いかにせんうきよの中にすみかまのはては煙と成ぬへき哉〔身を金葉〕

郭公何方

何方ときゝもわかれす郭公おいのねさめのおほ／＼しさに

月前遠情

月よにはおもひそ出るもろこしに友を尋ねし人のこゝろを

關路雪深

雪つもる庭にそしりぬいとゝしく猶やそふらん白川のせき

違約戀

人まつは苦しき物と我もさはそらたのめして思ひしらせん

對鶴爭齡

萬代を猶かさぬへき君なれは鶴の千とせもいひなくらへそ

二首和歌海上遠望

難波にて明石のせとをみわたせは雲の波こそ立へたてけれ

寢覺戀

逢と見る夢もむなしく覺ぬれはつらき現に又成にけり

曉添虫聲

夕露にこゑたてそむるきり／＼す明行まゝに鳴まさるかな

月添秋思

哀とも誰かみるへき月影にかしらの雪そひとへそひぬる

晩見藤花

むらさきに夕日かゝやく藤の花またゝとふへき色もなき哉

寄橋戀

あはぬよの戀のしけさは八橋のくもての數にいひも比へし

三月盡

行春をたれかとゝめんとりのねをまねひし人のおもひ計も

散花の物をしいはゝ行春をくもりもたゆく千たひとめまし

戀

奥山の木の下かくれ行水の人にしられぬなみた成るらん

晩風告秋

夕風そまたこぬ秋のこゝちする荻のはそよく程ならねとも

草花露色最

野へことに色々にこそみえわたれ露やそむらん花やそむ覽

萩盛待鹿

しからまは枝やおれんとをしけれと小萩匂へは鹿そ戀しき

蟬聲滿耳

夏の日の聲もしけみに鳴せみのまたこと／＼も聞そ別れぬ

なつ山のしけき梢にうつせみのをのかこゑ／＼たえす鳴哉

扇不離手

うちもをかぬ扇の風の涼しさにわか手に秋は立かとそ思ふ

終夜問辭戀

下紐のうちとけぬともみえすして今宵もたゝに明しつる哉

終夜結ほふれたる下紐のとくるまつ間にあけそしにける

漸忘扇

扇をは涼しき風にかへてけりやゝおさむへき心地つくらし

題しらす

いてしよりみやこ戀しき旅衣ひとやりならん立かへりなん

菊花臨水

吉野川岸のしらきく咲にけりおりくる波に色やまかはむ

不返事戀

思ふこと書なかしつる水莖のせきかへされて又そきにける

初聞鶯

たまさかに我まつ妹にあふよりも猶めつらしき春の鶯

毎年見花

年をへて散かふ花とおきなさひ我もとゆひと何れしるしも

郭公過曉

しのゝめに今そすくなる郭公音羽の山のをとにたてつゝ

月不如秋

冬のよの氷とみゆる月よりも秋の影にはしかしとそおもふ

田家秋雨

山里のさくり（つくらイ）の上にしりかけてをしねこくまに雨そ降ぬる

林下時雨

むれ立る木々の梢に隱るれと賴むかひなくぬれそほちつゝ

行路雪

たひ道に初雪ふれはいかにせんこゝちまとひて詮方もなし

寒鴈添戀

冬寒み聲さえわたる鴈かねに我おとらめやとしそおい〳〵

船中曉戀

明かたに浦こく舟のこゝちして我もおとらす楫のしつくに

うちの御たいはん所へ　　左大臣家越後

七夕はわか玉床をうちはらひちりの立ゐや暮をまつらん

これをきゝて

あひみても別の空を思ふにはかねてやぬるゝ天のはころも

ゆふへの風すたれならこかす

夕くれにこす吹かへす秋風にをさふる袖のしところなる哉

わつかにみるこひ

打つけにはつかの月のはつ〳〵に見し空もなき戀もする哉

かの岸にいつかいた覽舟なくて苦しき海におほゝるゝ身は

手もたゆくちる紅葉はを打はらひ誰かは我を尋ねとふへき

かゝみ

鏡うしまつしらひけの映りつゝ雪とみゆるもいとうたて皀

ますかゝみ月にもにたり又みれは池の氷とあやまたれけり

さつきのや五日のむまのひにいるは秋の川かとみゆる鏡そ

くた物

もちゐ社いたきやつなれ皆人のふゝたとのみも懷くと思へは

いかにせん立花くびに負ぬれはをもさるかくをするそうたてき

われそまつとふへかゝりける老はてゝくれ行春をしたふ心は

かへし　　のりよしのはゝ

老ぬれはおいぬる人そなつかしき心や同しこゝろなるとて

のこりの雪

人しれすわかはや今はきさすらん垣ねに殘る雪の下草

やなき

山風にむすほふれすもみゆる哉うらやましきは青柳のいと

はるこま

春草にいはゆる駒のこゑ聞はなつみし冬のけしきともなし

しかふへき程にもならぬ若草の心地よけなる駒そいはゆる

くゐな

いかはかり人まつ宿にあらませはたゝく水鶏に驚かれまし

ゆふたち

むら雲の俄にみゆる程もなくゆふたちしくる音聞ゆなり

うのはな

うの花とかつしりなからよそめには白浪かくる垣ねとそ見る

七夕

天河つかひの星のかへるまを心もとなくまちわたるらん

おき

たそかれの荻のすゑこす秋風は心盡しのしるへなりけり

のこりのきく

君かへんやち代の秋になそらへて八重こそ匂へしら菊の花

たかかり

雪の上にきゝすの跡もかくれぬはけふはし鷹を合てそ見る

ちきりてあはぬこひ

玉たれのこすはうしともいはすして契る計や情なるへき

たひのこひ

旅ねにはいとゝ戀のみ優りつゝ枕うこきていやはねらるゝ

のちのあした

頼めをきてかへるもくるしいかにせん流るゝ水の心とも哉

きのかけ水にうかふ

風ふかぬ汀の松のあやなくもよせくる波に影そみたるゝ

夏草

秋こそは萩か花すりみえわかめみなみとりなる夏の野へ哉

はつ雪

あらち山紅葉ふみわけ行道にきしかたしらすけさの初雪

たの家の秋のあめ

雨ふれは門田のいねそしとろなる心のまゝにかふき渡りて

はやしのもとのしくれ

みわたせは時雨てわたる絶間より木々の梢は色つきにけり

寒鴈増思

我戀はことにふれても増る哉雲井の鴈はよろつならねと

はしめてうくひすをきく

鶯は雪ふるすよりいつらめと猶はつ聲のめつらしきかな

竹をうへてまつ鶯のよをこめて春告かほに今そ鳴なる

ゆふかけて生田のもりの涼しきは風こそ秋のつかひ成けれ

花下述懐

櫻花ものをしいはゝ年ことに我身のうさをとふらひやせむ

哀とも誰かみるへきちる花のかしらの雪とちりまかふをは

老にける頭の雪の色ならは花も我をはあはれとやみる

身のうさの事もおろかにあらはこそ花みることに慰もせめ

鶯のこゑなをすくなし

一こゑに春をしらせて鶯のなとその後にきなかさるらん

天永二年二月十六日のゆめに

いかにせん此よの夢もまたさめす蓮のうへをうつゝとも哉

うちにて大夫のすけのあふきのかのめかためてとて

つかはしたりしかためてつかはすとて

盤のめのはなるゝたひにいとゝ敷君か心のうしろめたさよ

かへし　大夫のすけ

けふよりは君かかのめにかたまりぬ人も扇は思ひはなたん

うちへ

鶯のはるさめもよに尋れきて梅か匂ひにあかす鳴かな

御かへし

春雨に何かゝささん鶯は梅の花かさありと見なから

月あかゝりし夜みくらのことねりして御たいはん所より

かく計くまなきよはの月なれと君をはえ社さそはさりけれ

御返事まいらせてやかてまいる

今更に何さそふらん月かけの心は雲のうへにこそすめ

れいならす侍しころ御たいはん所より

思ひあまり逢みぬ程を數ふれは手たゆきまても成にける哉

御返りまいらす

心にそ逢みぬ程をかそへせは中のゆひまてふせすあらまし

右大藏卿行宗卿家集以濱田侯秘本挍合

群書類從卷第二百四十五

和歌部百家集十八

六條修理大夫集　顯季卿

承暦（白川）二年殿上歌合

尋こぬさきにもちらて山櫻みるおりにしも雪と降らん

藤中將の家の歌合

山高み尾上にさけるさくら花散なは雲のはるゝとやみん

二位の白川のさうし合の歌

（金葉冬）時雨つゝかつちる山の紅葉はをいかに吹よの嵐なるらん

遠聞郭公といふ心を

山ひこのこたへさりせは郭公外になくねをいかてきかまし

郁芳門院根合歌

さりともと思ふはかりや我戀の命をかくるたのみなるらん

遐齢如松題

二葉なる松を引うへて誰もみなおなし千年のかけをこそ迄

毎朝臨菊

菊の花さきぬる時は目かれせすいく朝露のをきてみつらん

鳥羽院前栽合に越前守家保に給歌二首左方萩不入

萩か花散もちらぬもをしなへてさなからおほき秋の野邊哉

すゝき

秋風になひく薄と知なからいく度そこに立とまるらん

おなしせさい合にいなはのかみにかはりて右方にたてまつる歌二首萩不入

秋の夜は人まつとしもなけれとも萩のは風に驚かれつゝ

きくいる

（金葉秋）千年迄君かつむへき菊なれは露もあたにはをかしとそ思ふ

殿上にて千鳥と云題をよませ給ひしに

沖津風吹上のうらや寒からん浪立さはき千鳥なく也

戀をなこその關によせてよみし

東路のなこその關はよとゝもにつれなき人の心なりけり

歌合に

（後拾遺）鴫の伏かりたに立るいなくきのいなとは人の云すもあら南

人々雨のうちの野花と云題をよみしに

雨ふれはおもひこそやれ露をたにおもけに靡く眞のゝ村萩

三條の内裏にわたらせて給て始て歌よませ給ひしに

花おほくの春を契といふ題を

君か代の千とせの春に櫻花是やはしめの匂ひなるらん

かよひ侍けるおとこのかれ／＼になり侍けるを女いかゝいひやりたりけん　おとことかくいひていたくな

うらみそなといひをこせたりしにその女にかはりて
何しかは人も恨みむ夏ひきのいとかゝりける身社つらけれ
ある六位の二ゐ(親子)の御許にうちの殿上をまうしけるか年比に成にけれとゆるされさりけるにゐらさうをもとめ給と聞てこの六位ゐらさうを奉るとて
雲の上をよそにのみ聞身にしあれは緑の袖も何にかはせん
をこなひするほと也この返事せよとの給ひしかは
よそにのみ思はさらなん雲の上をつゐは緑の袖そかさねん
住吉のかんぬし國基内に申さする事ありしをせんしをそくたるとて又の年の二月にいひをこせたりし[もの詞花]
[詞花雑下]雲の上は月社さやにさえわたれまたとゝこほる事や何なる
返し
同 とゝこほる事はなけれと住吉のまつ心にや久しかるらん
御門おりゐさせ給ふて後おほゐにこゝう(御幸)せさせ給ふて落葉滿水と云題をよませ給しに
[金葉秋]大井河ゐせきの音のなかりせは紅葉をしける渡りとやみん
はりまにくたりて侍しに周防内侍と云人花のさかりもすきなんとするにのほらぬといひて
おほつかな都の櫻にほふにもうら風はやきわたりいかにそ
返し
都にも花の匂ひはかはらねといひあはせつゝみる人そなき
院とは殿におはしましし[マヽ]に殿上の人々つれ／＼かりて日ことに歌よまむとて野花露滋と云題を
鶉なくあたの大野の眞葛原いくよの露にむすほゝるらん
野花薫衣
みれとあかぬとを里をのゝ萩か花袖に移れる香さへ懷かし
田家秋興
風はやみなひく稻はの葉の上にいかてをくらん秋のよの露
行路秋花
霧はれぬをのゝ(花のしこはさイ)萩原咲にけり行かふ人の袖匂ふまて
二月廿二日京極殿に御幸ありしに又の日花をもてあそふと云題をよまれしに
櫻花にほふさかりの宿なれは猶おりてこそみまくほしけれ
六條院にて落花入簾といふたいをよませたまひしに
櫻花こすのまとをりちるからに塵さへけふは拂はてそみる
花の池水にうつると云題を鳥羽殿のしま人々よみしに
しら波の立かとそみる池水にしつえをひてゝさける櫻は
歸鴈
ことつてん人とまつらん春霞たな引空にかへるかりかね
水によりて山の花を知と言題を人々よみしに
散かゝる細谷川に山櫻たつぬる人のしるへなりけり
はりまへくたりしに日のあれしかは河尻より馬にてかちよりまかりしに馬にのりし所にて馬の口をとりて
住吉の神主國基
諸共にふちはあけねとしたはるゝ心は君におくれさりけり
といひしかはかへし
心をはおなし道にはたくふともなを住吉のきしもせしかし
橘のなりともかやり戸ひとつへたてたる所にまうてきて人々物語なとしてかくなんとつけてかへりしかは

すまのうらの恨やせまし高砂の松に音せすおきつ白波

　旅宿雪と云心をよみしに

松かねにおはなかりしき終夜かたしく袖に雪はふりつゝ

　戀

岩代の野中の松にあらねとも戀も年ふる物にそ有ける

　年比侍し女房の尼に成て侍にきぬとらすとて

唐衣絶すきてみよ今はとて法の道には入にけれとも

　返

今はとてそむく身なれとから衣きてみる時そ君はられしき

　人々春の心花に有といふ心をよみ侍しに

心みにさてもや春はられしきと花なき年に逢よしも哉

　鳥羽殿に御方たかへに正月十日行幸有しつとめてつ
　かはしける

あらたまの春のはしめに降雪はいつしか咲る花かとそみる

　返

佳人も久しき宿は千とせふるみゆきに雪のつもるなりけり

　依月夏涼

なかむれは涼しかりけり夏の夜の月のかつらに風やふく覽

　雨中閑居

五月雨にとふ人もなし山里は軒のしつくの音はかりして

　遠村早苗

里とをみ山田のさなへ引つれて急きてみゆる田子の景色は

　逐日草滋

眞葛原しけれる野邊のけしき哉としはか末のみえす成行

　瞿麥滿庭

我宿は庭も笆もおしなへて今さかり也なてしこの花

　盧橘慕薫

軒近く花たちはなの匂ふかはたそかれ時そおほめかれぬる

　聞郭公忘歸

子規聲あかなくにたつねきて生田の森にいくよへぬらん

　照射及曉

ともせとも今夜もあけぬ徒に相坂山もかひなかりけり

　初戀

我戀はふかき太山の松なれや人にしられて年のへゆけは

　過不逢戀

思ひきやまた逢事のかたしきにすまの浦にて鹽たるへしと

　戀

大空は戀しき人の何ならんなかめてのみも過すころかな

　卯花所々

川野邊にむら〳〵咲る卯花はせゝのしら波たつかとそ見る

　逐夜待郭公

さてもなをねていく夜にか成ぬらん山郭公いまやきなくと

　待客聞杜鵑

諸ともにきかまし物を郭公たのめし人のはやきまさなん

　樹陰留客

逢坂の關ならねとも夏山は木の下陰も人はとめけり

　正月十日比よりわさとなけれと風たへかたき(ヨイ)に
　おろしこめて春の行ゑもしらすてありしに二月廿日
　比にきやくせしにりう源あさりかこもりそらにてあ
　りしにこそうへたりし櫻の花さきたりしをみてあさ
　りにやりし

花みんとねこしにうへしわか櫻咲にけらしも風なふきこそ

あさりのこのむ歌のすかたになん。

返し

今年より君かかさしの花なれは千年をへてもちらしとそ思ふ

二月廿日ころほひ周防内侍いふ事ありて せうそこい
ひたりし返事に正月の十日比より風のわりなさにさ
し出る事もなくておろしこめて春の行ゑもしらてな
んあるなとかとはぬと申たりしかは又をしかへして

身にしみていとふ風とはしらすして花による共思ひける哉

返

青柳のいと吹みたる春風もいかにくるしき物とかはしる

別當殿ゐ所に人々月前旅宿(情イ)と云題をよみしに

(金葉秋)草か根に衣かたしきよもすからなかむる月を妹みるらんか(やみるらんイ)

鳥羽殿北寢殿に始て渡らせ給しに松契遐年題

今年より枝さしそむる松の木の花の折々君そみるへき

七條にて人々あそひし次によみし戀の歌

年もへぬつくまの神にことよせてなへの數にも人のいれ南

おなし所にて梅告春近題并戀

雪中につほみにけりな梅花散明かたになりやしぬらん

としまよりとわたる舟のともやかたやかたつれなき妹か心か

正月雪の降たりしかは大納言公實の許に聞えし

(金葉春)あら玉の年のはしめに降しけは初雪とこそいふへかりけれ

返

(同)朝戸あけて春の梢の雪みれは初花ともやいふへかるらん

藤大納言の鳥羽のとのゐ所にて人々雨のうちの子規
又戀の歌よみしに

五月雨のいまきの岡の子規しとゝにぬれて啼わたる哉

戀

松の木の根にあらはれぬ我戀は人の心のかたきしなれは

右近のむまはに人々時鳥たつぬとて

郭公聲なかなくに山ひこのこたふる里そうれしかりける

そのついてに人々戀をよみしに

うらもなく今はひとつに脇付子かあひみ初けん雲鳥のあや

閏五月朔日のひ新大納言の許に聞えし

猶きなけいまた五月そ時鳥おもひたかへて山へかへるな

返　大納言

またさらに初音とそまつ郭公おなし五月も月しかはれは

同し歌を前左衞門佐基俊かもとにつかはしたりし返
事

つけさらはこそにならひて郭公ほと〳〵山に入やしなまし

うちにみや〳〵に歌よむときこゆる女房共にけさう
の心の歌めしして共聞え有殿上人かんたちめにたひて
かへし奉れと仰られしかは　一宮紀伊君

恨みかねさよの衣を人しれすおもひかへせとなくさまぬ哉

返

ひたすらにさよの衣に事よせてうらなき人を恨みさらなん

十一月廿日比に平等院のあさりのもとよりかけの馬
を送りて

またしきに逢坂山を立出るこの月かけのこまはあらしを

返

もりこすはいかてかみまし逢坂のこの月影の駒そうれしき

はるかに月をおもふと云題を

心あらは今夜の月をから國の人もなかめてあらさらめやは
　月は旅のなかのともと云題を
舟出してすまの浦半によもすから月の光のさすをこそまて
　松遐年友
千年まてすむへき宿の例にと岩根の小松けふそうへつる
　秋花催興
よとともに野邊に心やあくかれん本あらの萩（小萩イ）の花し散すは
　紅葉
紅にふかくそ見ゆるふすまちのひきての山の峯のもみちは
　戀
岩代の野中に立る結松いつとくへしとみえぬ君かな
　おとこせむさきのさゐいんにわたりてさふらひ給し
　にくす玉たてまつるとて
けふ毎にたつねてひける菖蒲草ねなかき君かよはひ共哉
　返たれにか有けん
菖蒲草玉のうてなに引かけてねなかきためし君そみるへき
　行宗の前兵衛のすけの許より扇かみこひにをこせた
　りしに例ならぬ事有と聞はいかにと有しかはやりし
　にかく
〔行宗集〕なをさりの言のはをたにきかしとや〔土しや行宗集〕扇の風の便りならすは
　返
〔同〕等閑の風のたよりと思ふなよこのかみ〳〵もかけて誓はむ
吾妹子にいかて知せんそなれ木の枝にもいはて年のへぬれは
　中宮の堀川の院作りて渡り給て歌ありしに松契遐年
万代の松のしけれる宿なれや千とせのみとは思はさらなん

　院にて山家卯花題
通ひこし柴のかとらちみえぬまて卯花さけるみ山への里
　人のこゆみをせちにこひしかは惜みかねて
そりたかききの關守かたつか弓心よはくもはられぬる哉
　返
今よりはをしてをいはん手束弓かく思はすにはられぬるには
　暮山落葉
くれぬとてかつちる山の紅葉はに嵐ふくよとみてやかへ覽
　戀
しるらめや音にのみきくかつらきの山のみね共戀しき物を
　月照菊花
いか計隈なきよはの月なれや八重さく菊の數みゆるまて
　落葉埋橋并戀
〔金葉秋〕小倉山峯のあらしの吹（からイ）まゝに谷の梯もみちしにけり
駒にをくうつし心もなきまてに戀わたるとは人しるらめや
　月
御笠山さしいつる月のくまなくも光のとけきよにも有哉
　山家待花
あし曳のかた山きしに家ゐして峯の櫻の花まつわれは
　中院にて初和歌見花延齢題
眺むれはをのゝえさへそ朽ぬへき花社千世のためし成けれ
　江中納言（匡房）のもとに申へきこと有てまかりたりし
　に櫻のめてたかりしを見て
君のみそたつねてみける櫻花おらまほしくも思ほゆる哉
　又日（つとイ）返
春毎にきてみよかし（イ无）な櫻花はなさかりなる宿といはせん

二月許閑織院覆花情人々よみしに

主なくてあれのみまさる山里にさかりとみゆる花櫻かな

堀川院にうちわたらせおはしまして和歌有しに竹不改色題

すへらきのなかれも絶す河竹の緑の色も色つくまてに

潤二月有し時三月廿日餘比に待郭公和歌一首と書て平等院阿闍梨許より

二月のそはさらませは郭公これは卯月と里馴なまし

返

日數にてほとそしりくる蜀魂春くはゝるといかゝ聞けん

長治（堀川）貳年三月四日行事して三日おはしましゝたひ池上花題

岸近くにほふ櫻の花みれはしつえやきしのかさし成らん

春日にまうてたりしに莊嚴院法眼の坊にやとりたりしに又の日歸らんとせしに酒なとたうへなとしてある僧のよめりし

三笠山木高き松のなかれとそ君をは賴む千代の例に

返

三笠山松のなたての身なれ共千代のためしにひかれぬる哉

正月に人の卯杖をつかはしたりしに(のイ)書付たりし歌

三笠山さしもはなれぬ君にけふいのりし杖をたてまつる哉

返

祈つる杖のたよりにみかさ山千とせの坂もさしこえぬへし

中納言の姬君の御もとに前齋院より正月七日子日にあたりしにおほせられし

とにかくに心いとなき子日哉まつや若菜をつみにゆかまし

かはりて返

しらすやは子日の松にひきつれて千歳摘へきはかな成とは

白川にてつれ〳〵なりしかは女房なとして題を(さ歟)くりくはりなとにしてとりしに紅葉を

散つもる色もみるへき紅葉はをなをかさみたる山下の風

おなしたひ人にかはりて女郎花

尋きて誰おらさらん女郎花霧のまかきに立かくるとも

菊契千年

色も香もむつましき哉菊の花千とせの秋のかさしと思へは

月照紅葉

うすくこき紅葉の色のみゆるまてくまなく照すよはの月哉

戀

思ひあまりおつる淚を忍ふれとをそふる袖の色に出ぬる

岩代の野中にたてるむすひ松とくへくもなき君か心か

浪かくる岸の額のめなれ木のめなれて妹とぬる由もかな

依花忘家

よとともに野へにて年や過さましときはにさける櫻也せはつくしへくたらんとせしに永縁僧都鹿毛なる馬ををこせて

立別れはるかにいきの松なれは戀しかるへき千代のかけ哉

返

浪路わけ遙にいきの松のみも心つくしに戀しかるへし

和歌合櫻

吹ちらす風なかりせは櫻花匂ふ日數の程はみてまし

詠花無擇處

いつこともわかぬ櫻の花なれは尋ねいたらぬくまのなき哉

十月十日比に成まて菊さかさりしに眞尊阿闍梨のも
とより大なる菊をこせて枝にゆひつけたりし
二葉より行末までにさかへつゝこれも八重咲しら菊の花
返
萬代のかさしと思へは年ことにとへとそおもふしら菊の花
藏人のしゝうの越後守のもとへわたりしふみに
諸共に千代へむ程を人しれすくれ行空をまつにそ有ける
返
千年經ん程はまことに知ぬへしくれ行空をまつとしきけは
たいこの座主のもとより此程なん花盛なるとありし
かは人々さそひてまかりたりしに
櫻花はな心にもこゝろみん此春風はふかすもあらなん
東山觀音寺といふ所にて藤の花いとめてたかりしに
人々藤并戀歌よみしに
ひたすらに今もむかしもわすられて心のかゝる藤の花哉
知るらめや音にのみきくかつらきの山の峯とも戀わたる哉
此歌を聞て前兵衛の佐ゆきむねの許より
藤の花みね迄人のこゝろにも聞につけてそまつかゝりける
返
藤の花心にかゝる物ならは尋ねてまつさなさかみさらん
前木工頭俊頼朝臣の北山の花見に人々さそひて罷た
りけりさ聞て
春風にあらぬ身なれさ櫻花たつぬる人にいさはれにけり
返
君か身は花ふくへしさみる物を風ならすさも思ひける哉
人々つれ〲かりて戀歌よみしに

足引の山かへりなるはしたかのさも見えかたき戀もする哉
俊忠宰相家にて戀歌十首よみしに古戀
戀々てつけのをくしのうらをしてつれなく人を猶たのむ哉
きてはさまらぬ戀
〔金葉戀下〕玉津嶋岸うつ波の立かへりせないてましぬ名殘さひしも〔ひさ金葉〕
ちかことの戀
〔千載戀二〕うれしくは後の心を神もきけ引しめ繩の絶しさそ思ふ
ふしなからまこさなき戀
事ならはふす名も立ぬひたすらにうちもさけなん妹か下紐
いのれ共あはぬ戀
はふり子かいのりを神やうけさらん我錦木をとる人もなき
ついせうの戀
心をはいかにも君につくせ共雲のよそにて年をふるかな
僞にてあはぬ戀
こひしき〔さイ〕を何につけてかなくさめむ頼めし月日過ぬと思へは
たちきゝの戀
〔金葉戀下〕わきも子か聲立聞しから衣其夜の露に袖はぬれにき〔けりイ〕
いやしきをいとふ戀
雲鳥のあやしかりける身なれさも思初てし心はやまし
かたけれととくる戀
いか計みとのまくはひ契ありておやの諫にさはらさるらん
於七條亭人々櫻歌十首よみしに
今はゝやさきにほはなんさくら花鵙の草くきかくろへに鬼
〔金葉春〕常よりものとけく匂へ櫻花春くはゝれるとしのしるしに
櫻花咲ぬる時はよし野山立ものほらぬ峯のしらくも

さくら花匂はぬ春はなけれともみる度ことにめつらしき哉
白雲とみゆるさくらの匂ひかなたかすむやとの梢なるらん
霞立くらまの山のうす櫻てふりをしてなおりそわつらふ
日かれせすなかめてをらん櫻花山下風に散もこそすれ
散つもる鏡の山のさくら花面影にこそよるも見えけれ
鶯の花ふみしたく山里は衣手さえぬ雪そふりける
春風の吹につけてや山櫻隣の松に花はかすらん

於大井河落葉浮水幷戀

小倉山みねのあらしの吹からにとなせの瀧そ紅葉しにける
年ひさにゆけたの帶をとりしてゝ神にそまつる妹に逢ん爲

雲居寺上人百種物供養に花綿可相具和歌の由いひたりしに

春風のふきくるからにしきたへの枕の上に花の散らむ

春情在花題

櫻花匂はさりせは何しかは春くる事のうれしからまし

桂の山庄にて暮山郭公幷戀

夕附日入佐の山にときしまれおりはへてなくほとゝきす哉
おもひかね戀わすれ貝ひろへとも袖ぬれまさる沖津嶋守

水邊芦葉題

見渡はあしはをしなみ茂合て道たつ〳〵し堀江こく舟

内府於東三條夏夜月幷怨人戀

明るかとみる程もなくあけに鳧おしみもあへぬ夏のよの月
言の葉をたのまさりせは年ふ共人をつらしと思はさらまし

長實朝臣於八條亭歸路落葉幷戀

家にいもはくものふるまひ頼らん道さまたけにちる紅葉哉
我妹子は木曾のほきちにすまはねと何逢事のかたきしな覽

同亭霞幷戀

雪消ぬ比良の高根も春くれはそれともみえす霞たな引
いかにせん野澤におふる丸菅のまろすけもなき戀にけぬへし

曉尋花

夢さめていそきてきつる山櫻あさふく風のたゝぬさきにと

同日晩景戀

時しまれ戀まさりけり入日さす山のはひとも眺めすなゆめ

永久四年四月四日鳥羽殿北面和歌合有しに卯花

卯花の咲につけてや山里は夏のころもをおもひたつらん

郭公

〔金葉夏〕深山出てまた里なれぬ子規旅〔うはイ〕の空なるねをや鳴らん

菖蒲

けふことに袂にかゝるあやめ草千世のさ月は君かまに〳〵

早苗

種まきし早苗の稲や生ぬらんしつ心なく見ゆるさをとめ

戀

戀しなむ事をそ今はなけかるゝ終にあふみと成もこそすれ

百首和歌　堀河院初度

春

立春

〔金葉春〕うちなひき春はきにけり山川の岩間の氷けふや解らん

子日

君か代を子日の松とけふよりは千世の例にひかんとそ思ふ

霞

見渡せは春の氣色に成にけり霞たなひく櫻井の里

鶯

〔金葉春〕鶯のなくにつけてやまかねふく吉備の山人春をしるらん

若菜

若菜おふる野をやしめまし今年より千年の春を積んと思へは

殘雪

山里のかき根にのこる白雪は草のもゆるに消やはつらん

梅花

梅花咲過てくる春風はたかふる袖とおとろかれつゝ

柳

佐保山に柳の糸を染かけて心のまゝに風そふきくる

蕨

紫の蘆うちはらひ春のゝにあさる蕨のものうけにして

櫻

櫻花匂ふにつけて物そおもふ風のこゝろのうしろめたさに

春雨

〔新勅春上〕霞しく木の目春雨ふることに花のたもとはほころひにけり

春駒

とりつなく人やなからむ春の野にいはゆる駒のあしけ成哉

歸鴈

人ならはとはまし物を散ぬへき花をみすてゝかへる鴈かね

喚子鳥

小夜中にみゝなし山の喚子鳥こたふる人もあらしとそ思ふ

苗代

小山田に種蒔すてゝなはしろの水のこゝろにまかせつる哉

菫菜

〔千載春下〕〔いたは千載〕雉子鳴山田のをのゝつほすみれしめさすはかり也にける哉

杜若

〔金葉春〕東路のかほやか沼のかきつはた春をこめてもさきにける哉

藤

〔同〕住の江の松にかゝれる藤の花風のたよりに浪や折けん〔をらなん金葉〕

款冬

山吹の花咲里は春ことにをらまほしくもおもほゆる哉

三月盡

花の散事をなけくとせしほとに夏のさかひに春はきにけり〔いイ〕

夏

更衣

いつしかとけふたちきつる唐衣ひとへに夏と〔はイ〕みゆるなり鬼

卯花

手玉ゆらしつはた布を織〔へカイ〕あけてさらしえたりとみゆる卯花

葵

昔よりけふのみあれにあふひくさかけてそ頼む神の契〔ちかひをイ〕を

郭公

時鳥夏の夜さへそらめしきたゝ一聲にあけぬと思へは

菖蒲

よとゝもに通ふ淀野のあやめ草けふたか宿のつまと成らん

早苗

賤母子かすそわの田井に引つれて田子の手まなく取早苗哉

照射

〔千載夏〕〔玉千載〕五月闇は山の峯にともす火は雲の絶間のほしかとそみえ

五月雨

久方の天もみえぬ五月雨にみくまか菅をかりほしかねつ

盧橘

吾宿の花橘や匂ふらん山ほとゝきす過かてになく

螢

大井河せゝにひまなき篝火とみゆるはすたく螢成けり

蚊遣火

わきも子にいかてしらせむ蚊遣火の下もえするは苦しかり鳧

蓮

つとめてはまつそ眺むる蓮葉を終に我身のやとりと思へは

氷室

夏の日も涼しかりけり松か崎これや氷室のわたりなるらん

泉

むすふ手に扇の風もわすられて朧の清水涼しかりけり

荒和秡

水無月の川そひ柳うちなひきなこしの秡せぬ人そなき

秋

立秋

朝またき袂に風の涼しきははとふく秋になりやしぬらん

七夕

ひこ星のまれに渡れる天川岩こす浪の立なかへりそ

萩

萩か花しからむ鹿そうらめしき露もちらさてみるへき物を〔みまくはしきにイ〕

女郎花

秋霧にかくれの小野の女郎花我たもとには匂へとそ思ふ

薄

風ふけは花野の薄ほに出て露うちはらふ袖かとそみる

苅萱

鶉なくかりはの小野のかるかやのおもひみたるゝ秋の夕暮

蘭

秋の野に香さへ匂へる蘭きてみぬ人はあらしとそおもふ

荻

山里に吹おとろかす風なくはおきさへ音もせてやかれまし

鴈

古里はかへる鴈とやなかむらん天雲かくれいまそなくなる

鹿

終夜しつくの山にうらふれてつま〔こイ〕とひわふる小男鹿の聲

露

風吹はまつ打なひく淺茅生にいかてをくらん秋のよ〔しらイ〕の露

霧

白波の音はかりしてみえぬかな霧立わたる玉川の里

槿

浦かせは浪やおるらんよもすから思ひあかしの朝かほの花

駒迎

引渡るせ〔す〕たのなか道空〔はしきりイ〕晴てくまなくみゆる望月の駒

月

山端にいさよふ月のたけ行を詠る我そ人なとかめそ

擣衣

衣うつつちの音にてよもすから〔よそなからイ〕人の心の程そしらるゝ

虫

夕去（暮イ）は過うかりけり秋の野は我まつむし〔にイ〕の聲ならなくに〔ねともイ〕

菊

うすくこく移ふ菊に置露はひといろならぬ玉かとそみる

紅葉

淺からぬやしほの岡の紅葉はをなにあかなくに〔とイ〕時雨そむ覽

九月盡

紅葉はのちりてつもれる木の本やくれ行秋のとまりなる覽

冬

初冬

昨日まて聲絕さりし小男鹿の〔もイ〕冬こもりせるけさのけしきか

時雨

天つたふ時雨に袖も濡にけりひかさの浦をさしてきつれと

霜

〔金葉冬〕さむしろに思ひこそやれ篠のはのさやく〔さゆる金葉〕霜よのをしの獨ね

霰

人目にはあられたはしる我袖を衣につゝむ玉かとやみん（るイ）

雪

白鳥の鷺坂山を越くれは小篠か峯に雪ふりにけり

寒蘆

葉かひせし芦もまはらに枯果てくきのわたりそ淋しかりけり（ける）

千鳥

よくたちに千鳥しはなく楸生る淸き川原に風や吹らん

氷

浪かくる岩は〔まイ〕ひまなくたるひして氷とちたる山川の水

水鳥

終夜霜やをくらむ水とりのはらふ羽音のたえす聞ゆる

網代

篝火をともさゝりせはひをのよる網代の程をいかてしらまし

神樂

夜もすからとる榊葉にをく霜のとけさらめやは神の慮も

鷹狩

白ぬりの鈴もゆらゝに岩せ野に合せてそみるましらふの鷹

炭竈

炭竈の（もイ）そことも見えすふる雪に道たえぬらん小野の里人

埋火

山里にひとりぬる夜は埋火も板まのかせに吹おこされて

除夜

門松をいとなみ立るそのほとに春明かたに〔夜やなりイ〕なりやしぬらん

戀

初戀

おもひあまりけふいひいたす〔いつるイ〕池水のふかき心を人はしら南

不被知人戀

〔金葉戀上〕我戀はからす羽にかく言のはのうつさぬ程はしる人もなし

不遇戀

〔詞花戀上〕我戀はよし野の山のおくなれや思ひいれともあふ人もなし

初逢戀

播磨かたうらみてのみそ〔もイ〕過しかと今宵とまりぬあふの松原

後朝戀

こひしさに我身そはやく消ぬへき何あさ露のをきてきつ覽

遇不逢戀

神もきけ思ひもいてよ吳竹のたゝ一よとはいつかちきりし

旅戀

〔金葉戀下〕戀しさをいもしるらめや旅ねして山の雫に袖ぬらすとは

思

何しかは人を恨むひたすらに心よはけに〔きイ〕つけるおもひを

片思

かたしきの片思してすまの浦にたるゝもしほのからき頃哉

恨

思ひかねよるら〔ちイ〕かへす唐衣うらみをれともしる人もなし〔そなきイ〕

雜

曉

山里の筧の水のせは〔はイ〕しきに猶有明の月そやとれる

松

〔千載雜上〕玉もかるいらこか崎の岩根松幾世までにか年のへぬらん

竹

冬籠色かはりてもみえぬかな竹のよことに雪はふれ共

苔

雲かゝる青根か峯の苔むしろいく世經ぬらんしる人そなき

鶴

鳴海かた朝滿しほやたかゝ覽あさりもせなて〔てそイ〕たつ鳴わたる

山

嶺高きこしのを山にいる人は柴車にてかへる〔くたるイ〕成けり

河

舟もなく岩浪たかきさか〔はイ〕ひ河水まさりなは〔ひイ〕こともかよはし

野

梓弓いる野の草のふかければ朝行人の袖そ露けき

關

妹か〔かいへイ〕りにくもの振舞しるからんとなみの關をけふ越くれは

橋

東路のさゝの舟橋朽ぬともいもしさためはかよはさらめや

海路

おほみ舟したなに波はかくれとも藤戸をさして浦つたひ行

旅

思ひ出ぬ人のなきかなかやねかり袂露けき旅のね覺を〔はイ〕

別

唐衣袖のわかれのかなし〔をイ〕さにおもひ立けん事そ悔しき

山家

〔金葉雜上〕蜩の聲はかりする柴の戸は入日のさすにまかせてそみる

田家

小山田の稻葉の露にそほちつゝ人めもる身はくるしかり鳬

懷舊〔わイ〕

末の世の人にみよとや岩代の野中の松をむすひをきけん

夢

〔金葉雜上〕うたゝねの夢なかりせは別にし昔の人をまたもみましや〔又みましやはイ〕

無常

朝日まつ露はかりなる命〔もイ〕にてなからへおもふ人そはかなき

述懐

なそやこは〔のイ〕吾身は越の白山かかしらの雪のふりつもるかな

祝

君かためゆはたのきぬをとりして丶神をそまつる万代迄に

人々歎冬并船中戀と云題よみしに

我宿に猶ほりうへん山吹の花のおりにそ人もとひくる〔けイ〕

つく／＼とおもひあかしに舟とめて都の方そ詠められける

希聞郭公并戀

時鳥やそ山までに尋きてた丶一こゑはきくへきものか

妹か門我過ゆかん出てみよ戀にやつれてなれる姿を

新中将（雅定）渡中院初祝和歌鶴契遐年

〔千載賀〕むれてゐるたつのけしきにしるき哉千年すむへき宿の池水

新中将家和歌合郭公

五月闇暗部の山の時鳥こゑはさやけきものにそ有ける

五月雨

五月雨に淺香の沼の花かつみそこの玉もと成やしぬらん

戀

〔千載戀三〕よと丶もに行かたもなき心哉こひは道なき物にそ有ける

未聞郭公并兵衛戀

夏衣たちきる日よりけふまてにまつにきなかぬ時鳥かな

かた糸の思ひみたる丶比なれや〔はイ〕言つてすともあはまし物を

曉天水鷄并月戀

またし今は八聲の鳥もなきぬ也何おとろかすくゐな成らん

ふき板のわれてもりくる月かけの戀しき人と思はましかは

海路子規并寄山戀

けふもなを舟出ものらし郭公こゑ高砂にたえす鳴なり

わきも子に今はあふみと思へとも人めもる山苦しかりけり

五月雨のはれまもなくつれ／＼に侍しにつねにましかはす人々のをさなけさりしかはさきのもくのかみ俊頼さきの兵衛の佐あき仲の君のもとにおなしことをいひつかはしたりし

何事か物せさせ給ふらんきこえさせてみつかきのいとひさしくなり侍にけるかな明行は二見の浦のうらめしくもくれ行は五月雨の空いと丶おほつかなき事大井川におとす筏のいかなることき丶給へるにかと雲鳥のあやめられ侍りて空行鳥のすけもはんへるかな

〔俊頼集〕五月雨の空をなかめて過せともたえてをとせぬ時鳥哉

さきの兵衛のすけ

かうはしき御をとつれはてのまひあしのふまん所もおほえすなんそも／＼さ丶かにのいとむつかしく心のうちも五月雨のつきなきほとはまことにみつかきの久しくをとはの川のをとつれまいらせぬ事なんかしこまり申

子規軒のしつくにをとなしのをとせぬうらみ誰もせましや

さきのもくのかみ

五月雨の晴間なきにつけても思かけすおほし出ける事をうれしき涙衣の袖にか丶りける身のほとのおもた丶しきをしら露のしらさりけるもをきところなき心地して本のしつくとなりはてむことをさへおしまか磯の千鳥久しくもなからへはやとおほけなきこと

は式嶋の大和みことのあそひのむしろにはなをちひろのかすまへさせたまへと心のうちに思ひ給ふることを大空にあらはれてかきつらねさせたまへる鴈の玉章をひらくにつけても袂のせはきうき身さへ數そふ身のありさまをしはからせたまふへきにや

蜀魄なけきの森にあかすして君かまつをはすきにける哉

水風晩來

夕附夜むすふ泉もなけれとも志賀の浦風涼しかりけり

庭樹礙日并戀

みな月のてる日といへと我宿の楢のはかせは涼しかりけり

兵衞のかみの家の歌合夏風

箱根なるねろの和草にこやかにつれなき人をみる由もかな

〔金葉夏〕夏衣裾野の草を吹かせにおもひもあへす鹿やなくらん

よかは

ぬは玉の夜川にともすかゝり火はさはしる鮎のしるへ成鳬

夏　戀

つらきをもうきをも今は思徐たゝ空蟬のねをのみそなく

寄泉戀

つれもなき人もろともに手もたゆく結ふ泉と思はましかは

たなはた人々よみしに

〔詞花秋〕天川たまはしいそきわたさなん淺瀨たとるも夜の更行に

月爲秋友

出るより入山のはのふもとまて心をそやるあきのよの月

九月十三夜詠月(和イ)歌并戀各一首

秋は今半もいまは過ぬるにさかりとみゆる夜半の月哉

寄森(露イ)戀

いかにせん我立ぬれぬわきも子にあはての森の木の下の露

月照旅宿并戀

いさゝめにさそはぬ月と諸共に旅のいほりによをあかす哉

玉もかるからかの嶋のからき哉妹に逢へきかたのなけれは

詣住吉社

そのかみのかさしにしめし住吉の松のしつえは浪そおりくる

殘菊留秋題并戀

冬に今は成ぬときけは賴れす時そとみゆる白菊のはな

十二月廿日比に雪のいといたくふりたりしにつとめてもくのさきのかみ俊賴の君前の兵衞佐顯仲かもとにおなし歌をやりて侍し

雪ふれはふまゝく惜き庭の面をたつねぬ人そ嬉しかりける

俊賴のきみかへし

我心雪けの空にかよへともしらさりけりなあとしなけれは

あきなかのきみ

人はいさふまゝくおしき雪なれと尋てとふは嬉しき物を

山寒花遲并戀

吉野山春は半になりぬれと雪きえやらて花さかぬかも

まとりすむうなての杜のうなたれてねをのみそ鳴人のつらさに

於桂山庄花纔殘并戀催舊意

櫻花青葉の中に散のこる梢や春のとまりなるらん

思出よあまのかこ山よそにのみ聞わたらむといつか契し

同山庄にて花并戀人々よみしに

木の下に衣かたしき旅ねせん花散里とみてやかへらん

もしほやくあまをとめ子か麻衣あさましき迄人のつれなき

土佐守播磨守のもとへわたる日歌とこひたりしかは
万代を契りはしむるけふなれはくるゝさへ社久しかりけれ
人々歎冬藏橋并戀題をよみし
かよひこしゐての岩橋たとるまて所もさらすさける山吹
我せこかきまさぬ時はうちなひき獨有明の月をこそみれ
平等院僧正講結願日人々止宿草菴題を
かとのとの草のいほりにやとりして我身の程を終に知かな
雨中郭公并戀
五月雨にしつくの山の郭公しのゝにぬれて小夜中に鳴
關守か弓にきるてふ槻の木のつきせぬ戀に我おとろへぬ
詠盧橋薫風利歌
夕月夜花橘にふく風なたか袖ふるとをもひけるかな
たのめてこぬ戀
契こし程は過ぬとおもへとも待とはいはし年もこそふれ
待聞郭公題并戀
夏衣たちきし日より杜鵑ぬるよもなしに今そ鳴なる
よとともに浪こす礒のそなれ木の下枝や戀の衣成らむ
草花告秋題院人々
露結ふ秋にははやく成にけりあさちか花の移ふみれは
曉知早涼并戀
秋風やゝ立ぬらん夢覺てたもと涼しく成も行かな
戀をして年のへぬるに女郎花うらやましくも結ふ露哉
月不撰處并契今夜戀
柴の庵も玉の臺も空晴ておなし心にすめる月哉
いつとなく思ひしよりも中々にくれ行空をまつにけぬへし
さきのもくのかみ俊頼の君いせにくたりて後久しく

をともせさりしにかくなんいひをこせたりし。ひな
のわかれによろつをとろへはてゝおほつかなきおほ
よとのつねにもせさせたまふちふねのよるひるは浪
のこゝろにかけなから月日の過にける事もなけきの
森のときはなるうへに薪をつめるうれへは身にそへ
る影のことくにして鈴鹿の關にもふりすてられすし
ふく山をもすへらかに越にけれはさもあはれなりけ
る身のありさまをもてあつかひて。しらぬさかひに
もまとひけるかなと袖のしからみところせきまゝに
はたゝはまおきのおりふしことにはなをよきさまの
つらにかすまへさせたまへかしと人しれすあふかれ
て。おもひてもなき都なれとさゝかにのほそかりけ
る事なれは。くすのうらはの風になひくもめにとゝ
まりて。さりとてやはいそきたつを聞て野にたつし
かのまうさする人もなきにはあらねは。いてやいつ
こにもつゐのすみかならねは釣するあまのとさため
かねてやすらはるゝほとに殘すくなき身のありさま
は旅の空よはの煙とも立のほりなは。あまのいさり
火かとおほめかれんこともをのつから哀とはかりや
つたへきかせ給ふらんと水くきのあとかきなかされ
ぬまゝにはこれにもつきぬ心地するいふせさもたゝ
をしはからせたまふへし
〔俊頼集〕とへかしな玉くしのはにみかくれて鵙の草茎めちならす共
とありしかはかくなん
つかひのたゝいまくたれはとて。とく／＼とせむる
に何事もおもひもあへぬほとにて。すなはち千はや

ふる神無月のついたちのひなんいろ〳〵のことのは
は見給へ侍ぬる誠にみつかきのいと久しくも聞えさ
せて侍けるかな花の都をふり捨てすゝか山越させた
まひしにさりともとしふく山のなをたのみをも玉く
しかとかひなくなのみして過給ひにけりとうけたま
はりてくちおしくて過侍しかと。つゐにはいせの海
の浪立歸り給はさらめやそのときこそはほしあひの
はまの眞砂のかすをつくして。おほつかなかりしほ
との事をもきこえさせめひなかのはまのほとはかり
たにもたいめんせてやはとむら松のはまを賴てすき
侍るほとにあはせてもたれそのもりのたれも。いく
りのゝ人を聞事もふちかたのかたくてなに事も岩木
のことにてのみなんうきはしのをろかなるさまにお
もはれたてまつりぬるかな

〔後拾集〕
しらすやは伊勢の濱荻風ふけは折ふしことに戀渡るとは（かなイ）

院北面にて郭公はしめて聞と云題又戀

卯花のかきねならすは時鳥いつしかけさの聲きかましや

院北面にて橋上藤花と云題

武藏野のうけらか花のいつとなく咲みたれたる戀もする哉

薄く濃くのとかに匂へしつえまて常葉のはしにかゝる藤波

郭公幷戀人々よみしに

色ならて身にしむ物は子規信田のもりのしのひ音のこゑ

夏引のいとしも人はしらしかし心にかけて年ふるわれを

旅宿郭公幷戀人々よみしに

折しまれしつ心なし時鳥たひねの空になく聲聞は

河内めか手染の糸のみたれ合てよりあふへくもみえぬ君哉

かすみ

ひはりあかる時にしなれは吉野山そこともみえす霞たな引

歌合に三首　贈左大臣家

子規なける渡りは關なれや行かふ人のすきかてにする

〔詞花夏〕
種まきしわか撫子の花さかりいく朝露のをきてみつらん

いたつらに花のみ咲て玉かつらみならぬ戀も我はする哉

さきのもくのかみとしよりの君の七月廿三日なん伊
勢へむすめをゐてくたり侍人のこになさんとてなん
ひとへにまれはかまにまれことさらにとてこひたり
しかはひとへはかまなとしてつかはしゝにたもとに
かき付侍し

今年よりかさしにしむる女郎花千世の秋をは君かまに〳〵

返

女郎花うれしき涙をきそへて露けかるへき旅の道かな

皇后宮にて庚申夜晩風如秋幷戀

夕されは風のけしきの涼しさに鹿鳴ぬへき心ちこそすれ

いかにせむ新嶋守かあさ衣あさましきとてあはぬ君哉

おなし夜又草の花をまつ幷戀

おもふとち露打はらひみにゆかん花のゝ萩のはやもさか南

ますらおの弓にきるてふ槻の木のつきせぬ戀も我はする哉

山のかけ水にうつる幷戀

龜山のかけをうつして大井川いく世までにか年のへぬらん

いかにせむしほれ衣にあらねとも夜毎に人をかへす君哉

祝

二葉なる松をひきうへて賴むかな万代迄のかさしと思へは

はな橘砌に匂ふ

しらぬことを人のまうせるによりて白河院の御かしこまりなる比唐の鏡の一尺はかりなるを北野にたてまつるとてかきつけし

身をつみて照しおさめよます鏡たか僞もくもりあらすな

そのことのあらはれにしこそ世のすゐこともなく哀なりしか。

年比の人かくれにしかは山里にわたりてとかくのことはするにすゐにもなりぬれはことさらに京にいてそめて曉かへるに鳥の鳴はへりぬなと人のいそけは

いつのまに身を山かつになしはてゝ都をたひと思ふ成らん

わさのことゝもはてゝみな人京へ出ぬれと我身はなをしはしと思ひてあるにしくれのせし日中將の上のもとへ

たれもみな花の都へちりはてゝひとりしくるゝ秋の山里

身のうれへあるころかもにまいりて

わかたのむかもの川波立かへり嬉しきせゝにあふ由もかな

其後氏人の夢に。この歌を御殿におせりけるを。歌かきたるかたを。御前にむかへてをせとおほせこと有けれは。しかなんをしなをすとみたまへしとかたりしはまことにや。

なき人のために西山なる所にて經供養するにきたれる人々くれにけれはとまりて山家春深といふことをよむに

鶯のなく音はかりや春ならむ花ちりにけるみ山へのさと

大貳の許に東國よりくろき馬のいてきたる名をはうしのことなんいふをたひ／＼ものすれとおしまるれは

かゝりける心つくしの牛のこをたれあつまちの駒といひ劒

源伯西宮にて歌合し侍りしに寄月述懐

〔詞花雜上〕難波江のあしまに宿る月みれは我身ひとつもしつまさり鳬

薄　戀

いつとなく忍ふも苦ししの薄ほに出て人にあふよしもかな

蘭　戀

わきもこかすそのに匂ふふちはかま思ひ初てし心たかふな

菊　祝

君か世は限りもしらす長月のきくをいくたひつまむとす覽

こもりゐたりし比月のあかき夜平等院僧正（行尊）のもとにたてまつりし

身をつめはたな引雲もなき空に心ほそくもすめる月哉

冬の春日祭に奉幣すとて身のしつみゐる事を思ひて御幣にかきつけし

〔詞花雜上〕枯はつる藤のすゑはの悲しきはたゝ春の日をたのむ計そ

或所に淡路といふ女房にたひ／＼せうそこすれとかへりこともなけれは

いかにせんとふひも今はたてわひぬ聲も通はぬあはち嶋山

つれなくて過る女の人にかたらひつきてあつまのかたへなんときけは心ほそくおもひけるにあはつといふ所よりいひおこせたりし

忘るなよあはつの原のあはすとも今かへりこん葛の末はに

返し

あはつのゝ葛の末葉のかへるまてありやはすへき露の命は

國なともさりにし後さてのみやはとて公文かむかふ

るに左大弁宰相爲隆勘解由使長官なれは さたする文
なとあるほとに 消息ありみれは立春に後今日のつか
さの奏にあはせむとて いそかせたまへはとくるよし
かむかふるつかさのおさなかめ〔マヽ〕て侍て御使につけて

夜をかさねあかたの水の凍れるをさの春風けふそときつる

返　し

春風にあかたの氷とけぬれは沈むみくつもあらはれにけり

歌合し侍しに月

〔詞花雜上〕よもすからふしの高ねに雲消て淸見か關にすめる月影

紅　葉

〔千載秋下〕山姫にちへの錦をたむけてもちる紅葉はをいかてとゝめん

戀

つらからむ言のはもかなわひつゝは恨てたにも慰めにせん

此後判者の前左衞門佐基俊の許へ 又歌合すへしこの
たひも判したまへと聞えたる返事に

諸越のたまつむ舟のもところけは思ひ定めんかたもおほえす

これは人々何こといひあはれたることにやとて

風をいたみたまつむ舟のもところきは君はかり社まほに定めし

播磨守宗成朝臣歌合せしに月

いかはかり隈なくてらす月なれは心のやみもはるゝなる覽

鹿

山ひこのこたふる山に鳴鹿はおのか聲なやともときくらむ

戀

あつまやののきのかやまの忍草こひをは人の忍ふ物かは

琳賢かもとより酒なとおくるとて 萩花さかりはよきさ
け世中になしこのころよき酒とりいてたるかめには
かならす物をいれてなんかへすといはせたれは 近江
守なりしおりにて 坂田郡の撿田の廳宣をいれてやる
とて

野へに出て露けき華をみるよりも秋はさかたの數を數へよ

返　し

數ふへき山田のつほの内にいれは萩の情けにしく花そなき

八月十五夜中宮御方にうへわたらせ給ひて 月の歌人
人よませさせたまひしに

なにたかき今夜の月をみる程や心のうちのはれま成らん

播磨守家成朝臣歌合せしに落葉

くれなゐにたきの白糸そめてけり峯の紅葉やまなく散らん

祝

いくらとかいふへかる覽萬代も君かためにはかすならぬ哉

火きりとて近江より貢御にまいらするもちゐは國司
のれうはことにおひたゝしくおほきにて人々のそう
するを前左衞門佐基俊佶のもとへふるとて

よしあしも淸き鏡そてらすなる心のほとはこれにてをみよ

返　し

はし鷹の野守のかゝみならねともよそなる人の心をそみる

身ののそみかなはて世中すさましくおほゆるころ人
のもとにつかはしける

浮身には都のてふりあきはてぬ鄙へ誘はんあつまつもかな

大宮中納言歌合に櫻

しら雲のたな引岑の櫻花かほらさりせはいかてしらまし

鶯

鶯の花のねくらにとまらすは夜ふかき聲をいかてきかまし

霞

炭かまの烟にむせふをの山は峯の霞もおもなれにけり

月

山のはに關守すへよたつた姫おしむもしらぬ月やとまると

紅葉

苔のむす岩かけまゆみ色ふかしこれを嵐にしらせすもかな

戀

情なきことのはさへも懷かしき戀しきなかに通ふと思へは

內にて遠聞擣衣の心を人々によませさせたまふに

たかためといそくなるらんよもすから槇のしま人衣うつ也

雨後草深と云題を

かそいろと賴むもしるし夜はの雨に小萩か原のたけそ增れる

鍛冶井宮法印世をうらみて大原にこもりゐ給へるに
しはすはかりに奉る

すみかまの烟はかりはたゝすとも山里いかに淋しかるらん

華のさかりに人々まうてきて花の下におりゐて偏愛
花といふことをよむに

我宿のものともいはし櫻花かゝる月日はあらしとそ思ふ

灌佛

世中にけふそ佛の立いてゝあらはれたまふ水はくみける

郭公

時鳥さてしもやまし物ゆへにおもはせたりや小夜更るまて

七夕

月の舟光りをさしていてぬめりこや彥星のあまの戸わたり

重陽

同しくはこゝのへにさけ菊の花月日の數にかなふはかりに

歲暮

はかなくてくれぬる年を數ふれは我身も末になりにける哉

曉明月

三室山みねにあさひのうつろへは立田の川に月そのこれる

百瀨川

名のみしてさしも嵐を百瀨川ゆゝしき瀨をは我そすきにし

祝

君か代にくらふの山の岩ね松いくたひはかりおひ變りなん

長承(崇德)元年十二月廿三日內裏和歌題十五首春

その色とめには見えぬを春雨の野への綠をいかてそむらん

歸鴈

契りけん程やすきぬと急くらむよるもすからにかへる鴈金

梅

かほらすはたれかしらまし梅花しらつき山の雪のあけほの

夏夜

まことにやあかしかぬらん夏のよを獨ね覺の人にとはゝや

照射

梓弓たかまと山にともすひはほくしにかけているにや有覽

瞿麥

朝またきおれふしにけりよもすから露をきあかす撫子の花

虫

聲たかしすこしたちのけ蛬さこそは草の枕なりとも

霜

かるの池の入江をめくる鴨とりのうはけはたらに置る朝露

千鳥

あふみちや野嶋かさきの濱風に夕波千とり立さはくなり

落葉

紅葉はをよもの嵐はさそへともみなこのもとにかへる成鳧

初戀

昔より人まとふとはきゝしかと戀てふ山にけふよりそいる

忍戀

淺ましや千嶋のえそのつくるなるとくきのや社ひまはもるなれ

會不逢戀

ひと夜とはいのらさりしをかひもなく心定めぬうき嶋の神

近衞院御時大甞會和歌

悠紀方　近江國

風俗和歌十首

從三位行左京大夫兼近江守皇太后宮亮藤原朝臣

稻春歌　野洲郡

人心やすのこほりときくなへにつけとつきせすはこふ稻哉

神樂歌　三上山

千早振みかみの山の榊はをかをかくはしみとめて社とれ

辰日參音聲　高御倉山

雲かゝる高みくら山のほる日のはるかに見ゆる君か御代哉

同日樂破　玉陰井

濁なきたまかけのゐの底清みすみよき世にもあひにける哉

同日樂急　長等山

〔玉葉賀〕君か世はなからの山の岩ね松ちたひやちたひ花の咲まて

同日退出音聲　安良鄕

やすみしる我おほ君の御代に社いとゝやすらの里も富ぬれ

巳日參音聲　佐野船橋

四方の海波もをとせぬ君か代とよろこひわたるさのゝ船橋

同日樂破　朝日鄕

いつしかと朝日の里をたちいてゝ急きもはこふみつき物哉

同日樂急　大富山

萬代とおほとみ山そよはふなる久しく君をさかゆへしとか

同日退出音聲　秋富村

君か代はたのしかるらし常よりも年へてみゆる秋とみの村

御屛風六帖和歌十八首

甲帖　正二月

長峯山小松多生

君か代はなかみね山に二葉なる小松の千たひおひかはる迄

見遣岡有摘若菜人

はる〳〵とみやりの岡の若菜こそ千歲の春はつむへかりけれ

梅原梅花盛人翫之

何れをかわきてもおらん梅はらは心にそまぬ色し見えねは

乙帖　三四月

青柳村樹尤多

〔玉葉賀〕君か代はたみの心の一かたに靡きてみゆる青柳のむら

白雲山櫻花盛開行客見之

八重たてるしら雲山の櫻花かほるはかりやしるし成らん

山吹崎欵冬開敷行人見之

いはね共くちなし色にしるきかなこや音にきく山吹のさき

丙帖　五六月

長澤池有採菖蒲人

年毎にたえすひくかな菖蒲艸ねもなかさはの池をたつねて

千藏里植田甚多

見渡せはちくらの里にあまるまて數もしられすとる早苗哉

常夏里毎人家瞿麥開

宿毎にうへける花のかひありて咲みたれたるとこなつの里

丁帖　七八月

石瀧水如糸

昔より名になかれたる岩瀧の水のしらいといくよへぬらん

千草原色々草花開敷

色々の千草の原をみわたせはいくらはかりのにしき成らん

玉井宿月

くもりなくすむ玉のゐにいとゝしく光をそふる夜はの月哉

戊帖　九十月

板倉山山田多積稻人見之

〔詞花雜下〕板倉の山田につめるいねをみておさまれるよの程をしる哉

會坂關運調物人馬多

貢物はこふよほろしおほけれはみちもさりあへす逢坂の關

鏡山紅葉盛客見之

日にそへてあかくそみゆるかゝみ山紅葉の色や深く成らん

己帖　十一二月

鷹尾山付鷹狩人

御狩するたかのお山にたつきしや君か千とせのひつき成覽

徭田杜祭神所

すへらきを守り徭田の森なれやあから柏のあからめもせす

高宮里白雪尤深

あさまたきふりさけみれは白妙の雪つもれるや高宮の里

康治(近衞)元年十月三日攝政殿(忠通)舍利講の次にふみつくらせたまひて願成佛道の心を被講に歌もある へしとてめしありしかはまいりて

〔詞花雜下〕いかてわれ〔かイ〕心の月をあらはして闇にまさへる人をてらさむ

人々來て歌よむに海邊月を

すみの江にやとれる月の村雲は松のしつえのかけにそ有ける

月照菊花といふことを新院のよませたまひしに

いくへとか籬のきくを思はまし今夜の月のなへてなりせは

ひえにまいりて客人宮の御前にてこれはしら山のおはしますときゝしかはむかし加賀守にて神拜にまいりしことをおもひいてゝ

年ふともこしのしら山わすれすはかしらの雪を哀ともみよ

新院仁和寺殿にて人々に和歌よまさせたまふとて中務大輔季宗かこひしに松間紅葉といふ題を

住吉の松の絶まの紅葉にやつもりの蜑はあきをしるらん

右衞門督宗成卿東山にて山家初雪といふことを讀しに

小夜更てかけひの水のとまりしに心はえてき今朝の初雪

夏月

夏引のいとのみたれもかくれなくこやのしのやを照す月影

新院にて野徑眺望(ちイ)

ますらおか朝ふむのらをみ渡せは雲ゐ遙かにかゝるせこなは

九月十三夜九條殿にて女院御堂にて和歌有しにいたはることありてえまいらぬをとのよりせめておほせらるれはゝう／＼まいりて月戀またもありしかと覺えす

くれのあき月の姿はたえねとも光は空にみちにける哉

人まねの戀にそ老はわすれぬるむかしの心いまたありけり
　左大臣殿(頼長)の中納言中將兼長春日祭上卿にくたり
　給ひしに前馬助範綱か二郎子清綱をいみしくしたて
　てしのふすりのかりきぬなとをきせたりしおもふと
　ころあるやうに見えしかは又の日たれともなくて範
　綱かもとにさしをかせし。
[千載雜上]きのふみし忍ふのみたれ[もちすりイ]誰な覽心のほとそかきりしられぬ
　老の病日にそへてよろつもおほえねと南おもての花
　さかりなりときゝて例のことなれは人々に案内して
　花の宴せしに
命あれは多くの秋になりぬれと今年はかりの花は見さりき
　此はなつねよりもめてたかりしをわすれかたけれと
　きのふの名殘にみたれこゝちまさりてさしいつへく
　もおほえさりしかは友人しておりにやりて見るにつ
　けて
かはよりの花の匂ひをきなから又もみさらん事そ悲しき
　このゝち病おもくなりて五月七日なむかくれはへり
　にける
金葉集[藤原顯仲か歌也]いつしかと明行空のかすめるは天の戶よりや春はたつらん
　郭公をよはる
同郭公あかて過ぬる聲によりあとなき空になかめつるかな
　新院のおほせことにて百首歌奉けるによめる
詞花集天川よこきる雲や織女の空たきものゝけふりなるらむ

　梅の木に雪の降けるに鶯のなきけれはよめる
千載集梅かえに降つむ雪は鶯の羽かせにちるも花かとそ見る
　崇德院に百首の歌奉ける時花の歌とてよめる
同かつらきやたかまの山の櫻花雲ゐのよそにみてやすきなん
　卯花をよめる
同村々に咲るかきねの卯花は木のまの月のこゝち社すれ
　崇德院に百首の歌たてまつりける時よめる
同五月雨の日數へぬれはかりつみし賤やの小菅くちやしぬ覽
同難波かた入江をめくる蘆鴨の玉もの床にうきねすらしも
　百首の歌奉ける時別の心を
同たのむれと心かはりて歸りこはこれそやかての別なるへき
同おもへともいはての山に年をへてくちや果なん谷の埋れ木
同砂の尾上の松に吹かせの音にのみやはきゝわたるへき
同よそにしてもときし人にいつしかと袖の雫をとはるへき哉
同年ふれと哀にたえぬ泪かな戀しき人のかゝらましかは
　百首歌たてまつりける時旅の心をよめる
同旋頭歌東路の野嶋かさきの濱風に我ひもゆひし妹か顏のみ俤にみゆ
　花十首歌讀侍けるに
新古今集麓まて尾上の櫻ちりこすはたなひく雲と見てや過まし
　崇德院に百首歌奉ける時
同秋風にたなひく雲のたえまよりもれ出る月の影そさやけき
　年比住ける女の身まかりにける四十九日はてゝ猶山
　里にこもりゐてよみ侍ける

同 たれもみな華の都に散果てひとりしくるゝ秋の山里
冬月をよみ侍ける
新勅撰集 雪ふかき吉野の山のたかねより空さへさえて出る月かけ
同戀 としふとも猶いはしろの結ひ松とけぬ物ゆへ人も社しれ
物の名 ときのふた
〔同雜〕 つらけれと昨日頼めし言のはに今日迄生る身とは知らすや
久安百首歌霰
續後撰集 さらぬたにね覺かちなる冬のよをならの枯葉に霰ふる也
戀の歌の中に
同 いかにせん玉江の芦の下ねのみ世をへてなけとしる人もなき
法性寺入道關白家に恨戀といふ心を
〔同〕 つらしとて心のまゝに恨ても後は思ひにたへんものかは
題しらす
〔同〕 思ふこと晴せぬ比はかきくらす時雨もよその物とやはみる
契不逢戀の心を
續古今 僞とかつしりなからけふまてに頼むや戀の餘りなるらん
久安百首歌奉ける時
新後撰 うちなひき春立きぬと鶯のまた里なれぬ初音なくなり
同 命をそちる花よりもおしむへきさすかに咲ぬ春しなけれは
同 隱れぬにおふるあやめもけふは猶尋ねてひかぬ人やなか覽
久安百首歌に秋のはしめの歌
同 衣てのまた薄けれは朝またき身にしむものは秋のはつ風
返し

千載集 家の風吹つたへすはこのもとにあたら紅葉のくちや果まし
家に歌合し侍ける時郭公
續後拾 時鳥なきて過ぬる一こゑのいかて心にとまるなるらむ
八條入道前太政大臣右兵衞督に侍ける時家に歌合し
侍けるに寄泉戀
同 我戀はむすふ泉の水なれやたえすなかれて袖ぬるゝかな
春生人意中といふことを
風雅 春來ぬとおもふはかりのしるしには心のうちそ長閑也ける
久安六年崇德院に百首歌奉ける時
新千載 織女の天の岩舟こよひこそ秋風ふきてまほに逢ふらめ
旅の心を
新拾遺 人つてといはぬはかりそ郭公聞ともなくて過ぬなる哉
同 草枕袖のみぬるゝたひ衣おもひたちけむことそくやしき
久安百首歌たてまつりける長歌
〔新拾遺〕 うき身には　よのふる事も　たのまれす　いつれかいつれ
おほつかな　ことはりなれや　まきもくの　ひはらの山の
そま人の　うきふししけみ　まかりきと　いとひすてたる
身なれとも　心にもあらす　たちましり　かなしきまゝに
かりかねの　ひまなくなけと　あはれてふ　言のはをたに
きかせねは　なくもゆかんも　かはらぬを　たゝ身のとかに
なしはてゝ　この世のことを　思ひすて　後の世をたにと
おもひつゝ　〔うき世の中を　立いつれと　子を思ふ道に
まよひつゝ〕　行へきかたも　おほえねは　天の川なみ
立かへり　空をあふきて　在明の　つねなき名をも

なかしつる哉

反　歌

身をしらていふはかひなき事なれと頼めは人をと思ふ計りそ

おなし心を

新後拾遺

河のせにおふる玉もの行水になひきてもする夏秋かな

右雖レ入ニ勅撰ニ不レ見ニ家集ニ。

子規負

郭公夏くはゝれる年とてもみのくせなれやとこめつらなる

瞿麥勝

から錦しくとこなつの花なれは宿のかさりと誰かみさらん

戀勝

今はさはあひみん迄はかたらはん命とならん言のはもかな

右三首修理大夫顯季家歌合。

水風晩來

またきより秋はたつたの川風の涼しきくれに思ひしらるれ

右左京大夫顯輔卿集以兩本挍合了

群書類從卷第二百四十六

和歌部百一　家集十九

從三位頼政卿集

春

立春

あふ坂の關にし春をとゝめては山のこなたは霞さらまし

おなし心を俊成卿家十首會内

冬こもる吉野の山の岩屋には苔の雫に春をしるらん

おなし心を實國卿家歌合

めつらしき春にいつしか打とけて先ものいふは雪のした水

故郷（遠村イ）霞歌林苑會

ほのかにも梢はみえし故郷をおもひやらする朝霞かな

霞播州歌合

ひきわたす大原山のよこかすみすくにのほるや煙なるらむ

霞隔關路

春くれは先そたちける相坂のせきもる物はかすみ成けり

おなしこゝろを

宇治路行するこそみえぬ山城の木幡の關を霞こめつゝ

海邊霞大貳重家卿會

春霞へたつるころはしら浪の越ともみえすすゑの松山

おなし心を

あきさゐるうなかみかたを見渡せは霞にまかふ信太の浮嶋

曉霞公通卿十首會内

狩ゆけは交野の御野に立鳥の羽きはもみえぬ夕かすみかな

鶯

ふる巣より若木の梅の初花にわたりそむなる鶯のこゑ

竹間殘雪

吳竹の夜な〳〵雪のやゝきえてもとのいくふしまた歸る覽

池水浪靜といふ事を歌林苑にて

春風や波たつ計ふかさらんかた寄もせぬ池のうき草

松上鶯

若和布刈春にしあれは鶯も不傳ひわたる天のはし立

毎朝鶯を聞といふ事を二條大宮にて人々よみ侍しに

日數行たひの庵を立ことにきゝ捨かたきうくひすのこゑ

ある宮はらなる女房に申かたらひて時々まかりかよひける程にあし分成事や有けむ久しうまからさりしかは二月の朔日頃梅の枝につけていかはしける

きまさすはさても散なて梅花なを待かほににほふ樣みよ

かへし

梅の花ちらは散なんちりて後それ故ならてゆかむと思へは
　よろこひして侍りける頃あひしりたりける女の悦ひ
　つかはさゝりしかは(これより)つほみたる梅の枝に
　つけていひつかはしける
またしとや梅を見つゝもとはさらん開くる物を我か思ひは
　返　し
かねて我思ひひらくる梅かえに並ふ人なき身なるへしとは
　隣家梅淸輔朝臣家會
一枝もおらぬとなりの梅花にほひはえたる心地こそすれ
　新院(崇德)御時里内裏におはします頃大内に候けるか
　綾綺殿の前の梅のはな盛にはへりけるを小舍人して
　おりにつかはしける枝に結ひつけて奉りける
九重の内にゝほへる梅の花とへはちらさしとおもひし物を
　返し兵衞内侍
九重のおなしみかきの内なれはあたにはちらぬ花と社みれ
　年ころ仕侍りし所を大宮の御所にかへめされてつき
　の年の春梅咲たるよしを聞て下枝にむすひつけさせ
　侍し
昔ありしわらやは宮に成にけり梅もやことににほひ増らん
　かへしよみ人しらす
むめの花むかしなゝ忍ふ妻もやと待かほに社にほひましつれ
　梅花薫窓中
東風かせの梅ふくかたに窓をあけて匂ひを閨の内に入つる
　二條院御時禁中柳垂
紫もあけもつらなる庭の面に又みとりなる玉柳かな
　雨中柳伊賀入道會
春雨に柳のかみを洗はせてけつり流すは風にそ有ける
　鶯
谷近き宿に来鳴やうくひすの里なれそむるはしめ成らん
　梅契多春
よろつ代の春まて咲ん宿の梅を命もかなや手折かさゝむ
　鶯爲春友
谷にてもつゐの友にや鶯のまたきにきつゝ我ならすらん
　待花似戀
いもか事戀しき花のひらけなは我こそさゝめ閨のかさしに
　きさらき廿日頃に大内の花みせよと申人に未ひらか
　ぬはなに付てつかはしける
おもひやれ君か爲にとまつ花の咲も出ぬにいそくこゝろを
　返し小侍從
逢事をいそく成せは咲やらぬ花をはしはし待もしてまし（なイ）
　南殿のはなみに大納言實房卿女房あまたひきくして
　大内にまいりて待けるにいひつかはして侍し
あたならす守御垣のうちなれと花こそ君にさはらさりけれ
　返　し
九重のうちまて人を尋いれははな吹風をいかゝいさめむ
　南殿花盛にさふらひける頃内の女房里内裏よりみに
　まいりて歸さまにあふきのつまを折て書付て花のし
　つえにさしはさまれたるなみれは
百敷の花に心をとゝめ置て歸らむ道にふみやまとはん
　かへし
花にあかて道にまとはゝ留けむ心の方へ歸れとそおもふ
　二月朔日頃に花またしき程にならよりつくりたる櫻

をませくた物のうへにかさしてつかはしたりけるを
ひとりみむか口惜さにむかひ成所に櫻の梢のみゆる
かまた咲ぬ程にあるしのもとへ此造花をつかはすと
て
君かすむ宿の梢のさかぬまにめつらしかれと花たてまつる
返し
身さへなりちらてやむへき花みれは宿の梢はまたれさり鳧
花
さくら花みるにつけても懷敷ちりなむ後のかねて惜さに
暮ぬまは花にたくへて散しつるゝこゝろあつむる春夜の月
春月經盛卿家歌合
花下月明右大臣家歌合
花ゆへになかしと思はぬ春の日をやかて暮さて見する月哉
春あつまのかたへまかるに花の咲たるをみて
東路や春のむかひに行旅はさきあふ花にえこそちかはれ
人々あまたくして花み侍しに法性寺にて
咲まさる木すゑやあると尋すは長閑にやとの花はみてまし
白河にて人々花見侍しに
をのつから花の下にし休らへはあはゝやと思ふ人もきに鳧
深山花
太山木のその梢ともみえさりし櫻は花にあらはれにけり
山さくら散もちらぬもしら雲のかゝる限はえこそみわかね
となりなる所に櫻の咲たりけるか梢計見えけれはあ
るしのもとへ
櫻なく梢をみれとよそなれはそなたの風を待としらなん
返し
花さそふ風を待えて嬉しくはやかて隣の數とをしれ
尋山花宰相入道歌合
はなさそふ山下かせの香を留て道にもあらぬ道をふむかな
遠尋花
くやしくもあさゐる雲にはから（さイ）れて花なき峯に我は來に鳧
水邊櫻
咲影の水にさなから移れるははなのすかたの池にそ有ける
さくらを重家卿歌合
あふみちやまのゝ濱邊（入江イ）に駒とめてひらの高根の花をみる哉
おなし人のもとにて花のうたとて
散はてゝ後やわか身に歸りこむはな咲宿にとまる心は
花播州歌合
さくら花さける盛は梢より外に心も散すそありける
花
散ぬれは程をへたつとおもへはやかつみる花のかねて戀しき
我やとの花はねたくやおもふらんよその梢にわくる心を
つねよりも花の梢の隙なきは立やならへる峯のしら雲
さくら咲梢はそらの白雲にまかひし花の雪とふりぬる
けふいく日同し所にゐる雲とみゆるは花のさかり成けり
人々白河の花みられしに歡喜光院の花の下にて歌よ
みさふらひしに
としことに哀とそおもふ櫻はなみるへき春の數もうすれは
尋花の心を歌林苑にて
たつねくる我こそ花を花とみれ人のよそめはみねのしら雲
歌林苑にて人々花のうたよみさふらひしに
花さかは告よといひし山守のくる音すなり馬（駒イ）に鞍をけ

大内のさくらさかりにさきてさふらひしに雨のふる
ひに侍従かもとへつかはしける
けふは雨明日は霙と成ぬへき雲井のさくらみむ人も哉
返　し
雪とたにみゐへき花のなとやさは雨やみけれとふらむとす覧
逢樵夫問花心を歌林苑にて人々よみ侍しに
折くたる爪木こるをに物申すかのみね成は雲かさくらか
老後見花
古はいつも〳〵とおもひしを老てそ花にめはとまりける
おなし心を
是きけや花みる我をみる人（人のわれを見てイ）のまた有けりとおとろかす也（きぬ也イ）
散かたに成にけるこそ惜けれと花やかへりて我をみるらん
歸　鴈
いまはとて春の田面を立鴈の雲に消ゆくかたをしそおもふ
おなし心を頼輔朝臣歌合
天つ空ひとつにみゆる越の海のなみをわけても歸る鴈かね
湖上歸鴈
歸る鴈聲をほにあくる時しもあれ南よりふくよこの浦かせ
大納言實國卿南殿のはなみにまいりて歸られて後た
れともなくて文をさし置てつかひはかへりにけりあ
けてみれは
我か身は歸る計そ（なのみイ）木のもとにとまる心と物かたりせよ
返しもしさにやと推量てつかはしける
歸りぬるうさは花にそ愁へつるとまる心はみえは社あらめ
八條院歡喜光院におはします頃さくらやう〳〵咲は
しめて侍るをみて花半開といふこゝろを人々よみ侍
しに
とりそへて植し櫻の先さきに一木咲にそ二木とはみる
地下にて侍しに南殿のさくらさかりなる頃上達部殿
上人參りて禁庭花のこゝろをよまれ侍しに
てもかけぬ雲井の花の陰にゐて散庭をのみ我物とみる
水上落花
よしの河岩瀬の波による花や青ねか峯に消るしらくも
落　花
吹ちらす梢のはなを天の原風ませにふる雪かとそみる
おなし心を按察公通會
散はてゝ梢のはなの戀しきに我なくさめよ峯のしら雲
いまた殿上をゆるされぬ事を歎侍しに二條院の御時
三月十日頃に行幸なりて南殿の櫻さかり成を一枝お
らせて去年と今年といかゝあると仰下されて侍りし
かは枝にむすひつけてまいらせ侍ける
よそにのみ思ふ雲井の花なれは面影ならてみえはみそあらめ
かへし丹後内侍
さのみやはおもかけならてみえさらむ雲ゐの花に心止めは
於船中見花
さくら咲磯山ちかくこく舟の片乘せぬはあらしとそ思ふ
谷　櫻
かけわたす木曾路の橋の絹間よりあやふみなから花をみる哉
櫻を季經朝臣家歌合
尋ねしと宿に櫻を植しかとおほつかなみの春の山邊や
尋　花
山さくら尋ねみるまに宿なるは身を恨みてや散むとすらん

三月十日餘のほとに内の女房さと内裏より大内の南殿の花見に上達部殿上人なと引くしてまいり(られ)て出さまに散たる花をかきあつめてつかはすとて

花ゆへに風ないとひ(うらみイ)そちれは袿かき集めても家つとにすれ

返し

いにしへもとも宮つこいさめけれ散花とても家つとにすな

かくて後夜に入まて此人々あそひてふくるほとに出らるとて陽明門より人をかへしていひつかはしてさふらひけり

散積る花はいくらと人とはゝ風のはらひていにしとをいへ

返し

ちる花を風にあふせてなしといはゝ同し名そとやふかおとす覽

春野歌林苑會

冬枯の野邊の新やけ程ふれはまたさわらひそもえ出にける

折蕨遇友

めつらしき人にもあひぬ早蕨の折まく我ものへにきに鳧

落花客稀歌林苑會

ちらさりし程(ときイ)はまもなくこし人の花踏わくるあとのともしさ

水上落花

山さくら散にけりとは初せ河すゑくむ里の人やしるらむ

落花按察公通十首内

花はみな散ぬとおもふかなしきに我なくさめよ峯のしら雲

おなし心を大内にて南殿のはなの下にて上達部殿上人よまれしに

はたれ雪ふるかとみれは九重に散かさなれる花にそ有ける

故郷花伊賀入道會

なはのうみの沖行ふねそ過やらぬ高つの宮の花やみゆらん

藤花を歌林苑にて人々歌よみ侍に

藤なみも汀によするをとす也かゝれる松に風やふくらん

おなしこゝろを

あたならぬ松のえことに咲花の散にそよそのふちと知ぬる

大内にて殿上の人々藤花映水といふ心をよみ侍しに

住の江の汀に松のなかりせは二木に藤をかけてみましや

藤花留客

みる人をなとやかへさぬ藤の花はひまつはれよとかは敎へし

杜若

さらぬたに行かたもなき沼水のめくりにたてる杜若かな

躑躅をよめる經盛卿歌合

けふそみるさきさか山の白躑躅いかて佐保姫そめ殘しけむ

瀧下欵冬

瀧の糸にぬきとめられす散玉をうくる(つゝむイ)袖かとみゆる山ふき

隣家欵冬

山ふきの色をうらやみ中垣のあなたにゐてと思ふころかな

春殘二日といふ心を

おしめとも今宵も更ぬ行春をあすはかりとや明日は思はん

三月盡

春も果花も同しくけふちらはたひ〳〵物はおもはさらまし

山三月盡

あるしこそ山かつならめけふ春を限としらぬ遲さくらかな

夏

六位にて侍し時更衣の心をよみ侍しに

夏ころもみとりの色もかはりせは心のうちや涼しからまし

更衣大納言實國卿歌合に

けふやさは卯花色のしらかさね春のつゝしに引かへつらん

卯　花

神まつる比にもなれはうつきさす小屋の袖かき花咲にけり

暮見卯花歌林苑會に

けふも猶卯花山は越ぬへしそのさく色のくれはこそあらめ

卯花季經朝臣家歌合

うの花の垣ねなりけり五月雨に雨さらしする布とみつるは

卯花隔水

卯花のみつの垣ねに咲け（ぬイ）れはなかめにわたす淀のわたりを

夜鵜河

かひくたすう舟にかゝる篝火のみえぬ夜もなきしもつやみ哉

旅宿郭公

哀さは思ひし事そほとゝきす鳴いほりをは朝たちもせす

月前卯花

てる月に色はとられて卯花の下枝をのみそ垣ねとはみる

閏四月卯花

あやめ草ふくへき月を卯花のうはひて猶も咲かとそみる

人傳郭公

ほとゝきす聞つと語る人をさへ又もやくるとまたぬ夜そなき

待郭公公通卿十首（あやイ）會中

戀するか何そと人やとかむらん山ほとゝきす今朝は待身を

夏　草

男鹿ふす夏野の草を分行（くれイ）はふまれにけりなあたら萩さへ

瞿麥をおさなきものにたくひて

なてしこな我身のするに成まゝに露のみをかん事を社思へ

竹風夜冷

をしのくる夜半の衣を戰くなる竹の葉音に引きつ（きられつゝ）るかな

竹の陰に涼むといふ心をよみ侍し

呉竹のあたり涼しきうたゝねに我さへふしをならへつる哉

待郭公の心を人々よみ侍しに

ほとゝきす空にも道をさためせは其一すちをまたまし物を

おなし心を

待けりと我もやきかむ郭公なかなのりせは名のりかへして

郭公を公通卿會

香をとめて山ほとゝきすおちくやと空までかほれ宿の橘

なく聲（をきゝ）のきえ果るまて郭公山遠方（とふ）をなかめこそやれ

ほとゝきす鳴音遙にほのめくは五百重（いくへイ）の雲の上やすむらん

寢覺に時鳥を聞て

ほとゝきす聞はしめたるね覺にはおとろくうへに猶そ驚く

念佛の隙に待郭公といふ事を人々よみ侍しに

西のみかすゝを打をく隙もあれはまたねかはるゝ郭公哉

海路郭公

もろともにとわたりすなる郭公ゐしまへいなは鳴聲もおし

三位大進清輔家やけて後五月郭公なくをきゝて申つかはしける

かたらひしいへはなしとて郭公君を尋ぬときくやきかすや

返　し

郭公いつもをとせぬならひとて宿のとかともおもはさり鬼

深夜郭公

待またむ人の心をみむとてや山ほとゝきす夜をふかすらむ

　郭公前兵衞佐經正家歌合

まちけるもまたさりけるも子規聞けしきにそみえ別れぬる

　夏草同會

春過ていくかになれは眞菰草あさりし駒のはみかへるらん

　寢覺の郭公のこゝろを人々よみ侍しに

うたゝねの夢に聞なす郭公うつゝのそらに名殘なくなり

　郭公法輪寺百首中

郭公またこそきかね我は世にあふちの花のさかりならねは

世中を過かてになけ郭公おなしこゝろにわれもきくへき（るなりイ）

一聲はさやかに過てほとゝきす雲路はるかに遠さかりゆく

郭公あかて過にし名殘をは月なしとてもなかめやはせぬ

　野徑郭公範兼卿家會

なきくたれふしの高根の郭公すそのゝ道は聲もおよはす

　むかひ成所にさくら多く咲たる梢をのみ見てすき侍るほとに五月に成て郭公の鳴けれはとなりに聞らんとおもひて

ほとゝきす聞はきくらむみれはみし隣の花の梢のみかは

　返し宰相中將

郭公ともには聞と猶きませしつゐたまてとて花もさそみし〔た字アマレリ〕

　五月十日比に郭公のしけく鳴をきゝて別當入道のもとへつかはしける

郭公かたらふ比の山里は人とはすともさひしからしな

　返し

郭公かたらふ事を山さとは都の人とおもはましかは

　夕郭公

けふもまた山路に柴の庵してとまれはすくるほとゝきす哉

　おなし心を

まきのとをしはしなさしそ霍公きゝつ宿とふ人もこそくれ

　月前郭公

一すちに月みる程のこゝろをそ山ほとゝきす空に分つる

　山家郭公法住寺殿會

都にはまつらんものをほとゝきす出るをおしむ太山邊の里

　郭公漸稀

いま更に猶まてとてやほとゝきす五月の末に聲のともしき

　五月雨の比内にさふらひてまかりいてたる夜珍らしく月のあかゝりしかは大宮に小侍從さふらふときゝて近き程なりけれは申つかはしける

雨雲のはれまに我もいてたるを月はかりをや珍らしとみる

　返し

雨のまに同し雲ゐは出にけりもりこはなとか月になとらん

　盧橘薫閨歌林苑會

かほりくる花橘の道なあけてしのふね床を人にしれぬる

　盧橘薫遠法住寺殿會

たか里のはな立花のにほひそとゝはまし物を風のこたへは

　五月雨

さみたれの日をふるまゝにいかなれは池の水草の淺く成覽

　六月十日頃に更忍（戀）郭公といふ心を讃岐の院にて人人よみけるに女房にかはりて

郭公今はなかしとおもふ夜は待しよりけにいこそねられね

　水風如秋

浦風のふきあけにたてる涼しさに秋かとそ思ふ志賀の辛崎

江上螢多鳥羽院北面會

いさやその螢のかすはしらね共玉江の蘆のみえぬ葉そなき

水鷄

くゐなとは思ひもあへす明にけり人待宿の夜半の戸さしは

水鷄驚寢

心なくわれ驚ろかすくゐな哉またまとろまは父なはかりそ

寺邊水鷄

あれはてゝたつる戸もなきあへ寺を叩くは夜半の水鷄也皃

連夜鵜河歌林苑會

かつらめや新枕する夜な／＼はとられし鮎の今夜とられぬ

河邊草深二條院御時女房に替りて

小船入つたの細江にさす竿の末そみえ行草かくれつゝ

泉

大原やせか井の水を手にかけていくむすひせは秋に成らむ

泉邊翫月有大臣會

まとゐして岩井の水を結ふには手毎にそゐる弓張の月

夏月

庭の面はまたかはかぬに夕立の空さりけなくすめる月かな

水上夏月

うき草を雲とやいとふ夏の池の底なる魚も月をなかめは

水邊納涼

なつも猶ゆきけの水の末なれは不二の河こそ冬心地すれ

杜邊納涼

名を聞に思ひなすにやいつみなる信太の杜のかけの涼しさ

夜五月雨と云心をよみ侍しに

露（つえイ）はしる山の末のにかりねして空おそろしき夜はの五月雨

大井河邊にまかりてあそひ侍しに河邊夕涼といふ心を人々よみ侍りしに

暮ぬるか遠の山かけわたりきて今そとなせの河邊涼しき

夕顔の心を述懐によせてよみ侍しに

よの中をうしろになせる山里にまつさしむかふ夕顔のはな

我にをとる人こそなけれ山さとに夏そ引折しはふるひ人

山かつの小（かイ）屋のしりへのはたにまく哀我身をいかさまにせん

秋

荻

めにみえぬ風のきたらは告よとて植てし荻そ契たかへぬ

秋かせの身にしむ事をそよ／＼とうなつく荻そ諸心なる

草花露重

枝よはみ露のしら玉もちかねて夜もふすのへの女郎花哉

薄

淺せなき大河嶋の花すゝきまねくとみれとえこそわたられ

大内にて禁中秋と云心を人に替りてよみ侍ける

やまふきや菊も重なる數はあれと増りてみゆる九重の秋

草花催促

出にけりあたの大のゝわさ薄またかたはらのこと花もかな

萩

わか宿の萩をはよきてこともなき淺茅かするに秋風そふく

秋野

宮城のゝ花の盛に下あひて音に聞こし萩をみるかな

旅行聞鴈

旅なるはわれし獨とおもへとも鴈も雲路を幾日とそなき

霧隔行船
ともとりも小舟もみえてたはれめか聲計こそ霧にかくれね
女郎花近水
なみ立る此河岸のをみなへし咲わたれはや露けかるらん
野徑眺望
暮ぬとて人ぬるのへの女郎花いまさは花のあさかたちみむ
草花の心を歌林苑歌合
かり衣われとはすらし露しけき野原の萩の花に任せて
月前草花法住寺殿會に
隈もなき月やまはゆきをのか枝をかさして立る女郎花かな
鹿歌林苑會に
草かくれみえぬ男鹿も哀〔妻歟〕こふる聲をはえこそ忍はさり鳬〔けれ歟〕
鹿聲遠近法住寺殿會に
いなり山みねかと聞は杉の庵の窓の前にもをしかなく也
夜泊鹿歌林苑會に
泊出て夜舟をこけは高砂のおのへのしかの聲そきえゆく
秋花勝春花範兼卿家會
秋までも俤にさく櫻はな野邊の色みて後そ散ゆく
閏餘秋月法住寺殿會
名に高き月は二夜をみよとてやことしは秋をのふる成らん
鹿聲何方同
鹿の鳴かたをもえこそ聞わかね今はみゝさへおほろ成けり
爭尋紅葉同
さそひつる人にも告て先さきに立田の山のもみち葉をみん
殘菊夾路同
露しのく山路のきくはらうへの〔にイ〕はかまにさへそ移ひにけり〔る歟〕

故籬苅萱
よりかゝる笆もあれて苅かやのみたれもしらす打臥にける
隣家晩萩
風ふけは中垣たゝく萩の葉をたそかれ時にとはせつるかな
待　月
出ぬまの山のあなたにおもひこす心やさきに月をみるらん
月法性寺殿にて人々十首の歌よみ侍しに
夜もすから寒行月を山端にをくり付るはこゝろ成けり
おなし心を
月清みこよひそみゆる水底の玉藻にすたくさいの數さへ
月待〔得イ〕秋勝左大臣家會
光をは秋の爲とやおさめけむとりいてたりとみゆる月かな
月經威〔盛歟〕卿歌合
殘るへき垣ねの雪は先消て庭はつもるとみゆる月かけ
海邊月
すみ吉の松のこまよりみわたせは月おちかゝるあはち嶋山
同伊賀入道爲業會
浦つたひなるおの松のかけにきて又隈もなき月をみるかな
三井寺歌合し侍けるに人々にかはりて月をよみ侍り
ける
月清みしのふる道そ忍はれぬ世にかくれてとなに思ひけん
月小野宮會
秋の夜も我よもいたく更ぬれはかたふく月をよそにやはみる
八月十五夜
名にたかき秋は二夜としりなから先みる月にしかしとそ思ふ
おなし心を歌林苑會

月はたゝ今宵をのみそまたれつる過ぬるかたや山のは成覽

八月十七夜月常よりくまなくみ侍しにむかひの中將のもとより

我見てもたくひ覺えぬ月の夜はふりぬる人そまつとはれける

返し

七十年の秋にあひぬる身なれ共今夜はかりの月はみさりき

經盛卿かもにて歌合し侍りけるにまいりあひておなし心をよめる

影やとすみたらし河のさやけさは月もやこよひ天降るらむ

敦頼すみよしにて歌合し侍りけるに社頭月のこゝろを

一すちにあふく心をすみよしの空行月に分そやらるゝ

月終夜友

有明の月もやわれを惜むとていらぬ先にはいらしとそ思ふ

雲間月

よもすから絶間々々そまたれける雲より雲にうつる月をは

清輔朝臣家歌合に月を

雲もなく山のはもまた遠けれは月ゆへいまそ物はおもはぬ

月歌林苑會に

曇なくあれたる宿になかむれは我もさやかに月にみえぬる

おなし心を

今夜たれすゝ吹風を身にしめて吉野のたけの月をみるらん

月重家卿歌合に

月かけにうつもれぬとや思ふ覽雪にならへるこしのさと人

海上見月左大臣家會に

てる月を雲なへたてそ夜舟漕我もよるへき嶋隠れなし

入月そ常よりもけに惜まるゝよし足柄の關をこゆとて

關路惜月同

旅宿月

雨にこそ庵はさゝね更科の月にさはりていく夜とまりぬ

九月十三夜法性(住ィ)寺殿(供花ィ)會

つもりより廣田へ渡るあき人の今夜の月をめてさらめやは

おなし心を

かくはかりさやけき月を命あらは又こむ年の今夜もやみむ

水月右大臣家歌合

影たにもゐせきにしはしよとまなんいらは小倉の山端の月

水上月

夕は川わたみによとむ水のあはのめくるもみゆる秋の夜の月

野風右府家會(歌合ィ)

心にもあらてやまねく花すゝき秋のゝ風にそゝのかされて

夜鹿

夜をこめて立きる山の裾にしも鳴てや鹿の人にしれぬる

水上月公通卿家會

月影を氷とみれとすはのうみに上ふむ冬はまたしかりけり

野風同會

吹おろすあらしやまなきをしほ山すそのゝ草のかた靡なり

促織虫

夜もすからはたをる虫はあさち原露ふき結ふかせや寒けき

野宿見月

秋の野のおはなかりふく庵には月はかりこそあひ宿りすれ

江上月歌林苑會

いさやこら難波堀江の蘆かりて宿れる月に隙もあらせし

寄月述懷
天の原あさ行月のいたつらによにあまさるゝ心地こそすれ
同右大臣家會
おちかゝる山端ちかき月かけはいつまて思ふ我身也けり
湖邊見月
こき出て月はなかめむさゝなみや志賀津の浦は山端ちかし
霜夜月
馴にけむおなし雲井の月影に猶一つなる庭の霜哉
海邊晩霧
貝ふむと汐干にたてる難波女か歸るあし邊にまよふ夕きり
閑居霧深
霧わけてとふ人もなししかのふむ庭の木葉の音はかりして
寄月述懷
さやかなる月の光をしるへにてよにふる道を辿らすもかな
月照已屋歌林苑會
あるしからあれたる宿のくせなれはおろしこめても月はみえ覓
藏人おりてはむへりし比夜半月といふ事を人々よみはへりしに
ねひとつと今やさすらん雲の上の月をみるにも忘られぬ哉
遍照寺の月を見て
いにしへの人はみきはに影たえて月のみすめる廣澤の池
草花經盛卿歌合
をりはてぬ花こそあらめ秋の野に心をさへものこしつる哉
をみなへし
ひともとゝ定めてそみし女郎花はなこと心あらしと思へは
なき名のみいはれのゝへの女郎花露の濡衣きぬはあらしな

雨中鹿
時雨する空はくもれとなく鹿の上毛のほしやかくれさる覽
菊花待開
とからしのかせの立まて綻ひぬきくこそ花のとしめ成けれ
大納言實定卿のもとより菊をこはれはへりしかはむすひつけて侍し
玉しける庭に移ふ菊の花もとのよもきの宿なわすれそ
返し
うつし置て此一もとはめかれせし菊も主ゆへ色まさり覓
惜秋忘戀といふ心を刑部卿範兼卿會
またもなき秋を今夜は惜めとや身にそふ戀のかたさりに劔
九月盡實國卿家歌合
秋にこそ今宵わかれめこのはさへとまらぬ音を聞そ悲しき
おなしこゝろを歌林苑會
秋ゆへにねぬ夜成けり盡ぬへき我齡をはたれかおしまん

冬

しくれ歌林苑會
山めくる雲の下にや成ぬらんすそ野の里を時雨すくなり
おなし隆信卿家歌合
音きけは哀ともにや曇るらん時雨か下にしくれしてけり
行路時雨
晴くもり時雨する日は常盤木のかけに幾たひ駒とゝめけむ
月前殘菊
月もみよ菊には似すな世中に殘れる身こそ白く成けれ
殘菊

白菊の又さけるかとおとろけは霜の下にそ色はありける

月照山雪右大臣家會

つもりける雪はかりかは木間より月もしくるゝさよの中山

冬　月

袖さえて嵐ふく夜の月みれは梢も空もくもらさりけり

おなし心を經盛卿家歌合

月かけを凍へたつる池の水の玉もかしたやくもるなるらん

月前水鳥

澄のほる月の光によこきれてわたるあきさの音の寒けさ

水上落葉北白川會

谷河のふし木の橋にせかれたるみくつをみれはもみち成皃

故郷落葉

木葉ちる志賀の都の庭の面はその跡とみる石すへもなし

落　葉

龍田姫梢も染るくれなゐの色をおろすは嵐なりけり

おなし歌林苑會に

梢には一葉もみえし大荒木の杜の下草もみちしにけり

落葉入簾中

木葉ふく嵐やこすをあけつらん拂ふにおしき塵のつもれる

大井河邊にて水上落葉をよめる

梢にもあらぬゐせきにわかちやる河の枝にも丹葉しにけり

水上落葉

いまはよに山の木葉もあらしかし立田の河の色つくみれは

葉飛渡水範兼卿會に

立田河吹こす風を待てこそぬれぬもみちを袖にうけつれ

山路落葉仁和寺にて人々歌よみ侍しに

このは散山路の石はみえねとも猶あらはるゝ駒のつま音

紅葉隔池範兼卿會

かつまたの池のあなたの紅葉ゆへ昔の人やふねもとめけむ

隔谷紅葉

もみち葉をよそにみましやかつら木の神の岩橋渡し果せは

落葉驚夢範兼卿會に

木葉散宿はかやゝの板ひさしはしに臥夜は夢も見はてす

於法住寺殿院三熊野詣候間人々歌合せられしに關路落葉を

都にはまた青葉にてみしかとも紅葉散しく白河の關

おなし歌合に水鳥近馴

子を思ふ鳰の浮巣のゆられきて捨しとすれや水隱もせぬ

おなし心を歌林苑會

まき流す丹生の河せにゐる鴨はめなれにけりな立も騷かす

鷹　狩

あられふる交野の草を打なひけこまかにかるや鳥立なる覽

河邊千鳥

東女とね覺て聞は下野やあその河はらに千鳥鳴なり

寒夜千鳥觀蓮歌合

さゆる夜は遠さかり行しかの浦の浪のこなたに千鳥鳴也

曉千鳥

打わたるやすのかはらになく千鳥さやかにみえぬ明暮の空

千　鳥

夜舟こきおきにてきけは常陸の海かしまか崎に千とり鳴也

時雨經盛卿歌合

時雨する交野のみのを狩行はならのましはの露そこほるゝ

雪おなしく

こえかねて今そ越路をかへる山雪ふる時の名にこそ有けれ

身のうへにかゝらむ事そ遠からぬ黒かみ山にふれる白雪

ふる雪に木曾路の谷は埋もれてかけても橋のみえぬ頃かな

踏分てこゆるあらしの山風に梢の雪もまたふりにけり

閑居雪歌林苑會に

雪にかるまかきの竹の音のみそ時々われをおとろかしける

雪埋樵路

雪つもる山路にまよふ山人はをのか爪木をこりぬとや思ふ

雪中鷹狩

御狩する野もせに雪の降ぬれは山をにたゝむかつらたになし

枝折せししはのさ枝もうつもれて歸る山路に雪にまよひぬ

曉鷹狩歌林苑會

暮ぬとてかへる野へより立鳥の羽音はかりにあはせつる哉

待初雪

またれつる雪けかと社思ひつれいまた時雨の雪〔雲イ〕にそ有ける

社頭雪敎頼入道西宮歌合

しめのうちによをとをす哉下消ぬかしらの雪を打拂ひつゝ

旅雪公通卿十首

船わたすすみた河原にふる雪の色にまかへるみやこ鳥かな

連日雪宰相入道歌合

こしの空雪けの雲の絶せねはふらぬ日をのみかそへつる哉

雪

今朝みれは小野山白しむへそこの過ぬる夜半の床はさえける

雪つもるこしの山風吹ぬらし檜原松のはあらはれてみゆ

雪ふれは何にかは身を隱すへきかるもか下のいとこころもなし

曉雪

忍ひつま歸らむあとのしるからしふらは猶ふれ東雲の雪

雪のふり侍しあしたに範兼卿許より

山里の雪を獨はみまうきに君やきまさん我やゆくへき

返し

君ませといはゝかしこし降雪を打拂ひつゝわれそゆくへき

寄氷述懷

我か身やふる河水のうす氷むかしはきよきなかれなれとも

氷

さゆる夜はつらゝやまなき原の池の上とふ鴨の聽て過ぬる

あるし人のもとよりまかりて朝に出るに雪のふり侍しかは立歸りて申つかはしける

朝またき雪ふみ分て出てわかまたこむ跡をみんやみしとや

返し

雪のうちに又こむあとを待ものをみせしといはゝ消計り也

歳暮雪

かそふれは我身もとしも暮果てふるも頭の雪かとそおもふ

賀

祝のこゝろを人々よみ侍りしに

君か代は千尋の底のさゝれ石の鵜のゐる程にあらはるゝ迄

おなし

君か代を何に例へむと思へとも果なき物のあらは社あらめ

禁中祝心を二條院の御時人に替りてよめる

昔よりをきけるちりの山なれと君か御代にそ雲はかゝれる

經盛卿かもとにて歌合し侍りけるにまいりあひて祝

のこゝろをよみ侍りけるに
斧のえをくたす山人かへりきてみるとも君か御代は變らし
　攝政殿下閑院つくらせ給ひて初て作文和歌の會せさ
　せ給しに歌人のうちにめされて對松爭齡といふ事を
　つかふまつれり
春の日のしつかにてらす庭の面の松の千年に君をとらめや
　庭　松
千年まて我をみよとや君か代の廂にちかく松たてるらん
祝
君か代はなからの橋をちたひまて造りかへても猶やふり南
　寄松祝の心を歌林苑會
ゆく年のつもりの濱のはま松も君かよはひに立はならはし
　祝二條院御時女房にかはりて
あまたゝひ君そみるへき海は山やまは白なみ立かはるやう

別

　敦頼あつまのかたへまかりけるに人々はなむけし給
　ひけるによめる
はる〳〵と行もとまるも老ぬれは又逢事をいかゝとそ思ふ
　つくしへまかる人に餞侍りしによめる
その日そと聞たにかねて悲しきにこき別なはなに心地せん
　素覺入道潮湯あみに津の國成所へまかりはへりしに
忘るなよふりぬる我を津の國のなからの橋の跡をみつゝも
　登蓮つくしのかたへまかるときゝて旅衣してつかは
　すとてよめる
限あれはわれこそゝはね旅衣たゝむ日よりは身をなはなれそ
　返　し
嬉しさをつゝみそかぬる旅衣ゆたかに立るかひもなきかな

旅

　九月はかりに難波わたりに潮湯あみにまかり侍しに
　侍從師光素覺入道かはしりにおなしくゝたられたり
　のち侍從のないしのもとより消息つかはしたるおく
　にかゝれて侍し
旅寢するかたは浦々かはれともおなし都やこひしかるらむ
　返　し
君か住空戀しくそ我はおもふしのふ都もたれゆへそこは
　おなし所より入道そへてつかはしける
くれて行そなたの秋やいかな覽此みなとには舟よそひせり
　返　し
われもさそ思ひよりぬる行秋の舟よそひせは梶かくさなむ
　旅のこゝろを歌林苑にて
捨て行都のかたの山にまたいつかむかひてゆかむとすらむ

哀傷

　二條院かくれさせおはしましてのち御めのと大納言
　の三位ほとなくみまかりぬときゝて女房せんつるか
　もとへつかはしける
雲の上に別れしたつはをりゐてもひと方ならぬねをや鳴覽
　返　し
わかれにし雲井をこふるあしたつは澤へに獨音をのみそ鳴
　あひしりはへりける女三年はかりすきていかなる事

か有けむもとすみける山さとへをくりつかはしてけりそのゝちある上達部のもとにをかれたるよしきゝわたり侍しほとに俄に煩ふ事ありてみまかりけるもとみしものとやおもはれけんかの上達部のもとよりかゝる哀なる事こそあれよの中のつねなきはいまにはしめぬ事なれとも心うくこそなといひつかはしたりしかへりことにあはれなるよしを申て

返し

けにもさそ有て別れし時たにも今はと思へは悲しかりしを

あるをたにさこそは人は思ひつれなきは哀をそことしらすや

少將通家身まかりてのちうち續さはりとも有てをそく吊ひつるよしはゝのもとへ申しつかはしたりし

返事に

悲しさを歎く心のあらはこそとふもとはぬも思ひわかれめ

返し

よそなから歎く心のうせぬにそ君かおもひにをとるとはしる

月前催無常右大臣家會

限あれは月はこよひも出に皃きのふみし人けふはなき世に

範兼卿身まかりてのち法事の日誦經し侍りける諷誦文に書付侍りける

此世にはこと葉も文も書絶てかねにつてある事そかなしき

よそにのみかくきゝ〳〵ていつか又我なき跡を人にとはれむ

戀

思へとていはて忍ふのすり衣こゝろのうちにみたれぬる哉

同歌林苑會

萠出てまた二葉なる戀草のいくほとなきにをける露哉

忍戀

聞しれる人もやあらん忘れつゝ打歎かるゝ夜半のけしきを

身のうさを歎くにつけて忍へとも戀はこひとや分てみゆ覽

人しれすかよふ心のめにみえははや我戀はあらはれなまし

皇后宮權亮賴輔朝臣歌合

事しけきあへの市路に我たゝし戀をみしれる人もこそあれ

忍ふとは君もかつしる事なれといかにか思ふとはぬたえまを

あけはとくかへしなをさむ小夜衣みて心うる人もこそあれ

いつ迄か心にこひをこめをきてもたりくるしき物を思はん

後悔戀

打出てもかひなかりける我戀を心のうちにおもひかくさて

藏事戀鳥羽院北面

かくれなきなみたの色の紅をふみちらさしとなにつゝむ覽

戀清和院齋院會

せきかぬる涙の河の早き瀬は逢より外のしからみそなき

逐夜增戀

戀初めて暫しは步もみしか共今はいをたにね(ぬイ)られは社あらめ

戀歌とて

世をなけき身を恨みてもなく涙戀にしなれは色かはりつゝ(けりイ)

思ひわひ步にみゆやと返さすは裏さへ袖はぬらさゝらまし

隔河戀

山城の美豆野の里に妹を置ていくたひ淀の船よはふらむ

旅にてみたる人をこふると云事をうちにて人々よまれしによみ侍りける

おちゝかふ淀の河舟こす(うイ)をあらみほのみし人を忘れかねつる

恨てあはすといふ事を清和院齋院にて人々よみはへりしに

まことにや恨のはしを作り出て戀わたるともあはしてふ也(なるイ)

又ふたつ文をたにかよはすましかりける人のもとへこれをかきりとおもへとて

水くきはこれをかきりと書つめつせきえぬ物は涙なり鳧

せめてうらめしき人のもとへつかはしける

きゝもせし我もきかれし今は唯ひとり〳〵か世になくも哉

心よりほかに中絶たる女のもとへつかはしける

思はすや手ならす弓にふす竹の一よも君にはなるへしとは

かれ〳〵に成にし女の山里にこもりゐにけりときゝてさすかにあはれに覺てをとつれつかはしたるかへりことにこゝにはあるましきよしを申て

世のうきに思ひ入にし山里をまた跡たえむ事そかなしき

かへし

おもひやる心はかりを先たてゝ行らむ方へわれもまとはむ

かたちをみていとはるゝ戀といふ心を歌林苑にて人人よまれ侍しに

朝な〳〵戀こそよはれ十寸鏡みれはいとふも思ひしられて

はしめてあひたる女に

わか袖の忍ふもちすりぬれ〳〵て亂れあひたる(ぬイ)心ち社すれ

忍ひて物申女の夜更て逢たるに廿三日の月山のはより出たるをみて

みよかしなはつか餘りの月たにも今迄人にまたれやはする

つれなかりける人のもとにまかりたりけるになをあはさりけれは歸りていひつかはしける

あひもみて歸れはこやの池水となれる涙にうきねをそする

此暮と契れる女のもとにさはる事有てをとつれ侍らて次の日人をつかはして過ぬる夜は苦分なる事のありしなり今夜はかならすまてとたのめつかはしたりし返り事に言葉はなくて小侍從

筏おろす杣山河のあさきせは又もさこそはくれのさはらめ

かへし

きのふより涙おちそふ杣河のけふはまされはくれもさはらし

過不告戀清和院齋院會

音もせて人かよひける道のへに何家ゐして物おもふらむ

戀播州歌合

我袖のしほのみちひの浦ならは泪のよらぬ折もあらまし

戀のこゝろを小野宮侍從歌合

君こふと夢の内にもなく涙覺てののちもえこそかはかね

會後隱戀

身の程(をイ)も思ひもしらし(しらせしイ)中々にあひみぬ先になしといひせは

及曉遂會戀

夜もすから妹か結へる下ひもは鐘とゝもにそ打とけにける

失返事戀

こひ〳〵てまれにうけひく玉章を證うしなひて又歎くかな

返迎車戀

のせてやる我心さへとゝろきてねたくも歸すむな車哉

不語終隱戀

聲はかり通ふやり戸のしりさしを猶頼ぬ(はイ)かなき心ちする

改名隱戀

あふみてふ名をはたかへて忍ふれは我を秋とや今は尋ねん

返事をみて増る戀の心を人々よみ侍しに
引かへし妹か書けることのはを恨みて今そねけなかれける
戀のこゝろを按察會
ともすれは涙にしつむ枕かなしほみつ磯の石ならなくに
いとはるゝ身を恨むるや戀しさに又こと事を思ひますらむ
尊勝寺にて人々戀歌よみ侍しに
我戀をさてやわするゝと思へとも起ても侘しねてもすへなし
あふ人もなき戀路行くるしさに休むまとては身をそ恨る
忘れつゝ猶そ戀しき身のほとを思ひしるには思ひやめとも
見家思出戀歌林苑會
故郷をみれは物こそかなしけれ我もあれにし心なれとも
人しれす心かけたる女のもとよりすゝをこひにつか
はしたりしかはつかはすとて
思ふ事下にもまるゝまろすゝの露はかりたにかなはましかは
女のもとより雨のふる日つかはしたりける
雨もよに思ひ出しとおもへともおもふ心をもらすけふかな
かへし
雨もよに思ふ心のもりけにやあやしくぬるゝ我たもと哉
過門不入戀歌林苑會
人心かはれは明ぬまきの戸をきなれし駒そ過かてにする
隔河戀尾坂歌合
わたりこぬ妹か栖を尋ぬれはあふくま河のあなたなりけり
待不來戀
すみよしの松とはすれと沖つ浪たちかへるにもよらぬ君哉
行路戀といへる事を
打過し野上の里の妹をみてかへりくたるはなみた（こゝろイ）なりけり

逢事を命にかふる市もかなかゝる戀する人やつたふと
今はたゝ身を恨みつゝなくものをしゐてこふとや妹は聞覽
戀しなむ後ははかなき玉章をもしやみるとて書そをかるゝ
世中をなけかぬほとの身なりせは何によそへて妹を戀まし
歌林苑戀十首内
敷妙の枕はふたつならふれとひとつはなれす君しなければ
おなし
人はいさあかぬ夜床にとゝめつるわかこゝろ社我を待らめ
せきもあへすはなれて落る涙哉我そはたつる瀧まくらより
奥山の杉のともすり我なれやわか戀ゆへに身をこかす也
今はたゝ夢をのみ社頼め共あはぬめさへそつれなかりける
つれもなき人に心をかけしより我世はつきぬと思ひし物を
わきも子かもすそになひく黒髪のなかくや物を思ひ亂れむ
くれなゐに染たる袖のおなし色の涙みわかぬ戀ころもかな
まとろまは驚かすなよ逢とみは夢にも中をさくと思はん
來不逢戀
住吉の沖よりきたる浪ならは松のねもみて歸らましやは
寒夜増戀
さゆる夜は人を戀しと思ひねの枕のしたにつらゝゐにけり
戀の心を
あひみてもかねて朝のなけかれてかた心には物をこそ思へ
あちきなし今は思はしと思へ共物うかるねに猶そなかるゝ
うらめしなから戀しき人のもとへつかはしける
ならへたる恨も戀もからくみの二すちなからぬるゝ袖かな
寄草花戀
露すかる萩の下枝はさもあらぬにわか涙には人もたはます

つれなかりける人のもとへつかはしける

きつゝはやせきもとめなて涙河なかすも君か心ならすや

雨中増戀

君こふと詠めくらせる夜の雨は袖にしもるゝこゝち社すれ

やう／＼かれ／＼になる男をうらむる女にかはりて

水の面におは打ふれて立鳥のやゝあまさかる人そ戀しき

祈神戀と云事を人々よみ侍けるに

逢事を祈るかひなき此嶋は涙をかくる名にこそ有けれ

寄源氏戀歌林苑

人しれす物をそおもふ野分してこす吹風にひまはみねとも

寄催馬樂戀

いとはれはたゝにはいらし妹か門過はふらなむひち笠の雨

觀身不言戀

もしやとてかく玉章も身のうさを思ひいてゝは打そ置るゝ

寄照射戀

我戀をほくしにかくるものならはつれなき人も目をや合せむ

經盛卿歌合に

うち歎きぬれとねられすあたりにも又こぬ人に驚かされて

被妨人戀院殿上會

なかれても契りし妹をせく人やあふくま河にかくるしからみ

戀のこゝろを大貳重家會

夜とゝもにおつる涙や戀してふ我こと草の露と成らむ

おなし心を

袖のうへにおつる涙の色みてそ戀はかきりと思ひしりぬる

命あらはもし逢事もありやとて我なくさむるわか心かな

久しく音信侍らぬ女のもとにしはすの廿日あまりのほとにつかはしける

とゝこほる春よりさきの山水を絶果ぬとや人もしるらん

かく申つかはしたれともものにこもりたるよしを申て返事もなかりしか年かへりて正月の十日比にかれよりつかはしたりける　小侍從

とゝこほる音かと聞し山河のたえはてぬとは春そ知るゝ

忍ひて物申女のあひてその日にわかれし時又いつかといひしに

思へたゝ岩にわかるゝ山水もまたほともなくあはぬ物かは

立聞怨戀

我のみか松のねたけにことのはを立聞波のうらみやはせぬ

寄石戀

厭るゝ我みきはにははなれ石のかゝる涙にゆるきけそなき

寄菊花戀

つれもなき人こそよそにきくならめこふる袖さへ移ひに鬼

遊女戀

思ひかねもしもやみるとたはれ女か住河上になかす玉つさ

乍臥無實戀

からさしと植ける竹か妹と我ふしをならへてゆるきけのなき

寄山戀

我妹子はさかよふ山のせはちかはあはしと人にかねて聞する

ある宮仕人をよひ出すとて木陰に立かくれて侍しに時雨のしてしつくのおちかゝり侍しかは

君まつとたてる木陰の雫さへ涙につれておつとしらなん

馬上の戀といふ事を

落かゝる涙やしけき戀路行駒のたつかみ露ふしにけり

言出後悔戀

されはよなかくても同し苦しさを言ぬ先より思ひかへさて

言切後增戀

言のはをきかす顏なる涙かな思ひたえなはなれもたえなて

依月增戀右大臣家會

妹こふとまたはしちかき轉寢の枕のそはにやとる月影

時々見戀

なこの海汐干しほみち磯の石となれるか君かみえかくれする

聞戀我戀

みこもりの神にや妹(君イ)か祈るらんこふと聞より我もかなしき

秘知音戀

うとからぬ人にはつけし戀といはゝ思ひ顏にて諫めもそする

秘從者戀法住寺殿會

ちらさしとせめても思ふ玉章は我つかひにて我そもて行

返書戀

玉章に我ひく墨のたかひせはみけりとみても慰みてまし

時々逢戀

鴨のゐる岩根の池の薄氷むら〳〵なれや解みとけすみ

寄鳥戀

妹とわかおなしこのねの鳥ならは逢ぬ歎に鳴すへてまし

ある宮腹の女房を忍ひてむかへにつかはしたりしに曉になりてまうてきたりしかは

ことしけき大宮人を待々てあふほともなく明る東雲

二條院のくらゐの御時問聞增戀といふこゝろを人にかはりて

うき人の上をはえこそ聞果ね又問たひにねのみなかれて

大貳重家卿歌合に戀の心をよみ侍ける

紅のなみたにそまる戀ころもかへさは袖そらみなりける

失返事戀

いつこそや妹か玉つさかくし置て覺えぬほとに老ほれにけり

思移妹戀

つれなくはしゐてないひそなれに吾思ふ心は早うつしにき

互片思戀

その心道にあふらし我を君あひ思はすとおもひおこせは

戀

なき名たにたゝむと思ふ世中の人の僞せぬさへそうき

獨ねの床はさゆれと妹かすむそなたの風は吹かとそおもふ

されはよな我みのうさに兼てより思ひし事そ人のつらさは

戀しなん後たにせめて有しおりあはてといはん言のはもかな

爐邊女談

くらき夜も漸おこす火を中に置て聲のみ妹そ見えぬる

語和不會戀

逢事は猶もかた木の切えねは言の葉のよき何にかはせむ

はしめは思はて後に思ふ戀の心を人々よみはへりしに

思ひきや新手枕をいとひしにおなし身なからこひん物とは

戀やするととひし人に

戀せすとあらかひはてむしはしたに落る涙よ心あらなん

寄船戀

こひしさは泊もしらて行舟のゆにかくものは涙なりけり

寄山戀

忍ひしも今はあさまのかひもなくもゆる煙となれる戀かな
うらめしき事侍る女を夜もすから恨あかして歸りて侍りけるにいかにしたりけるにかしろきおひのつきてまうて來りしを返しつかはすとて
憂にさは中や絕まし色なしと花田の帶を思ひなしつゝ
十月つこもり比大内にさふらひしにかたらひ侍る女をあひくして侍しにまかりいつとて女をもをくりつかはしたる夜霜つねよりもさえて朝の霜しろくみえ侍しかは文つかはすとて
霜さゆる今夜しもなと九重にかさねし衣引わかれけん
これかれあまた申ときく女のもとに女郎花につけてつかはしける
おなしくは我に(もイ)をなひけをみなへし吹秋風は心さためし
久しう音せぬ男のもとへうらみつかはしたりけれともなをまてとこさりけれは申つかはしける女にかはりて薄につけて
まねけ共こぬ夕されは花すゝきなひき初けむ事そくやしき
時々物申女波こしてけりと聞て心うきことなり今はおもひ絕なんと申て夜もすから恨侍りしを女も心うしと思へるけしきに(てイ)泣ふしたるにさしかはしたるかたの袖の所せきまてぬれにけるをかへりてみ侍るにさすかにあはれにて申つかはしける
あやなしや人をこふらん淚ゆへよその袂を今朝しほりつゝ
道にあふといふこゝろを齋院にて
わきもこかせはちにちかふ移香のいつのまにしむ心なる覽
たえて久しく成にける女のもとより五月五日あやめに付ていひつかはしたりし
よそにのみ人は軒はのあやめ草うきねは絕すかくる袖かな
かへし
菖蒲草そのねにいかて身をなしてかくといふなる袖を離れし
絕て久しく成たる女の思ひ出て五月五日になかきねをつかはすとて
あはぬまにおふる菖蒲のねをみつゝたゝふ淚の深さをはしれ
返し小侍從
かけてたにみぬまに生る菖蒲草淺きためしのねにそ比ふる
曉戀右大臣家會
鐘の音を獨ぬる夜もいとへはやあふてふ夢を打覺しつる
後朝の心を
戀々て君に始てあひそめのかへる色とは今朝こそはしれ
朝またき風吹野への葛の葉もかへれはかくや露そこほるゝ
あけぬとてかへる淚に暮ぬるを暮ぬといひて猶やゆかまし
むかしより歸る事とは知なからけさや我身にとまり初まし
送書待戀
玉章をみるかと思へは妹かりとやりつる使またるゝもよし
紀伊守三河守にふるされたる女のそのことを心にかけたる氣色なるを白河なる人のつかはしける
八橋と吹上の濱と忘れすは思ひも出よしら海のさと
返し
八橋はふみ絕にしを今更になにかくもてにおもひみたれん
袖の氷を思ひやれとて女のもとより
なかれてと賴むへきにはあらねとも心にかゝる白河の里
返し

逢事のとゝこほれはやしら河のなかれと君は賴まさるらん

寄衣戀

我ためはかたしく妹か小夜衣いかなる人にへたてさるらん

近隣戀

立そはぬ時のまそなきわきも子か聲はへたてぬ中のひ垣を

行路戀

とゝめてし我心にやかはるらんみし面影につれてきにけり

歎侍夢にたにとてねしか共さてもみえねはせむかたそなき

たえて久しく成たる男のもとへふみつかはしける女にかはりて

そのかみはふみならされし道芝の茂りに鳬とみるそ悲しき

戀

人しれぬ木葉か下の水なれやわか袖かくれおつるなみたは

おもはしと思ひけてともけたれぬは我胸にたくおもひ也鳬

麻衣かたのまよひにもる玉はとゝめもあへぬ涙なりけり

人心あれたる宿の庭に生るからなつなかはつまゝほしきは

久しく音信侍らぬ女のもとより恨つかはすとて

しらさりき蜑の刈藻にすむ虫の名をはいつより我につけしそ

返し

海士のかる藻にすむ虫の其名をは君にはつけす我ものにして

戀の心を

涙川色をは袖にせかれけりやなせにとまる紅葉はのこと

あひかたらひ侍し女のやう〳〵とことはなるゝ契りと成てもとすみ侍ける山里へをくりつかはすとてそのかたならすとも心なかくおもへなと申契りて侍し人のもとよりいゝつかはしける

鳥の子のすもりにとまる身なりせは歸りて物は思はさらまし

返し

かへるとも立はなるなよ鳥の子のはくゝむ親と我を賴まは

おさなくてみたる女おとなしく成て後あひかたらひて侍けるに女郎花に付てつかはしける

女郎花其かたおひはめもたえて花の盛りそなつさはれぬる

戀左京大夫顯輔家歌合

逢事はなきさにかへるしら浪の猶よりみるやこりすまの浦

旅戀

妹をゝきて門出せしより落初し涙も我もえこそとまらね

同左大臣家會

思ひきや妹をとゝめてなく涙いほのしたかや浮ふへしとは

七月十日頃に人のもとへまかりてあしたに遣しける

身をつまは今朝の別を彥星も空に哀と思はさらめや

かへし

七夕の契はかりもありとみはとはぬ絶まも數かさらまし

久しくをとつれ侍らぬ女に十月朔日頃にいまたひらけぬ菊に付てつかはしける

君を我秋こそはてね色かはる菊をみまかしひらけたにせす

返し小侍從

いさや此ひらけぬ菊も賴まれす人のこゝろの秋はてしより

さてほとへて後うつろひたる菊につけてこれよりつかはしける

ひらけぬを秋はてぬとや見し菊の賴むかたなく移ひにけり

返し

移ろはゝ菊はかりをそ恨むへき我こゝろには秋しなけれは

後朝戀

あはぬまはいかゝと思ひし疑もなく〳〵けふそ人は戀しき

戀

目をへつゝ戀しき事はまされ共戀する道にえこそやすまね

見書増戀

ふみゝては色増りぬる我袖や紅そめのふりてなるらん

返書戀

待々て何心ちせむ玉つさなをおなしさまにてかへしえたらは

隱傍女戀法性寺殿會にて

しらすなよつほねならひの下くちは物いひあしき宮と社きけ

戀遠所人同

陸奥のかねをは戀て堀間なく妹かなまりの忘られぬかな

觀身不言戀

數ならていひ出ん事をとゝめつるうき身や戀の關と成らむ

女のうちとけたる所にをし入て侍じにさはきてはかまをきけるをみて

何かその君か下紐むすふらん心しとけはそれもとけなん

戀の心を人々よみ侍しに

つれもなき人は稀にもみえこぬにめなるゝ物は涙なりけり

冬くれは駒打渡す諏訪のうみの幾重ともなき人のつらゝは

今はさは戀もしなゝんしなすとて難面き人のきてもみなくに

妹ならはひたいのかみをふりかけて傳ふ泪を玉とぬかまし

しほりあへぬ花染衣袖しろくかへしのみしてあはぬ君かな

下女をこふと云事をよみ侍しに

我心なにおほはらにつくす覽すみよかるへき人のさまかは

寄草戀のこゝろを

なとて我よそなる袖をぬらす覽おれはそ萩の露もこほるゝ

あひかたらふ女うらむる事有て山里へ行かくれなむとする由を聞て今一度人つてならてものをも申さんとてまかりたるになきよしを申ていれさりけれはをし入てみるに只今迄もありける樣にてぬき捨たるきぬをみれはさすかにあはれとや思ひけむ袖のしほるゝはかり濡たるをみるにかなしき事かきりなくて袖に書付てかへりける

今はとて脱をく衣の袖みれは我ひとりのみぬらさゝり鳬

二月廿日あまりのほとに南殿の花みむとて參りたる折しもある女房のもとよりあるかなきかと尋につかはしたりしかはさふらふよしを申たりし後音もせさりしかは是より云つかはしける

まことには雲ゐの花をみむとてや我によそへて空尋せし

返し小侍從

尋ねつる心のうちを知ならは花にもかくや恨られまし

其後又大内にまいりたるにきゝて侍し人のもとより

尋つゝけふなを待つるこゝろなをは花をおもふに猶やなるへき

返し

我をのみ目を數へつゝ待けるかあなかまさらは花にきかせし

おなし人のもとへつかはしける

さても猶人つてならてとひみはや花かあらぬか我か事かと

返し

花きかはさすか答へまうき事を人つてならてとひはみられし

おなし人のもとへつかはしける

逢坂を越ぬものからてにかけし清水かなにそ袖のぬるゝは

返　し

くみてしれ相坂山のいはし水手にかけゝるはあさき心を

おなし人のもとよりからのさくらのさまをうつしたる也こゝのに見あはせよとてつくりたる櫻のはなをつかはしたりしかは

もろこしの花もこゝには渡りけりましてて間近き人は如何は

かへし

もろこしの花を渡しの船よりもあやうき道は床しとそ思ふ

ある女に始てあひて物こしに夜もすから申かたらひて歸りて朝につかはしける

あひもせすあはすもあらぬけふやさは事あり顔に詠暮さん

ひおりの日の車の心ちこそすれといひつかはしたりしかは

今朝社はならはぬみにもあひてあはぬ戀とは是を思ひ知ぬれ

おもひをしるへにせし車はうつゝにてこそ。これはよひとにそ定させまほしくといへり。

南殿の花ゆかしかりてみせよと申たる女の返しに

しかすかにひるはまはゆし雲の上の花はよるみよ星の光に

返　し

今そしるよる花みよといひなして山もる人をとゝむへしとは

女にはしめてあひて朝につかはしける

こえぬともえこそ覺えね逢坂の關に心やとゝめ置けむ

かへし

いそきつるけしきにみえぬ相坂の關に心をとゝめしもせし

ふちつほの藤をみせにつかはして

逢事を待よりもけに今朝よりそ心にし[ふかイ]けくかゝる藤なみ

返　し

あふ事をまつにもあらぬ數にそ今朝より藤はかゝり初ぬる

物申そめて後二三日音信侍らさりしを小侍從かもとよりいひつかはしたりし

とへかしなうき世中に有々て心とつくる戀のやまひを

かへし

いかはいきしなはをくれし君ゆへに我もつきにし同し病そ

久しく音信さりし女のもとよりいひつかはしける

忘れしと契し文のもしならひかねてみえにしかゝるへしとは

返　し

玉章にかきける文字は君と我ならはむ事をみせし成らん

疑行末戀歌林苑會

末までのことはないひそ逢ぬまのわか心をは我もしらぬに

戀の心を

命をはあふにかへてんと思へ共變るもまたて先そけぬへき

不謂被怨戀

今更にさてあはしとや君ならていつかは我は新まくらせる

欲盜戀

夜床をは汀となして妹をわれひく白波のなをやたゝまし

曉に人を送りて後につかはしける

みえすとも有としらなん送りつる心は未た歸りこぬそよ

返　し

思はれぬ雨夜の空に出る身はをくる心のかけかとも見す

夜戀といふ事を按察十首内

夜もすから枕をつたふ涙かな明ての後や袖におつらむ

かたらひ侍りける女久しう音し侍らさりけれは絕果

ぬとや思ひけむいとわかき新枕をなんしたりと聞て
今音信さりしかはかれよりつかはしける
忍ひこし夕くれなゐの儘ならてくやしや何のあくにあひ劒
返し
紅のあくをはまたて紫のわか根にうつるこゝろとそ聞
一會之後不會戀歌林苑會
よしさらはしゐても戀し逢事を一夜てふ名は誰かくるしき
戀經正朝臣家歌合
まことにや戀の病を何と此それかかれかときつゝとふらむ
たとりえぬ涙の河の淺きせを妹かふみゝる時そしりぬる
いにしへはみかきか原に芹つみし人もかくこそ袖はぬれ鬼
年隨不會戀法住寺殿會〔マヽ〕
袖ひけはさすかよりて難面やくつろく物のぬけぬ成らん
被忘人戀
君をおもふ人の心のかはらなんさらはや我と新まくらせん
戀自我下人
我故としらすやあらん賤の女かつゝれる袖につける墨をは
戀若狹三位歌合
戀しなむ後はけふりとのほりなは涙しくるゝ雲とや成らん
絕て久しく成たる女又かたらひたる人に忘られにけりと聞て後あひて野中の淸水の心ちしてものなと申て後かれよりつかはしたりし
すむとしもなくて過にし忘水何ゆへさてもおもひ出けむ
返し
人もみなむすふなれともわすれ水我のみあかぬ心ち社すれ
橋上待人
妹をいかて木曾路の橋に待かけんよく方もなき道と社きけ
戀東西人
生野社いくかひなくてかへされめなとや近江の逢人のなき
老後戀
逢事そまたてけぬへきさらぬたに殘すくなき我身と思へはとしおいて後むかひ渡りなりける女をやさしきさまにはあらて申かたらひて後つかはしける
心をはむかひのきしにかくれ共よせぬは老の浪にそ有ける
返し
老の浪つゐによるへき岸なれは其方を忍ふ身とはしらすや
おなし人のもとにつかはしける
年ふりて色かはりぬる黑髮のあらぬ筋なる物をこそおもへ
返し
朝ね髮さこそは老のみたるらめ鏡のかけのかはる筋にも
おなし人のもとより五月五日あやめ草にはあらぬ草に付てつかはしける
けふとてもとはぬ菖蒲のうき中にあらぬ筋社嬉しかりけれ
返し
日にそへて(引よせイ)ねそみまほしき菖蒲草あらぬ筋をは思ひ返して
逐夜增戀の心を
日をへつゝそふるつらさを重荷にて悶へはつへき心ち社すれ
祈佛戀
人心うつまさに猶いのりみむ戀の病もやめさらめやは

雜

世中に思はすなる事のみ有て京には住侘ていつみ成

所に籠居て侍しに岡崎の三位六位にて侍し時内藏人に成ぬと聞て悦いひつかはすとて
君かためうれしき事は嬉しきに我歎をはなけきしもせし
返し
嬉しさをうれしと思はゝ思ひしれ君か歎をなけきけりとは
藏人おりて次の日女房のもとへつかはしける
思ひやれ雲井の月になれ〳〵てくらきふせやにかへる心を
返し
雲の上に心をふかくとゝめをかはすむ月影も哀れとそみむ
地下に侍し時内より歌をたひ〳〵めされてまいらするとて女房のもとへつかはしける
ことの葉は下吹風に散しあけて谷かくれなる我なけき哉
大内守護なから殿上ゆるされぬ事を思はぬにしもなかりける比行幸なりて侍けるに大宿直なる家にかくれゐて侍るに月のあかゝりけれは丹後(波イ)の内侍のもとへつかはしける
人しれぬ大内宮のやま守は木かくれてのみ(しるイ)月をみるかな
返し
いつの間に月みぬ事を歎くらん光のとけき御代にあひつゝ
かくてのみ過るほとに世かはりて當今の御とき殿上ゆるされてこれかれより祝の歌よみてつかはす中に中宮亮重家かもとよりつかはしける
まことにや木隱たりし山守の今は立出て月をみるかな
返し
そよやけに木隱たりし山守をあらはす月も有ける物を
おなし比皇后宮權大夫顯長のもとよりよろこひいひつかはすとて
此春やおもひひらけて九重の雲井のさくら我ものとみむ
返し
散をのみ待し櫻を(もイ)今よりは雲の上にておしむへきかな
二代の御門に昇殿して侍し時三位大進淸輔朝臣のもとよりつかはしたりし
立歸る雲井のたつにことつてむ獨澤へに鳴とつけなん
返し
諸共に雲ゐをこふるたつならは我ことつてをなれやまたまし
蓮花王院の執行靜賢おなし比よろこひ申つかはすとて
木隱にもりこし月を雲ゐにて思ふことなくいかにみるらん
返し
こかくれと何歎けむふた夜まて雲の上にてみける月ゆへ
右少辨親宗おなし比悅申つかはすとて
若月の出はしめたる雲井にはまたおほろけの人はかよはす
返し
長夜に出はしめたる月影に近つく雲の上そうれしき
正下の加階して侍し時右馬權頭隆信かもとよりよろこひいひつかはすとて
和歌の浦に立のほるなる浪の音はこさるゝ身にも嬉しとそ聞
返し
いかにして立のほる覽こゆへしと思ひもよらぬ和歌の浦浪
加階の後ほとなく殿上つかうまつりたるを聞て少納言資隆かもとより悅申つかはすとて
位山のほるにかねてしるかりき雲の上までゆかむ物とは

かへし

翁さひはふ〳〵のほる位山雲踏ほとにいかて成らむ

同よろこひの時中宮の大盤所よりとて

くらゐ山高く成ぬとみしほとにやかて雲井にのほる嬉しさ

返し

のほりにし位の山も雲の上も年の高さにあはすとそ思ふ

殿上の事をきゝて女房大輔かもとよりよろこひつかはすとて

よそにきく袖にもあまる嬉しさを包みあへすやあまのは衣

かへし

袂をはたちこそかふれ嬉しさをかさねてつゝむ袖の狭きに

ほとなく悦をふたゝひして侍りし比 三位大進清輔朝臣もとより

いかはかり袂もせはく思ふらむ雲井にのほる鶴の毛ころも

返し

知けりな雲ゐをおりて鳴たつの立のほるまて思ふ心を

昇殿の時これかれより悦の歌ともつかはしけるに 前大納言實定のをそくいひつかはしけれはこれより

雲の上を思ひ絶にしはなち鳥翅おひぬる心ちこそすれ

かへし

雲の上に千世もやちよも遊ふへき鶴は久しき物としらなん

祝言のついてにもむかし思ひ出られて こそとてかれよりつかはしける

木隱てみし夜の月のかはらすはおなし雲井を哀とや思ふ

返し

こかくれてその夜の月に馴にしも雲ゐ(にイ)をみては哀とそ思ふ

年の内に五位の上下をして正月に四位なして侍る悦(マヽ)ひいひつかはすとて中宮亮重家

あけ衣色そへにしむらさきの今一しほやまして嬉しき

返し

色そへし袖に包し嬉しさを紫にてはあまりぬる哉

昇殿の後四位して侍し時亮君顯昭よろこひいひつかはすとて

ことはりや雲井にのほる君なれは星の位もまさる也けり

返し

みえにけむ星の位も雲の上にのほりし折にのほるへしとは

誰ともなくてさし置たる文をみれは

いかにして野中の清水思ひ出て忘るゝ(イニナシ)はかり文成(にイ)ぬ覽

そのゝち誰ともしらて女のしわさにこそはと思ひしほとに別當入道大谷にまかりたりしにおとし文やみしそれは我したりしなりと有しかは歸りてつかはしける

淺かりし野中の清水忘れねは又夏草をわくとしらなむ

女院百日の御懺法のはてに僧の布施にわらはへのさうそくをしてまいらするにすいかんさうそくをしたしき人々一具つゝしてつかはす中に中宮權大進重家かつかはしたることに珍敷みえ侍しかはつかはしたる返事に申ける

音羽川せきいるゝのみか水ほすに人の心はみえける物を

返し

をとは河あさき心はみえぬるを關いれし水によそへさら南

是は伊勢か敦忠の中納言山庄に瀧おとしたる岩にか

きつけたりける歌をおもひ出てよみたりけるにや。
はしめてあひたる女に正月朔日の日子日の松をつかはすとて
今日よりは君とねの日の松なこそ思ふためしに人も引らめ
別當入道大谷におはすと聞て四月十日比にまかりたりしに松に藤の花咲かゝりておもしろかりしかは歸りて後つかはしける
松になを殘りやしけむ藤の花かへる心にかけてし物を
返し
藤のはな心にかけは又もやと待事のみそときは也ける
從下なる事を歎侍る比によめる
思ひきや雲のかけ橋おりしよりしもか下にてあらん物とは
述懷敎賴住吉歌合
いたつらに年をつもりの濱に生る松そ我身のたくひ也ける
別當入道大谷を人にかくれて出られにけるときゝてそこともきかさりしにほの〳〵おはする所を聞付て誰ともなき文をさしをかせ侍にし
おほつかな谷より出る鶯もそこにありとはきかする物を
すなはちかへり事はなくて程へてかれよりつかはしたりし
こたへせぬ太山かくれの山彥の（はイ）おもふ心をしらすや有らん
返し
こたへはそこともきかん山彥の思ふ心はいかゝしるへき
むかしいまのことをつく〳〵おもひつゝくるに哀なる事もましりて侍りけむ
いろ〳〵に思ひあつむることの葉に淚の露の置も有けり

別當入道ことありて後とふらひ申事もなくて過にけるをのほりて程へて後山里のさひしさいかゝなと申つかはしたる返事に
さひしさをとふへき事と思ひける人の心をことし知ぬる
返し
淋しさはさやは有しと人しれす歎しことはことしのみかは
鳥羽院かくれさせ給ひて後歌林苑にて人々懷舊といふ心をよみ侍けるによめる
昔わかなかめし月の入しより世にふる道はふみたかへとや
賓莊嚴院になへてならぬ梅有と聞て執行靜賢におろし枝をこひにつかはしたるにことしはえあらし明春たはんと申たる返事によめる
賴むとも又こん年の春まては梅のえまたし殘りなき身は
返し
色も香も心にふかく染つれは梢はるかに君そみるへき
年老たる人の五月十日比に盧橘の有けるを隣なる人のもとへつかはすとておりひつのたてかみに書付てつかはしける
橘は花の咲まてありけるに老ぬる身こそとまるましけれ
返し
時過て猶さかりなるたち花をおる人の身によそへてそみる
小侍從あまに成にけると聞てつかはしける
我そ先出へき道にさきたてゝしたふへしとは思はさりしを
かへし
をくれしと契し事を待ほとにやすらふ道も誰ゆへにそは
帥中納言顯時卿子四人昇殿せさせられたるよしを聞

て
雲井迄みなのほるなるたつの子はいかなるすより立初けん
返し
引つれて雲井に昇るたつの子は三熊野に住しるしとをしれ
熊野につかふまつれる人なりけれはかくよまれたる
にや。
少輔別當入道空仁と申歌よむもの侍るをとし比聞わ
たり侍るかれ聞てたかひにいかてあひ見てしかなと
思ひけるほとに歌林苑にて人麿か影供し侍ける日あ
いて歌よみなとしてのち程へていひつかはしける
音にのみきゝきかれつゝ過々てみきな我みき其後はいかに
返し
戀々てみきわれみえね其後は忍ひそかぬる君はさにあらし
上達部殿上人あまた大内の花みられ侍しに三位大進
清輔文をかきてさしつかはしたるをみれは
朝夕になれし昔の百敷や花のたよりにみるそ露けき
返し
馴にけむ昔を忍ふ袖のうへにおつる花もや露けかるらん
岡崎の三位やまひにわつらひて出家のよしを聞てと
ふらひつかはすとてよめる
三年まて君に先たつ身なれとも眞の道に入をくれぬる
返し
かはり行ひつしの歩近けれはいそき入ぬる道としらなん
同入道のもとより筆をつかはすとてつゝみ紙に書付
てはへりける
やるかたに筆に涙そこほれぬる我あらは社かきもかはさめ

返し
こほるらん涙にたくふ水莖を我目の前にかけてこそみれ
ある女のもとへ山端に月いらんとするほとかきたる
扇をつかはすとて
山のはに入なむとする月影を我によそへて哀ともみよ
返し
千世迄と君によそへてみる月そ山のはかけて入すもあら南
別當入道山里におはする所に詣まかりたりしにむか
しの事ともなとかたりつゝあはれつきせて歸て後か
れより故院の北面の車なとのみ面影にこそたちしか
とて
有し夜の君やかたみにとまるらん先みしまゝに昔おほえし
返し
世もかはり姿もあらぬ君なれは我も昔のかたみとそ見し
少輔入道素覺年ころの妻にをくれて歎くと聞てとふ
らひつかはすとて
ほともなきかしらの雪を持なから先にきゆるを哀とそ思ふ
かへし
末の露もとの雫はけふならすうきよのうへとみるそ悲しき
其後。ほともなく入道もうせ侍にけり。
九月廿日あまりのほとに天王寺へ參りて侍しに伊賀
入道爲業かもとよりこもりて侍けるかかくと聞てつ
かはしたりし
君こすは誰にみせまし津の國の難波わたりの秋のけしきを
返し
心ある君ましけれはともにこそ難波わたりの氣色をもみめ（はイ）

又女房大輔かまいりたりけるかかくと聞ていひつかはしたりし

底清みむすふ龜井の水すみて心のあかをすゝきはてつる

返　し

手に結ふ龜井の水はにしの海もわたす心をすゝめさらめや

此事を伊賀入道聞ていひつかはしける

西の海に渡す心の月の舟かめ井よりこそ澄のほるらめ

返　し

わか心龜井にすめと西へ行月の舟にそ乘歸りぬる

父是より入道のもとへつかはしける

諸ともにいさゝはゆかむ極樂の門むかひなる所なりけり

かへし

興津なみ君先たてゝ清き海の舟出いそかむにしの門より

其後入道のほりぬと聞て曉におひてつかはしけるわたのへにて舟に乘所にてそ(よイ)み侍ける

都へは我は急かすなはの海のかなたの岸へゆかまほしさに

返　し

かの岸へゆかまほしさは我もあれは都の方はいそかれぬ哉

ことちといふ歌うたひ念佛所にて夜もすから歌うたひてきりしといふあさ經よみなとせしを伊賀入道聞て興に入て我門といふ催馬樂うたひなとして忘かたくして思ひ給ふ事を門むかひとよみ侍し事なとを思ひ出られけるにやのほりて後入道のもとより歌三首よみてつかはしたりける

行やすくつとめてゐたる極樂の門むかひこそおもひ出けれ

思ひいつや秋のきりしの法の聲立ゐに付て忘れやはする

すみのほるよるのことちは松風を聞心ちして身にそしみける

返歌三首を一首にかきて

琴の音もきりしかのりも立聞し我ことをさへわれそ忘れぬ

ある人のもとにきしをつかはすとて申つかはしける

これをみよ人もさこそは妻戀る春のきゝすのなれる姿を

返し人にかはりて女房大輔

われはたゝかりの浮世そ哀なる春の雉子のなれるさまにも

和歌所に人々あつまりて夜もすから歌よみ連歌なとしてあそはれ侍しに隣なりけるおきなたひ〳〵よはれけれはまいりて人なみ〳〵にましろひ侍るにある宮はらの女房二三人を引物のうち(あそひ)にすへておなしく連歌(し)なとして今よりはなかく知人にせんなと申かたらひて夜もやう〳〵明方に成にしかはまかり歸てのち二三日計ありて一人かもとへ遣しける

君にあひて歸りにしより昔せし戀にさにたる物にこそ思へ

返　し

我はいさ昔もしらすあかさりし名殘はそれに始てそおもふ

これを聞て今ひとりの女房さにたるといふ事をいましかりてさ文字をはきかしといひけれはさらはよみこそなをさめとて

かくしあらは早そけなましそのかみの戀にはさにぬ我思哉

かへし

なとやさはさにると聞し古をいとひけるさへ今は戀しき

あひしりて侍女わつらふ事有けるか久しくおこたらさりけれは日野にこもりて日比に成ぬるよしを聞ておほつかなさに人をつかはすとて申つかはし侍ける

茜さす日の出る方に妹をゝきてあくれは山のはをそ詠むる

大夫公俊惠か坊にかたゝかへにまかりたりし夜雨のふり侍しに坊主のもとよりいひつかはし侍りし

月もれとまはらにふける閨の上にあやなく雨やたまらさる覽

返し

主からそ思ひしらるゝ雨のもるねやの板間の月のゆへかも

南殿の花ゆかしかりける人にみせて後よりなかき知人にせんなとちきりて(後)久しくをとつれ侍らさりしかは霜月の廿日あまりのほとにいひつかはしける

こむ春は雲井の花を待つけてなれゆへ有しことゝかたらん

返し

なれ故と雲ゐの花のかこたれはちりに散てやにけむとす覽

岡崎の三位入道のもとにかへに瀧のかたをかきてその瀧の下よりまことの水をおとしつきたり遠くてみれはたゝおなし水の落たるやうにみえしをみてまかり歸りてつかはしける

うつゝにもかへにも同し瀧をみてねても覺ても忘られぬ哉

返し

夢のよに（うちイ）かへよりおつる瀧の糸を君か心にかけゝりやさは

あひしりて侍女房二月十日比に大宮にさふらふよしを聞ていひつかはしける

春なから秋の太山に入人は紅葉をこひて花をみしとや

返し

あたに見し花のつらさに春なから秋のみ山を出そわつらふ

如渡得船

彼岸をねかふ心やしるからんうれしくよする法のふねかな

人麿影供の前にて一品經供養人々せられ侍しに勸持品のこゝろを

けふこそあれ終は佛とおもふなはしらてや我を恨かほなる

化城喩品

かりのみやに暫し休むるしるへあれは終に實の道にきに鬼

やさしき方にはあらて申かたらひける女のもとより雪のふりたりける朝につかはしたりし

朝戸明てまたれやせまし降雪のとふへき人のある身成せは

返し

朝戸あくる程にはゆかしけさの雪の積れは暮に踏分てこそ

ひとりのみあかしくらす比大夫公俊惠かもとよりとふらひつかはして侍ける文に

身をつめはいかゝはすらん獨ねてかた敷袖のさゆる霜夜に（をイ）

返し

僞の身をはえつましつむならは（にイ）獨はねしと思ひやらなん

甲斐大進爲基かもとより故帥大納言集を尋につかはしたりしをりしも大事なる所勞ありて人してかゝせてつかはしける

はかなさを誰かは君にかたらまし昔のあとを尋さりせは

返し

ありなしをかつはかたみに聞やとて昔の跡を尋ぬはかりそ

鳥羽院に侍し時光信かもとより櫻花をつかはして

みなもとはおなし梢の花なれは匂ふあたりのなつかしき哉

返し

けにや昔もとはひとつの花なれは末々なりと思ひはなつな

敎頼入道西宮にて歌合し侍りしに海上眺望のこゝろ

をよめる

わたつ海を空にまかへてこく船の雲の絶間のせとに入ぬる

おなし歌合に述懐をよめる

おもへたゝ神にもあらぬえひすたに知なる物を人のあはれは

おなし心を

常にわかねかふ方にしますと聞神を頼むは此世のみかは

とし比かたらひ侍りける女宮古や住うかりけむおとこにくしてあつまのかたへまかりける日ことさらにかたみにもせんときならしたる物ひとつとこひけれはつかはすとて

とにかくに我身になるゝ物をしもはなちやりつる事そ悲しき

返し

はなたるゝ我身になるゝ（かたみにたくふイ）唐衣こゝろしあらはなれも悲しや

群書類従巻第二百四十七

和歌部百二　家集二十

紀貫之集第一

延喜五年二月廿一日尙侍之被レ奉ニ泉右大將一賀之時屛風依ニ内裏仰一奉レ之

夏山のかけをしけみや玉ほこの道ゆく人〔きイ〕も立とまるらん

雪の降たる所

白雪の降しく時はみよしのゝ山下風に花そ散ける

延喜六年月次の御屛風八帖料歌四十五首依ニ内勅一奉レ之

行て見ぬ人もしのへと春の野のかたみにつめる若なり鳧

二月はかりに

獨のみ我こえなくに稲荷山春のかすみの立かくすらん

弓のけち

あつさ弓春の山へに入時はかさしにのみそ花はちりける

三月田返す所

山田さへ今はつくるを散花のかことは風におほせさらなん

わすれ草

うちしのひいさ住のえの忘草わすれて人を〔の又やつまぬとイ〕つましとそ思ふ

三月盡日

花もみなちりぬる時〔やとイ〕はゆく春の故郷とこそ成ぬへらなれ

五月ともし

五月山木のした闇にともす火は鹿のたちと〔のイ〕ゝしるへ〔元イ〕かり鳧

六月鵜河

かゝり火の影しうつれはむは玉のよ河の底〔はイ〕に水ももえけり

七月七日

七夕にぬきてかしつるから衣いと〔せイ〕ゝ泪に袖しぬれなん〔やぬるらんイ〕

秋風によの深行は天河かはらに浪のたちゐこそまて

八月駒迎

相坂の關の清水にかけみえていまやひくらん望月のこま

小鷹狩

秋の野にかりそくれぬる女郎花こよひ計の宿〔はイ〕もかさなん

穐の田のほに出ぬれは打むれて里遠くよりかりそきにける

擣衣

風さむみわかから衣うつ時そ萩の下葉〔はイ〕も色まさりける

志賀山越

人しれすこゆと思ひし足引の山下水にかけはみえつゝ

十一月神樂

おく霜に色もかはらぬ榊葉のかほるや〔をやはイ〕人のとめてきつらん

大鷹狩

霜かれの草葉をし〔うイ〕と思へはや冬のゝ田〔野へはイ〕をは人のかるらん

十一月臨時祭

宮人のすれる衣のゆふたすきかけて心を誰によすらん

十二月佛名

年の内に積れる罪はかきくもりふり〔らしふる白雪イ〕つる雪のと共にきえ南

延喜十三年十月十四日尚侍四十賀屏風歌依₂内裏仰₁奉ㇾ之

まねくと〔てイ〕やきづるかひなく花薄ほに出て風のはかるなり鳬

人家のほとりになかれたる水にくれなゐの木有

水底にひかり〔かけしイ〕うつれは紅葉はの色も深くや成まさるらん

鴈鳴を聞

秋きりは立わたれとも飛〔なくイ〕かりの聲はそらにもかくれさり鳬

月のなか

から衣うつ聲きけは月のなか〔きよみイ〕またねぬ人をそらにしる哉

紅葉の山にみちてしくれのふりそゝきおつる

足引の山立くもり〔かきくらしイ〕しくるれと紅葉はなをそてりまさりける

おとなひ人の馬よりおりてしはし松のもとにやすむ

に岸ちかき石に浪のしきりによせたる

我のみやかけとは頼む白浪のたえす〔もイ〕立よるきしのひめ松

延喜十四年二月廿五日女一宮御屏風の料歌

新しき年とはいへとしかすかの〔にイ〕我身ふりぬるけふにそ有ける

山みれは雪そまたふる春霞いつと定めて立わたるらん

山かせに香をたつねてや梅花にほへる里に家ゐそめけん

やまのかひたなひきわたる白雲は遠き櫻の見ゆる成けり

いかにして數をしらまし落たきつ瀧のみをよりぬける白玉

爰にして〔たにイ〕けふはくらさん春の日の長き心を思ふかきりは

月をさへ〔さはへイ〕あかすと思てねぬ物を時鳥さへなきわたるかな

深みなるまこもえりさけ〔かりそけイ〕あやめ草袖さへひちてけふや引覧

住の江のあさみつしほに御秡して戀わすれ草つみて歸らん

風の音のあきにも成ぬ〔あるかイ〕久堅の天つ空こそかはるへらなれ

かりにとて我はきつれと女郎花みるに心の思ひつきぬる

常よりもてりまさるかな山の端のもみちをわけて出る月影

聲をのみよそにきゝつゝ我宿の萩には鹿のらとくも有かな

さくかきりちらてはてぬる菊の花むへしも千世の齡のふ覽

吹風にちりぬと思ふを紅葉はのなかるゝ瀧のともにおつ覽

延喜十五年閏二月廿五日に齋院御屏風歌依ㇾ勅奉之

女共瀧のなかれに出る花をみあるは手をひたしあらひたる

春くれは瀧のしら糸いかなれは結へとも猶あはになるらん〔見ゆイ〕

女の寺詣に山路につれてゆく

思ふことありて社ゆけ春かすみ道さまたけに立わたるらん〔かなイ〕

人の木のもとにやすみて川こしに櫻花をみたる所

遠方の花もみるへく白浪のともにやわれは〔もイ〕戀わたらまし

旅人の道にありて歸鴈の雲に

ねたき事かへるさならは鴈金をかつ聞つゝそ我はゆかまし

人の家に春花をみたる

我宿の物なりなから櫻花ちるをはえしもとめすそありける

倚〔もイ〕柳下曳糸條

花見にとゆくへき物を青柳のいとてにかけてけふは暮しつ

藤の松にかゝれる

綠なる松にかゝれる藤なれとおのか心と〔こゝろとそ花はこきイ〕花はちりける

延喜十五年二月三日右大弁やすたゝの君の故中御門の左大殿の北方の御爲に奉給五十賀の屛風の歌

我宿の松のこすゑに住つるは千世のゆかりと思ふへらなり

水とのみおもひし物をなかれつゝ〔くるイ〕瀧は多くの糸にそ有ける

なへてしも色かはらねは常葉なる山には秋もしられさり鳧

うつろはぬ常葉の〔ちりイ〕山にふる時は〔したイ〕時雨の雨もかひなかりけり

紅葉はのまなく成ぬるこの本は秋のかけこそ殘らさりけれ

紀貫之集第二

延喜十五年九月廿二日右大臣殿(忠平)の奉ニ爲清和七宮御息所一被レ奉ニ六十賀一時屛風歌

かそふれとおほつかなきは我宿の梅こそ春の數はしるらめ

百千とりこつたひちらせ〔すきくらイ〕梅花何れの春かきつゝみさらん

菊の花しつくおちそひ行水のふかき心を誰かしるらむ

みよしのゝ山より雪は降くれといつともわかぬわか宿の竹

延喜十六年齋院御屛風四帖か料の歌依レ仰獻レ之女庭にいてゝ梅花殘雪をもてあそふ

梅の花さくとしらすやみよし野の山に友まつ雪のみゆらん

人の木の下に立て遙に櫻花をみる

山櫻よそに見るとてすかのねの長きはる日を立くらしつる

池邊に藤花あり女水にのそみて是を見る

藤の花色ふかゝ〔けイ〕れや影見れは池の水さへこむらさきなる

「瀧のほとりに人きて見る

なかれよる〔くイ〕瀧の糸こそ弱からしぬけと亂れておつる白玉」

海のほとりにある松木のもとにおこなひ人やすむ

いく世へし磯邊の松そむかしより立よる浪や數はしるらん

雪庭にみちたり

夜ならは月とそみまし我宿の庭白妙にふりし〔つもるイ〕ける雪

延喜十七年八月に仰によりて獻レ之

人はむへおそくしりけり梅花〔のイ〕さける後にそはるはきにける

梅かえに降かゝりてそ白雪も花の便にを〔もイ〕らるへらなる

若なつむわれを人見は淺みとり野邊の霞を立かくさなん

鶯のたえす鳴よる青柳のいとにうきふしなくもあらなん

松をのみたのみてさける藤の花千とせの後を〔はイ〕いかゝとそ思ふ

人もなきやとに匂へる藤の花風にのみこそなひくへらなれ

見てのみや立くらしてむ櫻花散をゝしむにかひなかりけり

をしみにときたるかひなく櫻花みれはかく社散まさりけれ

千世までのゆきかと見れは松風にたくひて田鶴の聲そ聞る

色のみそまさるへらなる磯の松かけ見る水もみとりなり鳧

かへる鴈わかことつてよ草枕旅は妹こそ戀しかりけれ

なかれゆくかはつなく也足引の山吹の花匂ふへらなり

夏衣しはしなたちそ時鳥なくともいまた聞えさりけり

時鳥まつ所にはおともせて何の里の月になくらむ

こぬ人をしたにまちつゝ久堅の月を哀れといはぬよそなき

朝霧のおほつかなきに秋の田のほに出て鴈そ鳴わたるなる

女郎花うつろひかたになる時はかりにのみ社人は見えけれ

花薄ほにはおけとも初霜の色はみえすそ消ぬへらなる

八重葎生にし宿にから衣たかぬふとてからつ聲のする

おく物はひさしき物を秋萩の下葉の露のほともなきかな

紅葉は〔のイ〕の散しく時は行かよふあとたに見えぬ山路なりけり

白浪はふるさとなれや紅葉はのにしきおりつゝ立かへる覽

物毎に降のみかくす雪なれと水には色も〔にイ〕殘らさりけり

降雪をそらにぬさとそ手向たる春のさかひも年の〔こゆイ〕くるれは

延喜十七年冬あつひらの□部卿宮屛風に

から衣あたらしく立としなれや人はかく社ふりぬへらなれ

子　日

春霞たなひく松の年あらはいつれの春か野へにこさらん

道行人櫻の下にとまれる

玉ほこの道は猶こそ遠けれと櫻を見れはなかゐしぬへし

あたなりと思物から櫻花ある所にはやすくやはゆく

池の上に藤の花さきける

池水にさきたる藤を風吹は浪の上にたつ波かとそ見る

瀧

松の音をことにしらふる秋風は瀧の糸をやすけて引らむ

九月晦日

もみちはを別をしみて秋風はけふのみむろの山を越らん

延喜十八年女四宮の御かみあけの料の御屛風の歌

依二内裏仰一奉レ之　正月

山の端をみさらましかは春霞たてるもしらてへぬへかり鳬

二　月

よる人もなき青柳のいとなれは吹くる風にかつみたれつゝ

三　月

うつろはぬ松の名立にあやなくも宿れる藤のさきてちる哉

七　月

荻の葉のそよくおとこそ秋風の人にしらるゝはしめ成けれ

八　月

あま雲のよその物とはしりなからめつらしきかな鴈の〔初イ〕一聲

九　月

いつれをか花とはわかん長月の有明の月にまかふしら菊

十　月

なかれくる〔もみち葉イ〕紅葉し見れはから錦瀧のいと〔もてイ〕しておれる成けり

十二月

木間より風にまかせて降雪を春くるまてはなかとそ見る

紀貫之集第二

内裏御屛風歌

あたらしく明ることしをもゝとせの春のはしめと鶯そなく

人の梅花を見たる

我やとに有とみなから梅花あはれとおもふにあく時もなし

山邊にちかくすむ女ともの野へに遠くあそひはなれて家の方をみやりたる

野へなるを人もなしとて我宿に嶺のしら雲おりやゐるらん

立ねとやいひにやらまし白雲のとふこともなく宿にゐる覽

故郷にけふ來て見れはあたなれと花の心そむかし成ける

春のくるゝ所

いつとのみ櫻さくとかをしめともとまらて春の空にゆく覽

松にさける藤の花
藤の花あたにちりなは常磐なる松にたくへるかひやなか覽
散ぬとてあたにしもみし藤の花ゆくさき遠き松にさけれは
おほみわの祭にまうてたる
古のことならすして三輪の山こゆるしるしは杉にそ有ける
さうふとれる又かさせるもあり
あやめ草ねなかきとれは澤水のふかき心は知ぬへらなり
時鳥聲聞しよりあやめ草かさすさ月と知にしものを
女ともの月におきて時鳥まてる所
なくさめてひとよたにねん月影に山時鳥なきてゆきなん
七日
よをうみて我かすいとは七夕の涙の玉のをとやなるらむ
よるの歌
誠かと見れともみえす織女はそらになき名を立る成へし
八月十五夜海のほとりなる家に男女出ゐて月のいつるを見たる
難波かたしほみちくれは山の端に出る月さへみちにける哉
田の中に小鷹狩したる所
秋の田と世中をさへ我ことくかりにそ人は思ふへらなる
河のほとりに鶴のむれゐたる
むれゐたる河邊の鶴も君かため我おもふ事を思ふへら也
萩見たる
とめきつゝなかすも有哉我宿の萩は鹿にもしられさるへし
をんなの菊花みたる所
置霜のおきまかはせる菊の花いつれをもとの色とかはみん
紅葉いたうちれる山こえたる
ひねもすにこえもやられす足引の山の紅葉をみつゝ迷へは
紅葉のなかるゝをみたる
もみち葉のなかるゝ時は立田川みなとより社秋はゆくらめ
人の家の竹いたくおひたる
竹をしもおほく植たる宿なれは千とせを外の物とやはみる
大鷹狩したる所
おほつかな今としなれは大あらきの森の下草人そかりける
霜かれに成にしやとゝしらねはやはかなく人の狩にきつ覽
神祭
神まつる時にしなれは坂樹葉の常盤の影はかはらさりけり
山里に住人の雪ふるをみる
雪のみや降ぬとはおもふ山里にわれも多くの年そへにける〔つもれるイ〕
延喜十一年東宮御屛風歌右近衛中將の君の被ニ傳仰一
あれひきに引つれて社千早ふるかもの河なみ〔をきてイ〕立わたりけれ
時鳥なくなる聲をさなへとるてまうちやすみあはれとそ聞
たきつせの物にそ有ける白玉はみるたひ毎にみぬ時そなき
夜に隱れきつるかひなく紅葉は〔も〕月もあかく〔そ〕照まさりける
京極の中納言の御屛風歌
春かすみ立ぬる年のけさみれはやとの梅さへめつらしき哉
〔我宿にさける梅なれと〔とてイ〕年毎に今年あきぬと思ほえぬ哉〕
野へなるを人やみるらむ若なつむ我を霞の立かくすらん
雨とのみ風吹松は聞ゆれと聲には人もぬれすそ有ける
山ふかきやとにしあれは年毎に春の心はあさくそ有ける
到るまにちりもそはつる如何して花の心にゆくとしられん
ゆかりとも聞えぬ物を山吹のかはつの聲に匂ひぬるかな
行月日おもほえねとも藤の花見れはくれぬる春そしらるゝ

五月くる道もしらねと時鳥なく聲のみそしるへなりける
一とせをまちつる事も有つれ〔ものをイ〕とけふの暮るそ久しかりける
織女はいまや別るゝ天河かはきりたちて千鳥なくなり
降しける雪かとみゆる月なれとぬれてさえたる衣手そうき
てる月をひるかとみれは曉に羽をかく鳴もあらしとそ思ふ
〔かへイ〕うゐし袖またもひなくに秋の田を鴈かねさへそ鳴渡りける
〔鴈鳴きて吹く風寒しから〔のイ〕衣君まちかてに打たぬ夜そなき〕
山遠き宿ならなくに秋萩をしからむ鹿の鳴もこぬかな
もみち葉はてりて見ゆれと足引の山はくもりて時雨社ふれ
〔もみち葉の流るゝ時は白浪のたちにし名社變るへらなれ〕
白雪にふりかくされて梅花人しれすこそにほふへらなれ
一とせに二度にほふ梅のはな春の心にあかぬなるへし

延長七年十月十四日女八親王の御爲に陽成院の親王の四十賀せらるゝ時の屏風歌内裏調ニ進之一依レ勅奉レ之

久しくも匂はんとてや梅花春をかねてもさきそめにけん
いとをのみ絶すより出す青柳を〔のイ〕年のをたかきしるしとそ見る
櫻よりまさる花なき春なれはあたし草葉を物とやはみる
藤のはな咲ぬるをみて時鳥またなかぬからまたれけるかな
足引の山下しけき夏草のふかくも君をおもふころかな
常夏の花をし見れは打はへてすこす月日の數もしられす
こふるものなくてみるへく我宿の萩の下にも鹿はなかなん
かりに〔もイ〕のみ人の見ゆれは女郎花花の袂そつゆけかりける
心とて〔するイ〕ちらむたにこそをしからめなとか紅葉に風の吹らん
紅葉せぬ草木にもにぬ竹のみそかはらぬ物のためし成ける
松か枝に降しく雪をあしたつの千世のゆかりに降かとそ見る
世の中にひさしき物は雪の中にもと色かへぬ松にそ有ける

延喜のすゑよりこなた延長七年よりあなた依ニ内仰一献れる屏風歌

春立て風や吹とてけふ見れは瀧のみをより玉そちりける
若菜つむ春のたよりに年ふれは老つむ身社わひしかりけれ
久しきをねかふ身なれは春かすみ棚引松をいかゝとそ思ふ
春ことに絶せぬものは年をへて風によらるゝ青柳の糸
みし人もこぬ宿なれと櫻花〔色もかはらす花そちりける〕
〔人も皆我もまちこし櫻花〕ひとひとたてゝ〔ちてイ〕みれとあかなくに
いまはとて殘れる峯の藤なみは春のみなとのとまり也けり
あひたなくよする藤浪立かへりいのりても猶あかすも有哉
大そらをわれもなかめて彥ほしの妻まつよさへ獨かもねん
女郎花にほひを袖にうつしてはあやなく人や我をとかめん
行水の心はきよきものなれとまことゝ思はぬ月そみえける〔りイ〕
一枝の菊折からにあら玉の千とせはたゝにへぬへかりける
足引の山の川きりなにとてか行人をのみたちかくすらん
散事も色さへともにもみち葉はもゝとせ〔ふれとイ〕まとか變らさり鳬
大空しあた〔みイ〕にみえねは月影もかはる時なくてらすへらなり
春ちかく花思をりに我宿の梢に雪のふりかゝりつゝ
うくひすのなきそめぬるを梅花色まかへとや雪の降らん
立ぬとは春をきけとも山里はまち遠にこそ花はさきけれ
ふたつこぬはるとおもへと影みれは水そこにさへ花は散鳬
鶯のきゐつゝなけは春雨にこのめさへこそぬれてみえけれ
川へなる花をし見れは水そこの影もともしくなりぬへら也

櫻花ちとせみるとも鶯もわれもあくよもあらしとそ思ふ
散かたの花みる時は冬ならぬわか衣手に雪そふりける
春の爲あたし心のたれなれは松か枝にしもかゝるふちなみ
春雨に道まとはして我宿にひさしくみえぬ人もみえなん
こぬ人を月になさはやむは玉の夜每にわれはかけを賴まん
雨ふらん夜そおもほゆるひさ方の月にたにこぬ人の心を
山里につくれるやとは近けれと雲井とのみそ成ぬへらなる
[おく霜の心やわける菊の花うつろふ色のおのかしゝなる]
瀧つせもうき事あれや我袖の泪につゝおつるしら玉
よとゝもに鳥の網はる宿なれはみはかゝらんとくる人もなし
空にのみ見るたにあかぬ月かけの水そこにさへ又も有かな
うきてゆく紅葉の色のこきからに河さへちかく見え渡る哉
雪ふれはうとき物なく草も木もひとつ道[ゆかりにイ]にそ成ぬへらなる
いかて人なつけそめけんふる雪は花とのみ社ふり增りけれ
みえねとも忘れし物を櫻花けさは[たひイ]雪のみふりかくしつゝ
くれなゐに紅葉すれはや石上ふるらむことに野へをそむ[わたらんイ]覽
白雲のたな引わたる足引の山のたなはし我もふみみん
延長七年十月十四日女八親王陽成院一の親王の四十
賀せらるゝ時の屏風歌内裏令レ調二進之一依レ勅奉レ之
ちはやふる神たちませよ君かためつむ春日野の若菜也けり
行末もしつかにみへき花なれとえしもみ過ぬ櫻成けり
時鳥きつゝ木高くなく聲は千世の五月のしるへなりけり
九月九日老たる女の菊しておもてのこひたる
今までにわれを思へは菊の上の露はちとせの花にそ有ける
竹に雪のふれる
白雪はふりかくせとも千年まて竹のみとりはかはらさり鳬
承平五年内裏御屏風之料の歌女すのこに出てゐたり
男物いふ梅木あり
なかにて[よそイ]は花のたよりとみえなから心のうちに心ある物を
子日したる人々馬車に乘各歸る中に男松をもたせて
車にやりたる
此松の名をまねはれは玉ほこの道わかるとも我はたのまん
女簀子にさし入たる櫻花折たる馬に乘て道行法師垣
こしにうちよりて見る
物こしに花をうちみて人しれす[　　　　　　]
馬に乘たる人故鄕とおほしき所にむれ入て櫻を見た
り
故鄕にさける物から櫻花色はすこしもあれすそ有ける
男とも打むれて池邊にさける藤の花みたり
松か枝にさきてかゝれる藤浪を今はまつ山こすかとそ見る
女とも神のやしろにまうてたり
打むれて心さしつゝ行道の思ふ[をイ]おもひや[やイ]神もしるらん
馬にのる女旅行
家路にはいつかゆかむと思しを日比しふれはちか付にけり
月夜に女の家に男いたりてすのこにゐて物いはせた
り
山のはに入なんと思ふ月みつゝ我はとなからあらむとやする
久堅の月のたよりにくる人はいたらぬ所あらしとそおもふ
網代に紅葉ちりて落る所
二度やもみち葉はちるけふみれは網代に社は落はてにけれ
承平六年右大臣殿御障子おやこ住給中へたてなる繪

に松竹鶴かける所
おなし色の松と竹とはたらちねの親子久しきためしなり鳧
鶴むれたる所
鶴おほくよをへてみゆるはまへ社千とせつもれる所也けれ
承平二年右大臣殿二(五イ)郎侍從の御屛風歌稻荷詣
春霞立ましりつゝいなり山こゆるこゝろ[おもひイ]の人しれぬかな
いやしき人神まつる
榊葉の色かはりせぬ百年のけふことにこそ祭まつらめ
十一月臨時祭
ゆふたすきかけても人を思はねと卯月もけふもまた明ぬ哉
十二月晦の雪
我宿にふるしら雪を春にまた年こえぬまの花とこそみれ
承平六年春左衞門督屛風歌
思ひかねいもかり行は冬のよの川かせさむみ千とり鳴なり
同年の夏八條右大將の北方本院の北方七十賀し給ふ
時の屛風の歌大將仰給ふ時に人の家松
變らすもみゆる松かならへしこそ久しき事のためし成けれ
藤花
名殘をはまつにつけても百年の春のみなとにさける藤なみ
四月神祭
まつる時さきもあふかな卯花は猶氏神の花にそ有ける
山里
草も木もしけき山へはくる人の立よるかけのしる[たよりイ]へ成けり
人の家の橋
年ことにきつゝ聲する時鳥はなたちはなやまつ[つきとなるイ]に有らん
瀧
白雲やなかるゝとのみみえつるは落くる瀧のつねにそ有ける
野花
秋の野のちくさの花は女郎花ましりておれる錦成けり
山の月
草木みなもみちすれとも照月の山のはゝよにかはらさり鳧
水邊菊
きくの花ひちて流るゝ水にさへ浪のしはなき宿にそ有ける
河のほとりに鶴むれたる
河のせに靡くあしたつおのか世を浪とゝもにや君によす覽
人の家の竹
千世もたる竹の生たる宿なれはちくさの花は物ならなくに
承平七年[うイ]依レ仰奉レ之
年立は花こふへくもあらなくに春今さらに雪のふるらん
くれぬとてなかす成ぬる鶯の聲のうちにや春はへぬらん
つらき人忘れなんとて拂ふれとみそくかひなく戀そ增れる
秋はきにみたるゝ玉はなく鹿の聲よりおつるなみた也けり
同年右大臣殿屛風歌わかなつむ所やのうちに女なか
めたり
野邊みれは若菜つみけりむへしこそ垣ねの草も春めきに鳧
子日
春立て子日になれは打むれていつれの人か野へにこさらん
人遙に山の瀧を見る
山分て落くる瀧を白雲のたなひくとのみおとろかれつゝ
駒引
都までなつけてひくはをかさ原へみの御牧の駒にや有らん

人家に紅梅あり

雪とのみあやまたれし〔つゝイ〕を梅花紅にさへにほひぬるかな

人家に櫻花あり男あまた有てもてあそふ

ことさともみな春なれと我やとの櫻にまさる花やなからん

人家のうしろにて男女さゝめきことしたり

忍ふれと思ひかねては人しれす心ひとつにみえぬへき哉

道行人木のもとにゐて時鳥のなきてゆくをおよひさしていふこと有へし

玉ほこの道もゆかれす時鳥なきわたるなる聲をきゝつゝ

女あまた川原にすゝみあふ

我みあまたあらしと思を水底に覺束なきは影にやはあらぬ

みな月に秡したる所

はらへ共はらふる水のつきせねは忘られ難き戀にそ有ける

道行人馬にのりてむちして月をさして見る

照月をみさらましかはむは玉の夜は物へもゆかすそあらまし

七日男あまた庭にあつまりて天河を見る

大空はかひもなけれと織女をおもひやりつゝなかめつる哉

馬車にのりて人おほくさま〳〵の花もさきみちたり

秋くれははたおる虫のあるなへに唐錦ともみゆるのへかな

山里の人の家に釣殿あり水の上に木葉なかる

そまちかき所ならすは行水ももみちせりとそ驚かれまし

人の家のすたれのもとに女出ゐたるに垣の下に男立てせうそくいふなる垣のつらに薄おほかり

いてゝとふ人のなきかな花薄われをはかなとまねく也けり

人家に男女庭の菊見たり

植てみる菊といふ菊は千世までに人のすくへきしるし也鬼

臨時祭

足引の山井にすれる衣をは神につかふるしるしとそ思ふ

人家ありすたれのもとに立出て雪ふるを見たり

草も木も花さきにけり降雪や春よりさきの花と成らん

松かえにつるかとみゆる白雪はつもれる年のしるし成けり

紀貫之集第四

延喜十八年四月廿六日東宮御屏風料歌 櫻木のもとに人々をる所

かつみつゝあかすと思へは櫻花ちりなん後そかねて戀しき

岸のほとりに藤花さける所

水にさへ春やくるゝと立歸り池の藤なみおりつゝそ見る

秡したる所

此川に秡へてなかすことの葉の浪の花にそたくふへらなる

七日

天河よふかく君はわたるとも人しれすとはおもはさらなん

小鷹狩したる所

花の色を久しきものと思はねとわれは山のをかりに社見め

大鷹狩したる所

春にのみ見えて山のへ冬なれはさりけりたになく霜枯にけり

男の花みる所

おなし枝に花し〔は〕さけれは〔とイ〕秋はきの下葉にわきて心をそみる〔やイ〕

雪ふれる所

春近く成ゆく〔ぬるイ〕冬の大そらは花をかねてそ雪ふりにける〔はふりけるイ〕

延喜十八年承香殿女御屏風歌依仰獻之水邊に梅花さ

きたる

梅花またちらねとも行水のそこにうつれる影そみえける

鴈のかへるに旅人あり

とも〳〵に思ひきつれと鴈金の[はイ]おなし里へも歸らさりけり

藤花

うつろはぬ色ににるともなき物を松か枝にし[のしイ]もかゝる藤浪

櫻花の散所

同し色に散しまかへは櫻花ふりにし雪のかたみとそ見る

人出て春野にあそふ

春に[ふイ]かく成ぬる時の野へみれは草のみとりも色こか[まさイ]りけり

河邊の松

松をのみときはと思へは[ふにイ]よとゝもに流るゝ水もみとり也鳬

やな見れは河かせいたく吹時そ浪の花さへ[はイ]落まさりける

雨ふるとふく松風は聞ゆれと池のみきはもまさらさりけり

女ともあまた秋の野にゐて花見たる所

花の色はあまたみれ共人しれす萩の下葉そなかめられける

女のもとに男いたりておはなの下にたてり

吹風になひくをはなを打つけにまねく袖かと思ひけるかな

くれの秋女車の紅葉の中をゆく

紅葉はのぬさともちるか秋はてゝたつた姫社歸るへらなれ

月の下の白菊

色そむる物ならなくに月かけのうつれる枝のしら菊の花

旅行人松の雪を見る

白妙に雪のふれゝは小松はら色のみとりもかくろへにけり

人家に佛名の朝に導師の歸に法師男とも庭におり立て遊ふあひたに雪ふりかゝれる梅花折

梅花をりしまとへは足引の山路の雪とおもほゆるかな

延喜十九年東宮御息所御屏風料歌　依内仰獻之子日の松のもとにつれてあそひゐたる所

春の色はまた淺けれとかねてよりみとり深くもそむる松哉

櫻花ちる

風吹はかたもさためすちる花をいつこへ歸る春とかは見ん

山邊に藤花松にかゝれり

藤の花もとよりみすは紫にさける松かとおとろかれまし

車にのれる人賀茂へ詣る

人もみなかつらかさして千早振神のみあれにあふひ成けり

五日

菖蒲草ねなかき命つけはこそけふとしなれは人のひくらめ

秋

大麻の川のせことになかれても千年の夏はなつはらへせん

空になけける鶴を聞

千年ふとわか聞なへにあしたつの鳴渡るなる聲のはるけさ

いつとても人やは隱す花すゝきなとか秋しもほにはいつ覽

道行人の時雨にあひて

朝ことに露はおけとも菊の花人のよはひはかれすそ有ける

臨時祭

道すから時雨にあひていとゝしくほしあへぬ袖の濡にける哉

山井もてすれる衣の赤紐のなかくそわれは神につかへん

雪のふれる

春こ[くれイ]ねと草木に花のさくほとはふりくる雪の心なりけり

延喜五年中宮御屏風歌正月立日

昨日よりをちをはしらす百年の春の初めはけふにそ有ける

二月梅花

山里にすむかひあるは梅花みつゝ鶯きくにそありける

子日

もとよりの松をはおきてけふは猶おきふし春の色を社みれ

田かへす所

忘らるゝ時しなけれは春の田をかへす〳〵そ人は戀しき

三月山寺へ詣

足引の山を行かひ人しれす思こゝろのこともなからん

晦日落花所

散花のもとにきて社くれはつる春のをしさは優るへらなれ

四月大神祭使

執れをかしるしと思はん三輪の山みえと見ゆるは杉にそ有ける

人の家の垣のもとの卯花見る

[今日も又イ]君ならて後もわすれし白妙の卯花にほふやとゝみつれは

馬にのれる人のおほくゆく[きのイ]

行からへにはやもゆけ駒神かけて三室の山の山かつらせん

五月旅人の山のほとりにやとれるか時鳥鳴を聞て

山里に旅ねよにせし時鳥聲聞そめて長ゐしぬへし

雨のうちに田うふる所

時過はさなへもいたく生ぬへし雨にも田こはさはらさり皃

六月すゝみしたる所

夏衣うすきかひなし秋まては木の下風もやます吹なん

かゝり火

大空にあらぬ物から川上にほしかとみゆるかゝり火のかけ

七月七日の夕のそらを見て

人しれす空をなかめて天川浪うちつけにものをこそ思へ

田守る家ある所

かりほにて久にへにけり秋風の早田かりかねはやもなか南

八月數人堀野花

みる人もなきのへなれは色每に外へうつろふ花にそ有ける

鹿啼花

棹鹿やいかゝいひけん萩の花匂ふ時しもつまをこふらん

九月霧籠山

ちりぬへき山のもみちを秋霧のやすくもみせす立かくす覽

河渡の所にある舟

山路には人やまとはん河霧の立こぬさきにいさわたり南

十月菊花

うすくこく色そみえける菊花露や心をわきておくらん

十一月芦かる所

難波女の宿のみあれはかりてほす芦火の煙たゝぬ日そなき

十二月雪にむかへる梅花

降雪に色しまかへは打つけに梅をみるさへさむくそ有ける

紀貫之集第五

延長二年左大臣殿北方御五十賀屛風料歌鶴群但北方已所遂其事

かひかねの山里みれはあしたつの命をもたる人そすみける

田子浦

吹風もあかすおもひて浦浪の數にそ君かとしもよせける

會坂

君と我千とせの春にあふさかの淸水はわれもくまむとそ思

龜山

かめ山のかけ〔こふイ〕をうつして行水にこきくる舟はいくよへぬ覽

白濱

君か代の年の數をは白妙のはまのまさこと誰かしり〔いひイ〕けん

むろふ

よと共に行かふ舟をみるからに〔ことイ〕ほに出て君を千年とそ思ふ

松崎

たなひかぬ時こそなけれ秋〔あまイ〕もなき松かさきよりみゆる白雲

嵯峨野

手ことにそ人は折ける君か爲行末遠き秋の野の花〔はきイ〕

宇治

おち積るもみち〔をイ〕は見れは百年のあきのとまりは網代也けり

かへのやしろ

影とのみ賴むかひ有て露霜に色かはりせぬかへのやしろか

梅の原

梅花おほかる里に鶯の冬こもりしてはるをまつらん

芳野山

みよし野のよしのゝ山は百年の雪のみつもる所なりけり

延長四年八月廿四日清貫民部卿六十賀 桓佐中納言北
方被進之時屛風歌わかなつめる所

春日野のわかなも君を新らなんたか爲につむ物ならなくに

人の櫻と松の木の下にをる所

櫻花ちらぬ松にもならはなん色々ことに見つゝ世をへむ

人の家にさくら花おほかる所

我宿に春こそおほくきにけらしさける櫻のかきりなけれは

すもゝの花を人をる

君かためわか折花は春ふかく千とせみたひを折つゝそゆく

人の舟にのりて藤花見たる所

をりつみてはやこきかへれ藤の花春も深くそ色は見えける

女共の瀧見たる所

糸とさへみえて流るゝ瀧なれはたゆへくもあらすぬける白玉

松のもとに泉のなかるゝ所

松のねにいつる泉の水なれはおなしき物をたえしとそ思ふ

秋花

いはひつゝ植たるやとの花なれは思ふかことく色こかり鳧

馬車に乘て人秋の花みたる所

かきりなくわか思ふ人の行野へは色のちくさに花そ咲ける

鹿の萩の中に立る所

棹鹿の尾上にさける秋萩をしからみへぬる年もしられぬ

菊花さける所

菊の花うゑたる宿のあやしきは老てふ年もしらぬ成けり

池邊に鶴のあそふ所

さゝら浪よする汀にすむ鶴や君かへむよのしるへ成らん

女紅葉ひろへる所

散うへにちりし積れは紅葉はをひろふ數社しられさりけれ

人家に紅葉の川のうへにちりかゝる

紅葉ちるこの下水を見る時は色くさ〳〵に浪そ立ける

神樂せる所

足引の山の榊の常葉なるかけにさかゆく神のきねかも

延長四年九月廿四日法皇六十賀 京極御息所被奉仕時
屛風歌若菜つむ

春たゝむすなはちことに君かため千とせへぬへき若な也鳬
若な生る野へといふのへを君か爲萬世しめてつまむとそ思ふ

子　日

春にゝすはるけき物は春霞たな引野への松にそありける

藤松にかゝれる所

松風のふかんかきりは打はへて絶へくもあらすさける藤浪

瀧の水

思ふ事たきにあらなん流れてもつきせぬ物とやすく頼まん

いはほ

山風は吹とふかねと白浪のよする岩ほそひさしかりける
こけ長くおふるいはほの久しきを君にかへてん心やある覽

むれたる鶴

かの見ゆるたつの村鳥君にとそおのか世々をは思ふへらなる

菊

いかてなを君か千とせは菊の花折つゝ露にぬれんとそ思ふ
菊の花下ゆく水にかけ見れはさらに浪なくおいせさりけり

竹

年毎に生そふ竹の世々をへてかはらぬ色を誰とかは見ん

三條右大臣殿御屛風に

いたつらに老にけるかな高砂の松や我身〔よイ〕のはてをかたらん
むは玉のわか黒かみも年ふれは瀧のいとゝそ成ぬへらなる
春霞立よらね〔もイ〕はやみよしのゝ山にいまさへ雪のふるらん
いつしかとこえむと思ふ足引の山になくなるよふこ鳥かも
足引の山下瀧つ〔したくイ〕いはなみの心くたけてひとそこひしき
鶯の花ふみちらす木の下はいたく雪ふる春へ成けり

浦ことに花ちる〔さきいつるイ〕なみの花見れは海には春の〔もイ〕くれぬ也けり
梅の香のかきりなけれは折人の手にも袖にもしみにける哉
とふ人もなき宿なれとくる春は八重葎にもさは〔よイ〕らさりけり
ゆきやとる白雲たに〔かイ〕もかよはすは此山里は住うからまし
玉もかる海人のゆき〔はイ〕とひさす棹のなかくや人を恨みわた覽
此やとの人にもあらて朝顔の花をのみみて我や歸らん
うつろふを匂ふと思て〔てイ〕常葉なる山には秋もこえすそ有ける
年月のかはるもしらす我やとの常葉の松の色をこそ見れ
久かたの月影みれは難波かたしほもたかくそ成ぬへらなる
つなてとき今はと舟もさし出なは我は浪ちをこえやわた覽
山たかみ梢を分てなかれくる瀧にたくひて落るもみち葉
さゝの葉〔はイ〕のさえけるなへに足引の山には雪そ降つみにける
君まさてさむさもしらしみ吉野のよしのゝ山に雪は降つゝ〔ともイ〕

紀貫之集第六　戀部

やまとに侍ける人のもとにつかはしける

こえぬまは吉野の山のさくら花人傳にのみきゝやわたらん
山櫻かすみへたて〔のまよりイ〕ゝほのかにもみしはかりにや戀しかる覽
世の中はかくこそ有けれ吹風の〔そイ〕めに見ぬ人もこひしかり鳬
よしの河岩波たかく行水のほやくも人を思ひそめてし
あふ事は雲ゐはるかになる神のおとに聞つゝ戀わたるかな
人しれす物思ふ時は難波なる芦のしらねのしられやはする
浪にのみぬれつるものを吹風のたよりうれしきあきの釣舟

津の國の難波の芦のめもはるに茂きわかこひ人しるらめや
人しれぬ思ひのみ社侘しけれ我なけきをはわれのみそしる
もえつゝもこなたかなたの思かな泪の河のなかにゆけはか
くれなゐのふり出つゝなく泪には袂のみこそ色まさりけれ
風吹はみねに別るゝ白雲の行めくりてもあはんとそ思ふ
風ふけはたえす浪こす磯なれやわか衣手のかはく時なき
泪川いつか水上はやけれはせきそかねつる袖のしからみ
行末はつゐにすきつゝあふ事の年月なきそわひしかりける
白玉とみえし涙もとしふれはから紅にうつろひにけり
なけきこる山路は人もしらなくに我心のみつねにゆくらん
山川に〔かけイ〕つくる山田のこ隠れてほに出ぬこひはわひしかり鬼
燃れともしるしたになきふしのねに思ふ中をは譬へさら南

宮つかへする女のあひかたかりけるに

手向せぬわかれせぬ身のわひしきは人めをたひと思ふ也鬼
なかき夜を思明して朝露のおきてしくれは袖そぬれける
織女とおもふ物からあふことのいつともしらぬ我そ戀しき
もゝはかき羽かく鳴もわか如くあした侘しき數はまさらし
かさす共たちと立なんなき名には言なし草のかひやなか覽
逢事のあまひこにしてよそならは人めも我はよきすそ有〔なし〕
織女の年にひとたひあふ事は人めそ後の空には有ける
まこもかる淀のさは水雨ふれは常よりことにまさるわか戀
よそに見てかへる夢たにある物をうつゝに人に別れぬる哉
我戀はしらぬ山ちにあらなくになとか心のまとひけぬへき
君こふる涙しなくはから衣むねのあたりは色もえなまし
逢事を月日にそへてまつ時はけふゆく末に成ねとそ思ふ
朝な／＼けつれはおつるわかかみの思ひ亂れて果ぬへら也

秋風のいなはそよきて吹なへにほに出て人そ戀しかりける
手もふれて月日へに鬼しらま弓おきふしよるは物を社思へ
わか爲のあたにそ有ける年月は思もなさて行かへりつゝ
戀しきや色には有らん泪川なかるゝおくの水はうつろふ
敷島のやまとにはあらぬ唐衣比もへたてすあふよしもかな
泪にそぬれつゝしほる世の人のつらき心は袖のしつくか
あひみんと思ふ心を命にていける我身のたのもしけなき
伊勢の海の蜑とならはや君こふる心の深さかつきくらへん
あふ事のなくて月日はへにけれと心はかりは明くれもせす
石上ふるのゝ道の草分てしみつくみにはまたもかへらん
むかしへに猶立かへるこゝろかな戀しき事に物わすれせて
年月はむかしにあらぬけふなれと戀しき事はかはらさり鬼
戀にのみとしはすくせと時鳥なくかひもなく成ぬへらなり

さ月山梢をたかみ時鳥なくねそらなることもするかな

あはれとも戀しともおもふ色なれやおつる涙に袖のぬる覽
哀てふ事にしるしはなけれともいはてはえ社あらぬ物なれ
あはれてふ事にあかねは世中を泪にかふる我身なりけり
さをしかのなきてしからむ秋萩における白露我もけぬへし
穐萩をみつゝけふこそ眺めつれ下葉は戀のつまにそ有ける
身をせはみ袖よりもふる泪には物思ひもなき人もぬれけり
君こふる涙に秋のかよへはや空も袂もとゝにしくるゝ
野へ見れは生る薄の秋わかみまたもほに出ぬ戀もする哉
人の身に秋やたつらん言の葉のうすくこくなり移ひにけり
秋はわか心の月にあらねとも物おもはしきころにも有かな
をしからて悲しきものは身なり鬼人の心のゆくへしらねは
秋のゝの移ふ見れはつれもなくかれにし人を草はとそ思ふ

百ちとり鳴ときあれと君をのみこふるわかねはいつと定めす
秋の野のみたれてさける花の色千くさに物を思ふころかな
明たては先さす紐の糸よはみたえてあはすはなといけるかひ
雨やまぬ山のあまくも立ゐつゝやすき時なく君をしそ思ふ
大空は曇らさりけり神無月しくれこゝちは我のみそする
年をへてこひわたれ共我爲に天のかはらのなきかわひしき
天河せたえもせなん鵲のはしをしらすたゝわたりなん
紅に袖そうつろふこひしきや涙の川のあき（いろイ）にはあるらむ
人を思ふこゝろのそらに有時はわか衣手そ露けかりける
秋風に萩の下葉のうつろへはひとりぬる身そ戀まさりける
秋の野の草も分ぬにわか袖の物おもふなへにつゆけかる覽
消やすき雪はしはしもとまらなんうき事しけき我に變りて
よとゝもに流れてそゆく泪川冬もこほらぬみなわ成けり
雨ふれは色さりやすき櫻花うすき心をわかおもはなくに
　女なほさりにいふとなんと申ければ
色ならはうつるはかりも染てまし思ふ心をえやはみせける
君によりぬれこそわたれ唐衣そては泪のつまにそ有ける
初かりの鳴こそわたれ世の中の人のこゝろの秋しうければ
住の江の浪にはあらねとよとゝもに心を君によせわたる哉
夢ちにそ露もおくらんねぬるよの我衣手のぬれてかはかぬ
人めてふ物はいかなる道なれはつかひもゆかて遂けかる覽
賤機に亂れてそ思戀しさをたてぬきにしておれる我身か
さけはつむ物と思ひしくれなゐは泪の川の色にそ有ける
あはれてふことをゝにしてぬく玉はあはて年ふる泪也けり
つまこふる鹿のしからむ秋萩におけるしら露我もけぬへし
思ひ餘り戀しき時はやとかれてあくかれぬへき心ち社すれ

降雪をゆきとたのまし人しれす物思ふ事の數にそ有ける
色もなき心を人につけしよりうつろはんとは思はさりしを
　ちか隣なる人時々とかく物いふを外へうつろふと聞
　て
近くてもあかぬうつゝを今宵よりとほき夢みん我そ悲しき
萩の葉の色つく秋をいたつらにあまたかそへて過しつる哉
春霞やまほとゝきす紅葉はもゆきもおほくの年そへにける
わひしとは年にしられぬ秋なれや我袖にのみ時雨降らん
しのふれと戀しき時はあし曳の山より月のいてもこそくれ
うつゝにはあふ事かたし玉のをのよるは絶すも夢にみえ南
　心させる女のあたりにまかりていひ入ける
わひわたる我身は露を同しくは君かあたりの草に消なん
忘られす戀しきものは春のよの夢のなこりのさむる也けり
ねぬるよの夢はなみにもあらなくに立歸りても人をみる哉
時鳥人まつ山になくなれは我も打つけに戀まさるなり
なけきこる山と我みの成ぬれは心のみこそいとなかりけれ
夕されは人まつ虫のなくなへに獨りぬる身そ戀まさりける
山ひこの聲のまに／＼尋ゆけは何處ともなく我やまとはん
降雨に出てもぬれぬわか袖のかけにゐなからひちまさる哉
人しれすいはぬ涙（思ひイ）のわひしきはたゝにたもとのぬるゝ也鬼
人しれす仇し心のありといへは浪ちとのみややまてなく覽
夢をみてかひなき事の侘しきはさむるうつゝの戀にそ有ける
あひみすは生らしとのみ戀る身の流石に惜く人にしれぬる
かきくもり雨ふることに道しらぬ笠とり山にまとはるゝ哉
み山には時もさ（いへイ）ためす百千鳥めつらしけなく鳴わたる哉
散時はうしとみれとも忘つゝ花に心のなをもとまれる

給ひける
百草の花のかけまてうつしつゝおともかはらぬ白川のみつ
　恒佐大(中イ)納言殿の扇合の歌すはまに入たり
住の江の松のかせをもこめたれはあふく扇のいつか絶せん
　宰相中將(師輔)の四條の宮(穏子)に住はしめ給にまうて
　てことのついてによめる
物ことにかけ水底にうつれ共ちとせのかけそ先はみえける
　承平五年十二月左衛門督殿(實頼)の男女きみたち元服
　しもき給ふ夜よめる
大原やをしほの山の小松原はやこたかかれ千世のかけみん
　源公忠の子に元服せさせ給ふ所に
君をみな祝ひかてらに百年をまたぬ人なくまたんとそ思ふ
　天慶六年正月藤大納言(師輔)御せうそこに年比ありつ
　る魚袋をつくろはせんとて細工に給へるをおそくも
　てくるあひたに日ちかくなりしかはいぬる一日の日
　はつけす有しかはおほいとの(忠平)に此よしきこしめ
　してわかむかしよりようするをあえ物にけふはかり
　つけよと仰られて給はりしかはよろこひかしこまり
　て給はりようして松の枝に付て返し奉る其よし内侍
　の督の殿上にいさゝか聞えんとなんおもひしのひて
　そのよしを書いたしてとあるにたてまつる
吹風に氷とけたる池の魚の(はイ)千世まて松のかけにかくれん
君しみつ松か枝深くかけ見えてたゆへくもあらぬ万代の影
　藏人中務丞源さねなかの君こへるにやる
千世と思ふ君か使にけふまちてつまんと思ふ若なをそつむ

紀貫之集第八　別部

　人のうまのはなむけによめる
をしむから戀しき物を白雲の立別なはなにこゝちせん
　みちの國へ下る人にやれる
白雲の八重にかさなるをちにても思はん人に心へたつな
　人をわかれける時よめる
別れてふことは色にもあらなくに心にしみてわひしかる覽
　おとは山のわたりにて人をわかるとて
おとは山こたかくなきて時鳥君かわかれをゝしむへらなり
　藤原のこれをかか武藏介にてくたる時相坂まておく
　りて
かつこへて別れもゆくか相坂は人たのめなる名に社有けれ
　兼茂朝臣の物へゆくに兼輔朝臣の餞する所にてよめ
　る雨の降けれは
久堅のあめも心にかなはなんふるとて人の立とまるへく
　みちの國へ下る人をゝしめる
かり衣する名におへる忍山こえん人こそかねてをしけれ
　遠くゆく人に
またもこそ物へゆく人われをしめ泪のこさす君になきつれ
遠くゆく人の爲にはわか袖の泪の玉もをしからなくに
　兼輔の兵衛督のかも河のほとりにて左衛門尉みはる
　のありすけの甲斐へ下るに餞したる日よめる
君をゝしむ泪おちます此川のみきはまさりてなかるへら也
　あひしれる人の物へゆくに(ふイ)ぬさやるとてよめる
行けふも歸らむ時も玉ほこのちきりの神をいのれとそ思ふ

もみちはも花をもをれる心をは手向の山の神そしるらん
　鶴のかたにぬさいるゝ物をしてかける
千年をはつるに任せて別るともあひみん事はあすもとそ思
　左中弁濟光朝臣の人の馬のはなむけのぬさにかゝん
　とてよませたる夏なりけれは
いとまたきみゆる紅葉は君か爲思そめてしぬさにそ有ける
玉ほこの手向の神もわかことく我思ことを思へとそ思ふ
　師氏少將の信濃へゆく人の馬のはなむけにやらんと
　てよませ給へる
我にしも草の枕はこはなくに物へときけはをしくそ有ける
君かゆく所と聞は月見つゝ姥すて山もこひしかるへき
　おなし少將のもとへ行人に火うちの調度をてらして
　それにたきものをくはへてやるによめる
をり〳〵に打てたく火の煙あらは心さす香を忍へとそ思ふ
　師尹の侍從のよませ給ふに
遠く行君ををしきと人もみな時鳥さへなきぬへらなり
　橘の公頼の師のつくしへ下時其子の阿波守としさた
　の朝臣のまゝ母の内侍のすけに送れる物ともにくは
　へたる歌くすりに
しはし我とまるかはりに千世までの君かおくりは藥社せめ
　かつら
打みえん面影ことに玉かつらなかきかたみに思へとそ思ふ
　さうそく
あまたにはぬひかさねゝと唐衣思〔ふ〕心はちへにそ有ける
　あひしれる人のものへゆくに馬のはなむけしけるあ
　ひたに雨の降けれはえいかす有けるによめる
君ををしむ心のそらに通へはやけふとまるへき雨の降らん
　みちの國の將軍ありときかむまのはなむけ宰相中將
　のし給ふによめる
みてたにもあかぬ別を〔こゝろイ〕玉ほこの道のおくまて人のゆくらん
　物へゆく人に送らんとて人のこふに
あつらへてわするなと思ふ心あれは我身を分るかたみ成鬼
　みちの國の守たひらのこれみつ〔よりすけイ〕の朝臣のく
　たるにぬさのすはまのつるのはねにかける
千年まて命たへたる鶴なれは君かゆきゝをしたふ也けり
　同し人の馬のはなむけにやるとて兵衞のかうのよま
　せたるに
遠くゆく君をおくると思ひやる心もともに旅ねをやせん
　同し人に
これをたに形身とて見はうは玉の思ひみたるゝ時なから南
　おなし人の馬のはなむけにさうそく調して送るにく
　はへたる歌
玉ほこの道の山風寒からはかたみかてらにきなんとそ思ふ
　同し人の馬のはなむけをおほきおとゝの白河殿にて
　せさせ給ふにかはらけとりてよめる
人もみな遠道ゆけと草枕このたひはかりをしき旅なし
　遠き人にぬさなとやるに
染たちて祈れるぬさの思ひをは手向の道の神や知らん
別ゆく人ををしむと今夜より遠き夢ちに我やまとはん
　筑前〔後イ〕守の子の下るにあふきやるとて
あふけともつきせぬ風は君かため我心さすあふき成けり
　尾張守藤原のおきかたか女の下にぬささうそくなと

やるにくはへたる歌

たつぬさの我思ひをは玉ほこの道のへことの神もしるらん

その人とかにおもほゆるから衣忘るゝなとてぬける成けり

人はいさわれは昔の忘れねは物へと聞て哀とそおもふ

同し人の下るを相坂にて送らんとて兼道の大君のその爲とてよませたる

出てゆく道とはしれと相坂はむかへん時の名に社ありけれ

源公忠朝臣近江守にて下るに送る

ねに鳴てわひしと思はぬほとなれと常の心にかはりぬる哉

別ちを君にまたわか習はねは下に心そをくれさりける

返し

せき人におとりかかり〔本ノマヽ〕ける君かため心と〻めぬ時はなけれと

師尹の頭中將東に下る女にくしの箱鏡なと調してやり給ふにそふとて

別てもけふより後は玉くしけ明暮見へをかたみ成けり

信濃にゆく人に送る

月影をあかす見るとも更科の山のふもとに長ゐすな君

人の國へ下るにたひにてよめる

いとによる物ならなくに別ちの心細くもおもほゆるかな

ひこの守藤原のときすけといふぬしの國へ下るに

一ひたに見ねは戀しき心あるを遠道さして君かゆくらん

躬恒かもとにまかりてつとめて

ちらぬほとに一枝もかな櫻花君かかたみにけさみまくほし

みつね返し

我こひて見んとないひそ櫻花ふりにし雪のかたみとをいへ

紀貫之集第九　哀傷部

あひしれる人のうせたるによめる

夢と社いふへかりけれ世の中にうつゝある物と思ひける哉

紀友則かうせたるによめる

あすしらぬ我身と思へと暮ぬまのけふは人社悲しかりけれ

山寺に行道にてよめる

朝露のおくての山田かりそめにうき世の中を思ひぬるかな

あるしともうせたるに家の梅の花を見て

色も香も昔のこさに匂へともうゑけん人のかけそ戀しき

河原の左のおほいとの(融)うせ給て後にいたりてしほかまといふ所のかたをつくれりけるを見て

君まさて煙たえにし鹽かまのうら淋しくもみえ渡る哉

素性うせぬと聞て躬恒かもとに送る

石上ふるく住にし君なくて山の霞は立ゐわふらん

三常返し

君なくてふるの山への春かすみ徒にこそたちわたるらめ

とあるまたの日

うせにしと身こそ聞ゆれ石上ふるき名うせぬ君にそ有ける

世中のはかなきをみてよめる

昨日まてあひ見し人のけふなきは山の雲とそ棚引にける

うけれ共いけるはさても有物をしぬるのみ社悲しかりけれ

いつみの大將うせ給ふて後隣なる人の家に人々いたりあいてとかく物語なとするついてにかの殿の櫻のおもしろくさけるをこれかれあはれかりて歌よむついてに

君ましゝ〔さてイ〕昔は露か故郷の花見ることにそてのひつらん
　兼輔中將のめのうせにける年のしはすの晦日にいたりて物語するついてに昔を戀しのふるあひたによめる
こふるまに年のくれなはなき人の別れやいとゝ遠く成らん
　題不知
立かへりかなしくも有か別てはしるもしらぬも煙なりけり
藤衣おりたる糸はみつなれやぬれはまされとかはく時なき〔まもなしイ〕
　東宮のかくれ給へる比よめる
霞たつ山へを君によそへつゝ春の宮人なほやたのまん
君まさぬ春の宮には櫻花泪の雨にぬれつゝそふる
　延長八年九月日京極中納言の諒闇のあひたにはゝのふくになりて
ひとへたにきるは侘しき〔かなイ〕藤衣かさぬる秋をおもひやらなん
　とよみて土佐國にあるあひたに送られたりし返し
藤衣かさぬる思ひおもひやる心はけふもやすまさりけり
　題なし
鶯〔ほとゝきすイ〕のけさなく聲におとろけは君に別れし時に〔たにイ〕そありける
夢のこと成にし君を夢にたに今はみることかたくも有かな
おく露を別れし君と思ひつゝ朝な〳〵そこひしかりける
　おやのおもひに侍ける時〔君こふるイ〕よみける
藤ころもはつるゝいとは侘人の泪の玉のをとそなりぬる
　かいせんうせぬと聞てかのをひの在原のまさふさかもとにといひて敦忠の中將のもとに送る
明くれてちとせ〔ふイ〕あるものと思ひしを猶世中は夢になりぬる〔そありけるイ〕
ひとのことちとせ行まは高砂の松と我とやけふをくらさん
　京極の中納言うせ給て後粟田に住給ふ所ありけるにそこにいたりて前栽に松竹なとあるをみてよめる
松もみな竹も別を思へはや泪のしくれふることゝちする
　同し中納言うせ給へるとしのまたのとしの一月の日かの中納言の御家に奉る
から〔ふちイ〕衣あたらしく立年なれとふりにし人のなほやこひしき

紀貫之集第十　雜部

　屛風の繪なる花をよめる
さきそめし時より後は打はへて世は春なれや色の常なる
　夜雲收盡月行遲といふ事をある人のよませ給ふによめる
天雲のたなひけり共みえぬよは行月影そのとけかりける
　凡河内躬恒か月おもしろき夜來るによめる
かつ見れとうとくも有哉月影の到らぬ里〔もイ〕はあらしと思へは
　和泉國にあるあひた藤原忠房朝臣のやまとよりこえておくれる
君を思ひおきつのはまに鳴たつの尋くれはそ有とたにきく
　とある返事
興つ浪たかせ〔しイ〕のはまの濱松のね〔名イ〕にこそ君を〔まちイ〕戀わたりつれ
　なにはにてよめる

難波かた生る玉もをかりそめのあまとそ我は成ぬへらなる
池にみゆる月をよめる
ふたつなき物とおもひしを水底に山のはならて出る月影
身をなけきてよめる
春やいぬる〔にしイ〕秋やいくらん〔はイ〕覺束なかけの朽木と世を過す身は
かうふり給ふてかゝの介に成て美濃介にうつらんと
申あひたに內の仰にて歌よませ給ふ おくにかいてた
てまつる
降雪や花と咲ても賴めけんなとかゝのみのなりかてにする
こしなる人にやれる
思ひやるこしの白山しらね共一夜もいめに〔こイ〕みえぬよそなき
雨ふれは北へたなひく白雲を君によそへてなかめつるかな
志賀の山こえにて山の井に女の手あらひ むすひての
むを見てよみてやれる
結ふ手のしつくににこる山の井のあかても人に別れぬる哉
九月九日壬生忠岑かもとより
おる菊の雫をおほみわかゆてふぬれきぬを社老の身にきれ
とよみて送れる返し
露深き〔しけきイ〕菊をしをれる心あらは千世のなき名は〔のたゝんイ〕たえんとそ思ふ
藤原興風か歌の返事
櫻には心のみこそくるしけれあきてくらせる春しなけれは
興風かもとに杜若につけてやれる
人の〔君かイ〕やとわかやとわける杜若うつろはん時みん人もかな
返し
睦ましみ通ひへたてぬ杜若たかかたにかはうつろひぬへき
とあるを又返し
たゝちにて君かこえこん杜若風を外にてうつろひぬへし
在原元方かもとに送る
白雲のたなひきわたるくら橋の山の松とも君はしらすや
忠岑かもとに送る
かひかねの松にとしふる君故に我はなけきと成ぬへらなり
源宗于朝臣もとより
君ひとりきとはぬからにわか宿の道も露けく成ぬへらなり
とある返しに
草の露おきしもあへし朝なけに心かよはぬ時しなけれは
躬恒か
まことなき物とおもひしを僞〔のイ〕に泪はかねておとさゝらまし
とある返し
をしからぬ命なりせは世中の人の僞に成もしなまし
紀の國に下りてかへりのほる道にて俄に馬のしぬへ
くわつらふ所にて道行人立とまりていふやう是はこ
こにいましつる神のし給ふならんとし比やしろもな
くしるしもなけれといとかしこくて いましける神也
さき〳〵かやうにわつらふ人々ある所也 いのり申給
へよといふにみてくらもなけれはなにわさすへくも
あらすたゝ手をあらひてひさまつきて神います かり
けもなきかたにむかひて そもそも何の神とかいふと
いへはありとほしの神となん申といひけれは 是を聞
てよみて奉る歌也そのけにや馬の心ちもやみにけり
かき曇りあやめもしらぬ大空にありとほしをは思ふへしやは
難波のたみのゝしまのほとにて雨にあひてよめる

雨に社民の〔のイ〕かしまを越ゆけとなにはかくれぬ物にそ有ける
源のとしのふの朝臣のよひにおこせたるにいまゝう
てむとておそくいきけれは
春日すら我まつ人をこんと〔のこしイ〕たにいはすはあすも猶頼まゝし
とある返し
こしと思ふ心はなきを櫻花ちるとまかふにさはる成けり
七日の朝に躬恒かもとに
君にあはてひとひふつかに成ぬれは今朝彦星の心ちすらしも〔こそすれイ〕
とある返し
あひみすてひとひも君にならはねは織女よりも我そ優れる
あくる年の七夕の後の〔のイ〕朝に躬恒かもとに送れる
朝戸明てなかめやすらん織女はあかぬ別の空をこひつゝ
しはすの晦日かたに身の上をなけきてよめる
霜かれにみえこし梅は咲にけり春に我身は〔はわか身イ〕あはんとはすや
ぬは玉のわかくろかみに年くれて鏡のかけにふれる白雪
高砂のみねの松とや世中をまもる人とはわれやなりなん
けふ見れは鏡に雪そふりにけるおいしる人は冬にそ有ける
京極宰相中將のみもとにおいぬることをなけきてよ
みて奉れる
ふりそめて友まつ雪はぬは玉のわか黑髪のかはる成けり
返し兼輔朝臣
黑髪のいろふりかはる白雪のまちつる友はうとくそ有ける
又返し
黑かみと雪との中のうきみれはとも鏡をもつらしとそ思ふ
色みえて雪積りたる身のはてやつひにけぬへき病成らん

同し中將のもとにいたりてこれかれ松のもとにおり
ゐて酒なとのむついてに
かけよ〔にイ〕とて立かくるれはから衣ぬれぬ雨ふる松の聲かな
ある所に春と秋といつれかまさるとはせ給ふける
によみてまいらする
春秋に思みたれてわきかねつ時につけつゝうつるこゝろは
躬恒かもとに
草も木もふけはかれゆく〔ぬるイ〕秋風にさきのみまさる物思の花
とある返し
ことしけき心よりさく物思ひの花の枝をやつらつえにつく
花を折てこれかれかさすつゐてにかさしてよめる
かさせ共花咲とやは頼まるゝみのなりつへき時しなけれは
承平五年十二月に左衞門督殿の男女きんたちのから
ふりし裳きしたまふ夜殿へ
今日までに昔の人のあらませは諸共にこそゑみてみましか
とて奉るに御返し
むかし〔いにイ〕へをこふる心のあるか上に君なけふみて又そ戀しき
三月晦日の日家うつりするに
我やとを春とともにし別るれは花はしたひてうつろひにけり
宗于の右京大夫のもとよりひさしくあはぬことなと
いひて
よそにてもおもふ心はかはらねとあひみぬ時は戀しかりけり
とあるかへし
櫻ちり卯花もみなさきぬれは心さしには春夏もなし
つかさなくてなけくあひたに正月の比ほひ坊城左衞

門督のもとにおほいとのによきさまに申給へと申奉
るついてに是奉給へとて奉る
朝日さすかたの山風いまたにも身のうち〔手のうらイ〕さむき氷とけなん
枯はてぬ埋木あるを春はなほ花のたより〔ゆかイ〕によくなとそ思ふ
延寛かもとより
世中に誰かなたかきたらちをと我とかなかを人はしるらん
とよみておこせたる返し
我はいさ君かなのみそ白雲のかゝる山にもおとらさりけり
世中をなけきてあるきもせすしてあるあひた三月晦
日の日藤原雅正朝臣のもとより
君みす〔こイ〕て年はくれにき立かへり春さへけふに成にける哉
ともにこそ花をもみめ〔えイ〕と待人のこぬ物ゆゑにをしき春かな
とある返し
君にたにゆかてへぬれは藤の花黄昏時もしらすそ有ける
八重葎心のうちにふかけれは花見にゆかん出立もせす
四月に成て同し人のもとに送る
あはぬまに梅も櫻も過にしを卯花をさくやりつへきかな
とし比近き隣に住けるを外へうつると聞てよみてや
りける
秋萩の散たにをしくあかなくに君かうつろふきくそ悲〔わひイ〕しき
式部丞三統元夏かにしなる隣に住はしめてかくちか
となりなることなといひおこせたるついてによみて
おくれる
梅の花匂ひのふかくみえつるは春の隣の近き成けり
とある返し二首
かたのみそ春はありける住人は花しさかねはなそやかひなし
梅もみな春近しとてさく物をまつこともなき我やなに也
もとなつかもとより
いてつと〔たイ〕ふ花にもあはぬ鶯はたゝ〔にイ〕にのみ社なきわたりけれ
とある返しに
こち風に氷とけなは鶯のたかきにうつる聲を〔とイ〕つけなん
近隣なりける男正月三日もとなつかもとにいたりた
るになかりけれはかくなんまらて來つるといひおき
てかへりにたるつとめて送れる
とはゝとひとはすはさても有へきを物の始めに歸るへしやは
とある返し
心をし君にとゝめて年ふれは歸る我身は物ならなくに
もとなつかほかにて曉に歸て門たゝくを聞てよみて
やれる
夜かれしていつからくるそ時鳥またあけぬまに聲のしつ覽
三條の内侍のかたたかへにわたりてつとめて歸るあ
ひたに物なといふついてにむすふ手の雫ににこると
いふ歌はかりは今はえよみ給はしかしなといひて車
に乘〔ゐイ〕ほとによめる
家なからつかるゝ時は山の井のにこりしよりも侘しかり鬼
六月に木葉のちりつるをとりて歌をよみてまさたゝ
(雅正)の朝臣のもとより
秋こそあれ夏の野へなる木葉には露の心のあさくも有哉
とありける返し
夏なから秋をまちけるもみち葉は色計りこそ物らかり〔かはらさりイ〕けれ

あつよしの式部卿のむすめ伊勢のこのはらにあるを
すむ所近く有けるに折てかめにさせるはなをおくる
とて
久しかれあたに散なと櫻花かめにさせれとうつろひにけり
おなし所にちひさきくるみの木の有けるをきゝてこ
ひてほるとてよめる
鶯にはなしられけはなけれとも春くるみちの物にそ有ける
ちか隣なりける所にかたたかへにある女わたれりと
聞てあるほとに事にふれてみきくに歌よむへき人な
りと聞てよまんさまいかて心みむと思へといとむ心
にしあらねはふかくも思はすすゝみてもいはぬあひ
たにこれもや心見んと思けん秋の葉のもみちたるに
つけて歌をこせたるあはせて十首女の
秋はきの下葉につけてめにちかくよそなる人の心をそ見る
返しに
世の中の人の〔に〕心に〔をイ〕染しかは草葉の色も見えしとそ思ふ
女
下葉には更にうつらてひたすらにちりぬる花と成やしぬ覽
返しに
散もせすうつろひもせす人を思心のうちに花しさかねは
女
花ならてうつろふ物はしかすかにあたなる人の心とそ〔なりけりイ〕きく
返しに
あたなりとなつくる人のことのはに匂はぬ花も我はさく哉
女
色も香もなくてさけはや春秋もみえて心の散かはるらん

返しに
春秋はすくす物から心には花も紅葉もにほひなくこそ
女
春秋にあへと〔は〕匂ひもなき物は〔をイ〕み山かくれの朽木成けり〔らんイ〕
返しに
奥山の埋木に身をなす事は色にも出ぬ戀のためなる
ひさしう住家をすましとて外へうつるに生たる松竹
松もみな竹をもこゝにとゝめおきて別ていつる心しらなん
昨日けふみへきかきりとまもりつゝ松と竹とをけふそ別るゝ
つかさえ給はらてなけく比おほきおほい殿のものか
かせ給へるおくによみてかける
おもふ事心にあるをあめとのみ頼める君にいかてしらせん
いたつらに世にふる物と高砂の松も我をやともにみるらん
しはすのつこもり方に身の上をなけきて
雪たにも花と咲へきみにもあらて何をたよりと春を待らん
六月晦日にまさたゝの朝臣のもとに送る
花もちり郭公さへいぬるまて君にもゆかす成にける哉
三月晦日の日ある人のもとにやれる
又もこん時そと思ふを頼まれぬ我身にしあれはをしくも有哉
世中の心ほそくおほえ常のこゝちせられさりけれは
源公忠朝臣のもとに此歌をなんよみてやれりけり此
あひたにまことのやまひにておもく成にけり
手にむすふ水に宿れる月影のあるかなきかの世にそ〔こそ〕有ける〔れイ〕
後に人のきけは此歌の返しをもとは思へと。いそきて
せぬほとに。うせにけれは。聞おとろきて。かの送れり
し歌に。返しをよみくはへて。おたきに誦經して。かは

らにてなん。やかせけるといふは。まことにやあらむ。

竹生嶋にまいるついてにもる山といふ所にて

白露も時雨もいたくもる山は下葉殘らす色付にけり

昔初瀨へまうつとてやとれりし人の家に久しくいたらてまかりたりしかはかくさたかになんやとりはあるといひ出したりけれはこゝにある梅花を折てやるとて

人はいさ心もしらす故鄉は花そむかしの香に匂ひける

かくいひていれたれは思の外にいたせる

花たにもおなし香なからさく物をうゑたる人の心しらなん

秋の立日殿上のぬしたちのかはらに逍遙し給ふともにいきて歌よむついてに

河風のすゝしくもあるか打よする浪とゝもにや秋は立らん

昔人の家にあつまりてさけのみあそひけるに櫻の花盛に人々これをよみしついてに

散からへにちりもまかふか櫻花かくてそ空の春もくれにし

亭子院の御門の歌合し給に歌ひとつ奉れとあるに

櫻ちる木の下かせはさむからて空にしられぬ雪そ散ける

延喜の御時やまとうたしれる人々いまむかしの歌たてまつらしめ給て承香殿のひんかしなる所にてえらはしめたまふ始の日夜ふくるまてとかくいふあひたに御前の櫻の木に時鳥のなくを四月の六日の夜なれはめつらしからせ給ふてめし出し給てよませ給ふに奉る

こと夏はいかゝ聞けん時鳥こよひはかりはあらしとそ思ふ

大德の櫻の花をうすかみにつゝみて

空しらぬ雪かと人のいふなれはさくらの冬は風にそ有ける

とある返事によめる

吹風にさくらの浪のよする時はくれゆく春を空かとそ思ふ

花の散もとにて歸なんとてよめる

我はきていつことゆくを散花はさきし枝へもかへらさり鳬

三月ふたつ有けるとし左大臣殿(忠平)のさねよりの君にたてまつれる

餘りさへありていぬ〔ゆくイ〕へき今年さへ〔年たにもイ〕春に必すあふよしもかな

春のつくる日御にて奉る貳首

こん年の爲には祈る春なれとけふのくるゝはをしくも有鳬

櫻なき枝ならなくに今はとて春のいつちかけふはゆくらん

ある人の欵冬の花を折て給へるに

おとにきく井手の山吹みつれとも蛙の聲は〔かはイ〕ましらさりけり

師輔の宰相中將の二郎君(爲通)のはしめてはかまき給ひておほち大殿の御もとへまいり給日送物のかへしにくはへんとてよませ給ふによめる

言にいはて心の内をしる物はかみのすちさへぬける也けり

ひえの慈惠といふ阿闍梨いましけるかうせ給ひなんとてものやみ給けるかいたくわつらはれてれいにあらすなやみ給けるによめる

やみおきてけふかあすかとまつ程をおきふしとふは消也鳬

とよめるを内にきこしめして御とふらひにつかはさんとてめされしに

鶯の花になくねを聞しまにいとほしきことしらすそ有ける

右貫之集以肥後守經亮本書寫得一古寫挍焉

群書類從卷第二百四十八

和歌部百三　家集廿一

業平朝臣集

二條后の東宮の御息所と申せしをり大原野にまうでたまふに

大原やをしほの山もけふ社は神よのことを思ひしるらめ

櫻の花盛にひさしくまからぬ人の許へまかりたれは

あたなりと名に社たてれ櫻花としにまれなる人もまちけり

といへは女かへし

けふこすはあすは雪とそ降なまし消すは有共花とみましや

なきさの院にて櫻の花を

世の中に絶て櫻のなかりせは春の心はのとけからまし

三月晦日に藤の花を（藤の花イ）人につかはすとて雨降日

ぬれ〳〵そしひて折つる年の内に春は幾かもあらしと思へは

人の許なる前栽にむすひつけ侍ける

植しうへは秋なき時やさかさらん花社ちらめ根さへかれめや

かへし

秋はきを色とる風は吹ぬとも心はかれし草葉ならねは

おきもせすねもせて夜を明しては春の物とて眺めくらしつ

千早振神よもしらす立田川からくれなゐに水くゝるとは

年久しくいひわたりける人のつれなく侍りけれは

たのめつゝあはて年ふる僞にこりぬ心を人はしらなん

かへし女

なつ虫もしる〳〵まとふ思ひをはこりぬ哀と誰かみさらん

右近のむまはのてつかひみ侍るむかひにたてる車の下すたれよりはつかに女の見え侍けれはつかはしける

みすもあらすみもせぬ人の戀しくはあやなくけふや眺め暮さん

ある女のもとに人のつかはしける

つれ〳〵の眺めにまさる涙川袖のみひちてあふよしもなし

かへし女にかはりて

あさみ社袖はひつらめ涙川みさへなかるときかはたのまん

あるきいたくすとて女のいたくいひ侍けるに

大ぬさのひくてあまたに成ぬれは思へとえ社頼まさりけれ

かへし

大ぬさと名に社たてれ流れても終にあふせは有とこそきけ

后宮の五條のにしのたいのにしのつまにすむ人をしのひて物いひ侍るときは正月十餘日はかりに梅の花さかりにかたらひける人のいきかたもしらすおとも

せす成にけれはまたの年の春の花盛にかのたいにまかりて廿日の月のかたふくまてあはらなるいたしきに侍りて

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我身ひとつはもとのみにして

宮つかへしける人をひさしくまからてむかひにまうつれとゝみにもいてさりけれは

よひのまにはや慰めよいそのかみふりにし床も打拂ふへく

伊勢といふ人に

いせの海に遊ふ蜑とも成にしか波かき分てみるめかつかん

これたかのみこかりしにまかりしにあまの川といふ所にてその心をいひてかはらけはとれといへは

かりくらし七夕つめに宿からん天の河原に我はきにけり

かへし歌えし給はさりけれは御供なりける紀有常といひける人

一年にひとたひきます君なれは宿かす人もあらしとそ思ふ

昔五條わたりに忍ひて人をかたらひけり忍ひたるところ成けれは門よりはえいらてついひちのくつれよりかよひけるをあるしきゝつけてかの道に人をすゑてまもらせけれはえあはてのみかへりてつかはしける

人しれぬ我通ひちの關守はよひ〳〵ことにうちもねなゝむ

ある人

君やこし我やゆきけむ覺束な夢かうつゝかねてかさめてか

かへし

かきくらす心のやみにまよひにき夢うつゝとは世人（こよひイ）定めよ

ねぬるよの夢をはかなみまとろめはいやはかなにも成增る哉

秋の野の篠分し朝の袖よりもあはてこしよそひち增りける

有常かむすめに住けるを恨ることありてひるはまて來てくるれはさてのみしてまかりけれは

あま雲のよそにも人の成行かさすかにめにはみゆるものから

かへし

行かへりそらめ（ニイ）のみしてふる事は我ゐる山の風はやみなり

めのおとうともて侍けるにうへのきぬゝひにつかはすとて

紫の色こき時はめもはるに野なる草木もわかれさりけり

大かたは月をもめてしこれそこの積れは人の老となるもの

これたかのみこの狩しにまかる供にてかへりによひと夜さけのみして物語し侍けるをみこのしひていりなんとし給ふに

あかなくにまたきに月の隱るゝか山のは逃ていれすもあら南

母の宮長岡といふ所に住侍りける時みやつかへし侍るとてしは〳〵えまからす侍けれはしはすの晦日はかりにとみのことにて侍けるふみをみれは

老ぬれはさらぬ別の有といへはいよ〳〵見まくほしき君哉

かへし

世の中にさらぬ別のなくもかなちよもと祈る人のこのため

布引のたきのもとにて人々歌よむに

ぬきみたる人社あるらし白玉のまなくもちるか袖の狹きに

これたかのみこかしらおろして小野といふ所に住給ふに正月にとふらひにまかりたりけれは雪のいとたかくつれ〳〵に物かなしかりけれは歸りて送り侍ける

忘れては夢かとそ思ふおもひきや雪ふみ分て君なみむとは
おなし所なる女にとしゆきの朝臣かたらひつまから
んと思ふを雨ふるになむおもひわつらふとましけれ
は
かす〳〵に思ひ思はすしりかたみ身をしる雨は降そ増れる
昔深草といふ所に住けり京へいて立ていくとてそこ
なる人に
年をへて住こし里をいてゝいなはいとゝ深草野とや成なむ
といひけれは
野とならは鶉となりてなきをらん狩にたにやは人のこさ覽
大井なる所に人々まかりてさけたへしに
大井川うける川邊のかゝり火に小倉の山もなのみなりけり
紀のとしさたか阿波の守に成てまかりける時あない
せんとてけふかととひにつかはしたりける日こゝか
しこまかりありきて夜ふくるまてまうてこさりけれ
は
今そしるくるしき物と人またむ里をはかれすとふへかり鳬
時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこ斑に雪のふるらん
くれぬとてねてゆくへくもあらなくになく〳〵も猶歸る勝れり
雁鳴て菊の花咲秋はあれと春の海へに住よしのはま
思へともみをしわけねはめかれせぬ雪の積るそわか心なる
年たにもとをとてよつはへにけるを幾たひ君を賴みきつ覽
背くとて雲にはのらぬ物なれとよの憂事はよそになるてふ
なつの夜の星か川邊の螢かも我すむかたのあまのたく火か
賴まれすうきよの中を歎きつゝ□に老ぬる身をもるかこと（ひかけに生る身をいかにせんイ）
いとひては何か別のをしからんありしに增るけふは悲しも

いてゝいにし跡たに未た變らぬにたか通ひちと今はなる覽
今迄に忘れぬ人はよにもあらしおのかさま〳〵年のへぬれは
むさしのゝ若むらさきのすり衣忍ふの亂れかきりしられす
女をなけき侍りて
住わひぬ今は限りのやま里につま木こるへき宿もとめてん
身のうれへ侍りし時津の國すまの浦といふ所にすみ
はしめ侍ける日
難波女にけふ社みつの浦ことにこれやうきよをうみ渡る舟
田むらの御時ことにあたりて津の國すまのうらとい
ふ所にこもり侍りて都の人につかはしける
わくらはにとふ人あらはすまの浦に藻鹽垂つゝわふと答へよ
東のかたに友たち二三人はかりさそひてまかりける
にかきつはたのいとおもしろく侍りけるをみて木の
もとにおりゐてかきつはたといふ五文字を句のかみ
にすゑてたひの心をよめと侍けれは
唐衣きつゝ馴にしつましあれははる〳〵きぬる旅をしそ思ふ
むさしとしもつふさの中にあるすみた川のつらにお
りゐて思ひ侍るにいとはるかに遠くまかてきにけり
わたしもり日くれぬといそかし侍りけれは舟にのり
てわたらんとし侍るほとにみな人物悲しくおもふこ
となきにしもあらぬにしろき鳥のはしとあしとあか
きか河つらに侍るを何鳥とかいふととひ侍りけれは
都鳥となんわたしもりいひ侍ける
なにしおはゝいさ言とはん都鳥我思ふ人はありやなしやと
やまひしてかきりとおほえしに人につかはしける
遂にゆく道とはかねて聞しかと昨日けふとは思はさりしを

敏行朝臣集

正月一日二條の后宮にて白きおほうちきを給はりて
降雪のみのしろ衣うちきつゝ春きにけりとおとろかれぬる
寛平御時殿上人におほみきなと給はせて御あそひせ
させ給ひけるに
老ぬ迚なとて我みをせめきけんおいすはけふにあはまし物か
おなし御時中宮のたいはん所にかめいたして御みき
おろし給はらんと申たりけるを藏人ともわらひて御
前にとりいたしてともかうもいはてやみけれはその
藏人ともの中につかはしける
玉たれのこかめやいつらこゆるきの磯の波わけ沖に出に鳬
題しらす
いくはくの田を作れはか時鳥してのたをさを朝な〳〵よふ
おなし御時后宮の歌合に
明ぬとてかへる道にはこきたれて雨も泪も降にこそふれ
賀茂の臨時のまつりにうたふへき歌とめしゝに
千はやふるかもの社の姫小松よろつよまても色はかはらし
業平の朝臣の家に侍ける女の許につかはしける
つれ〳〵のなかめにまさる涙川袖のみ濡てあふよしもなし
いかなりけるをりにか
我ことく物や悲しきほとゝきすときそともなく夜たゝ鳴覧
后宮の歌合に
こひ侘てうちぬる中に行かよふ夢のたゝちはうつゝなら南
これさたのみこの家の歌合に
我きつる方もしられすくらふ山やまの木葉のちるとまかふに

寛平の御時菊の花をよませ給ふに
久方の雲のうへにてみるきくは天津ほしとそあやまたれける
おなし御時后宮の歌合に
何人かきてぬきかけし藤はかまくる秋毎に野へをにほはす
又
秋の野に宿りはすへし女郎花名をむつましみ旅ならなくに
秋立日
秋きぬとめにはさやかにみえねとも風の音にそ驚かれぬる
これさたのみこの家の歌合に
秋の夜のあくるもしらす鳴虫はわかこと物や悲しかるらん
おなし
秋はきの花咲にけり高砂の尾上の鹿は今やなくらん
女の許につかはしける
我戀の數をかそへは天の原雲ゐはるかに降雨のこと
近江の關寺にわつらひてこもりて侍るにまへよりか
う院のこ石山へまて侍りけるをみておひてつかはし
ける
あふ坂のゆふつけに鳴鳥のねはきゝとかめてそ行過にける
大空に雲の鴈かねきにけらしおのかとこにはなしの宿りに
秋たちていくかもあらぬにこのねぬる朝けの風は袂涼しも
いつこにも草の枕を鈴虫はこゝをたひとはおもはさらなん
寛平の御時櫻の宴ありける日雨の降侍りけれは
春雨の花の枝よりなかれこはぬれ社ぬれめなにかかくれん
これさたのみこの家の歌合によめる
しら露の色はひとつをいかにして秋の山へをちゝにそむ覽
うくひす
心から花の雫にそほちつゝうくひすとのみ鳥のなくらん

宗于朝臣集

からふしてあひたる人のさはる事ありてえあはぬに

東路のさよの中山なか〳〵に逢みて後そわひしかりける

中宮歌合の時

つれもなく成行人のことのはや秋よりさきの紅葉なるらん

わすれ草枯もやするとつれもなき人の心に霜はおかなん

ものおもふころひとりことに

いつはとは時はわかねと秋のよそ物思ふ比の限りなりける

我こひの數にしとらは白妙の濱の眞砂もつきぬへらなり

恨むれとこふれと君かよとゝもにしらす顏にて難面かる覽

返事

思ふともこふともいかゝ雲ゐよりはるけき人の空にしる覽

あはすして今宵あけなは春のひの長くや人をつらしと思はん

中宮の歌合

ときはなる松のみとりも春くれは今一しほの色まさりけり

雪ふりて年のくれぬる時に社つひにもみちぬ松もみえけれ

たひにまかるさうそく人につかはすとて

袖ぬれて別はすとも唐衣ゆくとないひそきたりとをみん

かへし

別ちは心もゆかすから衣きれは涙はさきにたちつゝ

旅にまかる人の扇にかける

そへてやる扇のかせの心あらは我思ふ人の手をなはなれそ

七月八日曉によめる

今はとて別るゝ時は天の川わたらぬさきに袖そぬれぬる

歌合に

山里は冬そさひしさまさりける人めも草もかれぬと思へは

けふ人をこふる心はあすか川なかるゝ水におとらさりけり

むすめのみちの國へまかるに宮より給はせたる

いかて猶笠取山にみをなして露けき旅にそはんとそおもふ

かへしむすめ

かさとりの山と賴みし君をおきて涙の雨にぬれつゝそ行

男の伊勢へまかりけるに

君か行かたにありてふ涙川水は（まつは袖こそイ）底にそなかるへらなる

秋の野に宿りはすへし女郎花名をむつましみ旅ならなくに〔古今集に敏行作〕

人を思ふ心は（のイ）我にあらねはやみのまとふたにしられさる覽

わかやとの庭の秋はき散にけり後みむ人やくやしと思はむ

梓弓いるさの山の（はイ）秋きりのあたることにや色まさるらん

しら露のおかまくをしき秋萩ををりては更におきやまさ覽

よそにしてこふれは苦しいれ紐のおなし心にいさ結ひてん

君といへはみまれみすまれふしのねの珍しけなくもゆる我戀

はらからなる人のうらめしき事ある時

君とわかいもせの山の秋くれは色變りぬる物にそありける

我妹子に逢坂山のしのすゝき（ゆけイ）ほにはいてすも戀わたるかな

年月は昔にもあらす成ぬれとこひしき事はかはらさりけり

ゆき積るおのか年をはしらすして春をはあすと聞そ嬉しき

朝またき露分きつる衣手のひるまはかりのこひしきやなそ

よの人のおよひかたきは富士のねの麓にたかき思なりけり

あけかたに外山の雲のいとはれて歸りし程は侘しかりきや

寛平御時歌合

くる春にあはむこと社かたからめ過行たひに遲れすもかな

貫之か許にひさしうおとせぬにせうそこいひつかはすとて

君ひとりとひこぬからに我やとの道も露けく成にけるかな

かへし

草の露おきしもあへす朝夕に心かよはぬ時しなけれは

ひさしくたいめせぬころ貫之かもとより

よそにても思ふ心は變らねとあひみぬ時はこひしかりけり

かへし

櫻ちりうの花もみな咲ぬれと心さしには春なつもなし

貫之かもとへ

よの中に誰かなたかにたらちねと我とかなとか人はしる覽

かへし

君はいさわれか思ひは白雲のかゝる山にもおとらさらまし

公忠朝臣集

延喜の御時に五位藏人にてさふらひけるを御譲位にあひてはなれにけれは朱雀院の御時延長八年十一月に又かへり來てあくるとしの正月に御あそひのついてに梅のはなを折て

百敷にかはらぬものは梅の花をりてかさせる匂ひなりけり

枇杷のおとゝ(仲平)の左大臣に成給へる御よろこひにおほき大殿(忠平)わたり給へる日御あるしありてあるしもまた人も歌よみ給ひけるに

色もかもことしの春は梅の花ふたへに匂ふこゝちこそすれ

紅梅

くれなゐと雪との中はとほ(ほとイ)けれと梅のうへには通ふへら也

朱雀院の帝わらはにおはしましける時膝の上におはしまして御手つから紅梅をかうふりにさゝせ給ひてかしらもたけさらむに歌よめと仰られけれは

もゝ敷の梅の花かささす時はあめの下社らしろやすけれ

南殿の御前のさくらのちるを

との守のとものみやつこ心あらは此春はかり朝きよめすな

延長八年三月廿三日藤壺の藤の賀に

色深くにほへる藤の花ゆゑに殘りすくなき春を社おもへ

おなし(延喜のイ)御時に四月一日鶯なかぬよしのうたよめと仰らるゝに

春はたゝきのふはかりを鶯のかきれることもなかぬけふ哉

北の宮のみくしけの御屏風に山をこゆる人のほとゝきす聞たる所に

行やらて山路くらしつ子規いま一聲のきかまほしさに

醍醐の御時に御前のすゝきのむすはれたるを御覽してあれはたかむすひたるかと仰られけれは

綻ひて招くけしきとみえしかはしとけなしとて我そ結ひし

秋の夜の月をみてあそふといふ心を

池水のもなかにいてゝ遊ふいをの數さへみゆる秋のよの月

朱雀院御時八月十五夜をみてあそふ心

秋のよの月とはよそに聞つれと時にあへるは今宵なりけり

春霞かすみていにしかりかねは今そなくなる秋霧のうへに

近江守にて館に有けるころ殿上の人々たなかみのあしろに來けるにさけなとすゝむとて

流れくる紅葉の色のあかけれは網代にひをのよるもみえ鳬

延喜十七年十月廿五日(五日イ)藤壺のないしのかみの御屛風の歌

神無月時雨にまさる菊の花秋はてにきとみえすもある哉

おなし御時菊の宴に霜のうちのきくをしむといふ心をよめる

いとはしき霜にも有哉菊の花移ふとやは色をみすへき

おく霜に色そめかへし匂ひつゝ花の盛はけふなからみむ

寛平の御時歌合に

梅かえに降つむ雪は一とせにふたゝひさける花かとそみる

八條の大將の(女のイ)ために賀しけるに

よろつ代も猶社あかね君かため思ふ心のかきりなけれは

后宮の御方の御屛風に

行かへる舟ちはいたく馴に鳬年をつみてそはこふことなる

みな人のいかてと思ふ萬代のためしに君をいのるけふ哉

女におくる

あふことをよゝにへたつる吳竹のふしの數なき戀にも有哉

思ひやる心はつねに通へともあふ坂の關こえすもある哉

承平五年十二月三日(五イ)から物の使に藏人左衞門尉藤原の親盛(衞集)かまかりけるに餞し侍とて

別るゝか侘しき物はいつしかとあひみん事を思ふなりけり

あかたへゆく女にさうそくやるとて

いとせめて戀しき旅のから衣ほとなくかへす人もあらなん

ゐなかへくたる人にしろき袋をあをき物してすりて火うちをそへてやるとて

打みては思ひいてよと我宿の忍ふ草してすれるなりけり

月よみのあめに昇りて闇もなく明らけき世をみるか樂しき

小野好古すみともか時の追討使にてくたりてあくる年少將のらうにて四位になるへかりけるかあつからさりけれはやすからぬよしさねへおくりてかへりける文のおくに書つけゝる

玉匣ふたとせあはぬ君かみをあけなからやはみんと思ひし

延喜御時に月あかゝりける夜藤壺なとめくりて御覽しける御供にたゝひとりさふらひけるに誰ともしらぬ女いてゐていみしうなくかあるをうへもいみしくあやしからせ給ひてかれよりてとへと仰られけれはよりて物いへといらへさりけれはよみける

思ふらん心のうちはしらねともなくをみる社哀れなりけれ

おなし御時五位の藏人なりけるを位さらせ給ひけれはひらきぬのさうそくに成てまかりたるをみて女房

ほともなくぬきかへてけるから衣

といひけるを聞て
あやなきものはよにこそ有けれ
近江守にてくたるに貫之か許より　おこせたりける歌
ふたつかへし
關の戸そおとろかれける君かため心とゝめぬ時のなけれは
水海にしほたるはかりをさなくてみやこに年の老にける哉
内の御屏風に
なかるれとよをへてつきぬ汀社ちとせの鶴の住家なりけれ
延喜御時殿上の人々おのか名をみなそへてよみける
に
から衣ぬきすてかたみ我やきんたゝめの前にかけて社みめ
延喜五年八月十五夜
古へもあらしとそ思ふ秋の夜の月のためしはこよひなりけり
おりのほりみるかひもなし白雲の山と頼みし君もなけれは
この歌延喜の御門かくれ給ひて殿上もせさりけるほと
に山に雲のかゝりたりけるをみやりてよめる。
九月晦日のほとに殿上の人々紅葉みむとて東山のか
たにありきて　掃部介
さしてゆくかたもしられす秋の野に
とあれは　千古
もみちをみつゝとまる身なれは
延喜四年中宮御屏風に海の上ゆく舟かける所に
春の日ののとけき浦をこく舟は水底さへそしつかなりける
秋のよの月
年毎にみる月なれとよをへつゝ今宵に増るをりなかりけり
七夕
稀にのみ逢とはすれと天の川流れてたえん物にしあらねは
小鷹狩
秋の野に色々さける花みれは歸らん程そいつとしられぬ
うつろはむ色をみよとて菊の花露の心もおけるなりけり
くれぬひを網代によする物ならは紅葉の色は赤くみてまし
まつ散て後に咲ぬる梅の花思ひまかふは雪にそ有ける
我宿の松と竹とのなかりせは千世といふ事は外にそあるらし
色をみてかつまとはせる梅の花かをふりかくす雪なかりけり
春にのみ年はあらなん荒小田をかへす〲も花をみるへく
ふる郷はふりやしぬらん子規夜ふかき聲のめつらしきかな

頼基朝臣集

天暦の御屛風に春日野に若なつむところ
いくはくの年つみくれと春日野に生る若なは老せさりけり
三　月
花たにも散残らなん過ぬともをしむにとまる春かともみむ
秋の夜召ありて春宮にまいりて鴈のなくを
なく鴈はくるかかへるか覺束な春の宮にて秋のよなれは
寛平御時の屛風の歌
白露のおくての稲もかりてけり秋はてかたに成やしぬらん
てる月の流るゝ水し清けれはうへした秋のもみちをそみる
水そこに影のみゝゆるもみち葉は秋のかたみに浪やをる覽
霧の立紅葉のにしき亂るれは行へもしらぬ野へに(ものにもあるイ)をるかな
北の宮の御もき給ひしに内侍のかんのとのにおくら
れたる御屛風にかさとりの山を人の行ほとに時雨の
すれは袖をかつきたる所
笠とりの山を頼みしかひもなく時雨に袖をぬらしてそゆく
宇多の院にて梅花をよみ侍ける
散まてはきつゝたにみむ春雨に我をぬらすな梅のはなかさ
おなし院のうちに四十賀奉り給ふ竹の杖の歌
一ふしにちよをこめたる杖なれはつくともつきし君か齡は
あるところの屛風に志賀の山越に瀧おちたる所
水上に結ふ人なみ白玉は山の尾よりそぬけて落ける
ある人の扇にかく歌
涼しさをえやは心にまかせたる扇にあふく風ならすして
朱雀院の御屛風に子日の松ひく所に鶯なく
子日する野へに小松をひきつれてかへる山へに鶯そなく
宇多院の御前に松のするに藤花さきかゝりたるを三
月晦日に
藤の花まつのみならすくれぬへき春の末にも咲かゝりけり
先代の皇后(安子)の九條の右大臣殿(師輔)の五十賀奉り
給ふ御屛風に竹ある家
なかきよを思ひしやれは呉竹の暮行冬もをしからなくに
ある所の屛風の繪に志賀の山越の所
なにはおへと馴るもみえす爪生坂春の霞のたてるなるへし
人の扇にかゝんといへるに
内も外もみえぬ扇のほとなきに涼しき風をいかてこめけむ
亭子院の御使にこしへ行人におひとらするにたゝな
るよりはとて
ゆふおひのとくはあれ共別れなはこしをめくらん程の久しさ
おなし院の御前にてまゆみのもみちにみのむしのか
かりたるを歌つかうまつれとあるに
もみち葉の枝にかゝれる蓑虫はしくれ降共ぬれしとや思ふ
女の許にはしめて文やるとて
はつ霧の空にたちたる心かなおもはれんともしらぬ我みを
大井川の行幸にさま〲の題ともをよませ給ひしに
水にうかふといふ題を
色々にうつる心も秋の水もみちなかすと人やみるらん
秋の山を
白露はわきておかしを秋山のなとか紅葉のうらこかるらん
紅葉散
もみち葉の流れうつまく淵を社くれ行秋のかたみとはみめ

猿丸大夫集

あひしりて侍ける人の許よりすけに ふみをつけてこれはいかゝみるといひて侍る返事に

しらすけのま野の萩原ゆくさくさ君社をしめまのゝはき原

あたなる人のさすかにたのめて つれなくのみ侍りければ

いて人はことのみそよき月草のうつし心はあひもおもはす

もの思ひ侍けるころ子規のいたう鳴侍ければ

ほとゝきす鳴らん里に行てしかしかなく聲をきけは苦しも

あひしりて侍る女の家の前をまかりわたるとて草をむすひていれ侍るとて

妹か門過ゆきかてに草結ふかせ吹とくなあはむ日までに

名立侍ける女の許に

しなかとりゐな山ゆすり行水のなのみなかれて戀わたる哉

しなかとりゐなのふし原あを山にならん時にを色はかは覽

春の夜の月をまつに山かくれにて心もとなう侍れは

くらはしの山をたかみかかき曇りいてける月の光ともしき

ある女のもとに心はへありて

人妻といふはたか事すころものこのもとけしと云はたか事

家に女郎花をうゑて

をみなへし秋萩手をれ玉ほこの道行人もとはんこかため

鹿のなくをきゝて

うたの野の秋萩しのき鳴鹿のつまこふらくは我におとらし

女のもとに

玉くしけあけまく惜きあたらよを妹にもあはて明しつる哉

おもひかけたる人のもとに

梓弓末のたつきはしらねとも心は君によりにけるかな

朝日影匂へる山にてる月のよそなる君を山こしにして

かたらふ人の遠くまかりたるか許に

ほととほみ戀侘にけります鏡かけたにけさは爰に見えこす

梓弓ひきつのへなるなのりその花咲までに妹にあはぬかも

あひみねはこひ社増れみなせ川なにゝふかめて思ひそめ劔

あひしりたりける人のさすかにわさともなくて年ころになり侍りにけるに

をとゝしもこそも今年もはふ葛のしたゆたひつゝあり渡る哉

玉襷かけねは苦しかけたれはつきてみまくのほしき君かも

夕月夜さすや岡への松のはのいつともわかぬ戀もする哉

ものへまかりける道の海のほとりにかせのいたう吹にあさりするものとものの見え侍れは

風を痛みよせくる浪にあさりする蜑乙女子か裳裾ぬれぬる

おやのせいする女に忍ひて物いふをきゝてとりこめていみしういふを聞侍りて

ちりひちの數にもあらぬ我ゆゑに思ひわふらん妹か悲しさ

おほ舟のわくる所のたゆたひに物思ひ侘ぬ人のこゆゑに

人言のしけき此頃玉ならは手にまきつけて戀すそあらまし

我妹子にこひてあらすは秋萩のさきて散ぬる花ならましを

足引の山下風はふかねともよな〳〵戀はかねてさむしも

物へまかる道に霧の立たるをみて

しなかとりゐな野を行は有馬山ゆふ霧たちぬ友なしにして

物へまかる道にひくらしの鳴侍れはふみ山にて

ひくらしの鳴つるなへに日は暮ぬと思へは山の影にそ有ける

ひさしら中絶たる女を思ひいてゝつかはしける
梓弓ゆつかあらため長ひさしひかすもひきも君かまに〳〵
あらしをのかるやのさきに立鹿もいと我ことく物は思はし
前ちかううめの花の咲て侍りけるを
宿近く梅の花うゑしあちきなくまつ人のかにあやまたれ鳬
山寺(里イ)にまかりたるに櫻の咲たるをみ侍りて
山たかみ人もすさめぬ櫻花いたくなわひそ我みはやさん
雨降侍る日八重山吹を人の許につかはすとて
春雨に匂へる色もあかなくにかさへなつかしやまふきの花
やま吹をみて
今もかも咲匂ふらんたちはなのこしまのさきの山ふきの花
あたなる女に物をの給ひそめてたのもしけなきこと
なと申ほとに子規のなき侍れは(此歌伊勢物語爲貴陽親王作)
時鳥なかなく里のあまたあれはなほうとまれぬ思ふ物から
さつきまつ山郭公打はふきいまもなかなんこそのふる聲
秋のはしめつかた物おもひ侍るころ
大かたの秋くるからに我身こそ悲しき物と思ひしりぬれ
秋萩の色つきぬれはきり〳〵す我身のことや物は悲しき
鹿のなくをきゝて
奥山に紅葉ふみ分なく鹿の聲きく時そ物はかなしき
秋はきぬ紅葉はやとに降しきぬ道ふみ分てとふ人もなし
女に
萩の花散らんをのゝ露霜にぬれてをゆかむさ夜はふくとも
しのひたる女に
ほに出ぬ山田をもるとかり衣いなはの露にぬれぬ日はなし
あひしれる人のなくなれる所にまかりて

小浪やその山守はたかために今もしめゆふ君もあらなくに
人のいみしうあたなることのみいひて心にいれぬけ
しき成けれは我も何かはとのけひきて有けれは女の
うらみて侍りけるに
まめなれと何そはよけく苅萱の亂れてあれとあしけくもなし
あひしりて侍る女の人をかたらひておもふさまにや
あらさりけむつねになけきたるけしき見え侍けれは
たかみそきゆふつけ鳥かから衣立田の山にをりはへてなく
文つかはす女のつれなかりけるか許に春のころほひ
あら小田をあらすき返しかへしてもみて社やまめ人の心を
をちこちのたつきもしらぬ山中におほつかなくも呼子鳥哉
花みにまかれるに山河の岩に花のせかれたるをみて
石はしる瀧なくもかな山櫻手折てもこむみぬ人のため
山に花見にまかりて
折とらはをしけにもあるか櫻花いさやとかりて散迄はみむ
こんよにもはやなりなゝむめの前につれなき人を昔と思はん

紀友則集

立春日

水の面にあや吹みたる春風や池の氷をけさはとくらん

早春

花のかを風のたよりにたくへてそ鶯さそふしるへにはやる

うめの花を折て人のかりやるとて

君ならてたれにかみせむ梅の花色をもかをもしる人そしる

櫻花の許にて年老たるをなけきて

色もかも昔なからにさくらめと年ふる人そあらたまりける

寛平御時后宮の歌合に

みよしのゝ山へにさける櫻花雪かとのみそあやまたれける

久かたの光のとけき春の日にしつ心なく花のちるらん

雪のふれるを見てよめる

雪ふれは木毎に花そ咲にけるいつれを梅とわきてをらまし

香羽山をこえけるに時鳥を聞てよめる

香羽山けさこえくれは子規梢はるかにいまそなくなる

右大將の四十賀の屛風の歌

珍しき聲ならなくに郭公こゝらの年をあかすも有哉

寛平御時中宮の歌合に

五月雨に物おもひをれは時鳥夜深く鳴ていつちゆくらん

夜やくらき道やまとへる時鳥我やとにしもおりはへてなく

夕されは螢よりけにもゆれとも光みねはや人のつれなき

けふよりは天の河浪あせなゝんそよみともなくたゝ渡り南

あまの川流れてこふる七夕の涙なるらし秋のしら露

天の川せゝの白浪たかけれとたゝわたりしぬまつに苦しみ

天川戀しき瀬にそわたりぬるたきつ涙に袖はぬれつゝ

寛平御時殿上人歌合せしにかはりて

銀川あさせ白浪たとりつゝわたりはてねはあけそしにける

聲たてゝ鳴そしぬへき秋霧に友まとはせる鹿にはあらねと

誰きけと聲高砂に棹鹿のなか／＼しよをひとりなくらん

うちはへてかけとそ頼む嶺の松色とる秋のかせにうつるな

夕されはさほの河原の河霧に友まとはせる千鳥なくなり

これさたのみこの歌合に

秋かせに初かりかねそ聞ゆなるたか玉章をかけてきつらん

やまとの國にくたりけるにさほ山に霧の立けるをみて

誰ためのにしきなれはか秋霧のさほの山へをたちかくす覽

繪に菊の花のもとに人のたちよりたるをみて

花みつゝ人まつをりは白妙の袖かとのみそあやまたれける

露なから折てかささん菊の花老せぬ秋のひさしかるへく

たつた山をこえてよめる

かくはかりもみつる色のこけれはや錦たつたの山といふ覽

みることに秋にも有かなたつた姫紅葉そむとや山もきる覽

初時雨ふれは山へそおもほゆれ何れのかたかまつもみつ覽

から衣たつたの山のもみち葉は物思ふ人のなみたなりけり

おほ澤の池の堤に菊の花さけるをみて

一もとゝおもひしきくをおほ澤の池の底にはたれか植けん

春霞たな引山の櫻花みれともあかぬ君にもある哉

我戀をしのひかねては足引の山たちはなの色に出ぬへし

よひのまもはかなくみゆる夏虫にまとひ増れる戀もする哉

寛平御時中宮歌合に

蟬の聲きけはかなしな夏衣うすくや人のならんとおもへは

紅の色にはいてしかくれぬのしたに忍ひて戀はしぬとも

われよりもたかき人をおもひかけて

玉かつく蛋（も苅イ）ならねともわたつ海の底ひもしらす思ひつる哉
返事のなけれはまた
みるもなくめもなき海の嶋に出てかへす〳〵も恨みつる哉
我心いつにならひてみぬ人の思ひやりつゝ戀しかるらん
我宿の菊のかきねにおく霜のきえかへりてそ戀しかりける
思ひてもはかなき物は吹風のおとにもきかぬ戀にそ有ける
秋風はみを分てしもふかなくに人の心のそらになるらん
きゝの葉におく霜よりも獨ぬる我衣手そさえまさりける
河のせになひく玉ものみかくれて人にしられぬ戀もする哉
よひ〳〵におきてわかぬる唐衣かけて思はぬ時のまそなき
東路のさやの中山なか〳〵になにしに人をおもひそめけむ
しき妙の枕のしたは海なれと人をみるめは生すそありける
年をへてきえぬ思ひはありなから冬の袂は猶氷けり
ことにいてゝいはぬ計そ水無瀬川したに通ひて戀しき物を
命やは何そは露のあたものをあふにしかへは惜からなくに
たち歸り思ひいつれはそのかみのふりにし事を忘れさり鳬
下にのみ思へはくるし玉の緒の絶てみたれん人なとかめそ
水の沫の消てうきみとしりなから流れても猶たのまるゝ哉
うきなからきえせぬ沫と成なゝん流れてとたに頼れぬみは
雲もなくなきたる朝の我なれや厭はれてのみよをはへぬ覧
本院のおとゝのまへにして四十よに成まて無官にて侍るよし申侍るにおとゝ
今迄になとかは花のさかすしてよそとせまてに年きりのする
とある御返事に
はる〳〵の數はまとはす有なから花さかぬ木をなにゝ植けむ
人のもとより殿ゐものおこせたるをかへすとて
蟬のはのよるの衣はうすけれとうつりかこくも成にける哉
つくしにありし時こうちなとしける人の許に京にのほりてやりける
故里はみしこともあらすをのゝえの朽し所そ戀しかりける
ものへ行道にあひて物なといひける人に別るとて
下の帶の道はかた〳〵別る共行めくりてもあはんとそ思ふ
藤原のたゝゆきかみのしつむよしなけきけるとむらひにやりたる返事に菊の花をゝりて
枝もはも移ろふ秋の菊みれははてはかけなくなりぬへら也
とあるかへしに
雫もて齡のふてふ花なれは千世の秋にそかけはみつらん
おやのよみたる歌を書集ておくにかきたりける
ことならは言のはさへもきえなゝんみれは涙の瀧まさり鳬
藤のとしゆきらせて後かの家に送りける
ねてもみゆねてもみえ鳬大かたは空蟬のよそ夢には有ける
とりもあへぬとしは水にや流るてふ花の心のあさく成行
をみなへし
白露を玉にぬくとやさゝかにの花にもはにもいと女郎花
朝露を分そほちつゝ花みんと今そ山へをみなへしりぬる
をかたまの木
み吉のゝ吉野の山に浮ひいつるあはをか玉のきゆとみゆ覧
きちかう
あきちかう野は成にけり白露のおける草はの色かはりゆく
りうたん
我宿の花踏ちらす鳥うたん野はなけれはやこゝにしもくる
年をへて君にのみ社ねすみつれこと腹にやはこを話すへき
君といへはみまれみすまれふしのねの珍らしけなく燃る我戀
我を君思ひつくはの山のはにいもといりなはかへらさら南
朝霧はけさはなたちそさほ山のはゝその紅葉よそにてもみん
池水や氷とつらむ芦鴨の夜深く聲のさはくたる哉

坂上是則集

春亭子院の歌合に

淺緑そめてみたれる靑柳の糸をは春のかせやとくらん〔よるイ〕

山里の花をみて

折とらはをしけにも有か櫻花いさ宿かりてちるまてはみむ

前栽の中にさくらの咲たるをみて

櫻花けふよくみてん吳竹のひとよの程にちりもこそすれ〔夜のまイ〕

花ををしむ所にて

かつみつゝ千年の春をすくす共いつかは花の色にあくへき

亭子院の歌合に

花の色を移しとゝめよ鏡山春より後のかけやみゆると

同歌合に

三千とせになるてふ桃のことしより花咲春にあひにける哉

松のもとにこれから侍りて

深緑ときはの松の陰にゐて移ろふ色をよそにこそみれ〔花イ〕

鶯亭子院の歌合に

きつゝのみ鳴鶯の故里は散にし梅の花にそありける

夏時鳥

山かつと人はいへとも時鳥まつ初聲はわれのみそきく

秋

はつ時雨ふるほともなくさほ山の梢あまたに色つきにけり

大かたにおく白露も今よりは心してこそみるへかりけれ

大井に行幸に秋の山

秋の色は千種なからにかはれるをたれか小倉の山といふ覽〔さやけきイ〕

紅葉水にうかふ同行幸に

いつかたかとまりなる覽山風の拂ふ紅葉にふなちまとひぬ

もみち

みね高く行てみるへき紅葉はを我ゐなからもかさしつる哉〔みイ〕

秋の歌とてよめる

さほ山のはゝその色は淺けれと秋は深くも成にけるかな〔うすイ〕

紅葉散大井の行幸に

紅葉はのおちてなかるゝ大井川せゝのしら浪かけもとめ南

もみちはの流れさりせは立田川水の秋をはたれかしらまし

大井の行幸に菊の花のこれり

かけさへにいまはと菊の移れるは浪の底にも霜やおくらん〔ろふイ〕

鴈　大井川の行幸に

いくさとのある道なれや秋ことに雲井の旅のかりのゆく覽

かりてほす山田の稻のこきたれて鳴こそ渡れ秋のうけれは〔よな〳〵イ〕

冬やまとの國にまかりける時雪のふりけるに

朝ぼらけ有明の月とみるまてによしのゝ里にふれる白雪〔山イ〕

奈良の京にまかりてやとれる所にてよめる

みよしのゝ山のしら雪積るらし故里さむくなりまさるなり

氷

冬の池のうへは氷のとちたるをいかてか月の底にいるらん〔にイ〕

祝

君か代は天の羽衣まれにきてなつともつきぬいはほなら南

戀

わたの原かつきてしらん人しれす思ふ心のふかさくらへに

我戀をくらふの山の櫻花まなく散とも數はまさらし

を鹿ふす夏のゝ草の道みえすしけき戀にもまとふころ哉
秋山に朝たつ霧のみねこめてはれすそ〔もイ〕物をおもふへらなる
霜かれの淺ちかもとの荊萓のみたれて物をおもふころ哉
枕のみうくと思ひし涙川今は我身の〔てふイ〕しつむなりけり
かつきえぬ泪か磯のあはひゆゑ海より海はかつきつくしつ
片糸をこなたかなたによりかけてあはすは何を玉の緒にせん
谷〔川のイ〕深み岩まをたきつ山河のおとにのみやはきゝわたるへき
戀しさの限りたにあるよなりせは年へて物は思はさらまし
あふ事をなからの橋のなからへて戀渡るまに年そへにける
あひみては慰むやとそ思ひしをなこりまて社戀しかりけれ

逢ての後あひかたき女に

霧ふかき秋のゝなかの忘れ水たえまかちなるころにも有哉
秋のよをまとろまてのみあかすみは夢ちとのみも頼まさり鳧

風別に

忘るなよ別ちに生るくすのはの秋風ふかはいまかへりこん

雜大井の行幸に

此川の入江の松は老にけりふるき御幸のことやとはまし

鶴洲に立り同行幸に

山ちかみおりゐるくもとまな鶴の立る河へを人やみるらん

かもめ人になれたり同行幸に

行舟になるゝ鷗はさす棹のかへす浪にそあやまたれける

猿かひになく同行幸に

秋山のかひにみかへりなく猿を夜ふかく聞て袖そぬれぬる

〔異本〕秋の野に露おほく置たる所

秋の野に置白露のきえさらは玉にぬきてもかけて見てまし

藤原清正集

ある所にてみちの國のかみの餞せられける日

かりそめの別れと思へとたけくまの松に程へん事そ侘しき

まらうとゝも家にきて月いてなは歸りなんといひけれは

月影をまつほと計たちとまる君かためにはいてかてにせよ

正月山寺にこもりたりけるに京よりいかに鶯の聲きゝたるやさいへりける返事に

鶯の鳴ねたにせぬ我宿はかすみそ立て春そつけつる

天暦の御時の御屏風に

春霞けふそたちける春日野に若菜つまんといそくへらなる

紀伊國にて子日しけるに

はかなくやけふの子日を過さまし名草の濱の松なかりせは
子日しにしめつる野への姫小松ひかてやちよの影をまたまし

ある屏風の歌

石上ふりにし里をきてみれは昔かさしゝはなさきにけり

おなし屏風に二月歸鴈

里とほみ雲ち過行かりかねもおなし旅とてかへる聲する

三月に人々ちる花みる所

ちりぬへき花みる時はすかのねの永き春日もみしかゝり鳧

同頃藤壺の藤の賀の宴せられけるに

こむらさき昔の色もあせすしてたちかへりつゝ匂ふ藤なみ
かけみえて春はゆかなむ水底ににほふ藤浪折もさむへく

やまふき

春かせは八重たつ浪の色にさへ色こきよする井手の山ふき
　家に櫻木植たりけるに花のさかさりけれは
いつしかさ植てみたれはわか櫻さかすて春のすきぬへき哉
　おなしころ御屏風に
うの花のさかりに聞は子規夜ふかゝるねにあく人そなき
　人の家に前なる小柴垣にいとしろう卯の花咲かゝり
　たる月夜に
いつれをかわきてをらまし卯花のさける垣ねにてらす月影
　ほとゝきすの聲聞比女御の御かた成ける人よみける
　に
時鳥かねてし契る物ならはなかぬよさへはまたれさらまし
　うちの人兵衛
里めくりなさかきなかぬ時鳥人の心をそらになしつゝ
　女房のしりたるに物いひけるほとにおやめきたりけ
　る人の聞つけてゐて入にける朝に
あらかりし浪の心はつらけれとすこしによせし聲そ戀しき
　月まちて歸らんといひけるほとにほとゝきすのこゑ
　しは／＼きこゆ
夏のよの月まつほとは時鳥我やとはかりすきかてになけ
　むかししりたりける女の許へゆく道にいみしうあれ
　たる所にたかをはなちてありけれは女
夏草のしけりのみます我宿をわけては人の狩にこそみめ
　かへし
はし鷹のすゝろあるきにあらは社かり共（にイ）人の思ひなされめ
　右大臣の賀に頭の中將のし給ひける屏風に
夏のよも涼しかりけり山河は浪の底にやあきはやとれる

　五月くらまといふ所に女ともまらてあひたるにほと
　ときすの聲す
さつきやみくらまの山の時鳥おほつかなしやよはの一こゑ
くらま山くらくこゆれは時鳥かたらふ聲をそれとしらすや
　國へ下りける人々まうて來て別をしみけるに時鳥ま
　つ心を
小夜更て今もなかなん時鳥別をゝしむ聲ときこえて
　七月七日七夕の心
一とせに一夜のみあふ七夕をたちなかくしそ天の川きり
　おなし心の屏風に
天の川霧たちわたり渡りてはたか衣手かひちまさるらん
　雨うちふるゆふつかたまらうとゝもきてさけのみな
　としけるをりに月の雲かくるゝに人々かへる
あま雲の立のみさはく秋の夜は月影さへそしつ心なき
　天暦の御時かたわかちて前栽合せさせ給ひけるに中
　宮の御方に花の枝にてふのかた作てつけさせ給ひけ
　るに
九重に露をおけはや花の色の外の秋には匂ひまされる
百敷に花の色々匂ひつゝ千とせの秋は君かまに／＼
　内の御屏風に
秋のたのひたすらに社思ひつれかりにと人にみえにける哉
　九月はかりに人々あまたきあつまりなとして志賀の
　山越しけるに紅葉の色うみに移りたり
もみちはのくれなゐ深き色みれは水底まてや霜はおくらん
　十三みこ
よも山の紅葉はおほくみつれとも水底の霜ふかき色かな

又人

上は霜下は水海の浪かすにをりかへしつゝそむるにしきか

しくるれは色まさりけり奥山の紅葉の錦ぬれはぬれなん

同比山へまうてにける道にかせ打吹てもみち散

紅葉はの絶す山ちにちりかふは錦をたちてゆけはなるへし

九月九日

のふときく節にそへて露けきは年とともにそこひ増りける

うちの紅葉あはせ九月ふたつあるとし

紅のやしほの色はもみちはの秋くはゝれる年にそ有ける

もみちをしみに山里にゆきて

風吹はぬさとちりかふ紅葉こそ過行秋の手向なりけれ

ある所のかんしん(庚申)〔きうへにイ〕に雁秋風

とこよ出しかりのは衣さむけきに心してふけ秋のよのかせ

松と竹と植たる所に女房みる絵に

ときはなる松と竹とをやとに植て秋はくれ共物思ひもなし

閏九月にうちにて別をしむころ

秋の日の日数まされる年なれとけふの別はをしくそ有ける

絵に

むらなからみゆる紅葉は神無月また山風のたゝぬなりけり

殿上人残りの菊ををしみけるに

菊の花いかにとゝへは九重にうつろふ色のかきりなりけり

絵にかくらの所

榊葉のかをとめくれは千早振神のいかきにさしてきにけり

しはすはかりにまへのうめに雪ふりかゝりたるをみせしに

梅か枝にわきてふらなん白雪は春よりさきの花とみるへく

うちに十月十四日につほの前栽の菊のえに

九重に移ろふからに菊の花いつれの色にこゝろそむらん

物へまかりける秋

たひにして物思ふほとに秋の夜の有明の月もいてにける哉

うちに宇佐の使のせん(宣)せられけるに

限りあれはゆきてはきぬる道なれと孰れの旅か情まさる〔きイ〕

田舎へゆく人に物なとやるとてこうちきの袂に

君かためいのりてたてるから衣わかれの袖や手向なるらん

又こと人に

あつまちのかりの旅とは思へともいまこむ空を眺むへき哉

から衣馴にし人のわかれには袖こそぬるれかたみともみよ

かへし

かたみには慰むやとてから衣きるにしも社ぬれまさりけれ

こと人のくらのうはしきに

あしたつのちとせの水に影みえてとくたちかへる岸の白波

しのひたる女房田舎へくたれは

ありなからあひみぬ程もたへぬみに別の程を何にたとへん

五月はかりにことかたらはんと一聲もせすといへる女に

人しれぬねやはたえせぬ時鳥たゝあけぬよの心地のみ〔こそすれイ〕して

ふく(服)なりけるところとはすと恨て山吹をおこせたる人に

いふかひもなき世中におひしよりくちなしに咲花さへそうき

人に

須磨の浦に蜑のこりつむも汐きのからくもしたに戀渡る哉

五月ころ人に

なきそめし宵をこふとて時鳥夜深き聲をたれにきかせん
　かへし
郭公とはぬをりたに忘られすことかたらひしよはの一こゑ
　ふくなるころ久しういはて女に
すみ染の衣手そほつ物おもひにおほつかなくは成にける哉
　廣はたの御息所の御さうしにあこみといふわらはに
　文つかはすとてすまといふものもりつかはして
すまの蜑をしるへと思へはわたつ海の底のみるめは疑もなし
　父人にいかゝ有けむ
命をはあたなる物と聞しかとうきみのためは長くそ有ける
　父人かへしにこそあめれ
あひみてもあはても終に別れぬるしはし計のよをな恨みそ
　いとしのひにかたらひける女のおやこと人にあはす
　へしといそきけるをきゝて
我ならぬ人にとくなと結ひおきし君か下ひもゆるすなる哉
　かへし
むすふともとくともしらて下紐のよに亂れつゝ物を社思へ
　人をいひけるにいないとあたなりとおやせいしける
　をきゝて
つれもなき人にまけしとせし程に我もあたなは立そしにける
　人のむすめ今もも(袈)きんほとをねんし給へといひけ
　るもなときてける後さへつれなかりけれは
あまならて底の玉もゝかつくなり今はみるめの方を尋ねよ
　かへし
蜑なれの蜑にあらねはいさや又みるめかる覽方もしられす
　四月まつりの日
千早振神の心はたかふ(しらねイ)とも猶ねきことはたのまるゝかな
　齋院の女從の其院の院司を男にてあるときくに
千早振神もしりにきゆふたすきしめのほとかく離れさら南
　秋たつ日
獨ぬる床は草葉にあらねとも秋くるよひは露けかりけり
　濱のまさこの數しらんとたのめたる女のもとに
忘れしのなかきためしに賴めこし濱の眞砂やかそへきぬ覽
淺茅生の床のよとのゝあれしより我もなつなの何とかはみん
　人の許にいきて夏ころしのひたりけるときゝ人しつ
　まるほとにいたう更てやう／＼夜中はかりにいて逢
　たり
みしかよの殘りすくなく更行はかねて物うき曉のみち
　年かへりて物いはんとたのめし女にしはすに
花さかぬ梅の立枝もわかことや年のこなたに春をまつらん
葛城やくめのつき橋つき／＼も渡しもはてしかつらきの神
　かへし
葛城やくめのつき橋ならなくに渡しはや(はてイ)ましくめのかけちに
　近江へ下りけるころ心見のわたり過けるによいとふ
　かし
あけぬとや心みまてはきにけれとまた深きよのわたり成鳧
　又山の井といふ所に道に人あへり
みな人のむすひて過る山の井に我うちとけて影をみえぬる
　繪に
行人もかへるもみゆる淀川は浪の心もいとなかるらん
　ある女に
住よしの岸折かへしかへしても立よらまくのほしき君かな

かへし
打しきりたちよりくとも岸とほみよそにそ歸るおきつ白浪
いかてとおもひける人にはつかにあひたりけれとい
らへなともことにせさりけるに月も朧なり
おほつかな曇れる空の月なれは心やましきよはにもある哉
う月のみあれの又の日ついて有てなるへし
千早振神に祈りしあふことは草はにつけてけふそみゆめる
かへし
昔人のなへてかさせは葵草いつれをそれのしるしとかみん
ある所にて琴なとひきてあそふに夜ふけて月もいり
ぬうちの人とも入ぬる音するに琴をしらへていたし
たるに
山のはに入といりにし月なれは調へていたす琴もかひなし
あふ坂の關路に年はへぬれともけふの清水やなをは流さん
紀守になりてまた殿上もせさりしに
天津風ふけ井の浦にすむたつのなとか雲井に歸らさるへき
天暦の御時中宮の歌合のかちわさにふしの山をちん
(洲)して作ていたゝきより立るけふりのしたにうちの
御かたに
よに人のおよひ難きはふしの山ふもとに高き思ひなりけり
月夜にしろきゝぬとものかきりきたる女ともあまた
ゐたりけるにひとりか許につとめて
たれとなく朧にみえし月影に分る心をおもひしらなん

藤原元眞集

朱雀院御屏風繪に正月一日
あら玉の年を送りてふる雪に春ともみえてけふの暮ぬる
中の春池の邊に山吹櫻さけり女すたれをあけて立り
我やとの八重山吹はちりぬめり〔へレイ〕花のさかりを人のみにこぬ
櫻花のもとに人々あそふ
春風もことしはかりは櫻花人のこゝろにまかせたらなん
田うつ所
淺みとり野へのあらたを打返しせなかに秋をまちやわた覽〔くらさんイ〕
暮の春池のほとりに藤の花さける所に人あそふ
岸ちかき松にかゝれる藤の花波さへをりてかへるめるかな
同花さけるわたり
藤の花咲るわたりをこく舟のよそにて波はおもひかけなん
水のあやのおりゐる毎に藤咲る池のあしたつたゝぬ成へし
はしめの夏ほとゝきす
まつ人はあまたあれとも立とまり山ほとゝきす二聲もなけ
中の夏五月五日
駒なへてすさめぬ澤の菖蒲草けふにあはすは猶やからまし
七月七日
一とせを一夜にこめて七夕の逢はこよひの月日ならぬか
はつかりを聞て
初鴈をおくるなりけり秋風の雲ゐはるかになきてすくるは
中秋十五夜
白露のおける草はにうかはすは今夜の月をひると社みめ
田かるところ

秋の野をたちいてゝみれは足引の山の錦におとらさりけり

始の冬網代の上におきなをり

我宿にあるへき物を此たひの網代によりてひをもふる哉

雪みるところ

大空に春ともみえて散雪の雲の上にてたつねてしかな

十二月晦日

いたつらに過る月日はおほけれとけふしも積る年を社思へ

同十二月春宮女御藤壺の御局にてちゝの御五十賀うちにせさせ給ひしに其御屛風障子宣旨にて奉る始の

春男女かた岡の水のほとりにてあそふ

子日する山下水のかけしあれは千年の松はひかてみえけり

うめの花ある所に人あそふ

山風にまかするよりは梅花にほひの宿につきすも有な〔かなイ〕ん

松に藤かゝりたる所

春ふかみ咲て匂へる藤の花松そ千年のやとりなりける

人の家のはな橘にほとゝきすなく

よになれぬたゝ一聲も時鳥はなたちはなにかくれてそなく

瀧あるところ

山たかみ落くる瀧のしら糸は空にみたるゝ玉かとそみる

池の邊に鶴たてり

あしたつのちよの影すむ池水は浪さへたゝてのとけかり鬼

おなし題

水底にしつめる千世のかけをみて池の苫たつのとけかり鬼

かしらしろき翁のある所に雪ふる

年ふかき色としみれは白雪のふるにもおのか上をこそ思へ

人の家に竹のあるところ

窓近きときはのかけはくれ竹のよをへてふかき綠なりけり

うちの御障子の繪に女宮のつけ〔けそうせイ〕させたまふ

ける女いなりにまうてたる所

ちはやふる神の社にいのりかくる道の程さへおもなれに鬼

よし野川にくれくたす所

吉野川おろすいかたのをりことに思ひ〔よらイ〕もやます波の心を

廣澤の池のほとりに女とものねぬなはくる

廣澤のいけのねぬなはくりよする「　　」

さかみのあしからの關にたひ人ゆく

あしからの關にしけれる玉こすけ行かふ駒もすさめさり鬼

いてはのやそしまに舟にのりて人あそふ

やそしまの浦の渚に數へつゝとまれる年もあまたへぬへし

みちのくにのあさかの沼のほとりに京よりくたれる

人たちとまれり

おとにきくあさかの沼の朝ほらけたえぬ煙はなのみなり鬼

屛風繪に柳おほかる人の家にかすかにてあり

青柳の糸によりても年をふるうきよそむける跡もたち〔えイ〕ける

旅人道ゆくに櫻花ちる

いつしかと行故里の櫻花われたにみての後にちらなん

おなし題

行てたにいかてとくみむ我やとの櫻はけふのかせに殘らし

時　鳥

時鳥この一聲あかさりし人のきかくにまつそ〔もイ〕なかなん

櫻の咲たるやとに女見いたしたり

わかやとに咲にし日より櫻花かくこそはみめあかすも有哉

また
我やとの櫻はかせに散はてぬあすこん人やくやしと思はむ
山里に梅さける家に男まらうと馬よりおりてたてり
しる人もなき山里の梅の花匂ふ日よりそきてもたつぬる
卯月のついたちにいまたよそなる女に
けふよりはさてもすきてん夏衣みるよりうすき心とやみん
かへし
かけてたにいふ祉うけれ夏衣あるよりまさる薄さと思へは
をとこ
あはてふる程にぬれたる唐衣けふはみまくもほしくそ有ける
かへし
大空に降てぬるらん濡衣をほしもわひぬるころのなかめか
をとこ
うれたかみ鳴音空なる時鳥おとにたえてや夏を過さん
五月五日おなし人
菖蒲艸あやなくもみて逢事をいつかとまちしけふは暮しつ
かへし
まちきけるけふ過ぬれは菖蒲艸今は五月もあらしとそ思ふ
さての朝にをとこ
いたにねてありにし物をあふ事の夢かとのみも思ほゆる哉
えあはてかへりて男
ねさめにて夜は明ぬとも杜鵑ことかたらはん一聲もせす
かへし
あやしさにねさめて[のイ]聞は子規など[なイ]古郷に聲も聞えぬ
小野の宮に御ものいみにさき／＼かたらひしこたち
に女郎花につけて
うつろはんほとたにもみん女郎花心のとかに露はおかなむ
同年前栽合に神無月を題にて
神無月しくるゝ空のもみち葉は秋をたむくるぬさと散けり
過し秋をゝしむ
霧たちて別れし日より時雨つゝ過にし秋そ悲し[こひしイ]かりける
もみちををしむ
秋霧のたゝぬさき[にもイ]よりさほ山の紅葉のにしき殘らさりけり
神無月といふ心を
散はてゝ木のはも空に殘らぬを神無月とはいふにそ有ける
又
鴈金は霜とともにやおきてくるしくるゝ空になく聲のする
菊の花ををしむ
年ふかき色としり[サイ]ては初霜の殘しおきけんしら菊の花
二條の式部卿の御おとゝの六十賀北方のし給ふ御屛
風歌松原のあひ[たイ]にみな渚にいてゝ人あり
日をふれと松の濱へにある舟は[のイ]千年をみんと出ぬなるへし
田舍の家の前に川あるにそれに河龜なかる[るイ]
河龜も今よろつ代は[もイ]もろともに波の底にてすみてわたらん
大將殿の女御のなてしこ合に
山かつの垣ねをせはみ生そめし色とはみゆやなてしこの花
天德三年九月十八日庚申に中宮の女房歌合せむとい
ふによめる庚申
難波潟こけと小舟はあしわかのえさる程こそ久しかりけれ
花すゝき

月影にほのかにみゆる花すゝき風のたよりにむすひつる哉

萩

高砂の尾上の萩を折つれは鹿のたちとやうとくなるらん

女郎花

をみなへし野への故里思ひいてゝやと〔りしイ〕れる虫の聲や戀しき

きり〳〵す

露結ふ秋はてかたのきり〳〵す草のねことに寒くこそなけ

日くらし

秋かせの萩の下葉に吹みたれ空にみちぬるひくらしの聲

松むし

まつ虫の絶すなくなる女郎花千年の秋はたのもしき哉

同八月廿三日女御の前栽合の虫歌

人しれす秋のくれぬる女郎花むしのねよりも尋つる哉

花すゝき

秋くれてまねく袂を花すゝき今は露さへむすふへきかな

荻

荻の葉に風のすゝしき秋き〔まイ〕てはくれにあやしき物を社思へ

蘭

むさしのゝ草のゆかりに藤袴わかむらさきに染てにほへる

なてしこ

露結ふ風は吹ともとこなつの花の盛りにみゆる秋かな

菊の花

所よりうふるもしるく菊の花うつろふ色をけさはまたなん

紅葉

立田山ふかき紅葉も君〔こイ〕みすはよるの錦となをそくれまし

同年二月三日内裏の御歌合かた〳〵のをよめる霞

吉野山霞たちぬるけふよりやあしたの原〔のイ〕に若なつむらん

右れう同霞

春かすみ立やこめつる小倉山ほとりのかひに雪も見えぬは

左れう

けさよりはかすむ山ちに立昇る三輪の故里ほのかにも〔そイ〕みる

おなし

冬なからけふ計にや春霞たなひく空のことにみゆらん

人れう

春きぬとまちつけかほに鶯の木高き枝にふりいてつゝ鳴

又右れう

春は猶をしみつゝ鳴鶯の聲に雲ゐも匂ふへらなり

左

淺緑みたれてなひく青柳の色にそ春のかせはみえける

又　右〔左イ〕

青柳の糸にはふしそなからまし風のくるにも亂れさるへく

また櫻

さきさかすつけよ吉田の山櫻霞はれなはよそにてもみん

左

よと共にちらすもあらなん櫻花あかぬ心はいつかたゆへき

右歎冬

散迄もたのもしきかな山吹の八重をつくさん程もあるやと

同方に

花さかり八重山吹を折たれは井手の蛙のねにやなくらん

左　藤

もろともにちよは咲なん藤の花松にかゝらぬ春しなけれは

右
ときはなる松にかゝれる藤波は花たにちるな春のなこりに
左くれの春
あすたにもくるへき春にあらは社心のとかにけふを惜まめ
左卯花
咲にけり我山里の卯花はかきねにきえぬ雪とみるまて
右
白妙にさける卯花やみならは月とやみまし賤か垣ねを
人れうに時鳥
初聲のよはに聞ゆる時鳥わかこと人もまちやしぬらん
左
夏のよのみしかきよりも時鳥また二聲となかすゆくらん
同方れう
夏山のしけきにあともみえぬ哉野中ふる道いつれともなく
右
夏艸はしけりにけりな玉ほこの道行人もむすふはかりに
同方のれう戀
戀しさの忘られぬへき物ならは何かはいける身とも恨みん
左
君戀てあふとみる夜の曉は夢にうれしきかひなかりけり
同れう
我むねの絶すもゆるをしのふ哉人にいふへき中にあらねは
右
君こふとかくは消つゝふる程を斯てもいける身とやみる覽
打とけていをたにねゝは逢事の夢ちをさへそ隔てはてつる
玉の緒の絶てみたるゝ我戀にいとゝ涙そおちそはりける

戀わひて絶す泪のもろけれはつひにみくつと猶やなかさん
夏山のしけき思ひをふりそへてしけらす程に道まよひけり
夢にたにあふとみるまの曉はおつる涙のかつそはりけり
春つくしにて歌よみあまたしてよむにあまつゝみと
いふ所を十二にて
須磨の蜑のつゝみて底をかつかねは深き玉もゝみえぬ也覽
つく〳〵しを十三にて
霞かゝる浦にこきつく〳〵し舟いつれかけふの泊りなる覽
唐くた物のおなし題を
こゆるきの渚に風の吹しからくたも殘さす波もよせけり
五葉
あと絶て行もかへるも年をへて人のこえふる相坂のせき
すゝむし
飛鳥川岸やくつれて打にこすすむ白波のせゝにみえぬは
りうたう
思ひきや秋の下葉の露はかりうたうまたきに移ろはんとは
大みつ
肯分の小舟にのりてさはりおほみ妻にあひみぬ戀もする哉
十一にて梅花に雪のかゝれるをみて
匂ひをそつくへかりける梅かえに花まかはしてふれる白雪
若菜
君か爲若なつみつゝちよをへん珍らしけなく野へはみる共
又
吉野山ふもとの雪はきへにけり衣かたしきわかなつむめり
梅花
春霞立かた岡の梅花にほはさりせは誰かしらまし

紅梅

白妙に匂ふもあかぬ梅花くれなゐふかきいろさへそみる

ある所にて雨のうちの紅梅をゝしみて文作り歌よむ
に

くれなゐの梅の花かさ雨もよにけふをゝします花そ散まし

同年はしめの所の紅梅を殿上人所の衆なとしておし
む

梅花くれなゐ深き春のよの色をもかをもてらす月かけ

春藏人所にかれこれ右近の馬はにて櫻をゝしむ

櫻花ちらさて千世もみてし哉あかぬ心はさてもあるやと

人のさうし(障子)の繪に山里に櫻の花のさけるに道行
人のいひいるゝ

あらしのみ吹山里の櫻花いとゝのとけき人はあらしな

梅の宮にて櫻の花をゝしむ

風にのみおほせつれとも櫻花けふは心とちりはてぬめり

ある女の許にて櫻をゝしむ

一とせに一とせなからちらすともいつか櫻の花にあくへき

又おなし

春風の吹たひことに櫻花心のとかにみつるほとなき

人に別るゝ所に櫻はなちる

をしめともとまらぬ君を櫻花別るゝ道のみえぬまてちれ

四月一日人のもとに時鳥待

我にまつ鳴てきかせよ時鳥またよになれぬころの一こゑ

同

人しれすまつもなかなん時鳥みのうき事もかたらはまほし

八月十五日夜藏人所にて月の心をあはれかりて立出
て行に麗景殿の御曹子のこたち花すゝきを折てたて
しとみよりさしいたしたり

白露のおくより招く花すゝきむすはぬさきにまつそ亂るゝ

かへし

なへて人むすはぬさきの花すゝき風にのみ社亂るへらなれ

又をとこ

定めなく招く尾花の花すゝきほにいつる秋ははかるゝ哉

秋の野にいてゝあそふ

なへて咲花のなかにも女郎花おほかる野へはすきうかり鬼

おなし野にて人にいひかく

めにつくは少なかりけり女郎花あまた多かるさか野なれ共

女郎花のはなをもてきて人のうふるに

虫のねのほのかに絶ぬ女郎花いとゝ物おもふやとに植つる

時々かよふ人のもとにをみなへし

女郎花植て後よりいかなれは露の心もおきてなるらん

山里のをみなへし

あらし吹深山里なる女郎花うしろめたくもかへる(てイ)けふかな

物いふ人にこと人かよふと聞ていきたるに女郎花を
をりていたしたるに

女郎花なへて草葉におく露の秋はてかたにみるそ(ゆるころかなイ)わひしき

御前の前栽ほるとて

女郎花あまたみすてゝ過行はさかの心とおもふへきかな

春野より歸たるにあるさうしのこたち物いひかへる
に

百敷に移してうふる女郎花心おこりのいかゝせさらん

萩の花人にやるとて

棹鹿のねに鳴そむる秋萩を折てそみゆる人のこゝろは

ある人の許に行たるに萩をゝりてさしいたしたり

秋萩の色つくまゝになく鹿の聲をはよそのこと（ものイ）ときゝけり

人の家に萩を植たるをみて

人戀る鹿の涙もかゝらしを今さへかゝる萩のうへの露

人ともものあそふ所に萩の花あり

秋きても程はへぬれとこの暮におとろくはかり風は吹ぬる

六月十四日秋のせちに入

今夜より荻の葉風の音すらし秋のさかひにいりやたつらん

七月七日

一とせに今夜計そ天川戀つゝわたるせをすこしてよ

同題を

天川今はみなせに成ぬらんけふ彦ほしのふなちこくへく

同秋風

大かたに吹秋かせも心あらは物おもふやとは荻のはよけ

七月七日秋夜の虫といふ題を

何事を草の枕におもふらんなく聲たへぬ秋のよの虫

七月山寺に參るついてに野への草村の露をみて

秋の野をけさきてみれは蘭わかぬきかけし露もはらはす

紅葉を遠くみやる宮の御屛風の繪に

秋霧はたちかくせとも足引の山の錦はたまにみかけり

おなし題

たつた山みねの紅葉もみるへきを霧たちこむる秋の空哉

、波近き山の紅葉さかりなる所を人の馬にのりて

足引の山のにしきを惜むとて浪さへけふはたゝぬ成へし

十二なりけるとし九月によめる

花すゝき招く袂はあまたあれと秋はとまらぬ物にそ有ける

むさしのかみひてしけかつるのかたのとうかいおせち殿に奉れり其使にしろかねのかめの箱にくすりいれたりそれに

今年より君に千年をゆつるをそとうかいたうに求いてたる

かへし

千年ふる鶴のありけむかたにやはけふ万代の龜をすません

同殿の北方はくろめすみを舟につみて すみをそきよしをある所に

をりはへて君かたきゝにこく舟は住のえに社程はへにけれ

おやのしもつふさになりて下るに 兄の近江守の打出の濱にてよめる

もろともに打出の濱に打（ナイ）波のかへらんをりを思ひこそやれ

かへし

よの人の打出の濱といふことは涙のさきにたつなゝりけり

さて尾張よりかへりて藏人所にふしたる夜 物哀れにてこれかれ秋の夜の雨といふことをよむに

あつまちへゆく旅人を別れきておもひこそやれ秋のよの雨

きちかう

しら露のおける草葉にかせすゝし曉ちかうなりやしぬらん

くさの香

しら露のいかにそむれは草のからおくたひ毎に色のます覽

ほそおとこ

春の田を打かへしつゝほりたてるほそをとことも思ひける哉

たゝの戀

霜氷り心もとけぬ冬の池によふけてそ鳴をしの一こゑ

ある所の前栽合に
しら雲のはるけき峯の姫小松君か千年のかけと社みれ
志賀の山越に紅葉のかけに鹿
瓜生山紅葉の中に鳴鹿の聲はふかくもきこえけるかな
宇治の網代にて
紅葉はの流るゝ川はぬは玉のよるそあしろの色はみえける
秋くれは移ふ色のこきからに萩の下葉をみるそ露けき
秋の野はから紅になりにけり鹿ふりいてゝ鳴そめしより
まねく共たのみける哉花すゝき風にのみ社まかせたりけれ
棹鹿の音に鳴そむる秋はきを折てそみゆる人のこゝろは
人の許にをみなへしを植て
我宿にうつしうゑつる女郎花秋のかせさへあたらしもせし
宇治のあしろにて
水上に紅葉ちるらしうち川のせゝさへふかくなりまさる也
人のもとへやる
花すゝき風に亂るゝ夕くれそあしかりけると思ひしらるゝ
いつとなく時雨の空に秋くれは物おもひそふる事そ多かる
六月に萩の下葉をみて
さきたちて萩の下葉は色つきぬをくれて秋のいつこ迄きぬ
朱雀院御屏風にはらひする所
おほぬさにはらひやるとも此川の神はしるらんふかき心と
三宮にこちまき奉るとて
木かくれて五月まつまの時鳥忍ひてなけと聲つきぬへし
歌合に
卯花のかけにかくれてけふまても山ほとゝきす聲は惜まむ
今よりは聲なをしみそ時鳥さつきまつまのほとそあるらし

和歌所にて
さくら花をしむに年の老ぬれは恨みてすくすをりそ多かる
三宮御息所子日若菜を奉る小松
かた岡の子日の松を雪まより心ことにもけふそひきつる
また
霞たつ野への若なをけふよりそまつの便りにちよは摘へき
同おとゝの北方おとゝに若菜まいり給
淺みとり野への松引子日してつめる若菜は千世そはるけき
子日承香殿女御
君ひかて子日の野へも老ぬるを何をまつとか世をは盡さん
人の子うみたる七日夜に
かねてより千年の影そおもほゆるまた二葉なる今年生の松
人の子うみたる七夜
雲井にも今そまつらんあしへなる聲ふりたつる鶴の雛とり
冬の夜のなかきを送るほとにしも曉かたの鶴の一聲
物へいく人にこうちきぬはてやる
此たひはえたにぬひあへす唐衣たつにとまらぬ涙ならぬに
年毎の春の別をあはれとも人にをくるも人そしりける
物へゆく人にきぬとらすとて
別れちの草葉の露もはらへとてやかてかはかぬ衣をそやる
同しくはきぬに心もたくへてん涙のとまるものならなくに
道露ははらふ計のから衣かけてもうすき心とな見そ
みそきつゝ別るゝかたの川浪の立かへりけん程をこそ思へ
袖の上にかつしら露のかゝりける別るゝ道の草のゆかりに
別れては思ひ出よと朝ほらけ露けなからもぬるゝころもそ
いかなれはつけても人の別れけん深き心のおくれさりけり

その所にて人の別ををしむ夜
よそにても君わすれめや百年のおのかさま〴〵をしむ別を
惜まねと我みのいける程は猶おもひもしらすなからふる哉
はらからのしつむよしよめりけるに
君をたに浮へてしかな涙川しつむ中にも淵瀬あるやと
ふくにておやをむかへてかへるにはやう川を渡るとて
おとにきく淵せの川をたちかへり悲しき瀬をも渡りぬる哉
正月六日鶯のはつねをきゝてはらからに
鶯のはつね計そ聞ゆなる春のいたらぬところ〴〵に
おほ磯の岸にきよする白波の打みて歸るほとはまさらし
わすれたる女の家に雨やとりしてゐたるを今はこゝにかといひたり
古里は雲(もイ)ゐの外に飛かりをよそなる人のかへるとやみん
うき事そまたしら雲の山のはにかゝるやつらき心なるらん
深山木のこりやしぬ覽と思ふまにいとゝ思ひのもえ增る哉
はかもなき跡とみなから嬉しきはいくら計りの涙いつらん
烟とそうき世の事は成ぬへき空にわかるゝ我ならは
神な月しくれにそひて紅葉はのふるもかひなき物にそ有(ける)
春風になひく柳のいとよはみ心ほそくもたゆるきみかな
うき事を空にしりては白雲のかひなき山にかゝらましやは
秋の野の草葉をみれはおしなへてうきみの程に置る白露
わすれ貝よせもやすると住吉の岸のわたりに日を暮しつる
思ひやる夢ち變らぬ物ならはおほつかなしと君もまちみし
いひしらぬ思ひそいつる東雲におのか衣そ露けかりける
秋したる女をみて

みそきせしなこしのよゝり人(しれす)頼み渡るを人(とイ)はしらすや
をしの聲絶す鳴つる初霜に心をさへもおかせつるかな
忘れ貝ひろふ計に住吉のうらみてわたるほとはへにけり
花さかり過も社すれ娘部志匂ひて風にまつなひかなん
吹かせになひく物かは女郎花露の心もおかせさらなん
きえぬへき露の我身も言の葉にかゝれはとまる程そ悲しき
忘られぬ心を君にとゝめてん今はかきりにおもひなりとも
烟とも雲とも今は(つるにイ)成ぬへしつれなき人はよそにこそみめ
おもふ事いはてやみなは山城のとはに苦しきみとやなり南
かく社はあひみる事のかたからめ覺束なさは如何せよとや
から衣しほる計に成にけり涙も雨も降てきゆれは
人しれすふりかゝれともから衣涙にのみそあらはれぬへき
末の松まつ人をのみ頼みつゝ我をは波におもふ成へし
よにもにす物思ふからに苦しきはおのか心のしわさなり鬼
世のうきも人のつらさも忍ふるに戀しきにこそ思ひ侘ぬれ
いせの海のあまの濡衣きぬ人は別ると思へは殘らさりけり
忘るやとしはしはかりも忍ふるに心よはきは涙なりけり
いとゝしく物おもふ事の增る哉いつ我戀のやまんとすらん
戀侘てみのいたつらに成ぬとも忘るな我によりてとならは
心にも哀かなはぬみなりけりかくてもいけろ我みと思へは
けさこそは別れてきつれいつのまに覺束なしと思ふ成らん
あひみてもちゝにくたくる玉しひの覺束なさを思ひ起せよ
あひみぬにしぬへき物としりぬれは心をさへそ殺し果つる
風吹ははこねの山の玉ますけなひきて我に心とゝめよ
大井川ゐせきの波になる瀧はおのか上こそ悲しかりけれ
いひしらぬ思ひのみ社勝りけれ行先いかてましてまとはん

住の江の浦みつへくそ思ほゆる鹽のひるまの今はなけれは
涙川えもせきあへす成ぬれは今はかきりとおもふ成へし
雨ふれはつねより増る澤水と聞しも君かなみたなりけり
心をもかつはわりなしと思ふ哉いつのよにかはもえは歸覽
雲かくれ過行月のよもすからおほろけにては歸るこゝろか
夏衣うすき袂に落かゝる涙はしはしとまらさりけり
こりすまに猶もかへるか玉ほこの道の行衛にみゆる物哉
心をそならはし物といふなれとかた時のまもえやは忘るゝ
住よしの岸によすなる忘貝せめて戀しきけふそよすなる
恨てもかひなき物としりぬれといきてかひなき我身なり皃
夏衣いとゝ涙にそほちつゝおほしきこともいはてきにけり
戀しとは事をもかへぬ頃なれはいひし昔はのとけかりけり
白雲のしらぬ山ちにかくれなんかゝる浮世の處せき身に
我なからわりなき事はしられけり今夜計はのとけからまし
おとにのみ聞わたりつる衣川たもとにかゝる心なりけり
いなり山やま下水を結ひあけて君さへかけにならしつる哉

かへし

山川の流るゝ水のはやけれはむすふ計のかけもとゝめし

又かへし

あかすして別るゝけふはむすふ手の雫ならねと濁らさり皃

賀茂にて人に

みつかきのよそになるとも夕襷かけても我を思ひわするな
ゆふ付の鳥につけても忘れしを悲しきおやは君はのこさぬ
雲まよりはるかにみゆる白雪の山ちをいかて越てきぬ（つイ）らん
今はとて別るゝ袖の涙こそ雲の上より落るしら玉
山たかみ嶺のしら雲ふりはへてかへると思へは物うかり皃
君こふと我そ流れていはるへき涙の川のうきしつみつゝ
いせの海になこりを拾ひ侶るあまも物思ふ事はえしも増（なし）
いかならんと思ふ心の疑に恨てかつはゆゝしかりけり

むすめは京にておやは人の國にあるに

めに近くふゝきにまとふ玉しひをいとゝ遙にたのめつる哉
朝ほらけ歸るまもなく降雪に道の行衛もまとひぬるかな

人の國なる女に

里遠みいかにせよとかかくのみは暫しもみねは戀しかる覽
行さきに思ひしりけん秋霧のしはしもみえすまとふ物とは
常よりも物思ふことの増る哉むへもいひけり秋のゆふくれ（くれはイ）
よそにてもなひかさらめや人しれす心を春の風につけとか
わひはてぬ今は限りのみなりけり生て歸覽ことそゆゝしき
うしとてもかつもきえなてふる程に我みは雪に劣らさり皃
よもすからおちかゝりつる草枕涙のかゝるたひもありけり
よの常の思ひならすと我戀を君にはいかてことにしらせん
限りなく頼むにのみやつれなきとほに出てのみかつは苦敷
思ひつゝへぬる月日の程よりも忍ひ兼つる我にやはあらぬ
風吹は入江にさはく蘆鴨のたのむかたなくなりもゆくかな
みなせ川流れてとまる水くきのみえぬ絶まは涙なりけり
はつ雪にかくれてみえぬ跡よりも覺束なくて程もふる哉
清水の山ほとゝきす聞つれは我故里の聲にかはらぬ
えそいはぬ我は岸邊の田鶴なれや知人なしに濡れて年ふる
秋霧のはれぬ思ひにまとはれて鴈の羽風におとろかす哉
いひそめぬ程はかりこそ池水の深き心もつゝみこめつれ
虫のねの數そまさ覽おなしくは君かまかきの露にたになけ
さゝかにのいかにせよとか我戀の頼もしけなき空にしもふる

君こひて露の命のきえかへりほとをたになとまたす消ぬる
住よしの岸のしら波袖ひちて今けいふかひなくそ成ぬる
いひはなつ君にしあへは大澤のいけるかひなき身をそ恨おる
いひそめし池の水くきたゆれとも深き心はわすれさりけり
今そしる馴ての後もから衣袖に涙のかゝりけりとも
君こふる夢の玉しひ行かへり夢ちをたにも我にをしへよ
ゆふ月の鳥の一聲明ぬれはあかぬ別れを我そなきぬる
藻鹽やく蜑の燒火の下にのみ燃つゝからき我にやはあらぬ
みをうみにおなし涙はかゝらしをつきす袂もおちかゝる哉
中絶てあまたの年に成ぬれは今はかひなしみをそうらむる
戀しなは今夜もあすもしらぬみをいける程たに心とゝめよ
涙川みもうく計なかるれときえぬは人のおもひなりけり
疑に猶もたのむかいせの海のあまのたくなはくりかへしつゝ
ひたちなるいかこかさきの忘貝ひろふかひなき物にも有哉
飛鳥川人たのめなるよなりけり渡りそめけん我そくやしき
同しくは我みを露となりな南きえなはつらき言のはもなし
みのうさにおもひもあかし浦風にあまの歎きはいつか絶へき
住よしの戀忘草たね絶てなきよにあへる我そ侘しき
まとひつゝ幾世へぬ覽かほ鳥のみえし山ちの猶そはるけき
侘ぬれは曉かけてかへりたる鴫のはねかき我そかすかく
思ひつゝ獨ぬるよのから衣夢ちにさへも露はおかしを
三輪の山のしるしの杉も枯はてゝなき世に我そきて尋つる
なき人のゆきけん人は尋ぬとも此世の事は行てをしへん
いせの海のあまの釣舟春風になこりをたかみ何かわふらん
霞たつ三輪の山もと人しれす春のなけきを我につまする
雪降はまつそ悲しき三輪の山しるしの杉のみえしと思へは

朝ほらけおき行露は消ぬへしいつしか暮とたのみける哉
君こふと涙にぬるゝから衣かへすほとなくわれそ悲しき
　ひさしくこすとてふすへてこぬ人に
こむらさき君かむすひし元結のちり打拂ふほとまてやこぬ
君こすは我もかへらし神な月しくれにさへやぬれてかへ覽
かりそめの心くらへにあふ事の命もしらぬみとはしらすや
　又人に
つらさのみまさり行哉思ひやる夢の玉しゐいかにつくらん
草わかみ植て別れし娘部志わかみぬほとにかれにける哉
君たにも我たにあさく成はてはおもはす山に入ぬはかりそ
ひとりねの侘しき旅の草枕草のゆかりにとふ人もなし
君こふとおもふ心のたひよりも今はおろかに成ぬへきかな
夢にてもあふと見えなん戀わたる涙の川は淵せあるやと
白玉か露かとゝはん人もかな物おもふ袖をさしてこたへん
　忘れたる人にいひやるとて
あしろ行宇治の川波流れてもおのかかはねをみせんとそ思ふ
　かへし
古はくらけの骨はみもしてんあしろのひをはよるかたもなし
　朱雀院にて
霞立野へ吹かせもさむからて我みのよそに春はたちぬる
春くれはなく鶯の一聲をこかくれてこそきかまほしけれ
散ほとは雪とみゆれと梅花かせに匂ひてきえぬたもとそ
　かたらふ人の殿ゐ物のうらのいたくやれたりけれは
年をへてなれる中をはから衣うらみてかへすあはれなり鬼
　人の子になれる女に物なといひてかへる道にやすむ
　所にていく野といふ所より人をかへして
別にし程に消にし玉しゐのしはしいくのゝ野へにやとれる

群書類從卷第二百四十九

和歌部百四　家集廿二

信明集

亭子院うせさせ給ひつる御ふくにて
去年の春えたにて折し藤のはな衣にきんと思ひけんやは
又の年御はてに
散里の梢の紅葉ちりはてゝおのかちり〳〵なるそかなしき〔るわひしさイ〕
村上の御時に國々のなたかき所々を御屛風に繪にかかせ給て春日野
春日野の野守と身をもなしてしか待らん春を我物とみむ
三熊野
うき事も山道しらす尋ねこしわかみくまのに入やしなまし
長柄橋
心たになからの橋はなからへん我身に人はたとへさるへく
難波
我戀は難波の芦のうらなれや波のよる〳〵そよときゝつる〔つイ〕
すま
なには江て藻鹽のみたくすまゐ〔ゐイ〕の浦に絶ぬ思ひを人しるらめや
この歌つかうまつれとおほせことあるに奉る
渚岡
うちつけに渚の岳の松風を空にも波の立かとそきく
佐保山
さほ山の柞の紅葉ちりにけり戀しき人を待とせしまに
田子浦
我戀は慰めかねつするかなる田子のうら波やむ時もなく
しかすかの渡
ゆけときぬくれとゝまらぬ旅人はたゝしかすかの渡り也鳬
つくはやま
年をへて君に心をつくは山峯は雲ゐにおもひやるかな
しら山
むかしよりなに降つめる白山の雲ゐの雪は消るまもなし
ふたこ山
なかき世に君とふたこの山のねはあく共しらぬ朝霧そたつ
よしの山
行年の越てはすくる芳野山いく萬代のつもりなるらん
あさかの沼
花かつみかつみる人の心さへあさかの沼になるそわひしき
なこその關
なこそ世になこその關は行かふと人もとかめ〔すイ〕ぬなのみ也鳬
こと御屛風の繪に紅葉散たるを見る人々

ほの〳〵と有明の月の月影に紅葉吹おろす山颪のかせ
朱雀院のわか宮御もきの御屏風のゐに梅のはた山里の家にある所
色もかもまつ我宿の梅をこそ心しれらん人は見にこめ
おなし所雪ふる
ふる雪の下に匂へる梅のはなしのひに春の色そ見えける
おなし花折女を男見る
梅の花折たもとをも見つる哉かを尋ねてもとはむとそ思ふ
初　鴈
待人にいかてつけまし雲の上にほのかに聞ゆはつ鴈の聲
たきおちたる所
紅葉はの落そはりぬる瀧つせは秋の深さてそこに見えける
内裏の御屏風の繪に子日したる所
行かへり野へにこたかき姫小松これも子日の二葉なりけり
子日して歸る家ちのはる〳〵とゆくさき遠くおもほゆる哉
天暦八年中宮七十賀御屏風のれうの和歌なきさの岡
和田津海のなきさの岡の花すゝきまねきそよする沖つ白波
芳野山
よしの山雪には跡も絶にしを霞そ春のしるしなりける
おほあらきの森
時鳥さなくなきけは大あらきの森こそ夏のやとりなるらめ［しイ］
うきしま
うきこともきこえぬ物を浮嶋は所たかへのなにこそ有けれ
石　上
年をへていひふるさるゝ石の上名をたにかへてよをへてし哉
ふしみの里
行春に伏見の里とつけてしかあはまくほしみ立やとまると
高　砂
すむ鹿のなかぬ時さへあやしくも［なイ］聲高砂ときゝわたるかな
をはすて山
秋の夜のあかつきかたの月みれはをは捨山そ思ひやらるゝ
こゆるきの磯
風吹は玉もりいたすしら波のよせすともなきこゆるきの磯
又こと御屏風三月
鶯のなきかへる音をしるへにて春の行衛をしるよしもかな
六　月
水上にはらへて流すあさの葉を［ことイ］おりなか［そイ］くしそせゝの白波
芦のねのおふるあら田を打かへし下にて思ふ心あるらし
あちきなく思ひこそやれ七夕のまれにあふらんよるの下紐
もみち［のイ］ゝり殘たる山の峯に月の入たる所
ちりぬへき紅葉の色も月影も山端にこそとまらさりけれ
紅葉折るたりもかはらていつのまに降しきぬらん峯の白雪
霞ふる峯の山への榊葉にゆふかけてこそくれはかへらめ
志賀の山こえしたる所
わけたにもけふ珍らしく見る山にあまたの年も越にける哉
山路には絶て水たになかりせはいとゝ涙そほちまさまし
そほつともこゝに暮さん山のゐに戀しき人の影やみゆると
朱雀院うせさせ給てける時
かなしさの月日にそへて今よりは我身一つにとまるへき哉
御いみはてゝ人々出ける日
しくれつゝ梢はこゝにうつるとも露になくれし秋は忘れし
式部卿宮（敦實）出家し給ける時御とふらひに小野宮殿

まいり給へるに御あるしなとあるついてに

うれしきも哀も深き侪なれはわかれかたき[くイ]も見ゆるけふ哉

敦慶のみこのむすめ(中務)に

年ふれはわすれやせんと思ふ社あひみぬよりも我は侘しき

かへし

なからへん命もしらぬ忘れしと思ふ心は身にそはりつゝ

かへし

うしと思ふ心のこゆる松山はためし[のめしイ]もかひ[もイ]のなくそ覺ゆる

かへし

秋といへは色[さイ]もかはらぬ松山はたつ共波のこえんものかは

なとこ

こりすまにたゆるまもなき水莖のなく〳〵かける文にそ有ける

又なとこのかへりて

ちはやふるかもの葵をいのりつゝかさして君を頼みける哉

かへし

千早振かもの葵をかくるよりいとゝうきてもおもほゆる哉

なとこ

神代よりいむといふなる五月雨の此方に人を見る由もかな

かへし

五月雨の此方かなたも逢事はいつもいむとそ人はいふなる

又かへし

何處にも思ひもいらんよと共にいまぬ絶まの中もなにかは

なとこ

こよひれてあふみへゆくとみし夢の悲しと袖にふる泪かは

かへし

ほともなくやみぬる雨にたとふるはいかに悲しき涙なる覽

限りなく悲しと人を思ふには物思ひますものにそありける

五月雨は君にや有けん子規人しれぬ音をこゝらなきつる

かへし

いかてかはきゝとかめつる時鳥人しれす社なをはなきつれ

なとこ

人やりにあらぬ事にもあらなくに身もいたつらに成ぬへき哉

かへし

身をすてゝ思ふと見しは徒になるへき事にかこたれもせん

又なとこ

僞をたかならはして限りなき我まことをもうたかはすらん

かへし

世の人のおなし心にあらはこそみなおしなへて僞もせめ

又かへし

たまさかに誠やすると君ならぬ人してよをもしらせてし哉

又

身の上に人の心もしらぬまはことそ共なきねのみそなく

かへし

君たにもことそともなき涙をはいかに知てか哀とおもはむ

又

あくる迄と思ふ時たにある物をなく〳〵とくも返るへき哉

かへし

我思ふ心もまたきかへるまもふかくはあらぬ中にそ有ける

けふの内に否ともう共いひはてよ人頼めなる事なせられそ

かへし

今といひてかりの心も見るへきをかひなき人に頼めつる哉

又

かくなんと人しるらめや行道も心とゝめておもほゆるかな

かへし
行道もとまらはとまれ知とてもやるへき事の心ならねは
又
早く此かみの十日もすきな南はつかにてたに晦日なりやと
かへし
廿日にて晦日ならん共思ほえす後やよそかにな覽と思へは
又
涙とも雨ともわかす大かたにわれはふるとも人［そイ］はみるらむ
かへし
泪ともしらぬ先よりむへ社は常よりとくもなかめられけれ
又かへし
しられともおなし心になかめける事はかりをそ哀とはきく
又
契りけん日をも過さし七夕は我ことかくやおもはさりけん
かへし
七夕の契りけん日は過す共たとふへしやはこともゆゝしく
又かへし
ゆゝしとも思はさりけり七夕は忘れぬ中のあらまほしさに
又
數ならぬ心の内にいとゝしく空さへゆるす此のわひしさ
我をこそ世にみくるしく思ひしか人はいかなる心なるらむ
又かへし
あひもみすことをはいはん方もなし誰つけそめし病なる覽
かひもなき君によりつゝくたくれは心もなくて成ぬへき哉
又
［さイ］うきまさる我身もしらてよそにのみ聞し昔にかへしてしかな

たのむる事なくはしぬへしといひたる返事に［女イ］
徒にたひ／＼毎にしぬといへはあふには何をかへんとす覽
かへし
しぬ／＼ときく／＼たにも逢みねは命をいつの爲に殘さん
はしめてのつとめてかへりたる女
はかなくておなし心に成にしを思ふる［かイ］ことは思ふらんやは
かへし
わひしさをおなし心ときくからに我身を捨て君そかなしき
ちかつきてをとこ
よもすから風も涼しく吹ころは心ことにてまたしとやする
又
波高く松の隱れるよにやあらん賴めて行そなひかすといふ
かへし
末の松［やまイ］むかしよりまつ君をおきて波高く共こさしとそ思ふ
かゝみかりてかへすとてしきのしたにかきつく男
曉のわかれをゝしのかゝみかもおもかけにのみ人のみゆ覽
人のゆるさぬ中にやありけんをとこ
そめて思ふ色は深きを口なしのいとはぬ色と人やみるらん
いきたるにあはれは
あたらよの月と花とをおなしくは哀しれらん人にみせはや
かへし
君ならて誰にかみせんうめの花色をもかをもしる人そしる
内へいそきまいりたるつとめて女
いそきけん心の中をしらぬ哉もゝ百敷に床やさたむる
かへしありしとか。
又　女

ありしよりつらき處も優らなんかひなきよりは絶てやみ南
山里にある[にイ]女もさてあるに
我ことや人もいふらん山里は心ほそさそすみうかりける
おなし女のふくなるころ絶まかちなるをうらみて
なき人もあるかつらきを思ふにも色わかれぬは涙なりけり
おなしころいきてたゝくにあけれはをとこ
東雲の明さりしかは夜もすからま木のとよりそ立歸りにし
かへし
夏の夜もまきの板戸も徒にあけてくやしくおもほゆるかな
絶てのちきたるにかゝみをいたしたれは男
あけにけり影めつらしき増鏡ふたよりみよりれ社なかるれ
かへし
心からみさりし影はますかゝみみよりなく共今はかひなし
おなしころ女
思ひやる心もよにもおくれぬる野にも山にも行とみえつゝ
かへし
世とゝもにまとふ心や人めには野にも山にも行と見ゆらん
こと人[にイ]かよふときゝてをとこ
年をへて我こそ下に住の江の松をは人のうへときゝつゝ
かへし
心にもあらてうき世に住の江の年ふる松そみぬはくるしき
女小野の宮にまいりてさふらふをきゝつけてさふら
ひにゐて月のあかき夜人していひやる
戀しさはおなし心にあらすともこよひの月を君みさらめや
かへし
さやかにも見るへき物を我はたゝ涙にくもる折そおほゆる[かイ]

行平か三君をたえたるころ女
わひつゝもこの世はへなん渡り川後の淵瀬を誰にとはまし
かへし
此世をはおひもかつきて渡してんのちは初の人をたつれて[よイ]
閑院のおほい君いとおもくわつらひておこたれる比
いかてあはむなといひてをこせたる
辛くして惜みとめたる命もてあふ事をさへやまんとやする
かへし
諸共にいさとはいはてしての山いかてか獨こえんとはせし
さてきたるにえあふましきやうありてかへりてつと
めて
曉になくゆふつけのわか聲に劣らぬ音をそなきてかへりし
かへし
あかつきのね覺のみゝに聞しかは鳥より外の聲はせさりき[らイ]
人のふみをえてかくせは女のうらむれはふみのうち
にかきて見する
これはかくうらみ所もなき物をうしろめたくは思はさら南
女のもとにやる
秋とたにおもはさりせは人しれすしくるゝ事を何に告まし
返事にかみをつゝみてをこせたれは
いひ初ぬほとはなか〳〵ありにしをしつ心なき昨日けふ哉
わりなくてやみやしなんと侘つるに助くる神をみるか嬉しき[こイ]
またしらす惑ふ心にいとゝしく覺束なきはわひしかりけり
返事にみゝす書をしておこせたれは
侘しきに戀に惑へる心にはそのことゝしもみえすそ有ける
ほともなく消ぬへきよに白露の幸かりきとな思ひおかれそ

おとなしの山より出る水なれやおほつかなくも流れゆく哉
なか〱に覺束なさの夢ならはあはする人も有もしなまし
人しれぬ思ひをすれは秋萩の下葉こかるゝ物にそありける
露はおけと我折宿のはきのえはかくこそ秋をしらす顔なれ
　たいふの君といふ人にいひやる
思ふ事ありて久しく成ぬとはきくかきかぬかしりて知ぬか
　右大弁なくなり給て人々いみにこもりて有ほとに
物をのみ思ふ〔ひイ〕れ覺の枕には涙かゝらぬあかつきそなき
　おとうとの許にひさしくあはぬころ
手すさひにひをけのをけ〔きイ〕や有〔こりてイ〕にけん戀しき人にあはぬ比哉
　五月のせちにやあらんたいたしかにしらす
限りなく思へる駒に較ふれは身にそふかけはをくれさり鬼
　さくらの花をみて
年毎になをたに變は世の常の櫻とのみはいはすそあらまし
　そてといふ女つかひたる人にその女につけていふ
人しれぬ我物思ひの涙をは袖につけてそみすへかりける
　二三日はかりあは〔よイ〕ぬ女に
思ひきやあひみぬ程をいつなりと數ふ計りにならん物とは
　堀川のおとゝの宮の權大夫ときこえし時みちのくによりきこゆる
明くれは籬か〔のイ〕嶋を眺めつゝみやこ戀しきねをのみそなく
　大別松といふ人の出家したるにいひやる
いかにして君か〔りイ〕心にたちつらん小松の山のすみそめの雲
　しれたるといはれたる人のうしのしりにたちてはしりけるを見て人々のかれを題にて歌よまむといひけれは
あら牛のしたしの浦の床しさにとりてみつれははしかれに鬼
　はせをは長谷寺やけたりときくころ
世中のたのみ所にせし物をはせをはかくややかんと思ひし
　中務にしのひて物いふよ時鳥のなくをきゝて
今宵こそしての田長もきゝつらめ今は五月の空にしられん
　かへし女
時鳥きゝわたるとも五月雨の空ことにたに人のなさなむ
しるや君しらすはいかにつらからむ我かくはかり思ふ心を
みるめゆゑ蜑ににたれと娘部志けふは我にそかつきおとれる
　御しやうしのゑにふかき山にうくひすの聲をきく人あり〔こイ〕
鶯のなくれをきけは〔みやまいてゝ忠見集〕山ふかみ我よりさきに春はきにけり

藤原義孝集

源修理のかみのいへにかたゝかへにいきてあるにまくらいたしたるつゝみかみに

つらからは人に語らんしきたへの枕かはして一夜ねにきと

かへし

あちきなや旅のやとりを草枕かりならすとて定めたりとは

あかすおもほえしかは人にかくなんありしこれか返事せよといひしかはかくはいかゝとて

語る共たかなはたゝしなかゝらぬ心のほとや人にしられん

秋のゆふくれ

秋はなをゆふまくれこそたゝならね荻の上かせ萩の下露

露くたる星合の空をなかめつゝいかてことしの秋を暮さん

殿やみたまひしころいかゝと人のとひたるに

夕暮のこしけき庭を眺めつゝこのはと共におつるなみたか

うせさせ給にし御いみはてゝ人々におはしわかるゝ日

今はとてとひ分るめるむら鳥のふるすにひとり詠むへき哉

修理のかみ返し

羽ならふ鳥となりては契るとも君わすれすは嬉しとそ思ふ

春人のよめといひしに

夢ならて夢なる事を歎きつゝはるのはかなきものおもふ哉

春かしらけつらせてみな人々よめといひしにうめの花おもしろくある所を

春風のそらなるほとはうめの花梢こそなをうしろめたけれ

はる〳〵の花をあたにとみしものを昔の人の夢こゝちする

人の許よりかへりてつとめて

君かためをしからさりし命さへなかくもかなと思ひける哉

ものいひし女こと人に物いふときゝておほかたつれにみれとものいはれはなとかへるやまといひたりけれは

かへる山さか〳〵しくもみえなくに何しか人の立留るへき

かへし

こひにのみ惑へる人の心にはさか〳〵しくもみえぬなる覧

七月はかりに月のあかきにものいふ人のもとに

忘れてもあるへき物をこの頃は月よゝいたく人なすかせそ

ことゝもおもはぬ女のものいひかけしかは

梅かえに雪もつもらぬ春なれはこの下露やつねにつゆけき

うちわたりにて物いひし女のたえてのちうらみけれは

あふ坂や旅行人もしのはらにひと夜は宿りとらぬものかは

左衛門督の命婦の許に權中將となのりて宮のおはしたりときゝてやる

あやしくも我ぬれきぬをきたる哉み笠の山を人にかられて

おなし人にひさしくたえて

忘るれとかく忘るれと忘られすいか樣にしていか樣にせん

あふきにうめの花のかれたる所なとあるにかきつく

年毎にとまらぬ花の色よりもかれたる野へをみるそ悲しき

五節のころさしくしとりたるかへすとて

人しれぬ心ひとつを歎き筒つけのをくしをさすかひそなき

かへしいかなる人

かき分て我になさしそ美しとおもて〳〵にかつはいひつゝ

左衛門藏人のなかうとかりけれはこくれうのおかし
きをつゝみてそれにかきつく
ならされぬかはそのくれときゝ乍ら宵あか月と立そ苦しき
となさしなから物いひし女に堀川の中宮にて
思ふ事なるとか聞しかひもなくなとうちとけぬよはの白波
かへし
うちつけに思ひ鳴門の浦もなくとけはあたなる波も社たて
よかはにてさくなむさうをみて
紫の色にはさくなむさしのゝ草のゆかりと人もこそみれ
櫻花やまにさくなん里のにもまさるときくをみぬか悲しさ
ふくなる比大夫君人のめて人の國よりのほりたりと
てものへゆく道なれはいひいるゝをとこもふくなり
ける
こひしとはおもひし物をふち衣きたりときけとゝはぬ心よ
なとこあるほとにて返り事なし。
堀川の中宮にて雪のふりたるつとめてれいけい殿の
ほそとのゝかれたるすゝきに雪ふりかゝりたるなと
のもゝかさしてさしいれて弁の少將のきみたてまつ
れ給ふとてそれにむすひつく
まねくかたにそゆきとまりける
とかきてをこせたりけれは
ときすきてかゝるすゝきのみなれとも
かきてをこせたり
定めなく風もこそふけ花すゝきいかにせんとか結ひをき劔
またかはらけにかきてかみにつゝみてうちわりてと
らせたれは
さためなく風のふくよは花すゝきよらん方なき物を社思へ
またかへし
あはれにも思ふなる哉花すゝき秋こそうけれ春もしらしな
一品の宮の大はん所にてかむし手かひしかは山吹の
花にいとおかしうならしてよふくろにさしいたした
りけれはこしにひきつけてうめつほのかたにきんた
ちひきつれていきて花をいろ〳〵にこきいれてかう
かきてなかにいれたりける
嬉しやはこれをみつれとあちきなく花に慣たる心のみして
またかへし
またなさは誠の花に劣らめとあやしや春のときならぬみよ
またかへし
時ならぬみにもいかてかなりぬ覽春に後るゝ花もありやは
またかへし
春は花ちるやちくさに思へとも言のはしけしかくてやみ南
藤侍從五月五日まろなるさうふやるとて
駒たにもすさめすといふ菖蒲草かゝるは君かすさひとそきく
かへし
あやめたにかゝるは人にひかれけり汀に移る君やなになり
狩衣のひもをとりてむすひめをとりかへたりしかは
我ならぬ人にはまれと結ひをきし紐いつのまに打解けぬ覽
九月九日きくの露をみて
移ろはぬ菊に結ひをく露の色はとけぬ霜かとなりてみゆ覽
いし山の峯のもみち
有明の月のはらにて山端のふかくも空にしりにけるかな
行方も定めなき世に水はやみう舟をさをのさすやいつこそ

左衛門のないしときめいしころ山にのほりていひお
こせたりし
空たかくときめく月と聞しかは我も雲井にきてそなかむる
堀川の中宮の內侍のすたれのまへにものいふほとに
雨の降かゝれは女のつけゝれは
侘ぬれはつれなしかほはつくれ〔にもてなすをイ〕共袂にかゝる雨のわひしき
またおなし所にたちよりたるにまらうとのありしか
はたちなからかへりてまたあしたにうりにかくつく
是をみよ一夜はひとめ辛かりきたち煩ひし瓜にやはあらぬ
かへし
たちわひてはひかゝりけるうり葛ならし顏にや人のみて劔
中宮の大夫うふやの七夜むかしをこひ給て
ちゝにつけおもひそ出る昔をはのとかなる共君そいふへき
御かへし
君かかくいふにつけても人しれぬ心のうちてこゝろ〔ひのりするイ〕ある哉
藤侍從すけに物いひにたちよりたるに月もなきころ
なれはいとくらしやなといひたるにやみのうつゝは
さやかなるといひたるに
思ひつゝまとろむ程にみるよりもかゝる現をはかなかりける
女の許に
命たにはかなく〳〵もあらはよにあらはと思ふ君にやはあらぬ
また女
いつまての命もしらぬ世中につらき歎きのたゝならぬかな
かへし
みなつみてなかゝらぬよをしる人はひとへに人を恨みさら南
修理のかみこれたゝわかなすひわかうりをおこせた
りらい月されすけの少將むこにとるへしときゝての
ころ
御園守答へたにせよつきたゝはかの言も皆なりぬへしとか
四日のよかへしあり
何事もなる共なしに瓜つらの名にのみたゝん事のあやしき
またかへし
あやもあれあやもなくまれかの瓜の熟ならぬみようやは世中
五月五日時鳥の聲せすとて
こよひしもきかてやゝまむ時鳥のちに〔のイ〕なく〔つイ〕共定めなきよを
また女をたつれしに
つみ〔ゆイ〕ふかき物にそ有ける女郎花たつぬる人を唯にあらせ〔はぬイ〕よ
女御殿のすのこになかひつにほそちを入ておかせ給
へるをゆふたちのすれはみかうしおろしたるまきれ
にうせたれは
盜人はほそちをみても雨ふれはほしうりとてやとり收む〔かくすイ〕覽
いし山にまうてゝかへる河つらにとりおほくたては
さよ深くたつ河霧もある物をなく〳〵きゐるちとり悲しも
殿うせ給て八講し給ひしついてに
君たにも同しぬれとてのりの雨のふる心をもたつねつる哉
されはかへし
のりの雨も涙にわかす神無月はてやしくれやいとゝなか覽
權大納言殿にはなみにいきたりしかはさくらの花ち
りたりけるをみて大納言
櫻花またみぬほとに散にけりのちの春たに心あらなん
御返し
この春も君をはまちつ櫻花かせの心のなきにやあるらん

おなしへたうびゐの別たうはなれはまたにこゝろやすく仁和寺のはなみんとさため給へる日風のいたくふきてとまるよしの給へるに

あまつ風吹みたれぬる春なれは心のとかに花もみ〔てイ〕るまし

御かへしにへたうはなれ給ひぬるよしをいたうあはれかりきこえ給ひて

吹とめぬ風そかなしき春のよの色のつれなきことを〔つねなきことをしるさイ〕思へは

殿うせ給てまたのとしの春あめのふる日

春雨ゝとしにしたかふ世の中に今はふるよと思ふかなしな

八月はかりしのひたる人にあひて夜ふかくかへるあしたにすゝきにつけて

はなすゝきむすひをきつる袂ゆへ露も心のとけすみえつる

かへし

ほのむすふのくさかくれの花薄とけてや秋も〔をにてイ〕すきんとす覽

物いひし人にうりのありしをとりて

たつ事の物うかりつる瓜なれとのちやならす〔んイ〕と思ひぬる〔たのまるゝイ〕哉

かへし

仇なりとなにたつ君は瓜生のゝかゝる辛さもならさゝり鳧

はゝうへの東宮にさふらひ給しにいとまにてひさしうまいり侍らさりしかはなてしこにつけてたてまつりしはゝうへ

よそへつゝみれと露たになくさます如何はすへき撫子の花

御かへし

しはしたかかけにかくれぬ程は猶うなたれぬへし撫子の花

これはのちにかきそひ給へるとそ。

もかさやみ給ひてしぬへき心ちのする哉しぬるかさなりとももしはしはとかくなせそ誦經しはてんの心はへの女御のおまへにきこえたまひけるをわすれ給てとくなさめ奉り給ひてけれははゝうへの御ゆめに

しかはかり契りし物をわたり川かへる程には忘るへしやは

またの年の秋六君の御夢にこの君の御ふみありけるに

きてなれし衣の袖もかはかぬにわかれし秋になりにける哉

うせ給ての十月はかりにせいみむそうつの夢にちゝのおとゝのおはする所にものをへたてゝあにきみとおはするにあにの少將はものおもはしけにてしやうのふえをふき給をみれはたゝ御くちのなる也けりなと母上のあに君よりもこひきこえ給を御心ちよけにてはおはするときこゆれはいとあはすおほしたるけしきにてたつ袖をひきとゝめてかくの給ふ

しくれとは千草の花そ散まかふなにふる里のそてぬらす覽

むかしは契りき蓬萊宮の中の月今はあそふ極樂界のうちの風に

かへし

心にもあらてあひみぬ年月をけふきて花とつみてける哉

移ろはぬ心なりせは年月を花とつみても見えすそあらまし

藤原仲文集

けさうしける女のしにけれはいとかなしうて女のはらからの許にいひやる

なかれてと契りしことは行末の涙のうへをいふにそ有ける

旅の道行人みのゝ國ときの郡といふ所にやとりて

むすひをきし人やとくらん下紐のときの郡に旅ねしつるは

忍ひてかよふ人の許におほかたのまらうとにていきたるに雪のいたう降けれは忍ひていひ侍る

はるかにて忍ふる事もある物をいかなるまより行かよふ覽

女の許にこんとての夜はこて後の夜來るにふすへてあはれは

ことわりや今宵は罪のそこにはやいれよふし南さり所なし

四條大納言前栽つくろはせ給けるに心なき人のなてしこをすきすてたるに

すき物を花のあたりによせさらは此常夏にねたえせましや

大風のまたの日家の外よりもいたくこほれたれはちかき所なる四條の大納言殿にきこえたる

我宿は野分のほかもとなりよりあれまさりたる心ら社すれ

御返し

隣よりあれまさわりといふなるはいかなる風かみをは吹覽

花の枝にふみのあるをえ給ひて

春のとふ心つかひを尋ぬれは花のたよりにてふなりけり

〔衣香イ〕所行殿にさふらひける人をかたらひけるかみそか人をもたりとてまかりたりしかはまとひかくしてけるにくつのありけるをみてまへのやり水に生たるねせりをとりて

澤水にあらはれにける忍ひねをからせりけるはうき心哉

みたけさうしすとていは山にこもりたるに女藏人まうてあひてとはれ侍けれは

何處へも身をしかへれは雲懸る山ふみしてもとはれさり鬼かへし

鳥のねもきこえぬ山にいかてかは雲路をわけて人の通はん

ある女臨時の祭に車に乘なからきてたゝいれ入けれは小家にてえかくれあへす夕日のさしていとあらはなれは

思ひきやかけてもかくはゆふ襷けふの日影にまはゆからんと

かへし

ゆふ襷神にかけても誓ひてん夕日にあてゝみてはあらしと

同し人のふるきめのこひたるに

花さかぬ朽木のそまの杣人のいかなるくれにおもひいつ覽

絕ての比所行殿のたしまかく計りくるに苦しき榤繩を只にくたしてやまんとやする

三條の大殿にてゐちこに物いひてあくるまてあるになてしこに露なとをきたる扇をかれみ給へとてさし入たれは

思ひしる人にみせはや夜もすからわか〔いイ〕常夏におきゐたる露

うりたるかなへをこよなくこひをこしたりけれはうる人

ちうこくの鼎にもこそにえ給へおほくのせにな落し給へそかへし

かうよりもうるこそ罪は重けなれむへ社かまの底に有けれ

とねりのそのに步ありてとねりのうれへまさらんと
いふときゝて
古はとねりのねやのもの語りかたりあやまつ人そあるらし
紀伊國の郡をよめる　いと　なか　なくさ　あまり
ありた　ひたか　むろ
いと長きよはなくさまつ餘りありたえすひたかく室にいらはや
雪のふりたるつとめて院の御かゆのおろし給て哥よ
めとおほせられけれは
白雪のふれる朝のしらかゆはいとよくにたる物にそ有ける
同し人かうすけにもとすけすはうにくたる道にえと
まりといふ所よりいひをこせたる
えとまりに我きたりとはしられはや今迄君かみにこさる覽
かへしもとすけ
限りなきよりこを好む君なれはかへりはみしにまさり也鳧
同しなか文堀川の中宮のおはしまさて後ひと〳〵あ
まになると聞て少將の內侍の許に
數へつゝきても過つる世を背くうしろて共そ思ひやらるゝ
かへし內侍
そむきぬるうしろてよりも極樂にちかはん君か顏を祉思へ
又かへし
あか佛かほくらへせは極樂のおもておこしは我のみそせん
正月七日宰相內侍に
老らくも子日の松にひかれてやけふより若きなをやつむ覽
同人ゆきのかみのむすめけさうしける人に
とけかたき下ひもしても心みよ思ふ心のゆきのしまゝて
もとのめをやむことなき物に思ひなから又しる人お
ほかりけるにもとをはしのかたにて物語なとして曉
に歸たるにいたの上にさゆはかりおかれてひえにけ
りとてえしけれは仲文
ことわりや下はけに祉ひえつ覽君にしくへき思ひなけれは
物へまかりけるに女にわすれ給なといま秋はかなら
すまかりかへりなんとゝへりけれは
またすとも秋こさらめや初鴈の雲井になかん聲をこそ思へ
東三條院にておはたの右大臣中宮夜人々花雪のこと
しといふ題をよませ給ふけるに
降まよふ花か雪かと辿るまにわか世のいたくふけも行かな
三條殿にてきんたうの宰相の八月はかりの月のあか
き夜前栽の花み給ふにおなし人
常よりもこよひの月はさやかなれ秋の夕もたとるはかりに
ある本に大りの宮やけておはしまし所なしとて一宮
にわたらせ給ひて又ほかへかへらせ給ふに白かれの
はちすにこかれのはくを露におきてめしゝに
思ひをける蓮の露の玉さかにかたみにかよふひかり共みよ
かうつけのかみにて下りけるに美濃國うろまのわた
りにて
行通ひさためかたきは旅人の心うろまのわたりなりけり
三條殿松かしつきつくろはせ給ふ野分にたふれてれ
をさかさまにてあるをまゐりてみるに
その上は千世をもわかす祈りこし松なくならんとやは思し
仲文藏人になりし時衞門の內侍にくしなかりてかへ
すとて
祈事にかくし叶はゝねくたれのおとろの髮も宥めてんかし

かへし
ねくとてもよからぬ事はきく物か世にうるはしき神の心は
れせい院の御心ちのさかりにまひよらせよと藏人に
成しかはさいなめはいとたえかたししらぬ事なけれ
はなほいとたえかたしとて衛門の内侍に
追々は如何はすへきしらはまひ立まふへくも思ほえぬよに
かへし
あなさかな斯る事をや駿河舞君かしるへにたかへてをへよ
藏人にてやむことなき人のつほねを立きくにとのも
つかさしてたゝ今まゐりてといはせたる人ありしか
しはしありていとなれかほにうちたゝけはそれかと
てあけたるに入て臥ぬいとゝさらにえいはぬにから
うしてつほね人をみつけて
雲かゝるさ山に生る松なれやねさして人にあひかたき身は
かへし
くつれゆく岸に生たる松よりもねさしあやうき心ち社すれ
宮つかへ人またこと男かよふときゝてひさしくいか
ぬを思ひ出てさときてきたれは月あかきになかしま
水なといとおかしけれはとみにものほらてなかめゐ
たるに女なとかさてはといへは
比へはやこの中嶋のおきつ浪こすとはたれか恨みさるへき
此女のはらに女子のあるをさためなしと思てとはね
は
人しれすくちぬる物にさほ山のはゝそからちる木葉なり鳬
此女は但馬のもの也けり同所の式部の君といふとゐ
たりにきあひて思給ふやとゝへは式部人はいへは但
馬の君
我ははたせちに思はすと人心いひそとめつるしたに通はん
しもつけのかみすけあきらといひかはしたはふるゝ
とありてすけあきら
我頼むかさきのもとのしるしあらは過にしもとをかすしにあら南
かへし仲文
かさきをはかけすもあら南朝夕に宮のめ祈る已れなこひに
とて宮のめの所はしけしきけとてかすめてかきたり
めやみやにさふらふ四君かへし
たか月のいや／＼高き成まさはけすにはくれし宮のめの物
又仲文
宮のめのおろしにいへと幾許のかさ勝りてはあらしそ思ふ
つくしに四わうし山といふ題をいとよみかたき題な
りといひけるを
老ぬ共さしてかくして入へきをしわうし山は顔にたまれは
殿にさふらひてすけあきらとふなせうようせんとて
さためてすさのみかにぬしはふなはいかにといひた
れはいまかひにこそはつかはさめといひたるにやる
めに近く我をはをきてあふみ鮒かひつやりつといふは眞か
かへしすけあきら
つくまえの鯉はみゆると命をそかひつやりつるの郡に
かよふ宮つかへのさとのいへかひをきて尋ねけれと
もえあはて後にいへは三輪の山もとゝきこえしとい
へは
三輪の山世の行末はいかになれは處々にすきたてりけん
女なくなりてなけく比けさうせし人五月五日をこせ

たる
思ひやるよもきのやとはさひしくて涙のつまに何をかた覧
かへし仲文
けふしもあれ蓬の宿を問人はもしあやめにもな覧とや思ふ
かへし
菖蒲とは誰かかけ共思ふへき白きねなかみふきことなせそ
又かへし
昔よりけふの菖蒲は轉寝をいかにひかるゝ物とかはしる
女
ひきつれてれはうきにこそみかくれめけふはかり［　　］
しまのかみとゆきのかみ少將になり給ふにまゐりあ
ひてかはらけとりてさすに
播磨瀉こなたかなたにこく舟はかたほなりともおしむ我哉
大入道殿つかさをとられて又の年なりかへり給ひた
りし
去年は思ふ今年はみれは神無月しくれかはれる心ち社すれ
仁和寺の御はての日物いみにさしこもりてゐたるに
たて文にて法しわう子けふすくにゐましき御文なり
とてさしをきたるをみれはくろみ色のしきしにあや
しき手して
これをたにかたみと思ふに都にはかへやしつらん椎芝の袖
後にきけはとうのわたりよりある成けりと聞ていみ
しうあやしかりけり同しことなれとかくこそはと思
ふ
惜まれは衣のうちにかけてみん玉のきすとやならんとす覧
かよひし女のあまに成にけるに
今はなをふところひろき衣手に人をはくくむ心あらなん
山里にかよふ人花みにいきしまゝに久しうこれは
櫻花みるとていにしほとふれは思はぬ山も思ひこそやれ
中宮御前よりいしをつゝみてこれは何そとてなけ出
させ給へり
苔むしていはほとならんさゝれ石はわか獨みる心あたらし

源順集

五日菖蒲につけてあるところにたてまつらせける

進上こゝろさし

深ふかき

右葉之菖蒲草みきはのあやめくさ

千年五月五日可猗ちとせのさつきいつかゝるへき

にしの四條の宮の源中納言のおまへにちいさき紅梅をうゑさせ給ひたりけるをはしめてはな咲たるとし悦てをのこともおの〳〵文字ひとつをさくりてよむ哥の序さくりてうもしをたまはれり

あはれ春のはしめはひかしよりといふことを西の宮よりなりけりとはこの梅のはなをみてなんおとろかれけるこれによりわかおとゝの君やまとことのをのこともをひきつらねてさふらはせ給ひからたけの笛の一よあそびあかさせ給ひかゝるふしをたゝにやはすこすへきとてこのこ木のおひ出てし萬代の老木にならんまての心はへをよませ給ふに

白波のしらぬ身なれと大淀のおほせことをは如何そむかん

梅津河このくれよりそなかれける嬉しきせゝはみえん水底

あめつちの哥四十八首もと藤原有忠朝臣藤六なんよめる返しなりかれはかみのかきりにそのもしをすゑたりこれはしもにもすゑ時をもわかちてよめる也

春

あらさしと打かへすらしを山田の苗代水にぬれてつくるあ

めもはるに雪まも青く也にけり今こそのへの若菜[にイ]つみてめ

筑波山さける櫻の匂ひをはいりてをられとよそなからみつ

ちくさにもほころふ花の錦[にほひイ]哉いつら青柳ぬひしいとすち

ほの〳〵と明石の濱を見渡せは春の波わけいつ[みイ]ろ舟のほ

しつくさへ梅の花笠しるき哉雨にぬれしときてやかくれ[しイ]し

そらさむみむすひし氷打とけて今やゆくらん春のたのみ[つイ]そ

らにもかれ菊も枯にし冬のゝのもえにける哉を山田のはら

夏

山も野も夏草しけくなりにけりなとかまたしき宿の[のへイ]かる萱

待人もみえぬは夏も白雪や猶ふりしけるこしのしら山

かた戀に身をやきつゝも夏虫のあはれわひしき物を思ふか

はつかにも思ひかけては木綿襷かもの川波立よらしやは

みをつめは物思ふらし時鳥なきのみまとふさみたれのやみ

れをふかみまた顯れぬあやめ草人の[をイ]戀ちにえこそはなれね

誰により祈るせゝにもあらなくに淺くいひなせ大麻にはた

庭みれはやほたて負て枯に鬼からくしてたに君かとはぬに

秋

くれ竹の夜さむに今はなりぬとやかりそめふしに衣かた敷

もかみ河いな舟の身は通はすておりのほり猶さはくあし鴨

きのふこそゆきてみぬ程いつのまに移ひぬらん野への秋萩

りんたうも名のみ成けり秋の野の千種の花の香には劣れり

結ひをきて白露をみる物ならはよる光るてふ玉もなにせん

ろもかちも船もかよはぬ天川七夕わたるほとやいくひろ

このはのみふりしく秋は道をなみわたりそわふる山川の底

けさみれは移ひにけり娘部志我にまかせて秋ははやゆけ

冬

ひをさむみ氷もとけぬ池水やうへはつれなくふかきわか戀

とへといひし人はありやと雪分て尋ねさつるそ三輪の山本

いつこ共いさやしら波立ぬれは下なる草にかけるくものい
ぬる毎に衣をかへす冬の夜の夢にたにやはきみかみえこぬ
打渡しまつ網代木にいとひをのたえてよらぬはなそや心そ
へみゆみの春にもあらて散花は雪かと山にいる人にとへ
炭竈のもえ社まされ冬寒みひとりおきひのよるはいもねす
ゑこひする君か箸鷹霜かれの野になはなちそ早く手にすゑ

思

夕されはいとゝ侘しき大井川かゝり火なれや消かへりもゆ
忘れすも思ほゆる哉朝な〳〵しか黒かみのねくたれのたわ
さゝかにのいをたに安くねぬ比は夢にも君に逢みぬかうさ
るり草の葉にをく露の玉をさへ物思ふ時は涙とそみる
思ひをも戀をもせしの祓すと一方なら[てイ]てはて〳〵はしお
ふく風につけても人を思ふ哉天津空にもありやとそおもふ
せは淵にさみたれ川の成ゆけは身をさへうみに思ひ社ませ
よしの川そこの岩波いはてのみくるしや人を立ゐこふるよ

戀

えもいはて戀のみまさる我身哉いつとや岩におふる松かえ
のこりなくおつる涙は露けきをいつらむすひし草村のしの
えもせかぬ涙の川のはて〳〵やしひて戀しき山はつくはえ
小倉山おほつかなくもあひみぬかなく鹿はかり戀しき物を
なきたむる涙は袖に滿汐のひるまにたにもあひみてしかな
れうしにもあらぬ我こそあふ事を照射の松のもえ焦れぬれ
ゐてもこひふしても戀るかひもなく影淺ましくみゆる山井
照月ももるゝ板まのあはぬよはぬれこそまされかへす衣て
雙六盤の哥これもありたゝかよみはしめたるによみつく
(舊本此間有圖今從傳寫移置次頁)

祝

みそきするせみのを川のきよき瀬に君かよはひを猶祈る哉
天暦五年宣旨有て初て大和歌えらふ所[をイ]梨壺におかせ
給ふ古萬葉集よみときえらはしめ給ふ也めしおかれ
たるは河内掾清原元輔近江掾紀時文讃岐掾大中臣能
宣學生源順御書所預坂上茂樹[望城イ]也藏人左近衞少將藤原
朝臣伊尹其所之別當にさためさせ給ふに神無月のつ
こもりに御題を封してくたし給へるにいはく神無月
かきりとや思ふもみちはのと有各哥を奉る
神無月はては紅葉もいかなれや時雨と共にふりにふるらん
又くたし給へる判にいはく。紅出葉の神無月にはて
ぬと思ひて散すくるをしりにけり。いかなれやとお
ほめくさためなし。するつかたたをやけきさまなれ
となよ竹のよゝのふることにもなん成にけり。
佐保山はせ寺にまうてゝ
千鳥なくさほの河霧さほ山の紅葉はかりはたちなかくしそ
應和元年勘解由の判官の勞六年いにしへになすらふ
るにかくしつめる人なしつかれたる馬のかたをつく
りてつかさの長官朝成朝臣に給ふにくはへたるなか

哥

あらたまの　年のはたちに　たらさりし　ときはの山の
やまさむみ　風もさはらぬ　ふちころも　二たひたちし[こ草にイ]
[あきイ]秋きりに　心も空に　まとひそめ　みなしら雲と
なりしより　物思ふことの　葉をしけみ　けぬへき露の
[よるハイ]夜半に起て　夏はなきさに　もえわたる　螢を袖に
ひろひつゝ　冬は花かと　みえまかふ　木のま〳〵に

ふりつもる　雪をたもとに　あつめつゝ　ふみゝて出し
みちはなを　身のうきにのみ　ありければ　こゝもかしこも
あしればふ　下にのみこそ　しつみけれ　たれこゝのつの〔ヘイ〕
さは水に　なく鶴の音は　久かたの　雲の上まて
かくれなく　たかく聞えて　かひありと　いひなかしけん
われはなほ　かひもなきさに　みつしほの　世にはからくて
すみの江の　松はむなしく　老ぬれと　みとりの衣
ぬきかへん　春はいつとも〔ミイ〕　しらなみの　波路にいたく
ゆきかよひ　ゆもこりぁへす　なりにける　船のわれをし
君しあらは　あはれ今たに　しつめしと　緌のつり繩
うちはへて　ひくとしきかは　ものはおもはし

應和元年七月十一日によつなる女子をうしなひて同年の八月六日に又いつゝなるをのこゝを失ひて無常の思ひ事にふれておこるかなしひの涙かはかす古萬葉集の中に沙彌滿誓かよめる哥の中に世の中を何にたとへんといへることをとりてかしらにをきてよめる歌十首

世中を何にたとへんあかねさす朝日まつまの萩のうへの露
世中を何にたとへん夕露もまたてきえぬるあさかほの花
世中を何にたとへん飛鳥川さためなきよに瀧津水の泡
世中を何にたとへんうたゝねの夢路はかりに通ふたまほこ
世中を何にたとへん吹風はゆくゑもしらぬみねのしら雲
世中を何にたとへん水はやみかつくつれ行きしのひめ松
世中を何にたとへん秋の田をほのかにてらすよひの稲つま
世中を何にたとへんにこり江の底にならてもやとる月影
世中を何にたとへん草も木もかれ行ころの野へのむしの音
世中を何にたとへん冬をあさみ降とはみれとけぬるしら雪

ある所の前栽合の哥の判ある所に男女かたわきて御前の庭のすゝき荻しらにしをにくさのかうをみなへしかるかやなてしこ萩なとうへさせ給ひ松虫鈴虫をはなたせ給ひて人々にやかてその物ともにつけて歌を奉らせ給にをのか心々に我も〳〵とあるは山里の垣れにさをしかの立よりあるはかきりなきすはまの磯つらにあしたつのおりゐるかたをつくりて草をもおふし虫をもなかせたる仰ことゝて花の有樣むしのすかたいつれも〳〵いとおかしかめり哥のおとりまさりはさためてやはあるへきたれしてかさため申さすへきと仰給にこれかれまうすさきのいつみのかみ源順朝臣なんおほやけには梨壷の五人かうちにめされ宮にはおもと人八人かうちにてさふらひし人也これをめしてこそさためられんによろしからめと申によりてかれて其事とはなくてこよひすくすましとまめことなんあるとてめしたりたみのつかさたたすつかさのおほいすけたちこなたかなたにさふらひ給ひかゝの掾橘のまさみちによみあけさせ順朝臣にことはらせ學生ためのりに今日のことをかきをかせ給ふなかにためのりなん源といふ人にもあらす千種に匂ふ花のあたりにはもき木のやうにてましりにくゝ侍れともやんことなくさふらふへきみやまのふもとよりおひ出たる草のゆかりにて仰ことのいなひかたさにみつくきして書しるして奉りおく其哥とも順朝臣さため申さる處かくなん

すゝき　　　　侍従

花のみなひもとく野へのしの薄いかなる露かむすひおき劍

源すけまさの朝臣

秋風になひく夕の花すゝきほのかにまねく立とまりなん

このすゝきの哥は。すけまさかなひくまねくといへるわたり。らうたけたるやうなり。今しはしそ思ひあはせまし。

こなたしもなひき劣れる花薄玉まくくすのまくる威へし

帥のきみ

をみなへし

玉のをゝみなへし人のたえさらはぬくへきものを秋の白露

わけのありたゝ

くらふ山麓のゝへの女郎花露のしたよりうつしつろかな

此女郎花の歌は。ありたゝの朝臣のさか野を打い〔すきてイ〕て。くらふ山までもとめありきけんもあちきなし。又やまと名に。いひにくき事をこそへてはよめ。

萩

兵部君

我妹子か女郎花てふあたらなを玉の緒にやは結ひこむへき

橘のもちきの朝臣

さをしかのすたく麓の下萩は露けきことのかたくもある哉

萩の葉にをく白露のたまりせは花のかたみの思はさらまし

此萩の哥は。たれも〳〵〔〳〵もイ〕おなしさまなれと。すたく麓のなといへるわたり。少いひなれたり。もちきの朝臣の。はきの葉におく露と〔しらつゆのなとイ〕いへるわたり。めつらしからねと。哥めきたり。

弁君

露を淺み下葉もいまたもみちれは赤くもみえす勝負の程しらに

わかれゆく秋をししらに鳴鹿は命をさへやとゝめかぬらん

藤原のもりふむ朝臣

あたしのゝ草村にのみましりつる匂ひは今や人にしられん

此もりふむ〔のイ〕朝臣のあたし野は。野のなたしかならねはにやあらん。ありとしる人すくなし。又かみに花もみえて。しもに匂ふといふにつけて。

覺束なあたしのみれは花もなし空に匂ふといふや何そも

此哥。ことなることはへはなけれとも。添ところすくなきに。今一もしをくはへてしらにといへる所。すこしまされけり。

左衛門君

くさのかう

床夏の露うちはらふよひことに草のかうつるわか袂かな

源のためのり

野へことに花をしつめは草々のかうつる袖そ露けかりける

此草のかうの哥さまは。左衛門の。今少やはらかにいはれて侍るめり。されともかみのくさは。もとの草なから。しものかうをのみそへたれは。人にかくれん人の。身かくして。おもてはあらはならん心ちなんしける。

ひうかのかみ

しをに

千くさのか移る袂も有けるをなと朝顔をかくさゝりけん

しら雲のかゝりしをにも秋霧のたてはや山は空にみゆらん

藤原もろふむ

高砂の山のをしかは年をへておなしをにこそ立ならしなけ〔けれイ〕

此しをにの哥は。これもかれもおなしさまなれと。秋霧のたてはや山は空にみゆらんといへるわたり。

河霧の麓をこめて立ぬれは空にそ秋の山はみえける
といへるふることを思ひあはすれは。假おとりにな
んみえける。

麓とも峯ともみえす秋霧の立なはなにか空にみゆへき
をき　すけのきみ

そよと吹秋の荻たになかりせは何につけてか風をしらまし
源朝臣すけかぬ

をきの葉の末こす風の音よりそ秋のふけ行ほとはしらるゝ
此荻の哥。身つからも見給へ。人してもよみあけさ
するに。

荻の葉をそよかす風の音高み末こすかたは少しまされり
なてしこ　もとき

山賤のかきれの外に朝夕の露にうつるなゝてしこの花
藤原たかたゝ

秋深く色移りゆく野へなから尙とこなつにみゆるなてしこ
此なてしこの哥は。いつれも〳〵いとよくいはせて
侍り。但

秋も尙とこなつかしき野へ乍ら疑ひおける露そはかなき
かるかや　こはいと

行秋の風にみたるゝかるかやはしめゆふ露もとまらさり鳬
藤原たゝのふ

移しうへは東のまもなく苅萱はみちよの數を數ふはかりそ
此かるかやは。たゝのふかみちよの數なといへるわ
たり。秋の野にかるかやにはあらて。春の野に咲け
ん物のはなゝん。おもひいてられける。
言のはゝこはくみゆれとすまひ草露には映る物にさりける

むしのね　但馬

浅茅生の露吹むすふ木枯にみたれてもなくむしの聲哉
橘正通

秋風に露を涙となく虫のおもふ心をたれにとはまし
此虫のねの哥。露吹むすふ木枯のなといへるわた
り。いひなれたりなとさたむるほとに。正通か申や
う。木枯とは冬のあらしをこそいへ。この比の風を
いはゝ。雨をも時雨とやいふへからんといふをきこ
しめして。みすのうちに。これかれかゝる事をいふ
ことをこそは。ためしにひかめとて。

木枯の秋の初風ふかぬまになとか雲井にかりのおとせぬ
又

我門のわさ田の稻もからなくにまたき吹ぬる木枯の風
なといへるは。冬の嵐を秋の初風といへるにやあら
ん。そのわたりをこそさため申されめとあるに付て
又々み給ふれは。

なく虫の涙になせる露よりも露吹むすふかせはまされり
抑順。梨壺には奈良の都のふる哥よみときえらひ奉
りし時には。すこしくれ竹のよこもりて。行末をた
のむおりも侍りき。今は草の庵に。難波の浦のあ
しのけにのみわつらひて。こもり侍れは。すへて
われ舟の引人もなきさに。すてられおかれたらん
心ちなんしける。かゝるうちにも。このとしころ
は。

しらけゆく髮には霜やおきな草ことのはも皆枯はてに鳬
かく侍れは此哥ともさため申せるさまとも。いとい

ひしらすことやう也。猶おまへにて定させ給はんや。
よからんと申をきゝて正通か申すやう。

霜かれの翁草とはなのれとも女郎花にはなほなひきけり

今日の判をみれはなといひたはふれて。まかりいてなんとするほとに。みすの内をきけは。帥のすけ橋のなかきといひし人のむすめ。これかれなとさふらひて。夜のふけゆくまゝに。さやけさまさることの音をしらへあひたり。おまへの庭のおもをみれは。月影のおほろなるに。花のいろ／＼にうちみたれたり。風のよさむになりゆくに。虫の聲々もなきあひたり。かゝることともをきゝしのひすてゝ。今はまかり出なんとて。萩の下露に衣手のぬるゝもしらす。おきゐておほみきたふなりときこしめして。にへ殿より。みこの宮のくら人とところのさうしき藤原のたかたゝして。おほんくた物のおろしに。政所よりは長門の權守源有忠の朝臣して。さかなに給ふへき物をさま／＼色々に給へり。これかれみなたへあきて申やう。またあかぬ物は。おまへの花の色々と虫のこゑとなん有けるなと申て。やう／＼まかり出ぬ。爲憲ひとりあくるまてさふらひて。きのふよりけふまでの事を書しるして奉りおく。天祿といふ年はしまりてみとせの秋の半。長月のしもの十日に今二日おきて。大非にての事なり。

久しくつかさ給はらて式部卿の宮より大盤所に奉つらするなか歌

初の冬(貞元元)かのえさるの夜伊勢のいつきの宮にさふらひて松のこゑよるのことにいるといふ題にて奉る哥の序いせのいつきの宮(規子)秋野の宮にわたり給ひて後冬の山風さむくなりての初はつか七日の夜庚申にあたれりなか／＼しき夜をつく／＼とやはあかすへきとおもほしてみすのうちにさふらふおもと人みはしのもとにまいれるまうちきみたちに歌よませあそひせさせ給ふ歌の題にいはく松の風よるのことにいるこれにつけてきけはあし引の山おろしにひゝくなるまつのふかみとりもうは玉の夜はにきこゆることのおもしろさもひとへにみなみたれあひゆき通ひてむへもむかしの人松風に入といふことの詩句をつくりおきそめけんとなむおもほえける順かかしらのかみ夏も冬もわかぬ雪かとあやまたれ心のやみはからにも大和にもすへてつきなくおまへのやり水にうかへるのこりの菊に思ひあはすれはいつみはかりにしつめる身はつかしくなにたかききぬかさをかにてるもみちはを見わたせはかゝるまとゐにさふらふことさへまはゆけれとさもあらはあれ人こそきゝてそしりわらはめかけまくもかしこきおほんかみは哀ともめくみさいはひ給ひてん今いにしへをみるかことくこよひの事を後の人もみよとて書しるして奉るは仰ことにしたかふ也

夜を寒みことにしもいる松風は君にひかれて千代やそふ覽

天暦御時御屏風哥立春

けふとくる氷にかけて(かへりてイ)そむすふらし千年の春にあはん契を

西宮源大納言大饗の所に立へき四尺屏風調せらるゝ
れうの哥元日

きのふまて冬籠れりしみよしのゝ霞はけふや立もそふらん（雪にこもイ）

子日する所

岩に生る子日の松もたれしあれは千年の春は我におほせよ

二月はつむまいなりのやしろにまうつる人に

稲荷山尾上にたてるすき〳〵にゆきかふ人のたえぬけふ哉

あら田うつ所

おりたてはそら迄ひつる袂さへ何うちかへすあら田成らん（〔うイ〕）

三月花つみの所

いかにして花をつまゝし花のかを袖にとめくるつみも祉うれ

小弓射る所

春ふかき山にいれはや梓弓ふく風にさへ花のちるらん（やとイ）

四月神まつり

神のます杜の下草風吹はなひきてもみなまつるころ哉

五月ともしする人あり

時鳥まつにつけてやともしする人も山邊に夜をあかすらん

六月祓

祈事をきかすあらふる神たにも今はなこしと人はしらなん

七月七夕まつる所

七夕は空にしるらんさゝかにのいとかくはかりまつる心を

十五日ほんもたせて山寺にまうつる人

けふのためをれる蓮のはをひろみ露おく山に我はきにけり

八月あふ坂の關に駒むかへにゆく

なにゝ我夜半にきつらん相坂の關明てこそ駒もひきけれ

人の家のつり殿にまらうとあまたありて月をみる所

水の面に宿れる月ののとけきはなみゐて人もねぬ夜（たれはか）

九月小鷹狩する所

里遠みくねなは野へに留るへし稲おほせ鳥に宿やからまし

月の夜衣うつ所

風さむみなく鴈かねにあはすれはよるの衣はうちまさり皃

十月志賀の山こえの人々

なをきけは昔なからの山なれとしくるゝころは色かはり皃（〔まさりイ〕）

十一月加茂臨時祭みる車

ちはやふるかもの河霧きるなかにしるきはすれる衣也けり

十二月佛名をこなふ家

冬山の雪まにこれるあはれ木の上にそくゆる殘すつみなく（〔かくすイ〕）

藤原のとほかすの御四十五日のいみたかへに家にま
うてきてすむあひたに正月十五日子日にあたるあし
たかゆのうへに小松をゝきてつけて侍る

時しまれけふにしあへる餅かゆは松の千年に君もによとか

天德四年三月晦日内裏哥合の歌うくひす

氷たにとまらぬ春の谷風になと打とけぬうくひすの聲（またイ）

山吹

春ふかみ井手の河波立かへりみてこそゆかめ山ふきの花

戀

たかために君をこふらん戀わひて我は我にもあらす成ゆく

式部丞清原元輔かおとうとの學生もとされ字清用み
まかりて後はふりするまてしらすしておそくきゝに
たるよし兄の元輔にいひつかはす

宵のまの空の煙と成にきとあまのはらからなとかつけこぬ

應和二年正月東宮の藏人に成て月のうちに式部丞に

うつれりおもひなのへて右近の命婦につかはす
ひく人もなしとわひつる梓弓今そうれしきもろやしつれは
同年十二月前朱雀院の姫宮の御裳きのれうに御屏風
調せさせ給ふ人々哥奉らせ給ふ哥青柳
露を重みたえぬはかりの青柳はいくめかけたるこかれ成覽
四月卯花さける所
我宿のかきれや春をへたつらん夏きにけりとみゆる卯花
旅人時鳥をきく
おほつかなゆくたひ人〔にイ〕をたれとてか山時鳥まつなのるらん
池のほとりに鶴たてり
池水になひく玉藻のそこ清み千世さへしろき鶴のかけ哉
芦たつの影のみ浮ふ池水は千代にすむへきしるしとそみる
初鴈をきく人
里とほみ雲路かきわけ水くきの跡かとみゆる鴈はきにけり
山川にもみちなかる
水上に風や吹らし〔しくれふるイ〕山川のせゝにもみちのいろふかくみゆ
五月あめふる日東宮にさふらひて雨の心の哥を奉る
とてもしひとつをさくりてあもし給はれり
雨ふれは草葉の露もまさりけりよとのわたり〔のイ〕を思ひ社やれ〔ほゆる哉イ〕
内裏に女親王たちの御れうに月次の繪かゝせ給ふて
殿上人に哥をおしつけさせ給ひ有人のれうによめる
四月卯花咲る家に女郭公をまつ
郭公おき〔きかイ〕てまつ夜は明にけりほのにうの花白くみえゆく
九月大ゐ川に人々あそふにもみちゝる
もみちはを柚山風の吹つめはふれにしくれの秋はきにけり
人の家の池にはちすおひぬなはおひたり
蓮たにおひさらませは水の上に露おき皃といかてしらまし
年ことに春はくれとも池に生るぬなはは絶ぬ物にさりける
康保五年女五男八親王の御屏風の哥田舎の家に女と
ものいふ男あり
道とほみ人もかよはぬ梅花君には風やわきてつけつる
きしのなくを〔あれイ〕きゝて山の櫻をみる
かりにくる人もこそきけ春のゝに朝なく〔てイ〕雉のちかくある哉
山さくら木の下風し心あらはかをのみつけよ花なちらしそ
卯花さけるに郭公をきく
うの花のならまくを〔ほイ〕しき山里に時鳥さへきつゝなくなり
みあれ
わかひかんみあれにつけて祈る事なる〳〵鈴も先聞〔ゆなりイ〕えけり
人の家に泉のつらにすゝむ
山の井をかつむすひつゝ夏衣ひもうちとけてすゝむ比かな
人の家に女二三人出て曉花みる
花の色やよのまの風にかはるとて先おきなから出て社みれ
海のつらにしほやきあみひく
みわたせは蜑のたくなはなのみしてたつは鹽やく烟なり皃
九月卅日の日男女野へにいてゝもみちをみる
いかなれは紅葉にもまたあかなくに秋果ぬとはけふをいふ覽
雨の中に殘菊をみる
しくれつゝ移ろふみれは菊の花色をしめふる雨にそ有ける
池に水鳥あり
朝氷とけにけらしな水のおもにやとるにほ鳥ゆきゝ鳴なる
雪ふる日あつまのかたにおひつられたり

たふ

春の暮

心して風はふかなん花の散かたにや春もゆくと尋ねん

秋　月

久かたの空さへすめる秋の月いつれの水にやとらさるらん

あはぬ戀

あはれてふ言のはも社聞えけれよそにきえなん露の悲しさ

あひての戀

我なからくらへわひぬる心哉今さへ猶やこひしかるへき

宰相中將藤原朝臣たてまつる漢書の光武記よみをふる日わたりかゆの饗まうけて文つくる又のあしたいはひの心ある哥人々よみ侍るに

老ぬれは同し事社せられけれ君は千代ませ君〔は〕千代ませ

藤大夫されまさの朝臣の家に五月朔日なるに庚申するに曉に成て鳥の鳴をきゝて女方よりいひ出す

なく聲を鳥たにかふるものならは郭公と〔そイ〕てきゝあかさましかへし

君きかはなけ時鳥くろかみのふゝきになれは我もおとらす

一品宮くら人とあふきつくの日に御碁あそはして宮まけ奉り給ひにけれは七月七日に奉らせ給ふあやの文にもしをゝりてはれる哥

あまつ風あふくともゆめ霧たつなこは七夕のおれる錦〔ころもイ〕そ

大納言源朝臣の枇杷殿にて菊をもてあそひてくもしをえたり

うつろはん時やみわかん冬の夜の霜と〔もイ〕ひとつにみゆる白菊

右馬頭遠頼朝臣家にきたりやとれる比もちつきのおほんまひいぬる秋日かす冬になりてひき奉るむかふなるつかさの官人ともに酒なと給ふついてに望月の駒

君たにもあれたる宿にやとらすはよそにそみまし望月の駒

八月左大臣後院にて宴をなす夜の哥翫水上月

水きよみやとれる秋の月さへや千世まて君とすまんとす覽

岸のほとりの花

色ふかき〔くイ〕岸のまに〱さける花あさき波にはをられさり鬼

草むらのうちの虫

草村の底まて月のてらせはやなく虫のねのかくれさるらん

中の御門の家の南に中務すむ六月また梅の枝につきたるを折て北の家に送れる詞にいはくこゝのはまたかくなん殘たるとすなはち云心

非堰にはさはらす水のもるにあへは前の梅つも殘らさり鬼

南のかへし

泉たに〔にもイ〕殘らすいかてもりにけん堰のふる杙くひものかぬに〔あかぬこイ〕

ならひて北返し

いつみには〔もイ〕おらぬ籬の嶋ちかみ波のこえつゝもる〔をイ〕と社きけ

南のかへし

打こゆる波の音をはもらぬよりしまきの風そ吹かへさまし

又北のかへし

花を社人やをるとて〔もイ〕とかめしか數ならぬみは何にかはせん

貞元元年初齋宮侍從のくりやに御座する間に八月廿八〔五イ〕日庚申の夜人々あそひいはひの心をよむ

神代より色もかはらて竹川のよゝをは君そかそへわたらん

おなし年の九月はつる日齋宮のゝ宮の御前に前栽う

へて又よむ

たのもしなのゝ宮人のうふる花しくるゝ月にあすはなる〔へすイ〕共

此歌の返事女房

あすよりは時雨にかゝる花をうへてのへやるへくもあらぬ秋哉

かへし

君か爲今年の秋はなけれはやのへやるへくもあらすといふ覽

永觀元年一條の藤大納言の家寢殿の障子に國々のなある所を繪にかけるにつくる哥

夏鏡山

なにしおへは曇らさりけり鏡山むへこそ夏の影にみえけれ

秋大ゐ川

大井川杣に秋風さむけれはたつ岩波も雪とこそ見れ

あまのはしたて

滿鹽ものほりかれてそかへるらしなにさへたかき天の橋立

八十嶋

やそ嶋を誠にいかてみてし哉春のいたらぬうら〔しまイ〕はあるやと

うきしま

さためなき人の心にくらふれはたゝうき嶋はなのみ成けり

たかさこ

うちよする浪と尾上の松風と聲高砂やいつれなるらん

たこの浦

春くれは田子の浦浪うらよくて出まさりけりたこの浦波

おほよと

いせの蜑ととひはきかねと大淀の濱のみるめはしろくそ有ける

しかすかのわたり

ゆふか〔ヨイ〕よふ舟路はあれとしかすかの渡は跡もなくそ有ける

天元二年の秋おろかなるをのこさうしは平の兼盛するかの守にてくたるにやる哥二首

時しまれをしかの橋を秋ゆけはあつまをさへそ戀渡るへき

思ひわひ己か舟々ゆくを舟たこのうらみてきぬといはすな

しもつふさの守藤原のすゑたかゝ國にくたるに中納言のいへに餞給ふによめる哥

君ははや人なみ〳〵に出立てしつみにしつむ我にあふなよ

伊勢齋宮〔規子内親王〕の群行の後長奉送使ひろはたの中納言京にかへり給ふあした齋王の御前にて饗まうけ祿等給ふに男女哥よむに奉る

神のます山田の原の鶴の子はかへるよりこそ千世は數へめ

天元二年十月初の亥の日右大臣殿の女御ひをけともにもちゐくたものもりてうちの女房ともにつかはす次てに大臣殿にもひをけ一つ奉らせ給ふ銀にてゐのこかめのかたを作りてすゑさせ給へるにくはれる哥

渡津海の浮たる嶋をおふよりは動きなき世をいたゝけや龜

同年の五月一條藤大納言石山にまうてゝ七日さふらひたまふ同日人の詩つくり哥よむにたへたるあまたあるいとまのひまにからの哥作大和哥よめるに侍從誠信朝臣さはりありてとゝまれり後にかの哥ともをみて身つからゆきて作り侍らてこれにまた作りくへてとすゝめしむるに中に三河の權守惟成朝臣の江山此地深と云詩に客帆有月風千里仙洞無人鶴一雙といへると内記源爲憲朝臣なきさの松といふ題をよめる

老にけるなきさの松の深緑しつめるかけよそにやは見る
といへるをふたつの和すといへる和歌
ふかみとり松にもあらぬ朝あけの衣さへなとしつみ初けん
同年十二月の比ほひ依宣旨奉る御屏風哥子日の野へにあそふ人
小松ひく人にはつけしふか緑こ高き陰そよそはまされる
梅花ある人の家
朝氷吹とく風は寒けれといそきて梅ははや咲にけり
春の野のかすめるに梅花あり小鷹すゑたる人行
梅か丶をかりにきてをる人やあると野への霞はたち隠す覧
人の家に櫻柳あまたあり
鶯はわきてくれとも青柳の糸は櫻にみたれあひにけり
花の木の本に人々あそふやり水のもとに山吹さけり
山吹の花の下水さかれともみなくちなしとかけそ見えける
河風はさえんかたなく山吹のちりゆく水をせきやとめまし
松の木に藤か丶れり男女むれゐたりあるは折て行
住の江の岸のまつさへおもほゆれ身にさへか丶る藤波の花
松風の音にき丶つる藤波は折つ丶かへるなにこそありけれ
紫の藤咲松の木すゑにはもとのみとりもみえすそありける
七月七日女庭におりゐて七夕まつる男來てすい垣のもとにたてり
彦星を待とはなしになにすとて天の河霧いそきたつらん
七夕にけさはかしつる〔てイ〕麻の糸をよるは祭ると人はしらす〔はまかせしイ〕や
天川わたし守にも成にしか七夕つめにけふをまたまし
なにしおへは鵲の橋わたす也わかる丶袖は猶やぬるらん
八月十五夜人の家に蓮有木のはうかふ月の影落たり男女心々にあそふすたれのとにゐてものかたりするもあり
蓮葉にもみちもしける水の面に底まてみよとてらす月影
水のおもに照月なみをかそふれは今宵そ秋のもなか成ける
秋の夜月あかき木のもとに鹿たてり
月あかきこよひそ數はかそへつる常も鹿たつ木とはみれ共
秋の丶に色々の花もみち散まかふはやしのもとにあそふ人々あり鷹すゑたるもあり
もみちゆゑ家も忘れてくらす哉かへらは色やうすく成とて
時雨かと驚かれつ丶ふる紅葉あかき空〔色イ〕をもくもるとそ思ふ〔見しイ〕
池水にもみち丶りうかふ水鳥あり馬にのれる人ゆく空の霧の中に鴈なきてわたる野に狩する人あり
秋霧をわけ行鴈は何なれやおくれて後にまとふけふ哉
池の面に浮ふもみちの唐錦をしといふ鳥そた丶てゐるらし
此歌〔くイ〕を奉らする次てに御ことの給ふる藏人にやる
程もなきいつみはかりに沈むみはいかなる罪の深き成らん
天つ風空に吹あくる暇もあらは澤にそたつはなくとつけ南
天德三年の春能登守になりてくたるに一條大納言の家の人々餞する日の哥
こしの海にむれはゐるとも都鳥都のかたそ戀しかるへき
おなしころ左衞門佐誠信餞する日の哥
神のますけたのみ山木しけくともわきて祈らん君か千年を
おなしころ
をと丶しもこそも今年もをと丶ひも昨日もけふも我こふる君
かきたえてとはぬはうくも思ほえすか丶るにしなぬ身をいかにせん

群書類從卷第二百五十

和歌部百五家集二十三

能宣朝臣集

小野宮太政大臣の七十賀左大臣し給てよませ給ける御屏風の哥

春

たつの住澤邊の芦の下ねとけ汀萠出る春はきにけり

夏

花さかぬ常盤の山の鶯は霞を見てや春を知らん

夏山の木高き陰に立よりて見れは千年の影〔に〕そ有ける

秋〔秋脱歟〕

龜山の岩ほのうへの紅葉はゝちらて秋をそかそふへらなる

冬

春日野のときはの松は霜〔雪イ〕のふる年毎に猶色まさりつゝ

おなしるいの竹のつえにそへ侍る

君か爲けふきる竹の杖なれはまたつきもせす千代そ籠れる

屏風の哥よめと侍るに正月子日松引わかなつむところ

引松の千年の春は春日野の若菜も摘〔まゝ〕む物にやはあらぬ

二月田つくり侍る所

雁金そけふ歸るなる小山田の苗代水のひきもとめなん

三月晦日はかりに花の下にておしみ侍とて

散果る花をおしめは大かたの春さへ暮ることなしそ思ふ

四月山里にうの花咲たる所を旅人とまる

山近みさく卯花を時ならてふる雪とのみあやまたれつゝ

五月五日人の家にさうふゝきて侍り女ともほとゝきす聞侍るに

あやめ草引かけたれは子規ねをくらへにや我宿になく

六月はらへし侍るところ

みそきする川の淵瀬に引綱をおほぬさなりと人やみるらん

七月七日たなはたに物かせる所侍るに

棚機にかせる衣のうち返し別てこひんほとの〔はるイ〕つゆけさ

八月駒迎し侍所

むかへくる人もあるかな關山の駒引かへすかけはしるしも

九月ゐ中の家のいねをとるにかりする人のまうてきたる女とも侍るに

狩にとて我宿のへにくる人はいなおほせ鳥にあはんさや思ふ

十月あしろに紅葉なかれよりたるとゝまりて見侍る〔れイ〕

紅葉はのよれる網代はあかすして過にし秋のせゝ〔にこそイ〕にて有ける

十一月神まつる家

榊葉の霜うち拂〔ひ〕かれすのみすめとそ祈る神の御前に

十二月雪ふるところ
新き春さへ近く成ゆけはふりのみまさるとしのゆきかな
又屏風の哥よめと侍るに春いなりまうてして歸るもの侍り花の陰にてやすむもの有所
さしてくるいなりの山の道遠み花のあたりに宿やからまし
春日野にわかなつみ侍るところ
新き春くる毎に故郷の春日ののへに若菜をそつむ
おなし所にまつりの使のかへり侍るに
八乙女も霞もともにけふしこそ春日ののへに立渡るらし
須磨の浦しほやき侍るところ
すまの浦のもしほの煙春なれはそらに霞の猶や立らん
くれの春ふしの山近き所に人の家侍り
草ふかみまたきつけたる蚊遣火とみゆるはふしの煙なり鳧
すみよしのかたかきて侍る所
住吉の〔のえのイ〕年ふる松のよはひをはかへる〳〵も涙やかそふる
あまのはしたてわたりにあまの侍る
誰爲にわたし初けんよさの海の浦に世をふる蜑の橋立
うみのほとりなる人の家見いたして侍り
漁火のくるれはうかふ影をこそ天津星とそ〔はイ〕いふへかりけれ
末のまつやまに馬のりともおりてやすみ侍る
音に聞すゑの松山けふこそは打くる浪のこえ〳〵すみめ
うきしまのはしわたりして侍る所に
浮嶋と名にきゝくれと涙の上に所もさらすよをそへにける
夏季をくらのやま
紅葉せはあかく成なん小倉山秋まつほとの名にこそ有らし〔けれイ〕
大井川くれくたす人の家侍り男女見侍り
筏おろし明くれ下す大井川みなれそしつる四方の人さへ
さか野にくら人所の人々まかりておまへのせんさいほりいてゝ
秋ことに大宮人のくるのへはさかのことゝや花も見るらむ
人の家にせんさいのつらに侍りて
女郎花にほふあたりにむつなれはあやなく露や心置らん
小野にし侍る山里に人の家の紅葉おもしろきに女とものゐて侍るにかりする人のたかすへてまかりたる
山城の小野の山への里遠みかりのやとりを〔をちイ〕鳥そ鳴なる
くりこま山なる人の家に女とも紅葉見侍り
紅葉するくりこま山の夕かけをいさ我宿にうつしもたらん
うちのあしろに紅葉散なかれて侍る
もみちはの日をへてよれる網代木は錦を橋に渡すとそみる
かくらし侍る
〔やよイ〕みや人のたける庭火のおきあかし聲々あそふ神のきねかも
しかすかのわたり雪ふり侍る舟にのりて侍る
雪によりかへりやせましゝかすかに故郷こひしいさ渡なん
女のもとに春のころほひいかて物いひ侍らんといひつかはして侍るに秋につゆ〔なりてイ〕はかりいはんといひ侍れは
天の川へたつる中のこひよりも久しき秋を〔こひイ〕まちや渡らん
やよひのつこもりかたに雨のふる夜春の暮るをおしみ侍るこゝろをよむに
暮ぬへき春のかたみと思ひつゝ花の雫にぬれん今夜は
人の哥合し侍るによみてと侍れは

霞

霞たに立をくれせは新き春のくるともしらすそあらまし

梅

梅花匂ふあたりの夕くれはあやなく人にあやまたれ〔あらイ〕つゝ

春風

はる風の吹ときかたのうす氷底の玉もゝ今やみたるゝ

岩つゝし

咲ぬれは散事かたき岩つゝし名にはたかはぬ色にそ有ける

卯花

卯花の咲るあたりは時ならぬ雪ふる里のかきねとそみる

子規

時鳥ね覺に聲を聞しよりあやめもしらぬ物をこそ思へ

夏虫

もゆる火の中の契りを夏虫のいかにせしかは身にもかふ覽

蚊遣火

終夜したもえわたる蚊遣火にこひする人をよそへてそみる

萤

東ちにわかゝる萤のみたれつゝ誰爲とかはふきてなひかん

秋霧

秋霧の峯にも尾にも立田山紅葉の錦たまらさるらし

をみなへし

女郎花あたにやみをは思ふらん露の心にあやまたれつゝ

すゝき

吾たにも結ひ置ては花すゝきなへて人をはまねきしもせし

時雨

杣山に立煙こそ神な月しくれをくたす雲となりけれ

初霜

夜を寒み笹の草を見渡せは今朝そ初霜置にけらしな

氷

山川を落くる瀧の音もせす今は氷にとちそしぬらし

同しやうなる事人のし侍るに〔ふイ〕はつ春

隱沼の氷のまより下根さし芦のわか葉も今やとくらん

霞

霞たにたゝすありせは春きぬと何をしるしに人のとはまし

鶯

山高み雪ふるすより鶯の出る初音はけふそなくなる〔きゝつるイ〕

梅

匂をは風にそふとも梅花色さへあやなあたにちらすな

若菜

白雪のまたふる里の春日野にいさうち拂ひ若菜摘てん

櫻

櫻花またきなちりそ何により春をは人のおしむとか知

柳

ともすれは風のよるにそ青柳の糸は中々みたれそめける

子日松

いつしかも引人ともや春のゝに生る子日の松は待らん

蛙

今朝聞は澤の蛙も鳴にけり春のくれにも成ぬへらなり

やまふき

こくれつゝ春の中はに成にけり今や咲らんやま吹の花

歸雁

天の原わきて鳴なる雁金は故鄕尋かへるなるへし

春夜月

花ちらは起つゝも見ん常よりもさやけくてらせ春の夜の月

春　雨

我宿の垣根の草の淺緑ふる春雨に色はそめける

戀

埋れ木のうへはつれなくありなから下には深き戀もする哉

こひ〳〵てあふとも夢に見つる夜はいとゝね覺の恨めしき哉

さりともと頼む心にはかられてしなれぬ物は命なりけり

人しれぬ戀の道なる關守は忍ひにとひしことにそ有ける

旅ゆく人にかりの聲をきゝて

草枕われのみならすかり金も旅の空にそ鳴渡るなる

おほいまうちきみのかつらにて水のほとりの秋の花といふ題よめと侍るに〔にイ〕

水の色も花の匂をけふそへて千年の秋の例とそみる

藤　花

こむらさき匂へる藤の花よりはみつなき空に涙そ立ける

人の屛風に小鳥をすゑこにかひて侍るかたをかきてはへる

さま〳〵に山の古巢はこふらめと此とくらには鳴聲もせす

人の産して侍る所にて

時しもあれ春の始に生出たる松は八千世の色をそへけん

小野宮大まうちきみ月輪寺のさくらの花見侍しに

山櫻千代のはる〳〵ことしより色さき増れ君か〔こもりイ〕見にこは

しはすのつこもりの夜山寺にまかりて侍るつとめて僧のもとよりけふは何事か侍るといひ〔くイ〕て侍しに

人しれすいりきと思ひしかひもなく年も越ける山ちなり鳬

同し山寺にて法師の松引に携〔さそひイ〕ひ侍るにまうてたりし室の前におほいなる松の木の下にて昔住ける人の引ける松なり爰にゐて侍らんと申侍りしに

引そめて世々をへにける松なれと緑の色のあせすも有哉

くら人所のおのことも花見にまかり出て侍るに藏人になりて侍るかもとにつかはしける

花の色をよそに見つゝももろともに折し昔の人そこひしき

爲頼朝臣集

ゐの及ふ山野も近き夕まくれおりゐる雲そしるへなるらし

十一月廿八日前大納言なとしてさけまいりしに

人を社あらましかはと歎きしかわれをは誰か思ひいつへき

とおもひたまへるに今日なんすこしたのもしう侍る

別れては又もあひみんよはひこそなとてなけきし昔とも哉

いとたのもしかりしものをとそ人しれすおもひたまふる

おほかたの宗の露かは君かための萬代かけてをけるきくをや

たふさにけかるのさま

言とはゝほとけそとかも菊の花昔うつくしきくのもとゝは

あひて後のわされ

みし程にきえなましかは別てのゝちさへ憎に思はさらまし

おりつれは心もけかるもとなから今の佛に花たてまつる

つしるうた

ゐつらしくやま井につけん葵草待かけてのみ年はへにけり

かへし

にきすりの山井の衣珍らしく獨ならすはみえすそあらまし

きよきことせさすとて攻慶君のもとにものし給とこ

ろあゐもるときゝて

しもりなき君かみむろの法はれてうろの宿りを如何みる管

かへし

うろなれと君かきやけきやとのうちに

たいしらす

ちりぬとて歎きし花は咲にけり過しき人そはるけかりける

春はなをこれ人またし花をのみ心ひとかにみてをくらさん

中務のみやの御

花もみなこれもなくな我宿になにゝつけて人をみるへき

なか〳〵にあたなる花は散ぬ共まつを頼みのあらぬや

また宮

櫻花まつによそへておるひとゝ千歳の春そみるへかりける

月の哥少将にかはりて

秋風に夜やふけぬらんおほそらの月の桂のなひくかけみゆ

（下句…）ことゝりゐて月をなかむるあきのよはなに事をかは思ひ寄きん

見る人をかそへつくしていつ迄か歎くは君とふれはなり鬼

たいしらす

人のよをあるにまかせて花をのみおしむ心やかつは悲しき

人のよはへんに任せてありぬへし花をはえ社思ひかへさね

ひせにくたるいもうとのもとに

故郷の草葉をきたら結ふへきはるけきみちはいつち共かな

かへし

故郷にむすひし草の契りあれは千とせの春は誰と頼まん

長徳二年十月廿二日花山院の東宮におはしましゝ時

殿上にて右中将の五節たてまつりしときなにことに

かといひしかはなにもこゝならんきはをたてまつら

んといひしに忍りくしもとめてかせとありしかはか

したりし後かの舞もなくなりくしたりし人もなくな

りてわすれてやみにしをことし五節たてまつるに何

事をかすんと右京大夫のゝたまふにかれもしやある

ときたのかたにあないせらるゝに本のくしのいたさ

れはいとあはれにて
かきなてゝきしけん御はかみさひてあるに傳へし人のなき哉
小野宮の御日に法住寺にまいるとておなしほとの人
のおほくまいりしを思ひいてゝ
〔拾遺哀傷〕世の中にあらましかはと思ふ人なきか多くもなりにける哉
小おほきみこれをきゝて
あるはなくなきは數そふ世中に哀いつまていきんとすらん
〔拾遺哀傷〕常ならぬよはうき身社悲しけれ其數にたにいらす〔しイ〕と思へは
なつのはしめつかたいへのもえきをみて
おいに鬼庭のもえきのこ暗きにそこはかとなき涙とまらて
つのかみなりときはりまのかみむこにとりていへの
庭ところこゝすのかたになしたるにあめのふるころ
うみにしたり
うちつけに播磨潟にもにたる哉いかなるあまのよる道ふ覽
住吉と見えこそわたれ浦とをみいかゝ有へきはりまかた迄
正月十三日ひとひまいりたまへりしのち左兵衛督の
宮にまいらせたまふ
あかさりし君か匂のこひしさに梅の花をそけさはおりつる
みや
いまもとる袖にうつせるうつりかは君か折ける匂なりけり
いへあるし
戀しきにはなをおりつゝなくさめは鶯きゐん梅ものこらし
このころ今上の宮春宮なとに人々まいりつかうまつ
るときゝて
身をよせん方もおもてはなかり鬼戀を厭はん人しなけれは
いたう夜ふけて車のをとのしけれは
さ夜更ていつち車のつきならん山のへさしていかにや有覽
かやり火にやあらんおりすきたるけふりのたちけれ
は
夏はてゝ秋まてくゆるかやりひは昔いかなる事かありけん
越前へくたるにこうちきのたもとに
夏衣うすきたもとをたのむ哉いのる心のかくれなけれは
人のとをきところへゆくはゝにかはりて
ひとゝなるほとは命そおしかりしけふは別そ悲しかりける
正月ついたちころある人の御もとにせんよう殿より
あゆのかたをつくりてありけれは
虫にたに欺かれしと思ふ身をいかなるあゆのかはるなる覽
むまこのをうなにてむまれたるをきゝて
きさきかねもし然らすはよき國司若き受領の妻かならし
この人からものゝつかひにゆきたるころ月をみて
おもふ人あるかたへゆく久方の月の桂にふみやつけまし
おなしころ人くたりしころ
いとゝしく老はそふ共ゆき歸るひからは暫し短かからなん
いまの左大弁の御子のいかにおほはりこのふたにい
ちひめのかたちなとかけるところに
市姫のかみのいかきのいかなれやあきなひ物に千よを積覽
ものおもひに遠ところへにけるかほをかゝみのかけ
に見はへりて
なましゐにとまれる顔をけさみれは鏡やつらき涙とまらす
はらからのみちのくのかみなくなりてのころきたの
かたのなまみるをこせたりしに
幾におふるみるめにつけて鹽釜のうら淋しくも思ほゆる哉

藏人なるからものゝつかひにくたる殿上人の餞にかはりてとしかへりてはかうふりたまはるへかりけれはなるへし

まちゐるもよの常なれやなか／＼に年の歸らん事をしそ思

わかゝりしおりにつねに女のもとよりかへされて

雁の子も巣守はあるといふめるをなとて夜ころに我歸る覽

いなりにまかてたりける女のもとに文やりけるをほかさまになれりときゝて

我ためは稲荷の神もなかりけり人のうへとは祈らさりしを

はかりてあはさりける女に

白玉か涙かなにそよひ／＼にはかりあたりの袖にこほるゝ

くりしまの鱗やひるらむ此冬は見暮ぬものゝめつらしき哉

しれる人なかゝはへたてゝありけるに七月七日のよる

七夕のくもちはしらす中川をはやうち渡れかさゝきのはし

加階したりけるかたのさはにしなるに山ふきのおほううつれりけるを東のさとにや

山吹の咲るみきはを見渡はそこゝそ花の咲り成けれ

きみの御ふくなりける所のたてしとみにさうふのねをかけたりけれは

古はたもとにかけしあやめ草けふはなかねをなにゝよす覽

これは三條との

草枕しのふるたひのから衣露にたもとそあらはれぬへき

かへりに

色ふかき袂のほとはきてそみるいとゝ都のなかめらるゝに

五月のすゑにさくらのもみちたるにつけて

我宿のこ末にのみは秋こしをいかにもみつる夏のなかはに

かへし

うちつけに涼しくもあるか紅葉みる里にはなかす郭公さへ

にる人の心ににたるこゝろふとなかくそ頼むたえすも有南

丹波の國府にて三月のゆふやみに

ほつかはにまかふ汀のあやめ草月まつ宵はみしかゝらなん

故あはたの右大臣とのゝはかなくなりたまひての年の十月に

神無月いつもしくれは悲しきをこゝ井の森はいかゝみる覽

はきに露のかゝりてたまかとみゆるをおりにやりてみるにみなきえてなけれは

朝露を日たけてみれはなにもなし萩の上はに物やとはまし

ものおもへる女にかはりて

白露のきゆるをみてもうら山し萩の下葉に宿やからまし

人にかはりておとこのたえたるころは〔衍歟〕萩を見て

枯はつる冬もありけりあき萩の下葉の色をなに思ひけん

こなくなりてなきねのゆめさめてうつゝとおほえつるとて前のせんさいをみて

なてしこを夢に見てこそいつしかとあけて空しき床夏の花

屏風繪にぬす人たかひたるかた書たるかたゝの人とも見えぬに

〔拾遺雜下〕ぬす人の立田の山に入にけり同しかさしの名にやけかれん

いもうとの老たるかもとよりとしころの人なくなりたゝ〔衍歟〕るをとひたるに

いけらしと厭ふにしなぬ老の身をおしむにきゆる露そ共哉

としころあひそひたる人なくなりわたるころ中つか

さの宮のはゝの女御の御もとより
この代にて契りし事をあらためてはちすの上の露と結はん
右大臣とのゝ女房さとへいてんとてくるまかるかす
とて
またしらぬ戀の山路にまとふ哉さとへもさそふ人もあら南
かへし
はかなくて消にし露をはちすはに君しむすはゝ疑もなし
おなしをのゝ宮の中納言きたのかたにをくれてのた
まへる
よそなれとおなし心そ通ふへき誰もおもひの一つならねは
かへし
ひとりにもあらぬ思ひはなき人もたひの空にや悲しかる覽
またせんようてんの民部のめのとのもとよりおなし
ころ
君はいかに寢覺すらめや思ひやる我たによをは思ひ明すや
かへし
ねさめとはまとろむ程のあらはこそうきよを夢とみる計也
むまこのいたゝきもちゐを見せたれは
年をへて數まさるへきさゝれ石の巖とならん程をしそ思ふ
しれる人つくしのかたにくたるほとあふきにふねの
かた書たるをこれはうちきみにとてとふらふ人のあ
りしかは
思ふ人かすふか浦の君か爲とみてさつめる舟にやはあらぬ
まきといふ人を心にもあらてわかれたりしころ津の
くにへくたりしにつりふねのとものあそひしをいつ
こそとゝひしかはまきのさとゝいひしかは
なにしおはゝいさ舟とめん牧の里こひつる人も有といふ也
はやうけさうしける女つのくになかたのもりといふ
所にありときゝてやりける
命たになかたの森のなかりせはたよりに君か宿をみましや
故院の哥合にくさむらをたつぬといふ題を
〔拾遺秋〕覺束ないつれなるらん虫のねを尋ねは草の露やみたれん
水上秋月
水のうへに光さやけき秋の月萬代までのかゝみなるへし
岸のほとりの秋花
ときしるき花そ亂れて匂ふなるなみの心やかけておるらん
おものもちの人の物とるを見て
獨してあまた恨むるおものもちもたるわたをそ尋ぬへら也
一條のおとゝかくれたまひての秋いつれの度にかも
もそのゝ殿をはしましくおもひ
おほかたの秋とみるたに花すゝきうへし君ゆへ袖は露けき
とのゝ御かへし
うへをきし尾花にかゝる白露の消ぬさきにそ先まねかまし
つかさめしにのそむことありけるころさぬきのすけ
これすけか馬をかりければすけつかさたまはらはと
らせんと思ふ馬なりとてかしたりけるをかへすとて
心有てかひける駒のいはゝしにあやなくのりて我も賴もし
三條中納言つのくにゝらうしたまふところに御とも
にまてゝはまへちかき所にせんさいなとおかしきに
かれたるすゝきのうへより見えければ
濱風になひくおはなは朝ほらけ離によするなみかとそ見る
みちのくにのかみのおくりしてかへるに女車あふさ

かのせきにてゆきあひたりむかし心かけたる人にき
きなしてやる
古はこえかたかりしあふ坂をいつちとかへる涙そかなしき
この女。さるやうありて伊勢にかよふにそありける。
きゝしこともあれと。ひかことにやとてとそ。

元輔集

村上の御時に紅葉合殿上人にせさせ給ふに
〔おもひやるイ〕我思ふくらふの山のもみちはにおとらぬものは心なりけり
梨壺にへい内侍のすみ侍りけるにさうしのへたての
かみよりゑふくろにもの入て藤の花してゆひてうち
こして侍しに
立かへりみれともあかす春風のなこりにこゆる藤浪のはな
三月盡
風はやみよしのゝ山の櫻花ちらぬに春のすきぬて　ふらん
藏人所のをのことも川原にすゝみしにまかりたりし
に
吹風はすゝしかりけり草しけみ露のいたらぬ萩の　下は　も
同御時の菊合に
たとふへき色もなきかな菊の〔きのイ〕花枝をわきてや露もおくらん
つかさ給はらて又の日左近藏人のもとにつかはし侍
る
年毎にたえぬ涙やつもりつゝいとゝふかくやみをしつむ覽
小野宮の太政大臣の家の池のほとりにて櫻の花をゝ
しむ
櫻花そこなるかけそをしまるゝしつめる人の春かと思へは
藏人所に櫻の花の散をみてつかさ給るへき年の春給
はらて
さくらこそ雪と散けれ時雨つゝ春ともしらて過しつるかな
小野宮の太政大臣月輪寺に櫻の花みにおはしたりし

に
たかためかあすは殘さん山櫻こほれて匂へけふのかたみに〔にイ〕
梨壺の櫻花さかりなりけるにくにちか哥よみてつけて侍りける後に聞てよみて侍りし
花櫻おもひやりてもたへぬ哉あかすちりけんをりの心を〔ついイ〕
藏人所まかりはなれて後なしつほにてをのことも雨ふる日さけたうへしついてにともたちにあひて侍るよしを
石上ふりにし人にあふ時はうれしかりけりなつのよのあめ
冷泉院の池のほとりにて藏人所のをのことも櫻をしみ侍るにまかりあひて
いにしへのなこり成へし池水にうつれる花の涙とみゆるは
天德三年二月三日權大納言源朝臣舟にてやはた詣侍るに道にて人々のおもはん事をいへと侍りしに
わたし守君にみなれて老にけり雲井の岸にまとふへき哉
またの年の十月に同大納言の家に殘れる菊をゝしみ侍りて
なかきよの星かともみよ初霜のおきて殘せるしらきくの花
同大納言の家に菊をもてまかりてよみて侍る
霜ふかく成行年になかれけるまかきにおひて年へぬる菊
同大納言菊をしむ曉に紅葉をらせて讀侍りし〔をイ〕
夜もすから殘れる菊をゝしむとも紅葉の色も忘れさらなん
かへしに
忘れめや深きもみちのかけならて移ふ菊のあらは社あらめ
小野宮太政大臣花宴し給ふ日浪をへたてゝ花をみるといふ題
岸ちかみ浪のへたつる花の色は折てたに社みるほとにせめ
また
遠近の岸をは浪のへたつれとかよふは花の色にそ有ける
ちいさき人の許にかひをおこせて侍し人に
ゆくさきを心もとなく賴みけるちひろのはまの貝そ嬉しき
またあまひこのすにかひをいれて同人におこせて侍しに
虫のねのよる共しらてうつせ貝思はぬかたにもとめける哉
天祿二年正月ひえによしたかの少將のほりて鶯の聲心もとなきよしよめと侍りしに
鶯の音はうちとけて足引の山の雪こそした消にけれ
小野宮太政大臣さか野に花みにまかりて侍りしに
秋の野の萩のにしきを故鄕に鹿の音なからうつしてし哉
天德四年二月十四日の夜大納言(高明)右大將藤原朝臣(師尹)なと月のあかきに昔を戀ふる心人々よみ侍りしに
天の原月はかはらぬ空なからありし昔のよをやこふらむ
宮内卿もとなか八十賀にやかて法師になりて布引寺といふ所にこもりて侍りしに
夜を深みまつにゆつりて歸る哉うき世をそむく程の遠さに
天德二年八月廿四日白川院に大納言源朝臣(高明)秋花露を帶てひらくといふ題を右大將藤原朝臣(師尹)なとまかりあひて
ほころひて花咲にけり藤袴にほひをむすふ露にまかせて
安和二年二月五日一條のおほいまうち君白河院にて子日し侍りしに

わかなつむ子日の松の千世のかけすみつゝみせよ白河の水
　ありひらの左大臣八十賀あせちの更衣のし侍しに若なの哥
春毎に若なつみてそ祈るへきをしほのかひに色〔年ふへきイ〕ふかきまつ
　大將の子のいか子日にあたりて侍りしに
二葉なる子日の松をいかはかり行末とほき物にたとへん
　小野宮太政大臣の家にて子日〔のイ〕し侍りしに
千年ふる〔へんイ〕宿の子日の松を祉ほかもためしにひかんとすらめ
　内の女房とも子日しにまかり出んとて侍りけるに中宮のなやみ給て俄にとまりにけれはまうけて侍りけるわりこつかはすとて
春霞子日の野へに立出ねはまつかひなくて暮しつるかな
　つかさめしの子日にあたりて侍りしにあせちの更衣の局より松をはしにて物出して侍りしに
ひく人もなくて年ふるみよしのゝ松は子日をよそに祉きけ
　式部卿親王の子日の日人々にかはりてよみて侍る
舟岡に若なつみつゝ君かため子日の松の千世をゝくらん
子日する松の千年の春毎に若なはつまん野へのまにく
　安和二年二月五日頭中將さねすけの朝臣小野宮の太政大臣の子日〔みゆきイ〕しにつかはしけるによみて侍る
老のよにかゝる子日はありきやと水高き嶺の松にとはゝや
　女房車に梅花折〔らイ〕てつかはすとて
松をのみひきてかへれは梅花おもふ心ののこるらむかし
　人にかはりて
萬代の春の子日にいてゝみん松はいくたひおひはかはると
　天祿三年二月三日一條の太政大臣さい院にて子日し侍りし日庭の松をもてあそふといふ題を
千早振いつきの宮の庭の松いく世〔らイ〕の千代をもとめ〔とよあイ〕かそへん
　其日齋院のお前のものゝすはまに鶴小松舟なとあるに
つみて送れあまのつり舟棹さして松の千年も鶴のよはひも
　大貳くにのりか女の賀し侍しに
二葉なる松はひかすとおもふらん千年のけふに〔はイ〕殘すを
　又
けふよりは二葉の松そむつましき君諸共においんとすれは
　すはうに侍し時岩に生たる小松を人のもてきて侍りしに
萬代に千年をそへてみつる哉いはほなからにひける小松は〔をイ〕
植てみんちとせの春の今日毎に子日の松はかゝりけりとも
　すはうなるかつまのむまやといふ所にて子日し侍りしに
思ひいてよ千年の春〔よの子日の春イ〕のけふ毎にかつまの浦のきしのひめ松
　ある人のはらめるほとにその父身まかりて後むまれて侍る七日〔をイ〕の夜につかはしける
千世〔へせイ〕をへんかたみともみよ忍ひつゝ獨すた〔なイ〕てん鶴のけ衣
　頭中將さね〔たねイ〕すけの朝臣子むませて侍し七日の夜
をしほ山いかなる嶺の松なれは千世を一夜になして生らん
　九月九日人のむまれて侍るに七日にあたりて侍るに
時しもあれけふのけふにしあひぬれは千世をそおかん菊の白露
　人の裳きしに
千年ふる松に玉もそかゝるへき興つ白浪たちかへりつゝ
　たかときか子のかもの祭の日はかまきし侍りしに

千年と〔をイ〕はわれならね〔すイ〕ともゆふたすきむすふの神も祈かく覽
　冷泉院の御めのとこの七夜よみて侍る
たらちねも皆なからへて住吉の二葉の松の千代をこそみめ
　なかきよかむまれて侍し七日夜
松かえのかよへる枝をとくらにてすたてもる〔らイ〕へき鶴の雛哉
　人の裳き侍るに
萬代をなからの濱のさゝれ石の今宵よりこそ苔も〔はイ〕むすらめ
　是もまた人の裳き侍りしに
住吉のうらの玉もをむすひあけて渚の松のかけをこそみめ
　とうの少將あつとしか子むませて侍る七日夜
姫小松大原山のたねなれは千とせけたゝにまかせてをみん
　人の裳き侍るに
玉もよる〔かイ〕岩ほのほとに成にけりなからの浦の濱の眞砂は
　宰相もとすけの朝臣のむま子に袴きせ侍りしに
育くみて君すたてすは鶴の子の雲ゐなからや千世を知まし
　人の子うみたる七日夜
たつのこの雲井にあそふ齢こそ空にしらるゝ物には有けれ
　宰相もとすけの朝臣の娘のもき侍りしに
結ひあへ〔くイ〕る君か玉ものひかりにはさやけき月の影そはる覽〔そふイ〕
　きよはらのすけときか子むませたる七日夜
遙にそ思ひやらるゝうとからぬ我中やまの松のすゑの〔こすゑにイ〕世
　きのかみためみつかちいさき子をいたしてこれいは
　ひて哥よめといひ侍りしに
萬代をかそへんものはきの國のちひろの濱のまさこなり鳧
　右大將藤原朝臣子むませて侍りし七日夜さきそむる
　梅といふ題をよみ侍りしに
さきそむる梅の花かさかさすみはうしろやすきを萬よの春
　又のとしまたむませて侍るに
年毎に祈りしくれはおもなれて珍らしけなき千世と祉みれ
　もとすけか子のとみはたとつけて侍りしにはかまき
　せ侍りしを
世の中にことなることはあらす共とみはたしな〔でイ〕ん命長くて
　大貳くにのりの朝臣むま子のいかに侍りしにわりこ
　てうして哥を繪にかゝせ侍りし
みてしかな二葉の松の生茂りやそうち人のかけとならんよ
住の江のはまの眞砂の苔ふりて岩ほとならん程をしそ思ふ
松の苔千とせをかね〔けイ〕て生しけれ鶴のかひこのす共〔貝イ〕なるへく
　また後にきせ侍りしに
綠この千世そ常盤に祈らるゝのるへき山の松とみる〳〵
　かはもといふ所に
行春の〔かイ〕をしむにとまる物ならは何かはものを人のおもはん
　冷泉院にわたらせ給ふて池のもとの初雪といふ題を
　殿上のをのこともよみ侍りしにかはりて
池ちかく降初雪の名殘には玉のうてなそあらたまりける
　五月ふたつある年庚申に人にかはりて
五月雨の數くはゝれる年たにも山ほとゝきす聲にあかはや
さみたれのあまりもまたし時鳥たゝ一聲に明もこそすれ
　うちの藤花の宴に人にかはりて
もゝしきになひきてみゆる藤波はいく萬代の春をたのまん〔かさゝんイ〕
　つほ前栽の宴せさせ給に人にかはりて
月かけのいたらぬ庭もこよひこそさやけかりけれ萩の白露
　天祿四年七月七日一品宮の扇合にあやの文におらせ

給とてよみ侍りし

天河扇の風に霧はれて空すみわたるかさゝきのはし

又扇合に人にかはりて

萬代の秋やしのはん棚機はあふきの風のなこり久しく

村上の御時五月四日庚申をんな方男方哥合せさせ給ふに男方勝にければ八月廿日にまけわさしていとをむすへるこに松虫すゝむし入てをみなへしにつけて

女郎花雲〔そらイ〕にかゝりてはふくすのまくるとや思ふ露の分めを

千世をへてくる秋毎に聞えなん行末とほき松むしの聲

内の御前に紅梅を藏人ともによめとおほゝせらるゝにかはりて

春雨やふりてそむらんくれなゐの色こくみゆる梅の花かさ

梅花かはこと〲〔のイ〕に匂はねと薄くこくこそ花はさきけれ

くれなゐに色こき梅は鶯のなきそめしより匂ふ成へし

中務かある所にまかりたりしに貝をこに入て侍しに

浪間分みるかひあるはいせの海の何れのかたのなこり成覽

かへしなかつかさ

いせの海は名殘たになくあせに兒なのみ高師の濱〔うらイ〕と聞えて

又かへしつかはす

しら波の昔をかけて聞からにしほみつうらと成ぬへきかな

つかさめしのころ過て雪の降て侍しに衆盛か許につかはしゝ

雪ふかみこしのしら山われなれやたか敎へしに春を知らむ

中務娘の中納言淸水に詣て人に物いひ侍しを聞てつかはしゝ

匂ふらん霞の遠〔うちイ〕の山櫻おもひやりてもをし〔き春イ〕まるゝかな

梅花に雪のこほりつきて侍るを花か雪かと人のいひて侍りしに

花を雪ゆきを花かとみてそふる梅の氷のとけぬかきりは

にしの京に住侍し人のとはぬ心の哥よみて侍し返事に

草わかみ結ひし荻はほにもいてすにしなる人や秋を知る覽

順か子なくなりて侍りしとふらひにつかはしゝ

思ひやるこゝひの森の雫にはよそなる人の袖もぬれけり

したかふか返し

朽はてゝなきこのもとは君かとふ言のはみる〔にイ〕も先そ悲しき

又かへしつかはしゝ

おひたゝてかれぬと聞しこのもとの歎の森といかて成けん

正月二日鶯は聞やと人のいひ侍しに

年毎に春のわするゝやとなれは鶯のねもよきてきこえす

おいたる人のなるとよりめをおこせて侍りしに

わたの原あさくも思ひやらぬ哉おいの浪わけみるめかる浦

櫻のちれる所にて

花の影たゝまくをしき今宵哉にしきをさらす庭とみえつゝ

貫之集を人のかりて返し侍るにつかはしゝ〔袖に老の涙を－〕

かへしけん昔の人の玉章をきゝてそそゝく老のなみたは

ある所に松虫すゝ虫籠に入てひわりこなとそへて侍しに

萬代の秋をまちつゝきゝわたれいはほにねさす松虫のこゑ

四月一日ともときかありまよりまうてきてかへるに時鳥なんなきしとかたりければ

春はをし時鳥はたきかまほしおもひわひぬるしつ心かな

こに侍るものゝわかなのやうなる物して侍しに

二葉にてみし面影もかはらぬに若菜つみけるけふにあふ哉

また

おりたちて若菜をいかでつませけんひまを離れし程もへなくに

かゝいまうし侍しにえせて鶯のなくをきゝて

鶯のなくねはかりそ聞えける春のいたらぬ人のやとには〔もイ〕

みちすゑ同しことかゝいを得し侍らていかなる花か

まつは開くるなとやうなる心をよみて侍りしかは

おそくとく開くる枝を花ゆへに身をもうしとは何か思はん

宰相中將の子むませて侍し七日の夜梅花を題にて

さきそむる梅の花笠いつよりかあめの下をはしらんとす覽

時文か女なく〔もイ〕成て又の年の同頃いひおこせて侍る

年をへて馴こし人を別れにしこそは今年のけふにそ有ける

かへし

別れけん心をくみて涙河おもひやる哉こそのけふをも

菊のはなのいとしろきにつけて時文

菊の花さかりの色の我身にはしろくなるなとわひしかる覽

かへしに

露のわく世をそ恨る我みには盛りの色のさかりならぬに

小一條のおとゝのなく成侍て後櫻の花おもしろきを

もて遊ひ侍る日かへる雁といふことを

かへる雁君もしあはゝ故郷に櫻をしむとなきてつけなん

ある所にて月の〔きよ〕おもしろきに〔と〕昔のもの語な〔そイ〕として

かくはかり秋の月かけあかければ曇し冬の空や戀しき

大貳くにのり正月にはらかと云物おこせて侍しに

みよしのも若菜摘らんまきもこの〔くイ〕檜原霞みて日比へぬれは

同人のめしにて侍し又の年つかはしゝ

月影をへたてし〔ほこイ〕比の春霞みてなかむらんけふのかなしさ

かねもりかするかへまかりしにつかはしゝ

しらさりき田子の浦なみ袖ひちて老の別れにかゝる物とは

大貳くにのりの朝臣めのなく成ぬと聞てつくしへつ

かはす

年ふかき人に別の涙河袖のしからみおもひこそやれ

同くにのり秋風の夜さむなるよしよみて侍りし返事

につかはしゝ

思ひきや秋の夜風のさむけき〔くイ〕に妹なき床にひとりねんとは

左大將のひえにのほりて歸るむかへにまかりて後ひ

さしうまからさりしかはおほつかなきよしの哥の侍

し返事に

草深き谷の秋きりうつみてんおほつかなくそ忘られぬへし

頭中將さねすけか許にまかりて昔物語なとせしに

老て後昔をこふる涙こそこゝら人めも〔をイ〕つゝまさりけれ

かゝいし侍るへき年もれてえし侍らて雪いたくふる

日人のもとに

浮世にはゆきかくれなてかき曇りふるは心の外にもある哉

人のかうふりし侍りしに

こむらさきたな引雲をしるへにて位のやまの峯は尋ねん

ふ〔ひ〕くなる〔つね〕人の許にきぬの袖のかきりをつかはすとて

うらさえて道にもあらぬ衣手は袖の限りをみるそやさし〔かなイ〕き

おほいまうち君の家にて藤花を見侍しついてに

藤花こきむらさきの色よりもをしむ心をたれかそめけん

ともときか四月一日ありまよりまうてきて時鳥のな

給とてよみ侍りし
天河扇の風に霧はれて空すみわたるかさゝきのはし
又扇合に人にかはりて
萬代の秋やしのはん棚機はあふきの風のなこり久しく
村上の御時五月四日庚申をんな方男方哥合せさせ給ふに男方勝にければ八月廿日にまけわざしていとをむすへるこに松虫すゝむし入てをみなへしにつけて
女郎花雲〔そらイ〕にかゝりてはふくすのまくるとや思ふ露の分めを
千世をへてくる秋毎に聞えなん行末とほき松むしの聲
内の御前に紅梅を藏人ともによめとおほゝせらるゝにかはりて
春雨やふりてそむらんくれなゐの色こくみゆる梅の花かさ
梅花かはこと〳〵〔のイ〕に匂はねと薄くこくこそ花はさきけれ
くれなゐに色こき梅は鶯のなきそめしより匂ふ成へし
中務かある所にまかりたりしに貝をこに入て侍しに
浪間分みるかひあるはいせの海の何れのかたのなこり成覧
かへしなかつかさ
いせの海は名殘たになくあせに鬼なのみ高師の濱〔うらイ〕と聞えて
又かへしつかはす
しら波の昔をかけて聞からにしほみつうらと成ぬへきかな
つかさめしのころ過て雪の降て侍しに兼盛か許につかはし
雪ふかみこしのしら山われなれやたか敎へしに春を知らむ
中務娘の中納言淸水に詣て人に物いひ侍しを聞てつかはし
匂ふらん霞の遠〔うらイ〕の山櫻おもひやりてもをしまる〔き春イ〕ゝかな

梅花に雪のこほりつきて侍るを花か雪かと人のいひて侍りしに
花を雪ゆきを花かとみてそふる梅の氷のとけぬかきりは
にしの京に住侍し人のとはぬ心の哥よみて侍し返事に
草わかみ結ひし荻はほにもいてすにしなる人や秋を知る覧
順か子なくなりて侍りしとふらひにつかはしゝ
思ひやるこゝひの森の雫にはよそなる人の袖もぬれけり
したかふか返し
朽はてゝなきこのもとは君かとふ言のはみる〔にイ〕も先そ悲しき
又かへしつかはしゝ
おひたゝてかれぬと聞しこのもとの歎の森といかて成けん
正月二日鶯は聞やと人のいひ侍しに
年毎に春のわするゝやとなれは鶯のねもよきてきこえす
おいたる人のなるとよりめをおこせて侍りしに
わたの原あさくも思ひやらぬ哉おいの浪わけみるめかる浦
櫻のちれる所にて
花の影たゝまくをしき今宵哉にしきをさらす庭とみえつゝ
貫之集を人のかりて返し侍るにつかはしゝ
かへしけん昔の人の玉章をきゝて〔袖に老の涙を・〕そそゝく老のなみたは
ある所に松虫すゝ虫籠に入てひわりこなとそへて侍しに
萬代の秋をまちつゝきゝわたれいはほにねさす松虫のこゑ
四月一日ともときかありまよりまうてきてかへるに時鳥なんなきしとかたりけれは
春はをし時鳥はたきかまほしおもひわひぬるしつ心かな

こに侍るものゝわかなのやうなる物して侍しに
二葉にてみし面影もかはらぬに若菜つみけるけふにあふ哉
また
おりたちて若菜をいかてつませけんひまを離れし程もへなくに
かゝいまうし侍しにえせて鶯のなくをきゝて
鶯のなくねはかりそ聞えける春のいたらぬ人のやとには〔もイ〕
みちすゑ同しことかゝいを得し侍らていかなる花か
まつは開くるなとやうなる心をよみて侍りしかは
おそくとく開くる枝を花ゆへに身をもうしとは何か思はん
宰相中將の子むませて侍し七日の夜梅花を題にて
さきそむる梅の花笠いつよりかあめの下をはしらんとす覽
時文か女〔もイ〕なく成て又の年の同頃いひおこせて侍る
年をへて馴こし人を別れにしこそは今年のけふにそ有ける
かへし
別れけん心をくみて涙河おもひやる哉こそのけふをも
菊のはなのいとしろきにつけて時文
菊の花さかりの色の我身にはしろくなるなとわひしかる覽
かへしに
露のわく世をそ恨る我みには盛りの色のさかりならぬに
小一條のおとゝのなく成侍て後櫻の花おもしろきを
もて遊ひ侍る日かへる雁といふことを
かへる雁君もしあはゝ故鄕に櫻をしむとなきてつけなん
ある所にて月の〔きよ〕おもしろきに〔と〕昔のもの語〔そイ〕なとして
かくはかり秋の月かけあかけれは曇し冬の空や戀しき
大貳くにのり正月にはら〔くイ〕かと云物おこせて侍しに
みよしのも若菜摘らんまきもこの檜原霞みて日比へぬれは

同人のめしにて侍し又の年つかはしゝ
月影をへたてし比〔ほイ〕の春霞みてなかむらんけふのかなしさ
かねもりかするかへまかりしにつかはしゝ
しらさりき田子の浦なみ袖ひちて老の別れにかゝる物とは
大貳くにのりの朝臣めのなく成ぬと聞てつくしへつ
かはす
年ふかき人に別の涙河袖のしからみおもひこそやれ
同くにのり秋風の夜さむなるよしよみて侍りし返事
につかはしゝ
思ひきや秋の夜風のさむけき〔くイ〕に妹なき床にひとりねんとは
左大將のひえにのほりて歸るむかへにまかりて後ひ
さしうまからさりしかはおほつかなきよしの哥の侍
し返事に
草深き谷の秋きりうつみてんおほつかなくそ忘られぬへし
頭中將さねすけか許〔をイ〕にまかりて昔物語なとせしに
かゝいし侍るへき年もれてえし侍らて雪いたくふる
日人のもとに
老て後昔をこふる涙こそこゝら人めもつゝまさりけれ
浮世にはゆきかくれなてかき曇りふるは心の外にもある哉
人のかうふりし侍りしに
こむらさきたな引雲をしるへにて位のやまの峯は尋ねん
ふくなる人の〔ひ〕〔つね〕許にきぬの袖のかきりをつか〔かなイ〕はすとて
うらさえて道にもあらぬ衣手は袖の限りをみるそやさしき
おほいまうち君の家にて藤花を見侍しついてに
藤花こきむらさきの色よりもをしむ心をたれかそめけん
ともときか四月一日ありまよりまうてきて時鳥のな

きつるといひ侍れは

時鳥まつ初聲をいつしかといかなる人に〔かイ〕きてかたりけん

堀河の中宮うせ給て御服過して内侍のまかり出しに

雨のふり侍りしかはつかはしゝ

故鄕はありとも君を忘れけんけふ降いつる雨はやましを

ぬす人の入て侍りしに又日人のかいねりのきぬをお

こせて侍りしに

淺からす思ひそめてし衣かな〔はイ〕かゝる時こそそてもひちけれ

すけゆきか家に冬の月のおもしろきにまかりて侍り

しに

いさかくており明してん冬の月春の花にもおとらさりけり

男なく成て侍る女の程もなくこと人にあひぬと聞て

つかはしける

年へにし人のかたみの藤衣すてやしにけんまたやかけたる

大貳くにのりかすはうおこせて侍りしに

くらゐきぬ賴めそめてし色なれはいとゝ深くも成ぬへき哉

またのなく成たる秋さむき風をとはぬことゝいひ

て侍りし返事に

こし方もみえて眺むるかり金の羽風にはらふ床よかなしな

年頃つかさも給はらぬに子日しに人のいてまかりた

りしに

谷深くしつむたとひにひかされて老ぬる松は人もてふれす

よしのふか伊勢へ幣の使にてまかりしに〔をしイ〕

すへらきの鈴の限し有けれはふり出て行もつらからなくに

人の子うみて侍る七夜に

千年をは松と竹とに任せつゝ八百よろつよはいはて思はん

ある宮の入道し給へりしに

月影をいるゝ山へはつらからて思ひへたてん〔いりけんイ〕世をそ恨むる

女三の宮にまいりて

世をすてゝ山へいる人いらましよ〔や〕昔の空の〔月イ〕曇らさりせは

とほふるか子〔まこ〕の七夜に

おひしけれひら野の宮のあや杉よこき紫の色か〔にたらイ〕さねへく

初瀨にまうてゝ侍しに三輪の山みえ侍しかは

三輪の山しるしの杉はありなから敎へし人はなくて幾世そ

三月はかり櫻の花のいとおもしろくさきたるに風の

よるいたく吹侍りしに

くれて後うしろめたきを山櫻風のおとさへあらく聞ゆる

まかりかへるとてまた

山櫻みすてゝかへる心をは何にたとへてひとにかたらむ

みつなかひたちに成てまかりくたらんとし侍るころ

筑波山〔ゐのイ〕つく／＼物をおもふ哉君をみさらんほとのこゝちを

川原院といふ所に人々もろともに花見にまかりたる

にそこには花も侍らて山櫻の遙にみえしかは

春霞たちなゝよりそうすくこき錦とみゆる山のさくら〔にイ〕を

四月一日頃みたけにまうて侍りてよしの山のわたり

にて

古ものほりやしけん吉野山やまよりたかきよはひなる人

とうの弁さねすけか子むませ侍りし七夜

日の本を心やすくそ思ひぬる國のちふさのけしきみつれは

衞門督入道し侍りしにつかはしゝ

ますかゝみふたゝひよにや曇るとてちりを出ぬと聞は誠か

津の國にまかりていさりをするをみて

いさり火の底のみくすとみえぬるは涙の中にや秋を惜まん

　前の大貳くにのりの朝臣の四十九日し侍りしすきや
　うのかれにそへて侍りし

鐘のおとに涙の玉を添てたに玉のかさりを〔そへイ〕まさんとそ思ふ

　山里なる所に秋の頃ほひ〔イ〕住て人につかはしゝ

紅葉ちるころなりけりな山里のことそ共なく袖のぬるゝは

　人にかはりて

風早み秋はてかたのくすのは〔とイ〕のうらみつゝのみ世を〔もイ〕はふる哉

　とてつかはしたる返事はなくてほかへ遣したる返事
　をもてたかへてまうてきたれは又つかはす

とひかよふてふのたよりに散にきと聞し櫻も花を〔のイ〕みる哉

　えいしちかもとにまかりてつかさのほしく侍ること
　はくとくのためなりといひてよみて侍りし

世を渡すひちりをさへやなやまさん深き願のならす也せは

　九月廿日のほと右大將さか野にまかりて侍し供にて

こぬ人をなに、譬へて語らましくるゝ秋をしむのへの心ちを

　歸りまうてきて又の日大將の家にてしくれのし侍り
　しに

冬をあさみまたき時雨と思ひしをたへさりけりな老の涙も

　同大將の家に九月はかりに庚申し侍りしに菊の花を
　題にて

秋ふかきまかきに生る菊みれは花のうへともおもほえぬ哉

　十月一日頃に殿上のをのこともさか野にまかりしに
　よみて侍し

秋深みまたきにおふる菊の花立かへれともつけにやらはや

　とたいによみて侍りし

秋はまた遠くならぬにいかで猶立かへりぬ〔ねイ〕と人につけはや

　正月申文につけて侍し藏人に

露のいのちもしとゝまりて秋ふ共今年計りそ春のゝそみは

　文月はかりに萩のさきみたれたる家にまかりて

ほかみれは秋はきの花咲にけりなと我宿の下葉のみこき

　山寺にまかり侍りしにある人の法師になりたるなめ
　りといひ侍れはつかはしゝ

憂世もし外になしやといへてしを道に入ぬと誰かつて〔たへしイ〕まし

　くにもちかおなしことのそみならてなけくと聞侍し
　頃遣しゝ

つれ／＼と詠むる春の鶯も〔はイ〕なくさめてたになかはなかなん

　つかさめしの後にさふらひし内侍の許につかはしゝ

心あてにたよりもあらはつたへ南さかて露けき櫻ありきと

　山里にまかりかよふ所ありしを花見にと人々のまう
　てきたりしに

櫻こそ嬉しかりけれ花見にといはては人のくるしなけれは

兼盛集

我君としころ民をめくみ國をおさめおはしますこと御まつりことかすおほくて山にのほり水にたはふれ給ふおほみあそひもみえさりき西はをくら山の秋のもみちいたつらにその色をうしなひ東はむらさい野の春の梅むなしうそのかけをうしなひきしのほとりみつきょうすみ山の聲たかうよはふ風はえたをならさすあめはつちくれをやふらす世中もたのしけれはけふの御幸もありますなりかきりなき我君の御とくをおいたるは老たるをよろこひわかきはわかきをよろこふ世中のたのしきことはけふの御幸をためしとすへしとつけしめて其日の和哥

子日してよの榮ゆへき例にはけふの御幸をよには殘さん

春

かはらの院にてはるかに山の櫻をみる

道遠みゆきてはみれと山櫻こゝろをやりてけふは歸りぬ

春の花さかりにはかならすこんといひたりけるをさかりになりにけれは

花盛たのめし人もある物をかくさけり共つけすやあらまし

小野の宮のおとゝの櫻の花御覽しにおはしましたりしに

山櫻あくまてけふはみつるかな花ちるへくも風ふかぬよに

春頃夢に人のみえたりしに思ひつゝにやありけん

思〔歎イ〕ひつゝれつれはみえつ春の夜の正しき夢に空しからすな

夏

大監物なる時御こき侍しに内侍所に参りたりしにいとおかしけなるこうりをつゝみていたしたりしかは

山城のこまのわたりをみてしかな瓜つくりけん人の垣れを

五月ころ物いひたりしになにかはといひたりしにたのみてさもあらすなりけれは恨みて雨降ぬへかりける日

天の原くもれはかなし人しれす頼む木のもと雨ふりしより

秋

あきの夕くれにむしのいとあはれになくに

あさちふに秋の夕暮なく虫は我ことしたに物やかなしき

秋月いと面白きに紅葉散夜家にてよみし

あれはてゝ月もとまらぬ我宿に秋の木のはを風そふきける

冬

ふゆ山寺に心ちわつらひてありけるにとふらひにこんといひたりける人まつほとに雪の松にかゝりたりけるを

山かくれ消せぬ雪のかなし〔わひイ〕きは君まつの葉にかゝるなり〔りてそふるイ〕鳧

白河の關にて

たよりあらはいかて都へ告けや覽けふ白川の關はこえぬと

駿河へくたるにあはつといふ所に惠慶かきたるにあはれはかく

恨めしき里のなゝれや君に我あはつの原のあはてかへれは

返し

粟つ野のあはて歸れはせたの橋こひてかへれと思ふ成へし

世中恨ける比ゑきやうか許にいひやる

世中な今はかきりと思ふには君こひしくやならむとすらん
　春　頃
春霞たな引空は人しれす我身よりたつけふりなりけり
石まより出る泉そむせふなるむかしなこふる聲にや有らん
　はしめて女の許に
同しくはつけてなこひん難波めの忍ひにのみは(もえて)渡らし
　またみぬ人のとひたりけれはいとうきたりやと女の
　いひたりけるに
みぬ人の戀しき時はなのつから我のみならすたれ(君イ)もしろ覽
　いかてと思ふ人のちかくあるあたりにきて
濱千鳥かひなかりけりつれもなき人のあたりは鳴わたれ共
　又
何せんに人なおかしと思ひけん戀する袖のやすからなくに
　松に露のかゝれるな落さすなりて
あふことな今やとまつにかゝりてそ露の命の年もへにける
　いといたふしのふる中に
はかもなく落る涙な包みてそ人めもるとはいふへかりける
我戀はつゝ非の水となりなゝん心なくみて人はしるへく
　いみしう恨むれはとき〳〵はきこゆるりもあるは
　と女のいふに
言のはゝ色やは見ゆるこむらさき深き心はれそめてそしる
　又
さゝれ石の上もかくれぬ澤水の淺ましくのみみゆる君かな
　いかてとおもふ人に
谷河の岩まなわけて行水の音にのみやは聞(かんこ思ふしイ)わたるへき
　人なこひて
我戀にくらへてしかな山河の岩まの波にかすなそへつゝ
　おなし人に
君な思ふかすにしとらはなやみなく降添雨のあしは物かは
　いひそめていと久しうなりにける人に
二葉より今はおほたの松のはの幾よか君な戀てへぬらん
　又
つらくのみみゆる君かな山のはに風まつ雲の定めなきよに
　又
君こふと消こそわたれ山河にうつまく水のみなはならねと
　返事もさらにせねは
我戀にたくひてやりしたましゐの返り事まつほとの久しさ
　女のつれなくのみいへれは
戀そめし心なのみそ恨みつる人のつらさな我になしつゝ
我戀はなからの橋の下よりもつくる世なくもなりにける哉
　ものなといへといとつれなき女に
我戀はいななき淵の釣なれやうけも引れてやみぬへらなり
　女のもとにまかりて物なといふにつれなきな思ひな
けくほとに鳥さへなけは
天のとの明くるやなしき庭鳥の鳴ぬあしたもなくそ成ぬる
　女のもとにまかりていたつらにねて歸るに
逢事のなきつゝ歸るよな〳〵はいたつらねにも成にける哉
　すみよしといふ所にて人なこひつゝ
なにふりて世に住の江の神もなし戀しき人の影もみえねは
　女よにこひしともおもはしといひたりけれは
戀しとは何なかいはん岩波にたくふみなはの消ぬはかりな
　七月七日にこよひの星合みんとてはしにゐたりけ

に忍ひてみてのあしたに
天の河かはへの霧の中わけてほのかにみえし月の戀しさ
かへし
戀しくは河への霧の夜をこめて立返らすそあかしはてまし
又
あな戀し雲間の月に人をみておもかけにのみそへるころ哉
冬のはしめのころ霜のいと白きをみて我よりたかき
人に
獨れにあまたの冬をへぬる哉身をひと霜に思ひおかれて
こほりしたるあした人に
冬の夜の袖の氷のこりすまに戀しき時はねをのみそなく
雪のいみしうふるに
物思ひてよにふる雪のわひしきはつもり／＼て消ぬ計りそ
雪のふりたるあしたに
白山の雪のした草我なれやしたにもえつゝ年をのみふる
女のもとよりわすれわたるかなといひをこせたるに
忘るとは恨みさらなんはし鷹のとかへる山の椎はもみちす
女ふかき心にはあらさりけりと恨たりしに
淺しとは恨みさらなん渡津海のこふれはいとゝ沖になる身を
女かへしもせさりけれはなけなる物なといふことも
あるものをとて
言のはをなけなる物と思ひせは何かは人のつらくしもあ覽
なないとつらかりける［のよにイ］女に
難波かた汀の芦のおひ風に恨みてそふる人のこゝろを
いといたう恨みて
らけれと猶そ戀つる水無瀨河うけもひかれぬ身とはしる／＼

女かよはしていと久しくなりぬれとつれなき人に
足引の山のかけはし久しくもなけきこりつゝ渡りぬるかな
いとつれなか［られイ］りける女に
神なひの山のさは水君なれや淺ましくのみみえしわたれは
思ひかけて久しく成ぬる人のことさまに成ぬと聞て
うへしより枝のみまさる歎とて頼めはもとに雨そふりける
大入道殿御賀の御屛風の歌
見わたせは松のは白きよしの山いくよ積れる雪にかある覽
しらゝの濱
君か代の數共とらむきの國のしらゝの濱につめるいさごを
難　波
難波江に茂れる芦のめもはるに多くのよをは君にとそ思ふ
須　磨
すまの浦にあさりする海士の大方はかひあるよそ思ふへらなる
なからのはし
朽もせぬなからのはしの橋柱久しき事のみえす［もするイ］もあるかな
みつのみまき
まこもかるみつの御牧の駒の足の早く樂しき世をもみる哉
しかすかのわたり
我妹子か家路ふみわけしかすかの渡り難くもおもほゆる哉
むさし野
むさしのを霧のはれまに見渡せは行さき［するイ］遠き心地こそすれ
ふたむらやま
玉くしけふたむら山の月影は萬代をこそてらすへらなれ
まかきの嶋
よる波のかすをそしらすなりにける籬の嶋のまちかけれ共

あさかのぬま
ぬま水も氷にけらしこしかたの山路も今はたえやしぬらん
末のまつ山
あしたつのむれゐる末の松山はいくそかされの千年なる覽
よるのみそうすくいれたるはこのふたにあしてにて
しら波ののとけき浦の姫松は千年の數そそひてみえける
又
此夏のうすき衣は行末のかされてかゝるをりなたのまん
又御杖のふくろに
なよ竹のよなかき杖をつきてこそ八百萬代の秋はかそへめ
又
萬代の山にれさしゝはしめより君か杖にと見えにけらしも
御かさしのおほいにぬへる
萬代のよゝのみとりも清き哉これや千年のすめる水の色
千代をへて岩の上なる鶴さへそ君か千年につたふへらなる
しらたつの天の原よりとひつるは遠き心をしれるなるへし
御扇にあしてにて
昔より扇つたふる袖なれは君か手にてそ萬代はへむ
御はしのたいあるおしきのおもてに
君かへん萬代の數かそふれはたゝかたはしの千年なり鳬
三條のおとゝのおまへの前栽あはせに左右わきて歌
よむ人めしてよませたまひけるに水の上秋月
にこりなく千世をかそへてすむ水に光をそふる秋の夜の月
水のほとりの花
むらさきの雲とそ見ゆる月影に水の面てらす岸の秋はき
草むらの虫
千年とそ草むらことに聞ゆなるこや松虫の聲にはあるらん
齋宮のみやにてかんし給しに
萬代と天の空まて聞ゆるはよふかき松のしらへなりけり
駿河の守にて神はいして歸るにいそのほとりを行と
て
みさこゐるあら礒に立波なれはたいらけく社我國はあれ
申文にかきて奉る
澤水に老のかけみる芦たつの鳴音雲井にきこえさらめや
女の「ゐイ」いと思ひのほかになといひけるに
谷ふかくやく炭かまのけふりたに峯の雲とはならぬ物かは
ひら松のありけるを見て
年をへてたけも變らぬ平松のあやしやいかてれもみてし哉
女にいきて物いはんといひけれは來ても何ことをか
といひたるに「もイ」
芦の屋のこやとしいはゝ津の國の難波のことかいはす有へき
宮つかへ人のさうしのかへ近き所に立よりておほつ
かなきことなといひけれはさりとも夢にはみゆめり
といへは
君かまたかけにもかけてみえは社夢にも人をみつと思はめ
思はぬことゝいひけれはいはての森のなといひけれ
はさらはとて
思ふてふ事はいはても思ひ鳬辛きなといはてつらしともみし
女を思ひやみれと、ひけれは「なはイ」
ひたふるにいひもはなてそ世にふれは人憎からぬ物と社きけ
すみけるおとこよかれたりときゝしころ女に
君か宿ひまありけりと聞しより風に成ても入らんとそ思ふ

先帝の御時歌合・月卅日右霞
故郷は春めきにけりよしの山みかきの原を霞こめたり
鶯
我宿に鶯いたく鳴なるは庭もはたらに花やちるらむ
梅
白妙の雪ふりやまぬ梅かえにけふそ鶯春となくなる
青柳
さほ姫のいと染かくる青柳を吹なみたし〔りイ〕そ春のは〔やまイ〕つかせ
櫻
よと共にちらすもあらなん櫻花あかぬ心はいつかたゆへき
山吹
ひとへつゝ八重山吹はひらけなん程へて匂ふ花とたのまん
藤
我ゆきて花みるはかり住吉の岸の藤波折なか〔つくイ〕さしそ
卯花
あらしのみ寒き山への卯花は消ぬ雪かとあやまたれつゝ
時鳥
太山出て夜半にや來つる時鳥曉かけて聲のきこゆる
夏艸
夏ふかく成そしにける大あらきの森のした草なへて人かる
戀
君こふる心のそらは天川かひなくて行月日なりけり
人しれすあふをまつまと〔にイ〕戀しなは何にかへたる命さかいはん
忍ふれと色に出にけり我戀は物や思ふと人のとふまて
逢事のかたゐ〔たまイ〕さりする綠子のたゝん月にもあはしとやする
雨やまぬ軒のした水かすしらす戀しきことのまさるころ哉
大嘗會歌せたのはし
みつき物たえすそなふる東路のせたの長橋おともとゝろに
萬代をもちそ榮へん近江なるおものゝ濱の海士のひつきは
岩の上の河せきあけて植し田の稻は萬代たえすう〔つみてたへせしイ〕へにし
さゝ波のなからの山のなからへは久しかるへき君か御代哉
君か代をまちしもしろく大あらきの里の榮をみるか樂しき〔さイ〕
やす河の水底すみて鶴龜の萬代かれてあそふをそみる
いにしへもみすやありけん鏡山行末遠きとよのあかりは
鏡山やまひこたかくよはふ也世の榮ゆへきかけそみゆらし
世のとみは〔なイ〕いはくら山におさめ置て萬代までに君そ傳へん
とみゆかの〔數イ〕枝まさり行君か代にあへる國人たのもしき哉
朝妻のみゐのこのかけしけり合て榮へ行世をみるか樂しき〔さイ〕
是は繪にかもの社に人々まうつる車にてもかちにても
おなしくや人の心もいのるらむ我思ふ事をあやまつな神
あさましく有明の月と出つれとひたかく人にみえもする哉
あをうま
降雪に色もかはらてひく物をたれあを馬となつけそめけん
みこ達の〔にイ〕・出て子日し給へる所に
春立は子日をそする年をへて久しきことはまつをひくとて
大臣家大饗する所
ひきつれて大宮人のきませれは春うれしくもおもほゆる哉
大將の家にすまひのかへりあるしするに〔所イ〕
蹟きもなくて今年は數さしつるひさまたれて今日は歸りぬ
大將の家にむすめの裳きたるに
千早振神の社を尋つゝけふのためてふいのりをそする〔せしイ〕
祭の使のたつ所つかひまひ人へいしうなとに中將か

はらけとりて物かつく

ゐひにける我らはしらす綾もなしたかかつけたる罪にかある覽

駒むかへの使むかひあひてあそひてとれりに中將きぬゝぎてかつく

花すゝきほ末の露にそほちたる我衣手をぬきとるやたれ

足引の山路遠くや出つらん日高くみゆる望月のこま

市に物かふ車あり

市とのみいふそはかなき萬代をかひにそ我は急き出つる

ひはのほうし

よつの緒に思ふ心を調へつゝひきありけともしろ人もなし

すはうのめのくたる所河つらに馬わたしてものゝふところ

白雲の山へはるかに聞ゆるをなかと日たかく出たちをする

京の人の家に市女來たり酒うる

なよ竹の末のよ遠きわたらひは市女も我もかはらさりけり

さき〳〵にこりにし君かしひ戀を何業しにか又はきませる

招かれと數多の人のすかた哉〔たくイ〕とみといふ物そ樂しかりける

糸ひきゝぬおる所

年をへて織つくすへきいとなれや棚機つめをやとひてし哉

旅人いくあひたにぬす人あひたり

旅人はすりもはたこも空しきを早くいましね山のとねたち

つかさたまはらて內わたりの人に

澤水に老ぬるかけをみるたつの鳴音雲ゐにきこゆらんやは〔そイ〕

女をけさうしけるにあはさりけるかいつみの守なりける人にあひたるにそれもすまさりけるに正月はかりに

春雨に霽けの水もそふ物をなとてたえぬるいつみなるらん

駿河にふしといふ所の池にはいろ〳〵なるたまなんわくといふそれにりんしの祭しける日よみてうたはする

使ふへきかすにをとゝむ淺間なるみたらし河の底にわく玉

駿河になりて久しく音つれさりけれはよしのふ〔りぬるイ〕

怪しきは駿河の守といひしよりなとうと濱のうとくなる覽

かへし

うと濱の疎きにはあらす田子の浦の戀しか覽を豫て習ふそ

駿河なりけるものゝ男のいつといふ所にかよふかさきに人まうけてもとの人の許にはまからさりけれは神にうれへ侍けるうれへふみにはし侍ける

よこ走り清見か關の通路にいつといふことは長くとゝめつ

とありけれはしけゆきかへし

關すへぬ空に心の通ひなは身をとゝめてもかひやなからん

屏風の繪に子日する所四帖か歌

鶯の初音にけふはおとろきて春の山へになりくらしてん〔す哉イ〕

女の家に男きたり前に梅の花あり

梅かゝを便りの風やつけつらん春めつらしき君かきませる〔くイ〕

二月田舍家に田かへす所にかはつなく〔うたイ〕

澤水に蛙の聲はおいにけりおそくやからん春のを山田

三月櫻のはなを見る人

一年にふたゝひもこぬ春なれはいとなくけふは花を社みれ

釣舟つりをたれて海のうへにひかへたり

浦なきに釣のをたれてくる我そいたくなたちそ沖つ白波

濱に男女見わたせり

あら波のかけくる岸の遠けれは風まにけふそ舟渡りする
　六月はらへする所
河風の吹くるかけにふきくすしはらふる事そ涼しかりける
　七月七日女とも庭に出て尾花にいとかけたり
棚機のあふ夕くれの衣糸を秋の尾花にいくよへぬらん
　八月小鷹かりする所
秋のゝに招く尾花にはかられて狩にきつれとけふは暮しつ
　九月九日
朝露に我そほちくる菊の花つみしもしるき心ちこそすれ
　十月山のほとりなる家に男女ゐて紅葉をみて遊ふ
唐にしき色みえまかふもみち葉のちる木の本は立うかり鬼
　霜月谷河のうへにもみちおほうなかるあしろある所
　男女ゐたり
太山には嵐やいたく吹ぬらんあしろもたはに紅葉つもれり
　十二月大雪のふれるに家に男かしらに雪かゝりてゆ
　つるはもちてきたり
奥山のゆつるはいかて折つ〔こりイ〕覧あやめもしらぬ雪のふれるに
　内の御屏風四帖和歌春
　正月ゑする所
あたらしき年のはしめに逢くれと此春はかり樂しきはなし
　鶯をきゝて女の家に男きたり
人しれす待しもしろく鶯の聲めつらしき春にも有かな
　正月わかなつむ所
足引の山かたつける家ゐにはまつ人さきにわかなをそつむ
　三月花のもとに旅人たちとまれる
花みると家ちをおそく歸る哉待時すくと妹やなけか〔いふらんイ〕ん
　櫻の花をしむ所
色にあける年しなけれは櫻花けふ日くらしに折てこそみれ
　藤のはな松にかゝれる所
ときはなる花とそみゆる我宿の松にこたかくさける藤なみ
夏
　四月ほとゝきすきく家
太山出るまつ初聲は時鳥我宿ちかくうちもなかなむ
　五月長雨
我宿の庭の若草しけり合てなかめに日をもくらす比かな
　六日すゝみする家
水さむく風〔もイ〕の涼しき我宿は夏といふことはよそにこそきけ
　河つらにはらへする所
河風の涼しからすはみな月のはらへはか〔ひかイ〕りに物うからまし
秋
　七月七日
大空のことゝはみれと棚機〔にイ〕は衣〔ぬきイ〕きぬかしいくよへぬらん
　八月十五夜
夜もすからみてをあかさん秋の月こよひの空に雲なから南
　九月田かる所
時鳥聲めつらしく植し田をいなはもそよとけふは〔もイ〕かるかな
　野に出て花みる
をみなへし花みにきつる秋のゝを〔にイ〕あやなくまねく尾花也鬼
冬
　十月かものやしろにまうてゝかへる人道のなかにて
　しくれにあへり
かくるへき木の葉なけれは神な月時雨に袖をぬらしてそ行〔つる哉イ〕

十一月こほり池にあり
鴛のねのいたく鳴つる朝ほらけ池は氷にとちてけらしも
十二月雪おほうつもれる家
人しれす春をこそまて我宿に降つむ雪をは〔らイ〕こふ人なみ
これもおなし御屏風の歌となりに花の木ある家に人きたり
まかきより木末をみつゝ梅花春のとなりにけふはにきけり
子日
むれ立てめも春のゝに引松の千とせの春〔かすイ〕はたかためにそは
鷹かりしたる
妻こふるきゝすの聲もたえなくにはかなくけふは家路暮しつ
花みる所
はかなくもけふは山路に暮す哉かへらむ程に花やちるとて
三月三日桃の花ある家に
みちとせにひらくる桃の花盛りあまたの春は君のみそみん
松に藤かゝれる家
むらさきの雲うちなひく藤の花千年の松にかけてこそみれ
内の御屏風のれう梅花人來て見る
けふくれはあすも來てみん梅花花ちるはかりふくな春風
花の木ある家に人きたり
花の木を植しもしろく春來れは我宿すきて行人もなし〔そなきイ〕
櫻のはなみてとまれり
世中にたの〔うれイ〕しき物は思ふとち花みてくらす〔すくイ〕こゝろなりけり
山吹生たる所
枝たはにやへ山吹は咲にけり井手の河へをおもひやる哉
よき女藤のはなをもてあそふ
一年は春なからにもくれなゝん花の盛をあくまてもみん
藤の花を人をる
引よせてまつ社たをれ藤の花またみぬ人にみせに〔にイ〕やるとて
住吉の岸の藤波我宿の松の梢に色もまさらし
七月七日女庭に出て七夕祭するまらうときてまかきのもとにやすらふ
年毎に棚機つめをいのりつゝおほくの秋を過しつるかな
棚機のあかぬ別れの悲しきに〔もゆしきにイ〕けふしもなとか君かきませる
すゝきある家に男きたり
來ぬ人をよひに〔をイ〕はやらす我宿の〔はイ〕招く尾花にまかせてそみる
秋の夜女きんひくまらうときてすのこにゐてけさうす
秋の夜の月みるとのみあかし〔おきゐイ〕つゝ今宵もねてや我はかへ覽
秋の夜月あかきに萩のもとに鹿なく聲聞ゆ
月影に鹿の音聞ゆ高砂の尾上の萩の花やちるらむ
九月田かる所におきなあり
からくして急き刈〔こすなイ〕つる山田哉いなおほせ鳥の後ろめたさ〔をおふもてたゆしイ〕に
足引の山田の梢あすまてといなおほせ鳥の思ふことたゆ
山里に女ありかりする人に物いふいらへに
かりにくる人はやとさす昔より都の事はゆかしけれとも
十一月たひ人
何にかは急きもゆかん夕暮にあすもこえなん山にやはあらぬ
十二月佛名する家
數ふれは我身につもる年月を送りむかふと何いそくらん
内の御屏風正月梅の花を
日頃へて待しもしろく我宿の梅の梢に春は來にけり

柳ある家

青柳のまゆにこもれる糸なれはくる春〔はる／＼イ〕のみそ色まさりける

四月山里にて時鳥きく

山里に家ゐせしより時鳥夜半の初音は我のみそきく

五月五日男馬引出てみる

我駒をあやめの草に引そへてさつきもくれはみぬ時そなき

六月河つらにてはらへする所

夏の日〔よもイ〕はすゝしかりけり河風ははらふる事もかくやなる覽

七月七日

殘りなく衣はかしつ棚機〔はイ〕にけふもせなこは我いかにせん

天川かはせの風に七夕も夜のふけ行をまちやわたらん

八月野に出て花みる

はるかにそ花みにきつる女郎花あたなる露に移ふなゆめ

うかひの家の前に河あり鵜かふ

うかひする河へに年を送りつゝうき世〔のこゝイ〕中をしらてこそふれ

命長き人の前に松竹あり家のほとりに菊あり

春秋もしらて年ふる我身哉松と竹との〔ちよイ〕年〔をイ〕をかそへて

年をへて菊の下水〔くみイ〕みてしより老といふこと◉しらて社ふれ

戀しとはいへはさらなり水の上に降つむ雪と人はしらなん

なからといふ所に行て女の〔ひイ〕許にやる

忘るやとなからへゆけと身にそへて戀しき事は後れさり鳧

女風にわつらふときゝて

まつ人を梢に高きなきさこそ風にわつらふ身ともなるらめ

いとおもはしかりける女に

思ふてふ事のよにたにふりさらは我いへる〔とそイ〕こと君にいはまし

宮つかへする女をしもにおりよといはせたるにえおりましといひたれは

大空にたな引雲のめに近くおりゐるとみは我はたのまん

いひわたりつれとつれなき女に

みちのくのあたちか原のしらま弓心つよくもみゆる君かな

群書類從卷第二百五十一

和歌部百六家集二十四

實方朝臣集

〔千載別〕昔みし心はかりをしるへにておもひそをくるいきの松原

臨時

石清水のりうしのまつりのつかひにてためまさの朝臣のありけるとしの舞人にてまたの日かさしのはなにさして

〔續後〕かつら河かさしの花のかけみえし昨日の淵そけふは戀しき

しら川殿にて石上のまつを

一の種としあれは岩の上の子日の松もおいにける哉

四月のついたちの日殿上人山里にいきて郭公をまつ

みやこ人まつをもしらて郭公月のこなたにけふはなかなん

しら川殿の結緣の八講に

けふよりは露の命もおしからすはちすの上の玉とちきれは

山里にて日くらしの聲をきゝて

〔新勅〕はを繁みと山の影やまかふ覽あくるもしらぬ日くらしの聲

しきつといふところにてふねにて日のくれにけれは

船なから今宵はかりは旅ねせんしきつの波に夢はさむとも

高松殿のうへにきこえさせたまひけるにさふらはせ給ひけるほとにや

かみならぬみは蓮葉のいける世にうきは獨とおもほゆる哉

宇治にて

はしひめの片しく袖もかたしかて思はさりける物を社思へ

五月五日小一條殿にて

宿のうへに山郭公きこゆなりけふは菖蒲のねのみと思ふに

大將をしゝきこゆる事ありてしはしみえたてまつらぬに白川にいたり給とてれいのいさなひ給に

白川にさそふ水たになかりせは心もゆかておもはましやは

ほり川の院にて御屛風のうしろにこまの命婦かゐたるにかみよりやまふきのはなをなけこさせ給へるをうへのせさせ給へるとこゝろへて

〔續詞〕やへなから色もかはらぬ山吹の〔なきこゝのへにイ〕九重になとさかすなりにし

ときこえさせけれは一品宮の大はん所

九重にあらてやへさく山吹のいはぬ色をはしる人もなし

又　少將

□しひたきにみゆる花なれは心の中にいはて思ふか

上御

御垣より外のひたきのはなゝれは心とゝめておる人もなし

さくらのおもしろきをある人に心をよせて

うへてみる人の心にくらふれはつねなくちらぬはな櫻かな
かへしむすひつけゝる
蔭にたにたちよりかたき花のえをならし顔にも較へける哉
またかへし
立よらんことやはかたき春霞ならしの岡のはなならすとも
清凉殿の御前のすゝきをむすひたるをたかしたるな
らんといひて内膳の命婦のむすひつけさせける
ふく風の心もしらす花すゝきうらにむすへる人やたれそも
殿上人返しせんといひすさむほとにまいりあひて
〔新勅〕風のまにたれむすひけん花すゝきうは葉は露も心をくらし
あさひの山のふもとにかみまつりけるところ
朝日山ふもとをかけてゆふたすきあけくれ神を祈るへき哉
杉むらのもりにてほとゝきすをきゝて
はふきつゝいまやみ山をいてつらんすきかけてなく山郭公
あまの川にて
〔新古〕天の川かよふうきゝにことゝはん紅葉の橋は散やちらすや
宇治にてこれかれゆくにかけまさの朝臣のひわりこ
のふたにかきておこせける
はし姫の夜半の寒さもとふへきをさそはて歸る狩人やたそ
かへし
橋姫に袖かたしかん程もなしうちにとまらぬ人かたらひて
かけまさのあそんもろともにいそきけるころ花山院
のおりさせ給へるをなけきて
いひてなそかひ有へくもあらなくに常なき世をも常に歎かし
道信中將に花山院の御ことをおもひやりて聞えける
花のかに袖をつゆけみをの山のやまのうへこそ思ひやらるれ

權少將とのゐところに枕はこわすれたるをやるとて
あくまてもみるへき物を玉くしけ浦嶋のこやいかに思はん
かへし
玉匣なにいにしへの浦嶋にたれならひつゝをそくあくらん
たちかへり
をそくしもあくこそうけれ玉匣あな恨めしの浦嶋のこや
つねふさの少將のもとにとのゐものあるとりにやる
とて
返さんと思ふも苦しから衣わかためかふるおりしなけれは
道綱の中將のあしろにさそひけれは道心かり給ふよ
りはせ（殺）生このみ給こそとて
・宇治川の網代のひをゝ此頃はあみたほとけによると社きけ
かへし
ひをのよるうちにはあらて西河の網たにあらはいほも救はん
仁和寺僧正御くたものまいらせ給ふらいし（櫑子）のか
へさにかきつけたる
思ふ事なりもやするとうちむきてあなたさまにそ櫑子奉る
かへし
我爲にむらいしたまふことならは思ふ心もならさらめやは
かすかにて
〔かはすイ〕えたわかぬかすかの里の姫小松いのる心は神そしるらん
正月のついたちにたちはなのきに雪のふるを
時は春はなはさ月の花かもし鳥の聲にやけさはわくらん
かへし
郭公なくへき枝とみゆれともまたるゝ物はうくひすの聲
花山院の春宮と申しゝときに九月御庚申に

もみち葉の色とる露は九重にうつる月日やちかくなるらん
　時明（朝イ）朝臣ほうしにならんするころ女にくしの箱
　とらするふたにあしてして
なれこける程な忘れそ玉くしけあけ暮そはぬおりはあり共
　そのくしの箱を女院の物にてめしけれはたてまつり
　たるを御覽してかへしたまはすとて
忘るなと契りをきける玉くしけ我かたみとやけふはみる覽
　御かへし
中々になくかたなきは玉匣みには餘れるかたみなりけり
　さね明の君の女をかれにけれは女にいひやる
〔信明集〕わひつゝも此よはへなんわたり川淵瀨を誰にとはんとす覽〔後のふらせと誰にとはまし〕
　殿上にてこのは雲日とつと字かんぬ（おイ）のやにさ
　（御イ）くりあとゝいふもしを
常ならぬよをみるたにも悲しきに夢さめてのち思ひ社やれ
　宰相中將こそきみといふ子なくなりて七月八日のあ
　さほらけに
七夕のけさの別にくらふれはこはなをまさる心ちこそすれ
　おなしころこのなき人をみて
〔後拾〕うたゝねの此世の夢のはかなきに覺ぬやかての命ともかな
　ほとへて難波へゆく道にてなからのはしにて
親も子も常の別のかなしきはなからへゆけと忘れやはする
　ものへ行みちにしはつみたる車のゆきわすらふをみ
　て
はるこりのしはつみ車うしよはみたか故鄕の垣ねしめにそ
　十月の一日ころのふかたの中將に
いつとなく時雨ふりをく袂にはめつらしけなき神無月哉
　おなし人をうちにさそふとて
いてたちて友まつほとの久しさにまさきの葛ちりやしぬ覽
　かへし
急かすは散も社すれ紅葉々のまさきの葛おそくくるとて
　道信中將りうしのまつりのまひ人にてもろともにあ
　りしをふたりなから四位になりてのとしのまつりに
古のやま井の水にかけみえて猶そのかみの事そこひしき
　かへし
古の衣の色のなかりせはわすらるゝ身となりやしなまし
　ためたふの弁なかよりか家にたゝそめしとしことし
　はかりとて宮のへのうへの御そのはしらひたりける
　けしきをみてしりうことに
天にます笠間の神のなかりせはふりにし中をいかてとはまし
　人のもとにかみこひにやるとて
何をしてとよをかひめをいのらましゆふして難き神無月哉
　ふるきとしみかはのかみのいとたてまつらんといひ
　て又のとしおこせたるに
いにし冬いとしも何にまたれけん春くる物と思はましかは
　うさよりかへりて人にかみなところさすとて〔み〕
〔續詞〕いさや又うさの社はしらねともこやそなる覽すくなひの神〔ちこ〕〔も〕〔ぬ身はイ〕
　かへし
ひろまへにまさぬ心のほとよりは大直日なるかみと社みれ
　うちにて川にうきたるはしにうたゝねしたるにのふ
　かたの中將聲をかくして
うちかはの夢のまくらのゆめさめて
　といへは

よるははしひめいやねさるらん
新甞會のよあかひものみたるゝとのふかたの中將う
れふれは
いかなるひものよそにとくらん〔こくるなるらんイ〕
のふかた
〔後拾〕あしひきの山井の水はさえなから〔こほれるをイ〕
雪ふりてあしたに弘徽殿の北おもてにみちなかのき
みとたちよりて左京のきみに〔る哉イ〕
〔續詞〕あしのかみひさよりしものさゆなるは
といへは
こしのわたりに雪やふるらん
ゆみのけちにまたらまくに雪の降かゝれるを入道の
少納言
まへかたのまたらまくなるゆきみれは
とあるに
しりへの山そおもひやらるゝ
殿上にてほとゝきすをまつ心を
かきくもりなとかをとせぬほとゝきす
ためすけ
かまくらやまに道やまとへる〔よイ〕
ためすけかうふりうへきまへのとしの八月に月のあ
かきよものかたりなとして
かそふれは今いつ月になりにける
ためすけ
むつきにならはとふ人もあらし
みかは水のつらにゐてなかむるにある藏人のものお
もひかほにてゐたるかなといへは
こひとさほしきかけやみゆらん
といふに
やつはしにあらぬみかはのをちにゐて
六月はらひにあるやかきのまへをわたれは
さをしかのみゝふりたてゝきこしめせ
といふ人あれはいとゝく
おもとをゝかすつみはあらしな
五せちのころにてまかてなんといひあるきけるを
六條殿の少納言
くものとを月よりさきにいてつれは
といふをきゝて
ふしみの里に人やまつとて
小一條殿の人々なそ／＼物かたりす
かたすまけすの花の上の露
といひけるに
すまひ草あはする人のなけれはや
うちわたりの人にあふきをとりてかへさゝりけれは
たかためにおしむあふきのつまならん
といへは、
とれかしとらのふせるのへかは
八月はかり月あかきよ花山院のひか哥よまんとて
秋のよにやまほとゝきすなかませは
さねかた
かきねの月やはなとみえまし
三條院にてせ〔説〕教せられし日ひつとものおほくみ

ゆるを
このひつはなにそのひつそおほつかな
　といふにためすけ
かたねのまへのほかゐなりけり
　ためすけの弁しのひたる所よりきたるあしたに
たかさとにいかに契し郭公いもかきねの花や散〔咲イ〕にし
　道信の少將よのなかはかなき物かたりしてまたのあ
　したにきしをやるとて
たつ雉のうはの空なる心地にも遁れ難きはよに社ありけれ
　ほりかはの院の子日つかまつりし
むらさきの雲のたなひく松なれは綠の色もことにみえ鳬
　花山院の哥合に
のとけくも思ほゆるかな壓たゝぬ花の都のさくらと思へは
　またおなしうた合に
月影はやとにしとむる物ならは思はぬ山はおもはさらまし
　しくれ
秋はてゝかみの時雨はふりぬらんわか片岡のもみちしに鳬
　うさのつかひのおりもろともにみんと契りけるをか
　の少將なく〔はイ〕なりてのとしのあき
〔後拾〕みんといひし人もはかなくきえにしを獨り露けき秋萩の花〔の花哉イ〕
　白川殿にて鹿の聲をきゝて
浮世にも山のあなたの床しさに鹿のねなからいやはねらるゝ
　ある女のもとにさねかたの兵衞佐となのりてこと人
　のいきたりけるを女に
誰ならんいはての森に言とはんしめのほかにて我名かり劔
　小しゝうさた通ひけるけしきをみたる人のいひちら
　しけれは命婦のもとなるたつたやといふしもつかへ
　して
仇浪のたつやをそきと騷く也みしまの神はいかゝこたへん
　おなし女にふみをこまの命婦さわやかくなき事をい
　ふなといひけるをきゝて
こまにやは先しらすへきまこともことゝ思ふ人も社あれ
　小一條にある人のむすめをしのひてかたらふに女お
　やきゝつけていみしうはらたちてつみなとするとき
　くころ三日の夕かた北のかたもちゐまいれとあれは
〔後拾〕みかのよの餅ゐはくはしうかり〔わつらはし〕鳬きけはよとのにはとこゝみ〔む也イ〕鳬
　おなしところの少將のおもとこせちのまひ姫にてか
　へりたるに
かみまひし乙女にいかて榊葉のかはらぬ色をしらせてし哉
　この人たいのあらはなるにゐあかしてつまとををし
　あけたりけるに空のけしきもおかしくてかたちもま
　さりてみゆれは
天のとを我爲とてはさゝねとも怪しくあかぬ心地のみして
　おなし人のさとなるになきよしをいひてあはさりけ
　れはうちにまいりにけり女あけほのにおこせたりけ
　り
天の戸のさゝてこゝにと思ひせは明るをまたて歸らましやは
　かへしことはりとて
天の戸をあけてふ事をいみしさにと計りとはぬ罪は罪かは
　おなし人わかき心地やみけるをうすくなんいかにし
　たるとかきゝて
いかなれはわれしめしのと思ふらん春日の原を人やや〻覽

ある女をいかなることかありけんいまはさらにとは
　しなとちかひてかへりてほとへていかゝおほえけん
何せんに命をかけて誓ひけんいかはやと思ふおりもあり皃
　人にはしめて
〔詞花〕いかてかは思ひあり共しらすへき室のやしまの煙ならては
　宰　相
七夕の契るそのよはとをくともふみみきといへ鵲のはし
　かへし
たゝちには誰かかよはん天川うきゝにのれる世は變るとも
　小一條とのゝするかにふみやりたるにかへりことは
　せてたゝいなはの山のといへるに
結ふなるをやまの山もある物をなにゝいなはの峯にかく覽
　おなし院〔みや歟〕に宮内といふ人男に髮きられたりときゝて
よそなから消すきえすみある雪のふるの社のかみを社思へ
　又おなし院にある人承香殿にまいりてみし人とたに
　おほしたゝぬ〔のうちイ〕ことをうらみけれは
〔後拾〕わりなしやみは九重にあり乍らとへとは人の恨むへしやは
　これかやうにうらむる人に
我なから我ならす社いひなさめ人にもあらぬ人にとはれは
　ある女に
ものをたに岩まの水のつふ〳〵といはゝやゆかん思ふ心の
　また
おほつかなわかことつけし郭公はやみの里をいかになく覽
　わらはよりみける人を心かけて
二葉よりみしまのみすを結はんと涙の打いてゝえ社いはれね
　わすれにし人のもとにいきてえふともいはて
わかことやくめちの橋も中たえてわたしわふらん葛城の神
　おなしさまなる女のもとより
今はとてふるすをいかに鶯のあとみることにね社なかるれ
　かへし
うくひすの古巣をいてゝ雁金の歸るつらさも思ひならまし
　つゝむことありてあひかたかりける女に
大かたはたかなかおしき袖をみて雪もとけすと人にかた覽
　清少納言とてもとすけかむすめみやにさふらふとお
　ほかたになつかしくてかたらひて人にはしらせすた
　えぬなかにてあるをいかなるおりにかひさしく音つ
　れぬをおほそうにて物なとあらそふを女さしよりて
　わすれたま〔わすれイ〕へなよといへはいらへはせてたちかへり
〔後拾〕忘れすよ又かはらすよかはらやのしたゝく煙下むせひつゝ
　かへし
賤のやのしたゝく煙つれなくて絕さりけるも何によりそ〔てそイ〕も
　承香殿の宰相君のさとにいきたるに人あるけしきな
　れはかへりて白河にせりあらふ女して
中川に洗ふ根芹のねをほりてあらはれて社あるへかりけれ
　ひは殿にないきの侍從のきみといふ人に
山人のをのゝ便りと思ふともこりしもせしな峰のつまきに
　うちわたりの女に尾花につけて
是をみよちきらぬ野への尾花たにこと社いはね招く物をは
　又ある人に
をみ衣めつらしけなきはる雨に山井の水もみきはまさりて
　ものいひける人のたえてのち

笹蟹のくものい垣のたえしよりかくへき宵も君はしらしな
おなしところに十月のついたちの夜いきたれはみちつなの少將そまへよりありける夏のなをしきたるをみて
身に近きなをたのむとも夏衣昨日はかへてきたらましかは
うちの女さうしをへたてゝものいふにこれあけ給へといへはさゝぬものをといふいらへに
しまのこか心ゆるさぬ玉匣あくれとあかぬ物にそありける
またうちの女にたひ〱かへりことのなかりけれは
水莖の跡さへたゆる玉つさはみのゝを山のかみやいさむる
みのゝかみのむすめなりしかはかみのみるほととて返事なけれは
覺束なかゝらぬたひもある物をたちけるかみの心つらしも
人にはしめて
〔後拾〕かくとたにえやは伊吹のさしも草さしもしらしなもゆる物ゆへ〔おもひをイ〕
かうしのつらに一夜ゐあかしてあしたにおなし人に
あけかたきふたみの浦による波に袖のみぬれし沖つしま人
うちのかうしをよひとよならすを女さなゝりとはききなから心しらぬ人にてあらくとはせたれは音もせて返にけるあしたに女
〔よイ〕あけぬよの心乍らにやみにしをあまえてとひし〔あさくらさいひしイ〕聲は聞きや
かへし
〔後拾〕獨のみこのまろ殿にあらませはなのらて闇に歸ら〔まよはイ〕ましやは
四月はかりにこの女のもとによふかくよりてたちききをするにまたねぬけはひなれは
まとろまぬ人もありけり夏の夜に物思ふことは時ならす共
いとゝしけうつゝむことも心やすくもあらぬに
ある女に行末のこと契りちかひなとしてのちいかゝありけん
諸共にをきふし物を思ふともいさとこなつの露となりなん
〔玉葉〕誓ひてし事そともなくわすれなは人の上さ〔まてイ〕へなけくへき哉
かへし
〔歌關〕おやのせいしける所にいくをきゝてひなき事といひけれは
いはゝゆへ親のかふこも年をへてくる人あれと厭ふ物かは
かへし
繭こもり親のかふこのいと弱みくるも苦しき物としらすや
はやう物いひし人にかれたるあふひにつけて
古のあふひと人はとかむとも猶そのかみのけふそわすれぬ
かへし
かれにける葵のみこそ悲しけれ哀とみすやかものみつかき
うさよりかへりたりけるに人のくしをこひけれはうちわたりの人
こし道にけつる共なき旅人のたむけのかみに盡しはてゝき
かへし
かくし社かくしをきけれ旅人の露拂ひけるつけのをくしを
おもひかけたる人のうちよりまかてたるとのゐ所のまへのせさい(前栽)をみて露をきたりけるをなとか見給はさりしといへは
をきてみは袖のみぬれていたつらに草葉の玉と數やまさ覽
七月七日ひきたりける糸にくものすかきけるをみて

さゝかにのもろてにいそく七夕のくもの衣はかせやふく覽
　といふかへし
七夕(ひこほしのイ)のくへき宵とやさゝかにのくものいかきもしるくみゆ覽
　はちすの葉に［　］をつゝみて女に
いつれをかのとけき方と賴まゝしはちすの露と空蟬の身と
　かへし〔此歌公任集爲公任作〕
蓮葉のうかふ露こそたのまるれなに空蟬のよをなけくらん
　ある女にふみやりたるかへり事にあけまきをむすひ
　てをこせたれは
ひろ計りさかりて麿(まろイ)と旅ねせよその總角(のイ)にしるしあらせん(りやこイ)
　人のもとにまくらをゝきてこすなりにけれはかへす
　とて
をきてみるかひもあらまし忘るゝを是たにつけの枕なりせは
　するはなきなめり。ことなりしさかしらなめり。
　かへし

小一條殿の中將君に五月五日
水鳥のさはかぬ沼の景色にもいつかとのみそ猶またれける
誰そこのみわの山もとしらなくに心のすきのわれを尋ぬる
　おもひかけたる人のねたるをみて
うき事の夢のみさむる世中にうらやましくもねられける哉
　ある女かよふ人をうらみてこと人を語らふときゝて
かくなむとつけの枕にあらめ共しらさらめやは戀の數をも
　これはいかなりけんおりにか〔よこなイ〕
〔石抄〕大井川ゐせきにつゝむ水なれやけふ暮難きなけきをそする

また人のむすめにしのひてかよふをほとなくむなし
　くなりにけれはあかすあはれに思ひ出つゝ女の母に
〔後拾〕契りありて又は此世に生る共おもかはりして忘れもやせん〔見もやわすれんイ〕
郭公花たちはなの香をうとみこと語らふときくはまことか
　四月はかりにものいふ人の五月になりていたくしの
　ひけれは忍ひたる所のかとをたゝきけれはあけさり
　けるつとめて
覺束なまた明ぬよの月をみてあまのとはかり詠められしか
　小弁といふ人にことひとのものいふときゝて
〔後拾〕浦風になひきにけりな里の蜑のたくものけふり心よはさは
　中宮の宰相のきみのうへにのみさふらふをうらみて
風はやき嵐の山のもみち葉もしもにはとまる物とこそきけ
　五節のころあふきをとりかへて臨時のまつり日かへ
　すとて女
夕かけて扇も今はかへしてんまはゆくみえし日影と思へは
　かへし
諸共にをくるあしたもきたみぬ(こイ)に何の日影のまはゆかる覽
　又女に
山人のをのゝえはみな朽にしをいかなる人のつまきこる覽
　中宮の宰相君七月七日に
七夕のをにぬく玉もわかことやよはにをきゐて心かすらん
　ある女かよふ人ありときくをしのふけしきなるにか
　の男のあふきにみしまかきたるところ
まつに社思ひかゝるときゝしまにねに現はれてみゆる藤波
　世の中の家々のおほくやけたりし春ところを人のお
　こせて

此春は珍らしけなきやけところつれなき人はいかゝみる覽
　かへし
煙たつひの本なからゆゝしきにこは唐土のところとそみる
　とのもりの君にむらさきこひたるをこすとて
かこつへき人もなきよにむさしのゝわか紫をなにゝめつ覽
　かへし
したにのみ歎くをしらて紫のねすりのみやはむつましき故
　又人になにのおりにか
むらさきの色にいてにける花をみて人は忍ふと露そ置ける
　かへし
しら露のかそふはかりの花をみてこはたかかこつ紫のゆへ
　五せちのまひひめに
おほつかないかに吾をもすへらきの豐の明をいつくとも哉
　承香殿の宰相君なしをさしいてたれは
隠れなき身とはしるゝ山梨のおふのうらまて思ひなる覽
　おなし御かたにせきこゝのへといふわらはのこなた
　あなたにゐて人とものいふをみて
こゝのへは關のこなたときく物を關のあなたの九重やなそ
　白川殿にて道つなの少將せきとふしたるによりて
いかてかは人のかよはんかくはかり水ももらさぬ白河の關
　おなし少將とふしてさうゝしくもあるかな女かた
　をきたるところやとて人やりたるにかへりてあなは
　らいたとの給ひつる人の御聲なんしつるといへは
その原やいかにやましく思ふそも伏屋といふも處やはなき
　女たちかへり
何とてか人をも更に恨むへきもにすむ虫をしらは社あらめ

高光集

　十月九日冷泉院のつりとのにて神無月といふことを
　かみにをきて哥よませ給に
神無月風にもみちのちる時はそこはかとなく物そかなしき
　一條のおとゝのもとなる人に
秋風にみたれてものは思へともはきの下葉の色はかはらす
　はゝ宮うせ給て年かへりて雨のふるひ姫君に聞えし
ひねもすにふる春雨やいにしへをこふる袂のしつくなる覽
　御返し
詠むるを空もしれはやひくらしにをやみもせすは降そはる覽
　世中はかなくのみ「しらイ」おほゆるころ雪のふるに
世中にふるそはかなき淡雪のかつはきえぬる物としるしる
たつ雉のうはの空なる心にものかれかたきは此世なりけり
　うちとけてもあらぬ人をわりなき所にひきとゝめて
　かくやはとつまはしきをしかくれはあなかまへきく
　らんとわふれは
さもあらはあれ人のきく覽事もいさての限りなる物思ふ身
　歌合に
萬代の松にかゝれる秋の月ひさしき影をみよとなるへし
　ひこのめのとの出羽にくたるに餞たふとて人々歌よ
　むに
旅の行（をイ）草のまくらの露けくはをくるゝ人の涙とをしれ
　天暦三年三月つこもりの日文人めして花も鳥も春の
　をくりすといふ心を詩につくらせ給にやかてやまと

歌ひとつそへてまいらせよとおほせられしに
櫻花のとけき春の雨にこそふか(ゑイ)きにほひもあらはれにけれ
紅梅あはせに
鶯のすをくひそむる梅のはな色もにほひもおしくも有哉
小(花イ)宮かくれたまへるころ
世中はかくこそみゆれつく〴〵と思へはかりの宿りなり鳬
おほんさうそうのゝち
たのみこしときはの山も大空の霞にかすむよに社ありけれ
おなしころおほんふくにて七月七日のことにやあり
けん
七夕のわたるせもあらしあまの川藤の衣のみてるよなれは
といひしかは
かさゝきの橋なかれなは藤衣きしより身をや誰もすつへき
ひめ君にきこえし
常よりも秋の恨あることし也野への草葉も露にしほれて
七月七日宮君に火(はイ)たてまつるとて
秋風のはしめてむすふ白露といひをくほともゆゝしかり鳬
御返事
〔草イ〕年のはにかゝる心を白露といひをくほともひさしかりけり
白川にすみ〔イ无〕にわたりて
白河のまつの色こきかけみれはいつれか色もかはらさり鳬
ひめ君の御かたにこしと思へとこられぬこんと思へ
とこられすときこえたるを宮きこしめしておほせら
れたる
頼むにはしけさまされと思へ共こられさらんはになき事也
おほんかへし
年をへて繁さ増れはみ山木のよゝをへつゝもこられてし哉
そちの大納言のむすめ左衛門督にいかなりしおりに
か
いふ事のなひき難さに白露のおきゐてのみもあかしつる哉
にしのこふみたてまたしたりけるかへりことのなか
にかくかきてくはへたりける
年をへて思ふ心のしるしにそ空もたよりのかせはふきける
又これもおなし人に
片時もわすれやはするつらかりし心も更にたくひなけれは
七月七日九條殿の御まへにて君たち參たまへるにけ
ふの心よめと仰られしに
うちよする波にまかせて七夕をたちなかくしそあまの川霧
これは一條殿　謙德公
七夕のまちかけにする今宵すらなにたちさはくあまの河波
ほり河殿　忠義公
あすよりはゆゝしかるへき七夕の羨やましきは今宵なり鳬
すけまさの朝臣をかたらひわたりてとのゐしたるよ
もろともにといひてさはる事やありけんみえたまは
さりけれは又の日
程へたる覺束なさもある物をひとよはかりにまさる侘しさ
女七宮みこにならせたまふよ人々歌よみ給ふに
あやまたぬたねにしあれと姫小松心ことにもいのるけふ哉
天暦九年うさのつかひにきよとをくたるに餞せんと
上のぬしたち歌よみ給ふついてに
露のことはかなき身をはをきなから君か千年を祈りやる哉
おとゝうせ給ふてのとし新甞會のころうちにもまい

らてないしのもとに
霜枯の蓬の門にさしこもりけふの日かけをみぬそわひしき〔かかなしきイ〕
ある人のむすめに物語するほとに女のおやあさまし
とてもろともにゐあかしてかへりてつとめて
戀やせん忘れやしなんぬともなくねすともなくてあかしつる哉〔よをイ〕
女のおやのかへし
ぬともなくねすともなくてあかすよを戀もなこひそさらは忘るな
世中はかなくのみおほえてほうしになりなんとおほ
ゆるころ
たのむ夜か月のねすみのさはくまの草葉にやとる露の命を
村上の御門かくれさせ給てのころ月をみて
かく計りへかたくみゆる世中にうらやましくもすめる月哉
たふのみねに住ころ人のとふらひたる返事に
いかてかは尋きつらんよもきふの人もかよはぬ我やとの道
花盛に故鄉の花を思ひやりていひやりし
みても又またもみまくのほしかりし花の盛はすきやしぬ覽
ある女のかひねりのきぬを十月はかりにくとくにつ
くるに
もみち葉のおつるほとしも唐衣にしきかくるそ哀なりける
たゝきよの衞門督こせちたてまたしたまふにたきも
のかうはしうあはすとてそらたきものすこしと多武
のみねにこひ給へるにたち花のなりたる枝にみをと
りうてゝそれにいれてたてまたすとて
末のよになりもてゆけは橘の昔のかにはにるへくもあらす
かへし　衞門督
香をとめてこひしもしるく立花のもとの匂ひはかはらさり鳧
とふのみねに住比あさみつの大納言ひはの北のかた
わつらひ給ふ祈せよとのたまふに
昔よりきゝならしこしいかゝさき淺からしとを思ひなさ南
返事　大納言
早くより聞ならしけるいかゝさきすゑの人さへ賴もしき哉
ひえの山にすみ侍るころ人のたきものをこひて侍り
けれは侍りけるまゝに梅花のわつかにちり殘りける
につけてつかはすとて
春立て散はてにけり梅のはなたゝ香はかりそ枝に殘れる

相如集

いつものかみにてのちつかさなし藏人にて春宮に候
へし女に
祈事をきかぬものからちはやふる神てふ神は君につきにき
ふてよつをとらせたるをすくなしといふ人に
ひとつしてとをにかくともたらしかしつくまにまつる□
これのりの少將のもとにゆきてとのゐものゝかうは
しかりしかは
我妹兒かみなれ衣の移りかをひとへねたりと人そとかめし
人のもとより
數ならぬ人のひとへにやまふきの八重九へといかてしる覽
かへし
九重にや八へ山吹はしりたれとゝへといへとは君そをしへし
あたならんといひし人に
いな舟のいなみなはてそ最上川みなれは社は流れてもみめ
七月六日
あすは人ゆゝしといふ也最上川あけぬ此方にあひみてしかな
ものいふて中絶たる人のもとにゆきたるにふすへか
ほなれは
今更になにたけくまのたけからん心のうちに松はおひつゝ
くらのかみ(相信)のふくぬきし日
藤衣はつるゝ袖のいとよはみ涙の玉のぬきそみたるゝ
一品宮むめつほのはきの花くらへさせ給しに
くらふれと勝らさりけり花なからこの宮城のゝ萩の下葉は
おなし藏人のころ御文あけてみたりとてつみあるへ
しときはかるゝに
雲の上たかくみゆれは天川ふみゝぬせにて身をやしつめん
ひとのもとに人の
あたことのたへまやなとゝ葛城のくめちの橋の中ならなくに
これをみて
葛城やくめちの橋のその中のとたへにとはゝうらみ渡らん
おりしらす
たとふるも心ある物をいは橋のひとことぬしは渡らさら南
ひは殿にてこゆみのかけ物にせられたる
すみよしの岸に咲てふ藤ならてなにをか春の末にかくへき
かへし
住よしの岸ならすとも藤波の心をわれにかけてみよかし
物いふなかにいかにも〳〵いつといひやりたるにた
たいなとのみあれは
(新千載)いとゝしく頼まるゝ哉最上川しはし計りのいなを(ミイ)みつれは
宮の御事にてさはかれしころ人をとらへてせちにあ
るましきよしをいへはゆるして又の日
みちのくの奥を思ひはゆるしゝを我たけくまと思ふ覽やそ
はらへのつかひに難波にゆきてもとりといふうかれ
めにつきて
つの國の難波の葦のほのかにもねにきと人にいひつへき哉
おなしもとりにやる
行末はいのちもしらす夢ならて何れのよにか又はあふへき
むすめにすはうのかみなかきよ
なは代によとみし水を打返しかけはこひちにおりたちに鬼

かへし

おり立てかくとしきけは小山田にたてるそうつの心地社すれ

　いなはへくたるときゝて

吹風につけても悲し稲葉なるいなはにかゝる露の身なれは

　かへしおや

露の身のいなはにかゝる程もなく已か軒端をみする也けり

　堀河の中宮のたくみの藏人に兵衞のそうなる人住と
　きゝしに

柏木の杜のした行みつからにくもらはことか人のいふめる

　人のむめこひたるやるとて

しらしかし花なる人の心にはかゝるなけきの身になれり共

　わかかりし時女三宮におかしといはるゝ人にいかて
　ものいはんと思ふにおさなきちゝ〔こ歟〕のあふきに女
　をこのかたをかきてもたるにたかそとゝへはその人
　のといらふれはかくかきつく

いひ出はそらもやはちん〻和なる姿の池のかけのたかはぬ

　かへしむめのさるをつくりて

大和なるすかたの池にうきさるのまさるを君か影と社みれ

　たちかへり

かくいへとかるきか池に底のなを影の移れとさると社みれ

　ほとへていかにそといへといらへなし

覺束なたへて物をそいはしかよいつら渡りにあらし事そも

　つねにいひたはふるゝをはしめよりの人あれはわつ
　らはしかりていらへもせぬをとのゐしてつとめてあ
　りくちおしくてみかうしはなちて手をたゝけはふと
　よりきたりにけてかへりぬみかうしあくる人にたれ
　そとゝへは朝顏にさして

露のとくをきてみつれは朝顏をにくけなりとそ思ひぬる哉

　心にくゝ思ひつるといへりしかへし

うちとけてをのかき根の朝良を我身そいかてひとおほす覽

　またかへし

我宿の垣根なからもおいのよにいさまたかゝる朝良はみす

　いきことなし給ふとあるねたしとてかゝみ草にさし
　て

朝かほのよそこそあらし影移るかゝみ草をそそこにみつ覽

　またかへし

かゝみ草ありける物を朝顏を思ひもしらぬ人のこゝろよ

　女いとあやしかるそしりたまはぬかとて

一つたにすへて心のなき人はをのかかけ共あらぬとやする

　またかへし

我にたにかけをならへはかゝみ草その朝良はみもなをしてん

　ねたかりてかゝみのかたにかみをしておかしけなる
　女とさるのゑほうしたるとかきならへて

並へてももるさは君こそ增鏡さるや移れるかけにてもみよ

　兵部卿宮御前に人々おほかるにもていてゝはしめよ
　りの事をかたりきこえわつらふいとくちこはかりけ
　りとて

にくけなる朝良よりはかゝみ草心をみるにおもひかゝりぬ

　あひかたきことなん思ひぬるとていまはすまひと
　らんといへは女

朝良のうつる計りの思ひ草おもひかゝるはまくるなるへし

　なに事にもかつ事あらしとはいへり男

まくるとし人の思はゝ同しなをたまゝくくすと中をいて南
　二日はかりありてやる
そこ深くおもふ心はあしまよふうきにも移る影をみしより
　八月に兵部卿宮九の宮人々あまたして文つくる草む
　らになくむし聲たかけれとなくかりよりはといふ題
　を聲はいときゝにくし人々わらひて例の人
草むらになくむしよりは高けれとよくもきこえぬ雁の一聲
　すけゆき
我もまた玉章かけぬ雁なれはやまひさるまの聲にやある覽
　女
いかてかはかりにもかけん玉章を造りわつらふ君と社きけ
　かへし
魂もなくなる迄にひとめわかいひころしてし人はいけるか
　かねゆきの兵衞佐にひはならふをたちきゝて
人毎はよくなしけるをいかなれは我にあふねをしらせさる覽
　女
しらへつゝ君か爲にはあふ事の返しの聲はきゝもならさし
たゆるよもなく〳〵思ふ琴のねに常にならさん人そなか覽
　まくらかへるとて
君にいかて竝へてみんとよと共に思ひ敷妙こよひとめてん
　こと女の四月一日うすさのといひたるに
いとゝしくあつくこそなれ夏衣きるひとからや涼しかる覽
ろ
　女三の宮大納言の君にかれゆくとてうらみらるゝこ
かすならぬよを浮舟のよるへなみ響の灘のなくをこそまて
　おなしところ見なき所にきたりしに

里もなくしろへたになき山道にこのもといかて人やとる覽
　賀茂のまつりの日しりたる車にたち花やるとて
かをとめて昔の人を尋ぬれはけふはあふひになりにける哉
　はやうみし人のかゝみをかりてかへりに
かゝみ山あさたつ霧はくもれともみそめし影はさやか也鳬
　わすれにし女のもとより
我なから我からそとはしりなから今ひとたひは人を恨みん
　かへし
忘れぬときかはそ我もわすろへき同し心にちきりこしかは
　大納言の君またしかりし時の事なるへし
あふ事をたなゐる君を岩の上にまかせてみるは久しかり鳬
　堀河の中宮のひとのを□のかたりあかして
はかなくて明石の浦にあさりする蜑の袖ともほゝつけさ哉
　かへし
いさりする蜑によそふる袂をは猶來りとやかけていはまし
　はつかに物いふ人に
かけろふの水にとはたろ螢よりもはかなくみしは夢か現か
　一條攝政にてしはすのつこもりにかたひのまねして
　さみしきまゝにおうはうことするにかとのもちひ人
　にさえかしひにいたさせ給ふいひつけて

　戀する人にくやうするとあるにすけゆき
集まりて物な思ひそをのこともあけんみかとのもちひ也鳬
　花山のみかとうまれ給ひてのちころなれはいとめて
　たうけうしてものかつけられけりとかやをもしらす
　すけあきらかもとへやりし

きてもみる人しなけれは我宿のもみちはよもの風に任せつ
かう二位の大將とのゝさふらひの人々ともさみしかりとてすけゆきかけあきらかもとにいひやりたれはすけゆきかかものくたもののなかにせにふたついれて
ともしきをたか心はと人とはゝいさしら菊の露となたつや
二條殿(粟田右大臣)うせ給てあはれかきりなしかし
夢ならて又も逢へき君ならはねられぬいをも歎かさらまし

重之集上

三位の大貳(佐理)は故小野宮の大殿(實頼)の御子なりわらはより殿上なとし給へりけり宰相をかへしたてまつられて大貳になられて下給へるを道風はなちては(おきなたちてはイ)いとかしこき手書におはして手本なとはつくしへそかきにつかはしけるかなの御手本書に下させ給ふけるをかくへき歌ともよみてえんとの給へはあたらしき昔のも書あつめて奉る此哥の人も世中心かなはぬをうきものに思くたれるにやあらん大貳のかくてをき給へるよしなともあるへし所々のおかしきなともあるへし

松かえにすみて年ふるしらつるも(のイ)戀しき物は雲井なりけり
かまと山
春はもえ秋はこかるゝかまと山霞も霧もけふりとや(けふりたえぬやもみちなるらんイ)たつ
はこさきの宮の松おほかり
いくよにかかそへつくさん(かたりつたへんイ)箱さきの松の千年も一つならね
いきの松原
都へといきのまつ原いきかへり君か千年にあはんとそ思ふ(すらんイ)
しかのしま
みよや人(きみ)しかの嶋にと(へイ)急け共かのこまたらに波そたちける
秋くれは戀するしかのしま人もをのか妻をや思ひいつらん
そめ川
染川の(きしにイ)錦よせくる白波はきくにもたかふ色にそありける

うさ

筑紫へと悔しくなにゝ急きけん数ならぬ身のうさや變れる

ちかのしま

名を賴みちかの嶋へとこきくれはけふも舟ちに暮ぬへき哉

白雲のかゝれる峯をみ渡せはちかのしまにはあらぬ成へし

みのしま

村雨にぬるゝ衣のあやなきに猶みのしまの名をやからまし

あまくも

雨雲のしたにのみふる〔すむイ〕我なれは思ふことなき〔ときイ〕おりもぬれ鳬

秋

もみちする秋は旅にてくれぬへし我ふる鄕に人もつけなん

一本菊をひおけに植て大將殿の御ことにて

をく露にまかせつゝみし菊の花よにもおしきます成にける哉

四條の后のさうしの繪によめる女のけさう文かける

を友たちとものみけれは

秋なれはたれも色にそ成にける人の心に露やをくらん

小鷹狩の所

かりにきてかゝるにも今は思ほえす秋の山への歸りなけれは

女房男方として前栽あはする所ありたゝひとつなら

すかすさしに女わらはゐたり

なへてやは色もみえけり白露の數をくかたの花そまされる

かへしせさりし女に

誰ゆへに思ひ入にし山ちとてかへりことたにいはれさる覽

女返事はせてかみを文のやうにしておこせたるに

葛城や久米ちの橋も渡すらしこれより神のしるへなりけり

山端に闕をすへたる世成せはこゝらのひをはすくさらまし

秋歌

もみちはの色こひしりて別れなは吹風に社つけておしまめ

唐錦こゝの水にもうかひけりいかにさためて波のたつらん

紅葉はを巳かもの共みてし哉みゐにいさむる人はなけれと

初霜のをかぬたにこき紅葉はのその盛を〔いろのさかりをイ〕はたれにみせまし

八月十五夜かむしん(庚申)にて大貳のみたちにてさう

のことにかりの心ある哥よみていたされたるに

ことの上〔ねイ〕にひきつらねたる雁金のをのか聲々めつらしき哉

又かむし哥れいの人

もみちせぬ常盤の山にすむ鹿はをのれなきてや秋をしる覽

むさしのかみたためかたかかり衣をかりて二年ありて

かへすとて

うらもなき心ならひにかり衣かへさしとまて思ひけるかな

みちのくにのあたちにありし女に九月にいひやる

思ひやるよそのむら雲しくれつゝ安達の原にもみちしぬ覽

ある人宮たちに夢のやうにてやみにけるをゆめ人に

しらすなとなく／＼口かためられけるをうせ給にけ

れは

おもひて〔いてイ〕の悲しきものは人しれぬ心のうちのわかれなり鳬

みちのくにの柳河の家にてふみてにもちなとして七

月七日七夕の心

たつ〔もイ〕とこそおもひやらされ七夕のあけゆく空のあまの羽衣

うみつらにてなみたちけり

吹風に色そめわたる藤波ははるしもとかぬを〔かしるものイ〕にそありける

廣澤の池にいみしう波の立をそうの君なとして

廣澤の池にうかへる白雲はそこ吹風の波にそありける

あまの家にやとかりたるに日くるゝまて釣舟のみえねは
波まよりよふかく出し釣舟のまつほと過てものをこそ思へ
うこの大ふよしのふにみちのくより
わかれてはいかに戀しと思ふらんをのか心〔イ〕そ人をしりたる〔けりイ〕
あしろにもみちよせたり
紅葉はをよする網代は多かれと秋をとゝめてみる由〔こきイ〕そなき
つくしへゆくに
天原波のなるとをこく舟のみやこ戀しきものをこそおもへ
山たかみおちくる瀧の白糸はあはによりてそ亂れそめける
やま吹の八重咲花をなつかしみそよや一重に打とけにけり
又立春
山川の氷とけつゝ春くれはぬるき風にもはやきなりけり
青柳の糸よりかくる春くれは池の氷もほころひにけり
此御手本箱にあしてをぬひ物にすへしとせめらるれは
玉くしけ二見の浦の中におつる月〔のかけこそ〕かとみれは鏡なり〔れイ〕けり
いつこそやふたみの浦のありといひし心をいれてとはまし物を
おなしやうなれと書あつめて定らるへしとて
箱のうちに明くれ遊ふあしたつは川瀬の〔ちとせのかけそイ〕み社友とみるらめ〔に見ゆらしイ〕
難波津につのくみ渡るあしのねのねはひ尋ねてよを賴む哉
又大宮の仰ことにてよめると御手本にかゝれたれは
いつしかといそく心のさきたちて朝の原をけふ〔みつイ〕こゆるかな
しのゝめに朝の原を越くれはまたよこもれる心ちこそすれ
二村山
秋風にはたをる虫の聲しけみたつねにきたる〔そきつるイ〕二むらの山

ふるのやしろ
年をへて植し榊のかはらねはふるの社といふにそありける
人のなれと返しを書とて人の家の櫻をみて
さかしらとおもはさらなん櫻花ちらはとなりの人もおしまん
といへるを返しとて
つれ〳〵と花なきや〔さイ〕とにひとりゐて隣の春に心をそやる
むつましき人のめのおかしと思ふにそねむとて
心をは染てひさしく成ぬれといはて思ふそくちなしにして
もろ友かきよめる
人こふる我衣手のかはかぬは一夜の露や〔なイ〕いかにをきしそ
むかしあふみといひし人に冬
冬こもりつひにあひみす成はては雪ふりにきと人にかた覽
むまのすけにて播磨にくたるに明石の浦にてよるくらきに千鳥なきておきのかたに出ぬ
白波に羽打かはし濱千鳥〔見えしイ〕かなしき物はよるの一こゑ
いな〔みイ〕ひのにむら〳〵立る柏木のはひろになれる夏はきに鳬
村雨に立かくれせし柏木の青葉になつ〔きしイ〕はあつまりにけり
ひうかの國にこと引の松あり枝の波のよするを
しら波のよりくる糸ををにすけて風にひゝ〔しらふるイ〕くかこと引の松
つくしにて女にあひて曉方にいひやる
なに事のけさはうれしき我なれや〔くれかはイ〕涙はわかぬ物にそ有ける
又みちの國にてあるものゝのれかをこひにやる
冬の池の同し〔こもイ〕鳥には數ふ共〔あそへイ〕おしとないひそかものひかはそ〔くひかはイ〕
むまこのよりこて京へいくを恨ける女にかはりて
親の親と思はましかはとひてまし我子のこにはあらぬ成へし

あはつにやとかるときゝていひやる
湖のあはつにやとる君ゆへにはかなくしほをたれてける哉
むねたかゝみちの國にて子とも三人かかうふりし侍けるまたのあした
松嶋の磯にむれゐるあしたつの〔己〕かさま〴〵みえし千世哉
末の松山に子日に此人の母車にて出たるにかみ(守)しけみ〔之郎〕すけ(介)つ〔五〕ねみな〔お〕といひたり
末の松引にそきつる我ならて波のみたるときくかねたくて〔さにイ〕
返しあれはつけけれと〔とわろけれはイ〕〔かいイ〕。かゝす。をのかならねと。かへしたるかおんと思ふて、
ある人あゆみつ水くき〔なおきの葉イ〕の末につけて
水莖のあとふみつけて心みん思ふところにあゆみつくやと
かへし
篝火のうら白からぬからす河をみつとやいはん事は許すな
春雨をなかめて
ちる花をおらん涙の春雨にぬれぬ人こそ世になかりけれ
春雨のそほふるあしのをやみせすをのか涙に花そちりける
くれの春
春毎にけふのわかれはおしめとも年の內にはかへらさり鳬
年毎にわかるゝ春とおもへ〔さイ〕とも猶なくさますおしまるゝ哉
くる夏〔らにないイ〕とわかるゝ春の中にゐてしつ心なくものをこそ思へ
さく花の散にし春はうけれともけふのわかれは猶そ悲しき
年ことにとまらぬ春としりなから心つくしにおしまるゝ哉
二月はかりに梅花に雪の降かゝりたるを世のうき事をおもふころにて
花の上に散くる雪の我ならはいかに嬉しきいのちならまし

かゝみにしろさやみえけん
雪きえぬ我みやまなる朽木には春もまたれぬ〔ゝイ〕心地こそすれ
立春の日雪ふる
初春の思ひたつらん山道にあやにくなるやけ〔れイ〕さのふるゆき
またさかぬ枝にうつ〔そさゆるイ〕まは白雪を〔はイ〕花ともいはし春のなたてに
立春の日又雪ふる
春ことに鶯のみそしらせける鳥のはら〔こゑイ〕にや花もこもれる
山里はすみてあたにそ成ぬへき春の心の〔も〕花に〔ぞおイ〕〔こイ〕みゆれは
吹風をしるへにはして〔またこイ〕梅花こよひはかりをしるへかりけり
風さむみ春や來らぬと思ふまに山のさくらを雪かとそみる
雪とみておほつかなきは〔にイ〕山櫻花となつけてゆくやなになる
女の家にもゝの花やすもゝの花なとむら〴〵さきたりうくひすなく
鶯の聲によはれてうちくれはものいはぬ花も人まねきけり
春夏の中にかゝれる藤波はいかなる岸か花はよすらん
山さき川を立田川といふをつくしへゆくとて
白波の立田の川を(マヽ)出しより後くやしきは舟ちなりけり
昔より我千世に契なし人ともそあひみる事はすくなかり鳬
けすにはあらぬ人世中にすみわひて鍬すきとりておりたちたるほともなくしぬるをみて
打返しくはのはつみに〔るイ〕まみれつゝ秋の賴みも長からぬよに
春ことにわすられにけり埋木は時めく花をよそにこそみれ
雁金は花にすむ共みえなくにちりぬと思ふにかへる聲する
蛙なく〔さくらちりゆくイ〕苗代水にかけみれはときすき〔松イ〕にけるわれいかにせん
山ちこえくれ行春の木のもとは夏もみえぬにしけりあひに鳬
みちの國に山のこほりといふ所にて冬の月を

雲はれて空にみかける月影を山のこほりといひなおとしそ
　此山のこほりにかのこまたらに雪消殘る
秋くれはなくさをしかの北へゆき山の遠きかなく聲もせぬ
　京よりくたるにたこのうらにてむすめ
いそき行旅の心や通ふらんたゝぬ日そなき田子の浦波
　さねかたの君のもとにみちの國に下るにいつしかは
　まなの橋わたらんと思ふにはやく橋はやけにけり
水の上の濱名の橋もやけにけり打けつ波やよりこさり劔
　九條の右大臣のむすめかくれ給て
よそにふる物とこそみめ白雪のしら／＼しくも思ほゆる哉
　はるかに京よりくたりしに
天雲のわかれし中に通へはやよそなる袖のかはかさる「くまもなきイ」へき
　むかしのはおほつかなけれと
いとかたき岩ほに生る松たにも風のふくにはなひくてふ也
かへるさのなき水莖のはまへにてうつし心はとゝまりに鳧
いひさしてやみぬ「にほイ」と思ふな池水の深き心のよとむとをしれ
ほい／＼と明石の浦をこきくれは昨日戀しき波そたちける
　大嘗會のゆき「ふるさイ」すきのかたに明石の濱を題にて
朝日さす明石の浦に立ゐせし波ものとかになる世なりけり
　難波にて舟せうえうして岸の藤のはなを折てやかた
　にさし「さほをにイ」てくれにかへるとて
漕舟にけさよりかけし藤波はよるさへみゆる物にそ有ける
　秋わかれし人
年ことに昔は遠く成ゆけとうかりし秋は又もきにけり
　やとり所はなし
いつこにか心をやりてやとさまし花なき里はすみうかり鳧

　吹風梅の香す
花さかぬ我宿さへ「き」もにほひけるとなりの梅「に」を風やとふらん「ふくイ」
梅か枝「にイ」のものうきほとに散雪を花ともいはし春のなたてに
萬代の春をかそふる鶯は花と竹「うちふけにイ」とにすめはなりけり
散雪を花のさかり「そ見るイ」とみるへきは春の心の淺きなるへし
消はてぬ雪かとみゆる山櫻にほはさりせはいかてしらまし
花にのみうつもれにける鶯はなく聲さへそほのかなりける
散花をおしむとやなく鶯のおり「にイ」しれりともみゆる君かな
世中はおとろへゆけと櫻花色「見るイ」も昔の枝にそありける
山里は櫻花「さく」こそ。「に」あたならめすむ人さへやしつ心なき
鶯のとなりにわれもすむ物を聲をわきてそ人「にイ」もとひける
　春のくれつかた
花もちり鶯のねもかれ「さかイ」ゆけはわか山里はあくかれぬへし
いそくらん夏「しのひイ」のかよひに關すへて暮行春をとゝめてし哉
うき事も春はなかめてありぬへし花のちりなん後そ悲しき
うちしのひなとか心もやらさらんうき世中に花はさかすや
音もせて谷かくれなる山吹はたゝ口なしの色にそありける
我のみやゆきておらまし山さくら人の恨み「のわひしさイ」をおもはすも哉
初聲はきかまほしきを時鳥春にわかれんことそかなしき
いかてなをけふの衣をかへ「きそこイ」さらん春にわかれん事「はこ」の悲しさ
雁金のかへる羽風「うしさイ」や通ふらんすき行みねの花ものこらす
山里は浮世もあらしと思ひしをいとふもしらて尋ねきに鳧
あふくまに霧立といひしから衣袖のわたりに夜もあけに鳧
　又春思ひ出るに

春すきはいとゝ物をそ思ふへき花もちらぬに憂身すてゝん
波の聲に夢さむるといふ題をためきよとむねちかと
によませておきなことわる春　　ためきよ
夢たに〔にたにイ〕にも戀しき人をみるへきに波の聲にそおとろかれぬる
むねちか
浦ちかみぬるかとすれは白波のよるをと〔たイ〕に社夢さめにけれ
これをわろしとておきな
戀しさは夢にのみ社なくさむれつらきは波の音にそ有ける
渡津海の波のかた〳〵立波はいと打はへていつちよるらん
枝もなきうら〳〵に咲梅花〔くなみの花イ〕風にやとれる春かとそみる
花のあはれなる事をみて
舟ちにはおもふ事〔ひとイ〕のみ戀しくて行末〔のみそまつさはれけるイ〕もとくわするめるかな
吹風のしつ心なき舟ちにはさらは〔されはとイ〕よといひし人そ戀しき
都いてゝけふ〔やイ〕はいくかそおほつかな留〔とまりしイ〕めし人は數へをく覽
大嘗會すきの哥こしの國〔おさイ〕くは原の〔かイ〕里題にて
桑原の里のひきまゆひろひあけて君もや千世の衣糸にせん
ゆきのかた玉つくり川を題にて
ひとつにて萬代てらす月なれと底もみえ〔そらにみかけるイ〕ける玉つくり川〔えかイ〕
又屏風の繪にわらひ折女かたみひきさけなとして
我ならぬ野へのわらひも生にけり命そ春のかたみなりける
ひは殿のいは井に女の水くむさしのそきつゝかけみ
れは
年をへてすめるいつみに影みれはみつわくむ迄老に〔そしにけるイ〕ける哉
昔衣川の關の長のありしより老たりしかは
昔みし關守もみな老にけり年のゆくをはえやはとゝむる

しなのゝつかまのゆにおはしたりしかはかきつけし
これたゝのさいそうのおり
出るゆのわくにかゝれる白糸は來る人たえぬ物にそ有ける
やかてむまやをそへたるおなし事なれとおかしとみ
る
最上川おちそふ〔まイ〕瀧の白糸は山のまゆよりくるにそありける
此もかみ川はいみしき所なりよにゝすおもしろき所
なれはすきかたし
もかみ川瀧のしら糸くる人の心よらぬはあらしとそおもふ
なとそいひあつめける。
昔堀河殿石山よりかへり給しにはしり井にてよませ
給ひし
相坂の關とはいへと走り井の水をはえこそとゝめさりけれ
法師〔まイ〕の色このむをにくしとて
常ならぬやとの櫻に心入てや〔いけのはすをイ〕まさくらをはいひなはなちそ
二月はかりにみちの國にりんしの祭に雪にぬれこう
したるかちなるをのこつるの池をすくるほとにこ
はいつこそとゝへはこつるの池のつゝみといへは
心やりによめといへは　　むねちか
千年ふるこつるの池も〔しイ〕かはらねは親のよはひを思ひ社やれ
父
千年をはひなにてのみや過すらんこつるの池と聞〔いひイ〕て久しき
みちのくにのかみはら〳〵の子とも男女かうふりし
裳きすまたはかまもきすかはらけとれとあれは人々
かはらけとりてはゝきみうせての事也
いろ〳〵にあまた千年のみゆる哉小松か原にたつやゐる〔むれゐるイ〕覽

かへし
古をけふにあらする物ならはひとりは千代も思はさらまし
又返し
ひな毎に千世もゆつりてまな鶴のいつれの雲に飛隠れけん
仁和帝の子日に
萬代を霜をくけふの子日には野への小松そかつひかれける
をとに聞田子の浦をわたるに浪立は
風吹は面かはりゆく田子の浦の小浪しも社さかなかりけれ
をのか子ともの京にも田舎にもあれは
人の世は露なりけりとしりぬれはおやこの道に心をかなん
ことしめつらしき時鳥をきゝて
一人かすかたらひわたる時鳥ことのいらへをたれかせさ覽
世中なし恨て紅梅を
紅に花さく梅と衣手と露と我身をいろやかよへる
世中のはかなきをみてむねちかに雪降日
瀧つせにたえすうつまく淡雪の憂世つくすとみるやいつ迄
かへし
雲井より渦まきおつる瀧つせの雪とみえつゝ千代をふる哉
齋宮の内侍にひは殿よりいろ／＼の物送り給ふにれ
いのおきな
大方の聲となきゝそ時鳥おもふ心のあはれなるらん
故后宮より池の草合するにおほとの草ありけりとき
きていひにおこする
よるやとるいそへの波やさはくらんおほ海の原に千鳥鳴也
降雪の袖にこほりし朝よりふりすてかたき物をこそおもへ
さかみにて
こゆるきの磯の若めもからぬみは渙のこなみや誰によす覽
はるくら人たひといふくつを花につけてえさせたる
足引の山の櫻もみにゆかしこのたひえたるくつのおしさに
おもふ君にあひやなりたりけんまゆみいむとてはり
まちへくたりてかへりて
播磨野やしかまの市にそめかすし我かちにの(マヽ)君をみつしか
といへはおもふ君
我ためは君の心も淺みとりそらことかちのことなきかせそ
いまはあまに成ていひおこす
山ふかみ我身はいりていにし月思ひ出るはなみたなりけり
かへし
思ひ出る心にかなふ涙もているとく山はふかからしやは
あるやんことなきあたりにて風にわつらふにゆゝて
するにかたひらとへはいみしきしなののふるきかた
ひらをおこせたりかへすとて
よへしやるみちに程ふるから衣こゝの物にと人もこそみれ
兼盛するかのかみなりける時其國なりける男の清見
か關といふ所にまた人まうけてこのめのもとにいか
さりけれはかくなんあるとかみにかたりけれは
するかのかみ兼盛
〔よこはしり―〕
するかなる清みか關に人すへていつてふ事は永くとゝめつ
女にかはりて
せきすへぬ空に心の通ひなは身をとゝめてもかひやなか覽

重之集 下

大貳のかゝら哥もりにけり

舟路にて草の枕しむすはねはおきなからこそ夢はみえけれ

大貳常に哥よませけりつゝみの瀧を

音にきくつゝみの瀧をうちみれは〔すきてイ〕唯山河のなるにそ有ける

つゝみの瀧はこれにまさりてよむ人はあらしされと
たゝにやはとて

山河にふかゝる笛のあれは社つゝみの瀧にあはもまくらめ

すみや汀に春

春くれはまつそうちみる石上めつらしけなき山田なれとも

かすか野を

やかすとも草はもえなん春日野をたゝ春の日に任せたら南

あるやんことなき女にむかし

春の雨に〔はイ〕しのふる事そまさりける山のみとりも色に出に皃

夏

我かとにまつなきたらは空蟬のむなしきねをもなき暮〔あかイ〕す哉

ためちか島めくりにきていみしかりけるところをみ
せす成にけりと恨て哥よめりけれとわすれてかゝす

いそなつむ蜑のみるめもある物を君か舟ちに後れてそ思ふ

みちの國のかみさねちか〔あきらイ〕ある人のおやに後
れたるをとひにおこせてきぬわたなとこをつくりて
いれておこせたり

は〔くイ〕こくみし君を雲井になしてより大空を社たのむへらなれ

かへる春にあひて

吹風もけふはのとかになりにけり物思ふほとに春やいぬ〔きイ〕覽

又春つかさめしを思ひやりて

春ことにわすられにけり〔るイ〕埋木は花のみやこに思ひ〔をイ〕こそやれ

あるやんことなき所にめせはまいりたりむかしにな
らひておまへに出たれはなにとなく御覽じてかへさ
るるにつけて聞ゆ

天原わたる千鳥のはねたゆみきしをかはともみてかへる哉

ある女に秋

虫のねの悲しき野への花すゝきこち吹かせにうちなひか南

五月はかりにさまうつくしきわらはのかうのうすや
うのに蟬のもぬけをつゝみてもてきて人にさしおこ
せてうせぬよろつにおもへとみしらぬをもしひとゝ
せの夏ころいきたりし人こそよしなくみえしかとを
しはかりていひやる

古の夏きにけれは空蟬のそれからをともするにそ有ける

みちの國のかみの母君にいひはしめに

さゝかにの糸筋ならはあらぬ身の雲のよそには思ひ放ちそ

又此君のもとにてくものてひとつおちたるか二三日
まてうこくを

さゝかにのくものはたてのうこく哉風を命に思ふなるへし

齋宮の女御うちにおはせしむかしあるたちはきのお
さ承香殿の西の妻戸に立よれり少納言といふ人いと
えものおかしくわかよむこの君たちも人に物いひか
けよといひよりてまついかゝいはんと思ふとて袖と
りかはしたり誰にとゝへはみなもとのこたへすおな
しきなのらすといふ

こゆるきの磯のなのりそなのらねと底計をそ作りしりたる

女されはよといひてきゝもはてぬに

磯菜つむ蜑ならは社わたつ海の底のものめく事もゆるさす〔ぬイ〕

といひてそとしへける又波立をみて

吹風にいろたちまさる藤波は岸になりて〔よイ〕やかつはおるらん

春何事を思ひけるにかありけん

いにしへ〔むかイ〕をおもふ涙の春雨はわか袂にそわきてふりつゝ〔けるイ〕

もろともに外へゆかんといひ契りてふとひとりいぬ

るによみてやる〔るイ〕

行春に立後れぬと春霞思はぬ山をなけきつるかな

法師のことこのむ哥の返しを心えすれは〔にイ〕

口なしや君か園には繁るらん色めくなるをいらへせしとや

又法師

行さき〔すゑ〕を思ふ涙〔をイ〕のしるへにて蓮の池をたのむはかりそ

また

花をのみ春の宮にておりしかは思ひ出てそうく〔つしイ〕ひすのなく

いにしへの戀しき人もみえぬには〔こゑにイ〕花のゆかりにあひみつる哉

桃花すける人のうちゑいてあるをみて

人しれすすくとはきけと桃の花色に出てはけふそみえける

大貳の御手本

年ことに枝さす松の葉をしけみ君をそたのむ露〔なイ〕にもらしそ

たけくまの松一もとかれにけり

たけくまの松も一もとかれにけり風にかたふく〔らかイ〕聲の淋しき

年をへて誰をまつとか武隈の常盤にのみはいかて賴まん

かりのやとりにやり水をして心をやれといにしへの

にはにすやありけん

行水に心をそへてやりけれとむかしまてには波もかへらす

鶯もなかす霞もたゝぬ春あやしとて心長閑なる所に

おはせといひやる人のおそかりけれは

鶯の聲のつかひもまたこねはおもひそたゝぬ春の霞を

それのよしたゝ但馬にていつしの宮にてなのりそと

いふものをよめといへは

千早振いつしの宮の神のこまゆめなのりそよたゞりもぞする

曉のまかきにみゆる朝貝はなのりそせまし我にかはりて

故右大臣殿になつきにゆみそへて奉るとて

陸奥のあたちのまゆみひくやとて君に我身をまかせつる哉

故みちの國のかみせきかそならていれりとて返した

ふによみてまうす〔きかイ〕

こその春關にとまるとしらませは今年は〔春ゝイ〕花の長閑からまし

かへし

花見にはゆるしそせまし白河の水ならは社せきに淀まめ

平野の祭にもろともにさそへるに一尺はかりの松た

てりとまひこめたり

千代のこもれる心地こそすれ

と神のいふおきな

二葉なる平野の松をけふみれは

はこかたのいそにて京にのほる

白河の關よりうちはいとけくて今はこかたのいそかるゝ哉

みちのくの國にて子〔るイ〕のかくれたるに

わかためとおもひをきけん墨染はをのか衣の色にそ有ける

言の葉にいひをく事もなかりけり忍草にはねをのみそなく

なよ竹のをのか此世をしらすしておほしたちつ〔てイ〕と思ひける哉

さもこそは人に劣れる我ならめをのか子にさへ後れぬる哉

なけきてもいひても今はかひなきに「をイ」蓮の上の玉とたになれ
むすめに男もたるといふころ
世にふれは心の外にあくかれて何か立名をよそにこそきけ
返し
人なれぬみつの御牧の駒なれや立なも更にあらしとそ思ふ
あつまへくたるに美濃國ときの郡にて
旅人のわひしき事は草枕雪降ときのこほりなりけり
東路の「にこしをイ」としをうるまといふ事は行かふ人のあれはなりけり
夏の夜のみしかき事を人々いふあすは五日のひに
なるへけれは
夏のよの短き事もつらからすあすの菖蒲にあはんと思へは
秋の夜月をみて雁なきわたる
月影をまつらん里もある物をかりの羽風の「そさむくイ」ぬるくきこゆる
たちはきのおさみなもとのしけゆきつこもりの日を
給て哥よみたてまつらんときはたゝんと仰られけれ
は春廿夏廿秋廿冬廿戀十雜十

春二十

吉野山峯のしら雪いつ消てけさはかすみのたちかはるらん
難波えに生出るあしのはみれは數しらぬよそ思ひやらるゝ
冬はいかに結へる瀧の糸なれやけふ吹風にとくるをとする
めつらしく「あさイ」けふしも鴨のむれゐるは池の氷やうすくなる覽
春日野にむれたつ「やへきらんイ」雉の羽をとは雪の消まに若なつめとや
春たちてほとはへぬらししからきの山は「しらまきあらイ」霞にうつもれに鳬
常盤なる嶺の松原春〳〵とも「さはイ」霞たゝすはいかてしらまし
けふきけは井手の蛙もすたく也苗代水を誰まかすらん
春の日のうら〳〵「こゝにイ」にして出てみよ何業してか鬠はくらすと
かせにのみまかせてはみし梅花おりて袂にかをもうつさん
いつれをか色「花イ」ともわかん春たちて散「くるイ」こし梅におもなれに鳬
鶯のをのか羽風に散花をのとけくみんと「おもひイ」たのみける哉
おさなくそ春しもとふと思ひける花のたよりにみゆる也鳬
鶯のなく聲をのみたつぬれは春さく花はわれのみそみる
我宿や花のさかりに成ぬらん道行人「もイ」のたちとまるかな
青柳の糸をみきはに染かくる春の風にやなみはよすらん
花さくらつもれる庭に風ふけは舟もかよはぬ波そたちける
みたえせぬゐ手の山吹かけみれは色の深さもまさらさり鳬
夏にこそ咲かゝりけれ藤花松にといみもおもひける哉
春の日はゆきもやられす蛙なく「ゐイ」さほのわたりに駒を止めて

夏二十

花の色にそめし袂のおしけれは衣かへうきけふにもある哉
夏草は結ふはかりに成にけり野かひの駒「しイ」やあくかれにけん「ぬらんイ」
かけてたにあふひときけは千早振わか祈事のしるしある哉
卯花のさける垣根「にイ」は宿りせしねぬにあけぬとおとろかれ鳬
山城のよとのこくさをかりにきて袖ぬれぬとは恨「おくしきはイ」さらなん
初聲のきかまほしさに時鳥夜ふかくめをもさましつる哉
夏かりの萩の古枝も「もイ」たえにけりむれゐし鳥は空にやある覽
春まきし山田のなへは生にけりもろてに人はひきも植てん
我身こそ「そほうまさイ」ふりもせさらめ五月雨の同しそらとは思はさら南
五月山ともしにいつる狩人はをのかおもひに身をやや く鳬
夏のよはあり共「音すれもせぬイ」みえぬ虫なれと秋は野もせに有ときゝてん
旅人のたく火とみつる螢こそつゆにもきえぬひかり也けれ

わかてにも夏はへぬとも思ふ〔ヤイ〕らんあふきの風の今〔もし〕は物うき

草の葉もうこかぬ夏のてる日にも思ふ中には風〔やし〕そ吹〔くらんイ〕ける

空蟬の空しきからはをともせすたれに山ちをとひて越まし

小男鹿の通ふもみえぬ夏草もしけみなりとは思はさらなん

夏艸のしけみをわけし君なれと今は心に秋そきにける

秋風は吹ぬとをとに聞てしをさかりにみゆる常夏の花

ゆきなれぬ道のしけきに夏草のあか月をきは露け〔ものうイ〕かりけり

秋二十

秋くれと夏の衣もかへなくにありしさまにもあらすなり行

天川水まさりつゝ彦ほし〔ゆくたなはたの〕はかへる朝に〔たもとに〕なみやこゆ〔たつイ〕らん

七夕のわかれし日より秋風のよことにさむくなりまさる哉

をともせて思ひにもゆる螢こそなく虫よりもあはれ也けれ

待人のかけはみえすて秋山の月のひかりそ袖に入ぬる

秋風は昔の人にあらねとも吹くるよひはあはれとそおもふ

覺束なこゆる山への遠〔ち〕〔くらイ〕けれは日暮しのねに宿りをそする

萩の葉に吹秋風をわすれつゝ戀しき人のくるかとそみる〔おもふイ〕

秋風の吹ぬ日たにもある物を今宵はいとゝ人そ戀しき

なく鹿の聲きくから〔ミイ〕に秋はきの下葉こかれて物をこそ思へ

秋のよの有明の月にひろへとも草葉の玉〔つゆイ〕はたまらさりけり

秋風は旅の空にも吹ぬらんせこかころもをかへすらんやそ

白露のをくての稲も出にけりかりくる風はむへもふきけり

名取河や〔なイ〕そせの波そさはくなる紅葉やよりて〔いとゝよりてイ〕いとゝせく覽

秋風にしほみちくれは難波江の芦のほよりそ舟は行かふ

白雲のおりゐる山のから錦かさねて秋のきりそたちける

風さむみやとへかへれは花すゝき草むら毎に招くゆふくれ

白露のをきける菊を折つれは袖ぬれてそいろまさりける

山城の鳥羽のあたりを打過て稲葉の風に〔をイ〕おもひこそやれ

冬二十

もみち葉の殘れる枝にをく霜のしはしの程を恨む〔いこふイ〕へしやは

あさちふにけさ吹風はさむけれとかれ行人を今はたつねて

さむからはよるはきてねよ深山より今は木葉も嵐ふきつゝ

水鳥の羽にをく霜のさむきをは誰になれてかけつへかる覽

千早振をみのかさせる日影にもとけすて霜のよるむすふ哉

霜の上にけさふる雪のさむけれは人を〔かさねて人をイ〕重ねてつらしとそ思

芦の葉にかくれて住しわか宿の〔つのくにのイ〕こやもあらはに冬はきに鳧

我宿にけふ降雪の消さらはいつしか春をまたれましやは

降雪にぬれきて〔てまにひぬイ〕ほさぬ我袖をこほりなからも明しつる哉

冬くれはつらゝにみゆる石山の氷はかたきものとしらなん

故郷の垣根の雪しふかけれは通ひしあともみえすそ有ける

信濃なる淺間の山のあやしきは雪こそきゆれ火やはもえ南

たく人もあらしと思ふふしの山雪の中よりけふりこそたて

けふみれは蜑の小舟も通ひけり〔ふありイ〕しほみつ浦は氷らさるらし

近江なるやすの入江〔にさすあみの〕氷〔をいな〕けさそみえける

信濃なるいなにはあらすかひかねに降つむ雪のとくる程迄

數しらすかつくときけとわたつ海の蜑のしはさは寒け也鳧

年をへて雪ふり〔つもるイ〕うつむ白山のかゝれる雲やいつこなるらん

山の上をよそとみしかは白雪はふりぬる人のみにもきに鳧

雪つもるをのか年をはしらすして春をはあすと聞そ嬉しき

戀十

戀しさ〔さイ〕を慰めかてら〔ねてイ〕菅原やふしみにきてもねられさりけり

思ひやる〔れ〕我衣手は難波女〔なるイ〕の芦のうら葉のかはくよそなき
風をいたみ岩打波のをのれのみくたけて物を思ふころかな
打とくる〔やイ〕世社なからめ人しれすふす計〔むすこ〕りにもあらぬまそな〔あはぬ身そうきイ〕
松嶋の〔へイ〕を嶋の磯にあさりせしあまの袖こそかくはぬれしか
淀のつどみまくさかりに行人もくれにはたゝに歸る物かは
閑原やふせやにとつくかけ橋のたかためにかは我は渡しゝ
つくは山は山しけ山しけゝれと思ひ入にはさはらさりけり
〔なとりイ〕となか川渡りて作る小嶋田をもるにつけつゝよかれのみする
白波のまかきのしまに立よれはあまこそ常に誰ととかむれ

雑　十

高砂の尾上の松の我ならはよそにてのみはたてらさらまし
水の上にうきたるあはを吹風のともに我みも消やしなまし
うしと思ふ心にけさはきつれ共たそかれ時は空しからまし
みさこゐるあら磯波そさはくらし〔こイ〕しほやく煙なひく〔たちけりイ〕方みゆ
衣川みなれし人のわかるれは袂までにそなみはよせける
きさかたや渚にたちてみわたせはつらしと思ふ心やはゆく
磯はみなしほみちくれと鳴鳥の波の中にそよるもねぬへき〔ミくイ〕
たけくまのはなはに立る松たにも〔きよくイ〕我こと獨ありとやはみる
水上に〔いけゐ〕人のみわたる河なれは心によゝもたのまれぬかな
年ことにおひそはるてふやそしまの松の葉枝は君やしる覧
やそ嶋の松の葉枝〔はあへとイ〕をかそへつゝ今ゆくすゑのほと〔をふるイ〕はしる覧
枝わかぬ春にあへとも埋木はもえもまさらて年へぬる哉

右四部以一本校合了

和歌部百七家集廿五

藤原長能集

むかしこかみ（故守）の河内國さり侍りし時いのり申事やはへりけむ丹波守にてかの國の神うゝ返まうしはへりしにものたてまつれる人の侍りしにかはらけとりて

いのり置し神の心もいちしるくむかしの人にあへるけふ哉

また昔ことありてこのかみ（守）さり侍りしかは候しもとのことくに宮にまいりて候しほとに九十月十五日しんして哥奉らせ給ひしことはおはかれはとゝめつうたかくなむ

いにしへに光たかはぬ月清み神の心はさやけかりけり

東宮の大后宮女房におほせ給ふことありきいつれのとしにかはへりけん三月三日草もちゐして法しのかたをつくりて是にむろつくりてまいらせよとおほせこと侍りしかはかたのやうなるすはまつくりてむろのかたはらに木ともなとたてたるにほとゝきすのかたつくりてまいらせしにつけてはへりし

宮こにはまつ人あらん郭公さめぬ枕の宿にしも鳴

丹波にてわつらふことありしかはひさしう京にもかへらさりしほとにつれ／＼にてみゆるものにつけてよみあつめて侍りし哥春の事なりかたをかに火つけたるを見てこれはなにそとゝへは畑やくとはこれをなんいふといひしかは

片山にはたやくをのこしかやかはみ山櫻はよきてはたやけ

あらたに鷺のゐたるをみて

さきたてる汀の澤田あらすかもふるみなからに春を暮せる

山寺にまうつる道に木々のもと過るほとにあまかへるのなきしかは

雨蛙鳴や梢のしるへとてぬれなんものを行やわかせこ（こまイ）

野にあやしき水のたまりたるをみて

河上に井せきやすらんこその冬かくしはゝらに岩分る水

松一たてるをかをみてよめる

武隈にいつくたかへりくさむらのみよのうかみに松立る岡

草むらあるみや。その所の名也。

かりすとてたかき山にのほりていつくとかいふととへはいふき山となん答は

高けれと都もみえす登りてはたゝやくたらむいふゝきの山

夢見さはかしとてよめる

みやこ人我をこふらし草枕われか旅ねの夢みさはかし
秋小鷹かりにまかりありきしにあるたのくろに女郎
花のさけるをみて
山かつの田くろに咲る女郎花我ひとりのみゝるそあへなき
後にかたりしかはあたなは松といひしものかへし
やまためのたくろに立る女郎花人待えたる心ちしけめや
をくらの少將の御もとにてあめふりし夜秋夜雨とい
ふ題をよませ給ひしに
〔續詞秋下〕ぬれ／＼も明は先みむ宮城のゝもとあらの萩〔小萩イ〕は萎れしぬ覽
おなし人の石山にまうてゝ夜川霧といふ題をよませ
給ひしに
〔同冬〕河霧は〔みきはイ〕河邊をこめて立にけりいつこ〔くイ〕成らむ千鳥なく也
あるひとの屏風の哥よませ給ひしに人の家の妻戸よ
りおとこのいつるに草のうへの露おほくありあけの
月のこりしに
白露にかゝやく月の影みれはくやしやまたきをきにける哉
いつのやまひにかありけん家のうちにをきたりし人
なくなりしほとにさとのとねの申やう五條にてやく
神のまつりつかまつるになんあるおとこの五條には
ひと／＼おほくおはする中にうたふへき哥ともよま
せたまふへきことになむやむことなくはへるといひ
しかは祭主もこの條にこそはすめまつかしこにこそ
はいはめといひしこととものおそろしくおほえしか
はもしつとめなきさまに神もこそおほせとてよみ申
たりしかともわかよみてけれはいたさぬはたり哥
〔後拾神祇〕卜妙のとよみてくらをとりもちていはひそゝむる紫の野に
はやうた
〔後拾〕今よりはあらふる心ましますな花の都にやしろさためて
また水邊の白菊を
影みしは天つ星なりしかりとて沈む藻屑をてらすとはなし
かたらふ人のもとに五月のころほひいきたるに暗夜
子規待といふ題をよますれは
月みつゝ待たに有をほとゝきすなそやねなんと思ひける哉
又あそひする所にて待時鳥の心に
老らくの聲かれにけり時鳥きなきとよませはちかくるへく
またおなしころある法師の坊にておなしこゝろを
おとゝひもきのふも待し郭公けふさへ鳴すなるや世中
花山院の春戀といふ題を給へりしかは
もろ共にわかなも摘んいもせ山やま田の澤の水もぬるめて〔くイ〕
さゝのはのさゆる霜よも明してき白つむ春の袖そぬれぬる
何もせて明ぬるものを管のねの永き春日をまたやくらさん
入道中納言〔義懷〕下らうにおはせし時一條殿のさくら
をおしむこゝろの哥ひと／＼によませ給ひしに
〔拾春〕身にかへてあかなく〔やイ〕花を惜むかないけらは後の春も社あれ
うちわたりなりし人に
白波のよすれはよするさゝれ石のかとなき物は我身なり鳬
おなしひとに春山寺にこもりていひやる
なをや君われつらからむ然らすは霞の影はおるへきものを
又おなし人に
よのつねのもの思ふ人の袂たにぬるゝはぬるゝ物と聞しを
また女に
〔後拾戀四〕我心かはらむ物かかはらやのしたゝく煙わきかへりつゝ

かへし

忍ふ思ひひとしくなれはかはら屋の烟ははやく絶にし物を

うちわたりの人に

ありへても あらはやなとそ世中のかく憂き物としりぬとならは

〔後拾戀〕いとふとはしらぬにあらす知なから思ふにあらぬ心〔こゝろにもイ〕なり鳬

また女に

〔後拾戀〕命あらは命あらはと思ひつゝうきをもいたく恨みやはする

うちわたりなる人に四月はかりにやまより

數ふれは空なる星もなにならす何を〔しるものをイ〕つらさの數にとらまし

返し女

聲たえす山ほとゝきすなけゝ共都の人そわきて戀しき

おなし人に

郭公しのはぬころにつけつゝもわくらむ人やいつれ成らん

いかなるおりにかありけむ

わか如く物思はむ人を又もかなたくひ有けりと聞は頼まむ

八月はかりのゆふくれに

うき事は我身ひとつのうきなれは處かへてもかひなかり鳬

また女のもとに

〔新古〕〔續詞〕ひくらしの鳴夕暮そうかりけるいつも盡せぬ思ひなれとも

夕くれはなかむる人のなけれはや心つくしといひはしめ劔

また

思へ共えそうち出ぬなるすゝのひとつ心にこめてこそふれ

又

あひ思はぬ人をしもなと思覽露よりけなるこなかみをもて

〔新千雜〕所からうかる君にもあらなくには〔はイ〕かなくまとふわか心かな

うしとたにいふも更也いさゝら〔川イ〕はいさやいかなる我み成覽

いつとてか君かうからぬうきか上に又憂き時はいふかひもなし

人心うしとは思知なからさすかに物の忘れかたさよ

うき身なり何かおしむと人とはゝ我こたふへきとのはを

君よりほかにたれかしるへき

女かへし

ことたへやかたは多かるしはのはを我のみ計り心と思はむ（かりかく）

〔題闕〕うき事も戀しきことも諸共に我みをいみもしる心かな

うくはあらて戀しき事のそはさらはなそや我みのおしからなくに

雨のいみしうふる夜簀子にてものいひあかしてつと

めて

流れ合てそこ共しらすぬれたれは軒の雫におほせてそほす

女かへし

雫おほみ立よる軒の數まさはそのぬれ衣をたれすへやきん

女になつなのはなにつけて

雪をうすみ垣ねに摘るからなつなゝつさはまくのほしき君哉

雨のいみしうふる夜女のもとに

〔後拾戀〕かきくらし雲まもみえぬ五月雨はは〔たえイ〕れす物思ふわか身也鳬

おなし女つれなくのみありて行すゑはなとたのめた

りしかは

頼むれは頼まはすこし慰ていとゝえならぬ心地こそすれ

又

うきことも戀しきこともふりぬれは何をか今は言の葉にせん

みつからまいらんといひたりしかとひむなき所なり

といひけれはなを〳〵とて

有へくも斷る浮世になそやともけふそ我身を頼みはつへき

また女やいかゝいひたりけむ

思ふてふことこそいとゝうき人のうきをしらする心也けれ

また

わひ人の心をすこしなためけむしての山路もやすく越へき

数々にたの〔ヌイ〕めし事をあめつちの神も聞けむ物にやはあらぬ

とも角も〔ヌイ〕いふへき方も思ほえすすへて我身の我身ならねは

老ぬるも〔ヌイ〕若きも何もわかぬ世にもの思ひにやしなむとす覽

こゝろほそけなる山里にこもれる人のもとにいきてかへるとて

おほあらきのとをのゝ原に住人をみすてゝ行は袖そ露けき

かへし

かりにみる袖たにぬるゝ大あらきの杜の雫はいふ方もなし

人のもとにいかむと契し〔て待りしイ〕にかはりの新〻人のまいらさりしかはえまかてさりしつとめて

秋にそくみあかしつる夜もすから立わひつらん人の心を

山にのほりて法師になりたるひとのもとに

〔後拾雜〕
なにかその身のいるにしも立〔ろイ〕かくし〔たけからんイ〕心〔をイ〕の深き山にすませよ

屏風の繪に水無月はらへしたる所

〔拾夏〕
さはへなすあらふる神もをしなへてけふはなこしの祓也兒

さかのに前栽ほりにまかりて

〔拾秋〕
ひくらしにみれともあかす女郎花のへにや今宵旅ねし〔なまし〕

花山院に三月小なりし時春のくれおしむ心人々よみしに

心うき年にも有哉はつか餘こゝのかといふに春は暮ぬる

おなし夜のあくるあけほのに

なけや鳴山ほとゝきす春くれて物さひしかる人きかくれに〔のきかくにイ〕

同院にて障子の繪に橘の咲たる所

たちはなの花のさかりに成にけり山郭公きなけしはなけ

左大辨のはしめの北方の御もとにおはしはしめての比ほひそこにとのゐしてのあかつき

〔續詞戀〕
若草のいもかきなれの〔なつこ〕唐衣かは〔かさね〕しもあへす明るしのゝめ

上總よりのほりての春のりまさの家にまかりて人さけのみしつゐてに

東路の野路の雪まを分てきて哀都の春〔花イ〕をみるかな

ひとゝせおほ殿の卅講の哥合に

夏夜月

ねさめする秋もこそあれあまの原のとけく照せ夏の夜の月

郭　公

誰里にあかす聞らむほとゝきす有かなきかに鳴わたる也〔なるイ〕

池邊松

〔續詞賀〕
君か代の千とせの　の深みとりさはかぬ水に影はみえ〔そイ〕つゝ〔けるイ〕

いつれのとしにかありけむ花山院に八月三日哥合せさせたまはんとてありしかととまりにしに哥ともはをの〳〵奉れとおほせられしかはたてまつりし七夕

〔新古秋〕
袖ひちて我手に結ふ水の面にあまつ星合の影〔そらイ〕をみる哉

露

〔後拾秋〕
さゝかにのすかく〔あさちのするこゝにイ〕葉末の淺ちより亂てかゝる〔ぬけるイ〕しら露のたま

花山院三月廿八日はな御らむしにありかせ給ふ御ともにさふらひて尋殘花といふ題を

谷風にみやまの花やのこり有と打そ渡れるみつもさはくに

山寺にてあそふ

優婆塞か行かふ山の山さくらけふの行幸のためにさりける

同院の御てつからかみ繪かゝせ給ひて人々に哥つけさせ給ひしに秋の前栽さきみたれたる紅葉おもしろき所に

佐保姫の玉おちにけりから錦おれる木のはのうへの白露

ものへ行人に

いにしへも今もあらんやわか如く思ひ盡せぬ思ひ（わかれイ）するひと

石山にて

しらかしの知らぬ山路を尋ぬれは高根の續きならせるや誰

女のもとにいきて硯をこひ出て筆の中に

こと繁み見れは流るゝ薄墨のかすめしことやしるらんや君

女のたちより給へものきこえむといひたれは

定めてそ立もよるへき世の人のあひてもあはぬ物は思はし

おなし人に

つれ〳〵と物思ふ事の盡せぬをくるしき物としるや知すや

女返し

思ふ覽おなし心にあらはこそくるしきものと聞もなやまめ

なつきて後ひさしくありてとひて侍りしに女

あふ事のはに置し露はきえにしを世に有とてや人のとふ覽

霧立し朝に

秋きりは川邊にさへそ立にけるいつこ成らん千鳥鳴なり

紅葉散をみて

ひくらしに見れともあかぬ紅葉はいかなる山の嵐なる覽

かはらやとかありしおなし人に

早きせにのほるますらおこりすまに此夕暮を賴むへらなれ

我心散り失せぬ菊にたとふれは花こそいたく移ろひにけれ

千早ふる天の岩とをしひらき我にかたよれみこもりの神

あめつちの神ふりかけて誓ひてしことなる空に成にける哉

かけつらといひはへりける人の物いひ侍りける女にしのひて物いひそめてまかりたりけるにきあひにけれは一品宮の九條にかけつらみむとき〳〵て

こす波に袖うちぬらしかへりしも哀と思ひかけつらむやそ

かへし

よし思へなるよしとたにみましかは涙こし鳬とみせましやそは

女のもとに扇おとしたるにかへしたれは

獨ねの夜の衣にあらねともかへすはつらき物にそ有ける

白川の院にていてはてたる月の松陰よりもりたるに

山端のうちなる松の枝しけみさやかにみえぬ春のよの月

紅葉ある人の家のまへをわたるとて

道ゆきにみれともあかぬ紅葉哉むへこそ人も家居せりける

やたの里にて

やたのなる藻屑（もくへイ）やはらのつかのまも戀すやあらぬ花の都を

こかみにまかりをくれて人々わかれ侍りしには傳殿のものゝ上にかきつけてたまへりし

こゝにともしらてや君かすきぬらんたては悲しき深草の里

かへし

覺束な誰かきつけしことのはそみれは涙のかきくらしつゝ

花山院の御佛名に菊のつくりはなを

咲もせす散るともなききくの花みよのためしを賴みてそふる

はやう賀茂の祭見侍とてあやしき人を車にのせて侍りしをむかへによしまさの朝臣立てかくいひはへりし

その神のなかよしとたゝしりぬれは人の數とも思ほえぬ哉

かへし

理やしか憂き身也しかあれともよしまさゝらむ人は誰そは

いつれのとしにかありけむから〔りイ〕きぬあふきなとゝらせて遠江にくたり侍りしに

〔後拾別〕世の常に思ふ別れのたひならは心みえなるたむけせましや

明暮のほともやみると心みに八重立こめよ秋の河きり

岩波や吉野のもみち散ぬへし涙とゝもにもおれぬけふ哉

神無月にくらまにまうて侍りしに紅葉のいとおかしうはへりしかは

おらすして行むものかは遠近のはやまおく山よるはこゆ共

女に

日くるれは遙にかゝるから衣さほしかねつるころにも有哉

ある人のもとにまかりて二三日はかり音もせてうはとよみとよみに恴な淀河の底にも戀ん閑けからぬにやよひのついたち〔にほひイ〕

〔詞花春〕ひとへたにあかぬ心をいとゝしくやへかさなれる山吹の花

春雨

常よりは思ふをなき身にしあれはなぬかふる共何かとそ思

ある女に五月はかりに

五月雨はすきにたりとやあし曳の山郭公なく聲もせす

かへし

五月雨は世にうき物とほとゝきす鳴かくれにし聲な聞せそ

また

うかりけるその五月雨は過にしを今はゝやきてよしと語覽

かへし

風を疾みこりすまなみに立出て蜑よいかなるめをかみるへき

海士のきる鹽たれ衣ほさすして明石の浦そわひしかりけるしのものしのもとにまかりて物いはむといひ侍りしにいとまなしとていて侍らさりしかは

かへし

煙たにすこしたなひけ朝なけに灘のしほ燒いとまなく共

宮のすけなくなりて後宮にまいりて侍りしかはいとあはれにて

なたのうらに絶ぬ烟は絶ぬとも思はぬ方へみともせもせし

母のふくにて宮にまいりはへりしに花おりてとおほせを侍りし

諸共にこそさふらひし老らくの獨はみえすなりていく世に

故伊勢守のむすめにものいはむとて母の御息所に

したつえにさかすしもあらす櫻花いかてかゝけむ墨染の袖

但馬守の家に和琴かりにつかはすとて

老らくのなれる姿の池に生るはちなきこひも我はする哉

上總にまかりしとしものいひはへりし女にあふきなとして

つれ〳〵の夏の日くらし戀しきにかみの調へもして心みむ

ぬさに

東路の野路の契りはへたつとも扇のかせのたよりあらしや

かへし

行末に神〔のイ〕そしるらむいはすともこは大ぬさの手向ならぬを。

傳殿のうへあふきぬさなとおなしく什たまふとて

武藏野の草のゆかりを尋ねみは便りをしもはなとか待へき

かへし

〔マヽ〕さりそむ袂も早く朽にけむ軒のした葉の露をたにみよ

わかる覽とまるもおなし武藏のゝ木の下露は風も吹あへす
物いひ侍りし女我は今は老にたりこれか中にとてむ
すめよひいたして物なといひてはへるほとにくりを
ものゝふたに入て出して侍りしそのふたにかきつけ
てはへりし
何れをかわきて忍はむふたこより思ふ心はひとつなりとて
花山院の哥合にめしゝかは
〔後拾春〕谷河の氷もいまたきえあへぬに峯の霞はたな引にけり
鶯
我やとの軒端の梅やさきぬらん鶯きなく聲きこゆなり
櫻
春たゝはいつしかみむと待ものを遲くもさける櫻はなかな
いやしきに淚うちしくとみえつるは峯の櫻のかけにさりける
けふ咲てあすは散ぬるさくら花よはゝや早に物をこそ思へ
歟　冬
そこ淸く井手の川瀨にかけみえて今さかりなる山ふきの花
柳
花さくら散しはきのふ青柳のはやまにけふはうくひすそ鳴
夏
夏くれは山ほとゝきす鳴やせむと思ふ心そめはさましける
同しなを花橘のはなさかりみしかき夜こそわひしかりけれ
冬
ふしつけし淀の渡りをけさみれはとけむこもなく氷しに鳧
ひとりぬる人も社あれ一つかひ鳴なるをしの聲やかなしき
左の大臣（内裏御事也）の大井におはしましてて紅葉をたつ
ね給ふこゝろよませ給ひしに
〔續詞〕こイ　〔をイ〕
いつくにか駒もとゝめむもみちけの色なる物は心なりけり
おなし殿の哥合に惜夏戀月
ねさめする秋もこそあれ天の原のとけくてこそ夏のよの月
やまにて
何れをか世になかれとは思ふへき忘るゝ人と忘らるゝ身と
人の上を我に語りし其かみもそよ添はさりし日つきそかし
うとからぬなも有ものをいもせ山たちなかくしそ春の霞も
院の殿上にて四月二日庚申ありけるに卯花隔墻根と
いふ題を
うの花のしけき垣ねとなるまゝに隣にかよふ道そたえぬる
十月はかりに白川にて山里の戀といふ心を
戀しさそ忘れさりける山里はうらみていてし我身なれ共

藤原長能讃岐權介惟岳孫也。伊勢守（正四位下）倫寧二男。
惟岳者烏羅神臣男○中納言長良卿孫也。
天元五年十月十八日。任右近將監。永觀元年二月五日。停任。八月十二日。任左近將監。二年八月廿七日。補藏人。（廿六〔九歟〕傳）。寬和二年月日。兼近江少椽。永延二年八月廿九日。任圖書頭。正曆二四月廿六日。任上總介。寬弘二正月廿七日。叙從五位上。（治國賞）。同六年正月廿八日。任伊勢守。

右藤原長能集以古寫一本挍合

源兼澄集

十一に侍りしときちゝ(信孝)のともにみちのくにへまかりたりしにたまつくりのこほりそこのかはすきといふところをかならすつけよといひはへりしに人人もわすれてつけはへらてはやすき侍にきといひはへりしかは

音にのみきゝ渡りつるかはすかきそこ共しらて過にける哉

たちはきにてはへりしとき宮の女房のまへをわたり侍りしにむめのはなをさしいてゝはへりしかは

たまたれのみすのうちには梅の花思ひかけたる人やおる覧

ときあきらもろともにをのといふ所にまかりしゆふつかたおきな女くして京にいりはへりしかは

山人のおのかつま木をおりつめてよを故郷にうつる悲しな

おなし人もろともに八月はかりにはつせにまうてゝはへりしにあか月にかはきりのたちて侍りしかは

河霧も旅の空にや思ふらむまたよふかくも立にけるかな

女のもとにまかりてあめのふり侍りしあかつきにまかり歸てつかはしゝほいなくはへりしかは

逢事のなきさはいつも乾かねとけさこそ袖の裏はことなれ

いかの守ためたふかまた無官はへりしときさし(雑子)やあるいそく事なむあるといひて侍しかはまとかとてをこせて侍りしにつかはすとて

求むれと更に交野のきしとしれ有といひしはそれそら鳥

みつからよりはまさりたる人を忍てかたらひはへりしにことのきこえありてきゝにくゝ侍りしかはこたみはかりそとあひてはへりしに

さきにたつ涙の道にさそはれてかきりのたひに思ひ立哉

かはらの院にあほふか方にまかりたりしついてにこころへぬたいをいひてうたよまむとあはふかまてこの御寺のうしろにかしは木うへたるかなまかれかたになりにたるそれよめと申しかは

ならのはのよゝのふること思ひては梢の枝はかれむ物かは

ともときかありまのゆにまかりたりしにほとゝきすはつねをなむきゝしといへは

郭公ありまの山をきみひとりこゆとしりせはゆかまし物を

もとすけともろともにみたけにまうてゝはへりしにもとすけ

(元輔集)いにしへものほりやしけむ吾野山山より高きよはひなる人

といひはへりしかはかねすみ

歸りてもとそともなき身にしあれは吉野の山に山こもり南

さいすけちかゝいへにて人々四月一日ころもかへのこゝろよみ侍りしに

なれ衣もぬきかへ難し花のかを春のかたみにうつしゝ物を

たちはきに侍りし時ある女のもとにまかりてあしたにしものいとしろくをきてはへりしかは

朝霜に夢忘るなといひ置てとくるにぬるゝうらをみせはや

入道の中納言の子入道中将のむまれてはへりし七夜むめのはなをおりてかさして侍りしかはこのこゝろよめと侍しかは

梅花何れの春かさかさらむと思ふからにそ千代はしらるる

よしのふともろともにいせへまかりしにすゝかいもみちのいみしうしたるに時雨のふりはへりしかはよしのふ

紅葉はの色々になるすゝか山時雨のいたくふるにやある覧

かねすみ

神な月しくるゝ空は紅葉はの色もたむけのしるへ成けり

十一月かけあきらともろともにつのくにのいくたのもみちのちりしを見て

紅葉はの沈むそこあらはあかさりし名殘によせよ沖つ白波

かよひはへりし女をわすれかたになり侍りしにちいさき木のもとははへてすゑはかれてはへりしにふみをつけてかくいひて侍りし

侘つゝも木の世をたに賴む木の嬉しもまつそ枯れ勝りける

と申したりしかは

末のよをしらぬ歎はしけくとももとより人を枯むとはせす

ともまさの朝臣のはりまへまかり侍りしにはりまかたといふところに女の車にのりてはへりしかは

はりまかた行かふ舟の波間よりほのかにみえし嶋かくれ舟

き寺にそうのいけほりはへりしおりにまかりあひて

すみかへる袖にほる池の水の面に今は蓮の開けむにあはむ

まかりかよひし女のいまのおとこにもわすられたるかいへのまへをわたりしにみしわらはのかとにたちたるにおはすやといはれたれはこのわらはしていはせて侍りし

忘られていける身もあらし世中に有やとたにもとはれさら南

かへし

とはぬをも恨さらなむ世中に我ひとりするもの忘れかは

ものいひはへりし女の返事をせさりしかは

我ことはあくたの山の山人も思ふといへはおもふとそいふ

ある女のもとに五月四日にまかりてまたの日いひつかはしゝ

けさこそは君をみぬまの菖蒲草よとのをこふる程のわりなさ

ある女に物をいひそめてあふさかのせきのもとよりつかはしゝ

越すてもこえてのゝちも逢坂は猶まとはるゝ物にそ有ける

身の程よりもまさりたる人をおもひかけて

年をへて人めをつゝむ袂よりつねに涙のもりぬへきかな

むさしのかみためたかゝめのあまになりてはへりしに

なてきけむうふの黒髪やふりして變れるすちは心ほそしや

四條の宮のすけの君たゝにまかりてあまになりぬときゝしほともなくなをかたかむかへけれはあひぬときゝて

世をたゝにすつる道にはいらすして又故郷に歸るへしやは

むまのせうになり侍りてよろこひ申になかよりかたちはきのせ上なりしうへのきぬをかりて雨のふりしかはかへすとて

かさまよりもりし玉水てもたゆく拂ひし袖の後めたさよ

五月五日めのもとにてうちやすみたりしほとに女のいりにけれは

うたゝねのひるねの夢に菖蒲草結とみつるうつゝならなむ

東宮のとのゐにさむらひしにかりのこゝろよめと人

人中しかは
鳴鵰はゆくか歸るかおほつかなはるの宮にて秋のよなれは
四月一日人のもとへ
けふよりは夏の衣にきよせてあらふる神もあらしとそ思
よのなかいとさはかしきころ人のもとよりそのまへ
のさくらちりやしにたるひと枝をこせよといひたる
やるとて
世中に折くらふれは櫻花匂ひのとけきこゝちこそすれ
としころいみしうけさうせし女に
年を經てかき集めこし藻鹽草けふりやいかにならむとす覽
四月一日ころもとすけやこれかれさけなとのむ序に
子規なかぬなといへは人々みなきゝてきといへは
里ことに鳴といひつる郭公まつ我宿にをとつれぬ哉
四月一日ある所にて
身にしめるまた花のかもある物をとくもかへつる夏衣かな
ほとゝきすふるきこゑありといふ心を
故郷をこふる心有郭公思ひてなきにぬるゝ袖かな
女のもとにとまりてのつとめてほかへかへらむとい
ふにかへらてひるいひ侍りし
命をはけさ社たけく思ひつれくるゝをみれはいかむ方なく
八月つこもりに神明といふ寺にもとすけとふらひに
まかりたるにせんさいのいとおもしろく侍りしに
歸るさの物うき秋の夕暮にいとゝもまねく花薄かな
ものいひ侍りし女に
數ならぬ身にもつらさのしられつゝ歎くは君をいかゝとそ思ふ
さいすけらか露草こふやるとて
てに摘て身つから染し花なれは年はふれとも色もかはらす
しのひたる女のつれなくはへりしかはそのふみとも
おこせよとて
いひそめし言のはいかに成ぬらん吹かへさなむ秋の山かせ
女にものをいひそめてほともなくいよのゆにまかる
とてかはしりより
波たゝぬ衣の袖のうらなれてよものはま風なにならぬ哉
かけあきらかつくしへいくにやまはといろのあをや
るとて
足引の山はと色のかりあをくきしとや人のいはむとすらん
すけちかゝいもうとにおくれて侍りしにそのころす
けちかゝいへにてむかしを思ふといふこゝろを人々
よみて侍りしに
古をこふる心にまくれして君にあひてはまとはるる哉
すけちか
哀我むかしなからにけふならは心のほかにかへらましやは
またいてゝいく人をあはれかちに侍りしかはむすめ
かふくにすみしに
老の身をまきにおらん物なから此方彼方にいれてみよかし
くら人にてはつてのつかひにゝてなにはにまかりし
にうとのといふかたはらにとりかひのせきといふと
ころのあれは
川上をうとのと人のいひつるはとりかひのせのあれは成皃
つくしよりきたるひとにすたれかはこふをいまいき
とてこさねは
ありとのみ人のいふめるそめかはを心盡しに戀や渡らむ

はゝにをくれてはへるころすけちかゝいへにてほと
ときすをきゝて
啼聲はおとらぬ物を郭公しての山ちの道しるへせよ
しての山歸る〳〵もしるへせは親のさきにそ我はたゝまし
かへし
このよをははかなき露と聞しかと今は蓮の玉と成らむ
おなしころゆめにみて
夢の内にこれは夢そと思ひせは覺て千とせもあらまし物を
夢にみてあかすさめても思ひしも現の千よにならへてし哉
三月つこもりにおいゆくやなきをみて遊ふといふ心
をひと〳〵によみしかは
しはしまて花とこれとは春深き雨におい行柳みるまは
みつまさかむさしへくたるにかはらけとり侍て
行人は思ひやすらむとまるをは是そ分れはしつ心なき
くら人に侍りし時ひと〳〵あつまりてさけなとたへ
て月のいとおもしろけれはこれかれとゝむれとあす
は御ものいみなりとてこもりにいそきまいるとて
いかにせむなか空成や人をゝきて月と共にし出る身なれは
齋宮のかん神したまひしにあかつきにきむのこゑの
はつかなりしかまたもきこえさりしを心もとなしと
おもひし程にさけいたさせ給たるかはらけとりて
しのゝめのあくまてと思ふをの手に覺束なくも惑はるゝ哉
もとすけかかつらのいへにてふるきはしのうへにて
人々哥よみしに
いにしへとけふとのをゝはしにして後のよまてに思ひ渡覧
すけちかいと久しくあひはへらて夏の月にあひ侍り
て
山のはの月待ほとの心ともよゝ思ましてまとはるゝかな
内わたりなる女のまかてむおりはからなすと契てを
とせていてたれは
兼てより契らぬ空のしつくたに出るはしるき物としらすや
たちはきにはへりしときある御方の女房にものいひ
はへりしをよことに殿上の人にさまたけられて
あま小舟あきのゝ島にせかれつゝ入江の方をみてやゝみ南
よしのふもろともにいせにまかりくたりてためもと
入道みかはのかみにて侍しに哥よみておこせよと
申しかはつかはすとて
尋ねこしかひこそなけれしかすかの渡り遥に海をへたてゝ
こうませて七日に人々哥よみしは
かきりなく思ふ心にいはれねは人にまかせて頼む成けり
宮つかへひとをとらへてものいひはへりしをひきす
くしていりはへりしかは
乙女子か袖ふりかけし移りかのけさは身にしむ物と社思へ
一條殿さうしのゐに人々哥よみはへりしにはまなの
はし春
しほみてる程は行かふ旅人やはまなの橋と名つけそめけん
夏
あふみなるかゝみの山の山影の曇ぬほとにこえてぬるかな
宇治秋
あしろ木に日をへてよする紅葉ははたちともしらぬ錦成覧
すみよしの冬
住吉の峯に波たつまつもみな千とせは君にゆつる也けり

おほ井かはの秋
みなかみも時雨やすらむ大井河散くる紅葉色深くみゆ
やそしまのはる
やそ嶋の波とゝもにや春霞立くるあまの數をしるらむ
うきしまはる
水の面によるへ定めぬうき嶋もしつけき春はうこかさり皃
さほやま秋
さほ山の紅葉の色のあかぬゆへあまたの秋にあひぬへき哉
たかさこの冬
色もゐすまてきぬらむ高砂の尾上の松をとまりと思ひて
たこの浦春
たこの浦のもしほの煙打霞のとけくみゆる春の空かな
こゆるきのいそ春
わかめかる春やきぬ覽こゆるきの磯のあま人涙にましれり
おほよと
〔拾神樂〕おほよとのみそきいくらに〔よイ〕成ぬらん海〔御さひにたるイ〕はひぬらむ浦の姫松
しかすかのわたりの夏
思ひたち急きこしかとしかすかの渡りにきてそ妹は戀しき
屏風のゑに梅の花のかきたる山寺にまらうときても
のかたりするところ
山里の梅を忘れぬ心にて春にをくれす尋ねつるかな
くれの春かはらの院にてはるかに山さくらぬしなく
てあれたる心を人々よめは
ふるさとはゆかむとこそものうけれ山の櫻に心うつりて
やとあれて昔の人はみえねともすみえし水の絶ぬをそみる
くら人にて臨時の祭日まい人して宮の御かたにかへ
りあそひにかはらけとりしはとにおほ入道殿いはひ
の心よめとおほせられしかは
よひのまに君をしいのりをきつれは我世も深く思ほゆる哉
三月つこもりにあはたの殿に大將殿のおはしましゝ
御ともにつかまつりて
山里にみにこそきつれ君ともをおくれて匂ふ花は有やと
くら人にてさふらひしときさか野にはなみにまかり
てはへりしにむまこそといひし人のあまにてありし
所の坊のまへをわたりしかはませの中にうりなとう
へたりしかはそれを
なかむれはうとましくこそ思ほゆれこは何人のみその成覽
あはた殿のくら人のとうにてをはしましゝときふる
きとしにせちふ〔節分〕してはへりしにむめの花をたま
はりてこのこゝろよめと人々のはへりしかはくら人
ところのさうしきにてはへりしころ
枝わかす匂ひやすらむ梅の花年のうちなる春のあしたは
おなしをとゝそのとしの七月七日こ前のあしたさら
にあき有といふこゝろ人々よませたまひしに
織女の秋をしもなと契りけん雲の上なる人にとはゝや
またくら人にならさりし時ともまさのあそむの大貳
にまかりなりてくたるにうへのそうそくひとくたり
たまはりてかたみにみよとてものひとへわかちはへ
りしにそへて侍りし
雲ゐよりたつたひ人のから衣かたみに置も露けかりけり
と申たりしかは
くらふ山のほらん程は唐衣ちりもそゐるとかきてあふかむ

くら人おりてかふりたまはりてのはるよしふかきい
へにてこうはいをおりて人々哥よみしかは
ことしより色付にける身にしあれはおれる花さへ心有らし
めにまかりをくれて涙のふちといふ哥をよみ侍りし
かは
をり立ておほくなくには涙かは淵瀨しられぬ物にそ有ける
あるゐ中にまかりて京にのほりしにかみのめのきぬ
とてしらておこせたりしかは
夏衣あまたかさねてみゆれはあつかふほとに立やこさ覽
屛風のゑにはなおもしろき所にあまふねのわたりた
るかたかきたれは
さしはへて入えに急くあま舟の花のあたりはすきうかる覽
ある所のはかうに院源そうつのかうしせしにまかり
あひて方便品ときしそうつにかはらけとりて
君かけふときつる法を聞て社三世のほとけにあふ心ちすれ
ある女にひさしうあはぬかおほつかなくてはへりし
ころよひて侍りしかは
戀つゝもふるやのつまの忍草忍ふる程にをとなふやたれ
ゑに女のつらつゑつきて人まちたるところ
すみしれる月と水とにはかられて人待宵の秋の山さと
くら人おりてはへりしころひとのうへのはかまをか
りてかへすとてきてかへすへきなとやうにいひて侍
りしかは
雲の上おりてのゝちは唐錦きて返すへきほとそいつらは
わすれ侍りし女のまつりの車よりあふひをおこせて
侍りしかは
神かけて君かちかひし我中の葵はよそにならんとや思ひし
ひとのむすめをけさうしはへりしにおやにのみいひ
わたりて七月はかりにすゝきにさして女に
秋風の吹につけつゝ花薄ほのめかすをはしるやしらすや
女にかはりて
おほかたに何ともなくて過しつる暮も晝まも今や知られん
またなれはへらぬ女のもとにねすくして女のいたく
はち侍りしかほをみはへりしかはうちにいり侍りし
かは五月五日
菖蒲草よと野はそれとしりなから轉寢にやは思ひつくへき
五月五日人のかりくすたまやるとてひとにかはりて
永きよをかみか齡に較へつるにはふしのねに引くらへみよ
四月山道をまかるとてほとゝきすをきゝて
郭公初一聲のあかぬゆへこえくらしてむけふの山ちは
よしたゝにそうそくしてとらすとてかりきぬにむす
ひつけし
ぬきふとみ風さはなへてみえね共こを網のめの例にはせよ
まつりのかへさにちそく院の前にてほとゝきすの聲
をきゝて
ふる鄕のをやつたふる郭公初音ならねとこめつらなる
さねかたの中將あはひこひにをこせてはへりしやる
とて
ねを澤のあはひの程に較ふれはくによりも尙おほきなる哉
右源兼澄集依無類本不能挍合

源道濟集

藏人に中納言の君の御もとにて哥合に春まつこゝろ

待よりはゆきてやみまし春日野を春のけしきは霞たつやと

雪

朝ほらけ雪降空を見渡せは山のはことに月そのこれる

人々長閑寺にありきて殘花をたつぬといふ由よみしに

ちり殘る花もやあると尋ぬれはそこともしらす日は暮に鳬

參河入道の參河なりしほと女のなくなりにけるに京にのほりてしうとめのもとにありてまたくたるにあはれなるうたよみかはしたりけるをかきをいたりし草子をみて

哀しる涙は更におほかたの人の爲ともわかすそ有ける

元輔か集かりてかきつけし

玉章に心のうちはしりにしを身はいつかたのけふりなる覽

朱雀院にまいりたりしに山の紅葉いとおもしろかりしかは

見渡せは紅葉しに鳬山里はねたくそけふはひとりきにける

おなしころなくなりにける人のとふらひに山さとにいきたるに人もなけれはかきつく

古里に人たにあらはとふへきを紅葉の道もうつもれにけり

あひかたらふ女のとしころありてのほりたりと聞しに

分れしにつきにし物を待出ておなし涙とおもはさらなん

ある人の爲中へくたるときゝていきたるにいてにけるほとにてえあはてかへりしかは

常ならはあはてかへるも思はしを都いつとか人のつけつる

かへしに

山深くうき世を出ているなれと心はかりはかくれさりけり

二月はかりあひかたらふ人のもとにいひやりし

待えたる春もなかはになりぬるを花みにさそふ人もなき哉

月のあかき夜人々哥よみしに

二月はかり花をそくさく頃よみしに思ふことありし比にて

春にあはぬ人にあはしと思へはやよそなる花もをそく咲覽

はなたつねてほとをしらすといふこゝろを

山さくらみてかへらしと思ひしにしらぬ里にそ尋きにける

あひかたらふ人の陸奥國へまかりしに

思ひ出てよみちは遙になりぬとも心のうちは山もへたてし

月あかき夜あひかたらふ人のこのころの月はみるやといひしかは

徒にねてはあかせともろともに君かこぬよの月はみさりき

うしろやすきみかやとなる紅葉はの風の心にえしも任せし

十月はかり人の家にきくを見て

ほかなるはかれはてにしをおしみをける菊に心のみえもする哉

かたらふ人の家になてしこをもて遊しに

瞿麥の花の殘れる宿みれはあるしさへにもなつかしき哉

繪に山里に花をしみかほなる所に

〔拾遺〕山里に散はてぬへき花ゆへにたれとはなし〔く歟〕て人そまたるゝ

秋のねさめ

〔新古秋下〕ねさめして久しくなりぬ秋のよは明やしぬらん鹿そ鳴なる

さよふけて峯の嵐やいかならんみきはのなみの聲まさる也

山家月

〔詞花雜上〕さひしさに家てしぬへき山里をこよひの月に思ひとまりぬ

池氷

池の上の氷にたつのおりゐるをかゝみのうらと思ひける哉

松風を聞

世中に思ひみたれてつく〳〵となかむる宿に松風そふく

故郷をこふるこゝろ

人をたにやるへき物をふる里の越ちにゆきをへたてたる哉

もみちのつもる家

散つもる紅葉おしむとせしほとに庭もはらはて秋すきに鳬

雪ふりたる山家たつぬる所

道もなく雪ふりにけり山里はたゝ山ひこのこたへのみして

月に山路をゆく人ある所

〔續詞秋上〕秋のよの月に山路を越ゆけはまたなもしらぬ鳥そなくなる

あひかたらふ人のゐ中へくたるにきぬやるとて

わかるれとわかぬなるへし唐衣同し身なりと契りてしかは

ふる里をこふる心ゐ中にてよみし

忘れてもあるへき物をふる郷のけさ曙の夢にみえつる

人の惜花こゝろよみしに

散ぬとも春こはられは匂ひなんいかなる身にて我とゝむ覽

みちたつねに人きたる山里にいきて

おしみける人もありけり紅葉はのぬしなき山に尋けるかな

或所にて聞郭公よしよみしにおやの服なるとしにて

いにしへにことにも有かな郭公物思ふ時は聲かはりけり

卯花をたつぬ

卯花の咲るあたりを尋ぬれはしらぬ宿をもしりぬへき哉

山のさくらをたつねて

〔題闕〕このもとにけふはくらさむ山櫻後に尋ねはちりもこそすれ

〔續詞賀〕千歳ふる常盤の松もあまたゝひ君か〔御〕千世にはおも變〔ひイ〕りなん

ひえの山にのほりてふるさとをおもふ心を

〔續詞雜下〕ある時はうき〔こ〕としけしふる里に〔をこふるイ〕いそくやなにの心なるらん

おやの能登守になりたりしにまつくたれとありしに

人々まてきて哥よみしに

留るへきも道には非す中々にあはてそけふはゆくへかりける

法輪にまかてゝこれかれ哥よみしに

年毎にせくとはすれと大井河昔の名こそなをなかれけれ

二月はかりにけいそうかもとから

花みると急きしほとにおのつからこひしき人の日數へに鳬

かへし

花盛ひとりはみしと契りしをはるしもきみか忘るへしやは

服なりし時かたらふ人みた(已下闕)

思ふをいへはすこしは慰むをいつまて君にいはしとすらん

とき〳〵ものいひし女の子うみてその子なくなりぬ

ときゝて

はかなしといふにもいとゝ涙のみかゝる此世を賴みける哉

なくなりたるおやの夢にもなといひしかは

よはをになりにけれとも垂乳根の同し樣にて夢にみえつる

おやのなくなりたる比山寺にて佛供養してかへるみちにて

歸りては先たらちねをみし物をけふは誰かはあはむとす覽
おなしころなかむなとしてつれ〳〵なりしかはおな
しおもひなる人のもとに
身はことに色はおなしきふち衣袖にてしりぬおもふ心は
左大臣殿の秋花御覽せし御供にて
よそにのみみつゝはゆかし女郞花おらむ袂は露にぬるとも
ある人のもとから貫方君の集をおこせたりけるにか
へすとてかきつく
なき世には形見なりける玉章を昔はさしもおもはさりけん
山里にしりたる人たつねにいきたりしにあれはてゝ
人もなかりしかは
隣さへたえてなくこそなりにけれ誰にかとはんすみし人をは
あひしりたる人の武藏へくたるにそのおやのもとに
いかにそやよそに聞ける武藏野の殘れるなたに涙なりせは
みるとに逢まほしきを玉章のみゐの杜にはなりにたりとは
河原にてすゝみしけるに
涼みしてあくまてけふは心みつ河へは夏のほかにそ有ける
あひしりたる人のもとにいきたるに家はむかしのま
まにてあるしのなくなりにけれははしらに書つく
昔みし宿はかはらす有なからあるしはなくもなりにける哉
源中將家さくらいとおもしろく咲たりしを見てめの
とのもとにやりし
うへをきし人もなけれと春くれは花は昔にかはらさりけり
春ころゐ中よりのほるとて
みわたせは都はちかく成ぬらん人の心そかくれさりける
或所にてことなく春むなしくすきぬといふ題をよみ
しに
花みにも物うき人はいたつらにくれぬる春もしられさり鳬
人のおとこさりにしかはとをき國へくたりしにいひ
やる
〔新千載別〕わかるへきみちやはつらき大かたの世中はかり憂物はなし
或所にて四月つこもりかた郭公きかぬよしよみしに
郭公まつほと久し山里にところからかとゆきてとはゝや
郭公待聲きけは山里につねよりことに人そまたるゝ
また月みる男女ある所
久方の月はまとにかはらしをひとりみしにはとにそ有ける
宰相中將殿にて春にをくれたる事昨日といふことを
〔新古夏〕〔續詞夏〕夏衣きていくかにか成ぬらん殘れるはなはけふもちりつゝ
年毎にめつらしけれと郭公むかしの聲もかはらさりけり
郭公たつねありきしに
ほとゝきす鳴へき里を定めねはけふも山路を尋くらしつ
山家卯花
きなれたる人やかよはん山里にみちもなきまて咲る卯花
殿上人あまた大井にまかりて秋の心をよみしに
あきゝぬと
長保三年三月日補之
藏人になりて侍しに秋南殿にて月を翫ひはへりて
よそなりし雲の上にてみる時も秋の月にはあかすそ有ける
おなしころほひうへにて月をみて
秋のよの月の心にしみぬれは身のうちさへそさやけかりける
花のきをうへしもしろく春くれはまつ鶯のこゑをきゝつる
子日
〔續詞春上〕姫小松おほかる野へに子日して心に千世をまかせつるかな

たひ人山さとをみる

散はてゝのちやかへらむふる里も忘られぬへき山さくら哉

四　月

けふくれはかさす葵は千早振神に仕ふるしるしなりける

五月あやめふくいへ

年毎のけふにおひそふ菖蒲草ひくらむぬまのみまほしき哉

六月はらへ

水上のたゆるよもあらし年毎になこしの祓こゝにきてせん

七月七日

小夜更て逢やしぬらむ織女のよそなる人もまたれこそすれ

八月十五夜

年毎に秋のすくれておほゆるは今宵の月のみするなりけり

九月九日

おる人はよはひを延ふときくなへに散をしらぬ菊のはな哉

冬もみちする家

日をふれと厭かすも有哉紅葉はのひるたにとに色の勝れる

十一月神まつりする家

神代よりいはひそめてしあし引の山のさかきは色も變らす

雪ふる家

〔續詞花〕松の上にふる白雪のかつきえて千世は隠れぬ物にそ有ける

權中納言殿の御屏風哥

花のきを風にまかせてわか宿を尋ぬる人にあはぬ日そなき

かへるさは花の盛に成にけりおもふ事なきたひにも有かな

かすみたつ山さくら

きのふより散とそみえし山櫻今朝は霞のたちへたてつゝ

みそめては歸らさらまし常夏に戀しき人をこさせてしかな

馬にのりたる人みたりすくかけはしあり

心してこまはゆかなんあし引の山のかけはし皆おひにけり

五六人はかり松の木の下にありふちの花咲たり

常盤なる松にかゝれる藤なれは散とも千世はたのもしき哉

峯にたにまた登らぬに日は暮ぬ月は出なんこえやはつると

吹風にいきはさやかに成にけり秋ときこゆるふえのこゑ哉

山里に人家ありもみちはつかにみはやしに霧たちこめて

嵐のみ吹山里のもみちはをきりたちこめてくる人のなさ

海のほとりに松ありつたもみちかゝれり

紅葉して松にかゝれる蔦みれはかくて千年の秋そしらるゝ

松をのみ巡りて蜒のうへたれは千世の住家と思ふなるへし

こまなめてかりそめと行は朝ほらけ松風寒く雪降にけり

入道中將のきみの御もとに消息きこえしおくに書つけし

朝夕にみなれし君をおもふかなしら雲かゝる山をみなから

藏人になりて右衞門督殿にようさりまいりて侍しに御物忌なりけれはあひたまはてようちふけて

天のとにさしこしてやさよ更てたゝよひありく雲の上人

とあるかへし

蘆たつの雲の上にはかよへともふるす忘るゝときはなき哉

院うせ給ての春一條院櫻のいとおもしろきをみて

〔續詞哀傷〕櫻花見るにもかなし中々にことしの春はさかすそあらまし

四月になりて殿上に

夏のよのよは更ぬるを郭公待よひありて今はなか南

殿上人すゝみしに川原にいかんといひたりしにうち

にてえいてすといひやりたりし
音羽川かはせの風をこゝのへのうちにてひとり思ひやる哉
かへし
君こねはみるかひもなしをとは川岩波たかき風はふけとも
もとかく山里にすまんのこゝろなんはへるをいとよ
き山里あるをいさたまへと聞えしかは少納言かくの
たまふ
朝夕に心をやりて山里に花みんほとをおもひこそやれ
とある御返し
そよやそよ君やきますと兼てより心のうちに花そひらけぬ
大學助との爲所よりをみなへしにつけて
こゝにかく珍しと見る女郎花多かる野へをおもひこそやれ
かへし
ひとへたに花の心はしりぬれ〔は脱歟〕なへての秋をなにゝたとへん
正月はかり中納言とのにて人々鶯聞心よみしに
鶯の聲きくたひに春たては物わすれせぬ人となるかな
二月のころほひ六條の右大臣殿へむにありしにやと
もみなこほちてけり櫻のはなの咲たりしかは
昔みし人もなけれとあたなりし花こそ宿のあるし成けれ
或所に落花を思といふこゝろよみしに
散にける花の心をしらぬかなみてすくしけん人にとはゝや
つれ〳〵なりしにいみしう咲たる花人のもとにやる
とて
殘なくけふそ匂へる櫻花かせまつほとにひとりみるかな
衞門督殿にてよみし
春くれて待へき花もなき物を□より匂ふ宿の藤なみ

四月一日或人のもとにて
ほとふれてなつの心になりぬれは物思ふとそ變らさりける
しのひたる人に
しのふれは人にはいはす年をへて心のうちにやすき時なし
左大殿にて惜夏月
〔詞花夏〕待ほとに夏のよいたく更にけりおしみもあへす山のはの月
はるかにほとゝきすをきく
はるかなるたゝ一聲に郭公人の心をあくからしつゝ
水のほとりのまつにむかへり
君かすむ宿にむかへる松なれは水の面には猶そうつれる
としへてたのめし人に正月一日
春こはとちきりしことを待ほとにけさ鶯のこえに聞つる
屛風に稻荷詣
いなり山行かふ人のさま〳〵に思ふ心は神やしるらむ
あれたる人家に女ありたひ人かつゆく
我宿のまへのあら田をうちかへし春ふかきまて人をまつ哉
まつに藤花かゝれる所
みとりなる松にかゝれる紫の花のさけるとみゆる藤なみ
たひ人さくらの花みる所
駒とめてみるにもあかす櫻花おりてかさゝむ心行まて
みあれひく所
ゆふ掛てかもの河原にとし毎にけふあふ人のおほくも有哉
屛風に正月むめのはなある所
梅か枝をすきてや風の匂ふらむよそにしるへも成にける哉
二月子日
春の日に子日の松を引つれてうらやみもなくみゆるちよ哉

三月ちる花

春暮て殘らむとはかたくともみるおりにたに花のちらなん

四月神まつる家に卯花あり

ゆふかけてたれかみわかんみてくらに咲みたれたる宿の卯花

五月時鳥

よをこめて尋てくれはほとゝきすいまはみ山を出る聲する

六月はらへ

風吹ててるみな月に波たゝぬせゝやなこしのはらへなる覽

七月たなはたまつり

七夕の再ひとたにあひみねは我はかなしと思ひしみにき

八月十五夜

常よりも今宵優れてみゆるかな月こそ秋のすかたなりけれ

九月やまさとに人の家ありゆく人きたりむかふ

すむ人の心はしらすむかしみし宿はこたかくなりそしにける

十月人家にもみち

色深くなりもてゆけは紅葉はの風ふかねとも散まさりけり

十一月高山有古社人々參詣

山高み登るまゝにそ神かきの嵐のこゑも樣々にふく

十二月前池雪降水鳥群居

池水の氷につとふをしのうへにつく／＼とふる今朝の白雪

鶯

我宿にはつ聲そする鶯のほかには春のをそくあるらし

耕作

今朝見れは春きにけらし我宿の垣ねの梅に鶯のなく

山里尋花

けふこそは打かへすめれ小山田をいつしか風の吹んとす覽

櫻花たつねすくれは山里も空にそみける風にまかせて

見卯花

雪とのみあやまたれつゝ卯花にふゆこもれりとみゆる山里

聞郭公

五月やみあやめもなきに郭公行衞はしらす聲そとまれる

河邊納涼

川風にすゝみにくれは夏衣かさねつへくもさはくしらな（マヽ）に

七夕

よそなれと心はそらにたなはたのもとにそ渡る天の河波

目（月歟）前聞鴈

つく／＼と傾く月にさよふけてはつかにすくる初鴈の聲

霜中野

山ふかみ暮行野へはなか／＼に初霜をきて色まさりけり

神樂

あし引のみやまにとれる榊はの色こそまされあらし吹らし

見遠山雪

朝な／＼降積む雪を見渡せははやまの山もわかすそ有ける

河原院にて

行末のしるしはかりに殘るへき松さへいたくおひにける哉

雲林院の櫻を一枝あるある（マヽ）かりつかはすとて

またみせん人しなけれは櫻花いま一えたをおらすなりぬる

早秋十首

秋きぬとけさはけしきもみえねとも人の心の變るなるへし

こまなめていさゆきてみん宮城のゝ萩の上はゝ花咲にけり

わきもこかたひねのころもいまよりそすそ吹返す秋風そ吹

我宿のけさのわさ田もまたからてけふは立ぬるとを山の霧

都まて行やしぬらん初秋のまつ山里そしるくみえける
こよひしもねさめかちにて朝ほらけ尾上の鹿に秋を知ぬる
白露をよそにをくともみけるかな我身につもる秋をしらすて
思ふとさしてそれとはなけれとも秋にはそふる心ちこそすれ
〔後詞秋下〕古は身にしむ秋もなかりしをおいては物そかなしかりける
秋くれはすこさそまさるふる里もおなし心に人やなるらむ
　かはらのほとりのほたる
飛まかふ螢のかけそうつしける思ひみたるゝ人のこゝろを
　ゆふへの月をのそむ
夕つくよみるほともなく山端にいりての後も詠めこそすれ
　七夕
ふたゝひもなきあふ事を七夕のさよ更るまて影みえぬ哉
　はきの露
よそにてもあかすみゆれと萩花露やおつるとおらすなりぬる
　秋風をきく
〔詞花秋〕ひとりゐて〔なかむるイ〕物思ふ宿の萩のはに風こそ渡れ秋の夕くれ
　草花をみる
花みれは物思ふとも忘られぬ秋は野へにてすむへかりける
　松虫をきく
我宿に鳴松虫をさよ更てつれなき人にきかせてしかな
　あさきりにすく
朝ほらけ霧はれぬれは行水の聲こそ道のしるへなりけれ
　はしめの戀
〔詞花戀上〕しのふれと涙そしるき紅に物思ふ袖はそむへかりけり
　あひてあはぬ戀
うかりしにはしめきみにし魂を二たひしぬる身とや成なん

　屏風の繪にさくらの花みたる所
わか宿に咲みちにけり櫻花ほかには春もあらしとそ思ふ
　水のほとりにをしむれゐたり
春くれは芦間の氷とけぬらしむれゐるをしの數まさるめり
　陸奥守のもとへすまひのつかひにつけてつかはす
思ふとなからましかは武隈の松をはよそにあかすそあらまし
　十一月朔日のほとにゆふくれ時雨のするをみて
神な月すきにしかたも夕暮の[　　　]
　おなしころ
おりをける紅葉は散すほとふれは秋は心にまかせてそみる
　いなかにてふるさとの花をこふるこゝろ
かつみてもあかすおほえしふる里の花の盛に遠くきにけり
　五月うのはな
卯花に咲こめられて山里にこひし都もわすられにけり
ゆふ暮の袖にてしりぬ五月雨は戀する人やなつけそめけん
　なくなりてとふらひにくたりてのほりたる人にあひ
　て
よそにきく袖にてしりぬあつまちに遠く行けむ人の心は
おもかけに散にし花のみえまかひ春をわするゝ時のなき哉
　のりの花をおもふ
かをたにも衣にいかて移してむ殘れは花はけふもこそちれ
　藤花をおしむ
身にしみておしまれそする紫の心をみせん花はちるとも
　郭公をまつ

うたゝねもせられさりけり夏のよは山郭公いまやきなくと

夏月をみる

そともなる菊のはるはも繁りあひてさも懷かしき月の影哉

夏草をのそむ

宿ちかき野への夏草かるなゆめ鹿の聲聞たよりにもせん

ふるさとをこふる

老ぬれはすくる月日もあらはれてまつ古鄕そ戀しかりける

こひ

忍ふれとくつる袂のしるけれはいくたひ衣ぬきかへす覽

祝

君か世にみのゝを山のおひそはる松の千歲の數にそ有ける

四月八日山寺に即事灌佛

樣はかりみるにつけても嬉しきは昔のけふを思ひこそやれ

尋殘花

尋ぬれとみえすも有かな櫻花吞のとまれるところなけれは

見藤花

〔續詞春下〕山高み松にかゝれる藤の花そらより落る波かとそみる

九月はかりに山里の月をみる

雲の上にむかしさやかにみし月を時雨のみする谷かくれ哉

寬弘五年七月或所屛風春住吉有參詣者

住吉の神のみつかき神さひてやむときそなき岸の松風

籬嶋有柴舟折藤花所

紫の風そ吹ける藤の花空より落る布引のたき

やつはしに人家ありまへに旅人

我宿のまへの入橋ふみならしみちゆき人のすきぬ日はなし

秋のみやき野に旅人通行もみちあり野花也

駒とめてゆきもせられす宮城のゝもとあらの小萩花咲に鬼

たまの井きしのうへに花あり

岸のうへのはなにかゝれる白露や流てすめる玉の井のみつ

いもせ山旅人紅葉をみる

いもせ山たひとゝ紅葉は紅の袖ふりかはしゆくかとそみる

冬小倉山遊客見紅葉有坪下者

小倉山紅葉ふりしき大井河波の心に秋そとまれる

交野鷹犬者兩三騎經𢌞雨霜霏下

みかりする交野へはゆくはし鷹の羽うち拂ひ雪はふりつゝ

晚秋十詠に時主山家紅葉みる

深く淺く紅葉の色のみゆるかないかゝ定めむ秋のほとをは

翫殘菊

おいらくは殘れる菊そ哀なるしもいたゝける人にまかへて

たひのかりをのそむ

雁かねもふるさと遠くなりにけり我心をそ空にしりぬる

時雨をまつ

秋暮てむら〳〵空そくもり行山さといまは時雨すらしも

深山月

〔新古秋上〕心こそあくかれにけれ秋のよのよ深き月をひとりみしより

木枯風

かた岡に木枯吹てせこかすむまへのさつかい（マヽ）まりこふらし

春　戀

つく〳〵となかむる宿に春ひすら花ふみちらす鶯そなく

夏　戀

衣手のかはくまもなきいにしへのさみたれよりや戀初けん

秋　戀

もみちは涙や空にそゝくらん秋は戀こそしるくみえけれ

冬戀

〔く脫歟〕
かき・らし風吹むすふ[　]冬もかひなしもゆるおもひは

夏夜三首思深夜月

雲はれてよも更ぬらし月影のいるをもみ・やゝまむとす覽〔て脫歟〕

夜思蛩蛬

よの程にさきやしぬらん常夏の花の盛はいこそねられね

聞村笛

おきゐつゝねさめのみする頃にしもよ深きふえの聲を聞哉

八月十五夜左衞門督殿にて

大空のつねよりひろくみゆる哉ちれる雲なくてりみてる月

同殿にて思野花と云題を

秋の野はゆきてはみねと思ひやる心のうちに花そ咲ける

秋風聞

〔詞花秋上〕
夏衣またかへなくに秋のはの末打なひく秋風そふく

或所にて惜殘菊

一くさにいふにはあらす菊の花うつろふとに猶やかへまし

くれのあき

み渡せはくれも暮すもさほ山の紅葉も秋の心なりけり

大納言殿大井逍遙同和歌一首望紅葉

日くらしに昨日しくれて紅葉はの山てる迄に今朝みゆる哉

翫蘆花〔く歟〕

ほにいてた汀の蘆のあしたつの千世に變らぬ色にそ有る

或所にて

君か世とうへしもしるゝ〔く歟〕吳竹のけふそ一よはおひ初めてん

九月盡日眺望惜秋光

おしめともとまらぬ秋にならひぬる心にさへも別れぬる哉

有明の月

さよ更てふれる雪かと驚ろきてみれは有明の月にそ有ける

松　風

朝ゆふに吹松風はよとゝもに千世のかけこそたえす聞ゆれ

いのり

萬よはいつぬきかはにむれゐたる鶴の影にそみるへかりける

しくれ

おり〱にかはりそしける神な月しくれは人の心なりけり

しもかれ

み渡せは飛かふとりの風をいたみむれいる[　]かれにけり

こしはかきにあをきつたなとのはひたるに雪ふりかかりけれは

卯花と見えもするかな山里のかきねにふれるけさのしら雪

家のさくら花をみて

我宿の櫻の花はさきぬへしいまはとふへき人そまたるゝ

ものいふ人の在所をしらぬにいひやる

白雲のしるくもみえぬ宿なれは尋ねそわたる三輪の山本

二月つこもりかたにものいふ人のもとに

いふ人もなき我宿の櫻花風の心にまかせてそみる

二月つこもり頃左衞門督殿人々於白河院惜花心よみしに

春霞絶まにみれは山櫻いまそちりけるところ〱に

庭前櫻花の雨のよみな散をみて人のもとにつかはす

君こすて散ぬる宿の櫻花こよひの雨に殘らさりけり

白川院に人々花惜にいてゝ哥を不詠てかへりしか

は相模權守もとにつかはす
しら川の花の心そはつかしきおほくのとしの春すくしけん
ある人の家にひねもすに雨ふりて山ふきの花咲たる
をみてこと方にある人に
日くらしに春さめ降て我宿に咲やまふきをみる人やたれ
白川院の歌をきゝて河波前司入道
花をみる心はかりはしら川のむかしの春にはちすも有かな
相模權守にいひやる
山櫻はなによそへてかすめしをいかなる風のちらすなる覽
かへし
山櫻はるすきかたに成ぬれは風ちらさねと殘りやはする
人々來會ておほろなる月をみしに
空霞みおほろなからに月影のもるにもまさる庭のけしきか
長恨歌當時好士和哥よみしに十首養在深窓
玉たれの簾もすかぬねやの中にきみましけりと人もしらすな
寵愛一身
百敷の君かあさいの移りかはしみにけらしないもかさ衣
行宮見レ月
みるまゝに物思ふをの優るかな我身よりいる月にやある覽
不レ見ニ玉顔一
〔詞花雜上〕思ひかねわかれし人を〔の〜詞〕きてみれはあさちか原に秋風そふく
池苑依レ舊
草も木もむかしなからの宿なれとかはらぬ物は秋のしら露
碧落不レ見
やるかたもなかりし心幻をまつにはまさる思ひそひけり
雲海説々
久かたの空もきはなきわたつ海に雲さり渡り日そ暮にけり
花帳夢驚
たれそこのけさ曙の夢の内に都のことをほのめかしつる
誓兩心知
たなはたやしらはしるらむ秋のよの長き契りは君も忘れし
此恨綿々
いはねさす筑波の山はつきぬともつきん世そなきあかぬ我戀
或女草子かゝすとてふてをやりたりしにはてかたに
とてかへしたりしかは
さかさまにかけはかゝれぬ水茎をいかてか人のいひ初けん
ものいひし人のむつましくもあらてやみにたるを五
六年はかりありてまたひとりなんあるといひにつか
はすとて
年ふれは忘れやしにしから衣ぬれにし袖の又もかはかぬ
夏はぬれ冬は氷りて人しれすおほくの年をすくす袖かな
難面さはいかゝなりにし年ふれとぬれにし袖は乾かさり覧
またおなしやうなる人に
うかりしにぬれにし袖の乾かすて七年といふにくちはてに覧
はやう又つかはしゝ人に年頃ありてひとりはあらす
と聞なからまた文つかはしたれはいひを〔こ歟〕・せて侍る
またつかはす
駒もこぬ時たにありしかけ橋を又文みるそあやしかりける
人めのみもる山なるとかけはしのこのした陰は月も照さし
五月五日さうふにさして返事せぬ人につかはす
とし深きねは隱れぬる菖蒲あやめもしらてやまん物かは
五月六日靈山寺にて二首

〔續詞花雜中〕君すまてまたいくとせにならねとも峰の松風聲そかはれる

〔なく續詞〕東山に郭公をたつね

峯ことに尋ねきにけり郭公わかいたゝきに鳴てきにけり

雲林院櫻花を

また咲ぬ枝もあれとも櫻花けふそ盛とみえもするかな

見庭前櫻花〔立能ㇾ事也〕橘入道

むかしみし君そきまさぬ我宿に花の盛に成にけるかな

三月五日中宮大夫〔齊信卿〕法住寺にて人々よみし二首

春殘花

山かくれ殘れる花をみつるかなよにふきいたす風に尋て

雨中小松

春雨におふるこ松のこすゑにて君かきてみん程はしくるゝ

あひかたらふ人のひさしくをとつれぬに

さゝなみのをとつれもせす山の井の淺かりけりな君か心は

あひかたらふ人の出家して深山にいたると聞ておもひをやるとて

朝夕にきなれし君をそのおりに覺束なしとなとてとひけん

なにとなく昔かたりもむつ事の數は今こそかそへられけれ

わつらふころ人のもとに

狩人の朝たつ野へのくすかつらくるしさしけき頃にも有哉

八月はかりに山里にあひしれる人を尋ぬとて

君にあはて程やへぬらむそともなる稻のはそよき秋風そ吹

八月十六日山寺にて京なる人に

〔續詞秋上〕よそなから君やみるらむ思ひつゝ今宵の月にねてあかしつる

八月はかりに山さとにて三首萩花

萩の花あけもはてぬにおりつれはこほるゝ露に袖そぬれける

見山月

かたをかのしはとを明て山端にいま〳〵出る月を見るかな

わつらふ頃山寺にて秋月をみて

〔續詞雜上〕昔みし人はこれともなか〳〵にちきらぬ月そ忘れさりける

秋ころなまめかしき歌よめと人ののたまひしかは

さゝかにの糸てにかけて白露を玉にもぬくかいもかいとなき

秋夜虫といふ題を

草かれの秋にやたへぬなく虫のよふかく成て聲のうらむる

水上月

波の面にいかてか月のいてつらんなと水底に山のはのなき

九月はかり東山橘入道かもとにてよる鹿の鳴を聞て

よを寒く君を尋てさを鹿のよふかき聲にめをさましつゝ

山月をよめる

よとゝもにみる月なれと空すみて照つる月はめつらしき哉

秋の曙に花見に人の出て人もあらしと思ひて有しをつかはす

ねくたれて花みにいもか曙にぬれにし袖のかはくまもなし

ある人のもとに十日計有てかへるに

日をへつるむつとの倚つきぬるも君かそともに君か袖とる

武藏前司勞に聞ニ蟄居之由一遣レ之

谷ふかみ春待とをに鶯のはねのみたれとゝはむともなし

返し

こゝろみにこすゑつたひに鶯の紅葉の錦とひも絕なむ

十月はかりに

哀れなる山のしたには久方の空のけしきもさえまさりけり

山家早春五首霞

うら／＼に照すはるひはあし引の山も霞て遠く成ぬる

鶯

鶯の聲聞そめて山里に春日くらしつ花のかけにて

春風

きゝわかすはなふりひらく春風に寒けもあらすけさも吹南

梅

君かため梅かえおれは我袖に花ちりかゝりかさへうつれり

柳

(詞花春)ふる里のみかきの柳はる／＼とたかそめかけし淺緑そも

山寺に人々いきて山のさくらを

見渡せは峯のつゝきに咲みちて空まて匂ふ花櫻かな

また櫻の花をみる

櫻花開くるみれとあかなくにいかにせよとか匂ひますらん

さくらの花さかりに山さとにれいなき人あるに

よそなれと心はしりぬ山里の花のさかりにすむ人やたれ

山寺僧房の前新閼伽泉

流れいつる心はしりぬ秋のよの月そやとれる山の井の水

十月一日人のもとにつかはす

いつしかと曇れる空にいとゝしくけふは袂のぬれまさる覽

山里にて紅葉をみて

神無月時雨るゝまゝにかた岡のはゝその紅葉色まさりつゝ

人のもとに

みえつるは夢かと思ひてさめたれはなと面影に離れさる覽

朝ほらけうつろふ菊の露をもみ花みるいもか袖はぬれつゝ

返事せぬ人に

山高み峯におりゐる白雲のしらては人のやまん物かは

また

ふく風のそよとそなひく山のはにうらやまるゝは秋の風哉

また

風吹はすゑうちさはくしのすゝき何みる人のなひかさる覽

山寺にて月をみる

あきさむく成にけらしな山里の庭白妙に照す月かけ

としころいかてとおもふ人に

人しれす思ふ心は高砂の松やしるらむ年そへにける

かへし

年をへておもひやすらん高砂の松にもいかゝゆきてとふへき

ものいふ人に

わきもこにみせてやけなむ山里の紅葉の上のけさの初雪

しのふ人に

人心なき世をそむく山里に空かきくらし初雪そふる

また

山里のもみちにふれる白雪は花櫻とそみすまかひける

また人に

都にはふりやしぬらむ山里のみちもなきまてつもる白ゆき

山里にある人をかたらひてとき／＼通ふにまたおなし山さとのちかきところにものするあひたにていひたる

山里の外にそますときく時は心のほとをしらすそ有ける

かへし

君しらぬ心はほかにもたらねは行山里もへたてやはする

山寺にこもりたるあひたに雪ふる日玄番(蕃歟)助かもとへ

夕されは寒さやまさむ山里のかたちの岡にみ雪ふる也

かへし

吉野川雪はふれとも春きぬと峯のけしきそ霞渡れる

正月五日

我袖に春そしみぬる山里のむめかりすくる秋のすゝきは

いくへきよしをいひてさはる事ありてとまりしかは

戀しさにまけてやしたに待もみん云にかひなきをはとしめつ

かへし

心にもかなはぬ物は身なりけり□しても人を契りける哉

つくしにて十月はかり歡そは(マ)こもとにきぬつかはすとて

神無月み山の風しいかならむさとさへすこし時雨ふりつゝ

秋住吉にて三首

宮はしらふとしきたてゝわか□□□□□□□□□□□□

おいらくに病そひつゝいかにせん今行末を神のまに〳〵

筑前國にて香椎宮の祭の日梅花をさしてよめる國の例にて春は梅冬は杉きをさして前の守を必歌よめる

年毎に匂ひまされる梅花おなし色にてすきをかさゝん(り歟)

色かへぬときはの杉は我國のなかけき宮のしるしなりける

右源道濟集以村井敬義本挍合了

群書類従巻第二百五十三

和歌部百八家集廿六

橘爲仲朝臣集 始闕

すなはちたちなから

櫻花おりよく匂ふ春ならは風にも人のかくとつけきや

又朝久

ちらすなとつけしとそ思ふ櫻花風ものとけき君か御よには

かへす

吹風ののとけきよとはみゆれとも花さへ散て春やすくへき

ものなとはいひなからしたしくはなきをんなのもとよりなてしこの花のさきたるをみにことゝいふにやる

きてみよと思ふはかりの撫子は今まてなとか移ろひもせぬ

かへし

いはてこそすくへかりけれ撫子のありやなしやと花み心よ

殿のうた合のこうてうのあか月に哥合のうたをかきて中宮のいては辨のもとへやるとて

さ月闇くらへてみつる言のはをつきなき人にまつ散しける

微凉向月生詩題也

河かせの吹くるはかりあられとも月みる程はすゝしかり鳧

屛風のゑをみて人々うたよむにはるの花のもとにたひ人むまよりおりてゐたるところ

けふも又花みて暮す旅人の春のとまりは櫻なりけり

おなしゑに山家の前に田うふる所

いにしはる水せきいれし苗代の早苗は早くけさそとりける

山家あかつきすゝしけつれかいなりのやまもとの山莊にてゐいす

いなり山峯のすき村風吹はふもとさへこそすゝしかりけれ

たいをさくりてぬのひきのたきになつの心をそへて

夏なれと音のさむきはいひなかすなよりも高き布引の瀧

月よかやう院殿にて人々よるの菊といふ題をよむに

月かけにみな白妙の心ちしてうつろふ色はあけてこそみめ

山道のもみちを人々ひろさはにしてよみしに

嵐吹深き山へは我こまのゆく人もみえす紅葉ちりけり

殿上人五六人はかりして絶句述懐うたよまれしに

雲の上になれし昔をけふさへに思へは年のおほくへにける

月にむかひて秋ををしむといふ題九月十三日の夜

つねよりも心空なる月みすはかくまて秋ををしまゝしやは

三月はかりあはちよりのほるにつの國のすいたといふところにみちのくにのせしなりたふかしろ所さい

ぬのさふらひにて人々ほとゝきすをまつうたよみけ
ろひ講程にまいりあひて

待かれてきかぬかきりは郭公こひするころの心ちこそすれ

宮のさふらひにてたいをさくるにさみたれをとりて

かきくらし晴るまのなき五月雨のふしの煙はなをや立らむ

あきのはなひとつにあらすといふ題をおはりのかみ
としつなかいへにて

いつれとか思ひわくへは〔さ歟〕秋の野の千草の花にうつる心は

のゝはなあき日さしといふ題皇后宮さふらひの前さ
いほりに

うつしうふるけふより後の行末の數もしられぬのへの秋萩

秋のよを題にて

いつのまに程なく明し夏のよのねさめせらるゝ秋になる覽

かうふりたまはりて三年はかりのほととうの辨つ
ねいへのきみのさかのによはれたるにあるにくたり
たりけるにかくすくなりとてをとつれたるにたちよ
りて宮の人々なとありてあめのふるに春雨を題にて

思はすに今日こさりせは春雨のふる里人にいかてあはまし

四月のつこもりかたにあはちにくたるにかはしりに
てよるかたはらなるふねにのうゐん入道かくたりあ
ひて物かたりするにさかつきをとりて
のうゐん入道

〔後拾遺〕さ月待なにはの浦の郭公あまのたくなはくりかへしなけ

このほと郭公なきわたりきやまとの入道五月に入道
になりてのちのことなるへし

郭公鳴てすくなりなにはかたあしまの千鳥しはしなとすな

このたひ宮こいとまうしゝほとおはりのかみのよ
となるところのたうへん見てくたれとゝめられし
かともくたりて五月にくによりおくりし

さほとめの賤のした袖ひきぬらし山田の早苗植やしぬらむ

月まつをてらすといふたひ中宮のすけかねふさの二
條のいへにて人々おほくありてよみしに

松かえの木影もみえす曇りなき月のつもるやちとせ成らん

よるのあられを備ちうのかみよりいゑかもとにて古
曾部入道相摸不會

とふ人もなき冬のよのさよなかに音する物はあられ成けり

こせちのころうちにて月のあかきにゐうはうのつほ
ねのまへにてかくいひし

つきこそとよのあかりなりけれ
本を宮のしもつけ

ひかけにもたへまさりつゝ雲の上は

うるう七月七夕

彦星そすきにし□あやなくこよひつまやこふらん

あはちいくはのさとゝいふところのゝちをすくるに
はきのしけくおもしろきに露のをきたるをみて

小萩原分つるほとにぬれにけりいくはくかりに置る露そも

おなしくにのみはらのみなとゝいふところにて月の
あかきに

宮こにてみしにおとらぬ月なれやもしほの煙立まかふとも

おなしくにゝてわこしのまつりするにいさなきのや
しろにてかくらするほと雪のふるに

あまくたる神の心もゆきはてゝ庭火のかけに今やとくらん

梅の花の同し枝に白き紅梅咲ましりたるを皇后宮に
奉りしを是はいかゝみると女房のみせ給ひしに
いつれとかわきておりつる同しえにひと色ならぬ梅の匂を
人のゐをひろけて哥をよむにおやなき女にめのとの
ならのほうしをあはせむとするになきたるかたをか
きたるかたをみて
いかてわれよを古里にたえなはやならの都の人にしられて
淡路にてはるひのてるに人のなけきていのりするに
神にさうしをつゝりてたてまつるにかきし三首
淡路嶋あはれとみてやその神の天くたりまし跡もたれけん
あらたをかへす〳〵も諸人のふりはへ祈るあめのした哉
祈りつゝ神の心にまかせつるなはしろ水はいつもたえせし
同國にあるほとみふのたいふ義孝かくたりたりとき
くにをともせさりしかはふみやるにかきて
いかなれはゐしまの磯をかきたえて今まて人の音せさる覽
三月つくる日はるをおしむによあけたりといふ題を
たむはのかみのいへにて人々よみしに
おしむよの明やしぬらむと思ふより豫て戀しき春にも有哉
おなしよるのときにはとりなきてまらうと通る
といふ題をにはかによみしに
あけぬとて人も歸りぬ今暫し今宵は鳥のなかすそあらまし
五月十日ころに月のあかきに
月影は秋におとらぬ心ちしてなのみふりける五月雨の空
後れいせ院の御ときところのしふのうたあはせすと
てある人のうたをこふにころもかへを
いつしかと夏の立ぬるしるしには衣かへせぬ人のなきかな

ほとゝきすを
なか〳〵に聞てそいとゝ勝りける人くるしめの時鳥かな
なてしこ
いかなれはおなしたれなる撫子の千草の色に花は咲らむ
納涼
秋風のまたふかなくにおほあらきの森のこ影は涼しかり鳬
みな月はらへ
神代より年にひとたひ夏河の流てたえぬみそき成けり
いはひ
君か代はふたはの松のおひのほり數もかきらす花の咲らむ
水風始秋皇太后宮のすけきむもとか六條にて人々よ
みし
河風に吹かへさるゝ衣手は秋きてのちの心地こそすれ
八月十四日に勘解由次官もとにて講説のついてに人
人あつまりて詠題々二首一首は法華經文をおの〳〵
さくりて止宿草菴
そのかみの草の庵りを尋ぬれはついにはかきの宿り成けり
しつかなるよの月のよ人々あまれくよむいまひと
つのたいなり
尋くる人しなけれは一人ゐて月みる程によさへ更ぬる
月水をてらす
このうたは九月十三日のよに。とうの中將みきのむ
まのかみつれのふのきみの六條の家にてよみし。勘
解由次官あきひらか題なり。
行水の音せさりせは月影をまたきゐるにけるつらゝとやみむ
宮にさふらふほとうち殿よりもみちをたてまつらせ

たまへたりけるをおりてさふらひにいたされてこれ
はいかゝみるとありしかはまうしいれし
尋ても吹くる風のなかりせはいかてかみましよその紅葉は
いそく事ありてこのうたのかへしもきかていてゝた
つれしかともほとのすきたれはにやあらむ返しもな
けれはすゝきのお花ひとほあるをたはふれにかつら
殿のすゝきなり昨日のうちのもみちといかゝ御覽
するとまうさせたれはしもつけのきみのいひいたさ
れたる
秋の野のお花か末をみれたかき紅葉の色にくらへさらなん
このうたをみて昨日のもみちのうたのかへしをたま
はり候へこれはまいらせんといへはまつこれをみて
紅葉のかへしはせむとあれはかく
紅葉をはふきも返さぬ秋風にれたくお花のなひきぬるかな
あきの夜のこひ
長月の有明の月はいてにけりこひしき人は影もみえねと
探題三垣原加露ところのなにふたつときのものをく
はへたる
わかこまの行ゑもしらす秋霧のみかきの原に立にけるかな
件二首宮のさふらひにて人々よみし中宮のいては弁
のあまになりたるあき九月つこもりのひをくる
今はとてよをそむきぬる心にもおしみやすらむ秋の過るを
返し
常よりもあはれそひてそおしまるゝ契りことなる秋と思へは
正月七日雪のふりたるに宮の
春日野に雪まかきわけ常よりも今日の若菜をいかゝつむ覽
わせるしもつけのきみ
若菜にとのへにも出て今日は唯降つむ雪にまかせてをみむ
花下逢客世尊寺にて人々よみしに
ゐるとしも契らさりしを花ゆへにひきみぬ人も尋ねきに鳧
法華經一卷つゝえいしたてまつるに六の卷を
いりぬると心の闇に思ひしはくもるよもなき月にさりける
うりう院のほたいかうきくついてに人々よみし
今日をこそ心のちりを吹はらふ涼しき風のたよりともせめ
三月三日盃山浮水流といふ題を
水波に流てくたるかはらけは花の影にもくもらさりけり
かすみ山の花をへたつといふたいをたんはのかみと
しつなかいへにて
行ほともかつはみるへき山櫻なとて霞のたちへたつらむ
岸柳垂絲うち殿にて源大納言殿
春風のたえす吹くるみきはには波そよりけるあをやきの糸
中宮のいては辨なむ入かうをこなふときゝてさるへ
き人々のきかむとていきたりしかはこと人のおなし
ところにやとりてきゝたかへてとてかへりにしのち
のひいひをくりたりし
嬉しくもひきつれたりしつなて哉のりたかへたる舟と聞しを
返し
君によりわきし心やにこりけむ思へはおなし法のなかれを
うくひすのすにあるをこめなからきの枝なるを折て
人の宮にまいらせたるをいかゝみると女はうの見せ
たまひしかは
もゝ數にそたつとならは鶯も雲井のつるをみもならはなん

うるふ三月あるとしの三月つくるにうるうるうあま
りありといふたいを
つれならは今日までみまし春霞いまひとへさへ立やそふ覽
ほとゝきすといふたいを
年毎にきく許にて郭公あかて我よは過ぬへきかな
つれひらかちくせにくたりてふたとせはかりありて
ふみおこせたるにかきつけたる
都には君をのみこそ思ひいつれ紅葉のおりも花の盛も
返し
君もさは忘れさりけり我も思心や空にゆきかよひけん
なつのよといふたい
くるゝまと思ふにあくる夏のよは伏見の里の人いかならむ
東三條にて殿の人々のみることやくるしきをみなへ
しといふうたの末はおほゆやととはせたまひしに中
宮のやまとの君の家はきたなれはいかゝいふ〔ご歟〕•とひ
にやりたれはこれこそおほえれといひてしはしはか
りありてものにかきてきりのまかきにたちかくるら
んとこそいひけれといひおこせたりけれははしめお
ほえぬをはちしむとて
をみなへし忘れ草とそ思ひつるきりの籬におそくはゐれは
返し　　やまと
霧はれぬまかきの外に女郎花しらて尋ぬる人やなになる
すけよしのあそむのさぬきにあるころ九月許をくり
し
古さとは紅葉しぬめりまつ山のときはの影をみやなれぬ覽
もみち山にのこる宮の女方のうちにまいる日人々の
よみし
常ならすわきて嵐や吹つらむちらぬもみゆる峯の紅葉々
となく山の雪をのそむといふたいをさい院のさふら
いにて人々まいりあひてよみしに
ほとゝをみ峯の白雪ふりに皃雲のまかふとみえまかふまて
ゆきのあしたともをまつ
けさしもあれあやなのとけき我身哉雪まは人ゃ尋ねくるとて
雪のあした宮の御前に人々して雪山つくらせ給ふに
ひたきやのうへなる雪をみてしもつけのぎみのいひ
いたしたりし
いかてかつもるひたきやのゆき
もとつけし
けさみれはかまとの山もかくやあらむ
客依花來　　京極にて
春ならぬ折にも人のきてとはゝ花ゆへのみと思はさらまし
花のひゝにちるを人々みて長らく寺にして
山風のふきこぬひまは櫻花いかてと思ふにちらぬひそなき
月前落花
月影の霞み渡りてくらからはよのまに花のちるをみましや
このたいのうたをよみあけてのちのあしたに懐圓か
いそきかへるにいふ
月もすみ花もちりつるこの下にけさは霞の立もとまらて
はるくれて花すくなし
櫻花あをはのなかにみゆるかな春の残りもいくかならねは
月あきらかなるよ山ふきの花をみて　らうせん
月影に色はみゆれとおほつかないくへかさける山ふきの花

すなはち返し

色はかりみてやとふらむ山ふきのいくへ分れぬ月の影かは

あめのうちにはるをおしむ宮のさふらひにて人々のよみし

おしめともたちさるはるの春雨に霞の衣ぬれやしぬらむ

四月十日ころ平等院五十講のほと慶足阿闍梨宿房にてほとゝきすをまつといふたいをよみしに

山へにもきなかさりけり郭公みやこに待しよひそかゝりし

月くさの花をてらすといふたいを宮のさふらひのかむしのよ

白菊のひまなくみゆるみきはには風にもよらぬ波そ立ける

宮の女はうのふけ殿にわたりたまひたりしに月あかきによふけてものかたりなとしてちくせの君にのすゑ

はきはれたるにつゆそおきける

といへは

さよなかの月をやひるとおもふらむ

右之一册以二西行法師芳跡幷外題者定家卿眞筆之本一不レ違二一字一寫レ之。本則令二書寫挍合一畢。彼證本落帳三四枚有之由雖レ有二沙汰一其所未レ勘。任二當本一書續者也。

右之外又爲仲集有レ之以レ未レ書二載之一爲二一部一畢。

橘爲仲朝臣集

かうふり給はりたるに周防内侍のおとつれたる返事に

澤水におりゐるたつは年ふともなれし雲井そ戀しかるへき

法性寺の南に重經か山庄にまかりて納凉を

いなり山峯の杉村風吹は麓さへこそすゝしかりけれ

宇佐使にまかりしに周防國ののくちのむまやにとまりたるに月いとあかし

かへりては古郷人にまつとはん今宵の月はかくやみえしと

豐後國ゆふのたけのゆきをみて

神代よりおほくの年の雪つもり白くもみゆるゆふのたけ哉

宇佐の驛館にみやつかさきむのりまうてきて侍しに雪のふれは

千早ふる神のしるしのあらはれてきよめの雪の降にける哉

かへし

いのりつる神もつかひもまちつくる人も心の雪とこそみれ

豐前國よりおほさふをこゆるに雪のふれは

けふみつる山路なれとも人とはゝ雪降にきといはんとす覽

安樂寺にまいりてかまとの山けふりをみて

またしらぬ人のみるへきしるしにやかまとの山に煙立らむ

越後守にてくたり侍しに射水と云所を渡りて上津と云所にとゝまりたるに松虫のなきしかは

我ならぬ人はこしちと思へとも誰かためにか松虫のなく

九月十三夜をかはのやしろにまいる月いとあかし

訪人やよろつの月にまたれまし我ひとりのみ越ちならすは
　十月つこもりころに雪降たるにしなのゝかみたかも
　とかまうてきてあそひしに
思ひきや越ちの雪をふみ分てきませる君にあはん物とは
　返し
今さらにいなと思ひし道なれと君にあふちのせきそ嬉しき
　みやこゐといふ所
都いと聞にかけたにゆかしきに水もつらゝに成にけるかな
　その原をたちてみさかをすくとて
よそにのみ聞しみさかは白雲の上までのほるかけち也けり
　をはすて山の月をみて
これや此月みるたひに思ひつるおはすて山のふもとなる覽
　越後にて正月七日雪ふりたるをみて
雪深き越ちは春もしられともけふ春日のはわかな摘らむ
　京にのほりて四月十一日いなりにまいりて侍にすき
　のうへに郭公の鳴をきゝて
卯花のかきねならねと時鳥杉むらにてそはつ音聞つる
　みちのくにの守になりてくたらんとし侍しに式部大
　輔實綱か七條のいつみにてわかれおしみ侍りしに
すゝきたる心は人もわすれしな衣のせきを立かへるまて
　　李部郎藤原實綱
人はいさ我よはすゐになりぬれはまた相坂をいかゝ待へき
　大宮の少將の內侍もとより
思ひいてん思ひわするな朝夕に山のはいつる月つもるとも
　返し
いはさらむさきにも人を忘れめや月日にそひて思ひ社出め
　月日をかそへて
東路のはるけき程に行めくりいつかとくへき下ひものせき
　右大臣殿より御さうそくつかはしたる中に御ふみに
たまさかに思ひも出る時あらは是そきなれし物とみよとて
　おとろきなからいそきまいりてまいらせし
みなれたる心ならひにたまさかも思ひ忘るゝ隙やあるへき
　十七日の夜かゝみのやまのふもとにとまりたるに月
　いとあかし
老の後うつらむ影もはつかしくかゝみの山の月をみつるよ
　おはりの國のなるみのをすき侍りしにすゝむしのい
　とあはれに鳴しかは
古里にかはらさりけり鈴虫の鳴海の野への夕くれの聲
　みかはのふたむら山をすくるにもみち盛なり
唐錦おらまくほしきこのもとは二村山の紅葉なりけり
　同二日たかしまといふ所にみかはのかみ季綱たひの
　さうそくつかはしたるにそへたる
さして行衣のせきのはるけさは立かへるへき程そしられぬ
　みかはのさきさかといふところにたよりにつけてか
　へし
忘るなとかたみにきつる旅衣きみをみかはの立うかりけり
　遠江のさやの中山といふ所にとゝまりたるにしかの
　いとあはれに鳴しかは
旅寢するさよの中山さよ中にしかもなくなり妻や戀しき
　十月十日きよみかせきにとまりたるに月いとあかし
岸近くなみよる松のこのまより清見かせきは月そもりくる
　同し十四日はこれの山のふもとにとゝまりたるに月

いとあかし
朝毎におくるかゝみとみゆるかなはこれの山に出る月かけ
おなし廿一日むさしのよこ山といふ所をすくるにも
みちいとおもしろし
紅葉はのかゝる夕へを過行と古里人につけもやらはや
十一月七日白川のせきを過侍しに雪ふり侍しかは
人つてに聞渡りしを年ふりてけふ雪すきぬしら川の關
たけくまにて國の人いてきたりていひらく古へは松
侍りけりうせて久しう成けれとも國の司いらせ給時
・かならす松の枝をもとめてかくたて侍るなりさき
さき物の心をしらせ給へる人はこゝにて哥をなむよ
ませたまふといへは
たけくまのあとを尋て引うふる松や千とせの初めなるらむ
くたりつきて京へ頼俊かもとへいひつかはす
別しはきのふはかりと思へともみちにてとしの暮にける哉
うきしまにまいりて
祈りつゝなをこそ頼め道のおくにしつめ玉ふな浮嶋のかみ
正月十日ねの日にあたりたるに出羽守行房かもとよ
り
いとゝしく今日を子日ときくに社すかの松山思ひやらるれ
返し
問人のねのひならてもをとつれはすかの松山我もたのまん
雪のふりたるに行房かもとより
たけくまのまつこともなき我身には年月のみそ雪積ぬる
八月十五夜京を思ひいて大宮女房の御なかに十首か
うち
みし人もとふの浦風音せぬにつれなくすめる秋の夜の月
左衛門權佐行家許より八月十五夜の返し
うき影に誰かはとはんとふの浦のうらめしくてや獨みる覽
散位實清かもとより
秋のよの月はのとかに宿るともあふくま川に心とまるな
紀伊入道素意返し
宮城のゝ萩の下葉の露の身は君かきまさん日をまつとしれ
君ゆへによはにいくせか鳴渡るあふくま川のかは千鳥かは
はなかつみ且みしたにも有物をあさかの沼の淺ましのよや
頼義かすみけるたちのもみちおもしろしと聞てみに
まかりて
草まくらかりそめにても紅葉はの色にや人の移りすみけん
子日にしほかまにまかりて
ちはやふる神もねのひと思へはや煙たな引しほかまのまつ
源時綱肥後守に成てくたりぬときゝてつかはす
我たにもくやしと思にまことにや君もはるかにいきの松原
大藏卿長房かもとにふみつかはしたる返しに
沈む共今は我身はさもあらはあれ戀しき人をみぬそ悲しき
紀伊入道素意が衣川の哥のかへしたよりにつけてつ
かはす
なにせんに立ゐ待らむ思ひ出ては衣の關をきてもみよかし
伊勢守廣經かもとへつかはす
たけくまの松としきかはすゝか山ふりにし心我も忘れし
返し
鈴鹿山としふるまゝにたけくまの松に心をかけぬ日そなき
うきしまにまいりたるに花いとおもしろし

うきしまの花みるほとは道の奥にしつめる事も忘られに鬼

　式部大輔實綱朝臣もとへつかはす

朝夕にむすひしものを逢みてもいつとせまてに成にける哉

返し　實綱朝臣

老にける人の爲にはいつとせも積れは殘りすくなかりけり

　資仲中納言帥に成てくたるへしときゝてつかはしける

きなれたる我たにぬれし旅衣君もやとをく思ひたつらむ

　實源あさりかうちとのゝ御事なとおもひてたるにや有けんいひをこせたる

しるらめや霞となりて上りたる人のすみかの春のけしきを

　延住したりと聞て兵庫頭隆資かもとより

まつ我はあはれや空に成ぬるにあふくま川の遠さかりぬる

　わかさの國にしりたる女のいひをこせたる

山の井のそこに心はある物をあさかのぬまにかけやみゆ覽

返し

思ひをくる影しうつらは山の井の水は結はし濁りもそする

　つくしより時綱かいひをこせたる

めくりあはんほとはちとせの秋なれや末の松山いきの松原

　京上し侍しにたけくまの松をすくとて

古郷へ我はかへりぬたけくまの松とは唯につけよとか思ふ

　白川の關をいつるあいたもみちいとおもしろし

紅葉はのかゝるおりにや白川の關はなを祉かふへかりけれ

　五月つこもり大宮にさふらひし南面のこするゑに郭公の鳴侍しかは女房のいひいてられたる

いまはとて聲もしのはぬ郭公唯にわかれをおしむ成らむ

　御簾のまへにさふらひてとりもあへす

我ひとりきくにあらねと時鳥今日の音にこそ忍ひかたけれ

　月前の述懷といふこゝろを

かくしつゝ世をへてみつる秋の月今幾年かあらむとすらむ

　秋深月明

秋ふかくなり行空のさやけきは月の影にも霜や置らむ

　あしまのうすこほり

水鳥のゐるにさはらぬうす氷芦まやしはし消のこるらむ

　白川院にて關路のほとゝきすといふ事を

吾妻路にことつてやせし郭公關のいはかと今そすくなる

治承四年二月五日自筆書畢。和歌六十九首。此内人歌十七首。

建長五年三月九日以二大宮三位知家入道本一書寫挍合畢

日孝

弘長二年初冬頃書寫了。已上一挍畢。

入二撰集一不レ見二此集一哥。

　題しらす

あやなくも曇ぬ宵をいとふかな忍ふの里の秋の夜の月

　見華日暮ぬといふことを

櫻花日くらしみつゝけふもまた月待ほとになりにけるかな

此集木末兩部。以證本令二書寫一爲二一册一者也。則挍合畢

以藏本書寫以橋本俊長中川致保藏本挍合畢

讚岐入道集

藤原顯綱朝臣

ある宮はらの女房のつほねのまへに柳の枝をうへて
みけるによひにきて物かたりなとしてかへりにける
つとめてその柳なかりけれは夜部の人のとりたるな
めり返したへよとせめけれはかくなん

青柳の糸になき名は立にけりよるくる人は我ならねとも

人々くしてしほゆあみにまかりたりしに京よりしり
たりける女の四位權少將のもとにかくよみてつかは
しける

たちよらてをとせぬ時は津の國の芦間の浪の心地こそすれ

少將の返事侍しうはつゝみのかみにかきつけたりし

つの國の芦間の波の我ならはうらみぬ程にをとはしてまし

齋院の邊にさふらひける人の世中にかくれてあるや
う有ておもひかけぬ所に有けれはとし頃に成て四月
かもの祭の日あふひにかきてつかはしける

おもひきやその神山の葵草かけてもよそにならん物とは

是は有やうあるうたなり。ことさらにくはしくはかか
す。

年ころかたらひける人のこと人に物いひてたえにけ
れは日頃ありてあるやうありてをとつれけるつゐて
によみて遣しける

心にもかなはぬ物は泪かなわかためつらき人としる／＼

まひひとしてはやうしりたる女の內わたりにかくれ
てありときゝて尋てよめる

ゆきすりにとふとや人の思ふらむ山ゐの衣きたるけふとて

はなたなるかりきぬをきてある宮はらの女房にあひ
てまかてけるに雪のいたくふりてつとめてそのかり
きぬの袖をやるとてかきてつかはしける

ゆきかゝるはなたの袖を打はらひかへりし程の袂ともみよ

風いたくふきける夜御前にちかくうへさせ玉へる萩
御覽しにいてさせ玉ひて人々哥たてまつれとおほせ
られけれは宮にて

秋風の萩の下葉を吹かへしうらみや露は置まさる覽

ある宮はらの女房のもとよりなそ／＼とてかくいひ
たる

かひなしや社のみしていのる事なくてみそかに成にける哉

返しかくそ

みそか迄いのる社のかひなくは神無月とやいふへかるらん

二月許に寺に講きゝにまかりたりけるにある宮はら
の女房又くるまをならへてきゝけれは誰ともなくて
しきみの葉にかきてつかはしける

よそ／＼にみつの車と思へとも人の心はひとつならなん

講はてゝ人々さはき出ける折に。つかひまきれにけれ
は。誰ともしらて。いみしくねたかりて。ひころ尋けれ
は。程へてそかくときゝける。

三月つこもりかたに文をさし置てつかひのにけたり
けれは人をつけて見すれはしろ君のたはかる成けり
かくそ讀たる

もろともにいさ尋みむ山さくらちり殘りたる花は有やと

返ことかくなん

花見には何かはいさとさそふ覽すゝめしいりのおりは尋て

とよみてつかはしたりけれはこゝにはよもとあらかひてよめる

まろ橋をあとも定めす渡りてはふみ違ふるそ怪しかりける

又返し

あらかはゝさてもやみなん丸橋の跡なくは社ふみも違へめ

山さとにまかりけるをこよひはとゝまりてあれととめけれととゝまらていそきかへりてつとめていみしうゆきのふりたるにくしてかへりし人の許よりとゝめしひとけふの雪をいかにといひたれは

あは雪のふるにつけてもなけく覽とくるをわひし人の心は

ある所に參りたるにみすのそはより女房のかみいとなかくこほれ出たるをみて

人しれす思ふ心をかなへなん神あらはれて見えぬとならは

いつそやの殿上の大井のせうえうの哥かきつけたるうらにあしてを人の手ならひにしたりけれはそこにかきつけたりける

津の國の難波のみかと思ひしを和かの浦にもあしておひ鳬

さみたれの頃よころ物かたりなとしてあかすをかゝるはよけれともなき名たつなんわりなきといひけれは水無月の朔日の日つかはしける

五月雨はなき名立田にそほちつる田子の濡衣けふやほす覽

すみける所のさくらの花をみていかに世中をみける頃にか

雨ふれはうき言の葉も茂る世にうら山しくも散櫻かな

久しうかたらひける人のうき事ありとてたえにけるひはをかりたりけるそのおりはかへさて年頃ありて思ひかけぬ程に返しをこせたりけれはよみてつかはしたりける

忘るなと敎へし事はかひなくてひき違へたるひはと社みれ

しりたる人の許よりひさしくをとつれすとてのきにおふる艸をゝこせたれは忘れ草とおもひたるにやとて

これやこの音にきゝつる忘れ草またこそしらね心ならひに

しのひたる人のふみをゝこせてひとやみるらんとてかくいひたる

涙川せゝの玉もゝかきつめし人のみくつになりもこそすれ

返し

かきつめと河のせゝなる玉もにも人のみるめはあらしを思へ

たはふれ事にてかたらふ人の恨て今はあはしなといひけれは

蜘蛛の糸かはかりの言の葉に中かきたえん物とやは思ふ

すはういろなるかひのちいさきをこれなん忘れ貝といふはまことかみしりたりやとて人の見せけれは

これやさは人忘れかひ覺束なえこそしら波あまにとはゝや

なきことをきゝて人の恨けれはかくせよといひけるものを人にみせたりときゝたりけるにや

恨むれはみるめなきさと思へともこはいかなりし蜑の濡衣

ふみ人にみすらんと疑ける人のふみおこせたるそのふみを見て返しやるとて

今よりは跡もとゝめし濱千鳥なみたか磯のみるめなけれは

人々なとよひて和哥よむによはすとて恨をこせたりけれは

きの國やしらゝの濱のしらせねは理なりやわかの浦みは

ともたちのあつまの方へまかりけるかかくともしらてまかりくたりにけれはよみてつかはす

東路にたつ日をたにもしらせねは衣の關のあるかひそなき

かたらふ人に五月五日つかはす

つくまえの長くも人を賴かなけふのあやめのつまならね共

煩ふ事ありて久しうありかぬ頃つねに月もろともにみる人のもとより月のあかきおりこそ思ひ出らるれといひたりけれはよむ

世中になからむ後に思ひ出て有明の月をかたみともみよ

百和香にくらゝの花をくはふとてよめる

惑はすなくらゝの花のくらき夜に我もたなひけもえむ煙は

しりたる人のとをき國へまかるとてあこたうりををこせたりけれはうりにかきつけて返しやる

見るからにつらさそまさるあこたうり立別行道とおもへは

昔はすき物にて哥なとよみけるか年おいておはりのくに鳴海のうらといふ所にすみけるによみてとらする

陸奥國のいはてやしはしおらましと忍ふにいとゝ增る戀哉

かたらふ人のつくしへまかりけるによみて遣しける

とまらしと思ふ物から別路の心つくしになけかるゝかな

九月十三夜の月のくもりたるをあかゝりきなとあらかふ人の許にいかゝみるといひにやりたりけれはかくいひける

夕霧のたちふたかれる頃なれははるゝをそ待秋のよの月

かたらふ人かせをこりたりときゝていかゝといひやりたる返ことに

今こむと賴めをきてしのちよりは君まつ風そいとゝ戀しき

といひやりたりける返しに

高砂や立よる浪のしけゝれは我をのみやはきしの松かせ

源氏を人にかりて返しやりける

いかはかり袖のぬれけん武藏のゝ若紫の露のきえかた

齋院に人々あまた參りてよむに

神垣にさす榊葉のゆふよりも花に心をかくる春かな

おなし心

さかき葉のときはならひに櫻花しめのうちには散て年へよ

但馬のくにゝあさくらといふ所にいし非なとおかしくてすきもの有ける年おいてあまになりてこむまこなとあまたある猶おとろへるありける事のついていひやる

年積て蜑のすむらんあさくらの里のみるめをかりて我みん

おなし人のあまうれへすとて申ふみにくしのはこをそへたる返しやるとて

返してむうちは床しき筥なれとあけて悔しと思ひもそする

内わたりにてかたらひし人の年頃さとゐしてみやつかへもせて五せちのころかくいひをこせたる

谷ふかきみ山かくれに家居してひかけをよそに思ひやる哉

かへりことはその程さはる事有てうちへもまいらねは

谷深く契りし事のしるしにや同しひかけをよそにきくらん

おなし頃内わたりにありし時九月十三日の月をもろともにみあかしてさとゐのゝちおなし十三日の夜よ

みてをこせり

曇りしはうらめしかりし月影の今夜はそれそ嬉しかりける

返し

行すりのよそにみよとやいにしへの山ゐの衣きては契りし

るゐの大そきたの方に成りてくたるに御そやるとて

色深く染たる旅のから衣かへらむまてはかたみともみよ

年頃かたらふ人の人のめになりてたえてのち五せつのころうちわたりにてあひたりしにひかけのいとをときてとらせてよみたりける

思へ共ひかけの糸のくり返したえにしふしのつらくも有哉

一の宮の女房のうた

行かゝるうす花染の色みれは君よりは又かはらさりけり

心淺く染たる糸の色なれはこれよりは又いかゝかはらん

行かゝる跡を詠めし我袖もぬれなからこそみすへかりけれ

またしらぬ忘られ草といふ名をはさは我によりてや知り初めける

うしとみし心の程はをみ衣九重まてそへたてられぬる

谷川は誰かしからみとゝむれは秋はてにけるけしき成かな

身の程の思ひしらるゝ世中は跡とゝむへきこゝちやはする

あらかはて心も空に成ぬれは水くむ月の影ははなれし

淋しくてゆきふる里の印には人の心のかはるをそ見る

女御殿女房内りにて

吹返す風につけても山櫻またきちりぬる心をもみる

かく計りあたり忘るゝ扇には返さむよりはいかてとゝめし

つけてまし今そきたると夏衣ひとへにたのむ心なりせは

おもひしるおりも有けり涙河あさき瀬をのみゝせし心に

鵲のはしは雲井の便まてふみゝし跡もたれか尋む

その事を思ふともなきかたしきの袖こそけさはしほる計に

歸してんみれは中々つらさのみいとゝ益田の池のみつくき

泪河あけてもみせん玉くしけ浦嶋の子か心ゆるさは

夜をかさねあくかれはてゝ秋の月思ひくらふる心たになし

冬深み結ふつらゝもこち風の吹したちなはなにならすやは

唯にやはかきも絶なんさゝかにのうはの空成ことつけす共

我なみた忘かたみのめをあらみ年つみあへすもりも社すれ

夏衣うすきにかわる折しもやなひ口とふにうちはとくへき

うきことは露もなかけそ天川ゆき逢せこそ絶はたゆとも

榊葉のさゝても深く思ひしを神をはかけてかこたさらなん

ひきかくるつまならねはそ菖蒲艸忘ぬにしもわきておふ蘭

戀す共泪にいろのなかりせはしはしは人にしらせさらまし

故院のうせさせ玉ひたりけるに

かはくまもなき墨染の袂かなくちなは何を形みともせん

賀陽院の哥合にきくらを

花ゆへにかゝらぬ山そなかりける心は春の霞ならねと

ほとゝきす

あくる迄待かねし山の郭公けふもきかてやくれんとすらん

月

岩橋の神の契れるかひもなくくまなくてらす秋のよの月

雪

外山にはしはの下葉も散はてゝ遠の高根は雪ふりにけり

いはひ（ら歌合）（に歌）

君かせはなか井の濱のさゝれ石のいはねの山と成はつる迄

あるものなへを人のこひけれは

覺束なつくまの神のためならは幾つかなへの數はいるへき

水邊欵冬

山吹の下行水はゝやけれと移れるかけはなかれさりけり

中將家哥合くひな

里ことにたゝく水雞そきこゆなる心のとまるやとやなか覽

戀

紅のこそめの衣をしたにきん戀の涙のいろかへるやと

鳥羽殿の前栽合きくを

君か代は菊のした行谷水のなかれを汲てちとせをそまつ

行末はまたなか月の菊なれは久しき秋の花とこそ見れ

萩

秋霧のたえぬあしたはむら／＼に萩の錦のみえわたる哉

萩の葉に露吹むすふ木からしの音そよさむに成まさる也

菖蒲

引かけぬ宿はあらしをけふ毎にいかにつきせぬあやめ成覽

我宿のつまにのみかは菖蒲草かゝらぬ宿のねやしなけれは

藤

時わかぬ松のみとりは紫の藤さくおりや夏を知るらん

き く

秋の夜に雪むらきゆとみゆるかなまかきに咲る白菊の花

七 夕

たなはたの待つる程の苦しさとあかぬ別といつれまされる

いつれをか思ひます覽七夕はあふ嬉しさとあはぬつらさと

七夕に心かはすとおもはねと暮行空のうれしきはなそ

月

わたつみの底の玉もの□毎になひくそみゆる秋の夜の月

し は

獨ねやいとゝ淋しきさほしかのあさふすをのゝくすの浦風

中宮のますかけはまゆふをとりにをこせんと契りて

まつに久しくをとせさりけれはよみてつかはしける

忘らるゝ我みくまのゝはまゆふを何しに人にとへといひ劔

返し

みくまのゝうらみ所もなき物をとへと契りし程のすきねは

此本。子息道經之家本云々。於先考之外家者爲先祖粗傳其說等仍隨見及書留之。

右讃岐入道集以百花庵宗固本挍合了

故侍中左金吾家集　源頼實

春

三月三日ある人の家にて花みくらしておの〳〵さかつきとりてよめる

花をみる春は闇たになかりせはけふも暮ぬと歎かましやは

三月十五日しらかはてらに五時かうに人々いきてふみなとつゝりてのちけふことにかならすすへきよしをかはらけとりてよみける

しらかはのけふの契りを違へすは春のみとふと人や思はむ

やまふきをおりてある人のうたよみてをこせたる返し

ゐてにゆく人にもあらて我宿におりてそみつる山ふきの花

長久二年源大納言家にてかむしにおつるおしむといふたいを

散頃はちるをみつゝもなくさめつ花なき春のなをや殘らん

しらかはてらにて花浮瀧水題を

流れつる瀧の水たになかりせは散にし花をまたもみましや

宮にて花によりて春をおしむといふたいを

行春ををしむ心はちり殘る花みる人やのとけかるらん

春の夜の月

曇なき空も霞にかすみつゝ光りにあかぬ春のよの月

源大納言のねの日に

ねの日してけふ引そむる姫小松いくたひ春にあはむとす覽

夏

夏日見遠山雲

夏山のをちにたな引白雲の立出てみねと成にけるかな

くひな

たゝくとも暫しとちなん天のとはあくれはかへる水雞成鳬

ほとゝきす

ゆふやみに鳴てすく成郭公かへらむ時も道なたかへそ

ある所にて詠木下風

夏の夜はこのした渡る風の音も夕かけにこそ涼しかりけれ

なかをかにしてほとゝきすをまつといふことを

郭公きなかぬさきに明にけりなとなか月にまたす成けん

ほとゝきすをきゝて

一こゑのおほつかなきに郭公きゝてのゝちもねられさり鳬

月夜ほとゝきす

五月雨はおほつかなきを時鳥さやかに月のかけにきゝつる

長久二年四月九日於二源大納言家一有二哥合事一左右ノ人各十人おとこ五人女五人

左　侍從乳母　宰相乳母　權辨　五節　中務　實範　頼家　重成　隆方　定宗

右　少將乳母　宰相　小辨　山城　大夫　棟仲　義清　經衡　親範　頼實

三月ついたちのほとにたいをたまはせたりけれとことしけきよにてけふまてなりたるにや。

なつころも

みな人もけふや衣はかへつ覽ひとへに夏のきぬとおもへは

此哥被レ撰右一番。而右一番右衞門侍從哥云。式部權大輔擧周母言經古き賢當時打者也。而有言之間被

レ定。爲取は世無レ恥。願ニ於身一有ニ愁願一令レ來者。重
三是非顯書ニ入此集一了
たちて行春をおしめと夏衣きたるはこれもなつかしき哉
歎　冬
いとゝしくやへ山吹は匂はなん春さへ深くさけるしるしに
ふちのはな
ときはなる松にかゝれる藤の花千とせのはるに匂ふへき哉
うの花
卯花のさかりすきなん山里はすむ人やみの心地こそせめ
葵
けふみれはかけて歸らぬ人そなき葵そ神のしるしなりける
可レ被レ撰ニ入勝に一
早　苗
五月雨をまたは早苗やおいぬへき水ひくたこの急かしき哉
ほとゝきす
郭公きなく道たに●しるからはあふ坂まてもゆくへきものを
くひな
古里はとひくる人もなかりけりたゝく水鶏の音はかりして
吳　竹
こちくるを我友とのみみゆる哉よをへて風の音したえねは
潺　湲
かきなかす水も濁らぬ宿なれは移れる月のかけさへそすむ
四月はかりによふけて女のもとにいひやりける
待こひてきゝやしつると郭公人にさへこそとはまほしけれ
いりあひをきゝて
暮はてゝ人のまれらになるまゝに入相の鐘の聲そきこゆる

棟仲かいへにてなてしこをよむに
とこ夏に露をきわたる朝ほらけ錦に玉をかけてこそみれ
氷　室
夏の日になるまてとけぬ冬こほり春立風やよきて吹●らむ
草むらにむかひて秋をまつといふたいを六月廿日のほとに
秋をまつ花をほり植てみる人は夏をすくすそ久しかりける

秋

中逢秋
秋風はまた夏なから吹にけり月のたつをもなにかまつへき
田家早秋
秋立てかとたのいなはうちなひきをとめつらしき秋の初風
早秋月
初秋の空さへすゝしき月影は人の心もすみまさりけり
毎夜見月
さやかなる月をのみやは眺めつる雲しよはもまたれし物を
七夕後朝
待ほとの久しからすは七夕のけさの分れは歎かさらまし
八月十五日に大學頭義忠にさそはれて遍照寺にまかりて池上の月といふ題を
あかなくにあまつ空なる月影をいけのし〔水歟〕●に寫してそみる
八月十五夜右大弁家月似書題を
秋のよの空にくまなき月影はなけきやす覽かつらきの神
殿上人よふけてにはかにしらかはへなんいくとてくるまよせてさそふにまかりてしらかはの秋の月とい
ふたいを

くる人にいくたひあひぬ白河の渡りにすめる秋のよの月
七月十二日に宮の前栽ほとりに花契千秋といふ題を
秋毎に花を宮こにほりうへてけふそ千とせの初め成ける
聞鹿聲
秋ことに妻こひわひて鳴鹿はきりたつ山やふしうかるらん
聞擣衣
秋風にこゑうちそふるから衣たかさと人としらすも有かな
終日見花
朝露を野へに分つるかひもなしけふさへ花にあかて暮ぬる
見庭萩
青やきの枝はかりにも春暮てにたる花なき宿の秋はき
なかをかになかつかさの宮なとおはして一夜とまりたまひてありしにもみちをよめる五首
紅にふもとのかはのうつるまて峯のもみちの深くも有哉
野花
歸るさは急かれぬ哉花のかのひをへて變る野へにきぬれは
旅雁
空にのみ聲のきこゆる鴈金はあまの河原にやとやかるらん
しか
夜をかさね鹿のね高くきこゆなり小萩か原やしほれしぬ覽
あきゝり
河霧にをちみえぬまて立にけりいつれかよとのわたり成覽
右大弁の家にて九日翫菊
おいせしとおもて〳〵にのこへとも霜いたゝける白菊の花
むめつに四條中納言なとおはしてゆふくれに舟にのりてあしの花雪のことしといふ題を
岸による蘆かり小舟なかりせは雪とのみ社みるへかりけれ
うちのせさいほりに
九重にうつしうへつるしるしには久しく匂へ野への秋萩
源大納言の家に八月に歌合あらんとしたるをのひて九月になりてけれは十首のたいの中にはきのありけるをいまはときすきにたりとてもみちにかへられけれはそのよしをかたの人々あつまりてかはらけとりてよみけるに
秋萩のけふまてちらぬ物ならは紅葉の色もまさらましやは
長暦二年九月十三夜源大納言の家におとこをんなかたわきてうたあはせゝられけるにおとこかたの九人のうちにめされてよめる
月
つねよりものとけき空にみつる哉世を長つきにすめる月影
風
吉野山紅葉ちるらし我宿の木すゑゆるきて秋風そ吹
露
宮城のゝけさの白露ひまなくてかせはたまをや吹みたる
きり
花みんとしめしかひなく秋きりのあしたの原を立渡る哉
すゝき
花薄はにいてゝなひく秋風に野へはさなから波そ立ける
きく
くらきよもをりつへらなり我宿のをもしろきまて咲る白菊
田
小山田の秋はてかたにみゆる哉殘りすくなきかりやしつ覽

もみち
すきかたき色とみゆれは紅葉はの深き山路に駒をとめつる
かり
白雲にあとはきえつゝとふ鴈のきにける聲を空にしるかな
しか
聲しけみさを鹿のなく秋のよはきく人さらに驚ろかれぬる
ゑもんのすけの家にてかうしんのよのこりの菊を
色々に移ろふ菊のなかりせはなにをかみまし秋のかたみに
秋野晩望
しめゆはぬきりの籬のこ萩原またあかなくに日も暮にけり
依花知秋
けさみれは色つきにけり小萩原花こそ秋のしるし成けれ
庭盡秋花
我宿に花を殘さす移しうへて鹿のねきかぬ野へとなしつる
なかをかにて山家に月をまつ
月影のふもとの里にをそきかな峯を越てそまつかへりける
落葉滿庭
朝夕にあらしのはらふ庭の面に散しつもれる紅葉成けり
千栽秋花
我宿は花のやとりとなりにけりのへの主と人やみるらん
月夜のしくれ
定めなき空にもあるかなみるほとに時雨に曇る冬のよの月
のこりのきく
春秋の花といふ花の色々を殘れる菊にうつしてそみる
右大弁のさそひ給ひしかはむめつにまかりて河邊水
秋夕風
秋風のをきのはすくる夕暮に人まつひとの心をそしる
長久三年うるふ九月のつこもりに關白殿ありまのゆ
におはしましてそのあいた宮にさふらふ人々よしき
よしけなりつねひらため中なとして臨池
水のおもによもの山へもうつりつゝ鏡とみゆる池の上かな
見泉
昔よりをときく高き泉かな人のせいるゝ水ならねとも
翠松
色深く小高き松はなりにけりいくよそめつるみとりなる覽
紅葉
梢より散たにをしき紅葉はの風の音さへまれに成行
明月
月影のみるにくまなき秋のよはたのめぬ人もまたれ社すれ
初霜
あさまたき人のふみ行道しはのあとみゆはかり置る霜かな
殘菊
秋ふかくなり行まゝにきくの花日にそへてこそ色は染けれ
擣衣
唐衣もうつ聲しけくきこゆなり寒きあらしの音にそへつゝ
遠鴈
よとゝもに空にきこゆる鴈金はしらぬ雲ちも嵐とそ思ふ
惜秋
暮て行空に心そとまりけるけふらし秋のせきと思はん
長久三年右大弁山家にて夜深待月といふ題
月影をまつに夜更ぬ秋のよはあくる程たにひさしからなん
冬十月一日山さとに人々いきてもみちをみてかはら

けとりて
紅葉はの散し残れは山里に秋をとゝめてみるこゝ地する
かやうゐん殿のいけにふねにのりて月秋といふたい
を
秋毎にさやけき月は今宵こそ我みつるよのためし也けれ
栖霞寺にてもみち衣にをつといふ題を
紅葉々は我衣てにかゝれともきてみる人のあかすも有かな
けさみれは河邊の氷りひまなくて河瀬にのみそ波は立ける
いかた
河水にまかせて落すいかたしはさして行衞もしられさり鳧
雪ふりたる日大納言の家にうたよむひと人よひて松
雪といふ題を
雪ふれは松こそいたくおいにけれ千歳の冬をつみやしつ覽
十月廿日殿のあまうへはせにまうてさせたまひて返
らせたまひしにうち殿に御むかへにまいれる人々あ
しろにまかりてあしろにて月をみるといふ題を
月影もいは涙たかきあしろにはうすき氷のよるかとそみる
遍照寺にて人々月前紅葉といふ題をよみける
いとゝしく紅葉ちりしく庭の上に光をそふる冬のよの月
落葉如雨
このはちる宿はきゝわく事そなき時雨するよも時雨せぬよも
落葉舊苔上
打かさねいくよの風か立つらんこの葉そ苔の衣なりける
戀
よを重ねふけゐの浦に蜑のたく思ひありとは人もしらしな
思ひかねしらぬ磯へに事寄てうちいつる波のかひもあら南
深緣思ひそめては久しきをいかてかみましすみよしの松
おとは山谷の下水おとにのみきゝて渡らぬ袖もぬれけり
思ふこと鳴門の浦にすまぬみのしほたれ衣かはくよそなき
しるへする人たにみえぬ奥山のふみゝぬ道にまとふころ哉
年ふれといはぬ思ひはかひそなき人にしらるゝ煙ならねは
いかにせん戀ちにまよふ郭公しのひに鳴てすこす頃かな
我如く戀せん人のまたあらはいかにかするとゝふへき物を

右源賴實集以百花庵宗固本書寫挍合了

津守國基集

霞籠棹山といふ事をよめる

春くれはふもともみえすさほ山に霞の衣立そかけつる

忍岡霞

霞こそ忍ふの岡に立ぬれときゝすの聲はつゝまさりけれ

留船聞鶯

聞すてゝ漕し行ねは鶯の聲は船路のとまり成けり

梅花遠薫

さよ更ておちの里なる梅の香の吹くる風にたくふ成哉

雪中梅花

風吹て雪降かゝる梅の花散かちらぬかえこそみわかね

山家皆梅花

なつかしきかのみこそすれ山里は梅の匂はぬ宿しなければ

春色浮水

緑なる河邊の柳影させは水にも春の色そみえける

岸柳臨水

水のおもに柳の影のなひくをはそこにも風の吹かとそみる

山花未落

櫻花また盛りなりたかまとの春の山風のとけかるらし

見花述懐

とし毎に花みぬ春はなけれともあくことのなき山櫻かな

花時無外人

春くれはうとき人こそなかりけれおなし心に花をおしめは

閑庭落花

みる人もなき庭の面に散花をふまてみるこそ心やすけれ

追歳尋花

とし毎に山へのこさす尋ぬれとまたこそあかね散ぬ櫻に

花殘待人

尋ねくる人もやあると足引の山下影に花そ殘れる

苗代

眞菅おふる野澤のをたを打返し種まきて皃しめはへてみゆ

さゝらきや彌生になれは山かつの門田のそひに種まきて皃

帰鴈

うす墨にかく玉つさとみゆるかなかすめる空にかへる鴈金

行歸る旅の空にやひかすへんはかきのとけくみゆるかり金

遠山霞薄

春ふかくまた霞けるふる郷のとをちの山をほのもみましや

三月盡

吹風のさそふに花は散とみきたかゝたらふに春はいぬるそ

三月つこもりの日ある人のもとより

心あらは散殘らなむ櫻花暮行はるのかたみはかりに

かへし

櫻花こすゑはかりをかたみにて春とゝもにそ散ていにける

夏夜待郭公

夏のよのなかゝらませは郭公心やすくもまたましものを

遙聞郭公

ほのかにそこの夕暮に郭公をちのをかへのもりになく也

尋處聞郭公

待かねてこそのならひに山里を尋くれはそなく郭公

納涼

流いつる水にあつさの忘られてすゝむけしきそ打とけに見
樹陰假秋
夏のひのこのした影の涼しきはしのひに秋やかねてきつ覧
七　夕
織女にほか心をしかしたらはたゝひとよには歸らさらまし
萩花をよめる
朝またき萩原みれは露を重みたはなる枝のいとゝたはなる
紅　葉
紅葉はのちれるか上にちりつめは錦かさぬる庭とこそみれ
水邊紅葉
時雨つゝ雨とふれはか紅葉はのあさきみきはに色の深きは
草花廻水
秋のゝをうつせる宿の池なれはきしのまゝにそ花は匂へる
無山里月
ほかよりも光り久しくさやけさは月のかくるゝ山なしの里
月浮山水
くむ人のなき山の非のにこり沼さやかにすめる秋の夜の月
緩木森月
いつとなくゆるきの森の木間より長閑に月はみえすや有覧
初　冬
いつのまに空の氣色の變るらむ激しきけさの山おろしの風
旅中霰
定めなく時雨て過る山ちには菅のをかさをぬきみぬかすみ
すかたのいけみつとり
水鳥のおのかすかたの池水にうつるおりこそ我をみるらめ
旅宿雪
ひとりぬる草の枕はさゆれとも降つむ雪をはらはてそみる
行路雪
雪降て路たつ〳〵し逢坂の關の岩かとみえみ みえすみ
雪埋山路
雪深みこまのつまをとをともせす山した水にわたすいた橋
歳　暮
くる春にあはまく事は思へとも暮ぬる年のおしくやはあらぬ
戀わひてひとりぬるよをまそてもてとこ打拂ひ哀とそ思ふ
手枕を交さむ事はかたく共あとにはふせよもすそひききん
さ莚にいもをふせはや狹くとも衣しきつきかたはしにねん
わきもこか額のかみの亂よりたわきまゆねをみしか戀しき
吾妹見かはたにきなれのきぬも哉戀慰めに身にもまつはん
あひかたき戀に心やまとふらむつらき人をも思ひしらぬは
あひかたかりし女に
おふの浦の恨みてのみそよをはふる逢事なくになれる身なれは
あはむとちきりたる人をよそに見て
よそにみて過ける物をはゝきゝの伏屋てふなそ人頼めなる
女のもとにまかりてかへされて
うしと思ふ人の心は卓はかは歸る袂の露けかるらむ
ひるなりとものかたりせんといふにみくるしなをよ
るといひ侍し女に
あふ事をひるはなきさにあさ□ね蜑の釣舟よるをこそまて
かたらひて侍し女のまたさらに心つよかりしかは
つれなきにこりぬ心を思ひしれこれも昔のなこりなるへし
かへし
つれなくはさてもやみなて何にかは折々人の思ひいつらむ

つれなき女のゆめにみえしかは
明ぬとも君とてけさはねたらまし今宵の夢のうつゝ成せは
いかてとおもふ女のかひこひたりしに
戀しとて君うらみせは人しれす思かひある心地せましや
かへし
思ふらむ心もしらて浦みたるかひありけりと今こそはみれ
いひいてむ事のはゝからしかりし人におつ〳〵さる
こころなむあるとしらせんと
賤のみにやかて心のたくへかしさもあるましき事も思はし
かへし
涙たゝむ事をつゝまぬ身成せは思ふといふは嬉しからまし
又やりはへりし
あふまての事はかたくと人しれぬ心のゆくをやるといはなむ
かへし
人しれぬ心のきつゝつもりなはなきなの高くなりもこそすれ
ものこしにていらへはかりする女に
聞ゆなる聲を心にとりかへてへたてなき人思てしかな
四月はかりにかへりことをせぬ女のもとにくちをし
きよしをいひつかはして侍しかは
郭公里をもわかす語らへはこたへをなとかこゝにしもせん
かへし
郭公よ深き聲をあはれとも思ひしらすはなにかこたふる
あきの夜のなかきひとりねをおもひやれといひつか
はしたりしか女
秋のよは人からならす昔よりあかしかねぬるものとしらすや
かへし
なかしともなけかさらまし君と我枕ならふる秋のよならは
かたらひて侍し女のもとにひさしうをとせさりしか
はいひおこせて侍りし
かねてより人の心をしらませは契りしことを頼まゝしやは
かへし
頼めしを心みむとてをとせねは忘れたりとも思ひけるかな
またむつましくもあらぬ女とも仁和寺に遊ひにま
かりて日のくれにしかはとゝまりてあくるあしたか
へるとて
よそ人は睦ましとこそ思ふらめならひの岡にねてし歸れは
宮つかへする女をむかへておくりてあしたに
朝ね髪たか手枕にたわつけてけさは降こしかたみとかみる
能登守正月つこもりころにこし地はまた雪うつもれ
てなむあるといひおこせて侍しかは
思ひやるまたゆき深き越ちには霞む空をや春とみる蘭
すりの大夫のはりまくたりにいちのすまておくりき
こえ侍しに舟こきはなるゝほとに霞のへたてしかは
嶋かくれ漕行までもみるへきにまたきへたつる春の霞か
花山にまかりたりしに僧正のむろのまへとおほしき
所に櫻のくちのこりたるかたゝひとえた咲たりしか
は
あるしなきすみかに殘る櫻花あはれ昔の春や戀しき
花見に人々のまかるかをともせぬにつかはし侍りし
櫻みにいさと人こそいはねとも花に心はさそはれそする
花ちりてのちうちのけしきのかすめるをみて
左兵衛佐

山櫻いまはのこらす散ぬらむなにたちかくす春の霞そ
かへし
花ちれるあとのつれ〳〵みせしとて山立かくす朝霞なり
女のあひかたかりしに二月の晦日頃につかはし侍し
春風はへたつる霞吹みたれみたれのまにも花やみゆると
かへし
花散す風は吹とも春霞立へたてゝはいかゝみゆへき
あめのふりし日女のもとにつかはし侍し
春風やひとを忘れぬつまならむしめ〳〵物を思ひ出つる
かへし
春雨を忘れぬつまになすめれは降たるなかのこゝち社すれ
春のよ女とゐてものかたりして
手束弓春のよ君とまとゐしてみけしのしたにいる身とも哉
四月一日ある女のいへをすくとてなにことかといひ
いれさせて侍しにかへりことをはいはて山吹の花を
おこせたりしかは
くちなしの色に咲はか山吹の過行春をとまれともいはぬ
ある人のむことりしてのちはしめて人々よひて哥よ
み侍しに藤花久盛といふことをよみ侍しついてに
やとからか夏になれとも藤の花移ろふ色のみえすも有かな
布引の瀧にて人々哥よみ侍しつゐてに
高ねより落くるほとをしらぬかないくひろならむ布引の瀧
筑前の司賴家五月許にいさゝかにいとなむことなん
あるかさめやうのものとこひみ侍しにおくるとて
五月雨にたみのゝ嶋のあま人のかつくかさめは君かため也
かへし　賴家
天くたる神のしるしとみる物はたみのゝ嶋のかさめ成けり
賀茂の禰宜成助にはしめてあひて
聞渡るみたらし河の水清みそこの心はけふそしるへき
かへし
住吉の松かひありてけふよりは難波の事もしらすはかりそ
その日まうてきあひて祇薗別當良暹
住吉のみたらし河も流れあひてこの渡り社すまゝほしけれ
かものみたらし河のほとりにすゝみ侍しに
神やまのしたもさゝ[マヽ]に流れいつるみたらし河の水の涼しさ
かへし　成助
我さとにかたりも渡れけふ結ふみたらし河の水の涼しさ
七月七日すみよしよりまかりのほりしにあまの河と
いふ所にて日のくれにしかはとゝまりて舟をあらひ
きよめてたなはたにかすとて
たなはたは思ひしらなむ天の河いそく渡りに舟をかしつる
八月許に月のあかく侍し夜三條大納言の御もとにて
月をみてよみ侍し
さやかなる月みる毎にゆきつもる心は空にみちやしぬらん
かへし
みそら行月はあはれと思ふらむゆたにも君かなかめける哉
おなしころむまこのわらはのはかまに萩の花をかき
たるを大納言みたまひて誰ともなくていみしうさう
そきたるさうし女にもたせてなけいれさせたまひた
りし
ぬしゝらて萩のするなるたかまとのも心みに衣まかせん
かへし

袖たれてたかまのゝちを君ゆかは萩の花すりすりやみた覽
　月はかりに成助かさかにまかりてそれよりよひに
　おこせてはへりしかは
心とはまねかし物を化すゝきさかのゝ風のたよりなるらん
かへし
草なひく風は吹とも花すゝき我ほにいてすは招かさらまし
　月許に豐前守保定くたるとてみてくらしまにてむ
まのくさからせけるをせいしけれはからすへきよし
のくたしふみこひたりしに遣すとて
秋風に草はゝまかす豐國のたみのなひかむためしと思へは
　和泉の國ふけ非のうらといふところにまかりとゝま
りたりしによふけてやまのかたにはしかのこゑきこ
えなきさには千とりなきしかは
鹿の音をあはれと聞に秋のよのふけゐの浦に千鳥さへ鳴
　すりの大夫ふしみのもりのしたにて紅葉の散にとし
のおいぬることをたとへて人々哥よみ侍し
紅葉する森には春もまたきなむ我身の秋をやかてかれ行
　ものへまかるみちにてあめのふりしかは
兩降ぬいさ宿からむこの里のおちのゝちには人もすまなく
　ある人のきのくにへくたるとてすみよしをすきてさ
かひといふところにてとゝまり侍りしかは
住吉の渡りにたにも音せねはさかひの里を思こそやれ
　或人のすみよしにまいりてよみ侍し
いたつらにおひにけりとや住吉の松も我身をけふはみる覽
かへし
君か代や千とせまてへむ住吉の松に久しきともとみえつゝ
　つのかみ範永すみよしに神拜すとて
我身こそかみさひまされ住吉のこ高き松の影にゐぬれは
かへし
住吉の松の齡にあへぬれは君をも千世の友〔と〕こそみれ
　住吉に人々おほくまいりてあめのふりしにぬるゝ事
をいひしかは
ぬるゝにて思ひしらなむ諸人は天くたりたる神のしるしを
　美濃の國へまかりくたるにある女の許にまかりてい
とまこひてたつにいふことの侍らさりしかは
暫し共なとかとゝめぬ不破の關稻葉の山のいなはいねとや
かへし
旅の空行へき君としりぬれはなにかとゝめむ關のなたてに
　津の國に侍しころ京にあひしりたる人のもとにつか
はすふみのうはかきに
津の國の難波よりそといはす共蘆手をみてはそれとしら南
　故さぬきのかみにはしめてあひきこえさせたりしに
よみかけられたりし
住吉の松をそ頼むけふよりは千とせはふとも思ひかはらし
かへし
住吉の松の千とせもあかなくに萬代までをけふは契らむ
かもの禰宜なりすけかもとへかひつものやるとて
したゝみも鮑さたえも蛤もかきあつめたりみなゝからみよ
かへし　　　　成助
難波潟なにはのものもかひありて朝みつ汐のみつとしら南
　なけく事の侍りしころとふへき人のとはさりしかは
知しらすとはぬ人なくとひつるについに音せて君そやみぬる

かへし　　良暹
しぬ計り歎きいりてそ音はせぬ知も知ぬもとふはとふかは
加茂の行幸にみやつかさともかうふりたまはりてま
かりかへりてやすむ所に六位にて侍し時
紅葉するかつらのなかに住吉の松のみひとり緑なるかな
つしまにまかりたりしに我國のかたははるかになり
て新羅のやまのみえしかは
舟出せし博多やいつらつしまには知ぬ新羅の山はみえつる
たちまの國にあさくらといふ所に哥よむあまなんあ
るときゝてまかりてものかたりしはへりしついてに
あさくらやまたみぬ里に尋くる心のほとを思ひしらなむ
かへし　　あま
たつねきてみるにかひなき宿成と朝倉山を忘れさらなん
石山にまいりてかへり侍しにせたのはしのほとり馬
に乗たる女のきつれたるか夕立のせしかはせきてら
の大門におなしくたちいりたるにいひかけはへりし
東路をくるいもならは言とはん伏屋といひて誰かとゝめし
かへし　　女
東路のふせやになにか尋ぬらんけふ逢坂のことやちきらぬ
すみよしに賀茂の神主なりすけくたりたりときゝて
加賀左衛門命婦
葵草おふとしきけは住吉のきしにそ今はつむへかりける
かへし
住吉は忘れ草そといはるれと人にあふひをうへてまつなり
あはのくによりかみのゝみちからまかりのほりしに
するかにいりえのうらといふ所にて風ふきて八日ま
てふねをいたさすあやしみなけくほとに人のゆめに
住吉のひとのする事もなくておりのほりするかやす
からねはおきなかふかする風なりとなむみへるとか
たれはおとろきてたつぬれはなきさに神のやしろあ
りみをの明神と申にはかにみてくらはさみてしてに
かきつけ侍し
みをの神すむと聞てそ入江なるなそ舟すへて日數へぬらん
かくてそほとなくかせやはらきなみしつかにてふ
ねいたしはへりし。
おほやけに申事はへりしに申文にそへて奏者の御も
とに
住吉のあまつ社のうれへには心よせなれくものうへ人
おなしく申事のほとすきひさしかりしかは
雲の上は月そさやかにさえ渡るまたとゝこほる事やなに也
かへし　　兵衛佐
とゝこほる事はなけれと住吉のまつ心にや久しかるらん
おほやけに申事のともかくもおせ(ほ脱)せくたされは
へらさりしかは住吉へまかりくたるとて奏者の御も
とに
いつしかと見事きかまく住吉のまつなる神に如何いふへき
藏人少將うちにのみさふらひたまひてひさしうあひ
きこえさせねは月よなりしころ
雲の上にへたてゝ月のもりこぬはしつのやとりは朧なる哉
かへし　　少將
雲の上にみるたにあかぬ月影をことはりなりし賤の宿りは
成助かきやう中けからはしきことあれは京へもえい

てすみやしろにこもりゐてなむあるといひをこせて。
　はへりしかは
神垣にけからはしけきみい〔本ノマヽ〕まはおのか心をいつちやるらん
　住吉より京へのほり侍しにみつてらのほとにてあめ
　のふりしかは人のいへにたちいりたりしにいみしう
　もりしかは
すゝたるゝみつのかやゝの板庇久しくなりて雨もたまらす
　江中納言大宰帥になりてくたられしにかはしりにま
　かりむかひて物かたりのついてに
む年にそ君はきまさん住吉のまつへきみこそいたく老ぬれ
　かへし
すむ人のすき行われも住吉の松の千とせといのらさらめや
　三條大納言すゝしのむしろたてまつるとて
うらやまし我ひとりねのさむしろに誰とか君かた枕をせん
　正二位大納言をはいかてうらやむそやすからぬこ
　となりとていみしうこそわらひ給しか。
六條すりの大夫のうへにいしたゝみせんとていしと
　りてとありしかはきこえさすとて
かたきことはけみけり共思ひしれ石をわりつゝ君に仕ふる
　同人におほえひをきこえさすて
住の江のおきな姿そあはれなる海においつゝ腰のかゝまる
　かへし
わたつみのおいなゝけきそ住吉の松にかゝれるおきつ白波
　同人のはりまくたりにかちしなりしかは
諸共にむちはあけねとしたはるゝ心は君におくれやはする
　かへし
心をはおなし道にはたくふとも猶住吉のきしもせしかし
　おいのゝちに月をみてよみ侍し
あかすして老はてにける我身かなこむよのやみも照せ月影
　伯のはゝのたうのつまとのいたをこはれたりしかは
　つかはしてのちに
まきのとをにしに明てや月をみるさき立行に言つてをして
　かへし
西へ行月みるたひにまきのとを君思ひつるつまにするかな
　前左衛門佐のもとよりひさしくをとせすとていひつ
　かはしたりし
みこもりにひとひもおちす思へとも人忘れけり住吉のまつ
　かへし
住の江の松にたえせす吹風そきつせそへつゝ忘れやはする
　同佐のもとにかひつものをませくた物にしてきこえ
　さすとて
わたつみの涙のはなさく浮木にはかき蛤のなるにやある覧
　備中守仲實くたられしになにはえのほとりにまかり
　むかひたるにこふねのはたつひたるかありしをみて
　よみ侍し
難波江に年ふりにたる舟なれは芦のはすりにはたなれに鬼
　　　　備中守
難波江の芦の葉分にはたなれてけふを待ける舟のけしきか
　　　　若狭阿闍梨隆源
芦のはの茂みをわくる舟なれは年はつまねとなるゝなる覧
　おはりのかみにきこえさする事ありて
尾張なるはゝりの糸を手玉ゆらはにめのをれる衣のきほしき

住吉の堂の壇のいしとりにきのくにゝまかりたりしにわかのうらのたまつしまに神のやしろおはすたつねきけはそとおりひめのこのところをおもしろかりてかみになりておはすなりとかのわたりの人いひはへりしかはよみてたてまつりし

年ふれと老もせすして和哥の浦にいく代に成ぬ玉津嶋ひめ

かくよみてたてまつりたりし夜の夢にからかみあけてもからきぬきたる女房十人はかりいてきたりてうれしきよろこひにいふなりとてとるへきいしともををしへらるをしへのまゝにもとむれはゆめのつけのまゝにいしありいしつくりしてわらすれは一度に十二にこそわれて侍りしか壇のかつらはしにかなひ侍にき。

賀茂神主なりつきにあふひこふとて

むつましくかもの葵を住吉の松のゆふにもしてまほしきを

なりつきあふひをはめてたくしたてゝ遣はしてかへりことはちからおよはすといひてはへりしこそ中々ありつきたりしか。

右津守國基集以村井敬義本書寫挍合了

知念武雄
小林正直挍
松林竹雄

昭和五年八月二十五日印刷
昭和五年八月三十日發行

發行者　東京府西巣鴨町大字巣鴨貳千五百七拾番地
續群書類從完成會代表者
太田藤四郎

印刷者　東京市芝區西久保明舟町九番地
松岡松三

印刷所　東京市芝區西久保明舟町九番地
太洋社第五工場

發行所　東京府西巣鴨町大字巣鴨貳千五百七拾番地
續群書類從完成會
振替東京六二六〇七番電話大塚〇七一八番